異世界の王様

池崎　数也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界の王様

【Ｎコード】
Ｎ０６０９Ｆ

【作者名】
池崎　数也

【あらすじ】
滝峰義人はそれまで平和な高校生活を送っていた。多くの友人に囲まれ、楽しい日々を送る毎日。そして今日も幼馴染みの北城優希や親友の藤倉志信と共に帰宅の途について……。魔法あり、モンスターありの異世界召喚モノです。

プロローグ：召喚

白木造りの祭壇に、一人の少女が立っていた。
床には幾何学的な模様が描かれ、それを囲うように護摩木が焼かれている。

「――――――」

朗々と、少女が祝詞を紡ぐ。
辺りは厳かな雰囲気に包まれ、水を打ったように静まり返っていた。
何らかの意味があるのだろう。両手は印を結び、目は閉じている。
その様子はまさに神聖。絶対不可侵な、少女だけの領域。

「――――――」

しばらくの間、少女は言葉を重ね続ける。そうすること数分……
いや、数十分は経っただろうか。不意に詠唱が止み、少女が目と両手を開いた。

「……」

何かを探るように、両手が上下左右に動く。
その間にも、少女は口を開かない。
離れた場所に立つ他の人間も、呼吸すら忘れたかのように少女に見入っている。
時折音を立てて爆ぜる護摩木のだけが、この場の唯一の音だった。

「――見つけました」

ポツリと、少女が呟く。
その一言は、水面に投じた小石が起こす波紋のように周囲の人間へ伝わり、次いで動揺をもたらした。
少女は周囲の様子に構わず、開いた両の掌を握り締める。
まるで細い紐でもつかむかのように力強く握ったままで、少女は再び詠唱を開始した。
先ほどと違う、語りかけるかのような声色での言葉。それと同時に、見えない紐をゆっくりと引いていく。
余程集中しているのだろう、少女の額には汗が浮かんでいる。それでも少女は詠唱を止めず、見えない紐を手繰り寄せていく。
そこでふと、少女は眉を寄せた。
見えない紐の先で起こしたある事象が、予想と異なっている。
そのことを感覚だけで察知して、少女は首をかしげた。しかし、少女はすぐさま気を取り直して見えない紐を引く。
きっと勘違いだろう、とか、多分気のせいだろう、という楽観を胸に抱きつつ、少女は行為を続行する。
腕を引き、見えない紐をゆっくりと、徐々に引き寄せていく。
引く度に重くなるような感覚を受けながらも、少女は手を止めない。
そして、ふっと軽くなる感触が伝わってきた。
成功した。
少女は思わず内心で呟く。

「……あ」

それが油断を呼んだのか、見えない紐はさらに軽くなる。
そのことがどういう意味を持つのか一瞬で看破した少女は、さっきまでの汗とは違う、冷や汗を流した。

プロローグ：召喚（後書き）

どうも、初めましての方は初めまして、池崎数也と申します。他に掲載してるやつを放って何をしてるのかと自分でも思うのですが、前々から書きたいと思っていた異世界ものに手を出してしまいました。戦闘シーンのない平和な物語を書くのが嫌いなため、こっちの話はあちこちに戦闘シーンが入ると思います。時折シリアスに、そして時折コメディーに書きたいと思います。良ければお付き合いください。かなりの長編になる予定です。誤字脱字、ご指摘ご感想などは非常にためになりますので、お書きくださると嬉しい限りです。

第一話：日常の終わり

終業を知らせるチャイムが鳴り響く。
それを合図に、数字を板書していた教師は腕を止め、ノートに書き写していた大半の生徒は動くシャーペンを止めた。

「ふぁ～……やっと終わったか」

そして、大半の生徒に含まれない人物――滝峰義人（たきみねよしと）は、寝惚け眼を擦りながら、枕代わりにしていた腕の跡が微妙についた顔を上げる。
春も過ぎ、やや夏が近づいてきたこの時期。窓際の席は適度に暖かく、また、授業も終わりで疲労も蓄積されている六時間目のため、義人は授業開始五分後には夢の世界へと旅立っていた。

「それでは授業を終わります。日直、号令を」

日直の声でクラスの全員が起立する。義人も僅かに遅れながら立ち上がり、あまり感謝のこもっていない一礼を捧げた。
数学教師が教室を出て行くと、今まで張り詰めていた空気が弛緩する。帰り支度をする者。部活の準備をする者。友人との雑談に花を咲かせる者等様々だ。
義人は最初の選択肢に該当し、机の横に提げてある鞄を取り出してあまり使わない教科書を叩き込む。

「義人ちゃん、もう帰るの？」

と、義人が鞄に教科書を詰め終えたとき、横合いから声がかかった。僅かに視線をずらして見れば、一人の女子生徒が両手に鞄を提

げて立っている。
若干幼いながらも整った顔立ちに、肩まで伸びた淡い栗色の髪の毛。身長は百五十を僅かに超えたぐらいで、義人の斜め下からにこやかな笑みを向けてくる。

「ああ。俺はいつも通りってことで。優希はどうするんだ？　部活か？」

北城優希（ほうじょうゆき）。それが女子生徒の名前だった。

「ううん。今日は先生の都合で部活がないの。だから、一緒に帰ろうかなって思って……いいかな？」
「俺は全然構わないぞ。んじゃ、帰るか」

義人は軽く促し、歩き出す。優希はそれに従い、隣に並んで歩き出した。
放課後の喧騒が満たす廊下を、二人して歩く。義人はやや眠そうに歩き、優希はそんな義人を嬉しそうに眺めている。右斜め後ろに半歩下がり、その位置をキープしながら優希は口を開いた。

「今日はずいぶんと眠そうだね。数学の時間も眠っていたでしょ？」
「んー……？　いや、昨日の夜やっていたテレビが微妙に面白くてさ、ちょっと遅くまで見ていたんだ。消して寝ようかそのまま見ようか、丁度悩むぐらいの面白さっていうのが曲者だったね、あれは」

眠気の影響か、低回転の頭で答える義人。それを聞いた優希はクスクスと笑った。

「義人ちゃんのことだから、雑学とかクイズとかそういう番組を見ていたんでしょ？」

「ああ正解。たしか、簡単に家庭菜園を作る方法だったっけ？　腐葉土を堆肥にすれば、肥料代がかからなくて良いと言っていた気がする」

「それはまた、微妙な知識だね……」

優希は苦笑混じりに笑い、それと同時に、変わらないなぁとも思う。

すぐ傍を歩く義人とは、家が隣で幼馴染みという間柄だった。同じ幼稚園を卒園し、同じ小学校を卒業。もちろん中学校も同じで、高校も同じ。何度か違うクラスになったこともあったけれど、比率でいったら同じクラスだった場合のほうが高かった。

「たしかに微妙な知識かもしれないが、いつ役に立つかわかんないぞ？　もしも無人島に漂着してそこで生活しないといけなくなったら、こういうサバイバルな知識があったほうがいいだろ」

「うーん……まずは漂着しないようにしようよ」

益体のない会話を交わしながら、二人で下駄箱までたどり着く。自分の下駄箱を開け、中から靴を取り出す。義人はそのまま靴を履こうとして、ふと顔を上げた。

すぐ傍の玄関に目を向けてみれば、誰かが立っているのが見える。壁に背を預け、軽く目を瞑ったままで誰かを待っているようだ。

身長は義人よりも僅かに高く、百八十センチ弱。一見細身に見えるが、実際は鍛えて引き締まっているだけだろう。そして、どこか鋭い雰囲気を纏った男子生徒である。

「よぉ、志信。待たせたか？」

その上、義人の知り合いだった。志信と呼ばれた男子生徒はすっと目を開く。

「いや、大して待っていない」

あまり抑揚のない声で応え、志信は少し視線を移す。その視線の先には優希がおり、視線を向けられた優希は困ったように頭を下げた。

「こ、こんにちは藤倉君」

「……ああ」

志信が軽く会釈をする。それを受けた優希も、慌てて頭を下げた。

優希としては、この藤倉志信（ふじくらしのぶ）という人物が少し苦手だった。

どこか張り詰めた空気が、僅かに距離を感じさせる。しかし、隣の義人はまったくそれに構っていなかった。下手すれば険のあるようにも見える志信の肩を叩きながら、何が面白いのか爆笑している。

「わはははははは！　かてえよお前ら。いつものことながら、もうちょっと自然に挨拶しろよな。まるで初めてお見合いした同士みたいな感じだぞ？」

笑いつつ、志信の肩を連打。志信は困ったように眉を寄せる。

「む……俺は、ただ頭を下げただけなんだが」

「それが硬いんじゃないか？　もっとこう、にこやかに笑いながら挨拶するとか――いや、全然想像できないな。それ」

今度は義人が眉を寄せた。だが、すぐさま笑い飛ばす。

「まあいいや、いつかはなんとかなるだろ。そんなわけで、早く帰ろうぜ」

ひとしきり笑い、そのまま歩き出した。志信はそれに並び、優希は先程と同じく義人の半歩後ろを歩く。それが、三人で歩くときのポジションだった。

玄関を出ると、運動場のほうから野球部らしき掛け声が響く。それを聞いた義人は、しみじみと頷いた。

「いやいや、若いねぇ。青春だねぇ」

「……義人ちゃん、なんかオジさんみたい」

ポツリと、優希が突っ込みを入れる。それに対して、義人は傷ついたように一歩下がった。

「なっ！　このうら若き十七歳を捕まえてオジさんとは……自分でもそう思うぞ」

「それに、男でうら若きというのも可笑しなものだが」

追撃のように志信が突っ込みを入れる。その突っ込みに義人は笑い、困ったように頭を掻いた。

「まさか志信に突っ込みを受けるとはな。いいだろう、お前はもう免許皆伝だ」

「別にいらないが、受け取るべきか？」

「うん、素で返されると中々辛いから受け取ってほしい」

特に意味はない、友人同士の会話を交わす。それを聞きながら、優希は内心で頬を膨らませていた。

久しぶりに義人ちゃんと二人で帰れると思ったのにな……。

そんなことを考えつつ、義人の半歩後ろを歩く。そこは、さりげなく距離が近かった。

優希にとって、志信も一緒に帰るということに不満があるわけで

はない。と、いいたいところだが、不満はある。だが、それを顔に出すことはない。例え不満を顔に出していても、義人が気づかないという悲しい現実もあったりするが。

「そう言えば、大会が近いんだっけ？」

優希の考えを遮るように、義人が話しかける。優希はその言葉の意味をすぐさま理解して、いつもの笑みを浮かべた。

「うん。あと二十日後にあるよ」
「そっか。で、調子はどうよ？」
「まあまあ、かな」
「まあまあか。ま、優希にとっては調子が良いって意味だな」

義人は一人で頷くと、意味がわかっていない志信に説明を始める。

「優希が弓道部に入ってるのは知ってるだろ？　それで、大会が二十日後にあるんだよ」
「ほう……」

僅かに感心したような声を出す志信。その声が照れ臭かったのか、優希は話題を変えるように質問をする。

「そ、それよりも二人は部活に入らないの？　今でも、入部しないかって誘われているんでしょ？」
「ん、まあ一応は。まったく、今年の一年にロクなのがいなかったからって、二年から引き抜こうとするなっての」
「俺は、家の道場で運動するからいい」

やれやれと肩を竦める義人に、淡々と答える志信。それを聞いた

優希は苦笑する。

「二人とも運動神経良いんだから、部活に入ればいいのに」

「部活って面倒なんだよな……それと優希。俺と志信を一緒にしないほうがいいぞ。犬で例えるなら、チワワとドーベルマンぐらい運動能力に差があるんだからな」

ちなみにチワワは俺ね、と言い添えて、義人は優希に笑いかけた。だが、不意にその動きが止まる。

「……義人ちゃん？」

「義人？」

不意に動きを止めた義人に合わせて、優希と志信も足を止めた。だが、義人はそれに答えず自分の右腕を凝視する。

「いや、なんか今、腕に絡まったような……」

細い、紐か何かが絡まったのかと初めは思った。しかし、そんなものはまったく見えない。義人は一度首を捻り、再び歩き出そうとして、

『――見つけました』

ささやくような、声を聞いた。

「いっ！？」

その声と共に、グン、と腕を引かれる。だが、何も見えない。いや、優希と志信には見えない、と言ったほうが正しかった。

「な、なんだ？」

僅かに離れた場所にぽっかりと浮かぶ黒の点。それが徐々に広がり、それに呼応するかのように引く力が強くなっていく。右腕、左腕。次いで両足。見えない糸か何かが絡みつき、その太さを増して義人を引きずろうとする。

「どうしたの義人ちゃん。もしかして、パントマイム？」

「いやいや！　どう見ても違うだろ！　何かに引っ張られるんだよ！」

そういう間にも、今では三十センチほどまで広がっている黒の穴に引きずり込まれそうになる。

「っ、義人！」

そんな様子に何かを感じ取ったのか、志信が義人の右腕をつかむ。すると、それに反応したかのように見えない糸は志信の腕にも絡みつく。そして、それと同時に見えるようになった黒い穴を見て僅かに息を呑んだ。

「これは、なんだ？」

「知らねぇって！　いきなり出てきたんだ！」

珍しく困惑しているらしい志信に、義人は叫ぶことで答える。

それを見た優希も、“何か”が起きていることを理解して義人の左腕をつかんだ。

「うわわっ！　なにアレ！？　ブラックホール？」

そして、やはり突然見えるようになった黒い穴に驚く。

「そうか、ブラックホールか。って、んなわけあるか！」

引きずられながらも、とりあえず突っ込みだけは入れる。

義人は両足で踏ん張り、志信はそれを支えて引っ張る。優希は、義人の左腕に抱きついた状態でどこか嬉しそうに引っ張っていた。

「――――っく！　無理だ！　引きずり込まれる！」

だが、それも長くは続かなかった。まるで自動車で引かれるかのような力に、三人はバランスを崩す。そして、二メートルほどに大きくなった黒い穴へと吸い込まれていく。

「うわあああぁぁぁぁー！！」

いきなり底がなくなり、ふっと落ちるような浮遊感。そして、数瞬後に訪れる安全具なしでジェットコースターに乗るような感覚。

体がバラバラになりそうな衝撃が伝わり、義人は歯を食いしばる。

「きゃあああぁぁー！」

その左腕では、本当にジェットコースターに乗ったときのような表情で優希がしがみついて叫んでいた。

「っ！」

反対側の右腕では、志信が驚いている。叫ばないあたり、流石だと義人は思った。

義人にわかることがあるとすれば、突然絡まった何かが自分と引

っ張っているということだけだ。
そうして引っ張られること数十秒。再び不意に、引っ張っていた力がなくなる。

「へ？」

例えるなら、今までは斜め下に引っ張られていた感じだった。だが、それがなくなって真下に落ちる感覚へと変わる。

「～～～！」

今度は叫ぶ余裕もなく、三人は真っ逆さまに落ちていった。

第二話：異世界

「はぁ？　召喚先の座標を間違えた？」

一人の少女が、もう一人の少女に向かってそう尋ねる。

「はい。間違えたといいますか、こちらの世界に引っ張っている途中で糸が切れたといいますか……」

それに対し、もう一人の少女は眉を寄せながら答えた。

「間違えた、じゃすまないわよ！　どうするの？　どの辺に召喚したの？」

少女が詰め寄る。もう一人の少女は、眉を寄せたままで己の感覚からおおよその召喚位置を割り出す。

「多分、西の森辺りに……」

「魔物の巣窟じゃないの！」

答えに、少女が叫ぶ。

「どうしましょう？」

「どうしましょうって……そりゃ助けにいかないと駄目でしょ。私の隊と、あとは手の空いてる隊を出して！　すぐに行くわよ！」

「わかりました。事後承諾になりますけど、三部隊ほど出撃させます」

もう一人の少女はそう言って、傍にいた兵士に声をかけた。その

命令を聞いた兵士は、すぐさま駆け出していく。

「事後承諾ってアンタ……その承諾を取る相手を魔物の巣に放り込んだんでしょうが！」

「はぁ……返す言葉もないです」

怒鳴る少女と、肩を落とす少女。だが、すぐさま片方の少女は駆け出す。

「それじゃ、わたしも行くから！」

「はい、お気をつけて。あ、会えたらちゃんとニホンゴで話しかけてくださいね？　この世界の言葉で話しかけたら、多分警戒しちゃいますから」

「わかってるわよ！」

一人は残って見送り、一人は駆けていく。

「……ふぅ」

その様子を見ていた初老の男性は、心からのため息を吐いた。

「うーん……」

寝返りをうつ。義人はそれを数十秒周期で何度か繰り返すと、ゆっくりと目を開けた。

「……？」

自分の部屋ではない。いや、そもそも室内ですらなかった。
そこは鬱蒼と木が生い茂り、足元にはたくさんの落ち葉が敷き詰められている。天蓋では木から伸びた枝葉が日光を遮り、少し薄暗かった。
吹く風は僅かに肌寒く、木の上に止まっている鳥はやけに馬鹿でかい。

「なんだ、夢か」

即断すると、再び横になる。豊沃な大地の香りが鼻をくすぐったけれど、それすらも夢だと思い込むことにした。
そうさ、目を覚ませばきっとベッドの上なんだ。だから眠って目を覚まそう……。
そう思い、義人は再び眠ろうとして……跳ね起きた。

「って、こんなリアルな夢があってたまるかい！　そもそも、眠って目が覚めるわけねーだろ！」

自分自身に突っ込みを入れると、再度辺りを見回す。

「しっかりしろ俺！　実はこれが俺の部屋なんだ！！」

それが本当ならかなり嫌である。
義人は混乱が落ち着くように深呼吸すると、現状の把握をすることにした。何があったかを思い出し、この現象がなんたるかを推測する。

「たしか、学校が終わったから帰る途中だったんだよな。それで、いきなりここにきた」

現状の把握は、僅か十秒で終わった。しかし、すぐさま首を捻る。問題は、どうやってここにきたかだ。

「もしかしてテレポート？　うわ、俺って超能力者だったんだな…って、だからいきなり脱線してどうするんだっての。もっと真面目に考えないと」

腕を組み、ブツブツと呟く様は一見異様である。誰かに見られたら、黄色い救急車を呼ばれるかもしれない。

誰か……？

ふと、義人の頭に疑問が掠める。そして、それに続いて冷や汗が流れた。

やばい、混乱して二人のこと忘れてた。

慌てて周りを見るが、優希も志信も近くにはいない。落下途中までは腕にしがみついていたはずだが、その姿はなかった。

「おーい優希ー！　志信ー！」

声を張り上げてみるが、返事はない。義人は沈黙すると、とりあえず辺りを探すことにした。

「くそ、歩きにくいな」

生い茂る草や、足元の落ち葉が安定感をなくす。そのことに軽く愚痴を言いながら、薄暗い周囲を見回していく。

「あれ？　なんか、やけに体が軽いような……」

歩いている途中で、義人は首を傾げた。いつもに比べ、体がかな

り軽く感じられる。重力が変化したのか、もしくは自身の筋力が突然の異常発達をしたかのような感覚だ。
あまりの違和感に、義人は軽くジャンプしてみる。すると、軽くなのにいつもの全力よりも高く跳べた。

「な、なんじゃこりゃー！」

自分で跳躍したことが信じられず、思わず叫ぶ。
そのまま着地すると、義人は頭を抱えた。これは、やはり夢なんじゃないかと思ってしまう。だが、すぐさま顔を上げた。
高くジャンプできて、損はないだろう。バスケで簡単にダンクシュートが出来るじゃないか。ポジティブにそんなことを考えてみる。
そう判断すると、人探しを再開することにした。なにはともあれ、二人を見つけないといけない。
人の手が入っていないこと確実な森の中を進み、たまに立ち止まって声を上げる。すると、遠くのほうからきっと鳥のものだろう、『ギャーギャー』とか『クケケケケケ』なんて常識にない鳴き声が聞こえてきた。

「鳥か？　いや、鳥だな。というか、鳥であってくれ」

その鳴き声は徐々に義人に近づき、姿を見せる。その姿を見た義人は、あっさりと前言を翻した。

「ハッハッハ。ＯＫ了解コンチクショー。テメエら、絶対鳥じゃねえだろ」

その姿を見た義人は、ヤケクソのように笑う。
一メートル弱の体躯に、やけに鋭い嘴。羽毛は何の冗談か、艶のある紫一色。そして極めつけは、その額にある三つ目と頭の横から

生えた二本の角だろう。そんな化け物チックな鳥が、三匹。
世界の鳥類図鑑にもこんなの載ってなかった気がするなー。
やや現実を逃避しながら、義人は内心で呟く。
こんな鳥がいたら、間違いなく図鑑に載っているだろう。もしくは未確認の鳥類という可能性もあったが、この鳥は食物連鎖なんて軽く覆しそうである。つまり、生態系を狂わせるものだ。だから、きっと鳥ではないと義人は思いたかった。

「クケケケケ！」
「うおっ！　飛べるのかよ!?」

先程聞いた奇声で鳴きながら、化け鳥が飛翔する。一メートル近くある鳥が飛翔する様は中々に壮大だったかもしれない――嘴を開けて、義人に襲いかかってこなければ。

「俺を食うつもりか！」

自身に迫る危険を肌で感じ取り、義人は咄嗟に横に跳ぶ。その僅か横を嘴が掠め、風圧で義人はバランスを崩した。上体が泳ぎ、それを狙って二匹目の化け鳥が突っ込んでくる。

「っ！」

バランスの崩れをそのままに、バク転の要領で後ろへと跳ぶ。やけに体が軽いせいか、予想よりも後ろへと着地した。
運動神経が良くてよかった……。
義人は自分の両親に感謝した。そして、三匹目が突っ込んでくる前に駆け出す。
一歩地を蹴るごとに、落ち葉が舞い上がる。その落ち葉の量に比例するかのように、義人の体は前へと進んでいく。今まで感じたこ

とがないくらいの速さに、驚きつつも感謝した。
これで逃げ切れる。そう思った瞬間、真横からの衝撃に義人は地面へと倒れこむ。全身を強く打ちつけ、意識が一瞬飛びかけた。

「な、に？」

痛む体を押さえて、衝撃がきた方向を見てみる。しかし、そこには何もいない。ただ、少し離れた場所にさっきの化け鳥がいた。
まさか、あの位置から……？
義人は再び混乱する。原理はまったく不明だったが、あの化け鳥は遠距離から何かをしたようだ。
化け鳥は義人の動きが止まったことを確認すると、悠々と傍に寄ってくる。そして嬉しそうに一鳴きすると、義人に飛びかかってきた。

「クケケケケッ！」

鳴き声と共に、鋭い嘴と鉤爪が義人を捉えようとする。

――その瞬間、風が奔った。

すぐ横から、化け鳥の喉元に何かによる一撃が命中する。化け鳥は突然の攻撃に悲鳴を上げ、義人はそれを瞬時に判断すると、衝撃で僅かに下がった化け鳥の顔面に蹴りを叩き込んだ。そのまま蹴った反動で後ろへと転がり、痛む体を無視して立ち上がる。

「サンキュー志信！　助かった！」

そして、すぐ傍で身の丈ほどの棒を構えた志信へと礼を言った。

話は僅か前にさかのぼる。

誰かに名前を呼ばれた気がして目を覚ました志信は、すぐさま周囲を見回して状況を確認。それと同時に感じた、ピリピリするような嫌な気配に眉を寄せた。

辺りを見回すが誰もいない。そう判断しようとして、少し離れた木の陰で倒れこむ優希を見つけた。

志信は小走りに駆け寄り、すぐに脈を診る。次いで外傷がないかをざっと確認して、何も怪我がないと判断した。気絶もしくは眠っているだけだろう。志信はとりあえず、優希を木にもたれかけさせておく。

「……」

沈黙したままで志信は思考する。

常に冷静な彼は、この状況に置いても落ち着いて現状の把握に努めた。そして、先程から敵意を含んだ視線を感じている。

その危険性を考えた志信は、傍に生えていた細木を手ごろな長さで折り取った。形は少々歪だが、十分武器になるだろう。ともすれば、棍に見えるかもしれない。志信は身の丈ほどの棍で一度突きを繰り出して、頷く。

この場を移動するべきか、それとも留まるべきかを考え、すぐ傍で眠る優希に視線が向く。

人一人を抱えて移動するのは、得策ではない。

「クケケケケケ！」

そうやっていると、不意に遠くのほうからそんな鳴き声が聞こえた。志信は棍を構え、辺りを探る。気配は近くにない。だが、それ

ほど遠くでもなさそうだった。
一度周囲を見て、眠っている優希に及ぶ危険がないことを判断して駆け出す。あまり足音が立たないように移動し、注意深く辺りを見回した。
その際、いつもよりも体が軽く感じたが志信は無視する。今はそんなことを考えるときではないと、彼の直感が告げていた。
そうやって走ること僅か、志信は目の端で何かを見つける。そちらに目を向けて見れば、一メートルほどの鳥らしき生き物がいた。ただし、それは志信に意識を向けておらず、他の何かを追っているようだ。

「あれは、義人？」

その先にいたのは、義人だった。今まで見たことないような速度で走り、不意に横へと吹き飛ぶ。さっきの鳥が翼を振り、その直線状にいた義人が吹き飛んだ。それを見た志信は、今の現象が化け鳥によって起こされたものだと判断した。非現実的だが、それ以外に原因がわからないのだからそれが真実となる。
義人の危険を察知した志信は、そのまま全力で駆け抜ける。先程の義人を上回る速度で走り、今まさに捕食せんと飛びかかっていた化け鳥に向かって踏み込む。手に持った棍を突き出し、一番効果の高そうな喉元へと一撃を叩き込んだ。

「サンキュー志信！　助かった！」

それに反応した義人がすぐさま抜け出し、礼を言う。それを聞いた志信は、僅かに口元を笑みに変えた。

「志信、優希がどこにいるか知らないか！　まだ見つかってないん

だ！」

義人は棍を構える志信にそう尋ねると、志信は油断なく棍を化け鳥に向けたままで首肯する。

「向こうにいる。眠っているが、危険はないだろう」

「そっか……無事で良かった」

ほっと安堵の息を吐き、義人は表情を引き締めた。何はともあれ、まずは目の前の化け鳥をどうにかする必要がある。

何は武器になりそうな物がないか辺りを見回すと、それに反応したように化け鳥が鳴き声を上げて羽ばたいた。

「っ！！」

その動作に、最も早く反応する志信。先程の、義人が吹き飛ばされた現象と同じだという確証はないが、可能性は高い。その判断の元、義人を横へと突き飛ばして自身も跳ぶ。

それに遅れて数瞬後、今まで二人がいた場所の落ち葉が吹き飛んだ。地雷でも爆発したかのように、落ち葉が千切れて舞い散る。

「な、なんだぁ！？」

理解が追いついていない義人はそう叫び、予想を確信に変えた志信は着地と同時に駆け出す。離れた距離を瞬く間に潰し、棍の間合いに化け鳥を引き込んだ。

「しっ！」

再度の踏み込みに、今度は額の三つ目を狙った打突。僅かに捻り

を加えたその一撃は、正確に化け鳥の三つ目の一つを痛撃する。

「グギャァー！！」

その痛みに、化け鳥は悲鳴を上げた。たたらを踏み、数歩後ろに下がる。だが、すぐさま翼を広げて跳躍した。大きな翼をはためかせ、棍の届かない位置まで飛ぶ。そして、身の危険を感じたのかそのまま木々に隠れるように飛び去った。

志信は警戒を解かずに棍を構え、義人は他にも何匹かいたことを思い出して周りを見回す。しかし、今の騒動で警戒したのか化け鳥の姿はなかった。

「気配は消えた、か」

志信がポツリと呟く。それを聞いた義人は、今度こそ心から安堵の息を吐いた。

「はぁ～……いや、マジで助かった。ありがとな、志信」

「いや、大したことではない」

十分に大したことだよ。

義人は言葉に出さず、そう思う。正直な話、義人は手が出なかった。隙を突いて蹴りを入れてみたけれど、大した効果はなかっただろう。

それに対し、志信の行動は素直に凄いと思えた。事実、化け鳥を追い返したのは志信一人の功績と言っても過言ではない。だが、本人は全く気にしていなかった。

「まったく、そんなところは相変わらずというかなんというか」

やや呆れたように言ってみるが、そこに非難の色はない。義人は一度だけ大きく息を吸い込むと、気合を入れる。

「よし、まずは優希と合流しないとな」

「わかった」

頷き、志信が歩き出す。義人は一度周りを見回してから、それに続いた。

第三話：ある日森の中、熊さんに出会った

その少年と出会ったのは、四歳の頃だった。
同じ幼稚園、同じ小学校、同じ中学校。そして、高校も一緒という、それは世間一般で言えば“腐れ縁”というもの。
もっとも、腐った縁だろうが腐ってない縁だろうが、その少女には関係なかった。
どこか飄々としていて、それでいて自然と物事の本質を見極める。そんな、他の人とは少しだけ違う少年のことを、いつしか目で追うようになっていたのだから。
頭は良いくせに、勉強は嫌いで、運動が得意なのに部活にも入らない。裏表がない性格で、男女分け隔てなく接して、そのおかげで友達だって多かった。……そのおかげで、少女がやきもきしたこともあるが。
なにはともあれ、少女はその少年のことが好きだった。鈍感なのが欠点だけど、それでも良い。それで助かったこともあるのだから。

「ふにゅ……」

そこまで少女が思い浮かべたとき、ぺちぺちと頬を叩かれた。

「おーい優希ー。朝ですよー。そんでもって、ここは樹海ですよー。あ、もしかして富士の樹海かここ」

義人が声をかけるが、優希は起きようとしない。実に幸せそうな顔で、寝息を立てている。

「仮に富士の樹海だとして、日本にあんな鳥がいるのか？」
「いや、スマン。いないな。というか、いたら困る。もしいたら、近隣住人から行方不明者が続出するぞ、きっと」
軽く前言を撤回しながら、義人は優希の傍に膝をつく。
「ふにゅ……」
「幸せそうな顔しやがって……」
苦笑しながら、義人は優希の頬を軽く叩いた。柔らかい頬が叩かれ、ぺちぺちという緊張感がない音が辺りに響く。その音に、珍しく志信が笑っていた。
「おい優希、早く起きてくれ。いや、俺としてもそんなに気持ち良さそうに眠っているのを起こすのは、かなり心苦しいものがあるんだ。だけど起きてくれ」
もう一度頬を叩くと、優希は軽く身じろぎをする。そして、ゆっくりと目を開いた。そのまま目の前の義人を確認すると、不思議そうに首を傾げる。
「……義人ちゃん？　なんで、わたしの部屋にいるの？」
「素敵なボケをありがとう。もしここがお前の部屋なら、是非とも出口まで案内してほしいよ」
寝惚け眼をこする優希に、義人は苦笑を深くした。
「って、あれ？　ここ、どこ？」
完全に目が覚めたらしい。優希は周りを見回すと、困惑したよう

な声で呟く。

「俺にもわからない。ただわかるとすれば、あまり長居はしたくないってことくらいだ。というわけで、立てるか？」

優希に手を伸ばし、尋ねる。優希はその手をつかむと、引っ張られるようにして立ち上がった。

「さて、優希も起きたし、この森から出ないとな」

そう言ってみるが、どの方向に進めば出られるのかがわからない。辺り一面は木々に覆われ、目に見える範囲に抜け出す場所はなかった。

「……ま、歩いていれば出られるか」

確証はないので、義人は希望を込めて言ってみる。それに同意するかのように志信も頷いた。

「おそらくは」

「そこは、絶対って言ってほしかったぞ」

志信の言葉に突っ込みを入れてみると、優希が不思議そうな顔で尋ねる。

「ねえ義人ちゃん、この森って何かあるの？　話を聞いてると、すぐに出ないといけないみたいだけど……？」

「何かあるっていうか、いるっていうか……」

義人は困ったように志信を見る。この場で言うべきか、言うべき

ではないか。そのアイコンタクトに、志信は頷いてみせた。

「さっきの鳥が出てからでは遅い。先に言っておいたほうが、心の準備もできる」

「だよなぁ。いいか、優希。この森には……」

義人がそこまで言ったとき、志信が弾かれたように反応する。体を反転させ、腰を落として棍を構えた。そして、その棍の向く先には、全長三メートルほどの熊の“ような”生き物がいた。

「この森には馬鹿でかい鳥とか、あんな化け物が……いたんだな」

優希に説明していたはずが、途中から確認になる。なにせ、熊のような生き物のインパクトは強すぎた。

全長約三メートル。それだけなら、納得できただろう。だが、その熊の腕は四本。そして極めつけは、口から炎らしきものを吐いていることだ。

「な、なんだありゃ！　熊か？　ベアーか？」

「違うよ義人ちゃん！　きっとツキノワグマだよ！」

「落ち着け二人とも。熊とベアーは同じ意味だし、ツキノワグマもそこまで変わらない」

慌てる二人に、冷静に突っ込みを入れる志信。だが、その顔にも先程まではなかった焦りのようなものが見えた。

「ゴアアアァァッ！！」

そんな三人に構わず、化け熊が雄たけびを上げる。そして、口から炎を吹き出した。それは威嚇のつもりだったのだろう、三人のす

ぐ横の木に命中し、音を立てて燃え上がらせる。
その突然の光景に、優希は腰を抜かした。比較的心の準備ができていた義人は、さっきの化け鳥のほうがまだ手に負えたなー、と内心で呟く。志信は油断なく棍を構えたまま、化け熊との距離を目測で測った。
化け熊は、三人が自分にとって大した脅威ではないと判断する。それまで空けていた距離を、悠々と縮めだす。
三メートルほどの熊が迫ってくるのを見て、義人は冷や汗を流した。

「これは、逃げたほうが得策だと思わないか？」
「逃げ切れれば、だがな」

志信は横目で腰の抜けた優希を見る。それと見た義人は、あちゃあ、と言って手で顔を覆った。

「仕方ねぇ、優希は俺が担いで逃げる。なんかわからないけど、妙に体が軽くて速く走れるからなんとかなるだろ。優希も重くないし」
「わかった。義人はそうしてくれ」
「……俺は？　志信も一緒に逃げるんだぞ？」

訝しげな表情で義人が尋ねると、志信は小さく首を振る。

「あの熊は俺が食い止める。どの道、同時に逃げたとしても、炎を吐かれたら逃げられる保証がない」

淡々とした志信に、義人は動こうとしていた足を止めた。

「馬鹿言ってんじゃねえよ。お前を置いて、逃げられると思ってん

のか？」

僅かに怒りを含んだ声に、志信は薄く笑う。

「お前は、相変わらずだな」

「は？」

「俺のような人間でも、変わらずに接してくれる」

それだけ言うと、志信は化け熊に向き直る。先程よりも近くに寄ってきた化け熊を見据えつつ、握る棍に力をこめた。すでに語る言葉はないと、その姿が言っている。それを見た義人は、ため息を一つ吐いて優希に話かけた。

「悪い、優希。逃げるのは後になった」

そう言って、手頃な石を拾う。それを見た優希は、わかっていたように微笑んだ。

「うん。義人ちゃんなら、そう言うと思ったよ」

優希の言葉に、困った性分だよなぁと義人が笑う。

正直に言えば怖い。自分の何倍かありそうな体格に、口からは炎を吐く化け物。これで怖がらないほうが可笑しいというものだ。

内心で湧き上がる恐怖を、義人は無理やり押さえつける。膝が震えそうになるが、力を込めて無視した。

生憎と、友人を囮にして逃げるような根性は持ち合わせていない。義人は右腕を振りかぶり、化け熊に狙いを定めた。野球部には負けるが、それに準ずる程度のコントロールは持ち合わせている。

「くらえっ！」

大きく踏み込み、オーバースローで石を投げた。それと同時に志信が駆け出す。投げた石は狙い違わず化け熊の腹部に命中し――毛皮で弾かれた。

「ゴアァァッ！！」

ダメージを与えることなく空中へと弾かれた石を、化け熊が腕の一本で殴り飛ばす。それはライナーとなって、志信のほうへと叩き出された。

「っつ！」

時速百キロ超で迫る石を、志信は咄嗟に棍で弾く。志信の後ろには優希が腰を抜かしているため、避けるわけにはいかなかった。

弾いたおかげで僅かに痺れた右手を無視して、志信は走る。打撃では効果が薄いと看破し、化け鳥と同じく目を狙うべく高く跳躍した。

「はっ！」

勢いを乗せて棍を突き出す。狙いは右目。どんな生き物でも、眼球は急所だ。

しかし、化け熊はその動きを上回る。迫る志信を嘲笑うかのように、口を開けた。そして、先程よりも大きな炎を吐き出す。

志信の眼前に炎が迫る。だが、志信は表情を変えない。突き出していた棍を引くと同時に軌道を変え、横に生えている木を突く。志信自身はその突いた反動で横へと体を押し出し、炎から身を逸らした。

「うっわ、相変わらずとんでもない運動神経してんな……」

その曲芸染みた動きを見ていた義人は、思わず呟く。義人自身も運動神経には自信があるが、志信に比べれば段違いどころか桁で劣るだろう。チワワとドーベルマンの例は、冗談ではない。

義人がそんな呟きを漏らすとほぼ同時に、木を突くことによって横に回転した志信は、打突を諦め横薙ぎの一撃へと転じる。体勢は悪いが遠心力の乗った一撃だ。もしも相手が人間なら、殺傷するに余りある。

そんな威力のある一撃を、化け熊の側頭部へと叩き込む。志信の身の丈ほどある棍で殴られた化け熊は僅かに後退し、

「ガアアアアッ！」

すぐさま反撃を繰り出した。

志信が握る棍を爪で切り裂き、その余波をもって志信を弾き飛ばす。

「くっ！」

その衝撃をガードした志信は、何とか足から着地する。直接的なダメージはないが、それでも僅かに動きが鈍った。

チラリと、今まで棍だったものに目を向ける。爪で切り裂かれた棍は、長さを変えて一メートル程になっていた。その姿は、もはや棍ではなく棒。だが、それでも志信は表情を変えない。棒を正眼に構え、化け熊と対峙する。

「くそっ」

そんな志信を見ながら、義人は歯噛みした。友人が身を挺してい

るというのに、自分は何もできないのか、と。
義人は周りを見回し、何か打開策になるものはないか探す。右を見て、左を見る。そして、今度は正面を見た。

「――――は？」

そして、間の抜けた声を漏らす。その声を聞いた優希は、つられたように義人の視線の先を追って、

「――――え？」

つい、義人と似たような声を漏らしてしまった。その方向には志信と化け熊がいるが、二人の視線はさらにその奥へと釘付けになる。
そこには、こちらへと駆けてくる一人の少女の姿があった。
歳は義人達と同じか、少し上に見える。整った目鼻立ちに赤い長髪を後ろでまとめ、纏うのは華美でない装飾の施された白い鎧。それは一切の無駄を省いたように、必要最小限の急所だけを守っている。そして、右手に握られている一振りの日本刀。鎧は西洋の趣だというのに、その少女が握っているとやけに似合っていた。

「ハアアァァッ！！」

そのまま跳躍。少女は刀を振りかぶり、化け熊よりも高く跳ぶ。
それを見た志信は僅かに目を見開くが、すぐさま後方へと跳躍した。

「セイッ！」

刀は円を描き、振り下ろされる。その一閃は鋭く、化け熊の脳天から股下にかけて一息に両断した。まるで、包丁で野菜を切るかのような鮮やかさ。義人は思わずその光景に見入り、隣の優希は何も

見まいと目を瞑っていた。
少女は化け熊を切り裂いたまま、地面へと着地する。真っ二つに斬られた化け熊は悲鳴を上げることすらなく、その体を二つに分けて地面へと倒れた。
化け熊が死んでいるのを確認した少女は、一度刀を血振るいしてから鞘に納める。そして、志信へと目を向けた。

「……」

互いに無言。志信は警戒を解くことなく、手に持った棒に力を込める。それを見た少女は、今度は義人と優希に目を向けた。
その視線を受けた義人はとりあえず手を軽く挙げ、優希はそんな義人の袖を引く。
そして少女は僅かに思案し、志信の方へと歩み寄った。自分に敵意はないというつもりなのか、日本刀は地面へと置かれる。それを見た志信は、とりあえず棒の切っ先を少し下げた。
それを確認した少女は、志信に向かって膝を突いて頭を下げる。それは、臣下の礼と呼ばれるもの。

「カーリア国第一魔法剣士隊隊長、ミーファ＝カーネルです。王をお迎えに参りました」
「――――は？」

その台詞に、志信は珍しく素の声を発した。

第四話：王

「カーリア国第一魔法剣士隊隊長、ミーファ＝カーネルです。王をお迎えに参りました」

ミーファ、と名乗った少女はそう告げる。それは、少しばかり発音が違うが日本語そのもの。その言葉を聞いた志信は僅かに眉を寄せる。

「王？」

志信は困惑したような表情になる。だが、表面的には変わっていない。その表情の変化は、義人だけが気づいていた。

「はい、王です」

その表情の変化に気づくことができないミーファは、至極真面目な表情で頷く。

「何の話だ？」

志信の疑問の声に、ミーファは小さく首を振る。

「詳しい話は後ほど。今は、この森から出ることが先決です。私達についてきてください」

ミーファがそう言うと、離れた場所から多数の足音が響く。義人と志信は身構えるが、出てきたのは人間だった。そして、ミーファが志信に臣下の礼を取っているのを見るやいなや、全員が同じく膝

を突く。
志信は義人に目配せをして、それを受け取った義人は頷いて腰の抜けた優希を抱きかかえる。ミーファや他の人間は、皆志信に目を向けているのでそれに気づく者はいない。
逃げよう。
それが、二人の内心だった。
いきなり王呼ばわりされて、平然としていられる人間はいない。例え言葉が通じるとはいえ、さらに悪い方向へ転がる可能性だってある。
義人と志信は、集団に気づかれないようスリーカウントを取る。それを見た優希が声を上げそうになったが、それよりも先に義人が手で押さえた。
……三。
志信は僅かに棒を握り締め、次いで足に力を込める。
……二。
義人は抱きかかえた優希に今から走る意思を目で伝え、
……一。
二人はどの方向に駆け出すか目を向ける。
……零。
同時に地を蹴る。義人は体を反転させて駆け出し、志信はミーファ達を見たままで後方へと大きく跳ぶ。だが、それを見てもミーファたちは動かない。そのことに義人と志信は疑問を覚えるが、気にしている暇はなかった。
その判断の元、さらに走ろうとして――二人は足を止める。
「あー……団体さんでお出ましだったか」
思わず、義人は呟く。義人達を取り囲むように、周囲には何十人と人がいた。

「王よ、落ち着いてください。私達は貴方に危害を加えるつもりは毛頭ありません」

そう言って、ミーファが立ち上がる。

どう考えても逃げることはできない。それがわかってしまった義人は、ため息を吐く。

「まったく、なんだってんだよ」

義人は志信に話を振ってみるが、返ってくるのは沈黙だけだ。優希も答えることができず、ただ黙っている。

それを見たミーファは、義人達の傍まで歩み寄って兵士達に一度手を振った。それに従い、ガラガラと音を立てて馬車のようなものが引かれてくる。

「お乗りください。城に案内します」

三人は顔を見合わせるが、この状況で断るという選択肢は取れそうにない。義人はもう一度だけため息を吐いて、二人と共に馬車へと乗り込んだ。

安定のない道を進んでいるせいか、馬車はひどく揺れる。そのことに辟易しつつ、義人は対面に座る志信に目を向けた。

「なぁ志信……王ってなんだ?」

「……国家で最も上位にあたる統率者。もしくは最も優れた者につける称号」

「違う違う。合ってるけど違う。俺が聞きたいのは、なんで志信を

王って呼んだのかって
ことだよ。実は王家の人間？　って、いつの時代の話だっつーの」

自分で言ったことを否定しつつ、義人は考える。
見たことのない化け物に、時代錯誤な鎧や武器。西洋風な鎧に日本刀というのは微妙なところだったが、本物であることに変わりはない。

「うーん……もしかして、俺たち電波な人にでもさらわれたのか？　あ、もしかして夢？　集団催眠とか、そういうやつか？」

義人は試しに自分の頬を引っ張ってみるが、普通に痛かった。続いて、優希の頬を引っ張る。両頬をつまみ、左右逆方向へと引っ張った。

「おお～伸びる伸びる」

柔らかく、餅のような感触に思わず感嘆の声を漏らす義人。

「ひひゃいよ、ひょひとひゃん」

涙目で抗議する優希に、義人は笑って手を放す。

「いや、すまん。軽くつまむつもりが、思ったよりも伸びたせいで面白くってな」
「うぅ……戻らなくなったらどうするの？」
「大丈夫だろ、多分。戻らなくなったら、現代に復活した瘤取りじいさんとして有名になれるかもよ？」
「瘤取りじいさんって……わたし、女の子だよ？」
「……余裕だな、二人とも」

いつの間にか緊張感をなくした二人に、志信がため息交じりの突っ込みを入れる。その言葉に、義人は大きく頷いた。ついでに、右手の親指も立てる。

「おうよ。今更じたばたしても、問題は解決しないしな。とりあえずは森から抜け出せるんだし、今は大人しく連行されるしかないだろ。それに……」

チラリと、義人は自身の体に目を向けた。

「いつもより体が動くし、いざとなったら逃げ切るくらいは出来るだろ」

「それもそうだな」

義人の言葉に志信も頷く。何故かはわからないが、今までにないほど体が軽い。元々運動神経の良い二人は、それを感覚で理解した。

「えっと……逃げられるかな？」

そんな二人に、優希は困ったような声を漏らす。

優希は運動神経に自信があるわけでもない。そのため、逃げ切れるか不安だった。

「多分」

「多分なの！？　絶対って言ってくれないの？」

「いや、何とかなるって、きっと。多分。そうだといいなー」

結局は絶対と言わず、義人は欠伸を一つ吐く。

「ま、そのときはなんとかするって。今度こそ、担いで逃げるっていうのもありだし」

そう言って義人が笑うと、僅かに戸惑ってから優希も頷いた。

「……ふむ」

義人と優希の会話を聞きながら、志信は視線を横へと向ける。馬車の中から見える風景は、先程の森の中から場所を変えていた。

レンガ造りのような建物が遠くに見え、さらにその周りには畑らしきものが広がっている。志信は他にも見ようと思ったが、馬車を囲むようにして歩いている兵士のせいで見ることができなかった。

もしや日本では、ない？　いや、そもそもあのような生き物がいる時点でおかしい。

兵士の格好を見ながら、志信はふとそう思う。

あんな鳥がいたら、間違いなく辞典に載るだろう。ニュースで報道されてもおかしくはない。

仮に未知の鳥だとしても、それはまだ良い。百歩譲ってその存在を許容する。だが、鳥はまだしもあの熊は有り得なかった。

四本の腕に、火を吹く熊。

はは、と志信は内心で笑う。いや、笑うしかなかった。

これでは、義人の言うとおり夢ということにしたほうが最も説明しやすい。しかし、それを理性が否定する。

夢とは思えないほどのリアルな感覚。いくら明晰夢でも、ここまでのリアルさはないだろう。

「ん、どうかしたのか志信？」

思考していた志信に、義人が声をかける。志信はそれに首を振って応えると、義人は肩を竦めた。

「とりあえず、今は休んでおこうか。さっき走り回ったから、少し疲れちまったよ」

義人の提案に、志信と優希は頷く。

「そうだね。馬車が止まってくれないと、降りることもできないもんね」

「そうだな」

休むという提案に、全員で賛同する。義人は軽く息を吐き、背もたれに身を預けた。

石畳の上を馬車で往く。進むごとにガタガタと揺れるが、義人達は慣れたせいか大して気に留めなかった。

馬車の外に目を向けてみれば、規則正しく一定の間隔で家が並んでいる。そして、その家の量に比例するかのように人の姿もあった。だが、それは義人の知る服装とはかなり異なり、ミーファ同様、時代錯誤と感じてしまうようなものばかりである。

「なあ、気のせいか。この馬車、注目されてねえか？」

思わず、義人が呟く。

道行く人は、何故か馬車を凝視している。それも一人や二人ではなく、ほとんどの人間が馬車を見ていた。

「勘違い、ではないようだな。たしかに注目されているようだ」

義人の問いに、志信が肯定で答える。その答えに、義人はため息を吐いた。

「だよなぁ……」

見せ物のパンダの心境とはこんなものだろうか？

内心でそんなことを考えていると、不意に馬車が減速する。

「そろそろです」

一度軽くノックされ、馬車の外からミーファの声が聞こえた。義人が志信にアイコンタクトを送ると、志信はそれに頷いて口を開く。

「そろそろ、とは？」

「城に着くのです。皆、王の到着を心待ちにしているでしょう」

ミーファ自身も、それを喜んでいるのだろう。僅かに弾む声で、そう告げる。

それを聞いていた義人は、小さく頷いて志信と優希の耳元に顔を寄せた。

「俺としては、このままついていったほうが良いと思う。逃げるのもありだけど、向こうさんは志信を『王』って言ってるんだ。悪い扱いにはならないだろ」

「たしかに。ひとまずは話を聞いたほうが賢明か」

「で、でも……もしその話が嘘だったら？　本当は、わたし達を騙すつもりで連れてきたとか……」

少しばかり震える声で優希が尋ねると、義人は首を横に振った。

「いや、それはないだろ。向こうさんに嘘をつく理由がねえし、騙す意味もない。だから優希、あんま心配すんなよ」

義人はポン、と優希の頭に手を乗せる。それは幼い頃からの癖で、優希もなすがままに頭を撫でられた。

そんな二人を見ながら、志信はふっと微笑む。志信にとって、二人のそんな様子を見るのは好ましいものだった。

そうしていると、馬車が完全に停止する。徐々に減速していたのが完全に止まり、辺りがにわかに騒がしくなっていく。

何事かと、義人は窓から外を見る。すると、馬車の周りを人の群れが囲んでいた。

そのことについて義人が口を開こうとすると、それを遮るかのように馬車の扉が開かれる。そして、それと同時に歓声が義人達を包んだ。

周りの人間は、皆口々に『王』がどうだと叫んでいる。それを聞いた義人は苦笑し、志信は僅かに眉を寄せる。優希は歓声の大きさに、オロオロしながらとりあえず義人の袖をつかんだ。

「王よ、こちらです」

三人が観衆の様子を見ていると、ミーファが傍に歩み寄ってくる。義人はとりあえず志信を前に押し出し、自身は優希と共にその後ろへと続いた。

立ち並ぶ観衆の間を、三人は無言で歩く。その三人に向けられる視線には、好奇心と困惑が込められていた。

そんな視線に晒されながら、三人はミーファに続いて歩いていく。石畳の道を歩き、中世の趣がある跳ね橋を渡って城門をくぐる。

「……こりゃでかいな」

城門をくぐった先に建っていたものを見て、義人は思わず呟く。まるで、歴史の教科書に載っているかのような巨大な城がそこにはあった。

石造りの壁に、何箇所かに建てられた尖塔。おそらくは城の人間を住まわせるためであろう、居館。それは、確実に日本にない様式の建物だった。

「ははは、ここまできたら、外国まで誘拐されたってのが一番しっくりくるか」

今まで見たことのない威風ある建物にやや圧倒されつつ、義人は冗談交じりにそう言ってみる。だが、反応はない。優希は完全に圧倒されたのか、ポカンと城を見上げ、志信も少しばかり驚いているようだった。

城を見ながら、義人は軽く考えを巡らせる。

中世の趣の城に、鎧を着た兵士。民家らしき建物もレンガ造りで、コンクリートなど使われていない。

実際に外国へ行ったことがないため断言はできなかったが、今の状況はかなりおかしいものがある。その上、極めつけは森で出会った鳥と熊。

義人は昔から様々な本を読んできたが、あんな形状の鳥や熊は載っていなかった。もし仮に未確認の動物だとしても、あれほど目立つ動物が見つからないはずがない。現に、化け熊を倒したミーファなどはまるで見慣れているようにも見える。つまり、見慣れるくらい日常で遭遇する可能性があるということだろう。

火を吹く化け物なんて、一体どこのファンタジーだ？

苦笑を交えて義人は思う。しかし、一概に笑い飛ばすことができないもの事実だ。

「ったく、夢なら早く覚めろっての」

愚痴ってみるが、今の状況が夢でないことなど百も承知である。痛さで目が覚めるならば、さっきの森の中で目が覚めていただろう。だから、義人はこれが現実のものとして受け止めることにした。

直立する兵士の脇を通り、一際大きな扉を開ける。木製の扉はやや重たげな音を上げながら、ゆっくりと開いた。

床には赤い絨毯が引かれ、その絨毯に沿うように幾人もの人が並んでいる。

そして、その中でも一際目立つ人物がいた。

白の衣に緋色の袴。靴ではなく、足袋に草履。神社で見かけるその姿はまさに――、

「……巫女だ」

「……巫女さんだね」

「……巫女だな」

その人物を見た三人は、顔を見合わせて頷き合う。互いの見解に相違がないことを確認すると、今度は疑問が頭を掠める。

ここまで中世の格好をした連中ばかりだったというのに、何故いきなり和装の人物が出てくるのかと。

「カグラ、王を連れてきたわよ」

「はい。お疲れ様です、ミーファちゃん」

そんな巫女……カグラに親しげな声をかけるミーファ。それに対し、カグラも笑顔で頷いた。

「それで、どこにいたんですか？」
「西の森の真ん中付近、かな。私達の到着がもう少し遅れるか、召喚した先が森の奥だったら間に合わなかったわよ」
「あはは。まあ、間に合ったから良いじゃないですか」

楽しそうに会話する二人。だが、その後ろから初老の男性が声をかけた。

「二人とも、王がお待ちじゃぞ」

咎めるようなその声に、ミーファは慌てて表情を引き締める。

「そうでしたね。アルフレッド様、王剣は？」
「ちゃんとあるわい。それで、どなたが王かの？」

そう言って、アルフレッドと呼ばれた男性が鞘に包まれた剣を取り出す。剣を渡される際、義人はアルフレッドの耳が少し長いことに気づいたが、気にすることはなかった。

受け取った宝剣は、銀細工の鞘に、宝石が埋め込まれた鍔。形状から、ミーファが持つ日本刀とは違った西洋刀であることが窺えた。

ミーファはそれを受け取り、志信の元へと歩み寄る。そして、膝を突いて剣を差し出した。そんなミーファを見たカグラが、少し首をかしげる。

「王よ、これをお受け取りください」
「これは？」
「これは、カーリア国王が代々受け継ぐ宝剣です。カーリア国建国時、当時最高の魔法使いの手によって魔法をかけられた剣で、王にしか扱うことができません」

どこかで聞いたことがある話だな。
そんなことを考えつつ、義人はことの成り行きを見守る。
カグラは志信に目を向け、続いて義人に目を向けて再び首をかしげた。

「持てばいいのか？」
「はい。そして、剣を抜いてください。それが王たる証になるのです」
「……わかった」

一度ため息を吐いて、志信は剣の柄に手をかけた。そして、鞘から剣を

「む？」

抜けなかった。
まるで錆付いているかのように、剣はビクともしない。
それを見たミーファの額から、冷や汗が一筋流れ落ちる。カグラの笑顔が一瞬固まり、アルフレッドは目を見開く。
そして、志信も困ったように口を開いた。

「抜けないぞ」

見ていればわかる。
そんな突然の事態に、一番冷静だったのはカグラだった。

「えっと、多分王はそっちの人だと思うんですけど……」

そう言って、義人を指差す。

「は？」

突然の指名に、義人は素で返事を返した。ついでに自分を指で指してみるが、カグラの言葉は変わらない。

「はい。感覚的に、わたしが召喚したのは貴方だと思うんですが」

その言葉を聞いた志信は剣を持ったまま義人の傍へと歩み寄る。そして宝剣を差し出すと、自分はその横へと並んだ。

宝剣を受け取った義人は、なんとなく優希にパスする。

「ふぇっ？　わたし？」

いきなり渡された宝剣に驚く優希。一応柄を握り、引いてみるが抜けることはない。

必然的に、残ったのは義人だけになってしまった。

大丈夫。きっと俺も抜けないさ。

内心でそんなことを思いながら、宝剣の柄を握る。そして、ゆっくりとそれを引いた。

「げ……」

スラリと、何の抵抗もなく剣が鞘走る。あっさりと抜けてしまった剣に、義人は思わず呻きに近い声を上げた。だが、すぐさま気を取り直して剣を鞘に納める。

「まあ、抜けなかったということで……駄目？」

一縷の願いを込めて聞いてみるが、返答は沈黙による否定だった。

第五話：紹介

宝剣が抜けてしまった義人は、そのまま玉座へと座らされることになった。それを見たミーファやカグラ、アルフレッド。その他の兵士や文官などが膝を突く。

「えーっと……まあ、なんと言いますか」

そんな中で、ミーファが居心地悪そうに口を開いた。彼女としては、初っ端から王を間違えてしまったのだ。その自責の念は、かなり重い。

「ミーファちゃんは、何でその人が王だって思ったんですか？」

その横で、カグラが楽しそうに尋ねた。アルフレッドが咳払いをするが、二人は気に留めない。

「いや、最初見たときに、あちらのシノブ殿の方が王らしく見えて……いえ、なんでもありません」

目の前に本当の王がいるというのに、中々豪胆な発言だった。しかし、義人はそれに笑って同意する。

「ははははは。たしかに、あの場面じゃ志信のほうがソレっぽいよな」

その言葉は、半ばヤケクソだった。そして、そのヤケクソな気持ちのままで義人は尋ねる。

「それで、だ。なんで俺達をここに連れてきたのか、そろそろ説明してほしいんだが」

義人がそう言うと、ミーファ達は目配せを交わす。すると、三人を代表してかカグラが口を開いた。

「まず、いきなりこの世界へ召喚したことをお詫びします。わたしの名はカグラ。当代の召喚の巫女を務めております」

「召喚の巫女？」

「はい。このカーリア国は、五十年ごとに国主を他世界より召喚し、国主に据える召喚国主制です。その国主を召喚するための、そして召喚後の補佐をする巫女を召喚の巫女と呼んでいます」

カグラの言葉に、義人は頬が引きつるのを自覚する。だが、聞き間違いだと内心で言い聞かせながら尋ねた。

「他世界から召喚って……つまり、この世界は俺達がいた世界じゃないのか？」

「はい」

あっさりと、願いを断ち切ってくれるカグラ。

この世界が自分達の世界ではないというその言葉に、優希が気絶しかける。だが、すぐに志信が気づいてそれを支えた。

「……なんでそんなことするんだよ。国主なら、この国の人間がなるべきだろ」

そんな優希を横目で見ながら、義人はカグラとの話を続ける。

「それは、この国が建国されたときに決められた規則です。建国当

時、世界最高の魔法使いと呼ばれたミレイ＝シーカー様の提言により、召喚国主制となりました。それが、この国に最も良いだろうとおっしゃったそうです。他世界の知識を取り込むことで、この国をさらに発展させることができる、とのことらしいのですが……」

義人は見も知らぬその人物に、『そんなはた迷惑な規則を作るな』と怨嗟の声をかけてやりたくなったが、ぐっと飲み込む。

「なら質問を変える。なんで、俺が王に選ばれたんだ？　自分で言うのもなんだが、選ばれる理由がまったくないだろ」

「選ばれる理由、ですか。それは、貴方が王に相応しいからとしか言えません。カーリア建国時、初代の召喚の巫女としてミレイ様が選ばれましたが、その際に用いた召喚の陣は無作為に王を選出するものではなく、繋いだ座標の先の周囲数キロメートル内から最も王に相応しい人物を選定するものだったそうです。そして、今回用いた召喚の陣もそれに近いものにしてあります」

「それで俺が選ばれたってわけか？」

「はい。わたしや過去の召喚の巫女達は、ミレイ様が繋げた他世界への道を利用して召喚を行いました。そのため他世界における座標が変わることはないですから、貴方は座標から数キロメートル以内における、最も王に相応しい人間ということです」

なるほど、と義人は頷く。

「そうか。なら、なんで優希と志信も一緒にこっちにきたんだ？」

「おそらくですが、ユキ様とシノブ様は召喚に巻き込まれたのではないかと。今まで事例にありませんが、召喚の対象者のすぐ傍にいたため共に召喚された、ということだと思います」

「わかった。じゃあ、俺達を元の世界に帰してくれ。元々この世界とは何の関係もないし、国主は新しく召喚すればいいだろ？」

そう尋ねると、カグラは困ったように頬を掻く。

「それは、その……無理なんです」

「は？」

否定の言葉に、義人は思わず身を乗り出す。

「いや、召喚したんだから、元の場所に戻すぐらいできるだろ？」

「たしかにできないこともないのですが、現状では不可能なんです。わたしは今回の召喚の儀式で魔力を使いきってしまいましたから……」

申し訳なさそうな表情で告げるカグラ。それを聞いた義人は、乗り出した体を戻して背もたれにもたれかかる。

義人の頭の中で、ロールプレイングゲームなどで登場するマジックポイントみたいなものだろうという判断が下された。

「一晩宿に泊まれば回復するんじゃないのか？」

「……一体誰がそんなことを？」

心底不思議そうなカグラに、義人も不思議そうな表情で答える。

「なんつーかほら、ゲームだとそうだし」

「げぇむ、とはなんでしょうか。とにかく、消費した魔力はそう簡単には回復しないんです」

「そうなのか。だけどカグラ……さんが駄目なら、他の人がしてくれればいいじゃないか」

一応さん付けしながら提案してみるが、カグラはそれにも首を横

に振った。そして、それに補足するかのようにミーファが口を挟む。

「現在このカーリア国において、魔力の許容量及び操作の力量が最も高いのがカグラなのです。他の者では、三人どころか一人召喚することもできません。元の世界に送り返すなど、もっての他です」

その台詞に、再び義人の頬が引きつる。最悪の想像が頭を掠めたが、努めてそれを無視しながら尋ねた。

「それじゃあ、もしかしてだけど……俺達、元の世界に戻れないのか？」

「はい。現状では、不可能です」

隠しても仕方ないのだろう。ミーファとカグラが頷く。

それを聞いた義人は目眩を覚え、離れて聞いていた優希は、今度こそ気絶した。

ミーファに介抱される優希にため息を吐きつつ、義人は告げられた言葉の意味を反芻する。

つまり、なんだ……俺達は、元の世界に戻れないのか。

行き着く先はどう足掻いてもそこになる。義人がもう一度ため息を吐くと、それを見ていたカグラが戸惑いながら口を開く。

「国王様。今から貴方様の成すべきことをご説明したいのですが……よろしいでしょうか？」

よろしくないです。

義人は心の底からそう答えたかった。だが、現実はそうもいかな

い。とりあえず思考が沈みそうになるのを懸命に堪えた。

「……どうぞ」

「はい。ではまず、この国の主要な人物を紹介したいと思います。わたしは先程紹介したので割愛しますね」

そう言って笑うカグラ。それはまるで花のような笑みだったが、気分が最低を突き破ってさらに下降中の義人に気にする余地もない。

「こちらの男性が、アルフレッド様です。この国の歴代の宰相を務めています。何かわからないことがあれば、この方に聞くと解決すると思います」

カグラの紹介に、アルフレッドが一礼した。初老の男性に見えるが、その一礼には芯の通った頑強さが見て取れる。

「アルフレッドと申す。この国の宰相を務めさせてもらっておる」

一礼したアルフレッドを見た義人は、ふとあることに気づいた。

「えっと、アルフレッドさん？　一つだけ聞いてもいいっすか？」

「なんなりと」

「じゃあ、耳がかなり長くて、さらに尖っているように見えるのは俺の目の錯覚ってことで良い？」

失礼だとは思いつつも、アルフレッドの耳を指差す義人。その言葉が指す通り、アルフレッドの耳は長く、そして先が尖っていた。そこまで目立つわけではないが、義人達と比べるとかなり大きい。

「目の錯覚ではない。儂はエルフじゃからのう。だから耳の形も人

間とは違うのじゃよ」
「あー……成程、それでか。実は生まれつきで、コンプレックスを持っていたらどうしようかと思っちまったよ」
「こんぷれっくす？　いやはや、当代の王は妙な言葉を使うのう」
首を傾げるアルフレッドを見て、カグラは次の人物へと目を向ける。

「そして、こちらが魔法剣士隊隊長のミーファ＝カーネルです」
先程ちゃん付けで話していた様子からして、今は公私を分けているのだろう。どこか他人行儀な呼び名に、ミーファは頭を下げた。
「魔法剣士隊隊長のミーファ＝カーネルです。王よ、先程は失礼しました」
下げた頭をさらに下げ、ミーファが謝罪する。義人はそんなミーファに苦笑を返した。

「いや、まったく気にしてないから」
「しかし……」
「何か気になるのなら、さっき助けてもらったことで帳消しってことにしよう」
「……わかりました。ありがとうございます」
何故そこまで頭を下げるのか義人にはわからなかったが、カグラはクスクスと笑う。

「国王様を間違えて、落ち込んでいるんですよ。きっと」
「カ、カグラッ！」

ミーファが慌てたように叫び、義人の視線に気づいて再び頭を下げる。だが、義人はそれに手を振って応えた。まったく気にしていないということを、態度でアピールする。

義人は何度か頷くと、志信に顔を向けた。その顔は何故か笑顔である。

「なあ志信」

「なんだ？」

「やっぱり俺は夢を見てるっぽいから、殴って覚ましてくれ」

「……」

志信が義人に近づき、無言のままで言われた通りに殴る。手加減された一撃が義人に叩きこまれ、義人は何度目かになるため息を吐く。

けっこう痛かった。

「殴られて痛いっていうことは、やっぱり夢じゃないんだよな」

そもそも痛みで目が覚めるというのなら、森の中で化け鳥に襲われたときに目が覚めるだろう。義人は軽く現実を逃避してみるが、目の前の状況が変わることは一切ない。

「……まあ、落ち込んでいても現状は好転しない、か」

義人は呟いて、顔を上げる。その目には、先程まではなかった力強さがあった。

「よし、それじゃあいくつか質問させてもらうよ。まずはカグラさん」

「はい」
「君なら俺達を元の世界に帰すことが可能なんだよな？」
多分に期待を込めた質問に、カグラはやや困ったような表情を浮かべる。だが、少々思案した後頷いた。
「おそらくですが、可能だと思います。ただ時間がかかりますし、三人同時というのは無理です。一人ずつなら、なんとかなりますけど」
「本当か？　それは、どのくらい時間をかければ実現できるんだ？」
「およそ一年もあれば」
身を乗り出しかけた義人は、カグラの答えに力なく王座に座り直す。そして、大きなため息と共に質問を重ねた。
「なんで、そんなにかかるんだ？」
そんな問いに、今度はミーファが口を開く。
「魔力の回復に時間がかかるんです。普通の魔法使いならともかく、カグラの魔力許容量は遥かに大きいんです。それに、この国の魔力回復施設は質が悪いですから……」
後半は半ば愚痴に近かった。しかし、義人はその説明に首を傾げる。
「ちなみに、今のカグラさんの……その、魔力量とやらはどのくらいあるんだ」
魔力というファンタジーな単語にやや抵抗を覚えつつ、義人は尋

ねた。そんな義人に向けて、カグラはにこりと微笑む。

「ゼロです」

はは、笑顔で答えるなよ。

義人は内心で愚痴る。だが、ここで投げ出しては解決できるものも解決できない、と自身を鼓舞し、なんとか解決の糸口を掴もうと頭を働かせた。

「魔力っていうのは、自然にパーッと回復しないのか？　ゲームとか小説じゃ、時間の経過と共に回復っていうのも割とポピュラーなんだけど」

「えーっと、すいません。時間の経過でも一応回復することはできますが、その量は非常に微々たるものになってしまいます。そうですね、施設を利用した場合と比べたら、百倍ぐらい差が出ますよ」

「……じゃあ、方法を変えよう。カグラさん一人で無理なら、他にも大勢の人に手伝ってもらえばいい。そうすれば大丈夫じゃないか？」

期待を込めて尋ねる。しかし、カグラは申し訳なさそうに首を横に振った。

「たしかに、魔力量だけなら問題ないかもしれません。しかし、召喚の術式は難易度が高いため、おそらく不可能かと思われます」

代案が却下され、義人は深いため息を吐く。

一年あれば一人を送り返すことができるらしいが、それは、最低でも一年はこの世界で過ごさなくてはいけないということを示している。しかも、一番長い場合は三年後だ。

義人は夢であることを必死に願うが、相変わらず覚めることはな

い。

「最低でも一年か……戻ったら行方不明者扱いされるんだろうな。親父達になんて説明しようか……」

未だに事の重大さが浸透していない頭でそんなことを考えてみる。その言葉を聞いたカグラが、僅かに目を伏せたことに義人は気づかない。

「あー、いかん。駄目だ。頭が理解してくれねー」

軽く頭を掻く。

突然異世界に召喚され、化け物に襲われ、その国の王様になりましたとさ。めでたしめでたし。

「……黄色い救急車でも呼ばれそうだ」

中空を見つめ、ブツブツと呟く。別名、現実逃避ともいう。

その様子を見ていた周りの臣下は、僅かにざわめきだした。

『おい、当代の王は大丈夫か……』

『やはり、異世界の者を召喚しても……』

『そもそも前代の王とて……』

『何より若すぎるではないか』

その会話を聞き取った志信は、それとなく周囲の様子を窺う。義人を見る表情、会話に込められた感情、仕草。

歓迎が二割、消極的歓迎が二割、そして残り六割は戸惑いと反発に近い、と志信は判断する。何はともあれ、このままでは少し拙いことになりそうだ。

それを悟ったアルフレッドが、大きな声を上げる。

「王は疲れているようじゃ。今日はひとまず解散し、顔合わせの続きや取り決めは明日より行うこととする」

「そうですね。王も落ち着くのに時間がかかりそうですし、今日はひとまず解散とします」

アルフレッドの言葉に乗って、カグラもそう言った。すると、それに従うように文官武官が退場していく。残ったカグラ達は、労わるように義人へと声をかけた。

「では、王の部屋に案内します。まずは落ち着かれてください。その後、詳しい説明をしますので」

その提案に義人はとりあえず頷き、気絶している優希を横抱きで抱き上げて歩き出す。

その際、優希の口元が嬉しげに笑っていたことに気づくことはなかった。

第六話：王の立場

部屋に案内され、義人はとりあえず近くにあった椅子へと腰を下ろす。

置いてある物は大きなベッドに木造りのテーブル。それに椅子。壁にはいくつか絵画らしきものが吊り下げられ、控えめな華美さがある。部屋は部屋でも、どうやら寝室らしい。

日本の建築様式とは違い、両開きの扉に三メートル以上はある高い天井。三十畳を超える広い部屋。床には絨毯が敷き詰められている。いまだに意識を失っている優希は天蓋つきの大きなベッドに寝かせ、志信はカグラへと目を向けた。その後ろには、ミーファとアルフレッドが並んでいる。

「俺と、北城の立場はどうなる？」

「ホウジョウ……ああ、ユキ様ですね。お二方は王のご友人ですから、客人として扱わせていただきます。それにしても、シノブ様は落ち着いていらっしゃるんですね？」

「義人と北城があの調子だからな。俺くらいは落ち着いて周りをみなければなるまい」

志信の言葉に、カグラはクスリと微笑む。

「助かります。では、王を落ち着かせてほしいのですが……」

「ああ」

返事を返し、志信は義人へと近づく。

「義人」

「……おお、志信。どうするよ？　夜のクイズ番組、録画予約して

ないんだ」

心底困ったような義人の言葉に、志信は内心で小さく笑う。

「心配する点が違う気もするが」

いつも通り落ち着いている志信を見て、義人は自分も落ち着くように努める。いっそ優希のように気絶できたらどんなに楽だろうか、とも思ったが。

落ち着きを取り戻した義人を見て、志信は口を開く。

「とりあえず、ここの連中は俺達に対して害意はない。そして義人はこの国にとって必要な人物。一年もあれば一人は戻れる。ここまではいいか？」

「あー、うん。オーケー」

順序立てて説明していく志信に、義人は頷きを返す。志信は王の間で聞いた情報を分析し、吟味して口を開いた。

「この一年という期間だが、おそらく短縮することが可能だ」

「え？　マジでか？」

驚いた義人に頷き、志信はカグラへと視線を向ける。

「先程、『この国の魔力回復施設は質が悪い』と言っていたな。ならば、その質を良くすれば期間を短くすることができるのではないか？」

その問いに、アルフレッドが相好を崩す。

「ほほう、シノブ殿は本当に落ち着いて聞いていたようじゃのう」

どこか好々爺染みた笑みに、賞賛するような響き。しかし、志信はさして気にしない。

「たしかに、シノブ様のおっしゃる通りです。施設の質を上げれば、その分魔力の回復する時間が早くなります。ですが……」

カグラは首肯した後、言葉を濁す。

「ですが？」

先行きが見えた義人は、カグラの言葉の続きを待つ。すると、カグラは非常に申し訳なさそうに呟いた。

「施設を改良するだけのお金がないんです」

一瞬、沈黙が場を支配する。

「えーっと……マジですか？」

「本当です。魔力回復施設に関する物は莫大なお金がかかるので、そう簡単には改良できないんです」

「この国は貧乏なのか？」

志信が歯に衣着せず突っ込む。そのストレートな物言いに、カグラとアルフレッドは視線を逸らした。

「その……二代前の王が、ちょっとですね」

どう言ったものかとカグラが悩むと、その横からアルフレッドが

やれやれと呟く。

「これが大層な愚王でしてな。国の資産を食い潰しおったのじゃよ」

「食い潰したって……その王はどうなったんだ？　俺の一つ前の王は？」

「前代の王もそこまで優秀な人物ではなかったんじゃ。そのせいで……いや、なんでもないわい」

「ちょっと！？　そこまで言われると逆に気になりますよ！？」

言いよどむアルフレッドに、義人は気になって叫ぶ。その叫びを聞きつつ、志信が呟いた。

「役に立たない、か。ならば謀殺でもされたか？　それとも飾りの王として据えて、周囲が国政をしたか？」

「う、む……」

確信はなかったが、正鵠を射たらしい。

アルフレッドは口を閉ざすと共に、なんで志信のほうが王じゃないのか、などと少しだけ思った。言葉が詰まったアルフレッドに、志信は追撃をかける。

「それでは可笑しいところが出てくるな。召喚とやらは、その周囲で最も王に相応しい人物が召喚されるのだろう？　ならば、何故そんな事態になる？」

「いや、それは……」

返答に困るアルフレッド。それを横目で見ながら義人は考え込み、合点がいったように頷く。

「五十年ごとに召喚するのなら、二代前は百年前か……あー、あの

時代にこっちに王様として召喚されたら、そりゃ厳しいだろうさ」

今から百年前。文明開化も終わり、西洋の文化が浸透しきった頃。今とは違い、学校等に通っていた者は金銭面の関係であまり多くない。そのため、知識などは現代に比べれば劣っていただろう。政治や経済などの政など、行えるはずもない。

それに何より、異世界などと言われて理解できたかどうか。現代ならば、ゲームや小説などでその異世界という存在を比較的理解しやすいのだが。

そして、王というからには当時の日本よりも遥かに豊かな生活が出来たのだろう。

ならば話は簡単だ。

人は、気をつけなければ簡単に堕落する生き物なのだから。

「資産を食い潰したねぇ……それでこの国が今まで無事だったっていうのは、すごいことか。

アルフレッドさんなんかは、かなり苦労したんじゃないんですか？」

義人の言葉に、アルフレッドは無言で返す。即ち肯定だ。

「それでもまた新しい王様を召喚しようっていうんだから、盲目的というかなんというか」

苦笑する。

「実際、召喚国主制を廃止しようという動きもありましたから」

その苦笑に、カグラはそう返す。カグラの言葉に、志信は納得がいったように頷いた。

「成程。さきほどの場で、歓迎している連中が少なかったのはそれが原因か。だとすれば少々面倒なことになるかもしれんな」
「面倒なこと？　志信、なんだよそれ」

言葉に不穏な雰囲気を感じて、義人が尋ねる。それに対し、志信は表情を変えずに告げた。

「クーデター……いや、この世界に合わせて言えば反乱が起こる可能性が高い。王を殺す、もしくは幽閉でもして新たな政権を築く可能性がある」
「ちょっ！？　マジかよ！」

慌てて周囲を見回すが、カグラ達は目を伏せるだけだ。義人はその可能性を軽く考え、肩を落とす。

「そうだよなー。俺も周りの立場ならそうするか……どうするかねぇ」

動揺を抑え込み、義人は椅子に背を預ける。そして、考えを巡らせていく。
元の世界に戻るには時間がかかる。しかし、この世界にいたら最悪殺される可能性がある。ならどうするか？　いや、どうしたら殺される？　簡単だ。王として役に立たなければ殺される。だけど、既にアウトかもしれない。前の王様がずいぶんと駄目だったらしいし、このままではすぐにクーデターが起こる、か？
考えつつ、カグラ達を見る。
この人達はおそらくこっちの味方。アルフレッドを筆頭に、地位も高い。この人達が見限らなければ、まだギリギリで大丈夫だろう。
優希と志信は完全に味方。
志信……志信かー。

「なあ志信。お前王様しないか？」
「しないな。俺よりもお前のほうが王に相応しい。そして、お前が王なら俺はそれに付き従う」
とりあえず聞いてみたが、すぐさま返答がきた。義人はそんな志信に苦笑を向ける。
「そこは少しくらい悩もうぜ。志信は文武両道だから丁度良いと思うんだけど。でも、志信は一度言ったら曲げないから無理か……さて、どうしようかねー」
方法を模索し、案を考える。
一、どうにかしてすぐさま元の世界に帰る。
二、反乱を起こしそうな者を先んじて捕らえる。
三、どうにかやって反乱が起きないようにする。
四、逃げる。
「一は無理。四が魅力的だけど、この世界で生きていける可能性はあまり高くなさそうだしな。だったら二……いや、国のことを考えると三か？　うーん……」
考え込み、何やら呟き出した義人を見てミーファは僅かに眉を寄せた。
何故シノブ殿が王ではないのか……。
内心に不満が浮かぶが表情には出さない。どう見ても志信のほうが王に相応しいと思ったが、それを言っては王に対して不敬に過ぎる。
ミーファの内心を知らず、義人は顔を上げた。

「カグラさん達はこっちの味方？」
「はい、もちろんです」
問いに、笑顔で即答するカグラ。そもそも、カグラが反対派なら召喚されることもなかっただろう。
「ふむふむ、カグラさんは召喚後の王を補佐する立場ってことはけっこうな重役で、アルフレッドさんがこの国の宰相。ミーファさんが魔法剣士隊の隊長……そして優希と志信がこっちにはいるか。成程成程」
この国の規模がどのくらいかわからないが、幸い重要な立場の人間（エルフもいるが）が味方になっている。
義人が一つ頷くと、カグラが苦笑を浮かべながら口を開いた。
「ヨシト王。わたし達は臣下なのですから、さん付けなんてされては他の臣下に示しがつきません。従って、敬語なども絶対に使わないようにしてください」
暗に威厳を示せと言われた気がしないでもないが、義人はひとまず頷く。
「ん、そう？　なら、そうしようかな。しかし、そっちこそ王なんてつけて呼ばないでくれよ。背中が痒くて仕方ない」
「じゃあ、ヨシト様ということで」
にこやかに告げるカグラ。様付けもかなり抵抗があるのだが、威厳を示せばこちらへと恭順する者も出てくるかもしれないと思えば仕方ない。だが、自分よりも年下の者に高圧的に話されても印象が悪い気もするが。

そこまで考えたところで、ベッドに寝かせていた優希が身じろぎをした。一度寝返りをした後、ゆっくりと体を起こす。

「ぁう～……あれ？　ここどこ？」

のん気に体を伸ばす優希を見て、義人は小さく笑う。

なるようになるか、と呟いて、ひとまずこの場を解散させることにした。

第七話：カグラとカーリア国

カグラだけ部屋に残ってもらい、アルフレッドとミーファは退室させる。義人は椅子に座り直すと、ため息を吐いた。

「王様か……いや、困った。親父達、警察に駆け込むだろうな」

「困ったねー。今度の試合どうしよう……」

義人の言葉に優希が相槌を打つ。義人は半ば諦めがちに、優希はまだ実感がないように喋っている。そんな二人を見たカグラは苦笑しつつ、座り直した義人に目を向けた。

「それでヨシト様。アルフレッド様とミーファちゃんを部屋から退出させて、わたしに何を聞きたいんですか？」

苦笑を朗らかな笑みに変え、カグラが尋ねた。だが、それはどこか作り物めいた笑顔。それを見た義人は、面倒くさそうに頭を掻く。

「んー、この国についてとか、この世界についてとかかな？　あとは魔法についても知りたい。それと……」

そこで一度口を閉ざす。気だるげな動きで肘掛けに右肘を置き、右手の甲に顎を乗せてため息と共に僅かに口の端を吊り上げた。

「一体誰が“本当に”信用できるのか、とか」

「――――――」

僅かに、室内の空気が変わる。

カグラの笑みが深くなり、志信が音を立てずにカグラの背面へと

回りこむ。その空気の冷たさと志信の動きを見た優希は、オロオロと周りを見るだけだ。

「正直さ、困るんだよね。突然こんな異世界に呼び出されてさ。しかもいきなり王様になれ？

ハッ、馬鹿馬鹿しいにも程があると思わない？」

「そうですね……たしかに、馬鹿馬鹿しい話だと思います」

「だよな。しかも、俺だけを召喚するならともかく、優希と志信まで一緒ってどういうことだよ？　向こうでの生活はどうなる？　突然異世界に召喚されて、今頃向こうの家族はパニックだろうさ。下手すりゃ警察に捜索願いが出されるかもしれない、いや、出るね。新聞やニュースでも騒がれるかもな。『高校生三人、神隠しに遭う』みたいな見出しで」

怒気混じりの声。決して大声ではないが、その声は部屋中に響く。

「その上、最低でも一年は戻れない。なあ、どうしてくれるんだ？　おかげで人生が滅茶苦茶だよ。俺だけじゃなく、優希と志信の人生もだ」

「義人ちゃん、わたしは」

優希が何かを言おうとするが、義人が目で止める。志信はカグラの背後で立ったまま、ただ義人の言葉を聞くだけだ。

「この国では当たり前のことなのかもしれないけど、こっちの常識で他人に迷惑かけないでもらえないか？　俺はただの高校生で、王様なんぞやったこともない。政治や経済なんて学校でほんの少し習う程度。そんな人間に国王を任せるなんて、頭がどうかしてるとしか思えないぜ」

睨み付けながら吐き捨てる。悪意にまみれたその言葉を受けたカグラは、作り物の笑顔を消して義人の前に膝をついた。

「貴方のおっしゃることはもっともです。貴方や貴方の友人をこの世界に召喚したこと、それは許される問題ではないでしょう。ですが、わたしには謝ることしかできません」

「謝られても、問題は解決しないんだがな」

鼻で笑い飛ばす。そして、真正面からカグラの視線を受け止める。

「それを承知でお願いします。この国のために、ヨシト様達の力をお貸しください」

「俺達には貸すほどの力もない。まして、貸すことができたとして俺達に何の得があるっていうんだ？」

義人が嘲り混じりにそう言うと、カグラはそれを物ともせずに口を開いた。

「我が身を捧げます」

宣誓するかのような響き。嘘偽り一切なき、真摯な言葉をカグラは紡ぐ。

「この身は召喚の巫女。召喚されし王を補佐し、助ける者。戦えと命じられれば命を賭して戦い、守れと言われれば身を挺して王を守ります。身を差し出せと言われれば、喜んで差し出しましょう」

「――本気か？　アンタは、俺が死ねと言えば死ぬのか？」

真意を確かめるように、義人は問いを放つ。

「はい。死にましょう」

返ってきたのは肯定。まっすぐな視線を受け、それを見返す。
数秒目を合わせた後――義人は呆れたように笑った。

「困った。本気だよ、この人」
「ああ、本気のようだな」

呟きに、志信が頷く。
カグラの言葉に、嘘は一切ない。死ねと言われれば、本当に死ぬのだろう。そのことに内心で苦笑を浮かべると、義人はため息を一つ吐いてお手上げとばかりに両手を上げた。
この人は、信用できる。

「あーあー、わかったよ。ここはカグラに免じて、王様の真似事でもしてみるよ。どうやら、この世界で生活する手段がそれしかないみたいだしな」
「本当ですか!?」

カグラが喜びの声をあげるが、それを見た義人は一つ指を立てた。

「だけど、条件がある」
「何でしょう？　この身を差し出せというのなら、喜んで差し出しますが？」
「む、男としてはとっても魅力的な提案で……イエ、ナンデモナイデス」

ちょっといいなー、なんて思ったが、ベッドの上に座っている優希の目がとんでもなく剣呑なものになったのですぐに撤回する。その迫力は、義人の背中に冷や汗が流れるほどだ。

「まあ、条件っていうのはさ、『可能な限り早く元の世界に戻れるようにしてくれ』ってこと」
「王に戻られると困るのですが……」
「そこはほら、俺がこっちにいる間になんとかするさ。召喚国主制を廃止して、新しい方法を決めるとか。三年あればなんとかなるだろ？」
義人はそう言うと、椅子から立ち上がって優希と志信に向き直る。
「優希、志信、巻き込んで本当にごめん。なるべく早く元の世界に戻れるように頑張るから、俺に手を貸してほしい。お願いします」
誠心誠意を込めて、頭を下げた。その様子に、志信は小さく頷く。
「俺は構わん。家の祖父ぐらいしか心配する者もいないが、その祖父も俺に免許皆伝を与えてからは全国を放浪しているしな。それに、俺はお前の決めたことには付き従うつもりだ。何なら、三年後に帰るのは俺でもかまわない」
「ははっ、サンキュー志信。嬉しいけど、なるべく早く帰すよ」
親友の言葉に、喜び笑う。そして、今度は優希へと顔を向けた。
「優希。なるべく早く元の世界に帰すから、少しだけ我慢してくれないか？　危険もないみたいだし、もし危険なことがあっても俺が守るから。だから、俺に力を貸してくれないか？」
真っ直ぐに見つめる。その視線に、優希は恥ずかしげに微笑んだ。
「うん。義人ちゃんが守ってくれるなら大丈夫だよ。三年だって我

慢できる。だ、だから、そんな真剣な顔で見るの、やめてほしいなぁ」

「バカ。お前を三年もこの世界にいさせるわけにいかないだろ？志信、優希を最初に向こうの世界に戻したいんだけど、いいか？」

「ああ、俺もそれが良いと思う」

すぐさま返事をしてくれる親友に、内心で感謝しながら話を続ける。

「というわけで優希。一年、いやもっと早くお前を帰らせる。俺も無事に帰れたら、責任でもなんでも取るから、許してくれ」

「せ、責任！？　だったら、その……ごにょごにょ」

少し頬を染めて目を逸らす優希。なんと言ったか聞こえなかったが、義人はカグラに目を向けた。

「よし、それじゃあ色々と聞かせてくれ。この国や世界、それと魔法についてとか」

事の成り行きを見ていたカグラは、義人に対する評価を改める。そして、今まで纏っていた空気を軟化させて頷いた。

「この国や世界、それと魔法についてですか……」

うーん、とカグラは僅かに考えをまとめ、壁にかけてある地図を手にとって丁寧に話始める。

「まずこの国ですが、名前はカーリアと言います。大陸の最北端に位置し、総人口は約八万人。ここ、王都フォレスに約八千人。そし

て六つの町と十七の村があり、残りの人々が生活しています。国としての規模は小さく、ここ百年で軍事、魔法技術、農業、工業、商業、全てが他国に数歩劣っている状態です。ここまではいいですか？」

「いいけど……それでよく他国が手を出さないもんだ」

俺なら手を出す、と付け足す義人に、カグラは苦笑した。

「確かに、今の状態で侵略されれば困ったことになります。しかし、他国がこの国に手を出すことは今のところないんです」

そう言って、カグラはカーリア国の周囲を指でなぞる。

「周囲が山や森に囲まれているため、魔物による人的、農的被害が多く、その上土地も痩せています。多少良質な鉄が採れますが、目立った鉱産物もありません。他国に移動するにも不便な場所のため、軍事的価値もほとんどなく、国として成り立たせるのが精一杯の国です」

「……こうして聞くと、ものすごい駄目な国に聞こえるんだけど」

「ええ、まあ……」

何も反論できないように、曖昧に笑うカグラ。

俺、こんな国の王なのか……。

少しばかり暗鬱な気分になるが、それをなんとか振り払う。

「そしてこの国だけの特徴ですが、召喚国主制によって統治する王を召喚しています。召喚された王の下でわたし達は」

「ちょっとストップ！　いや、待て！　さっきから気になってたんだけど、なんで王なんだ？　さっきも軽く言ってたけど、他世界の知識を取り込むことで、この国をさらに発展させることができるか

ら俺達を召喚したんだよな？」
「はい、その通りですが？」
何かおかしなことでも？　と言わんばかりにカグラが首をかしげる。
「だったら別に王にしなくてもいいじゃないか。研究者とか、技術者みたいな役職に就かせた方が目的に沿ってるだろ？」
元の世界の役に立つ物が作れるとは思わなかったが、それは言わずにおく。
カグラは少し考え込み、ややあって困ったように笑った。
「ヨシト様のおっしゃることもわかります。ですが、これは建国当時からの習わし。すでに何百年も続いたことですので、変更は不可能かと……」
「いや、なんでそれをおかしく思わないのかって俺は言いたいんだが」
そうは言いつつも、頭の隅では理解する。
この国の王は異世界から召喚するということを、生まれてからずっと教えられていたのだろう。一種の洗脳みたいなものだが、たしかにそれならおかしく思わない。
そんな規則を作った人物に文句を言いたくなったが、数百年も昔のことだ。義人は心の中だけで罵詈雑言を言い募り、ため息と共にそれを止めた。
「もういいや……続きをお願いします」
「はい。世界には多くの国があり、その数は定かではありません。この国と比較的友好関係を築いているレンシア。極東にあると言わ

れているジパング。確認されているだけでも三十を超える国々が存在しています。それらの国は他国と戦争を行ったり、独自の文化を築き上げていたりします」

「ふむふむ、そのへんは俺達の世界と変わらないのか」

勿論国名などは違うが、人間のやることに変わりはないらしい。ジパングという名前に少し惹かれたが、そのまま話の続きを促す。

「世界のあちこちには魔物と呼ばれる生物が存在し、その猛威を振るっています。中にはアルフレッド様のように人間に協力する種族もいらっしゃいますが、大半は危険な存在と言えるでしょう」

「たしかに、森で出会ったのは危険だったなー。紫色の三つ目鳥に、四本腕の熊とか」

「シドリにバズスですね。しかし、魔物としての格はあまり高くないですよ?」

「格?」

「はい。希少性や戦闘能力、魔法が使えるかどうか、知性があって人間に対して友好的か……知り得た情報を元に、上級、中級、下級の三つで分けられています。この分け方に関しては魔法に対しても同様で、効果や威力を元に分けられています」

そう言いつつ、カグラは右手で三本指を立てる。

「上級に分類される魔物はそのほとんどが高い知性を持ち、無駄に人を襲うことはありません。しかし、中には一国を滅ぼせるだけの力を持つ魔物もいます。中級に分類される魔物も知性を持ちますが、半数以上は好んで人間を襲います。それ以下を下級と定めていて、これらはほとんどが知性なく人間を襲います。シドリは強めの下級の魔物で、バズスは中級の魔物に含まれますが弱い部類ですね」

「あれで下級と中級の弱めのやつ? つくづく危険な世界だな。上

級までいったらどうなるのやら……」
「上級で有名な魔物といったら龍種ですね。もっとも、上級に区別される魔物の大半は知性がありますから、逆に危険じゃないかもしれません。市民にとっては下級の魔物が一番の天敵です。畑を荒らし、人を襲う。中級の魔物はよほど森の奥に入らないと遭遇しませんから」

龍や魔物といった単語がファンタジーちっくだと義人と優希は思ったが、それは口に出さない。

「そして魔法ですが、これは魔力を使って様々な現象を起こすことです。例えば……」

言葉を切り、カグラが人差し指を立てる。すると、その指先に小さな炎が灯った。続いて、炎が消えて小さな氷が浮かび上がる。

「このように、魔力を炎に変えたり、氷に変えたりすることができます。今は魔力が空っぽなので、この程度しかできませんけど」

申し訳なさそうなカグラだが、それを他所に義人と優希は歓声を上げた。

「おおー！　すっげぇ！　優希、本物の魔法だぞ！？」
「すごいすごい！　タネも仕掛けもないんだよね！？」

きゃっきゃっ、と喜ぶ二人に、志信は苦笑しつつカグラへと話しかける。

「成程。では、あの化け鳥が遠距離から攻撃できたのは魔法を使っ

ていたからか」
「シドリですね？　たしかに、あの魔物は風の魔法を使います。とは言っても、風の塊を飛ばすぐらいで殺傷力はあまり高くないです。バズスの炎くらいになると、危険ですけどね」

喜んでいる二人を尻目に、志信は質問を重ねていく。

「魔法とやらは誰にでも扱えるのか？」
「いいえ。魔法はその人が持つ資質によって大きく左右されるものです。魔力がなければ魔法は使えず、才能がなければ高度な魔法を使うことはできない。また、人によって使える魔法が異なります。炎の魔法は得意だけど、氷の魔法は発動すらできない人。治癒の魔法が使えるけど攻撃の魔法は使えない人など、様々です。そして一般市民の大半は魔法が使えず、兵士の中でも使える者は限られています」
「そうか、それでミーファは『魔法剣士隊』と名乗っていたんだな」
「そうです。そして、この国の魔法技術はあまり高くありません。魔法剣士隊隊長のミーファちゃんでさえ、魔法の腕は中級に届くかどうか。一応魔法使いの隊もありますが、その隊長でさえ使える魔法の威力は中級ぐらいです」
「では、魔法を使わない兵隊の練度はどのくらいだ？」
「……一般兵士の練度も、士気も、そこまで高いものではないんです。この国は他国に侵略されることがないので、戦ったことがあるのは魔物ぐらいです。それも、魔物と戦ったことすらない兵士もいるでしょう」
「規模は？」
「各地の町や村での魔物に対する防備、王都の防衛等に割り振られている全兵力を集めて約千二百、ですかね。部隊数は八で、内訳は魔法隊が一つに魔法剣士隊が二つ。弓兵隊が一つに歩兵隊が三つ。残りは騎馬隊が一つです。義勇兵を募ればまだ増やせるでしょうけ

れど」
「現状維持なら大丈夫なようだが、他国に攻め込まれれば危険だな」
そこまで言うと、志信は黙然と壁に背を預ける。そんな志信に、カグラは感心したように微笑んだ。

「ヨシト様の話を聞く限り、貴方の世界はひどく平和なようです。ですが、貴方自身は違いますね？　立ち振る舞いに隙がないです」
「……家が武術の道場をやっている。俺が義人を支えられるとすれば、その方面になるだろう」
「腕は立ちますか？」
「素人に負けることはない。しかし、この世界の人間がどの程度のものかによる」
「わたしも武芸を嗜んでいますが、貴方は『素人に負けることはない』なんて腕ではなさそうですね……王の傍に、貴方がいたことは僥倖です」
「買い被りだ」
「そうでしょうか？」

クスクスとカグラが笑う。そんな二人の会話を、優希とじゃれ合いながら聞いていた義人も笑いかける。

「こらそこ。何話してんだよー」
「ふふっ、何でもないです。でも、少し安心しました」

そこで笑うのを止め、カグラは背筋を正す。

「明日より、ヨシト様には王として務めていただきます。不肖、このカグラも及ばずながら助力いたします。わからないことがあれば、

お聞きください」

そう言って、カグラは臣下の礼を取る。

「王、ね。まあ、まずは名前と顔を覚えるところから始めるかな……」

これからのことを考え、義人はため息を吐く。ただ、その表情は今までと違い、決意と希望の光が秘められていた。

第八話：評価

ユキ様とシノブ様の部屋を整えてきます、と言葉を残してカグラも退室し、部屋には義人達だけとなる。

義人は優希と志信を傍に寄せると、疲れたように絨毯へ座り込んだ。

「あー、本当に王様だってよ。正直、ドッキリ企画なら早くカメラ出て来いって感じだよな」

「本当に王様だね。大丈夫、義人ちゃんならきっと上手くいくよ」

「根拠がないぞ、優希。でも、上手くやらないといけないんだよな」

ペシペシと優希の額を小突く。優希は困ったように、それでいて少し嬉しそうにしている。

それを尻目に、義人は志信に目を向けた。

「なあ志信、これからどうすれば良いと思う？」

「そうだな……まずは、速やかに信用できる臣下を見極めることか。国の現状を考える限り、反乱が起きては拙い。下手すれば簡単に瓦解するだろう」

「信用できる臣下ねぇ……正直、俺はカグラ以外微妙なとこだよ。アルフレッドもミーファも、味方だろうけど信用はできない」

「そうなの？　だったら、さっきの『演技』を二人にも見せれば良かったのに。あの時の義人ちゃん、怖かったなー」

ほのぼの喋る優希の額を、今度はデコピンで弾く。

「あれは演技じゃねえよ。あの時はかなり頭にきてたから、本音さ。でも、仮にあの場にカグラ以外がいてもあまり効果はなかった気が

するんだ。ミーファは反発しそうだし、アルフレッドは……正直わからん。老獪って感じだし」

義人の言葉に、志信が肯定の意で頷いた。

「たしかに、あの二人は義人に対して好印象は持っていないようだ。だが、率先して敵に回ることもないだろう。そうなると、残った問題は他の臣下をどうこちらに引き込むかによる」

「んーまあ、そこは明日からだよなー。今日思いっきりみんなの前で醜態さらしたし、評価悪そうだけど」

「そこは義人ちゃん次第でどうにでもなると思うよ？　威厳たっぷりに話せば良いと思うなー」

「その程度ではあまり効果に期待はできまい。明日点呼でもして、そのときの表情と反応でも見てみるか」

「ああ、頼む。優希も、一応見といてくれ」

そこでふと、義人は真剣な表情に変わる。表情が変わったことに、優希と志信も表情を引き締めた。

「二人とも、さっきも言ったけど……本当にごめんな。ここは魔物なんて危険な生き物もいる。魔法なんてものもある、物騒な世界だ。これから大変だろうけど、一緒に頑張ってくれるか？」

「うん！」

「ああ」

迷いのない返事を、嬉しく思う。そして、場の空気を変えるように立ち上がった。

「さて、学校の昼飯から何も食ってないから腹減ったな！　何か食わせてもらえないか聞いてくるわ」

そう言って、義人も迷いなく笑った。

部屋から退出したカグラは、廊下を数歩歩くと肩の力を抜くように息を吐く。そして、カグラが出てくるのを待っていたらしいミーファとアルフレッドの傍へと歩み寄る。

「何を聞かれたの？　変なことされなかった？」

カグラの姿を見るなり、ミーファが口を開く。良くも悪くも真っ直ぐな友人に、カグラは苦笑を向けた。

「この国や世界、魔法等について聞かれました」

「ほう？　しかし、その程度のことを聞くために儂やミーファを部屋から追い出す必要があったのかのう？」

カグラの言葉にアルフレッドが疑問の声を投げかける。その言葉の裏に込められた意味を的確に読み取ったカグラは……敢えて無視することにした。

「見知らぬ世界に見知らぬ人々ですから、きっと警戒していたんでしょう。ほら、ミーファちゃんは目つきが悪いし、アルフレッド様はちょっと強面ですし」

しれっと答えるカグラ。

「だ、れ、が、目つき悪いってー！？」

「あ、ちょっと、痛いですよミーファちゃん。首に腕を回して絞め

ないでくださいっ」

ミーファはカグラの首に右腕を巻きつけ、そのまま絞める。微妙に気道が圧迫され、カグラはギブアップとばかりにタップした。

「あいたた……痛かった。もう、ミーファちゃんは相変わらずの怪力ですね。首が取れるかと思いましたよ」

ネックロックから開放されたカグラは自身の首をさすり、からかうように笑う。それを聞いたミーファはもう一度絞めてやろうかと一歩踏み出すが、それはアルフレッドによって制止された。

「茶番はそこまででよかろう。それでカグラよ、どうじゃった？」

主語を省いた台詞だが、それがわからないカグラではない。アルフレッドが相手では誤魔化せないと悟り、笑みを苦笑へと変えた。

「何勝手に召喚してんだコノヤロー、って怒られちゃいました」

「嘘ね。さっき見た限り、あの王にアンタを怒るほどの気概はないわ」

ミーファが即断で否定する。どうやら、彼女の中での義人に対する評価はかなり低いらしい。

「いえ、本当ですよ」

言い方は違いますが、と前置きして、カグラはミーファをなだめるように話していく。

「たしかに、この世界に来た当初こそ動転していたみたいですけど、

落ち着けば頭の回転が速いみたいです。わたしにきつい言葉をぶつけて、反応を確かめたりしてましたし」

「反応を確かめる？　なんで？」

「ふふっ、なんででしょうね？」

鸚鵡返しに尋ねたミーファを、からかい半分であしらう。ミーファはそんなカグラに声を荒げようとして、カグラの表情に声を途切れさせた。

今まで笑っていたカグラは笑みを消し、凛然とした巫女の顔を覗かせる。

「此度の国主召喚の儀。召喚の巫女の名にかけて。わたしはこれ以上ない成功だと思っています。もっとも、お二人はヨシト様よりシノブ様のほうが王に相応しいと思っているのでしょうが」

突然雰囲気を変えたカグラに戸惑いつつも、ミーファは頷く。

「そりゃあ、ね……立ち振る舞いに隙がないし、雰囲気も落ち着いてる。初めて見たときにわたしが王だと間違ったのは決しておかしなことじゃないと思う」

「そうじゃのう。たしかにミーファの言う通り、シノブ殿は落ち着きがあり、おそらく腕も立つじゃろう。それに比べれば、ヨシト王は数段劣っているように見えたのう」

容赦ない評価に、カグラは内心だけで苦笑する。しかし、表面は真剣な表情のままだ。

「たしかに二人の言う通り、シノブ様のほうがヨシト様よりも落ち着きがあり、腕も立つでしょう。しかし――それだけです」

「……どういうこと？」

わけがわからない。それを表現するように、ミーファは首をかしげる。

「いずれわかると思います。たしかにシノブ様ではなく、ヨシト様に仕えるのは大変かもしれませんが……」

そう言ってカグラは歩き出す。だが、すぐに足を止めて顔だけ二人へと振り返った。

その顔は今まで浮かべていた真剣なものではなく、どこか力の抜けた笑顔。

「――――とても楽しそうでもあると、わたしは思いました」

楽しげな声。そんなカグラを見たミーファはアルフレッドに目を向け、肩を竦める。

「どう思います？」

「さてのう。まあ、カグラがああ言うんじゃ。ひとまずは様子見ということで」

そこまで言ったとき、王の寝室の扉が突然開け放たれる。あまりのいきなりさに、扉の脇にいた衛士二人が慌ててそちらに向き直った。

「おーい、カグラー！　悪いけど何か食べさせてくれー！　っと、ミーファとアルフレッドもいたのか」

扉を開けたのは義人。その後ろでは優希と志信が苦笑している。

「あらあら……それでは、すぐに用意させますね。王を歓迎するための料理を作っているはずですから」

困ったように、それでいてどこか楽しそうにカグラが笑う。そんなカグラを横目に見つつ、ミーファは僅かに唇を噛んだ。

カグラ、貴女の目は曇っている！

言葉には出さないが、瞳が剣呑な輝きを放つ。それを察したアルフレッドは、やれやれとため息を吐いた。

第九話：国の現状

食堂に案内された義人達は、目の前の光景に声を失った。
純白のテーブルクロスがひかれた、細長いテーブル。その上には燭台が並び、その灯りに照らされていくつもの豪華な料理の姿が浮かび上がる。
山の幸や海の幸、色とりどりの果物。見たことのない料理もいくつか並んでいる。
絵画から抜け出たような光景。義人はそれを驚くと共に、頭を抱えた。

「なんだこの無駄に豪華な食事は……」

財政が逼迫していると言っていたのは嘘だったのかと、思わず問い詰めたくなる。

「王を歓迎するための料理ですから。普段はここまで豪華じゃないですよ？」

そんな義人に苦笑して、カグラが助け舟を出す。そしてそのまま義人を入り口から一番遠い席へと案内した。

「それではヨシト様はここに。ユキ様とシノブ様はこちらにどうぞ」

さらに、優希と志信を義人から見て右斜め前と左斜め前に座らせる。カグラはそのまま義人の斜め後ろへと周り、待機するように立つ。

「あれ？　カグラとアルフレッドは食べないのか？」

カグラと、入り口近くで義人達、正確には義人の挙動を見ていたアルフレッドに声をかけた。ちなみにミーファはアルフレッドの指示で部屋の外にいる。

「ヨシト様、わたしやアルフレッド様は臣下ですから、共に食事を取るわけにはいきません」

「うへぇ……そんなことまで気にしなきゃいけないのか」

うんざりだと言わんばかりに義人が顔をしかめた。そして、テーブルの上にある物を見て目を丸くする。

「なんでスプーンやフォークと一緒に箸があるんだ？」

テーブルや燭台などは西洋風なのに何故か一緒に箸が置かれており、違和感を際立たせていた。

「それは、召喚した王の全員が箸を使いたいとおっしゃっていたからですが……必要ありませんでしたか？　市民も大抵は箸を使っていますが」

「いや、いいけどさ……あー、ミーファが持ってた刀といい、異世界の知識がどうのっていうのはこんなところにも影響してるんだな」

どこにどんな影響があるのやら、と考える義人に、優希が笑いかける。

「テーブルマナーってわからないし、わたしはありがたいなー。やっぱりご飯はお箸で食べたいし」

そう言う優希の視線の先には、皿に盛られた白米。

「待て、ちょっと待て。なんでご飯が丸い平皿に盛られてるんだ？」
「いけませんでしたか？」
「そこはご飯茶碗だろう！？」

とりあえずキレてみる。
日本人なめんなコラァ！　と意味不明な叫びを心の中で高らかに上げ、義人は再度頭を抱えた。

「この世界は元々西洋風なのに、日本の文化が混ざってるせいでおかしくなってるのか。これは早急に片付ける問題かもしれないな……」

疲れと呆れが程よくブレンドされたため息を吐き出し、ひとまず料理を食べようと意識を切り替える。

「色々と言いたいこともあるが、とりあえず食べるか」

時計などが置かれていないため正確な時間はわからないが、体内時計は午後八時ぐらいを指している。昼食からすでに八時間あまりが経過しているため、お腹の虫がそろそろ五月蠅い。

「じゃあ、いただきます」

合掌して料理の材料と作った人に感謝の言葉を捧げる。挨拶もほどほどに料理に目を向け、とりあえず近くにあった魚の塩焼きらしきものに箸を伸ばした。

「……おお、これは美味い！」

空腹は最高の調味料であり、義人は次々と箸を進めていく。
もう少し行儀良く食べてほしいです、とカグラは思ったが、初日なので大目にみることにした。
優希や志信も料理に舌鼓を打っているが、その動作は義人よりも落ち着いている。そのことがアルフレッドの中で義人の評価を下げることに繋がっているのだが、義人は気にしない。
料理を食べながら、カグラへと話を振る。

「それにしても、魚が食べられるとは思わなかったなー。これって海の魚だろ？　近くに海があるようには見えなかったけど？」
「カーリア国を北上すれば海があるんです。その海で取れた魚が、ここ王都フォレスにも運ばれますから」
「へー、でもここまで遠いんじゃないか？　衛生面は大丈夫？」
「それは大丈夫です。水揚げされた魚をすぐに氷の魔法で冷凍するので、新鮮なまま運ばれてきます」
「この魚は塩焼きしてるけど、塩はどうしてるんだ？」
「海水を炎の魔法で煮詰めて作っています」
「すげー、使い道が生活感溢れてるけど流石魔法。便利だな」

魔法の便利さに驚きつつ、今度は皿に盛られた果物へと手を伸ばす。薄黄色の皮に、形は桃を若干細くしたように見える。皮を剥いてみれば、身も黄色だ。

「この果物は？」
「それはポポロっていって、この国だけでなく世界中で食べられている果物です」
「世界中で……そりゃすごいな。それじゃあこの果物ってどこでもポピュラーな食べ物なのか」
「ぽぴゅらー？」
「あ、一般的ってことですよー」

意味がわからず首をかしげたカグラに、優希が補足する。言葉の意味を理解したカグラは頷き、説明を続けた。

「そうですね。市民にも広く親しまれている果物です。安価で美味しく、子供のおやつにも丁度良いらしいですよ？」

「ちなみにいくら？」

「その年の相場にもよりますけど、大体一ネカです」

「ネカ？　この国の通貨は円ではないのか？」

前の王の影響で円だろうと思っていた志信がアルフレッドに尋ねる。

「通貨は世界共通での。この国の中だけで使える通貨もあるが、それが円じゃ。もっとも、円よりもネカのほうが主に使われておる」

アルフレッドの言葉を聞きつつ、義人はポポロを食べてみた。瑞々しく、柔らかい食感と程よい甘さ。味はマンゴーと桃を足して二で割ったような感じだろうか。

「甘くて美味しいねー」

同じようにポポロを食べた優希が感想を述べる。義人はそれに同意の頷きを返した。そして、ついでのように尋ねる。

「ちなみに、この国の一般市民の一日の平均収入で何個くらい買えるんだ？」

「え？　えーっと……三十……五十個くらいでしょうか？」

確認の意味を込めてアルフレッドに尋ねるカグラ。アルフレッド

も少し考え込む。

「そうじゃのう、五十個で五十ネカだからそのくらいじゃ」

「ふーん……ちなみに、一食あたりいくらぐらいかわかる？」

「市民の一食の金額ですか？　そうですね……三ネカもかからないと思いますけど」

ふむふむと義人は頷き、テーブルの上に乗っている料理を見渡した。

「この料理全部でいくらくらいかかってるんだ？」

その質問に、アルフレッドは僅かに眉を寄せた。だが、すぐさま料理担当の者を呼んで確認する。

呼ばれた料理担当らしき中年の男性は、訝しげな顔をしながら答えた。

「材料費だけでおよそ三千ネカくらいですが……何か至らぬ点がありましたでしょうか？」

もしや口に合わなかったか、と男性は思ったが、義人は首を横に振る。

「いや、どの料理も美味しい。そうだよな、優希、志信」

「うん。こんな美味しい料理はあんまり食べたことないよ？」

「そうだな。だが……」

志信が意味ありげに義人を見る。義人はその視線を受け取ると、頷いて男性へと向き直った。そして大きく息を吸い込み、

「豪華すぎるわボケェー！！」

そう叫び、テーブルをちゃぶ台返しよろしくひっくり返そうとして――料理が勿体無いので諦める。

叫ばれた男性は驚いたように肩を震わせ、慌てて膝をついた。

「も、申し訳ありません！　ですが、新しい王を歓迎するとのことでしたので、粗末な料理では……」

「あ、いや、ちょ、軽い冗談だからそんな平身低頭されても俺が困る！　いや、豪華すぎるのは冗談じゃないけど、叫ぶ必要ななかった！　王様ってことでぶっちゃけ調子に乗りました！　すいません！」

ストレス発散を込めて心の赴くままに叫んでみたが、どうやら色々と駄目だったらしい。

「何事か！？」

義人の叫び声を聞いたのか、外に待機していたミーファが扉を蹴り破る勢いで突入してくる。右手は腰の刀に伸ばされ、すぐに抜刀できるように構えていた。そして中の様子を確認して、何があったのかと目で尋ねてくる。

「えーっと、ミーファちゃん？　何でもないから」

「しかし今、ヨシト王の叫び声が」

「すんません。ぶっちゃけ調子に乗りました」

そう言いながら、義人は男性を立たせる。そして、話の続きを口にする。

「いやね、別にこんなに豪華な料理じゃなくても良いと俺は思うんですよ。一般市民は一食あたり三ネカぐらいって言うじゃないっすか。ね？　だから俺達もそれくらいがいいから、明日からそうしてほしいなー、なんて。一般市民の平均収入千日分を一食で食べるなんて贅沢すぎるでしょ？　約三年分ですよ？　しかもこんなには食べられないから、食べ残しのせいで罪悪感と申し訳なさとちょっぴりの切なさで死にますって、俺」

「いや、そういうわけには……王とそのお客人ですし。大体、三ネカぐらいじゃご飯一杯とおかず一品ぐらいになりますよ？」

「それにヨシト王、他の臣下の手前もありますぞ？　臣下よりも粗末な料理を食べていては、示しがつきますまい」

料理人の男性とアルフレッドにたしなめられるが、義人は首を横に振る。

「いやいや、大体俺たちみたいな若造にこんな豪華な料理を食わせるなって話だよ。まだ何もしてないんだぞ？　働かざるもの食うべからずという言葉もあるくらいだし」

いや、もう食べちゃったけどね？

もちろんそんなことは言わない。空腹は抗うことのできない、強力な敵なのだ。

しかし、アルフレッドと男性は当然納得してくれない。ならば、と義人は矛先を料理人の男性に向けた。

「それにほら、いかに安くで美味しい料理が作れるかっていうのは料理人の腕が問われるじゃないか。何の不自由もない環境よりも、多少の逆境は自分を成長させる良い機会だと思うんだ。な？　やってみよう？　大丈夫、きっとできるさ。むしろやれ」

「でも……」

「王様命令」

王様として初めて行った命令が、『自分が食べる料理をもっと粗末なものにしろ』だなんて、古今東西で初ではなかろうか？

男性は口を何度かパクパクとさせると、アルフレッドに助けを求めるように顔を向ける。しかし、アルフレッドも頭痛を堪えるかのように頭を抱えていた。そして僅かな間を置いて、呻くような声を出す。

「ヨシト王……貴方は上に立つ者なのじゃから、それに伴う役割と義務をじゃな」

「そんな義務はいりません。俺の代で廃止する！」

一言で切り捨てる。アルフレッドは押し黙ると、カグラに水を向けた。

「カグラからも何とか言ってくれんか。このままでは……」

そこで敢えて言葉を切るが、それだけでカグラに伝わる。

このままでは、召喚国主制に反対している勢力に付け込まれるだろう。カグラもそれを理解している。だから、今回はアルフレッド側へと回ることにした。

「いいですか、ヨシト様。貴方のおっしゃることはわかります。そして、それは正しいことでしょう。ですが、それでは食材を提供する商人が困ることになりますよ？　彼らにも生活があるんですから」

「うっ、痛いところを……」

カグラの指摘に義人は苦い顔をする。このまま勢いで押し切れるかと思ったが、それを指摘されては不利だ。そんな義人を援護する

ように、志信と優希が口を開く。

「では、なるべく安く抑えるという形でどうだ？　体裁が保てる程度で、かつ安く仕上げる。その商人とて、何も食材の収入だけで生活しているわけでもないだろう。俺も料理を振舞われる側の人間だが、これほど豪華では気も引けるというものだ」

「うん、わたしも申し訳なく思っちゃうよ。だから、もっと控え目がいいなー」

二人の援護に、義人は続ける。

「それにほら、節約したら浮いた金を他のところに回せるだろ？　この国の財政は逼迫しているらしいし、少しでも節約するに越したことはないはずだ」

その意見に、アルフレッドは僅かに興味を惹かれた。

「ほう、それで浮いたお金はどこに回すおつもりか？」

ここで自分と懐と答えてみたくなったが、そんな笑えない冗談は捻り潰して、義人は薄く笑う。

「さてねぇ。生憎と俺はこの国の現状を知らないから、どこに使うかはまだ考えてない。だけど、そういう金は然るべきところに使うべきだろ？　カグラ、そもそも国の財源はどうやって集めてるんだ？　やっぱり税収か？」

「はい。市民に税を課し、それで国の財源を賄っています」

「ここ数年の税率は？」

そこで、僅かにカグラの表情が曇る。

義人はその表情に嫌な予感がしたが、傍にあったオレンジジュースのようなものと一緒に飲み干す。

「その……七割です」

「ぶふぅーーー！」

思わず、ジュースを噴き出してしまった。だが、それを気にせず詰め寄るように文句を放つ。

「ちょ、七割は高すぎだろ！　前の王は何やってたんだ！？」

かつて江戸時代に行われていた年貢では、場所によって異なるが五公五民（五割を納め、残った五割が農民のもの）が一般的とされていた。四公六民は善政と呼ばれ、反対に六公四民などはかなり厳しいものといえる。そして、七割ということは七公三民。

義人はもう一度高すぎだろ、と呟いて、それほど高い税を取って国の運営が厳しいということに深い疑問を覚えた。

「……なんだ、この国ってそんなに貧しいのか？　そこまで他国に劣ってるのか？　いや、俺の感覚とこの世界の人間の感覚が違うのか？」

「いえ、たしかに他国に比べて多少劣っている部分はありますが、大きな差があるわけではないです。それに、百年前までは税率が五割だったという記録も残っています」

ちなみに、七公三民とは最も厳しい税率である。これ以上上げれば生活が成り立たないほどで、かつての日本では百姓一揆などが起こるレベルだ。かの有名な天草の乱も、この七公三民という高い税率が原因の一つとされている。

俺だったら絶対反乱を起こすな、と義人は暗い笑いを漏らすが、

すぐさま頭を切り替えた。
まさに搾取と言える現状。それなのに国の財源はギリギリ。なら、話は簡単だ。

「ったく、面倒くせえ。最初の仕事は腐ったリンゴを探すことかよ」

税金を横領している者がいるのだろう。それも複数。
アルフレッドをして愚王と言わしめる前王の下、私腹を肥やすために動いていたに違いない。
どこの世界でも税金を横領する人間がいるのは変わらないらしい。
どうやって見つけ出すか、と考えたところで、義人はふと苦笑した。
何のことはない。土を踏んで数時間しか経ってないこの国を、どう運営するか本気で考えてしまった自分をおかしく思っただけだ。

「何はともあれ、やっぱり贅沢は敵じゃないか」

その一言で、料理担当の男性を納得させる。
そして、そんな義人を興味深そうにアルフレッドが見つめていた。

食事も終わり、疲れで眠気を感じた義人は寝室へと向かってベッドに転がる。
優希と志信は別の部屋に案内され、同じように眠ろうとしているだろう。

「さて、起きたら元の世界に戻ってますように、と」

欠伸を一つ噛み殺し、願うように呟く。
頭は無理だと理解しているが、願わずにはいられない。そして、

それと同時にこれから先のことを考えて僅かに笑う。

「ま、長くても三年あれば帰れるんだ……それまで、王様をやってみるのもいいかもな」

元の世界に戻りたいという願望と、王という存在を演じる非日常に惹かれる本能。

それらのせめぎ合いに苦笑を一つ落として、義人の意識は眠りの淵へと落ちた。

第十話：王様業務、初日

「知らない天井だ……」

目が覚めると共に、定番の台詞を呟く。実際は天蓋が頭上を覆っているため、天井は見えないのだが。

義人は体を起こし、とりあえず周囲を見回す。やけに広い部屋の間取りを眺めて、寝起き早々にため息を吐いた。

「うーむ、やっぱり夢じゃなかったか」

まあ、わかってましたけどね？

誰もいない空間に向かって話しかけてみるが、傍目から見れば危ない人に見えるのですぐに止める。そして、ベッドから降りようとしたところで扉がノックされた。

「あの、ヨシト様、起きていらっしゃいますか？」

扉越しのため判断がつきにくかったが、おそらくカグラだろう。そう判断した義人は、一つ欠伸をしてから返事をする。

「起きてるよ。どうぞー」

「し、失礼します」

「ああ、おはようカグ……ラ？」

扉を開け、一礼して入ってくるのはカグラ……ではなかった。そう判断したのは、身長と髪の色、そして服装によってである。

カグラは優希よりも五センチほど背が高く、艶のある黒の長髪にトレードマークの巫女服。だが、目の前の人物は違う。

身長は優希よりも僅かに小さく、髪は綺麗な茶髪。髪型は肩で揃えたボブカットで、顔立ちは綺麗と言うよりも幼く可愛らしい。服装は、何故かメイド服。それもマンガやアニメなどに出てくるような薄くてヒラヒラしたメイド服ではなく、必要以上に装飾のない、紺色を基調とした給仕をするのに最も適した簡素なメイド服だ。

「……どちらさま？」

少なくとも初対面のはずだと判断した義人は、とりあえず素性を求めて話しかける。すると、少女は慌てて頭を下げた。

「お、お初にお目にかかります。わ、わたしは、今日からヨシト様のお世話をすることになりました、サクラと申します。至らぬ点もございますが、よろしくお願いしまひゅ」

緊張のせいか最後に噛んだが、どうやら本人は気づいていないらしい。

「あー、うん、よろしく。ちなみに世話っていうのは？　カグラみたいに俺を補佐してくれるってこと？」

「は、はい！　あ、い、いいえ違います！　わたしはヨシト様の身の回りのお世話をするだけです！　お部屋をお掃除したり、お食事のご案内をするのが役目です！」

「む、なんというリアルメイドさん」

「え？」

「いや、なんでもない。じゃあ、これからよろしく。えっと、サクラでいいのかな？」

優希とは違う種類の小動物染みた雰囲気に、義人は微笑ましい気持ちになる。動物に例えるなら優希は子犬で、サクラはリスかウサ

ギだろうか。

「朝食のご案内と、お、お着替えの服をお持ちしました」

そう言いつつ、綺麗に折りたたまれた服を差し出してくるサクラ。義人はそれを受け取ると、自分の格好を見下ろして苦笑した。

昨日は疲れていたため学校の制服のまま眠ってしまい、あちこちにしわがついている。あと三年近くこの世界で過ごさなくてはならないので、なるべく大切に着ようと義人は思った。

本当は着慣れた制服のほうがいいのだが、同じ服をずっと着続けるわけにもいかない。

ひとまず服を受け取ると、どんなものか確認する。

何せ、今までの王がどこに影響を及ぼしているかわからない。西洋風と和風が不協和音に混ざり合った珍妙な服が出てきても驚くまい、と義人は嫌な決意をした。

「おろ？　意外と普通な……」

だが、広げてみて拍子抜けする。渡された服は前をボタンで留めるタイプのシャツに、腰元を紐で締めるややゆったりとしたズボン。そして、シャツの上に着るための厚手の長袖服。色は落ち着いた薄茶色だ。

キワモノな服が出てこなかったことに、安堵の息を吐く。

「とりあえず着替えて……ん？」

制服に手をかけようとして、手が止まる。見れば、サクラが何やら決然とした表情で義人を凝視していた。

「あの、サクラさん？　そんな穴が開くほど見つめられると困るん

ですが？」

思わず敬語で話す。サクラはその声に弾かれるように顔を上げた。そして、気合を入れるように胸の前で拳に力を込める。

「そ、その……お手伝いします！」

「いやいやいや待てや！」

赤い顔で危険なことをのたまうサクラに、義人はすかさず右手を突き出して制止する。

「一人で着替えられるから！　手伝わなくていいから！」

「い、いえ！　これはわたしのお仕事です！　ヨシト様のお着替えをお手伝いします！」

「ええい！　嬉しいシチュエーションのはずなのにまったく嬉しくないのが不思議だぜ！　一人で着替えるから！　いやむしろ一人で着替えさせてください！　ていうか部屋から出て！　お願いしますから！」

そうして言い募ること数十秒。最後には王様命令を発動してなんとか一人で着替えた義人であった。

「おはよーっす……」

サクラと伴って食堂にたどり着いた義人は、疲れた声で朝の挨拶をする。それを聞いた優希は不思議そうに目を丸くした。

「おはよー、義人ちゃん。どうしたの？」

そう言う優希の服装も、昨日までの制服とは違う。
灰色のゆったりとした貫頭衣……いや、ワンピースというべきか。腕は長袖で覆われており、服の丈は膝下まである。腰の部分を紐で絞めており、動きやすそうだ。

「いや、ちょっとな。それは置いといて、そっちも普通の服で良かったな」

義人がそう言うと、優希は苦笑混じりに笑う。そんな優希の表情を珍しく思った義人は首をかしげた。

「なんだ？　何かあったのか？」
「えっとね、最初はこの服じゃなくてドレスみたいなのを着せられるところだったの。でも、窮屈そうだったからこっちの服にしてもらっちゃった」
「納得。俺もかしこまった服を出されたら変えてもらおうと思ってたからな」

そう言って笑い合っていると、今度は志信が食堂に入ってくる――制服姿で。

「おはよう、二人とも。む……なんだ、俺の顔に何かついてるか？」
「いや、志信。お前、なんで制服なんだ？」
「この服が一番着慣れているからだが」

何かおかしいか、と言わんばかりの志信の表情に、義人は首を横に振る。

「おかしくはないけど……元の世界の服って制服一着しかないんだ

ぜ？　大事に着ないか？　いや、俺だって制服のほうがいいけどさ」
「なら、着ればいいではないか」
「いやいや、だからさ。破れたりしたら困るだろ？」
義人の言葉に、志信は不思議そうな表情を浮かべた。
「制服と同じ作りの服や、それを元に現代の服を作ってもらえば良いのではないか？　俺はカグラにそう頼むつもりだったのだが」
何気ない志信の一言が、食堂に沈黙をもたらす。
そして五分後、食卓には制服姿の三人が並んで座っていたそうな。

「それにしても、ちゃんと食事が質素になってるな」
白米に味噌汁らしきもの、そしてサラダにおかずが数品並ぶ食卓を見て、義人は満足そうに頷く。料理が運び込まれるのと同時に部屋に入ってきたカグラは、それを聞いて苦笑した。
「五十ネカで作ったそうですよ？」
「うん、却下。もっと下げるように言っといて」
「これでも苦労したそうなんですが……」
苦笑を困った笑みに変え、カグラは頬に手を当てる。
「それでも、今までの朝食の五分の一以下なんです」
「オーケー。前王の墓はどこだ？　とりあえず、墓石を粉砕するから」

もちろん、そんなことはしない。そもそも死んでいるのだろうか？
それが疑問になった義人は、とりあえず聞いてみることにした。

「というか、前王はどうなったんだ？」

その質問に、カグラは露骨に目を逸らす。

「えーっと、忘れちゃいました」

目を逸らしたままで、明らかな嘘を吐く。義人はそうか、と一つ頷いて、傍で茶碗にご飯を盛っていたサクラに笑顔を向けた。

「サクラは教えてくれるよなー？　隠し事なんてしないよなー？」

優しく問いかける。

「ひゃ、ひゃい！　前王は、その……ど」

何故かどもるサクラ。義人は急かさずに、続きを促す。ちょっと嫌な予感がしたのは、きっと勘違いだろう。

「ど？」

「ど、ど……つ、されました」

「んー？　声が小さくて聞こえないぞ？」

聞き返すが、義人の本能は警鐘を鳴らす。
やめろ、続きを聞くな。今なら引き返せる。
そんな警告の声を、知らないがために起こる危険性を考慮して捻じ伏せた。
サクラはカグラへと何度か目を向ける。それはまるで、これから

話すことの許可を求めるようだ。カグラはため息を一つ吐くと、表情を引き締めて言葉を受け継ぐ。

「前王は毒殺されました。その無能さに耐えかねた臣下によるもので、毒を盛った者はすでに処刑されています」

食堂の空気が、ピンと張り詰める。

「……毒殺か」

志信が確かめるように呟き、義人は無言のままで目を瞑る。優希はオロオロと周りを見回して、食卓の食事に目を向けた。

「えっと、義人ちゃんの食べるご飯は大丈夫……だよね？」

「はい。毒見も行っていますので、安心して召し上がってください」

優希の背後にいたメイドがそう答える。

義人はそれを聞きながら、閉じた目を僅かに開いた。

「やばいな、これ。毒殺とか洒落になってないぞ」

自分も同じ目に遭う可能性があるのだから、人事ではない。しばし考えを巡らし、カグラへと目を向ける。

「それがあったのは何年前だ？　毒を盛った奴の立場は？」

「毒殺が起きたのは十年前です。そして、毒を盛ったのは当時の騎馬隊の隊長です。王の行いを正そうとアルフレッド様と共によく諫言を行い、忠義に溢れ、人望も厚い人物だったそうですが……」

「王が駄目すぎたか……いや、待て。前王はその人を疎ましく思ってたのか？」

そう尋ねると、カグラは申し訳なさそうな表情へと変わった。

「申し訳ありません。その当時わたしはまだ七歳でして、今のように王の傍にいたわけではないのです。アルフレッド様ならよくご存知かと思いますけど」

「よし、それならアルフレッドを呼んでくれ」

義人の指示に、慌ててサクラが部屋から出て行く。そして、数分してアルフレッドが食堂へと姿を見せた。

「おはようございます、ヨシト王。して、何の御用ですかな?」

折り目正しく挨拶をしてくるアルフレッドに挨拶を返し、すぐさま十年前のことを問いかけてみる。アルフレッドは記憶を遡るように考えこみ、首を横に振った。

「傲岸不遜な王じゃったが、ポドロ、前騎馬隊隊長の諫言にはよく耳を傾けておったものじゃ。それがどうかなされたか?」

「いや……そうか、むしろ重用されてたか。ふーん、そうかそうか」

義人は考えをまとめるように何度か頷き、皿に乗せてあったウィンナーらしきものを口へと運ぶ。

「ちょっと、義人ちゃん!?」

優希が慌てるが、義人は構わず咀嚼してウィンナーらしきものを飲み干した。

「うん、美味いな。ほら、優希も志信も食えよ。ご飯が冷めちゃうぞ？」

今まで周囲を満たしていた張り詰めた空気を振り払い、義人は何事もなかったかのように食事を始める。志信もそんな義人に従い、味噌汁らしきものに箸をつけた。

「む、この味噌汁の出汁はなんだ？　今まで食べたことのない味だが……」

「藤倉君まで！？　ぅう～……もういいもん！　わたしも食べる！」

空腹に勝てなかったらしく、優希も食事を始める。義人はそれに笑いながら、ついでとばかりに口を開いた。

「それでさ、十年前、いや、それよりも前に何か変わったことはなかったか？」

「変わったこと？」

「そう、例えば税率が変わった、とかさ」

何気ない問い。しかし、そこには強い確信が込められている。

「は、たしかに十一年前に税率が今の税率に変わったのう」

アルフレッドの返答に、義人はふーんと気のない言葉を漏らす。そして、椅子に背を預けてカグラに顔を向けた。

「この国の法律ってさ、王様が決めて他の奴はみんなそれに従うんだろ？　しかも、一度決めたら変えることができるのは王様だけ。違う？」

「はい、その通りですけど……」

それが何か、と言わんばかりのカグラに、義人は笑って返す。

「いや、なんでもない……おお、この味噌汁の出汁、本当に何だ？」

ずずず、と味噌汁らしきものを啜り、一息つく。

異世界から王を召喚。しかも、その王に絶対的な権限がある。一度決めた法律は、王でないと変えられない。そして挙句が毒殺。前王が死んでからの十年間は、おそらくアルフレッド主導の下、有能な連中でなんとか国を運営してきたのだろう。

様々な情報を頭で整理しながら、義人は小さく呟く。

「ったく、なんつー歪んだ国だよ」

その声は、誰に聞かれることもなく霧散した。

第十一話：綺麗なリンゴと腐ったリンゴ

朝食を終えた義人達は、今度は謁見の間へと案内される。
昨日行えなかった臣下との顔合わせを行うとのことで、カグラは義人に一枚の羊皮紙を差し出した。

「これが主な臣下の役職と名前です。なるべく早く覚えてくださいね？」
「ういっす、努力します」
「それと、これを」

そう言って差し出してくるのは、高級な布で織ったらしき赤いマント。義人はサクラに手伝ってもらい、とりあえずマントを身に着ける。

「おお、王様っぽい」

冗談混じりにそう言うと、カグラと優希も同意するように頷いた。

「お似合いですよ」
「うん、格好良いよ義人ちゃん」
「へっ、よせやい。照れるぜ」

本当はあまり照れていないのだが、とりあえずそんなことを言ってみる。そして、羊皮紙をポケットに入れようとして動きを止めた。

「そうだ。この名前が書かれている紙って、もう一枚用意できる？」
「できますけど……どうしてですか？」
「いや、志信に持たせようと思って」

「シノブ様に？」

カグラは不思議そうな表情を浮かべるが、志信が頷く。

「できれば書く物も一緒にお願いします」

「はぁ、わかりました」

ひとまず返事を返し、カグラは頼まれた物をすぐに持ってくる。志信が受け取ったのを確認すると、義人は口の端を吊り上げて笑いかけた。

「そんじゃ、頼むぜ志信」

「わかった。注意して見ておく」

「わたしは？」

「ああ、優希もなるべく頑張ってくれ」

なるべくというところに優希がへそを曲げかけたが、義人がなだめてすぐに元に戻る。

そして、一つ深呼吸して義人は謁見の間への扉をくぐった。

謁見の間には、昨日と同じように主な文官武官が並んでいた。その中にはミーファの姿もある。そして、義人が入ってくるのを見るとすぐさま膝をついて臣下の礼を取った。

やべぇ、ちょっとイイ気分。

王様っていいな、と義人は内心で思ったが、表情には微塵も出さない。下手すればにやけてしまいそうになるが、なんとかそれを抑え込んだ。

義人は表情を引き締めたまま、王座へと足を運ぶ。そして、なる

べく威厳があるように胸を張って王座に座った。
優希と志信はカグラに案内され、義人から若干離れたところに立たされる。義人の傍にはアルフレッドが控えており、義人を補佐する役目のカグラがその斜め前で膝をついた。それを確認した義人は威厳があるようにと臣下を見回して鷹揚に頷く。

「皆の者、昨日は取り乱したところを見せたな」

ポーカーフェイスを装うが、正直緊張で口から心臓が飛び出そうだ。
なんで俺、こんなところで王様なんてやってるんだろう？　と現実逃避したくなったが、逃避できないので話を進めていく。

「カグラ達から話は聞いた。これより、俺は王としてこの国を良い方向へと導いていけるよう努力する。よって、まずは最初の命令を下す」

命令、という言葉に臣下の間に微かな動揺が広がる。
それを見ながら、本当はすでに最初の命令を使っており、しかも『自分が食べる料理をもっと粗末なものにしろ』という内容であることは言わないでおこうと義人は思った。

「俺は若く、未熟だ。この世界のことなんて、わからないことが多すぎる。だから、皆には俺を支えてほしい。それが最初の命令だ。よろしく頼む」

そう言って頭を下げると、さっきよりも動揺が大きくなったのを感じる。『俺は』頭を下げているからわからないが、顔を見合わせている者もいるだろう。何せ、王が軽々しく頭を下げたのだ。前の王は傲岸不遜だったらしいので、その驚きは大きいだろう。

そんな臣下達の反応を、志信は冷静に見つめていた。浮かべた表情や挙動をつぶさに観察し、驚きや動揺とは違う様子を見せた者の目星をつけていく。

「ヨシト王。我々は臣下。王を支えるのは当然の務めというものじゃ」

アルフレッドがそう言うと、義人は頭を上げる。そして、ポケットから羊皮紙を広げると、アルフレッドに小さく笑いかけた。

「そうか。では、まずは臣下の名と顔を覚えないとな」

臣下達を一度見回すと、手元の羊皮紙へと視線を落とす。

「今から役職と名前を呼ぶから、返事をしてくれ」

さり気なく優希と志信のほうに目を向けると、二人はそれに気づいて小さく頷いた。

口元をニヤリ、と歪める義人だが、臣下達からは羊皮紙が死角になって見えない。

「ではまず、宰相のアルフレッド」

「はっ！」

傍にいたアルフレッドが返事を返す。義人はその顔を数秒凝視すると、再び羊皮紙に目を落として次々と名前を読み上げていく。

呼ばれた臣下は返事を返し、優希と志信は返事をした臣下の動きを見る。優希はその雰囲気を見て、志信は表情や動きなどを観察してさり気ない動作で手元の羊皮紙に筆を走らせた。

「……っと、これで終わりか」

羊皮紙に書かれていた文官武官、合わせて二十八人。義人はおおよその名前と顔を頭に叩き込むと、羊皮紙を丸めてポケットに仕舞う。そして、カグラの方へと顔を向けた。

「これからの予定は？」

「はっ、ヨシト様には執務室にて政務を行っていただきます。重要な事項がいくつかございますので」

「成程。よし、それでは解散とする！　皆の良き働きに期待する！」

「はっ！」

最後にそう締めくくり、初めての謁見は終了した。

「ぶはー！　疲れたー！」

執務室に案内された義人は、マントを脱いで体を伸ばす。そんな義人に、カグラは苦笑した。

「お疲れ様でした。でも、中々見事でしたよ？　緊張もされてなかったみたいですし」

「いやいや、すごい緊張したっつーの。てか皆の良き働きに期待する？　はは、何言ってんの俺」

思い返すと顔面から火が出そうだ。

「いや、カグラの言う通り見事だった」

「うん、格好良かった！　王様っぽかったよ？」

遅れて部屋に入ってきた優希と志信は、そんな義人に労いの言葉をかける。義人は執務用の机にだらーっと体を乗せると、その体勢のまま顔を上げた。

「んで、どうだった？」
「格好良かったよ！」
「ちげえよ」

楽しそうに笑う優希を一刀両断して、志信に目配せする。志信は一つ頷くと、制服の内側から羊皮紙を取り出した。

「臣下の様子を見ていたが、流石に露骨な表情をする者はいなかった」
「そうか。んで、味方っぽいのはどれくらいいた？」

志信は羊皮紙を見つつ、自身の見解を話す。

「そうだな……武官は好意的な者が多いように見えた。最初はどちらでもなかったようだが、義人が『皆には俺を支えてほしい』と言った後辺りから僅かに目の色が変わったように見えた」
「目の色が変わったって、良い意味でか？」
「ああ。武官はきちんと支えてくれそうだ」

完全無欠で自分の意見を求めない主君よりも、自分を頼ってくれる主君のほうが武官には良いようだ。そちらのほうが苦労を分かち合えるし、仕え甲斐もある。

多少の苦労があったほうが愛着も沸き、忠義を尽くしてくれるだろう。己の武を然るべきところで使い、それをきちんと評価してく

れるなら文句などない。

「それで文官は？」

「文官は、おそらく曲者が多い。中にはまともな人物もいるようだが」

「まあ、税金の横領とかは文官のほうがしやすいだろうしな」

義人がそう言ったところで、横から優希が口を挟む。

「この、財務大臣の人が嫌な感じがしたよ。なんか、品定めするみたいに義人ちゃんを見てたし」

財務大臣、エンブズ＝カリーという名前を指差す優希。義人は顔を思い出そうと僅かに黙考する。

恰幅の良い中年男性で顎から髭を生やし、やけに豪華そうな身なりをしていた……気がする。

思い出している義人の横で、志信は同意しかねるように首を振った。

「確かに、欲に濁った目をしていた。しかし、権力のある人間ならば多少は欲も出るから確証にはならないだろう。己が仕える者がどの程度の者かを確認するのも、さしておかしいことではない」

「うーん、そうかなー……」

可愛らしく小首をかしげる優希。

「だが、警戒しておくに越したことはないだろう」

志信はそう付け足して、義人を見る。意見は出すが、決めるのは

義人だ。少なくとも志信にとっては、義人が決めたのものなら従うだけの価値がある。

「こっちの印象だけで決め付けるわけにもいかないし、まずは様子見で行こう。俺はカグラと一緒に政務をしなくちゃいけないらしいから、優希と志信はこの世界のことを調べつつ、出来るなら情報も集めること」

「わかった」

「うん、わかったよ」

話が途切れたのを見計らい、カグラが二枚の紙を取り出す。そして、優希と志信に一枚ずつ差し出した。

「城の中を自由に動くための許可証です。お二人はヨシト様の客人という扱いですが、持っておくに越したことはないでしょう」

「有り難い」

「わぁ、ありがとうございます！」

許可証の文面を確認して、二人はポケットへと納める。義人は許可証を見て、何か閃いたようにカグラへと向き直る。

「この二人に何かしらの権限って与えられないかな？　多少は兵を自由に動かせるとか、お金を扱えるとか」

「それは止めておいたほうが良いかと。何の名分もなく権限を与えられては、他の臣下が納得しないでしょう」

「うーん、やっぱりそうか。でも、いざ何かあってからじゃ遅いし……そうだなぁ」

何かないものか、と考え込む。つらつらといくつかの考えが頭に浮かんでは消えていくが、中々良い案が浮かばない。

「志信なら武官に受けが良さそうだから誰か引き込んで……いや、待てよ。それより……うむむ……よし、志信！　頼みごとができた！」
「なんだ？」
「まずは武官から引き込む。カグラ、この国の兵はどこで訓練するんだ？」
「城の裏手に訓練場があります。大抵はそこで訓練していますが……何故です？」
「ちょっとな。志信、まずは訓練場に行って、この国の兵がどのくらい強いのかを調べてきてくれ」
「わかった。強さを見るだけでいいのだな？」
「ああ。ついでに有望そうな人間を探してくれると助かる。もしも誰かに絡まれたりしたら、構わずぶちのめして……いや、そりゃお前の家の流儀に反するか？」
「反しはしないが、沿いもしない。絡まれた程度では俺の流派の技は振るえんが、手を出されれば話は別だ。まして『試合』という形ならば存分に振るえる」
「そうか。まあ、まずは見てくるだけでいいからな」
志信は頷きを返すと、静かに部屋から退出する。それを見送ると、カグラが疑問を浮かべた表情で義人を見た。
「シノブ様ってお強いんですか？　いえ、少なくとも素人ではないようですけど」
そんなカグラの問いに、義人はおかしそうに笑う。
「あいつが強くないっていうのなら、俺がいた世界の大半の人間は弱いってことになるさ。少なくとも、あいつが普通の人間に負ける

なんてのは想像もつかないね」

熊らしき生き物と戦った時はさすがに分が悪かったが、あれは仕方ない。その辺りに生えていた細木を適当にへし折っただけの武器だ。きちんとした武器を持っていたのなら、あの熊とて倒してみせただろうと義人は確信している。

「義人ちゃん、わたしは何をすればいいの？」

そんな義人の裾を引っ張り、優希が尋ねた。若干その顔は拗ねており、義人は苦笑する。

「そうだなー……優希は俺達が着る服をなんとかしてくれ。制服じゃなくても良い。いつも着ていたような服を作ってほしいんだ。サクラ、優希を手伝ってやってくれ。そういった服を作る店や人に心当たりがあったら紹介してほしい。まあ、優希は裁縫得意だから自分で作れるかもしれないけど」

「わ、わかりました。それではユキ様、こちらへどうぞ」

「うん、よろしくね！　それじゃあ義人ちゃん、いってきます」

「ああ、車には気をつけてなー。って、走ってないか」

手を振って出て行く優希に手を振り返す。そして、出した指示の内容をもう一度確認してカグラに笑いかける。

「やばい、カグラ。王様って楽しいかもしれない」

意外と向いてるやもしれん、と言葉を繋げた義人に、カグラも笑顔で頷く。

「それでは、ヨシト様にはこちらの処理をお願いしますね」

そう言って、どこから取り出したのか大量の紙を『ドンッ』と執務机の上に置いた。

「ちょっ、今明らかに紙を置いて出る音じゃなかったよね？」

「まだまだありますからね。どうやら、わたしの予想通りヨシト様は王の資質があったみたいです。だから、このくらい簡単ですよね？」

さらに紙の山を二山ほど築くカグラさん。すでに執務机の上は視界一杯紙で埋まり、紙の海で溺死できそうだ。

「すまん。いや、ごめん。すみません。調子に乗りました。やっぱり俺って王様に向いてないわ。こんなに処理できないって。ね？燃やしていい？」

最後に本音を足してみるが、カグラは笑顔で首を横に振る。

「わたしも手伝いますから、頑張りましょうね」

輝くようなその笑顔に、義人はため息と共に頷いた。

第十二話：藤倉志信

四歳の頃に両親が交通事故で他界し、その日を境に自分を取り巻く環境が激変したのを今でもよく覚えている。誰も自分を引き取ろうとしない親戚連中。両親の葬儀も終わった後、志信を待っていたのは過酷な現実だった。

子供を育てるのには金がかかる。両親の保険金があるにはあったが、成人させるには足りない額。その保険金を管理という名を借りて奪い取り、志信自身は施設に追いやろうとした心無い親戚もいた。

幼いながらも聡明だった志信は、親戚連中はあてにならないと自ら施設に行こうとすら考え……結果、祖父に引き取られた。

それは、葬儀も終わって初七日が経過した頃。志信が親戚連中を見限り、施設に赴こうとしていた日。母の父、すなわち志信の祖父がやってきた。全国を流浪するのが趣味らしく、三日前に志信の両親の訃報を聞いて飛んできたらしい。

志信の母は駆け落ちのように父と結婚したらしく、志信が祖父を見たのは初めてだった。

祖父はまず線香を焚き、両親の冥福を祈る。その際小さく漏れた、

『親より先に逝きおって……馬鹿者が』

という呟きが、今でも志信の耳に残っている。

少なくとも、その言葉だけで目の前の祖父を名乗る人物が信用できると思った。

祖父が今後どうするかと尋ねてくるので、志信は施設に行く旨を告げる。親戚連中は誰も引き取らないからと。下手すれば、残った両親の保険金すらも奪われかねないからと。

それを聞いた祖父はおもむろに立ち上がって、志信をどうするか決めるために集まっている親戚連中の下へと赴いた。

そしてその後起こった出来事は、今でも志信の記憶に鮮明に焼きついている。

親戚連中を前にした祖父は目を見開いて大喝。それと同時に、傍にあった木造りの箪笥を殴打して粉砕した。それも、素手で。

そこからは流れるように話が進み、祖父が志信を引き取ることとなった。

それが今から十三年前。志信が祖父に引き取られ、武術を習い始めるきっかけとなった出来事である。

古流武術の流れを汲む藤倉流は、棒術を基本とした複合的な流派だ。そもそも棒術は剣術や槍術、薙刀術の諸流派と重複することが多く、藤倉流ではそれらも同時に学ぶ。また、他にも徒手空拳で戦う方法や柔術も覚える。

志信が得意とするのは棒術や槍術など、長物を扱うことだ。徒手空拳、剣術や柔術もそれなりに使えるが、祖父曰くまだまだひよっこらしい。

祖父と比べれば誰でもひよっこになると言いたかったが、言っても当たり前だと笑い飛ばすだろう。実際、他流試合に訪れた武芸者を軽々とあしらうところを見たことがある。

十六歳の時に免許皆伝を受け取りはしたが、結局祖父から一本も取ることはできなかった。

「一生勝てる気がせんな……」

志信は傍目からは見分けられぬ苦笑を浮かべると、城の裏手へと歩いていく。僅かに掛け声のようなものも聞こえるから、こっちの

方向で間違いはないだろう。
扉を開け、城の外へと踏み出す。すると強い日差しが照らしつけ、志信は目を細めた。

「エイッ！　ヤアッ！　トウッ！！」

練習用の刀を振り下ろし、訓練に励んでいる兵達。志信はその姿を見ながら、邪魔にならないよう隅のほうを歩いていく。
とりあえず全体が見渡せる場所まで歩くと、そこで足を止めた。途中で何人かの兵が不思議そうな顔で志信を見るが、志信は気にも留めない。
刃引きされた練習用の刀を振り下ろす者もいれば、違う場所では試合形式で打ち合っている者もいる。
志信はしばらく全体の動きを見ていたが、その途中で僅かに首をかしげた。

「……もしや、ここで訓練しているのは新兵か？」

動きに滑らかさがなく、踏み込みも弱い。刀の振りも遅く、中には真剣な表情ですらない者もいる。しかも、振り下ろす動作だけで他の動きがなかった。横薙ぎや突きなどの動きも見てみたかったが、誰もしていないのだから仕方ない。
志信の頬に、暑さとは違った汗が流れる。
これが正規兵？　いや、まさかそんなわけはあるまい。きっと新しく入隊した兵だろう。
若干願いを込めてそんなことを考えてみるが、志信の長年の研鑽と理性がそれを否定する。体つきを見る限り、刀を振るって日が浅いように見えない。すなわち……

「シノブ殿、こんなところでどうしたのですか？」

考え事をしていると、やや離れたところから声をかけられた。
志信が声の方向へ目を向けると、今から訓練を始めるらしく城から出てきたミーファが立っている。周囲と同じように練習用の刃引きされた刀を手に持ち、昨日使っていた白い鎧は身に着けておらず、これまた練習用らしき鎧を身に着けていた。

「ミーファか。いや、刀を振る音と掛け声が聞こえてな。訓練を見てみたくなった」

志信の言葉に頷くミーファの表情は、義人に対するものよりも幾分柔らかい。

「シノブ殿も剣術を使われるのですか？」
「剣術も扱うが、得意ではないな。それとミーファ、俺には敬語など使わないでくれ。義人と違い、立場のない人間だ」
「しかし……」
「名前も呼び捨てで良い。頼む」

譲らない、と表情を読み取ったミーファは、若干呆れたように頷いた。彼女としても、敬語を使わなくていいのならそっちのほうが良い。
ミーファは公私を分けるのが上手いタイプで、切り替えは早かった。

「わかったわ。それじゃあシノブって呼ばせてもらうことにする」
「そうしてくれ」

頷き返し、志信は兵達に目を向ける。そして、外れていてくれと願いながら口を開いた。

「ところでミーファ、ここにいる連中は新兵か？」
「え？　違うわよ？　ここで練習しているのは第二歩兵隊の連中で、最低でも一年は訓練しているわ」
「……そうか」
何故か声のトーンが下がった志信を、ミーファが不思議そうに見る。その視線に志信はなんとか気を持ち直す。
「それではミーファの隊に案内してくれないか？」
「それはいいけど。なんで？」
「いや、魔法剣士とやらを見てみたいだけだ」
何やら苦虫を噛み潰したような顔をしている志信を訝しげに思いつつも、ミーファは自分の隊へと案内した。
第二歩兵隊から百メートルほど離れ、先程よりも広い訓練場に移動する。その際にも、志信は色々と質問をぶつけていく。
「魔法剣士とやらはどんな戦い方をするんだ？」
「その名前の通り、魔法と剣を使って戦うわ。魔力を使って身体能力を向上させたり、剣や鎧の強度を上げたり、剣と同時に魔法を使ったりね。この国の主力と言えるわ」
どこか誇らしげなミーファと反対に、志信は若干の不安を覚える。主力の実力が高ければ良いが、低ければ目も当てられない。
「ちなみに、この国で最も腕が立つ……ああ、魔法とやらの使用も入れて、この国で最も強いのは誰だ？」
そう尋ねた志信に、ミーファが先程よりも誇らしげに胸を張る。

「わたしよ。去年の国内の武術大会でも優勝したわ」

そこに確かな自信と僅かな過信を見て取った志信は何か言おうとして、口を閉じた。

魔法を使っていたのかはわからないが、熊のような化け物であるバズスを一刀両断で倒したのを志信も見ている。『井の中の蛙大海を知らず』という言葉も浮かんだが、いきなりそんなことを言うのも失礼だ。

そうして案内された訓練場では、兵士が各々で訓練をしている。見回してすぐに気づいたことだが、第二歩兵隊では見なかった女性の兵士が大勢いた。

数にすれば全体の半分ほど。珍しいことだと志信は思ったが、横のミーファが補足を入れてくる。

「魔法を使えるのは女性のほうが多いの。だから、魔法剣士隊や魔法隊では女性が多いわ」

志信が見る限り、女性兵士の動きは男性兵士と遜色ない。おそらく魔法を使っているのだろうが、先程の第二歩兵隊よりも“使える”ことに安堵した。

もっとも、第二歩兵隊より“使える”だけで志信の評価はあまり高くないが。

「魔法とやらは何も唱えなくても使えるのか？」

「詠唱？　苦手な魔法や高度な魔法を使おうと思えば必要だけど、必ず唱えなくちゃいけないってことはないわ。第一、刀を振るいながら詠唱したら隙ができるじゃない。腕の悪い魔法使いとかは唱えてるけどね……あれ、シノブ？　貴方、よく見たら魔法がかかってるわよ？」

「何？」

魔法がかかっていると言われても、志信に思い当たる節はない。
ミーファはそんな志信を頭から爪先まで眺める

「何か違和感とかない？　体が軽いとか。いつもより力が出るとか」
「む、そういえばこちらの世界に来てからずっとそんな状態だな」
「やっぱり『強化』か……って、昨日からずっと？」
「ああ。その『強化』とはなんだ？」
「自分自身、もしくは自分以外の誰かの身体能力や知覚能力を向上させる魔法のことよ。あとでカグラに聞いてみたほうがいいかもね」
「そうか。ならば聞いておこう」

害はないと判断したミーファは、訓練を自身の始めようと歩き出す。志信は黙ってそれを見送ると、ひとまずこの国の主力がどれ程の練度か確かめることにした。
魔法の恩恵か、先程の歩兵隊よりも刀の振りは速い。動きも中々素早く、中には魔法で生み出した炎を放つ者もいた。
それらの動きを眺めながら、志信はポツリと呟く。

「少々動きが綺麗すぎるな」

型にはまった剣と言い換えてもいい。動き自体はそこそこだが、多くの兵士が実際の斬り合いを想定してない道場剣法だ。
この国は他国と戦うことはないと言っていた。そのため、実戦を知らない者も多いのだろう。魔物と戦ったことがない兵士もいるとカグラが言っていたのを思い出し、志信は僅かに頭が痛くなった。
無論、志信とて実際に人を殺したことがあるわけではない。だが、防具なしで他流試合を行ったことなどザラだし、それで大怪我を負ったこともある。逆に相手に大怪我を負わせたこともある。多対一

で戦ったこともある。下手すれば死に掛けたこともある。下手すれば相手が死んでいたこともある。さすがに魔物と戦ったことはなかったが。

「いや、お爺様が魔物のようなものだったか……」

苦笑を一つ零し、準備運動を終えたミーファへと視線を移す。そして、僅かに感嘆の息を漏らした。

「ほう……流石隊長というだけはあるな」

三人を相手取って戦うミーファを見て、そう評す。相手の攻撃を受け流し、隙を突いては一人ずつ倒していく。魔物相手に実戦も積んでいるのだろう、他の者とは動きが違う。

その動きを見ているうちに、志信の中でとある感情が首をもたげた。

――戦ってみたい。

志信とて武を修める者だ。強者がいたのなら、戦ってみたいとも思う。

しかし、しばらくミーファの動きを見ているとその衝動が収まっていくのを感じた。

――他の者より動けているがそれだけ、か……。

冷静にミーファの実力を測り、思考が告げる。動きの早さやキレ、刀を振る速度。踏み込みや周囲へと観察眼。勿論ミーファとて本気ではないかもしれないが、志信もそれを考慮してある程度加味して考えている。

苦戦はしても負けはしない。
そう判断して、他の隊の訓練風景を見に行くことにした。

第一歩兵隊と魔法隊と弓兵隊はいないらしく、ひとまず騎馬隊の訓練場へと足を伸ばす。
馬上で指示を出している隊長らしき人物や、他の兵士の動きを見る。
馬上からの攻撃や馬を使った機動。下からの攻撃の防御など、今までの隊よりも全体的に練度が高い。
それでも魔法剣士隊が主力なのは、魔法という存在がそれほど強力だということだろう。
ある程度の動きを見ると、今度は第三歩兵隊が訓練しているところを見ることにした。
そして、志信は思わず絶句する。
先程の第二歩兵隊よりも明らかに練度が低く、士気も低い。中には木陰で休んでいる兵士もいるほどだ。隊長が席を外しているのか、訓練する兵士の表情はどこか緩い。

「……義人。なるべく早く世界に戻る方法を考えたほうが良いかもしれん」

志信にしては珍しく、呆然とした声だった。
この国に国としての価値や軍事価値がほとんどなく、かつ侵略されるような重要な資源がないことに志信は感謝する。
もしも戦争でも起きれば、この国は短期間で負ける。他の国の兵がどれほど強いかはわからないが、この国より弱いということはないだろう。
色々と絶望を感じて、志信は大きなため息を吐いた。

第十三話：北城優希

生来、北城優希は酷く内向的な少女だった。
その上激しく人見知りをしていたため、幼稚園に入園させる際に彼女の両親が被った苦労は一言では言い表せない。
ならば入園させなければ良かったのだが、それでは優希の将来が危ういと心を鬼にして入園させたのだ。
当然、優希はそれを拒んだ。何とか引きずるように幼稚園の門まで連れていったが、そこから先に進めない。
嫌だと叫び、泣き喚く。必死に両親の足にしがみつき、力の限り抵抗する。そのあまりの拒否っぷりに、幼稚園の先生も困り顔だった。
門の前で駄々を捏ねること五分。優希の両親と幼稚園の先生の顔に諦めの表情が浮かび出した頃、一人の少年が通園してきた。
そしていまだに泣き叫ぶ優希を見ると、感心したような表情を浮かべて近寄ってくる。

「おまえ、げんきいーな」

第一声が、それだった。
今までは駄々を捏ねて泣く自分をあやしたり、泣くなと叱られたことしかなかった優希は、『駄々を捏ねて泣くことを褒められる』という事態に一瞬思考が停止する。少年は泣き声が止まったのを見ると、嬉しそうに笑った。

「おれ、たきみねよしと！　おまえ、なまえは？」
「ぐずっ……ゆき……。ほうじょう、ゆき」
「そっか。じゃあゆき、いっしょにあそぼーぜ」

そう言うなり、優希の右手を取って歩き出す。その強引さに優希はまた泣こうとするが、それより早く少年……義人が振り向く。

「あんまりないて、とうちゃんとかあちゃんこまらせるなよ。わらったほうがとうちゃんもかあちゃんもよろこんでくれるぞ？」

非難するわけでもない、ただ真っ直ぐな言葉。

それを聞いた優希は泣こうとしていたのを止め、マジマジと義人を見る。そして両親へと振り返って、両親の浮かべる表情を見た。

両親はほっとしたような、それでいて嬉しそうな顔をしている。

「いってらっしゃい」

次いでかけられた声に、優希は嬉しさを覚えてはにかんだ。

「……いってきます」

空いた手で手を振ると、両親の笑みが深くなる。それがさらに嬉しく感じて、優希は自分でも驚くくらいの大声を上げた。

「いってきます！」

それが、北城優希と滝峰義人、二人の出会い。

その後、二人とも同じ幼稚園を卒園して同じ小学校へ入学。これも同じように卒業すると、中学、高校と道を同じくする。

義人は優希の両親にも気に入られ、同じように義人の両親も優希

を気に入り、互いの家に泊まったことも何度もあった。現在はさすがにそんなことはしないが、家に上がってお茶をご馳走になることもザラである。

優希は義人に感化されたかのように明るい性格になり、人見知りも次第になくなっていった。

そして、時間の経過に比例するかのように義人への依存が強くなっていったことは当の本人しか知らず、彼女にとっては現在進行形での初恋である。

だが、それは初恋というにはあまりにも強すぎる感情だった。好きという感情を飛び越え、愛情すら抱いていたかもしれない。

幼い故の友愛ではなく、思春期に起こりがちな勘違いでもなく、愛情と依存心が混ざり合った感情。ひどく一途なその感情は、妄信とすら呼べたかもしれない。

義人が楽しいことは優希にとっても楽しく、義人にとってつまらないことは優希にとってもつまらない。

義人が言うことならば何でも信じるし、義人のすることならば何でも喜んで許容する。義人の困ることはしないし、困らせるものがいたら容赦はしない。

義人に望まれるなら、例えどんなことでもやってみせる。

長年かけて育まれた歪んだ感情は優希の奥深くに根付き、本来他人の機微に聡い義人でも緩やかすぎるその変化に気づくことはできなかった。

義人が愛情や慕情などの方向にだけはとことん鈍かったのも原因だろう。もっとも、そのおかげで今まで平和に過ごせてこれたと言っても過言ではないのだが。

優希とて、何度か思いを告げようとしたことがある。しかし、告げれば義人は困った顔をして悩むに違いない。もしかしたら即決で返事をくれるかもしれないが、本気で悩むのが目に見えていた。

そして、優希は自分の言葉で義人を困らせることが出来ず、今も幼馴染みとして日々を送っていたわけだが、ここで変化が訪れた。

そう、異世界への召喚である。
志信というおまけもついていたのだが、義人にとって志信は大事な親友。ならば、例え優希にとって苦手なタイプの人間でも許容する。自分とは違って荒事にも向いているし、義人を支えられるならその存在は有益だ。
この世界でなら、遠巻きに義人を眺めて騒いでいた女子連中もいない。義人と親しくするなと圧力をかけられることもなく、思う存分アプローチできる。そう、思った。
だがしかし、突然王様という馬鹿げた事態にもかかわらず、義人が楽しそうだったために過度のアプローチは控えることとなる。
今も義人はカグラに手伝ってもらい、政務をこなしているだろう。義人とカグラが二人で一緒にいるというのは少々癪だが、義人は王でカグラは臣下だ。その関係が発展することはないだろう。それが理解できているから、優希は義人の元を離れていられる。
義人が今の状況を楽しんでいるのなら、優希はその邪魔ができない。
だから、自分に出来ることで義人を支えることにした。

義人付きのメイドであるサクラと共に、優希はいくつかの布を前にしていた。
王家御用達の服飾製作担当の者もいるにはいたが、義人の指示は『制服じゃなくても良い。いつも着ていたような服を作ってほしい』というものである。この世界の人間はどんな服かわからず、まずは優希が型紙を作ることになった。
この世界の布地は現代の布地と比べて、まったく化学物質が使われていない手織りの布である。優希はそれを手に取り、表面を撫でるように触れた。

「うん、良い生地。これなら義人ちゃんの気に入る洋服が作れるかなー」

惜しむらくはミシンがないことだが、全て手で縫ったほうが義人は喜んでくれる気がする。優希は早速定規を使って、鼻歌を歌いながら型紙に線を引き始めた。それを見たサクラが慌てて口を開く。

「そ、そういえばヨシト様の体の寸法を測ってませんでした……すぐに測ってきます！」

「あ、別に良いよ。わたし知ってるし」

事も無げに告げ、さらさらと紙に筆を走らせる。迷いなく線を引いていく優希に、サクラは僅かに首をかしげた。

「ほ、本当ですか？」

「うん。身長に体重、肩幅や胴回り、足の長さもばっちり。中学生の時と違って、最近は成長が緩やかだから誤差はほとんどないはずだよ」

顔を上げた優希が笑顔で告げる。

サクラとしては何故知っているのかが聞きたかったのだが、義人と優希が親しい間柄ということがわかっているのでそのおかげだろうと納得する。

そうやってサクラが妙な感心を抱いていると、優希の腕が止まった。

「これで良し。あとは縫い方と細かいことを書いてー……義人ちゃんは落ち着いた色の方が好きだから色は派手じゃないやつ……あ、窮屈な服は嫌いだから少し余裕を見て作ったほうがいいかな。あと、よく動くからなるべく頑丈に、と」

完成ー。と嬉しそうな声をあげ、型紙を広げる。それを覗き込ん

だ服飾担当のケーリスという女性が感心したように頷いた。

「すごいですね……これだけわかりやすく書いていただければ、すぐにでも作ることができますよ」

「わたしも作るからね。あ、藤倉君の服はお願い。この型紙より少し大きめに作れば大丈夫だと思うから、多分」

多分、というところに義人との扱いの差を感じたケーリスだが、王とその客人の差だろうと納得する。本当はまったく違うのだが、それは気づかないほうが幸せだ。

早速テキパキと動き始めるケーリス達と、それを見回りながらアドバイスをする優希。

ケーリス達は流石本職というべきか、その手際は早い上に正確だ。優希も時折混じって形やデザインなどを整えていく。

そうして、優希は日が傾くまで服作りに没頭していた。

第十四話：滝峰義人

幼い頃から無自覚に友達を作るのが上手で、人見知りもせず、学校などの新しいクラスでも短い期間でクラスの中心になっていたことなどザラだった。

もっとも本人にそんな気はサラサラなく、ただ自分の好きなように動いていたらそうなっていただけだ。

頭を働かせるのは好きだが、将来使うことのなさそうな知識を学ぶ勉強は嫌いで、常に中の中から下の上ほどの成績を行き来していた。そのくせ役に立つ可能性がある雑学は好み、その手のテレビ番組に目がない。

運動神経は高く、一部の例外を除いてスポーツで負けることはなかった。一部の例外に藤倉志信という名前が含まれているのだが、ここでは割愛することとする。

他人の感情の機微には聡いくせに、自分に向けられる好意の類にはとことん鈍かった。いや、無頓着と言い換えても良かったかもしれない。

下駄箱に入っていたラブレターに宛名がなかったため、入れ間違いだろうと隣の下駄箱に突っ込んでそのまま帰ったことは本人の知らないところで語り草になっていたりする。その話を聞いた優希が義人ちゃんらしいと笑っていたらしいのだが、それもまた割愛させていただく。

また、曲がったことは嫌い、いじめや不正、差別をする者に対してよくちょっかいを出していた。それらを目撃すれば潰そうと首を突っ込み、解決することもあれば更なる問題に発展したこともある。

そこで再び志信の名前が挙がったりするのだが、以下略。いずれ語る機会もあるだろう。

それでも嫌われないのは、分け隔てなく誰とでも接していたからか。それとも首を突っ込んだ結果が全て最終的には上手い方向に転

んだからか、わからない。
ただ、首を突っ込む理由がその人のためではなく、『自分が気に入らないから』ということを知っているのは優希くらいなものだ。だが、必要悪は気に入らなくても許容する。清濁併せ呑む側面が義人にあったことも嫌われなかった理由の一つかもしれない。

そして、そんな滝峰義人は今――屍と化していた。

目の前にうず高く詰まれた書類の山を前についに撃沈。力尽き、真っ白になって机に倒れ伏している。

「すまん、優希、志信……俺は元の世界に戻れそうにない。俺が死んだら静かな場所にひっそりと埋めてくれ……」

筆と一緒にカグラに渡された王印を放り出し、義人は疲れを込めて呟く。

「何言ってるんですか、ヨシト様。ほら、まだまだたくさんありますよ？」

そんな義人に書類を押し付けるカグラ。その表情が爽やかな笑顔ということに、義人は軽い殺意を覚える。

「カグラ、一つ言わせてくれ……」
「はい？　なんですか？」

小首をかしげるカグラに、義人は大きく息を吸い込む。

「多すぎだろォーーーー！！」

叫び、書類の山を一山叩く。そして、書類が崩れて紙の雪崩に飲み込まれた。

「ぎゃあああああ！　重っ！　てかやっぱ量多すぎ！　過労死しますってマジで！」

紙の海でバサバサとクロールしつつ、切実に訴える。

駄々っ子のように全身で訴えるあたり、イイ感じにテンパってきたらしい。

そんな義人に苦笑しつつ、カグラが崩れた書類に向けて手を振った。すると一陣の風が吹き、書類を集めて再び机の上に乗せる。

「前王の死後十年間、臣下で決めることができるものは決めました。しかし、王にしか決められないこともあり、その結果がこの書類の山です。本当はこの五倍くらいあったんですけどね？」

「五倍て……でも、それは十年間でやったんだろ？　これって一日二日で終わる量じゃないぞ」

「一ヶ月もあれば終わるんじゃないでしょうか？」

「すっごい不思議そうな顔で言わないで！？　それ絶対適当だろ！？」

「一ヶ月より早くなるか、それとも遅くなるかはヨシト様次第ですよ。王印を押すだけのものもあれば、各大臣や文官武官と協議して決めるものもあります。休みなしで行えば二週間もかからないと思いますよ？」

嘘ではなく、本当に休みなしならば二週間もあれば終わるだろう。もちろん、休みなしというのは寝ないという意味だ。しかも、終わるのは今までの分で、これから発生する問題も片付けていかなくて

はならない。

「……過労死して死後五十年今のままにしちまうぞ？」

「大丈夫です。ちゃんと途中で魔法を使って回復させますから」

「なんて生殺し！？　ていうかそんなことで魔法を使うより、早く魔力を回復して俺達を元の世界に返してくれよ！」

「あ、さっきの書類を集めるために使った風の魔法で魔力を使い切っちゃいました」

「っておーい！？　早く回復してください！」

昨日よりも大分くだけてきたカグラと会話のキャッチボールをこなしつつ、王印を押すだけの書類を片付けていく。

「というかですね、王印を押すだけなら誰でもできるっしょ！？」

「いえ、実は王印も王剣と一緒で魔法が施してありまして……」

そう言いつつカグラが王印を持ち、書類に押し付ける。そして王印をどけてみるが、そこには何の印も打たれていない。

「この通り、王以外の者が押しても押印されないんです。王印だけに」

「笑えねぇ！？　他人が聞いたら笑えるかもしれないけど、何千何万枚と押さなきゃいけない俺にとってはまったく笑えねぇ！」

どんな魔法が働いているのかわからないが、朱肉がなくても押印できるこの王印。まさかそんな高度な偽造防止機構が組み込まれているとは思わなんだ。

義人はひたすら王印で押印しながら、愚痴るように口を開く。

「というか、この国のことなんだからやっぱりこの国の人間が決め

るべきだとボクは思うんですよー」
「それは説明しましたよ？　それが建国以来の」
「だからそれ洗脳だって。例えば選挙で決めるとかさ、カグラかアルフレッドが王を務めるとかさ」
「それでは民が従いません。この国の王は他国の王と違い、異世界の人間であり、その王が持つ異世界の知識の恩恵を受けて生活できていると教えられているのですから」
「それ、なんて選民思想？」

とりあえず突っ込みを入れるが、押印する手は止まらない。
自分は他国の人間とは違うということを生まれてからずっと刷り込み、不満や苦労があってもある程度緩和できる。中途半端に取り入れられた異世界の知識はこの国の様式を独自なものへと変え、それがまた市民にとって『他国とは違う』と思わせる要因になったのだろう。
だが、この召喚国主制には重大な欠点がある。

「異世界の知識の恩恵を受けるって言ってもさ、もう無理じゃないか？　こっちの技術力じゃ再現するのは無理だろうし」

それは、技術力の差である。
刀や日本語などはある程度時間をかければこちらでも使えるが、車を作れと言われても作ることはできない。仮に材料があったとしても、専門知識がなくてはどうやっても作れない。頑張れば自転車くらいは作れそうだが、道が綺麗に舗装されていないこの世界では作っても意味がないだろう。
その上、『異世界の知識でこの国を発展させる』ために、『最も王に相応しい者を召喚する』というのが義人の頭に引っかかっていた。

「……まあ、いいや」

今はまだ情報が揃っていない。そして、考え事をするには適した状況ではない。

さすがに押印しながら考えごとをするのは無理だ。

だから今は、聞ける情報を聞いておこうと義人が口を開く。

「そういえば、なんでこの国の公用語が日本語なんだ？　いや、理由は予想がついてるんだけどさ」

そう尋ねると、カグラは苦笑する。

「多分、予想の通りだと思います。初代の王を召喚した時、最初に訪れた難関は言葉の壁でした。この世界に存在する国の大半は世界共通の言葉を使っているのですが、肝心の王が何を言っているかわからず、こちらが何を言っているかも理解してもらえません。それでは駄目だと、身振り手振りでお互いのことを知り、なんとか王の言葉……ニホンゴを理解できるようになったそうです」

「へぇー……そりゃ大変だっただろうな。そんで、公用語や書類にまで日本語を使っているのは召喚される王のためであり、他国の使う言葉とは違う言葉を使っているということを市民に浸透させ、他国の民とは違って自分達は特別であると思わせるためか」

事も無げに正鵠を射る義人に、カグラは開いた口を閉口して表情を笑顔に変えた。

「……やはり、ヨシト様を召喚して正解でした」

「いきなりなんすか。褒めても……褒めてるのか？」

「褒めていますよ。そして、嬉しいです。この国の現状は厳しく、

仮に前王が没したのが二十年前だったらこの国は崩壊していたでしょう。ですが、ヨシト様がこの国の王ならば今まで以上の発展があるとわたしは思います」

心底嬉しそうな笑顔を浮かべるカグラに、義人は頬を掻いて目を逸らす。

「買い被りだっての」

「買い被りですか……ミーファも同じようなことを言いそうですね。ですが、少なくともわたしは買い被りではないと思っていますよ？」

しばし沈黙が下り、紙に押印する音だけが響く。

公私を分けているのか、ミーファはちゃん付けではない。

義人はそんなどうでも良いことを気にしながら、やけに嬉しそうな笑顔で見てくるカグラの興味を逸らせないかなー、と考えたところで先程のカグラの発言に危険な部分があったことを思い出した。

「そういえば、今しがた仮に前王が二十年前に没していたらこの国は崩壊していたっていってたけどさ、それってどういう意味で？」

そう尋ねると、カグラは笑顔を引っ込めて真剣な表情を作る。

「言葉通りの意味で、崩壊です。財政が破綻し、国としての形を取れなくなっていたでしょう。内紛が起き、国の人間同士で争うことになったかもしれません」

「財政が破綻して、ねえ……昨日からこの国が財政的に危険だって聞いてたけど、この国にはどれくらいの国家予算があるんだ？」

義人の言葉に口頭で答えようとしたカグラは、それを止めて書類

の山に手を突っ込む。そして数枚の紙を取り出すと、義人の前に並べた。

「細かい数字などはここに記載されています。一度で覚えることができる量ではないので、この紙に書かれていることを追々覚えてください。まず、この国の全予算は約十五億ネカです」

十五億と言えば大金に聞こえるが、国を運営するには明らかに足りない。義人は激しい絶望感に包まれつつ、手元の紙に目を落とす。

「えーっと……約七割は税金で、残りは輸出物による収益……なんてアバウトな。輸出物は鉄？　それと他の鉱山資源が少々ねぇ……」

しばし眺めていたが、途中でパサリ、と紙を放って義人は笑顔を浮かべた。

「うん、無理。財政破綻まっしぐら」

「多少は良質な鉄が採れるので、それを軸に輸出を行っています。あとは金と銀、鉱石などを輸出しています」

義人の発言を華麗にスルーするカグラ。義人はその流しっぷりに思わず拍手を送りたくなったが、カグラの『真面目にやってください』という視線に負けて真面目な表情を作る。

「輸出国は？」

「主にレンシア国です。レンシア国はカーリア国と比較的友好な関係ですので、交易を行うことができています」

「良い国か？」

「国王のコルテア＝ハーネルン王の下、兵や市民が一致団結した非

常に良い国です。また、コルテア王は賢帝と呼ばれており、市民のことを考えた善政が評判ですね。以前アルフレッド様と一緒にお会いしたことがありますが、コルテア王自身も気さくな方でした」

「……俺がカーリア国の市民だったら、迷いなくそっちに国に逃げるな」

思わず呟くが、カグラは首を横に振った。

「兵や市民が一致団結するという点では、わが国も負けてはいません」

「一部を除いて、だろ？」

一部という単語に、カグラが反応して僅かに目を細める。

「どういうことですか？」

目を細めたカグラに対して、義人は机の上の書類を人差し指で叩く。

「これは俺の予想なんだけど、臣下の中に税金を横領してる奴が何人かいるだろ？　そいつらがいる限り、一致団結とは言えないさ」

「……何故、横領している者がいると？」

「んー、勘かな」

勘、とは言ってみても、カグラには義人が確信に近いものを抱いているように見える。そして、横領をしている者がいるという確信を抱いているのはカグラも一緒だ。

「勘で横領されていると判断されては、その疑いをかけられた者が困りますよ？　それに、お金を管理している文官達にお金の流れを

掲示してほしくても、王の許可がなくては無理だと何回も突っぱねられましたから」

だから、わざとおどけるように明るく釘を刺す。自分では調べる権限がない。行動を起こすのなら、慎重に動くべきだという意味を込めて。

「ははは、そうか。じゃあ、それらしい証拠を集めてからにしよう」

それを聞いた義人は一度笑った後、口の端を吊り上げて命じる。

「十年前前後から現在に至るまでの国家予算の使い道を調べることを許可する。必要ならそれ以前も調べてくれ。文官が使い道の提示を渋るなら、それだけで怪しいしな。もし不透明な金の使い方をしていることがわかったら、逐一報告してくれ」

「はい。わかりました」

義人の言葉に満足な笑みを返し、カグラは執務室を後にした。

第十五話：王様業務、初日終了

日も山際へと差し掛かり、徐々に夜の帳が下り始めた頃。相変わらず王印を押していた義人は色々と限界を迎えていた。

「あだだだ！　ちょ、腕つった！？」

押印するだけの単純作業だったが、それがずっと続けばきつい。義人はこった肩をぐるりと回し、思いっきり背伸びをする。すると、執務室の扉がノックされて外から守衛の兵士の声が響く。

「ヨシト王！　シノブ様がお目通りを願っていますがどうされますか？」

「ああ、うん。通してくれ。というか、志信や優希はそのまま通していいから」

「はっ！」

兵士の返事が聞こえ、次いで扉が開いて志信が入ってくる。

「おっす、志信。いやー、王様って腕が疲れる仕事だったんだな。って、どうしたんだ？　なんか、ずいぶんと落胆してるけど」

冗談混じりに話しかけてみるが、志信の表情がいつもと違う。付き合いの浅い者ならばいつもの仏頂面でまったく気づけなかっただろうが、義人にとっては当たり前のように表情が読み取れた。

志信は言うか言うまいか僅かに迷い、口を開く。

「義人の言う通り、この国の兵の様子を見てきた。城の裏手にいない部隊もいたが、少し遠くで演習をしていると聞いてそこも見てき

た……が」

これまた珍しいことに、志信は苦悩の表情を浮かべ、そんな志信に義人は嫌な予感がした。

「も、もしかして……駄目だったか？」

「騎馬隊と魔法剣士隊はまだ良い。魔法隊は魔法の威力の基準がわからんから除外する。だが、歩兵隊と弓兵隊の練度が低すぎる。アレでは、もし他国に攻め込まれたら数日で負けるだろう」

「……マジで？」

「ああ、本当だ」

志信が嘘を吐く理由がなく、義人が志信を疑うこともない。義人は何度か宙に視線を巡らせると、自身を鼓舞するかのように口を開いた。

「でも、騎馬隊と魔法剣士隊は良かったんだろ？」

多分に期待を込めた問い。志信はその質問が来ることを予想していたのか、首を横に振る。

「歩兵隊などに比べれば、な。戦力として考えるなら魔法剣士隊。兵の練度だけで見るなら騎馬隊が上だが、他国の兵士がどれ程のものかわからん。それに、その二つの隊の中にも実戦を知らない者が何人もいるように見えた」

「ということは……」

「この国の軍は弱小、と言えるだろうな」

歯に衣着せぬ志信に、義人は頬が引きつるのを感じた。さらに、志信は追撃を加える。

「それと、魔法剣士隊のミーファだが……あれは少々拙いな」
「拙い？」
「ああ。おそらく、今まで負けという負けを経験していないのだろう。多少の過信が見える」
「過信か。どれくらい？」
「ある程度の自信を持つことは必要だが、あれはいきすぎだろう。騎馬隊の隊長は中々出来た人物のようだが」
義人はため息を吐く。
「財政は破綻寸前。臣下の中には税金を横領している奴がいる可能性が高い。その上、兵は弱く、それをまとめる隊長は過信気味ときたか……カグラ、早く魔力を回復してくれないかなー」
「だが、今すぐ元の世界に戻れたとしてもこの国の人間を見捨てることになる。義人はそれで良いのか？」
志信の言葉に、義人は苦笑する。
「自分や友達の身の安全と、見知らぬこの国の人間を秤にかければ、どっちに傾くかは簡単なことだろ？」
苦笑する義人に、今度は志信が薄く笑う。
「『秤を傾かせずに全てを良い方向に持っていこうとする』。それが滝峰義人という人間だ。まして、カグラが魔力を回復するまで時間がかかる。その間、手をこまねいているお前ではあるまい」
「買い被りだよ。答えは前者に傾くさ」
そう言って義人は肩を竦めるが、志信はそれが嘘だとわかってい

る。
義人はこの国を動かせる立場にあり、実際に動かそうとするだろう。もし王という権力のある立場でなかったら前者の考えだっただろうが、それでも出来る範囲で何とかしようとしたに違いない。
そんな真っ直ぐな信頼に、義人は参ったと言わんばかりに両手を上げた。

「はいはい、どうせ俺の考えてることなんて簡単ですよー。期間限定で、この国を良くしてみようかと思ってますよー。シミュレーションゲームみたいで面白そうとかちょっぴり思ってますよー」

投げやりに答えつつ、王印を机に置く。そして、椅子に背を預けて軽く息を吐いた。

「正直さ、この国が戦争とかやってたらすぐに逃げ出したよ。俺の命令で人が大勢死ぬなんて状況だったら、迷わず優希と志信を連れてこの国から逃げただろうさ。だけど、幸いこの国は平和……とも言えないか。でも、少なくとも戦争中ってわけじゃない。そして、俺の行動次第ではこの国の人間が幸せになれる。そしてこの国の現状は気に入らない。だったら何を迷うよ？」

椅子から身を起こし、義人は不敵に笑う。

「こんな体験、したくても出来ることじゃねえ。元の世界に戻るまで、この国をもっと良い国にしてやるさ」

魔法が使えて、魔物と戦う世界。日常からかけ離れた、非日常。
それは、子供なら誰しも空想に思い描いたこと。そんな世界で魔物相手に戦い、旅をする。
そして、それが絵空事に過ぎないことは誰でも気づき、歳を取れ

ば一笑に付すだろう。
だがその絵空事が実現したなら？
冒険は出来そうになく、魔物だけでなく人間と戦う可能性もある。
だが、それでも王という非日常な日常だ。
義人という人間は、それを簡単に投げ出せるほど童心を捨てていなかった。

「まあ、このままだと戦争とかで人が死ぬ前に、飢饉でも起きて多くの人が死にそうだけどな。親父やお袋達は心配してるだろうけど……って、それが一番のネックか。向こうの世界に戻ったら何て説明するかなー」

今度は困った顔になり、真剣に悩む義人。突然自分の子供がいなくなれば、家は大騒ぎだろう。せめて、無事だということでも伝えられればいいのだが。

「んー……魔法で手紙だけでも送ることってできないかねぇ？　人を元の世界に送るよりも楽だと思うけど」
「それはカグラにでも聞いてみなければわかるまい。俺もカグラに聞きたいことがある」
「お、スリーサイズ？」
「何でも、俺達には『強化』という魔法がかかっているらしい。身体能力を向上させる魔法らしいのだが、何故かかっているかわからん」
「カグラって優希よりはスタイル良さそうだよな」
「後々何か悪影響が起きては拙い。早急に聞いておくべきだ」
「でも、多分ミーファのほうがスタイル良いか」
「魔法のことについて、さらに深く聞く必要もあるだろう」
「そういやサクラって何歳だろ？　ちょっと幼く見えるけど」
「戦闘において、どれほど魔法に有利性があるのかも知りたい」

「全部スルーされた!?　ちくしょう!　やるじゃないか!」

もちろん義人も志信もお互いの話は全部聞いている。だが、全てスルーされてしまっては寒いどころかイタい。

今の空気を払拭するため、ごほん、と一度咳払いする。

「しかし、魔法がかかっているからいつもより体が軽く感じたんだな。今なら陸上競技の世界記録を簡単に塗り替えられそうだ」

「義人、女性にスリーサイズを聞くのはいささか以上に失礼だと思うが……」

「今更!?　このタイミングで混ぜっ返しますか!?」

今更咎めるような志信に、義人は突っ込みを入れて笑い声を上げた。すると、その笑いを遮るように執務室の扉が開く。

「義人ちゃん、洋服できたよー。って、どうしてそんなに笑ってるの?」

両手に服を抱えた優希が、不思議そうな顔で聞いてくる。

義人は『いやいや、なんでもない』と言おうとして、

「スリーサイズを」

「待て待て待て!　ちょっと待ちましょう志信さん!　それを言ったら血が流れるって!　主に俺が!?」

慌てて志信の台詞を大声でかき消した。

優希が持ってきた服を広げると、義人は感嘆の息を漏らす。

「おお……中々良いじゃないか」

良い布を使っているのか、非常に肌触りが良い。その上頑丈な縫い方をしているので、多少激しい動きをしても大丈夫だろう。

「そうでしょ？　頑張って作ったんだから」

褒めて褒めて、と表情で語る優希。もしも尻尾が生えていたら、ブンブンと大きく振っているだろう。

志信も服を手に取り、軽く引っ張って強度を確かめている。

「これなら鍛錬の際に着ていても問題なさそうだな」

「あ、藤倉君の服はケーリスさん……服飾担当の人が作ってくれたんだよ」

「そうか、会ったら礼を言わねばな」

さすがに制服は作らなかったが、下着にTシャツに羽織るタイプの上着、それとジーパンらしきものがある。色は黒や紺など、落ち着いたものが多い。

「あれ？　優希の服は？」

そこで洋服が全て男物であることに気づいた義人が尋ねると、優希は小首を傾げる。

「スカートとか下着とかを少し作ったけど……見たい？　義人ちゃんが見たいなら持ってくるよ？」

「いや、いい。てか、そこは恥らおうぜ？」

優希なりの冗談だと受け取った義人は軽く突っ込みを返し、服に使われた布を軽く撫でる。

「こういった布って、高いのか？」

「質によると思うよ？　これは義人ちゃんが着る服だから良い布を使ってるけど、普通の人が着る服の布はそんなに高くないみたい」

「ふーん。産業はそこまで悪くないのか？　いや、油断は禁物だな」

国に関する情報が書かれた紙を手に取り、ブツブツと呟く。

「他国の情報があれば比較できてわかりやすいんだけどな……カグラかアルフレッドに聞いてみるか。資料くらいならありそうだし」

と、そこまで言ったところで義人はあることに気づいた。

「そう言えばこの国、いや、この世界って情報とかはどうやって調べてるんだろうな」

義人がそう言うと、優希と志信は僅かに考え込んで口を開く。

「魔法？」

「やはり、間諜ではないか？」

情報というのは時として金よりも価値があるものであり、国を運営する上では必要不可欠なものだと言える。最低でも国内における情報網がしっかりしていなければ、有事の際非常に危険だろう。

さすがにこれはあとで聞くという気にはなれず、守衛の兵士にカグラを呼んできてもらった。

「情報、ですか？　それはその……」

呼ばれたカグラは、質問に対して僅かに目を逸らす。そんなカグラの様子に、義人は断定口調で頷いた。

「これも駄目らしい」

「はい……わが国の情報機関では、国内の情報を得るので精一杯です。他国の情報となると、そこまで得ることができません。この国は攻め込まれることがないということで、前王が国内の情報を集めるだけに止めていましたので」

「ちなみに、得られた情報は信用できるものなのか？」

肩身が狭そうなカグラに、今度は志信が突っ込みを入れる。

「……多分」

「よーし。とりあえず、前王の墓を壊しに行こうぜ」

はっはっは、と笑う義人だが、目はまったく笑っていなかった。どうやらこのカーリア国、予想していたよりもさらに危険な状態らしい。

「まずは情報網を万全にしないとな……でも、それをどうにかするには金がいる、と」

何をするにも先立つものが必要なのは、どこの世界でも変わらない。

「そういえばカグラ、『強化』という魔法を知っているか？」

そんな義人の横で、志信がカグラへと質問をぶつける。

「『強化』ですか？　自分、もしくは他者の身体能力を向上させる魔法です。自身の身体能力を向上させる『強化』は、魔法の中では基礎の基礎と呼べるぐらいに難易度が低い魔法ですね。他人に『強化』をかけるのなら中級魔法に分類されます。他人に『強化』をかけられるようになったら一流の魔法使いと言えますね」
「それが俺たちにかかっているらしいのだが」
そう言われ、カグラが不思議そうに首を傾げた。
「かかってますけど……言ってませんでしたっけ？」
「言ってないっすよ！？」
さらりとぼけるカグラに、義人が慌てて突っ込みを入れる。カグラはそうだった、と手を合わせ、申し訳なさそうに頭を下げる。
「正確には『強化』とは違うのですが、向こうの世界からこちらの世界に来る際必ず起こる現象らしいです。歴代の王も同じ状態だったとの記録もあります。召喚の術を使った際に、対象者に強制的に魔力が送り込まれて『強化』と同じ状態になると教えられています。それも、かなり長い間効果が続くみたいですよ？」
「長いって、どのくらい？」
「記録によると大体十年ってところですね。今回は三人召喚したので、三年ぐらい効果が続くのではないでしょうか？」
「へぇー、便利だな。優希とかは非常に助かるんじゃないか？」
「そうだねー。わたしって、よく転ぶし」
えへへ、と笑う優希。
そのことに義人は笑いを返すと、ひとまず解散することにした。

第十六話：商人ゴルゾー

書類の山に溺れること三日間。

書類に押印することに義人は飽き始めていた。飽きるのが早いと見るか、それとも頑張ったと見るかは個人によるだろう。

何せ朝から晩までずっと押印するだけだ。途中に休憩を挟むとはいえ、飽きるのは仕方ないと言える。

執務室の窓枠に手をかけ、外を眺めて不気味に笑う義人はポツリと呟く。

「俺は鳥になる」

そう言うなり、窓を開け放った。そして窓から飛び出そうとして、サクラが慌ててしがみつく。

「よ、ヨシト様！　ここは二階ですよ！？　飛び降りたら怪我しましゅ！」

慌てたのか、微妙に噛むサクラ。

二階と言っても、そこは日本とは違う建築様式だ。地面までの高さは五メートル以上あり、飛び降りれば足が折れるかもしれない。

「大丈夫。『強化』ってやつで身体能力上がってるらしいから。それにほら、俺鳥だし」

フフフ、と笑う。少々目が虚ろなあたり、精神的に危険なようだ。

「あー、今なら頭から落ちても無事に着地できる気がする。できる？　うん、できるな。よし逝こう」

微妙に漢字が違ったが、義人は気にしない。もちろん、頭から落ちる気はサラサラない。

「だーめーでーす！」

必死に支えるサクラに義人は心が癒される気がした。ストレスが溜まっては、こうやってサクラに癒されている気がする。

そうやって職務放棄をしていると、執務室の扉がノックされる。その叩き方からカグラだと看破した義人は、すぐさま机に戻って真面目に仕事をしているポーズを取る。

「どうぞ」

返事をすると、予想通りカグラだった。カグラは扉を開けると中に入ってきて、開いている窓とその傍で疲れたように座り込んでいるサクラを見てニコリと微笑む。

「遊んでましたね？」

「イエ、マサカ」

片言で返す。ペッタンペッタンと押印しながら目を逸らし、義人は空いてる手で湯飲みをつかんでお茶を飲む。そして、落ち着いた表情で窓の外へと目を向けた。

「実に良い天気だ……こんな日は、外で思いっきり走り回りたいと思わないかね？」

「曇っていますが？」

「実に良い天気だ……こんな日は、外で思いっきり走り回りたいと思わないかね？」

「繰り返して言っても駄目です」

義人は外からカグラに目を向けると、微笑んで口を開く。

「人間、心にゆとりがあるべきだと思わないか？」

「それではヨシト様、これから謁見がありますので謁見の間にいらしてください」

「無視かよ」

流されたことを寂しく思いつつ、サクラが淹れなおしてくれたお茶をすする。そして、一息ついてから首をかしげた。

「謁見？」

「はい。新しい王にお目通りしたいとのことで、商人が来ています」

「商人？　どんな奴？」

「カーリア国では最も力のある商人で、ゴルゾーという方です。代々商人の家系で、歴代の王と懇意にされています。会っておいて損はないかと」

「何を売ってるんだ？」

「武器や防具に魔法具、骨董品から芸術品。馬や食料など、幅広い商売をしています」

「なるほど、それは会っておいて損はないか」

「ええ。前王も優遇していたので、ヨシト様にも己を売り込みに来たのでしょう」

「……前王が優遇していたって聞くと、ものすごい嫌な予感がする」

「大丈夫ですよ……おそらくは」

最後は小さな声だったが、もちろん義人に聞こえている。

義人は嫌だなー、と呟くと、王のマントと身に着けてなるべくゆっくり謁見の間に向かった。

義人が謁見の間に入ると、何人かの臣下が同時に膝をつく。相変わらずそれに慣れない義人は手を振ってそれを止めさせると、王座に足を進めた。その王座から離れたところには一人の男が膝をついて頭を下げている。

「商人ゴルゾーだな？」

「はい。ヨシト王におかれましてはご機嫌麗しく……」

「かしこまった挨拶は良い。とりあえず、顔を上げてくれ」

王座に座った義人がそう言うと、ゴルゾーが顔を上げた。

――商人っていうから、てっきり恰幅の良いヒゲを生やした中年のおっさんだと思ったのは俺の偏見かな？

内心で呟くが、ゴルゾーの容姿はまったく違う。

歳は四十程で中年には違いないだろうが、体は決してたるんでなどいない。むしろ鍛えられて引き締まっており、商人というよりは兵士と言ったほうが余程納得できる。雰囲気はやや鋭く、やり手の商人という雰囲気が漂っていた。

そして、義人が最も目に付いたのはゴルゾーの目だ。

商人らしくない鷹のような鋭い目つき。少し欲に曇っているが、商人という職業に誇りを持っている目だった。そして、義人を探るような目でもある。

「私ゴルゾーと申します。ヨシト王が新しい王になられたということで、ご挨拶に伺いました、はい。つきましては、お近づきの印と私のほうで扱っております珍品などを見ていただきたく持ってきた

次第です、はい」

しかし、そんな雰囲気は一瞬後に霧散した。卑屈な笑いを浮かべ、ゴルゾーは腰の低い態度を取る。義人はその態度におや、と内心で首を傾げるが、ひとまず観察ことにした。

「わざわざすまないな。珍品というのは興味が惹かれる。見せてもらえるか？」

義人がそう言うと、台車に乗っていくつかの商品が運ばれてくる。ゴルゾーは商品を一つ取ると、解説を始めた。

「これは『飛竜の翼』という魔法具です。上級の魔物である飛竜の翼が原材料に使われており、自分が思い描いた場所へと飛ばしてくれる魔法具です、はい」

見た目は羽箒みたいなものだが、色は黄金に輝いていて艶がある。義人は説明の内容に非常に気になるところがあり、すぐさま質問した。

「自分が思い描いた場所っていうのは、違う世界でも移動できるのか？」

「それは無理です、はい。物理的に飛ぶので、そういった召喚とは違います、はい」

「そうか……ちなみにいくらだ？」

肩を落としつつ、一応聞いてみる。

「五十万ネカでございます、はい」

「……高いな」

「貴重な飛竜の翼を使った魔法具ですので、値段もそれ相応になります、はい」

義人自身で自由にできる金はそんなに多くない。浮いた食費の分や王個人が使える金があるが、使うともしれない物を買う余裕はなかった。

そんな義人に、買う気はないと悟ったゴルゾーは次の商品を取り出す。

「次は稀少鉱石である『魔石』です、はい。これは身に着けている者の魔力量や魔力回復量を増幅させたり、使った魔法の威力を上げることができます、はい。無限に使えるというわけではないですが、色が透明になるまでは使用することができます、はい」

そう言って掲げたのは拳大の石だ。色は濃い紫で、見る者を引きつけるような煌きがある。

「カグラ、今の話は本当か？」

「はい。しかもあれほど色が濃くて大きな『魔石』は見たことがありません。おそらく百万ネカ以上するかと」

カグラの言葉に、ゴルゾーが頷く。

「ご明察です、はい。こちらの『魔石』は百万ネカになります、はい」

「やっぱり高いな。次の品を見せてくれ」

「はい、次はこれ『お姫様の殺人人形』です、はい。持たせた人物の姿形や能力を真似ることができる人形です、はい」

そう言って義人に見せたのは、小さな木作りの人形だ。だが、義

人にはもっと気になることがある。

「『お姫様の殺人人形』？　なんだその物騒な名前は……」

「名前の由来は少し長くなりますが、よろしいですか？」

「あ、うん。頼む」

名前の凶悪さに惹かれ、義人は頷く。

「その昔、この人形を作った者がおりまして。その者は姫の身でありながら一流の魔法使いで、魔法人形を作ることを得意としていました。しかし友人もおらず寂しい身の上だったため、その代わりに数十体の人形を作られました。その人形は他人の姿形を真似ることができ、感情すら持つ人形でした。姫はその人形達を友人と思い、生活を送っていたそうです。しかし、その内の一体が姫を殺し、いつの間にかすり替わっていた、という話でございます。そのため、『お姫の殺人人形』と呼ばれております、はい」

「なんというホラー……ちなみに、いくらだ？」

「一千万ネカでございます」

「桁が違うじゃねーか！？」

「こちらの人形、武芸達者な者の姿を真似させれば簡単に熟練の将になり、魔法が得意な者の姿を真似させれば優れた魔法使いにもなります、はい」

「むぅ、そう言われるとひどく魅力的だな」

「はい、使い方は簡単で、姿を真似させたい者を頭の中で鮮明にイメージするだけです。そしてこの人形ならば、使用者の言うことならばなんでも聞くので夜の世話なども可能です、はい」

ゴルゾーの声を潜めた発言に、義人は思わず噴き出した。

「よ、夜の世話っておまっ！？」

「そのままの意味でございます、はい。高貴な方の中には、普通の方法では物足りないという方がいらっしゃいます。しかし、この人形ならば何をしてもそうそう壊れることはありませんし、様々な人の姿形を真似ることができるので飽きないそうです、はい」
「なんというアブノーマル。いや、一男子としてはちょっと惹かれるけど」

冗談混じりに言ってみるが、一千万ネカなど払えるはずがない。しかし、義人の発言を聞いたゴルゾーは下卑た笑みを浮かべる。

「ヨシト王もお若いですなぁ……そんなヨシト王に、お近づきの印をお持ちいたしました」
「あ、そう言えばそんなことも言ってたな。お姫さんの人形がインパクトありすぎて忘れてたわ」
「では、入ってきなさい」

ゴルゾーがそう言うと、数人の女性が入ってくる。女性といっても歳は若く、まだ少女と形容したほうが適切だろう。そして、少女達は一様に怯えた表情を浮かべていた。

「それではヨシト王、私からのお近づきの印でございます、はい」

そんな少女達を気に留めず、堂々と言い放つゴルゾー。

「……何も持ってないけど？」
頭の隅では理解しつつ、それでもとぼけて言ってみる。すると、ゴルゾーは楽しげに笑った。

「お若いと色々と困りましょう？　前王も“その方面”はお好きでありましたから、はい。お近づきの印ですので、お勘定はいりませ

ん。大した額でもないですし、はい」

数えてみれば少女が六人。一番年上で義人と同じぐらいか、それよりも一つ下くらいだろう。一番年下は、サクラよりも幼く見える。

「まさか、ゴルゾーの娘なんてオチはないだろうな？」

「いえいえまさか。これらの娘は借金の形にされた者達です。借金が返ってくるあてはありませんので、ヨシト王の好きになさってけっこうです、はい。愛でるもよし、嬲るもよしです、はい」

ゴルゾーの言葉に、六人の少女は一層の恐怖感を顔に浮かべた。それを見た義人は、何気ない動作で王座の肘掛を握り締める。

「そいつは豪気なことだな」

「ええ、全員生娘ですので最初はやり辛いものがあるかもしれませんが、それも楽しみの一つでしょう？」

下卑た笑みを浮かべたゴルゾーの発言を聞いた瞬間、王座の縁がミシリと音を立て、カグラが驚いて目を見開いた。

「へぇー、借金の形で娘を差し出すねぇ。ちなみに、借金っていくらぐらいなんだ？」

「六人合わせて五千ネカといったところでしょうか？」

「一人あたり千ネカもないじゃねぇか」

「はい。市民にも貧富の差はありまして、収入が非常に乏しい者も少なくないのです、はい」

「ふーん、耳が痛いな」

「これは失礼を。ですが、そういった者は生活をするために金を借り、返せないがために自分の子供を売ることもあるのです」

いつの間にかゴルゾーから卑屈な表情が消え、当初の鷹のような目で義人を見据えてくる。その目を義人は正面から見返した。

「成程、忠告……いや、諫言か。やり方が非常に気に食わないが、アンタの言いたいことはわかったよ」

吐き捨てるように言うと、ゴルゾーは再び腰が低い態度に戻る。

「一体何のことやら。さて、それでは失礼させていただきます、はい。今後とも是非ご贔屓に」

頭を下げて退出しようとするゴルゾーに、義人は言葉を投げかける。

「ゴルゾー」
「はい、なんでございましょう？」
「アンタ、“目と耳”は良いか？」

その質問に、ゴルゾーの目が僅かに細まった。

「目と耳でございますか……何分この国だけでなくあちこちに足を伸ばして商売をしておりますから、見聞は広いと自負しております、はい」
「そうか。なら、いつかこちらから呼ぶことがあるかもしれない。その時はよろしく頼む」
「はい。それでは失礼します」

もう一度頭を下げてゴルゾーが謁見の間から退出する。その際僅かに口元が笑っていたことが気に入らなかったが、義人はそれよりも目の前の問題をどうにか

することにした。

「さて、えーっと……君らは」

それはもちろん、ゴルゾーにお近づきの印として渡された六人である。六人とも肩を縮め、恐る恐る義人を見ていた。だが、その中でも一番年上に見える少女が意を決したように一歩前に出る。

「王様！　わたしが王様のお相手をいたします！　いえ、命じられればなんでもします！　例え痛いことでも我慢します！　だから、他の子達は親元に帰してあげてください！　お願いします！」

それは、必死な嘆願だった。目には涙さえ浮かべ、地面に頭をこすり付けるように頭を下げる。そのあまりの必死さに、義人は呆気に取られた後声を張り上げた。

「ま、待て待て！　それじゃあまるで俺が鬼畜な王様みたいじゃねーか！　しないっつーの！」

王座から立ち上がり、慌てて少女の顔を上げさせる。そして後ろに控えていたカグラに目を向けた。

「カグラ！　この子らに兵をつけて親元まで送ってやれ！」

「はい、わかりました」

義人の命令を受け、カグラが謁見の間から姿を消す。そして義人の言葉を聞いた少女達はポカンと口を開け、事態が理解できたのか数秒経った後頭を下げた。

「あ、ありがとうございます！」

礼を言うと、中には気が抜けて泣き始める者までいる。義人が苦笑していると、アルフレッドが歩み寄ってきた。その顔には賞賛と不満がない交ぜになった表情を貼り付けている。

「お志は立派じゃが、その子らが親元に帰っても遠くない先に同じことが起きるじゃろう。それに、その子らが戻っても食い扶持が増えて親の苦労が増えるだけじゃ。それでも、よろしいのか？」

「……そんなことわかってるさ。どうせ俺のした判断は偽善だよ。ちょっとお金を持たせようと思ってるけど、それでも問題の解決にはならない。そうだろ？」

義人の言葉にアルフレッドは頷く。そんなアルフレッドに、義人はやり切れない表情を浮かべた。

「なあ、この国にはこんな子達が大勢いるのか？」

「大勢とは言えないじゃろう。しかし、いることは確実じゃ」

「そうか……」

一度目を伏せ、顔を上げる。そこには、何かを決意したような義人の顔があった。

「お疲れ様です」

カグラは汗を拭っていたゴルゾーを見つけ、そう声をかける。すると、ゴルゾーは恭しく頭を下げた。

「これはカグラ様。お久しぶりです。直接会うのは半年振りといっ

たところですか？」

そんなゴルゾーに、カグラは先制口撃を仕掛ける。

「汗をかかれましたか？」

「はは……王座の肘掛を素手でもぎ取ろうとされた時は少々驚きました。それに、あのような口を利いては斬首されても文句は言えませんからな」

苦笑しつつゴルゾーはもう一度汗を拭った。そんなゴルゾーに、カグラはやんわりと笑いかける。

「今回の王、どう見ますか？」

カグラの問いに、ゴルゾーも顔を綻ばせる。

「若さ故か、真っ直ぐですな。その上聡い。こちらの茶番はすぐに見抜かれたようですしな。そして、この国を変えてくれそうな期待が持てます」

「ええ。貴方のおかげでより良い方向へと変えてくれるでしょう。王印を押すだけの仕事には飽きてきたみたいですが、これで身を入れて政務をしてくれると思います。それはそうと、借金の方はどうしますか？　わたしの方から払っても良いのですが」

「いえ、あの子達の借金の分はすでに私のほうで帳消しにしています。そして、あの子達をどうするかはヨシト王次第ですが、親元に帰すでしょうな」

「そうするらしく、わたしは今から兵を呼んでこなくちゃいけないんです」

「そうですか。それでは、私は失礼するとしましょう。ああ、ヨシト王には『情報を知りたければいつでもお呼びください』と伝えて

もらえますか？　もちろん料金はいただきますが」
「ふふ、わかりました」
そう言って互いに頭を下げ、カグラは歩き出す。
その顔には、若干嬉しげな表情が浮かんでいた。

第十七話：試合

義人達がカーリア国へと召喚されて早十日。

こちらの世界での生活にも多少慣れ、義人も王印を押す以外の仕事が多くなり始めていた。　ゴルゾーが挨拶に来た日以来、仕事を片付けるスピードが大幅に速くなった結果だ。

あの日以降、義人は政務を面倒だと思わず真剣に処理するようになった。

溜まりに溜まった書類の中にある、大臣や各専門分野の文官武官と協議して決定する事項などは、専門的なことはほとんどわからないためカグラの助けを借りつつ決定していく。

その際、協議する相手のことをさり気なく観察しつつ、なるべく好印象を与えるように振舞った。そのおかげで、召喚当時より少しは信頼されているだろう。

ゴルゾーに渡された少女達をその場で親元に帰したことも多少評価に繋がったらしい。

志信には自身の鍛錬も兼ねて、訓練場で武官の掌握に努めてもらっている。あまり目立たないように鍛錬をしているようだが、周りの評価はかなり高いとカグラが言っていた。

優希はサクラと共に義人の世話をしつつ、厨房に赴いては元の世界の料理知識を元に安くて美味しい料理を作ろうとしている。異世界の料理に触れることができるため、厨房の料理人の方々とも大分仲良くなっていた。

そうやって多少慣れた王様生活を送っていた今日、西の森付近の村から届けられた魔物退治に関する嘆願書についてどうしようかと悩んでいたとき、突然執務室の扉が強めにノックされた。

「よ、ヨシト王！　至急お伝えしたいことがあります！」

「ん、何だ？　志信か優希が問題でも起こしたか？」

兵士からの報告に、あの二人に限ってありえないだろうと嘆願書をどうしようかと悩み、

「はっ！　シノブ様が訓練場でミーファ隊長と試合を行うと！」

肯定の返事が返ってきたことで嘆願書が手元から滑り落ちた。

「……はぁ？」

一瞬忘我するが、すぐさま気を取り直す。

「志信とミーファが、試合？」

んー、と義人は若干悩み、首をかしげて、

「なんでよ？」

傍のお茶を注いでいたサクラに話を振った。

「ふぇっ！？　え、わ、わたしに聞かれましても……」

オドオドと視線を彷徨わせるサクラ。義人はなんとなく話を振っただけなので、元より返答はそこまで期待していない。

「とりあえず、入って詳しい話を聞かせてくれ」

「はっ！　失礼します！」

元気の良い返事をして、兵士が入ってくる。背は百七十センチ弱、金髪青眼でやや幼い顔立ちのため義人よりも歳若く見えた。その顔

に見覚えがあった義人は、すぐさま脳内からこの国の主要な人物の顔と名前を引っ張り出す。

「魔法剣士隊副隊長のシセイじゃないか。どうした？　志信がミーファと試合だって？」

言葉を交わしたことはないのに、すぐさま名前で呼んでもらえてシセイの頬が僅かに嬉しさで緩む。

シセイは若干十六歳にして、魔法と剣の才を見込まれて魔法剣士隊の副隊長を務めている。ミーファにはまだまだ及ばないが、それでも他の魔法剣士隊の兵士より頭一つ分ぐらい腕が立つらしい。

全て志信からの情報だったが、義人は今そんな情報はいいかと思考を切り替えた。

「はっ！　シノブ様とミーファ隊長が第一訓練場で試合を行うとのことで、ヨシト王に許可がほしいと！」

「……なんで俺の許可？　お互いが同意してるなら勝手にやればいいじゃないか」

義人がそう言うと、シセイは困ったような表情になる。

「それが、その……シノブ様が『ヨシト王の許可がなければ戦わない』とおっしゃられまして」

「志信がそんなことを……」

何か考えがあってのことだろうか。

そう判断すると、義人も椅子から立ち上がる。

さすがに根を詰めすぎていたし、気分を切り返るのも必要だ。カグラもそういった理由なら理解してくれる。

「よし、それなら俺も訓練場に行く。サクラ、少し席を外すぞ。もしカグラが戻ってきたら、訓練場にいると伝えてくれ」
「は、はい。わかりました」

資料を探しに行っているカグラへの伝言を残し、義人はシセイと共に訓練場へ向かうことにした。

訓練場へと足を踏み入れると、何やらざわざわと騒いでいる。しかし、一人の兵士が義人に気づくと慌てて膝を地面につき、それに釣られるように周りの兵士も膝をついた。その中にはミーファと、何故か志信も一緒に膝をついている。周囲に合わせたのだろう。

「やべ、ちょっと不思議な快感が」
「はい？」
「いや、なんでもない」

隣で首をかしげたシセイに手を振ると、問題の志信とミーファに目を向ける。

「それで、ミーファ」

義人が声をかけると、膝をついたままでミーファは頭を下げた。

「はっ！」
「何でも、志信と試合をしたいらしいが……なんでだ？」
「はっ！　シノブ殿の動きを見たところ、我が隊の兵士よりも遥かに良い動きをしていました。そのため、武人として是非手合わせしたく思いまして」

公私を分けているためか、ミーファの口調はやや固い。
「成程。まあ、ミーファの気持ちもわかるな。志信」
「はっ！」
「いや、なんでお前まで畏まってるんだよ」
思わず突っ込みを入れる。すると、志信は僅かに眉を寄せた。
「周りに合わせてみたのだが」
「合わせなくていいっつーの。まあいいや、俺に許可を求めたってことは何か考えがあってのことだろ？」
「ああ。ミーファと試合をさせるかどうかは、お前が判断してくれ」
志信の返答に、義人はしばし黙考する。
志信が意味もなくそんなことを言うとは思えず、義人は目だけで周りを見ながら様々なことを考えていく。
周りは魔法剣士隊だけでなく、騎馬隊も遠巻きにこちらを見ている。
――そんな中で試合を行えばどうなる？　いや、違う。行った結果が問題か？　志信とミーファが戦い、もしも志信が負けたら？　そしてその逆は？　そういやミーファが過信してるとか言ってたなー……。
ふむふむと頷き、義人は顔を上げる。そして、志信に目を向けた。
「“アレ”か？」
「“アレ”だ」

短い言葉でも意味は伝わったらしく、志信が頷き返す。
どうやら、ミーファの過信をへし折る気らしい。

「“折れる”のか？」
「“折る”さ」

珍しく、闘志を見せる志信。義人はそれに若干驚きつつ、志信がへし折る気になるくらいの過信をミーファが抱いているのか、と頭が痛くなった。だが、すぐに頭を振って意識を切り返る。

「そんじゃ……おーい！　グエンたいちょー！　カモーン！」

そう叫び、騎馬隊に向かって手を振った。『カモーン』という言葉の意味はわからなかったが、名前を呼ばれた騎馬隊隊長グエン＝クレアスはすぐさま馬で駆け寄ってくる。そして、義人の手前で下馬すると膝をついた。

グエンは今年で二十八歳になり、短く刈り上げた黒髪と頬に走った三本の傷が特徴である。すでに九年近く騎馬隊の隊長を務めており、その槍捌きはカーリア国の中でも一、二を争うとカグラが言っていた。

「はっ！　お呼びでしょうか？」
「ああ。今から志信とミーファが試合をするから、審判をしてくれ……まあ、必要ないと思うけど」

最後の言葉はボソッと小さく呟き、誰にも聞こえない。グエンは首肯すると、馬を他の兵士に任せて志信とミーファの傍へと歩み寄った。そして二言ほど言葉を交わすと、シノブとミーファが距離を取る。

義人がグエンの隣に並ぶと、グエンは厳しい顔をした。

「ヨシト王、ここは危のうございます。折れた刀の破片などが飛んでくるやもしれません」

義人の身を案じての言葉だったが、義人は首を横に振る。そして、実にあっけらかんと笑った。

「破片が飛んできても、グエンが弾いてくれるだろ？　だから危険じゃないさ」

信頼を込めて言うと、グエンは押し黙って沈黙する。そして、諦めたように、それでいて嬉しそうに肩を落とした。

「そのように言われては、お止めできないではありませんか」
「そうか？」
「ええ」

グエンは前を向き、屈伸運動をしている志信と刀の状態を確認しているミーファを見る。

「ヨシト王はどちらが勝つと思いますか？」
「ん、俺？　そうだなー……でも先に、グエンの意見が聞きたいかな」
「私はそうですなぁ、やはりミーファに分があるかと」
「魔法が使えるから？」
「ええ。魔法を使われては、私でも勝つのが難しくなります」
「なるほどなるほど。もっともだね」
「それでは、ヨシト王もミーファが勝つと？」

その問いに、義人は笑う。

「はは、まさか」

志信が負ける？　それこそありえない。

義人の確信を込めた声に興味を惹かれ、グエンが僅かに身を乗り出した。

「シノブ殿はそんなにお強いのですか？」

グエンとて、志信が鍛錬しているところはここ一週間の間に何回か見ている。動きはその辺の兵士に比べれば遥かに優れていたが、魔法剣士のミーファと比べると見劣りするように思えた。

そんなグエンに、義人は首を横に振った。そして、口元を吊り上げる。

「ミーファじゃ勝てないだろうさ」

グエンには、義人の志信に対する信頼が透けて見えるようだった。義人はそんなグエンの視線に楽しそうに笑う。

「いっそ賭ける？」

「おぉ、良いですな。と言いたいところですが、さすがに王を相手に賭け事をするわけにもいきませんよ」

グエンも楽しそうに笑い、志信とミーファに目を向ける。

ミーファの武器は刃引きされた練習刀だ。もっとも、刃引きされていると言っても鉄の塊に違いはなく、下手をすれば骨折ぐらいするだろう。当たり所が悪ければ死ぬかもしれない。

それに対し、志信が手にしていたのは木の棒だった。長さはおよそ六尺（百八十センチ）ほどで素材は樫。どうやら壊れた槍から作

ったらしいが、穂先や石突などはついていない。先端などに比べると若干中央が太いため、棒というよりは棍だろう。

「ほう……槍術、ですか？　先程は刀を使っていましたが……」

穂先等はないが、己の使う武器と同じと判断したグエンの目が僅かに光る。武人として何か感じるところがあるらしい。だが、義人は苦笑しながら否定した。

「近いけど違う。志信のは槍術じゃなくて棒術さ」

「ボウジュツ？」

「こっちの世界にはない？　まあ、志信に聞いた話だと槍術や剣術、薙刀術とも共通する部分が多いらしいから、槍術って言っても差し支えはないかもしれないけど」

扱う棒が短ければ杖術と呼ばれるのだが、それは脇に置いておくとする。

「あいつの場合、他にもいくつかの武術を覚えてる。でも、その中でも得意なのが長物を使った武術らしいんだ」

「それは、是非とも手合わせ願いたいものですな」

志信がいくつもの武術を覚えているということで、武人の血が騒ぐらしい。

志信もミーファもそろそろ準備運動が終わったらしく、向き合って深呼吸していた。

「シノブ、貴方の武器は……棒？」

「ああ」

「さっきまで刀を使っていたでしょう？　それとも、わたしなんか棒で倒せるとでも言うのかしら？」
「これが一番得意な得物でな。気に入らないなら……」
どうやら、先に舌戦が始まったらしい。ここで相手の感情を乱せれば儲け物と思ったのか、志信は僅かに口元を笑いに変える。
「無手で相手をしてもいいぞ？」
「……そう」
空気の質が変わった。今まで弛緩していた空気がピンと張り詰め、肌を刺すような殺気がミーファから発せられる。明らかな挑発だが、どうやら簡単に乗ったらしい。
「これ、試合だよな？」
「そうですな。ですが、ミーファ殿は侮られることを嫌いますから……もし危険なようなら、私が割って入ります」
隣のグエンと会話を交わしていると、志信が義人に目を向けた。何かを待つような視線に、義人は一瞬呆けるが、すぐに右手を上げる。
「どうやら、開始の合図は俺がいいらしいわ」
「そのようで」
「んじゃー、無理はしないこと。特に志信」
呼びかけて、悪戯っぽく笑う。
「折るのはいいけど、粉砕するなよ？」
「善処しよう」

「では……始め！」

腹から声を張り上げ、右手を振り下ろした。

第十八話：ミーファ＝カーネル

尊敬する父が仕えていた王を毒殺した。

少女がそんな話を聞いたのは、まだ九歳になったばかりの頃だ。

騎馬隊隊長を務め、王にも部下にも厚い信頼を向けられていた自慢の父だった。

何かの間違いだと少女は叫んだ。しかし、その話を聞いたのはすでに父が処刑された後で、少女の喉が枯れるほど叫んでも誰も聞く耳を持たなかった。

その一ヵ月後、父の後を追うように母が病死した。少女の母親は元々体が弱く、父が王を毒殺して処刑されたという話を聞いて以来、心身共に一気に衰弱していったからだ。

さすがに親の罪が及ばぬ子供まで殺すのは忍びないと判断されたのか、少女は国の施設へと収容された。その結果、カーネル家は取り潰されることとなり、少女は天涯孤独の身となる。しかし、それでも彼女はめげなかった。

死んだ父の無念と疑惑を晴らすため、女の身でありながら兵士になることを決意する。高位の官職に就くことができれば、毒殺の真相を調べることができるかもしれない。それだけを胸に秘めて、日々訓練に励んだ。

幸いというべきか、少女には才能があった。父譲りの武芸の才に、魔法が得意だった母の魔法の才。それらを受け継いだ少女の才能は瞬く間に開花し、三年後の十二歳にしてカーリア軍魔法剣士隊に入隊。その後着々と腕を上げ、五年後には隊長まで任されるようになった。

前王の決め事の中に、『その隊の隊長を倒し、かつ隊員の三分の二以上が賛成すれば新しい隊長にする』という規則があったのも幸いだったのだろう。少女の努力を知っていた周囲の隊員は皆歓迎した。

剣の腕を磨き、剣の才には劣るが魔法も努力で必死に習得し、ついには国内の武術大会で優勝。父の疑惑はまだ晴れないが、再びカーネルの姓を名乗れるようになった。

少女は自分に自信を持ち、同時に自覚なき過信を抱く。努力が実り、己の腕が証明されたのだから仕方ない部分もあったが、精神的にはまだまだ未熟である。

そんな少女――ミーファ＝カーネルは今、異世界の人間である志信と対峙していた。

義人の口から開始の宣言が告げられた瞬間、ミーファは意識を切り替える。

志信は友人と呼んでも差し支えない存在になってはいたが、試合となれば話は別だ。挑発も受けては、手加減することなどない。

互いの距離はおよそ五メートル。一足一刀の間合いには程遠いが、志信の武器は棍である。刀に比べれば間合いが広く、それを考慮したミーファは刀に右手をかけたまますり足で距離を縮めていく。だが、志信は一向に構えない。

「……どうした、シノブ。構えなければ勝負にならんぞ」

意識を切り替えたミーファの口調は、やや荒くなる。女ということで相手に侮られないためだ。

志信はリラックスした様子でミーファの様子を眺め、口元に薄い笑みを浮かべる。

「これが俺の構えだが？　そもそも、俺の戦い方は初見だろう。例え構えていないように見えても、それが本人にとっては一番良い構

えなのかもしれん。もしかしたら相手を油断させるために構えていないのかもしれんぞ？」

暗に、見た目だけで判断するなという訓告だ。それを聞いたミーファは、強く歯を噛み締める。

「……ほう、余裕だな。試合の最中に講釈を垂れるか！」

怒気が膨れ上がった。同時にミーファが地を蹴り、一足飛びに踏み込む。

右手は刀の柄にかけ、鋭い踏み込みと共に身を捻っての抜刀術。魔法によって向上した身体能力から放たれる抜刀術は、例え練習刀でも殺傷して余りある威力だ。

だが、ミーファが踏み込むよりも速く志信も地を蹴る。

抜刀術は初太刀で相手を斬るか、もしくは初太刀で相手の攻撃を受け流し、二の太刀で止めを刺すことで構成される剣術だ。

故に、志信が選らんだ方法は一つ。

「なっ！？」

ミーファと同時に踏み込み、右腕を押さえて“抜刀させない”。元の世界では難しかったが、今の志信は『強化』によって身体能力が向上している。

踏み込みの速さも、腕力も、全てが自分のものではないように力強い。

志信は片手でミーファの右腕を押さえ込むと、その場で力比べをしつつ口を開く。

「この世界にも抜刀術があったのには驚いた。たしかに長物は懐に踏み込まれると不利になるが、それは相手が抜刀していればこそだ。

抜刀術とて、刀が抜けなければ鞘打ちなどに攻撃方法が限られる。
そして、相手が持っている武器だけを使ってくると思うな」

そう言うなり、棍を傍に投げて空いた手で脇腹へと掌打を叩き込む。強打されて息が詰まるが、ミーファはその衝撃に任せて地面を蹴って志信から距離を取ろうとする。

「相手から距離を取るのは良い。だが、距離を取る間も牽制に攻撃をするべきだし、不用意に跳ぶな」

しかし、志信は事も無げにその距離を詰めていた。ミーファが接地する瞬間に足を払い、地面へと転がす。本来ならここで追撃を食らわせるところだが、志信は悠々と距離を取って捨てた棍を拾い上げた。

その先では、ミーファは愕然とした面持ちで身を起こしている。

「さて、それでは“試合らしく”いくか」

ミーファが身を起こしたのを見ると、志信は腰を下ろして棍を下段に構えた。

「……馬鹿な」

ミーファは抜刀しながら、呆然と小さく呟く。
僅かとはいえ油断があったことは認めよう。
挑発に乗り、気が逸っていたのも認めよう。
だが、自分がこうも簡単にあしらわれたことがミーファには信じられない。

志信の身体能力が予想よりも高く、どんな戦い方をするか知らなかったとはいえ、実戦ならそれが命取りになる。
大きく深呼吸をして気息を整え、打たれた脇腹の痛みは努めて無視。刀を正眼に構え、冷静になれと自分に呼びかける。
そうすること数秒、ミーファは平静を取り戻した。そして志信を見据えると、軽くあしらわれたことに対する怒りが沸いてくる。だが、それでは駄目だと何とか激情を押さえ込んだ。

「行くぞ」

それを見計らったように志信が動く。ミーファの間合いよりも外から打突を繰り出し、ミーファがそれに応戦する。
心臓、腎臓、肝臓、鳩尾、喉、眉間。
志信は容赦ない打突を急所という急所に向けて放ち、ミーファは体捌きと剣捌きによって回避していく。
威力ではなく速度を重視した打突と捌くことおよそ三十合。
志信が唐突に打突を止め、棍を横薙ぎに払う。明らかに大振りな一撃だったが、ミーファはそれを隙と見て、素早くしゃがむことによって回避した。そしてすぐに間合いを詰めて、今度はこちらの番と言わんばかりに志信の喉元に刀を突き出す。
志信はその動きを見切ると、棍を引き戻す最中に刀に合わせて横へと流した。ミーファはすぐさま連撃へと繋ぎ、いたる方向から志信を攻め立てる。
刺突、袈裟、逆袈裟、横薙ぎ、逆風。
容赦なく繰り出される斬撃。それらの全てを志信は棍先で弾き、または逸らしてミーファの動きを観察していく。
そしておよそ三十合ほど防ぐと、志信は打突を放つと共に大きく後退した。

そんな二人の“死合”を見ていた義人は冷や汗を流す。

「ミーファ、明らかに殺す気で攻撃してるよな」

「初撃の刺突から見てそうでしょうな。割って入ろうかとも思いましたが、シノブ殿の動きを見る限り必要ないでしょう」

志信がある程度手加減しているのはすぐに看破できた。そして、それでもなおミーファを軽々とあしらい、ミーファの動きを見ている。

しかし、ミーファとて全力というわけではない。剣士としては全力に近いかもしれないが、ミーファは“魔法剣士”だ。

それをわかっているのだろう。志信が口を開く。

「さて、そろそろ本気で来てはどうだ？　魔法とやらを使ってこい」

挑発でも何でもなく、本心からの言葉だった。

それを聞いたミーファは一瞬逡巡するが、すぐに決断を下す。

身体能力を上げるため以外に魔法を使えば不公平だと思って使用を控えていたが、ここまでくればそう言っていられない。

ミーファは大きく息を吸い、“魔法剣士”として本気で戦うことにした。

刀を右手に持ち、左手は志信に向ける。その構えに志信が眉を寄せようとした瞬間、何の前触れもなく炎の塊が左手の前に発生した。

「わたしは炎の魔法を使う。それだけ言えば十分か？」

「相手に手の内を晒すな。そう言いたいところだが、今回に限ってはそうも言えんか」

これは試合であり、ミーファは元々不意打ちを好まない。いきな

り炎弾を撃ち出せば虚を突けたかもしれないが、それではミーファのプライドが許さなかった。

「では、いくぞ！」

ミーファが吼える。それと同時に周囲に四つの炎弾が生まれ、志信へと放たれた。およそ百キロ超の速度で迫る炎弾に、志信は僅かな苦笑を浮かべる。

「やれやれ……なんとも非常識なものだな」

放った後の炎弾は操作できないのか、直線的な動きでしかない。しかし、高速かつ複数による遠距離攻撃。その上、炎弾に隠れるようにミーファが迫ってきている。

志信は自身に当たる炎弾の動きだけを見据え、半身開いて回避する。その際若干練習着が焦げたが、それに構わず炎弾に追従しているミーファへと意識を割いた。そして、ミーファの持つ刀を見て目を見張る。

ミーファの持つ刀は、鍔元から炎に包まれていた。

「ハァッ！！」

上段からの振り下ろし。だが、刀が炎に包まれていて正確な剣筋が読み取れない。志信は咄嗟に棍先で受けるが、いとも容易く焼き斬られて両断された。

志信は若干短くなった棍を振るって炎を払い、返す一撃でミーファの鳩尾に打突を繰り出す。しかしその一撃は燃える刀に防がれ、それと同時に志信の本能が警鐘を鳴らした。

「ちっ！」

本能の突き動かすままに横へと跳ぶ。すると今まで立っていた場所に頭上から炎が降り注ぎ、地面を燃やしながら吹き飛ばした。
跳躍した志信は片手だけで接地すると、思い切り地面を突き飛ばして身を捻り、縦に回転して着地する。そしてすぐに油断なく棍を構えると、燃え盛る地面を見て驚きと呆れの混じった息を吐いた。

「成程、魔法剣士隊が主力になるわけだ」
「お褒めに預かり光栄ね。まさか今のを避けられるとは思わなかったけど」

炎の向こうで楽しそうにミーファが笑う。
そんなミーファに、志信も僅かに口元を緩めた。そして、腰を落として棍を構える。

「だが、そろそろ終わりにしよう」

言葉と共に、志信が集中を高めていく。気息を整え、体に適度な力を込める。
ミーファもそれに応え、刀を握る手に力を込めた。彼女が使う刀に炎を纏わせる魔法だが、本来練習刀で使う魔法ではない。短時間なら大丈夫だが、時間が経てば経つほど炎の熱で地金が柔らかくなるからだ。故に彼女にも時間がなく、志信の勝負に乗る。
目を合わせ、互いに駆け出す。
ミーファが繰り出すのは振り下ろしの斬撃。
対する志信が繰り出したのは、振り下ろされた刀に対する横薙ぎ。
ただし、その一撃の速さは今までの比ではない。

「っ！？」

刀の腹を強かに打たれ、ミーファの手から刀が弾かれる。ミーファの意識は弾かれた刀に向き、志信はその隙を見逃すことなくさらに踏み込む。志信は僅かに体勢が崩れたミーファの襟首をつかみ、足を払って地面へと投げ倒した。

そしてその顔面へと棍を振り下ろし――――寸前で止める。

「俺の勝ちだ」

「……ええ、わたしの負け。まさか、あそこで武器を狙ってくるなんてね」

悔しさの滲む顔でミーファが呟く。

もしこれが実戦なら、最初の抜刀術を止められた時点で負けだった。その上、最後の一撃を見ればそれまでの攻撃全てが手加減されていたとわかる。

試合ではあるが、ここまでの大敗を喫したのは初めてだ。

ミーファは右手で顔を覆い、唇を噛み締める。そんなミーファに、志信が声をかけた。

「良い“試合”だった」

「……嫌味？　あれだけ手加減してたくせに」

違う、と首を横に振り、志信は言葉を続ける。

「試合は実戦とは違う。勝ち負けに大した意味はなく、己の悪いところを気づくことにこそ大きな意味がある。俺の祖父の言葉だ」

ミーファは答えない。志信はそれに構わず、先端が焼き斬られた棍に目を落とした。

「俺も今回の試合で様々なことを学ぶことができた。礼を言う」

そう言って一礼する志信に、ミーファは僅かに涙の溜まった目を向ける。

「試合を受けたのは、わたしにそれを教えるため？」

「それと、無駄な過信を取り除くためだ」

まだ倒れたままのミーファに志信が手を伸ばす。

「これも祖父の言葉だが、自信は持っても過信はするな。自分だけに限らず、周囲の人間を巻き込むことになるぞ」

ミーファは黙って志信の手をつかみ、上体を起こした。そして大きなため息を吐くと、澄んだ目で志信を見上げる。

「明日から、わたしに訓練をつけてくれない？」

「義人が許可を出すなら、と言いたいところだが、義人なら迷わず頷くか」

そう言いながら、志信はミーファを引っ張り起こした。

「勝者、藤倉志信！」

義人が声を張り上げ、勝利の宣言をする。そして、試合をした二人には試合を見ていた周りの兵士からの歓声が降り注いだ。

余談ではあるが、志信に弾かれた刀はミーファの斜め後ろ――――義人の方へと回転しながら飛んでいた。いまだに炎を纏った刀は、

避けなければ直撃コースである。

「失礼」

グエンが一歩前に出ると、軽い踏み込みと共に右手に持った槍を振り上げ、石突で刀を横へと打ち払った。グエンによって弾かれた刀は、数回転して地面へと突き刺さる。

「お見事」

義人がグエンに賛辞の声を送ると、グエンは軽く一礼して元の位置に戻った。義人は鷹揚に頷き、そして内心で安堵の叫びを上げる。

あぶねー！　思いっきり避けようかと思ったじゃねーか！

先程グエンが弾いてくれると言った手前、避けては信頼を損なうことになる。そう思って避けなかったのだが、もし弾き損なったらと思うと怖い。若干膝が震えていたが、余裕を装っていたため気づかれることはなかった。

「……ぶっちゃけちびるかと思いました」

「は？」

「いや、何でもない」

志信とミーファが言葉をかわし、志信が手を貸してミーファが立ち上がる。ミーファの表情には今までにない、清々しさのようなものが見えた。

それを見た義人は、大きく息を吸い込む。

「勝者、藤倉志信！」

そして大声で叫び、志信の勝利を宣言した。

第十九話：横領

志信とミーファが試合をした日から三日経ち、義人は相変わらず政務に頭を悩ませていた。　その顔には大分疲労が滲み、あまり覇気を感じられない。

「あー……ここの数字ちょっとおかしいだろ。買った物に対して出費が多いって。カグラ、すぐに担当の財務官を引きずってきてくれ。ついでに証拠になりそうな帳簿か何かも持ってこさせて……って、こっちもか！　ああもう、多すぎ！」

「わかりました。五分以内に引きずって……いえ、連れてきますね」

目の前に置かれた書類。去年城のほうで米やその他諸々を購入したらしいのだが、これが明らかにおかしい。

商人のゴルゾーに頼んで作ってもらったここ数年の国内の物価が書かれた紙と、取引をした商人から取り寄せた証明書の紙を突き合せつつ、義人はもう一度計算してこめかみを押さえた。

「これはアレか？　俺に対する挑戦だな？　『来年来る新しい王も、どうせこれくらいなら気づけねーだろ』と俺を馬鹿にしてるんだな？　そうだな？　三十万ネカもピンハネしているのはわざとだな？

よし、サクラ。裏で訓練している第一歩兵隊を全員連れて来い。強面の連中をズラリと並べて脅迫……もとい、自白させる」

「お、落ち着いてくださいヨシト様！　はい、精神の鎮静作用がある薬草を調合したお茶です！」

「ん、サンキュ。おお、これ美味いな」

差し出されたお茶を啜り、ほっとする美味しさに気持ちを落ち着かせる。ついでに干しポポロを口に放り込み、糖分を摂取して頭の

栄養にした。

ちなみに干しポポロとは、その名の通りポポロを干したものである。皮を剥いて天日で干し、甘みを凝縮させたものだ。日持ちもするため、旅人が好んで食べるものでもある。

「ったく、前王死後の十年間だけでも横領が多すぎる。もしこれだけの金があったなら、税率を一気に下げられるのにな」

文句を言いつつ、義人は書類に王印を押す。するとすぐにサクラが次の書類を置き、義人はそれに目を通した。

「次は嘆願書か。『最近魔物の活動が活発で、被害が多くなってきています。その上田畑の土に栄養がほとんどなく、作物の育ちが良くないのでなんとかしてほしいです』と。魔物ねぇ……その上田畑の土に栄養がない、か。サクラ、この世界では肥料は高いのか？」

「肥料、ですか？　詳しいことはわかりませんけど、農民の方が買うには高額だったかと思います」

サクラの言葉に、義人は物価の書かれた紙を広げる。

「農産で肥料……っと、あった。去年の相場で十キロ当たり三十ネカ。農民の平均収入は一日当たり二十ネカか。高いな、こりゃ」

ちなみに、農民と言ってもかつての日本のように身分差があるわけではない。流石に貴族や騎士などに比べれば下になるが、町民や商人などとは同格である。

「ヨシト様、担当の文官を連れて参りました。それとこれが帳簿ですが、改ざんされた形跡がありました」

「ありがとう。カグラはとりあえず後ろに立っていてくれ」

義人がそう言うと、カグラは義人ではなく連れてきた文官の後ろに立つ。それはもちろん威圧のためだ。義人はひとまず嘆願書を傍に置くと、文官に目を向ける。

「さて……なんで呼ばれたかはわかってるな？」

ニコリと、笑顔を浮かべて聞く。すると、文官が突然土下座した。

「も、申し訳ありませんでした！　ほんの出来心だったんです！」

「へえ、ほんの出来心で三十万ネカもピンハネしたと？」

ちなみに三十万ネカは目の前の文官の給料十年分ほどだ。義人は土下座している文官を眺めつつ、カグラに尋ねた。

「ちなみに、国家予算を横領した場合どんな罰則が定められているんだ？」

「そうですねー。前王が決められた罰則では、官職と家名を剥奪して、本人は斬首となっています」

にこやかにカグラが告げると、文官の肩が怯えで大きく震える。義人はカグラの言葉に頷くと、口を開いた。

「官職と家名を剥奪して、さらに斬首か。なるほど」

頭上で交わされる会話を聞きながら、文官は内心でどうせそれが行われることはないだろうと高を括っている。

目の前の新しい王は、とにかく甘い。商人のゴルゾーに贈られた少女達に金を持たせ、その場で親元へと帰すような人間だ。だが減俸くらいはあっても、斬首などの刑罰が行われるはず

がない。そう、考えていた。

「殺すなんて駄目だな」

やはり甘い！

文官は内心喜びの声を上げるが、それを表情に出さず殊勝に頭を下げている。そして、次の言葉で喜びは霧散した。

「やっぱり、生きたままで罰を与えないと」

文官は慌てて顔を上げる。すると、義人の楽しげな目があった。ただ、楽しげといっても普通ではない。まるで、羽をもがれた虫をどうやって潰そうかという嗜虐的な雰囲気がそこにはあった。

「資料によれば、妻と二人の娘、それと生まれたばかりの息子がいるみたいだな」

臣下の情報が書かれた紙を眺めつつ、義人は口元に笑みを浮かべながら話す。

「うん、まさに幸せの絶頂ってやつかな？」

「……は」

どう答えればいいかわからず、文官はただ頭を下げる。義人はそうか、と頷いて、罰を決めた。

「官職と家名を剥奪、そして財産も没収。退職金もなし。このくらいでどうだ？」

「なっ！？」

下げていた頭を慌てて上げる文官。義人の顔を見るが、冗談などではない真剣な顔だ。

「自分の給料十年分も着服したんだ。妥当だろ？　だけど、俺は斬首なんて形で臣下に人殺しを命じるなんて嫌だしな。まあ、奥さんとは離婚することになるだろうけど自業自得だ。そうだろう、カグラ？」

そう言ってカグラに話を振りつつ、ウインクを一つする。その意味を汲み取ったカグラは、苦笑をこらえつつ頷く。

「そうですね。お子さん達も周囲から迫害されると思いますけど、妥当でしょう」

「ちょ、ちょっと待ってください！　それだけは勘弁を!?　他の奴らもみんな税金を横領していました！　それなのに何故私だけがそんな重い罰を受けなければならないのですか!?」

「いやいや、犯した罪にはしかるべき罰が必要だろう？　まあ、横領をしている他の臣下に対して見せしめにもなるし。いつか同じ罰を与えるさ。しかし、犯罪者を親に持った子供が可哀想だなぁ」

文官は顔を青くし、ガタガタと震えだす。そんな文官に、義人は優しく語りかけた。

「なあ、不正なんてするもんじゃないだろ？」

義人が口調を変えたことに希望を見出したのか、文官は全力で首肯する。

「は、はい！　申し訳ありません！　私欲で金に目がくらんだ私が間違っていました！」

「口では何とでも言えるよな」
「いえ！　決してこのようなことは二度としないと誓います！　ですので、どうかお許しを！
横領したお金も全額お返しします！」
「ん？　横領した金は使ってないのか？」
「た、多少使いましたが、全額すぐにでもお返しできます。どうかお許しを！！」
「ならいいや」

一気に雰囲気を緩め、義人は頷く。文官はその意味を数秒理解できずに呆ける。

「ほ、本当ですか？」
「ああ。ていうかすまん。さっきの罰って嘘なんだ。いや、もしここで開き直るような真似をしたら本当に実行したかもしれないけどさ。横領した金を返してくれるならこの件は不問にしよう。ただし、さすがにそれだけじゃ甘いから他に横領していた奴のことを話せ。もちろん情報がどこから出てきたのかは言わない。あと、これからは真面目に働くこと。罰はそれでどうだ？」
「わ、わかりました」

知っている限り横領をしていた者の名前を挙げさせ、それを紙に書きとめていく。金額やどうやって横領したかを知っているならそれも吐かせ、全ての情報を聞き終えた義人は満足げに頷いた。

「それじゃあ、これで間違いはないな？」
「はい。間違いありません」
「なら退室して良し。横領した金は三日以内に持ってくること。遅れれば……わかるな？」

最後に感情を消した声で尋ねると、文官は慌てて首を上下に大きく振る。その様子に義人は苦笑すると、退室しようとしていた文官の背中に声を投げかけた。

「頑張った分だけ報われる。それでいいだろ？　アンタだって、別に横領なんてしなくても幸せな生活を送れていただろうに」

「……はい。失礼しました」

文官は一礼すると、執務室を後にする。

義人は扉が閉まったことを確認すると、執務机に突っ伏した。

「あー疲れたー……サクラ、お茶淹れてくれー」

「は、はい。ただいま」

パタパタとお茶の用意をするサクラ。そんなサクラを義人が眺めていると、カグラからの視線を感じてそちらへと顔を向けた。

「……やっぱ、甘いかなー」

「甘いですね」

即答される。その返答の早さに義人は脱力するが、なんとか気を取り直した。

「でも、横領された金が返ってくるんだ。それに他に横領していた奴の情報も聞けた。あとは証拠の情報を集めて、同じことを繰り返す。駄目かな？」

「証拠が見つけられない場合もあるでしょう。その場合はどうするんですか？」

「これからの横領をなくす。それしかないさ。大体、俺は万能でもなければ何かに優れているわけでもないんだぞ？　ない頭を必死に

使うのが精一杯だ」

眉間をマッサージしながら言うと、それを見たカグラが心配そうな表情を浮かべる。

「お疲れですか？」

「んー、そうだな。さすがに十日以上朝から晩まで根を詰めてたからな。ちょっと、疲れた……」

「では、明日は休まれてはいかがです？」

「いやいや、それはマズいだろ。たしかに少し休みたいけど、もっとちゃんとした理由がほしい」

首を横に振り、義人は先ほど見ていた嘆願書を手に取った。すると、それを見計らったように扉がノックされる。

「どうぞー」

おざなりに返事を返しつつ、嘆願書をどうしようかと悩む。文面に綴られた文字からしても、かなり必死なようだ。

「失礼するぞ、義人」

かけられた声に顔を上げ、義人は破顔する。

「おお、志信か。どうした？　って、ミーファも一緒か」

志信の横にはミーファが並んでおり、その距離は微妙に近い。その上ミーファはさり気なく志信を見ており、表情はどこか緩かった。

三日前の試合以来、ミーファと志信が一緒にいるのをよく見かける。もっとも、ミーファが志信の近くにいると言ったほうが正しい

のだが。

「結婚報告か？」

それを見た義人は、挨拶代わりにジャブを繰り出す。

「ち、違います！」

ジャブを受けたミーファは、微妙に顔を赤くして必死に否定した。効果は抜群だ。

「あらあら……」

それを見たカグラは楽しそうに笑う。

「な、なによ？」

「いいえ。なんでもないですよ。ええ、なんでもないです」

なんでもないと言いつつも、袖で口元を隠しながら笑っている。そんなミーファの横で、志信はいつものように義人と話していた。

「実戦経験がない兵士に経験を積ませたい。それで弱い魔物と戦わせようと思っているんだが、その許可がほしいんだ」

「なんだ、そんなことか。本当に結婚報告だったら驚いて心臓が止まるところだったのに」

「誰が結婚するんだ？」

「……さあ。誰だろうな」

真顔でぼける志信に呆れつつ、何も書かれていない紙を取る。そして許可する旨を書いて王印を押した。

「ほい、これでよしと。あんまり無茶はするなよ？」
「ああ」

志信に許可証を手渡し、仕事に戻ろうとして手が止まる。

「志信、どこの魔物を倒しに行くんだ？」
「日帰りできる距離ならどこでもいいが？」

志信の返答に義人は頷き、先程の嘆願書をもう一度読み返す。

「むぅ……これなら日帰りでいけるか？　経験値を稼ぎつつ、かつ肥料を集める。その上視察ができて、さらに魔物も減って一石四鳥、と」
「ヨシト様、どうかしたんですか？」

何やら計画らしきものを立てている義人に、カグラが話しかける。義人は考えをまとめると、部屋の全員に聞こえるよう口を開く。

「いや、明日俺もついていこうかと思って」

その瞬間、沈黙が場を支配した。

「……えーと、何故ですか？」

沈黙を破るべくカグラが尋ねると、義人は自身の考えを明かす。

「近くのタルサ村から魔物を退治してほしいって嘆願書が来ていてな。その上田畑の土が痩せているから、どうにかしてほしいとも書いてある。それに、さすがに俺も疲れが溜まってるしな。やっぱり、

きちんと休まないと体がもたないわ。俺自身は視察ってことにすれば、臣下も納得してくれるだろ？　村がどんな規模なのかこの目で見てみたいし」

一息に話し、義人はサクラが淹れてくれたお茶を飲む。そんな義人の案を吟味したカグラは、悪くないと首肯する。

「そうですね。実際に民の生活を見ることも良い勉強と刺激になるでしょう。気も晴れますしね。そういった理由ならアルフレッド様や他の臣下も納得してくださると思います」

「よし、それじゃあ明日だ。ひとまず、そのためにもこの書類の山を片付けないとな」

執務机に積まれた書類を前に、義人は楽しそうに笑った。

第二十話：視察

朝特有の清涼な空気を吸い込み、大きく背伸びをする。
城門の前に魔法剣士隊が隊列を組み、王都の外へと歩き出す。そんな中、義人は馬に跨ると、カグラに声をかけた。

「それじゃあ行ってくる」

義人は後ろに優希を乗せ、カグラは馬上の義人を見上げると笑顔で頷く。

「お気をつけて。シノブ様とミーファちゃんがいるから大丈夫だとは思いますけどね」
「魔法剣士隊を丸々連れて行くんだ。危険はないって」

カグラの言葉に苦笑を返す。
義人が身につけている携行品は王のマントだけだ。だが、その周りを固めるように兵士が並んでいる。

「それではシノブ殿。ヨシト王を頼みましたぞ」

少し離れたところではアルフレッドが志信に声をかけていた。そして、それを聞いたミーファが僅かに頬を膨らませる。

「アルフレッド様、魔法剣士隊の隊長はわたしなんですけど？」
「シノブ殿が辞退していなければ、“元”魔法剣士隊隊長になっていたかもしれんがのう」

ミーファの抗議にアルフレッドが意地悪く笑う。ミーファはうっ、

と呻くとあらぬ方向に目を逸らした。

「俺は魔法を使えませんからそれはないでしょう」

「いやいや、シノブ殿には『強化』のようなものがかかっておるから資格はあるのじゃよ。魔法の恩恵を受けていれば魔法剣士と呼んでも差し支えないからのう」

「しかし、俺は他人に指示を出すよりも自分が動くほうが楽です。ミーファのほうが隊長に向いているでしょう」

そんな会話を聞いていると、このままでは色々と拙いと思ったらしきミーファが大声を上げる。

「そ、それじゃあタルサ村に行くわよ！　全員、出発！」

叫ぶなり逃げるように馬で駆けていくミーファ。それを見た義人達は、やれやれと苦笑し合った。

タルサ村は王都フォレスから馬で早駆けすれば一時間もかからない場所にある。

魔法剣士隊の兵士は馬に乗っていないが、皆魔法で身体能力を上げているのである程度の速さで走ることができるから問題はない。

全員がタルサ村に着くには二時間もあれば大丈夫だろう。義人は馬を走らせながらぼんやりとそんなことを考えていた。

カグラが連れてきたこの馬だが、十分に躾がされているため馬に乗ったことのない義人でも非常に乗りやすい。その上他の馬よりも多少体が大きく、後ろに優希を乗せていても平気で走ってくれる。

「お馬さんってやっぱり足が速いねー」

「そうだなー。でも、俺としては周囲を走る連中のほうがすごいと思うぞ。周りから見るとけっこう不気味だろうけど」

それなりに早く走っている馬と並走する無言の集団。手には鞘に納めた刀を持ち、隊列を崩さずに走っている。かなりシュールな光景だ。

義人は風を切りながら馬を走らせつつ、後ろへと流れていく風景を見る。

馬に乗って疾走していくなど元の世界では味わえなかった体験だ。速さでいうなら車に分があるが、馬の走る振動などが伝わってきて実に不思議な気分になる。

「なんつーか、楽しいな……」

何気なく呟いた言葉は風に流されていく。

魔法を使う人間がいて、魔物がいる異世界。もしもＲＰＧならば魔王がいて、それを倒すために旅に出ただろうか。

そんなどうでもいいことを義人が考えていると、後ろに座っていた優希が力いっぱいしがみついてきた。そして、小さく呟く。

「楽しいね」

どうやら聞かれていたらしい。

義人としては、しがみつかれた際に背中に当たった柔らかいものが気になったがそれは顔に出さない。ついでに『柔らかくてあったかいなー』なんて思ったが、もちろん口には出さない。義人も男の子なのである。

「オ、オオ。タ、タノシイナー」

ただし、明らかに動揺して片言になっていた。優希はそんな義人の声を聞くと、小さく笑う。

「どうしたの？　義人ちゃん、声が変だよ？」

そう言いつつ、落ちないよう義人の腰に回していた腕に力を入れてさらに密着した。

「イヤイヤ、ナンデモナイデスヨ」

ダラダラと冷や汗が流れている。義人はこういった事態にはとことん弱く、優希もそれを知っていた。さらに今は馬に乗っており、逃げ場はない。

結局、義人はタルサ村につくまで片言のままだった。

「ふぅ……ここがタルサ村か」

タルサ村についた義人は馬を下り、額から流れる冷や汗を拭う。同じく馬から下りてきた優希は、どことなく幸せそうだ。

「どうした義人。なにやら顔色が悪いが？　乗り慣れない馬を使ったせいで足を痛めたか？」

義人の様子を見た志信が傍に寄ってくる。義人は遠くを見るような目で志信を見た。

「なんというか、針の筵？　いや、違うか。桃源郷と地獄を全力疾走で行ったり来たりしてた気分だ。頑張った、俺」

言われた言葉の意味がわからず、志信は僅かに眉を寄せる。言った本人の義人も意味がわからず、やっぱりいいやと手を振った。

点呼を取っているミーファをなんとなく見ていると、義人達の方へと初老の男性が一人歩み寄ってくる。その後ろでは村人が大勢並んでおり、義人が身に着けているマントを見るとすぐに膝をついた。

「私、この村の村長を務めている者です。まさか王自らお越しいただくとは……」

恐縮しきったように頭を下げる村長に、義人は苦笑を向ける。

「そんなに頭を下げないでくださ……下げないでくれ」

危うく敬語で話しかけて、慌てて口調を改める。そして馬を預けると、嘆願書を開いて村長の前に掲げた。

「嘆願書をもらったからな。俺もこの国の民がどういう生活をしているか自分の目で見てみたかった。だから、そんなに畏まらないでくれ」

「は、はい……」

想像していた王の人物像と違ったのか、村長は若干安堵した表情で顔を上げる。そんな村長を一瞥すると、義人は村の方へと目を向けた。

タルサ村は人口約千人で、農業を生業としている者が多い。だが魔物が出没する森が傍にあるため、よくその被害を被っている。

村の様子は、端的に表して活気がない。人の姿がちらほら見えるが、その顔には疲労の色が滲んでいる。そのことに顔をしかめた義人は、ミーファに点呼が終わったことを確認して村長に顔を向けた。

「とりあえず魔物が出るっていう森の傍まで移動する。村長、案内してくれ」
「は、はい！」

大きく返事をした村長の後に続き、義人達は歩き出す。その際にも村の様子を眺め、義人は手にした紙に色々と書き込む。

「義人ちゃん、それ何？」
「これか？　これはタルサ村に関する資料で、俺自身がこの村を見た感想を書いてる」

村民の生活や走り回っている子供たち、村の設備などを観察しつつ、義人は先頭に立って案内をしている村長に質問をぶつけることにした。

「村長、今からいくつか質問をするから正直に答えてほしい。いいかな？」
「もちろんですとも。王に嘘をつくなどとんでもありません！」
「そうか……なら質問。生活は苦しくないか？　いや、苦しいだろ？」

あまりにも直接的な質問に、村長はどう答えようか迷う。
ここで肯定すれば、今の政治を批判することになるかもしれない。
前王は政治批判をした者には容赦がなく、大勢が罰を受けたと話を聞く。
もしかしたらこれもそういった質問かもしれない。そう思った村長は、首を横に振った。

「い、いえ。大丈夫です」

明らかな嘘に、義人はため息を吐く。

「いや、そんな誰が見てもわかる嘘をつかれても逆に困るって」

「義人ちゃんに対して嘘をついたらそれだけで罰を受けさせるよ？」

さらりと横の優希が笑顔で告げ、村長が身を震わせて頭を下げる。

「も、申しわけありませんでした！　せめて罰は私一人に！」

「そんなことするか！　優希も何言ってんだよ！？」

優希の額をデコピンで弾き、義人は今にも土下座しそうな村長を立たせた。

「ちゃんとありのままに話してくれ。そうしないと、きちんと改善できないだろ？」

「わ、わかりました。正直に言われていただければ、生活はかなり厳しいです。村民の中には借金をして、自分の子供を借金の形に取られていった者もいます」

「うっ……そうっすか」

借金の形に取られた子供を贈り物として差し出されたことがある義人は、内心気まずくなって目を逸らす。だが、そうしているわけにもいかず気を取り直した。

「やはり税金か？」

「ええ。税金が七割では生活も厳しいです。他国へ引っ越そうとした者もおりますが、引っ越すための金もなく断念していました」

「……仮に、税金が六割か五割に下がったらどうだ？　少しは生活が楽になるか？」

義人がそう言うと、村長は大きく首を縦に振る。

「少しなんてものじゃありませんよ！　六割なら借金をする者がほとんどいなくなるでしょうし、五割なら皆豊かな生活ができます」

「そうか。いや、そうだよな」

村長の言葉に嘘はないと判断すると、思考を巡らせていく。

――――どうにかやって税金を下げないとな……いや、俺が下げようと思えば下げられるのか？

帰ったらカグラに聞いてみよう。

心の中だけでそう呟くと、義人は疲れた息を零した。

タルサの森の傍まで案内してもらった義人達は周囲を見回す。森の奥からは魔物の鳴き声が聞こえ、少々薄気味悪い。

そんなタルサの森から少し離れた場所には柵が作られており、それを超えれば広い畑が見える。柵のあちこちが壊れているのは魔物の仕業だろう。

義人は畑に足を運ぶと、マントを魔法剣士隊の兵士に預けて畑の土を掘り返す。それを見た村長や農作業をしていた村民が目を剥いて驚いているが、義人は気にしない。

「ミミズもいないし、ずいぶんと痩せた土だな……」

痩せた土とは有機質がなく微生物も居ないことを指す。これでは肥料を与えても微生物が居ないため、与えた肥料を分解して植物の

養分とすることはできず、結果として植物の育ちがすこぶる悪くなる。

そのためにはまず肥料よりも微生物を土に与えなくてはいけない。義人は元の世界で見ていたテレビからの知識を思い出すと、一つ頷いてミーファを呼んだ。

「お呼びですか？」

「ああ。予定通り魔物を退治する班と腐葉土を集める班に分ける。両方とも実戦経験がない奴を均等にしてくれ。一定時間が経ったら交代させるから」

「その……本当に腐葉土を集めたり農作業をするために兵を使うのですか？」

そんなことをするために兵がいるのではないとミーファの目が語っている。それを見た義人はたしなめるように説得を開始した。

「兵士だって食事を取るだろ？　その食事の材料は誰が作ってるんだ？」

「それは農民です」

「そうだ、農民だ。だけど、野菜を育てるのにも米を育てるのにも金と時間がかかる。そんな農民の苦労の末に出来た物を俺達は食べてるんだ。手伝っても罰は当たらないさ。そうだろ？」

「それとこれとは話が別です。農民はそれが仕事であり、わたし達は刀や魔法を振るうのが仕事です」

反発するミーファに、義人は意地悪く笑う。

「器が小さいな、ミーファ。志信なら迷わず賛同してくれるぞ？試しに呼んでみよう。おーい、志信ー！　ちょっとこっちに来てくれー！」

「ちょ、ヨシト王！？」

ミーファが慌てるが、そんなものは無視する。呼ばれた志信はすぐに駆け寄ってきた。

「どうした？」

「いやさ、ミーファが農作業や腐葉土集めに兵を使うのは嫌だって言うんだよ。どう思う？」

簡潔に会話の内容を話すと、志信はミーファに目を向ける。

「ミーファはどうやら義人の案を深く考えなかったようだな」

「深く？　深くってどういうこと？」

志信が話すとなるとやけに素直なミーファの態度に、義人は少しだけ苦笑した。そんな義人を他所に、志信が説明を続けていく。

「農作業とは存外体力を使う。鍬を振って土を掘り起こす動きは剣の振り下ろしの訓練にもなるだろう。そして腐葉土を集めるにはまず落ち葉を掘り起こすことから始める。だがその間は魔物に対して無防備になるだろう。そのために魔物を相手にする班があり、仲間が腐葉土を掘るために無防備な状態でいるなら嫌でも緊張感を持つ。そうすればより良い訓練になるだろうし、守るということの大切さも学べる。そして腐葉土が手に入れば肥料代がかからず、農民も助かるだろう。どうだ？　どこか拙い点があるか？」

つらつらと告げる志信に、ミーファは満足そうに頷いた。

「ううん、拙い点はないわ。そんなことを考えつくなんて、流石シノブね！」

「いや、考えたの俺なんですけど……」
「よし、それじゃあ早速班分けしてくるわ」
「聞けよ」

納得したのか、鼻歌混じりに去っていくミーファ。そんなミーファの背中を見送った義人は、志信に悲しげな目を向ける。

「なあ、俺って王様だよな？」
「もちろんだ」

力強く頷いた志信は、ミーファがどんな感情を持っているかも当然のように気づいていなかった。

第二十一話：農作業と重圧

「うはははは！　俺は今、働いている！」

ストレス発散のために木製の鍬を振り下ろしつつ、義人は今の状況を非常に楽しんでいる。

何せ執務室で一日中書類を片付ける毎日だ。体を動かせることがこんなにも楽しいなんて、元の世界にいた頃は夢想だにしなかった。

義人にも『強化』に似た効果が働いているため、その動きはひどく軽快だ。力強く鍬を振り下ろし、土を掘り返していく。

「ヨシト王！　腐葉土を集めてきました！」

「よし！　掘り起こしたところに撒いていけ！　あ、腐葉土だけじゃリン酸やカリが足りないから魚の骨なんかも今度撒いといてくれな？」

農民にそう話しつつも、掘り起こす手は止めない。日頃の運動不足を解消するために、思うがまま農作業に没頭している。

農民達はそんな義人を最初は遠巻きに見ていた。何せ、王が自ら畑仕事に精を出しているのである。

恐れ多いことこの上なかった。

しかし、実に楽しそうに農作業をしている姿を見ていると深い親近感を覚える。義人自身もまったく身分を気にしていないので、いつしか農民や兵士が一体となって農作業に励んでいた。

優希は村のほうで皆が飲むお茶や城から持ち込んだ米でおにぎりなどを作っている。そちらも非常に仲良くやっているらしく、時折楽しそうな声が聞こえた。

「まったく、あっちは楽しそうね」

実戦経験がない兵士が下級の魔物を相手に戦うのを監督しつつ、ミーファが愚痴のように呟いた。

自身はまず兵士の見本になるように紫色の鳥の魔物であるシドリを倒してみせると、後はサポートに回るだけだ。志信も数体の下級の魔物を倒すと、後はあちこちでサポートに徹している。

ウサギを二周りほど巨大化させて二本の角を生やした魔物のニカクウサギ。

カマキリを姿そのままに一メートルサイズまで巨大化させたような魔物のソルム。

童話に出てくるような棍棒を手に持ったゴブリン。

危険度は低く、すべて下級の魔物に分類されている。中級の魔物が出てくると一般兵ではきついかもしれないが、余程森の奥に入らない限り遭遇することもないだろう。

最初こそ人間とは違った動きをする魔物相手に苦戦していたが、動きに慣れると魔法剣士隊のほうが有利だった。森の中だから火炎の魔法は使えない。しかし、魔法で身体能力を向上させればそれだけで十分だ。あとは培った剣術だけで相手を倒せる。

そうやって魔物と戦っている兵士の後ろでは、他の兵士がせっせと腐葉土を集めていた。落ち葉を掘り起こし、良い具合に発酵している腐葉土を畑へと運んでいく。

それを横目に眺めて、今度は志信の姿を探す。

試合以来、何故か志信が気になって仕方ない。一緒に訓練をしたいと思うし、今もできれば傍で一緒に戦いたかった。自分の感情がまったくわからないが、それが何故か不快ではない。

ふと、志信と視線がぶつかった。

「っ！？」

慌てて視線を逸らす。それは反射に近い行動だった。数秒経って視線を戻すと、志信はすでに他の場所へと移動している。それを見たミーファは、残念そうなため息を吐いた。

――――どうやら俺はミーファに嫌われているらしい。

向けた視線をすごい勢いで振り払われた志信はそう判断した。本人のためとはいえ、試合で様々なことをしたので仕方ないと視線を外す。そして苦戦している兵士の傍へと駆け寄り、手に持った棍を突き出して魔物を弾き飛ばした。

「相手のほうが小さいのだから、それに合った戦い方をしろ。こちらのほうが間合いは広いのだから上手く立ち回れ。懐に潜り込まれると戦いにくい」

「は、はい！　わかりました！」

志信より多少歳若い少女は緊張気味の声で返事をする。その様子に微笑ましさを感じた志信は、魔物が起き上がってくるまでアドバイスをすることにした。

「何も刀や魔法だけで攻撃しなくても良い。相手のほうが自分よりも小さくて軽いなら、蹴りだって十分に有効な攻撃手段になる。ある程度は体術も扱えなければ、刀が折れたときに苦労するぞ？」

そうやってアドバイスをしていると、今度は横手からニカクウサ

ギが突っ込んでくる。少女が慌てて刀を構えるが、それよりも早く志信は地面を蹴っていた。

額に生えた角で突き刺そうと突進してくるニカクウサギの顎を蹴り上げ、浮いた体に前蹴りを叩き込む。人間と違って受身を取ることができないニカクウサギはそのまま後ろへと吹き飛び、木の幹に叩きつけられた。相手が起き上がってくるかわからないため、志信は残心としてしばらく構えは崩さない。そして十分に残心を取ると、少女へと目を向けた。

「もちろん、体術だけで相手を倒すという手もある。こちらの場合は刀と違って相手を殺さずに無力化しやすい。用途に応じて使い分けることも重要だな」

ニカクウサギは気絶しており、それを見た少女は尊敬と熱のこもった目を志信に向ける。

「では、まずは実戦に慣れることだ」

その視線の意味を理解できなかった志信は、それだけを告げてその場を後にした。

太陽が中天を過ぎ、村のほうから鐘の音が響く。それを聞いた義人は、近くにいた農民に声をかけた。

「今の音は？」

「あれは正午を告げる鐘です」

「そうか。なら丁度良い、休憩にしよう」

手に持っていた鍬を地面に立てると、義人は作業している兵士達に向かって振り返る。

「今から昼食と休憩を取る！　森の中で戦っている者にも伝えてくれ！」

「はっ！」

傍にいた兵士が頭を下げ、すぐさまタルサの森へと走っていく。それを見送った義人は手拭いで汗を拭いた。そして自分が耕した畑を見て満足そうに笑う。

「これは良いストレス発散になるな。カグラに頼んで城の裏手に畑でも作ろうか？」

無理だとわかっているが、冗談交じりにそんなことを言ってみる。そしてひとまず畑付近にいた魔法剣士隊を整列させると、楽しげに笑いかけた。

「なんだ、みんな泥だらけじゃないか」

「ヨシト王が一番泥だらけだと思いますが？」

調子の良い兵士がそう言うと、周りの兵士も楽しそうに笑う。

「ははは、そうだな。張り切りすぎたよ」

義人も一緒に笑い合う。そうやってしばらく笑っていると、村のほうから優希が小走りに駆け寄ってくる。

「義人ちゃん、おにぎりとお茶を用意しておいたよ。早く食べに行こう？　あ、顔に泥がついてるよ？」

そう言うなり濡れた手拭いで義人の頬を拭う。それを見ていた兵士の間から口笛や冷やかしの声が飛んだ。

「うらやましいですな、ヨシト王」

「いやまったく。俺達も顔を拭いてもらいたいなー」

「なー」

「ええい、やかましい！　態度が砕けすぎだお前ら！」

口ではそう言うが、魔法剣士隊の態度は義人自身許容している。部下や臣下などより、友人やそれに近い関係のほうが義人にとっては嬉しいからだ。

そうやって笑いつつ、義人達は村に向かって歩き出す。

「優希、おにぎりは誰が握ったんだ？」

「んーと、わたしの他には同い年ぐらいの女の子達だよ？」

優希の言葉を聞いた義人は、後ろについてきている連中に振り返る。

「聞いたか？　おにぎりは村の若い女の子が握ってくれたそうだぞ！？　味わって食えよ！？」

『はっ！　味わって食べます！』

男性兵士全員が迷いなく大声で返事を返す。

「お前ら一致団結しすぎ」

見れば、女性兵士はやや白い目で同僚を見ている。

そうやって村の広場まで行くと、一緒に農作業していた村人が若

い女の子からおにぎりを受け取っていた。
義人は並んで受け取るように指示すると、自身も列に並ぶ。すると、今度はタルサの森の方角からミーファが砂煙を上げながら走ってくる。

「ヨシト王！　何故わたしの部下を貴方が指揮しているのですか！？」

どうやら、突っ込みのためにわざわざ走ってきたらしい。

「何故って……流れでつい？」
「そんなことでヨシト王の手を煩わせるわけにはいきません！　というかお前達！　何故普通にヨシト王を並ばせているんだ！　王だぞ！？」

周りの兵士に怒鳴るミーファに、義人は肩を竦めた。

「こらこら、ミーファ。俺が自分で勝手に並んでるんだからいいだろ？　というか、今日の俺は休養が目的でもあるんだ。好きにさせてくれよ」
「しかし……」
「王様命令」

伝家の宝刀を抜く。するとミーファは一瞬呻き声を出し、嘆息した。

「……わかりました」
「よし。それならミーファも並べよ。腹減っただろ？」
「はっ！」

一礼して最後尾に並ぶミーファ。しかし、別の列の最後尾に志信がいるのを見てそちらへと移動する。それをニヤニヤしながら見送った義人は、いつの間にか自分が受け取る番が来ているのに気づいて前を向いた。

「さて、腹減った……ん？」

差し出された竹皮に包まれたおにぎり。それを差し出していた少女に見覚えがあった義人は浅く記憶を辿っていく。そんな義人を見ていた少女は、嬉しそうな顔で頭を下げる。

「お久しぶりです、ヨシト王。親元に帰していただき、本当にありがとうございました」

「やっぱりあの時の……そっか、無事に帰れたか」

借金の形に取られ、商人のゴルゾーに贈り物と称して義人に差し出された少女達の中の一人だった。他におにぎりを手渡している少女達も、どこか見覚えがある。

「一緒の村だったんだな。なにはともあれ、無事で良かった」

「はい、他の子もみんな無事に戻れました。ヨシト王にはとても感謝しています」

本当に感謝をしているのだろう、含みもない綺麗な笑顔。義人は逆に申し訳なくなり、目を逸らす。

「別に気にしないでくれ。元はと言えば、悪政を敷いていた前王が悪いんだし。俺は人として当たり前のことをしただけだよ」

「そういうわけにはいきません！　わたし達はみんな、もう二度と親元に帰れないと思っていましたから、本当に感謝しているんです。

それに、あんなにたくさんのお金までいただいてしまって……」

心苦しそうな少女を前に、義人は歯を噛み締めた。

今の義人が個人の裁量で扱える金額は限られている。王とはいえ、私的な判断でお金を渡すと決めたために財務担当の者を通して大金を渡すことはできなかった。そのため一人あたり五百ネカずつぐらいしか渡せなかったのだが、目の前の少女はそれを大金と喜んでいる。

それが、ひどく心苦しい。

「それに、借金がいつの間にか帳消しにされていたとお父さんが言ってました。王様のおかげなんですよね？」

花の咲くような笑顔だった。目の前の少女は、借金を帳消しにしたのが義人だと信じきっている。

「以前の王様は酷い人でしたけど、今回はヨシト様が王様で良かったです！」

実に、嬉しそうな声だった。他の少女や、一緒に農作業をしていた村民も頷いている。

「……そうか。いや、ありがとうな」

感謝の言葉が、笑顔が重い。

自分の取った行動が誰かを幸せにして、誰かを不幸にするかもしれないという重圧。

それは、覚悟していた。いや、したつもりだった。だが、実際に目の前で感謝されると言い表せぬ喜びを感じ、判断を誤った時のことを考えると鉛のように気分が重くなる。

「本当に、ありがとう」

結局、その少女の顔をまともに見ることができずに義人はその場を後にした。

少し離れた芝生の上に腰を下ろした義人は、竹皮を解いて中のおにぎりに手をつける。無言でつかんで口に運ぶと、程良い塩の辛さに頬を緩めた。

「こりゃ、優希が作ったやつかな……」

自分好みの味付けに、そう呟く。すると、それを聞いたかのように優希が歩み寄ってきた。その手には二つの湯飲みを持っている。

「はい、義人ちゃん。お茶だよ」
「ああ、サンキュ」

湯飲みを受け取ると、優希は義人の隣に腰を下ろした。その距離は肩が触れ合いそうなほど近く、長年義人の隣を歩んできた優希の距離だ。そして自分の分のおにぎりを頬張ると、笑顔を見せる。

「美味しいね？」
「そうだな。これ、優希が作ってくれたんだろ？」
「うん！　わかってくれたんだ……嬉しいなぁ」
「……ま、長い付き合いだしな」

ぼんやりと呟き、義人は雲一つない青空を仰ぎ見る。その表情は

どこか遠くを見ており、その表情が何か考え事をしていると読み取った優希は、倣うように青空を見上げてポツリと呟いた。

「義人ちゃんの思う通りにしたらいいんじゃないかな？」

「俺の考えを読むなんて……エスパーか？」

「ううん。でも、義人ちゃんに限ってはそうかも」

見上げていた顔を下げ、優希が義人に向かって柔らかく微笑む。長年見慣れたその笑顔を前に、義人は肩の力を抜いた。そして、苦笑混じりに話し出す。

「なんていうかさ、今になってプレッシャーを感じてるんだ。初めてゴルゾーが来たときに『歪んだこの国を良くしてやろう』って強く思えたんだけど、それに伴う責任の重さが、な」

「きつい？」

「きついっつーか、重いな。今日あの子らの笑顔を見てそう思ったよ。そんで、俺なんかで王様が務まるのかってちょっと不安になった」

サァ、と芝生の上を風が撫で、二人の髪を揺らす。

「そう考えると、昔の殿様とかってすごいよな。この国は人口八万人くらいらしいけど、その何倍もの人達の生活を守っていたんだから」

「義人ちゃんが弱音を吐くなんて、珍しいね」

「そうか？　まあ、相手が優希だしな」

「――――ふふ、嬉しいな」

義人の言葉に、優希が心から嬉しそうに笑う。

「義人ちゃんなら大丈夫だよ。義人ちゃんが良いと思った方向に進めば、みんな幸せになれるよ」
「簡単に言うねー。買い被りだっての」
「そうかな？　でも、少なくとも」
優希が立ち上がり、満面の笑顔で振り返る。
「わたしは、そう信じてるよ」
信頼しきったその表情に、義人は小さく笑う。
「じゃあ仕方ないな」
義人も立ち上がり、兵士達を交えて笑い合っている村民の方へと目を向けた。
「もっと頑張ってみる。あと、ありがとな優希。気が晴れた」
「義人ちゃんの役に立てたのなら、それだけで嬉しいよ。さ、残ってるおにぎりも食べちゃお？」
「そうだな。腹が減ってはなんとやら。まずは腹ごしらえだ」
いつもの力ある表情に戻った義人を、優希は陶然とした笑顔で見つめる。
意識が残ったおにぎりへと向いていた義人は、そんな優希の笑顔に気づくことはなかった。

第二十二話：税率改定

「明日より税率を引き下げることにした」

タルサ村の視察から二週間ほど経ったその日、朝礼で臣下を謁見の間に集めた義人は開口一番そう言った。

脈絡もなく、かつ何気なく告げられたその言葉に臣下は反応することも忘れ、ただ呆然としている。そして、いち早く立ち直ったのはアルフレッドだった。

「ヨシト王……突然何を？」

「いや、税率を引き下げるって言ったんだけど。聞こえなかったか？」

不思議そうに首を傾げる義人に、アルフレッドは眉間を軽く押さえる。

「税率とはそんな簡単に決められるものではないですぞ？　そもそも、今の財政でもいっぱいいっぱいじゃというのに……」

「あ、それは大丈夫だ。ここ一週間ほどで何回も試算してみたが、六割に引き下げても問題ないって結果が出たから」

にこやかに告げる義人。ようやく事の次第を理解し始めた臣下達は、互いに顔を見合わせて何事かをささやき合う。

「お待ちくださいヨシト王！」

そんな中で、恰幅の良い男が声を張り上げた。

「なんだ？」
「税金を引き下げることなどできませんぞ！　そもそも、引き下げると言ってすぐに引き下げられるものではありません！　いや、第一何故私に相談されないのですか！？」

声を張り上げた男……財務大臣のエンブズ＝カリーは顔を赤くして反発する。たしかに財務大臣のエンブズには話を通しておくべきだろう。だが、義人は息巻くエンブズを見て軽く足を組んで薄く笑った。

「どうしたエンブズ。ずいぶんと焦った顔してるじゃないか？　税金を引き下げたら困るか？」
「当たり前です！　先程アルフレッド様がおっしゃいましたが、ただでさえ財政は逼迫しているのですぞ！？　税金を引き下げてしまえば、国の運営が成り立ちません！」

名前を呼ばれたアルフレッドが若干顔をしかめたが、それに気づいた者はいない。義人はそんなエンブズを一瞥すると、カグラに目を向けた。

「エンブズはああ言っているが、最終決定権は誰にある？」
「ヨシト様です」
「だよな」

頷き合う。だが、そんなことではエンブズは納得しない。

「それは横暴というものですぞヨシト王！　何のために臣下がいるとお思いか！？」
「何のため、ねぇ……」

義人は顔を真っ赤にしながら叫ぶエンブズを冷めた目で見つつ、懐から丸めた紙を取り出して口を開いた。

「財務官、ロッサ＝ハーネリア。同じく財務官、ウェルツ＝ハンネア。同じく……」

書面に書かれている名前を読み上げる。その数は文官のおよそ半分で、呼ばれなかった者達は不思議そうな顔をした。

今呼んだ名前は、視察の前日に横領の件で呼び出した文官から聞いた名前である。ゴルゾーやカグラを使って一週間ほどで証拠を集め、すでに“話”をした者達だ。

「お前らはどう思う？　税率を六割に下げたら国の運営は無理か？」

「は……それは、その……」

最初に執務室に呼ばれた文官、ロッサはエンブズを見てすぐに目を逸らす。それを見た義人は、小さく笑った。

「ロッサ。お前は誰の臣下だっけ？」

「もちろん、ヨシト王の臣下です」

「だよな。で、どうだ？　無理か？」

急かすでもなく、ただ思うがままに話せと言外に告げる。ロッサは数回深呼吸をすると、頭を下げた。

「無理ではありません。十分可能だと思います」

「ロッサ！　貴様何を抜かしておる！！」

ロッサの言葉に激昂するエンブズ。ロッサは一瞬身を竦ませるが、すぐに反発するように口を開いた。

「ヨシト王、今名前を呼ばれた者全員と話されたのですか？」
「ああ。いや、みんな聞き分けが良くて助かったよ」

おどけるように言うと、呼び出された文官達は苦笑する。
証拠を突きつけられ、厳しい罰を言い渡されて懐柔されたのだ。
横領した金を返せば義人は約束通り何もしなかった。ただ、『頑張って働け』と言うばかりである。

「でしたら、十分に可能でしょう。私はそう思います」
「そうか、他の者は？」
「はっ。私も可能かと思います」

続々とロッサに同調する文官達。その様子を見ていた武官達は、感心したように義人を見ていた。

「やれやれ、ヨシト王が手を回していたみたいだな」
「そうね」

騎馬隊隊長のグエンが呟き、ミーファが同意する。そんな会話が聞こえるはずもない義人は、まったく気にせずエンブズに目を向けた。

「さて、お前以外の文官は皆可能だと言ってるが？」
「ぐ……ぬぅ……そう、ですな。では、可能なのでしょう……」

歯を噛み締めるエンブズ。そこには義人に対する忠誠心など欠片も見えず、邪魔だと思う心しかない。
それに対して、他の文官達はある程度の忠誠心を義人に対して持っている。

本来税金の横領などは大罪で、最悪斬首となっても仕方なかった。しかし、義人は水に流すと言う。

例え横領した金を返すことと、これから真面目に働くことなどの条件があったとしても、生活するには十分の給料をもらっている。それに、彼らとてこの国の人間だ。この国が良くなる方法があり、良くすることが出来る人物が上にいるなら従うにも抵抗はない。

「まあ、税率を変えると言ってもすぐにできるわけじゃないか。農民は作物を収穫してから年貢を納めるものだしな。だから、下げられるところから順次税率を六割に引き下げる」

「それならば時間的にも余裕がありますな……」

義人の言葉を吟味したのか、エンブズは頷く。そこに納得の色を見た義人は、周囲を見回して反対意見がないか目で尋ねた。そして、意見がないと判断すると大きく頷く。

「よし、それでは朝礼はこれで終了とする！　今日も皆の働きに期待する！」

その言葉で締めくくり、朝礼は終了となった。

「あー、疲れた……」

執務室に戻ってきた義人は、早速執務用の机に向かう。それを見たカグラは苦笑を浮かべた。

「嬉しいことですが、ずいぶんと熱心ですね？」

「まあな。税率を引き下げるとなったら俺の仕事も多くなるだろ？速やかに片付けないと後で困るからな」

政務に勤しむ義人を見て、カグラは内心で嬉しげに笑う。

義人達がこちらの世界に来て一ヶ月ほどだが、最近は元の世界に戻りたいとも言わなくなってきている。

初めて商人のゴルゾーに会った時以来政務に身を入れてくれるようになったが、コルサ村の視察に行った後はさらに真剣になっていた。

真剣に考えれば考えるほどこの国に愛着を持ち、元の世界に戻ろうとしなくなるだろう。

この国の未来を考えるカグラにとっては、そう事が運ぶように努力した甲斐があったというものだ。あと何か一押し欲しいところだが、今のところ思いつく手はない。

いっそのこと女性を与えてみようかとも思ったが、何のかんので義人は拒否するだろう。

奥手というか、微妙に純粋なところが義人にはある。鈍感なだけかもしれないが。

「いっそのこと、わたし自らいきましょうか……」

ポツリと呟く。カグラ自身義人のことは憎からず思っているし、それはそれで名案に思えた。

「ん、なんだって？」

「い、いえ！　なんでもないです」

珍しく慌てた様子で首を横に振るカグラ。頬が微妙に赤く染まっており、義人は首を傾げた。

「風邪か？　最近証拠集めでこき使っちまったし、きついなら休んでくれよ？」
「はい、大丈夫です。ヨシト様こそ、無理はしないでくださいね？」
心配を向けてくる義人に、カグラは微笑みながら頷く。
「ま、体力には自信あるしな。志信には負けるけど」
「そう言えばシノブ様やユキ様は何を？」
「志信はグエン隊長に頼まれて騎馬隊の連中と一緒に訓練してる」
手元の書類を眺めつつそう言うと、カグラは意地悪げな笑みを浮かべた。
「あらあら、それでミーファちゃんの機嫌が悪かったわけですか」
最近義人の頼みでいつも通りに喋るようになったカグラは、ミーファをちゃんづけで呼ぶ。それを聞いた義人は小さく噴出した。
「なんだ？　やっぱりミーファは志信がいないと寂しいのか？」
「そうですねー。訓練相手としてなのか、別の感情なのかはわかりませんけどね？」
そうは言うが、カグラは後者だと思っている。
知り合ってすでに十年以上の付き合いになるが、あんなミーファを見るのは初めてだった。だが、まだそこまで強い感情ではないだろう。友人でありライバル、そしてちょっと気になる存在。そんなところだ。
「へぇ……まあ、志信ならお似合いじゃないか？」
「ヨシト様もそう思います？」

「ああ。今度へそくりで温泉旅行でもプレゼントしてやろうか？」
「ぷれぜんと……贈り物のことでしたね。でも、へそくりって……」
へそくりという言葉にカグラは苦笑する。義人のいうへそくりとは、横領した文官から返還させた金のことだ。
その額しめて五百万ネカ弱。
大半は国の予算に戻したが、誰にも知られずに動かせる金があったほうが良いというカグラの進言に従って五十万ネカほど隠してある。

「そういや、ゴルゾーに頼んだエンブズの情報まだかな？」
王印を押しながら、義人はそう呟く。エンブズの情報というのはもちろん、不正に関した情報のことである。
文官の証言からも、エンブズが税金を横領しているのは間違いない。だが、証拠がないため罰を与えることもできなかった。

「罰って、エンブズ様も他の文官の方と同じ罰にするんですか？」
「そのつもりだけど、やっぱり無理かな？」
エンブズが横領した税金の額は、他の横領した文官全員分の横領額を足してもまったく届かない。最低でも十倍以上の五千万ネカは横領しているとの見立てが出ていた。

「そこまでいくと逆にすごいと感心するよな」
「もう、そんなことで感心しないでください。最低でも五千万ネカですよ？」
「最低っていうところがポイントだな。カグラはエンブズがどのくらい横領してると思う？」

義人がそう尋ねると、カグラは僅かに考えこんで指を一本立てる。

「このくらいかと」

「一億、か。いや、俺には想像もできない数字だな」

十年で一億ネカ横領したということは、一年で千万ネカ。ロッサの三十万ネカの横領がずいぶんと可愛く見える。

「王の権限で提示させた帳簿も、綺麗に改ざんされているみたいだしな。こうなったらゴルゾーの情報待ちか……やっぱり、情報機関の強化が必要だな」

干しポポロを口に運びながら呟いた義人の言葉に、カグラは困り顔を浮かべた。

「短期間ではむりですよ。お金もかかりますし、まずは目の前の問題を片付けてからにしないと足元をすくわれちゃいます」

「そうかー……いや、そうだな。よし、まずは書類を片付けなきゃな。出来ることからしておかないと」

義人は気合を入れ直すと、手元の書類に目を通し始める。

切り替えが早くなった義人をカグラは感心したように見つめ、最後にはいつもの笑みを浮かべた。

「頑張りましょうね、ヨシト様」

「おう。書類を見て決めるだけなら楽だからな、どんとこい」

その一時間後、税率を下げるために決めなければいけない書類が山のように押し寄せてくるのだが、それはまた余談である。

第二十三話：情報

「あー……こっちは用水路の嘆願書で、こっちは文官からの税率引き下げに伴う注意書き……こっちは干しポポロで、こっちはお茶……こっちは、ああ、なんか綺麗なお花畑が見える……」
「ヨ、ヨシト様？　そっちは壁で何もありませんよ？」

急に遠くを見て呟き出した義人の肩を揺さぶるサクラ。義人の目の下にはクマが出来ており、ずいぶんと消耗しているように見える。

「あれ、婆ちゃん？　なんだよそんなに手を振って。え、こっちに来いって？　しょうがねえなぁ……」
「ちょ、ヨシト様！？　な、なんで近づいてくるんですかぁ！？」

焦点の結ばぬ目つきでフラフラと歩み寄ってくる義人に、サクラは若干恐怖を覚えて一歩後ろに引き下がった。義人は時折呻き声を上げており、さながらゾンビのように恐怖感を醸し出している。

「婆ちゃん……ばあちゃん……って、婆ちゃんは死んどらんわあああああ！！」

あともう少しでサクラに手が届く距離まで近づいた途端、カッと目を見開いた義人は咆哮した。そして慌てて周囲を見回す。

「あ、あれ？　俺って椅子に座って政務をしてなかったっけ？　って、どうしたサクラ？　そんなところに座り込んで」

目の下にクマを作った義人は不思議そうに首を傾げる。サクラは苦笑いを浮かべると、すぐに立ち上がった。

「い、いえ。なんでもないです。それよりもヨシト様、そろそろきちんと休まれたほうが良いと思います……」
「んー……そうだなぁ。今日くらいはちゃんと寝ないと、そろそろ発狂しそうだわ、マジで」
すでにさっきそうなってました。
サクラは喉まで出かけた言葉を飲み込むと、すぐに微笑を浮かべる。
「そ、それじゃあ眠気覚ましにお茶をお淹れしますね！」
「ああ、悪いけど頼むよ」
おっかしーな、と呟きつつ執務机に戻る義人を見て、サクラはため息を吐いた。
義人が税率を下げると宣言して早四日。
税率を下げるにあたって様々な事柄を片付けなくてはならない義人は、文字通り一日中執務室にこもりきっていた。
「これが俗に言う引きこもりか……」
感慨深げに呟きながらお茶を飲むが、その表情はいつもより疲労の色が滲んでいる。
今は一秒の時間も惜しいと三日連続徹夜で政務を処理していたが、それもそろそろ限界が近い。
最初は睡眠を取っていたのだが、書類の処理や判断を始めると寝るのが面倒になるから不思議だ。もっとも、政務のほうはそれに見

合った分処理することができ、あとは三日ほどいつも通りにこなせば終わるだろう。

別段急ぐ必要はないのだが、あまり時間をかけるとエンブズが何か仕掛けてきそうだ。そう考えた義人は、体に鞭を打って政務を片付けていた。

やれやれと軽く肩を回してみると、かなり重く感じられる。体のほうも大分硬くなっている気がした。試しに背を伸ばしてみると、バキバキやらボキボキやら、何やら不穏な音が背中から聞こえる。

「よ、良ろしければ肩をお揉みしますけど……」

あまりに大きな骨の音に、おずおずとサクラが告げると義人はしばし黙考する。普段なら『女の子に肩を揉ませるなんて』と言って断っただろう。しかし、現在の体調は厳しいことこの上ない。

「じゃあ、悪いけど頼むわ」

肩揉みならばされている最中でも書類も読める。そう内心で自己弁護すると、義人は体の力を抜いて椅子に背を預けた。

「では、失礼します」

一礼してサクラが肩に触れる。

小さい手だなー、と義人が思ったが、サクラらしかったので何も言わなかった。

「いきます」

そう言うなり、サクラはかなり強い力でマッサージを始める。その力の強さに、義人は少しだけ驚きの声を上げた。

「サクラってけっこう力あるなー。メイドさんの仕事って、けっこう力がいるのか？」
「ふぇ！？　え、あ、そ、そうですね。ええ、はい。けっこう力がいるんですよ」
何故か動揺するサクラ。だが、肩揉みの気持ち良さに義人はどうでも良くなってそれ以上聞くこともない。
義人が心地良さそうに目を細めていると、サクラが穏やかに微笑んだ。
「やっぱり、お疲れみたいですね。こんなに肩が凝っちゃってますよ？」
「流石に三日連続徹夜はなぁ。受験勉強や試験勉強でさえ徹夜はしたことなかったぞ」
大作ＲＰＧをクリアするために三日連続で徹夜したことがあるが、それは内緒である。
「まあ、今日くらいはゆっくり寝るよ」
それをおくびにも出さずに言うと、サクラは何度も頷いた。
「是非そうしてください。カグラ様も、『今日寝ないようだったら無理やりにでも寝かしつけます』って言っていましたから」
「うん、『無理やりにでも』という言葉にそこはかとない危険な香りがするな」
最近遠慮がなくなってきたカグラのことだ、強制的に気絶させられ……もとい、眠らされる危険がある。

「いやいや、さすがにそれはないか」

自分に言い聞かせるように呟くと、今はひとまずサクラの肩揉みでリラックスすることにした。

「くちゅん！」

「む？　どうしたんじゃカグラ、風邪かの？」

突然くしゃみをしたカグラに心配そうな目を向けるアルフレッド。カグラは苦笑しながら手を振る。

「いえ、風邪じゃないです。突然くしゃみが出ただけで……」

義人に聞かれたことの確証を得るためにアルフレッドの部屋にいたカグラは、可愛らしく小首を傾げた。

「誰かが噂でもしてたんですかね？」

何も知らないカグラは、心底不思議そうにしていたそうな。

サクラに肩揉みをしてもらい、多少体が楽になった義人は再び書類の山との格闘を始める。　カグラが戻ってきていないため、専門的なものは後回しだ。

お茶を啜りつつ政務をこなしていると、扉の向こうから守衛の声が響く。

「ヨシト王、商人のゴルゾーが面会を申し出ておりますがいかがなさいますか？」
「ゴルゾー？　うん、通してくれ」
「はっ！」

返事と共に執務室の扉が開かれ、ゴルゾーが入室してくる。堂々とした足取りで、いつかの腰を低くしたような態度ではない。
執務机の前まで来ると、ゴルゾーは膝を突く。

「お久しぶりです、ヨシト王。お疲れのようですな」
「ああ。といっても、お前だって忙しさなら俺に負けないだろ？」
「そうですな」

互いに苦笑し合う。

「それで、首尾は？」

早速尋ねてみると、ゴルゾーにしては珍しく渋面を作る。

「思わしくないですな。以前の横領の情報を集めるために、いささか派手に動いてしまいましたので。エンブズ様も、元々私相手に何かを注文するということもありませんでしたから」
「そうか……ゴルゾーでも無理だったか」

良い報告が聞けず、義人は僅かに肩を落とす。そんな義人を前に、ゴルゾーは僅かに声を小さくする。

「確証のない話で良ければ、お話できますが？」
「……本当か？」

義人が確認するように聞くと、ゴルゾーはチラリとサクラに目線を向けた。その意味を理解した義人は首を横に振る。

「サクラなら別に良いさ。頑張って俺を支えてくれてるし、信用している」

「左様ですか。では……」

そう言うなり、ゴルゾーは懐から一枚の紙を取り出して目を落とす。

「エンブズ様が贔屓にしている商人が何人かいますが、最近その商人の周りで金の動きが活発になっているようです」

「ふむふむ……その商人達はどんな奴らだ？」

「注文されればどんな商品でも取り揃える者達です。私のように真っ当な商人とは違い、麻薬や毒物なども平気で売り捌くでしょう」

「よし、今度逮捕しようじゃないか」

即断する。

そんな危険な連中は放っておけない。そう判断した義人だが、目の前のゴルゾーがそれを押し止める。

「それはお待ちを。彼らとて、お客に頼まれなければそういった物を進んで売ることはないのです」

「……わかった。悪いのは売る方じゃなくて、注文する方だって言うんだな？」

「はい。それに、彼らにしかない独自の販売ルートもあります。私でも入荷できないものを、彼らなら手に入れることができるかもしれません」

「なるほど、適材適所だな。ゴルゾーは真っ当な物を売ってくれて、

そいつらには危険な物を売ってもらう。それで、そいつらの周りで金の動きが活発ってどういうことだ？」

義人が尋ねると、ゴルゾーは再度手元の紙に視線を向けた。

「おそらくですが、何者かが高額の商品を購入したのでしょう。あいにくと詳細を調べることはできませんでしたが、その商人達の中の一人が酒場で豪遊しておりました」

「その何者かっていうのがエンブズか？」

「おそらくは、ですが。それとこれも未確認の情報ですが、エンブズ様がその商人達を贔屓し始めたのが十年ほど前からしいのです」

「十年っていうと、前王が暗殺された年か……なるほど、臭うな」

目を細める義人に、ゴルゾーが釘を刺すように忠言する。

「全ては未確認の情報ですので、そこをお忘れなきよう」

「わかってるって。他に何か情報はあるか？」

「そうですな、一つ言わせていただけるなら、きちんと睡眠を取ってくだされ」

「そりゃお互い様だろ」

「私は毎日睡眠を取っております。あと、食事もきちんとお取りくださいい」

「む、ゴルゾーって意外と世話焼きなんだな」

「いえ、ヨシト王は大切なお客様ですので」

サラリと告げるゴルゾーに、義人は苦笑した。

「そういう正直なところがあるから信用できるわ。それで、今回はいくら払えばいい？」

「いえ。今回は納得のいく情報は得られませんでしたからな。前回

けっこうな額をいただきましたので、今回はけっこうでございます」
「……やっぱ、そういうところがあるからこそ信用できるな」
「光栄ですな。それでは、今日のところは失礼します」

義人の言葉に慇懃に一礼すると、ゴルゾーは立ち上がって執務室の扉へと向かう。だが、途中で立ち止まると今思いついたように口を開いた。

「余計なことかもしれませんが、食事の毒見役などは多いですか？」
「突然何を言い出す、と言いたいところだけど、俺も毒殺される可能性があるってことだろ？
でも、カグラがすでに対抗策を取ってるよ。カグラの奴、解毒の魔法を食事にかけて俺に食べさせるんだ」

この干しポポロもな、と苦笑する義人に、ゴルゾーは口の端を僅かに吊り上げる。

「おやおや……カグラ様も心配なのでしょう。ヨシト様の身に何かあっては困りますからね」
「なんかその笑い方がムカつくぜ。まあいい。また何か調べてほしいことがあったら頼むわ」
「はい。どうぞ今後ともご贔屓に」

商人らしい言葉で締めくくると、ゴルゾーは部屋を出て行く。それを見送った義人は、両腕を上に上げて体を伸ばした。

「んー……情報はつかめなかったか。仕方ねぇ、今はとりあえず、できることから片付けるか」

上げた腕を下に下ろし、積まれた書類へと伸ばす。

サクラに肩揉みをしてもらったとはいえ、その表情には疲れが色濃く残っていた。

第二十四話：夜へ

「よし、それでは今日の訓練はこれまでとする」

棍を片手に携えた志信がそう言うと、息も絶え絶えな調子で兵士からバラバラに返事が返ってくる。それを見たグエンは苦く笑った。

「シノブ殿の体力を化け物と見るか、それともうちの部下が軟弱と見るか迷いますな」

「いえ、俺には『強化』という魔法がかかっていますから。もしその魔法がかかっていなかったら、多少身体能力が落ちます」

「多少、ですか……」

今度は乾いた笑いを零す。

今日志信が訓練を手伝ったのは騎馬隊だが、別にずっと馬に乗っているというわけでもない。馬に乗ってから訓練もするが、まずは歩兵として戦えなければ騎兵に成りえないからだ。

地上で槍が振れなければ、馬上で振っても意味がない。それに馬に乗るにも体力がいるため、今日志信が提案したのは体力の向上やバランス感覚についてだった。

志信なりに訓練メニューを考えてみたのだが、その結果は目の前の死屍累々。

身体能力が『強化』されていることを考慮したのだが、魔法を使えない兵士からするととんでもなくハードだった。

隊長のグエンは訓練をなんとかこなしたが、途中で脱落した者もかなりいる。それらを一度見回すと、志信は少し考え込んで頷く。

「では、明日は馬に乗っての訓練をしよう」

「おや？　シノブ殿は馬にも乗れるんですか？」

「一応、といった程度ですがね。以前祖父に流鏑馬（やぶさめ）をさせられたことがあります。それに、ここ最近で馬に乗るのにも慣れました」

ちなみに流鏑馬とは、疾走する馬上から的に向かって鏑矢を射る騎射の技術である。

「ほう……馬上ならば、こちらにも分がありますな」

「そうですね。むしろ俺のほうが教わるのも良いかもしれません」

この世界に来ておよそ一ヶ月。

元の世界とは違い、武を修める者としては充実した日々を送れている。

最近は義人が少し無理をしているが、義人がすると決めたことに口は出さない。それが良い結果になると信じている志信は、ひとまず自分のできることをやっていた。

実は訓練などをけっこう楽しんでいたりするのだが、それに気づいているのは誰もいない。

「……む？」

そこで志信はふと、遠目に誰かが自分を見ているのに気づいた。

距離はおよそ百メートル。城の扉で隠れるように誰かが見ている。

志信が気づいたことに向こうも気づいたのか、慌ててその身をすぐさま城の扉の中へと引っ込めた。

「シノブ殿？　どうかされましたか？」

急に気配を鋭いものに変えた志信に、グエンが尋ねる。どうやら疲れのせいでグエンは気づかなかったらしい。

「……いえ、なんでもないです。気のせいでしょう」

最近、よく誰かが自分を見ている気がする。

志信は首を傾げると、訓練の片付けを行うことにした。

夕食時になり、義人はため息を一つ吐いて体を伸ばす。その横では優希が椅子に座り、楽しそうに義人を眺めていた。

「義人ちゃん、今日は一緒にご飯を食べようね？」

「ああ、そうだな。良い気分転換になるし」

ここ数日は執務室に食事を運んでもらっていたため、食事を取るときは一人だった。しかし、山のように積まれていた書類の片付けもそろそろ終わりの目処がつく。普通にこなして二日か三日で終わるだろう。ここまでくれば急ぐこともない。

それを理解しているために、優希も義人と一緒に食事を取る。昨日までは食事をしながらも書類を片付けている義人の邪魔をしたくなかったので、一人もしくはサクラと一緒に食事を取っていた。

ちなみに、再三に渡る義人からの突っ込みと優希の協力により、食材費を抑えた上に品数も多く、美味しい食事を作ることに厨房の調理人一同が燃えているのは余談である。

「よし、それじゃあこいつに王印を押して……っと。これでいい。んじゃ、食堂に行くか」

一段落させ、義人は立ち上がって肩を回す。昼にサクラに揉んでもらったのだが、すでに疲れが蓄積されて再び凝っていた。

王印は机の上に置き、優希を促して執務室を後にする。

「あれ？　王印は置いてていいの？」
「ああ。どうせ俺しか使えないらしいからな」
「そうなんだ。王剣は？」
「え？　あー……そういや寝室に置きっぱなしだ。ていうか、俺が持ってても飾りにしかならないしなぁ。志信ぐらいの腕になれば、いざというときに使えるんだろうけど。俺は素人だしな」

せいぜい志信の家に遊びに行った際、少しだけ基礎を教えてもらった程度だ。それから訓練を積んでいるわけでもないため、役に立たない。あとは喧嘩で拳や蹴りを振るった程度だが、志信を相手にしたら一撃で負ける自信が義人にはあった。

「そうかなー。義人ちゃん運動神経良いのになー」

不満そうな優希に、義人は苦笑する。

「馬鹿だな、ここには戦いを本職にしている人がわんさかといるんだぜ？　俺が戦う必要はないって。というか、おっかねえ」

心からの本音を最後に呟き、義人は食堂の扉を開く。すると、そこではすでに志信が椅子に腰をかけていた。

「おっす志信。今日はグエン隊長の隊の訓練だっけ？　お疲れさま」
「いや、俺よりも義人のほうが大変だろうに。俺はただ、体を動かしていただけだ」
「その『ただ体を動かしていた』に巻き込まれて、どれだけの人が被害を被ったんだろうな……」

少し遠い目をしながら言ってみるが、あながち間違いではない。

十日ほど経った後に騎馬隊の兵士から連名で、『シノブ殿の訓練をもっと優しいものにしてくれ』という嘆願書が届くのは別の話である。

「まあいいや。それで、兵士のほうはどうだ？　志信が訓練に参加するようになって三週間以上になるだろ。ちょっとは強くなったか？」

「三週間程度ですぐに強くなれるほど、武術は甘くない。しかし、無駄な動きが多少減ったな。それと、魔物相手に何度か実戦を積ませたから勝負度胸も少しはついただろう」

何事にも通じることだが、継続は力なりだ。志信は兵士がほとんど成長してないと思っているが、実際は体力や筋力がつき、三週間前に比べれば確実に強くなったと言えるだろう。ただ、志信はその強くなった兵士を軽く倒しているので実感が沸かないだけである。

そんな志信の話を聞いていると、ふと思い出したように志信が首を捻った。

「そういえば、ここ最近誰かに見られている気がするのだが、義人や北城は大丈夫か？」

突然の質問に、義人と優希は顔を見合わせる。

「誰かって……誰よ？」

「それはわからん。こちらが気づくと、すぐに慌てて身を隠してしまうのだ。だから顔の確認もできん」

不思議そうな志信だが、話を聞いた義人は思わず吹き出した。

――ミ、ミーファさんバレてますよ！

内心でそう叫び、笑い転げたくなるのを我慢する。

「クク……い、いや、あれじゃね？　ハハハ、きっとほら、志信のファンだって」

堪え切れなかった笑い声が混じったが、なんとか誤魔化そうとする義人。それを聞いた志信は腕を組んで悩みこんだ。

「しかし、あの視線はただ見ていただけとは思えない。まるで俺を観察していたような……」

「いやいやいや！　だから！　ミ……いや、なんでもないわ」

志信にバラしたら真っ二つにされる気がする。

直感がそう告げたので、義人は口を閉ざした。

「ミ？」

「いや、なんでもないって。な、優希！？」

「そうだねー。うん、藤倉君“も”けっこう鈍いところがあるんだね？」

「お、優希も言うなー」

優希の言葉に再び笑う義人。言葉の意味をきちんと理解しなかったのだろう。優希は密かにため息を吐く。

「よーし、それじゃあまずは食事にしようぜ。話は食べながらでも出来るしな」

ひとまずそう締めくくると、義人と優希も自分の席へと向かった。

この国では現代のような正確な時計はないが、水時計を使って一定の時間で鐘を鳴らし、それを参考に生活している。

鐘は一日で十二回鳴るため、一回ごとの間隔は約二時間。

夕食は大体午後六時頃から取り、就寝は午後十時からだ。それ以降は城の必要なところ以外火を消し、見張りや見回りの兵士がいるだけとなる。

義人は八時頃に地下の浴場で風呂に入り、そこから再び政務をこなす。

ちなみに、風呂などは魔法で火を発生させ、それで水を温めている。戦いなどに使われると思われがちな魔法ではあるが、こういった日常の場でも多く使われていた。

義人は本日十二回目の鐘、すなわち零時の鐘の音を聞くと書類から顔を上げる。

「やべ、いつの間にかこんな時間かよ……寝ないと明日あたりカグラに怒られそうだな」

真剣に考えていると、時間が経つのも早い。昨日までなら徹夜をしていただろうが、流石に四日連続徹夜は体力的に無理だ。

カグラとサクラは十時の鐘が鳴った時点で部屋に返しており、それ以降は自分の判断でできる簡単な仕事や、元の世界の知識を使って何か作れないかと考えていた。

残った仕事は専門の者と相談をしなければいけないため、どのみち今日の仕事はここまでだろう。

そう判断した義人は、書類を軽く片付けて机の上や壁に設置されている明かりを息で吹き消す。すると、すぐに執務室は闇に包まれた。光は外からの月明かりだけで、窓から離れるとかなり暗い。

「おお、こえー。暗闇から何か飛び出してきそうだ。って、そんな魔物いないだろうな？」

冗談交じりに呟きつつ、執務室の扉を開ける。すると、扉の前に立っていた守衛の兵士二人が直立不動の体勢を取った。

「ヨシト王、お疲れ様です！」

「ああ、お疲れ。というか悪いね。俺が遅くまで仕事しなかったら、二人もすぐ家に帰れるのに」

「いえ。ヨシト王の身辺警護という重大なお役目ですから。それに、ヨシト王はこの国を良くするために頑張ってくださっています。それに比べたら、扉の脇で立っているだけなんて楽な仕事ですよ」

「ははは、良くなってるかまだわからないけどな。さて、それじゃあ俺は寝室で寝るよ。今日は寝ないと、明日カグラに眠らされるからな。物理的に」

最後の『物理的に』という言葉を聞いた兵士二人が目を逸らす。

「そ、そうですか。それならすぐにお休みになられたほうが良いですよ。ええ、それがヨシト王の身のためです」

「ちょ、待てや！　何故に目を逸らしながらそんなことを言いますかね！？」

「いえいえ目を逸らすなんて滅相もありません」

「そう言いながらも壁を見てるのは何故かね？　んん？」

見過ごせない態度に義人が突っ込むと、兵士二人は顔を見合わせて頷く。

「言ってもいいかな？」

「大丈夫じゃないか？　むしろ知らないとヨシト王が危ないだろ」

小さく話し合うと、一つ咳払いをして義人へと向き直る。

「実はカグラ様ですが、岩を素手で砕けます」

「は？」

突然告げられた言葉に、義人は素で聞き返す。

「実はカグラ様ですが、岩を素手で砕けます」

そんな義人にもう一度繰り返す守衛。義人は言葉の意味を噛み締めるように理解すると、顔を青くした。

「う、うっそだー」

「いえ、これが嘘じゃないんです。カグラ様はこの国一番の魔法使いですから、岩を素手で砕くというのはまだ序の口ですよ。噂では、城の城壁くらいなら一撃で木っ端微塵にできるとか」

真剣な顔で語る守衛二人に、義人は唾を飲み込む。

「そ、それじゃあ……カグラが俺を物理的に眠らせるっていうのは……」

「殺す、とはいきませんが、あばら骨の二、三本は折れる覚悟をしろということでしょう。ですからヨシト王。すぐに寝室でお眠りください」

本気で心配しているらしい守衛二人に、義人は頷き返して駆け出す。

「おー……ヨシト王、走っていっちゃったよ」
「いや、まさか信じるとはねぇ」

遠くなっていく義人の背中を見つつ、二人の守衛は顔を見合わせて小さく笑う。これで義人が徹夜をすることもなくなるだろう。
さっきのは義人の身を案じた嘘であり、本当にカグラが岩を素手で砕いたり、城壁を破壊するというのはあくまで嘘だ。

「でもさ、さっきの冗談本当だって話を聞いたことがあるんだけど……」
「あはは、まさか」

義人を見送った守衛二人は、とりあえず笑いながらその場を後にした。

「あー、やべえ。寝ないと殺されちまうぜ」

寝室にたどり着いた義人はそう呟き、軽く身を震わせる。

「は、はは……いや、まさか、ねえ？」

自分にそう言い聞かせるが、疲れきった頭は考えることすら拒否した。明かりをつけるのすら面倒で、部屋を照らすのは月明かりのみ。
義人はとりあえず服を寝間着に着替えようと上着に手をかけ、

「ヨシト様」

扉越しに声をかけられ動きを止める。
今しがた噂していたため一瞬カグラかと身を固くするが、声色が違ったので安堵して聞き返した。

「サクラか。どうしたんだこんな時間に？　ていうか、部屋に戻って良いって言っただろ？」

そう声をかけるが、サクラからの返事はない。
義人が訝しげに眉を寄せると、寝室の扉がゆっくりと開いてサクラが入ってくる。ただし、サクラの服装はいつものメイド服ではなく、寝巻き用の若干薄いパジャマのような服だ。服の前をボタンで留めるタイプの服だが、いくつかボタンが外れている。

「あ、えーっと……サクラ？　ここはお前の部屋じゃないぞ？」

義人は自分が部屋を間違えたかと一瞬本気で悩んで辺りを見回すが、いくら疲れた頭でもそんな馬鹿なことはしない。
サクラは一歩義人に近づくと、艶然とした笑みを浮かべる。

「夜のお勤めに参りました」

いつもの幼い笑顔とは違う、大人びた女性らしい微笑を前にした義人は若干慌てて頭を働かせていく。

――お勤め……仕事か？　何かサクラに任せていた仕事があったっけ？　肩揉み？　いやいやサクラの性格ならいつものメイド服で来るだろ。そもそもここは寝室だぞ？　あ、最近寝室で寝てなかったから布団を取替えにきたのかな？　うん、そうだ。そうに違いない。

グルグルと思考が回り、強引に答えを決めて一つ頷く。

「ああ、ベッドメークね。なんだ、今頃になって気づいたからメイド服を着るのが面倒だったんだな。よし、それじゃあよろしく」

ひとまずそう言うと、義人は目を逸らして深呼吸を吐いた。

――――うん、きっと自分が言ったことで間違いはない。

内心でそう言い聞かせ、義人はもう一度深呼吸をする。

そんな義人の傍で、薄い布が地面に落ちる音がした。

第二十五話：月下氷刃

パサリ、と布が地面に落ちる音がして、義人は思わず振り返る。そして、思わず絶句した。

「あ……う、え？」

言葉にならない。目の前の光景が理解できず、義人の思考は完全に停止した。

窓から差し込む月明かりに照らされ、浮かび上がるサクラの姿。上半身を覆っていた服は地面へと無造作に脱ぎ捨てられ、その裸身を月明かりに晒している。

「いや、あの、ちょ、ちょっとサクラ？」

何故上着を脱いでいるのか理解できず、いや、その意味こそ理解しているが頭に浸透しない。

「ふふ、どうかしましたか？　ヨシト様」

そんな義人を見て愉しげにサクラが笑う。そして一歩、また一歩と義人に近づく。

「あー、えっと、だな。何のつもりだと聞いてみたいがどうだろう？」

いまだに混乱から抜けきらない義人はそう尋ねてみる。サクラはもう一歩近づくと、色気の溢れる仕草で口元に手をやった。その際僅かに胸が揺れ、義人はすかさず目を逸らす。

「夜のお勤めです、ヨシト様。その意味はおわかりでしょう？」

さらに一歩サクラが近づき、それに合わせるように義人が一歩後ろに引く。

「い、いやー。わかるっちゃわかるんだけど、わかりたくないというか何というか……」

据え膳食わねばなんとやら。義人の脳裏に官能的な想像が僅かに浮かび上がるが、それを気力で捻じ伏せた。

「もしかして遠慮しているのですか？　大丈夫です。わたしはこういったことも含めてヨシト様のお世話をするのですから」

サクラの瞳が妖しげに輝き、口元は媚を売るように緩んでいる。ともすれば遊女のような雰囲気。男としての本能が刺激され、義人の思考を奪おうと本能を攻め立てる。

「ね？　ほら、ヨシトさまぁ……」

甘える声。両の腕を前へと差し出し、サクラは義人へ淫蕩に微笑む。

「……はは」

その仕草に、ひどく違和感を覚えた。艶のある笑みも、どこか温度が感じられない。

本能は男としての行動に出ようとして、理性が口を動かす。

「――お前、誰だ？」

疑念が口から零れる。一度警戒を覚えれば、後は楽だった。理性が警鐘を鳴らし、思考が切り替わる。疲れは危機感で吹き飛ばし、義人は睨むようにサクラを見据える。

「ひ、ひどいです、ヨシト様。貴方のメイドのサクラですよ」

そんな義人の視線に怯えたようにサクラが身を震わせた。その動作だけを見るならたしかにサクラのものだが、どこか違和感がある。

「ハッ、サクラがそんな大胆なことをできるわけないだろ」

ゆっくりと距離を取りつつそう言い放つ。するとサクラは再び艶然とした笑みを浮かべた。

「ヨシト様、人とは様々な顔を持つものです。わたしにもこういう一面があるとは思えませんか？」

訴えかけるようにサクラが一歩前に出る。義人もなんとか下がろうとするが、後ろはすでに壁だ。

「大丈夫です。怖いことなんて、何もないですから……」

笑みを浮かべながら近づいてくるサクラ。その笑みはどこか人形染みていて、義人は僅かな恐怖を覚える。それでもなんとか恐怖を捻じ伏せ、義人はサクラの様子を窺った。

身長や顔はまったく同じ。スリーサイズは当然知らないが、おそらくこれも同じだろう。だが、頭の隅で理性が警鐘を打ち鳴らしている。

警戒している義人を見たサクラは、歩みを止めて悲しそうな表情を浮かべた。

「……ひどいです、ヨシト様。勇気を振り絞って来たのに、わたしを拒絶するんですね？」

目には涙が浮かんでおり、声は震えている。作り物の感情だと思っても、義人は少し罪悪感を覚えて少し目を逸らした。

「ああ、悪いけど突然すぎるよ。固いことを言うみたいだけど、もっとお互いを知ってからだな……」

「そうですか……だったら」

目を逸らしながら答えた義人に、サクラは肩を落とす。

義人は何と声をかければいいか迷い、

「死んでください」

告げられた言葉に、驚いて身を引いた。そして、それが義人の身を助ける。

軽い風切り音。何気なく振ったサクラの腕から伸びる、透明の氷刃（ひょうじん）。西洋刀を形取ったその氷刃は、身を引かねば野菜でも切るように首を叩き落しただろう。

「なっ！？」

首のほんの数ミリ前を通り過ぎた横薙ぎの一閃に、義人は驚きの声を上げる。

「もう、避けちゃ駄目ですよヨシト様。ちゃんと今ので死んでくれ

なきゃ」

そんな義人を見たサクラは、クスクスと笑い声を立てた。そして、今度は腕を振り上げる。

「動かないでくださいね？　頭から一気に斬っちゃいますから」

口の端を吊り上げ、サクラが笑う。

言葉の意味を理解するのとほぼ同時、右手を振り上げたサクラが踏み込んでくる。義人は生存本能に突き動かされて咄嗟に横へと転がった。転がった後のことなど考えない、生き延びるための動き。

それでもサクラの氷刃は義人の上着をかすめ、切れ端が宙に待う。

「あーもう。避けちゃ駄目って言ったじゃないですかぁ。仕方ないですね、ヨシト様ったら」

愉しげに嗤うサクラ。その表情はどこか陶然としており、目は焦点を結んでいない。

地面に転がる義人の背を、激しい悪寒が通り抜ける。向けられた殺気に体が竦み、足が震えた。それでも何とか自分を奮い立たせ、義人はゆっくりと立ち上がる。

「氷……サクラって、魔法使えたんだな……」

右手を覆っている氷の刃について尋ねてみると、サクラはお茶を入れるときのような笑みを顔に浮かべた。

「王の傍に仕える者が弱いわけがないじゃないですか。わたしはメイドですが、何かあればヨシト王を守る役目もありました」

「……それが今では俺を殺すってか？」

笑えねぇと吐き捨て、義人は寝室の扉に目を向ける。部屋の外には寝室担当の守衛の兵士がいるはずだ。その兵士の手を借りて、なんとかサクラを押さえ込む。

そう考え、頭が否定する。

何故寝巻き姿のサクラを守衛の兵士がそのまま通した？　メイド服ならまだわかるが、明らかにいつもと違う様子のサクラを通すわけがない。なら外の兵士は？

サクラを警戒しつつも思考を巡らせていると、サクラが小さく笑った。

「さっきから扉のほうを見ているみたいですけど、無駄ですよ？外の兵士には眠ってもらいました。当分目を覚ましません」

解答を示すサクラだが、義人は内心で舌打ちする。

それならすぐに逃げたいところだが、サクラが魔法を使えるとなると話は別だ。背を見せればミーファのような遠距離用の魔法を使ってくるだろう。そうなれば、志信と違って避けることもできない。

そもそも、最初の一撃を避けられたことでさえ幸運に過ぎない。二太刀目を避けられたのはどこに向かって氷刃を振ってくるかわかっていたからだ。

このままではすぐに殺されるだろう。そう判断した義人は、ゆっくりと周りに視線を向ける。武器になるようなものがほしいが、ここは寝室だ。

椅子……駄目だ。あんなもの、振り回しにくい。

花瓶……攻撃をしても防御をしても、一撃で割れるだろう。

王剣……最初に引き抜いて以来、ずっとベッド脇に置きっ放しにしていた。だが、今はそれに感謝する。

義人はサクラを警戒しつつ、ゆっくりとベッドに近づく。そんな義人の動きを見たサクラは、殊更楽しそうに笑った。

「王剣ですか。それで、剣を取ってどうすると？　シノブ様と違い、ヨシト様は戦う術（すべ）を持たないはずでしょう？」

「さて、ね。それはどうかな？」

虚勢を張ってみるが、サクラの指摘通りだ。

王剣を抜いたとしても義人は素人に過ぎず、サクラにとって脅威にならない。

「どうぞ、お取りくださいな。サクラは邪魔をしませんから」

余裕か、はたまた油断を誘うためか、サクラは両手を広げて見せる。今のサクラは上半身に何も纏っていないが、この状況でそんなことを気にする余裕はなかった。

宣言通り、邪魔されずに王剣を手にする。そして剣を引き抜こうとして、戸惑った。

剣を抜いてどうする？　剣を抜いてサクラと戦うのか？　サクラを……殺すのか？

柄に添えた手が震え、膝から力が抜けそうになる。頭に浮かんだ嫌な想像が、剣を抜かせない。

殺すかもしれないという恐怖に、殺されるかもしれないという恐怖。

口の中がカラカラに乾き、義人は額に冷や汗がいくつも浮かんだのを自覚した。

「どうしました？　さあ、剣をお抜きなってください。そして……」

剣を抜くこともできない義人に、サクラは優しく微笑む。

「サクラと――――踊りましょう？」

殺気が膨れ上がる。残像が霞む速度でサクラが踏み込み、義人は反射的に鞘に納まった王剣を頭上に掲げた。

「ぐっ！？」

甲高い金属音と共に、両手に激しい衝撃が走る。頭を割りにきた一撃は鋭く、そして重い。　年下の女の子による細腕での斬撃とは到底思えなかった。

義人が斬撃を防いだことに喜悦の笑みを浮かべると、サクラは横へと回転する。独楽（こま）のように回転し、遠心力の乗った横薙ぎ。義人は痺れかけている手で王剣を横へと倒し、なんとか氷刃の間に滑り込ませた。

しかし、王剣で受けた瞬間義人の体が浮き上がる。

「マ、ジ、がぁっ！？」

横薙ぎを防いだ体勢のまま壁へと吹き飛ばされ、叩きつけられた。背中を強打し、口から空気が漏れる。

激しい痛みがあるが、幸いにして骨に異常はないようだ。

以前志信が『戦闘において、どれほど魔法に有利性があるのか』と言っていた。義人は頭の片隅で思い出した親友の言葉に、諦観にも似た笑いを向ける。

「……片手で人を数メートル吹っ飛ばすぐらいは簡単らしいぞ、志信」

痛みを堪え、身を起こす。もしも『強化』に似た効果が働いてい

なかったら背骨が折れていただろう。もっとも、今の状況では大した慰めにもならないが。

「ふふふ……痛かったですか？　でも、ヨシト様が防ぐから悪いんですよ？」

「……馬鹿やろー。防がないと胴体が真っ二つだろうが」

氷刃を片手にサクラが前傾姿勢を取る。義人はなんとか両足で立つと、両手で鞘を構えた。

「それでは、次はもうちょっと激しくいきますね」

言葉と同時に、寝室の温度が下がる。空中に水分が集まり、パキパキと音を立てながら氷へと変わった。

「は、はは……なんつーファンタジーだよ。ちくしょうめ」

矢じりのような形になった氷を見て、義人の口元が引きつる。義人の表情を見たサクラは嬉しそうに笑う。そして、氷の矢が一斉に撃ち出された。

その数は十二。手のひらほどの大きさの氷が唸りを上げて降り注ぐ。距離が近いためそこまでの速度はないが、義人では避けきれない。そして、氷が降り注ぐと同時にサクラが義人の間合いへと踏み込んでいる。

このままでは氷の矢に全身を貫かれ、その後サクラの氷刃によって体を真っ二つにされるだろう。思考することを放棄しそうになる頭を必死に働かせ、義人は目の前の状況を見据える。

放たれた氷の矢は何本かが義人の周囲に飛んでいるため横には動けない。残った矢は義人へと向かっている。その内体をかすめる軌道が三本に、眉間と心臓目がけて一本ずつ。さらに、サクラが氷刃

を振りかぶっている。
ああ、これは死んだな……。
逃げ場はなく、防ぐ手立てもない。義人の思考を諦観が支配し、目の前の死を受け入れようとする。
――だが、体がそれを拒否した。
力が抜けた膝が崩れ、義人の体が頭一つ分下へと下がる。
その瞬間義人の頭と左耳を氷の矢がかすめ、壁へと突き刺さった。
「っ！」
一瞬の忘我。氷の矢が当たらなかったことへの安堵と共に、目の前の氷刃を振りかぶるサクラへ意識が収束する。
「あああああああああああ！！」
生への渇望で、叫びを上げながら我武者羅に鞘を振り上げた。サクラの振り下ろした氷刃と鞘がぶつかり合い、火花を散らす。火事場の馬鹿力か、義人とサクラの力は拮抗する。
「本当にっ！　運の良い方ですね！」
まさか体から力が抜けたことで魔法を避けられるとは思わなかった。そのままサクラは義人と力比べを数秒すると、僅かに眉を寄せる。そしてすぐに後ろへと跳び下がり、右手の氷刃に視線を向けた。
今までは綺麗な曲線を描いていた氷刃が、ところどころ欠けて一回り小さくなっている。
「『無効化』、いや、『反射』？　それとも『吸収』？」

突然問われるが、義人には何のことかわからない。サクラは目を細めると、義人ではなく王剣の鞘に目を向けた。

「なるほど、仕掛けは王を選別するための魔法だけではなかったということですか……小賢しい」

憎々しげに吐き捨てる。サクラが何に対して怒っているかわからなかったが、義人はひとまず王剣を引き抜き、鞘と一緒に片手ずつ構えた。

王剣と鞘を使っての二刀流……ではなく、防御するなら両手に構えていたほうが良いだろうという素人考えだ。

威嚇するように構えを取って腰を落とすが、あくまで適当なものである。

元来二刀流は片手に両手と等しい腕力がなければ成り立たないが、『強化』もどきによって強化されている身体能力ならギリギリで可能だ。

義人は警戒しているサクラと対峙し、

『寒いわ、戯け』

不意に、そんな声が脳裏に響いた。

第二十六話：風と知識の王剣

『寒いわ、戯け』

突然聞こえた声に、義人は目を瞬く。

「……サクラ、何か言ったか？」

「小賢しいと言いました」

「そうか、じゃあ違うわ」

ついいつものノリで返してしまったが、サクラは自分を殺そうとしている人物である。義人は空耳かと王剣を握り直す。

『ようやく剣を抜きおったな、この戯けめ。最初に引き抜くなりすぐに鞘に戻すなど何を考えておる』

再び脳内に声が響く。

やべえ、恐怖のあまりおかしくなったか、俺。

まさか恐怖で狂うことになるとは思わなかった。あまりの緊張感に精神が異常になったらしい。

先程とは違う、嫌な汗が背中を伝う。そんな義人をサクラが訝しげな目で見ていた。

「……そうやって油断を誘うつもりですか？　ですが、そうはいきませんよ」

「い、いや、違っ！？」

『さっきから何を言っておる。早く目の前の人形を妾（わらわ）で叩き斬らん

か』

「うっせえ！　電波の癖に命令すんな！」

思わず怒鳴る。突然怒鳴った義人を、サクラは哀れんだ目で見た。

「ヨシト王……わたしが、すぐに楽にして差し上げますね」

「ちょ、そんな哀れんだ目で見ないでくれ！？　俺は正常だっての！」

今にも殺されそうだが、弁解しなくては精神衛生上悪すぎる。

『誰が電波か、戯けめ。お主、『王』であろう？　妾を引き抜いておいて、そうでないはずがない。それと、声に出すな。念じよ』

「は？　念じる？」

『心の中に言葉を浮かべよ。そのくらい考えてわからんか、戯け』

「戯けって……ていうか、誰だお前」

視線をあちこちに向けるが、寝室には義人とサクラ以外誰もいない。

『前を見んか！　くるぞ！』

叱咤の声に慌てて王剣と鞘を構える。見れば、すでにサクラは地を蹴っていた。

狙いは心臓。放つは氷刃の突き。防がねば、容易く殺される。

『右に体を捻れ！　捻りながら相手の武器に鞘を叩きつけよ！』

声に体が追従する。体を右に回転させつつ、左手に持った鞘を氷刃に叩きつけた。すると簡単に氷刃が砕け、空中へと消えていく。

『左足を一歩前に出して軸足にせよ！　体を捻って右後ろ回し蹴りじゃ！』

促されるままに体が動く。まるで誘導されるかのように左足を前へと踏み込み、軸足を基点に体を捻る。そして遠心力の乗った後ろ回し蹴りをサクラの腹部へと放ち、吹き飛ばした。

「きゃっ！？」

サクラの体が宙に舞い、そのまま寝室の扉へと叩きつけられる。咄嗟に両腕でガードしたらしいが、義人自身芯にくるような蹴りだった。下手すれば、ガードした腕が折れたかもしれない。

「だ、大丈夫かサクラ！」

我に返って駆け寄ろうとする。

『待たんか戯け！　お主はさっきから何をしておる！　そんな魔法人形なぞさっさと片付けんか！』

「誰が戯けだ！　サクラに……」

そこまで言ったとき、声の台詞に足が止まる。

「魔法人形、だと？」

『気づいておらんかったのか？　そやつは魔法人形じゃ。人間ではない。だから早く妾で叩き斬れ』

「マジかよ！　っていうか、お前まさか……」

義人は、右手に持った王剣に目を落とす。

『やっと気づいたか、この戯けめ。妾は『風と知識の王剣』じゃ。この剣に植えつけられた擬似人格とでも言えばわかりやすかろう。外部からの魔力吸収により、今しがた起動したところじゃ』

「……喋る剣って、なんてファンタジーだ……っと、この世界はそんな世界だったか」

『理解したか？』

「ああ。俺は義人だ。さっきは助かった」

『ふん。妾の役目は、私を引き抜いた者を助けることじゃ。礼などいらん』

「そうか。いや、でもありがとうな」

『礼はいらんと……横に跳べ！』

声に体が従い、横へと身を投げ出した。今まで立っていた場所を幾多もの氷の矢が通り過ぎ、壁へと突き刺さる。

「あ、あぶねー」

『油断するでない。まだあの人形は止まっておらんぞ』

王剣の声に従ってサクラを見ると、ユラリと幽鬼のように立ち上がっている。先程の義人の蹴りで右腕が折れたのか、二の腕から下が不自然に曲がっていた。

「ひどいです、ヨシト様。わたしの腕を折るなんて」

裂けるほどに口の端を吊り上げ、サクラが凄惨な笑みを浮かべる。痛みを感じている様子がなく、義人は息を飲んだ。

「ほ、本当に人形なんだな？」

『そうじゃ。あの者からは生命の鼓動を感じぬ。だから安心して斬

るがよい』
「安心してって……サクラの姿をしてるのに斬れるわけないだろ！？」
人間とは視覚に左右される生き物である。目の前のサクラが人形と言われても、義人には斬れるわけがない。
「他に止める方法は！？」
『体の中心に動力の魔法石があるから、それを貫くしかあるまい』
「斬るのと変わらねーよ！？」
『ならば、殺されるか？』
王剣からの声が一段低くなる。
『殺さなければ殺される。それがわからぬほど愚かではあるまい？』
「ぐ……それしか、方法はないんだな？」
苦渋を含んだ声。相手は人ですらない魔法人形に過ぎない。だが、姿形が人であるものを斬るのには大きな抵抗があった。しかし、殺さねば殺される。
元の世界での倫理観が、殺し合いという極限の状況で理性とせめぎ合う。殺すのではなく、壊す。その二つにどれほどの違いがあるか義人にはわからなかったが、一度深呼吸をすると鞘を捨てて王剣を両手で構えた。
「……わかった。斬る」
死にたくない。その一念で王剣を構え、義人はサクラを見据えた。

『その覚悟や良し。斬るなら最初に妾を振るがよい。風の魔法で動きを止める』

「魔法？　使えるのか？」

『さっきも言ったぞ？　妾は『風と知識の王剣』だと』

自信溢れるその言葉に、義人は僅かな安心感を覚える。そして覚悟を固めると、一息に駆け出した。

対するサクラは氷の矢を生み出し、正面から迫りくる義人に向かって撃ち放つ。

『振れ！』

短い一言に、義人は迷わず王剣を振る。すると一陣の風が吹き荒れ、氷の矢の軌道を横へと逸らす。さらに、突風はサクラの体を壁へと叩きつけた。

「あああああああ！！」

踏み込み、王剣を振り上げる。

人の姿をしたものを斬る後悔は後ですればいい。今は、生き延びる。

それだけを考え、振り上げた王剣は袈裟懸けにサクラを切り裂く。手に伝わる“斬る”感触に吐き気がするが、それを飲み下して王剣を振り切った。するとサクラの動きが止まり、その姿が崩れていく。

まるで幻のように消え去ると、今までサクラいた場所に一つの人形が転がっていた。

木で作られた、小さな人形。どこかで見たことのある人形だと義人は記憶を漁る。

「……『お姫様の殺人人形』か」

それは、いつの日か商人のゴルゾーが売りにきた人形だった。
義人は本当に人形だったことに安堵すると、力が抜けて床に座り込む。

『良くやった。だが、まだまだ荒い太刀筋じゃのう』
「知るか……剣を振ったのは今日が始めてだっての」

一気に気が抜けた。だが、このまま座り込んでいるわけにもいかない。義人はなんとか立ち上がると、寝室の扉を開ける。
扉の脇には兵士が二人倒れており、義人は慌てて駆け寄った。

「おい！　大丈夫か！？」

見た限り外傷はない。口元に手を当ててみれば、きちんと呼吸もしている。人形の手によって気絶させられたのだろう。
ひとまず大事がないことに安堵すると、義人はサクラの部屋へと走る。
廊下は必要最低限の明かりしか灯されておらず、守衛の兵士も見当たらない。途中でカグラの部屋の前に差し掛かり、義人は若干荒くカグラの部屋の扉を叩いた。

「カグラ！　起きてくれ！」

何度か扉を叩くが、カグラからの返事はない。

『中には誰もおらんようだぞ』

右手に提げた王剣からの声に、義人は舌打ちを打つ。

「こんなときにどこへ行ったんだ？」

今は時間がない。そう判断した義人は再び走りだす。

義人やカグラのような高官とは違い、使用人扱いであるサクラの部屋は遠い場所にある。

頭に叩き込んである城の地図を思い出しながら廊下の角を曲がり、目の前に人影があるのを見てすぐに足を止めた。

「誰だ！？」

王剣を構え、問いただす。相手も手に持った何かを構えようとしたが、相手が義人だとわかると直立する。

「こ、これはヨシト王！　どうされましたか！？」

人影は執務室の守衛を勤める二人の兵士だった。義人は安堵して王剣を下げると、すぐに指示を飛ばす。

「魔法人形がサクラの姿をして寝室に忍び込んできた。とりあえず人を集めてくれ。俺はサクラの無事を確認する」

「はっ！　では、私がお守りいたします！　お前は人を集めてくれ！」

「わかった！　それではヨシト王、失礼します！」

すぐさま一人の兵士が駆け出し、もう一人は義人に従って走り出す。

そうして走ること一分ほど、使用人の部屋が集まっている区画にたどり着いた義人はサクラの部屋を目指して走る。兵士が置いていかれないように必死な形相で走っているが、気が逸っている義人に気にする余裕はない。

廊下の絨毯を滑るように疾走し、義人は廊下に誰かが倒れているのを遠目に見つけた。

この一ヶ月で見慣れたメイド服とその顔は、サクラのものだ。義人はすぐさま駆け寄ると、王剣を放り出してサクラを抱き起こす。

「サクラ！　おいサクラ！　しっかりしろ！」

頬を叩いてみるが返事はない。義人はすぐに、ついてきた兵士へ目を向ける。

「すぐに医者を呼んでくれ！」

「は、はっ！　わかりました！」

再び兵士が駆け出し、廊下の角に姿を消す。揺らすと拙いと判断した義人はサクラを床に寝かせた。すると、サクラの目が開く。

「あ……ヨシト、様？」

「ああ。大丈夫かサクラ？　どこか痛いところはないか？」

そう尋ねると、サクラは義人へと手を伸ばす。

「サクラ？　どうした？」

どこか痛いのだろうか、と心配する義人に、サクラは口元を笑みの形に変える。

「もう一人のわたしを殺してきたんですね？」

「――――え？」

その言葉を理解するには、あと一瞬足りなかった。

目を見開いたサクラが義人の胸倉をつかみ、体を入れ替えて地面へと転がす。そしてすぐさま義人に馬乗りになると、凄惨な笑みを浮かべた。

「お、まえ！　『お姫様の殺人人形』か！？」
「はい。人形が一つだけだと思いましたか？」

義人は王剣に手を伸ばそうとするが、それに気づいたサクラが氷の塊を放って遠くへと弾き飛ばす。
それならばとサクラを跳ね除けようとするが、その上に乗られては力が入れにくい。その上魔法で身体能力を上げているのか、逆に押さえ込まれるほどだ。
必死にあがく義人だったが、そんな義人を嘲笑うように空中にいくつもの氷の矢が作られていく。
この場所では誰かが来る可能性があったため、サクラはすぐに行動に移す。

「それじゃあ、死んでくださいね」

笑顔で告げられた言葉と共に、氷の矢が降り注いだ。

第二十七話：人形との戦い

「まったく、頑張ってくれるのは嬉しいですけど、ヨシト様にも困ったものです」

サクラの部屋でお茶を飲みながら、カグラが呟く。それを聞いたサクラは苦笑した。

「そうですけど、今日はちゃんと休んでくださるそうですよ？」

「わたしや貴女を王命を使ってまで部屋から追い出しているのですから当然です。もし休んでいなかったら、明日……」

ふふふ、と暗い笑みを零すカグラ。

「わたし達に気を使ってくださったんですよ。ヨシト様は、優しい方ですから」

どことなく嬉しそうなサクラに同意の頷きを返し、カグラは湯飲みに注がれたお茶を飲み干す。部屋の大きな窓が開いており、吹き込む風は涼しく心地良い。

「さて、わたしは少し執務室の様子を窺ってから魔力回復の施設で眠ります。この時間なら、
さすがに休んでくれていると思いますが」

時刻はすでに午前零時へと差し掛かっている。もしまだ執務室にいたら、無理矢理にでも寝室に連行するつもりだった。

「サクラはもう休んでください。明日も――」

そこまで言った時、言葉を遮るように部屋の扉がノックされる。
規則正しく二回叩かれたその音に、二人は顔を見合わせた。

「もしかして、サクラの逢引の邪魔でしたかねー」
「ち、違いますよ！　そんなわけないじゃないですか！」

半分冗談だったのだが、本気で慌てるあたり本当に違うらしい。

「どちら様ですか？」

気を取り直したサクラが尋ねると、扉がゆっくりと開く。

「こんな夜更けに失礼する」

そして、部屋に入ってきたのは志信だった。見知った顔だったことにサクラは安堵し、カグラは眉を寄せた。

「シノブ様、一体どうしたんですか？」
「なに、廊下を歩いていたら二人の声が聞こえてな」
「いえ、そうではなく」

志信の言葉を遮り、カグラは志信の手に持っている物を指差す。

「何故、武器を携帯しているのですか？」

カグラの言う通り、志信は右手に棍を携えていた。それもいつも使っているような手作りの棍ではなく、しっかりと装飾がされている。棍の先端には文字が書かれており、それを見たカグラが顔色を変えた。

「それは『無効化』の術式？　志信様、一体何故……っ！」

何かに気づいたようにカグラが後ろへと跳ぶ。そしてすぐさま腰を落として無手で構えを取った。

「貴方、誰ですか？」

尋ねる声に、先程までの親しさはない。サクラは何事かと志信を注視して、カグラ同様距離を取った。

「カグラ様！」

「わかっています。アレは人間ではなく、おそらく魔法人形の類でしょう」

僅かな時間で看破したカグラに、志信は小さく笑った。

「ふむ、流石は召喚の巫女といったところか」

「人形が、一体何の用です？」

低い声でカグラが尋ねる。志信は問いに対して、静かに答えた。

「お前達に死んでもらうと思って、な！」

一歩で間合いを潰し、手に持った棍を横に振りかぶる。挙動の速さに反応が遅れたカグラは、それでもなんとか両腕を構えながら後ろへと跳んだ。

「くっ！？」

横薙ぎの一撃を咄嗟に受けとめ、衝撃に逆らわず弾き飛ばされる。サクラは後ろに弾かれたカグラに一瞬意識を裂き、

「そんな暇はないぞ？」

眼前に迫った志信の掌打を腹部に受けて、同じように後ろへと吹き飛ぶ。咄嗟に後ろに飛びつつ、魔法で氷の盾を生み出したがそれでも志信の掌打は止めれなかった。

二人とも開けていた窓から外へと投げ出されるが、空中で体勢を整えると足から着地する。窓からはそれなりに高さがあったが、魔法で身体能力を強化できる二人にとっては問題にならない。

地面を滑るように着地して勢いを殺すと、頷き合ってすぐに駆け出す。

「まさかこんな直接的な手を取るとは……急いでヨシト様のところへ向かいます」

「はい！」

返事を返すサクラ。どこか適当な窓か扉を破壊して城の中に戻ろうと走っていると、それを遮るように人影が立ちはだかる。

「シノブ様！？　いや、こっちも魔法人形か！」

それは、サクラの部屋で襲ってきた志信とまったく同じ姿の志信だった。

「カグラ様、こっちも追いつかれました！」

隙を見せないように確認してみれば、棍を構えた志信がサクラと

対峙している。その手には『無効化』の術式が刻まれた棍を持っており、明らかに魔法対策だろう。

『無効化』とはその名の通り、魔法を無効化する魔法である。

『無効化』の魔法を施した魔法使いの腕にもよるが、魔法使いとしてかなりの差がない限り魔法を防ぐことができる。

主に魔法使いと戦うために兵士の武具に付加する魔法だが、特殊な文字を刻むことによってその武具が壊れない限り永続的な効果を持つ。

「明らかにわたし達を殺す気ですね……まったく、まさかこんな直接的な愚行に出るとは。相手もかなり焦っていると見える」

カグラとサクラは冷静に志信と牽制し合う。だが、いつまでもそうしているわけにはいかない。義人にも同じように刺客が迫っているだろう。

「サクラ、すぐにこの人形を片付けてヨシト様のところに行きますよ」

「はい！」

やはり義人の傍にいるべきだったとカグラは後悔するが、今は眼前の敵に集中する。

相手の姿や能力を真似できる魔法人形は昔から存在しているが、その全てを真似できるはずもない。故に、志信の戦闘能力も完全に真似できないからすぐに倒せる。

そう、カグラは思っていた。

『強化』以外何の魔法の援護もなくミーファを倒したと聞くが、それは試合での話だ。

それに、その程度ならサクラでも十分に可能。

そう判断して――――眼前の志信が姿を消した。

「っ！？」

いや、消してない。ただ、動きの速さに目が追いつかなかっただけだ。離れていたはずの距離はすでになく、眉間目がけて必殺の打突がすでに放たれている。

カグラは咄嗟に首を横に倒し、紙一重で棍をかわした。風圧が髪を数本散らし、カグラは反射的に前へと踏み込む。

右手に魔力で風を集めて真空の渦を作り、鎌鼬（かまいたち）を発生させると、志信の胴体を吹き飛ばす勢いで解き放つ。

「遅い」

だが、それより志信が棍を引くほうが速かった。『無効化』の術式が施された棍先で鎌鼬を薙ぎ払うと、勢いそのままに回し蹴りを繰り出してくる。

カグラは横っ飛びに地面を蹴り、蹴りを避けると共に右手で地面を突き飛ばして回転。そこから左手を志信に向け、今度は城の壁に叩きつけようと突風を放つ。

しかし、これも通じない。事も無げに棍を振るって霧散させると、悠々と間合いを詰めてくる。

まずい……。

ここで初めて、カグラの心に焦りの感情が浮かんだ。

カグラの知らないことだが、ミーファと試合をしたときの志信は本気ではない。出した実力は精々六割ほどだ。そんな志信の姿を真似た『お姫様の殺人人形』は、およそ九割相手の能力を真似ることができる。

その上手に持った棍に施された『無効化』の魔法が厄介だった。

小手先の下級魔法では簡単に防がれる。かといって、カグラの魔力は本来の全魔力の一割も回復していない。それでも並の魔法使い十人分以上の魔力があるのだが、“本気”で戦えばすぐに底をつくだろう。

サクラのほうに目を向けてみれば、カグラ以上に苦戦している。発生させた氷の剣は容易く砕かれ、放った氷の矢はことごとくが弾かれていた。それでもなんとか持ちこたえているのは、防御用に氷の盾を作りだしているからにすぎない。しかし、それも長くは持ちそうになかった。

しかも、戦う間に城から徐々に離されている。城へと向かおうとすればその進路を防がれ、それ以上の後退を余儀なくされた。

義人の部屋付近には守衛の兵士もいるだろうが、もし腕の立つ者の姿を真似た人形が相手なら並の兵士では太刀打ちできない。義人自身も運動能力は高いが、戦いになると話は別だ。もし自分かサクラ、志信やアルフレッドかミーファの姿を真似されれば勝ち目はほぼなくなる。

その思いがカグラをいっそう焦らせるが、対峙する志信の人形が義人の傍へ向かうことを許さない。

「ゴルゾーさんから魔石を買っておくべきでしたね……」

魔石があれば魔力を吸い取って自分のものにできる。だが、ないもの強請りをしている暇もなかった。

戦う場所を城近くの森まで移動させられ、焦りはさらに募る。こうなったら志信かミーファが気づいて義人を助けに向かってくれることを祈るが、前者はともかく後者は期待できない。

武官の寝泊りする場所は義人の執務室や寝室から遠く、何かあっても気づくのは容易ではない。守衛の兵士や見回りの兵士用の詰め所になる部屋もあるが、自分ならまず先にそこを潰すだろうとカグラは唇を噛んだ。

「すみません、ヨシト様」

だから、カグラは覚悟を決めた。

なるべく早く魔力を回復させてくれと、困り顔で言っていた己が主君に対して一言詫びて精神を集中する。

まさかここまで大胆な手で暗殺しようとするなど、見通しが甘かったと認めざるを得ない。助けに向かうための魔力を残しつつ、全力で目の前の人形を破壊する。おそらく回復した魔力は全て使い切ることになるだろうが、義人に死なれるわけにはいかなかった。

気配が明らかに変わったカグラに、警戒の表情を浮かべた志信が距離を取る。

そしてカグラが魔法を使おうとした瞬間、人形の志信が真横へと吹き飛んだ。

「え？」

まだ自分は魔法を使っていない。ならばサクラかと視線を向けてみるが、サクラは少し離れたところで戦っている。

「ふむ、まさか自分自身をこの目で見ることになるとはな……まったく、面妖な」

次いで聞こえてきた声に、カグラは目を見張った。

「シノブ様！？　どうしてここに！？」

もしやまた人形かと警戒するが、今度の志信には人間らしい生命の鼓動を感じた。

「鍛錬をしていたのだが、何やら戦うような音が聞こえてな」

それだけ言うと、すでに体勢を立て直している人形に目を向ける。

「一体何が起こっている？」

「何者かが義人様の暗殺を企てたようです。わたしとサクラは足止めに遭っていました」

「そうか……なら早く行け。アレは俺が潰しておく」

そう言って手作りの棍を構え、目でカグラを促す。カグラは頷くと、一陣の風に乗って駆け出した。それを見た人形が止めようとするが、志信がそれを許さない。人形との間合いを一息に潰し、わざと棍を受けさせて力比べに持ち込む。

カグラの姿が見えなくなると、志信はすぐに距離を取って棍を下段に構えた。それに対し、人形も鏡写しのように棍を下段に構える。

「自分自身と戦えるとはな……」

まったく同じ構えを取った人形に、志信は小さな笑いを零す。

これもまた、良い糧になる。

義人の身に危険が迫っているから時間をかけられないのが残念だ。

志信は自分がどんな動きをするのか客観的に見れることに喜びを覚えつつ、人形と同時に駆け出した。

第二十八話：危機一髪

空中に浮かぶ数多の氷の矢。その量は自身の危険を省みず、相手を確実に殺すためのものだ。先端は矢じりのように鋭く、人の体など容易く貫く。

義人を馬乗りで押さえ込んでいるサクラの姿をした人形は、喜悦の笑みを浮かべて口を開く。

「それじゃあ、死んでくださいね」

その言葉に、浮かんだ氷が落下を始める。そこからさらに加速し、一秒後には全身を氷の矢で貫かれた死体が一つ転がることだろう。

迫り来る死の気配に、義人は恐怖と諦観を覚える。避けようにも体を押さえ込まれ、動くことも叶わない。

――――くそったれ……ここまで、か。

見ている光景がスローモーションになる。迫り来る氷も同じようにゆっくり落下し、義人は引き伸ばされた時間の中で愚痴を吐くように内心で独白した。

――――なんだよ、死ぬ間際に走馬灯なんて見ないじゃねーか……親父、お袋、ごめん。優希、志信、すまん。元の世界に戻るって言ったのにな……。

緩やかに流れる時間の中でそう呟き、義人は目を瞑ろうとする。どうせすぐに死体に変わる身だ。そう思った義人の視界の端で、何かが動く。

緩やかな時間の流れを拒否するように、弾丸のような速度で突っ

込んでくる人影。

「やあああああ！」

それは、優希だった。

ラグビーのタックルさながらにサクラへと飛び掛り、義人の上から弾き飛ばす。それをスローモーションに見ていた義人は、すぐさま我に返って必死に地面を転がった。それと同時に、緩やかだった時間の流れが正常のものへと戻る。

降り注ぐ氷の矢が腕や背中をかすめ、空中に鮮血が舞う。灼熱のような痛みが体に走ったが、それを堪えて壁際まで転がり続ける。

体のあちこちに裂傷を負い、左腕には小さな氷の矢が刺さっているが、死ぬよりは断然良い。義人はすぐに跳ね起きると、離れた場所に落ちている王剣をつかみ取る。

『戯け！　いきなり妾を手放すやつがあるか！』

「すまん！　それは後だ！」

痛みを堪え、左腕の傷口から内部を凍らせようとしている氷の矢を引き抜き、床へと投げ捨てる。

目で見なくとも腕から血が流れ出るのを感じたが、歯を食い縛って左手を持ち上げて剣の柄を握った。そして両手で王剣を構えると、氷刃を優希に振り下ろそうとしているサクラへと駆け出す。

「させるかあああああ！」

無我夢中に、氷刃を纏った右腕を斬り飛ばす。そして返す刀で肩口から腰にかけて一気に切り裂き、剣を振り抜くと同時にそのまま蹴り飛ばした。

サクラの姿を真似た人形はそのまま壁へと叩きつけられ、元の木

作りの小さな人形へと姿を変える。義人は荒い息を吐きながらそれを確認すると、足元でうずくまる優希の傍へと膝を折った。

「おい優希！　大丈夫か！？」

王剣をすぐ傍に置き、肩を抱きかかる。すると、ヌルリとした感触が手に伝わった。慌てて見てみれば、氷の矢で切れたのか優希の脇腹からかなりの量の血が流れ出ている。

「くそ！　おい！　しっかりしろ優希！」

「ん……義人、ちゃん？」

「ああ！　優希、あんまり動くな！　お前脇腹からかなり血が出てるんだ！」

義人はそう言いつつ、周りを見回す。遠くから誰かが駆けてくる音が聞こえ、すぐにでも人が来るだろう。

そんな義人に、優希は“いつも通り”笑いかける。

「わたしはどうでもいいよ。義人ちゃんは、怪我しなかった？」

「どうでもいいって、お前……」

溢れる血の量はそれなりに多い。致命傷ではないが、痛みも大きいだろう。

「ごめんね、義人ちゃん。嫌な予感がしたんだけど、気づくのが遅れちゃったんだ……」

だが、優希は痛みなど感じていないかのように語りかけてくる。ただ義人の身だけを案じて、自分の身などどうでも良いと言わんばかりに微笑んでいた。

「ヨシト王！　大丈夫ですか！？」

そんな二人の元に、守衛の兵士二人が他の人間を連れて走ってくる。それを見た義人はすぐさま指示を出す。

「医者は誰だ！？」

「はっ！　わたしです！」

「まず優希の手当てをしてくれ！　出血が酷いんだ！」

医者を名乗る女性がすぐに優希の容態を確認し、一緒に来ていた部下に目を向ける。

「わたしはユキ様の傷を治します。貴方達はヨシト王の怪我を」

「はっ！」

女性は優希の傷口に手を当てると、精神を集中していく。すると手のひらから暖かな光が溢れ、優希の傷口をふさぎ始めた。

「これは……？」

「治癒魔法です。さ、ヨシト王の傷も治しますので見せてください」

女性の部下らしき者の言葉を聞き、義人は痛みがある部分を向ける。すると部下は数人がかりで義人の傷口に手を当てた。

「ユキ様に比べれば傷は浅いです。ヨシト様、痛みはありますか？」

「い、いや、そんなにない。というか、傷が浅いなら先に優希を治してくれ」

義人がそう言うと、女性の部下は患者を安心させる笑みを浮かべ

る。

「大丈夫です。我々が束になって治癒魔法を使うよりも、隊長一人の方が早いですから」

言われて目を向けてみれば、優希の傷口はすでに大部分がふさがれて出血もほとんど止まっていた。それを見た義人は感嘆の声を漏らす。

「……すごいな」

「我々治癒魔法を使える者の中でも、隊長は別格ですから」

ちなみに彼らは正確には医者ではなく、治癒魔法が使える魔法使いである。多少の外傷程度ならすぐに完治させることができ、病気などを担当する本来の医者とは違った役割を持つ。

治癒魔法は他の魔法よりも適性を持つ者が少なく、その存在は稀少だ。

暖かな光が義人の背中を照らし、時間を追うごとに痛みが引いていく。氷の矢が刺さっていた左腕も治癒魔法をかけてもらうと、傷口がゆっくりとふさがっていくのが確認できた。

「まさに魔法って感じだな」

「時間がかかるので戦闘中には使えませんけどね」

義人の感嘆の声に、治癒魔法使いは苦笑を返す。

小さな傷をふさぐのにも多少時間がかかるため、戦いながら治癒魔法をかける余裕などない。カグラクラスの魔法使いになると話は別だが、並の治癒魔法使いでは精々痛みを和らげながら戦える程度でしかない。

「ふぅ……ヨシト王、これで大丈夫です」
「あ、うん。ありがとう」

治療が終わったのか、痛みはすでにない。試しに腕を回してみるが、特に違和感はなかった。

『ふん、魔法使いの質も落ちたものよ。あの程度の傷を治すのに数人がかりで数分も時を要するとは』
「なんだよいきなり」
『戯け。口に出すでないわ。妾に話しかけるときは心の中で念じよ』

そう言われ、義人は半信半疑で口を閉ざす。

『えーっと、こうか？』
『うむ。やればできるではないか』
『おお、思ったより簡単だな』
『魔力を使った意思疎通は下級魔法の一種じゃからな。もっとも、好んで使う者もあまりおらんが』
『……あれ？　ということは、俺って魔法使ってるのか？』
『魔法とはちと違うな。妾と触れておるから、こちらから強制的に思念を繋いで話しかけておる。妾に触れずに思念通話が出来るようになっておけ』
『えー、無理だって。魔法なんてファンタジーチックなもの、俺には使えねーって』
『戯けが。魔力があれば魔法は使えるようになるわい。己に埋蔵されている魔力量もわからんのか』
『埋蔵て……なんか、得体の知れないものが体に入ってるみたいで嫌だな』

義人は自分の体に意識を向けてみるが、特に何かを感じるという

ことはない。

『うん、わからん』

『この戯けが……まあ良い。その話は後でする。今はまず、事態を収束させよ』

言われて周りの様子を見てみれば、城のあちこちに火が灯されて兵士が走り回っている。どうやら寝ていた者達も起き出してきたらしく、城の中が騒がしくなってきた。

優希も治療が終わったらしく、義人の方へと近づいてくる。

「魔法ってすごいね、義人ちゃん」

「あ、ああ」

今まで重傷を負っていたとは思えぬ明るさで優希が話しかけてきた。義人はひとまず返事を返し、優希の様子を窺う。

傷を負ったのは脇腹だけだったのか、他に治療でふさがれた傷はない。眠っていたのか寝間着用の薄い服を身に着けており、腹部付近が血で黒く染まっていた。裂けた服の隙間からは白い肌が覗いており、傷跡は目に見える限り残っていない。

それを見た義人は、音が立つくらいに歯を噛み締める。そんな義人の様子に、優希は泣きそうな顔になった。

「ど、どうしたの義人ちゃん？　どこか痛い？」

「いや……ゴメンな、優希。さっきは助かった。ありがとう」

礼を言い、頭を下げる。

優希がサクラに飛び掛らなければ、自分は死んでいた。だが、そのせいで優希を危険な目に合わせたことが義人には許せなかった。

心のこもった言葉に、優希は相好を崩す。

「気にしなくて良いよ、そんなこと。わたしは、“義人ちゃんさえ”無事でいてくれればいいんだから」

笑顔の優希に、義人も笑顔を返す。優希の言葉に少しだけ違和感を覚えたが、それを遮るように誰かが駆けてくる。

「ヨシト様！　ご無事ですか！？」

突風のような速度で走ってくるカグラに、義人は眉を寄せた。

「カグラ、お前どこに行ってたんだよ？」
「申し訳ありません！　敵の足止めに時間を取られました！」
「足止め？」
「はい。シノブ様の姿を真似た人形二体に襲われまして……」
「志信を真似た二体の人形って、おい」

もしそちらが部屋に来ていたら、確実に殺されていただろう。義人はその最悪の想像を振り払う。

「倒してきたのか？」
「いえ、思いのほか手強く、現在サクラと本物のシノブ様が戦っておられます。わたしはヨシト様の身の安全を確認するために先にここへ来た次第です」
「サクラ！？　サクラは無事だったのか！？」
「は、はい。最初サクラの部屋に共にいたのですが、そこで人形に襲われまして。城近くの森で戦っているはずです」
「その人形は本物よりも強いのか？」
「いえ、それはないと思います」
「そうか……なら、援軍はいらないな。今頃志信が片付けて……い

や、一応人を行かせたほうがいいか」

そう呟くと、カグラは義人が握っている王剣に目を落とす。

「もしや、ヨシト様自ら戦われていたのですか？」

「ああ。サクラの姿をした人形が部屋に来てな」

「サクラを真似た人形が……よく、ご無事で」

「死に掛けたけどな」

そう言って、背中を見せる。上着のあちこちが裂けており、それを見たカグラは膝を突き、悔恨の表情で地面に擦り付けんばかりに頭を下げた。

「此度の騒動、見通しが甘かったわたしの責任です。なんなりと罰を申しつけください。どんな罰でも喜んでお受けします」

声の響きに嘘はなく、仮に死罪を言い渡せばカグラは迷わず頷くだろう。義人は肩を竦め、頬を掻いた。

「まだこの騒動は終わってねぇよ。カグラの罰は、犯人を捕まえてからだ。ひとまず、寝ている臣下を叩き起こして謁見の間に集める。城の中に住んでいない奴は屋敷に兵を向かわせろ。それと、必要ないと思うけど志信達がいる場所に兵を出してくれ。頼んだぞ、カグラ」

「……はっ！」

「よし、良い返事だ。それじゃあ、俺は着替えてくる。さすがにこんな格好でいるわけにはいかないしな」

そこまで言って、義人は優希に向き直る。

「優希も、服を着替えたほうがいいな」
「うん。それじゃあ着替えてくるね」
「ああ。俺も寝室で着替えてくる。もう大丈夫だと思うけど、一応守衛の数は増やしておくか」

治癒魔法をかけてくれた者達にもう一度礼を言うと、義人は優希を部屋まで送って自身も寝室へと戻った。

「くそっ！」

寝室に戻り、周りに誰もいなくなると怒りを込めて吐き捨てる。寝室にはあちこちに戦いの傷跡があり、義人は先程以上に歯を噛み締めた。

今回の騒動、カグラは自分の責任だと言ったがそれは違う。自分に手を出してくるにはまだ余裕があると高を括っていたのが原因だ。

義人は地面に放っていた鞘をつかみ、王剣をひとまず鞘に納める。

『そう心を乱すでない。原因はお主でも先程の巫女でもなく、事を企てた者であろう？』
「……なんだ、鞘に納めても喋れるのかよ」
『柄をつかんでおるじゃろうが、戯けめ。それに喋っておるのではなく思念じゃと言うとるに。まあ良い。臣下の前で怒った姿を見せなかったのは良くやった、と褒めておく』
「たまたまだよ」

義人は何度か深呼吸をすると、怒りで叫びたくなるのを徐々に押さえ込んでいく。

『……なんじゃ、自分を殺そうとしたことが今になって気に触ったのか？』

「ちげえよ。たしかに俺を殺そうとしたことにも腹が立ったけど、それ以上に相手の取った手段が気に食わねえ。そして、優希に助けられた挙句怪我をさせた自分に腹が立ってるんだ」

『ふむ、なるほどのう。気にするな、とは言えんが、怒りで目を曇らせて大局を見誤るような真似はするでないぞ？』

「ああ。ありがとよ。肝に銘じておくわ」

激情を押し殺しながら言葉を返し、王剣を壁に立てかける。それきり言葉が聞こえなくなったところをみると、やはり触れてなければ思念通話ができないのだろう。

もう一度深呼吸をして気分を落ち着かせると、義人はとりあえず服を着替えることにした。

第二十九話：一夜明けて

騒動から一夜明け、城の中は大分落ち着きつつあった。それでも兵士が忙しなく走り回り、城の者達は誰が犯人かと口々に憶測を並べ立てる。

そんな中で、義人は信用の置ける者をひとまず執務室に集めていた。

優希、志信、カグラ、サクラ、アルフレッド。それに、商人のゴルゾーも呼ぶ。ミーファや騎馬隊隊長のグエンも呼ぼうと思ったのだが、王暗殺という大事件で兵士に動揺が広がらないよう奔走しているためここにはいない。

義人は一夜明けて“冷静に”怒れるようになったので、外見上はいつも通りだ。サクラの淹れたお茶を飲みつつ、小さく笑いかける。

「それにしても、サクラって強かったんだな？」

「あ、あの、その……ヨシト様に危険が及んだ時、傍に仕えている者が戦えなくては駄目ですし、メイド相手なら敵も油断してくれるんじゃないかと……こ、今回の件、まことに申し訳ありませんでした！」

小動物のように怯えた様子のサクラに、『やっぱりこれがサクラだよなー』と義人は内心で思う。

「いやいや、そんなに頭を下げんなって。志信の姿を真似た人形相手に戦ってたんだろ？　むしろ頑張ったじゃんか」

「い、いえ。わたしは防戦一方でしたから……シノブ様が加勢してくださらなければ、負けていました」

「俺なら三秒で死ねる自信があるけどね。そういや志信、さっきから気になってたんだけど、その手に持っている物はなんだ？」

何やら恐縮しているサクラから視線を外すと、いつもとは形の違う棍を持っている志信に話を振る。

「これは人形が使っていた武器でな。丁度良いから二本ともいただいておいた。相手の魔法を無効化する能力があるらしい」

「鬼に金棒だな、そりゃ。相手は強かったか？」

志信の腕前に、魔法を無効化する武器となればまさに鬼に金棒だ。志信は義人の質問に少し眉を寄せる。

「一年前の俺と戦うようなものだった。自分の無駄な動きなどもわかったから、良い経験だったと言えるな」

「なるほど……それじゃあ、朝から暗い表情のカグラ君。君はどうしたんだね？」

暗い表情で立っているカグラに、義人はわざとおどけて聞いてみた。

「いえ、なんでもないです」

だが、返ってくる言葉にも暗い感情が込められている。今回の事件で余程責任を感じているらしく、いつもの朗らかな笑顔はまったく見られない。そんなカグラを落ち着かせるように、アルフレッドが口を開く。

「カグラよ、お主一人が背負い込む問題ではなかろう。儂も此度のことでは何の役にも立っておらんわ。まったく、我ながら情けないのう……ここまで鈍っておるとは」

最後は珍しく愚痴のような言葉だったが、そんな二人を見た義人は何でもないように笑い飛ばす。

「だーかーらー。俺は無事だったんだから、二人が気にすることはないって」

「しかし、無事とは言ってもヨシト様やユキ様がお怪我をされたではないですか！」

義人の言葉に、カグラが反発するように声を張り上げる。

「う、それを言われるとちょっと困る。でもほら、すでに魔法で傷一つないし」

そう言って努めて明るく振舞う義人を見ていた志信は、義人が内心ではかなり怒っていることを感じ取っていた。そして、そんな危険なときに外へと鍛錬に出ていた自身の迂闊さも腹立たしい。

元の世界でもこちらの世界でも毎日続けていた日課だったのだが、方法を改めなければと内心で思う。

そして、ここ最近感じていた視線はおそらくエンブズのものだったのだろう。

『お姫様の殺人人形』は真似させる対象を鮮明にイメージしなくてはいけない。サクラはこの世界の人間だからまだ良いが、志信は異世界の人間だ。イメージするために遠距離から何度も観察していたに違いない。

志信はそんなことを考えつつ、さり気なく隣に立っている優希に目を向けた。

「……」

優希は、無言で義人を見ている。明るく振舞う義人に対して、優

希の表情も笑顔だ。
ただ、目だけは笑っていない。瞳にはどこか濁った輝きがあり、僅かに狂気染みたものを感じる。
どうやら、こちらも大変ご立腹らしい。
話に一区切りがつくと、今まで話の成り行きを見守っていたゴルゾーが前へと出る。

「それでヨシト王。私に用事とは？」
「っと、待たせて悪いな。と言っても、わかってるだろ？」

僅かに義人の視線が鋭くなり、その視線を受けたゴルゾーは頷く。

「今回の騒動に使われた『お姫様の殺人人形』がどこで、誰が売ったものかですな？」
「ああ。まあ、ゴルゾーじゃないことはわかってる」
「おや？　私が『お姫様の殺人人形』を売っているのはご存知のはず。それなのに何故私ではないと？」

言葉には試すような響きがあり、義人は小さく笑う。

「俺を殺すための道具を売るよりも、この先俺相手に商売していたほうが儲かるからだよ。たしかに数千万ネカが一気に手に入るだろうけど、この先王様を相手に商売していれば最終的にはそっちのほうが儲かるだろ？　それに、この国の中で道具の売買ならお前が一番だ。実際に『お姫様の殺人人形』を誰かに売ってしまえば、真っ先に疑われるし足がつく。それがわからないほどお前は無能じゃないだろ？　それに、俺はゴルゾーを信用してるしな」

そこまで言って、言葉を切る。ゴルゾーは鷹のような目を僅かに細め、相好を崩した。

「信用、ですか。いや、光栄です」

楽しげな声。だが、すぐに表情が元に戻ると懐から一枚の紙を取り出す。

「実は、夜が明けぬ内にカグラ様からの使いが来まして。それからすぐに調べておきました。さすがに時間がなかったので深いところまでは探れませんでしたが、この国の中で『お姫様の殺人人形』を所持していた商人の情報です」

義人に紙を手渡すと、ゴルゾーは苦笑染みた表情を浮かべる。

「もっとも、『お姫様の殺人人形』のような高価で稀少な商品を扱える商人は数が少なく、絞り込むのも楽でした。しかも、それを複数所持していたのは一人だけです」

「商人ベッソン……こいつか」

「ええ。二週間ほど前から他の商人に『お姫様の殺人人形』を売ってもらっていたようです。そして、つい最近その『お姫様の殺人人形』が全て売れています」

ゴルゾーの説明を聞きながら、ベッソンについての資料を読み進めていく。

「こいつはどんな奴だ？」

「強欲で、金になるならどんな物でも売り捌く奴です。その紙に書かれた情報を集めるだけでも一苦労でした。そして、エンブズ様が十年前から贔屓にしている商人でもあります」

「それでよく情報が集まったな」

「ベッソンの取り巻きに金を握らせていましたので、そこから情報

を聞き出すことができました」
「そうか……それじゃあ、その握らせた金の分も含めて料金を払わないとな。いくらだ？」
義人が尋ねると、ゴルゾーはしばし考え込む。
「……いえ、お支払いは後でけっこうです、はい」
「なんでよ？」
ゴルゾーの言葉に思わず突っ込みを入れると、ゴルゾーは商人らしい笑顔を浮かべる。
「そちらのほうが金になる気がしまして、はい」
理由はわからないが、そちらのほうが良いらしい。たしかに今の状況で金勘定をするのも気が引けたので、情報の書かれた紙を懐に入れつつ納得の意味を込めて頷いた。
「わかった。それじゃあ事態が完全に落ち着いてから払おう」
そして義人は一枚の白紙を取り出し、筆で文字を走らせる。一分ほどかけて文字を書き終えると、最後に王印を押した。
「さて、それじゃあベッソンに出頭……いや、話を聞きたいから来てもらうか」
そう言って、王命で今すぐに城まで来るよう書かれた紙を見せる。
それを見たカグラはすぐさま頷き、紙を片手に駆け出した。
それを見送り、義人は肩を竦める。

「かなり気にしてるな、あれは……」

どうにかしないといけないな、と小さく呟き、ゴルゾーを除いた全員と共に謁見の間に向かうことにした。

謁見の間ではすでに大勢の臣下が集まっており、口々に今回の暗殺未遂に関して話している。

その中で、ミーファは周りから向けられる矢のような視線に耐えていた。

『前回の王は毒殺で、今回は直接殺そうとしたらしい』

『二代続いて王を暗殺か……』

『前王とは違い、今回の王は良き王だというのに』

ヒソヒソと、それでいてミーファにギリギリ聞こえる声量でささやく。朝からずっとこの調子だった。

周りの文官は白い目でミーファを見て、本人はただ耐える。救いは武官達が味方ということだろう。隣に座っている騎馬隊隊長のグエンもその一人だ。

「まったく、証拠もなしによく喋る。気にするなよ、ミーファ殿」

「ええ。ありがとうございます、グエン殿」

グエンの言葉に感謝の言葉を返し、ミーファは周りの雑音を遮るように目を瞑る。

前王を毒殺したと処刑された父。その父の潔白を示すために努力してきたが、それも実らず今度は自分が次の暗殺犯だと見られてい

る。

昨夜は自室で睡眠を取っており、不覚にも騒動に気づけなかった。起き出したのは全てが終わった後、義人が部屋に引き上げてからだ。新しい王が召喚されてから気が緩んでいたことをミーファは自覚する。

父を暗殺犯に仕立て上げた本当の犯人を見つけるために自分はここにいるのだ。そのために血の滲むような鍛錬を積んできた。本当の犯人を見つけだし、己の手で殺すために。

様々な憶測が飛び交い、その噂の大半はミーファが犯人だと決め付けている。

それが自身の日頃の行いからくるものならミーファもまだ納得した。だが、父を引き合いに出して決め付けられては怒りよりも悲しさが大きい。

そんな悲しげな表情をしているミーファの横で、グエンは内心ため息を吐いた。

ヨシト王、なんとかしてくだされ……。

今回暗殺されかけた人物に、グエンは願う。

義人とは何度か話したことがあるが、実に良い人物だと思った。こちらを全面的に信用し、主君として仕えるには申し分ない。

民のことをよく考え、少しでも税率を下げようとここ数日まともに眠っていないという話も志信から聞いた。

これから先も、今の義人のままでいるなら名君になるだろうとグエンは見ている。曲がらず、折れず、堕落しない。それが叶えば、この国は今まで以上の発展を遂げるだろう。

施政者としては甘いと言わざるを得ないところもあるが、そんな甘さも魅力のうちだと思える。

だから、今回の騒動も上手く収めてほしいとグエンは思っていた。

「何を騒いでおるか！」

そうしていると、謁見の間に入ってきたアルフレッドが騒ぎを見るなり一喝する。腹の底から発せられた叱声に、文官達は声を失って口を閉ざした。

そして遅れること十秒ほど経ち、今度は志信達を連れ立って義人が謁見の間に姿を見せる。謁見の間にいた臣下は皆膝をつき、頭を下げた。

それを見た義人は、まるでいつもの朝礼のように苦笑する。

「あー、みんなそんなに畏まらないでくれって。ほら、頭を上げてくれ」

声にも厳しさはない。そう判断した文官武官は顔を上げ、義人の様子を窺った。

「ヨシト王！　お体のほうはご無事ですか！？」

そんな中で、文官のロッサが声をかける。横領が発覚して義人に許されて以来、仕事に精を出しているこの青年は義人の身を非常に案じていた。

「ああ、大丈夫だよ。ちょっと怪我したけど治癒魔法で治してもらったし、今はまったくの健康体だ」

無事をアピールするように体を動かしてみると、それを見た臣下から安堵の声が漏れる。

そのことに義人は苦笑して臣下を見回し、そのうちある方向を見て眉を寄せた。

「どうしたミーファ。顔色が悪いぞ？　もしかして風邪か？」

膝をついているミーファの顔にいつもの精彩がなくて声をかけたのだが、周囲の人間はそれを暗殺失敗に関しての皮肉と思い同調するように声を上げる。

「そうですな、ミーファ殿。何やら顔色が悪いですが、此度の件で何か申し開きがあるのでは？」

嘲りを含んだ声が文官から飛ぶ。それを聞いたミーファはただ唇を噛み締めるだけだ。

「こらこら、みんな何を言ってるんだ？　まさかミーファが犯人とでも？」

ざわめく臣下達を嗜めるように言うが、そのうち何人かが頷く。

「おそれながら、その可能性が高いかと」

「なんでやねん」

思わず突っ込みを入れる。義人の出身は関西ではないが、なんとなく関西弁だ。

「ヨシト王はご存知ないかもしれませんが、前王を毒殺したのはミーファ殿の父であるポドロ＝カーネルです。だから」

「だから、その娘のミーファが俺を殺そうとする？　意味がわからんぞ。疑われるとわかっていてなお俺を殺そうとするなら、余程俺に恨みがあるか余程間が抜けているか……そのどちらにもミーファは該当しないはずだ。そもそも、前王を毒殺したのはミーファの親父さんじゃないだろ」

事も無げに言い放つと、今まで顔を下げていたミーファは音が立

つ速さで顔を上げる。

「それは本当ですか！？」

「確証はないけどな。丁度良い機会だから聞いておくけど、前王が毒殺されてポドロが犯人だって言い出したのは誰だ？」

義人の質問に臣下達は顔を見合わせると、僅かな時間を置いて視線を動かす。しかし、そこには誰もいない。

臣下達の視線を追った義人は、いつもそこに誰がいたかをすぐさま思い出す。

「お、エンブズがいないな。どうしたんだ？　すぐに集まるようにと兵を向かわせたはずだろ？」

そう言ってカグラに目を向けると、カグラは首を横に振った。

「向かわせた兵がまだ戻っていません。本来なら戻っていてもおかしくないのですが……」

「んー……あと三十分経って戻らなかったらもう一回兵を向かわせる。それまでにこっちの用事も済むだろうしな」

「用事、ですか？」

問うカグラに、義人は目を細める。すると、それを見計らったように謁見の間に兵士が走りこんできた。

「商人ベッソンを連れてきました！」

「ああ、お疲れ様。通してくれ」

「はっ！」

返事を残して再び走っていく兵士を見送り、義人は口の端を僅か

に吊り上げる。

「さて、まずは証拠を吐いてもらいますかね」

その瞳の奥には、怒りの炎が静かに燃えていた。

第三十話：勧進帳

謁見の間に通された商人のベッソンは、義人が座る王座から少し離れた場所で膝をついて頭を下げる。

ゴルゾーと違い、無駄な贅肉が体のあちこちについていて外見は太めだ。

顔には商売用の愛想笑いが浮かび、目は欲でひどく濁っている。

義人が初め抱いていた商人像にピッタリな男だった。

「お初にお目にかかります、ヨシト王。私商人のベッソンでございます。此の度は火急の召集ということで馳せ参じました」

「ああ、急に呼びつけてすまないな。顔を上げてくれ」

形式の挨拶に労いの言葉をかけ、顔を上げさせる。

「それで、私に何か聞きたいとのことでしたが？」

ベッソンは顔を上げるなり尋ねてくるが、義人はどう切り込んだものかと思案していく。喋れと言われて喋るのか、それとも口が堅いのか、何かしらの方法で口封じをされていないか。

いつもなら気軽な口調で話しかけるのだが、今回ばかりはそうもいかない。外見上はいつものように振舞うよう心がけているが、内心には深い怒りがある。

「実は俺な、昨晩暗殺されかけたんだ」

故に、直接切り込む。まずは牽制代わりの言葉を放つと、ベッソンは一拍置いて驚いたように声を上げた。

「あ、暗殺!?　だ、誰が一体そんなことを!?　お怪我は!?」

白々しい。

ベッソンの反応を見た義人は、内心で冷静に吐き捨てる。それでも頭を働かせ、考えを巡らせていく。

「いや、大丈夫だった」

「そうですか……いや、驚きましたぞ。まさか、王を暗殺しようなどと大それたことを考える者がいるなど……」

「ああ、食事に盛られた毒に気づくのがあと少し遅かったら死んでいただろうけどな」

「……は？　毒、ですか？」

「うむ、毒見役の者が気づいてくれて良かった」

真顔で頷く。控えている臣下のうち数人が顔を見合わせているが、それをベッソンに気づかれないよう目で制す。

そして再びベッソンに目を向けてみれば、虚を突かれて僅かに困惑したような表情を浮かべていた。

「どうしたベッソン、何か気になることでもあるのか？」

「い、いえ。そんなことはありません」

声をかけると、少し上ずった声が返ってくる。

それを見た義人は、商人は商人でもゴルゾーのほうが上手かと評価を下した。そして努めて冷静な表情を作ると、口元だけ僅かに笑みの形に変える。

「そういえば、お前のところでは色々な物を売っているらしいな。他の商人では手に入らない物も売ってくれるそうじゃないか」

「え、ええ。品揃えが自慢ですから」

僅かに、ベッソンの顔色が変わった。それを見た義人は、追撃とばかりに口を開く。

「この国でも一番手広く商品を扱っているのはゴルゾーだと思ったんだが、お前はそんなゴルゾーでも手に入らない物を売っていると聞いたよ。いや、すごいじゃないか」

賛辞の言葉に感情はこもっていない。無機質な声をかけられたベッソンは、先程よりもさらに顔色が悪くなっている。

「十年ぐらい前から大分商売の規模が大きくなったらしいな。いやいや、商売繁盛でなによりだ。十年前、何か特別なことでもあったのか？　俺も商売に興味があってな、何かコツがあるのなら是非とも教えてくれ」

わざととぼけるように言うが、その真意は伝わっているだろう。現に、話を聞いていたミーファが刀の柄に手をかけ、射殺すような目でベッソンを睨みつけている。

「こ、コツなどありませんよ。じ、地道に商売をしていくことが肝心でして……」

突き刺さるような殺気を感じているのか、ベッソンは額に冷や汗を浮かべながら話す。

あと一息だな、と判断した義人は、どうしたものかと思案する。

そうして考えること数秒、先程懐に入れた紙の存在を思い出して取り出した。ゴルゾーが持ち込んだ『お姫様の殺人人形』を所持している商人が誰かについて書かれた紙だが、利用できるものは利用

する。

「地道に商売ねぇ……どれどれ。おお、ベッソンのところでは色々と売ってるんだな」

紙を開いて目を落とし、一読してわざと驚く。取り出した紙と義人のリアクションを見たベッソンは、流れていた冷や汗をさらに増やしながら慌てて口を開いた。

「よ、ヨシト王？　そ、それはまさか……」

「あ、これ？　もちろん、ベッソンのところで取り扱っている商品の一覧だよ。ゴルゾーに頼んで調べてもらったんだ」

もちろん、嘘である。

紙面に書かれているのは商人に関する情報だけで、取り扱っている商品など書かれていない。

「ふむふむ、ゴルゾーのところで取り扱っている商品もあれば、見たことのない名前の商品もあるな。高価な商品もある……お、こっちは毒物か？」

それでも義人は紙を隅々まで眺め、己の推測とゴルゾーからの情報を元に堂々と嘘を吐く。

毒物という単語を聞いた瞬間、ミーファが目を見開き声を張り上げる。

「貴様かあああああああああ！」

それは、怒りのこもった咆哮だった。

ミーファのただならぬ様子に、脇にいたグエンや他の武官がすぐ

さま押さえこむ。
もし押さえるのが遅れていれば、刀を抜いてベッソンに飛び掛っていただろう。ミーファは押さえられながらも、全力でグエン達を振りほどこうとしている。

「どけぇ！　放せ！」
「ミーファ殿、落ち着かれよ！」

魔法で身体能力を強化しても、武官数人がかりで押さえ込まれては振りほどけない。ミーファは獣のような唸り声を上げながら、それならばとベッソンを火炎魔法で焼き殺そうと精神を集中させる。

「やめろ、ミーファ」

それを察したのか、ベッソンを庇うように志信が棍を構えた。『無効化』が付与されたその棍を見ると、ミーファは歯を噛み締める。

「どいてよシノブ！」
「駄目だ。まだこの男には吐いてもらうことがある。それに、本当に悪いのは商品を売ったこの男ではなく、毒殺を仕組んでそれをお前の父になすりつけた者だろう？」
「そう、だけど……でも！」

激昂するミーファをたしなめるように、義人が落ち着いた様子で話しかける。

「落ち着いてくれミーファ。お前の気持ちはわかるから、もう少しだけ待っててくれ」
「ヨシト王……」

かけられた声に、ミーファは奥歯が割れるほどに噛み締めて頷く。
それを確認した志信はいつもの立ち位置である壁際まで移動し、義人はミーファの殺気をぶつけられて腰を抜かしかけているベッソンに目を向けた。

「さて、話が途切れてしまったな」

そう前置きして、義人は酷薄な笑みを浮かべる。

「十年前、お前が前王の毒殺を企てた誰かに毒物を売ったんだろ？そしてその見返りに贔屓してもらい、お前は商人として成り上がった……違うか？」
「そ、それは……」

言いよどむベッソン。それを見た義人は片手で制す。

「さっき志信が言ったが、悪いのは商品を売ったお前ではなくその商品を使って前王を毒殺した者が悪い。毒だって、上手く使えば薬になるしな」

現代の薬とて、元は毒だったものの構造を少し変えたり、薄めて治療薬として使っているものが多々ある。
有名な毒物としてトリカブトなどがあるが、加熱等の処理をして得られたものは漢方薬の配合にも使える。
効能としては、鎮痛、強心、利尿、新陳代謝機能の衰弱の改善、体温・血圧低下の改善などで、毒が薬に成り得る一つの例だろう。
そのことを知っていた義人は、言いくるめるようにベッソンに語りかける。

「お前は医者が薬に使うための毒物を売ったのかもしれない。それ

なら俺はお前を罰することはできないし、それに前王が毒殺されたのは十年も前の話だ。悪政を敷いていたらしいし、正直俺にとってはどうでもいい。まあ、そのおかげで今苦労してるけどな？」

「そ、それでは……」

ベッソンの顔に希望の光が差す。血の気の引いた顔に僅かながらも赤みが戻り、そんなベッソンを見た義人は、遠慮なくもう一度地獄へと叩き落すことにする。

「だが、お前はさっき変なことを言っていたな」

表情を消し、声からも感情を消す。

「へ、変なこと、ですか？」

「ああ。俺が最初に『昨晩暗殺されかけた』と言ったとき、お前は何と言った？　何故、怪我がないかと聞いたんだ？　俺は“どんな方法で暗殺されそうになったか”は言ってなかったはずだが？　前王は毒殺されて俺もその可能性があったというのに、何故お前は怪我はないかと聞いたんだ？」

目を細めて尋ねる。するとベッソンの視線があちこちへと動き、震える口を開く。

「あ、暗殺と言われて気が動転しまして……何故そのようなことを言ったかは覚えておりません」

「へえ？　覚えてないと。それじゃあ、何で俺が毒殺されかけたと言った時は妙な顔をしていたんだ？」

「そ、それは、み、見間違いかと……」

苦しい言い訳だった。だが、証拠に成り得ないので義人は追求し

ない。

「そうか……あ、そういえばお前に注文したいものがあったんだった」

「ちゅ、注文でございますか？」

肥えた体に冷や汗を滲ませていたベッソンは、注文という言葉でなんとか気を取り直して余裕を取り戻す。

「ああ、『お姫様の殺人人形』を四体ほど欲しい」

だが、その余裕はすぐさま崩れ去った。義人の注文に、ベッソンは震えながら返答する。

「そ、その、『お姫様の殺人人形』は現在売り切れておりまして……」

「売り切れ？　そうなのか？　お前が周りの商人から買い集めてるって聞いたから、持ってると思ったんだが。いやー、残念だ」

さも残念と言わんばかりに義人は頭を掻き、本題を切り出す。

「じゃあ、“誰に”売ったんだ？」

努めて低い声で、怒りを込めて尋ねる。その言葉を聞いたベッソンは、何度か口を開閉すると頭を下げた。

「それは……言えません。商人として、お客を売ることはできません」

「言えない、か。言えば殺されるからか？」

問いに、ベッソンは答えずただ頭を下げる。

「殺されることのないよう保護するし、暗殺を企てた奴は一生牢獄にでも放り込む。　いや、前王を暗殺したのもそいつだろうから処刑かな。それでも言えないか？」

本当に処刑することはないのだが、それでもベッソンは黙して語らない。

言えばどうやっても殺されるからか、商人の意地か、それとも喋らなければ情報が欲しい義人では殺せないと判断したか。

思ったよりも手強いな。

小さく呟き、どうやって喋ってもらうか義人は思案する。

拷問などは駄目だ。それでは自身の倫理に反する。

考えていたのはほんの数秒。だが、何か良い考えが浮かぶよりも先に動く人物が一人。

――――それは、優希だった。

第三十一話：狂気

優希が突然歩き出したのに最初に気づいたのは、ミーファだった。偶然や勘が良いなどという理由ではなく、優希が歩く先にいたのがミーファだったために最初に気づいたというだけである。

周りは義人の言葉やベッソンの反応に気を割いており、動いた優希に気づいたのはそれから数秒経ってのことだった。

「優希？」

ミーファに続いて義人が気づく。義人の呼びかけには笑顔で応じるはずの少女は、能面のような無表情で振り向きもしない。ただミーファの傍まで歩を進め、呆然と自身を見上げるミーファや他の武官の視線を無視して膝をつく。

「借りるね」

事も無げに告げ、ミーファの腰から刀を抜き取った。ミーファの腰には鞘だけが残り、優希は白刃を片手に再び歩き出す。

あまりにも自然な動きでベッソンに近づく優希に対して、誰も反応ができない。

刀を抜かれたはずのミーファでさえ、他の武官に押さえ込まれた状態で怒りすら忘れて優希の一挙一動を見送った。

「おい優希、どうした？」

例外は、義人だけだ。幼馴染みが取った行動に疑問の声を向ける。

それを聞いた優希は、ベッソンの傍で足を止めて満面の笑みを浮かべた。

「義人ちゃんは、人形を誰に売ったかこの人に教えてほしいんだよね？」

その笑顔に若干気圧されつつも、義人は頷く。

「あ、ああ。教えてほしい」

ひとまず返事をするが、それを聞いた優希は座っているベッソンに硝子染みた無機質な目を向ける。

「ねえ、聞こえたよね？　誰に売ったか義人ちゃんに言ってよ」

義人のような、作った無表情ではない。

優希は一切の感情を声に乗せず、ただ言い募る。

ベッソンはそんな優希に恐れを抱きつつも、首を横に振った。

「……言えません」

いや、“振ってしまった”。

「そう」

短い言葉。それと同時に刀を逆手に持ち替え、何の戸惑いもなく振り下ろす。

それにすぐさま反応したのは志信だった。優希が逆手に持ち替えた瞬間、床を蹴って一気に間合いを詰める。

棍先で刀の腹を叩いて刀の軌道を変えようとするが、想像以上の鋭い太刀筋に僅かにしか軌道が変わらない。

「っ！？」

僅かに刀が逸れ、白刃はベッソンの左耳をかすめて床へと突き刺さる。もしも志信が棍で軌道を変えなければ、今頃ベッソンの左耳が床に落ちていただろう。

優希は志信によって刀の軌道がずらされたことに何の反応も返さず、もう一度刀を振り上げる。

「ねえ、義人ちゃんの言葉が聞こえなかったんだよね？　だから答えないんだよね？　だったらそんな聞こえない耳――いらないよね？」

表情はなく、怒りに濁った瞳だけで告げて再度刀を振り下ろす。

志信は咄嗟に刀を持った優希の右腕をつかむと、振り下ろせないように力を加える。

優希の細腕では志信の力に対抗できず、刀を振り下ろすことはできない……そう、志信は思っていた。

「そんな聞こえない耳は、いらないよね？」

そんな志信に構わず、優希の握った刀は徐々に下へと下がっていく。優希を突き動かす激情が可能にするのか、志信の膂力を上回る力だった。

ゆっくりと迫ってくる刀の切っ先に、ベッソンは今度こそ腰を抜かす。逃げようにも体が言うことを聞かず、その場で震えることしかできない。

震えるベッソンを虫でも見るような目つきで、優希が告げる。

「――言える、言えないじゃないの。“言うの”」

志信はこれ以上押さえきれないと判断すると、すぐさま義人に目を向けた。

「義人！」

「ああ、わかってる。優希、そこまでだ！　やめろ！」

王座から立ち上がって叫ぶ。すると、今まで志信の力を超えて下へと降りていた白刃が動きを止めた。

義人にかけられた言葉を聞いた優希の体は、すぐさまそれに応じて動きを停止する。そして、義人に困ったような笑顔を向けた。

「どうしたの、義人ちゃん？」

「いや、どうかしたのはお前のほうだろ。ほら、そんな物騒な物は志信に渡してこっちに来い」

「うん、わかったよ」

いつものように頷くと、刀を志信に渡す。そして義人の傍へと駆け寄ろうとして、ベッソンへと振り向いた。

「義人ちゃんが優しくて良かったね？」

笑顔で、そう告げる。

それを聞いたベッソンは、顔色が青を通り越して白くなった。恐怖が理性を上回ったのか、震えながら口を開く。

「……え、エ……ン、ブズ、さ、ます……」

蚊の鳴くような声だったが、義人は聞き漏らさず聞き返す。

「エンブズ？　エンブズに売ったんだな？」

確認するために聞くが、ベッソンはそれ以上喋らずただ頷く。それを見た義人は、やはりかと納得した。

「カグラ、エンブズの家に向かわせた兵はまだ戻っていないか？」
「は、はい。まだ戻っていません」

優希の様子に呆けていたカグラは、なんとかそう言葉を返す。

「逃げる気か、すでに逃げてるか……よし、今からエンブズの自宅に向かう！　魔法剣士隊と騎馬隊はすぐに準備をしろ！　逃げていたらすぐに追うから歩兵隊や魔法隊も準備をしといてくれ！」
『はっ！』
「準備が完了次第すぐに出発する！　急げよ！」
『はっ！！』

臣下全員が気合の入った返事を返し、ミーファがすぐさま飛び出していく。
それを仕方ないかと見送った義人は、いまだに震えているベッソンに目を向けた。

「お前への罰は後日通達する。まあ、そんなに重いものにはしないからひとまず牢屋で気楽に待っていてくれ。」

義人がそう言うと、ベッソンは震えながらも兵士に連れられ退室する。
謁見の間から次々と人が走り出て行くのを見送った義人は、横で控えていた優希に目を向けた。

「優希……お前、無茶しすぎ」

いつものように話しかけると、優希もいつもの朗らかな笑顔を浮かべる。

「無茶じゃないよ？」

「無茶だっての」

笑顔でとぼける優希にデコピンを放つ。ペチーンと気の抜けた音がして、優希は額を押さえた。そこには、先程までの狂気めいた気配は微塵もない。

「う～……痛いよ、義人ちゃん」

「痛くしてるんだから当たり前だ。まったく、脅しとはいえ刀を振り下ろすなんて、滅茶苦茶驚いたじゃねーか。本当に耳を切り落とすかと思ったぞ」

「あはは、まさかー。本当にそんなことするわけないよー」

義人と共に笑うが、それを傍で見ていた志信は優希を抑えていた腕を見る。

あの時、間違いなく優希は本気だった。放たれた殺気は本物で、振り下ろす太刀筋に迷いはない。そのことを義人に言おうとして、それを察したように義人が横目で制す。

言うなという意味が込められた視線に、志信は口を閉ざした。

魔法剣士隊と騎馬隊の準備が整ったとの報告を受けて、義人はマントと王剣を身に着けて馬に跨る。

「それじゃあ、行くか」

「ああ」

志信が頷き返し、カグラは無言で頷く。優希やサクラ、アルフレッドは待機だ。

優希が一緒についていきたいと言ったが、義人が大人しく待っていてくれと言えばすぐに頷いてくれた。

「よし！　それじゃあエンブズのところまで案内してくれ！」

「はっ！」

頷く騎馬隊の兵士が先行し、義人達がそれを追う。エンブズの屋敷は少し離れた場所にあり、馬を飛ばして十分程度の場所にある。

騎馬隊と魔法剣士隊が隊列を組み、街道を疾走していくのに合わせて義人達も馬を走らせた。そして少し走ると、馬に乗った志信が横へと走り寄ってくる。

「義人……北城のことだが」

風を切って走っているためか、少し聞こえにくい志信の声に義人は困ったような表情を浮かべた。

「さっきのことか……実はさ、優希がああいうことをするのって初めてじゃないんだよ。昔にも二回、似たようなことをしたことがあるんだ」

「同じようなこととは？　……いや、気軽に聞く話題ではなさそうだな」

志信は興味を示すが、すぐさま言葉を撤回する。義人は苦笑すると、綱から離せない手の変わりに首を横に振った。

「別に重い話ってわけでもないさ。なんか、優希って俺のことになるとすごい豹変することがあるんだ。自分のことを馬鹿にされても怒らないくせに、俺が馬鹿にされたりすると何でか別人のように怒ることがあるんだ」
「ふむ……それだけ義人に深い友情を感じているのか」
「かもな」

真面目にぼける二人の後ろで、同じく馬を走らせていたカグラがため息を吐く。

「お二人とも、そこは友情じゃないでしょう……」

小さく呟いた言葉は風に流れ、二人の耳には届かない。そんなカグラに気づかず、義人は話を進めていく。

「一回目はいつだったか……たしか、小学生の時だったかな？　クラスの男子が俺を馬鹿にしていたとかで、そいつを平手打ちして泣かせたって話だ。二回目は中学の時で、俺が停学くらった時に担任が俺のことをクズだとか不良だとか言ってたらしくてさ。それを聞いた優希が椅子から立ち上がって、笑顔で平手打ちしたらしい。一回目は昼休みだったから外で遊んでたし、二回目は停学で学校にいなかったから、両方ともあとでクラスの奴に聞いた話なんだけどな」
「それは……すごいな。停学とは、まさか俺の時のやつか？」
「ああ。志信と一緒にいじめっ子共を退治した時だな。まあ、それは置いとこう。優希が教師を叩いたって聞いた時は驚いたけど、その後担任に『今の言葉、全部義人ちゃんのお父さんとお母さんに言っておきますね』って言ったらしい。そのおかげで優希は停学にならなかったってよ」
「なるほど。良い手だな」

参考になると言わんばかりに頷く志信を脇に、義人は眉を寄せる。

「今回初めてその場に居合わせたわけだけど、正直あれは驚くな、うん」

まるで他人事のように言うが、実感が沸いていないだけだろう。義人にとって、優希という存在からは想像もできないような出来事だった。

どうしたものか、と義人が唸っていると、それを見かねたようにカグラが馬を寄せてくる。

「ユキ様はヨシト様が危険に晒されたことに怒っていたのでしょう。それで暗殺を企てた者の情報を聞きだすべく刀を振るったんです。ヨシト様を大事に思っているんですよ」

カグラはそう言うが、実際は違う。

義人が尋ねているのにベッソンが答えなかったこと、表に出さないが義人が深い怒りを覚えていたこと。もちろん、義人が怪我を負ったことに対する怒りもある。

義人のことを想っていたのは確かに合っているが、カグラが想像したものとは意味合いがかなり違っていた。

「それで人の耳を斬り落とされたら困るって。しかし……そうか。まあ、俺も優希のことは大事だけどさ。むしろ怪我が酷かったのは優希のほうだし……ううむ、今度何か埋め合わせをするべきか」

顎に手をやり、悩むように目を細める。義人はしばらくそうしていたが、諦めたように頭を振った。

「いかん、良い方法が思い浮かばねぇ……まあ、今はひとまずエン

ブズを捕まえることに専念するか」
「そうだな。まずは片付けられる問題から片付けるべきだ」
二人して頷き合う。カグラはそんな二人の横でため息を吐き、気を取り直して前を見据える。
エンブズの私邸が、すぐ傍まで迫っていた。

第三十二話：突入

王都フォレスの南西に、エンブズの私邸は建っていた。
エンブズの私邸は広く、庭だけでいけば三千坪は超えているだろう。
家の作りは西洋風で、屋敷と形容するのが相応しい威容。二階建てだが一階ずつでもかなりの高さがあり、日本建築の四階建て並の高さがある。
屋敷自体も広く、百人以上住めそうな大きさだ。その周りをぐるりと塀が取り囲み、少数ながらも見回りの兵士がいる。
それを、魔法剣士隊と騎馬隊の総勢三百人で取り囲む。それだけで見回りの兵士が逃げ出したが、構っている暇はない。

「カグラ、先にここに向かわせた兵はどこだ？」

義人は馬から下りると、同じく馬から下りたカグラに尋ねる。カグラはすぐに辺りを見回すが、それらしい者はいない。

「おかしいですね……もし城に向かっていたとしても、今来た道の途中で鉢合わせたはずです」
「となると、答えは一つだな」

『無効化』の棍を手に、志信がエンブズの私邸を見据える。その言葉に義人は頷く。

「エンブズが伝令の兵をどうにかしたか……くそ、殺してないだろうな？」
「可能性は低くない。義人、お前はここに残ってくれ。俺とミーファ、グエン殿。それと数名の兵士を連れて突入する」

そう言うなり、志信は部下の指揮を執っていた二人を呼ぼうとする。だが、義人はそんな志信の肩をつかんだ。

「まあ、待てよ志信。俺も行く。今回の事件は俺の見通しの甘さが招いたことだしな」

「ヨシト様、それは違います！　今回の件はわたしの」

「あーあー。聞こえなーい」

カグラが自責を訴えようとするが、義人は両手で両耳を塞いで取り合わない。それを見たカグラは、大きな声を張り上げた。

「もう、ヨシト様！？」

「ちょ、キレないでください！？　冗談だから！」

カグラらしからぬ怒りの表情と声に、義人はすぐさま冗談をやめる。

「ヨシト様が行かれるのなら、わたしもついて行きます。今度こそ、ヨシト様をお守りしますから！」

「んー……じゃあ、よろしく頼む。外の兵の指揮を取ってもらおうかと思ったけど、各部隊の副隊長に任せるか。それじゃあ、そう伝えてくれ」

「はっ！」

傍に控えていた兵にそう言うと、すぐさま駆け出す。義人がそれを見送ると、すれ違うようにミーファとグエンが駆け寄ってきた。

「お、丁度良いとこに。今からエンブズの屋敷に突入するから、二

人とも十名ほど兵を連れてきてくれ」

義人がそう言うと、ミーファは尋常ならざる様子で頷く。

「すでに用意は出来ています。ヨシト王、突入の許可を！」

滲む感情は怒りか、はたまた焦りか。ミーファの目は鋭く細まっており、纏う雰囲気は刃のように鋭い。

「落ち着けミーファ」

そんなミーファをたしなめるために志信が声をかけるが、ミーファは小さく首を振るだけだ。

幼い頃から追い求めた、父を暗殺犯に仕立て上げた仇。その存在がいつも以上にミーファの余裕をなくしている。気が高ぶって自然と魔法が発動しているのか、ミーファの周りには揺らぐような熱気があった。

「あー、落ち着けってミーファ。あんまり焦るようなら、突入する班から外すぞ？　王様命令で」

「な、何故ですか！？」

「当たり前だろ。今のお前と一緒に突撃したら、味方に被害が出そうだ。屋敷の中ということは室内戦だろうし、得意の火炎魔法なんか使われたら屋敷が焼け崩れかねない。だから、落ち着け。じゃないと連れて行かない」

「く……わかり、ました」

激情を堪えるように拳を握り締め、ミーファは数回深呼吸をする。すると少しは冷静さを取り戻したらしく、表情も先程よりは落ち着いたものに変わった。

それを見た義人は満足そうに頷き、集まってくる兵士達に向かって口を開く。

「よし！　それじゃあ今から突入する！　中に入る奴は何が起こってもいいよう気をつけろ！
外の奴はもしエンブズが逃げ出したら捕まえろ！　いいな！？」
『はっ！』

一糸乱れぬ返事に、義人は腰の王剣を引き抜く。

「行くぞ！」

そう叫び、入り口の門へと駆け出した。

『ヨシト、だったかの』

義人達が門の傍まで移動すると、右手に持った王剣が思念通話を繋げてくる。

『ん？　そうだけど、どうした？　今は割と逼迫した場面なんだけど』
『何、妾の名前をつけてもらうのを忘れていただけじゃ』
『……名前？　こんな時に何を言い出すんだよ』
『戯け！　お主との繋がりが深くなければ全力での力の行使ができないのじゃ！』
『繋がりって……まあ、俺には名前があるのにお前は名前がないのは可哀想か。それじゃあ、『オウケン』でどうだ？』

ひとまず安直に考えた義人はそう言ってみるが、返ってきたのは限りなく低い声だった。

『祟る（たたる）ぞ？』

『ごめん、冗談です。祟らないでください』

間髪入れずに謝り、義人は僅かに思考する。

『お前の性別は？』

『戯けめ。口調で女とわかるであろう』

わからなかったと言いたかったが、本能が警鐘を鳴らすのでそれはやめておく。

ふむ、と一つ頷くと、自信ありげに義人は笑った。

『それじゃあ『ノーレ』でどうだ？』

『ほう、ノーレか……何故その名を？』

『昨日『風と知識の王剣』って言ってただろ。知識は英語で……俺の世界の言葉で『ノーレッジ』って言うんだけど、そこから名づけさせてもらった。性別が男だったら『ウインド』だな』

『案外安直な男よの……まあ良い。ノーレ……ノーレか』

噛み締めるような声が聞こえる。声には喜色が混じっており、どうやら気に入ったらしい。　それに安堵すると、義人は直面してる事態の解決に気を割くことにした。

突入するために兵士が門を開けようとしたのだが、内側から閂（かんぬき）がかかっているらしくビクともしない。

高さは五メートル近くあり、材質は樫の木。ところどころ鉄板で補強されており、厚さもかなりある。兵士十人がかりで体当たりをするが、それでも効果は薄かった。

「こうなったら、わたしが焼き払うか」

不穏な言葉を呟きつつ、ミーファが刀を抜く。

波紋は直刃。無駄な装飾はなく、鍔がはめられているだけだ。その輝きは見事で、練習刀とは違い刀工によって鍛えられた業物だということが窺える。さらに、ミーファの火炎魔法に耐えられるように耐魔法の加工もされていた。

『あの小娘では周りに飛び火するかもしれんの。ヨシト、妾を使うが良い』

『ノーレを？　ああ、風でぶち破るのか……ぶち破れるのか？』

途中まで頷き、途中で疑問を差し挟む。昨夜振るったときはサクラを弾き飛ばしたが、その程度の威力で頑丈な門を破壊できるとは思えない。

『戯け。名を付けられた妾なら、あの程度の門を破るのは容易いわ。少し、お主は疲れると思うがの』

『少し疲れるくらいならいいけど。まあいいや、とりあえずやってみる』

王剣をしっかりと握り、門へと目を向ける。

「全員門の前からどけ！」

「え？　は、し、しかし……一体何を？」

「いいからどけって！　王様命令！」

何か考えがあるとわかったのか、兵士や志信達がすぐさま門の前から離れていく。それを確認した義人は、ノーレへと思念を送った。

『それじゃあ、頼むぞノーレ』
『うむ、任されよ。ヨシトは門に向かって思い切り剣を振るがよい！』

ノーレの言葉と同時に、王剣の周りに風が渦巻き始める。それを見たカグラは僅かに目を見張り、義人は自身から抜け出る“何か”に眉を寄せた。

『お主の魔力を使っておるだけじゃ！　心配するでない！』
「魔力、ね。俺にもそんなのあったんだな」
『そこの巫女には到底敵わんがな。ほれ、魔力を吸ったから威力は十分じゃ！』

義人は王剣を両手で持ち、正眼に構える。そして一度深呼吸をすると、門に向かって駆け出す。

「はあああああ！」
気合を乗せ、両腕を振り上げる。重心配分も関係なく思いきり踏み込むと、風を纏った王剣を振り下ろした。
瞬間、轟音と共に暴力的なまでに激しい風と鎌鼬が吹き荒れ、すさまじい圧力と衝撃で門を粉々に破壊する。
そしてそのまま勢い余り、エンブズの私邸の壁に砕けた門が命中して破砕音を立てた。

「っ、はぁー……はぁー……」

義人は王剣を振り切った体勢で大きく息を吐く。魔力が大きく削がれ、立ちくらみのような感覚を覚えて膝をついた。

『魔力の半分を消費してしもうたか……魔力の変換効率が最低じゃったから仕方ないが、今後の課題じゃな』

「少し、どころの、疲れじゃ、ねぇ……」

ついた膝を持ち上げ、なんとか立ち上がる。長距離のマラソンを走り終えたような倦怠感が身を包み込んでいるが、今は疲れて膝をついている場合ではない。

「門は開いた！　エンブズを捕まえろ！」

開いたというレベルではなく、門はバラバラになっている。周りの兵士達は呆気に取られていたが、義人の号令ですぐさま駆け出した。

そして、その流れに逆らうようにカグラが駆け寄ってくる。

「ヨシト様！　いきなり魔法を使うなんて、体に異常が出たらどうするんですか！　いえ、そもそもどうやって魔法を……」

「それは後回しだカグラ。この件が終わったら説明するよ。今は、エンブズを捕まえることが先だ」

疲れを無視し、義人も駆け出す。

志信達はすでに門をくぐって屋敷の玄関を蹴り破り、邸内へと突入している。

ここでのんびりしているわけにもいかず、カグラも護衛の兵士数名と共に駆け出した。

玄関の扉を蹴破って突入した志信達はすぐさま周囲を警戒し、誰もいないことを確認して次々と先に進んでいく。

屋敷は広く、部屋数も多い。しかし、普通の屋敷ならば見られるはずの使用人の姿はなく、閑散としている。

「どこだ！　エンブズッ！！」

ミーファが声を張り上げるが、声は屋敷の奥へと吸い込まれていくだけだ。グエンや兵士達も辺りを探っているが、エンブズは見つからない。

そうやって闇雲に探していると、カグラを伴った義人が追いついてきた。

「いたか！？」

「いや、いない」

すぐさま志信が首を横に振る。義人も周囲を見回すと、王剣のノーレが思念を送って話しかける。

『奥じゃな。大きな魔力反応がある』

『大きな魔力反応？　本当か？』

肯定の意思がノーレから伝わり、義人はすぐに駆け出す。それを見た志信が横へと並んで走り、斜め後ろにカグラが続く。

「どうした義人？」

「こっちにエンブズがいる……と思う。勘だけどな」

本当はノーレが教えてくれたのだが、王剣が喋って教えてくれたと言っても理解してもらえないだろう。義人の言葉や勘を疑わない志信は、迷いなく先へと疾走していく。

「……ん、魔力反応があります。この先に誰かいるのに間違いはないみたいです」

ノーレに遅れて魔力を察知したのか、並走するカグラが奥へと目を向ける。

「ヨシト王！　カグラ！」

廊下を走っていくと、大きい扉が見えてきたところでミーファが合流した。グエンは他の場所で兵の指揮を取っているのか、姿が見えない。

志信はすでに大きい扉へとたどり着き、取っ手に掛けられた南京錠を壊そうとしている。だが、思ったよりも頑丈だったのか棍を右手に構え、南京錠ではなく取っ手を突き壊して南京錠を外した。

「また強引な手を……」

そんな志信に苦笑するが、開いたので気にしないことにする。すぐさま気を引き締めると、義人はノーレを握る手に力を込めていく。

「カグラ、屋敷の構造からしてこの先はどうなってると思う？」

「おそらく庭に続いていると思います」

「庭……いや、テラスか？　屋敷の外は兵士を配置してるし、こりゃ詰んだかな？」

「いえ、油断は禁物です。エンブズは魔法を使えますが、魔力量は少ないはずです。それなのに、この先から感じる魔力はかなり大きいですから」

「そうか。じゃあ、気を引き締めてかかるぞ」

「はい！」

カグラの返事を耳に、扉へとたどり着く。
そして志信と一度頷き合ってから、扉を開けた。

「不意打ちには気をつけて……ん？」

扉を開けると共に、風が吹き込んでくる。それだけならおかしいことではない。だが、風に含まれた臭いに義人は眉を寄せた。
鼻の奥を刺激する、ツンとした臭い。風で薄れているが、それでもなお嗅ぎ分けることができる鉄の香り。

「っ！」

不意打ちに構わず、扉を開け放つ。志信が先行し、それに続いてミーファとカグラ、義人がテラスへと飛び出す。

「来たか、ネズミ共。おや、ヨシト王自らお出でとは……」

そんな義人達を出迎えるように、二十メートルほど離れた場所にエンブズが軽薄な笑みを浮かべながら立っていた。それを見たミーファから歯軋りの音が聞こえ、志信は棍を握り締める。

「エンブズ！」

義人が一歩踏み出して、パシャリと水音が響く。その音と、靴裏に感じるぬるりとした感触に、エンブズを見ていた義人は石畳の足元に目を落とす。

「なん……っ！？」

まるで義人達を出迎えるように、辺り一面に血の海が広がってい

た。

第三十三話：庭先の戦い

粘つく足元から、血の香りが立ち昇る。石畳に流れる血の量は、一人や二人分どころではない。

「……あ……たす、け……」

聞こえてきたかすれた声に、義人は無意識のうちに血の流れ出る場所へと目で辿って思わず口元を手で覆う。

柱の影から覗く、折り重なった数人分の人影。そのうちの一人が義人達へと手を伸ばし、必死に助けを求めていた。

「っ！　大丈夫か！？」

思わずエンブズから視線を外し、義人は怪我人の傍へと走り寄る。初めて見る大量の血に気分が悪くなるが、怪我人に無理やり意識を向けてそれを堪えた。そして怪我人の傍に膝を突き、後方に向かって叫ぶ。

「カグラ！　こいつらを助け」
「ヨシト様！」
『上じゃ！』

助けてくれ、という言葉を遮り、カグラとノーレが焦燥の声を上げる。それと同時に首筋に氷を当てられたような寒気が走り、義人は反射的に頭上を見上げた。

見知らぬ男が一人、義人の額を貫こうと剣を突き出しながら落下してくる。義人は咄嗟に王剣を振り上げようとするが、それよりも男の攻撃が圧倒的に速いだろう。

「義人！」

志信が駆ける。カグラの声を皮切りに駆け出し、頭上から迫り来る凶刃を間一髪で横薙ぎに弾き飛ばす。

男は志信の反応に僅かに笑うと、落下しながらも柱を蹴って横へと跳ぶ。少し離れたところに着地すると共にさらに地面を蹴り、エンブズの傍へと着地した。

「今のに反応できるとは中々……いや、こんな田舎の小国にも、ちったあ骨のある奴がいるらしい」

片刃の剣を肩に担ぎ、男は笑う。

身長は志信と同じくらいで、百八十センチを僅かに超えた程度。若干ぼさぼさな髪の毛に、野性味のある顔立ち。顔立ちと雰囲気から察して歳は二十台後半だろう。

ミーファと同じく必要最低限の急所を守る鎧を身に着け、肌は日に焼けている。腰には短刀を下げ、額には一本の傷跡があった。

志信は前へ出て棍を構え、義人は気を取り直して怪我人の状態を確認する。義人のすぐ傍にカグラも駆け寄り、ミーファは志信の横に並んで抜刀した。

「何をやっとるかガルアス！　さっさとあの小僧を殺さんか！」

男……ガルアスの後ろで、エンブズが巨体を揺らしながら叫ぶ。

「まあまあ、そう騒ぎなさんなって。料金分の仕事はちゃんとするからよ」

耳に障る叫び声を風に流し、ガルアスは快活に笑う。

「というわけで、だ。お前らに恨みはないが、死んでくれや」

それと同時に、殺気が膨れ上がる。片刃の剣に文字が浮かび上がり、青い光が剣を包み込んでパチパチと何かが爆ぜる音が響く。

「これは……手加減して倒せる相手じゃなさそうね」

倣うようにミーファの刀が柄元から燃え上がり、志信は『無効化』の棍を構えて腰を落とした。

志信の構えにほとんど隙はなく、それを見たガルアスは楽しそうに目を細める。

「そっちの嬢ちゃんはともかく、坊主、おめえは楽しめそうだな」

そう評価を下し、ガルアスが悠々と間合いを詰めていく。互いの距離はおよそ十メートル。そして、今もその距離は縮まっていく。

合図はなく、志信とガルアスは同時に地を蹴った。それに続くようにミーファも駆け出し、先制とばかりにバレーボールサイズの火球を三つ生み出して撃ち出す。

「ハッ、なんだこりゃ！　火の粉か！？」

ガルアスは片手の剣を振るい、いとも容易く火球を打ち払う。

それを見た志信が一気に加速し、鳩尾目がけて棍を繰り出した。

だが、ガルアスは身を捻ってその一撃をかわす。

次いですぐさま連撃へとつなげるが、ガルアスも足を止めて剣で弾き逸らしていく。

今回はミーファと試合をしたときのような手加減など、一切して

いない。
仮に相手がミーファだったら、すぐに圧倒することができただろう。しかしガルアスは、次々と繰り出される打突を前に笑みすら浮かべている。

「いいねぇ！　鋭く、速い突きだ。お前ほどの槍捌き、中々お目にかかれねぇな！」

ガルアスも『強化』を使っているのか、その動きは志信に劣らない。
技量はほぼ互角、いや若干相手が上か。しかも、戦闘経験に大きな開きがある。
嵐のように連撃を繰り出しつつも、志信は冷静に眼前の敵を観察していく。
二対一でも自分のペースを崩さず戦い、ガルアスは戦況を五分に持ち込んでいた。

「くっ、この！」

ミーファも隙を突くように斬撃を繰り出すが、ガルアスは見向きもせずに腰の短刀を抜いて弾く。

「嬢ちゃんはまだまだだな。あと三年くらいしたらこっちの坊主に追いつくかもしれないが、攻撃が単純だ」

しかも、軽口まで叩く有様である。ミーファは奥歯を噛み締め、射殺すような殺気を放つがガルアスにとっては何の効果もない。

「ミーファ！　この男の相手は俺がする！　お前はエンブズを捕まえろ！」

膠着した状況を打破しようと、志信がそう叫ぶ。ミーファは反発しようと口を開くが、ミーファにとっての本当の敵はガルアスではない。

「わかった！」

頷き、エンブズのほうへと駆け出そうとする。

「行かせるかよ！」

それにすぐさま反応したガルアスが地面を蹴り、短刀ではなく片刃の剣をミーファへと振り下ろす。鋭い斬撃に、ミーファは咄嗟に刀で受けた。その瞬間、青く光っていた剣から音を立てて電流が迸る（ほとばしる）。

「きゃあああああああ！」

刀を伝わって強烈な電流がミーファを襲い、追撃と言わんばかりにガルアスが前蹴りでミーファを蹴り飛ばす。

電流で体が硬直していたミーファはそのまま後ろへと吹き飛び、壁にぶつかって崩れ落ちた。

「ミーファ！」

視線はガルアスから外さずに、志信は義人の大声を聞く。しかし、ミーファからの返事はない。

「安心しろ、坊主。殺しちゃいねえよ。俺に剣を向けたとはいえ、女を殺すのは趣味じゃないしな」

「うっ……ぐ、ぁ……」

ガルアスの言葉を肯定するように、ミーファから呻き声が漏れる。志信はミーファが生きていることを音で確認すると、棍を振るいつつ口を開いた。

「成程、雷を使った魔法か」

「ああ。武器を合わせりゃ勝手に相手が電撃を喰らう。まあ、金属の武器が相手じゃねーと効果はないけどな。お前さんの場合、木は電流を通さねえし、しかも『無効化』まで付加してあったら電気は届かねえ」

褒め称えるような言葉だが、志信は油断など微塵もしない。そんな志信を見たガルアスは、嬉しそうな笑みを見せる。

「いいねぇ……歳の割には完成した強さだよ、坊主。しかも、まだまだ伸びる余地があると見える。名前を聞かせてもらえるか？」

「……藤倉志信だ」

「シノブ、か。覚えておくが、残念だぜ。こんな場所で出会わなけりゃ、殺さなくてすんだんだがなぁ」

「ぬかせ」

ガルアスの言葉に乗らず、志信はひたすらに打ち合う。だが、ミーファが倒れて志信のほうがやや押され始めた。

気を抜けば、一瞬で命を刈り取られる。試合ならまだしも、命を賭けた殺し合いは志信とてまだあまり経験していない。だが、緊張はなく高揚がある。

劣勢になって初めて、志信の口元に小さな笑みが浮かんだ。

「どうだカグラ！　助けられるか！？」

柱の影に折り重なっていたのは合計で五人。それぞれが深い傷を負い、体中から血を流している。伝令に向かわせたが、ガルアスに襲われたのだろう。

「治癒魔法を使えばなんとか……しかし、魔力を使って良いのですか？」

「人の命がかかってるのにそんなこと言ってられるか！　使ってくれ！」

「わかりました」

カグラが頷き、精神を集中する。すると手の平から暖かい光が漏れ出し、カグラはその手を倒れた兵士の傷口へと押し当てて『治癒』を施していく。

義人はもどかしそうにその光景を見ていたが、手に持った王剣ノーレへと話しかけた。

『ノーレ、治癒魔法は使えないのか！？』

『……妾は『風と知識の王剣』じゃ。治癒魔法は使えん』

予想通りの返答に、義人は大きく眉を寄せる。

「おやおや、ヨシト王はお優しいことですなぁ……そのような使い捨ての兵士に、治癒魔法をかけてやるなど」

離れたところから、揶揄混じりの声がかけられた。義人が睨むように見てみれば、エンブズが下劣な笑みを浮かべて笑っている。志信達は戦いに集中しているのか、聞こえていないらしい。

「エンブズ……」

怒りを込めて呟くと、エンブズは肩を竦めた。

「おお、怖い怖い。そのように睨まれては、腰が抜けそうですな」

からかうような声色に、義人は逆に冷静になる。自分はエンブズに聞くことがあると言い聞かせ、口を開いた。

「今回の暗殺騒動で、何か申し開きはあるか？」

「おやおや、暗殺ですと？　そんなことが起きていたのですか？　大変ではありませんか」

驚いたような表情を作るが、その口元は笑っている。

「ああ。大変だったぜ。おかげさんで、危うく死ぬところだった」

「ヨシト王を暗殺しようなどとは、まったく大それたことを考える輩がいたものですな」

「お前が言うか。商人のベッソンから証言を取ってある。お前が犯人だとな」

「ヨシト王は臣下の私よりも、どこぞの商人を信じると？」

脂ぎったエンブズの笑みに、義人は口元を吊り上げる。

「お前は、そのどこぞの商人よりも自分が信じられているとでも思ってるのか？　前王の暗殺といい、税金の横領といい、ずいぶんと好き勝手にやってくれたじゃないか」

義人がそう言うと、エンブズは意外そうな表情を浮かべた。

「おや、前王の暗殺は私ではなく……」

そう言うなり、ミーファが義人の横を通り過ぎて壁へと叩きつけられる。意識を失っているのか、それとも激痛に耐えているのか、体はピクリとも動かない。

「ミーファ！」

そんなミーファに義人が声をかけるが、返事はない。エンブズが鼻を鳴らし、嘲るように呟く。

「そこの小娘の父親がやったことですぞ」

嘘だ。義人はエンブズの言葉をそう断じ、睨みつける。

「阿呆が。ベッソンが全部吐いた。下らんこと抜かすな、肉ダルマが」

吐き捨てるように罵倒した。すると、エンブズの顔がみるみる赤らんでいく。

「小僧が……ふざけた口をきくなっ！」

「おいおい、お前こそ王様に向かってなんて口をきいてんだ、豚野郎。『お姫様の殺人人形』なんぞ差し向けやがって」

「ふん！　せめてもの慈悲に、死ぬ前に良い思いをさせてから殺してやろうと思ったがそれも要らん世話だったようだな。クソガキが、お前は儂自ら殺してくれるわ」

そう言うなり、懐から紫色の石を取り出す。それに見覚えがあっ

た義人は、握る王剣に力を込めて呟く。

「『魔石』か……」

『気をつけよ。あの者自体は下級魔法使い程度の魔力しか感じぬが、『魔石』を使われれば一気に魔力が跳ね上がる』

『どのくらいだ？』

『下級から中級に変化した、といったところじゃ』

『は……聞いといてなんだが、それがどのくらい強いのかわからねえ』

『この戯けが』

僅かに呆れたような響きだったが、それを気にせず王剣を構える。

「ヨシト様、わたしが！」

それを見たカグラが慌てて治癒魔法を止めようとするが、義人はそれを制して声を上げた。

「それでそいつらが死んだらどうするんだよ！　カグラはそのまま魔法をかけ続けろ！」

「し、しかし！？」

いつになく慌てた様子のカグラに、苦笑を浮かべる義人。そして小さく笑いかける。

「喧嘩じゃ志信以外に負ける気しないんでね。心配なら、ミーファを起こしてくれよ」

殺し合いとは言わない。そう口にしてしまえば、滝峰義人として

の何かを一つ失う気がした。
王剣ノーレを正眼に構え、義人は呼吸を整える。先程使った魔法の影響で体にだるさを感じているが、膝を折るほどではない。
『ヨシト、こうなれば仕方ない。屋敷を囲む壁に穴を開けるぞ』
『壁を？　……なるほど、外の兵を呼ぶのか』
ノーレの提案に賛同すると、一向に動こうとしない義人へとエンブズが揶揄を込めた声を上げる。
「剣を持って立つだけでは儂は倒せんぞ？　ククク、怯えて動けんか？」
そんなエンブズに、喧嘩腰になった義人はわざと哀れんだ目を向けた。
「ブゥブゥと鳴き声を上げられても、俺には理解できないんだ。せめて人語を喋ってくれよ」
「き、さまあああああああああああああ！」
義人の挑発を受け、怒りで先程よりも顔を赤くしたエンブズの頭上に巨大な炎の塊が生み出される。二メートル近くある火球に、義人はノーレへと話しかけた。
『ずいぶんとでかい魔法だけど、どうするよ』
『戯け。あの程度の魔法、大した脅威ではないわ。あの豚が魔法を撃ったら妾を横へと振るが良い』
さり気なくエンブズを豚と呼称したノーレに、義人は改心の笑みを浮かべる。

『ノーレ。お前、俺の良い相棒になれるわ』
『こ、こんな時に何を言っておるか！　気を引き締めよ！』

何故か微妙に慌てたノーレに義人は首をかしげると、エンブズを見据えた。頭上の火球はさらに大きさを増し、三メートルほどまで巨大化している。

「焼け死ねえええええええ！」

エンブズが吠え、火球が放たれた。
圧倒的な熱量を持った火炎は、命中すれば骨も残さず燃やし尽くすだろう。後ろにはミーファがうずくまっており、避けるわけにもいかない。

『今じゃ、振れ！』

ノーレの言葉に従い、義人は王剣を横へと薙ぐ。体から力が抜け出すのと同時に剣先から突風が吹き荒れ、火球を風の流れに乗せて屋敷を囲む壁へと誘導する。
激しい爆音。
壁に接触した炎が爆ぜ、轟音と共に壁に穴を開ける。その音に志信とガルアスは攻撃の手を止め、互いに距離を取った。

「風魔法、だと？　……何故、そんなものを使える」

風で火球を受け流されたエンブズが呆然と呟く。義人は力が抜けそうになる足腰に力を込め、口元を笑みの形に吊り上げる。

「どうでもいいだろう、そんなこと。さて、これで外の兵が中へと

雪崩れ込んでくる。お前の負けだ、エンブズ」

義人の言葉を証明するかのように塀の外から兵士達のざわめく声が聞こえ、穴から数人の兵士が中の様子を窺う。そして戦闘が行われていることを確認すると、他の兵に指示を出して中へと突入し始めた。

「ヨシト王！」

爆音を聞きつけたのか、邸内を探索していたグエンが兵士を連れて扉から飛び出してくる。ミーファもなんとか痛みを堪え、身を起こして刀を構えてエンブズへと怨嗟のこもった目を向けた。

「エンブズ……父の仇。今こそ、殺す」

「ふんっ、ポドロのような正義馬鹿は邪魔だったからな。前王もあやつの言葉によく耳を傾けておったわ。しかし、毒殺の容疑をかけられた時の顔ほど傑作なものはなかったわい」

挑発するようにエンブズが笑う。

「貴様ぁ……燃え尽きろ！」

ミーファが怒りの叫びと共に左手を前へと突き出すと、怒りに呼応するかのように燃え盛る炎が一直線に放たれた。エンブズへの最短距離を奔り、髪の一本も残さず燃やし尽くそうと迫る。

「おいおい嬢ちゃん、俺のこと忘れてるだろ？」

だが、ガルアスの前では無力だった。雷を纏った片刃の剣を炎へと振り下ろし、相殺して霧散させる。

「邪魔をするなぁっ！」
「無茶言うねぇ。俺の仕事はこいつを無事にハクロアに連れていくことだから、そいつは聞けないって」
激昂するミーファに苦笑を向けるガルアス。治癒魔法をかけていたカグラは、ガルアスの言葉に眉を寄せた。
「ハクロア？　まさか、内応していたとでも！？」
内応とは味方を裏切ってひそかに敵方と通じることである。カグラの疑問の声に、エンブズはつまらなそうに鼻を鳴らす。
「儂はこんな小さな国の財務大臣などで終わる気はないのでな。ここ数年、献納金を差し出してハクロア国に取り立ててもらったわい。本当なら貴様を殺して手土産にしたかったがなぁ」
ハクロア国とは、カーリア国の友好国であるレンシア国に隣接する国である。
戦火が絶えず、他国の領土を武力で奪い取ることが多い。この付近にある国の中では最大の軍事力を保有しており、友好国のレンシア国と小競り合いを数多く繰り広げている。
「そうかい。本当に最低な奴だな、アンタ……だが、この状況で逃げられるとでも？」
エンブズの言葉を聞いた義人は王剣をしっかりと構えて言い放ち、志信も棍を下段に構えた。グエンも槍を構え、塀の外からは続々と兵士が集まってくる。
例えガルアスが奮戦したとしても、物量差で押し切ることができ

るだろう。だというのに、エンブズの顔に焦りの色はない。

「馬鹿め！　逃げる手段などとうに用意しておるわ！」

嘲るように笑い、エンブズが懐から“何か”を取り出す。

その形状は羽箒のようだが、金色に輝いている。

どこかで見た記憶があると義人は記憶を漁り、すぐさま思い出した。

それは、ゴルゾーが以前『お姫様の殺人人形』と一緒に売りに来た物。

「『飛竜の翼』か！？」

「ふはははは！　その通りじゃ！」

エンブズが『飛竜の翼』を頭上へと掲げる。すると『飛竜の翼』が発光し、エンブズを黄色い光が包み込んだ。そしてそのまま宙に浮かぶと、矢のような速度で飛び去っていく。

それを確認したガルアスも、懐から『飛竜の翼』を取り出してやれやれと肩を竦めた。

「そんじゃあ、俺も失礼するぜ。もうちょっと戦っていたかったけどな」

『飛竜の翼』を頭上に掲げ、ガルアスの体が黄色い光に包まれる。

「ま、あのおっさんに“未来はない”。シノブ、また戦えることを祈っとくぜ」

それだけを告げ、ガルアスも矢のような速度で飛び立つ。

義人達にそれを止める手段はなく、エンブズの姿もガルアスの姿

もすぐに見えなくなった。

「くそ……くそおおおおお！　待て！　エンブズッ！！」

エンブズが飛び立った方角へとミーファが叫び声を上げる。

「逃がした、か」

志信は左腕を押さえ、無感情に呟く。ガルアスと戦っている最中に斬られたらしく、服の袖から血が滴っていた。服もところどころ斬られているが、怪我を負ったのは左腕だけのようだ。

義人は王剣を鞘に納め、目を瞑って深呼吸を数回繰り返す。そして目を開くと、集まってきた兵士に視線を向けた。

「重傷者が五人、他にも怪我をしている者がいる。すぐさま治癒魔法を使える者呼んできてくれ」

「はっ！」

ミーファのように、いや、それ以上に怒鳴り声を上げたいのを押し殺し、指示を出す。

カグラが治癒魔法を使ってはいるが、五人同時ではさすがに効率が悪すぎる。それでも五人ともまだ息があり、治癒魔法使いが到着すれば助かるだろう。

肝心のエンブズには逃げられたが死者はなく、重傷者を含めて怪我人が数人のみ。

『気に病むな、ヨシト。お主は出来る限りのことをした。死者も出さず、怪我人とて治癒魔法を使えばじきに回復する。それで良いじゃろ？』

義人の内心を読み取ったノーレが思念を向けてくる。その声色に心配の色を感じた義人は、なんとか胸の中の激情を堪えて首を横に振った。

「良いわけがねえよ」

小さく呟いた言葉は、風に流されて消える。王剣の柄を力の限り握り締め、義人はエンブズが飛び去った方向に目を向けた。

「良いわけが、ねえよ……」

もう一度呟いた言葉に込められた感情は、深い怒りと自身に対する情けなさ。

それでもなんとか己を律し、義人は待機している兵へと歩み寄る。

「みんなでエンブズの屋敷内を隅から隅まで調べてくれ。隠し金庫や隠し部屋がある可能性が高い。徹底的に探し、なんとしても見つけだせ」

「はっ！」

せめて横領された金だけは取り戻す。

それだけは、最低でも果たさなければならない。

義人は屋敷の中へと走っていく兵士達を見送りながら、睡眠不足と昨晩からの実戦で張り詰めていた緊張の糸が緩むのを感じた。それを自覚するなり疲労が足にきて、前のめりに地面へと倒れ込む。

「ヨシト様！？」

カグラが慌てた声を上げるが、疲労が蓄積された体は容易く義人の意識を奪う。徐々にかすんでいく視界に、義人は小さく悪態をつ

いた。

「くそ……」

不甲斐無い。心の底からそう思う。

そんな義人を嘲笑うかのように、風が頬を撫でていった。

ハクロア国王都フートリアのすぐ傍の街道に、空から二人の男が舞い降りる。

一人は先に逃げ出したエンブズ。もう一人はその後を追って飛び立ったガルアスだ。

さすがにいきなり王都の中に飛び込むわけにもいかず、ひとまずその傍の街道に着地することにした。

地面に足を着くと、今まで発光していた『飛竜の翼』が光を失って羽が白く染まる。埋蔵されていた魔力がなくなったためだ。

「やれやれ、こいつは便利だが一度使えば再使用するのに時間がかかるのが難点だな」

白くなった『飛竜の翼』を懐に入れ、ガルアスが呟く。魔力が溜まればまた使えるようになるが、ハクロア国の魔力回復施設に放り込んでも一ヶ月はかかる。

「そんなもの、新しく買えば良いことであろう？　ほれ、儂を早くハクロア国王の元へと案内せんか」

そんなガルアスを見たエンブズは、急かすように口を開く。飛んだだけで疲れたのか、少し肩で息をしていた。だが、これから先の

未来を思い描いているのか口元が笑みで歪んでいる。
横領した金をハクロア国へと流し、その国の財務大臣として登用してもらう。ハクロア国はカーリア国と違い、国土も広く国民の数も多い。その上商業や工業、農業や魔法技術がカーリア国の数歩先を行っており、軍の練度も段違いだ。税収も多く、自分に払われる給金もカーリア国の時とは比べ物にならない。
金に対する欲が人一倍強いエンブズは、そんな考えで自分の生まれ育ったカーリア国をあっさりと裏切った。
そんな欲にまみれたエンブズを、ガルアスは冷ややかな目で見る。

「おめでたい野郎だな……ヨシトとかいう新しい王にちょっとだけ同情するぜ。こんな無能で害にしかならねえ部下がいたとはよ」

カーリア国は他国と違い、非常に独自色がある国だ。
王の決定に従うのはどの国も一緒だが、その従い方が妄信的と言える。今までエンブズのような者が出なかったのが不思議なくらい王を信奉していた。さすがに最近は重税や横領などのせいでぐらついていたようだが、エンブズがいなくなれば安定するのは遠くないとガルアスは見ている。

「ん？　何か言ったか？」
「いや、なんでもねえよ。ほら、王都にはそっちの道だ」
「なんと！？　儂にここから王都まで歩けというのか？　馬車を呼べ馬車を！」

王都までは歩いて数百メートル程度。歩いて十分もかからないだろう。いや、エンブズの肥えきった体ではもっと時間がかかるかもしれないが、それでも大した距離じゃない。

「愚痴を言いなさんなって。ほら、王都に着けばアンタの『フート

リアまで送り届ける』って
仕事は終わりだ。着けばいくらでも贅沢できるんだろ？」
「そ、そうだったな。仕方ない、それでは歩くとするか……」

贅沢という言葉に頬が緩み、巨体を揺らして歩き出す。時折ブツブツと愚痴を吐くが、それでも先へと進んでいく。
そうすること十五分。ガルアスにとっては散歩にもならない速度だったが、エンブズはすでに汗をかいている。それでもなんとか城壁に囲まれた王都の門前まで辿り着くと、エンブズが歓声を上げた。

「ふはははは！　これで儂もハクロア国の官僚じゃ！」
「おめでとさん。そんで、俺の仕事もこれで終わりだな？」
「ああ！　金は先払いで払ったからのう！　とっとと儂の前から消えるが良いわ！」
「そうかい。それじゃあ」

エンブズの罵声に近い声にも、ガルアスは反応を示さない。エンブズがフートリアに一歩踏み入れた瞬間、気軽な動作で片刃の剣が横へと一閃する。

「“次の仕事”に移らせてもらうかね」
「……は？」

何が起きたかわからない。そんな表情を貼り付けたままで、エンブズの首が胴体から離れて宙に舞った。
弛緩しきった反射神経ではガルアスが剣を抜いたことすら察知できず、間抜けな顔のまま地面に首が落ちる。体はそのまま前のめりに倒れこみ、事も無げに切り捨てたガルアスは剣を血振るいして肩を竦めた。

「アンタのような奴が、本当にこの国の財務大臣になれると思ったのか？　まったく、寝惚けるのも大概にしてほしいぜ」

心底馬鹿にするように呟き、門の前にいた兵士が駆け寄ってくるのを見てため息を吐く。あとはこの死体を引き渡して、次の仕事に移らなければならない。

「お疲れ様ですガルアス様！」
「ああ、お疲れさん。そんじゃあ、手筈通りに頼むわ」
「はっ！」

兵士の敬礼に見送られ、ハクロア国軍所属傭兵隊隊長のガルアス＝アーミルは城門をくぐって王都へと帰還する。

「次は報告業務か……あー、めんどくせえ」

欠伸を一つ漏らし、ガルアスの姿は雑踏へと消えた。

第三十四話：一日の時過ぎて

そこは、深い闇の中だった。
音もなく、一寸先すら見えない漆黒の闇。
大地に立っているような気もするし、空を飛んでいるような気もする。もしかしたら水の中を掻き分けながら進んでいたのかもしれない。
上に向かっているのか、それとも下へと向かっているのか。
体はいうことを聞かず、ただ意識だけが浮遊する。時間の概念すら感じず、ただ闇の中で漂い続けた。

「……ゃ……」

そうしてどれだけ時間が経っただろう？
何も見えず、何も聞こえない中で僅かな変化が生じた。どこか遠くから聞こえてくる、懐かしい声。

「……と……ゃん」

意識が浮上する感覚。かけられた声に引っ張られるように、沈んでいた意識が覚醒へと進んでいく。
嗚呼、これは夢だ。
徐々に光が差す闇の中で、義人は一人呟く。
夢と言うにはあまりにも殺風景だが、そんな夢があってもいいかと苦笑する。

「よ……と……ゃん！」

かけられる声は、長年聞き慣れたもの。それを目覚ましに、義人

の意識は覚醒する。

「義人ちゃん！」

耳元で聞こえた声に、義人は目を開く。視界がぼやけるが、それでも間違えることなどあるわけがない。

「……おはよ、優希」

ベッド横で呼びかける優希に、義人は小さく笑いながら挨拶をした。

疲労と緊張の糸が途切れたことにより、気を失った義人が目を覚ましたのは一日経った後のことだった。

丸一日死んだように眠り込んだものの、治癒魔法使いではなく本当の医者の診断によればただの睡眠不足だったらしい。そんな状態で実戦に巻き込まれ、疲労が限界を超えたとのことだった。

そうして目覚めた義人は今、床の上で正座している。

「だからあれほどしっかり休んでくださいと言ったじゃないですか！　もし命に関わるような事態になってたらどうされるおつもりだったんですか！？」

そんな義人の前で仁王立ちする般若……もとい、怒りの形相を浮かべたカグラが、唾を飛ばす勢いで義人を叱り飛ばす。

「いや、でもな」

「なんですか！？」

なんとか言い訳しようと義人が口を開くと、それを制するようにカグラが机を叩きながら威嚇する。
その際硬い木で作られた机がミシミシと不穏な音を立てていた気がするが、精神衛生上義人は努めて無視した。
「義人ちゃん、本当に大丈夫？　どこか痛くない？」
優希はカグラの怒鳴り声をまったく気にせず、心配を表情に出しながら義人の体を労わる。　肩を揉もうとしたり、サクラと共にお茶を運んだりと部屋の中を行ったり来たりしていた。
「そもそも、いきなり魔法を使うなんて何を考えているんですか！？　何の訓練も積んでいないヨシト様が風の中位魔法なんて使ったら、体にどんな影響が出るかわからないんですよ！？」
「……すみません」
顔を突き合わせるように怒鳴るカグラに義人はただ頭を下げるしかない。カグラは自分の身を案じて怒ってくれているのだ。そう思えば、抵抗できるはずもなかった。
『妾が制御したのだから、体に悪影響など出るはずがないに決まっておるわ』
カグラの言葉にへそを曲げたのか、義人の足に柄が触れているノーレが不機嫌そうな声を届けてくる。
『なんだ？　魔法っていきなり使うと体に悪いのか？　俺と優希、治癒魔法をかけてもらったんだけど……というか、『強化』っぽいのもかかってるじゃん』

少し心配になって尋ねると、ノーレは鼻を鳴らすように説明していく。

『魔法を“使われる”のは大丈夫じゃ。問題は、魔法を使って魔力を外に出すという行為が危険でな。魔力は生命力に近いものじゃから、それをいきなり放出するのは危険が伴う。もっともお主の場合は妾がそれを制御しておるし、目の前の巫女のように熟練した魔法使いなら魔力を放出することに慣れておる。だから仮に魔力が空になったとしても日常生活に支障は出まいて』

『ふーん、そうなん』

「ヨシト様！　ちゃんと聞いていますか！？」

「はいぃっ！　聞いてます！」

ノーレとの会話に気を向けていた義人は、突然カグラに肩をつかまれて全力で驚く。慌ててカグラに目を向けてみれば、

「本当にっ、心配、したんですから……」

カグラは、目に涙を溜めていた。僅かに肩を震わせ、涙を流すまいと歯を噛み締めている。

「ちょ、その、な、なんで泣いてるんだよ！？」

怒られるのはまだいい。しかし、泣かれてしまっては義人に抗う術（すべ）はない。女性の涙はある意味剣や魔法よりも強いのである。

身振り手振りでなんとか泣き止んでもらおうとするが、カグラは何も答えずに目元を拭うだけだ。

『ど、ど、どどどうするよノーレ！？』

小さな子供ならともかく、同年代の女の子を泣き止ませる方法がわからず義人は『風と知識の王剣』であるノーレへと助けを求めた。

『知らんわ、戯け』

だが、返ってきたのは不機嫌そうな言葉のみ。

『お前『風と知識の王剣』だろ！？　何か良い知識があるだろ！？』

『男女関係の機微を剣に求めるほうがおかしいわ、戯けめ』

正論である。

義人はノーレに頼ることを諦めると、周りに目を向けた。

サクラと目が合うが、『わたし怒ってます』という表情で目を逸らす。僅かに頬を膨らませているのは可愛らしいが、今の義人にとっては心臓が痛くなる。

ならば優希にと助けを求めるが、いつも通りの笑顔を向けてくるだけだ。こちらは怒っていないように見えるが、少し眉が寄っている。

オーケー、触らぬ優希に祟り（たたり）なし。

すぐさまそう判断すると、義人はいまだに目元に手を当てているカグラに向き直った。

「も、もう無茶なことはしないから泣き止んでくれよ。頼む、カグラ」

「……本当に、もう無茶なことはしませんか？」

「ああ、もう無茶はしない」

真剣な顔で頷く。

無茶はしないが無理をする可能性はある。だが、それを口にするほど義人も馬鹿ではない。

カグラと目を合わせること数秒。納得してくれたのか、カグラはもう一度目元をこすって頷く。

「わかりました。ずっとここでお説教をしているわけにもいきませんしね。食事を取られたら、謁見の間で今回の騒動に関する報告がありますし」

涙を拭うと、そこにいたのはいつものカグラだった。毅然と背筋を伸ばし、義人を立ち上がらせる。

義人が立ち上がったのを確認すると、今度はカグラが膝をついた。義人が怪訝な表情を浮かべるが、カグラはそれに構わず頭を下げる。

「此度の騒動、見通しが甘かったわたしの責任です。なんなりと罰を申しつけください。どんな罰でも喜んでお受けします」

それは、『お姫様（プリンセス）の殺人人形（マーダードール）』に襲われた時と同じ台詞だった。

カグラの言葉を聞いたサクラも、真剣な表情で膝をつく。

そんなカグラ達に、義人は苦笑して首を横に振った。

「罰？　ねえよ、そんなもん」

「しかし！」

「だって、エンブズは取り逃がしたしな」

あの時義人は『カグラの罰は、犯人を捕まえてからだ』と言っている。

故に、エンブズが捕まっていない以上カグラ達に対する罰はない。

もし捕まえていたとしたら、捕まえた功績で罰は無しにするつもりだった。

「そ、それでは他の者に示しがつきません！」
「示しがつかないって言われてもなぁ……志信の姿を真似た『お姫様の殺人人形』の相手をしてたのなら仕方ないし。罰するならあっさりとサクラの姿を真似た『お姫様の殺人人形』に気絶させられた守衛の兵士達だろ」

寝室の扉の外から何やら悲鳴が聞こえた気がするが、義人は気にしない。本当に罰する気はないからだ。

「ですが！」
「王様命令」

笑顔で命令する。毎回使いどころが間違っていると義人も思わないでもない。カグラは納得できずに何かを言おうとするが、それを悟った義人はわかったと言わんばかりに頷いた。

「ならこうしよう。カグラは今まで以上に俺を支えてくれること。サクラは今まで以上に美味しいお茶を淹れること。それが罰ってことで」

言われずとも今まで以上に頑張ろうと思っていたカグラとサクラにとっては、罰にすらならない。しかし、義人が曲げるとも思えず二人はため息を吐いた。

「……わかりました」

納得はできないが、しぶしぶ頷く。

「それじゃあ、まずは食事にしようか」

義人は満足そうに笑うと、まずは着替えるために女性陣を部屋から追い出して優希が作ってくれた服に袖を通す。

そして顔に浮かべていた笑みを消すと、小さく呟いた。

「罰なんて、与えられるわけないだろ……」

見通しが甘かったのは自分だと、深いため息を吐く。ぐっすり眠って体の疲れは取れたが、精神的な疲労は中々抜けそうにない。

もう一度ため息を吐くと、義人は寝室を後にする。

扉の脇で何やらいじけている守衛の兵士に『さっきのは冗談だ』と励ましの言葉を一つかけ、義人は食堂へと向かった。

一日ぶりの食事を取った義人は、その足で謁見の間へと向かう。

赤い王のマントを身につけ、腰には王剣ノーレを差す。

すれ違った兵士や臣下が心配そうな目で見てくるが、義人は笑って手を振ることで無事をアピールした。

そうやって歩いていると、対面から志信が歩いてくる。志信は義人の姿を見ると、常の無表情の中に心配の色を覗かせた。

「義人……体はもう大丈夫なのか？」

「ああ。丸一日眠ってたらすっかり回復したよ。というか悪いな。俺が寝てる間に、エンブズの屋敷の中を調べる手伝いをしてくれてたんだって？」

「他にすることもなかったしな」

義人の感謝の言葉に、志信は言葉少なく頷く。そこで義人は、志

信の左腕に包帯が巻かれているのに気がついた。

「あれ、治してないのか？　治癒魔法使い呼んでこようか？」

左腕の上腕部に巻かれた包帯だが、志信は義人の提案に首を横に振る。

「これは俺の未熟で負った傷だ。治癒魔法で完全に治されては困る」

「自分に対する戒めってやつか？　いや、志信が良いのなら俺から言うことはないけどさ」

義人としては志信が手傷を負わされたことのほうに驚きを覚えたが、それを感じたのか志信が苦笑する。

「俺などまだまだ未熟な身だ。義人が俺に向けてくれる期待は嬉しいのだが、それに応えられるほど俺は強くない」

「だけど、傷は負ったけど負けてないだろ？」

志信のほうが劣勢ではあったが、あのまま負けていたとは義人は思っていない。その気持ちが嬉しかったのか、志信は小さく笑った。

「それはわからん。だが、次に戦うことがあったら勝てるよう修練を積んでおく」

志信の言葉に義人も笑うと、謁見の間に行くべく再び歩き出す。

謁見の間の扉までたどり着くと、脇に立っていた守衛の兵士が慌てて扉を開けた。義人はそれに礼を言うと、王座へと歩を進めていく。

臣下はすでに全員揃っており、今までエンブズがいた場所だけぽっかりと空白が出来ていた。

義人は王座までたどり着くと、ひとまず腰を落ち着ける。その傍にカグラが立ち、優希や志信は少し離れた場所に立つ。
膝をつく臣下一同を見回した義人は、苦笑を浮かべた。

「いきなり倒れてすまなかった。みんなには迷惑をかけたな」

本当は『すいませんでした』と言いたかったが、そんな口を臣下に利けば後でカグラに怒られる。

「迷惑など、とんでもありません！」
「ヨシト王、お体は大丈夫ですか？」

義人の言葉に、臣下の数人が声を上げた。他の臣下も気持ちは同じようで、心配そうな表情を浮かべている。
それをくすぐったく感じたが、嬉しくもあった。

「丸一日ぐっすりと寝たら疲れも吹き飛んだよ」

冗談混じりに言ってみると、それで安心したのか何人かが頷いている。義人自身も苦笑を浮かべると、報告書らしきものを手に持ったアルフレッドに目を向けた。

「それじゃあ、俺が寝てる間の報告を頼む」

義人の言葉に促され、アルフレッドは手元の紙に目を落とす。

「ヨシト王の指示通り、エンブズの私邸を隈なく探索しておいたんじゃがのう……色々と出てきて驚くばかりじゃった」
「何が出た？」
「横領したと思われる金が五千万ネカほどに、様々な魔法具や美術

品などじゃな。本当はもっとあったようじゃが、事前にどこかへと持ち出したらしいわい」

眉を寄せて唸るアルフレッド。義人は告げられた言葉に頷くと、アルフレッドと同じように眉を寄せた。

「ずいぶんと貯めていたみたいだな。全額取り戻せなかったのは悔しいが、多少でも戻ってきたと納得するか……それで、エンブズはハクロア国のどこに逃げたんだ？」

義人の質問に、今度はカグラが口を開く。

「現在調査隊を向かわせていますが、他国の領土で調査するのは難しく、足取りはつかめていません。国として正式に抗議するという手もありますが、どうされますか？」

「んー……そうしたいけど、その抗議を受け入れてエンブズを差し出すような国なのか？」

「それは少し難しいです。ハクロア国はこの近辺では最も大きい国ですし、交流も少ないカーリア国からの抗議を聞き入れる可能性は低いかと」

「下手すりゃ戦争吹っかけてきそうな国だしな。今のところは様子を見るしかないか」

声に悔しさが滲みそうになるのを堪える。そしてすぐさま気分を切り替えると、アルフレッドに他の報告を促した。

「それではエンブズがいなくなったことにより、財務大臣がいなくなってしまった件についてですが……」

「ああ、それならロッサがしてくれ」

即断で財務官のロッサ＝ハーネリアに一任する。それを聞いたロッサは、驚きのあまり口を数回開閉し、搾り出すような声を出した。

「わ、私……ですか？」
「うん。頑張ってくれ」
「しかし私は……」

過去に税金横領をしたことがある、そう言いたかったのだろう。
だが、義人は不思議そうに首を傾げた。

「なんだ、また“する”のか？」
「い、いえ！　滅相もありません！」
「だろ？　ロッサなら“ちゃんと”財務大臣の仕事をしてくれそうだしな」

褒めているようだが、実際には脅しである。
残っている財務官の能力は皆似たり寄ったりであるし、それならば理由はどうであろうとも一生懸命仕事に励んでくれる者のほうが良い。
もしまた問題を起こすようなら、今度は容赦するつもりはないが。

「扱う金額が大きいときは、俺かカグラにも報告すること。それを守りつつ頑張ってくれ」
「はっ！」

義人の言葉にロッサが頷く。それを満足そうに見た義人は、アルフレッドに続きを促した。　そして様々な庶務の報告を聞き、他の臣下からの報告にも耳を傾ける。
そうすることしばらく。報告することもなくなり、義人はそろそろ解散させようとしてミーファの様子に目を引かれた。

意気消沈といった風情で顔を下げており、エンブズを逃がしたことに対する悔しさが滲んでいる。自分の父に前王毒殺の濡れ衣を着せて処刑させたのだから、エンブズに対する怒りは深い。

義人はどうしたものかと思案し、口を開く。

「ミーファ」

「……はっ」

声にも張りがない。きっと後ろではカグラが心配げな表情をしているだろうと義人は思い、真剣な表情を作った。

「今回の件でお前の父、ポドロ＝カーネルが前王を毒殺したという嫌疑も晴れた。魔法剣士隊隊長に就任して以来、今までカーネルの姓を名乗っていたようだが正式にそれを許可する。そして、これから先ポドロの名を貶めるような発言は許さん」

『はっ！』

最後の言葉は臣下全員に向けての言葉だ。

毒殺はエンブズが仕組んだことだとすでにわかっているので、他の臣下もすぐに首肯して返事をする。

今の自分にはこれくらいしかできず、そんな自分を義人は悔しく思う。ミーファは一度顔を上げると、表情に僅かな喜色を浮かべて頭を下げた。

「はっ！　ありがとうございます！」

「よし、それでは解散とする！」

義人の号令の下、臣下達は退出していく。それを見送りながら、義人は肩の力を抜いて大きく息を吐いた。

「お疲れ様です、ヨシト様」

傍のカグラが労わるように声をかけてくる。それに苦笑で応えた義人は、王座から立ち上がった。

「さて、とりあえず一段落といったところか……残っている仕事を早く片付けないとな」

エンブズに対する処理が一段落したとはいえ、税金を六割に下げるための仕事がまだ残っている。他にも、今回の事件で見直すべき点がいくつも出てきてしまった。

「まったく、まだまだ大変だよ」

愚痴のように呟いて、謁見の間を後にする。

臣下の問題はある程度片付いても、今度は国の中の問題を片付けなくてはならない。

まだまだ問題は山積みで、片付ける懸案も多くある。

その重圧が肩に重くのしかかってくるが、それでも義人は前を向いて歩き出した。

立ち止まる暇なんて、今の自分にはないのだから。

第三十五話：ハクロア国の使者

エンブズの一件から五日ほど経ち、城の中は大分落ち着きを取り戻しつつあった。

各々が今まで通り仕事に励み、義人達もいつも通りの生活に戻りつつある。

今回の騒動でエンブズに道具を売った商人のベッソンは、何の罰もないのでは示しがつかないので罰金百万ネカで釈放。それと、違法な物は取り扱わないように言ってある。

税率を六割に引き下げるために片付けなくてはならない仕事もある程度片付け、下げられるところから順次引き下げていく。

税率引き下げの報を聞いた国民は諸手を上げて喜びの声を上げ、その喜びと感謝を綴った手紙が義人のところへと多く届いていた。

「うーん……ここまで喜ばれると、俺も嬉しくなるなぁ」

政務の合間に休憩を兼ねて手紙を読み、義人は頬を緩める。誰かに感謝されるというのはむず痒いが嬉しいもので、それが手紙という形で大量に送られてくれば尚更だ。

使える金が増えたということは消費する金も増えるということで、商業が今より活発になるだろう。そうすれば他の分野にも影響を及ぼし、今よりも生活の質が向上するのではないかと義人は思っている。

「はい、ヨシト様。お茶です」

「お、ありがとサクラ……っと」

サクラから差し出されたお茶を反射的に受け取り、顔を見て思わず目を逸らす。

「どうかしましたか？」

それを見たサクラは、不思議そうな顔で首を傾げた。

「いやいや、なんでもないよ。うん、なんでもない」

動揺を表に出さないよう気をつけ、義人はお茶を啜る。

「なんでもないと言われましても、今日だけで四回まったく同じことをおっしゃられてはわたしも気になります。ここ最近、毎日ですし……」

「ぶっ！」

サクラの切り替えしに、義人は思わずむせた。何度か咳をしながら、たしかに最近サクラの顔を見るたび同じことを言っていたなと自省する。

「あの、もしかしてわたし、知らない間に何か粗相を？」

言いあぐねていた義人を見たサクラは、怯えたように身を小さくして義人の様子を窺う。

「いやいや、なんでもないよ。うん、なんでもない」

そんなサクラを安心させようと慌てて口を開く。

「それで五回目です……ヨシト様」

言われて、義人の頬が引きつる。サクラは義人へと近づくと、懇

願するような表情を浮かべた。

「お願いですヨシト様！　何か至らぬ点があったのならおっしゃってください！　すぐに改めますから！」

「ちょ、近いっす！　近いですサクラさん！　そんな見上げるように潤んだ瞳で俺を見ないでください！」

下から見上げるように自分を見てくるサクラに、義人は慌てて身を引く。

義人がここまでサクラに対して動揺しているのはもちろん、エンブズの一件が原因である。しかし、その表情に浮かんでいるのは恐怖などではなくただの羞恥心と照れだ。

サクラの姿を真似た『お姫様（プリンセス）の殺人人形（マーダードール）』に襲われて以来、義人はこんな調子だった。

殺されるかもしれないという極限状態で見た光景は鮮明に記憶に残っており、元々記憶力の良い義人は細部まで思い出すことができる。

そして、その記憶力が問題だった。あの時はまったく気にする余裕がなかった“あるもの”を今更ながらに鮮明に思い出してしまい、サクラに対してどう対応すればいいか困っているのである。

義人の視線がサクラの顔から少し下のふくらみへと向き、すぐさま目を逸らす。

幼馴染みである優希やカグラに鈍感だと言われる義人ではあるが、その分“その手”のことに弱かったりもする。

義人本人の名誉のために言えば、義人も“男の子”であり、思春期真っ盛りだ。しかし、偽者だったとはいえいきなり知り合いの女の子に迫られたとあっては平静を保てない。

サクラにも、サクラの姿を真似た『お姫様（プリンセス）の殺人人形（マーダードール）』が襲ってきたとは言ってあるが、どういう風に襲ってきたかまでは伝えていなかったのも原因の一つである。

――落ち着け俺！　落ち着くんだ俺！　あれは人形だった。本物のサクラじゃないんだ。だから落ち着いて対処しろ。さあ、サクラの目を見ていつも通り話しかけろ！

一心に念じ、義人はサクラの視線を正面から迎え撃つ。

「本当になんでもないんだ。ちょっと気になることがあっただけで、それは今解決したから。サクラは何も気にしなくていいよ。あ、お茶のお代わりもらえるか？」

少し棒読みだったが、心を落ち着けてそう言い放つ。

「あの、お茶はまだいっぱい入ってるみたいですけど……」

言われて手元の湯飲みに目を向けてみれば、まだ七割ほどお茶が入っていた。

どうやら、思ったよりも冷静になれていないらしい。

義人はそんな自分が情けなくなったが、いずれ時間が解決するだろうと決め付けることで精神を落ち着かせる。

「さぁて、仕事仕事っと」

そして、とりあえず逃げた。

およそ午後二時。義人が七回目の鐘の音を聞きながら政務を片付けていると、扉をノックしてからカグラが入室してきた。

カグラにはそれなりに権限が与えられており、義人の代わりにあ

る程度までの仕事なら独自の裁量で決定することができる。そのため城のあちこちに赴いており、最近では義人の傍にいることが以前よりも減っていた。それでも、一日の半分近くは義人の傍で政務を共にこなしているのだが。

そんなカグラが、珍しく戸惑った表情を浮かべながら口を開く。

「ヨシト様、謁見の申し出があるのですが……」

「謁見？　ゴルゾーか？」

謁見と言われてすぐに思い浮かんだのは商人のゴルゾーだった。しかし、ゴルゾーには直接執務室に来ても良いと言い含めてあるのでそれはない。

ちなみに今回の件でのゴルゾーへの報酬は金ではなく、エンブズの屋敷にあった美術品数点だ。ゴルゾーからの希望だったのだが、自分なら高値で売り捌けるからそちらのほうが良いらしい。

しかしカグラは戸惑いを口調に乗せて、謁見者の素性を述べた。

「それが、ハクロア国からの使者が来ていまして」

「……は？」

言われたことが少し理解できず、間を置いてから首を捻る。

「ハクロアって……エンブズが逃げ込んだ国だよな？」

「はい」

「おいおい、本当か？　まさか戦争を仕掛けにきたんじゃないだろうな？」

冗談混じりに言ってみるが、もしそうなれば大事だ。ただでさえ国内が安定していないし、この国の兵力は低い。そんな義人の懸念に、カグラが首を横に振った。

「たしかにハクロア国は好戦的な国ですが、それはないかと。その、こういってはなんですが、我が国を相手に戦争を仕掛ける利点がありません」
「……うん、俺の立場でいうのもなんだけど、たしかに利点はないよな」

国力は低く、独自の生活様式を築いているこのカーリア国を支配してもメリットなどない。
なら何故きたか？　それを考えるが、情報が少なすぎてわからない。
義人は少し思案していたが、すぐさま立ち上がって指示を出す。

「ひとまず謁見の間に行くとしよう。その使者とやらに会わないとどうしようもないしな。一応、警戒のために志信とミーファも呼んできてくれ」
「はい、わかりました」

義人の指示を聞いたカグラが執務室から足早に出て行く。義人はそれを見送ると、王のマントを身につけて王剣を腰に差した。

『さて、ノーレはどう見る？』

そして、すぐさま王剣ノーレへと話しかける。

『そうじゃな……同盟の申し出か、はたまた別の理由か。こうも情報が少なくては妾でも推察すら困難じゃ』
『やっぱりそうだよな』

ノーレでもわからないらしく、義人は思念通話を止めて謁見の間

を目指す。
エンブズの一件以来城の中を警備している兵の数は増えており、出会う度に膝をついて頭を下げられるのには困ったが、今は笑って頭を上げさせる余裕はない。
とりあえずいつも通り苦笑だけ浮かべながら、義人は謁見の間へと向かった。

義人が謁見の間に足を踏み入れると、すでにハクロア国の使者らしき者達が膝をついて頭を下げている。人数を数えてみれば、その数三人。
義人はひとまず王座に座ると、急いできたらしい志信とミーファが控えていることを確認した。そしてカグラが傍に立ち、義人は口上を考えてから口を開く。

「さて、まずは顔を上げてもらいたい。ハクロア国の使者とのことだが、一体どういった御用向きかな？」

ひとまずそう言うと、使者達が頭を上げる。そして使者の一人が慇懃な態度で口を開いた。

「我がハクロア国の国主より書状を携えて参りました」
「書状？」

使者がぎこちない日本語と共に白い木箱を取り出し、傍にいた兵士がそれを受け取る。そして箱を開けて危険がないことを確認すると、今度はカグラへと手渡した。

「魔法を使った仕掛けもありません。それではヨシト様」

魔法による仕掛けがないことを確認すると、今度は義人へと渡す。
義人は木箱を受け取ると、中身の書状を取り出して広げた。そして、小さく呟く。

「……読めん」

書状に書かれていた文字は、日本語でなくまったく別の言語である。おおよその国で通じるコモナ語と呼ばれるものだが、異世界出身の義人に読めるはずもない。

「すまん、カグラ。ちょっと読んでくれないか？」

仕方ないので書状をカグラに渡し、読んでもらうことにした。
書状に書かれていたことは、大まかに説明するとこうなる。
曰く、王都に不法侵入をした者を手討ちにしたこと。その不法侵入した者がエンブズであり、不法侵入に対する抗議と手討ちに対する詫び。
それらがつらつらと書き綴られており、義人は眉を寄せた。

「不法侵入？　エンブズはハクロア国に登用されたと言って喜んで飛んでいったんだが、不法侵入なのか？」

裏切って、などとは言わない。向こうもそれは知っているだろう。
そんな意図を込めた言葉に、使者は首を傾げた。

「はて、登用とは？　そのような話は窺っておりませんが？」

初耳だと言わんばかりのその態度に、義人はさらに眉を寄せる。

「エンブズ殿はそちらからの密偵ではないのですか？　そう判断されて兵士に斬られたのですが」
「密偵？　あんな密偵に向かない奴を密偵にするわけないだろ」
「そうですか。ですが我が国は戦時中でしてな。怪しい動きを取られては、こちらとしても相応の対応を取らなくてはならないのですよ」

義人を侮っているのか、それともカーリア国を侮っているのか。それともその両方か。使者の態度はすこぶる悪い。

「それでエンブズを殺したってわけか。だけど、よくエンブズがこの国の人間だとわかったな？」

その態度に感化されてか、義人も態度を少し変える。何故殺したのがエンブズというカーリア国の人間だとわかったのか、それを追求していく。

「エンブズ殿の顔を知っている商人がいましてな。それで知ることができました」

使者は義人の言葉をさらりとかわす。
商人が様々な国を股にかけて行商するのは珍しいことではない。それなら何故都合良くエンブズの顔を知っている商人がいたのかと言いたかったが、使者の顔を見る限りその答えも用意してあるのだろう。
義人は一度口を閉じ、王座に背を預けた。

「それで？　書状には不法侵入に対する抗議と、エンブズを殺したことに関する詫びが書かれてあるが、具体的にどうしたいんだ？」

追求を止めた義人に使者は僅かに目を細める。そして一拍の間を置いて口を開いた。

「痛み分けにする、というのが我が国王の意向です」

「おいおい、こっちは財務大臣を殺されて、そっちは不法侵入をされただけだろ？　それで痛み分けっていうのはおかしな話じゃないか」

本当はそんなことなど思っていないが、義人は使者に噛み付く。すると、使者は薄い笑みを浮かべた。

「では、エンブズ殿が戦時中の我が王都へと不法侵入したのはそちら側の指示と判断して良いのですね？」

使者の言葉に、義人は再度口を閉ざす。

それを認めてしまえば、事実とは異なるとしても先程の密偵という言葉を肯定することになりかねない。

密偵でなくても、向こうが密偵と断定して押し通す気だろう。しかもハクロアは戦時中だ。そんな中で密偵を送り込んだと判断されれば、戦端を開く理由にされるかもしれない。それでもこのまま話を終わらせる気がない義人は、別の方面から攻める。

「それじゃあ、いきなり襲い掛かってきたガルアスについてはどう説明する気だ？　エンブズを手引きするためにそっちから送ってきたんだろ？」

義人がそう言うと、使者は表情を変えずに再び首を傾げた。

「はて、ガルアス？　誰ですかな、それは」

これもとぼける気らしい。
たしかにガルアスがハクロア国の人間だという証拠はないし、偽名の可能性もある。その上、目の前の使者は義人よりも交渉事では上手だ。追求しても簡単にかわすだろう。
義人は内心で怒りの感情を殺しつつ、頭では冷静に考えを進めていく。
証拠がなくては相手を糾弾することもできず、このまま食ってかかれば相手側が反撃に出てくる可能性がある。

「……わかった。痛み分けだとそちらの国王に伝えてくれ」

だから、義人には頷くしかなかった。
証拠を集めて正式に抗議をしたい気持ちもあるが、証拠になるものを残しておくほど相手も馬鹿ではないだろう。

「承りました。いや、お話が早くて助かります」

まさに慇懃無礼と言うべきか。国力差のあるカーリア国を見下す使者は含み笑いをしつつ、他の使者に目を向ける。すると傍に置いていた大きめの木箱を手に取った。

「では、こちらをお渡しいたします」
「それは？」
「エンブズ殿でございます」

サラリと告げる使者に、義人は目を見開く。

「エンブズ、だと？　そのどう見ても人の頭くらいしか入らないようなものが？」

嫌な予感がするが、それでも指摘する。すると使者は感心したように頷いた。

「ご名答です。さすがに体まで持ってくるのは大変でしてな。こちらは首桶でございます」

カグラが控えている兵士に目配せすると、兵士が頷いて木箱を受け取る。そして中身を見るなり顔を青くした。

「た、たしかに、エンブズ様です……氷付け、ですが」

「腐敗防止のための処置です」

何でもないように使者は言葉を挟む。義人は右手を握り締めつつ兵士に目を向けた。

「弔ってやってくれ」

「はっ！」

例え横領した上に反逆したエンブズだが、死んでしまえば恨んでも仕方ない。義人は感情を見せないように心がけつつ、使者に向き直る。

「他に何かあるか？」

「いえ、ありませんな。それでは、失礼いたします」

おざなりに頭を下げ、使者達が退出していく。義人はそれを睨むように見送り、姿が見えなくなるなり歯を噛み締めた。

こちらが国として正式に抗議する前に、先手を打ってきたのだろう。武力を背景に知らぬ存ぜぬを主張し、しつこいようなら威嚇する。単純だが実に効果的だ。

元の世界なら国際連合や国同士の貿易、周囲の国からの風評などの関係があるため到底できないことだが、ここは力がある国が上に立つ世界。抗議して実力行使に出られれば、大きな被害を受けてしまう。

「くそっ……」

小さく吐き捨てる。個人の喧嘩ならともかく、国全体に関わる喧嘩など吹っかけるわけにもいかない。それも、負けるとわかっている喧嘩なら尚更だ。

別段、エンブズのことを悼んでいるわけではない。たしかに人が死んだのは初めての経験だが、目の前で死なれたわけではないため義人自身でも意外なほどに感情が波立たない。ただ、相手のやり口が義人は気に食わなかった。

「ヨシト様、ハクロア国に向かわせている調査隊はどうなさいますか？」

そんな義人を気遣ってか、カグラの声はいつもより柔らかい。

「……これじゃあハクロアを探る意味もない。それに、その調査隊も不法侵入だと絡まれても困るしな。すぐに呼び戻してくれ」

「わかりました」

頷くカグラを横目に、義人は立ち上がる。気分が滅入っているが、片付けるべき仕事はまだいくらでもあるのだ。

義人は何とか気を落ち着けて執務室へと向かう。それを見た臣下達も各々の仕事場へと戻っていく。

ただ、ミーファだけは気の抜けた表情で、いつまでもその場に立ち尽くしていた。

第三十六話：途切れた復讐心

ハクロア国の使者が去ってから三日が経ち、義人はすでに気分を切り替えていた。

痛み分けと正式に決めた以上、ハクロア国と関わることもない。そう判断し、思い出すだけでも怒りが沸きあがるってくるので、どうでも良いこととして頭の片隅へと仕舞いこんだ。

たしかに今回の事件は大きな問題だったが、他にも片付けなくてはいけない重要な案件がたくさんある。しかも徹夜をしようとするとカグラやサクラの目が厳しいので、政務に携われる時間は今までよりも多少減ってしまった。

自分はこんなに勤勉だったのかと義人は苦笑したが、他人の生活がかかっていては真剣に頑張らざるを得ないのである。

それに、元の世界に戻るまでは出来る限り頑張ると決めた。そのため、義人は今日も様々な問題を片付けていく。

町や村、国民からの嘆願書。

臣下から提出される提案書や許可を求める書類。

魔物退治のために遠征させる部隊を選び、それに伴う許可。

国家予算の無駄をなくす方法など。

多岐に渡って決めねばならず、義人の周りにはカグラや専門の文官武官が常にいる。そのため、様々な噂や情報が義人の下へと届く。

そして最近、義人の耳にある噂が届くようになっていた。

「ミーファの様子がおかしい？」

今日だけで三回告げられた言葉を義人は復唱する。

主に武官や兵士からの報告だが、ここ最近ミーファの様子がおかしいらしい。

どこか気の抜けたような顔をしており、訓練にも身が入っていな

い。このままでは怪我をするのではないか。何か重大な悩みを抱えているのではないか。
そんな報告が数多く届いている。

「んー……変だった、かな？」

義人は朝礼のときの様子を思い出そうとするが、よく覚えていなかった。
臣下の顔はなるべく見るようにしているのだが、ハクロアの使者が来て以来、朝礼の際に挙げられる情報を整理推察することに集中していたためである。
うーむ、と悩みつつ眉間を押さえる義人だが、いくら記憶を掘り返しても思い出すことができない。

「ヨシト様、お茶です」
「お、ありがと」

そんな義人にサクラがお茶を差し出し、礼を一つ言ってから口をつける。
熱すぎず、かといって温い（ぬるい）わけでもない、丁度良い温度のお茶で喉を潤しつつ義人は眉を寄せた。

「志信が何かやったか？　いや、しかし……うーん」

頭を働かせるが、理由が思い浮かばない。
噂というか、その報告が出始めたのは三日ほど前からだ。丁度ハクロア国の使者が帰った辺りからミーファの様子がおかしくなっているらしい。

「……エンブズ、か」

あの謁見以来ミーファが気を落としているのなら、それはエンブズのことだろうと義人は当たりをつける。
父親の仇に逃げられ、自分の手で討つこともできずに死なれた。それで気を落としているのではないか。

「うん、そう考えるのが妥当かな」

一つ頷き、執務用の机に積まれた書類を見る。
以前より大分量が減ったとはいえ、まだその数は多い。しかし、ミーファは魔法剣士隊の隊長という重要な役職に就いており、そんな人物が気を落としていては全体の士気にも関わりかねない。
義人はこれからのスケジュールを思い浮かべ、息を吐いてから立ち上がる。そして傍で政務を共にこなしていたカグラに目を向けた。

「カグラ、俺は休憩がてら訓練場に行ってミーファの様子を見てくる。三十分くらいで戻ると思うから」
「ミーファちゃんの様子、ですか……はい。お願いします、ヨシト様」

カグラも気にしていたのか、すぐさま頷く。そしてサクラに向かって口を開いた。

「サクラ」
「はい、カグラ様。心得ています」

短いやり取りをするなり、サクラも義人の傍へと歩み寄る。理由はもちろん護衛のためだ。
暗殺未遂事件以来、移動する際には必ずカグラかサクラが追随するようになった。

その二人がどうしても無理な場合は複数の兵がつき従い、義人にとっては窮屈なことこの上ない。しかし、安全のためだと言われれば義人にも頷くしかなかった。悪意ではなく、義人の身を案じてのことだったため、無碍にもできない。

用心のために王剣ノーレも身につけ、義人は執務室を後にした。

城の裏手にある訓練場では、今日も兵士達が訓練に励んでいる。城の警備や町村からの要請で魔物退治に出かけている部隊もいるため、その数は常に一定ではない。

ミーファが率いる第一魔法剣士隊はどこにも派遣していないので、今日は訓練場で訓練に励んでいるはずである。

サクラを連れた義人は裏門から訓練場へと足を踏み入れ、遠目に訓練の様子を窺う。

基礎訓練は終了したのか、実戦形式として一対一で切り結んだり、魔法を使って訓練をしている。

肝心のミーファを探してみれば、すぐに見つかった。

トレードマークの赤い長髪を翻し……志信に弾き飛ばされている。

「おー、すげえ。人ってあんなに飛べるものなんだな」

志信と試合をしていたらしいが、鎧に打突を喰らって数メートル後ろへと“飛んで”いた。なんとか空中で身を捻り、足から着地するものの体にいつものキレがない。着地するなり駆け出そうとするが、間合いを詰めた志信に反応すらできていない状態だ。

「たしかに、調子が悪そうだな。あれなら俺でも勝てるかもしれん」

もちろん冗談である。ミーファはおろか、その辺の一般兵にでも

負けるだろう。

『戯けが……妾を使ってその辺りの雑魚に負けてみい……枕元に立つぞ？』

『ちょ、立たないで！？　というか、無理だろ。俺素人もいいところなんだぞ？』

『その素人が、隣のメイドを真似た魔法人形を倒したんじゃぞ？　まあ、阿呆な豚が条件を吹き込んだらしく、能力は低かったがな。そもそも、遠距離から魔法で攻撃すれば勝てるじゃろうが』

どうやらノーレはプライドが高いらしい。しかも、いまだにエンブズを豚と呼称している辺り執念深いところがあるのかもしれない。自分を振るう者が負けるのは気に入らないようで、不機嫌そうな声が聞こえてくる。

『いや、でも相手は魔法剣士だぞ？　そのくらい避けるだろ』

間合いを詰められれば、義人のほうが不利になるだろう。何せまともな剣の振り方すら覚えていないのだから。

『ならば避けられないよう全体を薙ぎ払うが良い。そのくらいはできるじゃろ？』

『できないって！？』

そもそも、そんなことをすれば相手が死にかねない。物騒なことを呟くノーレの意識を逸らすべく、義人は違う話を振ることにした。

『そういや魔法人形の条件がどうのこうのって言ってたけど、何のことだ？』

『それはじゃな、魔法人形に他人の姿を真似させた後、一体何をさ

せるか決める時の話じゃ。条件をつけられた魔法人形は、その条件を実行するために動く。大抵条件は一つしかつけないんじゃが、メイドの姿を真似させたときにおそらく二つの条件をつけたんじゃろうな。そのおかげで、メイドの本来の能力の半分も発揮しておらんかったわ』

『条件をたくさんつけるとマズイのか？』

『うむ。その分意識が割かれるからな。おそらく夜伽と暗殺両方を指示したのじゃろう。だから両方を実行しようとして能力が落ちる。もしも暗殺だけ条件にしておったら、今頃死んでおったかもしれん。あそこで戦っている仏頂面を真似た魔法人形が巫女とメイドを殺そうとしたと言っておったが、話を聞く限り殺すことだけを指示したのじゃろう。その分本物に近い能力を持っておったはずじゃ』

仏頂面というのは志信のことだろう。巫女はカグラでメイドはサクラ。義人は仏頂面という言葉に内心だけで苦笑する。

『仏頂面って……あいつ、慣れれば表情豊かなんだぜ？』

『知らんわ戯けめ。ともかく、あの豚が阿呆なおかげで、そして妾のおかげで助かった。そう覚えておくが良い』

『はは、了解。ありがとうな、ノーレ』

『ふん、わかれば良いわ』

ノーレとの会話を止め、義人はサクラへと目を向けた。

「サクラはどう見る？　ミーファの調子が悪い理由はわかるか？」

「わ、わたしですか？　そ、そうですね……」

かけられた声に、サクラは僅かに動揺しながら考え込む。小柄なサクラが一生懸命考えている姿は非常に可愛らしいものがあったが、ノーレ曰くけっこう強いらしい。

そのことに興味を惹かれた義人は、軽い気分で質問する。

「サクラって強いらしいけど、どのくらい強いんだ？」

「ふぇっ！？　わ、わたしの強さですか！？　それは、その……」

再度の質問に、サクラは言いよどむ。

自分の実力を把握していないのか、それともサクラ特有の謙虚さで自分の実力を告げることを躊躇しているのか。サクラの様子から後者だと判断した義人は、物は試しにと比較対象を挙げる。

「それじゃあ、その辺で訓練している普通の魔法剣士とサクラならどっちが強い？」

「それは、多分わたしです」

「へぇ……それじゃあ、ミーファとなら？」

「さすがにミーファ様に勝つのは難しいかと……」

そう言って控えめに微笑むサクラ。そんなもんか、と義人は納得しかけるが、それを遮るように再びノーレが話しかけてくる。

『ヨシト、このメイドは嘘を言っておるぞ。あの赤い髪の小娘程度、倒すのはわけないはずじゃ』

『……いや、それはないっしょ。ミーファってけっこう強いんだぜ？』

『戯け。あの赤い髪の小娘が強いのではなく、周囲が弱いのじゃ。そもそも、この国全体兵の練度が低すぎるわ』

『最近は多少良くなってきたって志信が言ってたけど』

『それは、下の下以下の連中がようやく下の下まで這い上がってきただけじゃ。この国の中だけで言えば強くなってきたと言えるかもしれんが、他国と比べてみい。あの赤い髪の小娘とて、部隊の副隊長相手に防戦程度が関の山じゃ。隊長並の者と戦えば、数分も持た

ないじゃろうて』
『……ミーファって今すごい調子悪そうだけど、今の状態でってことだよな？』
『現実逃避をするでない。もちろん万全の状態での話じゃ。あの調子では、一般兵三人がかりでこられるだけで負けかねん』
『よし、可及的速やかにミーファの調子を向上させようじゃないか』

ノーレの言葉に触発され、ミーファ達のほうへと歩み寄っていく。いくら今まで他国との戦争がなかったとはいえ、ハクロア国のような国もいる。それにもしまた敵が城に侵入してきても、兵士が足止めすらできないのでは安心して眠ることもできない。
義人に気づいた兵士が慌てて膝をつこうとするが、義人は苦笑しながら手を振ってそれを遮った。

「いつも通り訓練をしていてくれ」

一応そう言ってはみるが、国王がいてはやりにくいのか兵士達の動きが急にぎこちなくなる。義人は苦笑を深めながら、志信に打ち倒されて膝をついているミーファへと歩み寄った。

「調子が悪そうだな、ミーファ」
「……はっ、面目ありません」

答えるミーファには、いつもの力強さがない。いや、なくなっている。心ここにあらずと言うべきか、どこか気の抜けた雰囲気だ。
義人は志信に顔を向けると、一応確認を取る。

「ミーファの調子、志信はどう思う？」
「すこぶる悪いな。鍛錬に身が入っていない。それでは怪我をすると言っているのだが、本人の立場上休むわけにもいかないだろう。

だが、このままでは他の兵に影響が出かねんな」

ばっさりと切り捨てる志信に、ミーファは顔をうつむかせた。そんなミーファの様子に、どうしたものかと義人は考え込む。すると、傍に控えていたサクラがミーファへと話しかけた。

「その、ミーファ様は“体調”が悪いというわけではないのですか？」

心配そうなサクラの声。ミーファはその声に込められた意味を理解し、ミーファは首を横に振る。

「いや、“それ”ではない」

「そうですか。でも、ミーファ様って無理をして訓練されることがありましたし……」

「ん？　なんだ、もしかして風邪でもひいてたのか？」

意味がわからなかった義人が尋ね、志信も首を捻った。すると、サクラは何故か顔を赤くする。

「よ、ヨシト様達は気にしなくて大丈夫です！」

「ええ！？　体調を気にしただけなのに！？」

サクラに怒られ、義人は思わず身を引く。だが、サクラの非難するような視線に負けて義人は両手を上げて降参した。

「わかった。体調的なものじゃないんだな。うん、納得したからそんなゴミを見るような目で見ないでくださいサクラさん」

「な、なんで敬語なんですか！？　そもそもそんな目はしていませんよ！？」

もちろん冗談である。義人は慌てているサクラに少々癒されつつ、ミーファへと目を向けた。そして真剣な表情を作る。

「まあ、冗談はさて置き単刀直入にいこう。最近気落ちしてるのは、エンブズが死んだことが原因だな？」

咎めるような声ではなく、ただ確認するだけだ。ミーファは一拍の間を置いてから頷く。

「はい」

「父親の仇が別の人間に殺され、目標を見失ったか？」

「……はい」

先程よりも長く間を置いて頷くミーファ。

本来口出しするようなことではないのだが、周囲に影響を及ぼしているのなら放っておくわけにもいかない。義人がどうやって立ち直らせるかと思案していると、それよりも先に志信が口を開いた。

「ミーファ。俺は、殺してまで復讐したい相手などいない。そんな俺が口を挟むのはお門違いだろう。しかし、敢えて言わせてもらう」

志信はミーファを真正面から見据える。

「復讐に囚われるな。仮にエンブズを討ったのがお前だったとしても、今と同じような空虚な感情を持ったはずだ。仇を討って喜んだとしても、その先に残るものなどないだろ？」

諭すような志信の言葉。ミーファは黙って聞いていたが、すぐに反発するように声を張り上げ、志信を睨みつける。

「それでもわたしはっ！　父上の仇をこの手で討ちたかった！　そのために剣の腕を磨いて、魔法を使えるようになったのに！」

ここ最近ずっと思っていたのだろう。放たれる言葉には、自らの手でエンブズを討つことができなかったことに対する怒りと悲しみが込められていた。そんなミーファを見た志信は、ミーファを冷めた目で見る。

「ならば剣を捨てろ。信念のない剣など、ただの暴力にすぎん。復讐の相手が死んだ以上は剣を振るう必要はないはずだ」

冷たく言い放つ志信にさすがに義人が口を挟もうとするが、志信の真剣な表情を見て口を閉ざす。言葉にせずとも、ここは任せてほしいという気持ちが義人にも伝わってきた。

「そんなこと！」

「俺が決めるようなことではないな。たしかにこれはミーファ個人の問題で、俺や義人達にも口を挟める問題ではない。しかしそれで剣を振るえなくなるというのなら、今すぐにでも剣を捨てろ。周囲にも迷惑がかかるし、それがお前のためだ」

志信が毅然と告げると、ミーファは歯を噛み締めながら視線を下へと向けた。そして義人のほうに一礼すると、何も言わずに駆け出す。

「おい、ミーファ！？」

義人が慌てて追いかけようとするが、それを察した志信が肩をつかんで止める。

「追わないでくれ、義人。これはミーファ自身の問題だ。本来、俺も口を挟むようなことではなかった」

「じゃあなんで口を挟んだんだよ？」

「このままでは、遠からずミーファは駄目になっていただろう。そうなる前になんとかしたかった。それに、あのままでは義人が俺と同じ事を言っていただろう？　口下手な俺では説得もできないが、義人よりも俺のほうがミーファと近い。だから俺から言わせてもらった」

近い、というのは立場のことだろう。義人の立場で志信と同じことを言えば、ミーファは本当に剣を捨てかねない。義人は眉を寄せ、唸るように呟く。

「他に手はないのかよ……」

「これればかりは、な。時間が解決するか、誰かが背中を押さなければ前へは進めまい。第一、復讐する相手を失った者の気持ちなど、推察はできてもわかることなど不可能だ。同じような境遇にならない限りはな」

志信の言葉に、義人は渋々頷く。

たしかに今は打てる手がないと自分に言い聞かせる。

「仕方ない、か。ミーファが抜けた穴はどうする？」

「戻るまで俺が引き受けよう」

「……ミーファは戻ってくるか？」

「戻るだろう、ミーファならば」

ミーファが走り去った方向を見据え、志信は小さく呟いた。

第三十七話：未来に向けて

夜も更け、ミーファは自室のベッドに寝転びながら天井を見上げていた。壁には白の鎧と一緒に愛用の刀が立てかけられている。

「はぁ……」

深いため息を吐く。エンブズが死んだと聞いてから、ミーファは胸に穴が開いたような気持ちだった。

父親を暗殺犯に仕立て上げた者に対する憎悪は、今でも根深く残っている。だが、その矛先を向ける相手が死んでしまい、どこに向かって気持ちを向ければいいかミーファにはわからなくなった。

昼に志信に剣を捨てろと言われたが、そうしてしまえば自身に残るものは何もない。

剣の腕を必死に磨き、魔法を習得してきた。だが、その他のことなど気にも留めてこなかった。料理や裁縫などできないし、剣を捨てて一体何をしろと言うのか。しかし、その剣すら振るう気が起きない。

「どうしようか……」

小さく呟くと、それを遮るように部屋の扉がノックされる。

親友のカグラか、それとも昼に厳しく言い放った志信か、それとも王のくせにお節介な節がある義人か。

再度扉がノックされ、ミーファはのろのろと体を起こす。

「どちら様ですか？」

一応敬語で話しかけるものの、険のある声だ。しかし、相手はそ

れを気にせず声をかけてくる。

「儂じゃ、ミーファ」

そして、それはミーファが予想もしない人物だった。己の父親とも親しかった者の声に、ミーファは慌てて扉を開ける。

「アルフレッド様!?」

扉を開けると、そこにはアルフレッドが立っていた。

「うーん……いかん、駄目だ。気になる」

昼間の一件以来、なんとか政務に精を出していたがそれもそろそろ限界だ。義人は王印を机に置くと、疲れた体を労わるように背伸びをする。

「ミーファちゃんのことですか?」

今日は珍しく一日中一緒にいたカグラが僅かに不安を込めた声で尋ね、義人は少し迷って頷いた。

「ああ。気になるからちょっと部屋にでも行ってみるかな」

「それならわたしも行きます」

義人はてっきり止められると思っていたのだが、カグラはすぐさま立ち上がる。

どうやらカグラは義人以上に気になっていたらしい。だが、義人

をよりいっそう支えると誓った以上仕事を放り出すわけにもいかなかったのだろう。しかし今日の分の仕事はなんとか片付いたので、カグラは親友の様子を見に行くことに決めた。

「それじゃあ早く行きましょう、ヨシト様。あんまり遅くなると、ミーファちゃんも寝ちゃうかもしれません」

そう言うなり、カグラはいつもより早い歩調で歩き出す。

「ちょ、待ってくれカグラ。早いって！　サクラ、戸締まりとかを頼む！」

「は、はい！」

サクラに戸締まりを頼み、義人はすぐさまカグラの後を追う。そして横に並ぶと、苦笑を浮かべながら話しかけた。

「カグラはミーファと付き合いが長いんだったな。やっぱり心配か？」

「そうですね……以前に比べればミーファちゃんは大分おとなしくなっていますけど、復讐心は強いままでしたから。その対象が急にいなくなったとなれば、やはり心配です」

「以前のミーファはどんな感じだったんだ？」

好奇心から尋ねると、カグラは遠くを見るように目を細める。

「昔のミーファちゃんは、剥き出しの刃みたいな感じでした。今でこそわたしがからかえば顔を赤くするような子ですけど、父親のポドロ様が亡くなられた直後のミーファちゃんは感情を失った人形みたいだったんです。魔法剣士隊に入隊してからは、毎日自身を苛め抜くように訓練をするばか

りで傷だらけでした」

毎日治癒魔法をかけてあげてたんですよ、と懐かしそうに、それでいて悲しそうにカグラが付け加えた。義人は武官の住居がある方向へと歩きながら、何も言わずにただ耳を傾ける。

「それでも、周囲に努力が認められ出すと徐々に性格が軟化していきました。例えそれが復讐のための剣だったとしても、ミーファちゃんの頑張りようは周囲の人間を感嘆させるものでしたから。そして魔法剣士隊の隊長に就任する頃になると、今のミーファちゃんと大差ない性格になり、復讐への執念も少しだけ薄らいだように見えました。もっとも、そう見えていたのは周りだけで、ミーファちゃんが復讐心を自分の胸の内に隠せるようになっただけだったのですが……」

明かりに照らされた廊下を、ゆっくりと歩いていく。

「なるほど……俺はミーファがそこまで復讐に固執していたようには見えなかったよ。志信に対しての態度とか見ていると尚更な」

「ふふっ。たしかに、あのミーファちゃんを見ていれば復讐を考えている人間には見えませんよね。わたしもとても驚きましたよ。まさか、ミーファちゃんのあんな顔が見られるなんて思っていませんでしたから」

互いに顔を見合わせ、小さく笑い合う。そして曲がり角を曲がり、武官の居住エリアへと足を踏み入れた。

「さて、ミーファの部屋は……ん？」

辺りを見回していた義人は、廊下の先に誰かが立っているのを見

て足を止める。その誰かは部屋の扉の前に立っており、表情は少し険しい。

「カグラ、ちょっと隠れるぞ」

それが誰かをすぐに理解した義人は、すぐさまカグラの袖を引いて傍の物陰へと身を滑り込ませる。

「……どうしたんですか？」

「あそこの部屋の前を見てくれ。アルフレッドが立ってる」

義人が指差すと、カグラは義人の後ろからその指の先を追って目を丸くした。

「本当ですね。アルフレッド様がミーファちゃんのところに来てくれるなんて……」

アルフレッドの姿を食い入るように見るカグラ。どうやらアルフレッドが立っているのはミーファの部屋の前らしい。

カグラは義人の背中にのしかかるような体勢になり、義人は慌ててバランスを取る。

「なんだ、ミーファとアルフレッドって仲が良いのか？」

何やら背中越しに柔らかいものや温かい体温を感じたが、義人は努めてそれを気にしないようにした。

「ミーファちゃんが、というよりは、ミーファちゃんのお父様と仲が良かったみたいですね。魔法剣士隊になってからも、何かとミーファちゃんのことを気にかけていたみたいですし」

カグラがさらに体重をかけていく。義人はさらなる密着感や背中の柔らかさに必死で抵抗しつつ、口を開く。

「そ、そのアルフレッドがミーファの部屋を訪ねるのはなんでだろうな？」

「もしかしたら励ましてくれるのかもしれませんね」

そうやって小さく話し合っていると、扉が開いてアルフレッドが中に入っていく。

「あ、中に入っちゃいました」

少し残念そうに呟くカグラ。本人は気づいていないのか、義人の背後から抱きつくような形になっている。

「か、カグラさん……なんかですね、いろいろと当たってるんですが」

吐く息やら、サラサラの黒い長髪やら、温かい体温やら、女の子特有の甘い匂いやら、なにやら柔らかいもの等々。

「当たってるんじゃなくて、当ててるんです」

「わざとかよっ！？」

思わず突っ込みを入れる義人。カグラは小さく舌を出し、その身を離そうとして、

「……二人とも、何をしているんだ？」

背後からかけられた声に硬直した。その声に聞き覚えがありすぎた義人は、とりあえず振り向いてみる。

「かくれんぼだ」

そして、志信に向かって自信満々に言い放った。

アルフレッドを部屋に通したミーファは、ひとまず椅子を勧める。

「これはすまんのう」

アルフレッドは小さく破顔すると、好々爺染みた笑みを浮かべて椅子に腰を下ろした。

「お茶とかなくて……すいません」

「いや、気にするでない。こんな時間に押しかけてきた儂が悪いんじゃ。中々仕事が多くてのう」

そう言って笑うアルフレッドに、ミーファもつられて笑みを零す。しかし、すぐさま表情を引き締めた。

「それで、わたしに何の用です？　わざわざアルフレッド様が来るなんて、今までででもそうなかったことですが……」

真剣な表情になったミーファにつられるように表情を引き締め、アルフレッドは重々しく口を開く。

「うむ。最近のお主の様子が気になっての。まあ、年寄りからの助

言をしにきたんじゃよ」
「助言、ですか？」
「そうじゃ。エンブズが死んで、目標を見失っているように見えたからのう」
そう言いつつアルフレッドは目を細めると、自身の白に近い銀髪と同じ色をした顎鬚（あごひげ）をサラリと撫でた。
「復讐心という負の感情を持たせておくのは嫌じゃったが、お主の生きる活力にも繋がっておった。じゃが、復讐の対象であるエンブズが死んでしまった以上、その感情をどこに向ければ良いかがわからんのじゃろう？」
「……はい」
ミーファの小さな呟きに、アルフレッドは苦笑を浮かべる。その目は優しく、まるで泣いている孫を見る祖父のような目だった。そして、そのまま遠くを見るように部屋の窓の外へと視線を飛ばす。
「お主の父のポドロは、真面目で明るく、部下に慕われる良い男じゃった。儂が人間でないとわかっておっても、友人として扱ってくれたしのう。しかし、儂がレンシア国に外交で赴いておる間に暗殺犯に仕立て上げられた……ミーファよ、儂はお主には謝らねばならん」
そう言ってアルフレッドは椅子から立ち上がり、ミーファへと向き直る。そして、深々と頭を下げた。
「あの時、お前の父を救えなくてすまなんだ。もっと周囲に目を配っておれば、防げたやもしれぬというのに……」
「そ、そんな！　頭を上げてください！」

頭を下げられたミーファは、慌ててアルフレッドの頭を上げさせる。ミーファとしてはアルフレッドに非はなく、謝られる道理がない。

アルフレッドは慌てているミーファに寂しそうな苦笑を向けると、下げていた頭をひとまず上げた。

「頭を下げて困らせることになるとはのう……それでミーファよ。お主はこれからどうするつもりじゃ？」

優しく問いかけてくるアルフレッドに、ミーファは目を逸らして口を開く。

「それは、まだわかりません。このまま魔法剣士隊の隊長を務めていくのか、それとも剣を捨てるのか……」

「ふむ、それはお主の道じゃ。お主の思うがままに決めると良いじゃろう。儂としては、ポドロと同じようにこの国を良くするために手を貸してほしいところじゃがな」

「父上のように？」

ミーファは小さく首を傾げる。

ミーファの父、ポドロが亡くなったのは十年前。当時のミーファはまだ幼く、ポドロがどんな風に仕事をしているかまでは知らなかった。

「王を支え、民のために行動し、部下を思い遣る。前王は後に傲岸不遜な性格になってしもうたが、それでもポドロのことを重用していたんじゃ。あやつの忠誠は臣下の中でも随一で、前王もそんなポドロを気に入っておった。暗殺の濡れ衣を着せられる前にも、税率を下げるよう進言しておったのう」

在りし日の出来事を思い出しているのか、アルフレッドの口元が僅かに綻ぶ。

「それを邪魔に思ったエンブズが、父上に暗殺の濡れ衣を着せたわけですね？」

「うむ。儂も事件のことを調べてはおったんじゃが、尻尾は掴めなんだ」

「そうですか……」

俯くミーファに、アルフレッドは正面から向き直る。

「当代の王は前王と違い、良い君主になると儂は思っておる。臣下も文官武官を問わず、ヨシト王を認め始めておるしな。あと一月二月もすれば臣下は一丸となるじゃろう」

そこまで言うと、アルフレッドは言葉を切って快活な笑みを浮かべた。

「それに、ヨシト王は面白い人物じゃしのう。ユキ殿やシノブ殿も良き人柄をしておる。これからの国の行く先が楽しみだとは思わんか？」

アルフレッドの言葉にミーファは何も答えない。そんなミーファを見ながら、アルフレッドは言葉を続けていく。

「お主が剣を捨てると言うのなら、それもまた良しじゃ。しかし、どこにも感情を向けられないというのなら、この国の未来に向けてみんか？」

「この国の未来に……」
「そうじゃ。何も、いきなり感情の全てを向けろとは言わん。ゆっくり、ゆっくりでいいから他のことに目を向けてみんか？」

ミーファは聞いた言葉を噛み砕くように、何度も呟く。
そこには先程までの無気力な雰囲気はなく、目には少しだけ力が戻ってきている。
その様子を見たアルフレッドは、話はお終いだと言わんばかりに立ち上がった。

「それでは、儂は失礼するわい。こんな夜更けにすまなかったのう」
「あ、いえ！　気にかけていただいて、ありがとうございました！」

立ち上がったアルフレッドを見て、ミーファは頭を下げる。アルフレッドはすぐに頭を上げさせると、部屋の扉の取っ手を握って眉を寄せた。

「どうかしましたか？」
「……いや、なんでもない。外にネズミがいただけじゃ」
「ネズミ、ですか？」
「心配性の、な」

自分で言った言葉に小さく笑い、アルフレッドは取っ手を捻って扉を開けて廊下へと歩き出す。ミーファはそれを見送ると、扉を閉めて一つ息を吐いた。

「この国の未来に向けて、か……父上も、そのほうが喜んでくれるよね？」

呟いた言葉を聞く者はおらず、ミーファは目を閉じる。

そして目を開いてみれば、そこには今までとは違う、力強い目をしたミーファがいた。

話を廊下で聞いていた義人達は、アルフレッドの言葉に相好を崩す。

「この国の未来に向けて、か。まったく、言いたいことをあっさりと伝えてくれるな」

苦笑混じりに義人が呟くと、カグラと志信がそれに頷いた。

「これでミーファちゃんの気が変わってくれるといいんですけど……」

交わす会話の声量はかなり小さい。部屋の中の二人に気づかれないためなのだが、中の雰囲気を察する限り正しい判断だっただろう。

「む、アルフレッド殿が部屋を出るようだな」

中の様子を窺っていた志信がそう言うと、義人は慌てて周りを見回した。

「うげ……どこか隠れる場所はないか？」

このまま鉢合わせしてはさすがに気まずい。

義人の言葉を聞いた志信はその場で垂直に跳躍すると、天井の装飾を掴んでぶら下がる。『強化』によって底上げされた身体能力での跳躍は、床から五メートル近くある天井まで届くようだ。そ

れを見たカグラも真似るように軽く跳躍し、天井の装飾を掴んでぶら下がる。

「おいおい。俺、届くかわからねえぞ」

時間がないため、義人は愚痴を言いつつも精一杯跳躍する。ええいままよ、と内心で気合を入れながら跳躍すると、なんとか手が届いて装飾を掴んだ。

「元の世界で同じぐらい垂直跳びが出来たら、プロのバスケット選手になれるな」

跳んだ距離は二メートルと少々。身体能力が『強化』されていなければ半分も跳べないだろう。

「天井付近は暗いが、一応気配も消しておくか」

「そうですね」

なにやら会話をしている二人に、義人はぶら下がりながらも首を横に振った。

「いや、俺そこまで人間止めてないんで」

気配を消すと言われても、どうすればいいかわからない。幸いというべきか、天井付近は明かりが届かないので暗くて見えにくいだろう。

三人が口を閉ざした数秒後、ミーファの部屋の扉が開いてアルフレッドが姿を見せる。アルフレッドは何食わぬ顔でその場を立ち去り、姿が見えなくなってから三人は地面へと飛び降りた。

志信はアルフレッドが歩き去った方向へと目を向けると、少しば

かり眉を寄せる。

「……どうやら、アルフレッド殿には気づかれていたようだな」

「無駄骨かよ！？」

部屋にいるミーファに聞こえないよう、義人は小さな叫び声を上げた。カグラはそんな義人を見ると、それを宥めるように苦笑した。

「ミーファちゃんに気づかれちゃいますよ？　ひとまずこの場から離れましょう」

「あ、ああ。それにしても、ミーファの奴立ち直れるかな？」

部屋から離れるために歩き出しつつ、義人は僅かに心配を含んだ声を上げる。

「大丈夫ですよ、きっと。ミーファちゃんは立ち直ります」

義人の言葉に、カグラが笑う。その顔には何かしらの確信が含まれており、義人は志信と顔を見合わせて肩を竦めた。

「……まあ、ミーファの親友であるカグラがそう言うなら大丈夫か」

「そうだな」

明日の朝礼の時にでも様子を見れば良い。

義人はそう判断して、この場を解散させることにした。

カグラの言葉通り、翌日には今までのミーファへと戻っていた。

いや、今までとはどこか違う、力強い目つきへと変わっている。

それを確認した義人は安堵したようにアルフレッドに目を向けた。するとその視線に気づいたのか、アルフレッドが含み笑いをしながら視線をぶつけてくる。

どうやら、部屋の外にいたことに本当に気づいていたらしい。

義人は苦笑すると、朝礼の報告をしている臣下達を王座から見渡す。

ひとまず地盤は固まった。気を抜くつもりはないが、これからは暗殺事件などが起こる可能性はほとんどないだろう。次は、国内の問題を片付けていかなくてはならない。

そして行く行く（ゆくゆく）は、召喚国主制をどうにかして元へと世界に帰る。

それだけを胸に秘め、報告が終わったのを確認して義人は快活に笑う。

「さて、それじゃあ今日も一日、頑張っていこうか」

『はっ！』

一糸乱れず返ってきた返事に、義人は笑みを深めた。

――――そして今日も、異世界の王様としての一日が始まる。

第三十七話：未来に向けて（後書き）

どうも、作者の池崎です。

終わり方が完結したみたいになってますけど、物語はもちろん続きます。

ようやく一章的な話が終わり、次は二章としてほのぼのした日常パートを描きたいと思っています。

とうとう続きのストックが切れてしまったので、これからは毎日更新ではなく二、三日ぐらいで更新していくことになると思います。

毎日更新でなくなった途端見てくださる方が激減しそうで怖いので、なるべく早いペースで更新していけたらいいなと思っています。

それでは、次章予告など。

異世界の王様での魔法に対する説明や魔法の訓練：『カグラ先生による魔法のレッスン』

新キャラ登場と、それに伴う物語：『ミーファ＝カーネルの憂鬱』

義人君の暴走：『異世界の王様、畑を作る』『異世界の王様の発明』

カグラさんの暴走：『酒は飲めども飲まれるな』

志信君の大暴れ：『其は烈風の如く』

アルフレッドさんの大暴れ：『レンシア国最強の男』

優希さん大暴れ：『お風呂改造計画～ほのぼのまったり入浴編～』

義人と志信の出会いを綴った物語：『嗚呼懐かしき中学時代』

等々、何やら考えています。他にも色々と考えています。今までシリアス分が多めだったので、今度はギャグ分を多めにした話を書きたいと思っています。上に書いたタイトルの時点でギャグに走る気満々ですが、時折シリアスな話も書きたいです。どれだけギャグに走れるかはわかりませんが……。

その後は三章から六章までの構成で話を進め、全体としては百三十話くらいで終わる予定です……終わるかな？　増えるか減るかは

わかりませんが、百三十話を目安にしたいと思います。
それでは、こんな拙作ではありますが、今後ともお付き合いいただければ幸いです。

第三十八話：カグラ先生による魔法レッスンその1

暗殺未遂事件から二週間が経ち、義人は大分落ち着いた生活を送れるようになっていた。

溜まりに溜まっていた書類の山も粗方片付け、税率の引き下げも順調である。この調子でいけば、政務をしなくても良い空き時間が少しはできるだろう。そのことに、義人は小さく息を吐いた。

「そうなったら何をしようかねぇ……志信に頼んで俺も訓練をしようか。うん、それが良いな。また同じような事態が起きたら困るし」

書類に目を通しながら、うむうむと頷く。すると、傍に立てかけておいた王剣のノーレが思念通話を繋げてくる。

『ヨシト。妾が見たところ、お主は魔法剣士の才がある。だから、剣と魔法の両方を学ぶべきじゃ』

最近では義人も多少慣れたのか、ノーレに触れていなくても一メートル以内ならば通話することが可能になった。そして何より、突然話しかけられても動じなくなったことが一番の成長かもしれない。

『魔法剣士？　マジで？』

『うむ。魔力の貯蔵量も申し分ないしの。運動能力も問題ないわい。体を鍛えておいて損はないしの？』

『んー……そうだな。護身ができる程度には鍛えたほうがいいか』

ノーレに触れずに会話していると、隣で政務をしていたカグラが突然顔を上げる。そして周
囲を見回すと、給仕をしていたサクラへと目を向けた。

「サクラ、先程から魔法の気配がしますけど、何か魔法を使っていますか？」
「い、いえ。わたしは何も使っていませんけど」
「そうですか。最近似たような魔力を感じることが多いのですが……」

眉を寄せ、次いで義人へと視線を投げかける。

「そういえば、ヨシト様も風の魔法を使っていましたね。何か魔法を使われているのですか？」
「え、俺？　いや、俺は魔法なんて使えないんだけど」

カグラの言葉に義人は首を傾げた。すると、ノーレが感嘆したような声を漏らす。

『ほう……妾の思念通話に気づいたか。それともここ数日で魔力の波長を覚えよったか？』
『そういや忙しくてお前のことを紹介してなかったな。大分落ち着いてきたし、紹介していいよな？』
『そうじゃの。このままでは、巫女も気になって仕事が手につかんじゃろ』

ノーレの承諾を得た義人は、立てかけてあった王剣をつかむ。それを見たカグラとサクラは、何事かと小首を傾げた。

「魔法を使っていたのは俺じゃなくて、こいつなんだ」
「え？」
「へ？」

二人は義人の言葉を聞くなり、素で反応する。意味がわからないと言わんばかりの二人に、義人は苦笑した。

「だから、この王剣が魔法を使ってるんだよ。俺はただ魔力を供給しただけなんだ。名前は『風と知識の王剣』ノーレ。カグラと同じく、王を補佐するのが仕事らしい」

『初めまして、と言うべきかの。妾は『風と知識の王剣』ノーレ。お主らはヨシトと違って熟達した魔法使いのようじゃから妾の声は聞こえるであろう？』

義人に紹介されたノーレが、挨拶と言わんばかりにカグラとサクラに思念通話を繋げる。

「これは思念通話？　いえ、そもそも剣が自ら魔法を使うなど……」

『なんじゃ、今の時代では珍しいのかえ？』

「珍しいもなにも、そんな存在は初めて聞きましたよ」

カグラはありえないと眉間を押さえ、サクラは驚きで硬直している。

「え？　ノーレってそんなに珍しい存在なのか？」

二人の反応を見た義人は、不思議そうに尋ねた。すると、カグラはすぐさま首肯する。

「この前の『お姫様の殺人人形』のように、初めから魔法を使う可能性があることを前提に作られているのなら話は別です。しかし、『お姫様の殺人人形』ですら指示を与えなければ自ら他人の姿を真似ることはなく、ましてや動くことはありません。指示さえあれば姿を真似した本人の能力を用いることが可能でしたが、その剣のように命令もなく自発的に魔法を使う魔法具の存在は、今まで見聞き

したことがありません」
「おお、ノーレってすごい奴だったんだな」
『ふん、当たり前じゃ』

義人の賛辞にノーレは胸を張るように答えた。もちろん、胸などはないが。
そんな義人を見たカグラは、違うと言わんばかりに首を横に振った。

「すごいも何も、勝手に魔法を使う魔法具など危険すぎるので誰も生み出そうとしなかったんです。使用者の使う魔法を補佐する魔法具ならば存在します。しかし、使用者の意思を問わずに魔法を使われては魔力がいくらあっても足りません！」
「……訂正、やっぱすごくないわ」

説明を聞いた義人はすぐさま前言を撤回する。たしかに、勝手に魔力を使われてはたまらない。
そもそも義人は魔力がどれだけあるかなどわからないため、仮に九割近く魔力を消費されても気づくことはないだろう。

『戯け。思念通話程度で多くの魔力を消費するわけないじゃろ。妾自体、僅かながらも魔力を持っておるしな。この前の屋敷の門を破壊するときに使ったレベルの魔法を使うとなれば話は別じゃが』
「たしかに、あの時使った魔法はすごい威力だったもんな。あれが上級魔法ってやつか？」
『そんなわけないじゃろ。あれは中級魔法じゃ。しかも、中級は中級でも弱い部類の魔法にすぎんわ。それに、お主の魔力の変換効率が悪すぎたせいで消費魔力が普通の数倍になってしもうたしのう』
「……魔力の変換効率って？」

聞き慣れない単語に義人が首を傾げると、それを補足するようにカグラが口を開く。

「魔力の変換効率とは、どれだけ少ない魔力で効率良く魔法を使うことができるかを示す値です。少ない魔力で高威力な魔法を使うことができれば様々な面で有利ですよね？」

「そうだな。反対に、魔力を多く使っても威力が低い魔法しか使えないなら魔力の無駄遣いだしな」

『この前のお主と同じじゃな。あの時、もっと効率良く魔力を使っておったらあれほど疲労することもなかったじゃろ』

「むむ……その魔力の変換効率って、どうやったら良くなるんだ？」

義人は眉を寄せる。元の世界にないものについては、さすがに考えてもわからない。推察することはできるが、それで妙な先入観を持つのは危険だろう。

「魔法は感覚で編むものですから、魔法を使うことに慣れるのが一番早い道ですね。そもそも、どうやって魔法を使うかご存知ですか？」

「いや、わからん」

カグラの問いにすぐさま首を横に振る。義人の知っている魔法など、マジックポイントを消費したら魔法を発動できるゲームの知識程度のものだ。さすがに陰陽術や黒魔術などを詳しく知っているはずもない。

「慣れない人が魔法を使うには、使いたい魔法を頭の中で強く思い描く必要があります。例えば、頭の中で燃え盛る炎を思い浮かべて魔力を体の外へと放出します」

カグラは右手の人差し指の先に小さな炎を灯す。

「魔法の才能がある人の場合は魔力を外に放出する際、魔力が頭で思い描いた形になりやすいんです。魔法が使えない人は、魔力がないか魔力を持っていても操作して外に出せない人ですね」

次いで、カグラは左手の人差し指の先に小さな氷を生み出す。

「慣れれば、このように簡単に魔法を使うこともできるようになります。もっとも、魔法使いには使える魔法の相性があるので、大抵は一種類の魔法しか使えません。ミーファちゃんだったら炎の魔法。サクラだったら氷の魔法というように、それぞれ得意な魔法や使えない魔法があります。中にはわたしのように、複数の種類の魔法を使う者もいますが、これは稀です」

指先の魔法を消したカグラに、義人は学校でするように片手を挙げる。

「はい、カグラ先生。質問です！」

「なんでしょう、ヨシト君」

答えるカグラもノリノリだ。

「ミーファは『強化』も使ってるけど、あれも魔法だろ？　炎の魔法しか使えないのなら、『強化』は使えないんじゃないか？」

疑問を尋ねると、カグラは出来の良い生徒を喜ぶかのように微笑む。

「良い質問です。ミーファちゃんが炎の魔法を使う時は、魔力を外

へと放出します。しかし、身体強化系の魔法を使う場合は逆に体の内側へと魔力を作用させるので、得手不得手はありません。あ、ちなみに『強化』は他人の身体能力を向上させる場合は中級魔法で、自分自身の身体能力を向上させる場合は下級魔法……いえ、言わば最下級魔法になります」

「最下級魔法って……一番低いのか？」

「はい。自身の身体能力を上げる『強化』は、魔法剣士や魔法使いにとってなくてはならない魔法です。魔法を学ばない、魔力があるだけの一般人でもたまに使える者がいるぐらい難易度が低い魔法です。体中を魔力で満たせば『強化』を発動できるので、魔力を操る練習には最適ですね」

政務を進めていた手が止まっているが、今は急ぎで片付ける仕事もない。義人は手に持った書類をひとまず机に置くと、サクラが淹れてくれたお茶に口をつけた。

「なるほど。魔力を持ち、なおかつ操作できれば魔法使い。魔力がないか、操作できなければ一般人ってことか」

「そうです。先天的に魔力を持って生まれてくるのは女性の方が多く、割合は七対三ぐらいです。魔力量に男女の差はなく、遺伝によって決まります。時折突発的に高い魔力を持つ子供が生まれることもありますが、それはかなり稀ですね。両親が魔力を持っていれば子供も魔力を持つ場合が多く、その逆もまた然り（しかり）です。魔力の操作力、魔力回復量、変換効率は生後の訓練次第です。才能による差はありますが、肝心なのは慣れですね」

サクラがカグラにもお茶を淹れ、カグラも口をつける。

「身体能力の向上は最低限にして魔法攻撃に重きをおくか、それとも自分の身体能力を上げ、魔法と共に武器を手にして戦うか。それ

が魔法使いと魔法剣士の差です。魔法剣士は魔法戦士と言い換えてもいいかもしれません」

「わざわざ分けなくても、身体能力を思いっきり向上させつつ武器を使い、なおかつ強力な魔法を使えばいいじゃないか。そっちのほう強いだろ？」

義人は気になったことを尋ねてみる。すると、カグラは困ったように苦笑した。

「それができれば一番ですが、それをすると大抵の人間がすぐに魔力切れになってしまいます。それに、常に体中に魔力を行き渡らせるだけでも集中力がいります。その上で剣を振るうか、それとも魔法を使うか分けるだけでも大変なんです。自身に『強化』をかけ、剣を振るいつつ魔法を使うなんて、この国ではミーファちゃんの他には数名しかできません」

「ふーん……魔法って大変なんだな。その魔力量っていうのは、一般の魔法使いや魔法剣士だとどれくらいあるんだ？」

「ヨシト様が他人の魔力を感じ取れればわかるんですが……サクラ、『魔計石』を持ってきてください」

「はい」

カグラの指示に、サクラが執務室から足早に走り去る。その背中を見送った義人は、更なる聞き慣れない単語に首をかしげた。

「『魔計石』ってなんだ？」

「『魔計石』とは、その名の通り魔力を測る石です。石を持てば、その持ち主の魔力量に応じて色を変える魔法具です。最初は透明ですが、紫、藍、青、緑、黄、橙、赤と魔力量に応じて色が変化します。おおよその魔力量しか測れませんが、魔力を隠していても計ることができるので便利ですよ」

「虹の七色か。赤が一番上なのか？」
「はい。赤の上はありません。もしもそれ以上の魔力量だったら、石が割れちゃうんです」
「へぇ、ちなみにカグラはどうだったんだ？」
興味本位で尋ねてみる。するとカグラは少し目を細めて小さく笑った。
「魔力が完全に回復してれば簡単に割れますよ？　今は魔力が減っているので、黄色くらいだと思います」
「うん、聞いといてなんだが、それがどれぐらいなのかまったくわからん」
「紫色なら普通の魔法使い一人分で、それ以降は二倍の魔力量が必要になってきます。まあ、およそ十六人分といったところでしょうか」
「……本来のカグラの魔力量が気になるな。黄色で十六人、橙で三十二人、赤だと六十四人分か。それを簡単に超えるってことは……百人分ぐらい？」
適当に計算して尋ねてみるが、カグラは首を横に振る。
「わたし自身、正確にはわかりません。ですが、そのくらいはあるでしょう」
そう言って、カグラはどこか寂しそうに笑う。悲しみとも思えるその表情に、義人は眉を寄せた。思わず理由を問おうと口を開き、それを遮るように執務室の扉が開く。
「カグラ様、『魔計石』をお持ちしま……あわわっ！」

そして、余程急いできたのかサクラが絨毯に足を引っ掛けて前のめりに転んだ。両手に持っていた『魔計石』はその勢いで宙を飛び、義人の元へと飛来する。

「よっと。サクラ、そんなに慌てなくても良いんだぞ？」

飛んできた『魔計石』をキャッチして、義人は苦笑した。

「ううう……すみません」

転んだのが恥ずかしかったのか、サクラは顔を赤くして立ち上がる。カグラもそれを見て笑っており、その表情に先程の寂しそうな色はない。

勘違い、だったか？

改めて問うには場の空気が明るい。そう判断した義人は、ひとまずカグラの態度を記憶に焼き付けて話を逸らすことにした。

「これが『魔計石』か……って、透明じゃないぞ？」

改めて『魔計石』を覗き込んだ義人は首を捻る。『魔計石』は濃い緑色になっており、とても透明とは言えなかった。それを見たカグラは興味深そうに『魔計石』を見る。

「濃い緑色……どうやらヨシト様は十人分並の魔力をお持ちのようですね。魔力量だけでいうなら、サクラと同等かと」

「十人分か。これって多いのか？」

「多いですね。魔法隊の隊長であるシアラ＝テンシアもそれぐらいですし。鍛えていない状態でそれだけあれば、もっと上を目指せると思います」

カグラの言葉に、義人は自分の体を見下ろす。
魔力と言われても実感などない。悩むように首を捻っていると、それまで説明を聞いていた王剣のノーレが話しかけてくる。

『ヨシトの特性は魔力量ではない。魔力回復量が並外れて高くなっておる。そこの巫女を遥かに上回る程度にな』
「え、本当か？」
『うむ。この間、門を破壊するときに一気に半分くらい魔力を使ったじゃろ？　翌日にはすでに回復しておったからな。大した回復量じゃ』

何故か誇らしげなノーレの言葉を聞いたカグラとサクラは、驚愕したように義人を見る。

「カグラ様の魔力回復量でさえ、三日で一人分ぐらいなのに……」
「わたしの十倍以上ありますね」

眉を寄せ、二人して義人を頭の先からつま先まで見ていく。

「あれじゃないか？　魔法ってイメージ……想像することが大事なんだろ？　俺の世界では、魔力は一晩で回復するのが当たり前だった。だから、俺も一晩で魔力を回復したとか」

考えを述べるが、義人の言う魔力とはあくまでもゲームの話である。宿に泊まる。アイテムを使う。そうすれば魔力が回復すると思っていた。

『ふむ、あながち間違いとは言えんかもしれんな。そもそも世界が違うんじゃ。こちらの常識に当てはめることはできんじゃろ』

「俺の世界の常識が、こっちの世界で当てはまらないようにか？」

ノーレの言葉に義人は納得してみせるが、カグラとサクラはいまいち納得していないようだ。

いくらカーリア国の魔力回復設備が劣悪とはいえ、カグラは魔力回復量においても高いレベルである。

彼女達にしてみれば、魔力は回復しにくいものでしかない。戦時の際は、いかに早く魔力を回復するかが鍵となるくらいだ。

ちなみに魔力回復施設とは、様々な設備によって人工的に魔力を濃くされた空間のことだ。施設にいれば、通常よりも遥かに多くの魔力を回復することができる。

設備が良ければ魔力がもっと濃いのだが、カーリア国の設備ではそこまでの効果は望めない。

カグラとサクラはなんとか納得したのか、表情を和らげて口を開く。

「こうなったら、ヨシト様も本格的に魔法を学ぶべきですね。いえ、本格的ではないにしても、魔力の扱い方は学ぶべきです」

「そ、そうですよヨシト様。わたし達がお守りしますが、もしものときに魔法が使えるのと使えないのでは全然違いますし！」

魔法を薦める二人に、義人はしばし考え込む。たしかに政務も大分落ち着いてきたし、護身のために何かしようと思っていたのも事実だ。

「魔法を学ぶって、どうすればいいんだ？　なんか言葉を詠唱したりすればいいのか？」

「魔法はわたしが教えましょう。それと、詠唱は魔力が足りないか、自分の苦手な魔法を使う時、自分の実力よりも上の魔法を使うときに用いるものです。詠唱することにより、精霊や大地、世界などに

働きかけます。ですがヨシト様は魔力もたくさんありますし、詠唱は必要ないでしょう。まずは、魔力を操る感覚を覚えることから始めることになると思います」

「詠唱はしないのか……格好良さそうなのに」

魔法を唱えるのは格好良いと思ったのだが、この世界では違うらしい。義人の不満そうな声に、カグラはたしなめるように微笑んだ。

「ヨシト様、仮に魔法が詠唱をしなければ絶対に発動できないものだとしたら、どうなると思いますか？　今の世の中ほど、魔法に有利性があると思いますか？」

「んー、そういえばそうだよな。俺なら詠唱をさせないと思うし、有利性はかなりなくなるよな」

志信だったら、迷わず喉を潰しにいくだろう。そうして魔法さえ使えなければ、魔法使いとてただの人間にすぎない。

「その通りです。昔は詠唱をしていたこともあったらしいですが、現在では滅多なことでは詠唱はしません。わたしがヨシト様達を召喚するために使った『祝詞』や、召喚を成功させる補助として焚いた『護摩木』のように、補助的な意味合いが強いんです」

祝詞とは神に祈りを捧げて願い事の成就を願うものであり、護摩木とは願い事を書く札のことだ。

「詠唱や道具は補助か。そういえばカグラは『召喚の巫女』って言ってたけど、巫女って神様に仕える女性のことだよな。この世界って神様もいるのか？」

「いることはいると思いますが、このカーリア国の場合意味合いが違うんです。昔は召喚された王のことを神と崇めていたため、その

王を召喚して仕える女性を『召喚の巫女』と呼んでいました。今ではさすがに神として崇める風潮は薄れましたが、その当時の流れを汲んで『召喚の巫女』と呼ばれています」

「へぇ……本当に変な国なんだな」

今ではその国の王は自分だが、義人はそれを脇に置いておく。そして残っていたお茶を飲み干すと、一つ息を吐いた。

「もう少ししたら政務も落ち着くだろうし、時間ができたら魔法を学んでみるかな」

元の世界で魔法を学ぶことなどできない。だが、子供の頃に思い描いた夢のような出来事が目の前に転がっているならば、義人は迷わずそれに飛びつく。

「そうですね。税率の引き下げも大分進みましたし、もう少ししたら空き時間もできてくるでしょう」

義人の言葉にカグラが頷く。魔法を教えることが楽しみなのか、その表情は少々嬉しそうだ。

「ああ。それじゃあ、その時はよろしく頼むよ」

そう言って、義人は再び政務に戻ることにする。

カグラの楽しそうな笑顔の意味が少しだけ気になったが、それを聞くことはなかった。

第三十九話：朝の散歩

こちらの世界へと召喚されて二ヶ月ほどが経ち、季節も徐々に変わりつつある。

元の世界では春も過ぎ、夏の気配が近づきつつあった。それはこちらの世界でも同じらしく、最近では日中の気温も上がってきている。

元の世界での暦（こよみ）に合わせるなら、七月も半ばの気候だ。こちらの世界での暦も同じだったが、気温は若干低い。

一応四季はあるようだが、変化が緩やかなため気づきにくかった。早朝や夜は涼しく、日中は暖かい。この世界に召喚される前の義人にとっては、これ以上ない居眠りしやすい気候だ。

「んー……朝、か？」

時間を知らせるための鐘が鳴り、義人は目を覚ました。窓の外を見てみれば、大分明るくなっている。

城の出仕は午前九時からなので、午前八時の鐘で起きれば十分に間に合う。その時間になれば大抵サクラか優希が起こしにくるので、時間を間違えることもない。

ちなみに、カーリア国の労働時間は基本的に午前九時から午後六時までだ。

午前九時と午後六時に三回鐘を鳴らし、仕事の開始と終わりを告げることになっている。昼食は正午から午後二時の間に取るのが一般的であり、城の中でもそれは同じだ。

義人の場合、仕事量が多いので午後八時過ぎまで仕事をしていることがザラである。それでも最近は減ってきているので、いずれは規定通りの時間で終われるようになるだろう。

「……誰もこないな」

ベッドから起き抜け、とりあえず優希特製の普段着へと着替えていく。

ジーパンと薄手の長袖シャツというラフなものだが、この世界にはないタイプの服なので周囲からは義人の世界ではそれが正装だと思われている。

ひとまず水場で洗面でもしようかと寝室の扉を開けると、守衛の兵士がギョッと驚いた表情を浮かべた。

「よ、ヨシト王！　おはようございます！　今日はお早いですね！」

「ああ、おはよう。見張りご苦労様……って、早い？」

「はい。まだ、六時過ぎですよ？」

どうやら、時間を間違えたらしい。

ここ最近は仕事で夜更かしをする必要もなく、午前零時前には眠るようにしている。

義人は元の世界ではしょっちゅう夜更かしをしていたが、夜更かしをしようとすればカグラやサクラの目が怖いのでできない。

そのうち、午後十時に寝て午前四時ぐらいに起きるようになるかもしれんな……。

近い未来のことを想像して、義人は苦笑する。

早寝早起きは良いことだと思うが、現代人としてはどうかと思った。

もっともこれは学生の思考であり、職に就いて働き始めれば早寝早起きが当たり前になるかと義人は一人頷く。

時間があるならいつもと違う時間帯の城の中を見るのもいいな、と義人は考えて口を開いた。

「鐘の音で目が覚めてね。とりあえず顔でも洗って散歩しようかと

思ったんだ」
「そうですか。それでは、お供をいたします！」
「大丈夫だって。散歩すると言っても城の中だけだし、あちこちに兵士が立ってるから危険はないって」
「しかし……」

守衛の兵士は心配そうな表情を浮かべる。
エンブズの一件以来、城の警備を担当する兵士の数が増え、多少厳重になった。交代で見張りの兵士が立ち、あちこちを兵士が巡回している。
だが、散歩をするのに兵士がついて回るのは堅苦しい。

「じゃあ、王様命令。一人で散歩させてくれ」
「し、しかし！」

毎回毎回、命令を下すところがおかしいと義人自身も思っていたりする。兵士は何かを言おうとしたが、結局は脱力したように首肯した。
それを見た義人は、笑顔で歩き出す。
すれ違う度にかけられる挨拶に返事を返しながら、城の中を見て回る。

「あ、ノーレ置いてきちまった」

ベッド脇に立てかけてある王剣を思い出し、少し眉を寄せた。しかし、数秒後には苦笑しながらそれを振り払う。

「まあいいか」

散歩に武器は必要ない。そう判断して、廊下を歩く。

部屋に帰ったとき、そのことで文句を言われるがそれはまた別の話である。

朝食の準備に追われる厨房を覗き、誰もいない謁見の間を覗き、あちこちを彷徨(さまよ)い歩いていく。

夜とは違う、どこか涼しげな雰囲気がある城の中を歩くのは思ったよりも良い気分だ。

「お、階段発見。この上はなんだっけ？」

適当に目に付いた階段を上り、扉を開ける。

扉を開けるなり太陽の光が飛び込んできて、義人は僅かに目を細めた。それでも気にせず前へと出ると、今度は涼しげな風が吹き込んでくる。

「おー……城壁の上だったか」

周囲を見回してみれば、そこは城壁の上だった。

あちこちに見回りの兵士が立っており、義人の姿を見るなり驚いて目を丸くしている。義人はそれに苦笑を返すと、城壁からの景色へと目を向けた。

城は平地よりも高いところに作られており、その視点は高い。そのため、眼下には城下町が一望できる。

城下町の人間はすでに起き出しているのか、往来を人が行ったり来たりしていた。風に乗って僅かに喧騒が聞こえ、義人は頬を緩ませる。

「平和だな……」

元の世界に比べたら、実に小さな規模の町だ。外敵から身を守るために石造りの壁に囲まれ、箱庭と言っても良い。

「本当に、平和だ」

それでも、そこには人々の営みがあった。今日を平和に過ごし、明日の平和を祈る。

そんな“当たり前”。現代にはない、どこか暖かな風情がそこにはあった。

そして、その当たり前の平和を長くもたらすのが王の役目である。

義人は目を瞑ると、深く息を吸ってゆっくりと吐き出した。

「よし、今日も一日頑張ろう」

自分に気合を入れて、背伸びをする。そしてもう一度息を吐くと、目の端に見慣れぬ建物が映った。

「ん？　なんだ？　見張り小屋か？」

城から少し離れたところに建てられた建物。

大きさは縦三十メートル、横五十メートルほどで、高さは十メートルほど。目を引いたのは、屋根に幾何学的な模様が描かれていることだろうか。その上、建物の四方には変な形の石柱が立っている。

「……なんだ？」

気になって注視していると、建物の扉が開く。そして、見慣れた人物が外へと歩み出てきた。

その人物を見た義人は、すぐさま扉を開けて階段を駆け下りてい

く。
建物から出てきたのは、カグラだった。

「おーい、カグラー！　おはよー！」

外への扉を開け、歩いてくるカグラへと手を振る。
いつも通り紅白の巫女装束に身を包んだカグラは、義人に気づくなり驚いたように目を見開き、慌てて走り寄った。

「よ、ヨシト様！　お一人で何をしているんですか!?」
「いや、城壁の上からカグラが歩いてるのが見えてさ。いやぁ、この世界に来て『強化』で視力も上がってるから便利だよな」

正確には『強化』の“ような”ものだが、義人には違いがわからないので放っておく。

「城壁って……なんでそんなところにいるんですか!?」
「さ、散歩っす。早くに目が覚めたから散歩してて、偶然たどり着いたんです、はい」

カグラに怒られることが多い義人は、カグラの剣幕にすぐさま腰が引けてしまった。
怒った美人にはものすごい迫力があるのである。

「もう！　いいですか、ヨシト様!?　ヨシト様はこの国の王としての自覚をきちんと持ってください！　城の中とはいえ、危険がないとも限らないんですよ!?　王剣はどうしたんですか!?」
「い、いやー……ノーレは寝室に置いてきちゃったんだ。散歩には

必要ないかな、なんて。城の中には兵士がたくさんいるし、な？」

詰め寄るカグラに、義人は必死で弁明する。身振り手振りを加え、なんとか怒りの矛先を納めてもらおうと必死だ。

「それにほら、普段とは違う時間帯の城の中を見てみたかったし。今まで行ったことのない場所に行けたし。それに、カグラにも会えたから良いじゃないか」

「わ、わたしにですか？」

「ああ。カグラが歩いているのを見て、城壁の上から走ってきたんだ」

動揺したカグラを見た義人は、畳み掛けるように言葉を繋げていく。

走ってきた理由はもちろん、奇妙な建物について聞きたいからだ。

「そ、そういうことなら……で、でも、あまり心配をかけるようなことはしないでくださいね？」

義人の勢いに押されたカグラは、どこか嬉しそうにして目を逸らす。義人はそんなカグラの様子に小首を傾げたが、このまま押せば話題が逸らせると判断した。

「うん、わかったよ。それでさ、もし良ければちょっと一緒に散歩しないか？　色々と話を聞きたいし」

そう言いつつ、カグラを促す。するとカグラは一瞬虚を突かれたように動きを止め、落ち着かないように視線をあちこちに向けた。

「さ、散歩ですか……そ、そうですね。はい、わたしで良ければ」

そして、目を逸らしたままで小さく頷く。

「よし、それじゃあ早速行こうか」

カグラが首肯したことに義人は笑い、早速歩き出す。目指す場所はもちろん、あの奇妙な建物だ。

歩き出した義人に苦笑交じりの息を吐くと、カグラもそれに倣って歩き出す。

「お、あれだ。なあカグラ、あの変な建物はなんだ？」

遠目に見えた奇妙な建物を指差し、義人はカグラへと尋ねる。義人の指し示す先を見たカグラは、今しがた自分の出てきた建物を見るといつものように微笑む。

「あれは魔力回復のための施設です。四方に置かれた魔法石と屋根に描かれた魔法陣で周囲の魔力を集め、中にいる人間の魔力回復を助ける効果があります。魔法隊の宿舎でもあり、大きく魔力を消耗した魔法剣士隊が利用することもあります」

「へぇ、あれが例の魔力回復施設か。あんまり設備が良くないんだっけ？」

以前聞いた話を尋ねてみると、カグラは申し訳なさそうに苦笑する。

「そうですね。他国のものと比べると、その効果は三割から四割といったところでしょうか。魔法石が大分古くなっていますし、魔法陣も徐々に効果が薄れてきていますから」

「……ちなみに、いくらぐらいで他国と同じ効果が出せる施設にで

きるんだ？」

義人が興味本位から尋ねてみると、カグラは片手を開いて見せた。
それを見た義人は、僅かに首を傾げる。

「五百万ネカか？」

それならすぐにでも工事の許可を出せるな、と義人は内心で計算をした。しかし、カグラは
首を横に振る。

「ん？　じゃあ、五千万ネカか？」

それぐらいなら、まだなんとか捻出できる。最悪、前財務大臣のエンブズが横領していた金を使えば良い。だが、カグラはこれにも首を横に振った。
義人の額から、冷や汗が流れる。

「ざっと見積もって五億ネカです」
「五億！？　『お姫様の殺人人形』の五十体分じゃないですか！？」

あまりの巨額な数字に、義人は思わず敬語で驚きの声を上げた。
そんな義人の驚きを見たカグラは、頬に手をやって困ったように微笑む。

「四方に設置する魔力吸引用の魔法石が一つ一億ネカくらいしますからねー。あとは屋根に刻む巨大な『魔法文字』を刻める魔法使いと、建物を建てるための人足（にんそく）と建設用の材料で一億ネカ。合計で五億ネカです。もっとも、その時の相場によって変わるので、多少上下はしますけど」

「むむむ……魔法石を自分の国で発掘できればそんなに金はかからないと思うんだけど、どうだろう？」

「この国の鉱業は盛んじゃないんですよ。以前説明しましたが、多少良質な鉄が取れるくらいで、あとは金や銀が少し、それと稀少金属がごく稀に取れるくらいで……魔法石の類が発掘されたという話は聞きません。あまり山の奥で作業をすると、中級以上の魔物が襲ってくることもあるので……」

「それは……さすがに努力じゃなんともできないか。じゃあ、鉄はどのくらい良質なんだ？」

「質で言うと中の上ぐらいですね。普段流通している鉄よりも多少質が良いぐらいです。取引価格は今年の相場で十キログラムあたり百ネカ程度ですね」

「一応この国の貿易の要だしな。しかし、なるほど……今度実際にどの程度の鉄なのか志信と一緒に見てみるか」

そこまで呟き、義人はいつの間にか思考が仕事のほうへと移行していたことに気づいて苦笑する。

「いかん。俺って本当は勤勉だったんだな」

「はい？」

「いや、気にしないでくれ。せっかくカグラと散歩するっていうのに、王様としての仕事が頭から離れなかった自分が少しおかしかっただけさ」

そう言って、義人は魔力回復施設に背を向けた。そしてカグラを促し、城の周りを歩き出す。

「仕事開始の鐘が鳴るまで、仕事のことは忘れよう。カグラも立場を忘れて、敬語なんか使わなくていいぞ？」

カグラと共にゆっくりと歩きながら、義人はそう提案してみる。しかし、カグラは困ったように笑うだけだ。

「そういうわけにはいきません。わたしは『カグラ』です。その立場を忘れるわけにはいきません」

表情は穏やかだが、どことなく悲しげな色が含まれている。それを見て取った義人は、右手で頬を掻いた。

「そういうもんか？」

「はい。それに、この口調には“慣れて”いますから」

「ふーん……」

楽じゃなくて、慣れているのか。

義人は思わずそう尋ねたくなったが、どことなくカグラが尋ねてほしくないように見えて口を閉ざした。その代わりに、別の質問をぶつける。

「そういえば、カグラって何歳なんだ？」

「今年で十七ですけど……ヨシト様。安易に女性に歳を聞くのは失礼ですよ？」

カグラの指摘に、義人は思わず背を伸ばす。

「それもそうだ。以後、気をつけるよ。しかし、俺と同い年だったのか……てっきり年上かと思ってた」

「……それって、わたしが老けてるってことですか？」

笑顔で尋ねるカグラ。しかし、微妙にこめかみが引きつっている

ところに義人は恐怖を感じた。
義人はなんとかその恐怖を抑えこむと、肩を竦める。

「いやいや、カグラは落ち着いて見えるからな。一つ二つは上かなと。ミーファはさすがに年上だよな？」
「ミーファちゃんは今年で十九歳です。ちなみに、サクラは十五歳です」
「むむ、そこは予想通りだな」

もしミーファが年下でサクラが年上だったらと想像し、義人は思わず吹き出す。

「くくく……ありえねぇ」
「何を想像しているかが手に取るようにわかりますよ？　あとでミーファちゃんとサクラに言っておきますね？」
「ちょっと！？　それは勘弁してくれ！！」

サラリと告げるカグラに、義人は慌てて笑いを引っ込める。すると、慌てる義人を見たカグラは袖口で口元を隠して楽しそうに笑った。

「冗談です。わたしも、ちょっと面白いと思っちゃいましたから」
「なら共犯ということで」
「ふふふ、そうですね」

顔を見合わせ、二人で笑い合う。そしてしばらく笑い合うと、義人は一つ息を吐いて背伸びをした。

「いや、こんなにのんびりした気分になったのは久しぶりだよ。ありがと、カグラ」

「いえ。わたしもこんな気分になったのは久しぶりですから、お互い様です」
「そっか……こんな気分になれるなら、毎朝起きて散歩するのもいいかもな。あ、でも散歩も良いけど、志信に稽古つけてもらうのもいいな。志信のことだから、朝からどこかで訓練してるだろうし」
気が緩んだのを自覚しながら、義人は早起きの計画を立て始める。それを聞いたカグラは、首をかしげながら口を開いた。
「シノブ様でしたら、最近はヨシト様の寝室に近い場所で訓練をしていましたよ？　警備も兼ねているようでしたから、てっきりヨシト様が指示をされたのかと」
「え、本当か？　気づかなかったな……」
言われた言葉に、義人は記憶を掘り返す。しかし、寝室の窓から外を見た時に志信の姿を見た記憶はない。
「志信のことだから、気づかなかったじゃなくて“気づけなかった”って言ったほうが正しいかもな。あいつ、最近人間離れが進んでる気がするし」
元の世界の時でさえ、義人が心底驚くような身体能力を持っていた志信のことだ。こちらの世界に来て、さらに磨きがかかったに違いない。いつしか、名前を呼んだら音もなく傍に現れるようになる可能性がある。
義人はそう考えると、腕を組んで悩みこむ。
「志信が暗殺者だったらこれ以上怖いことはないなぁ……いや待て、暗殺者か」

ふむふむと考えこむ義人を見たカグラは、苦笑しながら目を細めた。
義人がこうなったときは、何か良い案を出す兆候である。ここ最近でそれを覚えたカグラは、考えを促すように話しかけた。
「何か思いつきましたか？」
「うん？　いや、志信が暗殺者だった場合、うちの城の警備で防げるのかと」
「……わたしやサクラが本気で迎撃しても良いのなら防げますが？」
「城の中で強力な魔法をぶっ放すか？」
「もちろん城を崩したりはしませんよ？」
義人の問いに、えらく物騒なことを仰るカグラさん。
崩そうと思えば崩せるのかと聞きたくなった義人だったが、肯定されたら怖いので聞かないことにした。
そうやって取り留めなく話していると、午前八時を知らせる鐘の音が響く。それを聞いた二人は、顔を見合わせた。
「やれやれ、楽しい時間はあっという間に過ぎるもんだ。朝食を食べて、今日も一日頑張らないとな」
「そうですね。最近は大分落ち着いてきたとはいえ、まだまだ片付けるべき仕事はたくさんありますから」
「うへぇ……あーやだやだ。でも、そうも言ってはいられない、か」
たまには愚痴も言いたくなるが、義人はすぐにそれを飲み込んだ。
そしてカグラへと向き直り、笑いかける。
「それじゃあ、今日もよろしくな」
「はい。頑張りましょうヨシト様」

そんな義人にカグラも笑い返す。
またいつか、のんびり散歩でもしよう。
そんなことを思いながら、義人はカグラと二人で城の中へ戻っていった。

第四十話：魔法隊隊長シアラ＝テンシア

エンブズの事件からある程度立ち直ったミーファは、毎日魔法剣士隊の訓練に精を出していた。しかし、ここ最近新たな問題が浮上しつつある。

広い範囲で武術を学んでいる志信に時折訓練を見てもらうのだが……。

「あ、あの、シノブ様！　もし良ければ、わたしに稽古をつけてもらえませんか？」

「ちょっと！　抜け駆けは駄目だってば！」

「あー！　わたしもシノブ様に教えてもらいたい！」

「おいおい、俺達だってシノブさんに教えてもらいたいぞ？」

「シノブさん。一つ手合わせをお願いします！」

何故か、隊長であるミーファよりも人気があった。

「俺なんかで良ければ構わないが……」

しかも志信はそれらを律儀に全てこなすため、人気は増す一方である。

教え方、武術の腕ともに志信のほうが上であることはミーファも承知している。そのおかげで部下の練度が上がっているのだから、感謝すべきだろう。志信自身も教えるのを楽しんでいるため、誰も損はしない。

志信の周りに部下の兵士……男女比率が三対七で群がっている。しかも、女性兵士の中には明らかに熱いまなざしで志信を見ている者もいた。

以前タルサ村での魔物退治の際、志信に危ないところを助けられ

たからなのだがミーファが知る由もない。

「くっ……この胸の感覚は何？」

それを見ていると、奇妙な感覚が渦巻くのをミーファは感じた。胸の辺りが苛々（いらいら）するような、それでいて苦しいような感覚。

右手に握っていた練習刀を力一杯握り締め、口を開く。

「そこ！　シノブ殿に群がるな！　訓練をしないか！？」

訓練の最中はさすがに呼び捨てにするわけにもいかず、殿付けだ。怒鳴られた兵士達は蜘蛛の子を散らしたように志信から離れ、訓練を再開する。それを見たミーファは、ため息を一つ吐いて志信の傍へと歩み寄った。

「ごめんねシノブ。わたしの部下がわがまま言って」

「いやなに、他人に教えることで学ぶことも多々ある。俺はまったく構わないぞ」

ミーファの言葉に志信がそう答えると、それを聞いていたのか再び女性兵士が数人集まろうとする。だが、ミーファが刃物のような眼光を向けると慌てて訓練に戻った。

「まったく」

鼻を鳴らすように息を吐くミーファに、志信は僅かに眉を寄せる。

「俺は訓練を見るために呼ばれたと思ったんだが？」

それなのに兵士を近づけないのでは、まったく意味がない。

「え？　あ、ごめん」

志信の言葉にミーファは小さく頭を下げる。それを見た志信は、周りを見回して一つ頷いた。

「そうだな……俺がいては集中できないようだし、少し他の隊のところに行ってくる。基礎訓練が終わった頃に戻ってくる」

「うん、わかった」

ミーファが頷くのを確認してから、志信は歩き出す。

騎馬隊にでも顔を出すのだろうと思ったミーファは、訓練に戻ろうとして首を捻った。

「あれ？　あっちは魔法隊が訓練している方向じゃなかった？」

志信が歩いていった方向を見て、訝しげに呟く。思わず一歩前に出ようとして、部下の兵士が声を上げた。

「ミーファ隊長！　次は何をすれば良いですか！？」

「あ、次は自分に『強化』をかけて素振りを千本！　気合を入れなさい！」

『はいっ！』

気を削がれたミーファは、気にしないことにして訓練に戻ることにする。

「わたしも頑張らなきゃね」

最後にもう一度志信が歩いていった方向に目を向けて、ミーファは練習刀を握り直した。

第一魔法剣士隊が訓練している場所から少し歩き、志信は他の訓練場よりも広い場所へと出る。

その足の向かう先には手に杖を持った者達が隊列を組み、魔法の訓練に精を出していた。ローブのようなものを着て杖を振るうその姿は、魔法使いと呼ぶに相応しい。

カーリア国魔法隊。

接近戦や中距離からの魔法攻撃に重視を置く魔法剣士隊とは違い、こちらは遠距離から強力な魔法を撃ち放つ部隊だ。

もっとも、強力な魔法と言ってもそれは魔法剣士隊と比較してというだけで、部隊の魔法使いはほとんどが下級魔法使いでしかない。

部隊構成は女性が多く、その割合は八対二。魔法剣士隊と比べても、女性兵士の比率が高い部隊だ。

志信は少し離れたところで足を止め、飛び交う魔法を興味深げに眺める。

「やはり詠唱をする者はいない、か。もしそうならば喉を潰すだけで事足りるのだが……無力化させるにはやはり気絶させるのが一番か」

さり気なく物騒なことを呟き、志信は右手に握った棍に目を向けた。

「ふむ……この『無効化』とやらがどこまで効力を持つのかも気になるな」

一人頷くと、再び魔法隊へと向かって歩き出す。炎や氷の矢が飛び交っているが、自分へと飛んでくるわけでもないので志信は気にしない。

仮に魔法が飛んできたとしても、ミーファが以前使った火炎魔法に比べれば直線的な軌道でしかないので避けることは容易いだろう。それに、今は『無効化』の棍がある。

悠々と歩み寄る志信に一人の兵士が気づき、驚きの声を上げた。すると、隊長らしき小柄な女性が右手を上げる。

「……撃ち方、止め」

『はっ！』

実に小さな声だったが、周りの兵士はすぐに魔法の発動を止めた。それに満足そうに頷くと、隊長らしい小柄な女性が志信へと歩み寄っていく。

「……今、訓練中。危ない、です」

とってつけたような敬語だった。

身長は小柄で、百五十センチにも満たないだろう。紺色のローブを着て、手には一メートルほどの杖を持ち、頭には服同様紺色の、つばが広い三角帽子が乗っている。

歳はサクラと同じくらいに見えるが、志信には判断がつかない。カグラほど長くはないが、それでも背中まで届く長さの黒髪。そして、黒曜石のような色合いの無気力な瞳が印象的な女の子だった。

――まるで日本人形のようだな……。

目の前の少女を、志信は内心でそう評す。

「申し訳ない。この隊の隊長に話があってきたんだが、君が魔法隊の隊長か？」

ひとまず頭を下げ、志信が尋ねる。すると、少女はすぐに頷いた。

「……わたしが魔法隊の隊長、シアラ＝テンシア、です。貴方は？」

シアラと名乗った少女に、志信はもう一度頭を下げる。

「名も名乗らず失礼した。俺は藤倉志信。義人……当代の王と共にこの世界に召喚された人間だ」

志信がそう言うと、シアラはゆっくりとした動作で膝をつく。

「……王の友人なら、礼を尽くさなくては、です」

膝をつき、ゆっくりと喋るシアラに志信は首を横に振った。

「いや、俺は立場のある人間ではない。故に、膝をつかれては困ってしまう。できれば立ってもらいたいのだが」

「……そう、ですか」

志信の言葉に頷き、シアラが立ち上がる。そして志信のことを興味津々で見ている兵士達へと目を向けた。

「……貴方達は、瞑想。わたしは、シノブ様と話がある」

そして、待機している兵士へと指示を出す。すると、兵士の女性からブーイングが上がった。

「えー！　シアラ隊長、わたし達もシノブ様とお話したいですよー！」
「……却下。訓練、すること」
「ちぇっ。わかりましたー」

シアラの言葉で渋々引き下がる女性兵士。そのやり取りを見ていた志信は、自分に対する敬称が気になって口を開く。

「義人ならともかく、俺には様などつけなくても良い。さん付けも不要だ。呼び捨てで構わない」
「……じゃあ、シノブって呼ぶ。良い？　……ですか？」
「無理矢理敬語にする必要もない。俺もシアラと呼ばせてもらう」
シアラの言動が少しおかしくて、志信は小さく笑う。それは志信にしては珍しい、優しげな笑い方だった。

「一体何の話をしているのかしら？」

そんな二人の様子を見ている人物が一人。訓練場の傍の雑木林で、隠れるように様子を窺いながら眉を寄せていた。

「つい気になってきちゃったけど、シノブってシアラ隊長と知り合いだったの？」

コソコソと志信とシアラの様子を見ているのは、もちろんミーファである。
結局志信の行き先が気になり、様子を見に来たのだ。

「でも、そんな話は聞いたことないし……」

何やら話し合っている二人を見ながら、ミーファはどうしたものかと逡巡する。

こんなところで必死に気配を消しながら志信の様子を窺う理由はない。だが、何故か志信の行動が気になる。

そうして悩むこと数秒、ミーファが見ている先で志信が小さく笑った。

「っ！？」

その笑みを見たミーファは、思わず体が硬直する。それは今まで見たことのない類の、どこか優しい笑みだった。

しかしそうなると、シアラは志信がそういった笑みを向ける間柄なのではないか？

そう考えたミーファは、胸の中が重くなるのを感じた。そして、思わず隠れていた木に生えていた枝を思いっきり握る。

握られた枝は、悲鳴を上げるようにバキリと音を立てた。

「む？」

「……どう、したの？」

「いや、なにやら寒気が。殺気ではないのだが」

それとなく周囲を窺うが、人影は見えない。そのまま数秒警戒していたが、何もないことを確認すると軽く気を抜く。そして、自身を見上げるように見てくるシアラへと視線を落とした。

「少し聞きたいことがあってきたのだが、良いか？」
すでにシアラは話を聞く体勢に入っているが、志信は一応尋ねる。
「……わたしに、答えられることなら」
「そうか。では、これを見てほしい」
頷いてくれたシアラに安堵の息を吐きつつ、志信は右手に持った『無効化』の棍を持ち上げた。そして棍先に施された幾何学的な文字、『魔法文字』の羅列を見せる。
「……『無効化』の術式。これが、なに？」
「いや、その『無効化』とやらはどこまで効力を発揮するのかと思ってな。魔法隊の隊長ならば、それがわかるかと思って聞きにきたんだ」
志信の言葉に、シアラは棍先の『魔法文字』をゆっくりと眺めていく。そして、棍の全体も眺めて口を開く。
「……これで、何度か魔法を『無効化』した？」
「ああ。数度、戦闘で振るった。その際に『無効化』したらしい」
らしい、というのは志信が魔法という存在に詳しくないからだ。一応話は聞いているが、義人に比べればその知識の量は劣る。
「……『魔法文字』で刻んだ魔法は、永続的な効果があるわけじゃない。刻まれた魔法を発動し続ければ、その効力も、いずれなくなる、です」
「そうか……どうすれば良い？」

「……また、『魔法文字』を刻んでもらえば良いの。この武器は、まだ二割くらいしか『魔法文字』が削れていないから、しばらくは大丈夫。でも、強力な魔法を『無効化』すれば、すぐに効力を失う、かも」

「強力な魔法とは、どのくらいの威力だ？」

「……この武器に刻まれた『無効化』の術式なら、中級魔法を『無効化』すれば術式が消える。この『魔法文字』を刻んだ人、下手くそ」

サラリと毒を吐くシアラに、志信は苦笑した。

「その言い方だと、自分のほうが上手く『魔法文字』を刻めると聞こえるが？」

挑発ではなく、ただの疑問として尋ねる。すると、シアラは無言で頷いた。

「……少なくとも、これよりは上手」

「そうか。では、いつか頼んでもいいか？」

「……いいけど、タダじゃない」

「む、案外しっかりしているな。では、何を望む？」

姿勢を正して、志信はシアラへと向き直る。そんな志信に、シアラは小さな口を開いた。

「……動く的」

「ん？　動く的？」

「……魔法の訓練をするとき、動く的がほしい」

「それを俺にやれと？」

やや戸惑いながら聞くと、シアラはしっかりと頷く。

「……『無効化』を施した武器を使って、的になる」

提案された条件に、志信はしばし考え込む。そして先程の魔法隊の練度を思い出すと、納得したように首肯した。

「ふむ、魔法隊の訓練にもなるし、俺も魔法使い相手にどう動けばいいかを学ぶことができるな。わかった、それで良い。義人にも一応聞いてみるが、義人なら二つ返事で了解してくれるだろう」

「……交渉成立」

シアラは無機質な声で小さく呟くと、今度は視界をあちこちに向け出す。そして周囲を数回見回すと、話すべきことがまとまったらしく志信へと真っ直ぐな目を向けた。

「……なんで、カグラ様じゃなくて、わたしのところにきたの？」

不思議そうに首を傾げるシアラ。そんなシアラに、志信は困ったように眉を寄せる。

「カグラは義人に付きっきりで忙しそうでな。それに、知り合いの縁は多いに越したことはない。現に、『魔法文字』を刻むときはシアラに頼めば良いとわかったしな」

「……そう」

志信からの返答に対して、シアラは納得したのかわからない無表情で頷く。

そんなシアラに、志信は苦笑染みた笑みを浮かべた。もし義人が

この場にいたならば、その表情を見て驚いたかもしれない。志信がシアラに向けた目は、まるで歳の離れた弟や妹に向けるようなものだった。

元来、藤倉志信という人物は面倒見が良い。特に、年下に対しては大分優しくなる。ただ、持ち前の仏頂面がそれを目立たせないだけだ。

「さて、それでは魔法隊の訓練の様子も見てみたい。何なら、動く的を今からしても良いがどうする？」

志信は自分がどんな表情をしているか自覚せずに尋ねる。すると、シアラは数秒志信の顔を凝視して目を逸らした。

「……今はまだ、いい、です。基礎訓練も、終わってないから」

「そうか。では、見学だけするとしよう」

そう言うなり、志信は邪魔にならなさそうな場所へと歩いていく。その様子を見た魔法隊の女性兵士がなにやら囁き合っているが、志信は特に気にしない。

シアラは志信が歩いていくのを無感情に見送り、ポツリと呟く。

「……変な人」

とりあえず、それだけを口にした。

シアラ＝テンシアという少女は、弱冠十四歳にして魔法隊の隊長に就任した魔法使いである。現在は十五歳だが、これは十七歳で魔

法剣士隊の隊長に就任したミーファよりも明らかに早く、歴代の隊長の中でも最も歳若い就任だと言える。

彼女が生まれたテンシア家は、魔法技術が他国よりも発展していないカーリア国において、カグラと言う例外を除けば魔法に対する随一の才を秘めた家系だった。

シアラもその才を受け継ぎ、わずか十四歳にして魔法隊の前隊長である自身の母からその立場を譲られた。

もっとも、シアラの魔法使いとしての腕は中級魔法使い程度である。それでも魔法隊の隊長を務められるのは、『魔法文字』を多少扱うことができるのと、他の魔法使いのレベルが低いからだ。

『風と知識の王剣』ノーレをもってして『下の下』と言わしめるこの国の兵士の実力評価は、もちろん魔法使いにも適用される。

魔力量、魔力操作の技術、魔力回復量。そのどれを取っても三流以下だ。中にはカグラのような超がつく一流もいるが、これは例外中の例外である。

サクラも実力的にはシアラより上だが、サクラが魔法を使えることを知っている者はあまり多くない。王の警護も兼ねてメイドをしているため、魔法を使えることが知られては不利になる。そのため、表立って行動することはあまりなかった。

魔法隊の前隊長であるシアラの母は、年齢を重ねて衰え始めた自身の能力では娘のシアラに敵わない。

そのため、例外を除いてカーリア国の中では最も魔法の腕が立つシアラが魔法隊の隊長を務めていた。

どこかぼんやりとしており、何を考えているかわからないところもあったが、それでも前隊長の努力もあってシアラは魔法隊の隊長という役目を全うしている。

無口だが小柄で可愛らしく、隊長というよりはマスコット的存在として部下に慕われているのは本人も知らないことではあったが。

そんな魔法隊から少し離れた雑木林の中で、ミーファは踵（きびす）を返し

て歩き出す。
『とぼとぼ歩く』。そう形容するのが相応しい足取りで、ゆっくりと魔法剣士隊が訓練している場所へと向かった。
自身の感情を持て余したままで、ただゆっくりと。

第四十一話：志信先生による戦闘訓練

夏の朝特有の清々しさを感じながら、義人は念入りに準備運動を行う。
服装は薄手の半ズボンに黒のTシャツで、優希に作ってもらったものだ。靴も紐で結ぶものを履き、ある程度体を動かして不備がないか確かめる。
最後に深呼吸をすると、自身と同じように準備運動をしていた志信へと目を向けた。

「よし、それじゃあお手柔らかに頼むよ」
「ああ」

志信も準備が整ったらしく、悠然と相対する。その向こうでは、カグラがいつものように微笑みながら立っていた。

事は前日の夜へと遡る。
以前早朝に散歩をして以来、義人は六時前後に目を覚ますことが多くなった。ならばと散歩をしていたのだが、それも数日で飽きがくる。

「んー……志信は朝から自主練してるらしいし、俺も混ぜてもらうかな」

八時頃まで寝ていても良いが、そうなると眠り過ぎという気がしてならない。それに、日中に政務ばかりしていると思いっきり体を動かしたくなるのだ。

幸いと言うべきか、志信は二言で承諾。そして、義人の予定と違ったのはそこでカグラが口を開いたことだった。

「では、並行して魔法の訓練も行いませんか？　初歩の自分にかける『強化』なら、自身の魔力を操作しながら体を動かす訓練になります。上手くいけば身体能力を向上させることもできるので、シノブ様との訓練も実りのあるものになると思いますよ」

笑顔で提案してくるカグラだったが、義人は首を傾げる。

「並行して練習って……身につくのか？」

「ええ。魔法使いも魔法剣士も、最初は体の動かし方から学びます。魔力というのも、言わば体の延長上のものですね。手を動かすように魔力を動かし、魔法を使うことを覚えていくんです」

カグラの説明に、義人は自分の手を見下ろす。どうやら魔力を操作することに慣れれば自分の手のように動かせるらしいが、義人にはそれがどんな感覚か想像もできない。

「カグラ、魔法とやらは俺でも使えるのか？」

そんな義人を他所に、志信がカグラへと尋ねる。カグラは志信を頭からつま先まで見ると、納得するように頷いた。

「大丈夫だと思います。ヨシト様ほどではありませんが、シノブ様も魔力を持っているみたいですから」

「そうか……では、俺も少し教えてもらうとするか」

そう呟く志信に、義人はため息を吐く。

志信は魔法を教わるだけですむが、自分は魔法と格闘を両方同時

に学ばなくてはならないのだ。
もっとも、学ぶ時間が限られているため所詮は付け焼刃にすぎない。覚えきれるかわからなかったが、それでも知らないよりはマシだろうと自身を納得させた。
生兵法は怪我の元ともいうが、生兵法にすら届かない気がすると少し気落ちもしたが。

そして現在、義人は志信を相手に適当な構えを取っていた。
志信のように武術を習っていたわけでもないため、志信の見様見真似で構えを取る。僅かに腰を落とし、半身開いて両拳を握った。左拳は軽く握って適度に前へと出し、右拳は腰付近へと構える。

「義人、それは俺が無手の時の構えだな？」
「ああ。というか、これくらいしか知らないし」
「そうか。ならば、もう少し下半身をリラックスさせろ。足の筋肉が緊張していては、滑らかな動きがしにくい」
「ういっす」

軽くステップを踏むように、足を小刻みに動かす。そんな義人の動きを見た志信は、腕を組んで頷いた。

「さて、それではまずは義人がどれほど動けるかを調べたい」
「ん？　百メートル走でもするか？」
「いや、それは良い。元の世界での運動神経と照らし合わせれば、おおよその運動能力はわかる。俺が言っているのは……」

志信はそこまで言葉を紡ぎ、流れるような動きで構えを取る。義人の見様見真似の構えとは違い、堂に入った隙のない構えだ。そして、何が楽しいのか小さく笑う。

「戦いにおいて、どこまで動けるかだ。反射神経、攻撃速度、見切り、体捌き。それと咄嗟の状況判断等だな」
「どうやって調べるんだ？」
志信の構えに内心で感嘆しつつ、義人は尋ねる。すると、志信は小さな笑みを僅かに引き締めた。
「簡単なことだ。手合わせをすれば良い」
「ハッ、成程。そりゃ簡単だ」
義人とて男の子だ。こういった“戦い”などには憧れる心がある。威勢良く志信を見据え、一度深呼吸をして駆け出す足に力を込めていく。
「それじゃあ、いくぜ志信！」
自身を鼓舞するように声を張り上げ、義人は駆け出した。

――その十秒後、義人は地面に寝転びながら青空を見上げていた。

「ああ、今日も良い天気だ」

ひんやりとする地面に全身を預け、虚ろな目で青空を見上げる。構えはともかく、喧嘩さながらに殴りかかった結果がこれだ。
突き出した右拳は空を切り、気づけば視界が回転。それに意識が追いつかないまま地面へと叩きつけられ、義人は現実逃避気味に青

空を見つめていた。

「アレっすよ。視界からいきなり姿が消えるとか、どこの漫画かと」

拳が志信を捉えたと思った瞬間、文字通り志信が消えた。そしていきなり体が縦に回転し、地面へと落下。合気道、いや、あるいは投げ技だったのかもしれない。

どちらにせよ、義人には見分けがつかなかった。

「大丈夫か？」

「……おー。以前受身を習ってなかったらやばかったけどな」

そう言いつつ身を起こそうとするが、実際は受身を取り損ねたらしく微妙に体が痛い。もしも地面がコンクリートだったならば、今頃全身を強打して死に至っていたかもしれなかった。

「加減はしたのだが……大丈夫か？」

地面に転がった義人を見た志信が、少しばかり心配そうな声を出す。義人はなんとか上半身を起こすと、軽く頭を振った。

「いやぁ、流石は志信。動きすら見えなかったよ」

一体どうやったのかと疑問を乗せて呟いてみれば、志信は不思議そうに首を傾げる。

「見えていなかったのか？　目は俺の動きを追っていたから、対応できると思ったのだが」

「え？　俺、目で追ってたのか？」

言われて思い返すが、意識が追いついていなかったため判断できない。反射的に志信の動きを見たのかもしれないが、頭のほうがそれを認識していなかったのだろう。

義人はそう判断すると、とりあえず立ち上がる。

「よし、もう一本！」

気合を入れるように叫び、再度拳を構えた。それを見た志信も軽く拳を構える。

「では、今度はもう少し遅い動きでいく。避けるか、防御。もしくは反撃してくれ」

「おう！」

返事と共に志信が地を蹴った。五メートルほどあった距離を瞬く間に踏破し、義人から見れば目に止まらぬ速度で踏み込んでくる。握られた拳はいつの間にか掌底の形を取っており、カウンターを仕掛けるには速度が違いすぎた。

「ちっ！」

義人は咄嗟に両腕を交差させ、背後へと跳躍する。攻撃が届かない距離に逃げる、もしくは衝撃をある程度殺せればいいと判断しての行動だったが、志信はさらにその上をいく。

踏み込むはずだった右足はさらに地面を蹴り、義人が稼いだ距離をさらに潰す。そのことに義人が頬を引きつらせたが、志信は左足で踏み込み、体を捻りながら体重の乗った掌打を繰り出した。

「っ！？」

交差した両腕の上から掌打を叩きつけられ、声を上げる間もなく義人は真後ろへと吹き飛ぶ。

軽く五メートルは空中浮遊をしながら衝撃に耐えていると、それに合わせるように志信が距離を詰めてきた。

「速いって!?」

足が地面に着くなり、義人は乾いた地面を滑るようにして勢いを殺していく。僅かに土煙が立ったが、それを気にしている余裕はない。すでに眼前には志信が迫っている。

牽制のつもりなのか、志信はボクシングでいうところのジャブのようなものを左右交互に放つ。威力よりも速度を重視したらしいのだが、素人の義人の目から見れば十分に脅威だった。

咄嗟にジャブを弾き、あるいは逸らす。鳩尾（みぞおち）にでもくらえば、悶絶すること間違いなしだ。

義人は自分から攻撃を仕掛けようかと思ったが、今は衝撃を殺すために地面を滑っている。そのため、攻撃はおろか防御もできず攻撃を捌くので精一杯だ。

志信のやつ、本当に手加減してるんだろうな!?

そう思った瞬間、志信が左足を軸に体を捻る。その動作に見覚えがあった義人は、先程よりも頬の筋肉が引きつるのを感じた。

「ばっ、おまっ!?」

志信が無手の際、最も得意とするのは手技や投げ技ではなく足技である。

足技というのは下手すればバランスを崩すこともあり、相手に足を取られては不利になる。だが、その反面手技に比べれば威力は大きい。そして、志信が学んだ藤倉流では足を取られた際の対処法も存在している。

もっとも、義人が危惧したのはそんなことではない。

元の世界での志信の運動能力を知っている義人は、身体能力が増した現在の志信の蹴りの威力を予想して血の気が引いた。
恥も外聞もなく、身を投げ出す勢いで思いっきり地面を蹴って真横へと跳ぼうとする。志信の前動作から察するに放たれるのは前蹴りだ。ならば、思い切り横へと跳べば避けられるかもしれない。
そんな一縷の希望を込めて、義人は必死に地面を蹴って回避を試みる。
そして、跳ぶなり前蹴りが脇腹に掠った。

「のわあああぁっ！」

音を打ち抜くような速度で繰り出された前蹴りが掠り、義人の体が勢いに押されて横へと回転する。
そして勢いそのままに地面を数メートル転がり、掠った脇腹へと手を当てた。

「……抉(えぐ)れてないだろうな。俺の腹」

割と本気で呟くが、鈍い痛みが伝わってくるだけで出血もない。Tシャツをめくって見てみれば、掠った部分が赤くなっている。

「ヨシト様！？　大丈夫ですか！？」

今まで様子を見ていたカグラが心配そうな表情で駆け寄る。どうやら、カグラの目から見ても今の一撃は大分危険なものだったらしい。

「もう！　シノブ様！　今の蹴りは本気でしたね！？」

義人の様子を確認するなり、カグラが割りと本気で怒鳴る。その

怒鳴り声を向けられたわけではないが、義人はつい反射的に背筋を伸ばしてしまった。
そんな義人の反応を他所に、志信が申し訳なさそうに頭を下げる。
「いや、すまん。義人の反応が予想よりも良かったため、体がつい動いてしまった。一応加減はしたが……」
「加減してあれかよ……」
直撃すればどうなったか。それを想像して、義人は少し顔色を悪くする。
「しかし、中々良い反応だった。俺としては、手技を捌くのは無理だと思ったのだが」
「捌いたっていうよりも、必死に弾いただけだって。というか、組み手よりまずは基本を教えてくれ。できれば防御を。いきなり組み手はもう嫌だ」
義人が頼むように言ってみると、志信は少しだけ考え込んで頷く。
「防御か。そうだな、相手を倒す技よりも、自分の身を守る技のほうが良いか。カグラ、王剣を義人に」
「ノーレ様を？　シノブ様、一体何をするつもりなんです？」
「無手の場合と、剣を使った場合ではどれくらい動きが違うのかを見たい」
「……きちんと手加減をしてくださいね？」
ニコリと、笑顔で釘を刺すカグラ。その笑顔に薄ら寒い殺気のようなものを感じた志信は、迷わず頷いた。
「もちろんだ」

そう言って、志信は近くに立てかけておいた『無効化』の棍を手に取る。それを見た義人もひとまず王剣ノーレを手に掴み、一息に抜き放った。

「よし、それじゃあ頼むぜノーレ」

『……ふん』

頼りになる自身の相棒へと声をかける義人だったが、返ってきた声はかなり冷たい。それを聞いた義人は、思わず脱力した。

「ちょっとちょっと、ノーレさん。なんでそんなに不機嫌なんだよ？」

『……知らんわ、戯け』

怒っているというよりは、拗ねたような声色である。

義人は自分が何かしたかなと首を捻るが、そんな義人の仕草を見たノーレはさらに不機嫌になっていく。

『……巫女が気づかんかったら、妾をまた置き去りにしておったくせに』

ぼそりと小さくノーレが呟くが、どうしたものかと考えていた義人にはよく聞き取れなかった。

「ん？　なんだって？」

『何でもないわ、戯け！　とっとと仏頂面に叩きのめされるが良いわ！』

「ちょ、ひどっ！？　そこまで怒られるようなことをした覚えはないぞ！」

何やら怒っているらしいノーレは、まったく聞く耳を持たない。
そんな義人達の会話が聞こえない志信は、棍を軽く振るって構えた。

「それでは、いくぞ義人」
「ちょっと待ってくれと言いたいけど、仕方ねえ……来い、志信！」

すぐにはノーレの機嫌が直らないと判断した義人は、ノーレを正眼に構える。それを見た志信は、ゆっくりと間合いを詰めながら口を開く。

「義人、お前は魔法でもなんでも使って良い。俺は魔法は使えないが、お前の出来ることを見ておきたい」
「……魔法、か。使いたいんだけど……使えないかな？」

台詞の後半部分はノーレに向けた言葉だ。ノーレはしばらく沈黙していたが、やがて諦めたようにため息を吐くのが聞こえた。

『……ふぅ、仕方ない。駄々を捏ねてもこの唐変木には伝わらんか……まったく。良いじゃろう。補助してやるから、とっとと叩きのめされるが良い』
「言ってることが微妙に酷い気がするんだけど？」

しかも、叩きのめされることが前提である。義人としては、そこは少しでも善戦しろと言ってほしかった。
それでもなんとか気を取り直すと、義人は志信との距離を測る。
義人の武器であるノーレは両刃の西洋刀だ。志信の扱う棍に比べれば、その間合いは圧倒的に狭い。それを補うために魔法を使おうとするが、志信の棍には『無効化』が付与されている。

『いや、ぶっちゃけ手詰まりっす』

一合も武器を交えることなく、義人は思念通話で愚痴を吐く。それを聞いたノーレは、鼻を鳴らすように不機嫌そうな声を出した。

『戯け。戦う前から諦めてどうする。たしかに勝ち目はないが、なければ作るんじゃ』

『はっはっは。無茶を仰(おっしゃ)いますなノーレさん』

『戯言を言う暇があったら、とっとと攻撃せんか。魔法の使用は妾に任せよ』

何が何でも戦わせる気らしい。義人は小さく息を吐くと、気を引き締める。

それを待っていたのか、義人が気を引き締めた瞬間志信が動いた。

『右じゃ！』

その動きを察知したノーレが警戒の声を上げる。義人はすぐさまそれに反応すると、右胸部を突きにきた棍先をなんとか弾いて逸らした。

それに義人が安堵しようとすると、すぐに次の打突が放たれる。手加減はされているらしいが、攻撃が“線”ではなく“点”で放たれる打突は距離感がつかみにくい。その上攻撃の速度は速く、瞬きをする暇もなかった。

「よっ！　はっ！　とっ！」

それでも、義人は何とか捌(さば)いていく。

声をかけてからでは防御が間に合わないと判断したのか、ノーレは初撃以降声をかけない。義人は持ち前の動体視力と運動神経を必

死に使い、次々と繰り出される棍先での突きを紙一重で捌いていく。
手加減をされてはいるが、繰り出す打突はそれなりに速い。汗を流しながらも打突を捌いている義人を見た志信は、僅かに口元を緩ませた。

「素人にしては良い動きだ」

小さく呟かれた賛辞の言葉を聞く余裕など、義人にはない。防御に専念しているためだろうが、その集中力は見事だと志信は内心で評価する。

「だが、足が止まっているぞ！」

突きをフェイントにして足払い。上半身への攻撃に意識が集中していた義人は、突然足元へと繰り出された回し蹴りに反応できなかった。

『させん！』

しかし、それにはノーレが反応する。義人と志信の中間に突風を発生させると、迷わず両者を後ろへと弾き飛ばす。
警戒した志信は地面を蹴って後ろへ跳び、義人は風に体を押されて後ろへと飛んだ。

『ヨシト！』
「おう！」

義人はノーレが魔法を使うのを察知していたのか、着地するなり王剣を振り上げる。そして、志信目がけて真横へと薙ぎ払った。
その瞬間、幾多もの鎌鼬（かまいたち）が放たれる。義人の腕では狙いなどつけ

られないが、下手な鉄砲でも数撃てば当たるものだ。
高速で飛来する鎌鼬に、志信は僅かに眉を寄せる。ミーファの炎やサクラの氷の矢と違い、風は視認することができなかった。

「ハッ！」

それでも自身に迫る“何か”だけを察知して、『無効化』がかけられた棍先で鎌鼬を打ち消していく。
都合七回棍を振るい、自身に迫った鎌鼬を全て『無効化』しながらも志信は義人の動きから目を離さない。そんな視線の先で、義人はさらに王剣を振りかぶっていた。

「もういっちょ！」

今度は上段から叩きつけるように王剣を振り下ろすと、圧縮された風の塊が撃ち出される。
かつてこの世界に来た際、いきなり襲ってきた鳥の魔物のシドリが使ったものと同じ魔法だが、威力は義人のほうが上だ。
志信は地面の砂を巻き上げながら迫る風の塊を前にして、すぐに迎撃を判断する。棍を振り上げ、裂帛の気合と共に地面を割るように踏み込み、棍を振り下ろした。
『無効化』が付与された棍は風の塊を両断すると、その勢いをもって霧散させる。それを見た義人は引きつった笑いを浮かべた。

『……あやつ、本当にお主と同じ世界の人間か？　風の魔法は視認できないはずなのに、何の迷いもなく自分に迫る魔法だけを打ち消しおったぞ……』
『……保証できないね。俺も、常々志信は人間離れしていると思ってたけど、まさかここまでとは思わなかったよ。というか、どうする？　不意を突いても無理だぞ？』

『あやつの武器に付与されている『無効化』が厄介じゃの。こうなったら中級魔法で薙ぎ払うのも手じゃが、おそらくそれも効かん。上級魔法は今のお主では到底扱えんし、お手上げじゃな』
『うへぇ……まさに鬼に金棒だな。味方なら心強いけど、敵に回すとこれほど厄介な敵はいないってか』

思念通話で話し合うが、対抗策はない。いっそ特攻しようかと義人が考え出したところで、志信は構えていた棍を下げた。

「成程。王剣を使えば戦うことができるようだな。義人は目が良いし、反応も良い。防御に関しては成長が良さそうだ。その上でノーレがサポートに回れば中々に手強い」

構えを解いた志信を見て、義人も緊張を解く。僅か数分の組み手だったが、どっと疲れを感じた。

「『強化』とやらがかかっているらしいし、義人は元々基礎運動能力に問題はない。あとは剣を振ることに慣れれば、それだけで一段階上の強さを得られるな。明日からは練習刀を使っての訓練をしよう」
「え、あ、うん。マジっすか。意外と高評価？」
『下の下程度じゃがな』

ボソッとノーレが呟く。

「義人の場合、俺とは違って距離に関係なく戦える。俺の場合は近づかなければ攻撃できないが、義人は魔法を使えば良い。それが俺にはない強みだな」
『妾が協力せんと下級魔法すら使えんがな』

さらに、義人にだけ聞こえるようノーレが呟く。

「志信は武器で『無効化』ができるから良いじゃないか」

「いや、どうやらこの棍では中級魔法までしか『無効化』は効かないらしい。あまり多用するのは控えるつもりだ」

ノーレの言葉を何とか聞き流すが、ノーレは途切れることなく言葉を投げかけてくる。

『どうせお主では中級の弱い魔法しか扱えんから、仏頂面には通用せんな』

「……あの、さっきから何を怒ってるんでしょう？」

『自惚れるなということじゃ、戯けめ』

ノーレの呟きが、義人の心には痛かった。

第四十二話：カグラ先生による魔法レッスンその2&寝惚け優希さん

義人が志信との手合わせに関する細かいことを聞きながら休憩していると、今度はカグラが歩み寄ってくる。そして、笑顔で口を開いた。

「では、今度はわたしの番ですね？」

「……えーっと、俺って岩よりも脆いんで、カグラさんのお相手をするのはできれば御免被りたいんですけど」

「違います！　格闘じゃなくて魔法の練習ですよ！」

少し引き気味に義人が言うと、カグラは顔を赤くして声を張り上げる。義人にはわからなかったが、岩を素手で砕けるのは女性としてのプライドが許さないらしい。

「何？　カグラは素手で岩を砕けるのか？」

それに反応したのは志信だった。声にはどこか感嘆したような響きが込められており、それを聞いたカグラはさらに顔を赤くする。

「ま、魔法を使うからです！　魔法を使わなかったらそんなことできません！」

「いやいや、魔法を使ったからって岩を砕くのはどうかと思うよ、うん」

ヒートアップしているカグラをさらにからかう義人。カグラは何かを言おうとして、疲れたようにため息を吐く。

「もう、いいです……ヨシト様のばか」

「俺だけ!?　志信は!?」
「む?　俺はからかった覚えはないぞ?」
「さっきの反応は素かよ!?」

落ち込んだカグラを前に、義人はあちこちへと視線を飛ばす。
軽い冗談のつもりだったが、城中の人間が同じことを聞いてくるカグラにとっては割と辛い話題だったらしい。

「いや、すまん。まさかカグラがそこまで気にしているとは思わなかったんだ。許してくれ」

そう言いつつ、義人は頭を下げる。その下げられた頭を見たカグラは、もう一度ため息を吐いて苦笑した。

「頭を上げてくださいヨシト様。国王に頭を下げられては、これ以上怒るわけにもいきません……まあ、さっきのは事実ですし」

最後の一言は小さな声で呟く。どうやら、魔法さえ使えれば岩を砕くのは本当らしい。これからはあまりからかわないようにしようと内心で思いつつ、義人は頭を上げた。

「そうか……じゃあ、今の話題は忘れよう。といわけで、魔法を教えてくれ。志信も聞くよな?」
「ああ。使えないかもしれないが、知っておくに越したことはない。ご教授願おう」

志信が姿勢を正し、義人もそれに倣う。それを見たカグラは小さく微笑むと、講義をする教師のように二人に向き直った。

「それでは僭越ながら、この“カグラ”が魔法をお教えいたします。

あ、その前にシノブ様にはこれを」

カグラはそう言うなり懐から黄色の石を取り出し、志信へと渡す。
黄色の石を受け取りつつも、志信は首を傾げた。

「これは？」

「『魔計石』という魔力を計る魔法具です。今はわたしが触れたせいで透明から黄色に変わってますけどね。まあ、とりあえず握ってみてください」

カグラの言葉に従い、志信は『魔計石』を握る。すると、黄色だった石が徐々に色を変え始めた。

「何やら色が変わったが、これでいいのか？」

『魔計石』が青色に変色したのを見て、カグラへと指示を仰ぐ。
志信が握る『魔計石』を見たカグラは、興味深そうに目を細めた。

「シノブ様の魔力量は四人分ですか」

「……どういうことだ？」

意味がわからない。
無表情ながらもそんな志信の内心を読み取った義人は、苦笑しながら説明する。

「その石は色によって魔力量を調べるアイテムでな。志信は一般の魔法使い四人分の魔力があるってことさ。あとは、魔力を操って体の外に出せるようになれば魔法使いってこと……だよな？」

カグラからの聞きかじりの知識のため、義人の言葉には確信の響

きがない。そのため、少しばかり不安そうにカグラに尋ねた。

「はい。ヨシト様の言う通りです。魔力がない、もしくは魔力を操作できなければ魔法使いとは言えません。その点、シノブ様は魔力を持っています。あとは魔力を操るだけですね」

「へぇー……しかし、向こうの世界から来た奴はみんな魔力を持つのかね？　俺と志信が持っていたってことは、優希も魔力を持っているのか？」

「それは測ってみないことにはわかりません。しかし、歴代の王も魔力を持っていたらしいですし、可能性としては高そうですね」

「そっか。まあいいや。今は魔法の練習をしよう」

「そうですね。では、まず魔力を操る練習から始めましょう。まずは気を楽にしてください」

カグラがそう言うと、義人と志信は顔を見合わせる。そして、とりあえず指示通りに気を楽にした。

「はい、では次に目を瞑って深呼吸をしてください」

二人して言われるがままに目を瞑り、深呼吸をする。深く息を吸い、ゆっくりと吐き出していく。

「それでは、体の中に魔力があるということを意識してください」

「え？」

「……む」

意識しろと言われても、どう意識すれば良いのかわからない。義人は眉を寄せながらも深呼吸を繰り返し、自分の中にあるらしい魔力へと意識を向けた。

その隣で、志信は少しばかり首を傾げている。それは義人とは違

い、何かしらの感覚を掴んだためだ。
武術において、精神修養は必要不可欠な要素である。座禅に似た心境で魔力とやらの感覚を掴もうとした志信は、意識して初めて“何か”の存在を察知した。

「魔力……これか？」

ポツリと呟く。その一言に義人は目を見開いた。

「もうわかったのかよ！？」
「いや、確信はない。ただ、元の世界の時には感じなかった妙な感覚がある」

しきりに首を傾げる志信に、カグラは感心したような目を向ける。

「なるほど……シノブ様は感覚が非常に優れているみたいですね。先程も、ヨシト様が使った魔法を感覚だけで察知していましたし」
「あれが魔力か？　俺は妙な感覚がするものを打ち消しただけなんだが」
「それが魔力です。それにしても……」

そこで一度言葉を切り、カグラは困ったように頬に手を当てた。

「魔法を使ったことのあるヨシト様よりも先に、シノブ様のほうが感覚をつかむのが早いとは思いませんでした」
「ぐはっ！」

告げられた言葉が胸に刺さり、義人が思わず膝を突く。そしてプルプルと震えると、ノーレを片手に立ち上がった。

「の、ノーレは俺の魔力を吸い出すだけだから、体の中にある魔力なんて俺はわからないって」
『戯け。その吸い出される感覚がわかるくせに、何故自分の魔力がわからんのじゃ。体の中にある魔力を妾が操って外に出しとるんじゃから、その感覚を覚えれば良いじゃろ』
「あの体の力が抜けるような感覚を？　ノーレ、ちょっと魔力を吸い出してくれよ」
『自分で感覚をつかむほうのが良いのじゃが……まあ、良かろう』

そう言うなり、ノーレが義人の体から魔力を吸い出していく。
自分の中から“何か”が抜けていく感覚に、義人は納得の声を上げた。

「あー！　これが魔力か！　しかし、気持ち悪い感覚だな……何か、血を抜いてるみたいだぞ？」

魔力が吸われていく感覚に、義人は顔をしかめる。ノーレを握る右手からどんどん血が抜けていくような感覚を覚え、気分が落ち着かない。

『……っと、妾が吸える魔力はこれで限界じゃな。感覚はつかめたかの？』
「ああ、うん。ばっちり。操るのはともかく、魔力がどんなものかはわかった」

義人は首肯してノーレから手を離す。そして自分だけで魔力を感じようと集中するが、いまいち感覚をつかめない。

「んー……ノーレの補助がないとわからないなぁ」
「普通はそういうものですよ。むしろ、すぐにわかったシノブ様が

すごいんです。本当だったら早くても三日はかかるのに、それを一度で覚えたんですから」

苦笑混じりのカグラに、義人は肩を竦める。

「まあ、志信だしな」

その一言で、義人は自分を納得させた。

本日四回目の鐘が鳴り、午前八時を知らせる。その鐘の音を聞いた義人は、集中するのを止めて顔を上げた。

「うん、わかんね」

一時間ほど感覚をつかもうとしていたのだが、一向につかめない。ノーレの補助があれば大丈夫だが、自分一人では魔力の欠片すら探知できなかった。

「それでは、ひとまずここまでにしておきましょう」

あと一時間もすれば謁見の間で朝の報告会がある。そろそろ切り上げれば丁度良い時間だろう。

「ふむ、中々に興味深いな」

志信も集中を解き、なにやら自分の体を見下ろす。今まで自覚していなかった魔力という存在に興味をもったらしい。

「後でシアラのところに行って教えてもらうとするか」

小さく呟くが、義人はそれを聞き逃すことなく聞き取った。そして、楽しげな表情を浮かべる。

「シアラ？　シアラって魔法隊の隊長だろ？　仲良いのか？」

そう言いつつシアラの顔を思い出し、義人は一つ頷く。

直接話したことはあまりないが、ある意味志信とぴったりな少女だと思った。

「仲が良いというわけではないが、魔法のことは魔法使いに聞くべきだと思ってな。カグラは義人と共に政務をするだろう？　だから、訓練の合間にでもシアラに教わるとしよう」

もっとも、シアラ次第だが。

そう付け足して、志信は傍に置いていた『無効化』の棍を拾い上げる。

「ふーん。へぇ……志信がねぇ。いやいや、良いことだ。まあ、ミーファにとっては良くないかもしれないけど」

うんうん、と感心する義人。志信が元の世界では中々友人を作ろうとしなかったことを思い出し、一人感慨に耽（ふけ）ってみたりする。

そんな義人を見たカグラは苦笑した。

「そうなると、ヨシト様はシノブ様に差をつけられてしまいますね？」

「うん？　ああ、別に良いんじゃないか？　昼間は政務をしないといけないし、志信に差をつけられて困ることはないしな。むしろ嬉

しいぐらいだ。それに……」

傍に置いていたノーレを拾い、義人は快活に笑う。

「こっちには、優秀な教師が二人いるからな。政務が終わってからどっちかに教われば良いだろ？　志信だって一日中魔法の訓練をするわけでもないだろうし」

優秀な教師とはもちろん、カグラとノーレのことだ。場合によってはサクラに教わるのもありだなと笑い、ふと思いついたことを口にする。

「なあカグラ、『魔計石』を貸してくれないか？　あとで、優希にも魔力があるか計りたいしな。あいつも、魔力があったら魔法を覚えたいって言うだろうし」

「そうですね。ユキ様も計っておいたほうが良いとわたしも思います」

義人の案に同意すると、カグラは『魔計石』を手渡す。

それを落とさないように受け取った義人は、とりあえずこの場を解散させることにした。

「さーて、優希はどこかなっと」

とりあえず寝室に戻ってみたが、優希はいなかった。守衛の兵士に話を聞いてみたが、優希は来ていないらしい。

それを確認した義人は、とりあえず優希の部屋へと向かうことにした。

「もしかしたら寝坊してるかもなー。うん、優希ならありえるか」

元の世界での生活を思い出し、義人は小さく笑う。

伊達に長年幼馴染みをしているわけではない。登校時に迎えに行った際、優希がまだ寝ていたということも数多くある。そのため慌てて叩き起こし、優希の母親に楽しそうに笑われたのは懐かしい思い出の一つだ。

こちらの世界に来てからはなるべく早く起きようとしているのだが、時折八時を過ぎても寝ていることがある。

「まあ、別に優希は寝てても良いんだけどな？」

義人や志信と違い、優希は特段するべきことがない。もっとも、それを言えば志信も同じだが、志信が訓練に参加することはすでに当たり前になっている。

優希がしていることをあえて言うならば、料理と洋服作りだろう。それと、政務をしている義人の周りで雑事をするぐらいだ。

そんなことをのんびり考えつつ、優希用に用意された部屋へと足を運ぶ。国王の友人ということでそれなりに大きい部屋であり、扉の脇には守衛の兵士が立っている。

「おはよう、お勤めご苦労様。優希はまだ寝てるか？」

ひとまず守衛の兵士に挨拶がてら声をかけると、兵士は驚いたように背筋を伸ばした。腰に日本刀を差しているところを見る限り、歩兵隊か魔法剣士隊の兵士だろう。

「おはようございます！　ユキ様はまだお休みになられています！」

「そっか。やっぱり寝てるのか」

うんうんと一人納得して、どうしたものかと軽く考え込む。すると、そんな義人を見ていた兵士が口を開いた。

「あの、俺達はここから離れたほうが良いでしょうか？」

何故か、神妙な顔で聞いてくる若い守衛の兵士。

「いや、別にそんなことはないけど……なんで？」

「外に人がいては集中できないかと思いまして」

どこかで見た顔だなと思いながらも、とりあえず義人は聞き返す。

「……何に集中するんだ？」

「え？　夜這いに来られたのではないのですか？」

「馬鹿野郎！　今は朝だから朝這いだろ！」

心底不思議そうに答えた若い兵士に、もう片方の兵士が突っ込みを入れた。王を前にしてやたらと砕けた態度に、義人は苦笑する。

「お前ら、魔法剣士隊か？」

よく顔を見てみれば、以前タルサ村へと魔物退治に行った時に義人と一緒に農作業をしていた兵士だった。あの時大分打ち解けたかなと義人は思っていたが、どうやら予想以上に打ち解けていたらしい。

「はっ！　第一魔法剣士隊の者です！」

「タルサ村で、俺と優希を見て冷やかしてくれたよな？」

「はっ！　……あ」

兵士の額から、冷や汗が流れ落ちる。それを見た義人は笑顔を浮かべた。

「そ、それでは失礼します！」

義人の笑顔を見た兵士がすぐさま逃げ出す。まさに脱兎の如くと言わんばかりの逃げ足に、義人は再度苦笑した。

「まったく。気軽な関係のほうが好きだけど、アレは少し気軽過ぎかな」

『そうじゃの。慕われるのと侮られるのはまったく違う。まあ、今の奴らは前者のようじゃがな。引き締めるところはきちんと引き締めるんじゃぞ？』

苦笑混じりの呟きに、ノーレが返答する。その言葉を聞いた義人は、一つ頷いた。

「肝に銘じておくよ。ま、今はまだ王様業務が始まる前だし、良いよな？」

『戯け。お主は一日中王なのじゃぞ？　そのことをきちんと自覚せんか。巫女に見られておれば、長い説教モノじゃ』

「それは勘弁してほしいなぁ……」

ため息を一つ吐き、優希の部屋の扉をノックする。

「おーい、優希ー。朝だぞー？」

そして声をかけてみるが、中からの返事はない。

「やっぱり寝てるか」

そう口にして、ドアノブを捻って扉を開ける。義人はそのまま部屋の中へと足を踏み入れると、なんとなく部屋の中を見回した。

元の世界の優希の部屋なら知っているが、こちらの世界で優希の部屋に来たことはあまりない。

壁際に置かれたベッドや、その近くに置いてある机と椅子。反対の壁には箪笥（たんす）や書棚が設置されており、書棚には様々な本が並んでいる。さすがにヌイグルミの類は置いていない。

「おーい、優希？　寝てるのか？」

ベッドに歩み寄りながら尋ねてみるが、返事はない。

『寝ておったら返事などできんじゃろうが』

「そりゃごもっともで……ん？」

義人はベッドの傍で足を止め、机の上に置かれている物へと目を向ける。

机の上には厚さ五センチほどの本が三冊置かれており、表紙に書かれたタイトルが義人の興味を惹いた。

「『カーリア国の料理辞典』、『魔物大全』、『コモナ語について』？　へぇ、優希って相変わらず勤勉だなぁ」

そう言いつつ、『コモナ語について』という本を手に取る。そして開いてみると、日本語と一緒にコモナ語が書かれていた。

コモナ語はほとんどの国で通じる言語で、義人もいずれは覚えなくはいけない。ひとまず流し読みをして、次は『魔物大全』を書かれた本を手に取って中を開いた。

そこには魔物のイラストが書かれており、名前や危険度、習性や特徴なども書かれている。これも同じように流し読みしてくと、途中に栞が挟まっていたためその手を止めた。

「これは……龍か？」

栞が挟まっていたページを見て、義人は思わず目を輝かせる。龍と言っても数種類存在し、そのほとんどが上級の魔物として知られる存在だ。火龍や翼竜、中には白龍という種族もいる。他の魔物と比べて情報が少ないのは、それだけ情報を揃えるのが難しいということだろう。

習性や特徴などにも目を通し、義人は小さな唸り声を上げる。

「リアルで遭遇したら絶対逃げるぞ、こりゃ」

ゲームなどでは格好良い生き物だと思っていたが、実際には羽の生えた巨大なトカゲのようなものだ。もっとも、風龍や白龍などは絵が載っていないためどんな姿形をしているかわからないが。

遭遇することはないだろうと軽く現実から逃避しつつ、今度は『カーリア国の料理辞典』に手を伸ばす。そして開こうとしたが、優希の寝息が聞こえて義人は手を止めた。

「って、俺は何をしにきたんだか……」

優希を起こしに来ておきながら、その横で本を読んでいては意味がない。今度見せてもらおうと思いつつ、義人は本を元の位置に戻した。

「さて、起こしますか」

幸せそうに寝ている優希の横に立ち、義人は声をかける。

「おーい、優希。朝だぞ。朝飯食べるぞー」

元の世界のパジャマに似た服を着た優希の肩を軽く揺さ振ってみるが、目を覚ますことはない。それどころか、義人の声を聞いてますます幸せそうに布団に丸まる。

「むむ、これは手強いぜ」

義人は一気に布団を引き剥がしてやろうかと思案するが、もう少しだけ粘ってみようと優希を揺り動かす。

「優希、起きろってば」

だが、起きない。

義人は揺らすのを止めると、今度は人差し指で優希の頬をつつく。

「ほーら優希。起きろー」

「……ふにゅ……ふにゅ」

つつく度に面白い声を漏らす優希。それを見た義人は少し楽しくなり、餅のような頬を更につつく。

「おー、こりゃ面白い。ってか柔らかいな」

プニ、プニと何度もつつくが、優希は目を覚まそうとしない。それでも挫けず頬をつつく義人だったが、ここで優希の行動が変化した。

「……ふにゅ……ふにゅ……あむ」

何を思ったか、優希はつついていた義人の人差し指へと噛み付いた。もちろん、本気で噛んでいるわけではなく甘噛みである。

「ちょ、優希？」

まるで赤ん坊のように人差し指に吸い付く優希を前に、義人は困惑した声を漏らす。ちゅぱちゅぱとなにやら音が鳴り、どうしたものかと義人は思案した。少し、変な気分になりそうである。

『何をしとるんじゃ貴様は！？』

思案する義人をノーレが怒鳴りつけた。

「俺のせい！？　ほ、ほら優希！　起きてくれ！　ものすごくくすぐったいんだ！」

思念通話で怒鳴ってくるノーレの剣幕にビビりつつ、義人はさっきよりも強く優希を揺する。するとさすがに優希も目を開け、数回瞬きをした。

「ぅん……義人、ちゃん？」

「お、おお。義人だよ」

どもりながらもそう答え、さりげなく噛まれていた指を体の後ろへと隠す。そんな義人の横で、優希はのんびりと体を伸ばした。

「ふぁ～……今、何時？」

「朝の八時過ぎ。起きてこないから、まだ寝てるのかと思って起こ

しにきたんだ」
「そうなんだぁ……ありがと、義人ちゃん」
そう言って、優希が嬉しそう笑う。その満面の笑みを前に、義人は心の中で首を傾げた。
『あれ？　俺って、優希を起こしに来ただけだっけ？』
『この戯けは……この娘の魔力を計るために、巫女から『魔計石』を借りたことまで忘れたか？　呆れた鳥頭じゃな』
『おお、そうだった！』
ものの見事に忘れていた義人は、ポケットに入れていた『魔計石』を取り出す。義人が触れたせいで濃い緑色に変色している『魔計石』を見た優希は、物珍しそうに目を見開いた。
「うわぁ……義人ちゃん、それ何？」
「これは『魔計石』っていう魔力を計るアイテムだ。優希を起こすついでに計ってみようと思って、カグラから借りてきたんだよ。とりあえず握ってみてくれ」
そう言いながら、義人は優希に『魔計石』を手渡す。優希は小さく首をかしげながら『魔計石』を受け取り、とりあえず両手で握り締めた。すると、色が徐々に変わっていく。
「どれどれ？」
握られた『魔計石』を覗き込む義人。変色した『魔計石』の色を確認し、一度目を逸らしてもう一度見る。そして再び『魔計石』の色を確認すると、今度は目を擦りだした。だが、何度見ても『魔計石』の色は変わらない。

「……赤、か」

搾り出すように呟く。

優希が握った『魔計石』は、濃い緑色から赤色へと色を変えていた。

「義人ちゃん。赤くなったけど、これでいいの？」

「あ、ああ。協力に感謝するよ、うん。しかし、赤か」

動揺が口調に現れる。義人はカグラが以前言っていた話を思い返し、ノーレへと思念通話を繋げた。

『ノーレ、ノーレ！　赤って六十四人分だったよな！？』

『そう……じゃのう。妾も驚いたぞ。しかし、これは……』

義人の言葉に、しばし考え込むノーレ。その声に真剣なものを感じた義人は、眉を寄せた。

『なんだ？　何かあるのか？』

『……いや、何でもない。それより、このままでは朝食を食べる時間がなくなるのではないか？』

ノーレから指摘されて、義人は今の時間を思い出す。

「って、やべ！？　早く朝飯食わないと間に合わないじゃねえか！　起こしといてなんだが、すまん優希！　俺は先に食堂に行くから！」

「あ、うん。それじゃあ、わたしも着替えてから行くね」

「ああ！」

それだけを言い残し、慌しく走り出す義人。
頬をつついて遊ぶんじゃなかったと若干後悔しつつ、優希の部屋を後にする。
優希はそんな義人を見送り、小さく欠伸をした。そして目の端に浮かんだ涙を擦り、口を開く。

「ふぁ……とりあえず、着替えよ」

義人に起こしてもらったことに頬を緩ませつつ、そう呟いた。

第四十三話：屯田兵計画

いつものように執務室で政務をこなしていた義人は、一枚の紙を前に眉を寄せていた。

部屋の中には義人とサクラしかおらず、カグラはアルフレッドと協議。志信は魔法隊で訓練。優希は厨房で元の世界の料理を再現しようとしている。

「あちこちの村で魔物による農作物荒らしや人的被害が増加中……人的被害において死亡者はいないものの、重傷者も出ている、か」

書いてある文を読み上げて、寄せた眉をさらに寄せる。

税率も六割に引き下げられ、最近はそれらに関する書類はほとんどなくなってきた。しかし、今度はそれを待っていたようにこういった問題が持ち上がる。

傍に置いておいた湯飲みを手に取り、義人は眉を寄せたままで温くなったお茶を飲み干す。そして湯飲みを元の場所へと戻してため息を吐いた。

「うーん……元の世界には魔物なんていなかったからなぁ」

どう対処すれば良いか、皆目検討もつかない。いっそのこと森を焼き払ってみようかと物騒な考えが義人の頭を過ぎったが、すぐさまそれを打ち消す。

それで森の中から魔物が逃げ出して被害が出たら本末転倒だ。それに、住む場所が減れば下級以上の魔物が森から出てくるかもしれない。

魔物の中でも食物連鎖のようなものがあり、ある程度の下級の魔物は中級の魔物の食料になる。中には草食の割に強かったり、魔力

だけで生きることができる魔物もいるので微妙な食物連鎖だが。
ちなみに上級の魔物はほとんどが知性を持ち合わせているため、食料として無駄に他の魔物を襲うことはない。中には姿を変えて人間の生活の中に溶け込んでいる魔物もいるというのだから驚きだ。
義人はそのまま椅子に背を預け、傍で書類の整理をしていたサクラへと目を向けた。

「なあサクラ。この時期って、いつもこんな感じで魔物による被害が多くなるのか？」

そう話しかけると、サクラは書類整理をしていた手を慌てて止める。

「そ、そうです。もうちょっとしたら魔物の繁殖期になるので、食べ物を求めて森の中から出てくることが多いんです」
「森の中の食料だけじゃ足りないのか？」
「それもあるんですけど、えっと、下級の魔物を餌にしようとする中級の魔物がいるので、下級の魔物が森から逃げて出てくることもあるみたいです」
「……おお、なんてはた迷惑な」

森を焼き払うのはやっぱり駄目だったかと義人は内心で呟く。やはり住む場所が狭くなれば、逃げる魔物も多くなるだろう。
そもそも、魔物とて生きているのだ。ゲームのように一方的に滅ぼすわけにもいかない。

「そうですよね……あ、お茶のお代わりはいかがですか？」
「ああ、もらうよ」

急須（きゅうす）でお茶を注いでもらい、義人は早速口をつける。義人が飲み

やすいよう適度に温くしてあり、サクラのその心配りに感謝した。

「ふぅ……お茶を飲むと落ち着くなぁ。でも、たまには炭酸を飲みたくなるぜ」

夏の日差しも強くなってきており、それに比例して気温も上がってきている。元の世界ほど暑くはないが、それでも最高気温は三十度近くあるだろう。

こんな時は無性に炭酸飲料が飲みたくなるな、と義人は内心で苦笑した。

「炭酸ってなんですか？」

可愛らしく小首を傾げるサクラ。どうでも良いことだが、来ているメイド服は夏仕様で生地が薄めだ。もっとも、それでも長袖であり、暑くないのかと義人は時折疑問に思ったりする。

「炭酸っていうのは、俺の世界での飲み物でね。二酸化炭素が水に溶けている炭酸水を使った飲み物なんだけど……二酸化炭素はわかるよな？」

この世界ではその手のことがどれくらい解明されているかわからなかった義人は、一応サクラに尋ねた。するとサクラは少しだけ考え込み、思い出したように頷く。

「は、はい。そのくらいなら」

「そっか。それで、炭酸水を使った飲み物なんだけど、飲み心地がなんとも言えない飲み物なんだ」

「そうなんですか。どんな飲み心地なんです？」

「そうだな……シュワシュワ？」

「しゅわしゅわ？」

抽象的な表現だと義人は自分でも思ったが、炭酸ならシュワシュワだろうと一人納得する。対するサクラは先ほどよりも首を傾げていた。

「しゅわしゅわ……」

擬音のような言葉を呟きながら考え込むサクラの様子に少しだけ癒されつつ、義人は執務机の引き出しを開ける。そして、カーリア国軍の部隊がどれだけ魔物退治に出撃したかを記録した紙を取り出した。

「んー、なるほど。たしかに以前と比べると出撃の回数も増えてるな」

以前の出撃数と最近の出撃数を比較して頷く。次に、どの部隊がどれだけ出撃したかを確認する。

「ふんふん。第一魔法剣士隊と騎馬隊が多いな。やっぱり機動力かねぇ？　その次が魔法隊と第二魔法剣士隊。その次が第一歩兵隊と弓兵隊のセット。第二歩兵隊は少し……」

そこまで読んで、義人は首を傾げた。

「第三歩兵隊は？　あれ？　載ってないぞ？」

もう一度資料の紙を見るが、第三歩兵隊は載っていない。他にも紙があるのかと引き出しを漁るが、見つかることはなかった。義人が最初の資料に視線を戻し、端から端まで読み直しているとサクラがおずおずと口を開く。

「第三歩兵隊は、その、練度が低いので……」

非常に言いづらそうな口調だったが、その言葉の意味が十分に伝わった義人の頬が僅かに引きつった。

「魔物退治に派遣したことがないと？」

そんな馬鹿なと義人は言いたくなったが、思い返してみれば確かに第三歩兵隊を魔物退治に向かわせた記憶がない。

義人は再度引き出しを開けると、今度は志信に書いてもらった各部隊に対する報告書を取り出した。無駄に達筆で書かれた報告書を取り出すと、第三歩兵隊のところを読み進めていく。

「『全体的に運動能力に難あり。武器を振るうにはまだ筋力が足りていない。まずは基本的な筋力トレーニングから教えているが……新兵の寄せ集めの部隊を作るよりも、各地の村で農作業に従事させたほうが良いかと思う』。うん、これは酷い」

報告書を読み上げ、義人は思わず頭を抱えた。

カーリア国軍の内訳は、志願してきて兵士になった者と元々が兵士の家系だった者に分かれる。

各地の町や村から志願してくる者、親の跡を継いで兵士になる者。大抵はそのどちらかなのだが、前者の場合は完全に素人であることが多く、後者の場合は親から手ほどきを受けていることが多い。そのため、戦力という点では両者間に大きな開きがある。

もっとも、他国の軍と比較すれば両者は団栗の背比べでしかないのが悲しい現実だったりするが。

この第三歩兵隊は村から志願してきた者が多く、半数が少年少女と呼んで差し支えない年齢のため練度が著しく低い。その上、志願

と言っても食い扶持に困った親を助けるために兵士になった者も少なくなかった。そのため中々成長が見られず、魔物退治に派遣するには不安がある。

「でも、兵士は必要だしな。しかし、訓練させるだけではかけた時間と金が勿体無いか。どうしたものかね……」

第三歩兵隊を解散させるのも手だが、それでは今までかけた時間と金が無駄になる。税金横領の芽を潰したとはいえ、税率を六割に下げたため国の財政に余裕はないのだ。

「となると、やっぱり屯田兵にするしかないか。サクラ、この世界にも屯田兵っているよな？」

なにやら考え始めた義人の邪魔をしないよう、傍で控えていたサクラへと話を振る。すると、サクラは目を瞬(しばた)かせた。

「屯田兵ってなんですか？」

「いないのかよ！」

予想が外れて思わずツッコミを入れる義人。

「す、すみません！」

ツッコミを入れられたサクラは、反射的に慌てて頭を下げた。

「いやいやいや、怒ってないから！　ただのツッコミだから！」

頭を下げたサクラを宥(なだ)め、すぐに頭を上げてもらう。そして一息ついて、屯田兵について説明をしていく。

「屯田兵っていうのは、普段は農業に従事している兵のことだよ。未開発の土地を開墾したり、有事の際は兵士として戦ったり、それ以外は農業をしながら過ごすんだ。農業は体力を使うし、鍬とかを振るえば筋力もつくしな」

この国の場合、有事とは魔物と戦うことだ。他国と戦うつもりはないので、敵と呼べるのは魔物か山賊や盗賊ぐらいしかいない。

屯田兵なら農業をしながら魔物を退治して経験を積むことができ、なおかつ魔物による被害を減らすことができる。

「うん、いいな。自分の生まれた村で屯田兵をさせれば土地勘もあるから魔物相手にも有利に戦えそうだし、自分の生まれた村を守るってことでやる気も出そうだ」

そこまで呟いて、言葉を切った。それを実行するにはいくつか問題があり、それに対する案も考えなくてはならない。

それは、第三歩兵隊を屯田兵にしても魔物相手に勝てなければ屯田兵の意味がないことだ。戦えなければ農民と大差がない。

実戦経験がほとんどなく、下級の魔物相手にも苦戦する練度では不安がある。

「他の部隊も屯田兵に……いやいや、それじゃあ治安維持が大変だし、敵は魔物だけじゃないしな。ここは、他の部隊から屯田兵に戦いを教えられる人材を少しずつ派遣させるか」

そうすれば屯田兵にした兵士だけでなく、現地の農民を鍛えることもできるだろう。そうすれば、有事の際の戦力を増やすことができる。

しかし、そうなった場合今度は派遣する人材が問題になってくる。

屯田兵や農民を鍛えることができる実力を持ち、なおかつ指揮も執れなくてはならない。他人に何かを教えるには自らもそれに精通していなければならないし、ある程度教養も必要だ。

そこまで考えた義人は、ため息と共に軽く頭を抱えた。

「人材不足が痛いな、こりゃ」

各部隊の隊長を屯田兵にするのはもちろん不可である。

部隊全体の指揮を執る人間を指導や指揮する立場とはいえ、屯田兵として村に派遣しては本人も不満に思うだろう。

そうなると隊長や副隊長よりも下の人間になるが、カーリア国軍には中隊長や小隊長、班長などといった役職はない。部下の指揮は全て隊長か副隊長が執ることになっている。

もしも戦争で両方とも討たれてしまえば、その軍は一気に瓦解してしまう。

いたるところに前王の負の遺産があるが、他国との戦争がないがために簡略化されすぎた軍もその影響を受けていた。

「あー、まずは軍の編成を見直しか。次に派遣する人材選び。その辺は志信やミーファ、カグラやグエン隊長に頼むかな」

他人任せだが、こればかりは仕方ない。性格や人となりなら義人でもある程度わかるが、戦う術など門外漢もいいところである。

「ま、適材適所かね。よし、それじゃあサクラ。悪いけどカグラを呼んできてもらえるかな？」

「あ、わかりました。すぐにお呼びします」

サクラは小さく頭を下げ、少々慌てた様子で執務室を後にする。

小走りに走り去るサクラを見送り、義人は軽く息を吐いた。

「別にそこまで急がなくていいんだけどなー」

そう言った瞬間、微妙に閉まっていない執務室の扉の隙間を通って人が転ぶような音と『きゃっ！』という悲鳴が耳に届く。どうやら、サクラが転んだらしい。その光景が簡単に想像できて義人は小さく笑みを零す。

「あれで俺の何十倍も強いっていうんだから、この世界は怖いよな」

もっとも、小動物のような仕草や転んだりするのも、全てが演技という可能性もあると義人は考えていたが。

「だったら怖いな、っと。サクラが戻ってくるまで他の書類を片付けとくか」

そう呟いて、義人は自分の裁量だけで判断できる書類に手を伸ばした。

サクラから義人が呼んでいることを伝えられたカグラは、丁度話し合いをしていたアルフレッドに頭を下げた。

「それでは、わたしはヨシト様の元へ戻りますね」

「うむ。残った書類は儂が片付けておこう」

「いえ、それはわたしが……」

「気にするでない。お主はヨシト王を最も補佐する立場の人間じゃ。

この程度の雑事など、この年寄りに任せておけば良いんじゃよ」

カグラの言葉にアルフレッドが好々爺染みた笑みを浮かべる。

カーリア国では宰相と召喚の巫女は立場で言えば同格だが、カグラはアルフレッドに対して常に自らを格下の者として接している。これは年齢的なものもあるのだが、能力的にもアルフレッドのほうが遥かに上だからだ。

アルフレッドは人間でなく、エルフである。

人間とは違って寿命が長く、非常に長命。その人間の何倍もある長き生で身につけた知識の量はカグラの数倍あり、しかも他分野に渡って博識である。その上エルフという種族は魔法の才に秀でてもいた。

もしもアルフレッドがカーリア国にいなければ、義人を召喚する前に国が滅んでいたとカグラは思っている。

国民にこの国で最も重要な人物は誰かと尋ねれば、皆が王の存在を挙げるだろう。しかし、カグラの立場から言えばアルフレッドも同じくらい重要な人物だ。

エルフであるアルフレッドを人物と呼ぶかは微妙なところだが。

カグラは傍で待機していたサクラを伴い、義人の執務室へと向かう。

時折すれ違う文官や武官、兵士からかけられる挨拶に返事を返しつつ、薄い絨毯張りの廊下を歩いていく。

「それで、ヨシト様は今度は一体どんなことを言われたんですか？」

歩みは止めず、斜め後ろに追従するサクラへと尋ねるカグラ。それを聞いたサクラはすぐに返答する。

「それが、『屯田兵』というものがどうとか……」

そう言いながら、義人との会話をカグラへと話す。それを道すがら聞いたカグラは、ふむと一つ頷いた。

「兵士に開墾や畑仕事をさせ、有事の際は敵と戦わせる、ですか。町村の自衛団を強化したような感じですかね？」

魔物が暴れ回るこの世界において、自衛団を形成する町村は珍しくない。正義感がある腕自慢の若者などが集まり、外敵に対する備えを整えるのはある意味当然と言えるだろう。裕福な権力者などは独自に傭兵を雇っているところもあるくらいだ。

しかし、傭兵はともかく自衛団の民兵はそこまで強くない。農作業などで体力はあるが、魔物を相手にするには能力不足な感がある。カグラも第三歩兵隊の練度は知っているが、自衛団の民兵と比べればまだ第三歩兵隊のほうが上だ。兵の半数が若く、経験が少ないとはいえ剣の振り方も知っている。

税率が六割に下がり、金が消費されて商業が発達するまでは国の税収も減ってしまう。それでも、税金を横領している者がいなくなったために国政はなんとか無事に回っているが、余剰戦力を抱える余裕はない。

その余剰戦力は大した戦力にならないが、下級魔物ぐらいなら追い払えるだろう。一対一なら厳しいが、集団で戦えば追い払えるはずだ。

……追い払えますよね？

少し遠い目をしつつ、カグラは内心だけで呟いた。

外交を行うのは大半がアルフレッドだったが、カグラも他国へと外交で赴いたことがある。その際にその国の軍の訓練風景をこっそり見たことがあるが、自国の軍と比較すると暗澹（あんたん）たる気持ちを覚えたものだ。

「ヨシト様の案に期待するとしましょうか……」

サクラに聞こえない程度のため息を一つ吐き、カグラは執務室へと急いだ。

第四十四話：会議

その日の夜、義人は武官を会議室に集めていた。
屯田兵をするにしても、実際に武官の意見を聞いたほうが確実だと思ったからである。
八部隊の副隊長以上の武官、合計十六人。それと、志信とカグラとアルフレッド。サクラと優希は給仕係としてあちこちを行ったり来たりしている。
何故か優希がメイド服を着ていたりするが、あまりにも自然に着こなしていたためにその人物が優希だと気づく者はあまりいなかった。
席についた武官達をぐるりと見回し、義人は口を開く。

「さて、今日はみんなに集まってもらったわけだけど……まずは手元の資料を見てほしい。今回の会議で話し合いたいことについて、簡単に書かれているから」

義人の言葉を聞いた武官達は、手元の資料に目を落とす。その様子を見ながら、義人は横目で優希へと目を向けた。
お茶を配り終えた優希は、笑顔で義人の近くに控えている。その表情は笑顔で、なおかつ何かを言ってほしそうでもあった。

「何故にメイド服？」

とりあえず尋ねる義人。それを聞いた優希は、くるりと一回転してはにかむように笑う。

「可愛いから着てみたかったんだー。どう？　似合ってるかな？」

優希は自らの服装を見下ろし、くるりと一回転して楽しそう尋ねる。その問いに、義人は優希の姿を上から下まで眺めて頷いた。

「いや、中々良いんじゃないか？　よく似合ってるよ」

その言葉に嘘がないとわかったのか、優希が花咲くように微笑む。そんな優希の笑顔に笑い返しつつ、義人は気を引き締めて武官達へと目を向けた。

「さて、みんな軽く目は通したな？　俺はその紙に書かれた通りのことをしたいと思っている。だけど、俺はみんなほど軍のことに詳しくない。だから色々と意見が欲しいんだ」

義人がそう言うと、何人かが不思議そうに首をかしげる。

「ヨシト王、少しよろしいですか？」

「ん？　何だ？」

そのうちの一人が手を挙げ、義人はそちらへと目を向けた。手を挙げた男は不思議そうな表情を崩さず、口を開く。

「ヨシト王は、この紙に書かれたことを実行したいと思っているのですよね？」

「ああ、そうだな。できれば実行したいけど……何か拙（まず）いところがあったか？」

「いえ。ヨシト王が実行したいと仰られるのなら、我々は何事であろうとも喜んで従います」

そう言って頭を下げる。そんな男の様子を見た義人は、今度は逆に不思議そうな表情を浮かべた。

「従ってもらえるのは嬉しいけど、嫌なことは拒否してくれていいんだぞ？　というか、これは実行するかどうかを決める会議だから」

微妙に違和感を覚えながらそう言うと、何かに思い当たったらしいカグラが義人の傍まで歩み寄る。そして義人の耳元に顔を寄せ、小さな声で話しかけた。

「ヨシト様。彼はおそらく、王の提案はどんなものであろうとも従わなくてはならないと思っているんだと思います」

「……なんでまたそんな面倒なことを？」

「王の言うことは絶対で、逆らうわけにはいかないと教育されてきたのでしょう。そもそも、それがこの国の生活を支えてきた信仰のようなものですから」

コソコソと話し合い、義人は眉を寄せる。

「なんて嫌な教育なんだ」

「そうは言いましても、この国の中ではそう教わるのが普通なんですよ。前王や前々王が会議と言えば、それは会議というよりも決定事項を伝えるだけのようなものだったらしいです。今でもその風潮が残っているので、王が発案したことは全て肯定すると思います」

「それ、会議の意味ないじゃん……」

義人はため息を一つ吐くと、軽く背筋を伸ばす。そして会議室の全員に聞こえるよう、意識して声を大きく出す。

「いいかみんな！　これは会議だ！　意見はどんどん出してほしいし、俺が間違ったことを言ったら正してほしい！　今までは王の発案にケチをつけることもできなかったみたいだけど、俺はむしろ歓

迎する！　王に着任したときにも言ったが、俺は未熟だ。だから、色々と案を出してくれ！」

『はっ！』

揃って返事が聞こえ、義人は頷き返す。ついでに心の中で前王に対して抗議の声を一つかけ、気を取り直して全員の顔を見渡した。

「じゃあ、何か意見はないか？」

そう尋ねると、武官達は顔を見合わせて話し合う。隣同士で何事かを囁き合い、少しして手が一つ挙がった。

「ヨシト王、お聞きしたいことがあるのですがよろしいですか？」

手を挙げた人物、騎馬隊隊長のグエンが起立して尋ねる。義人は当然だと言わんばかりに頷いた。

「もちろん。それで、何かあったか？」

「はい。この屯田兵という案には賛成なのですが、それに伴った軍の編成の見直しとは何ですか？」

そう言われて義人は資料に目を落とす。屯田兵と合わせて記載したが、少しばかり説明が足りなかったようだ。

「今は隊長と副隊長が全ての指揮を出すだろ？　一部隊辺り百五十人だけど、全ての人間に正確な指揮をするのは難しいと思うんだ。だから他にも役職を設け、指揮の正確さを増したいと思う。例えば十人ずつ班を分け、その中で班長を決める。その班長が隊長か副隊長から指示を受けて班の全員に伝える。そうすれば聞き逃す奴もい

ないだろうし、何かあれば班長が指揮を執ればいい」
「なるほど……我が国は他国から侵略されることはありませんが、ハクロア国のような好戦的な存在もいますしな。備えあれば憂いなしということですか」
「そんなところ。あと、班単位で様々な仕事を分担できるしな。魔物退治にしても、今までみたいに一部隊丸々出撃しなくてもいい。必要な分だけ出撃させれば、その分経費も浮くだろ？」

最後の一言に、武官の間から笑いが漏れる。班単位で出撃させれば、その分義人が許可するための手間も増えるだろう。しかし、義人はその程度の手間ならば喜んで引き受けるつもりだった。

「それで、だ。第三歩兵隊を解体して、町や村で屯田兵をしてもらおうと思う。だけどそうなると、その屯田兵を指揮や指導する人物が必要になる」
「その指揮ができる者を選出するのが我らの役目ということですな？」
「ああ。できれば、現地の住人を護身ができる程度に鍛えられれば尚更良い。あ、もちろん鍛えてほしいって志願してきた人だけな。それと、これは当然だけど隊長と副隊長は除くぞ？」

義人がそう言うと、先ほどと同じように武官達が顔を合わせて話し合う。各部隊の隊長と副隊長が隣同士になり、目ぼしい者がいたかを話しているようだ。
義人はそれを見つつ、喋って乾いた喉をお茶で潤す。
第三歩兵隊を解体することで何か言われるかと思ったが、どうやら杞憂だったようだ。第三歩兵隊をこのまま置いておくよりも、村の防衛と農耕に従事させたほうが良いと他の者も思ったらしい。
違和感なく武官達の会議に混ざっている志信を見ながらそんなことを考えていると、その志信が義人の方へと目を向けた。そして席

を立ち、傍まで歩み寄ってくる。

「義人」

「ん？　どうした志信」

「俺からも提案がある」

「提案？　さっきの屯田兵や軍の編成で何か見落としてたか？」

義人の言葉に首を横に振り、志信は口を開く。

「この際、素質のある者を選んで義人を警護するための部隊を作ってはどうだろうか？　正直なところ、今の当番制の守衛兵士では義人を守れるとは思えん」

「俺を守るための部隊？」

志信の提案を復唱しつつ、義人は眉を寄せた。

現在、城の中にいる守衛の兵士は各部隊からの当番制で形成されている。これは見回りの兵も同じで、その日によって警備の兵士が変わる。

義人の周りはほとんど変動しないが、城の中は違うのだ。歩兵隊の兵士が警備をする日もあれば、魔法剣士隊の兵士が警備をする日もある。

そうなると、日によっては警備の兵が弱い。つまるところ、侵入しやすい状態になりかねない。

「もしも腕の立つ者が侵入したとき、今の人員では義人のところまで侵入されるのを防ぐのは難しいだろう。だから、せめて義人の周りには腕の立つ者を置いておきたい」

「腕の立つ者をねぇ……そうは言っても、部隊を作れるほど腕の立つ奴を集められるか？」

「部隊といっても、百人もいるわけじゃない。それに、今は腕が立たなくても鍛えれば十分に伸びる者が何人もいる。そういった者を

集めて徹底的に鍛え、義人の近衛隊を作りたいと思う」

義人は志信から言われたことを頭の中で考えていく。

たしかに、そういった部隊を作っておけば有事の際役に立つだろう。忍者のように情報網を作るのにも役立つかもしれない。しかし、これは屯田兵と同じで長期的な政策だ。そして、まだ他にも決めなくてはいけないことがある。

「近衛隊を作るって言っても、誰が指揮を執るんだ？　それに、その兵を探して鍛えるのも大変……って、まさか」

そこまで言って、義人は思わず志信を凝視した。視線を受けた志信は、迷いなく頷く。

「俺が引き受ける。この世界に来て二ヶ月、様々な部隊で共に訓練をしたが、若輩の俺でも教えられることがあるとわかった。さすがに大勢の人間に教えることは無理だが、十人ぐらいならなんとかなるだろう」

真剣な眼差しで告げる志信に、義人も真剣な表情を作る。

「……俺としては、志信にそこまでしてもらうわけにはいかない。今俺達がこの場にいるのだって、原因は俺にあるんだ。他の部隊と一緒に訓練をするぐらいなら良いけど、志信にそんな危険なことをさせるわけにはいかないよ」

本当の原因は召喚したカグラや召喚国主制を作った者なのだが、それを言うほど義人は野暮ではない。

志信が兵の指導をすることには納得していたが、新しい部隊を作ってその隊長をさせるかといえば答えは否(いな)だ。大きな責任のある立

場になるのは自分だけで十分だと、義人は志信を止める。
巻き込んだ者として、親友として。
だが、志信はそんな義人の内心を察したのか、再度首を横に振った。

「義人の言いたいことはわかる。だが、俺はこの世界に来て他人に武術を教えることが楽しいと思えた。免許皆伝はもらったが、他人に教えることなどなかったからな。こんな俺でも教えることができ、それで少しでも成長するのを見ると嬉しいと思えた。だから……」

そこで一度言葉を切ると、志信は真っ直ぐに義人を見据える。

「義人に感謝している。この世界に来ることができて、俺は良かったと思っている。だから、義人がそこまで気にすることはない。こんな俺でも、したいことが見つけられた」

そこまで言われ、志信は元の世界での生活に思いを馳せた。
義人と志信と出会ったのは中学生の時。色々あって友人となったが、志信は人生の中で楽しいと思ったことはあまりない。義人や祖父と共にいる時はそうでもないが、一人でいる時などはそれが顕著だった。
しかし、この世界に来てからは違う。義人と共に召喚されたおかげで、志信は元の世界とは違った充実した日々を送っている。
義人は志信の表情を見て、諦めたようにため息を吐いた。

「志信さぁ、絶対生まれてくる時代を間違えたよな」
「俺も時折そう思う」

そう言って、互いに小さく笑い合う。そして、義人は声色だけは真剣に告げた。

「無茶はするなよ？」
「善処しよう」

志信の言葉に苦笑を一つ零し、義人は筆を取って資料に修正を加える。
また決めることが増えたなと、どこか楽しそうな表情で。

義人と志信の会話が終わった頃、武官達も丁度区切り良く会話を終えた。

「終わったみたいだな。それでどうだ？　大丈夫だったか？」

そう尋ねると、武官達を代表してかミーファが立ち上がる。

「第三歩兵隊を屯田兵にすることに問題はありません。しかし、それを指揮できる者が限られてきます。明日から適性がある者を選出する時間をいただきたいのですが……」
「ああ、もちろん構わない。それと、もう一つ案を追加したい」

そう言いつつ、義人は志信に目を向けた。

「志信の提案なんだけど、近衛隊を作ろうと思う」
「近衛隊、ですか？」
「そうだ。志信が王の警護をする部隊を作りたいらしい。俺としては、他にも様々な仕事をしてもらおうと思ってる。それにあたって、各部隊から何名か引き抜くことになるかもしれない」

義人がそう言うが、不満そうな顔をする者はいない。そのことに義人は内心で苦笑しつつ、話を続けていく。

「引き抜く場合は、補充する人員もなんとかしないとな。俺の案としては、第三歩兵隊の中からか、もしくは屯田兵と一緒に農民を鍛え、その中から見込みのある者を空いた穴に当てようかと思う。もっとも、引き抜く人数はあまり多くないからそのままでも大丈夫かもしれないけどな」

己の言葉を黙って聞く武官達を見回し、義人は言葉を切る。

反対意見が出ないのは、召喚された王の命令には絶対従うという長年の癖があるからだろう。先ほど言った言葉を皆が実行してくれるようになるまで、もう少し時間がかかるようだ。

「各町村に派遣する屯田兵のまとめ役。班をまとめる班長。それと、志信は引き抜こうと思った奴。それらが決まったら、俺のところまで決定した人員の書類を持ってきてくれ。問題がないことを確認したら、そこから一覧や新しい編成をみんなで考えるから」

『はっ！』

「よし、それじゃあ今日のところはひとまず解散！　明日から早速選別を始めてくれ！　なお、ミーファ隊長とグエン隊長、シアラ隊長はちょっと話があるから来てくれ！」

そう締めくくり、会議を終了させる。武官達は義人に一礼すると、席を立って退席していく。

そんな中で、義人に呼ばれた三人は流れに逆らうように義人の下へと歩み寄る。そしてすぐさま膝をついた。

「お呼びでしょうか？」

三人を代表してミーファが口を開く。そんなミーファを挟んで右にグエン、左にシアラが膝をついている。

「三人にはちょっと頼みごとがあってね」

「頼みごと、ですか？」

今度はグエンが口を開く。その表情には若干の疑問が浮かんでおり、そんなグエンの表情を見た義人は小さく首を縦に振った。

「ああ。三人には他の隊長や副隊長と話をして、今回の件で不満な点を聞いてきてほしいんだ。俺の名前は出さず、みんなの本当の意見が知りたい」

義人がそう言うと、ミーファはすぐに首肯する。しかし、グエンとシアラは少しばかり戸惑っていた。

「それは構わないのですが……何故私達にその役目を？」

グエンが尋ねると、義人は尋ねられたことに対して嬉しそうに笑う。

「そうやって、俺の言ったことに疑問を向けてくれるからだよ。他の面子だと、俺の言ったことには何の反発もせずに従うしな。その点で言えば、ミーファやグエン隊長は自分の意見を出してくれるだろ？　だから信頼できる」

「……わたし、は？」

自分の名前が挙がらなかったことが不満だったのか、それとも呼ばれた理由がわからないのか、シアラは小さな口を開いて僅かに抗議染みた声を上げる。

「志信から話を聞いた限り、シアラも信頼できそうだなってね。隊長陣とはなるべく話すようにしてるけど、まだ王に対して変な遠慮がある。そこは前王を恨むことにするけど」

「……そう、ですか」

とってつけたような敬語に、納得したのかわからない抑揚のない声。

ミーファがいるほうから『シノブ、から？』なんて呟きが聞こえたが、義人は聞こえない振りをした。

「それじゃあ、そういうことで。三人は仕事が増えて申し訳ないけど、よろしく頼むよ」

『はっ！』

三人が返事をする。どう見てもシアラは口パクだけで返事をしていなかったが、義人は見ない振りをした。

武官が全員いなくなり、義人は湯飲みを片付けている優希とサクラを見ながら思案にふける。

「そういや、村とかに派遣する奴には手当てもつけなきゃいけないな。班長の給料も考えなきゃいけないし、その辺の金回りはロッサと決めるか……」

いきなり財務大臣に抜擢したロッサの顔を思い出し、義人は椅子から立ち上がる。そして軽く背を伸ばして一息吐く。

毎日処理する書類に加え、屯田兵の計画や軍の編成の見直し。そ

れに伴う様々な決め事など、することは多い。こちらの世界に来た当時に比べれば少ないが、多少は夜更かししないと片付かないだろう。

「明日か明後日は久しぶりに徹夜かね、こりゃ」
「駄目ですよ？」

小さく呟いたつもりだったが、どうやら聞こえたらしいカグラに釘を刺される。

「駄目ですよ？」
「……いや、わざわざ二回言わなくても大丈夫だから。ちゃんと聞こえてるから」
「しかし今、徹夜がどうとか」
「空耳じゃないですかね？」

最近、以前にもまして遠慮がなくなったカグラの説教は長くなることが多い。義人としては遠慮がなくなるのは嬉しいことではあるが、長いお説教は勘弁してほしかった。

「……まあいいです」

明らかに不満そうだが、それを指摘することはない。
カグラに怒られない程度に夜更かししようと内心で決意しつつ、義人は会議室を後にした。

第四十五話：カグラ先生による魔法レッスンその3

会議から二日後。
いつものように朝礼を終えて執務室へと入った義人は、目の前の光景にとりあえず足を止めた。そして二回ほど目をこすり、もう一度目の前の光景……具体的には机の上を凝視する。
机の上には、久しぶりに書類が山を築いていた。

「……おおう」

義人は思わず、自分でも意味のわからない唸り声を漏らす。
数週間ぶりに見た書類の山。いや、もはや壁の領域に達しているその量は、ついこの前まで毎日見ていたものだ。

「崩れたら直すのが大変そうだな」

少しだけ崩してみたい衝動に駆られたが、もちろんそんなことはしない。
試しにいくつか書類を手に取って見てみると、どの町村にどれだけの数の屯田兵を送るかという提案が書かれている。
他にも班長の適性がありそうな者や、屯田兵の指揮が出来そうな者。それと、志信からどの部隊の誰を引き抜こうとしているかなど書かれている。
これならば、義人が裁定するよりもみんなで決めたほうが良いだろう。少なくともカグラの意見は聞くべきである。
そう判断した義人はひとまずカグラの到着を待とうと思い、すぐに眉を寄せた。

「カグラはアルフレッドと少し話をしていくって言ってたっけ……

ううむ、やはり俺一人でもわかるところだけ処理するか？　だけど、今日は会議で決まったことの書類が多いしなぁ……」

『……そんなに巫女を待つのが退屈なら、魔法の練習でもしたらどうじゃ？』

どうしたものかと手持ち無沙汰に周りを見ていると、義人の傍で鞘に納まったノーレが思念通話を繋げて話しかけてくる。

「魔法ねぇ。うーん……それもいいか」

『魔力の感覚ぐらいは掴めるようになったんじゃろ？』

「かなりあやふやだけどな。しかし魔法の練習と言われても、どうすれば良いのか皆目見当もつかないぞ？　ノーレを使えばいいのか？」

『戯け。妾を使ってはお主の鍛錬にならぬではないか。自身の力だけで成し遂げてみせよ』

「いやいや。そのためにはどうしたら良いかが知りたいんだけど」

そう言いつつ、義人は自分の右手を見つめた。

魔力とやらの感覚は多少掴んだ。しかし、その魔力をどう使えば魔法を使えるかなど知るはずもない。

「漫画やゲームみたいに、魔法の名前を唱えたら発動する……なんてことはないよな」

ぼんやりと呟き、試しにゲームで知っている魔法の名前をいくつか唱えてみる。万が一発動したら洒落にならないので、一応右手を窓の外に向けながらではあるが。

だが、当然のように魔法が発動することはない。そのことに義人は小さく苦笑すると、相棒たる王剣に話を振った。

「なあノーレ。魔法を使うのってイメージ……想像することが大事なんだっけ？」
『そうじゃのう。あとはそのイメージとやらに合わせて魔力を外に放つんじゃが……』
「魔力を外に、ねぇ……」
『まあ、お主がどんな魔法を扱えるかまだわからんしな。今はとりあえず、自身にかける『強化』の練習から始めるべきじゃ』
「そんなもんか。いや、それにしても暑いな」

ノーレとの会話を一度切り、義人は窓の外へと目を向ける。
窓の外では元気に蝉が合唱し、日差しはうだるように熱い。
元の世界に比べればほんの少し涼しいのだが、この世界にクーラーなどがあるはずもなく、その分暑く感じる。

「せめて扇風機でもあればな……」

いっそサクラに魔法で氷の塊でも作ってもらおうかと思案するが、義人の言葉に興味を惹かれたノーレが疑問の声を上げた。

『のう、ヨシト。その『扇風機』というのは一体何じゃ？』

かけられた声は、微妙に好奇心で弾んでいる。さすがは『知識と風の王剣』だなと義人は妙に感心しつつ、頭で扇風機を想像した。

「そうだなー。少し曲がった羽が回転して、それで風を起こすんだ。こう、ブワーっと」

そう言って、風を表現するように義人が手を振る。

――その瞬間、机の上に鎮座していた書類の山が一つ崩れた。

「……は？」

『風』に煽られたように書類の山が傾き、崩れて書類が宙に舞う。山の一角が崩れると、そこからさらに連鎖するように他の書類の山も崩れ、机の上に積まれていた書類が音を立てながら地面へと散らばった。

「あ……え？」

それを呆然と見ていた義人は、とりあえず左右を確認する。ついでに天井と床を交互に見つめ、続いて閉まっている窓へと目を向けた。そして最後にノーレへと目を向けて、咎めるように口を開く。

「魔法を使って書類の山を崩しちゃ駄目じゃないか、ノーレ」

完全に濡れ衣である。

『こ、の戯けは……崩したのは自分じゃろうが！　妾の所為にするでない！』

「ハッハッハ。手で扇いだ程度で崩れる量じゃないって。ほら、俺は怒らないから白状してみ？　カグラには怒られると思うけど」

笑顔で怒るカグラを思い浮かべ、義人は頬が引きつった。それでもなんとか表情を元に戻すと、義人は僅かに声を小さくする。

「ま、まあ冗談は置いといて。今のって、本当に俺？　手で扇いだだけだぞ？　元からバランス……書類の置き方が悪かったんじゃないか？」

『いや、今のはお主が自分でやったことじゃ。そよ風程度ではあっ

たが、魔力を使って風を起こした。現実逃避をするでない。そんなに巫女に怒られるのが恐ろしいか？』

「もちろん恐ろしいっすよ」

ノーレの言葉に即答する義人。それを聞いたノーレは、呆れたように声を漏らす。

『尻に敷かれておるのぅ……』

「ノーレは怒られたことがないからそう言えるんだよ！　この前エンブズの一件で俺が倒れた時のことを忘れたのか！？」

思わず義人は力説する。

自分のことを心配して説教してくれたのは有り難く、また嬉しくもあった。しかしそれが原因で泣かれ、さらには硬い木で作られた机にヒビが入るまで殴打するのを目の前で見せ付けられたのだ。

「あれも『強化』を使っていたんだろうが、正直怖かった。机がミシミシと悲鳴を上げてるなーとは思ったけど、まさかヒビが入っていたとかね」

『自業自得じゃろう』

「……いや、そう言われたら俺の負けだけどさ。まあ、怖いというよりは苦手。もしくは申し訳ないってところ。とりあえず、説教は勘弁してほしいなーと」

最近は本当に遠慮がなくなってきたため、説教にも遠慮がなくなってきている。あまり説教を受けるようなことはないが、その分説教する内容をストックしているのではないかと義人は考えていたりした。

もっとも、説教ではなく小言程度ならよく聞かされるのだが。

『やはり尻に敷かれて……む？』
「どうした？」
『この魔力、巫女が来よったな』
「なっ！？　ちょ、待て！　まだ少しも片付けていないんだぞ！？」
義人は慌てて散らばった書類を集めようとするが、それよりも早く、カグラが軽くノックして入ってくる。
「それではヨシト様、今日も頑張り……」
言葉が途切れた。そして、地面にしゃがみこんで書類を集めていた義人と目が合う。
義人は正座すると、背筋を伸ばして両手をついて頭を下げ、
「が、頑張ります」
とりあえず、土下座した。
「もう！　一体何をしてるんですか！？」
「いや、本当にすんません」
義人は土下座を止め、ひたすら頭を下げる。そしてお茶を持って来たサクラにも手伝ってもらい、書類を集めていく。
「カグラが来るまで暇だったから魔法の練習をしてみたら、本当に成功して書類の山を崩しちゃったんだ」
「なんで室内で魔法の練習をしようとするんですか！　魔法が発動したらどうす……」

義人の言葉に反射的に返答していたカグラは、そこで動きを止める。そしてもう一度義人の言葉を思い返し、小さく眉を寄せた。

「……魔法で、風でも起こしたんですか？」

「あ、ああ。扇風機っていう俺の世界にある機械を想像しながら手を振ったら、少しだけど風が起きて書類の山が崩れたたんだ」

そう言いつつ、義人はもう一度扇風機をイメージしながら右手を振ってみる。すると、手で扇いだにしては強い風がカグラの前髪を揺らした。

「おお！　偶然じゃなくて本当に俺が風を起こしてたのか！？」

少し離れたところにいたカグラの前髪が揺れたのを見て、義人が嬉しそうに笑う。そんな義人を見たカグラは考え込むように目を閉じ、数秒経ってため息を吐いた。

「そういうことなら仕方ないですね……ですが、これからは書類の山に向かって魔法を放ったりしないでくださいよ？」

「もちろん。というか、魔法が発動するとは思ってなかったんだよ」

「たしかに。しかも、ノーレ様を使ったわけでもないのに風の魔法ですか……」

「そよ風程度だけどな」

そう言いつつ、義人は自分に向けて風を送ろうとする。だが、今度は扇風機をイメージしていなかったため風が起こることはなかった。

そのことに苦笑しつつ、頬を掻く。すると、カグラの観察するような視線に気づいて義人は首を傾げた。

「そんなに凝視されると困るんだけど……魔法を使って何か問題があったか？」

もちろん、書類の山が崩れたこととは別でだ。

「いえ、問題というほどのことではないのですが……まさか『強化』を通り越していきなり風の魔法を使うとは思いませんでした。余程風と相性が良いのでしょう」

「良いのか？　俺は魔法に関してもまったくの素人だから、相性が良いか悪いかなんてわからないぞ？」

義人の言葉にカグラは首を横に振る。そして足元の書類を一枚つまみ上げると、それを風に乗せて執務机の上へと飛ばして義人へと視線を向けた。

「今、わたしは風の魔法を使って書類を机の上へと飛ばしました。しかし、書類は見えても風は目に見えなかったはずです。そうですよね？」

「ああ、そりゃそうだ。風は透明だしな」

「そうです。風は目に見えるものではありません。故に形を想像することが難しく、魔法の中では難易度が高い魔法なんです。そして相性……資質と言い換えてもいいですが、風の魔法を使える資質を持つ者は少ないです。これは祖先に風龍や風を操る魔物がいないと」

「ストップ！　いや、待て！」

さり気なく飛び出した見過ごせない発言に、義人は待ったをかける。その突然の静止にカグラは言葉を切り、不思議そうな顔をした。

「何かわかりにくいところがありましたか？」

「いやいや、わかりにくいんじゃなくて！　祖先に風竜や風を魔物がどうとか言っただろ？　それってどういうことなんだ？」
「……説明したことありませんでしたっけ？」
「だからこうして聞いているんだけど？」
それもそうですね、とカグラは呟き、解説するために言葉を紡ぐ。
「そもそも、人間には魔力なんてものは存在していませんでした。魔力を持つのは神や悪魔、魔物などで、本来人間は魔力を持っていません。しかし、今現在魔力を持つ人間は存在しています。何故だと思いますか？」
問いかけに、義人は小さく唸って考え込む。いくつかの回答が頭に浮かぶが、その中でも一番可能性の高そうなものを選んでいく。
「んー……魔力をもらった？　いや、違うか。両者の子供が引き継いだ？」
「はい。魔力を持つ者と持たない者、その両者の子供が魔力を持ち、さらにその子供が魔力を持つ。中には魔力を持たない場合もあったそうですが、それでも多くの人間が魔力を引き継ぎ、次代へと繋いでいく……そしてわたしやサクラのように、魔力を持つ人間が生まれたわけです」
「へぇ……そうなのか。ということは、俺もそうなのかな？」
人間と人間でないものが結ばれる話ならば、元の世界でも話を聞いたことがある。
それは、人間とは違った種類の存在と人間が結婚する異類婚姻譚（いるいこんいんたん）。
有名なところで言えばギリシア神話の『プシケー』や、グリム童話の『かえるの王さま』。日本で言えば『鶴女房』や『蛇女房』。

特に、『鶴女房』は『鶴の恩返し』と言えば大抵の人はご存知だろう。

世界各地に存在するその説話。義人は誰しも一度は聞いたことのある話をいくつか思い出す。そんな義人を見ていたカグラは、少しばかり申し訳なさそうに微笑んだ。

「残念ながら、ヨシト様の世界もこの世界と同じとは限りません。そちらの世界は魔物もいない平和な世界だとか。それに、魔法もないんですよね？」

「アルフレッドみたいにエルフに関する話とかはあるけど、こっちみたいな魔法はないな。黒魔術とか霊感とか、そういったものは今でもあるみたいだけど」

「そうですか……と、話が逸れちゃいましたね。そうやって魔力を持つ者と持たない者が生まれ、魔力を持つ者は魔法という技術を編み出しました。まあ、技術というのはいささかあやふやなものではありますが、長い年月をかけて魔法の歴史を築いてきました。そして、ここからが先ほどの話に戻ります」

そう言って、カグラは右手で三本、左手で四本の指を立てた。

「基本的に、魔法は三種類あります。身体能力などを向上させる補助魔法。怪我を癒す治癒魔法。そして、攻撃魔法です。攻撃魔法はそこからさらに四種類に分かれ、炎と氷、風と雷の四属性があります。これらを扱うには魔力が必要で、どの魔法を扱えるかは本人の資質に寄ります。補助魔法は魔力を扱えれば覚えることができるので割愛しますが、それ以外の魔法には相性があります」

カグラは左手を下ろし、右手の人差し指だけを立てる。そして指先に小さな火を灯すと、続いて小さな氷。そして最後にそよ風を発生させる。

「以前も言いましたが、ミーファちゃんは炎。サクラは氷。そしてわたしはその二つに加えて風と治癒魔法を使うことができます」
「四つ？　いや、補助魔法も入れたら五つか。そんなに使えるものなのか？」
「才能と生後の修練次第、ですね。わたしは本来治癒魔法と相性が良かったのですが、『カグラ』たるもの他の魔法も使えなくてはいけません。そのため、色々と苦労したんですよ？」

冗談めかしてカグラが言うが、その表情は決して笑ってなどいない。薄く悲しみを纏った瞳を見て、義人はどうしたものかと口を開く。

「そっか……すごいんだな、カグラは」

結局、口から出たのはそんな言葉だった。だが、そんな言葉でもカグラは小さく笑う。

「ありがとうございます。これだけの種類の魔法を使えるのは、世界でも数人ぐらいだと思いますよ？」

場の雰囲気を変えるためか、今度こそ笑いながらカグラが告げる。そのどこか誇らしげな顔に、義人は内心ほっとしながら話に乗った。

「数人！？　そりゃすごいな！　全種類の魔法を使える奴はいないのか？」
「さすがにいませんよ……と、言いたいところですが、この国が建国された時の初代の『召喚の巫女』である、ミレイ＝シーカー様は全種類の魔法が使えたそうです。一説ではそれだけに留まらず、重力や時間なども操ることができたとか。召喚魔法の陣なども作られ

たことから考えるとあながち嘘とも思えませんし、それ以来、『召喚の巫女』になる者は全てミレイ様のような魔法使いを目指してきました」

「そうなのか。っと、また話を逸らしちゃったな。魔法の相性がどうとかいう話を聞かせてもらえるか？」

再び話が逸れていたことに気づき、義人が修正する。カグラは頬に手を当てると、楽しそうに笑った。

「ヨシト様と話していると、ついつい必要のないことまで話しちゃいますねー。先ほど生後の修練次第で他の魔法も習得できると言いましたが、いくら訓練しても使えない魔法もあります。それが相性ですね」

「前にも言ってたな」

「はい。例で挙げるなら、ミーファちゃんは氷の魔法を使うことができません。反対に、サクラは炎の魔法を使うことができません。大抵の人は補助魔法を除けば一種類の魔法しか覚えられず、その上炎か氷の魔法のどちらかであることが多いです。治癒魔法は完全に資質の問題なので生後の修練では習得できません。そして、風や雷の魔法を使える者は治癒魔法使いよりも少ないですね。百人魔法使いがいたら、九十人は炎か氷の魔法使い。九人が治癒魔法使いで、残り一人が風か雷の魔法を使えるぐらいです」

「ということは、けっこう珍しい存在なんだな？」

「そうですね。この国で風魔法を使えるのは、わたしと魔法隊のシエラ隊長ぐらいです。シエラ隊長は補助魔法に加え、氷と風の魔法が使えます。惜しむらくは、魔法の技術が高くないことですね。あと数年もすれば魔力量も増え、もっと上の魔法使いになると思いますが。そして、雷の魔法を使える者はいません。本来なら雷よりも風の魔法を使える者のほうが少ないんですけどね」

「そうなのか？　てっきり同じだと思ったんだけど」

風と雷はイメージ的に同じレベルのものだと義人は思ったが、どうやら違うらしい。

「その考えもわからないではないですが、魔法として使うには雷魔法のほうが簡単なんです。そうですね……それでは、試しに雷を頭の中で思い浮かべてください」

「雷？」

カグラの言葉に疑問を示すが、義人はとりあえず雷をイメージしてみる。バチバチと青白く光る電気から、雨の日の落雷。それを想像していると、見計らったようにカグラが話を続ける。

「それでは、次は風を頭の中で思い浮かべてください」

そう言われ、義人は風をイメージしようとして首を捻った。扇風機は風を起こすものだから風ではないし、雷と違って風は色がついているものではない。

「……ああ、なるほど。雷と違って、風は透明だからイメージしにくいな。だから風のほうが難しいのか」

「はい。もっとも、雷の魔法を扱える才能がなければ実際に比較もできませんけどね」

「なるほどなるほど。ということは、きちんと風をイメージできたらちゃんとした風の魔法が使えるんだな？」

「さきほどの扇風機とやらは風を起こす道具でしたよね？　こちらの世界で言えば扇子や団扇のようなものでしょうか？」

「ああ、風を起こすって点では同じだな」

義人が肯定すると、カグラはしばし考え込む。そして小さく手を

振ると、それに合わせて風が舞った。

「『いめーじ』するものが風に関係するものでも大丈夫みたいですね……これは新発見です。威力は大分落ちますが、練習するには丁度良いかもしれません」

何やら納得した様子をカグラに、義人は楽しそうに笑う。

「よし、それじゃあ早速練習を」

そこまで言うと、それを遮るようにカグラが微笑んだ。

「その前に、まずは政務を片付けましょうね？」

「……はい」

威圧感のある笑顔を前に、義人は反射的に頷く。

義人がカグラと話している間にもサクラが書類を集め、机の上では再び山が築かれつつあった。

「政務が早く終わったら魔法の練習に入りましょう」

「……あいよ」

カグラの苦笑に相づちを打つ義人。

結局、その日は政務を片付けるだけで終わってしまったが。

第四十六話：兵士用食堂での一幕

騎馬隊隊長のグェン＝クレアスは、騎馬隊に入隊してから十四年目になる熟練の騎兵である。

魔法を使わない純粋な技量でいえばミーファを凌ぎ、国内では屈指の槍の名手だ。その上人当たりも良く、部下からの信頼も厚い。また、隊長としての才もそれなりにあり、彼の率いる騎馬隊はカーリア国の部隊の中でも随一の練度を誇っている。

魔法剣士隊のように剣と魔法の力で主力になるわけでもなく、魔法隊のように遠距離から殺傷力のある魔法を射掛けるわけでもない。だが、馬を駆っての突進力と馬上からの攻撃は、他の部隊にはない特色である。

短く刈り上げた黒髪と、頬に走った三本の傷跡。その上、最近は無精髭のせいでよりいっそう精悍な顔立ちへと変わっていた。

どうでもいいことではあるが、頬の傷跡がどうやってついたのかを知る者はいない。

魔物と戦ったときについたという説や、彼女に引っ掻かれて傷ができたという説まである。他にも諸説様々あるが、グエンは語ろうとしなかった。真相は闇の中だ。

そんなグエンは今、兵士用の食堂で遅めの夕食を取ろうとしていた。

時刻は午後八時前。

本日の訓練も終わり、隊長業務も終了である。あとは食事を済ませ、大衆浴場で汗を流して自室に戻るだけだ。

グエンは出来立ての日替わり定食を受け取り、湯飲みにお茶を注いで適当に席へと座る。

「今日の夕飯は魚の煮付けか……」

お盆に乗った本日の主菜を眺め、ポツリと呟く。
料理などはしないため、魚の名前も知らなかった。日本でいうところの醤油のようなものを使っての煮魚だが、グエンがそれを知るはずもない。
自分と同じく、遅い夕食を食べている者を適当に見ながら食事を進めていると、隣の席にお盆が置かれた。

「隣、いいか？」

かけられた声に、グエンは口に含んでいるものを飲み込む。ついでにお茶でさらに流し込み、声をかけて人物へと顔を向ける。

「やー、こんばんは、グエン隊長。お互い遅い晩飯だねぇ」

義人だった。

「ぶふぅっ！？」

思わず吹き出す。
さも当たり前と言わんばかりに隣に座った義人は、そんなグエンを見て首を傾げた。

「おろ？　どうしたんだ？」
「よ、ヨシト王！？　何故兵士用の食堂に！？」

思わず声を上げるグエン。そのグエンの声を聞いた他の兵士が何事かと振り向き、その隣の義人に気づいて目を見張った。

「いやー、今日の分の政務は終わったんだけど、せっかくだから兵士のみんなと親交を深めようかと思って。あ、良ければそっちのみ

んなも一緒に食べようぜー」

そう言いつつ、遠巻きに見ていた兵士達を手招きする。しかし、いきなりこの国の王に呼ばれて動く者はいなかった。近くの者と顔を見合わせ、どうするかを囁き合う。

そうして数秒が経過した時、今度は厨房の奥から誰かが顔を覗かせる。

「あ、義人ちゃんだー。もしかして今からご飯？」

優希だった。

兵士用の食堂の手伝いをしていたらしく、制服の上からエプロンを身につけ、手にはお玉を持っている。

「おお、ついさっき今日の分の政務が終わってな。志信は早めに夕食を取って夜の鍛錬をしてるし、一人で食うのも楽しくないからこっちにきたんだ。というか、優希も一緒に食わねえ？」

「うん、食べるよー。この時間から注文する人は少ないから、わたしが抜けても大丈夫だろうし」

エプロンを外し、優希は自分の分の料理をお盆に乗せていく。そして最後に厨房のほうへと顔を向け、『今日は上がりまーす』と声をかけた。

そのまま義人のほうへと向き直ると、嬉しそうに笑いながら義人の傍へと歩み寄って隣へと腰掛ける。心なしかその距離が近かったが、お互い子供の頃からの長い付き合いのため、気にすることはなかった。

優希が義人の隣に座ったのを見て、数人の兵士が傍に寄ってくる。

「ヨシト王。一緒に食べたいのは山々ですが、我々は馬に蹴られた

くありません。そういうわけで、今日のところは……」

断り文句を言ってはいるが、微妙に冷やかし混じりだった。そして、義人にそんなことを言ってくれる兵士は限られている。

刀を腰に差してはいないが、間違いなく魔法剣士隊の兵士だ。

「馬？　グエン隊長、どっか近くに馬でも繋いでるのか？」

かけられた冷やかしに、義人は素でボケる。それを聞いたグエンは無精髭を軽く撫でた。

「さて、ここは食堂ですからそんなことはないはずですが。私は騎馬隊の隊長ではありますが、馬ではないですしなぁ……」

相づちを打ったグエンも、どこかズレている。義人は一つ頷くと、遠巻きに見ている兵士に笑いかけた。

「ということで、みんなで一緒に食おうぜ。ほらほら、こっちに来いって。みんなで食べた方が美味しいだろ？」

そう言いつつ手招きをする義人に、兵士達は顔を見合わせる。そして諦めたように苦笑すると、それぞれ自分の料理を持って席についた。

「そんじゃ、いただきまーす」

合掌してそう言うと、義人は自分の夕飯に箸をつける。そして一口食べ、元の世界で食べ慣れた味に眉を寄せた。

「これは……作ったのは優希か？」

「うん、そうだよ。こっちに来てから、わたしが作る料理は“全部”義人ちゃん好みの味付けにしといたんだー。少し濃い味付けが好きだもんね？」
「ああ、美味いよ。うん、これは箸が進むな」
舌鼓を打ちながら料理を食べていく義人に、そんな義人を見て嬉しそうに笑う優希。時折会話を交え、楽しそうに食事を取る。そんな二人を見ていた兵士も肩の力を抜き、各々の食事を再開した。
「そういえばみんな、訓練の調子はどうだ？　新しく軍を編成したけど、何か不満はないか？」
皆がリラックスしたのを見計らい、義人は味噌汁を啜りながらさも世間話のように尋ねる。それを聞いた兵士達は箸を止め、僅かに考え込んで口を開いた。
「そうですね……訓練の調子は良好です。何かあったら班長に聞けばいいですし、軍の編成は特に問題ないかと思います」
「たしかに。今までは何かあったら隊長か副隊長に指示を仰がないといけませんでけど、その点で言えば班長がいると気軽に聞けるから良いですね」
口々に答える兵士達に義人が頷いていると、数人の兵士が苦笑を浮かべる。
「ただ、シノブ様が訓練に参加された時はきついですね。歳はそう変わらないはずなのに、あれほどの腕を持っていることに驚きです

よ。まあ、教え上手でもありますが」
「まあ、志信は自分の爺ちゃん……師匠と一対一で学んできたからなぁ。その分色んなことを学んだだろうし、教え方も真似ればいいしな。それにしても、やっぱり教える立場の人間は多いに越したことはないか……他には何かあるか？」
「シノブ様が来ると、ミーファ隊長のやる気が上がるんです。そのせいで、訓練量が平時の倍ぐらいになるのをどうにかしてください」
魔法剣士隊の兵士が涙ながらに呟く。だが、微妙に口元が笑っているあたりそれほど深刻な悩みでもなさそうだ。
「本人に直談判しろよ。『シノブ様が来たときに異常にやる気を出すのを止めてください』って。多分、斬られるか焼かれるかのどっちかだと思うけど」
義人が笑い混じりに答えると、周りの兵士も一緒に笑う。そこで一度会話を切ると、義人はご飯を口に運ぶ。
もしもカグラがこの場にいれば、『食事中の会話は慎んでください』と注意するだろう。だが、遅めの夕飯を食べてくると言い残して逃げてきたのでこの場にはいない。今頃王用の食堂に姿がないことに気づいているかもしれないが、兵士達の話を聞くためだと言えば多分許してもらえる。
そんなことを少しだけ考え、義人は思考から追い出す。そして次は何の話を振ろうかと考えていると、隣に座っていた優希がくすりと笑った。
「義人ちゃん、ほっぺたにごはん粒がついてるよ？」
「ごはん粒？」
優希に言われ、とりあえず左頬に触れるがごはん粒の感触はない。

それを見た優希は、楽しそうに指を伸ばして義人の右頬からごはん粒を取った。

「はい、取れたよ」

そう言って、そのままごはん粒を食べる優希。その表情はどことなく嬉しそうだ。

「あ、悪いな。少し考えごとしてたから気づかなかったよ」

ハッハッハ、と義人は笑う。だが、それを見ていた兵士達はニヤニヤしながら何事かを話し合っていた。そして、そのうちの何人かが楽しそうに話しかける。

「ヨシト王とユキ様はいつも仲が良いですね」
「いやまったく。うらやましい限りですなぁ」
「うんうん、ヨシト王にあやかりたいものです」

完全に冷やかしだった。しかし、義人は首を捻る。

「幼馴染みだしなぁ……これくらい普通じゃないか？」
「だよね？」
『普通じゃないです』
「……そうか」

異口同音で兵士が唱和し、義人は頬を掻く。優希はまったく気にせず、笑顔のままだ。

「しかし、夫婦（めおと）というわけでもないのにお二人は本当に仲が良いですな」

そんな二人を見ていたグエンは楽しそうに呟く。それを聞いた義人は、何か思いついたように目を瞬かせた。

「そういえば、この国って結婚に関してどんな法律があったっけ？その辺は調べたことなかったんだけど」

「法律、ですか？」

「そう。俺の世界だったら男性は十八歳以上、女性は十六歳以上じゃないと結婚できないんだ。そういう年齢的な制限とかは決められてないのか？」

「そうですなぁ……年齢によって結婚が出来る出来ないというのはありません。まあ、政略結婚で幼い子が他国に嫁ぐこともありますしな」

「ふーん。そういうもんか」

「あ、それと一夫多妻制ですな」

「ぶふっ！？」

最初のグエンのように、思わず吹き出す義人。そして数回深呼吸すると、遠い目をして口を開く。

「一夫多妻制とは……さすがファンタジー。侮れねぇな」

侮れないも何も、元の世界でも一夫多妻制は存在するためファンタジーは関係ない。

「前王は何人も妻を娶（めと）っていましたが……ヨシト王はどうされるのですか？」

遠い目をしている義人を見た兵士がどこか楽しそうに尋ねる。そ

れを聞いた優希の目元が僅かに動き、義人は飛んでいた思考を元に戻して苦笑した。

「どうするも何も、三年……あと二年と九ヶ月ぐらい経ったら元の世界に帰るしなぁ。国の建て直しに、召喚国主制をどうにかすること。その他にも色々とすることがあるだろうし……」

「ヨシト王は元の世界に帰られるのですか！？」

これから先のことを述べていた義人を遮り、数人の兵士が腰を浮かせて悲鳴染みた叫び声を上げる。その驚きっぷりに、義人は逆に驚いて目を何度か瞬(またた)かせた。

「な、なんっすか……そんなに大声を出すようなことっすか？」

思わず体育会系的な敬語で兵士を見る義人。そんな義人の挙動に、兵士は浮かせた腰を落ち着けてから頭を下げた。

「あ、いえ、失礼しました。しかし、ヨシト王が元の世界に帰られては国の行く末が……」

「いやいや、だからそれを三年でなんとかするんだよ。召喚国主制の代わりに新しい制度を導入して、国を運営できるようにする。そして、俺と優希と志信の三人で無事に元の世界に戻る。それが俺の目標。難しいかもしれないけどな」

迷いなく言い切る義人に、グエンや兵士は何も言うことができない。

元の世界ならともかく、カーリア国の人口は八万人ほど。日本の現在の総人口に比べれば、千分の一もいないのだ。それに、この国の人間は王の言うことには盲目的に追従するところがあるのでかなり楽だろう。

最大の問題は、元の世界に戻るための方法である。
魔力が回復したカグラなら元の世界に戻せると聞いているが、義人としては手段が一つしかないのは不安に感じてしまう。

――城の書庫でも漁ってみるか……それとも、ゴルゾーにそれとなく他の方法を調べてもらうかな？

夕飯を口に運びつつ、表面上はいつも通りに振舞いながら思考する。いくつかの案が頭の中を飛び交い、義人はそれを整理していく。
ところどころ元の世界の常識が通用しないために、慎重に行動しなければならない。
そうやって義人が色々と思案していると、不意に嫌な予感がした。

「……なんだ？」

本当に突然である。義人は急に、この場から逃げたくなった。
思わず周囲を見回し、何か変わったことがないかを確認する。だが、食堂の中に不審な点はどこにもない。不審な人物もいないし、見慣れぬ物が置いてあるわけでもない。
気のせいかと義人が首を傾げた瞬間、“彼女”はやってきた。

「何をしているんですかヨシト様っ！」

そう、カグラである。
王が使う専用の食堂に義人がいないことに気づいて探していたのか、全力疾走からスライディングで滑り込むような勢いでの登場だった。
その後ろにはサクラと兵士数名が付き従っており、割と本気で探していたらしい。

「王用の食堂に姿が見えないと思ったら、兵士用の食堂で何をしているんですか!?」
「何って……夕飯？　晩飯？　って、どっちもあまり変わらないか」
「そんなことはどうでもいいです！　どこかに行かれる時は供に誰かを連れて行ってください！　それと、行き先もきちんと仰ってください！」

そう言いながら距離を詰め、カグラは義人の首根っこをつかむ。
そして軽々と体を持ち上げると、まるで猫でも連れていくかのように義人を持ったままで移動を始めた。

「あ、あれー？　ちょっとカグラさん。何か最近、俺の扱い酷くないっすか？」
「自業自得です！」

引きずるカグラに、引きずられる義人。抵抗する気もなく、抵抗してどうにかなる気もしない義人は、呆然としている兵士達にとりあえず笑顔を向けた。

「また今度来るわー。その時は俺の世界の話でもするから」
「ちゃんとご自分の食堂で食事を取ってください！」

引きずられたままで手を振る義人に、カグラは注意をする。兵士達は何の反応も取れずにそれを見送り、義人達はそんな兵士達の視線に気づかず先へと進んでいく。

「いやいや、兵士達とのスキンシップ……交流も大事だと思うんだ」
「それはそうですけど、ヨシト様が自ら出向くことはないはずです。言っていただければ交流の場を設けますから……」
「それじゃあ意味がないんだって。飾らない日常に紛れ込むからこ

そ意味があってだな……」

どんどん遠ざかっていく義人達。それを追うように優希も立ち上がり、食堂の出口へと歩いていく。そして、出口で一度止まると楽しそうに振り返った。

「お騒がせしましたー」

お辞儀を一つ残し、優希は駆け出す。
それを見送り、兵士達は緊張を解いた。

「……ふぅ、やれやれですな」

嵐が去ったように静けさを取り戻した食堂で、グエンは苦笑を零す。
今日も一日、平和である。

第四十七話：異世界の王様、城下町に出る　その１

いつものように執務室で政務を片付けていた義人は、腕組みをしながら目を閉じて唸っていた。

「うーん……」

窓は開けているが、それでも執務室の中は暑い。城の外では元気に蝉が鳴いており、元の世界で言えば八月の上旬ぐらいの気候だ。

こちらの世界へと召喚されて早三ヶ月が経過し、義人としてはもう三ヶ月が経過したのかと感慨深くもある。

軍の編成を終えて二週間。

それに関する書類はほとんどなくなり、訓練の様子も順調と聞く。

屯田兵も各町村へと派遣され、活動を開始している。あとは定期報告や視察で様子を見るだけだ。

そのため、一日に片付けなくてはならない政務の量も大分減っている。今日はそれが顕著で、午後二時の鐘を聞く頃にはほとんどの政務が片付いていた。

「各部隊の訓練の視察は……昨日やったか。散歩は……暑いしなぁ。かといって片付ける仕事もないし、どうするかねー」

元の世界なら、クーラーで涼みつつテレビでも眺めていただろう。しかし、この世界にはテレビはおろかラジオもない。

「サクラ、何か面白いことってないか？」

とりあえず、傍で雑事をこなしていたサクラへと話しかける。

「お、面白いことですか？　そうですね……」

小首を傾げて考え込むサクラ。その様子に若干癒されつつ、義人はサクラの回答を待つ。

「城下町の視察、とか……」

サクラは小さな声で、自信なく答える。それを聞いた義人は眉を寄せると、引き出しを開けて一枚の書類を取り出し、それに目を通しながら口を開いた。

「それだ」

「え？」

「それだ。うん、それだよサクラ。よし、決まりだ。城下町の視察をしよう」

何やら即断即決してしまった義人に、サクラは慌て出す。

「し、しかし、視察と言ってもそれに伴う護衛の確保がですね！？」

サクラとしては本当に適当に答えただけだった。面白いことと言われて、休日に街に出ると楽しいなという、自身のちょっとした願望を口にしただけである。だが、義人はそれを採用した。

「護衛？　そんなのが大勢いたら、市民の普段の生活が見れないだろ？　だから、俺も一般市民として紛れ込む」

そして、護衛と聞いて当然とばかりに却下する。

「で、でも、カグラ様かアルフレッド様に聞いてからでないと……」

それでもなんとか思いとどまらせようとしたが、サクラの言葉に義人は笑顔で答えた。

「それじゃあアルフレッドに聞こう。カグラは却下するだろうし」

サクラは、後でカグラに怒られることを覚悟した。

「城下町に、とな？」

義人の話を聞いたアルフレッドは、顎鬚（あごひげ）を撫でながら黙考する。そして、義人の様子を見て一つ頷いた。義人の服装はいつもの学校の制服ではなく、召喚された当初にもらったこちらの世界の服装である。知らない者が見れば、一般人として通用するだろう。

「それで、護衛はつけないと？」

「ああ。そうしたら市民の方も畏（かしこ）まって普段の生活が見れないしな」

そこまで言って、義人は苦笑する。

「と言っても、護衛をつけないわけじゃないさ。志信に声をかけるし、近衛隊にも変装してついてきてもらう」

「ほほう。シノブ殿に近衛隊か……たしかに護衛としては十分じゃのう。じゃが、カグラはどうするおつもりか？　連れて行かんし、事後承諾を取るんじゃろ？」

アルフレッドの問いに、義人は目を逸らした。額に冷や汗が浮かんでいるが、見間違いではないだろう。

「まあ、その、なんだ。カグラに言ったら反対されるだろうし、ついてくるだろうし。きちんと説明すれば納得してくれるだろ、多分。きっと、そうだといいなー」

後半は投げやりである。だが、それを聞いたアルフレッドは苦笑した。

「本当の理由は違うようじゃが？」

「本当の理由？」

アルフレッドの言葉に、サクラは首を傾げる。そして義人を見ると、義人を困ったように頬を掻いていた。

「あー……俺って単純？　それとも、年の功ってやつ？」

「どちらかといえば年の功かの。ヨシト王の考えを読むのは、ちと骨が折れそうじゃが」

「いやいや、買いかぶりだって。ただ単に、カグラを護衛にしたら市民に気づかれそうだなって思ってさ。『召喚の巫女』って言えば、この国でも有名人だろ？　顔も知られてるだろうし、そんなカグラに護衛されてたら俺が王様だって宣伝してるようなもんだよ」

「ふむ、一理あるのう」

「……他には何もないっすよ？」

「なら、何故サクラを連れて行かんのじゃ？　サクラとて、この国有数の魔法使い。その上メイドじゃから、市民の中でもサクラが魔法を使えることを知っている者はいないはず。それ故、市民を警戒させずに護衛するという意味では適任のはずじゃ」

アルフレッドがそう言うと、サクラは胸の前で両手を握って口を開く。

「そ、そうですよ。わたしも護衛につきます。い、いえ、つかせてください！」

もしも護衛につかなかったら、後でカグラに怒られることが確定してしまうため、サクラも割と必死だ。

エンブズの裏切りの一件以来、カグラは義人の警護に注意している。傍にいたのに護衛につかなかったという事態は避けたかった。だが、サクラが意気込むのと反対に義人は困ったように口元を引きつらせた。

「い、いやぁ、志信と近衛隊がいるから大丈夫だって、うん」

志信と近衛隊は義人の命令ですぐさま動かすことができる部隊だ。護衛任務の練習と言えば、すぐさま納得するだろう。だが、義人としてはカグラやサクラがついてくるのは遠慮してほしかった。

そんな義人の考えを見透かしたアルフレッドは、楽しそうに笑う。

「それではユキ殿を連れて行ったらどうじゃ？　一緒に“城下町”を廻ればさぞ楽しかろうて」

「ぐ……アルフレッド……俺の目的をわかってて言ってるだろ」

「さてのう。ミーファはあれで初心（うぶ）じゃから今回は無理じゃし、シアラには情操教育に悪そうじゃのう」

くくく、と笑いを零すアルフレッド。いつもの好々爺染みた表情ではない。どこか若々しい仕草にサクラは内心驚きを覚えた。

こうして義人がカグラやサクラ、優希やミーファにシアラ……女性が護衛につくのを遠慮したいのには理由がある。

今回の視察で見ようと思ったのは市民の生活だが、それとは別にもう一箇所見てみたい場所があった。

それは、遊郭である。

いくら人口が少ないとはいえ、“そういったもの”の需要があれば供給もある。

一男性としてではなく、国王として視察してみたかった。だが、そのためには女性随伴は絶対に避けなくてはならない。もしも誰かについてこられたら、“色々と”マズいことになりそうだ。

……まあ、一人の男としてちょっとだけどんなものなのか見てみたいという気持ちも義人にはあったが。

「そういったものの管理はきちんとしておる。じゃから、ヨシト王が気に揉まれることもなかろうて」

「ん、なら良いんだけどさ……男としてはやっぱりこう、どんなものか一目見てみたかったかなー」

「ほっほっほ、若いのう。じゃが、今回は市民の生活を視察するだけにしておくべきじゃな。それならサクラを連れて行っても大丈夫じゃろう？」

アルフレッドとしては、義人が国の綺麗なところだけではなく少し厄介なところに目を向けてくれたのは嬉しい。だが、それに伴う危険は避けたかった。もっとも、アルフレッドが考えている危険とは義人の周囲に関するものだったが。

「痴情の縺れで王が死亡など、笑えんからのう……」

「ん？　何かいったか？」

「いや、何でもないわい」

幸いと言うべきか、義人は鈍い。余程直接的な行動に出られない限り、好意に気づくことはないだろう。

アルフレッドの見立てでは、優希は既に危険だ。義人が望めば、すぐにでも応える。

そして、カグラも若干危険だった。今はまだ『カグラ』として振舞っているが、何か進展があれば拙い。最近は義人の行動に怒ってばかりだが、もし義人が“今の”振る舞いを止めたら危険である。

サクラはまだわからない。主人とメイドの関係であり、義人はサクラを妹か何かのように見ている節もある。

そこまで考えて、アルフレッドは義人を見た。

エンブズの一件以来、義人がカグラに怒られる機会は増えている。エンブズをどうにかするまでは王としての隙を見せようとしなかった義人が、ここ最近では進んで軽率な行動を取っている気がした。

「それじゃあ、視察に行ってくるよ。志信にサクラ、それと近衛隊がいれば危険はないだろうし、優希も一緒に連れて行くから」

考え込んでいるアルフレッドを見た義人が、思考を遮るように告げる。アルフレッドはいつものように好々爺染みた笑みを浮かべると、思考を打ち切った。

「気をつけるんじゃぞ」

「はいよ。カグラに何か聞かれたら、適当に答えといてくれ」

そう言い残し、義人はサクラを連れて退室する。それを見送ったアルフレッドは、僅かに口元を緩めた。

「今の性格が素か、それとも演技か。はてさて、どっちかのう」

楽しそうに笑い、アルフレッドは政務に戻ることにした。

次に義人が向かったのは兵士用の食堂だった。この時間なら優希

はその場所にいるだろうと当たりをつけ、サクラを伴って兵士用の食堂へと向かう。

「お、優希発見」

休憩している優希を見つけ、小さく呟く。すると、その声が聞こえたのか優希が振り返った。そして義人の姿を見ると、嬉しそうに破顔する。

「義人ちゃんどうしたの？」

「いや、今から城下町に行こうと思ってな。それで優希を誘いにきたんだ」

「デート？」

「そんな色っぽい話じゃないけどな」

優希の言葉を冗談と捉え、義人は軽く流す。優希はそんな義人の言葉に残念そうにため息を吐くが、すぐに満面の笑みを浮かべた。

「じゃあすぐに準備してくるね。どこに集合すればいいかな？」

「準備……って、そうだな。サクラもメイド服じゃなくて普段着に着替えてきてくれよ。その格好だと、明らかに目立つし」

「は、はい。そうでしたね」

自分の格好を見下ろし、サクラは恥ずかしそうに笑う。街中（まちなか）にメイド服を着た少女がいれば、さぞ目立つに違いない。

「それじゃあ、俺は今から志信のところに行ってくるから。準備が出来たら第一訓練場に来てくれ」

「うん、わかった」

返事をするなり、優希は嬉しそうに歩き去る。それを見たサクラは、義人に一礼した。

「それでは、わたしも着替えてきます」

「ああ。サクラの私服姿を楽しみにしてるよ」

義人がそう言うと、サクラは僅かに顔を赤くして困ったように微笑む。そしてもう一度頭を下げると、自身の部屋へと向かった。

「さて、それじゃあ俺は志信のところに行くかね」

呟いて歩き出し、三歩進んで足を止める。

「……そういやノーレを置いてきちまったな。でも、ノーレを持ってたら目立つしなぁ」

己が相棒のことを考え、義人はため息を吐く。

「今度、ゴルゾーにノーレを手軽に持ち運べる魔法具がないか聞いてみるか」

あればいいな、と内心で呟きつつ城の外へと出る。そして、第一訓練場の方へと足を向けた。

「なんというか、死屍累々？」

第一訓練場へと到着した義人の第一声は、そんな呟きだった。

眼前に広がるのは地面に倒れ伏した十二人の亡骸……もとい、近

衛隊の兵士達。

「む、義人か。何かあったか？」

それと、その光景を作り出した張本人である志信である。手には訓練用の棍を持ち、軽く汗を流していた。

「ちょっと城下町に出ようと思ったんだけど……またずいぶんと厳しくやったなぁ」

近衛隊として選抜されたのは十二人。志信が目をつけた者を部隊に関係なく引き抜いたのだが、その内訳は魔法剣士が六人に魔法使いが三人。それと騎兵と歩兵と治癒魔法使いが一人ずつだ。

近衛隊を創立して一週間以上経過しているが、毎日志信の手によって地獄の訓練を受けている。部隊としても一人の兵としてもまだまだ未熟だが、もっと時間をかければ確実に成長するだろう。

「城下町に？　それでここに来たということは、護衛か？」

「そういうこと。志信とサクラはすぐ傍で護衛。残りの近衛隊は周囲に溶け込んでの護衛を頼もうかと思ってなー。でも、この調子じゃ志信以外は無理っぽいな」

義人はもう一度倒れている近衛兵を見回すが、皆荒い息をつきながら倒れ伏している。そんな義人の視線を追った志信は、顎に手をやって口を開いた。

「成程、護衛の訓練になるな……よし、それでは五分休憩を取った後、王の護衛をする。普段着に着替え、隠し武器を携帯しろ。いいな？」

『……は、はっ！』

なんとか返事をするが、その声は疲労で震えている。その様子を見た志信は、僅かに頬を緩ませた。

「護衛が終われば、明後日まで休暇とする。だから頑張ってくれ」
「集合場所はここな」
『はっ！』

明後日まで休みという言葉を聞いてすぐに立ち上がる近衛兵達。そして義人に一礼するとものすごい速さで走り去っていく。

「……飴と鞭。いや、鞭が酷すぎる気がするな」

義人はポツリと呟く。一体どれだけハードな訓練をしているのか気になったが、途中まで想像して止める。そして軽く目を閉じると、近衛隊の兵士の無事を少しだけ祈ることにした。

志信自らによる訓練指導。そして、いつかは諜報活動などにも回ってもらうつもりだ。今はまだ人数も少ないが、今の近衛兵がある程度成長すれば新しく兵を組み入れるつもりである。

義人はそれが何ヶ月先になるのかと気長に考え、練習用の棍を片付けている志信へと顔を向けた。

「志信は準備するものはないか？」
「ああ。金も一応持っているし、暗器として使える武器もいくつかある。問題はないだろう」
「……いや、志信がそれで準備完了っていうのなら、俺は何も言わないけどさ」

集合場所はここ、第一訓練場だ。

志信の服装は学校の制服ではなく、動きやすさを重視したこちら

の世界のものである。そのため、着替える必要もない。ややゆったりとした作りなのは、志信が言う暗器とやらを持っているからだろう。素人である義人の目から見れば、ただの服にしか見ない。

「暗器っていうけど、何を隠してるんだ？」
「寸鉄をいくつか」
「寸鉄？」

義人が首を傾げると、志信は懐から細い鉄の棒を取り出す。
長さは十五センチほどで、太さは二センチもない。棒の中心付近には指輪状のものがつけられ、棒の先は丸みを帯びている。

「この輪に指を通して用いる。先端が鋭いものもあるが、それでは容易く人を殺傷してしまうだろう。もっとも、本来の用途はそちらだがな」
「物騒だなぁ。てっきり、忍者が使うクナイとか手裏剣が出てくるのかと思ったんだけど」
「苦無はともかく、手裏剣のような投擲にしか使えない武器は苦手でな」
「使ったことあるのかよ！？」

志信の口ぶりに、義人は突っ込みを入れる。志信は僅かに苦笑すると、遠い目をして空を見上げた。

「お爺様の知人の方に少しだけ教わったことがあるが……俺は素人に過ぎん」

何やら呟く志信を前に、義人は突っ込みを入れるのを諦める。そして空を見上げ、ポツリと呟く。

「近衛隊の兵士ってさ、近衛兵じゃなくて忍者でいいんじゃないか？」

王の警護をして、情報も集めなくてはならない。護衛はともかくとして、情報集めは忍者の得意とするところだ。

「……」

志信は、何も答えない。

結局、城下町に行く人員が全て揃うまで二人は無言のままだった。

第四十八話：異世界の王様、城下町に出る　その2

カーリア国王都フォレスは人口八千人ほどの都市である。
カーリア国内では最大の人口数であり、それに伴い商業や工業も少し発展している。
現代に比べればはるかに少ない人数だが、カーリア国は小規模国家。同盟こそ結んでないものの、友好国である隣のレンシア国とは国としての規模が違う。
そのレンシア国も数ある国の中では中規模国家に過ぎず、総人口は十三万二千人。王都であるハサラは二万八千人の人口を持ち、残りは四十五の町村から成り立っている。
商工業に農業、兵力や魔法技術などは全てカーリア国を超えているが、隣接するハクロア国との小競り合いが絶えない。
義人達が召喚される前にも幾度となくぶつかり合い、時折支援や援軍を求める使者が来ていたらしい。だが、その時決定権を持つ前王は暗殺により不在。王の許可なく支援は出来ないとして断っていた。

さてさて、もう少し国の中が落ち着いたら挨拶にも行かないとな……貴重な友好国だし、貿易ももっと盛んにしたい。でもこの国にそこまで有益な物はない、と。それまでに特産品を考えとかないとなぁ……。

義人はそんなことを頭の中で思い描きつつ、城下町への道を歩いていく。
優希やサクラ、近衛隊の準備が整い、義人達は城下町へと足を向けていた。
義人の左隣では志信が歩き、気を抜きながらも辺りを油断なく見ている。右隣には優希が歩き、こちらは楽しそうにしていた。

サクラは義人から数歩後ろを歩いている。メイドとしては、主君たる義人の隣や前は歩けないらしい。

近衛隊の十二人はそれぞれ普段着に着替え、一般人を装いつつ義人の周囲を警護している。武器になるような物は持っていないように見えるが、服のところどころが膨らんでいた。もっとも、近衛隊の八割近くは魔法を使えるので必ずしも武器が必要というわけではないのだが。

城下町が目前まで迫ると、志信はさり気なく左手を開き、二度ほど適当に払った後握り締める。それを見た近衛兵は歩調を上げ、先に城下町へと入っていった。

「今の合図、何だったんだ？」

近衛兵が城下町に入っていくのを見送った義人は志信に尋ねる。志信は散っていった近衛兵達を見送り、ふむと呟いた。

「『散開して王を警護しろ』と合図した。口頭で指示したら敵に聞かれる可能性もあるからな。他にもいくつか合図が決めてある」

「……本当に忍者で良いんじゃないか？　というか、敵って誰だよ？」

「この場合は城下町の民だな。義人が王と気づかれれば騒ぎになるだろう」

「ごもっともで。それじゃあ、俺達は色々と見て回るか」

義人がそう言うと、隣を歩いていた優希が小さく首を傾げる。

「最初はどこを見るの？」

「まずは市場だな。実際にどんな物が、どんな値段で売られているのか見てみたい。その次は適当に回ろう。そして最後は酒場かな」

「酒場、ですか？」

今度は僅かに後ろを歩いていたサクラが疑問の声を上げた。義人はその声に振り返ると、楽しそうに笑う。

「情報の集まるところと言えば酒場が定番だろ？」

その定番とやらが、ゲームなどの知識によって決められたことをサクラはもちろん知らなかった。

現代に比べれば少ないとは言え、八千もの人間が住む町である。当然それに伴い、人々の生活が営まれていた。

威勢の良い掛け声と共に野菜や果物を売る八百屋。様々な刀剣や槍を売る刀剣屋。店先に見本の服を並べる服屋。その場で食べられるよう、椅子などを設置してあるお菓子屋。他にも様々な店が軒を連ねている。

住民と売り子の活気ある声。母親らしき女性に手を引かれて歩く子供。友人と共に楽しそうに話し合う少年少女。

義人はしばしその様子を眺め、頬を緩ませた。

「こういうところは、世界が違っても変わらないか……」

義人の感慨深い声に、志信は首肯する。

「そうだな。そして、この光景があるのも義人のおかげだ」

「真顔でそんなこと言われると照れるなー」

「で、でも、ヨシト様が王になられる前はこんなに活気のある街じゃなかったんです」

サクラの言葉に、義人は僅かに首を傾げた。

「そうなのか？」

「はい。税率が下げられてからはさらに活気が増し、民の生活も前より豊かになりつつあります」

「……そうか」

義人はもう一度目の前の光景を見据え、小さく笑う。隣の優希も微笑み、義人の袖を引いた。

「ねえ義人ちゃん、アレはなんだろ？」

「ん？　どれどれ？」

優希が指差したのは緑色の果物らしきもの。八百屋の軒先に置かれた箱にたくさん敷き詰められている。大きさは現代のリンゴぐらいだが、青リンゴではない。微妙に形がでこぼこしている。

「うん、興味を惹かれるな」

そう言いつつ、義人は八百屋の方へと歩み寄っていく。すると、それに気づいた八百屋の女性は商売人らしい笑顔を浮かべた。

「いらっしゃい！　何か欲しいかい？」

『八百屋のおばちゃん』と形容するのが相応しい、中年の女性だった。義人は近所にもこういう人がいたなー、と内心感傷を覚えつつ口を開く。

「おばちゃん、それ何？」

「これかい？　これは『カロの実』っていう果物さ。カロっていう

木に生るんだけど、この時期にしか出回らない果物だよ」
「へぇ、美味しそうだ。四つほどもらおうかな」

そう言いつつ、義人は懐から財布を取り出す。もっとも、財布と言っても現在の財布ではない。

こちらの世界に紙幣はなく、ネカは硬貨である。金貨、銀貨、銅貨で価値が違い、金貨は百ネカ。銀貨は十ネカ。銅貨は一ネカだ。

そして、義人が取り出した財布はがま口財布だった。紙幣がないので硬貨を入れるために優希に作ってもらったものだが、作りは頑丈である。その上目や小さいながらも手足がつけてあり、可愛らしい蛙姿（かえる）のがま口財布だ。

義人はがま口を開けると、中を覗き込んで僅かに考え込む。財布の中には以前税金を横領した文官に返還させたお金で作ったへそくりのうち、五千ネカほど入っている。そして金貨、百ネカ取り出すと、八百屋のおばちゃんに手渡した。

「毎度！　……ってお客さん！　これ金貨じゃないのさ！」
「おろ？　もしかして足りなかった？」

驚くおばちゃんに、義人はもう一度がま口を開こうとする。しかし、それを見たおばちゃんは大慌てで手を振った。

「逆だよ！　銀貨ならともかく金貨で果物を買われちゃお釣りが足りないさね！」
「あ、そういうことか。それじゃあ銀貨で払うよ。『カロの実』四つでいくら？」

そう言いつつ、義人はがま口を開く。すると、それまで事の成り行きを見ていたサクラが我に返って大慌てで義人の傍へと駆け寄った。

「よ、ヨシト様！　果物を買うお金ならわたしが出しますから！」
「いやいや、そうもいかないって」
大慌てのサクラをやんわりと宥める。八百屋のおばちゃんは義人とサクラ、そして志信と優希を見て訝しげに眉を寄せた。
「もしかしてあんた、どこかのお偉いさんのお坊ちゃんかい？」
「いや、違うよ。遠くから出てきた田舎者でね。こっちの勝手がわからないんだ」
お偉いさんも何も、この国の王である。だが、義人はそんなことを言うつもりはない。渡した金貨を受け取り、代わりに銀貨を渡す。すると四枚の銅貨をお釣りとして渡され、義人は『カロの実』を四つほど手に取った。そしてそれを優希と志信、それとサクラに手渡す。
「あの、ヨシト様？」
渡された中で困惑したのはサクラだ。
サクラは義人のメイドに過ぎず、本人もそう思っている。義人は主人であり、その主人に自腹で何かを買ってもらうなど想像の埒外（らちがい）だった。少なくともメイドとして教育された時はそう教わっている。しかし、義人はそんなことを気にする人間ではない。
いただきますと呟くなり、そのまま『カロの実』に噛み付いていた。それを見て、サクラは再度慌てる。
「ヨ、ヨシト様毒見をっ！？」
慌てるサクラに、義人は苦笑した。

「毒見も何も、何で毒を盛られなきゃいけないんだよ」

義人の立場を考えるならサクラの反応の方が正しい。しかし、義人としては毒が盛られる可能性など無いと考えていた。

それよりも、サクラの反応を見て余計な疑念を持ったらしい八百屋のおばちゃんのほうが重要である。

「いや、騒がせて悪いね。この子ちょっと心配性でさ」

そう言って、『カロの実』を齧(かじ)る。

「うん、こりゃ美味いな。ほら、サクラも食べてみろよ」

サクラに促すと、サクラは助けを求めるように優希と志信を見た。しかし、二人も既に『カロの実』を口にしている。すると、サクラは説得を諦めて肩を落とした。

「後で絶対カグラ様に怒られます……」

遠からぬ未来を予見して、サクラは薄く涙を浮かべる。義人はそのことを極力考えないようにしつつ、八百屋のおばちゃんを見た。

「まあ、気にしないでよおばちゃん」

「……そうさね。気にしないことにするよ」

関わらないほうが良いと見たのか、おばちゃんは一応首肯する。

義人は苦笑すると、食べかけの『カロの実』に目を落とした。

「しかしこれ、美味しいなー。この時期だけって言ってたけど、やっぱり売れる？」
「そうだねぇ。ポポロと違って一年中食べられるってわけじゃないし、売れ行きは好調さね。値段も安いし、手軽に食べられるから。それと、税率が下がったからねぇ」
義人の表情が僅かに動く。
「そういえばそうか。税率が六割に下がったけど、下がる前と比べたらやっぱり違ったりする？」
「そりゃあね。商品も多く仕入れられるし、お客さんもたくさん買っていってくれるし。新しい王様には感謝してるよ。前王はそりゃ酷かったからねぇ……」
しみじみと呟くおばちゃんに、義人は力強く頷く。
その後も十分ほど話し、義人達は八百屋を後にした。
「いやぁ、色々と話が聞けて良かった。税率を引き下げて本当に良かったよ。しかし、商業が発展するのはまだ先かなー」
周囲に聞こえないくらいの声量で話す義人。それを聞いた志信は、疑問に思ったことを尋ねる。
「やはり、最初に金貨を渡したのはわざとだったのか？」
「んー？　まあ、わざとというか、百ネカで買い物したらお釣り分の金があるのかなーと思っただけだよ。あとはまあ……」
義人は目だけで周囲の様子を窺う。

八百屋でのやり取りを見ていたのか、義人達を見る視線がいくつかある。興味や好奇心といった視線もあれば、少々剣呑なものもあった。

「大金を持っている田舎者に対して、どんな行動を取るかなーと」

悪戯(いたずら)小僧のように笑う義人。その言葉に志信は頷き、優希はいつも通り義人と一緒に笑い合う。しかし、サクラは首を傾げていた。

「まあ、もうちょっとすればわかるさ。その時は志信とサクラの出番かな。っと、見ろよ志信。刀を売ってるぞ」

「む？」

刀と聞いて志信の興味がそちらへ向く。視線を向けた先には刀剣屋があり、それを見た志信の表情が僅かに綻んだ。

「よし、ちょっと見てみるか」

志信の表情が変わったのを見て義人は即断する。もちろん自分も興味があったからなのだが、こういった方面なら志信の本領だろう。

「御免」

志信を先頭にして刀剣屋へと入る。すると、見るからに商人といった風体の男が出迎えた。

「いらっしゃいませ」

商人らしい笑みを顔に貼り付け、一礼する。だが、表情は笑っていても目は笑っていない。義人達を値踏みするかのように見ている。

「少々刀を見たいのだが」

その視線に気づきつつも、志信は気にしない。そんな視線は商人のゴルゾーと会えば嫌でも慣れる。義人と優希も気にせず、サクラだけオドオドとしていた。

店主の承諾を得ると、志信は傍にあった刀へと手を伸ばす。刀に一礼し、どこからともなく懐紙（かいし）を取り出すと、それを口に咥えてゆっくりと刀を引き抜いた。

今どこから懐紙を取り出したんだ？

義人は疑問に思うが、深くは突っ込まない。きっと普段から持ち歩いているのだろうと無理矢理自分を納得させ、何度か角度を変えて刀を見る志信の様子を眺める。

刀身を光に透かし、地金を見て、刃紋を確認する。志信はそれで満足したのか、刀を鞘に納めた。

「どうだった？」

義人が尋ねると、志信は僅かに考え込む。そして僅かに店主を見やると、刀を元の場所へと戻した。

「ふむ……実際に試し切りをすればもっとわかるのだが、美術品としては失格だろうな」

「おや、これは異なことを仰いますな。刀は振るうものでございましょう？　飾っておいては宝の持ち腐れでは？」

店主の言葉を聞くと、志信は義人に小さく耳打ちする。

「この世界では刀剣は美術品ではないようだ。作りは頑丈で、戦うことに重点を置かれている」
「本当か？　というか、志信って刀の見方とか知ってたんだな」
「ああ。お爺様に刀の見方は教わった」
「そういや志信の家にも何本か刀があったな。そんで、どうだった？　志信としての評価は？」
「……下の中、といったところか。頑丈だが、切れ味は鈍そうだ」

店主に聞こえないよう小声で話し合う二人。優希とサクラは物珍しそうに鞘に納まった刀を眺めている。しかし、そこでサクラは眉を寄せた。

「ヨシト様、シノブ様。あそこに飾られている刀を見てください」
「ん、どれ？」

義人と志信につられて小声で話しかけてくるサクラ。義人と志信はサクラに言われた方向に目を向けた。そして志信が刀を手に取ると、店主が僅かに驚いたように声を上げる。

「おやお客さん、中々お目が高いですな。それは当店でも最上級の一品ですよ」

最上級と言われ、志信は先ほどより丁寧に刀を持つ。そしてゆっくりと刀を引き抜くと、刀身に刻まれた文字を見て目を細めた。

「これは？」
「刀の強度を上げるために『魔法文字』が刻んであります。さらに、耐魔法の効果も付加されているため敵の放った魔法を切り裂くことも容易く、この国の魔法剣士隊隊長のミーファ＝カーネル様にも愛用される一品でございます」

「ぶふぅっ！」

思わぬところで知人の名前が出たことに噴き出す義人。志信はそんな義人の反応を気にせず、刀の作りを見ていく。

「ふむ……刃紋は直刃調に小乱れ。地鉄の組み方は……見たことないな。しかし、丁寧な作りだ。切れ味も良さそうだな」

志信が下した刀の評価に、店主は嬉しそうに笑う。

「お若いのに見る目がありますな。腰の物にどうでしょう？」
「欲しくはあるが、生憎（あいにく）と俺の使う武器は長物でな。いつか用立ててもらうやもしれんが」
「そうですか……残念ではありますが、当店では長物も扱っております。ご入用の際は是非ご利用くださいませ」
「そうさせてもらう」

志信は刀を元の場所へと戻す。義人は志信と店主の様子を見て、楽しそうに笑った。

「あんなに楽しそうな志信も珍しいな」
「た、楽しそうなんですか？　あれで？」

義人の言葉にサクラが首を傾げる。店主と会話している間も志信の表情は変わっておらず、いつもの無表情のままだ。少なくともサクラにはそう見えたため、首を傾げるしかない。

小柄なサクラが小動物のように首を傾げるのを見て、義人は無意識のうちにサクラの頭に手を乗せて撫でた。

「まあ、志信と長く付き合えばわかるさ」

「そ、そうですか……」

撫でられるのがくすぐったいのか、それとも恥ずかしいのか、サクラは少しばかり顔を赤くする。それを見た優希は頬を膨らませた。

「義人ちゃん、わたしも！」

「んー？」

乞われるままに優希の頭も撫でる義人。微妙におざなりだったが、優希は嬉しそうに笑う。

「そんじゃ、他のところを見て回るかね」

手を離し、義人達は刀剣屋を後にした。

第四十九話：異世界の王様、城下町に出る　その3

刀剣屋を後にした義人達は、他の場所も見て回ろうとしていた。
しかし、それを遮るように数人の若い男達が行く手を塞ぐ。
歳は若い者で十五ぐらいで、年長でも二十に届かない程度だが全員共明らかに素行が悪そうだ。服を微妙に着崩し、腰には刀を提げている者もいる。軽薄そうな笑みを顔に貼り付け、義人達を取り囲んだ。その数は八人。

「ちょっと待ちな」
「断る」

リーダーらしき人物の言葉を一刀両断する義人。そしてそのまま無視して進もうとするが、こめかみを引きつらせた男達に道を塞がれた。

「ナメたこと言ってんじゃねぇぞゴラぁっ！」

お前はいつの時代の不良かと突っ込みたくなったが、義人はそれを言わずに周囲の様子を観察する。
志信は既に臨戦態勢に入っており、さり気なく立ち位置を変えた。サクラはいつもの小動物染みた雰囲気を消し、義人の傍に立っている。
近衛隊の兵士は野次馬を装って男達の周囲を取り囲み、遠巻きに人ごみができていた。そして優希はいつも通りに微笑んでいる。

「詰襟（つめえり）の制服とか着せたら似合いそうな台詞だね？」
「ついでに頭はリーゼントな。そんで第一ボタンは外してるに違いない」

「『番長』って呼ばれる人もいそうだよねー」

義人と優希は軽口を交し合う。別段挑発しているわけでもなく、二人とも素だ。

「りーぜんと？　何わけのわからねえことを言ってんだ！」

「あー、こっちの話だから。というか、何の用？」

叫び声と共に唾まで飛んできそうだと義人は顔をしかめ、大体の用件はわかっているが一応尋ねる。すると男達は下卑た笑みを浮かべた。

「なぁに、ちょいと金が欲しくてなぁ」

「働けば？」

今度は優希がツッコミを入れる。それを聞いた義人達はもっともだと頷いた。

「力“だけ”は有り余っているようだが……勿体無い」

「志信、それ褒めてないぞ」

「元より褒めたつもりはないが？」

互いに顔を見合わせ、義人は笑い出す。そしてそのまま薄く笑いつつ、義人はリーダー格らしき男に目を向けた。

「優希の言う通り、金が欲しいなら働けばいいだろ？　それとも、汗水流して働くのは嫌なのか？　それとも働き口がないのか？」

「あぁん？　何でテメェみてぇな野郎にそんなこと言わねぇといけねぇんだよ！」

そう言って凄む男達。ガンつけると言い換えても良い。義人は本気で『いつの時代の不良だよ』とツッコミを入れたくなったが、とりあえずそれは我慢した。

いつの間にか周りには野次馬が集まり、男達を見てヒソヒソと囁き合う。

『やぁねぇ……またあの穀潰し共よ……』

『今度は何をしてるのかしら？』

『まったく、いい年にもなって……』

『誰か憲兵呼んでこいよ』

どうやらこの付近では割と顔が売れているらしい。もちろん、悪い方向でだが。

「こんな連中が他にもいるのかねぇ……でもまぁ、今はそんなことを考えてる暇はないか」

帰ったら無職の者に対する政策を考えようと決め、義人はにやりと笑う。

「そんじゃ、あんたらはカツアゲ……俺達の金が欲しくて無理矢理奪おうとしているということで合ってるな？」

「わかってるなら話がはえぇ！　身包みそっくり置いていきな！」

男の台詞を聞いた義人は、思わず優希のほうを見る。

「追い剥ぎにランクアップしたぞ」

「最終的にはどこまでいくのかな？」

再度ボケた義人に、男達の堪忍袋の緒が切れた。元々切れやすかったのだが、おちょくられたことに気づいたらしい。刀を持っている者は刀を抜き、それ以外の者は拳を鳴らしている。

八対四。しかし、義人がそれを危機と思うことはない。むしろ楽しそうに笑った。

「志信さん、サクラさん、少し懲らしめてあげなさい！」

某ご老公のように叫ぶ義人。

「御意」

「え？　あ、は、はい！」

割とノリノリな志信に、意味がわからずともとりあえず返事をするサクラ。近衛隊は動かない。志信がいるため、助太刀は必要ないと判断したのだろう。だが、いつでも義人と優希の盾になれるようにと身構えている。

「義人ちゃん、わたしの役は？」

目を輝かせて尋ねる優希に、義人は重々しく頷いた。

「悪代官にさらわれた町娘で良いんじゃないか？」

「クルクル回りながら、『あーれーそんなご無体なー』って言えばいいのかな？」

「むむ、男としてちょっとした浪漫があるな……」

「帰ったらする？」

「誰にだよ」

義人は苦笑しつつ、自分達を取り囲むゴロツキ共を見る。

刀を持っている者が三人ほどいるが、素人に近い義人の目から見ても駄目な構えだということがわかる。志信は言うに及ばず、ここ一月ほど早朝から志信に教えを受けている義人にも劣るだろう。

刀の持ち方など知らず、とりあえず柄を握っているだけだ。いっそのこと、刀は捨てて殴りかかったほうが有効な気さえする。歩兵隊の兵士ですら、二対一でも相手取れそうだった。

もっとも、ゴロツキと軍人を比べるべくもないのだが。

「かかれぇっ！」

リーダーらしき男の号令に従い、周囲を取り囲んだ男達が同時に地を蹴る。しかし、その速さはバラバラだった。一糸乱れぬ動きとは程遠く、各々が思い思いの速さで襲い掛かってくる。

「喧嘩慣れはしてるっぽいけど……兵士としては雇えないかぁ」

義人は小さく呟きつつ、優希を庇うように前へと出た。殺し合いならともかく、喧嘩なら義人も慣れている。その上『強化』のような効果で身体能力が向上している今なら遅れを取ることもないだろう。

前へ出た義人に、一人の男が拳を振り上げて殴りかかる。体重を乗せることすら考えていない、勢いだけの拳。しかし、その拳は義人に届く前に停止した。

義人でもなく、志信でもなく――――サクラの手によって。

いつの間に移動したのか、殴りかかっていた男の手首を左手で掴んで押さえている。正面から拳を受け止めたのではなく、それなりの速度が出ている拳を横から掴んで止めたのだ。右手は男の腹部に添え、勢いの乗った体を微動だにせず受け止めている。

「ヨシト様に手出しはさせません」

ニコリと、サクラが微笑む。それに対して、男は頬を引きつらせた。

「ま、魔法使……ぎっ！」

サクラが魔法使いだと気づいて口にしようとするが、それより早くサクラが踏み込む。踏み込みと同時に体を捻り、体重と勢いを乗せて腹部に乗せた右手を押した。強烈な一撃を受け、男が短い悲鳴を上げながら後ろへと吹き飛ぶ。

そして、一般人を装っていた近衛隊の兵士がそれを受け止めた。

「げほっ！　げほっ！　いってぇ……って、なんだテメェ！？」

「はいはい、ちょっとこっちに来てねー」

義人に襲い掛かった男を羽交い絞めにすると、そのまま路地裏へと引きずっていく。

「ちょ、おい！　離せよ！」

「黙れ小僧。ヨシト様に手を出そうとするとは良い度胸だ」

男は暴れるが、引きずる近衛兵は元魔法剣士隊である。『強化』で身体能力を上げてあるため、普通の人間で振り解くことは難しい。近衛兵は捕まえた男を楽しそうに路地裏へと引きずりこむと、その数秒後に悲鳴が上がる。

「……何をしてるんだ？」

義人が周りを見てみれば、志信の手によって倒された男達もいつの間にか姿が消えている。残っているのはリーダー格の男だけで、刀を構えたまま微妙に震えていた。

「な、何なんだよお前ら！？」

仲間が謎の集団に路地裏へと連れ去られたせいか、リーダー格の男の声は震えている。それが少し気の毒になった義人は、志信へと尋ねた。

「路地裏で何をさせてるんだ？」

志信のことだから殺しなどさせず、穏便な手を取っているだろう。そう思って尋ねたのだが、義人の予想に反して志信は首を傾げた。

「俺は何も指示をしていないが……」

「ちょっと!?　あいつら何やってんの!?」

義人は慌てて路地裏へと駆け込む。後ろの方で志信がリーダー格の男を殴り倒す音が聞こえたが、そんなものは気にしない。義人が路地裏へと入ると、縄で縛られたゴロツキとそれを取り囲む近衛兵達の姿が目に入ってきた。

「なあお前ら、誰に手を出そうとしたかわかってんのか？　ああ？　それとも他国の刺客かコラ？」

「し、知らねえよ！　俺達はただ金が欲しくて……」

「んだとこらぁっ!?　金欲しさに襲っただあ!?」

そう言いつつ、短刀でゴロツキの頬をピタピタと叩いて脅す近衛兵。脅されたゴロツキは、震えながら首を横に振っている。どちらがゴロツキかとツッコミを入れたい。

「お前らが脅してどうすんだー!!」

「あうちっ！」

それを見た義人は、とりあえず跳躍してドロップキックをお見舞

いした。
　短刀で頬を叩きながら脅していた近衛兵は横へと吹き飛び、そのまま地面を転がるとすぐさま立ち上がって抗議の声を上げる。

「い、痛いじゃないですかヨシト様！」
「やかましい！　いきなり路地裏に引きずり込んだと思ったら何をしてるんだよ！？」

　義人が力を込めて尋ねると、近衛兵達は目を逸らした。

「え、えーと……忠誠心の暴走？」
「どんな暴走だよ！？」
「いや、シノブ隊長の訓練厳しくて……ちょっと鬱憤（うっぷん）が。あ、ヨシト様の世界ではストレスって言うんでしたっけ？　その発散をしようかなー、なんて」

　その言葉に頷き合う近衛兵達。どうやら、志信の訓練は予想以上にきついようだ。

「……志信にはほどほどにしてくれって言っとく」
『ありがとうございます！　お願いします！』

　近衛兵全員が同時に頭を下げる。余程嬉しいらしい。義人はため息を吐くと、縛られたまま地面に転がされているゴロツキに目を向けた。

「こいつらどうすっかねぇ……」
「埋めますか？」
「物騒だなおい！？」

反応からして元騎馬隊の兵士だなと義人は判断する。ドロップキックをお見舞いした元魔法剣士隊の兵士のように、ある程度は気安く接してほしい。

まあ、それはこれからだな……。

内心で一人呟くと、とりあえず指示を出すことにした。

「縄を解いてやれ。しばらくは悪さもしないだろ」

『はっ！』

指示に従い、縄を解いていく近衛兵達。隊長は志信だが、義人はさらにその上の王のため指示を出すことは可能である。

「ヨシト様、気絶している奴はどうしますか？」

「気絶“してる”んじゃなくて、“させた”んだろ？　まあいいや。ほら、これに懲りたら悪さなんかせず、真面目に働くんだ。いいな？」

義人がそう言うと、男達は気絶した仲間を連れて一目散に逃げていく。それを見送った義人は苦笑した。

「わかってんのかねぇ……それじゃあ、みんなも解散。また護衛に戻ってくれ」

『はっ！』

号令の下、一般人を装って散っていく近衛兵達。義人はそれを確認すると、元の場所に戻る。すると、野次馬が集まって少し騒ぎになっていた。

「とりあえず……逃げるか？　おーい！」

野次馬に混じって志信に手を振ると、何故か優希のほうが先に気づく。そしてサクラと志信に声をかけると、野次馬をかき分けて義人のもとへと駆け寄った。

「あいつらは何をしていた？」

「もう二度とこんなことをしないよう“優しく”諭してたぞ」

開口一番志信が尋ねるが、義人はここで正直に答えると近衛兵達の明日の休日がなくなると嘘をつくことにする。それに気づいたのか気づかなかったのか、志信は特に表情を変えずに頷いた。

「そうか」

「ああ。とりあえず今は逃げようぜ」

追及される前に、野次馬から隠れるようにその場から逃げ出した。

第五十話：異世界の王様、城下町に出る　その４

騒ぎから遠ざかるように逃げ出した義人達は、ある程度離れてから再び店などを見て回ることにした。

「ここまで来れば大丈夫……だよな？」

とりあえず周囲の様子を窺うが、特に変わった様子は無い。義人は軽く気を抜くと、後方から突き刺さる、微妙に恨みがましい視線へと振り向いた。

「む～……」

振り向いた先、そこではサクラが僅かに頬を膨らませている。そして義人と目が合うと、目を逸らした。

「あの……サクラさん？　露骨に目を逸らされるとけっこう傷つくんですが」

サクラが機嫌を損ねた理由がわかっているので、義人はとりあえず敬語で話しかけてみる。すると、サクラは拗ねたように口を開いた。

「ヨシト様、さっきの連中が襲ってくるって知ってましたね？」

明らかに確信を含んだ問いかけだったが、義人はなんとなく大仰に肩を竦めてみる。

「ハッハッハ、何を仰るサクラさん。そんなこと知ってるはずが」

「じゃあ、なんでわざわざ八百屋さんで金貨を渡したんですか？」

自身の言葉を遮って返された言葉に、義人は口を閉ざす。そして苦笑すると、降参とばかりに両手を上げた。

「いやほら、明らかに余所者で田舎者っぽい挙動をしてる奴が大金を出したらどうなるかなーと。王都の治安も知りたかったし。案の定金欲しさに襲ってくる奴がいて俺としては参考になったと言うか」

「だからわたしとシノブ様の出番があるなんて言ってたんですね…酷いですよ」

肩を落とすサクラ。義人もさすがに申し訳なく思い、宙に視線を彷徨わせた。

「あー……ゴメン。うん、迷惑をかけた。そうだよな、いくらサクラが強いって言ってもいきなり戦わせるのはまずかった。ゴメンな」

サクラの役目は義人の身の回りの世話と護衛だ。その立場上、義人を危険な目に合わせるわけにはいかないのだろう。

僅かに膝を折り、目線を合わせて謝るように話しかける。しかしサクラはそれに答えず、ポツリと呟いた。

「カグラ様に黙って城から出た上、街中で戦ったなんて知られたらどれだけ怒られるか……うう、お仕置きは嫌です」

義人はどんなお仕置きがされるのかと少しだけ気になったが、励ますように声をかける。

「大丈夫だって。アルフレッドに許可をもらってるし、護衛もちゃんといる。何かあったら俺が王様命令で無理矢理連れ出したってこ

とにするさ。まあ、そんなこと言わなくても怒られるのは十中八九俺だけだろうけどな」

もっとも、自分だけが怒られるように誘導するつもりだったのだが。

サクラは心配そうに顔を上げる。そこにはすでに拗ねたような表情はなく、義人の言葉を聞いて不安を覚えたようだった。

「で、ですがそれだと義人様が……」

「いやー、俺なら怒られ慣れてるし。というか、今回はアルフレッドの許可も取ってる正式な視察だからね。なんとかなる……と、思いたい」

説教を回避する方法は思いつかないので、最低でも小言はもらうことになるだろう。義人は苦笑混じりに笑った。

「今はそんなことよりも店を見て回ろうぜ。どんな店があるのか知りたいし」

そう言って周りを見回してみる。すると、隣を歩いていた志信が義人の袖を引いた。

「義人、あの店はどうだ？」

「お、どれどれ？」

志信が指差し、義人はその方向を見る。その視線の先には、髪飾りや櫛、手鏡や指輪などの装飾品を扱っている店があった。

義人は僅かに考え込むと、志信に向けて親指を立てる。

「さすが志信。良い店を見つけてくれた」

「良い店……なのか？」

志信としては適当に目についたから指差しただけなのだが、義人にとってはありがたいらしい。そのまま四人で連れ立って入店すると、優希とサクラは目を輝かせて品物を見始めた。やはり、女の子としては装飾品などが気になるらしい。

装飾品の他にも様々な物が売ってあり、義人と志信も商品を見ていく。

「中々品揃えが良いな。って、扇子まで売ってるじゃないか！？」

驚きの声を上げる義人。扇子や団扇が存在していることはカグラから聞いていたので知っていたが、実物を見るとやはり驚いてしまう。

「これも歴代の王の影響で作られたんだろうか……」

建物などは西洋の造りだというのに、時折和風のものが混ざっている。義人はこの国の歪さを垣間見た気がして、苦く笑った。

「……まあいいや、扇ぐものが欲しかったし。あとは何を買うかなー」

いくつか髪飾りを眺め、黙考する。そんな義人の横では志信が所在無さげに立ち、落ち着かないように視線を彷徨わせていた。

「義人、俺はこういった店は苦手なのだがどうすればいい？」

「いや、普通に商品を見れば良いと思うぞ。何ならミーファとかシアラにお土産でも買ったらどうだ？」

「ぬ……土産か」

義人の言葉を聞くなり、まるで死闘にでも挑むかのように志信の顔つきが変わる。プレゼントなどを選ぶのが心底苦手な志信にとっては、まさしく死闘に違いないのだろう。

真剣な表情で商品を見始めた志信を横目に、義人は桜の花をあしらった髪留めを手に取る。続いて髪留めとしても使えそうな落ち着いた色合いの手櫛（てぐし）を手に取り、最後にもう一回り小ぶりな手櫛を手に取った。小さい方の手櫛は髪留めには使えないタイプのものだが、淡い色合いで品がある。

「それにしても、こっちの世界にも桜があるんだなー」

そんなことを呟きつつ、最初に見ていた扇子と一緒に店主らしき若い女性の下へ近づく。

「いらっしゃいませ。これは全部一緒の袋でいいですか？」
「できれば扇子以外は個別に包んでほしいんだけど……」

義人がそう言うと、女性はクスクスと笑う。

「女の子三人にあげるの？　甲斐性があるのは良いけど、ほどほどにね？」

嫌味なく、楽しそうに笑う女性に義人は苦笑した。

「いや、そんなんじゃないっす。二つはともかく、残りの一つは逃げ道というか、予防策というか」
「あらあら、彼女のご機嫌取り？」

どの世界でもこういう話題は共通らしい。義人は何やら納得したらしい女性に三十ネカ渡し、三つの包みを受け取って扇子はポケットに入れる。

「ありがとうございましたー」

お決まりの商売文句と営業スマイルに小さく笑い、踵（きびす）を返す。そして商品を楽しそうに眺めている優希とサクラに近づくと、それに気づいたサクラが僅かに焦ったように振り向いた。

「あ、す、すいませんヨシト様！　護衛する立場なのにはしゃいじゃって……」

「いや、気にしなくていいよ。護衛も何も、こんな狭い店の中で襲ってくる奴なんていないって」

そう言って義人が苦笑すると、そんな義人の背中に恨めしそうな声がかかった。

「狭い店で悪かったわねー」

先ほどの店員の女性である。

「……すみません。こじんまりとしつつも品揃えが良い、素敵なお店と訂正します、はい」

義人は両手を合わせ、拝むように謝った。女性は満足して引き下がったが、まだ義人の方を見ている。どうやら、プレゼントを渡すところまで見たいらしい。

そのことに内心で苦笑しつつ、義人は受け取ったばかりの包みを二人へと差し出した。

「えっと、なんですか？」

差し出された包みを見て首を傾げるサクラ。優希には毎年の誕生日プレゼントから旅行先のお土産、一緒に出かけた時にも同じようにプレゼントをしているため、包みが何か理解しているようだ。

「今日はサクラに迷惑かけたからな……いや、これからも迷惑かけるけどさ。その埋め合わせというか、プレゼント。あー……贈り物のことな」

そう言いつつ、義人は包みを手渡そうとする。

「そ、そんなとんでもない！？　ヨシト様の手ずから何かをいただくなど！」

するとその瞬間、サクラは慌てたように後退した。そして止めなければ平伏しそうになるのを、優希が羽交い絞めにして捕まえる。

「サクラちゃん捕まえたー」

「ナイスだ優希。よし、そのままでいてくれ」

このままでは受け取ってくれないな、と判断した義人は、包みを解いて中から桜の花をあしらった髪飾りを取り出す。

サクラは優希の拘束から抜け出そうとするが、まさか『強化』を使って振り解くわけにもいかない。

「い、良いですかヨシト様。主従間での贈り物にはそれなりの功績が必要で……そもそもわたしはメイドですよ！？　ヨシト様手ずから何かをいただいては……」

「ふはははは、良いではないか良いではないか」

必死で言い募るサクラを気に留めず、悪代官のような台詞を吐く義人。もちろん悪代官のように不埒な真似はしない。

「ほら、動くなよー。動くとずれるからなー。あと、悪いけど少しだけ髪に触れるな？」

一応そう言ってサクラの髪に触れ、桜の花をあしらった髪飾りを手早くつける。サクラは観念したのか、身動ぎもしなかった。

「よし、できた！」

すぐに髪飾りをつけ、義人は満足そうな声を上げる。優希はすでにサクラから身を離し、正面から覗き込んだ。

「うん、可愛いねー。ほら、サクラちゃんも鏡を見てみるといいよー」

優希の言葉に、サクラは傍にあった鏡を見る。そして自身の髪につけられた桜の髪飾りを見て、ほんの小さく、嬉しそうに笑った。

「安直だけど、サクラだけに桜の花を選んだんだ。しかし、ピッタリだったな」

義人は満足そうに呟くと、次いで優希へと視線を移す。

「あと、優希にもプレゼント」

こちらは慣れたように手渡し、優希も慣れたように受け取る。た

だ、その表情はひどく嬉しそうだ。もしも尻尾があったのなら、千切れんばかりに振っていただろう。

「わたしにも？　わぁ……何かなぁ」

手渡された包みを丁寧に開け、中から小振りの手櫛を取り出す。

「手櫛……ありがとう、義人ちゃん！」

「さすがにヌイグルミとかはなかったからな。ま、気が向いたら使ってくれよ」

「うん！　毎日使うね！」

嬉しそうな優希に義人も微笑む。そして背中に突き刺さる、女性店主の好奇心一杯な視線を努めて無視すると、いまだに悩んでいる志信の傍へと歩み寄った。

「どうよ？　何か良いやつ見つかったか？」

「いや、何を選べば良いのか皆目見当もつかん」

無駄に威圧感を発揮しつつ、商品を見る志信。周りの客はそんな志信から微妙に離れている。

「プレゼントはやめとくか？」

「いや、俺もミーファやシアラには日頃世話になっているからな。何か形あるもので礼をしたい。ふむ、これはどうだろうか？」

そう言いつつ志信は手を伸ばし、同じ作りの指輪を二つ手に取る。

「指輪、ねぇ。二人とも同じものを渡すのか？」

「駄目か？」

「いや、駄目というか……もうちょっとこう、気軽な物がいいんじゃないか？」

ミーファは喜びそうだが。そう付け足したいのを飲み込み、義人は冷や汗を拭う。

義人はシアラとの付き合いが浅いためあまりわからないが、ミーファならある程度は理解している。志信から指輪を贈られれば、それはさぞ喜ぶだろう。だが、もしもシアラが同じものをつけているのを目撃したらと思うと簡単には薦められない。

昼メロよろしく、手に汗握り背中に冷や汗の愛憎劇が起こってはたまらないのだ。

もっとも、そんなことを考える義人も割と危ない立場にいるのだが、それに本人が気づくことはない。

結局、私服の時用に見栄えの良いネックレスを購入すると、装飾品屋を後にした。

店の外に出るなり夕日の光が目に入り、義人は思わず目を細める。右手を上げて影を作ると、口元を小さく笑いの形に変えた。

「もう夕暮れかぁ……早いもんだ」

こちらの世界に来て三ヶ月以上が経ったが、遊び心を持って城下町に来たのは初めてである。その分、時間が経つのは早く感じた。

義人は暮れ行く夕陽を眺めつつ、僅かに覚えた寂寥（せきりょう）感に苦笑する。

「いや、思えばずいぶんと遠くに来たもんだなぁ……」

遠くも何も異世界なのだが、言葉を聞いた優希や志信が何かを言うことはない。義人と同じように夕陽を眺め、そんな三人を見てサクラは顔を伏せた。

「っと、悪い。少し湿っぽくなったな」

それに気づいた義人は、取り繕うように苦笑を笑みに切り替える。そして大げさに背伸びをすると、サクラの方へと目を向けた。

「そんじゃ、最後に酒場に寄って行くか。サクラ、場所は知ってるか？」

「あ、はい。酒場でしたらこっちです」

時刻は九回目の鐘が鳴って少々。つまるところ午後六時を過ぎて数十分程度だ。酒場の様子を見てすぐに帰れば夕食に間に合うだろう。

「それにしても、二時間おきに鐘が鳴るっていうのはけっこう不便だな。一時間おきにその時間分鐘を鳴らすようにさせるか。十時なら鐘を十回鳴らす、みたいにさ」

なんとはなしに呟き、歩く暇つぶしに義人が話を続ける。

「そういえば、なんで二時間おきに鐘を鳴らしてるんだ？　もっとこまめに鳴らしたほうがわかりやすいだろ？」

義人が尋ねると、サクラは僅かに首を傾げた。そして何かを思い出すように宙を仰ぎ見て、口を開く。

「これはアルフレッド様に聞いた話なのですが、八代前……四百年くらい前に召喚された王様の影響だそうです」

「八代前？」

「はい。その時召喚された王様は歴代の王の中でも抜きん出て優れ

ていたそうです。文武両道で、召喚されたときに刀を身につけていたらしく、そのおかげでこの国の主力武器である今の刀が誕生したとか」

サクラの言葉に志信が一つ頷く。

「ふむ、八代前ということはおよそ四百年前か。慶長（けいちょう）何年頃だろうな？」

「およそ四百年前ってところが微妙だな。関ヶ原の合戦の前後数年ってところか？　というか、刀を持ってなおかつ文武両道っていうことは有能な武士でも召喚されたのかねぇ……」

志信の言葉に答えつつ、義人は首を捻る。そんな義人達を見て、サクラは恐縮そうに肩を縮めた。

「わたしからはなんとも……アルフレッド様が詳しいですから、機会があれば聞いてみてはどうですか？」

「そうするか。まあ、今は目の前のことからだな」

そう言って、義人は遠目に見えた建物を見据える。

「『飲み屋』、ねぇ」

西部劇に出てくる酒場のような建物に提げられた看板。そこには達筆に『飲み屋』と書かれており、違和感があることこの上ない。

「おかしいですか？」

げんなりとした義人の表情を見て心底不思議そうに首を傾げるサクラ。義人はパタパタと手を振り、何でもないと言葉を返して『飲

み屋』へと足を踏み入れた。

『飲み屋』に入って中を見渡してみれば、そこそこ客が入っている。客の多くは見るからに土木工事などの肉体労働者らしく、夏の日差しで小麦色に日焼けしていた。酒の入ったグラスや杯を手に持ち、今日一日の疲れを癒しているらしい。中には煙草をふかしている者もいる。

義人達が足を踏み入れると、不躾（ぶしつけ）な視線を送って年恰好（としかっこう）を見て笑い出す。

「おいおい坊や達、ここは子供が来る店じゃないぞ？」

一人の男がそんな声を上げると、他の男達も馬鹿にするように笑う。義人はまったく気にせず、店主らしき中年の男へと目を向けた。

「おっちゃん、四人ね。席は適当に座らせてもらうよ」

そう言って義人達は近くにあった席に座る。すると、それを見た店主が口を開いた。

「注文は？」

「喉が渇いたからお茶で」

「同じく」

「わたしミルク……じゃなかった、牛乳で。あ、ミルクでも通じる？」

「わ、わたしも同じ席に座っていて良いんでしょうか……？　あ、そ、その、牛乳で」

その注文に、再び周りから笑い声が上がる。

「おいおい！　飲み屋に来て酒以外の飲み物を注文するなよ！」
「しかもお茶と牛乳とは！　ハハハハハッ！」
野次染みた笑い声を聞いた義人は、むしろ嬉しそうに笑う。
「なんというか、西部劇のお約束みたいで楽しいな」
ちなみに、カーリア国では飲酒に関して特に法令が定められているわけではない。飲もうと思えば何歳でも飲むことができる。現に、客の中には義人達と大して歳の変わらない者もいた。
運ばれてきた飲み物を受け取ると、それを見計らったように何人かの男達が席を立つ。そして下卑た笑みを顔に貼り付けながら義人達の方へと、正確には優希とサクラへと歩み寄った。
「お嬢ちゃん達、こんなガキと一緒にいてもつまんねーだろ？　こっちに来て一緒に飲もうぜ？」
「そうそう、俺達に酌してくれよ」
多少酔っているのか、男達の顔は赤らんでいる。
「うん、やっぱりお約束だな」
絡んできた男達を見て、義人は小さく呟く。
酒を飲む場所なら何か面白い話が聞けるかと思っていたのだが、酔っ払い相手では期待できない。かといって暴れるわけにもいかないため、義人達はとりあえず無視することにした。
男達はそれから数回話しかけるが、義人達はそれに取り合わず自分達だけでのんびり話す。男達の周囲から『振られてやんの！』などの野次が飛び始めると、男達はすごすごと元の席へと戻っていった。

「ったく、あんな貧相なもやしみたいなガキのどこかいいんだか」
「言えてるぜ」

座った男達からそんな声が聞こえてくるが、義人は怒っても仕方ないので軽く流す。志信とサクラもそれに倣い、優希は“笑顔で”聞き流す。近衛隊も数名紛れ込んでいたのだが、微妙に殺気立ってきたのを志信が手振りだけで制した。

徐々に顔がどうだとか性格がどうだとか悪口の内容が酷くなっていくが、義人はそれを聞きながら別のことへと思考を飛ばす。

やっぱり飲酒や喫煙に関する法律も定めないと駄目か……だけど酒や煙草は庶民の娯楽だしな。何歳を境にするか……他国の法律と照らし合わせないとな。酒税とかはどうなってたっけ？　そういえばこの国の教育制度や就職はどんな仕組みだったか……うーん、けっこう見落としてるところがあるなぁ。城に帰ったら確認してきちんと決めないといけないか。

そこまで考え、義人は我に返る。

「イカンイカン。最近どうにも思考が国のことに流れるな」

周りに聞こえないように口に出し、義人は店主へと目を向けた。

「おっちゃん、トイレ……厠（かわや）借りるよ」

ちょっと気分を切り替えよう。そう思って立ち上がった。

「ちょっとトイレ行ってくる」

そう言い残し、義人は席を離れる。

そして義人の姿が見えなくなって数秒後、笑顔の優希がゆっくりと立ち上がった。

第五十一話：異世界の王様、城下町に出る　その5

義人は矢印と共に厠（かわや）と書かれた板に従い、外へと出る。

この世界の主なトイレは水洗式などではなく、汲み上げ式のトイレだ。所謂（いわゆる）ぽっとん便所と呼ばれるものだが、臭いなどを考慮すると建物の外に作らざるをえないのだろう。　囲いの中に深い穴が掘ってあり、そこで用を足す仕組みだ。傍には手洗い用の水瓶（みずがめ）が置いてあり、義人は少しため息を吐く。

「城のはまだマシだけど、やっぱり一般人が使うトイレはこんな感じか……下水道を作って水洗式にするかねぇ？　でもそんな金はない、と。しかし、あまり不衛生だと変な病気が発生しそうだしなー……って、イカンイカン。気分を切り替えにきたはずが、また余計なことを考えちまった」

ちなみに、城のトイレは一応水洗式である。水洗といっても、常に水が流れているだけだが。

「さーて、トイレ……って、何か騒がしいな」

飲み屋のほうから聞こえる大声を耳にして、義人は首を傾げる。何やら酔っ払いが騒いでいるらしく、騒ぎ立てるような大声が聞こえた。少し聞いていると、さらに少し経って悲鳴が上がる。

「酔っ払いってやだねー。酒は飲めども飲まれるなって言葉を知らないのか？」

あーやだやだと肩を竦（すく）め、義人は気にも留めない。

飲み屋の中で何が起こっているのか知るはずもないが、義人の顔

には小さく笑みが浮かんでいた。

それは、志信にとって驚くべきことだった。

義人が席を離れ、志信が僅かに周囲へと意識を逸らした隙を突くように優希が立ち上がる。あまりの自然さに、サクラはおろか志信でさえ反応するのに数秒を要した。それは、志信にとっては驚くに足る出来事である。

北城の動きに気づくのが遅れるとは……まだまだ俺も未熟か。どうしても意識が緩む。お爺様のようにはいかんな。

優希はカグラやサクラのように戦う術を知らない素人だ。その優希が立ち上がり、数歩歩いた時点でやっと気づいた未熟な自身に対して落胆しつつ、志信は気を引き締めた。

「北城？　どうした？」

すでに席から離れた背中へと声をかける。立ち上がった優希は答えず、笑顔を浮かべながら軽い足取りで騒いでいる男達の席へと向かう。

「お、どうした？　あんなガキより、やっぱりこっちが良かったか？」

歩み寄ってきた優希を見た男達は、揃って下卑た笑みを浮かべる。それに対して、優希も柔らかに微笑んだ。

「義人ちゃんと自分の顔を鏡で見比べてから言ってね？」

そう言って傍にあったグラスを手に取り、一番近くにいた男の頭に酒をぶちまける。

「……は？」

酒を頭からかけられた男は自分の身に何が起きたかわからずに、椅子に座ったまま呆然と優希を見上げた。優希は自分を見上げる男に対して、笑顔を深める。

「義人ちゃんは優しいからあまり怒らないし、どうでも良いことは気にしない。でも、わたしは許さない。さっき義人ちゃんの顔や性格について何か言ってたみたいだけど、“身の程”を弁えようよ、ね？」

それだけを言うと、優希は元の席へと戻っていく。あまりにも堂々と歩き去っていく優希に男達は反応できず、酒をかけられた男が事態を理解したのは優希が席に戻って数秒経ってからだった。

男の顔が徐々に怒りで赤くなっていく。そして、目を見開いて大声を上げた。

「な、何すんだテメエエェーー！？」

元々気の短い性格である。男は怒りを露にすると、椅子を蹴立てて立ち上がった。それに対して、優希はクスクスと笑う。

「手が滑っちゃった。ごめんね？」

笑顔で嘘を吐く。もっとも、嘘ではなく挑発に近いものだったが。

「このガキィ……」

酒をかけられた男と、その仲間が立ち上がる。こういったことはよくあるのか、店主はグラスを磨きながら傍観していた。

「あわわ……ゆ、ユキ様、何をしてるんですか！？」

事態の成り行きに慌てるサクラ。もっとも、彼女が慌てているのは男達が怖いからではなく、何か大事（おおごと）を起こした時のカグラが怖いからだ。そうやって慌てるサクラに、志信はため息を吐く。

「北城を止めなかった時点で俺も同罪か……まあいい。親友を侮辱されて黙っているのは腹が立って仕方なかったところだ」

ゆらりと立ち上がった志信を見て、優希はサクラに目を向けた。

「ほら、藤倉君もやる気みたいだよ？　サクラちゃんは良いの？義人ちゃんを馬鹿にされたんだよ？」

志信と違い、サクラにとって義人は仕えるべき人物だ。それを馬鹿にされたのは確かに腹に据えかねる。

「……わかりました」

カグラに怒られることを覚悟して、サクラも立ち上がる。志信と違って優希を守れる位置に立ち、それを見た男達は笑い声を上げた。

「ははははっ！　こっちは何人いると思ってんだ！」

「男は半殺しにして、女のほうは売り飛ばしてやろうか！？」

一見すれば志信とサクラの二人と、肉体労働で鍛えてそれなりに力の強そうな男が七人の二対七だ。
優希はわたしも戦えたらなーと思いつつ、口を開く。
「そっちは七人？」
「ああ？　それがどうした？　卑怯とでも言うつもりか？」
「ううん、別に良いよ。だって……」
そう言って優希が右手を上げると、男達の周囲に座っていた近衛兵六人が立ち上がる。そしてそれを合図にしたように残りの近衛兵六人が飲み屋へと飛び込み、優希は“楽しそうに”笑った。
「こっちはもっと多いから」
そう言って、優希の右手が振り下ろされる。その数秒後、男達の悲鳴が上がった。
「ただいまーっと……あれ？　人が減ってね？」
トイレから戻った義人は、店内を見回すなりそう呟く。今まで座っていた近衛兵も何人かいなくなっており、それを聞いた優希は小さく笑う。
「“お勘定”を済ませて出て行ったよ？」
「そうなのか？　まあ、騒がしくなくなったからいいけど……ところで、志信とサクラはどうしたんだ？」
義人がそう尋ねると、僅かに肩を落としていた志信と頭を抱えて

いたサクラが顔を上げる。志信とサクラは酷く落胆したように口を開いた。

「俺よりも、北城のほうが部隊指揮に向いているかもしれん」
「カグラ様が怖いです……」
「……はい？」

二人同時にため息を吐き、義人は首を傾げる。
志信は、近衛兵達がやけに生き生きと優希の指示に従っていたことに頭を悩ませていた。
割とノリが良い者が多く、義人に忠誠と友情を混ぜたような感情を持っている近衛兵達は優希が酒をぶちまけたことに喜んでおり、そのため場の勢いで優希の指示に従ったのだが、志信がそれに気づくことはない。
サクラは単純に、カグラに怒られることが確定したので気分が沈んでいた。これほど暴れれば、カグラは絶対に気づくだろう。
目の前で首を傾げる己の主君を馬鹿にされたからだが、どう説明しても怒られるに違いない。
義人はそんな二人を見ながら、そろそろ帰らないとマズイなと店主のところへと歩み寄る。そしてがま口財布を開くと、他の誰にも気づかれないように金貨を三枚……三百ネカほど手渡した。

「ごちそうさま。お茶美味しかったよ。これ、お代ね」
「……お客さん、お代も何も、多すぎるんですが？」

お茶と牛乳を二杯ずつなので、代金は全部で十ネカもかからない。
義人は店主の戸惑いに、苦笑を返す。

「また来ることもあるだろうし、その時は色々と話を聞きたいんでね。あとはまあ……」

義人は一仕事やり終えた顔で椅子に座っている近衛兵達を見て、苦笑を深めた。後は城に帰るだけなので、護衛はそこまで必要ない。志信とサクラがいれば十分だろう。

「あいつらの食事代ってことで。これだけあれば足りるだろ？」

そう言って、背を向ける。

これから城に帰り、この日一番の大仕事をしなければならない。義人はため息を一つ吐くと、近衛兵に解散を告げて飲み屋を後にした。

「お帰りなさい、ヨシト様」

義人がこの日一番の大仕事と評したカグラは、城門の前で仁王立ちしていた。

顔は笑顔だが、怒りを表すように頬が引きつっている。義人は『ズゴゴゴゴ……』という効果音と共に、カグラの怒りで地面が鳴動する様すらイメージしてしまった。

「ぬ……なんという威圧感」

隣で志信が感嘆を込めて呟いているが、その呟きに答える余裕など義人にはない。

「や、やあカグラ。こんなところで会うなんて奇遇だな？」

「そうですね。お城にいるはずのヨシト様と城門前でお会いするなんて、奇遇にもほどがあります」

義人は頭を掻きながら『あはは』と笑い、カグラは口元に手を当てながら『うふふ』と笑う。そんな二人を見た城門の守衛は仕事を放棄してその場から離れ、仕事が終わって城門から出ようとした文官はそのまま回れ右をした。

カグラは目だけ笑わないまま笑い終えると、待っていたと言わんばかりに目を見開く。

「ヨシト様は一体何を考えているのですか！？　わたしが席を外した間に城を抜け出すなんて！」

怒り心頭と言わんばかりのカグラだが、義人としても今回は言い分がある。

「抜け出したって……ちゃんとアルフレッドに許可を取ったぞ？　城下町に行ったのは視察のためだし、一人で抜け出したわけじゃない。志信にサクラ、それに近衛隊。護衛もちゃんとつけてる。問題はないだろ？」

いつもなら頭を下げて謝るところだが、今回は義人が折れるとサクラや近衛隊にまで飛び火する可能性がある。そのため、いつもと違って毅然と答えた。

「そ、それは、そうですが……何故わたしに隠したんですか？」

義人の言うことに正当性を感じたのか、カグラの気勢が弱くなる。それを見て取った義人は、とどめと言わんばかりに苦笑した。

「カグラに言えば絶対に同行しただろ？　でもカグラはこの国では有名人だろうから、一緒にいると俺が王だと気づかれる可能性が高

い。だから言わなかったんだ」

そこまで言うと、義人は姿勢を正して頭を下げる。

「でも、除け者にしたみたいでカグラには悪いと思ってる。すまない」

真摯に告げて頭を下げる義人に、カグラは数秒経ってため息を吐く。それは苦笑の混じったもので、カグラは苦笑と申し訳なさを足して割ったような表情を浮かべた。

「そんなに言われたら、怒れないじゃないですか……ちゃんとした理由があったのなら、わたしにも知らせてください。きちんとした理由なら、わたしだって止めたりはしませんから」

そう言ったカグラの表情は、どことなく寂しそうでもある。そんなカグラの表情を見た義人は、ポケットに入れていた包みを取り出した。そしてカグラに一歩近づくと、包みを手渡す。

「これは？」

「ちょっとしたお土産。開けてみてくれよ」

「はぁ……」

言われるがまま包みを開けるカグラ。そして中身を取り出すと、戸惑ったように義人へ顔を向ける。

「手櫛だよ。髪留めとしても使えるから、もし良かったら使ってくれ」

少し照れくさかったのか、義人は頬を掻く。

カグラは手櫛と義人を交互に何度も見ると、最後にはゆっくりと顔を俯かせた。表情は前髪に隠れて見えないが、雰囲気は悪いものではない。

「ありがとう……ございます」

小さい呟き。その声に込められた感情は、義人にはわからない。だが、少なくとも嫌がってはいないと判断した義人は小さく笑った。そんな義人の笑いにつられたようにカグラが顔を上げる。

透き通った笑顔で、カグラは微笑む。

日が沈んで暗かったせいか、その頬が僅かに赤かったことに気づけた者はいない。

「本当に、ありがとうございます」

――本人ただ一人を除いて。

おまけ。

義人とカグラのやり取りを見ていたサクラは、カグラの怒りが収まったのを見て内心安堵の息を吐く。

――これで怒られずにすみそうです……。

サクラにとっては上司であり、姉のような存在でもあるカグラの説教は長い。その上怖いので、それが回避されたことはサクラにとって嬉しいことであった。

義人につけてもらった桜の髪飾りを軽く撫で、小さく嬉しそうに

笑って義人のほうを見る。
これから夕食を取るだろうから、その準備をしなくてはならない。
サクラがそう考えたとき、カグラと目が合う。
「あ、サクラは後でわたしの部屋に来てくださいね？　少し“お話”したいことがありますから」
にこやかに告げるカグラ。
最後の最後で捕まったサクラは、涙目で肩を落とした。

第五十二話：ミーファ＝カーネルの憂鬱

カーリア国第一魔法剣士隊隊長であるミーファの起床は早い。
幼少の頃から身についていた早寝早起きの習慣は、成長した今でもミーファを自然と目覚めさせてくれる。
城下町から帰ってきた義人の提案により数日後から毎時間鐘が鳴るようになるのだが、ミーファはそんなものがなくても午前五時丁度に目を覚ます。
起きると水場に行って顔を洗い、部屋に戻ると赤い長髪を後ろ…現代で言えばポニーテールのようにまとめ、訓練用の身軽な服装に着替える。そして実戦用の武器の傍に置かれた刃引きされた刀を手に取ると、部屋を後にして訓練場へと向かう。
今の時期は夏も本番。太陽は山際から少しだけ顔を出し、雲一つない青空を照らしている。それを遠目に見たミーファは、僅かに目を細めた。

「今日も良い天気になりそうね」

準備運動をしながら、小さく呟く。
夏とはいえ、日の出直後はまだまだ涼しい。気分が落ち着く清涼な空気を吸い込みつつ、ミーファは体を解す。
体を動かす前には必ず準備運動をしなければならない。突然襲われた時などは仕方ないが、体を解していない状態で激しい運動をすれば怪我につながる。そのため腕や足の筋を伸ばし、ミーファは丁寧に体を解していく。
十五分ほど準備運動をすると、次はランニングだ。魔法が使えるとはいえ、基本的な身体能力が低くては魔法を活用できる幅は狭まる。
『強化』のように体の中だけで魔力を使う補助魔法は魔力消費が

ほとんどない。だが、攻撃用の魔法は別である。補助魔法と併用して攻撃魔法を使えば、魔力はさらに消費されるだろう。

もしも魔力が尽きてしまえば、己の身一つで戦うしかない。そうなると、女性の魔法剣士は男性の魔法剣士に比べて体力や腕力、体格で劣る分不利だ。

気合を入れ、ミーファは走り出そうとする。しかし、それよりも早く自身に近づく気配に気づいて動きを止めた。

「今日も早いな、ミーファ。おはよう」

志信である。

服装は黒の半袖に薄い長ズボン。訓練用に作られたため、激しい動きをしても大丈夫なように丈夫に作ってある。手には訓練用の棍を持ち、今まで走っていたのか額には汗をかいている。

ちなみに、起きるのはミーファよりも志信のほうが三十分は早い。ミーファもそれを知っているため、志信の言葉に苦笑した。

「そんなこと言って、志信のほうが早いじゃない。もう準備運動は終わったんでしょ？」

「ああ。とりあえず町の外まで走ってきたが……今日も零（ぜろ）か」

そう言いつつ、志信は辺りを見回す。

近衛隊に早朝訓練は自主参加という形で通達してあるのだが、“自主”参加のため誰も来ていない。そのことに志信は僅かに肩を落とすが、近衛兵からすれば昼間の訓練だけも精一杯なのだ。もっと体力がつけば参加する者も出てくるのだろうが、今の時点では一人もいない。

六時頃になれば義人が顔を出すが、それまでは大抵志信とミーファの二人で訓練をしている。

「じゃあちょっと待ってて。わたしも走ってくるから」

そう言ってミーファが走り出そうとするが、志信は困ったように眉を寄せながらそれを止める。

「……すまんが、少し待ってくれ」

右手でミーファを制しつつ、左手でポケットから包みを取り出す。ミーファがそれを不思議そうに見ていると、志信は僅かに逡巡したあと包みを差し出した。

「ミーファ、これを」

突然差し出された小さな包みを見て、ミーファは首を傾げる。

「……えっと、なに？」

一応受け取りながら聞いてみるが、志信は答えない。いや、どう答えたらいいのかわからないらしく、四方八方に視線を飛ばしている。

「その、なんだ。昨日義人達と城下町に行ってきたんだが、ミーファには日頃世話になっているからな。その礼と言ってはなんだが、プレゼント……贈り物だ」

贈り物と聞いて、ミーファは目を瞬（またた）かせた。包みに目を落とし、志信の顔を見る。そして再び包みに目を落とし、再度志信の顔を見る。それを数回した後、ようやく現状が理解できたのか一気に顔を赤くした。

「そ、そのっ……あ、ありがとう！　開けてもいい？」
「あ、ああ」

ミーファの反応に少し驚きつつ、志信は頷く。ミーファは丁寧に包みを開けると、中に入れてあった落ち着いた作りで見栄えの良いネックレスを手にとって目を丸くした。

「これを、わたしに？」
「そうだが……違うものにしたほうが良かったか？」

ミーファの反応を不服と受け取った志信が尋ねると、ミーファは慌てたように首を横に振る。

「違うの！　こういうものをもらったことがなかったから、どう反応すれば良いかわからなくて……その、本当にありがとう」

しどろもどろにそう言うと、ミーファは言葉を続けようとして何度か口を開閉させた。しかし、結局言葉が見つからなかったのか顔を俯かせる。そんなミーファにどう声をかければいいかわからず、志信も口を閉ざす。

場が沈黙して数秒。空気に耐えられなくなったのか、突然ミーファが走り出した。

「わ、わたしちょっと走ってくるね！」

それだけを言い残し、ミーファは『強化』を使って脱兎の如く走り去る。ミーファの突然の逃亡に、志信は追うこともできずにその場に立ち尽くした。

「……ふむ、やはり指輪のほうが良かったのだろうか」

ポツリと見当違いのことを呟き、志信は訓練用の棍を握る。
とりあえず、ミーファが戻ってくるまで体を動かしておくことにした。

風を切りながら疾走するミーファは、自身の感情を整理できないでいた。
男性からの贈り物など、ミーファの人生の中でもそうない。あることはあるのだが、それは自分の部隊の者達からの贈り物などで、隊長と部下以上の関係はなかった。だが、今回は違う。
友人としてか、はたまた違うものか。志信がどんなつもりだったのかわからないが、喜び以上の感情を覚えている。
その感情が何なのか、ミーファにはまだわからない。それでも心が浮き立つような感覚に、僅かに頬が緩んだ。

落ち着くのだ、ミーファ＝カーネル。心頭滅却して心身の合一をしなさい。動揺したままでは訓練に身が入らないぞ。深呼吸をすれば落ち着くわ、きっと。

仕事用と日常用の口調が心の中で混ざり合う。それに気づかないほどミーファは動揺していたのだが、走る足を止めて数回深呼吸をして顔を上げた。

「……よし、落ち着いた。うん、これなら大丈夫」

胸に手を当て、一つ頷く。
結局、途中から早朝訓練に参加した義人に一本取られるほどに動揺したままだった。

昼休憩も終わり、午後の訓練が始まって多少時間が経った頃。ミーファもすでに落ち着きを取り戻し、部下との訓練に励んでいた。

義人が新しく軍を編成したことにより、隊長であるミーファが指示を出す回数は減っている。そのため自身の鍛錬に時間を当てられるのだが、そうなると疲労が蓄積されるのも早くなるため適度に休憩を取らなくてはならない。

夏場はとにかく汗をかくので、ミーファはキリがいいところで素振りを止めて水分補給をするために水場に足を向ける。そして、その途中で足が止まった。

「あれは……シノブとシアラ隊長？」

そう呟きながら向けた視線の先。水場から少し離れた木の下で、志信と魔法隊隊長のシアラが向き合っている。

何故か、手をつなぎながら。

それを見たミーファは、咄嗟に息を潜めて気配を消し、ゆっくりと近づくことにした。

「……駄目……が……」

「……ない……だが……」

「……うん。……中で……」

「……もっと……たい……」

風に乗って、途切れ途切れの会話が聞こえてくる。朝方とは違う、鉛のような重苦しさを感じながらも、ミーファは歩を進めた。

今日は近衛隊に休暇を与えているため、志信は他の隊の訓練に混じっていた。午前中は歩兵隊の連中と訓練し、午後は“とある事情”で魔法隊へと赴く。午後といっても、歩兵隊での訓練に熱が入ったおかげで午後の訓練開始から多少時間が経っていたが。

志信は隊長であるシアラを見つけると、まっすぐそちらへと向かった。

「シアラ。少しいいか？」

志信の来訪に、シアラは無言のままで頷く。とりあえず部下に休憩を言い渡すと、志信を連れて木陰へと移動した。

「……どう？」

主語のない短い問いに、志信は首を横に振る。

「相変わらずだ。すまないが、また試してもらっていいだろうか？」

志信がそう言うと、シアラはそっと右手を差し出す。志信は特に躊躇うことなくその手をつかむと、深呼吸をして精神を落ち着けた。

「……じゃあ、魔力を全身に送って」

志信は自然体に立ち、言われた通りに体内の魔力を全身へと送る。一応補助魔法の『強化』ではあるが、まだまだ安定感がない。

すると、魔法の発動を察知したのかシアラは繋いだ手を基点に『吸収』を発動した。だが、数秒して首を横に振る。

「……駄目。やっぱりシノブは、魔力が外に出ない」

魔力はあるが、体外に出せない。志信が魔法という存在をシアラに学ぼうとして、最初に気づいたことである。

魔力があり、操作できるが体の外に出すことができない。前例がないわけではないが、珍しい現象だった。

魔力がない、もしくは、どうやっても操作することができなければ魔法を使うことはできない。志信の場合、魔力はあって操作もできるが体の外に出すことができなかった。

試しに魔力を『吸収』しようとしたが、吸い取ることもできない。いわば、志信の魔力は密閉された入れ物に入った水のようなものだ。減らないし、増えることもない。

ちゃんとした補助魔法を使えるようになれば少しは減るのだろうが、志信はまだ『強化』すら完璧に使うことができないでいた。

「何度やっても変わらないか。だが、体外に魔力が出せなくても補助魔法は使えるのだろう？」

「……うん。補助魔法は、体の中でしか魔力を使わないから」

「そうか。もっとも、俺としてはありがたい話だがな」

自分の中の魔力という存在から意識を切り離し、志信は集中を解く。すると、志信の言葉を聞いたシアラは首を傾げた。

「……なんで？　魔法は、使えたほうが便利」

「それはそうだろうが……魔法を使うのは少々気が咎めてな。特に、魔法を使った遠距離からの攻撃は嫌いなんだ」

正確には魔法という存在が嫌いだったのだが、さすがにそこまで口にはしない。

志信としては、自分自身が積み重ねて身につけた以上の力を発揮できる『強化』などは邪道に思えて仕方なかった。自分自身にも似

たような効果が働いているのだが、できれば消えてほしい。そう思って、“魔法を使わないため”に魔法を覚えようとしたのだが、前途多難である。

「……でも、この世界では魔法が使えた方が良い。せめて、『強化』くらいは使いこなせないと」

「『強化』か。今の状態で使いこなせたらどうなるのか……」

一応、『強化』もどきは使えるようになった。だが、元々『強化』と似たような効果が働いているため、あまり効果を実感できない。

ちなみに補助魔法には『吸収』や『無効化』、『反射』などといったものも含まれている。

『吸収』とは文字通り、魔力を吸収する魔法だ。魔法というよりも技術といったほうが近いが、自身が触れているものから魔力を吸収することができる。ただし、『魔石』などに内蔵されている純粋な魔力ならともかく、他人の魔力を吸うのはあまり体に良くない。個人個人で魔力に特徴があるので、他人の魔力を自分のものとして完全に扱えるものなど吸血鬼などの一部の魔物だけだ。

『無効化』は触れた魔法などの効果をなくすもので、志信が使う棍にも使われている魔法だ。優れた魔法使いならば体内の毒なども無効化できるが、その場合は治癒魔法の適性がないとできないので割愛する。

『反射』も文字通り、魔法を反射する魔法である。触れた魔法を跳ね返すことができ、『無効化』よりも一段上の魔法だ。

これらは聞けば便利な魔法だと思えるが、欠点がある。

それは、『触れなければ効果がない』ということだ。その上、高度な魔力コントロールが必要になるため習得するのが難しい。

言い方を変えれば高度な魔力コントロールができれば習得できるのだが、才能があっても年単位の修行が必要だ。そのため、大抵は武器や防具などに『魔法文字』で刻み込むのだが、その『魔法文字』

を刻める人間も限られてくる。
『魔法文字』を刻むには微細な魔力コントロールが必要で、『魔石』を削って作った特殊な道具を使って文字を刻む。なおかつ、魔法を刻むには自分もその魔法を使えなくてはならない。しかも一つの魔法を刻み込むのに数日かかることもあり、『魔法文字』が刻まれた武器は稀少で高値で取引されていた。
そうなると、基本中の基本である『強化』以外の補助魔法は軽視されがちである。習得するのが難しいというのもあるが、『強化』と違って使えなくても問題はない。『強化』をかけつつ武器を振るい、攻撃魔法を使ったほうが簡単かつ有効だからだ。

「何はともあれ、まずは『強化』だな」

志信は右手を握り締め、小さく呟く。
たしかに、この世界では魔法が使う必要があるかもしれない。元の世界では自分の体一つで戦う術を学んだが、この世界はそれだけでは戦えないだろう。そう考え、志信は目を閉じる。

「郷に入りては郷に従え、か」

使えるものを使わねば死ぬ。幸いにして自分には戦う術があり、それを後押しできる補助魔法も使える。そのためには、まだまだ修練が必要だ。
自分にそう言い聞かせ、志信はシアラに向き直って一礼する。

「これからも、魔法の指導を頼む」
「……うん。わかった」

頷くシアラの首元には、志信から贈られたネックレスがかけられていた。

志信とシアラのやり取りを遠目に見ていたミーファは、ゆっくりと地面に目を落とす。

たしかに、魔法のことならば魔法隊隊長のシアラを頼るのが筋だ。この国きっての魔法使いであるカグラは義人やアルフレッドと共に政務に励んでおり、志信に魔法を教える暇はあまりない。

ミーファも魔法を使うが、彼女は教える側の人間ではなく使う側の人間である。

戦い方を指導する立場ではあるが、魔法を教える立場の人間ではない。また、他人に懇切丁寧に教えられるほど魔法に精通しているわけでもないのだ。

かといって、志信に戦い方を教えることもできない。むしろ教わることのほうが多く、精々模擬戦の相手を務めるぐらいしかできない。

シアラは志信を頼り、頼られることができる。しかし、自分は志信に頼ることしかできない。

ミーファはそのことにもどかしさを覚え、胸が締め付けられるような感覚を覚えていた。

「この気持ちは……なんだろう？」

すでに、早朝訓練の時の嬉しさや晴れやかさはない。

呟くミーファは、いまだ己の感情を理解できずにいた。

第五十三話：カーリア国最強の男

城下町視察から三日ほど経ち、義人はいつも通り執務室で書類の山を片付けていた。

山と言っても以前のように大量の高い山ではなく、低い山が二つ程度である。ゆっくりと片付けても午後三時ぐらいには終わるだろう。

政務を片付ける傍ら、義人は手元の紙に色々と書き込んでいく。あーでもないこーでもないと言いながら筆を走らせる義人に、部屋に入ってきたカグラは首を傾げた。

「何をしているんですか？」

「これ？　これはちょっと公共事業の案を考えてるところ」

「公共事業、ですか？」

カグラが覗き込んで見てみると、一枚の紙に様々なことが書かれている。予算から必要な人員、どんな事業にするかなど。

紙を見て眉を寄せるカグラに対して、義人は苦笑する。

「一昨日城下町を見てきたんだけど、色々と気になるところがあったからな。それに、昨日調べてもらったら王都だけでも職に就いてない者がけっこういることもわかった」

引き出しを開け、今度は別の紙を取り出す。カグラが受け取って見てみると、そこにはいくつか数字が書かれていた。

農民だけではなく、商人や職人、一般職についている者も六割の税金を納める。しかし、働いていない者は金がなく、税金を納められるはずもない。

働けない老人や子供は仕方ないが、働けるのに働かない若者や失

業した者はそれなりにいる。
カーリア国は魔物の多さや国の特性上、他国から流民はほとんどこない。そのためいきなり人口が増えることはなく、年々少しずつ増えているだけだ。
そして、国民の中には働かない者もいる。働けないではなく、働かないのだ。
性質（たち）が悪いものになると、盗賊や追い剥ぎをする者もいる。城下町で義人達から金を奪おうとしたのもそんな連中だ。

「そいつらに仕事を与えて働かせる。そして給料を渡せば金を使う。そうすれば金が回り、商業が活気付く。農村で用水路を作らせたりすれば農業も発展する。金があれば盗賊や追い剥ぎをする奴も減るだろうし、仕事があれば馬鹿なことをしでかす奴も減るだろ？」

資料を見ながら義人の話を聞いたカグラは、納得がいって頷く。

「なるほど……給料はいくらぐらい払いますか？」
「そこは財務大臣のロッサと話して決めるさ。肉体労働だから、国の平均賃金ぐらいは出さないとな」
「ですが、今年分の国家予算が残り少ないですよ？　税率を引き下げましたから、来年はもっと減るでしょうし……」

義人は残りの国家予算を思い出し、苦く笑った。

「まあ、多少無理な金の相談でもロッサならなんとかしてくれるだろ。何なら、必要な物を残して宝物庫の中身を売り払っちまえ」

義人がそう言った時、財務大臣のロッサは妙な悪寒を感じていたが、本人がその理由を知るのはまだ先のことである。

「まだ決まったわけじゃない。あくまで一つの案だからな。決めるにしてももっと中身を煮詰めて……」

その時、話す義人を遮るように執務室の扉がノックされた。強めに叩かれた音に、義人は話すことを止める。

「よ、ヨシト王！　至急お伝えしたいことがあります！」

「ん、何だ？　志信か優希が問題でも起こしたか？」

外からかけられた声に反射的に答え、義人は首を傾げた。

「んん？　なんか前にも同じことがあったような……とりあえず、入ってくれ」

「失礼します！」

そう言って慌てたように入ってきたのは、第一魔法剣士隊の副隊長であるシセイ＝ホールドだ。以前も同じようなことがあったなと、義人は内心で苦笑する。

「どうしたシセイ？　またミーファが志信と試合をするとでも言い出したか？　あ、サクラお茶のお代わりちょうだい」

「は、はい」

雑事をしていたサクラにお茶を注いでもらい、義人は口元へと運ぶ。

「違います！　それが、その……」

「ん？」

「アルフレッド様がシノブ様と戦われると！」

「んぐっ！？」

名前を聞いた瞬間、義人はお茶が気管に入り込む。そして数秒後に咳き込むと、平静を装って顔を上げた。

「……何故に？」

「ヨシト様、頬にお茶が……」

サクラに指摘され、義人は袖で拭う。そして深呼吸をすると、もう一度尋ねた。

「アルフレッドが？　なんで？」

「志信様に稽古をつけるだとかで……とにかく、ヨシト王にお伝えせよとミーファ隊長に言われまして」

シセイの言葉に、義人はカグラへと目を向ける。カグラはそれに頷くと、真剣ながらも小さく笑った。

「アルフレッド様が……良い機会ですし、見に行きますか？」

何が良い機会なのか義人にはわからなかったが、カグラの口調では危険はないらしい。そう判断した義人はすぐに頷く。

「よし、見に行こう」

ノーレを腰に提げ、義人は歩き出す。カグラやサクラ、シセイもそれに従った。

第一訓練場に入るなり目に飛び込んでくる野次馬達。どうやらア

ルフレッドと志信が戦うという話を聞いて集まってきたらしい。

「はいはいごめんなさいよーっと。ほら、通してくれー」

「誰だ……って、ヨシト王!?　こ、これは失礼しました!」

声をかけてきたのが義人だとわかると、人ごみが真っ二つに割れる。義人は『いや、悪いねー』と苦笑しながら進み、カグラ達もそれに続く。

人ごみの中央では志信とアルフレッドが向き合っていたが、義人の姿を見るなり緊張を解いた。

「おや、ヨシト王だけではなくカグラまで見に来たんじゃな。政務は大丈夫かの?」

アルフレッドがそう尋ねると、カグラは苦笑する。

「少しだけなら大丈夫です。しかし、どういう風の吹き回しですか?」

「なに、最近体や感覚が鈍(なま)ってきておるからのう。たまには動かさんとな」

いつもの和装ではなく、志信のように身軽な服装で笑うアルフレッド。外見は初老の男性で身長は百六十五センチほどと少し低いが、肉体は引き締まっている。筋骨隆々とまではいかないが、明らかに“戦い”を生業とする者の肉体だ。

義人は隣のサクラにこそこそと耳打ちする。

「なあ、アルフレッドって強いのか?」

小声で聞かれ、サクラも小声で返す。

「強いも何も、わたしやカグラ様に体術を教えたのはアルフレッド様ですよ？」
「……マジで？」
「はい。エルフという種族は魔力も高いですし、弓や剣などの武器も扱えます。それに加え、人間とは違って寿命が長いので数百年分の経験がありますから」
「サクラとどっちが強い？」
「アルフレッド様です。まともに戦えば、カグラ様でも勝てるかどうか……」

サクラの言葉に感心する義人だが、少しだけ気になったことがあったので尋ねてみる。

「ちなみに、カグラのまともじゃない戦い方って？」

義人の質問に、サクラは僅かに顔を青ざめた。そして、カグラに聞こえないよう小さく呟く。

「全開で『強化』を使って高速移動しつつ、上級魔法を連続で放つ……魔力量が並の魔物よりも高いカグラ様だからできる戦法です。もっとも、今は召喚の影響で魔力が減っているので実行するのは無理だと思いますけど」
「なるほど。そいつは最強だな」

ヒュウ、と口笛を吹きつつ、余裕を装う義人。その光景を想像して少し足が震えていたが、気づく者はいない。
そんな義人達にアルフレッドが目を向け、いつもの好々爺染みた笑顔を浮かべた。

「儂など、今のカグラにも敵わんよ。サクラにも負けるかもしれんのう」
「……聞こえてたのか」
「エルフは耳も良いんじゃ。さて、ヨシト王。シノブ殿と手合わせしたいんじゃが、良いかのう？」
良いかと聞きつつも、すでにやる気満々である。義人はため息を吐きつつ、実際にどのくらい強いのか気になるので頷いた。
「二人とも無茶はするなよ？」
「無論じゃ」
「……ああ」
義人の言葉に返事を返す二人だが、志信の声は固い。志信は一見いつもの無表情だったが、義人は志信の表情を見て内心だけで驚く。
志信が緊張してるなんて珍しいな……いや、志信が緊張するぐらいアルフレッドが強いのか……？
義人がそんなことを思っていると、カグラが義人の前へと歩み出る。
「ヨシト様はもう少し下がってください。アルフレッド様のことだから大丈夫だと思いますが、“地面が割れて”破片が飛んでくるかもしれません」
「ちょっと!?　今さり気なくとんでもないこと言ったよな!?」
「気のせいです。それとお二人とも、もしもわたしが危険だと判断したら止めます。良いですね？」
カグラの言葉に、アルフレッドと志信は頷く。もっとも、カグラ

の表情からすると実際に止める気はないのだろう。いや、止める必要がないのかもしれない。

「では……」
「うむ」

アルフレッドと志信が向き合う。
志信は一礼すると、一番得意な武器である棍を構えた。
対するアルフレッドは無手のまま自然体で立つ。
カグラは周囲の兵にも少し下がらせると、二人の中央に立って右手を上げて……振り下ろす。

「それでは……始め！」

そんな掛け声の下、アルフレッドと志信の“訓練”は始まった。

「……ははっ、ありゃ人間業じゃねぇな」

目の前の光景を見た義人は、やや呆れを含んだ呟きを漏らす。それを聞いたカグラは苦笑した。

「ヨシト様。アルフレッド様はエルフですよ？」
「揚げ足取るのは止めてくれっての。いや、本当に驚いた。まさか……」

一度言葉を切り、戦うアルフレッドと志信をもう一度見てため息

を吐く。

「志信が一発も当てられないなんてな」

そう言いつつも、目の前の光景から目を離さない。目を離せば、二人の動きが追えなくなる。

「はっ！」

志信が裂帛の気合と共に棍を突き出す。それは手加減も容赦もない、高速にして最短の距離を貫く一撃。

「ふむ、中々速いのう」

だが、アルフレッドには当たらない。無手のままで、棍を弾くでもなく受け止めるでもなく、体捌きだけでかわしていく。

それは紙一重の回避。直撃すれば肋骨（ろっこつ）の二、三本は軽くへし折れそうな打突を前に、アルフレッドは涼やかな笑みすら浮かべていた。

すでに開始から三分。志信の棍が百回以上振るわれてもなお、有効打はおろか掠りもしない。

周りの兵士も最初こそは騒いでいたが、今では二人の動きを少しも見逃すまいと沈黙していた。

志信は最初からこうなることがわかっていたのか、表情に焦りの色はない。ただ、自分よりも上の者の動きを読み取ろうとしていた。

足捌き、重心の位置、視線の動き。どこか一部分を見るのではなく、アルフレッドの全身を“観る”。そうすることでアルフレッドの動きを読もうとするのだが、それを見越したかのようにアルフレッドは内心だけで笑った。

――――なるほどのう……速く、鋭く、才気に溢れておる。動きに

もほとんど無駄がないわい。歳に見合わぬ腕前……余程良い師に学んだか、シノブ殿自身の努力か……いや、その両方かの。

志信の攻撃を避けつつも、心の中でそう評す。

並の使い手が相手ならば、十分以上に渡り合えるだろうと。そう思いつつも、アルフレッドは避け続ける。

そんなアルフレッドの余裕を読み取ったのか、志信の動きが変化する。今までは棍先を使った打突を中心にしていた。それは一撃の威力と速さに重きを置いた攻撃だったが、ここで志信は威力を捨てた。

「む？」

アルフレッドの顔色が変わる。

志信の攻撃が当たったわけではない。しかし、さっきと比べて明らかに攻撃が速くなってきている。

志信は自分でも気づいていなかった力みを抜き、ただ速く動く。棍を突き出し、引き戻す。棍を回転させ、石突で打ち上げ。時には距離を詰めて蹴撃を見舞う。

無駄のなかった動きはさらに洗練され、加速していく。

「すげえ……」

そんな志信の動きに、義人は自然と感嘆の込もった呟きを漏らしていた。

同い年の親友を、心底すごいと思える。それと同時に、例えようのない羨望も覚えた。

「本当に、すげえ」

義人にも、強さに憧れる心はある。志信のように戦えたら、どれだけ違う世界が見れるのかとも思う。

だが、自分では無理だ。志信のようにはなれない。そう思ってしまい、義人は微苦笑する。

「やっぱりさ、お前はすごいよ志信」

妬(ねた)むでもなく、僻(ひが)むでもなく。義人はただ、賞賛した。

結果として、アルフレッドには一撃も当たらなかった。

五分以上全力で動き続けた志信は、動きが乱れた隙を突かれて投げ倒され、荒い息を吐きながら地面に転がっている。額からは汗が流れているが、表情は清々しい。まだまだ自分の腕が伸びることを確信でき、充実感から拳すら握っていた。

それでもゆっくりと立ち上がると、姿勢を正して一礼する。

「……はぁ、はぁ……ありがとう、ございました……」

「なんの、儂も良いものが見れたわい。才能溢れる若者を見ると、儂も若返る気分じゃよ」

「ご冗談を。貴方は、まだまだお若い……俺の動きは、全て読んでいたんですね？」

何の気負いもなく尋ねる志信に、アルフレッドは首肯した。

「途中からは少し読みにくくなったがのう。まあ、これでもお主の何十倍も生きておる。それに、儂も昔は暴れておったクチでの。経

験は何事にも勝るものじゃよ」

そう言ってアルフレッドが浮かべた表情は、どこか悪ガキ染みている。その顔を見た志信は、おかしそうに笑った。

「なるほど……貴方に比べれば、俺など殻を被ったヒヨコのようなものですね」

志信は武術を学び始めて十三年。それに対して、アルフレッドは数百年。アルフレッドも昔に比べれば腕は落ちているが、それでも何百年もの経験がある。そして、人間とエルフという種族の差は大きい。

「なに、ヒヨコならまだまだ成長するじゃろう。シノブ殿はまだまだ伸びる余地がある。それは儂が保証するわい」

アルフレッドの言葉に、志信は黙って一礼する。

そんな二人のやり取りを見ていた義人は、とりあえず拍手をしながら会話に割って入ることにした。

「いや、すごいなー。というか、アルフレッドって強いんだな」

強いというレベルを超えていたが、義人としてはそう表現することしかできない。そんな義人の賛辞に、アルフレッドは苦笑交じりに笑う。

「なんのなんの。儂も昔に比べれば老いたもんじゃよ」

「昔？　暴れてたって言ってたけど、その頃か？　良ければ聞かせてほしいんだけど」

「儂にとっては恥ずかしい話じゃがな……まあいいじゃろ」

そう言ってアルフレッドは義人達を促し、木陰へと移動する。
それを見送った各隊の隊長は、今の戦いの感想で盛り上がっている兵士を連れて各々の訓練場へ戻ると、中断していた訓練を開始した。

アルフレッドと志信の試合に触発されて、いつもより訓練に熱が入っていたというのは余談である。

第五十四話：宰相アルフレッド

木陰に移動した義人達は、アルフレッドの話が聞きやすいように車座に座る。
その際カグラが『王が地面に座るなど』と義人に対して説教をしようとしたがそれは割愛する。

「んで？　アルフレッドの昔話を聞かせてくれよ」

カグラを宥めつつ、それでも興味津々といった表情の義人。その右隣には騒ぎを聞きつけて駆けつけた優希が座り、左隣には志信が座っている。ノーレは腰から抜いて義人の傍に置かれ、カグラやサクラはすでに聞いたことがあるのか、リラックスしたように座っていた。

「そうじゃのう……では、最初に八代前の王について話しておくとするかの」

優希が来るついでに持ってきた麦茶で喉を湿らせつつ、アルフレッドの昔話は始まった。

時はカーリア国歴四百年、五月十二日。
現代から四百年前のその日、カーリア国において新しい王が召喚された。
名を杉田晴信義景（すぎたはるのぶよしかげ）。
腰に大小の刀を差し、歳は二十歳過ぎの着物姿の男だった。頭には髷（まげ）を結い、身分は武士である。

その当時の日本は関ヶ原の合戦も終わり、豊臣から徳川の世へと変わりつつある時世。

そして、晴信は登城する最中にこちらの世界へと召喚された。

「な、何事！？」

召喚の陣の上に召喚された晴信の第一声は、戸惑いの声だ。登城するために道を歩いていたら突然何かに腕を引かれ、これまた突然目の前に現れた黒い穴へと吸い込まれた。何が起きたのかわからない晴信は、自分を取り囲む見知らぬ者達を呆然と眺めることしかできない。

「四代目の王の召喚の儀、成功ですね……」

そんな中で、一人の女性が安心したように声を上げる。それは少し聞き取りにくいものの、れっきとした日本語だった。その声を皮切りに、周囲の者達も騒ぎ始める。

――なんだ、こやつらは？

晴信が戸惑いながらも思ったことは、その一言に尽きる。

声を上げた女性は黒髪に巫女服という和装なのに、周囲にいる者達の中には晴信が見たこともないような髪の色の者がいる。さらに手には変わった形の槍や両刃の剣など武器らしきものを持ち、着込む鎧は日本のものではない。

驚きつつも冷静に観察していた晴信に、最初に声を上げた女性……四代目カグラの名を継ぐ女性が歩み寄る。

「っ！？」

その瞬間、晴信の体が動いた。五歩で詰めるつもりだった間合いを一歩で詰め、自分でも驚くほどに軽い体に驚愕しつつもカグラの背後を取る。そして瞬時に脇差を抜き放つと、カグラの片腕を捻り上げながら首筋に脇差を当てた。

この時ばかりは、武士としての矜持も何もない。婦女子に手をあげるなどと必要のないことを思う余裕はなかった。

「動くな！　お主ら一体何者だ！？」

周囲を警戒しつつ声を上げる。そんな晴信の行動に、周囲の者達は慌てて片膝を突いて無抵抗を示す。いや、あるいは恭順を示したのかもしれない。

周囲の人間が全員膝を突いたことに、晴信の混乱はさらに深まるばかりだ。

「突然の召喚、申し訳ありません」

そんな中で、晴信に声をかけたのはカグラである。片腕を捻られながらも、冷静な声で晴信に話しかけた。

この国が召喚国主制で、晴信は王として召喚された者だと。晴信の力が必要だと。カグラは冷静に、それでいて必死に話す。

いくら召喚の影響で疲れていたとはいえ、この『カグラ』である自分でも反応できない速度で今の状態を作ったのだ。もしも万が一、この場から逃げようとされたら止めることは難しい。

周囲で膝を突いている者の中には魔法剣士もいるが、カグラに比べれば数段どころか桁で劣る。召喚した王の身のこなしは武を修める者の動きであり、手には武器もある。その上召喚された王に起こる、『強化』に似た効果が味方していた。

カグラはそれらの状況を踏まえ、晴信に変な気を起こさせないよう細心の注意を払いつつ話を進めていく。

その結果、晴信は脇差を鞘に納めた。カグラの言葉に嘘はなく、元の世界に帰ることはできないと聞いて、暴れる気もなくなった。

それなりに高い地位にいたが、いまだ独り身の晴信である。帰る家には使用人しかおらず、女房などはいない。仕えていた殿や家族に申し訳ないと思いつつも、しばらく帰れないのなら仕方がないと割り切った。もしも帰れなくても、家督は弟が継ぐだろう。

「申し訳ありませんが、王のお名前をお聞きしてもよろしいですか？」

沈思黙考していた晴信だが、その一言で現実に引き戻される。

王様。晴信に言わせれば一国一城の主、殿様だ。だからというわけではないが、晴信は自然と背筋を伸ばしていた。

「杉田晴信義景だ。義景は諱故、晴信と呼んでほしい」

「ハルノブ様ですね……わかりました。わたしはハルノブ様の補佐をさせていただく、召喚の巫女カグラです。カグラとお呼びください」

召喚の成功と、王を納得させたこと。その二つが成功したと思い、責任という重圧から解放されたカグラは力みのない、それでいて自然で綺麗な笑顔を浮かべる。

その笑顔を見た晴信は、ふむと頷き笑い返した。

「お主のような見目麗しい女子に補佐してもらえるなど、男冥利に尽きるな」

そう言いつつ、晴信は『召喚された良かったなー』と内心で呟く。

自分があの一帯で最も王に相応しい人物と聞き、驚きつつも喜んだ。武士として、一国一城の主になることは夢に見る出来事である。

こうして四代目の王、杉田晴信義景は異世界へと召喚された。この時代は最もカーリア国が栄え、最も変化を果たした時代とも言える。

まず、主要武器の変化。これは召喚当時晴信が身につけていた刀を見本に、三ヶ月後には刀を作ることに成功。そして、晴信の知識と他国の文化を汲み取りながらカーリア国の生活様式も変化していった。

極東の国ジパングで栽培される米を取り寄せて自国で栽培し、主食を米に変える。

カーリア国の各地を流れる川を治水し、周囲の町村の安全を確保。土地を開拓して自国の食料自給率の向上。また、農業や商業の発展。

隣国であるレンシア国との交易が始まったのもこの頃からである。晴信は次々と国を改良し、民の生活を豊かにしていった。武士として、文武共に優れていた晴信だからこそできたことである。そして領民にも慕われ、城の兵士にも慕われていた。ただ、今の西洋風の城が気に食わなくてカグラに破壊させ、晴信の知る日本風に築城し直そうとしたときはさすがに止められたが。

明るく気さくな晴信ではあったが、どうにも西洋の文化は好きではなかったらしい。そのため、西洋刀である風と知識の王剣ノーレは最初に一度抜かれただけだった。

そのため、晴信に名前を与えられることもなく、また、魔力を『吸収』することもできないため思念通話で喋りかけることもできなかった。

その後も代々使われることなく、ノーレが本当の使い手として義人と出会うのは四百年後である。

閑話休題。

順風満帆だった晴信だったが、ここで問題が立ちふさがった。

「西の森の魔物が暴れているだと？」

それは、魔物の問題である。義人もぶつかった問題ではあるが、元の世界には魔物などいなかった。妖怪などの存在は信じられていたが、晴信は遭遇したことなどない。

「討伐隊は？」

「向かわせましたが、手酷くやられて敗走しています。死者は出ていませんが、どうやらエルフがいるようで……」

「エルフ？」

「魔物の一種です。姿形は人間に似ていますが、内包する魔力が人間よりも高い上魔法の扱いにも長けています。その上武器を扱うこともできる種族です」

「ふむ……危険な魔物なのか？」

晴信が尋ねると、カグラは眉を寄せた。エルフは魔物としての格は中の上程度で、中級の魔物の中では強い部類に入る。温厚で人間とも親しい種族ではあるが、その戦闘能力は高い。

「いえ、本来は領土を侵さなければ大人しい種族なのですが……」

カグラはおかしいと思っているため、歯切れが悪かった。そんなカグラを横に、晴信は真剣な目をしている。

「人型……美形だろうか？　いや、ここは美人だろうかと聞いたほうがいいか？」

そして、少々頭の弱い発言をした。英雄色を好むというわけではないが、晴信も男である。ぽろっと、気になることが口から零れてしまった。

「エルフは整った顔立ちを持つ魔物ですが……って、何を言っているのですかハルノブ様！」

カグラは質問に答え、その途中で発言がおかしいことに気づく。そして、怒りで僅かに顔を赤らめながら晴信の頬を引っ張った。

「ひはいひはい！　ひっはるな」

「もう！　ハルノブ様はいつもそんなことばかり言って！」

頬を引っ張られながらも笑う晴信。引っ張るカグラは顔を赤くしている。その理由は色々とあるのだが、強いて言えば嫉妬だった。

晴信が召喚されて一年と少々。いつの間にか晴信とは気安い仲になっていた。誰とでも打ち解ける晴信の人柄も原因だが、刀を握った晴信は自分でも勝てない強さがある。その強さに惹かれ、人柄にも惹かれた。そんな晴信が他の女性について聞いてくるなど、腹が立って仕方がない。

「おー痛い痛い。頬が千切れるかと思うたぞ」

「知りません！」

ぷいと横を向くカグラに、晴信は苦笑する。だが、表情を引き締めると傍の刀掛けに置かれた愛刀を手に取った。

「討伐隊が勝てぬのなら、我らが出張らねばな。そうであろう、カグラ」

そう問いかける言葉には、深い信頼が込められている。

当代、カグラを除けば兵の質は悪い。魔法剣士の隊長でさえも、中級魔物を相手にすれば勝ち目は薄いのだ。晴信が政務の傍らに指導しているが、練度は低い。この時代のカーリア国においては、王

やカグラが戦わねば片付かない問題だった。
その真剣な声を聞いたカグラは、膨らませていた頬を元に戻してため息を吐いた。

「もう、ずるいですよハルノブ様……」
「ん？　何がだ？」
「何でもありません！　さあ、行きますよ！」

晴信に背を向け、カグラは歩き出す。その背を見ながら、晴信は苦笑しつつ刀を腰に差した。

カーリア国の西側は、魔物の森である。奥に行けば行くほど危険な魔物が存在し、好んで森の奥に行く者などいない。一説では龍種も住み着いているという話だが、真偽を確かめた者はいなかった。

「ここが西の森か……ちと嫌な空気が漂っているな」
「ここまで来て言うのもなんですが、ハルノブ様は無理をしないでください。私が片付けます」
「……女子の背に隠れておれと？」
「王様ですから。雑魚を倒して鬱憤を晴らしていてください」

ニコリとカグラは笑う。晴信も来ているが、自分だけで片がつくだろうと思っていた。それでも晴信を連れ出したのは、王という職務で溜まった日頃のストレスを少しでも晴らしてもらうためである。
晴信は納得しなかったが、ひとまず件（くだん）のエルフが現れるまで雑魚魔物を狩ることにした。

無銘ではあるが長年使い親しんできた愛刀を振るい、民に害をなす魔物を斬り倒していく。ちなみに刀にはカグラの手で『魔法文字』が刻んであり、切れ味や頑丈さが増している。カグラは誕生日に晴信から贈られた薙刀を片手で振るいつつ、周囲に目を配っていた。

そうして二人で暴れること十分。晴信が良い具合にストレスを発散した頃に、そのエルフはやって来た。

「変な二人組が暴れてると聞いてきたが、俺の縄張りで何してんだ？」

その声は木の上から聞こえ、晴信とカグラは瞬時に身構える。いつの間にか木の上にいたエルフは、銀髪で若々しいエルフだった。手には弓と剣を持ち、小柄だが肉体は引き締まっている。

二人の構えを見たエルフ……アルフレッドは面白そうに笑った。

「中々良い構えじゃねえか。どこかの魔物狩りの奴らか？　この前来た討伐隊とは違って楽しめそうだな」

余談ではあるが、魔物を退治して金を得る『魔物狩り』という職業が存在する。稀少で魔法具の素材になるような魔物は高値で売買されるのだが、アルフレッドは二人を見てそう判断した。

「失礼な！　わたしはこの国の召喚の巫女、カグラです！　貴方を退治しにきました！」

「えー、某（それがし）は通りすがりの侍だ。というかカグラ、エルフとは女性ではないのか痛っ！？」

怒るカグラと、とりあえずとぼける晴信。つい気になったことも聞いてしまったが、それはカグラにツッコミとして膝蹴りをもらうことになった。

「何を言ってるんですかハルノブ様！　貴方は王様ですよ！？　というか、何を期待していたんですか！？」
「い、いや、だからと言って膝蹴りはどうかと思うんだが……地味に痛いぞ」

漫才のように騒ぐ二人ではあるが、構えに隙はない。アルフレッドが侮ってくれれば良いと思ったのだが、アルフレッドはおかしそうに笑うだけだ。

「なるほど、召喚の巫女に新しい王か……そんな重要な人間がわざわざ俺を討伐するために出向くなんざ、この国の程度が知れるな」
「いやー、まったくその通りで痛っ！？」
「何を納得してるんですか！　馬鹿にされたんですよ！？」
「だからって、鳩尾に拳を打ち込む奴があるか！」

二人してぎゃいぎゃいと騒ぐ。その様子を眺めていたアルフレッドは、苦笑した。

「なんだ、俺に夫婦漫才でも見せに来たのか？」
「ふ、夫婦じゃありません！　な、何を言ってるんですか！」
「いや、どうしたカグラ？　声が変だぞ？　風邪か？」
「そこで素に戻らないでください！」

今度は頭を叩かれる。アルフレッドはその漫才を見ながら、中々面白い奴らが来たなと内心で笑った。

「それで、お前らは何がしたいんだ？」

木に腰掛け、戦う前に尋ねる。それを聞いた二人は動きを止め、

今までの寸劇をやめた。

「貴方を退治するためにきました」

薙刀を構え、カグラは言う。それに対して、晴信は自然体のまま口を開いた。

「話を聞こうかと思ってな」

「ほう……話だって？」

「ああ。お主が暴れるのにも理由があるだろう？　まさか、暇だからといって暴れたわけでもあるまい」

真っ直ぐな目で問いかけてくる晴信に、アルフレッドは笑う。

「残念だが、それが理由だ。二百年以上も生きると暇でな。暴れることぐらいしか思いつかなかった」

「勝手な理由だな」

「魔物だからな」

短く会話を交わし、晴信は自然体のままで話し続ける。

「暇なら働かないか？」

「働く？」

「ああ。某に……いや、この国に仕えろ。暴れる暇がないくらい、忙しい日々を送れるぞ？」

ニヤリと笑う晴信に、アルフレッドは眉を寄せた。

「俺はエルフ……魔物だ。無理に決まってるだろう」

晴信の提案を一蹴する。当たり前だ。危険な魔物を人間と共に働かせるなど、正気とは思えない。

生まれたばかりの魔物を育てて使役するというのなら話は別だが、アルフレッドは違う。すでに二百年もの時を生きた一個の魔物だ。

そんな考えを見透かしたのか、晴信は肩を竦めてみせる。

「この国なら可能だ。俺はこの国の王様で、国民は王に妄信的に従う」

困った習性だがな、と晴信は苦笑するが、隣のカグラは眉を寄せるだけで異論を挟むことはしない。

今の晴信は、何を言っても聞かないだろう。過去にも今のような表情で様々な案を出し、成功に導いてきた。時に強引に、時に周囲を説得しながら。

普段はちょっと怒ればすぐ謝るくせに、一度本気で決めると曲げない。そして、カグラにはそれを曲げることができない。

晴信の話す内容に興味を持ったのか、アルフレッドは聞く体勢を取る。それを見た晴信は、脈有りと見て様々なことを話し始めた。

話を聞き終えたアルフレッドは、興味を持ったように頷いている。それを見た晴信は、最後として一言尋ねた。

「どうだ、この国で働いてみないか？」

アルフレッドとしては、エルフである自身の長い生に嫌気が差していた。この先もまだ数百年と行き続けなくてはならない。かとい

って、自ら命を絶つという考えは微塵もない。
その退屈を紛らわせるために暴れていたのだが、思わぬ話を聞けた。その上、話を持ちかけた人物も中々に面白い。
この時点で、アルフレッドの気持ちはある程度決まっていた。だが、最後に一つ確かめなくてはならないことがある。

「アンタの話はわかった。確かに面白そうだ……だけどな」

木から飛び降り、晴信に向かって頭上から剣を振り下ろす。それに対して、晴信は刀を抜いて真っ向から受け止めた。『魔法文字』を刻んで刀の強度を上げていなければ出来ない芸当である。
受け止めた晴信に向かって、アルフレッドは口を開く。

「俺は、自分よりも弱い奴には従わねぇ……アンタのいう話を実現させたいのなら、まずは俺を倒すんだな！」

地面に降り立ったアルフレッドと鍔迫り合いをしながらも、晴信は笑った。

「ああ……そうくると思ってたよ！　カグラ！　これは“命令”だ！　絶対に、手を出すなよ！」

隣で攻撃を仕掛けようとしたカグラにそう叫び、体勢を入れ替えて刀を跳ね上げる。それと同時に走り出し、晴信はアルフレッドと共に森の中へと姿を消した。
それを見送ったカグラは、ため息を吐きながら跳躍する。そして木の上を移動しながら、小さく呟いた。

「手は出しません……が、貴方の身が危険ならば、手ではなく魔法を使うとします」

そんな言葉を残し、カグラはその場から姿を消した。

「……それで、どうなったんだ？」

麦茶が注がれた湯飲みを手に持った義人が尋ねる。話し疲れたのか、アルフレッドは麦茶を飲んで一息吐いた。

「三時間ほど戦い続けて、儂が負けた」

「負けたのか？」

「うむ。儂もハルノブも限界じゃったが、最終的にはあ奴の勝ちとなった。そして、儂はこの城に運ばれた……」

そこまで言うと、アルフレッドは懐かしそうにカーリア城を見る。その遠い目は当時を思い返しているのだろう。今までにない、優しげな表情でアルフレッドは笑っている。

「ハルノブの言う通り、暴れる暇がないほど忙しい日々じゃったよ。あ奴の言葉があったとはいえ、最初は他の者に避けられておった。それでも時間をかけ、ハルノブを支えるうちに儂は皆に受け入れられた。兵が弱いから鍛えてくれと部隊の指揮権を丸投げされたりもしたのう……いや、本当に忙しい日々じゃった」

声には親しみと、僅かな悲しみが込められている。義人はそれを聞きながら、音を立てずに麦茶を飲む。

「結局、あ奴が死んでからも儂はこの国から離れられなんだ。あ奴が他界する頃には、この国をすっかり愛してしまってのう……ハルノブや当時のカグラの薦めもあって、儂はこの国の宰相にもなった。次代のカグラを見出し、鍛えるのも儂に任されるようになった。そうすると、ますますこの国や民が大事に思えたんじゃ。まるで我が子のように、の」

誰も口を挟むことはしない。ただ、兵達の掛け声や蝉の鳴き声の中で、アルフレッドの話に耳を傾ける。

「宰相ではあったが、途中までは名ばかりの存在じゃった。儂としても武官として腕を振るうほうが性に合っていたんじゃ。しかし、時代は流れてそうも言っていられない……儂は時代ごとのカグラと共に舵取り、この国を守ってきた。特に、前代と前々代の王の時は後年になると大変でのう……いっそ王を討とうと思ったこともあるんじゃ」

さり気なく危険なことを告げるアルフレッド。今まで黙って聞いていたカグラは目を見開く。

「……わたしでさえ、そんなこと聞いてませんよ？」

「そういえば、カグラには『おじいちゃん』と呼ばれたこともあったのう」

カグラのツッコミを流しながら、アルフレッドは笑う。そんなアルフレッドに、今まで話を聞いていた義人は口を開いた。

「しかし、それならなんで王を討たなかったんだ？　アルフレッドなら簡単だっただろ？」

アルフレッドの腕前を見てそう思った義人が尋ねるが、アルフレッドはその問いに苦笑した。

「あ奴の遺言でな……この国を頼むと言われたんじゃ。そして、この国の民は王の存在がなくてはならない。いや、内政をするのは本当に大変じゃった」

そこまで言うと、アルフレッドは義人とカグラを見る。

「当代は優秀なカグラがおるし、ヨシト王も働き者じゃ。文官もそれなりに優秀じゃし、仮に儂が働かんでも国の運営はできるじゃろう。しかし、本当に碌な文官がいない時代もあってのう……」

苦笑するのも仕方ない。義人はそう思い、遠い昔を思い出しているアルフレッドの話に耳を傾ける。

「国が傾いて以来は文官として働きつつ、才覚のある子供には将来国の柱になってもらうべく儂が手ほどきをした。当代で言えばカグラやサクラがそうじゃ。ミーファにも教えたかったんじゃが、前王の死後は国の運営が本当に大変での。サクラも途中までしか面倒を見れんかった」

「カグラは？」

「カグラは王を公私で支えるのが役目じゃからのう。なんとか一人前にすることができたわい」

「そっか……でも、今なら武官として活躍できるんじゃないか？」

義人がそう言うと、アルフレッドは苦笑を深めた。

「儂ももう歳じゃからな　。そういうことは若い者に任せて、老骨は裏方をするのが性に合うんじゃよ。精々、時折稽古をつけるぐら

いが関の山じゃ」
「志信を簡単に倒したくせに何言ってんだよ」
歳だと聞いて笑い飛ばす義人。そんな義人を見て、アルフレッドは懐かしそうに目を細める。
「……やはり、似ておるのう」
声色にも懐かしさが含まれており、義人は首を傾げた。
「似てる？　誰に？」
「儂がこの国……いや、仕えたいと思った人間にじゃよ」
「ああ、アルフレッドを倒したって王様か。どこが似てるんだ？」
「性格と、一度決めたら曲げぬところ。それと……」
そこまで言って、アルフレッドは破顔する。
「カグラの尻に敷かれるところかのう」
「はっはっは。似たくねえー」
思わず乾いた笑いを漏らす義人だが、目は本気だった。
アルフレッドはその言葉に笑うと、志信に目を向ける。
「ところで、シノブ殿は儂と似たような立場におるな」
「そうですか？」
「うむ。儂があ奴に忠誠を誓ったように、お主もヨシト王にそういった感情を持っているように見える」
それを聞いた義人は、顔の前でパタパタと手を振って否定した。

「いやいや、忠誠ってアンタ。志信と俺の間にあるのは友情だぜ？そんなものがあるわけ……」
「まあ、あるな」
「あるのかよ！？」」

否定しようとした義人だったが、志信本人に肯定されて驚きの声を上げる。志信は戸惑いつつも、頷いた。

「もちろん友情も感じているが、な」
「ほほう、良ければ聞かせてほしいのう」」

昔話をして楽しかったのか、アルフレッドが身を乗り出す。そんなアルフレッドの言葉に応えたのか、志信は口を開いて語り出す。

それは、義人と志信がまだ中学生の時の話だった。

第五十五話：嗚呼懐かしき中学時代

藤倉志信が滝峰義人と出会ったのは、中学二年の時だ。
志信と義人は同じクラスになり、最初はクラスが同じという接点しかなかった。
志信が他者と関わらないようにしていたというのもある。それでも、北城優希という少女と共にクラスの中心で笑っている義人を、彼にしては珍しくフルネームで覚えていた。
運動はできるが、勉強は苦手らしい。だが、頭が悪いわけではない。その程度の認識しか持たなかったが、当時の志信にしては珍しいことである。
ことあるごとに義人が話しかけていたというのも理由の一つだ。大抵の者は、最初志信に話しかければそれから話そうとすることはない。授業中でも休み時間の時でも寡黙に過ごす志信を相手にするより、気の合った友人と話すほうが良い。ほとんどの生徒はそう思い、進級して一月もすれば志信に話しかける者は皆無となった。

「おー、おはよう藤倉。今日も良い天気だなー」

義人一人を除けば、だが。

「……おはよう、滝峰」

一応、志信も挨拶を返す。義人はそれに満足そうに笑うと、志信の前の席に座った。だが、義人の席はそこではない。実際には志信の席の二つ後ろなのだが、世間話をするために座ることにした。

「今日の体育の授業でやるハンドボール、同じチームでやろうぜ」
「何故だ？」

「何故って、藤倉は運動神経良いだろ？　相手チームにはハンドボール部が三人いるし、こっちの戦力を整えないと勝てないしな」
「……俺はキーパーでもしておく」
「それはそれで心強いけどさー。こっちの動ける奴はハンド部がマークするんだよ。でも、藤倉ならマークされても簡単にかわせるだろ？」

そう言って笑う義人に、志信は首を傾げる。
たしかに素人を避けるのは簡単だが、学校内でそんな振る舞いをした覚えはない。祖父の教えで力をひけらかすことを嫌う志信は、体力測定などのときも手を抜いていた。それなのに、何故目の前の少年はそれを見抜いているかのように話すのだろうか。そんな疑問を見透かしたのか、義人は苦笑する。

「いや、藤倉ってこの前の体力測定のときかなり手を抜いてただろ？　注目を避けるつもりなのかもしれないけど、ちょっと挙動が変だったぞ。あと、歩き方が絶対普通じゃないし」

志信は他の生徒の結果を見て、自分の体格や見た目でおかしくない程度の結果にしていた。歩き方は自分でも気づかなかったが、自然と足音を立てないようにしていたらしい。だが、どうやら義人にはそれが通じなかったようだ。

なるほど、中々周りを見ているようだな……。

志信は義人に対する評価を若干修正する。そんな志信に義人は笑いかけて、

「ちょいと失礼」

そう言うなり、突然手刀を繰り出した。その瞬間、志信もほぼ反射的に動く。振り下ろされた手刀を受け流すと同時に、空いた片手で義人の顎に向かって掌底を放つ。長年祖父に叩き込まれた動きが、つい出てしまった。

義人に合わせるように手を抜いたが、素人には避けられない速度である。志信は内心でしまったと後悔の声を上げたが、結果として掌底は外れた。

義人は志信のカウンターを見て反応したのか、それとも最初からこうなることがわかっていたのか、すでに上体を引いていた。だが、それでもギリギリで義人の鼻先を掌底が掠める。

「おおっ！　あっぶねー、ギリギリだな」

鼻先を掠めた掌底に冷や汗をかきながらも、義人はそう呟く。それに対して、志信は振り上げた腕を元に戻した。

「……何のつもりだ？」

「いや、悪い。藤倉なら軽く避けると思ったんだ。まさかカウンターが来るとは思わなかったけど……まあ、これで運動神経が良いことがわかったな」

うんうん、と一人頷く義人に志信はどんな言葉をかければ良いかわからない。少し悩んでいると、義人の袖を引く者がいた。

「義人ちゃん、何してるの？」

そう言いながら袖を引くのは、北城優希である。義人といつも一緒にいる少女を見た志信は、名字を思い出すだけでも数秒の時を要したが、それでもなんとか思い出した。優希は志信のほうを見るが、大した感情も浮かべない。一瞥するように観察すると、義人へと笑

顔を向ける。

「一時間目は音楽だから教室移動しないと駄目だよ？　一緒に行こう？」

「ああ、了解。そんじゃ、行くか。藤倉も早く来いよ？」

それだけを言い残し、義人は優希と共に立ち去った。志信はそんな二人を見送ると、音楽の教科書を取り出して小さくため息を吐く。

義人に手刀を当てるつもりはなかったのだろう。不意打ちしたらどんな反応をするか見ようとしての行動だったのだが、それを瞬時に見抜けなかった自分に肩を落とす。

「俺もまだまだ精進が足りんな……」

それだけを呟くと、志信も教室を後にした。志信が義人を友人だと思うようになる出来事が起きる、一ヶ月ほど前のことである。

一ヶ月ほど経ったある日、志信はいつも通り一人で帰宅しようとしていた。家に帰れば祖父との鍛錬があるため、部活には所属していない。一緒に帰る相手もいないため、常に一人での登下校だ。

だが、その日はいつも通りの下校にはならなかった。その日は日直の役目があり、放課後の簡単な掃除などで帰るのはいつもより遅い時間である。僅かに足を速めて歩く志信だったが、僅かに聞こえた音に足を止めた。

「……なんだ？」

何かを殴り、蹴るような音。そして、僅かに漏れる苦痛の声。志

信はどうするべきか僅かに逡巡し、音のするほうへと足を向ける。
すでに放課後で、教室に残っている者はいない。グラウンドでは部活に精を出している生徒がいるが、校舎内に残っているものはごく僅かだ。
志信は音を辿るように外へ出ると、校舎裏へと進んでいく。

「いじめ……か？」

そして、目の前の光景を見てそう呟いていた。
志信の視線の先では、一人の男子生徒を囲んで三人の男子生徒が殴る蹴るの暴行を加えている。三人とも軽薄な笑みを浮かべつつ、思い思いに拳を振るっていた。
拳の振るい方から素人だとわかるが、それだと逆に危険である。肉体のどこを、どれだけ強く打てば人が死ぬかなど考えてもいない。
志信としては、係わり合いになる必要はなかった。だが、こういった手合いは志信の嫌いなタイプの人種である。
気が弱くて抵抗できない者を見つけ、暴力を振るってストレスの捌け口にする。そのくせ自分よりも強い者には手を出さず、媚びへつらう。
僅かに腹立たしさを覚えつつ、志信は三人組の背後へと近づいていく。そして一人の男子生徒が拳を振り上げ、振り下ろそうとした瞬間に横から受け止めた。

「そこまでにしておけ」
「ああ？　なんだテメエ？」

志信の声に振り返ると同時に、威嚇のつもりか所謂（いわゆる）“ガンを飛ばす”三人組。志信は内心でため息を吐きつつ、それでも口を開く。

「ストレスを発散したいのならスポーツでもすれば良いだろう？

それとも人を殴りたいだけか？　何にせよ、お前らの我侭を他人にぶつけるのはよせ」

「いきなり出てきて何言ってんだ！？　引っ込んでろ！」

そう言うなり、志信を突き飛ばそうと一人の生徒が右手を突き出してくる。志信はそれに合わせて生徒の内側へと踏み込むと、突き出された腕をつかみながら軸足を払い、地面へと投げ倒した。

幸いというべきか、地面はアスファルトなどではなく土である。かなり軽く投げた上に土には芝生も生えているので、大した衝撃もないだろう。

「関係はないが、一度関わると決めた以上見過ごすわけにもいかないのでな。いじめなど、下らんことをするのは止めろ」

「この野郎！」

仲間が投げられたことに腹を立てたのか、残りの二人が殴りかかってくる。志信はとりあえず手のひらで受け止めると、深いため息を吐いた。

「もう一度言う。いじめなど止めろ」

受け止めた拳をそのまま握りこみ、ゆっくりと握力を加えていく。さすがに握った拳を握りつぶすことなどできないが、志信の握力は中学生の平均握力を軽く超える。徐々に拳を圧迫された二人は、痛みに顔を歪めながら必死に振りほどいた。そして、すぐに志信から距離を取る。

三人は顔を見合わせると、志信が非常に厄介な存在だと判断して背を向けた。

「く、くそっ！　覚えてろよ！」

“お約束”の逃げ台詞を残し、三人は逃げ出す。志信は特に追うことはせずに、いじめられていた生徒に目を向けた。だが、すぐに興味を失って歩き出す。

「あ、あの！　ありがとうございました！」

歩き出した志信に、いじめられていた生徒は慌てて礼の言葉をかける。志信は少しばかり足を止めると、何も言わずに頷いた。

やはり慣れないことはするものではないと思いつつも、かけられた感謝の言葉に悪い気はしない。何か言おうにも良い言葉が見つからず、口下手な自身に呆れを抱く。

結局志信は何も言わず、帰宅の途につくことにした。

「ふむ、気が乱れておるのう」

家に帰り、祖父……藤倉源蔵との鍛錬を始めようとして言われたのはそんな言葉だった。

もしも義人がこの場にいたならば『気ってなんだよ!?』とツッコミを入れただろう。しかし、この時はまだ義人と親しくない上、志信が自身の祖父の発言を疑問に思うことはない。

「気……ですか？」

「そうじゃ。さては、学校で何か変わったことがあったな？」

そう尋ねる源蔵の言葉は、年の功か全てを見透かしているように聞こえる。志信は話すか話すまいか僅かに逡巡し、口を開く。

「いじめの現場に遭遇したので、いじめをしていた者達を追い払いました」
「ほほう、いじめとな……」
顎に手を当て、源蔵は何度か頷く。すでに六十を超えた源蔵は、志信に比べれば拳二つ分ほど背が低い。しかし、ピンと背筋を伸ばしたその姿は歳不相応に若々しく見える。表情は一見柔和に見えるが、薄く開いた目だけは鋭かった。
「それで、どうやって追い払ったんじゃ？」
「どうやって……とは？」
「口で注意して追い払ったのか？　それとも拳を振るったか？　いや、そもそも何故いじめられていた者を助けた？」
「口で注意し、話を聞かなかったので一人は軽く投げました。残りの二人は拳を握り締めるだけに留めました。何故助けたかは……」
そこまで言って、志信は言葉を濁す。
確たる理由などない。偶然暴行の音を聞き、少し気になったから足を運んだ。そして、いじめている者が少し気に食わなくて追い払った。それだけである。
「……偶然、目に付いたからです」
志信がそう言った瞬間、源蔵が水のような動きで間合いを詰める。志信は一瞬遅れてそれに気づいたが、すでに遅い。志信へと踏み込んだ源蔵は、志信が防御する時間すら与えずに掌底を叩き込む。
「馬鹿者！　確かな理由もなく力を振るうでない！　意味なき力はただの暴力じゃ！　お前にはそれを幼い頃から教えていたはずじゃ

ぞ！」

腹部に掌底を受けた志信は咄嗟に後方へと飛ぶが、威力を逃がしきることはできなかった。歯を食いしばり、痛みを堪えながらも反論する。

「っ……ならば、見ぬ振りをしろと言うのですか？」

多少なり掌底の威力を殺した志信を内心で褒めつつも、源蔵がそれを表に出すことはない。志信の、自身の孫の問いに、源蔵は眉を寄せる。

「ならば逆に聞くが、明日再び同じ場所で、同じ者が、同じ者達にいじめを受けていたとする。その時はどうするつもりじゃ？」

「それは……」

「助けるか？　それとも見捨てるか？　お前が今日助けたことにより、お前に助けを求めてくるかもしれぬ。だが、お前が助けたことにより、今日よりも酷い暴力に晒されるかもしれぬ。もしもそうなったとき、お前はどうするつもりじゃ？」

「……」

源蔵の言葉に、志信は答えることができない。もしもこれが普通の家庭だったならば、志信の取った行動は褒められただろう。

『いじめられているのを助けました』

『そうか。志信は偉いな』

そうやって、志信の行動を褒めるだろう。だが、源蔵は違う。

助けたが故に状況が悪化することなど、世界中のどこにでも転がっていることを知っている。また、自分自身もそういったことを引き起こしたことがある。だからこそ、志信を褒めるわけにはいかない。

源蔵は志信に背を向けると、いっそ冷たさを滲ませた声を投げかけた。

「今日の稽古は中止じゃ。今日のことを、お主がしたことを良く考えよ。三日ほど稽古はせぬ。そして、その間武を振るうことは禁止とする」

「……はい。ありがとうございました」

道場を後にする源蔵に、志信は頭を下げる。そして、道場の隅に行くと座禅と組んで目を瞑った。

源蔵に言われた言葉を思い返しながら、志信は小さくため息を吐く。

しばらく考えても、答えは出なかった。

その日から二日後、志信はいつも通りの放課後を迎えていた。教科書を鞄に入れ、席を立つ。すると、そんな志信の傍に一人の男子生徒が近寄ってきた。

「あの、藤倉君……」

「ん？」

声に振り向いてみれば、どこかで見た男子生徒が立っていた。何故かオドオドとしている男子生徒を見て、志信は僅かに記憶を漁ってなんとか目の前の人物を思い出す。

「ああ、君か」

それは、二日前にいじめから助けた生徒だった。志信が思い出し

たことに安心したのか、その男子は“困ったように”笑う。

「その……この前助けてもらったお礼がしたいんだけど……」

「礼などいらない。俺が勝手にやったことだ」

様子を見る限り、あれからいじめは受けていないのだろう。志信はそう判断して、自分の取った行動は間違いではなかったと僅かに安堵する。

「それじゃ申し訳ないよ……だから、ちょっとこっちに来てくれないかな？」

そう言って、志信の袖を引く。その行動に疑問を覚えつつも、志信はついていくことにした。

どうせ明日までは鍛錬をすることもできない。ならば家に帰っても暇なだけだ。そう考え、男子生徒の後をついていく。

しかし二日前の校舎裏へと案内される頃には、そんな考えも消えていた。

「お、ちゃんと連れてきたな」

そんな声をかけられ、志信は内心ため息を吐く。校舎裏には、二日前に追い払った三人組が待ち受けていた。しかも、他に仲間らしき男子生徒が四人ほどいる。

志信をここまで連れてきた男子生徒は、怯えるように口を開いた。

「つ、連れてきたよ。だから、僕のことはもう放っておいてくれるんだよね？」

その言葉を聞いた志信は、今度は本当にため息を吐く。

状況が悪化したな、と。祖父の言う通りだったと。それだけを思い、疲れたような息を吐く。

そんな志信を他所に、一人の生徒がニヤニヤと笑いながら近づいてきた。

「ああ？　そんなわけねーだろ！？」

オドオドと状況を見ていたいじめられっ子を蹴り飛ばす。蹴られた方は後ろへと転げると、慌てて逃げ出した。

「あ、逃げやがった！」

「いや、今日のところはいいだろ。コイツがいるし。あいつは明日またいじめるから」

「あはは！　ひでー！」

男達の会話を聞きながら、志信は思案する。

見たところ全員素人だ。囲まれる前に勝負を仕掛ければ、簡単に倒しきることができるだろう。だが、祖父には“武”を振るうなと言われている。それなら逃げるかと考えたが、それを見越したように一人の男が口を開いた。

「あ、逃げたいならどうぞ？　逃げたらその分あいつを殴るから」

そう言われ、志信は逃げようとした足を止める。そんな志信を見て、男達は笑い声を上げた。

「おやおや、正義の味方は辛いねー！　他人事に首を突っ込むからそうなるんだよ！」

正義の味方などではない。志信はそう言おうと思ったが、結局言うことはなかった。ただ、無言のままで防御の構えを取る。

「お？　やる気？　この人数相手に勝てると思ってんの？」
「……元より、勝つつもりなどない」
「は？」

小さく呟いた志信に、眉を寄せる男達。志信はそれに構わず、“提案”を持ちかける。

「殴りたいのなら、殴れば良い。だが、これからあいつに手を出すのは止めろ」
「……あははっ！　カッコいいこと言うなぁ！」

志信の提案に笑い、一人の男が殴りかかってくる。腹部を狙った打撃を前に、志信は腹筋に力を入れて受け止めた。
それを皮切りに、男達が志信を取り囲む。そして、思い思いに志信を殴り始めた。

志信が一方的に殴られ始め、すでに十分近く経つ。
校舎裏は日当たりが悪く、職員室からも離れている。その上人気（ひとけ）がなく、好んで人が立ち寄ることはない場所だ。
そんな場所で、志信はただひたすらに私刑（リンチ）を受けていた。
筋肉を固め、急所を打たれそうになったら優先的に防御する。打たれると同時に身を引き、衝撃を最小限に殺す。そうすることで、志信はいまだに地面に倒れていなかった。

「くそっ！　タフな奴だな！」

逆に殴る側のほうが疲れてきている。だが、志信としてもそろそ

ろ体力の限界が近い。

「おい！　コレ使おうぜ！？」

そんな志信に業を煮やしたのか、一人の男子生徒が折れた木の枝を持ってくる。木の枝は不恰好に曲がってはいるものの、竹刀ほどの太さがあった。

「そりゃさすがにマズいだろ……」

「頭さえ殴らなきゃ大丈夫だって。それにこいつ、異常にタフだしな」

さすがに木の枝は拙いと思ったのか、注意の声が飛ぶ。しかし、木の枝を持った男は聞こうとしなかった。実際は志信が異常にタフなのではなく、衝撃を殺すことによりダメージを減らしているだけだ。だが、それがわかるはずもない。

志信は歯を噛み締める。さすがに、木の枝を素手で受け止めるのは厳しい。できることはできるが、そこまで威力を殺すことはできないだろう。下手に受ければ骨が折れるかもしれない。

「よーし、何発耐えられるかな？」

そう言いながら木の枝を振り上げる。周りの男達は止めようか止めまいか悩んでいるが、今更言っても間に合うものでもない。

受けずに捌くしかない。そう判断した志信は腕を構えようとするが、散々殴られた腕は思うように動いてくれなかった。

「よし、いくぞ！」

木の枝を振り下ろそうと、男が踏み込む。軌道を見る限り、狙い

は右の肩口だ。そう判断した志信は咄嗟に両腕を交差して受け止めようとして――背後で地面を蹴る音を聞いた。

志信の視界の端に、何か動くものが映る。そして、それが何なのかを判断する前に木の枝を振り下ろそうとした男が横合いから蹴り飛ばされた。蹴ったほうはそれなりに勢いがついていたらしく、蹴られた男は数メートルほど地面を転がって動きを止める。

「お前……」

蹴った人物を見て、志信は思わず口を開く。そんな志信に対して、蹴った人物……義人は気軽に笑った。

「おっす藤倉。ずいぶんと大変そうだなー」

志信の姿を頭から爪先まで見ると、今度は苦笑する。

「何やってんだよ？　藤倉なら、こんな奴らとケンカしても簡単に勝てるだろ？」

そう言って笑い飛ばすが、志信からすれば余計なお世話だった。これでは自分が殴られた意味がない。事態は余計に悪化する。そう思うと、彼にしては珍しく怒りの感情を覚えた。

「余計なことを、するな」

怒鳴るわけでもないが、十分に怒りを滲ませた声。それを聞いた義人は肩を竦める。

「文句ならあっちの方に言ってくれよ。俺は、頼まれて首を突っ込んだだけさ」

義人が背後に向かって指を差す。すると、そこには先ほど逃げた男子生徒の姿があった。だが、何故か左頬が腫れている。

「日直の日誌を職員室に提出した帰りに突然泣きつかれてさ」

「……先ほどまではなかったはずの傷があるようだが？」

「いや、話を聞いたら腹が立ったんで殴っといた。そしたら俺の連れも平手打ちを食らわせたから、腫れちまったんだよ」

そこまで言うと、義人は周りを見回して拳を鳴らす。

「さて、選手交代だ。藤倉に代わって、ここからは俺が相手になるぞ？」

志信の隣に立つ義人を見て、何人かが顔を見合わせた。

「た、滝峰には関係ないだろ？　引っ込んどいてくれよ」

「吉岡に春野、それに川崎か……お前らとケンカするのって小学校の時以来か？　それにしても、中学生にもなっていじめなんてするなよ」

義人の方はすでにケンカする気満々である。今名前を挙げた三人は、過去のクラスメートだ。義人をからかったことで優希に平手打ちを喰らったことがあるのだが、この場では割愛する。

騒ぐことのない志信と違って、義人はクラスの中心で騒ぐ人物である。その分学年に関係なく交友関係が広く、成績はあまり良くないが教師の受けも良い。その上運動神経も良く、一対一のケンカなら確実に負けるだろう。

数人は戦う気がなくなったが、それでも止まらない者もいる。

「いきなり出てきて好き放題言ってんじゃねえよ！」

義人に蹴り飛ばされた生徒が立ち上がり、そう叫びながら義人へと殴りかかった。

「そりゃもっともな話だ。でもな」

義人は一つ頷くと、口の端を吊り上げる。

「いじめなんてやってる奴に言われても、まったく気にならないね！」

振り下ろされた拳を掠めながらもかわし、お返しと言わんばかりに拳を叩き込む。それを合図に、いまだ拳をおさめていない最初の三人組が殴りかかった。

二人の拳をかわし、残った一人の拳を避けられないと判断した義人はわざと受けに行く。勢いが乗り切る前に前へ出て、正面から額で受け止めた。

「いってえな！」

引こうとした拳をつかみ、自身へと引き寄せる。そうすることで相手のバランスを崩し、空いた腹部に拳を打ちつけた。

そんな義人を、志信はただ呆然と見ていた。運動神経は良いが、武術などをかじったわけでもない義人の動きを。

そうして、騒ぎを聞きつけた教師が駆けつけるまで志信は立ち尽くしたままだった。

教師が駆けつけるなり、義人は志信の手を引いて逃げ出した。捕まったら指導室で説教のフルコースが待っている。そう判断した義人は、何故か呆然としている志信の腕を引いて傍のフェンスを乗り越え、脱兎の如く逃げていく。

「ぜぇ……ぜぇ……何とか逃げれた、かな？」

学校からある程度離れると、義人は走る足を止める。そして荒く息を吐くと、殴られて切れた口内の血を吐き捨てた。それを見た志信は、とりあえず手当てをするべきだと判断する。

「滝峰、怪我の手当てをしよう」
「あ、病院はパス。ケンカがばれたら親父とお袋に怒られる」
「……ならば、俺の家に来い。簡単な手当ぐらいならできる」
「本当か？　じゃあ頼むよ」

志信の提案に頷き、義人は歩き出す。迷いなく歩き出した義人に、志信は困惑したような声を上げた。

「……俺の家がどこにあるか、知ってるのか？」
「ん？　ああ、知ってる。塀があって、道場っぽい建物がある家だろ？　割と俺の家の近くだし。表札に藤倉って書いてあったから間違いないだろ」
「そうか……」

義人の歩く方向に本当に家があるので、そこで会話を打ち切る。そして、家に祖父がいないことだけを祈りながら志信は帰宅した。

とりあえず義人を客間に案内し、志信は手当て用の道具が入った箱を取りに行く。茶でも出すべきだろうかと僅かに思案し、ひとまず急須と湯のみも用意する。

そして客間に戻ると、祖父がいた。胴着としても使える頑丈な普段着を身に纏った祖父が、義人と向き合っている。

「なんじゃ、お主は？」

「あ、どうも初めまして。藤倉君のお爺さんですか？　俺……いや、僕は藤倉君のクラスメートの滝峰義人です」

源蔵の問いに、義人は敬語で答えた。すると、源蔵は僅かに口元を緩める。

「敬語はいらん。お主くらい若いなら、多少生意気であるべきじゃ」

「あ、そうですか？　それならそうさせてもらいますよ」

そう言うと、義人は救急箱とお盆を手に持った志信に目を向けた。それに合わせて、源蔵も志信に目を向ける。

「……何があったか、おおよそ見当はつく。まずは手当てをしてやりなさい」

「……はい」

源蔵の言葉に従い、志信は義人の手当てをしていく。そんな二人を見ながら、源蔵は義人へと目を向けた。

「見当はつくが、何があったんじゃ？」

「藤倉は手を出さずに殴られてて、俺は助太刀……かな？」

そう言って義人は志信に話を振る。話を振られた志信は肯定する

ように頷くと、事の顛末を話し出す。
源蔵は静かにそれを聞くと、眉を寄せた。
「見たことか志信。お主が起こした行動が、事態の悪化を招いた」
「……はい」
「いやいや藤倉、そこで納得するなよ」
頷いた志信に、義人は裏手でツッコミを入れる。それを見た源蔵は、義人に目を向けた。
「ほう？　それではお主は、事態は悪化していないと？」
「悪化じゃなくて解決だろ？　さすがに今回ほどの騒ぎになったらもうあいつはいじめられないさ」
「ずいぶんと簡単に言う。もしもまた、同じいじめが起こったらどうするつもりじゃ？」
「そりゃもちろん、また追い払いますよ」
「だが、それではいじめられる者のためにもならんし、現実的ではない。もしもお主が預かり知らぬ場所で同じことが起きたらどうするつもりじゃ？」
嘘は許さないと言わんばかりの鋭い眼光を前に、義人は苦笑した。
「それは助けられないな。うん、その時は自分で何とかしてもらうしかないよ」
「……それは、無責任というものではないのか？」
源蔵の声に凄みが加わる。だが、義人は大して臆せずに笑い飛ばした。
「それじゃあ爺さんは、日本の裏側で起こってる戦争に義憤を感じ

て止めにいくか？　行かないだろ？」

それこそ現実的じゃない。そう呟き、義人は言葉を繋げていく。すでに敬語ではないが、源蔵としてもそちらのほうが若者らしくて好ましい。ただ、義人の話を興味深そうに聞くだけだ。

「俺は正義の味方じゃないし、何でも万能にこなせるスーパーマンじゃない。だけど、手の届くところで気に食わないことがあったら首を突っ込むし、それが解決できることなら手伝ってやりたい」

そこまで言うと、義人は口の端を吊り上げる。

「そしてそいつが自分の足で立てるようになったら、あとは蹴り出して勝手に歩かせるさ。いじめられるのなら、いじめられないように努力させる」

「それは何故じゃ？　お主がそこまでする理由はないはず」

「理由？　簡単だよ。“俺が気に食わない”。それだけさ」

「ほっ、またずいぶんと身勝手な理由じゃ」

「人間そんなもんだと思うけど？　自分が気に食わないからいじめる。それなら反対に、自分が気に食わないからいじめを止めるっていうのもアリだろ？　世の中、気に食わないから戦争する奴だっているんだ」

「まあ、アリじゃな」

志信が持ってきた急須で茶を注ぎ、源蔵は湯飲みを義人に差し向ける。

「飲むかね？」

「いや、口の中切ってるから遠慮させてもらうよ。しみると痛いんだ」

「首を突っ込まなければ、そうなることもなかったんじゃぞ？」

揚げ足を取るような問いに、義人は苦く笑った。

「そうなったら、俺は嫌な気分で帰宅することになったね。そうなると幼馴染みが心配するから勘弁だ」

「怪我をするほうが心配するじゃろ」

「いや、あいつは俺が“俺らしくない”行動を取るほうが余程嫌だろうさ」

「ほほう、若いのう……」

「爺さんが老けてるだけだっての」

志信を置いてけぼりにして、二人は楽しそうに笑う。

「お爺様……」

とりあえず口を挟んでみると、源蔵は含み笑いをしながら立ち上がった。そして志信の頭に手を乗せると、乱暴に撫でる。

「お前は、何のために藤倉の技を身につけたんじゃ？　儂も最初はお主に藤倉の技を教えるつもりはなかった。平穏な日々を送れば、それで良いと思った。だが、お前は儂に武術を教えてくれとせがんだ……それは何故じゃ？」

「……強く、なりたかったからです」

「強くなってどうする？　お前の言う強さとはなんじゃ？」

「それは……まだわかりません」

怒られるかもしれない。そう覚悟して言った言葉に、源蔵は笑う。

「まあ、そうじゃろ。儂も志信ぐらいの歳の頃は、それがよくわか

らなんだ。だが、もう少し歳を取ればわかる……もしくは」

そこで言葉を切り、源蔵は義人を見る。

「こやつのように“自分”を曲げねば、早くにわかるかもしれんな」

「そうなんですか？」

「さて、のう。だが志信、これだけは覚えておいてほしい」

志信の頭に乗せた手を、ゆっくりと退かす。

「理由なく力を振るえば、それはただの暴力じゃ。だが、確たる信念を持って力を振るうのなら、儂に言うことはない。それは暴力ではなく、“力”じゃからのう」

そう言って源蔵は背を向けた。志信には、源蔵の言葉の意味がまだ理解できない。だが、それでも今の言葉を心に刻みつけた。

義人と志信は黙ってそれを見送り、姿が見えなくなってから大きく息を吐く。

「いや、なんつーか……すごい爺さんだな」

苦笑交じりの声に、志信は頷いた。

「ああ。自慢の祖父だ」

「そうかい。じゃあ、手当てありがとな。俺は帰るよ」

義人は立ち上がり、そのまま歩き出す。だが、途中で足を止めると笑いながら振り返った。

「それじゃあ、また明日な。“志信”」

名前で呼ばれたことに、志信は動きを止める。そして首を傾げた。
そんな志信に、義人は笑いを苦笑に切り替える。

「いやー、俺って友達になった奴は名前で呼ぶことにしてるんだよ。駄目か？」
「駄目ではないが……」

断る理由もなく、かといって頷くこともない。そんな志信に苦笑を一つ残し、義人は玄関に向かう。
今から三年以上昔。義人と志信が名前で呼び合うようになった“三日前”の出来事である。

「うあー！　改めて話されると恥ずかしいなおい！」

志信の話が終わり、義人は悶えながら地面を転がっていた。

「あの後大変だったよね。結局ケンカしたのが義人ちゃんだってバレて」

転がる義人を見て、優希が小さく笑う。
結果として、義人と志信は翌日生徒指導室に連行された。いじめに関わっていた者も呼ばれ、いじめられた本人も交えての説教である。

「あー……結局停学くらったしなぁ。まあ、事情を話したら親父とお袋に怒られなかったのがせめてもの救いだったな」
「それで、シノブ様がヨシト様を名前で呼ぶようになったのはいつ

からなんですか？」

話を聞き終えたカグラがそう尋ねる。あとでミーファにも話してあげようと思っていた。

「停学三日の最終日だな。志信の家に遊びに行ったときにようやくだ」

「俺にしては頑張ったほうなのだが……」

「俺としてはその場で言ってほしかったけどな。まあ、いじめっ子が手を出すことはなくなったし。結果オーライさ」

停学が解けた後、義人と志信はしばらくの間いじめられた生徒と共に帰宅したり、遊んだりしていた。そうすれば再びちょっかいを出されてもすぐに気づけると思ってのことだが、生徒指導の体育教師に余程キツく叱られたのか、ちょっかいを出してくることはなかった。

いじめに加わった生徒に対して“何故か”女子の間で色々と噂が流れて抑止力になっていたのだが、それは義人達の知るところではない。

いじめられていた生徒と気の合いそうな者を近づけ、義人以外に数人友人が出来たら直接関わるのを止めた。もちろん義人は友人付き合いを止めたわけではないが、あまり支えすぎるのも本人のためにならないと思っての判断である。

義人は地面を転がるのを止めると、勢いをつけて起き上がる。そして空気を変えるように背伸びをした。

「さーて、それじゃあ政務に戻りますかね。思ったよりも話し込んじまったし」

「そうですね」

義人の言葉に従い、志信を除いて皆政務に戻るために立ち上がる。

「それでは、俺は訓練に戻るとしよう」

そう言って、志信も立ち上がった。そして夏の日差しに目を細め、小さく息を吐く。

まだ、お爺様の言葉は完全に理解できない。だが、それでもゆっくりと正解に近づいていける、か。

「ん？　ボーっとしてどうした？」

そんな志信に、義人が声をかけた。志信は何でもないと首を振ると、訓練場のほうへと視線を向ける

自分勝手に振るうのが暴力ならば、俺は“誰か”のためにこの“力”を振るおう。

心の中でそう呟いて、志信は歩き出す。

――――今のところ、その“誰か”は一人だけである。

第五十六話：龍の落とし子

カーリア国の気候は日本と似ており春夏秋冬、つまり四季が存在する。

カーリア国は日本に比べると僅かに湿度が高く、夏は暑くても三十度前後。冬は寒くても零度前後と、地球温暖化が進んで異常気象が多々起こる現代に比べると過ごしやすい。もっとも、その気候を過ごしやすいと思うのは人間だけではない。元の世界には存在しない魔物などにとっても過ごしやすく、カーリア国での魔物の被害の多さの一因にもなっている。

義人はカーリア国の天候に関する本を閉じると、ため息を吐いて窓の外を見た。

「しっかし、よく降るなぁ……」

「よく降りますねぇ……」

窓の外は土砂降りの雨。バケツをひっくり返したように激しい雨が地面を打ち、いつもの夏日とは違った蒸し暑さがある。

昨晩から降り出した雨は勢いを衰えることなく、今もなお降り続いていた。

そんな降りしきる雨をＢＧＭに、義人はカグラと共に今日も政務を片付けていく。

新しく公共事業を始めるための書類を作成し、それに伴ってあちこちから寄せられる承諾や許可を求める書類の山。義人はそれらを捌きつつ、貿易の目玉になるような物を思案していた。

「あー……ノーレ、なんかないか？　原材料は安いけど、完成したら高値で売れるような物。風と知識の王剣なら、何か良い案があるだろ？」

『そんな都合の良いものはないじゃろう。あったとしても、他の国も同じことをするに決まっておる』

「まあ、そうだよな。それこそ、元の世界にしか存在しないような物を作るしかない……だけどこの世界じゃ実現不可能、と」

この世界でパソコンを作れと言っても、確実に不可能である。そもそもテレビすらないのだ。

魔法による思念通話はあっても、電話はない。

魔法で火を熾(おこ)すことはできても、ガスコンロはない。

魔法で氷を生み出すことはできても、冷蔵庫はない。

魔法で風を起こすことができても、エアコンはない。

魔法で雷を発生させても、コンセントはない。

まさに、ないない尽くしだ。

義人は麦茶を飲みながら、手元の書類に王印を押していく。そうやって義人が政務を片付けていると、執務室の扉がノックされた。

「どうぞー」

麦茶の入った湯飲みを机に置き、来訪者を迎える。するとなるべく音を立てないようにしたのかゆっくりと扉が開き、近衛兵が数人入ってきた。

「この雨による各地の状況を調べてきました」

「お疲れ様。他の隊は臨時休暇だっていうのに、悪いな」

「シノブ隊長の訓練に比べれば、全然楽ですよ」

義人の労(ねぎら)いの言葉に苦笑しながら首を横に振ると、懐から紙を取り出して義人へと差し出す。そして近衛兵達が執務室から退室すると、カグラは首を傾げた。

「何を調べさせていたんですか？」
「これか？　これはこの雨で何か問題が起きてないかを調べてもらったんだ」
カグラにそう教えながらも、義人は紙に目を通していく。
「河川の氾濫はなし……堤防が壊れた様子もない、と。この雨はカーリア国全体で降っているのか？」
「ここまで雨が酷いのは王都フォレスとその周辺だけです。他の町や村は普通の雨ぐらいでした」
「ふむ……自然のものか、それとも何か原因があるのか……」
そう呟きながら紙を机の上に置くと、それを見たカグラが口を開く。
「もしかしたら、上空で龍が暴れているのかもしれませんね」
「……はい？　龍？」
聞き間違いかと思い、もう一度尋ねる義人。カグラは至極真面目な表情で頷いた。
「はい。龍の中には天候を司るものもいます。特に、数百年以上生きた龍なら局地的に雨を降らせることも可能でしょう。そんな龍が暴れていると、気候にも影響が出るんです」
説明を続けるカグラを他所に、義人は眉間を軽く揉み解す。
「そうか……そういえば、この世界って龍なんて存在もいたな」
なんというファンタジーだ。そう付け加え、義人は椅子にもたれ

かかる。

日本の古典神話でも、龍は水神や海神として崇められている。雨乞い祈願の信仰対象としても扱われる龍ならば、雨を降らすことも可能だろう。

義人はそう納得すると、鬱陶しげに窓の外に視線を向けた。

「しかし、なんでわざわざ上空で暴れるんだ？　龍って、高い知性を持ってるんじゃなかったっけ？　無駄に暴れることはしないだろ？」

「たしかに、高い知性を持っています。だから、龍が雨を降らす時というのは外敵から身を守って暴れる時や、ずっと日照りなどが続いて水不足に陥った時。それと、人間などに雨乞いされた時などですね。あとは出産の時にも上空で暴れるみたいですけど……」

「……なんでよ？」

最後の言葉に納得できなかったのか、義人は首を傾げる。そんな義人に、カグラは苦笑した。

「大抵の龍は高い山や谷などに巣を作りますが、出産するときは痛みで暴れます。するとどうなるでしょうか？」

「そりゃまあ、巣が壊れるな」

「はい。そのため、水の中に住む龍などは別として大抵の龍は暴れても差し支えのない空中で出産します。龍は人化することも可能ですが、さすがに出産の時は変化する余裕がないみたいですね」

「ふーん……空中で出産ねぇ。それじゃあ、産んだ龍はどうなるんだ？　まさかそのまま落とすことはないだろ？」

小皿に持った茶菓子をつまみつつ尋ねる。するとカグラは苦笑を深めながら頷いた。

「実はその通りなんです。龍やドラゴンは卵生なんですが、産んだ卵はそのまま地上に落とします。これを『龍の落とし子』と呼ぶのですが、卵の外殻は非常に頑丈で地面に落ちても割れることはありません」

「隕石みたいだな。民家に落下したら大惨事になりそうだ」

直撃すれば即死しそうである。その光景を僅かに想像し、義人は眉を寄せた。だが、カグラは首を横に振る。

「いえ、それはありません。卵が落ちるのは大抵森や林など、自然に囲まれた場所です」

「森や林っていうことは、人的被害は出ないのか？」

「人的被害が出たという話は聞いたことありません。そもそも、龍が卵を産むこと事態稀ですから。龍は個体数が少ないですし、非常に長寿のため子供の出産は数百年に一度とも言われています」

「少子化が進みそうな種族だな……あ、でも強いから狩られることもないのか」

「そうですね……若い龍種ならたまに狩られるみたいですよ。その場合は角や鱗などが非常に高値で取引されますね。龍種のように魔力要素が高い魔物は、良い魔法具の材料になりますから」

そう言って、カグラは自分の湯飲みに麦茶を注ぐ。そして軽く一口飲むと、カグラは自分用のお茶菓子を口に運んだ。

「ということは、その『龍の落とし子』で落ちてきた卵を手に入れれば高値で売れるのか？」

「それは止めておいたほうが良いですね。『龍の落とし子』は大切に扱わないと後が怖いですから」

「後が怖い？」

会話を続けながら、義人は止めていた政務を再開する。それほど重要ではない案件が書かれた書類に目を通しつつ、カグラの話には耳を傾けておく。

「産んだ龍……つまり母親が回収に来るらしいです。その時卵や孵化した子供がいなければ、その国を滅ぼすとか」

最後は冗談混じりだったのだろう。カグラの声は微妙に軽い。義人はそんなカグラの声を聞きながら、小さく苦笑した。

「そりゃ怖いな。この雨が自然に起きたことを祈るか？」

苦笑混じりの言葉に、カグラは口元に手を当てて笑う。

「まあ、御伽噺（おとぎばなし）みたいなものですから。そもそも、龍の出産は数百年に一度。そして、雨を降らせるほどの強力な力を持つ龍が生息していなければ関係ありません」

「でも、この国って魔物が多いよな」

ポツリと、義人が呟く。

その瞬間執務室に静寂が訪れ、義人とカグラは顔を見合わせた。

「ふふふ、ヨシト様ったら。そんなことを言っていたら本当に卵が降ってきますよ？」

「あはは。大丈夫だって。俺って運が良いほうだし」

何の根拠もなく笑い飛ばす義人。カグラもそれに同調して笑いつつ、窓の外に目を向ける。

「『龍の落とし子』が落ちてくるのは、運が良いからしいんです

けど……」

小さく呟かれた言葉は、義人に聞こえなかった。

翌日、義人は執務室で一つの物体を前に腕を組んでいた。
大きさは縦三十センチ、横幅二十センチほどの楕円形。義人が生まれてから何度も目にしたことのある物を何倍にも大きくしたようなものだ。
その物体……巨大な卵を前にして、義人は腕を組んでいた。

「いや、昨日の会話が前フリになっちまったな」

もしくはフラグ成立でも可である。
本日未明、城壁の外に落ちていくのを見回りの兵士が目撃して回収してきたものだ。
重さは五キロほどで、白い卵の表面は少しデコボコしている。義人と同じように卵を見ていたカグラは、頬を引きつらせていた。

「ま、まさか本当に落ちてくるとは……」
「へぇ……これが龍の卵なんだ。卵焼き何人前になるのかな？」

そんなカグラの横では、優希が興味深そうに卵を見ている。
志信やミーファ、シアラは兵士の訓練でこの場にいない。昨日とは打って変わって雲一つない快晴になったため、張り切って外へと出て行った。

「でも、本当にどうしましょうか？」

不安そうに卵を見るサクラ。義人は王剣ノーレを手に取ると、声に出して尋ねる。

「ノーレは何か知ってないか？　どうすれば良いか、できればアドバイス……助言が欲しいんだけど」

『そうじゃな……この卵を産んだ龍が引き取りに来るまでは育てるしかあるまい。龍は寿命が長いから、いつ頃取りに来るかはわからんがの』

「数ヶ月ぐらいか？」

『下手すれば数年単位じゃな。龍にとっては、そのくらいでも早いぐらいじゃ。そもそも、『龍の落とし子』など妾も知識としてしか知らん。実物に遭遇したのは初めてじゃ』

「……ちなみに、力の強い龍って一国を滅ぼすことが可能なのか？」

昨日カグラと会話していた内容を思い出し、義人は恐る恐る尋ねる。

『龍によるが、一国を滅ぼすのは可能じゃな。そこの巫女とて、本気を出せばこの王都を滅ぼすくらいできるであろう？』

「マジで！？」

「できませんよ！　というか、そんなことしません！」

義人は本気で驚き、カグラは慌てながら否定した。その際義人は、サクラがカグラを見て僅かに目を逸らしたのを見てしまい、それでも必死に気にしないことにする。

「しかし、この卵はどう扱えば良いんだ？　やっぱりアレか？　温

めなきゃ駄目か？」

『いや、龍の場合は必要ない。極端に暑くしたり、寒くしたりしなければそのままで大丈夫じゃ。問題は魔力じゃな』

「魔力？」

『うむ。龍の卵は周囲の魔力を栄養代わりに吸いながら育つ。このままでもいずれ孵化はするじゃろうが、魔力を吸わせた方が産まれるのも早くなるんじゃ。また、その時吸った魔力の持ち主と似た“属性”を持つらしい。もしも火の魔法を扱う者の傍に置いていたら、将来は火龍のように育つじゃろうな。その上、魔力も豊富で親の龍の属性も受け継ぐ。だから龍は強力で強大な存在なんじゃ』

「へぇー……さすが風と知識の王剣。博識だな」

『ふふん。どうじゃ、驚いたか？』

「ああ。それにしても魔力か……どのくらい必要なんだ？」

義人は卵に手を触れつつ、ノーレに尋ねる。意識を集中してみれば、たしかに少しずつだが魔力を吸われていた。

『ヨシトやメイドでは少し辛いかもしれん。仏頂面レベルでは論外じゃ。巫女か……そこの娘ぐらいの魔力があれば問題ないんじゃが』

巫女とそこの娘……カグラと優希は顔を見合わせる。そして、カグラは困惑した表情を浮かべた。

「ユキ様は魔力量が多いのですか？」

「あれ？　言ってなかったっけ？」

「聞いていませんよ。『魔計石』をお貸しはしましたが、結果は聞いていません」

「あ、そりゃスマン。優希の魔力量は、今のカグラよりも多い。『魔計石』が赤くなるくらいの魔力を持ってる」

「『魔計石』が赤く……それなら十分でしょうね」

義人の言葉に、カグラは納得してみせる。義人は優希のほうに顔を向けると、卵を軽く撫でながら尋ねた。

「それで、優希はどうする？　必ずしも魔力を与える必要はないみたいだけど……」

そんな義人の問いに、優希は僅かに考え込む。何かを思い出すように宙を見つめ、少しして義人を真っ直ぐに見つめた。

「義人ちゃんはどうしたいの？　魔力をあげたほうが良いと思う？」

「俺か？　そりゃ、与えた方が良いならそうするさ。産まれるのが早くなるみたいだし。ちっちゃい龍って見てみたいよな」

義人がそう言うと、優希は微笑みながら頷く。

「“じゃあ”、わたしが魔力をあげるね？　傍にいるだけでいいのかな？」

『……そうじゃな。背中にでも背負っていれば大丈夫じゃろう』

優希の言葉に、ノーレは何故か歯切れ悪く答える。だが、それを義人が気にするよりも早く優希は背を向けた。

「それじゃあ、卵を入れるための抱っこひもを作ってくるね。おんぶするよりも、抱きかかえていたほうが良いだろうし」

ちなみに、抱っこひもとは文字通り抱っこをするために使うひものことである。普通は赤ん坊を体の前で抱きかかえるために使うのだが、優希はそれを卵に使うらしい。

意外と乗り気な優希の様子に、義人は安心を込めて苦笑した。

「抱っこひもなんて、まるで母親だな」
『まあ、産まれる龍はあの娘と“似たように”育つじゃろうから、育ての母とも言えるかもしれんが……』
「それならどんな龍になるんだろうな？　優希って魔法を使わないから、どうなるかわからないし」
『さて、の。それは妾にもわからん。卵が孵ってみればわかるじゃろ』
「そうだな。それじゃあ、卵は優希に任せて政務に励むとしますかね」

最後にもう一度だけ卵を撫で、義人は机に積まれた書類に目を向ける。
昨日の豪雨で、数箇所土砂崩れが起きていた。問題ない場所もあるが、三箇所ほど道を塞いでいるらしい。まずは、それをどうにかしなければならない。

「よし、人足は国のほうで募集しよう。これは公共事業として扱うことにする。サクラ、財務大臣のロッサを呼んできてくれ」

卵から意識を切り離し、義人は以前から計画を練っていた公共事業の案を始動させることにした。
働いていない者に仕事を与えるための公共事業。当初の計画としては、道路の整備や用水路を作るのが目的だった。だが、最初の仕事はこれで決まりである。

「土砂や木を退かす力仕事は集めた奴らにさせる。土木作業を本職にしている奴には、土砂崩れが再発しないように補強する仕事を割り振ってくれ」
「わかりました。城下町の土木職人に話を通します」

義人は指示を与えながら、それに伴って必要になる書類を作成していく。
いつの間にか執務室から龍の卵がなくなっているのに気づくのは、それから三時間後のことだった。

優希は絨毯張りの廊下を歩きながら、抱きかかえた卵を見て小さく微笑む。優しく卵を撫でると、それに応えるように卵が僅かに揺れる。

「どんな子が産まれてくるのか……楽しみだなー」

呟いた声は、優しい響きで宙に溶けていった。

第五十七話：酒は飲めども飲まれるな

カーリア城において、食堂は二ヶ所ある。

一つは、王やその客人などが利用する王用の食堂。そこまで広くはないものの、高価な調度品が飾られた気品ある食堂である。

そして、文官や武官、兵士が使う一般食堂。こちらは王用の食堂と違い、大勢で食事ができるように広々と設計されている。

最近、この国の王である義人は王用の食堂を使わず、兵士に紛れて一般食堂で食事を取ることが多い。色々と兵士の話や噂が聞けるからなのだが、抜け出す度にカグラに怒られている。　いっそのこと王用の食堂など王様命令で使用禁止にして、全員一般食堂で食事を取るようにしようかと義人も考えていた。

他の者に示しがつかないといつもカグラが怒るのだが、義人は大して気にしない。そんなことを気にするよりも、文官や武官、兵士などとコミュニケーションを取ったほうが有益だと思っているからだ。

臣下に命令しようとしたら、名前がわかりませんでした。もしそんなことになったら笑えない。そして、義人も“あえて”カグラにそういった説明はしないで怒られていた。

「今日の晩御飯は何かなーっと」

そうして今日も、義人は一般食堂に向かっていた。

政務も終わり、時刻は午後七時。今日一日執務室で政務をしていた義人は、自身の横で服を縫っていた優希と共に、カグラの目を掻い潜って一般食堂に向かって歩いていた。

「今日はねー、たしか新鮮な魚が届いたはずだから魚料理が中心だよ」

「魚か。もしかして刺身とか？」
「ううん。夏場に生の魚を出すのは危ないから、塩焼きがメインだよ。あとは煮付けとかかな？　刺身が良いなら今からさばいてくるよ？」
「いや、いいよ。塩焼きも美味しいし」
義人の言葉に微笑む優希。
体の前面には抱っこひもで龍の卵をぶら下げ、時折バランスを取るように抱え直している。そんな優希の様子に義人は目を細めつつ、楽しげに笑った。
「こっちの世界の魚は美味しいから楽しみだな」
「そうだねー」
楽しげに笑う義人につられたのか、優希は嬉しそうに笑う。そうやって二人で歩いていると、一般食堂へとたどり着いた。
「ちょっと混んでるな」
「あ、あそこ空いてるよ？」
周りを見回して呟く義人に、優希は空いている席を指差す。その指の先を見た義人は、納得したように頷いた。
「丁度良いな。よし、それじゃあ優希は席を取っておいてくれ。俺は夕飯をもらってくるから」
「うん。ありがとう、義人ちゃん」
卵を抱えたまま、優希はのんびりした足取りで席へと向かう。周りの兵士が何事かと目を向けるが、それが卵を抱えた優希だとわかると速やかに道を空けた。

義人は料理の受け取り場所へ足を向けると、並んでいる一般兵の一番後ろへと並ぶ。すると、それに気づいたらしく並んでいた兵士が目を見開いた。

「こ、これはヨシト王!?　何故こっちの食堂に!?」

「いや、向こうの食堂だと人が少なくて寂しくて。あ、ほら。一番前の人は料理ができてるぞ」

下手すれば膝をつきそうな兵士に苦笑しつつ、義人は気軽に笑う。そんな義人を前に、兵士は慌てて道を空けた。

「ど、どうぞお通りください！」

「いや、先に並んだ奴から受け取るべきだろ。ほら、元に戻る……いや、戻れ」

このままだと道を譲ったままだと判断した義人は、とりあえず命令する。すると兵士達は顔を見合わせ、僅かに苦笑して元の列に戻った。その様子を前にして、義人は苦笑する。

「王様って言っても、俺よりも年上のほうが多いだろうに」

義人としては、自分の父親ほど年が離れている者にまで畏まられるのは勘弁してほしかった。表には決して出さないが、逆に義人のほうが恐縮してしまいそうである。

騎馬隊隊長のグエンのように、礼儀を弁えながらも気さくに接してもらうほうが気が楽だ。しかし、国王に対して気さくに話しかけることができる人物などそうそういるものではない。

生来の性格で誰とでも気軽に接することができるか、本人と親しい人物や地位が同じか上の者。もしくは相手がどれだけ偉くても気にしない、図太い神経を持った者くらいだろう。

残念ながら、現在のカーリア国においてそれらが当てはまる人物は非常に少ない。そうなると、義人自ら接しやすいように振舞うしかなかった。

兵士の列に並び、傍にいた兵士と世間話をしながら列が進むのを待つ。そして自分の番がくると、義人は指を二本立てて見せた。

「あ、おばちゃん。夕飯二人前ね」

まるで、学食か定食屋で注文する学生のようである。もっとも、義人は高校生なので間違ってはいないのだが。

注文を受けた中年の女性は返事をすると、奥へと引っ込む。すでに何度か注文を受けたことがあるおかげか、大した動揺もしていない。

義人はお盆に乗った夕飯をスムーズに受け取ると、優希に確保してもらった席へと向かう。百人単位で食事が取れるように作られた一般食堂は移動用のスペースも広く、両手でお盆を持っていても誰かとぶつかることはない。

優希の言った通り魚の塩焼きがメインの夕食を眺めつつ、義人は優希が確保した席へとたどり着く。そしてなるべく音を立てないようにお盆を置くと、自身はその隣へと腰を下ろした。

「優希の言った通り、魚の塩焼きがメインだな」

「でしょ？　この魚はね、今の時期が一番美味しいんだって」

「おお、そりゃ楽しみだ。それじゃあ、いただきます」

合掌してお決まりの言葉を呟くと、料理と一緒に受け取った箸を手に取る。そして、周りの様子を眺めつつ食事を始めるのであった。

「ふー……食った食った。いや、塩焼きも美味しいな」

食事を終えた義人は、あと少しで食べ終わる優希の横でのんびりとお茶を飲む。

幸いというべきか、それともももう諦めたのか。逃げた義人を連れ戻しにくるはずのカグラはいまだに姿を見せない。

義人はそのことに安堵と底知れぬ不安を等分に覚えつつ、食後の満腹感からか欠伸を一つ漏らす。

そして軽く目をこすると、後ろのほうから聞こえる複数人の大きな笑い声に眉を寄せた。笑い声程度なら気にすることはないが、やけに騒がしい声である。

「あれは……魔法剣士隊の連中じゃないか。手に持ってるのは酒か？」

振り返った先にいたのは、酒らしき液体が入ったビンを片手に盛り上がる魔法剣士隊の兵士が五人ほど。男性二人に女性三人という組み合わせだが、すでに出来上がっているのか男女共に一人ずつ顔が赤い。

訓練時間でもないので酒を飲むのを止めるつもりはないが、周りに迷惑をかけるのはいただけない。どこかの隊の隊長や副隊長がいれば注意するのだろうが、生憎（あいにく）と誰もいないようだった。

あまり騒ぐと周りの迷惑になると判断した義人は、ため息を一つ吐いて立ち上がる。

「こらこら。お前らあんまり騒ぐんじゃない。飲むのは良いけど、周りに迷惑をかけるのはアウト……いや、駄目だ」

義人がそうやって声をかけると、魔法剣士隊の兵士達は煩わしそうに振り返り……酒を噴き出した。

「ヨ、ヨシト王!?　ここで何してるんですか!?」
「食堂でするのことと言ったら食事だろ?　それは置いとくとして、飲むならもう少し静かに飲んでくれよ。騒ぐなとは言わないけど、もう少し声を落としてだな」
「そんなことよりヨシト王も飲みましょーよ!」

義人の言葉を遮り、酒の入ったビンを突き出す酔っ払い。もとい、酒の入ったビンを突き出す女性兵士。すでに大分酒が回っているのか、顔は赤く目が微妙に据わっている。

「いや、俺の世界じゃ二十歳未満は酒を飲んじゃいけないんだよ」

きっぱりと断ると角が立ちそうだったので、義人はとりあえずそう言ってみた。

ちなみに口ではそんなことを言う義人ではあるが、酒は割と飲めるほうである。親が飲む時に一緒に飲んだり、親友の祖父に飲まされたこともあったので問題はない。ザルとまではいかないが、余程無茶な飲み方をしない限り酔うことはなかった。両親も同じように酒に強いため、それを受け継いだらしい。

「しかしヨシト王。この国では飲酒に関する法はありませんし、なにより貴方が法ですよ?　それに酒は百薬の長とも言います。美味しいですし、飲むと日頃の鬱憤も晴れます。夜もぐっすりと眠れますし」

酒の勧めを断った義人だが、それを見た酔っ払いの女性兵士は表情を引き締めて真面目に語り始める。

酒は百薬の長と言っても、それは適量ならばの話だ。目の前の女性兵士が飲んだ量は明らかに適量をオーバーしており、薬ではなく

毒になるだろう。
美味しいかどうかも人それぞれだし、飲めなければ鬱憤が晴れるどころか逆に溜まる。
飲んで気分が悪くなれば夜も眠れるかわからない。
義人は思わずそう言おうとしたが、酔っ払いに理(ことわり)をもって話しても無意味だ。反論すれば今度は意味の通じないことを言い出しそうだし、最終的には酔っ払いの最終奥義である『リバース』をする可能性がある。
ちなみに、『リバース』は魔法ではない。

「あはは、俺が法ね。まあ、そりゃそうだ。そこまで言うなら、折角だし一杯もらおうかな」

一杯だけ飲んで優希のところに逃げよう。
そう決めた義人は適当になだめつつ、とりあえず一杯だけ飲むことにした。

「さすが話がわかりますね！」

義人が許諾したことに嬉しそうに笑う。そして手のひらほどの底の浅い杯(さかずき)を持ってくると、それを義人に手渡した。

「ささ、それでは一杯」
「お、こいつはどうも、っと」

果物のポポロを原料にしたポポロ酒を注いでもらい、義人は苦笑しながら口を開く。

「お酒は二十歳になってから飲みましょう」
「はい？　誰に言ってるんですか？」

「さて、誰だろうな？」

義人は肩を竦め、ポポロ酒を口にする。アルコールはそこまできつくなく、果汁の甘さもあって非常に飲みやすい。酒特有のアルコール臭さが僅かに鼻についたが、そこまで気にするものでもなかった。

酎ハイみたいなものだなと内心で思いつつ、義人は軽く飲み干す。

「おおー！　中々イケる口ですねー！」

軽く飲み干した義人を見て沸きあがる周囲の兵士達。酔っ払いに同調してしまったのか、今までは止めようとしていた兵士も諦めたように酒を飲み始めた。

「ささっ！　それではもう一杯！」

義人のグラスが空になったのを見て、もう一度酒を注ごうと酔っ払いが寄ってくる。

完全に出来上がっているのか、義人が国王だということを忘れているらしい。酔っ払った女性兵士が義人の杯に手を伸ばそうとすると、それを止めるように横合いからその手がつかまれた。

「そこまでです」

誰かが止めてくれたらしい。義人は内心で僅かに安堵の息を吐き、止めた人物へと顔を向ける。

「それで、ここで何をしているのですか……ヨシト様？」

カグラだった。王用の食堂から逃げた義人を捕まえにきたのか、

表情は非常に“素敵な”笑顔である。

「また王用の食堂を使っていないと思ってこちらに来てみれば……」

酔っ払った女性兵士の手を離し、カグラは説教をしようと義人へと一歩近づく。説教が始まると思った義人は背筋を伸ばすが、そんな二人の様子を気にすることなく酔っ払いの女性兵士がカグラへと飛びついた。

「ほら！　カグラ様も飲みましょうよ！」

「えっ！？　きゃあっ！！」

カグラに抱きつき、酒瓶に入った酒をその口元へと運ぶ女性兵士（よっぱらい）。

カグラは完全に気を抜いていたのか、なす術もなく酒を飲み込む……いや、飲み込んでしまった。

義人は『酔っ払いスゲー』と賞賛しようとしたが、それよりも早くカグラの“異変”に気づいて口を閉ざす。

「カグラ？　おい、カグラ？」

とりあえず声をかける。

酒を飲んだカグラは踏鞴（たたら）を踏むようにふらつくと、かけられた声に答えるため、義人に据わった目を向けた。

「……ひっく」

漏れ出た声は、しゃっくりのようなものだったが。

二時間後、食堂は地獄と化していた。
一口で酒に酔ったらしいカグラは義人に説教をすることなく、椅子に座って酒を飲んでいる。ただし、その周りには空になった空きビンや、カグラに絡まれて酔い潰された兵士が死屍累々と転がっていた。
その中には、いつまで経っても義人を連れてこないカグラを心配して様子を見に来たサクラが含まれていたりもする。
義人はカグラの最も近くにいたのだが、絡まれたら最後だという生存本能に従って周りの兵士(いけにえ)をカグラへと差し出した。
今ではカグラから離れ、優希や途中から食堂へと顔を見せた志信と共にその様子を眺めている。

「まさか、カグラがここまで酒に弱いとは思わなかったんだけど……いや、これは逆に強いのか？」

義人は疲れたように呟く。
原因の一端を担った自分がこの場から逃げ出すわけにもいかず、さりとて絡まれて酒を大量に飲まされるのも困るため離れたところから見ていることしかできなかった。
最初は必死に止めようとしたのだが、酒を一口飲んで酔っ払ったらしいカグラは聞く耳を持たず、義人に打てるのは逃げの一手しかない。

「やはり、酒は危険だな」

カグラの様子を見て、志信は至極真面目に頷く。武術家たるもの酒に溺れるわけにはいかないらしいのだが、それ以前に未成年である。将来の禁酒を誓う志信に、義人は苦笑を向けた。

「でも、志信の爺さんは普通に飲んでたぞ？」

「お爺様は酒を飲んでも問題はない。年齢的にも、武術家としてもな」
「そんなもんか？」
「そんなものだ」

言葉少なに語る志信の言葉に首を傾げつつ、義人は手元のポポロ酒を飲む。その隣では義人と同じように、優希がポポロ酒を飲んでいた。ただし、優希の飲んでいる方は杯が大きいもののアルコール度数はかなり低い。

「美味しいけど、ジュースみたいだね？」
「それはアルコールが二、三パーセントくらいだろ？　それにポポロの味が強いし、ジュースっていっても間違いじゃないかもな」

二人がポポロ酒について適当に批評していると、今度はミーファが食堂の入り口に姿を見せた。騒ぎを聞きつけたのか、それとも遅い夕飯を取るのかはわからない。食堂の床に転がる兵士達を見て眉を寄せ、端の方で椅子に座る義人を見て目を見開く。

「ヨシト王？　一体何をされているのですか？」

ミーファからそんな言葉をかけられ、義人は苦笑交じりに手に持った杯を見せる。

「ちょっと色々あって。そんなことよりどうだ？　ミーファも一緒に飲まないか？　志信もいるぞ？」

義人がそう言うと、ミーファはつられたように歩み寄ってきた。そして椅子に座ろうとして、離れたところで酒を飲んでいる者を見る。

そこでは、カグラが楽しそうに酒を飲んでいた。

「やっぱり遠慮します」

そう言い残し、食堂の出入り口へと全力で“逃げ出す”ミーファ。

『強化』を使用した、実に素早い反応である。

その行動に義人が疑問を覚えるよりも早く、酒を飲んでいたはずのカグラが姿を消した。

「ミーファちゃん、どこに行くんですか？」

どうやって移動したのか、カグラは食堂の出入り口、すなわちミーファの眼前へと移動している。しかも右手には酒瓶を持ち、左手には杯を持ったままだ。その動きが見えなかったミーファは、頬を引きつらせながら後退していく。

「か、カグラ……わ、わたしはほら、明日も訓練があるから、ね？お酒を飲むと差支えが出るのよ」

「大丈夫、大丈夫です。ちょっとです。お酒の一升くらい……」

ちなみに、一升とは一・八リットルである。

「ちょっとじゃないわよそれ！？　あんた、前もちょっとって言ってわたしに大瓶二本飲ませたでしょ！？　あ、駄目！　そんな引っ張らないで！」

「あはは、ほら、一緒に飲みましょう？」

必死に逃げようとするミーファを力ずくで押さえ込むカグラ。

ミーファは『強化』を使って逃げようとするが、カグラも『強化』を使ったのかビクともしない。『強化』は使用者の魔力量によって

効果が変わるので、ミーファでは抗いようがなかった。

「もう、逃げちゃだめです……はい、あーん」

楽しそうに笑いながらミーファに無理矢理酒を飲ませるカグラ。義人はそんな二人を見て、引きつった笑みを浮かべた。

「か、カグラって過去にもこんなことをしたのか？」

やはり今のうちに逃げたほうが良いかもしれない。そう判断した義人はミーファに心の中で合掌しつつ、優希や志信と一緒にこっそり食堂から抜け出そうとする。

「どこに行かれるんですか？」

しかし、今のカグラはそれを許さない。

一瞬で義人の背後に接近すると、そのまま片手で持ち上げて元の席へと戻す。義人は一切抵抗せず、首の裏を持たれた猫のように大人しく元の席へと戻った。

ミーファのほうを見てみれば、逃げられないと悟ったのか別の席で怯えるように酒を飲んでいる。

「ね？　ほら、ヨシト様も飲みましょうよ？　さっきから他の人に飲ませてやれって言うばかりですし、ヨシト様も飲みましょう？」

「飲んでるって、ほら」

そう言って杯……カグラが持つものに比べて二周りほど小さい杯を見せた。だが、そんな義人にカグラは頬を膨らませる。

「そんなのは飲んだうちに入りません。はい、わたしの杯を使って

ください」

ズイ、と突き出される杯を、義人は突き返す。

「いや、ほら。明日も政務があるから、な？」

「いいじゃないですか少しくらい。美味しいですよ？　それとも、わたしの酒は飲めませんか？」

「そういうことじゃなくてですね、俺の世界では二十歳未満は飲酒できないという法律がありまして、ええ」

「ここではヨシト様が法です。ヨシト様が飲もうと思えば飲んで良いんですよ？」

「そりゃそうだけど。じゃあ、やっぱり二十歳未満は飲酒禁止という法律を作ろうかな、なんて……」

徐々に近づいてくるカグラから身を引きつつ、義人は断り続ける。

「むぅー……それじゃあ」

断り続ける義人に業を煮やしたのか、カグラは見る者を惹きつけるような綺麗な笑顔を浮かべた。それは、街角を歩けば誰もが振り向くような、魅力ある笑顔。

そしてカグラは、そんな笑顔をまま杯を持ち上げて口を開く。

「飲め」

命令だった。

「はい」

生存本能に従い、義人は頷く。そこに主従関係など見えず、ある

のは強者と弱者の構図だけである。
せめてもの抵抗か、差し出す杯は義人が今まで使っていた小さめのものだ。

「えいっ」

それを見たカグラは、笑顔で杯を叩き割った。

「ちょっと!?　いきなり何してんの!?」

真っ二つどころか八分割に砕けた杯を見て、義人は震えた声を上げる。そんな義人に、カグラは自分が使っていた杯を差し出した。

「それじゃあ小さすぎですよ。はい、わたしの杯を使ってください」

笑顔で杯を差し出してくるカグラ。
笑顔ながらも強烈な威圧感を前にした義人は思わずその杯を受け取りそうになったが、それよりも早く、笑顔の優希が自身の杯を義人の手に乗せる。

「義人ちゃん、こっちのほうが良いよ」

乗せられた杯は大きさがカグラの杯とほぼ同じで、深さもほぼ同じだ。

「あ、ああ。サンキュ」

義人はとりあえず優希に礼を言うと、カグラのほうへと杯を差し出す。すると、カグラは僅かに不機嫌そうな顔で杯に目を落とした。
そして酒を注ぐことなく、義人へと視線を移す。さらに自分が使っ

ていた杯を見ると、何が不満なのか頬を膨らませた。

「お酒、注がないの？」

無言で義人を見るカグラに、優希が笑顔で話しかける。すると、カグラも笑顔を浮かべて優希と微笑み合った。

「いえ、やはり止めておきます。ヨシト様には明日も政務がありますから」

「そうなんだ」

「ええ」

笑顔のカグラは義人が優希から受け取った杯を手に取ると、それを少し遠くに置く。そして、自分の杯を義人の手に握らせた。

「それでは一杯」

「はい、ちょっと待ってね」

笑顔の優希は酒を注ごうとしたカグラから酒瓶を取り上げ、義人が握らされたカグラの杯を回収する。

「何をするんですか？」

「義人ちゃんは明日政務があるから飲ませないんじゃなかったの？」

「あれ？　そんなこと言いましたか？」

カグラは笑顔でとぼける。そんなカグラに、これまた優希も笑顔で頷いた。

「あ、そうでしたね。うっかり忘れちゃいました。あははは」

「うん、そうだよ。あははは」

笑顔で笑い合う二人の横で、義人は志信の方へと身を寄せる。
微妙に空気が軋む音が聞こえた気がしたのだが、義人は幻聴だと自分に言い聞かせて口を開いた。

「……なんか、胃が痛くなってきた」
「飲みすぎではないか？」

素で答える志信。
結局、騒動が収まるのはカグラが酔いつぶれる二十分後のことだった。

第五十八話：月明かりの影

「しかし、これはある意味壮観だなぁ……」

酒に酔って暴れていたカグラが飲み潰れた直後、義人はそんな言葉を呟きながら辺りを見回した。

辺りにはカグラによって酔い潰された兵士が死屍累々と転がっており、中には良く見知った顔も含まれている。

その最たる者はサクラやミーファだが、今は完全に酔い潰されてテーブルに突っ伏していた。

なんとか無事だった義人は、カグラの手によって犠牲になった兵士達に合掌する。そして、同じく無事だった優希や志信へと目を向けた。すると、無理矢理カグラに酒を飲まされた志信が口を開く。

「とりあえず部屋にでも運ぶか？」

酒を飲まされたものの、その口調はしっかりしている。足元を見てみれば、特にふらついているということもない。志信自身、酒には強いようだ。

「そうだなー……夏とはいえ、このまま寝転がしとくのも体に悪いか。志信はちょっと人を集めてきてくれるか？　俺と優希は起きれる奴を起こすから」

「了解した」

義人の指示に従い、志信はすぐに食堂を後にする。義人はそれを見送ると、もう一度だけ周りを見回して苦笑した。

「もう二度とカグラの周囲には酒を近づけねぇ……」

義人は万感を込めて、そんなことを誓ってみる。もっとも、それが守られるかどうかは神のみぞ知ることだが。

優希は片付けの人員を確保するために厨房へと向かい、義人はひとまず手近に転がっていた中身のない酒瓶を集めると、テーブルの上へと置く。次いで地面に転がっている者やテーブルに突っ伏している者に声をかけて回る。

「おーい、大丈夫か？」

「……大丈夫、です……うぷっ」

大丈夫ではないらしい。

義人は気分が悪そうにしている者を丁寧に介抱すると、僅かに疲れを含めて口を開いた。

「この歳で酔った人間の介抱をすることになるとはなぁ……」

しみじみと、感慨深そうに呟く。感慨深いと言っても、それは呆れを多分に含んではいたが。

そうやって義人が介抱していると、厨房から優希が顔を覗かせる。そして湯飲みを片手に小首を傾げた。

「義人ちゃん、お水はいる？」

「そうだな……何人分か持ってきてくれ」

優希は義人の言葉に頷き、水の入った湯飲みをお盆に六つほど乗せる。そして自身の前面に抱えた卵に衝撃を与えないように注意してお盆を持ち上げ、義人の元へと運んだ。

「大丈夫そう？」

「完全に寝入ってる奴が大半だけど、中にはちょっときつそうな奴もいるんだ。さすがに医者はいらないと思うけど、用心はしておこう」

急性アルコール中毒にでもなったら大変だ。そう付け加え、義人は気分が悪そうな者に水を渡していく。

今まで厨房でつまみになる小料理を作っていた調理人達は、そんな義人を見て苦笑しつつも片付けを始めた。

王が一兵士の介抱をするなど聞いたこともないが、それが当代の王なのだろうと納得している。そして、手の空いている者は義人へと指示を仰ぐ。

「ヨシト王、酔い覚ましになるようなものを作りましょうか？」

「ん？　そうだな。良ければ作ってほしい。このままだと、何人かは絶対に二日酔いになるだろうしな」

元の世界なら酔い覚ましの薬やドリンクなどが手軽に手に入るが、この世界ではそうもいかない。

「アミノ酸を豊富に……って、アミノ酸なんて通じないか。まあいいや、この世界なりに酔い覚ましの方法も発達してるだろうから任せるよ」

「わかりました」

アミノ酸という言葉に首を傾げつつも、手の空いた調理人は首肯する。

アミノ酸と言っても、具体的には内臓機能を高めるグルタミンなどが必要だ。だが、それも通じないのでは義人に打つ手はない。

そうやって義人が優希と共に介抱していると、志信が見回りらしき兵士を引き連れて戻ってきた。兵士は食堂の中を見ると、呆れを

込めて苦笑する。

「これはまた……すごいですね」

義人も兵士の言葉に苦笑すると、揺さ振っても起きないほどに寝入っている者達を見る。

「悪いけど、寝ている奴を部屋に運んでやってくれないか？　さすがに人手が足りなくてな」

「わかりました。部屋に押し込んできます」

義人の言葉に苦笑しながら敬礼すると、兵士達は寝入っている者を抱え上げていく。そして、なるべく揺らさないように歩き出した。

「まったく……俺達も運ぶか」

そう言って、義人は寝ている者に視線を向ける。

いつもならカグラが義人の行動を止めるはずだが、今回は彼女が元凶だ。今は完全に寝入っており、実に幸せそうにテーブルに突っ伏している。

「仕方ない。いくら夏とはいえ、このままにするわけにもいかないか」

ため息を一つ吐き、義人はひとまずカグラの肩を押して揺らす。声をかけながら数秒揺らしてみるが、カグラは幸せそうに寝息を立てるだけだ。

義人はもう一度、今度は深いため息を吐く。

「志信もその辺に転がっている奴を……いや、ミーファを部屋に連

れて行ってやってくれ」

微妙にうなされているミーファに申し訳なさを感じた義人は、志信にミーファを運ぶよう頼む。ミーファも他の兵士に運ばれるより、志信に運ばれたほうが良いだろうと思ってのことである。

本当は女性に運ばせたいのだが、『強化』でも使えないと大変だろう。しかし、食堂にいた『強化』が使える女性の魔法剣士や魔法使いは軒並みカグラに酔い潰されていた。

今回の騒動に巻き込まれなかった者は部屋にいるのだろうが、すでに時刻は午後十時を回っている。そろそろ城内の不要な灯を落とす時間であり、明日も訓練があるためすでに就寝しているだろう。

もっとも、志信に運んでもらうのはミーファに対する義人なりのお詫びの意味合いもあったが。

義人のそんな考えを気に留めず、志信は何事もないように頷く。

「わかった。それならミーファは俺が運ぼう」

志信は短くそう答え、何の気負いもなくミーファを抱え上げる。一応寝ていることを考慮しているのか、首と膝下を持つ横抱き……いわゆるお姫様抱っこだ。

義人は普段と変わらぬ足取りで歩き去る志信の背中を見送ると、感心したように口を開く。

「お姫様抱っことは……やるじゃんか。って、馬鹿なことを言ってもいられないか」

なんとなく志信を賞賛すると、義人は眠っているカグラに視線を落とす。

さすがに首根っこをつかんで持って行くわけにもいかないので、義人も志信に倣ってカグラを横抱きに持ち上げた。その際僅かにカ

グラの目元が動いたが、目を開けることはない。

「よっと。お、意外と軽い？」

本人が起きていたら笑顔で殴られそうな台詞を吐きつつ、義人は少し抱え直してバランスを取る。そしてサクラに肩を貸している優希に目を向けると、軽く手を振った。

「そんじゃ、サクラのほうは頼むな。大丈夫か？」

「大丈夫だよ。それじゃあ、サクラちゃんは部屋に連れていくね？」

お互いに頷き合うと、義人は食堂を後にした。

余程深く寝入っているのか、ほとんど身動ぎもしないカグラを抱えた義人は廊下を歩いていく。両手が塞がっている状態でどうやって扉を開けようか、なんて愚にもつかないことを考えながら、義人は両腕で抱きかかえたカグラへと目を落とした。

身体能力が上がっているせいか、カグラの体はやけに軽く感じられる。男性の筋肉質な肉体とは違い、触れた腕に伝わる感触は女性らしく柔らかい。その上服越しでも伝わる温かさは、普通ならば心地良さと同時に扇情染みた感情を抱かせるだろう。

「あー……明日の政務は大丈夫かねぇ？」

しかし、義人の意識が“そういった”感情へと傾くことはない。抱きかかえたカグラに向ける感情は、起こさないように注意するといった気配りだけだ。

割と飲んでしまった酒が明日に残らないことを祈りつつ、義人は

カグラの部屋へとたどり着く。
カグラの部屋は義人の寝室に近い場所に作られており、その距離は歩いて数十秒といったところだ。
『強化』でも使いながら走れば数秒で到着できるが、そんなことを試す者はいない。カグラは普段魔力を回復するために外の魔力回復施設で寝るのだが、今日ばかりはそう言ってもいられないだろう。
義人はなんとかカグラの部屋の扉を開けると、カグラを起こさないよう慎重に歩を進める。そして少し大きめのベッドを見つけると、カグラを横たえるためにそちらへと向かった。
月明かりに照らされたカグラの部屋は、義人の寝室に比べれば多少狭い。もっとも、狭いといっても『カグラ』はこの国の中では宰相と並んで地位が高く、王を除けば最上位に位置する役職のため使用人などが使う部屋と比べれば十分に広かった。
カグラはあまり物を置かない主義なのか、必要最低限の生活用品しか置かれていないのも広く見える理由だったりする。
少し無機質に感じる部屋の空気に眉を寄せつつ、義人はカグラのベッド傍まで歩み寄った。そしてカグラを起こさないように、丁寧に、ゆっくりとカグラをベッドに下ろす。

「んっ……」

ベッドに下ろされたカグラは僅かに声を漏らして眉を寄せるが、すぐに落ち着いたのか寝息が安定する。義人はやれやれと呟くと、カグラを起こさないよう静かに薄い掛け布団を手に取る。多少暗いが、月明かりのおかげで見えないほどではない。
いくら夏とはいえ、この世界での夏の夜は涼しいくらいだ。さすがに風邪を引くことはないだろうが、用心するに越したことはない。
そう判断した義人がカグラに布団を被せようとした瞬間――、

「おろ？」

世界が回転した。

「は？　や、へぶっ！？」

ぐるりと視界が斜めに一回転すると同時に背中に衝撃が伝わり、義人は思わず変な悲鳴を上げる。

義人は回転した衝撃で閉じた目をすぐに見開き、素早く状況を判断しようと辺りを見回そうとした。しかし、そこで自分の腹部に重さが加わっていることに気づいて視線を巡らせる。

「ビックリした……って、カグラ？　何やってんだ？」

義人は自分の腹部を占領している人物……カグラにそんな疑問の声を投げかけるが、カグラは答えない。見れば、布団をかけようとしていた右手がカグラの左手につかまれている。

どうやら、腕をつかまれたことに気づくよりも早く、カグラに投げられてベッドに転がされたらしい。そして転がされると同時にカグラが体勢を入れ替え、自身の腹部に乗った。

義人がそう理解するのにかかった時間はほんの数秒。そしてつかまれた右手からカグラへと視線を向けると、思わず口を開いた。

「いや、本当になにしてんの？」

いわゆるマウントポジションを取られたわけだが、義人から出たのは心底疑問を含んだ声だった。

もしやさっきの『お、意外と軽い？』という台詞をカグラが聞いていて、マウントを取ってボコボコにされるのかと一瞬恐怖する義人だったが、カグラにそんな様子はない。本当に実行されたら軽く死ねる自信があったが、幸いというべきかカグラがそんな挙動を取

ることはなかった。

「ヨシト、さまぁ……」

代わりに、少し熱っぽい声がこぼれたが。

「……は？」

今まで聞いたことのない種類の声色に、義人は目を丸くした。

よく見れば、カグラの目は微妙に潤んでいる。口から漏れる吐息は熱っぽく、赤い唇から僅かに覗く舌が艶(なまめ)かしい。腹部に乗ったカグラの体は軽く、温かい上に柔らかい。

そして義人の鼻腔をくすぐるのは、女性らしい、やけに甘く感じられる匂いと……微量のアルコールの臭(にお)いだった。

……酔ってやがる。

思わず、義人は心中でそう呟いた。そして僅かに頭痛を感じると、ため息混じりに口を開く。

「飲みすぎだよカグラ。ほら、寝惚けるのはそれくらいにして、早く寝ろって。明日も仕事があるだろ？」

そう言いつつ体を起こそうとするが、カグラの乗った場所は臍(へそ)の上。体を起こそうにも、動かすための基点を押さえられた状態では、力が入れにくかった。さすがに力づくで押し退けるわけにもいかず、義人はカグラへと声をかける。

「ちょっと、そこをどいてくれ。起きれないだろ？」

「それは、わたしが重いってことですか？」

「違う違う。カグラは軽いくらいだけど、臍の上に乗られたら体を起こしにくいんだって」

苦笑しながらそう言うが、カグラはどこうとしない。揺れる瞳で義人を見下ろし、何かを考えているのか口を開いては閉じている。

月明かりに照らされたカグラは酒のせいか、はたまた別の要因か、頬だけでなく顔全体が赤い。

義人はどうするべきかわからず、とりあえずカグラの行動を待つことにした。

そうすること数十秒。カグラは僅かに目を瞑ると、何かを決意したように目を見開く。

「ヨシト様」

「なんでしょう？」

なんとなく敬語で答える義人。決して、沈黙が重すぎたからではない。

カグラは頬を真っ赤に染めると、しおらしく視線を逸らす。

「その、至らぬ点もあるでしょうが……わたし、頑張ります」

「何が!?　何を頑張るの!?」

「そんな……わたしの口からは言えませんよ……」

義人はいきなり三つ指をつきそうなカグラに突っ込みを入れつつ、なんとか逃げ出そうともがく。しかし、その度に重心をずらされて逃げ出すことはできなかった。

そんな義人を見下ろしながら、カグラは僅かに微笑む。月明かりに透けた絹のような黒髪が義人の頬にかかったが、それを気にする余裕はない。

「“貴方”をこの世界に召喚したあの日、わたしは貴方に誓いました。『この身は召喚の巫女。召喚されし王を補佐し、助ける者。戦えと命じられれば命を賭して戦い、守れと言われれば身を挺して王を守ります。身を差し出せと言われれば、喜んで差し出しましょう』と」

「いや、聞いたけどさ」

それがどうしたんだと言わんばかりの義人に、カグラはゆっくりと言葉を紡いでいく。

「こうも、誓いました。『我が身を捧げます』、と」

冗談ではなく、その目は本気だ。

「そんな……本気か？」

あの時と、召喚されたあの日と同じように、義人は尋ねる。そして、カグラもあの日と同じように、宣誓染みた言葉を紡いだ。

「はい、本気です。それが歴代の『カグラ』の“務め”であり、ヨシト様と共に“この国で同じ時を歩みたい”と思う、『わたし』の願いです」

それは、思いのこもった、囁（ささや）くような言葉。

ここまで言われては、義人としてもカグラの思うところに気づく。

いや、“意図すること”に気づいてしまう。

そんな義人に構わず、カグラは僅かに体を傾かせた。

「ヨシト、様……」

カグラは目を瞑り、ゆっくりと、義人との距離を縮めていく。それ故に、カグラは義人が浮かべた表情を見ることはなかった。目を瞑ったが故に、気づけなかった。

月明かりに照らされて床に映った二人の影が、ゆっくりと近づく。

――――そして、影が重なった。

第五十九話：想いと願い

小さな頃から、少女は『カグラ』として育てられてきた。『カグラ』として次代の王を召喚し、その身を助けるために様々なことを学んだ。

召喚するための魔法だけではなく、多岐に渡って様々な魔法を覚えた。

魔法を操るための技術を身につけ、異世界からの召喚という魔法を使うために魔力量を必死に増やした。

王の剣として戦えるよう、どんな敵とも戦える術を学んだ。

王の知能として役立てるよう、山のような知識も頭に叩き込んだ。

自身が召喚する王と共に、この国を守るために。

自身が召喚した王を、守るために。

幼少の頃から『カグラ』となるべく英才教育を施された“少女”は、同年代の異性と話す機会など皆無だった。もちろん男女交際などしたことがなく、友人と呼べたのはミーファやサクラぐらいである。日常的に言葉を交わす男性など、精々アルフレッドぐらいしかいなかった。

そのため、今自分が“していること”も、“しようとしている”ことも知識としてしか知らない。それでもそれは『カグラ』としての“務め”であり、未知への恐怖と期待を含んだ少女の“願い”でもある。

『カグラ』の務めは王を公私共に支えることだ。故に、王が望むならどんなことにでも応えなければならない。

『カグラ』として、王の欲望を満たさなくてはならない。それは義務であり、『カグラ』の役目の一つだ。だから、“こうする”の

はきっと自然に違いない。
少女は未知に対する恐怖で震えそうな自分を鼓舞するために内心でそう唱え、それでも、そんな理由(たてまえ)をつけなくても良いぐらいには、“彼”に惹かれていた。だから、少女は自ら望んでしまった。王が望むかどうかを別に、望んでしまった。
この世界、少女よりも歳若い娘が嫁にいくなどザラである。少女よりも歳若い娘が母親になっていることも多々ある。
政略結婚を筆頭に、望まぬ婚姻はどの国でも掃いて捨てるほどにあるのだ。もっとも、望まぬ婚姻とて人買いに攫(さら)われて売り飛ばされるよりは余程マシというものだが。
それらに比べれば、好きな者と添い遂げることができればどれ程幸せかわからない。
そして、少女は『カグラ』としても“少女”としても、“彼”とはこの国で共に在りたかった。
共に政務をこなし、時には笑い、時には怒る。何気ない平凡な日々でも、きっと楽しいだろう。そんな日々を、隣で歩みたい。
目を閉じた少女……カグラは、そう思っていた。

「ん……」

目を閉じたカグラは、唇に伝わる感触に眉を寄せる。その感触は、想像よりも硬い。そのことに僅かな疑問を覚えたカグラは、目を開けよう判断する。そのついでに、いつの間にか呼吸を止めていたことに気づいた。
余程緊張していたのか、先ほどまでは感じなかった息苦しさも感じる。義人の“右手”をつかんでいた腕は、僅かに震えていた。
自身の緊張に気づけなかったカグラは僅かに内心で驚きつつ、ゆっくりと目を開けて、

「……え？」

そのまま、目を見開いた。

「え……あれ？」

何度も、目を瞬(しばた)かせる。目の前の光景が理解できずに、カグラはただうろたえた。

普段は明晰な頭も、この時ばかりは上手く働いてくれない。

何故義人の“左手”が義人の唇の前にあるのか、カグラには数秒理解できなかった。

何故義人が困ったように、それでいてどこかつまらなそうな目で自分を見上げているのか、わからなかった。

「あ、その、わ、わたし……」

義人から僅かに身を離し、カグラは言葉にできないように小さく呟く。義人はそんなカグラを体の上からどけると、ベッドから転がり落ちる。そしてすぐに立ち上がり、僅かに肩を竦めていつもより少し固い声を出した。

「カグラさ、やっぱり飲みすぎたんだよ。だからそんなことをするぐらい、“酔ってる”んだ」

「そ、んな。違います。わたしは……」

カグラは立ち上がった義人の顔と、義人の左手を交互に、何度も見る。

想いは、義人自身の手によって“文字通り”受け止められていた。

重(かさ)ねるつもりだった唇は、義人の手のひらで受け止められている。

影は重なっても、唇は重なっていない。想いは、重なっていない。
たしかに、酒を飲んだ酔いもあった。思わずつかんでベッドに投げてしまった勢いもある。だが、それでもカグラには、確(しっか)りとした想いがあった。
ベッドの上から呆然と見てくるカグラに、義人は力ない笑みを浮かべて背を向ける。
カグラはそんな義人を止めるためか、右手を上げた。だが、その手が届くことはない。義人は部屋の扉の前まで移動しており、離れた距離はすでに五メートルほど。それでも、カグラは上げた右手を下ろさない。遠ざかる義人を必死に止めようとしているのか、右手が下がることはなかった。

「あ……う……」

口から零れる言葉に、意味はない。
声をかけて、振り向いてもらえば良い。頭ではそうわかっているが、声帯が麻痺したように声が出なかった。
だから、カグラは右手を伸ばす。立ち上がって追いすがることなど、浮かばない。これでは止まらないと、カグラもわかっていた。
それでも、カグラの予想に反して義人は立ち止まる。扉の取っ手に手をかけ、義人は振り向かずに口を開く。

「カグラの“願い”はわかった。そして、気持ちは嬉しかった。でも、それが『カグラ』の“務め”なら、俺はお断りだよ」

カグラに聞こえるか聞こえないかの声量で言われた言葉に、カグラの上げていた右手が力なくベッドへと落ちる。それは小さな、それでいて乾いた音を立てたると、カグラは動かぬ口をなんとか動かす。

「わ、わたしは……わたしは……」

多くは望まない。ただ、一緒にいてほしいと。“この国で”共に在りたいと。

そう言いたいのに、自身の意思に反してカグラの口は動かない。

義人はそんなカグラに振り向くことなく、カグラの部屋を後にした。

カグラの部屋から出た義人は、自分の寝室へと向かう。警備のために明かりが灯された廊下を歩き、その足を止めた。

「困った、な」

小さく呟き、ため息を吐く。そして、カグラの“想い”と“願い”を思い出して目を細めた。

カグラの“想い”は、たしかに嬉しい。一人の男としても、滝峰義人としても。

けれど、カグラの“願い”には応えられない。

「本当に、困った」

場の流れに乗るわけにはいかなかった。乗れば行き着くところまでいってしまっただろうし、そうすれば傷が残る。カグラに対する負い目と、愛情という傷が残ってしまう。そして、それは“枷（かせ）”にしかならない。

もしもこれが元の世界での出来事だったら。そんな言葉が頭を過ぎるが、生憎（あいにく）とここは異世界。『ｉｆ』の話を考えても仕方ない。

義人は困ったように苦笑すると、傍の窓へと歩み寄って空を見上

げる。しかし、さきほどまで見えていた月は雲に隠れていた。
それでも隠れた月を見上げつつ、義人は思考を巡らせる。

「さて……ちょっとまずい、かな？」

しばし思案に耽った後、そんなことを思う。現状や様々な情報を頭の中で整理すると、義人は見上げた視線を元に戻した。

「ま、なんとかなる……いや、なんとか“する”か」

そう呟くと、義人は再び寝室へと歩き出す。そして、ぼやくような声を漏らした。

「据え膳食わぬは男の恥っていうけど……それが毒入りでも食わなきゃいかんのかねぇ」

呟いた声に僅かに含まれていたのは、無機質な感情。それでも義人は頭を振ると、気を取り直したように歩を進める。
今日はもう遅い。早く寝て、明日に備えなくてはいけないのだ。
いつの間にか早寝が習慣になっている自分に苦笑を一つ残し、義人は寝室へと向かった。

翌日、義人はいつも通りの生活を送っていた。
早朝に起きて動きやすい服装に着替え、志信達と共に朝食までの早朝訓練。王剣のノーレを使っての訓練は良い運動になり、同時にノーレを使って魔法の練習もする。
そして朝食の時間になると、服を着替えて食堂へと向かう。さすがに朝から兵士用の食堂に行くわけにもいかず、王用の食堂で優希

や志信と共に食事を取るのだ。
その際サクラやその他の使用人が世話をするのだが、いつもならその中にカグラも含まれている。しかし、その日カグラの姿はなかった。

「カグラはどうかしたのか？」

それを疑問に思ったのか、志信が首を傾げる。義人はその問いに対して、肩を竦めた。

「二日酔いでもしてるんじゃないのか？　昨日あれだけ飲んだんだし」

義人の言葉に、志信は納得したように頷く。たしかに、あれだけ飲んでいれば二日酔いしてもおかしくはないと、そう納得した。
結局カグラが食堂に姿を見せることはなく、義人がそのことに疑問の声を上げることはない。ただ、少し苦々しい表情を浮かべるだけだ。
さすがに朝の報告会には参加していたが、カグラの表情は優れない。寝不足か、はたまた別の理由か、目が僅かに赤く充血していた。

「おはよう、カグラ」

報告会も終わり、執務室へと移動した義人はそう声をかける。それはいつも通りの挨拶だったが、答えるカグラの声は小さい。

「おはよう……ございます」

僅かに目を逸らしつつ、頭を下げる。それでいて時折怯えたように義人を見るが、目が合うとすぐに逸らしてしまう。そんなカグラ

の様子に、義人は内心だけでため息を吐いた。

「どうかしたんですか？」

明らかに様子がおかしいカグラを見て、サクラが首を傾げる。その横では、同じように優希が首を傾げていた。

「い、いえ、なんでもないです」

声に僅かな張りを持たせ、カグラはそう返事をする。カグラは執務室に備え付けられた自分の机へと向かうと、仕事をするべく椅子に座った。

「はぁ……」

そして、早々にため息を吐く。

「二日酔いですか？」

カグラがため息を吐いたことに驚きつつも、理由がそれしか浮かばないサクラはそう尋ねる。しかし、カグラは一瞬だけ義人のほうに視線を動かそうとしてその動きを止めると、サクラに“作った”いつも通りの笑顔を向けた。

「いえ、違います。サクラこそ、二日酔いになってませんか？」

「なってませんけど、できれば無理矢理飲ませないでほしいです……」

抗議するように、それでいてほんの少し冗談染みた口調で言葉を返すサクラ。カグラはサクラの言葉に、儚く笑う。

「ちょっと、胃が痛くなってきた……」

そんなサクラとカグラの横で、義人は小さく呟く。それでも、自分が招いた結果だと享受する。

「お薬もらってこようか？」

義人のすぐ隣で縫い物を始めた優希がそう尋ねるが、義人は首を横に振った。

卵は縫い物をするのに少し邪魔だったのか、抱っこ紐から外して義人と優希の丁度中間に置かれている。

「いや、いいよ」

置かれた卵を眺めつつ、義人は遠慮した。そして、ゆっくりながらも仕事を始めたカグラへと目を向ける。すると、見事に目が合った。

「あ、う……その……」

目が合ったカグラは怯えたように、それでいてどこか期待するように呟き声を漏らす。そんなカグラに、義人は“いつも通り”笑いかけた。さも何もなかったと、言わんばかりに。

「それじゃあ、今日も頑張って仕事しようか」

「え……は、はい。頑張り、ます」

その意図が通じたのか、カグラは僅かに表情を引き締めて、それでいてどこか寂しそうな表情で仕事に取り掛かる。

カグラの表情を苦く思いながらも、義人も政務を片付けるべく机に向かう。

結局、その日の仕事はほとんど片付かなかった。

第六十話：疑心

酒宴から三日ほど経つと、義人とカグラは以前の二人に戻りつつあった。今まで通りに政務をこなし、時折世間話もする。

まるで、何もなかったように。

「これで今日の分は終わり、と。カグラのほうはどうだ？」

「わたしのほうも、あと少しで終ります」

若干事務的な口調だが、それでも目を逸らしたり言葉を濁すことはない。

執務室には二人の他に優希しかおらず、サクラは厨房にお湯を沸かしに行っている。執務机の傍には王剣のノーレも立てかけてあるが、何かを話すことはなかった。

義人は王印を押した書類をまとめると、机の上に並べる。そして席を立つと、大きく伸びをした。その際背骨がボキボキと音を立て、義人は苦笑しつつカグラへと目を向ける。

「それじゃあカグラ、今日の分の書類はここに置いとくから」

そう言って、義人はノーレを手につかむ。それを見たカグラは、慌てたように立ち上がろうとする。

「その、どこかに行かれるのですか？」

「どこかっていうか、散歩かな？　さすがに椅子に座りっぱなしだと、体を動かしたくなるんだよ」

「でしたら、わたしが護衛に……」

「いや、ノーレがいるから大丈夫だろ？　別に城の外に出るわけじゃないし、カグラのほうはまだ仕事があるみたいだし」

それ言って義人が目を向けたのは、カグラ用の机に積まれた書類の束だ。義人の裁可が必要でない、それでいて義人では知識が足りずに判断できない類のものである。

「あ、そう……ですね」

カグラは立ち上がりかけた体を再び椅子へと預け、落ち着かないように書類へと目を移す。義人はそんなカグラを見て苦々しい感情を覚えるが、それを表に出すことはない。表面だけは、いつも通りに笑った。

「それじゃあ、行ってくるよ」

それだけを言い残し、義人は執務室を後にする。カグラはそれを黙って見送り、執務室の扉が閉まるとため息を吐いた。

「はぁ……」

「ため息を吐くと、幸運が逃げちゃうよ？」

「ひゃっ！？　ユ、ユキ様！　いつからそこに！？」

「さっきからずっといたよ？　カグラちゃん、気づいてなかったの？」

驚き、慌てて優希を見るカグラ。そんなカグラに、優希は不思議そうな表情を向ける。

「あ、い、いえ。そんなことはないです、はい」

「ふーん……」

必死に否定するカグラに対して、優希は不思議そうな顔をしたま

まだ。そして、そのまま首を傾げる。

「義人ちゃん、何かあったのかな？」

何気なく呟いた言葉だった。それを聞いたカグラは驚きながら優希を見るが、優希はカグラを見てはいない。義人が出て行った執務室の扉を見ながら、首を傾げていた。

傍に自分がいた場合、義人は必ず声をかけていく。幼い頃からの慣習のようなものだが、それが行われなかったことに対して優希は思案した。

数秒ほど考え込むと、手に持っていた裁縫道具を片付けだす。そして膝の上に置いていた卵を抱えると、椅子から立ち上がってカグラに軽く手を振った。

「わたしも散歩に行ってくるね？」

それだけを告げると、優希も執務室を後にする。

残されたカグラは、手元の書類に視線を落としてもう一度だけため息を吐いた。

カーリア城の中には、図書室という部屋が存在する。

その名の通り図書が保管された部屋で、古いものはカーリア国建国当時のものも存在していた。ただし、その当時は今よりも紙が稀少だったのか、紙ではなく薄い木などに書いてあったが。

国の歴史を記（しる）したものもあれば、魔法に関する本も置いてある。魔物に関する本や、共通語であるコモナ語について記した本もあった。ニホンゴで書かれた本が大半だが、中にはコモナ語で書かれたものもある。

図書室を利用する者は少なく、いるとしても資料が欲しい文官や、魔法の知識を覚えようとする魔法使いぐらいしかいない。

広さは食堂と同じぐらいだが、書棚が列をなしているため狭く見える。その上日当たりが悪く、室内はやけに暗かった。

「これは……違う。お、こっちはどうかな？」

そんな薄暗い部屋の中で、義人は本を探していた。

『何の本を探しておるんじゃ？』

「んー？　魔法関連の本だよ」

思念通話で話しかけてくるノーレにそう答えつつ、義人は手当たり次第に本を漁っていく。

『それならば、もっと右の棚じゃ』

「右？　ああ、あっちか」

ノーレの言葉に従って移動すると、義人は適当に一冊引き抜いて表紙を確認する。そこには達筆な文字で『魔力操作の概念』というタイトルが記されており、義人は小さく笑った。

「この書棚の本が魔法関連のやつか？」

そう言って他にも確かめてみるが、どれも魔法に関するものらしい。義人は書棚に置かれた本の数を見ると、眉を寄せる。

「……なんか、他の分野と違って少なくないか？」

魔法関連の本は少なく、五十冊もない。そんな義人の言葉を聞い

たノーレは、講釈するように語りかけた。

『魔法は体で覚えるものじゃからな。本で学べる知識も大事じゃが、重要さで言えばそれは一割にも満たん。魔法は読んで覚えるのではなく、使って覚えるものじゃ』

「魔法なのに、やけに体育会系染みた覚え方だな」

『そんなものじゃよ』

「そんなもんか」

ノーレの言葉に納得しつつ、義人は手に取った本をめくっていく。幸い内容はニホンゴ……漢字とひらがなで記されており、義人はニホンゴを公用語にしたかつての王様にささやかな感謝を送った。

『それで、どうしたんじゃ？』

「ん？　なにが？」

『魔法文字』に関する本を興味深く眺めていると、ノーレが世間話のように尋ねてくる。その意図がつかめなかった義人が僅かに首を捻ると、ノーレは呆れたように言葉を紡いだ。

『巫女のことじゃ。ここ最近、やけにぎこちないじゃろう？』

「……イエ、ソンナコトナイデスヨ？」

『片言で言っては動揺してるのを公言してるようなものじゃぞ？』

ノーレの言葉に、義人は参ったなと頭を掻く。そして持っていた本をとりあえず閉じると、傍に置いてあった脚立に腰掛けた。

「やっぱり、わかるもんなのか？」

『剣である妾でも、な。それに、妾にはヨシトの心情が伝わるから仕方あるまい』

「おいおい、そりゃ初耳だぞ？」
『言っておらぬからな。まあ、心情と言っても喜怒哀楽程度じゃ。何を考えているかまではわからん。しかし、お主が今どんな気持ちでいるかぐらいはわかるつもりじゃ。お主に名前をもらったあの日から、繋がりが深まったあの日から、な』

後半部分の言葉には、深い感情が込められている。義人はそれに気づきながらも、軽口を叩くように言葉を返した。

「全部わかったらプライバシーもくそもないっての」
『ぷらいばしぃ？　なんじゃそれは？』
「気にすんな。こっちの話だ」

図書室には自分以外いないため、義人が思念通話で喋ることはない。

ちなみに思念通話とは自分の魔力を相手に飛ばし、言葉を伝える魔法である。

かつては当たり前のように使われていた魔法だったが、今では使う者がほとんどいない。

思念といっても電波のようなもので、魔法使いならば盗み聞きされる可能性がある。その上複数人が同時に使用すると言葉が伝わりにくいという欠点もあった。その上使用可能な距離が短く、“人間同士”では五メートルも離れれば言葉が伝わらない。

『ふむ、それで何があったんじゃ？』
「何がって言われても」
『もしや巫女を抱いたか？』
「ちげーよ」

スパーン、と反射的に王剣の鞘を叩く義人。しかし、相手は金属

でできた鞘。むしろ叩いた義人の手のほうが痛かった。

「ぬおお……しまった。つい突っ込みを入れちまった。いてぇ……」

『なんじゃ、図星か』

「いや、違いますって。その三歩手前くらいでなんとか踏みとどまりましたとも、ええ」

微妙な敬語で否定する義人だが、ノーレは鼻を鳴らす。

『ふん、色を好むのは男の性(さが)じゃろう。それにお主はこの国の王。どれだけ手を出しても構わんじゃろうて』

「……いや、それは人としてどうだろう？」

僅かに不機嫌なノーレの暴言を宥めつつ、義人は痛む手をさする。そして、苦笑混じりに王剣の鞘に手を乗せた。

「まあ、アレだよ。正直俺も嬉しかったさ。カグラみたいに可愛い子に迫られれば、手を出したくもなるよ。耐え切った自分を褒めてやりたいくらいに、さ」

軽口を叩くように告げ、そこで一度言葉を切る。そこでノーレは、義人の心情が固くなったのを察した。

「でも、それは駄目なんだ」

『……何故じゃ？』

ノーレの疑問の声に、義人は答えない。ただ、苦笑に似た表情を浮かべるだけだ。

義人はノーレの鞘に施された装飾を眺めつつ、湿っぽい、埃(ほこり)の匂いがする図書室の空気を吸い込む。そして、ため息を隠すように大

きく吐き出した。
いつになるかわからないが、自分達は元の世界に戻る。いや、戻ってみせる。
突然消えて、家族は驚いているだろう。何か事件に巻き込まれたのではないかと、心配しているだろう。学校の友人も、心配しているかもしれない。
生まれ育った元の世界と召喚されて四ヶ月弱のこの国を比べるならば、義人は前者を選ぶ。例え無責任と言われようが、元々は関わりないことだ。もっとも、今の状態のままで放り投げる気もないが。
戻れば、こちらの世界に来ることもないだろう。それまでにどうにかこの国を変える。
“自分の足で立てるようになったら、あとは蹴り出して勝手に歩かせる”。
そうするためには、“重い荷物”は背負えない。元の世界よりも、こちらの世界を選んでしまうような“傷”は残さない。
この国に対する愛着も、多少とはいえ感じている。自身を王と呼ぶ臣下達に対する親しさもある。この国を良くしたいと思う気持ちも、確かにある。だが、義人の根底には『元の世界に戻る』という決意があった。

「しかし、元の世界に戻っても色々と困るか……」

カグラの話では、一番最初に向こうの世界へと帰れるのが召喚から一年後。一年に一人送り返せるとしても、最後の一人は三年後だ。そうなると、元の世界での生活に支障が出る。今すぐ帰れれば、ギリギリで留年せずにすむかもしれない。だが、そんな方法はない。

「いや、参ったね……本当に」

考えれば考えるほど、泥沼にはまる気分だった。そして、今のま

までは一人ずつ帰るという手も取れないかもしれない。元の世界に帰せるのは、カグラだけなのだから。

義人がそうやって考えていると、図書室の扉が開く音が響く。義人は咄嗟に手に持った本を元の場所に戻すと、ノーレを片手に息を潜めた。

『ノーレ、誰かわかるか？』

『この魔力は……』

「義人ちゃん。わたしだよ、優希だよ」

思念通話でノーレに話しかけた義人だったが、ノーレが答えるのを遮るように声が響く。間延びしたような、聞き慣れた声を聞いた義人は、肩の力を抜いた。

「なんだ、優希か。本でも探しにきたのか？」

優希の姿は、書棚に遮られていて見えない。

「ううん。本じゃなくて義人ちゃんを探してたの。見回りの兵士さんに聞いたら、こっちのほうにいるって聞いて、わたしも暇だったから一緒にお散歩しようかなって。でも珍しいね？　義人ちゃんが図書室にいるなんて」

「そうかな？　優希はよくここに来るのか？」

「うん、そうだよ。色々と面白い本があるしね」

義人は優希の声がするほうへと足を向ける。

「相変わらず勤勉だなぁ、優希は」

「けっこう時間があるから。それに、コモナ語とか読めたら義人ちゃんにも教えられるでしょ？」

「お、まさか覚えたのか？」
「簡単な日常会話ができるくらいには覚えたよ」
「へぇ……さすがだなぁ」

優希と会話しつつ、義人は図書室の入り口へと向かう。すると、そこには窓越しの夕日を背にした優希が立っていた。

「お散歩なら、もう少しそれらしいところに行こうよ？」
「それもそうだな……よし、それじゃあ城壁の上にでも行くか」

図書室に夕日が差し込み、薄暗かった室内を明るく照らす。
今度本を虫干ししないとな、などと考えつつ、義人は図書室を後にした。

優希と共に階段を上り、城壁の上へと向かう。交わす言葉は世間話の域を過ぎないが、それでもそこには長年の親しさを感じさせる気安さがあった。
義人は扉を開け、吹き込む温い風に目を細める。その斜め後ろでは優希が髪を押さえ、吹き込んだ風に苦笑していた。

「足元に気をつけて、それと、城壁から落ちるなよ？」

さすがにないだろうが、そうなっては笑えない。そんな義人に、優希は笑ってみせた。

「もし落ちても、義人ちゃんが助けてくれるでしょ？」
「そんな無茶な……いや、できるのか？」

ノーレを使えば可能かもしれない。かといって、本当に落ちられても困るが。

城壁の上には見張りの兵士が配置されているが、この時間帯はかなり少ない。

義人は城壁の上から城下を一望すると、優希もそれに倣って城下を一望した。

城下町では人々が行き交い、楽しそうに笑っている。仕事を終えたのか、充実した表情をしている者もいた。

「良い景色だね？」

「ああ、本当に」

夕日に照らされたその景色は、ある種の懐かしさを感じさせる。それでいて、郷愁に似た気持ちも感じさせた。

「優希は……」

だからだろうか。義人は、自分でも止めることなく口を開いていた。

「優希は、元の世界に戻りたいか？」

隣に立つ優希を真っ直ぐに見据え、ポツリと尋ねる。その視線と疑問を受けた優希は、はにかむように笑った。

「そこに義人ちゃんがいるなら」

「いや、答えになってないって」

「そうかな？」

「そうだよ」

優希の言葉に、義人は僅かに目を逸らす。しかし、優希は笑いかけるだけだ。

「義人ちゃんは戻りたいの？」

「そりゃ、な。何も言えずに消えたんだ。みんな心配してるだろうし、顔も見たい。戻れる手段があるのなら、元の世界に戻るさ」

「戻る手段……カグラさんに頼むんだよね？」

「……ああ。悪手かもしれないけどな」

元の世界に戻る方法は、今のところカグラに頼るしかない。だが、逆に言えばカグラなしでは元の世界には戻れないかもしれない。そのことが、義人の頭を悩ませていた。

優希と志信だけしか元の世界に戻せないかもしれない。最悪、誰も帰れないかもしれない。

カグラの魔力が元に戻るまで、まだ半年以上ある。しかし、魔力が回復したからといって召喚魔法を使ってくれるかはわからない。つまるところ、全てはカグラの意思次第なのだ。

「まったく、嫌な仕組みだよ」

ぼやくように呟く義人。

一度召喚されたら、戻る手段があっても戻れない。戻す手段を持つ者が戻そうとしてくれなければ、戻れない。その上、自分はこの国の王という破格の待遇だ。一人で召喚されたなら、半年もせずに帰る気をなくすだろう。

もしも、一人で召喚されたのなら。

「でもまぁ、どうにかするさ」

信用はできても、信頼はできない。義人としては心苦しかったが、

カグラに対してはそう評した。
そんな義人を見ていた優希は、視線を移して沈もうとしている夕日に向けた。

「……少し、日が沈むのが早くなったね？」
「八月も半ばだしなぁ。夏至が過ぎて一ヶ月以上経つし、そんなもんだろ」

まだまだ暑い日が続くが、いずれ涼しくなる。
秋が来れば作物の収穫の時期だ。農民からの年貢や、その他にも様々なことで忙しくなるだろう。
先のことを僅かに想像すると、ため息混じりに頭を振った。そんな義人を見て、優希は微笑む。
そんな二人の間を、夏の暖かい風が吹き抜けていった。

城壁の上へと続く扉の前で、少女は立ち尽くす。
僅かに開いた扉から漏れ聞こえた会話に、両手を強く握り締める。
その目尻には僅かに涙が浮かび、何かを堪えるように小さく呟く。

「どうにかなんて……させません」

扉を完全に開けることなく踵を返し、腰ほどまで伸びた真っ直ぐな黒髪が翻った。

第六十話：疑心（後書き）

どうも、作者の池崎数也です。色々と問題を残しつつ二章終了です。

一章終了時に書いた予告の半分近くが書かれていませんが、話の流れ的に無理そうなものがボツになりました。もっと物語の構成力が欲しいです。

次は三章ですが、世界観の描写をもっと入れたいと思います。そして、三章は外交編です。色々あって隣国に行く話を書きたいと思います。もっとも、隣国に行く前に数話挟むことになります。とうとう卵が……。

三章は二十五話ぐらいで終らせることができたらいいなと思ってます。予定は未定です。一章終了時に百三十話前後で完結するのではと書きましたが、百五十話前後と訂正することになりそうです。

ご感想、ご指摘、評価をくださった方々。本当にありがとうございます。中には『異世界の王様』の絵を描いてくださった方もいて、非常に嬉しく思います。

まだまだ未熟な身ではありますが、少しでも面白い物語が書けるよう誠心誠意努力したいと思います。

それでは、こんな拙作ではありますが、今後ともお付き合いいただければ幸いです。

閑話：二章之一（前書き）

この話は『第五十九話：想いと願い』と『第六十話：疑心』の間の話となります。

閑話：二章之一

魔法剣士隊の隊長であるミーファ＝カーネルは、『召喚の巫女』であるカグラと幼少からの付き合いである。年齢こそミーファのほうが年上だが、それも精々二歳程度。互いの関係は気心の知れた友人であり、共に国に仕える同僚であり、血こそつながっていないが姉妹のようなものだった。

ミーファが魔法剣士隊の隊長になってからは私的に会う時間が少なくなったものの、その関係に変わりはない。何かあれば話し、時には共に食事を取り、気が向けば並んで酒を飲む。最後の部分に関しては、酔ったカグラの相手をしたくないためミーファが避けようとしている節もあるが、それでも良好と呼べる関係だった。

そして、そんなミーファだからこそカグラの異変に真っ先に気付く。

――二日酔い……ってわけじゃなさそうね。

その内心での呟きは、朝の報告会の最中のものだった。

ミーファは国王である義人の斜め後ろに立つカグラへと視線を投じると、僅かに首をかしげる。

昨晩は暴走したカグラによって酔い潰されたものの、奇跡的に二日酔いにならずにすんだ。ミーファはそのことに安堵し、それと同時に、素面（しらふ）になったカグラへ何と言ってやろうかと意気込んでいた。しかし、どうにもカグラの様子がおかしい。そのことにすぐさま気付いたミーファは、観察の目をカグラへと向けた。

長時間泣いていたのか、僅かに充血した目。いつもはミーファが密かに羨んでいる黒髪も、今日はどこか艶がない。その上落ち込んだような空気を纏っており、今ならばミーファと同年齢、人によっては年上に見えかねないほどの翳（かげ）が見えた。

周囲の人間やアルフレッドもそれに気付いているのか、どこか落ち着かないようにカグラへ視線を向ける。義人はそんな臣下達の様子に気付いていないのか、それとも気付いていて敢えて放置しているのか、平常の態で玉座に座り、臣下の報告に耳を傾けていた。

何かあったのか。いや、何かがあったのだろう。

長年の付き合いからカグラの性格を熟知しているミーファは、カグラが公の場で自身の感情を強く見せるのを良しとしないことを知っている。見せるとすれば“作った”感情が主だが、今日のカグラを見る限りそうとは見えなかった。自身で制御できないほどに感情を乱しており、なおかつそれを他者に気付かれている。それでいて、他者から向けられる視線に気付けないほどに気が抜けているようだ。

――何があったのかはわからないけど、あとで話を聞きに行ったほうが良さそうね。

あとでといっても、これから通常通り訓練がある。隊長であるミーファが訓練を放り出すわけにもいかず、カグラの元へ行くのは訓練後になるだろう。

ミーファは訓練が終わった後の予定を組み上げると、ひとまずカグラから目を逸らして報告会に意識を向けるのだった。

「さて、準備良し。あとはカグラがどこにいるかね」

今日一日の訓練を終え、所用で城下町まで足を運び、その後に手早く夕食を取ったミーファは一人呟きながら城の廊下を歩いていた。その手には一本の丸い瓶が握られており、すれ違う兵士や文官が不

思議そうな目をミーファに向ける。しかし、ミーファは向けられた視線を敢えて無視しながら歩を進めた。

向かう先はカグラの部屋で、手に持つのは酒瓶である。

――もう少し安いのにすれば良かったかしら？

僅かにそんな考えが頭を過ぎるが、すぐさま頭を振って打ち消す。何せ、一瓶で百ネカ近くする名酒である。魔法剣士隊隊長のミーファの給料をしても、中々手が出しにくい金額だった。だが、カグラの様子を思い浮かべたミーファは苦笑を一つ零すだけで自分を納得させる。

――そんなことよりも、カグラが酔っ払う可能性を心配するべきね。

幾度となく酔ったカグラの相手を務めた身としては、その一点が恐ろしい。愚痴を吐かせるには酒を飲ませれば手っ取り早いと判断したミーファだが、カグラの暴走が起きないことを祈るばかりだった。

ミーファは先ほどとは違う種類の苦笑を浮かべ、それと同時に、そうなっても良いかとも思う。

「それであの子の気が少しでも晴れるのなら、ね」

誰にも聞こえない程度の声量で呟き、ミーファはカグラの私室の前に立つ。

国王（よしと）の部屋と違って守衛の兵士はいないが、守衛百人を相手にするよりも厄介なカグラである。忍び込もうものなら、逆に忍び込んだ者の心配をするほうが妥当な程度に腕が立つ。そのため、カグラの私室の扉をノックするミーファの姿を見る者はまったくと言って

いいほどにいなかった。

日はすでに沈み、灯りになるものがない部屋の中は真っ暗だった。燭台に蝋燭が置かれているものの、部屋の主であるカグラは火を灯さずにいる。

火を点けるのが面倒というわけではない。それこそ手を使わずに火を点けることもできたが、沈鬱な気分に後押しされたカグラは火を点ける気にならなかった。

カグラは寝台の上に座り、壁に背を預けながら窓の外へ視線を向ける。ほとんど瞬きをせず、視線に空虚なものを滲ませたその姿はまるで精巧な人形のようだった。だが、目の端に涙を溜め、頬にその涙が流れた跡を残すものが人形であるはずもない。

カグラは今日一日を反芻し、静かにため息を吐く。

自分が何をして過ごしたのか、記憶が曖昧で確証がない。いつも通り政務をこなそうとしたものの、義人の一挙動に気を取られていた気がする。食事は取ったが、何を食べたかも覚えていない。過去にないほど気が散漫になっていることを自覚し、カグラはもう一度だけため息を吐いた。

すると、そんなカグラのため息を遮るように部屋の扉がノックされる。カグラはその音で視線を動かすと、ゆっくりとした動作で右手を蝕台の蝋燭へと向けた。すると何の前触れもなく蝋燭に火が灯り、部屋を淡く照らし出す。

無視することもできたが、何か問題が起きたのなら対処しなくてはいけない。カグラは壁から身を離しながら自身の役職に対して少しだけ不満を覚えたが、それは飲み込むことにした。

「……どちら様ですか？」

発した声に、常の凛とした響きはない。だが、そんな声を投げかけてからカグラの頭にとある考えが過ぎった。

――――もしも、ヨシト様だったら？

昨晩のことで何かを言いにきたのか、それとも今日一日の腑抜けた政務に対する叱責か。一瞬で様々な展開が頭に浮かび、カグラは心音が早くなるのを感じた。しかし、そんなカグラの予想とは異なり、扉の外から聞こえてきたのは違う声である。

「カグラ？　入ってもいい？」

それは、非常に聞き慣れた声だった。幼い頃から聞いてきた声に、カグラは少しだけ張りのある声で応える。

「ミーファちゃん……どうかしましたか？」
「ちょっと用があって。入るわよ？」

言葉の上では承諾を求めているが、ミーファはカグラが返答するよりも早く扉を開けた。そして部屋に入ると、すぐに扉を閉めてしまう。

「返事を待たずに入ってくるなんて珍しいですね。何か急用ですか？」

カグラは泣き腫らした目を擦って誤魔化し、ぎこちない笑みを浮かべる。それを見たミーファは僅かに眉を寄せたものの、敢えて見なかった振りをして右手に持った酒瓶を掲げる。

「ちょっと良いお酒が手に入ってね。せっかくだから、カグラと飲もうかと思って」

そう言ってミーファは酒瓶とは別に杯を二つ取り出し、存在を誇示するように軽く振った。すると、そんなミーファの仕草を見てカグラは小さく笑う。

「いつもならわたしがお酒を飲もうとすると逃げるのに……今日は何かありましたっけ？」

特に目出度(めでた)いことがあった記憶もなく、カグラは首を傾げた。互いのことを知り尽くした間柄だが、今日という日に何か特別な出来事があったわけでもない。

ミーファはカグラの言葉を聞くと、酒瓶を傍にあった机の上に置いてから頬を軽く掻いた。

「元気がないみたいだからね。何かあったなら聞こうかと思って」

頬を掻いたのは照れ隠しのためか。ミーファは少し早口に述べると、表情を隠すようにカグラの隣へと腰を下ろす。

「……何かあった？」

そして、呟くように質問を投げかけた。優しく、それでいてどこか労わるような声色。そんなミーファの声に、カグラは再び壁に背を預ける。

「……“何か”、あったんですよ」

答えるカグラの声は、まるで拗ねた子どものようだった。カグラらしからぬ稚気を感じ取ったミーファは内心だけで僅かに驚くが、それと同時に納得も覚える。

――――これは、余程のことがあったみたいね。

お互い、幼少の頃からの友人だ。表情や声、仕草などで大抵の感情や考えは読める。

ミーファは無言のままに杯を差し出すと、カグラの手をつかんで半ば無理矢理に握らせた。そして酒瓶を傾けると、杯に酒を注いでいく。

杯に注がれる透明の酒を無言で眺めるカグラだったが、ミーファの厚意を汲んで小さく頭を下げる。

「……ありがとうございます」

礼を一言呟き、杯に口をつけてゆっくりと傾けていく。そして一息に飲み干すと、小さく息を吐いた。

「良いお酒ですね、これ」

「まあね。ほら、飲んだ飲んだ」

ミーファが空いた杯に酒を注ぐと、今度はお返しとばかりにカグラがミーファの杯へと酒を注ぐ。両者は小さく杯を打ち合わせると、無言のままに酒を口に運んだ。

そうやって杯を重ねること数杯。酒瓶の中身が半分ほど減ったところでミーファが口を開く。

「少しぐらいは話す気になった？」

「……少しは」

ミーファの言葉に頷き、カグラは空になった杯を傍に置く。そして僅かに口を開くものの、すぐに閉じ、数秒経ってから再び開く…
…という動作を四回ほど行ってから声を発した。

「実は、ですね」
「うん」

手酌で酒を注ぎつつ、ミーファはカグラの言葉を促す。すると、カグラは酒が原因なのか、頬を赤らめながら口を開いた。

「ヨシト様を押し倒してしまいました」
「……」

カグラの言葉に対して、ミーファは無言で応える。否、正確には思考が停止していた。手酌で注いでいた酒が杯から溢れ、指先を伝って肘まで酒が伝っていく。それなりに酒精（アルコール）が強い酒だったせいか、酒が伝った箇所が空気に触れると冷たく感じられた。そして、床に酒が数滴落ちたところでようやくミーファは思考停止から回復する。
カグラの言葉を噛み砕き、意味を理解するために何度も頭の中で反芻していく。それこそ何度もカグラの言葉を反芻し、理解し、とりあえずといった風情で手に持った杯を一気に呷（あお）り、勢いをつけて尋ねた。

「普通逆でしょ！　というか嘘でしょ！？」
「本当です」

あまりにも断定的に言われたことが癪（しゃく）だったのか、カグラは少しだけ唇を尖らせる。そんなカグラに対して、ミーファは半信半疑な視線を向けた。

「それって昨晩のこと？」
「はい。酔い潰れたところをヨシト様が介抱してくださったんですけど、そのときについ押し倒してしまいました」
正確には投げ飛ばしたのだが、それを知らないミーファは呆れたような声を出す。
「ついで国王を押し倒したのね、アンタは」
友人の大胆な行動に驚いたミーファではあるが、平静を装って酒を口にする。
「酔った勢いもありましたけど、ヨシト様にならと思ったんです。でも……」
「でも？」
それまで多少の明るさを見せていたカグラの表情が曇り、ミーファは首を傾げながら先を促す。カグラはそんなミーファの言葉に従い、続きを口にした。
「……拒絶されまして」
呟いた声は、小さいものだった。ミーファはカグラの言葉を聞くなり、内心だけで疑問の声を上げる。
――――けっこう良い雰囲気だと思ったんだけど、わたしの勘違いだったのかしら？
傍目から見ていて、義人とカグラの仲は良いように見えた。少な

くとも、ミーファから見ても義人がカグラに対して嫌悪感を持っていないのは確かである。

もしやすでに想っている人がいたのかと考えたミーファだが、その考えと同時に優希の顔が頭に浮かんだ。義人との関係を考えると、可能性としては一番高い。

同性のミーファから見ても、カグラの容姿は優れている。絹のような黒髪に、整った目鼻立ち。性格も良く、魔法使いとしての腕も近隣諸国を含めて最高と言えるだろう。欠点らしい欠点は酔ったときの被害が大きいことぐらいで、カグラの人気を裏付けるように、文官や兵士の中にはカグラに好意を持つ者も少なからず存在している。

ミーファも、自分が男だったらカグラに惹かれるものを感じていたと思う。

――もしかして、違う世界の人間だから？

美醜の基準が違うのかと思ったミーファだが、ミーファからすれば優希とカグラの違いは魅力の方向性が違うだけである。

「それにしても、カグラがねぇ……」

ミーファは自分の考えをいったん脇に寄せると、感慨深げに呟く。それは、考察よりも今は目の前の友人をどうにかするべきだという判断からだった。

カグラはミーファの言葉に少しばかり怯んだ表情を見せるものの、すぐに気を取り直して口を開く。

「そういうミーファちゃんはどうなんですか？」

「え？　わたし？」

「シノブ様のことですよ」

突然向いた矛先に首を傾げるミーファだったが、続くカグラの言葉に危うく酒瓶を落としかける。

「い、いきなり何よ!?　なんでシノブの名前が……」

「なんでって、それは……」

そこまで言うと、カグラはからかうように薄く笑う。その表情を見たミーファは頬を引きつらせ、動揺を表すかのように目を逸らした。

「別に、何もないわよ。カグラが考えるようなことは何もね」

「本当ですか？　わたしに聞くだけ聞いて、自分は言わないのはずるくないですか？」

「わたしは別に……」

カグラの追求から逃げるように、ミーファは酒を口に運ぶ。口で語るよりも明らかなその態度を見たカグラは、張っていた気が緩むのを感じながらミーファの持つ酒瓶に手を伸ばした。

「わたしにも話を聞かせてもらいますからね？」

「力づくでなんて言わないでよ？　あと、何もないって言ってるでしょ？」

じゃれ付くように告げるカグラに対し、ミーファはなんとか逃げ道を探す。

そうやって他愛無い話をしている内に、カグラは気が晴れてくるのを実感するのだった。

互いにからかうように話し続け、酒もなくなるとお開きとなる。ミーファは最後まで口を割らなかったことに安堵しつつ、腰掛けていたベッドから立ち上がった。

「それじゃあ、わたしはそろそろ自分の部屋に戻るわ。明日も訓練があるしね」

カグラの表情から多少翳がなくなっているのを確認したミーファは、そう言ってカグラから空の杯を受け取る。その姿がまるで逃げるようだったのを知るのはカグラだけだが、敢えて口に出すことはしなかった。

「ミーファちゃん」

その代わりに、カグラは違う言葉を口にする。

「ん？　まだ何かあるの？」

肩口に振り返り、ミーファは何事かと目を瞬かせた。そんなミーファに対して、カグラは微笑む。

「……ありがとう」

それは、何に対しての礼だったのか。カグラではなく、ミーファの友人である“少女”としての言葉にミーファは目を丸くするが、すぐさま同じように微笑んだ。

「明日からはもう少し良い顔してなさいよ？　他の人も心配してたんだから」
「うん。気をつけるね」

敬語ではなく、友人としての言葉。それが何年振りのものになるかとミーファは思ったが、意味もないのですぐに止める。
カグラはもう一度だけ『ありがとう』と礼を言い、それを聞いたミーファは苦笑しながら背を向けた。

「じゃあ、おやすみカグラ」
「おやすみなさい、ミーファちゃん」

片手を振って退室していくミーファを見送り、カグラはベッドへ身を倒す。そして天井を見上げると、自分に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

「諦めるにはまだ早いですよね……」

言葉に込められたものは、決意と執着。
自身に言い聞かせるような呟きを最後に、カグラは目を閉じるのだった。

閑話：二章之一（後書き）

どうも、池崎数也です。
今回の話については前書きの通り、第五十九話と第六十話の間の話になります。本来は本編に入れる予定の話だったのですが、色々ありまして閑話という形にしました。
今回は二章の閑話でしたが、本編では描くことのできなかった物語の裏側を他の章でも書くことができればと思います。
それでは、こんな拙作ではありますが今後ともお付き合いいただければ幸いです。

第六十一話：コモナ語

猛暑も過ぎ、僅かに秋の訪れを感じ始めた九月の初頭。もう少しすれば、農作物の収穫が始まる。そんな季節だった。

「レンシア国の建国記念日？」

カグラから聞かされた話に、義人は首を傾げる。

「はい。今から約二ヶ月先……十一月十日がレンシア国の建国記念日となっています。その式典に新しい王として、また、友好国の王として参加していただきたいのです」

そう告げるカグラの口調や表情に、三週間ほど前のぎこちなさはない。義人はカグラの言葉を聞いて、ふむふむと頷いた。

この世界において、一年は三百六十日である。一月三十日が十二ヶ月。一日は二十四時間で、義人としては覚えやすくて良い。

「相手はこの国にとって貴重な友好国だし、交易をしている国だから挨拶くらいはしとかないといけないな」

「その通りです。ヨシト様が召喚される少し前までは、レンシア国はハクロア国と戦争をしていたために建国を祝う式典も簡素なものでした。しかし、今は小康状態になっているため正式な式典を行うらしく、その案内状が来ています」

「案内状ね……こっちの国の建国記念日は五月だっけ？　その時はどうするんだ？」

「その場合はこちらから招待状を出し、しかるべき立場の方に来ていただきます」

「なるほど、それなら対等ってわけだ。ここ十年、国王がいなかったときはどうしてたんだ？」
「以前はこの国の代表としてアルフレッド様が式典に参加されました。わたしも十二歳を超えてからは、アルフレッド様と共に式典に参加したことがあります。ですが、ここ三年ほどは祝いの品を送るぐらいしかしていません」
「原因は戦争だっけ？」
義人が尋ねると、カグラは真顔で首肯する。それに対して、義人は内心で苦笑した。
召喚されたのがこの国で良かったと、本気で思う。戦争のない国に生まれ、法律によって守られてきた義人にとっては、戦争などテレビやゲーム、教科書の中での話だ。
このカーリア国では、人同士での戦いが起こることなどほとんどない。国の特性柄、農民が一揆を起こすこともなく、他国が戦争を仕掛けてくることもない。時折街中で喧嘩が起こるぐらいで、義人が暗殺されそうになって戦ったことなど稀な出来事である。
義人とて同じようなことが起きても対処できるように志信に戦い方を学んではいるが、所詮付け焼刃。王剣のノーレさえいれば雑兵に負けることはないが、一定以上の腕を持つ者と戦えば簡単に殺されるだろう。
そのことを想像し、義人は肩を竦める。
「あーやだやだ。なんで戦争なんてするのかねぇ……」
「それはわたしではなんとも。それとヨシト様」
義人を呼ぶと同時に、カグラは手に持った本を執務机の上へと置く。その本の表紙に書かれた文字を見て、義人は眉を寄せた。
「それは？」

「他国の共通語であるコモナ語について記した本です」
「……それで？」

若干嫌な予感を覚えた義人に、カグラはニコリと微笑む。

「覚えてください」
「これを、全部？　創立記念の式典までに？」

本を捲ってみると、中には単語や文法について様々なことが書いてある。ニホンゴで翻訳もされており、習得するのは可能に思えた。だが、その量は多い。

「何も全部覚えてほしいわけではありません。しかし、最低でも日常会話ぐらいはこなせるようになっています。他国ではニホンゴが通じないのですから」
「うへぇ……二ヶ月で覚えられるのか？」
「日常会話ぐらいでしたら、わたしは二週間で覚えましたよ？　難しさでいえば、ニホンゴのほうが難しいですから」
「そうなのか？　それなら、なんとかなりそうだな」

軽く流し読みをする義人だが、一目見た感想は『英語に似ている』ということだった。文法、接続詞など、色々なところが英語に似ている。もちろん、似ているというだけで扱えるものではないが、義人の感覚としては英語を覚える感覚に近い。

「その、それでですね……」

義人が軽く読んでいると、カグラが僅かに緊張したような声を出す。義人はその声に本から目を離し、カグラへと視線を向ける。

「もし良ければ、わたしが教え」

バタンと、扉が開く。カグラの声を遮るように扉を開けたのは、片手で皿を持った優希だった。皿の上には、一口大のクッキーが盛られている。

「義人ちゃん、クッキーが焼けたよー」

「お、本当に作れたんだな。どれどれ……うん、美味しい」

優希が差し出してくる皿の上からクッキーをつまむと、義人は何のためらいもなく口に運ぶ。それを見たカグラは、僅かに肩を落とした。しかし、すぐに気を取り直す。そして、再度義人へと声をかけようと口を開き、

「あ、それってコモナ語の本？　義人ちゃんもコモナ語を勉強する気になったの？」

「一応な。今度レンシア国に行くから、その時に必要らしいんだ」

「そうなんだ。良かったら、教えようか？」

優希に、先を越された。

「優希は覚えたのか？」

「日常会話ぐらいなら大丈夫だよ。内容は英語に似てたかなー」

「あ、やっぱりそうなのか？」

「うん、文法とかは特にね。必要な単語と文法さえ覚えれば、あとは簡単じゃないかな」

「そっか。それじゃあ、優希が暇な時にでも教えてもらえるか？」

口を開きかけた状態で固まるカグラを他所に、義人と優希の会話は進む。それでも再度気を取り直すと、カグラは優希へと話しかけ

た。それも、コモナ語で。

『ほ、本当にコモナ語がわかるんですか？』

突然ニホンゴと違う言葉でカグラが話し始め、義人は目を丸くする。具体的には、『何言ってんのコイツ？』という反応だった。しかし、それとは対照的に優希は涼しい表情で口を開く。

『日常会話ぐらいならね。難しい言い回しとか、訛りがあったら少し難しいけど』

返ってきたのは、コモナ語だった。少し発音がぎこちないものの、言葉としては十分である。

『いつの間に……』

『独学と、あとはサクラちゃんが暇な時に教えてもらったの。元の世界にも似たような言語があったから、覚えるのは楽だったかな？』

そこまで言うと、優希は微笑む。

『それで、義人ちゃんに教えるには不十分かな？　カグラちゃんは普段仕事があるし、わたしでも日常会話ぐらいなら教えられるよ？　それに、元の世界にあった英語って言葉と比べて教えれば覚えやすいと思うし』

カグラと違い、優希には片付けなくてはいけない仕事はない。カグラの仕事はカグラだけにしかできないが、厨房の手伝いや針仕事などは優希でなくてもできる。元の世界の料理や服などは自分の知る限り再現してしまったので、最近は割と暇だった。

カグラとしては、そこまで言われて断る理由はない。本音として

は不満があったが、それを表に出すことはなかった。

「それでは、ユキ様にお願いするとします」

会話の内容はわからなかったが、話が終わったらしい。それを理解した義人は、カグラに言われた言葉に頷く。

「何を言っていたのかわからないけど……よろしく頼むな、優希」

そう言って頭を下げた義人に、優希は嬉しそうに笑った。

ちなみに、義人が『コモナ語なんてノーレに翻訳してもらえばよくね？』などと呟くのは少し先のことである。

カーリア国において、コモナ語を話すことができる者は多い。アルフレッドやカグラ、商人のゴルゾー、その他外交に赴くことがある文官はニホンゴとコモナ語の両方を難なく扱える。元の世界で言えば、二ヶ国の言葉を母国語として使えるバイリンガルのようなものだ。

他の文官や、それなりの家柄の武官。そして一般の商人も普通にコモナ語を話すことができる。特に商人は商売にも関わることなので、コモナ語の習得は必須のようだ。

他にも、王都フォレスに住む者は日常会話程度ならこなせる。小さい村などになるとニホンゴしか喋れないものがほとんどだが、それでも一人ぐらいはわかる者がいるのである。

コモナ語の起源は千年以上昔にあるらしいが、それが真実かどうかを知る者はいない。ただ、この世界に存在する国なら大抵の場所で通用する言語であることだけは確かだ。そのため、コモナ語を公用語とする国も多々あった。

もちろん、中には例外もある。

義人が国王であるカーリア国での公用語はニホンゴであるし、極東の国であるジパングではコモナ語が使われていない。

ジパングはカーリア国とは違い、本当の意味で独自の文化を築いた国である。詳しい資料などはカーリア国にはなかったが、それでも商人の口から話を聞くことがあった。

国としては四代目の王である杉田晴信義景が米を取り寄せたぐらいの関係しかないが、米があると聞いた志信は一度で良いから見に行ってみたいとも思っている。

そしてその志信は今、魔法隊の隊長であるシアラの部屋にいた。

魔法使いであるシアラの部屋は、城の外にある魔力回復施設の中にある。日中の訓練も終わったため、志信は『無効化』の術式が施された棍と共に、コモナ語で書かれた本を持ってシアラの部屋を訪れていた。

部屋の中は実に殺風景で、机と椅子とベッド、それと箪笥（たんす）と本を置くための小さな本棚しか置かれていない。人形などが置かれていることもなければ、花が生けてあることもなかった。

部屋の中はほとんど無音である。志信はコモナ語の単語を覚えるために本を読み、シアラは磨り減った『無効化』の術式を直すために『魔法文字』を刻んでいた。いつも頭に乗せている帽子は傍に置き、無表情ながらも目だけは真剣に『魔法文字』を刻んでいる。

部屋の中では本のページを捲（めく）る音と、棍に『魔法文字』を刻む音だけが響く。そこには色気も何もない、ただ無言の空間が広がっていた。だが、互いにそれを苦に思うことはない。もしも義人がこの場にいたら、似た者同士だと苦笑するだろう。

「……できた」

そんな中で、シアラがポツリと呟く。それを聞いた志信は本から顔を上げると、手に持った本を閉じてシアラの隣へと移動した。

「今回は早かったな？」
「……以前書いた『魔法文字』が、そこまで磨り減ってなかったから」

シアラは志信が使う武器に『無効化』の術式を施す代わりに、魔法隊での動く的を依頼している。初めは志信も魔法に慣れていなかったため、飛んでくる魔法を避けれずに『無効化』の棍で打ち消すしかなかった。しかし、最近は慣れたのか大体の魔法は避ける。そのため、『無効化』の術式もあまり磨り減らないようになっていた。
志信は『無効化』が施された棍を受け取ると、シアラは僅かに首をかしげる。

「……そっちは、どう？」
「単語なら多少は覚えたつもりだ」

主語がない質問だが、志信には意味が伝わったらしい。だが、そこから再び会話がなくなる。
志信は棍を傍に立てかけると、手に持ったコモナ語の本を開く。シアラは特に何かをするでもなく、ただぼんやりと中空を見つめる。そして時折志信の方を見ると、再び違うところへと目を移す。
そうすること三十分。シアラがポツリと呟く。

「……シノブは、暇なの？」

志信がシアラの部屋を訪れるのは、珍しいことではない。魔法の知識を教えてもらい、棍に『無効化』の術式を施してもらう。そのために、志信はシアラと共にいることが割と多いのだ。

「暇ということはないが、ここは静かで落ち着くからな。しかし、

そろそろ時間も遅いか……」

時計などはないため、志信は月の位置と体内時計で判断する。今から夜の鍛錬をしなければいけないので、そろそろお暇しなければならない。

そう判断した志信は棍を手に取って立ち上がると、部屋の入り口へと向かった。

「それでは、失礼する」

小さく頭を下げ、志信はシアラに背を向けて扉を開ける。

「……また」

そんな志信の背中に小さな別れの挨拶を投げかけ、シアラは小さく、本当に小さく笑った。

シアラの部屋を出た志信は、棍を片手に廊下を歩く。そして曲がり角を曲がると、足を止めた。

「あ……ぐ、偶然ね、シノブ」

そんな志信に声をかけたのは、“偶然”ここにいたミーファだった。僅かに慌てつつ、視線をあちこちに飛ばしている。

「ミーファか。どうした？　日中に魔力を使いすぎたのか？」

少しだけ挙動不審なミーファに内心首を傾げつつ、志信は尋ねた。

するとミーファは三回ほど首肯する。

「そ、そうなの。それで魔力回復施設を使おうと思って」

魔法剣士隊が主に使うのは『強化』のため、魔力はほとんど消費しない。しかし、ミーファぐらいになれば同時に攻撃魔法も使う。

この世界では一日の回復魔力量が少ないため、魔法を使う者はなるべく一日の消費魔力量を抑えるようにする。そのため訓練で使う魔法はかなり威力を抑え、本気で撃つことはあまりない。本気で使えば、普通の魔法使いの魔力は下級魔法十発ほどでなくなるのだ。

志信はミーファの言葉に頷くと、納得したように口を開く。

「そうか。やはり魔法剣士の隊長ともなると、実際に魔法を使って部下に手本を示さねばならんしな」

うんうん、と一人頷く志信。ミーファは疑うことなく信じてくれた志信に心苦しいものを感じつつ、話を進める。

「それでさ、良かったらこれから話でもしない？」

もしもこの場に魔法剣士隊の兵士がいたら、翌日は志信とミーファに関する噂で持ちきりになっていただろう。しかし、幸いと言うべきか周囲に誰もいなかった。

志信はミーファの誘いに対して、無表情を僅かに申し訳ないものへと変える。

「いや、すまんが今から夜の鍛錬をするので無理だ。勉強も終わったし、『無効化』の術式も直してもらったしな」

日中は近衛隊を鍛えているため、志信自身の鍛錬はあまりできて

いない。それでも近衛兵が顔をしかめるぐらいにはしているのだが、志信にとっては不十分だった。早朝訓練は義人も交えているため手加減している。そのため、夜の訓練は短時間ながらも集中してこなすのが志信の日課だった。

「そ、それじゃあわたしも一緒に……」

にべなく断れたミーファは、食い下がるように次の案を出す。しかし志信は首を横に振ると、労わるように微笑んだ。

「無理は禁物だ。俺の鍛錬に付き合うよりも、消費した魔力の回復に努めたほうが良い。ミーファは早朝訓練にも参加しているのだし、休むべきだ」

自分のことは棚に上げているが、志信は今のような生活をずっとしている。そのため短時間でも深く眠って体力を回復できるし、この世界に来てからは『強化』のような効果で身体能力が上がっているため、そこまで疲れることがない。最近は志信自身『強化』を使えるようになったので、それに拍車をかけていた。

「あ……うん。そうね、あはは……」

諭すように言われ、ミーファは思わず頷いてしまう。そして苦笑いをすると、それを見た志信は満足そうに真っ直ぐな目を向けた。

「休める時に休むのは大事なことだ。それでは、また明日の訓練で会おう」

そう言い残し、志信は外へと向かう。ミーファはそれを黙って見送ると、大きなため息を吐く。

「……寝よう」

墓穴を掘ったなと落胆しつつ、ミーファは肩を落とした。

第六十二話：思案

四代目の王、杉田晴信義景が極東の国ジパングより輸入し、自国で栽培を始めたのがきっかけとされる『米』は現在のカーリア国の主食である。

本来米には様々な使い道があるが、カーリア国においては純粋に食用にしか使われていない。つまり、炊いて食べるだけだ。一部の村では糊として使うこともあるが、それは少数である。もちろん、発酵させて日本酒を作り出すこともない。

他にも小麦を作る者もいれば、果物を栽培する者もいる。農民は税として年貢を納めるのだが、栽培するものが違えば納めるものも違う。大体は村ごとで育てるものが分かれているため、納めてもらう側としては特に仕分けが必要ということもない。

そろそろ稲刈りの時期ではあるが、義人は屯田兵として各村に派遣している兵士からの報告書を前に眉を寄せていた。

執務室の中には義人とカグラしかおらず、優希は図書室で義人のコモナ語の勉強に役立ちそうな本を探している。サクラは義人の寝室を掃除しているため、今は執務室にいなかった。

「農具が古くて作業効率が悪いか……鍬とかは木製だったもんなぁ」

義人は報告書に書かれた内容を読み進めつつ、片手で湯飲みを持ってカグラに淹れてもらったお茶をすする。そして一息つくと、湯飲みを机に置いてカグラへと目を向けた。

「金属製の農具を使う人って少ないのか？」

以前義人が視察で訪れたタルサ村で使った農具は、ほとんどが木製である。硬い木を用いて作った物だが、金属性に比べれば作業効

率も悪く、道具としての寿命も短い。

「大体は木製だったと思います。金属……鉄を使った物は値段が高いですから、貧しい人は木製の物を使っています。中には自分で作る人もいるみたいです」

「稲刈りに使う鎌とかも木製なのか？」

「金属製、もしくは研いだ石です。風の魔法で鎌鼬（かまいたち）でも起こせれば、簡単に稲刈りができると思いますけどね」

カグラの言葉を聞いて、義人は僅かに想像を膨らませる。鎌鼬で一気に稲を刈り、後は拾うだけで良い。それならば、確かに楽だろう。

「風の魔法が使える農民はいないのか？」

「いたら、今頃魔法隊か魔法剣士隊に引き抜いてますよ」

「あー……それもそうか。でも、そんな道具があったら便利そうだよな」

元の世界ならば稲刈り機がある。値段が張るのが難点だが、自分は稲刈り機に乗って運転するだけでいいのだから手作業よりは楽だ。

「鎌鼬を起こす道具ではないですが、魔力さえ使えれば風属性の『宝玉』で風の魔法を使うという手もありますよ？」

「『宝玉』？　なんだそれ？」

義人が首をかしげると、カグラは楽しそうに立ち上がる。そして、以前のように講義しようと胸を張った。

「『宝玉』とは魔法具の一つです。『魔石』が変質して生まれるものですが、何らかの属性が宿った『魔石』が『宝玉』と呼ばれてい

ます。例えば赤い『宝玉』なら火炎魔法を“扱いやすく”なります。そのため『宝玉』を使えば、魔力があるけど魔法が使えないという人でも魔法を使える“かも”しれない道具です」

「……なんか、微妙そうな道具だな」

カグラの説明を聞いた義人は怪訝な顔をするが、それに対してカグラは苦笑を返す。

「たしかに、魔法を使う訓練をしていない人が使っても手品程度のことしかできません。ですが、“できる”のと“できない”のでは大きな差があります。それに、本来は魔法使いなどが魔法の威力を底上げするために使う魔法具ですから」

「珍しいのか？」

「我が国では毎年ごく僅かな量しか採掘されません。しかも質が悪いので、“珍しいけどいまいち使えない”といったところでしょうか？」

「はっはっは、いらねー」

笑い飛ばしつつ、義人は報告書に文字を書き込んでいく。商人のゴルゾーにもらった市場の相場が書かれた紙を見ながら、仮に農具を支給するとしたらどれぐらいの金がかかるのかざっと試算を始める。

「ですが、質の良い『宝玉』を腕の良い魔法使いなどが使えば危険です。上手く扱えば、一段階上の魔法を放つこともできるのですから」

「つまり、腕次第ではけっこう役に立つ補助魔法具ってことか？」

「はい……ところで、先ほどから何をしているのですか？」

義人が筆算しているのを見て、不思議そうな顔をするカグラ。

「もし農具を支給するとしたら、どれくらいお金がかかるか試算してるんだ。電卓があれば楽なんだけどな」

もちろん、この世界では電卓など存在しない。カーリア国では算盤（そろばん）が存在するが、義人は小学校の授業で習った程度の珠算しかできないので暗算か筆算で計算している。しかし、筆算をするにしても使っているのは筆と質の悪い紙だ。筆につける墨（すみ）の量が多ければ、簡単に破れてしまう。

「書道も珠算も苦手なんだよな。今度から優希に任せようかね……」

子供の頃の習い事として習う者が多いが、義人は習い事をせずに外で遊ぶタイプの子供である。それとは対照的に、優希は書道も算盤も段持ちだ。それを考えると、義人としても悪い案には思えなかった。

「図書室から戻ってきたら頼んでみようか。って、カグラ？　どうしたんだ？」

義人は少し浮かない顔をしているカグラへと尋ねると、カグラは首を横に振る。

「農具を支給するのは良いのですが、予算が取れるかどうか……国家予算も残り少ないですし」

国を運営するためには、どうしても金を使う。現在のカーリア国の一年の国家予算は約十五
億ネカだが、兵士の給料や公共事業など、他にも金を使う場面はいくらでもある。

今までは予算の約七割が税収で賄われ、それ以外は交易によって得ていた。しかし、税率を下げたため来年の国家予算は今年よりも少なくなるだろう。

「予算が減るのは税率を引き下げたから仕方ないか。でも、年貢を納めてもらえば多少は潤うし……今のうちに、もっと実入りが良い輸出品を考えるべきかな」

カーリア国の輸出を支えているのは鉄である。鉱山から発掘された鉄鉱石や製鉄した鉄を輸出しているのだが、その質は多少良い程度でしかない。それでも、戦争をしている国ならばいくらあっても足りないぐらいだ。

「採掘量の増加……いや、質の向上か？　そもそもこの国の製鉄技術がどのくらいか調べないと……質がもう一つ上の鉄なら、取引価格も倍近くになる……」

ブツブツと呟きながら考え始めた義人を見て、カグラは口を閉ざす。ここ数ヶ月の付き合いで、こういうときの義人には声をかけないほうが良いと学んだ結果だ。カグラは思考を巡らす義人の邪魔をしないように注意しながら、湯飲みへと新しくお茶を注ぐ。

カーリア国の交易で取引する物の七割は鉄と鉄鉱石で、残りは鉱山から発掘される金や銀。それと本当に僅かの稀少鉱物に、自国で栽培した米などである。

米は隣国レンシアの一部の者に好評で、それなりの値段で取引されているが需要は少ない。

最近は兵士が経験を積むために戦った魔物から魔法具の材料になりそうな物を手に入れ、輸出もしている。しかし、下級の魔物から得られる材料などそこまで価値はないため、輸出全体の一パーセントにも届いていない。

中級の魔物から得た材料ならばそれなりの値がつくのだが、カーリア国では倒せる人間が限られているため中々手に入らなかった。

義人は椅子に背を預けると、大きな息を吐く。

「もっと人材が欲しい……できれば、文武両道な奴。こうなったら士官学校でも作るか？　いやいや、そもそも学校みたいな施設もほとんどないからそっちが先か」

金が足りず、人も足りない。現状維持が精一杯だが、義人としてはそれを改善しなければならない。

この国には言葉を話すことはできても文字の読み書きができない者が多くいる。識字率として表現するならば、その割合は半分にも届かないだろう。

識字率は基礎教育の浸透状況を測る指針として広く使われているが、それと照らし合わせるとカーリア国での基礎教育の浸透状況はすこぶる悪い。

現在のカーリア国での勉強方法といえば、最初に挙げられるのは『親に聞く』ということだ。その他にも、『家庭教師を雇う』という手があるが、それは家庭教師を雇う余裕がある家庭にしか取れない手である。

「いずれ教育施設を作るとしても、それにはまた金が必要と。どこかに大金が落ちてないかなー」

カグラが淹れてくれたお茶を飲みながら愚痴を零す義人に、カグラは茶菓子を差し出す。

「落ちていれば苦労はしませんよ？」

「そりゃごもっともで」

カグラから茶菓子を受け取り、義人は口へと運ぶ。先日優希が作ったクッキーをこちらの世界の料理人が真似て作ったお菓子だが、甘さが目立つ。

「ちょっと甘すぎ。逆に辛いものが食べたくなるな」

咀嚼したお菓子をお茶で流し込み、一息吐く。そこで、義人の脳裏に閃くものがあった。

「辛いもの……辛いものか。カグラ、この世界では香辛料って貴重か？」

「香辛料ですか？　塩ならこの国でも作っていますけど……」

「塩か。いやいや、もう少し香辛料らしいものがいいな。胡椒とか山椒とか大蒜とか山葵とか、そういうのはないのか？」

義人がそう尋ねるが、カグラは首をかしげるだけだ。そして、申し訳なさそうに肩を落とす。

「コショウなどはわかるのですが、ワサビとはなんでしょう？」

「摩り下ろして使う調味料だよ。鼻にツーンとくるやつ。あ、こっちだと名前が違うのか？」

日本語が通じるから時折忘れがちになるが、ここは異世界である。元の世界での名前とは違う可能性があると思った義人は、適当に白紙を取って紙面に筆を走らせていく。

「えーっと、摩り下ろす前の山葵はと……できた。こういうやつなんだけど、知らないか？」

紙面に描かれたのは、葉の部分なども描かれた白黒の山葵だ。摩

り下ろす前の山葵を見たことがある者なら、すぐにわかるような物体がそこには描かれている。

「うーん……『ラディ』ですかね？　変な臭いがするんですけど、香辛料なんですか？」

「『ラディ』っていうのか？　俺の世界だと、摩り下ろして醤油と一緒に刺身につけて食べるんだよ」

「そ、そうなんですか？　あれを……そんな」

「ああ。でも、山葵だと用途が限られるか。やっぱり、胡椒とかがいいな」

今でこそスーパーなどで手軽に手に入るが、昔は胡椒などの香辛料は非常に貴重なものだった。

料理に使うのはもちろん、防腐や殺菌効果が高いものは食料の保存にも使われている。胡椒などは大航海時代の食料の保存に重宝されており、同じ重さの金と交換していた時期もあるぐらいなのだ。そのため香辛料貿易を巡って様々な国が熾烈な争いを繰り広げ、貿易の主導権を握ろうとしている。

そんな話をした後、この世界ではどうなのかと義人は質問を飛ばした。

「コショウはある程度使われていますが、必ずしも必要というわけではないんです」

「必要じゃない？　料理や食料の保存に使うだろ？」

「料理や殺菌には使うのですが、食料の保存に使うというのはあまり聞きません。精々、旅人が持ち歩く保存食用に使うくらいですね」

何故と聞こうとして、言葉が止まる。

元の世界では料理と食料の保存に使われている。電気が通っていないこの世界では、冷蔵庫などもないはずだ。しかし、食料を保存

する方法は他にもある。その方法を思い出した義人は、思わずため息を吐いた。

「そういえば、魔法で氷を作れるんだっけ……魔力がある限り氷を作れるのなら、金を払ってまで香辛料を手に入れようなんて思わないわな。あーもう、そういう要素も入れて考えないといけないのか」

電気を使った冷蔵庫いらずだとため息を吐き、ついでに机へと突っ伏す。ところどころ元の世界の常識が通じないのが義人にとって頭の痛いことだった。

現代では通用したことも、こちらの世界では通用しないことがある。その逆もまた然りだが、この世界の情報が少ない現状では義人に打てる手は少ない。

「でも、魔法が使えない一般人になら売れるか？　いや、そもそも香辛料が貴重じゃなかったら意味がないか。こうなったらやっぱり現代の道具を……って、技術力が足りないっつーの！」

一人ノリツッコミをしつつ、義人は頭を悩ませる。魔法という存在は便利だが、義人にとっては邪魔な存在に思えてくるほどだ。

「こうなると、今はこの世界に存在しないけど、この世界の技術力でも作成可能な物が限られてくるな」

そう呟きつつ義人が真っ先に思い浮かべたのは『銃』の存在だ。

魔法が主力のこの世界では、銃のような武器はまだ存在していない。火薬は存在しているが、その用途は土木作業で発破に使われるぐらいだ。

火縄銃ぐらいなら、この国の技術力でも作れるだろう。だが、作ってもあまりメリットがない。

その理由としては、今しがた挙げた魔法の存在がある。
下級魔法でも火縄銃より威力があり、有効射程距離も長い。その上魔法は連射も可能で、魔力が続く限り撃つことができる。
メリットとしては、使い方さえ覚えれば誰でも使用できるという点だ。魔法と違って連射はできないが、弾切れは方法次第でどうにでもなる。引き金を引いて目標に当てれば殺傷できるため、魔物退治にも有効かもしれない。そして、人間相手にも十分強力な武器になる。

「だけど、それは駄目だな」

義人が銃を開発しない理由が、“そこ”にあった。
銃があれば、この世界の戦いの仕組みを変えることが可能だろう。最初は火縄銃からのスタートだが、改良を重ねれば魔法よりも強力な武器になる。いずれ大砲などもでき、魔法よりも遠距離からの攻撃が可能になるだろう。
そうなると、それだけ多くの人が死ぬことになる。
義人としては、それは避けたかった。故に、銃などは作れない。

「こうなったら、今あるものを現代の知識で改良するしかないか…よし、優希と志信にも知恵を出してもらおう」

一人で考え、一人で納得する義人。
カグラはそんな義人の様子を嬉しそうに、それでいて、どこか複雑そうな表情で見ていた。

第六十三話：現代人会議と王剣の不満

「はい。というわけで、会議を行いたいと思います」

その夜、義人は優希と志信を前にそんな口上から話を始めた。

場所は執務室の傍にある会議室で、当然のことながら義人以外の現代人の出席者は優希と志信の二人だけである。

他にもアルフレッドやカグラ、そしてサクラがいるが、最初の二人はこの世界の人間として意見を聞くためで、サクラはメイドとしての役割を全うしていた。ちなみにノーレもいるが、カグラやアルフレッドと同じくこの世界の意見をする役である。

「議題は『この国に今あるものを、どうにか改良できないか』ということ。交易に使えそうなものが望ましいかな。あと、意見は遠慮なく言ってほしい。何か閃くかもしれないから」

「改良ということは、新しい物は作らない……いや、“作れない”のか？」

義人の言葉に、志信が疑問を示す。その意図を汲み取った義人は、苦笑混じりに頷いた。

「技術力が足りないんだよ。構造が複雑な物は無理だし、形だけ真似しても意味がない。かといって、構造が簡単でこの国にないものっていうのも中々ない。だから、今ある物を、今ある技術で改良するのが精一杯なんだ」

そう言いつつ、義人はもう少し元の世界で様々なことを勉強しておけば良かったと僅かに悔やむ。テレビや本、インターネットなどから様々な知識を覚えてはいたが、それはまさに雑学に過ぎない。

それでも、歴代の王に比べれば遥かに知識量は多いだろう。昔と違い、今は様々な情報を簡単に調べることが可能だ。インターネットで検索でき、図書館に行けば大量の本もあり、テレビでも色々な番組が放送され、身の回りには多くの情報が溢れている。しかし、この世界では当然利用できない。利用できるのは、すでに頭の中に入っている知識だけとなる。

「そして、俺達にとって問題なのが魔法や魔物の存在だ。元の世界ではゲームや小説の中にしか登場しなかったものが、本当に存在している。これらの要素も交えて考えなくちゃいけないんだ」

そう言葉を締めくくった義人に対して、優希が小首を傾げながら口を開く。

「この国の技術で可能ならどんなものでも良いの？」

「可能なら良いけど……何かあるのか？」

「んー……わたしでもできそうなのは、新しいお菓子を作るとか、元の世界の服をこっちの世界用に改良するぐらいかな？」

「お菓子に服か、それならたしかに可能だな。この世界にない作りの服とかだったら、他国も興味を持つかもしれないし。ちなみに、何か案はあるのか？」

お菓子なら保存方法も考えなければ。そんなことを考えつつ、義人は気軽に尋ねる。すると、優希は膝に乗せた卵を撫でながら、僅かに頬を赤く染めて笑った。

「義人ちゃんのエッチ」

「何で！？　今の会話のどこにそんな要素があったんだ！？」

優希の言葉に本気で驚く義人だったが、なんとか気分を落ち着け

て今の会話と優希の反応から何が悪かったのかを考える。
周りを見てみれば、志信やアルフレッドなど他の男性組も不思議そうな顔をしていた。続いてカグラとサクラを見るが、同じように不思議そうな顔をしている。

「よくわからないけど、優希の作りたいように作ってくれ。というか、この国の技術でもちゃんと作れるものなのか？」
「作ることはできると思うけど、この国でみんなが使い始めるまで時間がかかるかも。でも、あったほうが良いと思うよ」
「あったほうが良い……俺とか志信も持ってたほうが良いものか？」
「多少違うけど、義人ちゃん達にはもう渡してあるよ？　わたしも自分用のは頑張って作ったけど、この国の人達は使ってないから作れば受け入れられると思うんだ」

義人は余計にわからなくなったが、それまでお茶を淹れていたサクラが何かに気づいたように顔を赤くする。そして優希へと近づくと、耳元で何事かをささやいた。それを聞いた優希は、微笑みながら頷く。

「うん、サクラちゃんのもちゃんと作ってあげる。あとでサイズを測らせてね？」

サクラに対してそう話す優希を眺め、志信は眉を寄せた。

「サイズ……身長に合った武器でも作るのだろうか？」
「いや、優希にそんな特技はないはずだけど……サクラは持ってない物なのか？」

志信のボケに突っ込みを入れながら何気なく義人が尋ねてみると、サクラは顔を赤くしたままで湯飲みを乗せるためのお盆を抱きしめ

る。

「ヨシト様、えっちです」
「えええぇっ！？」

優希に続いてサクラにまで言われ、義人は先ほどよりも大きな驚きの声を上げた。

「のう、シノブ殿。その『えっち』とはどういう意味じゃ？」

驚く義人を尻目に、アルフレッドが志信へと訪ねる。志信はどう答えたものかと思案し、常の無感動な表情で言葉を返す。

「そうですね……好色と似たような言葉です。おそらく、ですが」
「ふむ。しかし、色を好むのは男の性（さが）じゃと思うが」

説明として微妙な志信の台詞と、何やら頷いているアルフレッド。そんな二人の会話が耳に入った義人は、サクラの視線から逃げるようにそちらへと向く。

「そこ！　真面目な顔で話し合わないでくれ！　この話題はここまで！　優希はその作るものの詳細を後日紙に書いて提出してくれるか？」
「うん、わかった」

義人の言葉に、優希はすぐさま頷く。

後日、優希から提出された女性用下着を作る案を見た義人が気まずそうな顔で許可の王印を押すことになるのだが、それはまた別の話である。

義人はサクラに淹れてもらったお茶で喉を潤すと、今度は志信へと目を向けた。

「志信は何かないか？」

「俺は武器の改良ぐらいしか提案できないが……」

「武器の改良？」

「ああ。近衛兵に実際に戦う時使う刀を見せてもらったのだが、あまり質が良くなかった。ミーファが使っている刀ならば『魔法文字』で強度と切れ味が増しているため実戦でも“それなりに”使えそうだが、一般の兵士が使っている刀では少々不安がある」

「なまくらだったか？」

「なまくらとは言わないが、鉄の質が問題だな。せめてもう少し良い鉄を使わないと、魔法の補助がない刀では魔物相手でも厳しいだろう」

「質が悪いのか？　カグラ、普通の兵士が使ってる刀に使う鉄の質はどのくらいだ？」

義人がカグラに話を振ると、カグラは少し考え込んで口を開く。

「我が国で作った鉄を使っていますから、中の上ぐらいの鉄のはずです。ヨシト様達の世界と比べると質が悪いのでしょうか？」

「鉄鉱石の質はあまり変わらんのだろうが、製鉄技術が問題ではないか？　元の世界では『玉鋼（たまはがね）』と言うものがあるのだが、これは砂鉄を使って」

「それだ！」

志信の言葉を遮って義人が叫ぶ。遮られた志信は、不思議そうに義人を見た。

「何か使えそうなものがあったか？」
「ああ、あった。今志信が言ってくれたじゃないか。製鉄技術が問題だって。それをどうにかすれば、この国の輸出の目玉である鉄の質が大きく改善される」
「玉鋼……たたら吹きか？」
「そうだよ。テレビの特集でやってたけど、たたら吹きなら現代の高度な設備がなくても良い。昔から行われてた製鉄方法だから、この国の技術力でもできるはずだ」

たたら吹きとは、平安時代から存在していた鞴（ふいご）を使った製鉄方法である。もっと遡（さかのぼ）れば弥生時代のたたら炉という鞴（ふいご）を使わない方法もあり、その歴史は長い。かつては盛んに行われていたが、現在ではごく一部でしか行われていない製鉄方法だ。

砂鉄と木炭を使って作るのだが、非常に優れた純度の鉄を得ることができる。三昼夜を通して砂鉄と木炭を炉にくべ、合計四日で一回の製鉄となる。この四日間のことを一代（ひとよ）と呼ぶのだが、小規模なものなら半日ほどで製鉄することも可能だ。

「たしかに、たたら吹きならこの国の製鉄技術でもできるだろうな」
「よし、それなら明日にでも作り方を書き記しておこう。まあ、作り方がわかってるといっても上手くいくかはわからないけどさ」

記憶を掘り返してテレビの内容を思い出す義人の横で、志信は僅かに笑う。

「初めは上手くいかないだろうが、方法がわかっていれば改善もできる。俺もお爺様に連れられて見に行ったことがあるから、多少の助言はできるだろう」
「え？　見に行ったことがあるのか？」

「お爺様は知り合いが多くてな。知り合いの方がたたら吹きを行うところを見せてもらったんだ。『日本刀を作るのなら、玉鋼から作るべきじゃろう』とも言っていたな」

どこか懐かしそうに話す志信に、義人は笑いながら相槌を打つ。

「あの爺さんらしいや」

かつて志信の家で何度もあったことがある老人を思い出し、義人も懐かしく思う。すると、そんな義人のすぐ横に立てかけられていた王剣のノーレが疑問のこもった声を思念通話で届けた。

『その玉鋼とやらはそれほど良いものなのか？』

『俺は実物を見たことないけど、すごいらしいぞ？』

『ふむ……この王剣に使われている鉄よりもか？』

『さあ？　俺はそういう鑑定眼は持ってないんで』

ノーレの疑問にそう答えると、義人はアルフレッドに目を向けた。

「なあアルフレッド。この王剣に使われてる鉄って、良い鉄なのか？」

鞘に収まったノーレを持ちながら尋ねると、アルフレッドは顎（あご）に手を当てながら眉を寄せる。

「さて、王の剣に使うくらいじゃから良い鉄だと思うがのう……シノブ殿はどうじゃ？」

「お爺様ならわかるのかもしれませんが、俺はまだまだ未熟な身でして。そこまでわかりませんね」

首を横に振る志信を見ると、義人は傍のノーレをつかむ。そして自分以外でも抜けるように僅かにノーレを引き抜くと、志信のほうへと差し出した。

「まあ、一応見てくれよ。志信なら何かに気づけるかもしれないしさ」

「気づければ良いが……とりあえず、拝見するとしよう」

差し出されたノーレを前に何事かを考え込んでいた志信だったが、刀剣の類を見るのは嫌いではないらしい。丁寧な手つきでノーレを受け取ると、柄を握って椅子から立ち上がる。そしてゆっくりとノーレを引き抜くと、刀身を斜めにして明かりに照らした。

「どうだ？」

角度を変えてノーレを見る志信に、義人が尋ねる。すると、志信は申し訳なさそうに苦笑した。

「さすがに西洋刀まではわからないな。しかし……」

そこまで言うと、志信は椅子に座っている他の者から距離を取る。そして、ノーレを軽く数回振った。

真上から振り下ろし、一気に切り上げる。そこから体勢を入れ替え、横薙ぎに一閃。さらに数度空を切るようにノーレを振るい、動きを止める。

「ふむ……重さも丁度良く、武器としては申し分ないな。切れ味も良さそうだ。だが、俺では扱えないようだな」

ノーレに対しての評価を告げ、最後に何やら付け足す志信。それ

を聞いた義人は、否定を示すように片手を振った。

「いやいや、今ものすっごい軽やかに振るってたじゃんか」

「“振るっただけ”だ。俺では、使いこなすことはできない。そうだろう？」

そう言って、志信は右手に持ったノーレへと話しかける。問いかけられたノーレは、鼻で笑うように思念通話を発した。

『妾（わらわ）は王の、ヨシトの剣じゃからな。お主では妾は使いこなせん。お主では、妾の使い手として相応しくない』

「そういうことらしい」

志信はノーレの言葉に小さく笑い、鞘へと納める。そして義人へと手渡すと、椅子に腰掛けて苦笑した。

「それに、うちの流派では西洋刀を扱うことはないからな。日本刀なら扱えるが、西洋刀は少々使いにくい」

苦笑混じりの志信に頷きつつ、義人はノーレを受け取る。

「志信の爺さんもそんなこと言ってたな。あと、『日本人なら日本刀じゃろう』とか」

「こだわりがあるらしい。もっとも、俺も西洋刀よりも日本刀のほうが好きだがな。その点で言えば、この国で様々な刀を見ることができるのは良い経験になる」

義人も志信の言葉に同意するものがあったのか、何度か首肯した。

「男なら惹かれる魅力があるよな。今度ゴルゾーに頼んで何振りか調達してもらおうか？」
『む……』
ピクリと、義人の言葉を聞いたノーレが反応する。
「いや、それよりもこの国の刀の作り方が気になる。美術品としての価値がないらしいが、やはり武器や美術品としての価値を併せ持ってこそ名刀と呼べるだろう」
「美術品として輸出するって手もあるしな。玉鋼が作れたら作刀（さくとう）してもらうか？」
「そうだな。最初から質の良いものができるとは思えんが、試行錯誤を繰り返すうちに良くなるだろう」
話が盛り上がってきたのか、義人は笑顔で楽しそうに話し、志信は僅かに口元を緩めてどこか楽しそうに話し合う。
「なんと言いますか、楽しそうですね」
それを見ていたカグラは、苦笑しながらアルフレッドへと話しかける。声をかけられたアルフレッドは、義人達のほうを見ながら目を細めた。
「そうじゃのう。召喚された過去の王達も、王剣ではなく刀を好んでおった。何か特別なものなのかのう」
僅かに首を傾げるが、アルフレッドにはわからない話だ。エルフは弓以外に剣も扱うことができるが、日本刀とは形状が違う。
アルフレッドは四百年ほど昔の記憶を掘り返し、懐かしさに笑い

ながらお茶に手を伸ばした。

「ハルノブも、『刀は武士の魂』と言っておったが……サクラや、すまんが茶を淹れてくれるかの？」

湯飲みに入っていたお茶は残り少なく、それを見たアルフレッドはサクラへと声をかける。

「あ、わかりました。それでは失礼しますね」

身振り手振りを交えながら話している義人達の傍を通り、サクラはアルフレッドの方へと移動する。すでに会議をする空気でないのを理解しているのか、他の者もリラックスしていた。

ただ一人、いや、一本の剣を除いて。

空気を緩めてしまった張本人である義人は、会議を終了させると寝室へ足を運んでいた。

ノーレをベッド横へと立てかけると、靴を脱いでベッドへと寝転がる。

「いかんなー。つい話し込んじまった。まあ、多少案が出たから良しとするかね」

『……』

明日からの政務以外の作業を考え、軽く頷く。一応ノーレにも話を振った形ではあるのだが、ノーレからの反応はない。

この国の交易で最も比重を占める鉄の質を向上させられれば、その利益は大きい。問題は材料として砂鉄と木炭が多く必要なことだ

が、まだ試験的な段階のためそこまで量はいらないだろう。
仮に必要になったとしても、砂鉄で困ることはない。木炭は商人のゴルゾーに頼めば用意できるだろうし、公共事業として作るのも一つの手だ。
このカーリア国が他国とあまり交流がない理由として、交通の不便さが挙げられる。
北は海があるため、船でも使わないと行き来できない。西は森林地帯だが、魔物の巣窟になっている。東は多少の森と鉱山があるのだが、ここにも魔物が住み着いているためあまり奥に入ることはできない。南は他国への道があるのだが、ここも魔物が出没する。もっとも、南側に生息するのはほとんどが下級の魔物なので腕の立つ者なら大した危険はない。しかし、これが一般人や流民などなら危険である。

「街道付近の木を切って道を大きくするか？　開けた場所なら魔物が襲ってくることもあまりないだろうし、切った木は木炭にできる。商品を運ぶための道を整えるって言えば商人達の協力も得られそうだしな……しまったなぁ。さっきの議題に挙げれば良かった。ノーレはどう思う？」
『……』
再度義人が話を振るが、ノーレは答えない。ただ、不機嫌そうな感情が伝わってくるだけだ。
義人は困ったな、と頬を掻く。そしてベッドから身を起こすと、立てかけておいたノーレを手に取った。
「おーい。さっきからどうしたんだよ？」
『……ふん』
会議室を出た辺りからずっとこの調子である。義人は困ったよう

に笑うと、ベッド脇に置かれた綺麗な手拭いをつかんでノーレを鞘から引き抜く。

『……何をするつもりじゃ？』

「いや、これで拭いてノーレの機嫌を取ろうかと」

何も隠さず義人が告げると、ノーレはため息に似た声を響かせる。そして、僅かに呆れを含んだ声を発した。

『馬鹿者め、そういうことは口に出すことではないわ。それと、剣の手入れの仕方くらい覚えんか戯け』

「お、ようやく話してくれたな。それで、俺何かしたか？」

義人はノーレを鞘に戻しつつ尋ねる。それに対してノーレは、数秒沈黙した後ポツリと拗ねたような声で呟く。

『……日本刀というのは、そんなに良いものなのか？』

「え？　日本刀？」

『さっき話しておったじゃろうが』

さっきと言われ、義人は記憶を掘り返す。日本刀について話したのは、先ほどの会議のときだ。志信と日本刀の魅力について色々と話し合ったのだが、それに思い当たった義人は苦笑する。

「良いっていうか、元の世界では実物を見ることなんてあまりないからな。志信の家に行けば何本かあったけど、爺さんがあまり見せてくれなかったし。俺達の世界でなら、実物を手に取って眺めるなんて機会はほとんどないんだ。骨董品が好きな奴とか、剣道や剣術をしている奴なら話は別だけどさ」

そこまで言うと、義人は元の世界での生活を思い出して目を細める。

「だからというか、一種の憧れみたいなものがあるんだ。漫画やゲームではよく目にするけど、実物を見ることはほとんどない。時代劇とかでも刀を振るうシーンは格好良いしな」

でも、と言葉をつなげ、義人はノーレを再度引き抜く。そして両刃の剣を眺めて嬉しそうに笑った。

「ノーレみたいな剣に対する憧れもあるんだ。冒険物の小説やゲームで登場するのは大抵西洋刀だし、日本刀とは違う美しさがあるしな」

そう言って、義人はノーレを鞘に納める。そして膝の上に置くと、首を傾げた。

「それで、何で不機嫌だったんだ？」

『……もう良いわ、この戯けめ。妾は不機嫌になどなっておらん』

「え？　でもさっき」

『良いと言っておるだろうが！　不機嫌になどなってない！』

「なら良いけどさ……」

怒鳴るノーレに対して、義人は大人しく引き下がる。

義人の言葉の中には知らない単語がいくつかあったが、それでも義人の言いたいことと気持ちは伝わった。そんな義人に、ノーレは愚痴のように呟く。

『まったく……お主はもう少し剣の心というもの理解するべきじゃ』

「剣の心？　いや、それはきっと志信が得意だろ」

剣の心はおろか乙女心も碌に理解できない人間には無理な注文である。

ひたすら首を傾げる義人を前に、ノーレもそれを理解したのだろう。先ほど以上に呆れた声を零す。

『お主には無理な話じゃったな』

ノーレの言葉に、義人は納得できないものを感じながらも頷く。すると、ノーレはため息のような声を義人に届けた。

『まったく、ようやく巡り合った妾の初めての使い手だというのに……この戯けは』

「ん？　初めての使い手って、俺が？」

『そうじゃ……言っておらんかったか？』

「聞いてないな。というか、歴代の王がいただろ？」

ノーレの呟きに疑問を示した義人だったが、ノーレは否定の意を向けてくる。

『いたが、妾を使いこなした者はおらん。いや、そもそも妾をきちんと振るったのはお主が初めてじゃ』

「いやいや、ノーレは王剣だろ？　なんで今までの王様が使わなかったんだよ。博識で魔法も使える上に喋れるなんて最高じゃないか」

『最高……いや、ごほん。むしろ妾がそれを聞きたいんじゃ。召喚された王は皆、妾を使うのを拒んでおってな。魔力があるときは何とか話しかけることもできたのじゃが、話しかけた途端『物の怪』だの『妖刀』だの言われての……危うく叩き折られそうになったこともあるんじゃ』

悲しそうに語るノーレに、義人は眉を寄せた。

「まあ、いきなり剣に話しかけられたら驚くわな。俺も最初は頭がおかしくなったのかと思ったし」

『ぬぅ……適応能力のない奴め』

「いたって正常な反応だと思うんだけど。まあ、それは置いとこう。それでどうなったんだ？」

義人は初めてノーレが話しかけてきたときのことを思い出し、苦笑する。殺し合いの最中に声をかけられたため、恐怖で気が狂ったのかと本気で思ったぐらいだ。

幸いだったのは、現代ではゲームや小説などで似たようなものが存在していたことだろう。架空の存在としてだがそういったものを知っていたため、受け入れるのはある程度容易い。

もっとも、現実に遭遇すると本気で驚いてしまうのだが。

『妾は魔力がなくては活動することができぬ。そのため鞘に施された『吸収』の術式を使って触れたものから魔力を吸ったり、剣を持った王から魔力を吸ったりするんじゃ。しかし、肝心の王が妾を使わん。他の者が王剣に触れることなど滅多にないし、思念通話を使うだけの魔力もなくなっての。“妾”の存在を維持するだけで精一杯になっておった。あとは冬眠した熊のように、意識を失うことで魔力の消費をなくして鞘から魔力が送られてくるのを待っておったんじゃ』

「それはなんというか、大変だったんだな……」

『大変どころの話ではないわ。お主達を召喚した際に何とか魔力を吸ったのが、それがあと一ヶ月後だったら妾は消えていたかもしれん』

「誰が剣を引き抜けるか試した時か。でも、魔力を吸ったのならなんですぐに話しかけてこなかったんだ？」

話を聞いた義人はなんとなく鞘に手を当て、ついでに柄を握りながら尋ねる。

『簡単な話じゃ。思念通話を使えるまで魔力を吸えなかった。それだけじゃ。あと、どこかの誰かさんが妾を寝室の片隅に放置していたおかげでのう』

「ま、まったく、どこの誰ですかね」

そんなことを言いながら、義人はノーレから目を逸らす。額に冷や汗が浮かんでいるのはきっと、室温が高いからだろう。

『まあ良い。あとはお主が魔法人形に襲われた時に魔力を吸い、話しかけることができたわけじゃ。そして、妾に名前をつけてくれたのもお主が初めてじゃよ、ヨシト』

最後は嬉しそうなノーレの声色に、義人は申し訳なさを感じて小さく頭を下げる。

「……今度から、持ち歩くようにします、はい」

『そうしてもらえると嬉しいが、どうせ忘れるんじゃろ?』

「ハッハッハ、ソンナコトナイデスヨ」

からかうようなノーレに、棒読みで否定する義人。

『まったく、お主というものは……む、そろそろ寝ないとまずいのではないか?』

「お、もうそんな時間か?」

元の世界ではまだ眠る時間ではないが、こちらの世界では早寝早

起きが基本である。義人は寝間着に着替えると、明かりを消してベッドへと潜り込む。歯は食事後に磨いているし、その後は何も食べていない。虫歯になることはないだろう。

ノーレは手の届くベッド横へと立てかけ、義人は声をかける。

「それじゃあ、おやすみノーレ」

『うむ、おやすみ。良い夢を』

お互いに就寝の挨拶を交わすと、あとは眠るだけだ。もっとも、ノーレが眠ることはない。ただ、義人の寝息の音を聞くだけである。

『まったく』

しばらく経つと、ノーレは義人の眠りを妨げないように小さく呟く。義人はすでに寝入ったのか、呼吸は規則正しい。

『あれから数百年、か……』

ぼやくように、ノーレは独白する。初代カグラにして、この王剣を作った女性であるミレイ＝シーカーのことを思い返して苦笑する。

『あの戯けめ。ちゃんとした使い手が現れるまでにここまで長い時（とき）がかかるなど聞いておらんぞ』

毒づくような言葉だが、声には親しさが込められている。そして、同時に懐かしさを思う感情も込められていた。

『まあ、良い使い手に巡り合えたのが救いか。のう、ヨシト』

寝ている義人へと、ノーレは語りかける。もちろん、起こすつも

りなど毛頭ない。

「ん～……？」

それでもノーレの言葉に応えたのか、義人は寝返りを打つ。

『ふふっ……どんな夢を見ているのやら』

そんな義人の様子を見たノーレは楽しげに、そして、優しげに呟いた。

第六十四話：周辺国家

会議から二日経ったその日、今日一日の政務を片付けた義人は執務室の机の上に広げた紙の前で腕組みをしながら首を傾げていた。その横では、膝の上に卵を置いた優希が裁縫針片手に“何か”をせっせと作っている。それにつられているのか、卵は時折小刻みに震えていた。

「えーっと、必要な材料は砂鉄に木炭だけだよな。あとは炉と、風を送るための鞴を作ってと。炉は粘土で作って……いや、まずは実験として小規模だから、小さい炉でいいか。いきなり成功するとは思えないし」

義人は優希が作っているものをなるべく意識しないように目を逸らしつつ、記憶を掘り返して必要なことを紙に書き記していく。時折カグラが興味深そうな表情で紙を覗き込み、気になることがあれば指摘する。

「材料は良いとして、この作業をするのは誰なんですか？」

「城下町の外れにある製鉄所に頼もうかなと思ってる。それで上手くいったら公共事業として扱い、いずれ職人の育成を目指そうかなと思ってね」

「職人の育成、ですか」

「ああ。職人だけじゃなく、医者とかも欲しいな。怪我なら治癒魔法で治るけど、病気は治せないし。あと、教育制度を作って学校を建てたい。もっとも、それを実現させるには金がいるからなー。それに時間もかかるし……なるべく早めに目処をつけたいよ」

そう言いつつ義人は苦笑し、手元の紙を叩く。

「これが上手くいけば、もう少し交易による収入が増えると思う。取らぬ狸の皮算用になりそうで怖いけど、その時は他の手を考えないとな」

「何か考えがあるのですか？」

カグラの問いかけに、義人は一度手を止める。そして引き出しを開けて中を漁ると、数枚の紙を取り出した。

「考えってほどのことじゃないけど、塩を輸出しようかなと思ってね。調べてもらったけど、カーリア国の近くの国が普段使う塩は岩塩だろ？　だから、この国の海水から作る塩を輸出しようかと思うんだ。まあ、売れるかどうかはわからないけど」

手元の資料をカグラに見せつつ、義人は肩をすくめる。すると、そんな義人に優希が声をかけた。

「海水から塩を作ったら苦汁（にがり）も一緒にできるよね。そうなると豆腐も作れるようになるよ？　大豆はこの世界にもあったから、豆乳はすぐに作れるし」

「豆腐か……寒くなったら鍋料理を食べたくなるし、丁度良いかもな」

「蟹（かに）もこの世界にいたら良いね？」

「もしいたら蟹鍋ができるな。よし、今度調べとこう」

優希の言葉に頷く義人だが、決して優希のほうは見ない。間違っても、目を合わせない。

「ところで義人ちゃん」

「ん？　なんだ？」

「なんでさっきからこっちを向いてくれないの？」
「あー、そりゃアレですよ。ちょっと首を寝違えまして、ええ」
思いっきり嘘である。優希のほうを向かない理由は、現在優希が作っているものが問題だった。
「じゃあ、わたしが移動するね？」
「ストップ！　待て！　動くな！　いや、動いても良いけど手には何も持たないでくれ。何も見せないでくれ。俺は“それ”に関してはノーコメントだ」
「今度はシンプルだよ？」
声色からして、きっと優希は心底不思議そうに首を傾げているのだろう。十数年に及ぶ付き合いから、顔を見ずとも義人にはわかる。だが、わかるからこそ義人は口を開いた。
「だからって、完成した下着を俺に見せてどうすんの！？　俺にどんなリアクションをしろと！？　服飾担当のケーリスに見せてきてくれ！　いやむしろ見せてきてくださいお願いします！」
筆を机の上に置いた義人は、土下座しかねない勢いで優希に頭を下げる。それを見た優希は小さく笑った。
「ケーリスさんは『付け心地も良いですし、画期的ですね』って言ってたよ？　あとは男性としての意見が欲しいなって思ってるんだけど」
からかうような優希に、義人は両手を交差させて拒否を示す。ついでに、服飾担当であるケーリスに『画期的ってなんだよ！？』と心の中で突っ込みを入れた。

別段恥ずかしさを覚えるほど初心なつもりはないが、義人としては何が悲しくて幼馴染みが作った女性用下着の意見をしなければいけないのかという感情がある。

恥ずかしさではなく、どういった反応を取れば良いのかわからないのだ。何か意見を言えば、そのまま取り入れられそうで怖い。

「とにかく、それは優希に一任するから！　俺はノータッチ！」

「んー……残念」

親しさを感じさせる気安さで、優希は笑う。義人はそんな優希に対して、相変わらず視線を逸らしたまま肩を竦める。

そんな二人の会話を黙って聞いていたカグラは、話を戻すべく咳払いをした。

「それで先ほどの話なのですが……」

「どこまで話したっけ？」

「塩を輸出するというところまでです」

そう言って、カグラは資料の紙を義人に返す。義人は資料を受け取ると、机の引き出しを開けて元の場所へと戻した。

「そうだった。まあ、輸出するって言っても利益がなさそうなら手は出さないけどな」

気を引き締め、置いていた筆を手に取る義人。そして記憶にある限りたたら吹きについての情報を紙に書き込んでいく。カグラは紙に文字を書き込んでいる義人の邪魔にならないよう注意しつつ、広げた地図を机の上に置く。

「塩もそうですが、カーリア国近隣の国で海に面している国はあま

りありません。なので、海の幸を大量に輸出できれば多くの利益が出ると思うのですが……」

地図の表面を、カグラは国の境界に沿って指でなぞる。地図には近隣数カ国の地形が描かれており、義人は筆を持ったまま目を向けた。

近隣諸国で一番北に位置する国であるカーリア。その南に位置し、カーリアの三倍ほどの国土を持つ友好国レンシア。そのレンシアの東には武力を持って他国を支配しようとするハクロアが存在し、さらにその周囲には国にも満たない集落が点在している。ハクロアの国土はカーリアの六倍ほどあり、レンシアと比べても大きい。

義人はその地図を見て首を傾げる。

「レンシアもハクロアも海に面しているみたいだけど、これは違うのか？」

その問いかけがくることは予想していたのか、カグラは迷わず頷く。

「海に面してはいますが、我が国カーリアとは違って海に面する部分に線を引くように山脈が存在します。山脈には強力な魔物が住んでいますので、山を越えて漁村（ぎょそん）を作ることもできません。そのため、海に面しているとは言い難いのです」

「ふむふむ……“きちんと”海に面しているのはこの近隣諸国ではカーリアと……」

地図のあちこちへと目を飛ばし、義人は各国の位置を把握していく。

「一番近くではハクロアの北のほうの国か。いや、これは国か？

カーリアよりも小さいけど」

ハクロアの北に位置し、なおかつ海に面している地域を見て首を捻る。カグラは義人が見ている先を視線から探すと、納得したように頷いた。

「そこは国ではなく、各町村が自治をしている地域ですね。しかし……」

そこで言葉を濁すと、カグラは言うべきかどうか迷うように視線を逸らす。義人はそんなカグラを不思議に思いつつも、続きを話すように目で促した。それに対して、カグラは僅かに姿勢を正す。

「以前軽くお話しましたが、レンシアとハクロアが戦争をしていたというのは覚えていらっしゃいますか？」

「レンシアの記念式典について話してたときに言ってたな。たしか今は小康状態なんだっけ？」

「はい。戦争自体は四年ほど前から始まったのですが、半年ほど前から小康状態になっています。時折小競り合いが起きているようですが、あくまで牽制だけのようですね。そして、その自治区は戦争開始当初にハクロアによって支配されました」

「属国……いや、国じゃないから植民地か？　それで、どうなったんだ？」

さすがに紙に書く手を止め、義人はカグラのほうを見る。優希も話に興味を持ったのか、縫い針を針刺しに刺してカグラのほうへと目を向けた。

「これはゴルゾーさんに聞いた話ですが、若い男性は戦に駆り出され、残った人達は奴隷のように働かされたみたいです。塩や魚介類

を安値で売らせ、時にはお金を払うこともなかったとか」

僅かに憤りが込められたカグラの話に、義人は眉を寄せる。

「酷い話だな。しかし、そうなるとハクロアを相手に交易するのも考え物か」

元々交易する気などサラサラないが、それを言うことはない。

なにせ元財務大臣のエンブズの件で多少関わりのある国だ。王としての立場は別として、義人個人としては交易など行う気は起きない。そんな義人の心情を見越したのか、カグラは同意するように頷いた。

「商人同士での取引はありますが、国としての交易はほとんどありません。ハクロアとしても、この国にあるもので取引しようと思うものはないでしょうし」

「俺としては嬉しいけど、王としては嬉しくないなぁ……」

顎に手を当て、義人は困ったように視線を宙に飛ばす。しかしそれも数秒のことで、表情を引き締めて視線を戻した。

「ひとまずハクロアのことは置いておこう。さっきカグラが言っていた、海の幸を大量に輸出できればっていう話はどうなんだ？」

そう義人が問うと、カグラは質問に答えるためか僅かに距離を詰める。

「それはですね、海から他国まで距離があることが問題なんです。これも以前お話しましたが、海で取った魚などは鮮度を保つために氷付けにして運んでいます。しかし、氷は時間が経てば溶けてしま

いますし、氷の分余計に重いです」
「まあ、そりゃそうだよな」

氷を使った冷蔵庫はあっても、魚自体を凍らせることができる冷凍庫はこの国にはない。しかも運ぶための手段は人力か、もしくは馬車である。重すぎれば運ぶことができず、その結果大量に運ぶことができない。かといって氷の量を減らせば腐敗するかもしれないのだ。

「海からこの王都まで運ぶのに馬車で二日。さらに、ハクロアの王都であるハサラまでは王都からでも馬車で約一週間かかります。その間、氷が溶ける度に凍らせなければいけません。そのため、需要があっても供給できるのは少量というのが現状です」

カグラの説明を聞いた義人は、納得するように首肯して最後に首を捻る。

「干物にすれば良くないか？　それなら凍らせなくても、冷やしておくだけで良いし。あ、でもそれだと刺身とかは無理か。貝類なら干物にしても良さそうだけど、魚の干物だと調理方法も限られそうだしな」

そこまで言うと、義人は優希のほうに苦笑を向けた。

「この世界だと、車のありがたさがわかるな」
「作れば良いんじゃないかな？」
「いや、作れないから。馬車はあってもガソリンで動く車なんて作れないから」

優希の提案に手を振って否定する義人。技術力もそうだが、エン

ジンの構造も知らないのに作れるはずがなかった。そして、それ以前にガソリンがない。

魔法で代用できないかなと義人は考え始めるが、それを遮るようにカグラが呟き声を漏らす。

「干物……干物ですか。値段は落ちますけど、その分大量に運べれば最終的に利益が大きくなりそうですね……」

そこまで言うと、何かに納得できたのかカグラが立ち上がった。

「可能かどうか、担当の者に聞いてきます」

それだけを言い残し、カグラは執務室から歩き去る。止める暇なくそれを見送った義人は、隣の優希と顔を見合わせる。

「もしかして、この国って干物もなかったのか？」

「どちらかというと、魔法で凍らせるっていう手段があるのが問題じゃないのかな？」

「あー、なるほど。便利だから魔法を使った方法が先に浮かぶわけか。干物自体はあると思うけど、元の世界とは違う冷凍方法が存在するからそっちを使っちまうんだな」

机の上に広げられた地図を元の場所に戻しつつ、義人と優希は意見を言い合う。そして最後に、義人はポツリと呟いた。

「今度からは、この世界の人間だけど魔法が使えない奴からも意見を聞いたほうが良さそうだな」

意外とあっさり良い方法見つかるかもしれない。最後にそう付け足して、義人は元の作業に戻ることにした。

その夜、夕食を食べ終えた義人は今日書いた『たたら吹き』についての資料を寝室で読み返していた。志信に書いてもらった資料と照らし合わせつつ、覚えている知識と合わせて読んでいく。

『のう、ヨシト』

「んー？　どうした？」

そんな義人に、ノーレは声をかけた。

『お主の世界では、皆が皆お主のように知識を溜め込むものなのか？』

暇だったのか、その声色は世間話のもの。対する義人も、世間話程度に反応する。

「別に知識を溜め込んでるわけでもないさ。この世界に比べて大量の情報が溢れ、ある程度の情報は調べればすぐに手に入れることができる。そんな世界で生きていれば、誰でも知ってるだろうさ」

『そうなのか？』

「多分、な。まあ、俺の場合は学校の勉強よりもこういった知識を覚えるほうが好きだったっていうのはあるけど」

資料を見ながら答える義人に、ノーレはふむと相槌らしき声を漏らす。

義人としては、学校での勉強に力を入れたことはあまりなかった。優希や志信はテストでも上位に入っていたが、義人は大抵平均点を取るぐらいの成績でしかない。かといって、別に頭が悪いわけでも

なかった。

「学校の授業で学んだこととってさ、人生のどこで役に立つのかいまいちわからなくてな。将来使うあてがない数学の公式を覚えるよりも、もっと違うことを覚えたほうが有意義じゃないかって思うんだよ。もっとも、進学や就職には必要だし、雑学を覚えたから使う機会があるのかと聞かれたら答えはノーだけどさ」

自分で言ったことに、義人は苦笑する。それは誰もが思うことだろう。そして、考えても意味のないことだ。

将来就きたい職業があって、そのために専門の学校で学ぶわけでもない。とりあえず進学できるところに進学して、将来の目標を定めることもなく言われるままに勉強をする。テストや受験のために学び、それが過ぎれば記憶から風化する知識。義人にとっては、勉強よりも人間形成の場としてのほうが意味がある気がした。

『何故そんなところに通うんじゃ？　話を聞く限り、意味がなさそうじゃぞ』

「必要な知識もあるからなー。あとは義務教育っていう制度があって、中学校……十五歳までは学校に行かなくちゃいけないんだ。集団生活を通して人間関係を学ぶことも重要だしな」

この国には中学校というものがないため、義人は年齢で説明する。

『ふむ……なんとも評価のし難い場所じゃのう』

「そんなもんだって」

ノーレの言葉に義人は苦笑すると、手に持っていた資料をまとめて机の上に置く。そして背伸びをすると、一つ欠伸を漏らした。

「ちょっと早いけど、そろそろ寝るかな？」

早寝早起きの習慣が身についたせいか、多少の眠気を感じる。歯を磨いて寝るかと義人が判断した時、不意に寝室の扉がノックされた。

「ん？　誰だ？」

「義人ちゃん、わたしだよ」

義人が扉越しに問いかけると、耳慣れた声が響く。それを聞いた義人は、特に迷うことなく扉を開けた。

「どうした……って、何してるんだ？」

扉を開けた義人は、震える卵を落とさないように慌てている優希を見て眉を寄せる。

「そろそろ産まれそうなの！」

「ヨシト王のお子さんがですか？」

卵を落とさないように注意しながら優希がそう言うと、扉の右横にいた守衛の兵士が真顔でぼける。それを聞いた左横の兵士は右横の兵士の頭を叩いた。

「なんでヨシト王の子供が卵から産まれるんだよ！？」

「いや、つい……」

叩かれたほうも自分の言ったことのおかしさに気づいたのか、照れながら頭を掻いた。義人はそんな守衛の二人に苦笑しつつ、優希を寝室に招き入れる。

「まあ、とりあえず入ってくれよ。あ、誰か呼んできたほうが良いかな？」
「ううん。必要ないと思うよ。孵化するだけだし。呼んでる間に卵が孵っちゃうかもしれないよ？」
「そ、そうか？」

優希の様子に首をかしげながらも、龍の卵が孵化するという好奇心に押されて義人は優希の言葉に納得する。優希は寝室の扉を閉めると、座布団の上に卵を置いた。

『何の騒ぎじゃ？』

ノーレが義人に尋ねると、義人は卵を見ながら思念通話で答える。

『そろそろ卵が孵るらしいんだけど……本当か？』

口には出さずに思念通話で尋ねると、ノーレから何かを探るような波長が義人へと伝わる。そして数秒経った後、肯定するような声が返ってきた。

『ふむふむ。たしかに、そろそろ孵化しそうじゃの。僅かじゃが、内側の魔力が漏れつつある』
『危険は？』
『ないじゃろう。じゃが、せめてエルフか巫女くらいは呼んでおいたほうが良いのではないか？』
『アルフレッドかカグラを？』
『うむ。エルフなら他の魔物についても知っておるだろうし、巫女ならば何かしらの知識を持っておるじゃろう』
『そっか。それじゃあそうするかな』

ノーレの言葉を聞いた義人は、卵を見ている優希の傍へと歩み寄る。

「やっぱりカグラかアルフレッドを呼んできてもらうよ。そっちのほうが何かあっても対処できるし」

そう告げて義人が寝室の扉へと向かおうとすると、ズボンの裾を引っ張られて足を止める。何事かと義人が目を向けるが、優希は視線を合わせずに口を開いた。

「見てよ義人ちゃん。孵化するみたいだよ?」

裾から手を離さずに、優希が告げる。

パキリと音を立てながら、優希の言葉を肯定するように卵にヒビが入った。

第六十五話：白龍の子

夕食を終えたカグラは、サクラと共にアルフレッドの部屋にいた。
カグラの部屋と同じく、最低限必要なものしか置かれていない殺風景な部屋で三人は気の向くままに談笑している。
時折ミーファも交えて話すことがあるのだが、今回彼女の姿はない。アルフレッドはサクラに淹れてもらったお茶が入った湯飲みを口に運ぶと、軽く飲んで好々爺然とした笑みを浮かべた。
普段飲まれているお茶の葉は極東の国ジパングから輸入し、カーリアで栽培しているものの一つである。アルフレッドなどは何百年も飲み続けているのだが、少しずつ品種改良が進んでおり飽きることがない。

「ふむ……相変わらずサクラの淹れてくれたお茶は美味いのう」
「そうですか？　えへへ……嬉しいです」

アルフレッドの言葉に、サクラが嬉しそうに笑う。そんなサクラの歳相応の笑顔を前に、アルフレッドは笑みを深くする。それはさながら、祖父と孫の会話のようだった。アルフレッドとサクラの様子を見ていたカグラは、穏やかに微笑む。
アルフレッドはカグラとサクラにとっては師であり、祖父のような存在だ。サクラは途中までだったものの、幼い頃から鍛えられた縁と絆がある。
反対に、カグラとサクラはアルフレッドにとっては弟子であり、孫か子のような存在だ。もっとも、弟子という要素を除いてしまえばアルフレッドにとってこの国すべての人間が孫か子のような存在になるのだが。
そうやって三人で他愛も無い話をしていると、不意にアルフレッドが口を閉ざして表情を引き締める。それを見たカグラは、何事か

と口にしようとして眉を寄せた。

「これは……魔力ですか？」

多少の違和感を感じ、カグラはそう呟く。それに遅れること数秒、サクラもカグラの言ったことに気づいて表情を引き締めた。

「そのようじゃのう。ふむ、カグラとサクラも成長したものじゃ。しかしこの魔力はどこから出ておるんじゃ？」

通常、魔力というものはあまり感知できない。できたとしても魔法などを使って魔力が体の外に出ていなければ感知できず、その上魔力量の大きさは大雑把にしかわからない。『魔計石』を用いるかノーレのように魔力に敏感でないと正確な判断はできないのだ。

しかし今、カグラ達は正確に魔力を感じ取ることができた。それは誰かが魔力を使ったことを示すのだが、そこまで思考が行き着いた瞬間、カグラは椅子から立ち上がる。

「カグラ様！？」

サクラが声をかけるが、カグラは答えない。突風のような速さでアルフレッドの部屋から飛び出し、見回りの兵士が驚くのを無視して疾駆する。

ここ最近は平和だったため、気が緩んでいた。そのことに後悔しつつも、カグラは絨毯張りの廊下を走り抜けていく。

顔色を変えて走り去ったカグラを呆然と見送ったサクラは、気を取り直すと慌ててカグラの後を追おうとする。アルフレッドは立ち上がりつつ、長い付き合いがあるサクラに声をかけた。

「急ぎすぎて転ぶでないぞ？」

「こ、転びませんよ！　昔じゃないんですから！」
「なら良いが……」

僅かに顔を赤くして反論するサクラに、アルフレッドは時の流れを感じて苦笑する。
もっとも、急いだサクラがアルフレッドの予想通り転ぶことになるのだが、この時のサクラはまだ知らなかった。

パキリ、パキリと音を立てながら、徐々に卵の上部にヒビが入っていく。さすがに義人も興味を惹かれたのか、誰かを呼びに行くという考えは頭の中からなくなっていた。

『さすがは龍種じゃな。僅かとはいえ、漏れる魔力が濃いわ』

ヒビが入った卵を義人と優希が見ていると、ノーレがそんなことを呟く。それを聞いた義人は、卵から目を離さずに口を開いた。

「すごいのか？」
『何がどうすごいのかと聞いておるのかわからんが……並の魔物ではないことはたしかじゃな』
「へぇ……」

感心するように頷くが、その間にも卵のヒビは広がっていく。中から外へと出ようとしているのか、卵は暴れるように左右に揺れる。
優希は黙して語らず、ただ卵の様子を見るだけだ。
余程卵の殻が硬いのか、ヒビは少しずつしか広がらない。だが、それでも確実に少しずつ広がっていた。

「割ったら駄目か？」

半分冗談、半分本気で義人が尋ねる。すると、ノーレは呆れたような声を漏らした。

『自分で割らせるべきじゃろう。何、そろそろ割れるじゃろうて』

ノーレの言葉を肯定するように、天辺部分の卵の殻が割れて転がり落ちる。ここまでくると義人も口を閉じ、優希と並んで卵を見ることにした。

一部分とはいえ穴が開き、中にいるであろう幼龍はその穴を基点にさらに卵を割っていく。

「お……」

「わぁ……」

思わず、義人と優希は感嘆に似た声を漏らす。徐々に卵の殻が割れ、三分の一ほど割れたとき“ソレ”は姿を見せた。

一目見た義人と優希が同時に思い浮かべた言葉は、純白。一点の汚れもない、雪のような白い繊毛に覆われた皮膚。背中には小さいながらも双翼が生え、小さい四肢の先では爪が鈍い光を映す。大きさ自体は割って出た卵よりも小さく、三十センチにも満たない。

龍と呼ぶにはどこか頼りないものの、それでもなんとか卵から這い出ると、閉じた目をゆっくりと開いていく。

「思ったよりも小さいな」

「でも可愛いよ？」

そして、目の前で己を見ながら会話する存在に気がついた。幼龍は、緑色の目でその存在を認識すると僅かに首を傾げて声を上げる。

「キュ？」
「あ、今鳴いたぞ。産声か？」
「産声かなぁ……」

二人がそう言うと、幼竜は四足歩行で義人のほうへと近づく。そして義人を見上げると、再度鳴き声を上げる。

「キュー……キュク？」
「なんて言ってるんだ？」
『さすがに妾もわからんが……別に敵意を持っているというわけでもなかろうて』

義人が眉を寄せるが、当然龍の言葉などわかるわけもない。幼龍は義人を見ると、今度は優希のほうへと近づく。

「どうしたのかな？」

そう言って優希が手を伸ばすと、幼龍は不思議そうな目で優希を見上げた。そのまま義人と優希を交互に見ると、小さな四肢で跳躍して優希の腕へと飛びつく。そして、優希が驚きの声を上げる前に肩まで一気に登った。

「ちょっと、いきなりは驚くなぁ……」

自身の肩に登った幼龍を見ながら、優希は苦笑する。そんな優希の苦笑をどう見たのか、幼龍は首を傾げた。

「中々元気が良さそうな……おっと！」

義人が口を開くと、幼龍は義人のほうへと跳躍する。義人はいきなり跳んできた幼龍を受け止めると、幼龍は義人の肩へと登った。そして楽しそうに一鳴きすると、再び優希のほうへと跳躍する。

優希は今度は慌てずに幼龍を受け止めるが、幼龍は楽しそうな様子で再び義人のほうへと跳び移った。

「キュ、キュ、キュクー」

まだ翼を使って飛ぶことができないのか、幼龍は四肢を使って義人と優希の間で跳躍を繰り返す。

体重は軽く、重くはない。ただ、楽しそうな様子で自分達にまとわりつく幼龍に対して義人は苦笑染みた笑いを漏らした。

「どうしたんだろうな?」

思わず義人がそう言うと、それを聞いた幼龍は動きを止めて寝室の扉へと顔を向ける。つられたように義人も扉へと目を向け、どうしたのかと幼龍に問いかけようとした瞬間、

「ヨシト様!」

蹴り破る勢いで、扉が開いた。

「い、いきなりどうしたんだ? 何かあったのか? 俺が何かしたか?」

扉を開けた人物……カグラの剣幕に少々驚きつつも、義人が尋ねる。カグラはその問いに答えず、警戒しながら寝室を見回す。カグラに十秒ほど遅れてサクラとアルフレッドも姿を見せ、カグラと同じように周りを見回した。

「グルルルル……」

そんなカグラ達を見て警戒したのか、幼龍が翼を広げながら威嚇の声を出す。ただし、義人と優希の後ろに隠れてだが。

「……あれ？」

カグラは幼龍の姿を見ると、険しい表情を呆気に取られたように変える。続いて視線を割れた卵に向け、さらに後方のアルフレッドへと目を向けた。

「孵化する際に、卵の内側にあった魔力が漏れただけのようじゃな。あれだけ濃密な魔力が溢れれば、勘違いするのは仕方ないわい」

目を向けられたアルフレッドが淡々と答え、そのまま言葉を続ける。

「それにしても……ふむ、見た限り産まれたのは白龍の子かのう」

いまだに警戒している幼龍を見て、アルフレッドは僅かに感嘆の滲んだ声を漏らした。

「白龍？　なんだそれ？」

アルフレッドの声に疑問を向けつつ、義人は足元で唸り声を上げている幼龍を持ち上げる。そして落ち着かせるように頭を撫でると、幼龍は警戒状態を解いて嬉しそうに一鳴きした。

「龍種にも様々なものが存在するのは知っておるじゃろう？　白龍もその中の一つじゃが、個体数が少ない龍種の中でもその存在は非常に珍しい。魔物の中では最上級に位置する龍種じゃ」
「へぇ、そりゃすごい……のか？」
「すごいも何も、儂ですら実物を見たのは初めてじゃぞ？　もしかしたら違う龍種なのかもしれんが、外見が白い龍など他に聞いたことがないわい」

そう言って幼龍を見るアルフレッドから視線を外すと、義人は腕の中に抱えた幼龍に目を向ける。

「お前すごいやつなんだな？」
「キュク？」

義人の言葉に答えたのか、幼龍は鳴き声を返す。そんな義人と幼龍を見たカグラは、気が抜けたように大きな息を吐いた。

「いきなり巨大な魔力が発生したから驚きましたよ……何か、あったのかと」
「いや、ごめん。呼びに行く暇がなくて」

左肩から右肩へと移動する幼龍が落ちないよう支えつつ、義人は小さく頭を下げる。幼龍は支えていた義人の腕に頭をこすりつけると、優希のほうへと跳躍した。

「とりあえず、割れた卵の殻は片付けて良いのでしょうか？」

メイドとして気になるのか、サクラが掃除道具を取りに行こうとする。アルフレッドはそんなサクラに苦笑を向けると、首を横に振った。

「龍の卵の殻は貴重な魔法具の材料になるし、他にも様々な用途があるからのう……片付けるのではなく、保存しておいたほうが良いじゃろう」

アルフレッドがそう言ってサクラに指示すると、それを聞いた義人は興味を惹かれたのか足元の卵の殻の欠片を拾い上げる。

「これって珍しいのか？」

「龍自体が珍しいからの。白龍の卵の殻ならば、高値で取引されるじゃろう」

「ふーん……財政が本気で危なくなったら売ろうかな、なんて」

冗談混じりに呟き、指先でつまんだ欠片をしゃがんで元の場所へと戻す。すると幼龍がその背中へと飛びつき、勢いをそのままに義人の頭へと着地した。

「おっとっと……本気で元気が良いな。雄か？」

頭に乗った幼龍を片手で捕まえ、引き剥がす。そして跳び回らないように抱きかかえると、幼龍は暴れることなく義人の腕の中で丸まった。

「抱きかかえたら大人しくなった……雌か？　いや、魔物の性別なんてわかんないけどさ」

「ふむ……どれどれ」

義人が首を捻っていると、アルフレッドが前へと歩み出る。そして幼龍を凝視すると、好々爺染みた笑みを浮かべた。

「性別は雌じゃな。いや、女の子と言うべきかの？」
「へぇ、わかるんだ？」

あっさりと断言したアルフレッドに感嘆の声を上げる義人。アルフレッドはそんな義人に対して、小さく首を振ってみせる。

「同じ魔物同士じゃからのう。種族が違っても顔を見れば性別くらいはわかるわい。ヨシト王とて、こちらの世界の人間でも顔を見れば性別はわかるじゃろ？」
「そりゃわかるけどさ、そんなものなのか？」
「そんなものじゃよ。して、名前はどうするんじゃ？」
「名前？　あー……呼ぶときに困るし、やっぱりいるよなぁ」

義人は自分の腕の中で丸まっている幼龍を見下ろし、眉を寄せた。そしてそのまま優希のほうへと振り返り、幼龍を手渡す。

「卵に魔力をあげたのは優希だし、名前を付けるのは優希に任せるよ」
「わたしに？」

幼龍を手渡された優希は、僅かに身じろぎする幼龍を見下ろしながら目を瞬かせる。それでも優希が白い繊毛に覆われた皮膚を撫でてみると、心地良いのか幼龍は小さな鳴き声を上げた。

「可愛い……ねえ、義人ちゃんはどんな名前が良いと思う？」
「俺？　いや、だから優希に任せるって」
「義人ちゃんの意見も聞きたいな」

幼龍を撫でながら尋ねてくる優希から目線を外し、義人は顎（あご）に手を当てる。

「そうだなぁ、ドラゴンだからアルフレッドみたいに日本人っぽくない名前かな？　いや、待てよ。ドラゴンじゃなくて龍として考えると日本人っぽい名前が良い気もする」

どうでも良いことだが、喋る義人の表情はいたって真面目である。義人は顎に手を当てたまま、体を丸めた白い幼龍を見て口を開く。

「雪玉……大福餅……ケサランパサラン？」

『最後のはいまいちわからんが、お主は自分にそんな名前がついて嬉しいか？』

『いえ、冗談っす。そんなわけないっす。真面目に考えてますとも』

『妾に『オウケン』などという戯けた名前をつけようとした奴がよく言うわ』

いまだに覚えたらしい不機嫌なノーレの声に、義人は思念通話で必死で謝る。それでも表面上は真剣に考えているように真面目な表情を作り、先ほどの冗談から一つの言葉を拾い上げた。

「雪、かな」

丸まった白い幼龍を見ながら、ポツリと呟く。

「ん？　呼んだ？」

それに反応する“優希”。義人は苦笑すると、片手を振った。

「優希じゃなくて雪……紛らわしいな。その龍が丸まったところを見ていたら、雪玉を連想してな？　見た目も雪みたいに真っ白だし」

紛らわしいと笑う義人に対して、優希は楽しそうに頷く。

「雪……うん、いい。見た目も白くて雪っぽいし、ちっちゃいから小雪かな？」

優希が“小雪”と呼ぶと、丸まっていた幼龍が顔を上げて首を傾げる。それを見た優希は、幼龍の頭を撫でた。

「その名前で良いの？　小雪で良いかな？」

「キュクー……キュ？」

わかっているのかいないのか、小雪と呼ばれた幼龍は翼を二回ほど羽ばたく。義人はその様子を眺めつつ、アルフレッドに話を振る。

「人間の言葉がわかってるのか？」

「どうかのう？　白龍ほどの魔物になれば、生まれてすぐでも理解しているのかもしれんが……」

「頭は良いんだ？」

「良い悪いで言えば、間違いなく良いじゃろうな。魔力も龍種らしく膨大な量を持っておるようじゃし、卵を産んだ親の龍はかなりの大物かもしれんのう」

「へぇ……」

名前が気に入ったのか、呼ばれるたびに鳴き声を上げる“小雪”を見ながら義人は少しばかり思案に耽る。

「どうしたんじゃ？」

黙りこんだ義人が気になったのか、小雪を見ながらアルフレッドが尋ねた。すると、義人は肩を竦める。

「いや、今は小さいから小雪でいいけど……大きくなってからも小雪でいいのかなー、なんて」

どうでもいいことだけどな。苦笑しながら最後にそう付け足した義人に、アルフレッドも苦笑する。

「本当にどうでもいいわい」

二人して、苦笑し合う。すると義人に名前を呼ばれたと勘違いしたのか、小雪が義人のほうへと跳躍した。義人はなんとか受け止めると、小雪の頭を軽く撫でる。

「おっとっと……いきなり跳びつくと危ないぞ？」
「キュ？」

義人の言葉に首を傾げる小雪だが、何かを訴えるように翼を羽ばたく。ついでに前脚で義人の腕を叩き、何度も鳴き声を上げた。

「鳴かれても何を言いたいのかわからないなぁ……アルフレッドならわかるか？」

そう言つつ義人が小雪を見せると、アルフレッドは小雪の鳴き声と奇妙な動作を見て微笑ましそうに笑った。

「『お腹が空いた』そうじゃ。普通なら親の龍が餌をあげるところじゃが、この子は『龍の落とし子』じゃからのう。親代わりであるヨシト王とユキ殿に食べ物を求めているのじゃろう」
「あ、食べ物か。孵化したばっかりなのに、もうお腹が空いてるんだな……って、ちょっと待ってくれ！　今、聞き捨てならないこと

を聞いた気がするんだけど？」
「はて？　何かおかしなことを言ったか？」
思い当たる節がないのか、アルフレッドは顎鬚（あごひげ）を撫でながら首を傾げる。
「親代わりって言わなかったか？」
「言ったのう」
「……何故に？」
「孵化したとき、最初に顔を合わせたんじゃろう？　鳥と一緒でな。魔物の中には『刷り込み』をする魔物がいるんじゃよ」
「『刷り込み』って、初めて見たものを親だと思うってやつか？」
刷り込み、刷り込みと呟きながら腕の中の小雪を見ると、そんな義人の言葉に反応したのか小雪が顔を上げた。そして非常に澄んだ、綺麗な緑色の目で義人を凝視する。
「キュル？」
「うっ！　そんな純真で円らな目で見られると、自分が酷く汚れてるような気がしてくるから不思議だぜチクショー！　……いや、違う違う。本当に『刷り込み』が起きているのか試さないと」
軽くボケつつ、義人は小雪を机の上に置く。
そして義人が優希と共に机から離れようとすると、小雪はすぐに机から飛び降りて義人達のほうへと駆け寄った。
「ちょ、反応が早すぎないか？　いやいや、偶然かもしれないし……よし。優希、小雪を中間に置いて同じタイミングで反対方向に移動するぞ」
「あ、うん。ほら、良い子にしてね？」

今にも跳びつきそうな小雪を撫でつつ、優希が答える。小雪は撫でられて嬉しいのか、翼を羽ばたかせながら鳴き声を上げた。

「それじゃあ、スリーカウントで同時に離れるぞ？　三……二……一……ゼロ」

ゼロという合図に合わせ、義人と優希は同時に小雪から離れる。互いに反対方向へと進み、小雪を中心にして義人と優希は五メートルほど離れた。

「キュ、キュク？」

小雪はそんな二人を交互に見ると、困惑したような声で鳴く。どちらに行けば良いのかわからないのか、義人のほうへと二、三歩近づいては優希のほうへと引き返し、優希のほうへと近づいては義人のほうへと引き返す。

「キュー……」

そのままオロオロと移動し続け、最後には困惑を通り越して泣くような鳴き声を上げた。

それを見た優希は、小雪の傍へと歩み寄って軽く膝をつく。

「意地悪してゴメンね？　ほら、おいで」

「キュク！」

声をかけてきた優希に嬉しそうな声を上げ、小雪は優希の肩まで一気に登る。そして、そんな優希達から少し離れたところで義人は壁に手をついていた。

「本当に刷り込んじゃってるよ……何あの反応？　庇護欲がものすっごい刺激されたんですけど」

壁に向かって何事かを呟く義人に苦笑しつつ、アルフレッドが歩み寄る。

「赤ん坊じゃからのう。それで、コユキの食事はどうするんじゃ？」
「ああ、そうだった。えっと、龍の赤ちゃんって何を食べるんだ？」
「基本的に何でも食べるはずじゃぞ？」
「それじゃあ食堂に行って何かもらうか……あ、カグラとサクラは警戒させちゃってごめんな？　危険はないみたいだし、今日はもう休んでくれよ」

義人は事の成り行きを見ていたカグラとサクラにそう言うと、小雪を撫でている優希へと視線を向けた。そして、小さくため息を吐く。

「アルフレッドはついてきてくれないか？　何かあったら困るし」

疲れたような義人の声に、アルフレッドは笑いながらも頷いた。

第六十六話：白龍の子　その2

翌日、義人は午前六時を知らせる鐘の音で目を覚ました。二ヶ月ほど前から始めた、志信達と行う早朝訓練に行くためである。

そしていつも通り布団から出ようとして、眉を寄せた。

「……ん？」

寝起きのためいつもより低回転な頭が、違和感を訴える。今までの、いつも通りの朝と何かが違う。

「はて？」

僅かに体が重い。そう感じた義人は風邪でも引いたのかと首を傾げ、起き上がるために布団を押し退ける。

「キュクッ」

――何か、いた。

「……」

押し退けた布団を元に戻す。押し退けたことで鳴き声上げたその“何か”を、とりあえず見なかったことにする。

「いやいや、待て俺。寝惚けてないから。幻覚や幻聴じゃないから」

それでも義人は、自分の布団の中で幸せそうに眠っている白い幼龍……小雪について大急ぎで記憶を掘り返した。

小雪が食事を所望し、それをアルフレッドから聞いた義人は食堂で何かを作ってもらうことにした。カグラやサクラもついてこようとしたが、そろそろ消灯時間である。義人達にはアルフレッドがついてくるため、護衛の必要はない。

「じゃあ、わたしが作るね？　お肉が良いかな？　それとも野菜？」

食事の時間は終わっていたので調理を担当する者がいなかったのだが、そこは優希がいたため問題は無い。時折小雪のほうから腹の虫が聞こえ、義人は『龍も腹の虫が鳴るんだな』なんて妙な関心をしたものである。

「白龍とはいえ、赤子じゃからのう。生肉などでなければ大丈夫じゃろうて」

「じゃあ、今日の調理で余ってる分のお肉や野菜を炒めて使うね。義人ちゃんも何か食べる？」

「いや、食べ物はいいや。何か飲んどくから。アルフレッドは？」

「儂はお茶でも飲むかのう」

物珍しそうに周りを見回す小雪を眺めつつ、義人とアルフレッドは食堂の椅子に座って雑談に耽る。

「しかし、刷り込みとはねぇ……」

「魔物とて生き物じゃからな。しかも龍種ともなれば、高い知性を持つ。産んだのは親の龍じゃが、育ての親は卵を拾って魔力を与えた者じゃ。魔力を与えていれば、卵が割れた時に最初に顔を合わせることになる。最初にヨシト王とユキ殿を見たこの子にとっては、

二人が育ての親というわけじゃ」

好々爺然とした笑みで小雪を見るアルフレッド。そんなアルフレッドの横で、義人は肩を竦める。

「そう言われても、魔力をあげたのはほとんど優希だしなー」
「それでも、刷り込んでしまったものは仕方なかろうて」
「……仕方ない、か。まあ、親の龍が引き取りにくるまでだしな」
「それが何ヵ月後、何年後になるかはわからんがのう」

そう言って、アルフレッドが笑う。義人は匂いに釣られて厨房へと行きたそうにしている小雪を眺めつつ、ため息を吐いた。

そこまで思い出した義人は、その後のことも次々と思い出していく。

小雪が体に見合わぬ量の食事を平らげ、食費が嵩(かさ)みそうだと肩を落としたこと。

そして、食事が終わって部屋に戻ろうとして“とある問題”が浮上したことを。

「キュー……」

食事を取った小雪は満足したのか、眠たげな声を漏らす。料理を食べるために机の上に乗っていたのだが、満腹になって今度は眠くなったのだろう。自身の体積と同程度の料理を食べたことで“文字通り”丸くなった体をさらに丸めて眠ろうとしている。

「いや、この小さな体のどこに入ったんだ？」

義人は丸くなった小雪を不思議そうに眺めつつ、リンゴに似た味のするジュースを口に含んだ。ついでに小雪の膨れたお腹を指で突こうとしたが、今にも破裂しそうなので実際に突くことはない。

そんな義人の行動と眠りかけの小雪を見て、アルフレッドは楽しそうに笑った。

「よく食べよく寝る。それが赤子の仕事じゃよ。起こすでないぞ？」

「ついでによく泣くのも赤ん坊の仕事、と。夜泣きとかするのか？」

「夜泣きは……どうかのう？　大丈夫じゃとは思うが」

「一応、餌用に果物をいくつかもらっておこう。優希、何かないか？」

義人は小雪が食べた後の皿を厨房に持って行きつつ、優希に尋ねる。それを聞いた優希は傍にあった棚を漁り、青リンゴに似た果物を取り出した。

「『カロの実』が何個かあるよ。これで良い？」

「食べられるものなら大丈夫だろ。三つぐらいもらっていくよ。あとついでに、眠った小雪を入れていく箱はないか？　腕で抱きかかえて持っていくと、起きそうだし」

「ベビーベッド？」

「そんな上等なものはないだろ？　あ、これはどうだ？」

手に持った皿を水場へと置き、義人は今まで『カロの実』が入れてあったカゴを手に取る。

カゴは蔓を使って編まれており、形は箱型。持ち運びがしやすいように取っ手もついており、大きさも小雪が体を伸ばしても大丈夫な

ほどあるため申し分ない。

「あとは座布団でも入れておけば即席ベッドになるだろ。その辺にないか？」

「休憩用の座布団ならあるよ」

そう言って優希が示した先には、木造りの椅子に備え付けられた座布団が四枚ほどある。ところどころに破れた生地を繕った跡があり、年季を感じさせる座布団だ。それを見た義人は、長年使われたであろう座布団を見ながら首を捻る。

「休憩用……借りていって大丈夫なんだろうか？　いつも使っていたものがなくなってたら、俺は嫌なんだけど」

「明日戻しておけば大丈夫だと思うけど……新品じゃなくて良いのかな？」

「むむ、たしかに使い古しの座布団よりも、新しい座布団のほうが良いか。よし、それじゃあ新しい座布団を……って、別に座布団じゃなくても良いや。丁度良さそうなやつがあればそれで」

「それじゃあ裁縫室から取ってくるね」

どこか楽しそうに言い残し、優希は食堂から出て行く。義人はそれを見送ると、カゴを手に持ってアルフレッドが座る席へと足を運んだ。すると、アルフレッドは義人を見ながら小さく笑う。

「……いきなり人の顔を見て笑うのはどうかと思うんだけど」

何かおかしいところがあるのかと言いたげな義人に対して、アルフレッドは小雪を起こさないよう声に出さず笑った。

「いやなに、先ほどは面倒そうな顔をしていたのに、きちんと小雪

の面倒を見ようとするのが微笑ましくてのう」

まるで孫の成長を楽しむ祖父のような笑みに、義人は目を逸らして頬を掻く。

「そりゃまあ、刷り込みとはいえ育ての親になるんだしな。ペット……愛玩動物ってわけじゃないし、あれほど懐いてくれる小雪を蔑ろにはできないさ」

照れ臭さを隠すように素っ気無く言い、義人はテーブルの上で気楽そうに眠る小雪の傍にカゴを置いた。そして軽く撫でてみるが、小雪が起きる様子はない。

「魔物って言っても、可愛いもんだな」

「賢そうじゃしのう」

義人はアルフレッドと適当に雑談しつつ、時間を潰す。すると手に座布団を持った優希が食堂へと戻ってきた。

「丁度良いのがあったよ。これで良いよね？」

そう言って、優希は丸型の座布団を義人へと手渡す。座布団を受け取った義人は、手触りを確認してカゴへと入れる。

「お、中々良いんじゃないか？　十分に簡易ベッドとして使えそうだ」

カゴに丁度良く収まった座布団を見て、義人は満足そうな声を漏らす。そして起きないようにゆっくりと小雪を持ち上げ、座布団の上へと下ろした。小雪は僅かに身動ぎをするが、寝易い体勢を見つ

けたのかすぐに熟睡へと戻る。

「よしよし、バッチリだな」

「ぐっすりと寝てるねー」

丸まって眠る小雪を眺めつつ、義人と優希は小声で言葉を交わす。

すると、義人は何かに思い当たったのか眉を寄せた。

「そろそろ部屋に戻るけど……小雪はどこで寝かせれば良いんだ？」

義人がそう言うと、アルフレッドが苦笑する。

「それはもちろん、ヨシト王かユキ殿の傍じゃろうな。もちろん、二人が傍で一緒に寝てあげるのが一番だと思うがのう」

否。苦笑して、爆弾を落とした。

「一緒にねぇ……一緒に？」

義人はそのまま頷きかけて、前言を反芻（はんすう）する。そして数秒間硬直すると、大声で突っ込みを入れようとした。

「義人ちゃん、大きな声を出すと小雪が起きちゃうよ？」

だが、それは優希の言葉で停止する。

「う、ん……そう、だな。いや、ごめん。アルフレッドが変なことを言うから」

「はて？　“変”とは？」

義人の狼狽を楽しそうに眺めつつ、アルフレッドは惚けてみせた。
義人はそれに対する説明を口にしようとするが、すぐに口を閉じる。
「いや、やっぱり何でもない。うん、何でもない。とにかく、小雪をどうするかを決めようじゃないか」
平静を装った義人がそう言うと、優希が頬に手を当てながら首を傾げた。
「義人ちゃんかわたしの部屋で寝かせれば良いんじゃないかな？」
「やっぱりそうなるか」
「それとも……」
頷く義人に、優希は楽しそうな笑みを向ける。
「アルフレッドさんの言う通り、一緒に“寝てあげる”？」
一緒に寝るではなく、寝てあげるという言葉に義人は一瞬頷きかけた。しかし、頷こうとした首を無理矢理横に振る。
「……いや、それはまずいだろ。色々と」
「昔は一緒にお昼寝したこともあるのに？」
「それはお互いに小さい時のことだろ？　小雪もぐっすり眠ってるから朝まで目を覚まさないだろうし、今夜はひとまず俺の部屋で寝かしとくよ。何かあったらノーレに聞くし、な？」
「んー、残念」
焦りながら言い募る義人を見て、優希は渋々首肯した。アルフレ

ッドそんな二人の会話を楽しげに聞いていたが、二人を促すように小さく咳払いをする。

「そろそろ眠らねば、明日起きるのが辛くなるかもしれん。何かあれば遠慮せずに儂を起こして構わんから、ひとまず部屋に戻らんか？」

「それもそうだな。それじゃあ、今日のところはここまでにしよう。とりあえず今日のところは俺の部屋で寝かせて、何もなければ明日は優希の部屋で寝かせてみるか」

そう言って、義人は小雪が寝ているカゴを持ち上げた。

その後は寝室に戻って机の上にカゴを置き、眠りについた。そこまで思い出した義人は、机の上に置いたカゴを一瞥（いちべつ）して小雪へと視線を落とす。

「なんで俺の布団に潜り込んでるんだか。あー……どうすっかねぇ。志信のところに行く前に、優希の部屋に寄って渡してくるか？　でも起こすのも悪いしなぁ。まだ寝てるようだし、このまま寝かせておくか？」

スヤスヤと眠っている小雪を見ながら、義人はどうするべきか思案する。

「カゴのほうで寝かせて、優希の部屋に連れていくか？　……うん、そうしよう」

即断即決して、義人は小雪をカゴに移動させるべく持ち上げた。

「キュク？」

それと同時に、小雪が目を開く。緑色の透き通るような目で義人の姿を認め、今度は嬉しそうな声を上げる。

「キュクッ」

「ああ、うん。おはよう」

義人はそれを挨拶だと勝手に解釈すると、ひとまず挨拶を返した。そして、小雪をベッドへと下ろす。

「キュー、キュル？」

すると小雪は周りを見回し、首を傾げた。その動作を見た義人は、小雪の頭を撫でながら口を開く。

「優希はここにはいないんだ。もう少ししたら会えるからな。あ、それとも今会いたいのか？」

言葉が通じるのかわからなかったが、義人はとりあえず話しかける。すると小雪は小さな翼を二回羽ばたかせた。

「え？　あとでいいのか？」

「キュ」

その動作を適当に解釈して尋ねると、小雪は肯定するように鳴き声を上げる。義人は感心したように何度も頷き、小雪に向かって右手を向けた。

「俺は今から志信……友達と一緒に体を動かしてくるけど、小雪も来るか？」
「キュク！」

元気良く一鳴きすると、小雪は義人の腕を駆け上がって頭へとよじ登る。そんな小雪に対して、義人は苦笑した。

「まずは着替えるから、頭の上に乗られても困るんだけどな」

そう言って優しく小雪を下ろし、義人は着替えに取り掛かる。そして志信にどう説明しようかと考え、小さく笑った。

第六十七話：製鉄所

卵が孵って三日経った頃、義人は最近量が増え始めた書類を片っ端から片付けていた。時刻は午後三時。午前九時から仕事に取り掛かり、義人は昼食を取った後も執務用の机に座って書類に目を通し、王印を押し続ける。

疑問に思うことがあればカグラに尋ね、傍らで楽しそうに裁縫をしている優希やその膝の上で寝ている小雪を時折眺め、小休止の際にはサクラにお茶を淹れてもらう。

召喚された頃に比べれば仕事を片付けるペースも早くなっており、無駄も少なくなっていた。しかし今は農作物を収穫する時期のため、それに合わせて税金や年貢の納付が行われる。そのため、それらに関する書類があちこちから義人へと回ってきていた。

もちろん、すべてが義人の元へと集められるわけではない。各分野専門の文官が存在する以上、ほとんどの仕事は彼らによって片付けられる。それでも義人が決定しなければならない項目が数多く存在するのもまた事実であり、日を追う毎に増え始めた書類を前にした義人は小さくため息を吐いた。

「国の予算が潤うとはいえ、中々大変だなぁ……」

右手に持った書類……各町村に派遣してある屯田兵からの報告書を速読しつつ、義人は左手で湯飲みに手を伸ばす。

「あ、すぐにお淹れしますね」

それを見たサクラが、飲み易いよう適度に冷ましてあるお茶を湯飲みに注いだ。

「ありがとう、サクラ」

義人は書類から目を離し、サクラに対して礼を述べる。そして再び書類に目を落とし、お茶を飲みながら書類を大雑把に読んでいく。

専門的な知識がほとんどないため、義人が行うのは書類内容の確認が主である。それでもおかしなところや計算が間違っているところはすぐに発見でき、傍で仕事をするカグラを頼れば大抵のことは片付く。

現在までの収穫量から例年に比べて豊作であるという報告に頬を緩めつつ、その収穫量を元にどれだけの年貢が納められ、どれだけの税収になるか計算された書類を手に取る。

そして暗算と手計算で本当に合っているのかを計算し、眉を寄せた。

「微妙に数字が違うな……カグラ、この書類は担当に返しといて」

念のためもう一度計算して、間違っていることを確認する。計算を間違えたのか、それとも故意に間違えたのかはまだわからない。

書類に書かれた計算結果は義人の計算結果よりも僅かに多いため、おそらく前者だろう。これで少なかったらその差分をどこにやったのかと詰め寄らなくてはならないが、担当は横領をするような人物ではないので書類を返すだけに留める。

電卓などがないため、計算するのは全て人間の手で行う。だから失敗して良いというわけではないが、毎日数百数千の計算をする以上はどうしても計算間違いが起きてしまう。さすがに数十年もの経験を持つ者なら間違えることはないが、経験の浅い若い文官の中には時折計算間違いをする者がいる。時間があるのならば計算した後にもう一度計算して確認するのだが、忙しい時期はどうしてもそれが疎かになってしまう。

義人は他に計算間違いが起きないよう祈りつつ、次の書類に手を

伸ばした。

「ふむふむ、収穫の時期に合わせて魔物の活動が活発になっていると。面倒だなー」

以前から魔物による農作物の被害があったが、この時期はそれが顕著になる。今年は派遣した屯田兵のおかげで被害が少ないらしいが、それでも魔物退治のために何部隊かが城を出払っている。

ちなみに今日は騎馬隊と第二魔法剣士隊、第一歩兵隊と弓兵隊が魔物退治に出かけていた。機動力がある騎馬隊や魔法剣士隊は離れた場所へと赴き、機動力が少ない歩兵隊などは近辺の魔物退治を行う。

それに対して、義人はため息を吐いた。

「全員が魔法を使えたらなぁ……」

小さく呟き、頭を振る。もし全部隊が魔法使いか魔法剣士なら、戦力としては今の何倍にもなるだろう。『強化』を使えば馬の全力疾走にやや劣る程度の速度で移動することもでき、攻撃魔法を使えば下級の魔物程度なら楽に倒せる。だが、現実問題魔法を使える者は限られている。魔力を持って生まれ、魔力を操ることができなければ魔法は使えないのだ。

益体もない考えだと、義人は苦笑する。そして次の書類に手を伸ばして、小さな声を漏らす。

書類に書かれてあったのは先日のたたら吹きに関することで、城下町に外れにある製鉄所で試しに行おうと考えていたのだが、相手側が難色を示していると書かれてあった。

そして、難色を示されたことに義人は小さからぬ驚きを覚える。

一応は依頼という形を取ったが、義人発案の依頼だ。依頼ではあるが、王命に近い。召喚国主制にして王の命には盲従するこの国の

在り方を考えれば、それに難色を示されたことに驚き、それと同時に義人は密かに喜びの声を上げた。

「王様の命令を拒否してくれるなんて、嬉しいじゃないか」

本来なら喜ぶところではないが、義人としては非常に嬉しい。何の理由があるのかわからないが、王命に難色を示す者がいるなど興味を惹かれる。

「でも、これを拒否されるのは困るな……」

どういう風に難色を示したのかは書かれていない。書類を書いた者は義人が他の製鉄所に頼むと思ったのだろう。しかし、義人は机の上に乗っている書類の量を確かめると、口元を笑みの形に変えた。

たしかに、他にも製鉄所は存在する。この国の貿易の目玉である鉄を製鉄するための施設なら、城下町の中でも三ヶ所はある。だが、義人としてはその製鉄所に強く興味を惹かれた。

「よし、さっさと片付けてその製鉄所に行ってみるか」

思い立ったら即実行する。

急げばあと一時間程度で終わるだろう。そう判断した義人は、仕事のペースを上げるべく次の書類へと手を伸ばした。

「製鉄所の視察、ですか？」

今日の分の仕事を片付けるなり言われた義人の言葉に、カグラは眉を寄せた。今度は何をするつもりですかと言わんばかりのカグラの目つきに、義人は冷や汗をかきつつも身振り手振りを加えながら説得にかかる。

「ああ。どんな施設なのか見てみたいし、どんな人が働いているのかも見てみたいんだ」

どう言いくるめようかと考えながら義人がそう言うと、カグラは僅かに黙考して口を開く。

「……ヨシト様が行きたいと仰るのなら、わたしに止めることはできません。今から行かれるのですか？」

「え、あ、うん。できれば」

いつもなら危険がどうとか軽率な行動は慎んでほしいと言うはずだが、何故か頷くカグラに義人は毒気を抜かれる。

断られたら以前のようにアルフレッドに頼もうと思っていたのだが、カグラは断らない。以前カグラに黙って城下町に行ったことがあったので聞いたのだが、カグラはそんな義人を見つめると、どこか縋（すが）るように言葉を続けた。

「わたしもご一緒したいのですが……よろしいですか？」

「別に良いけど……あー、どうかしたのか？」

義人は強硬に反対されると思っていたのだが、あまりにもすんなりとカグラが頷いたことに疑問を示す。しかし、カグラは義人の言葉に小さく微笑んだ。

「ヨシト様が外出されるのなら、それを守るのもわたしの役目です

よ？」
「……そう、か」
カグラの言葉に内心首を傾げつつも、義人は一応納得したように頷いてみせる。
以前なら『前もって言ってください』、『王が軽々しく外出するなど』と小言の一つでも言ったはずだ。
それがなかったことに安堵しつつも、腑に落ちないものも感じる。
「どうかしましたか？」
そんな義人の内心を見透かしたのか、カグラが不思議そうな顔で声をかけた。義人は反対されないのならそれで良いかなと自分に言い聞かせ、苦笑混じりに手を振る。
「なんでもないよ。カグラのほうは仕事は大丈夫か？」
そう言いつつカグラ用の机の上を見てみれば、書類はほとんどない。それでも数枚の書類があるが、時間はあまりかからないだろう。
「外出から戻ってからでもすぐに終わりますから、気にしないでください。それでは外出の準備をしてきますね。集合は城門前でよろしいですか？」
「あ、ああ」
どこか嬉しそうなカグラの様子にやや圧されながらも、義人は頷いてみせる。そしてカグラが執務室から出て行くのを見送り、その姿が見えなくなってから湯飲みへと手を伸ばした。
「なんだろうな」

「さあ……わたしもあんなカグラ様は初めて見ました」

義人の疑問に追従するサクラ。カグラと長年の付き合いがある彼女も疑問に思ったらしく、義人と一緒に首を傾げている。

「ねえ、義人ちゃん」

そんな二人の横で、優希が口を開く。膝の上に小雪を乗せ、目線は執務室の扉に向けたままで声をかけた。

「わたしもついていって良いかな？」

「優希も？　でも、そろそろ夕食の準備の時間だろ？　それに、これは一応公務の一環だからなぁ……」

以前のように城下町の視察程度ならば良いが、今回は以前とは状況が異なる。

お忍びではなくこの国の王として出かける以上、何があるかわからない。相手側が難色を示しているのなら、何かしらの交渉をすることになるだろう。他の製鉄所を利用すれば良いだけの話だが、義人としては難色を示した相手に興味が湧く。

「そっか、残念」

義人がどうするか迷っていると、それを見た優希はすぐに身を引いた。そして、小さな笑みを向ける。

「じゃあ、晩御飯を作って待ってるね？」

「ん……期待しとくよ」

優希があっさりと引いてくれたことに感謝しつつ、義人は椅子か

ら立ち上がった。傍らのノーレを手に取り、執務室の入り口へと向かう。そして扉を開け、優希とサクラの方に顔を向けた。

「それじゃあ、いってきます」

「いってらっしゃい」

小さく手を振る優希と、頭を下げるサクラ。小雪は相変わらず優希の膝の上で眠っており、反応はない。

そんな光景に小さく笑いながら、義人は執務室の扉を閉めた。

ノーレを片手に城門前へと移動した義人は、背筋を伸ばして直立する兵士に苦笑する。楽にしてくれと声をかけるが、兵士が姿勢を崩すことはない。その堅苦しさからどこの部隊の兵士かと気になったが、それを遮るようにカグラが姿を見せた。

「すいません。お待たせしました」

恐縮そうに頭を下げるカグラに軽く手を振り、義人は周りを見回す。

「あれ？　近衛隊は？」

「いませんけど……どうしてですか？」

「いや、準備をしてくるって言ったから、てっきり護衛の兵士を集めに行ったのかと思って」

「なるほど……しかし、今回の護衛はわたしだけです」

「あ、そうなのか？」

「はい。何分急なことでしたし、わたしも戦闘に支障が出ない程度には魔力が回復しましたから。そうなると、他の兵士は邪魔になるだけですので」
「邪魔って、どういう意味で？」
思わず気になった義人が尋ねると、カグラは頬に手を当てて苦笑する。
「“味方の被害”が出ると困りますから」
サラリと物騒なことを告げるカグラに、義人は顔の筋肉が硬直するのを感じた。そして、背中に背負ったノーレに思念通話を飛ばす。
『ノーレ、ノーレ！　今の言葉はマジなのか？』
『マジ？』
『本気、本当かってことだ』
『ふむ、たしかに完全に魔力が回復していないとはいえ、巫女ほどの魔力を持った者が本気で暴れれば……』
『暴れれば？』
『……まあ、世の中には知らぬほうが幸せなこともあろうて』
『うおぉいっ！　逆に怖いっつーの！』
言葉を切ったノーレに突っ込みを入れる義人。するとノーレは五月蝿そうに鼻を鳴らした。
『簡単なことじゃ。『強化』だけで戦うにしても攻撃魔法を使うにしても、味方が多ければそれだけ動きが、攻撃の幅が制限される。それならば、初めから一人で護衛したほうが良いじゃろう？』
『良い、のか？』
『並の者ならば数が多いほうが良いのじゃろうが、ある一定よりも

上の者になれば逆じゃな。魔力が多ければその分『強化』の効果も上がり、攻撃魔法の威力や範囲も大きくなる。しかし、仲間ごと攻撃するわけにもいかんじゃろ？』

『そりゃそうだけどさ……カグラが本気で暴れたら、そんなに危険なのか？』

『そうじゃのう……“本気”ならあのエルフでも勝ち得んな。エルフと仏頂面、ついでにメイドの三人でかかればあるいはといったところじゃ。もっともあくまで本気……魔力が完全に回復していたらの話じゃぞ？』

『今のままなら？』

『魔法剣士“隊”と互角……いや、巫女が有利か？』

「さすがにそれはないですよ！」

義人とノーレが会話していると、突然カグラが大声を上げる。義人が思わず顔を向けると、カグラは怒りか羞恥かで顔を赤くしていた。

「……俺、口に出してた？」

“聞きました”。思念通話の有効範囲内なら、聞き取れますから」

僅かに頬を膨らませるカグラを前に、義人は空中へと視線を投じる。微妙に義人の足が震えているのは、きっと気のせいだろう。

「護衛対象ごと敵を吹き飛ばすなんてことは……」

「しませんよ！　ヨシト様の安全が第一ですから！」

「はぁ」

慌てるカグラを天辺から爪先まで眺め、義人は気のない声を漏らす。

巫女服という外見を除けば、普通の女の子にしか見えない。魔法

というものが存在する時点で外見などは関係ないかもしれないが、それでも目の前のカグラが戦う姿を想像して義人は眉を寄せた。

『えっと、マジで？』

カグラが魔法剣士隊を相手に立ち回る光景を想像して、ノーレへと再度話を振る。

『マジじゃ』

「……まあいいや。とりあえず製鉄所に行こう」

今までも様々な話を聞いていたが、義人としては実感が湧かない。それでも本当なのだろうと自分を納得させ、とりあえず製鉄所に向かうことにした。するとそんな義人の隣にカグラが並ぶ。

「しかし、製鉄所を視察してどうされるおつもりですか？　しかも、たたら吹きの実験を打診して断られたところですよね？」

視察するとしか聞いていないカグラが首を傾げ、義人は小さく笑う。

「今度は直接頼もうと思うんだ」

「たたら吹きをですか？　それならば他の製鉄所もありますが……」

カグラは義人の言葉に難色を示すが、それに対して義人は肩を竦めて見せる。

「直接頼んでも無理だったらそうするさ。でも、王命を断ったのがどんな“人”かも見てみたいし、話をしてみたい」

義人がそう言うと、カグラは驚いたように目を見開く。そして、慌てたように口を開いた。

「ヨシト様は、何故城下町の外れにある製鉄所を選んだのですか？」

「何故って……適当に目についたからだよ。城下町の外れなら大量の木炭を運び込んだり、大量の木炭を使っても住民から苦情が出ないかなー、なんて思ったんだけど」

事実、その製鉄所を選んだ深い理由があるわけではない。ただ単に、製鉄所を探して一番最初に目についたのがそこだったからだ。そこまで言うと、カグラはため息に似た息を吐きながら僅かに肩を落とす。

「その製鉄所の責任者は、人ではありません。ドワーフです」

ドワーフという言葉に、義人は目を丸くする。

「ドワーフ？　ドワーフって魔物の？」

「はい」

短く答えるカグラ。義人は軽く頭を掻きながら、アルフレッドの顔を思い浮かべた。

「アルフレッド以外にも魔物が働いてるんだなぁ」

「ドワーフも高い知性がありますし、アルフレッド様が宰相を勤めるこの国だからこそ可能なことですね」

「へぇ……」

カグラの言葉に、義人は目を細める。

「魔物か……魔物、ね」

そして、カグラにも聞こえないほど小さく呟いた。

第六十八話：ドワーフの鍛冶師

義人達はなるべく人目を避けながら城下町の外れまで足を運んでいた。しかし、街中で誰一人として遭遇しないというのは不可能である。

それでもなるべく人が少なそうな道をカグラが選んでいたのだが、どうしても人目につく。

すれ違う人々が時折振り返るのは、おそらくカグラに見覚えがあったからだろう。中にはカグラが付き従う義人を見て、慌てて膝をつく者や平伏する者もいる。歳を重ねた者ほどそれが顕著で、義人としては祖父や祖母ほどの年配の者に平伏されるのは非常に心苦しいものがあった。

「んー……顔を隠すものでも持ってくれば良かったかな？」

逃げるように歩く速度を速めつつ、義人は呟く。逆に注目を浴びそうなのですぐに内心だけで却下したが、道の脇でいきなり平伏されるのは勘弁願いたい。

いっそ馬車でも使えば良かったかと僅かに後悔するが、そこまで移動距離がない上に馬車は乗り心地が悪いので使う気が起きなかった。

義人は自分から斜め後ろに一歩引いた位置で歩くカグラに視線を向け、ため息の混じった息を吐く。

「どうかしましたか？」

そんな義人の様子に、カグラは不思議そうな顔をした。

一瞬、義人のため息を聞いたカグラの表情に僅かな怯えのような色が走ったが、義人がそれに気づく前に“それ”は霧散する。

「いや、やっぱりカグラは有名人だなーと思って」

世間話のように話しつつ、義人は道行く人々を再度観察した。

やはり『召喚の巫女』であるカグラは有名らしく、道行く人のほとんどが反応を示す。

紅白の袴姿をした者など、この国ではカグラ一人しかいない。そして、そのカグラが付き従う者もこの国では一人しかいない。

「やっぱり顔を隠してくれれば良かったかな？」

先ほど内心だけで却下したことをもう一度口にして、義人は首を捻った。防犯、防衛上の問題として顔を隠すべきかと考えたが、今となってはすでに遅い。

「布で顔を隠す……いや、お面とか？　狐の面とか被ってたら格好良くね？」

義人は狐のお面を被った自分の姿を想像してみるが、非常にシュールな光景である。王剣であるノーレを背負い、狐のお面を被った自分。それを想像した義人は『やっぱりこのままで良いや』と首を振った。

「必要ならば調達してきますが？」

「いや、いいっす。いらないっす」

体育会系染みた台詞で断りながら、義人は背中のノーレを背負い直す。

腰に提げるとバランスが悪かったので鞘に革で作った帯を取り付けてみたのだが、中々に背負いやすい。抜くのに少々難があるが、

それは慣れ次第でどうにでもなるだろう。
そうやって義人がカグラと世間話をしながら歩いていると、遠目に少し大きな建物が目に入った。周囲の家から三十メートルほど離れた場所に建てられ、大きさは城の横に作られた魔力回復の施設と同程度。煉瓦造りの壁に覆われ、屋根には何箇所か煙突が設置されている。それに気づいた義人は、確認の意味も込めて口を開いた。

「お、あそこか？」

疑問を含んだ義人の声に、カグラは頷きを返す。

「そうですね。一応先に兵を向かわせておきましたが……」
「兵を？　ああ、準備っていうのは訪問を伝えることか」

城を出る前にカグラが言っていたことを思い出し、義人は納得する。しかし、先に向かわせたという兵士の姿が見えず、義人は首を傾げた。

「いないぞ？」
「……いませんね」
「中にいるんじゃないのか？」
「訪問の意を伝えたら外で待機しておくように言ったのですが……」

すでに製鉄所の目の前まで移動したが、兵士の姿はない。義人はカグラと顔を見合わせるが、見合わせた瞬間カグラは気まずそうに目を逸らした。

「ん？　どう……」

どうした、と言おうとした瞬間、製鉄所の正面にある扉が荒々し

く開く。そして中から兵士の格好をした者が三人ほど、転がるように飛び出てきた。

「下がってください！」

それを見たカグラが瞬時に前へと出る。義人はカグラの声に押されるように後ろへと下がり、背中のノーレの柄へと手を伸ばした。しかし、転がり出てきた兵士はそのまま地面へと倒れ、動かなくなる。

「……なんだ？」

動かなくなった兵士達を見て、義人が小さく呟く。カグラは油断なく、ゆっくりと兵士達へと近づいて兵士の様子を窺った。

「どうやら気絶しているだけのようです。ひとまず手当てを」

「なんだぁ？　まだ他にいやがったのか？」

気絶した兵士を介抱しようとしたカグラの声を遮るように、大きく低い声が響く。それを聞いたカグラは再び警戒するように構えると、声がした方向……開いた扉のほうへと目を向けた。

「ったく鬱陶しい……ん？　城の兵士じゃねえな。誰だテメエら」

不機嫌そうな声を出しながら、声の主が扉から出てくる。

身長は優希やサクラよりも小さく、百三十センチ程。しかしそれに不釣合いなほどに筋骨隆々な体は、身長以上に大きく見える。その上目つきは鋭く、無精なのか黒い髪はボサボサで、口周りには髭が生えていた。

「ドワーフ……」

元の世界で遊んだロールプレイングゲームでも登場するその姿を見て、義人は無意識に声を出す。それを聞いたドワーフは不機嫌そうに眉を寄せ、噛み付くように口を開いた。

「ドワーフだったら何だって言うんだ？　文句でもあんのか？」

怒気のこもった声に対して、義人は首を横に振る。

「いや、本物が見れてちょっと感動したな、と」

「は？」

怪訝そうな表情をするドワーフだが、いまだに警戒しているカグラを見て僅かに表情を変えた。少し驚いたようにカグラと義人を交互に眺め、無精髭が生えた顎へと手を伸ばす。

「その格好……そっちのは『召喚の巫女』か。ということは、テメエが……」

「テメエ？　なんですかその口の利き方は！」

“テメエ”と聞いた瞬間、今まで様子を見ていたカグラが遮るように大声を上げる。さっきのドワーフ以上に怒気がこもった声は、その感情を向けられたドワーフよりもカグラの後ろにいた義人のほうを硬直させた。

「ちょ、カ、カグラさん？　何もそんなに怒らなくても」

あっさりと沸点を超えたカグラと今まで聞いたことないほどの大声に戦々恐々しつつも、義人は嗜めるように声をかける。だが、そ

の言葉を聞いたカグラはドワーフから義人へと視線を移すと義人のほうへと詰め寄った。

「何を言ってるんですか！？　ヨシト様はこの国の王なんですよ！？　それを“テメエ”呼ばわりするなど！」

「わかったから詰め寄らないでくれ。いやむしろ詰め寄らないでください」

至近距離まで詰め寄ったカグラの肩を押さえつつ、義人は割と本気で“懇願”する。しかしカグラは納得がいかないらしく、さらに言い募ろうと口を開いた。

「しかしですね！」

「俺は気にしないから！　だから落ち着いてくれ！」

言い足りなさそうなカグラを大声で遮り、義人は落ち着くように促す。カグラは納得いかないと言わんばかりの表情をしていたが、なんとか落ち着いたのか義人から身を引いた。

「すいません。取り乱しました」

「いや、別に良いけどさ……」

落ち着いたらしいカグラにそう言うと、義人は内心だけで首を捻る。自身に対してこういった態度を取った者がほとんどいなかったため、カグラの反応に対してどういった言葉をかければ良いのかわからない。少なくとも国王に対して通常取り得る態度ではないことはわかるが、義人としては大して気にすることでもなかった。

そんな義人とカグラの様子を見ていたドワーフは、少し思案して製鉄所の入り口に目を向ける。

「とりあえず、中に入りな。外で騒ぎ続けるわけにはいかんだろ？」

ドワーフの言葉に、義人とカグラは目を合わせて頷いた。

製鉄所の中へと足を踏み入れた義人達は、ドワーフの案内に従って休憩に使うための部屋へと案内された。義人が案内された部屋で椅子に座ると、カグラは警戒のためかその後ろに立つ。それを見たドワーフは、先ほどよりも険を和らげた顔で義人に視線を向けた。

「ちょっとここで待っててくんな。若いモンに、さっき叩きのめした兵士を介抱するように伝えてくるからよ」

それだけを言い残し、ドワーフは足早に部屋から出て行く。カグラはそれを不満そうに見送り、その圧力を背中越しに感じた義人は苦笑しながら振り返った。

「だから落ち着けって。別に俺は気にしないし、俺がそういう性格だっていうのはカグラだって知ってるだろ？」

「ですが……」

「向こうだって、さっきよりは態度が柔らかくなったじゃないか」

「そういう問題ではありません。使いの兵士を叩きのめしたというのも問題です」

「何か叩きのめす理由があったのかもしれないだろ？」

義人がそう言うと、カグラは不満そうに眉を寄せる。それを見た義人は、話題を逸らすべくからかうように口を開いた。

「それにしても、カグラもあんな大声で怒ることがあるんだなー。

驚いたよ」

苦笑混じりの義人の言葉に、カグラは一瞬言葉が詰まる。義人は今までの経験から『怒られるかな?』と内心身構えるが、その予想に反してカグラは義人から目を逸らした。

「そ、その……あれは……えと……」

そして、小声で不安そうに呟く。不安のためか羞恥のためか、頬が僅かに赤い。義人は予想外のカグラの反応に、思わず焦りの感情を覚えた。てっきり『何を言ってるんですか』と呆れた顔をされるか、無言の笑顔で威圧されると思っていたためにその反動は大きい。

「い、いや、ごめん、冗談だから。だから気にしないでくれよ」

どこかうろたえたようなその姿に、義人は一ヶ月ほど前の、“あの夜”のカグラを思い起こす。しかしすぐさま思考から追い出し、場を取り繕うように乾いた笑いを表情に貼り付けた。

「そ、それにしてもドワーフが想像通りの姿で驚いたよ」

「そう、ですか……」

「えっと、はい。そうなんです」

いつもと反応が違うカグラに、義人は思わず会話を終了させてしまう。そしてそのまま口を閉じると、義人とカグラは互いに目を合わせた。

「……」

「……」

会話もなく、互いに無言で見詰め合う。

「……アンタら、何してんだ？」

そんな二人に声がかけられ、義人は弾けるようにそちらへと顔を向けた。視線の先にはドワーフが怪訝そうな顔で立っており、義人は慌てて口を開く。

「いや！　なんでもない！」

慌てる義人を怪訝そうに眺めつつ、ドワーフも椅子へと座る。それを見た義人は気持ちを切り替え、椅子に座り直した。

「それで、一国の王様が何の用があってこんなところにきたんだ？」

敬語を使うわけではないが、先ほどよりは言葉が柔らかい。それでも義人は後ろのカグラから発せられるチクチクとした怒気に内心冷や汗をかくが、表面上は平静を装う。

「この前この製鉄所に頼んだことについて、ちょっと聞きたいことがあって来たんだ」

「この前？　……ああ、あの“たたら吹き”とかいう製鉄法か」

「そうそう。それで……っと、そういえば名前を聞いてなかった。俺は滝峰義人って言うんだけど、名前を聞いても良いかな？」

話を進めようとするが、相手の名前がわからず義人が尋ねる。すると、ドワーフは僅かに眉を寄せた。

「……俺はローガス。タキミネヨシト、か。『召喚の巫女』が傍にいるってことは、この国の王なんだよな？」

「一応」
「証拠は？」

ドワーフ……ローガスの言葉に、義人は僅かに考え込む。しかし、すぐに背負っていたノーレの鞘をつかんで引き寄せるとローガスのほうへと向けた。

「この王剣が証拠だな。俺以外には抜けないらしいし」

義人がそう言うと、ローガスはノーレを手に取る。その際カグラが警戒するように義人の横へと移動するが、ローガスが呆れたような目をカグラへと向けた。

「そう警戒しなさんなって。その辺の兵士ならともかく、国王を叩きのめしたりはしねえよ」
「兵士を叩きのめすだけでも、城に連行する理由になるんですが？」

威嚇するようなカグラの言葉を無視して、ローガスはノーレの柄を握る。そして剣を引き抜こうとするが、少しも抜くことができず感嘆したように目をノーレへと向けた。

「こりゃ本物だな……それにしても、“お前さん”は誰だ？」

不思議そうな顔をするローガス。

『力任せに引き抜こうとしよって……もっとも、一目見ただけで妾の存在に気づいたのはさすが鍛冶に秀でたドワーフといったところかの』

義人はローガスの言葉の意味を理解しかねたが、次いで響いた不

機嫌そうな声に納得した。

「お褒めに預かり光栄だな。そんで、なんだこいつは？」

ローガスは納得した義人に目を向け、その視線を受けた義人は苦笑混じりに答える。

「そいつはノーレ。この王剣に埋め込まれた擬似人格……だったっけ？」

義人は以前ノーレ自身から受けた説明を思い出しつつ、自信なさげに答える。その説明を聞いたノーレは、ローガスにも聞こえるよう思念通話を発した。

『そうじゃ。妾は『風と知識の王剣』。今はノーレという名があるがな』

「擬似人格？　こいつが？」

『……何か文句があるのか？』

ローガスはノーレをマジマジと眺め、鼻を鳴らす。

「擬似人格、ねぇ。まあ、アンタがそう言うのならそれでいいがな」

義人はどこか引っかかるようなローガスの口ぶりに疑問を覚えるが、それを遮るようにノーレを手渡してくる。義人はノーレを受け取ると、とりあえずノーレを引き抜いた。

「引き抜けるのは俺だけだし、俺が王ってことを信じてもらえるか？」

「ああ。そんな剣を作るのは現代じゃ無理だしな。それで、話は戻

すが何の用だ？」

話が元に戻ったことを確認すると、義人は肩を竦める。

「さっきも言ったけど、“たたら吹き”についてだよ。実践するのに難色を示しているって聞いて、その理由を聞きにきたんだ」

「……それだけか？」

「それだけって？」

「その理由を聞くためだけに、一国の王がわざわざ足を運んだってのか？」

ローガスは懐疑的な視線を義人に向けるが、義人としてはそれ以外に理由がない。

「そうだけど……何かおかしいか？」

義人が不思議そうな顔をすると、そこに嘘はないと判断したローガスがカグラへと同情的な視線を向ける。

「アンタ、こんな王を補佐するなんて苦労するだろ？」

「それがわたしの役目ですから」

カグラはローガスの言葉に微笑みで返す。ローガスはため息を吐くと、足を組んで義人へと再度顔を向けた。

「ったく、当代の王は変わりモンだな」

「褒め言葉と解釈するけど……とりあえず、難色を示した理由を教えてもらっていいか？」

義人がそう言うと、ローガスは懐から数枚の紙を取り出す。そし

てその紙を義人に差し出すと、読むように促した。

「これは？」

「それはアンタのところから送られてきたもんだ。その“たたら吹き”とかいう製鉄法と、それに関する“命令書”だよ」

命令書と聞いて、義人は紙面に目を通していく。“たたら吹き”に関しては義人と志信が書き上げたものだが、“依頼書”については臣下に任せていた。だが、目の前の“命令書”には一方的な命令が書かれている。

「俺は、人間に上から指図される覚えはねえ。だから“命令”なんぞ聞かん。さっきの兵士共もそうだ。ここに来るなり、偉そうに命令口調で話しやがって」

「だから叩きのめしたと？」

「ああ。うちの若いモンが暴れないうちにな。たしかに俺は魔物で、ここで働いている奴らは町のゴロツキみたいなもんさ。だが、だからといって一方的に命令をされる覚えはねえよ」

悪びれずに答えるローガスに、義人はため息を吐く。

「まったく……“依頼書”を送ってくれって言ったのに何やってるんだか。いや、中身に目を通さなかった俺が悪いか」

義人は困ったように目を閉じると、ローガスの言葉に同意するように頷いた。カグラは何も言わず、義人のすることを黙って見ている。

「言い分はもっともだ。アンタみたいな人……いや、違うか。魔物がいてくれて嬉しいよ」

ローガスの言葉を全面的に肯定し、義人は目を開けて表情を引き締める。

「それじゃあ、改めて“お願い”したい。俺に、手を貸してください。お願いします」

そう言って義人は姿勢を正し、迷いなく頭を下げた。それを見たローガスは驚きで僅かに目を見開き、頭を下げた義人を数秒間見てから視線を逸らす。

「……頭を上げな。仮にも一国の王が、そう簡単に頭を下げんじゃねえ」

どこか不機嫌そうな声に対して、義人は下げた頭を僅かに上げた。

「一国の王って言ってもアンタの、ローガスの言う通り仮の立場なんだ。それに、ドワーフの目から見れば俺はまだ生まれたてのガキみたいなもんだろ？　そして、俺は“頼む”側の人間だ。頭を下げるのは当たり前だよ」

頭を下げたままでそう言うと、ローガスは何も言わずに立っているカグラへと呆れたような視線を向ける。

「こんな変わり者の補佐をするなんざ、苦労するだろ？」

ローガスは、どこか楽しそうな声色に同情を混ぜてカグラへと尋ねる。カグラはその問いに対して、先ほどと同じように微笑んだ。

「慣れると楽しいんですよ」

「そうかい」

言葉の通り、カグラは楽しそうに答える。義人は頭を下げたままで二人の会話を聞き、会話の切れ目に顔を上げた。

「それで……答えは？」

僅かに緊張しつつ尋ねると、ローガスはカグラから義人へと視線を移す。そして少しばかり考え込んだ後、髭で覆われた口元を笑みの形に吊り上げた。

「命令ばっかりの気に食わねえ王様ならお断りだが、お前さんみたいな変わり者の“依頼”なら受けてやるよ。報酬はちゃんともらえるんだろうな？」

軽口のようなローガスの言葉に、義人は笑みを浮かべて頷く。

「もちろんだ。上手くいったら特別手当てもつけるよ」

「なら交渉成立だ。明日から作業に取り掛かるから、様子を見に来るなり人を寄越すなりしな」

「わかった。それじゃあ、今日のところはこれで帰るとするよ」

「ああ……っと、さっきの奴らは気絶させちまって悪かったな。一発殴って気絶させただけだから、怪我はしてないと思うんだが」

城から派遣された兵士を殴って気絶させるなど、本来ならば捕まってもおかしくはない。元の世界で言えば、職務質問をしてきた警察官を殴り倒すようなものだ。しかし、義人は苦笑しながら首を横に振った。

「一発で気絶したのか……あいつらには特別手当てを出しておくよ。

あと、三人がかりで負けるなって言っとく」

カグラの視線が背中に刺さっているのを自覚しつつも、義人はそう答える。ついでに少しばかりため息が聞こえたが、あえて気にしないことにした。

ローガスの製鉄所を後にした義人は、カグラと共に城へ向かって歩いていく。気絶していた兵士達も目を覚まして義人の護衛をしようとしたが、カグラの指示で先に城へと戻っている。一撃で気絶させられたことに落胆しているのか、その足取りはかなり重そうではあったが。

「いやー、それにしても引き受けてくれて良かったな」
「そうですね」
「あとは明日以降に様子を見に行くだけだな」
「そうですね」

夕日で赤く染まっている道を歩きながら、義人は話を振る。しかし、カグラから返ってくるのは機械的な言葉だけだ。

「あー……カグラ、怒ってるのか？」

義人には思い当たる節はいくつもあるので、恐る恐る尋ねる。するとカグラはため息を吐き、小さく口を開いた。

「ヨシト様は甘いですよ……」
「それはローガスの言葉遣いに対してか？　それともローガスが兵士に手を出して、それを許したこと？」

「存在全てです」
「そこまでいきますか！？」

存在全てと言われ、義人は思わず驚愕する。そんな義人を見て、カグラは再度ため息を吐いた。

「他の者に示しがつきません……前々から同じようなことを言っている気がしますね」
「奇遇だな。俺も前々から同じようなことを言われていた気がするんだ」

カグラとしては自分が何度言ったかわからないが、義人が“完全に”改めてくれたことはない。そのことを思い返し、カグラは僅かに頬を膨らませた。

「もう……ヨシト様も、たまにはわたしの言うことを聞いてくださってもいいじゃないですか」
「カグラの言うことはけっこう聞いてる気がするけどなぁ。まあ、前向きに善処する所存であります」

政治家のようなことを言いながら、義人は小さく笑う。それを見たカグラも相好を崩すと、隣を歩く義人へ半歩分だけ距離を詰めた。

「明日は見に行くんですか？」
「どうかなぁ……それは仕事の量次第じゃないか？　そろそろ農作物の収穫がピーク……一番大変な時期だし、それに関する書類がたくさん回ってくるだろうしなぁ」
「それもそうですね」
「だろ？　まあ、仕事が少なかったら見に行くかな」

王としての仕事を中心に考えてしまっている自分自身に対して、義人は苦笑する。

「そうですね。その時はまた、お供しますから」

そんな義人に対して、カグラは嬉しそうな笑みを向けた。

第六十九話：ドワーフの鍛冶師　その2

翌日、毎朝行われる定例の報告会を終えた義人はいつもよりやや早い足取りで執務室へと向かっていた。

その理由は、前日に依頼した玉鋼の製造が上手くいったか見に行くために仕事を少しでも早く片付けたいというのが半分の理由で、もう半分は報告会の様子から仕事の量が普段よりも多そうだと判断したためである。

「こういう時に限って仕事が多くなるんだよなぁ……」

ため息を吐きつつ愚痴のようなことを呟くが、それで仕事の量が減るわけでもない。義人はなるべく早く、かつ正確に仕事をしようと気合を入れた。

この国で栽培される米などは、元の世界と同じく秋に収穫される。それとは別に多種類の穀物や野菜、果物も栽培されているのだが、カーリア国において主食である米は他と比べて栽培量が多い。農民の中には税を米で納める者も多く、それに関連した様々な書類が義人へと回ってくるのだ。

もちろん、義人のもとへと回ってくる書類はそれだけではない。この時期は活動が活発になる魔物を退治するために派遣する部隊の選別や、国内で発生した問題、または周辺国家に関する情報など、多岐に渡る分野の書類が回ってくる。当然それら全てが義人のもとへと回されるわけではないが、それでも義人が目を通さなくてはならない書類が多く、今頃執務室の机の上ではいくつかの山ができているだろう。

元の世界に戻ったら何かの役に立つかな、などと思うこともあるが、今現在必要なことなので投げ出すわけにもいかない。

それでも、義人とて今の生活に対して考えることはある。

午前六時頃に起き、運動不足の解消とストレスの発散、それと自衛の手段を覚えるために志信達に混じっての早朝訓練。それを二時間ほどこなした後は午前九時からの政務に備えて朝食を取る。そして昼食を挟みつつ政務をこなし、それが終われば夕食や他国の共通語であるコモナ語の勉強。余裕があれば志信が行っている夜間訓練にも顔を出すが、大抵は午後十時頃に就寝する。

召喚当時は溜まりに溜まった政務を片付けるために徹夜の連続だったが、今となっては徹夜はおろか夜更かしをすることもない。正確には“できない”のだが、元の世界とは違う規則正しい生活でも慣れてしまえば不満はなかった。

義人としてはこの世界での生活に慣れてしまうことに対して色々と思うところがあるのだが、元の世界に戻るための方法が“確立”されていない状況では仕方がない。

「まあ、今は目の前の仕事を片付けますかね。大丈夫、俺ならやれる」

つらつらと現実逃避気味に考え事をしていた義人は、執務室にたどり着いて自分を出迎えた書類の山を前にして、自分自身に言い聞かせるようにそう呟いた。

義人の提案によって一時間毎に鳴らされるようになった鐘が午後五時を告げ、それを聞いた志信は残心として構えを取ってから棍を下ろした。そんな志信の目の前では、近衛隊に所属する十二人の兵士が乱れた呼吸を整えようとしている。以前に比べて体力や技術がつき、部隊として機能できるようになった彼らを見て志信は僅かに頬を緩めた。

元の世界では弟子はおろか他人に何かを教えたことすらない自分

が、今は十二人相手に教えを施している。それがどこかおかしく、そして自分の拙い教えでもきちんと成長してくれる彼らに対して、喜びと感謝を覚えていた。

志信は補助魔法である『強化』程度しか魔法が使えないため、魔法に関しては教えることができない。むしろ教わることのほうが多いが、志信にとっては身体能力を上げる『強化』さえ使えれば問題はなかった。下級魔法程度ならば避けることが可能で、中級魔法までなら棍に施された『無効化』で消すことができる。さすがに上級魔法を相手にすればどうなるかわからなかったが、魔法隊の隊長であるシアラでも上級魔法を使うことはできないので対策の取りようがなかった。

「それでは、今日はここまでとする。きちんと夕食を食べ、十分な睡眠を取るように」

『はっ！』

志信の言葉に、各々が返事をする。

現在魔法剣士六人に魔法使い三人、騎兵と歩兵と治癒魔法使いが一人ずつという混成だが、最低限身を守れるようにそれぞれに合った戦い方を文字通り体に“叩き込んだ”。その教え方は習うより慣れろと言うべきもので、そんな教え方しかできない自分に志信は僅かなりとも落胆するものもあったが。

「妙な癖もほとんど矯正できたし、良しとするか」

軽く腕組みをしながら、志信は頷く。

現在カーリア国の主力は魔法剣士なのだが、その戦い方は『強化』で向上した身体能力を用いての力押しである。一見すれば力任せにしか見えない戦い方をする者がほとんどで、技術は二の次だ。それが志信には不思議でならないのだが、戦う相手は魔物なので納得も

している。しかし、技術が向上すれば実力もそれに伴って上昇すると判断したため、訓練中はほとんど『強化』を使わせずに訓練させていた。そのおかげで全体的に実力が向上しているが、魔法が使える者は魔法に頼る癖があるためそれも取り除かなければならない。

志信はこれからどういった指導方針にするかを思案しつつ、棍を片手に訓練場を後にする。その際、『無効化』の術式が多少削れた棍先を見て僅かに眉を寄せた。

「後でシアラに頼むか……コモナ語の勉強もしなければならんしな」

ぼやくように呟きながら、志信は城の中へと足を踏み入れる。そして自室に戻ろうとしたが、ふと気になることが思い浮かんで足を止めた。

「そういえば義人が玉鋼の試作を見に行くと言っていたな。政務はもう終わったのだろうか？」

今日は仕事量が多いと愚痴を吐いていた義人の顔を思い出し、志信は苦笑する。自分はこうやって体を動かしているだけで良いが、義人はそうもいかない。肉体的な疲れもあるだろうが、精神的にも疲れる仕事だ。

何か手伝えることがあればと、志信は執務室へ足を向ける。もしかしたら既に製鉄所へと向かっているかもしれないが、執務室までは距離があるわけでもない。故に大した手間にもならないだろう。

そう判断して歩を進め、志信は執務室の前までたどり着く。そんな志信を見た守衛の兵士は、背筋を伸ばして道を空けた。そんな兵士に目礼をすると、志信は武器である棍を預けて扉をノックをする。義人によって自由に入室が許可されているが、そういった礼儀を忘れるわけにもいかない。

「どちら様ですか？」

すると、扉越しに声がかけられた。その声からサクラだと判断した志信は名乗ろうとするが、それを遮るように声が響く。

「今の律儀なノックは志信じゃないか？　他の奴なら守衛が声かけるはずだし」

「そ、それもそうですね」

義人の言葉に、サクラは少し慌てたように返事をする。それを聞いた志信は内心で苦笑しながら口を開いた。

「入っても良いか？」

「どうぞー」

僅かに気の抜けたような義人の声に、志信は扉を開けて執務室へと足を踏み入れる。そして室内を軽く見回すと、小雪を頭に乗せながらやや疲れた顔をしている義人と目があった。

「今日は大変だったようだな」

「ああ、大変だった。王印の押しすぎで腕がつるところだった」

やれやれとため息を吐く義人だが、仕事自体は終わったのか机の上に書類の類はない。カグラは裁可し終わった書類を運んでいるのか姿が見えず、義人は椅子から立ち上がって軽く背伸びをした。その際義人の背骨が鳴り、志信はその音を聞きながら用件を述べる。

「製鉄所に行くのか気になって来たのだが、どうする？」

「んー……昨日より遅くなったけど、行くよ。昨日と違って問題も起きないだろうし、志信も

行くか？」

頭に乗った小雪を床に下ろしつつ、義人が尋ねる。志信としても可能ならばそうするつもりだったので、特に何かを言うこともなく頷いた。すると、編み物をしていた優希が義人のほうへと顔を向ける。

「義人ちゃん、わたしも行っていい？」

「優希も？　そういえば昨日断っちゃったからなぁ……優希さえ良ければいいよ」

「じゃあ、ついていきたいなー」

優希は義人の言葉に笑顔を返し、編み物の道具を片付けだす。

「キュー……」

優希や義人の言葉が通じているのか、小雪は義人のズボンの裾を口で引っ張って鳴き声を上げる。それを聞いた義人は、僅かに首を傾げた。

「ん？　小雪も行きたいのか？」

「キュク」

適当に解釈して尋ねたのだが、合っているらしい。志信はそんな義人と小雪の様子を感嘆しつつ眺めていたが、ふと小雪が志信へと目を向けた。

小雪はちょこちょこと絨毯張りの床を歩き、志信の足元まで来ると緑の瞳に不思議そうな色を加えて首を傾げる。

「キュ？」

何かしらの疑問を覚えているらしい。そう判断した志信は、畏まって頭を下げた。

「自己紹介がまだだったか。俺は藤倉志信。君の父の友人だ」

「誰が父親だっつーの。まあ、間違ってもいないけどさ」

志信の自己紹介に突っ込みを入れる義人。それを聞いた優希とサクラがおかしそうに笑っているが、志信本人は首を傾げる。

「何かおかしかったか？」

「……いや、志信はそれが素だもんな。うん、わかってたさ」

義人は疲れたように呟き、何やら志信を観察している小雪に目を向けた。

「小雪？　どうかしたのか？」

そう声をかけると小雪は義人のほうへと走り、跳躍して肩へと飛び乗る。生まれた頃よりも重くなったなと義人は頭の隅で考えるが、すぐにそれを放棄してサクラへと目を向けた。

「サクラはどうする？　一緒に行くか？」

義人がそう尋ねると、サクラは自分も誘われると思っていなかったのか目を瞬かせる。

「わ、わたしですか？　えっと……カグラ様とシノブ様がついていかれるのならこれ以上護衛は必要ないですし、わたしは夕食の準備をしています」

「そうか？」
「はい。その代わり、きちんと専用の食堂で夕食をとってくださいね？」
「ははは、了解」

釘を刺してくるサクラに笑いつつ、義人は頷く。そして傍に立てかけてあったノーレをつかむと、背中に背負って小さく笑った。

「それじゃあ行くか。カグラは先に城門前で待ってるだろうし、あまり待たせると後が怖い。主に俺が」

そんな冗談染みたことを口にする義人に、志信も小さく笑って執務室を後にした。

「なんだ、今日はずいぶんと大人数で来たな。それに、そっちのちっこいのは白龍か？　そんな大層なモンを連れて……お前さん、変わり者にも程があるだろ」

町外れの製鉄所に足を運んだ義人を迎えたのは、ローガスのそんな言葉だった。昨日と同じように休憩用の部屋に通されたのだが、それを聞いた義人は頭を掻きながら笑う。

「はっはっは、照れますなぁ」
「褒めてねえよ……まあいい。まさか、本当に見にくるとは思わなかったぜ」

冗談混じりに笑う義人にローガスはやや白い目を向けつつ、ため息を吐く。だが、すぐに気を入れ替えたのか表情を引き締めた。

「お前さんが依頼した“たたら吹き”だが……」
「どうだった？」

大量の材料を使って三日三晩行う本格的なものではなく、少量の材料での試験的な“たたら吹き”。その結果が気になる義人に、ローガスは眉を寄せた。

「ありゃまだまだ改良の余地があるな。理屈はわかるが、お前さんの言う“最高級”の鉄が作れるのはまだまだ先になりそうだ」
「……そうか」

ローガスの口振りから結果が良くなかったと判断し、義人は僅かに表情を暗くする。だが、そんな義人の表情を見たローガスは口元を意地悪く吊り上げた。

「“最高級”の鉄が作れるのはまだまだ先になりそうだが、“それなり”の鉄で良ければ作れたぞ？」
「え？」
「ちょっと待ってな」

ローガスの言葉に、義人は表情を変える。ローガスはそんな義人に笑いながら、足早に部屋を後にした。そんなローガスの背中を見送り、義人は志信と顔を見合わせる。

「ということは……」
「成功ではないが、失敗でもないということか？」

互いに首を傾げるが、現物を見るまでは何とも言えない。そうやって首を傾げていると、足取り荒くローガスが戻ってきた。片手で

木の板を持ち、その上には少し黒みがかった物体が乗っている。

「ほらよ。今日作ったのはこいつだ」

そう言って義人の前に謎の物体を差し出すローガス。義人は木の板ごとそれを受け取り、眉を寄せた。

「これが？」

「ああ。お前さんが渡した紙の通りに作ってみた『玉鋼』とやらだ」

ローガスの言葉に義人は玉鋼をしげしげと眺めるが、実物を見たことがないため判断のしようがない。そのため、隣で玉鋼を見る志信へと話を振ることにした。

「志信は実物を見たことがあるんだよな？」

「ああ。しかし、俺が見たものと少し違うな……」

酸化して表面が薄黒くなったソレを眺めつつ、志信は首を捻る。それを聞いたローガスは鼻を鳴らして口を開いた。

「一回で成功したら苦労はねえよ。だが、この方法で製鉄ができることはわかったんだ。“ソレ”だって、この国で出回っている鉄よりかは質が良いんだぜ？」

「え？　本当か？」

「嘘を言ってどうするよ？　まあ、良いと言っても少しだがな。何度か作ればもっと上等な鉄ができるだろうさ」

ローガスの言葉の意味を、義人はゆっくりと理解する。そして、理解した瞬間ガッツポーズを取った。

「よしっ！　それじゃあ改良を頼むよ！」
「言われなくともそうするっての。まあ、一月もあれば上の下ぐらいの鉄が作れるようにしてやるさ。ドワーフの名にかけて、な」

無邪気に喜ぶ義人に、ローガスは僅かに相好を崩す。良い鉄ができることに喜んでしまうのはドワーフとしての性分かと笑い、納得のいく鉄が完成したら剣でも作るかと僅かに思考する。刀でも良いが、ローガスの頭に浮かんだのは剣のほうだった。それでも鍛冶師としての考えを引っ込めると、いまだに喜んでいる義人に目を向ける。

「喜ぶのは良いが、材料はちゃんと届けてくれよ？　試行錯誤するにしても、材料がなければできないんだからな」
「わかってるって。他にも足りない物があったら用意するから、何かあったら知らせてくれよ」

材料の量に対して取れる量が少ないが、高品質ならばそれに見合った値段で取引される。
材料費や作業人員の給料を差し引いても、十分以上にお釣りが返ってくるだろう。あとはそれをどう取引するかだが、その辺りはアルフレッドにでも任せようと義人は内心だけで決める。今度行われる隣国レンシアの建国記念式典の際にどうにかやって売り込むのも手だが、今の段階では取らぬ狸の皮算用に過ぎないので義人は考えを打ち切った。
考えることや覚えることが多くて目が回りそうだが、弱音を吐く暇もない。
義人はローガスへと視線を向けると、軽く肩を竦めてみせる。

「それじゃあ、今日のところは帰るよ。また見にくるから」
「おう。どうせすぐには改良できねえだろうから、次は一週間後に

でも来な」

ローガスの口振りにカグラが口を開こうとするが、それを察した義人は苦笑しながら頷く。

「そうする。そんで、カグラは落ち着こう」
「……わたしは落ち着いています」
「ならいいや。ほら、帰るぞー」

義人はカグラを押し出すように歩き出し、他の者にも声をかける。そんな義人の後ろに小雪を抱えた優希が続き、最後に志信が部屋を後にした。

第七十話：準備

一ヶ月ほどの月日が流れて秋も深まりつつあるその日、義人は主な文官や武官を会議室に集めて会議をしていた。議題は『レンシア国の記念式典について』で、レンシア国へ義人が赴くために様々なことを決めなくてはならない。

移動に際して必要な護衛。記念式典で贈呈する品や段取り。レンシア国に滞在するために必要な物や手続き。そして、それらに関する経費等々。

作物の収穫に関する仕事は落ち着いたが、問題は次から次に出てくる。義人はそのことに内心だけでため息を吐きつつ、交わされる会議の内容に耳を傾けた。そのついでに給仕としてサクラと共にお茶を配っている優希が淹れたお茶で喉を潤し、湯飲みを机に置く。そんな義人が座る椅子の傍では、以前より一回り大きくなった小雪が寝そべっていた。

「ふむ……レンシア国に送る人選をどうするかのう」

司会進行役であるアルフレッドが顎鬚を撫でつつそう言うと、義人の斜め後ろに立つカグラが口を開く。

「わたしかアルフレッド様のどちらかは行かなくてはならないでしょう。外交官がいるとはいえ、補佐できる範囲には限りがあります」

カーリア国とて外交官がいるが、その手腕はアルフレッドやそのアルフレッドの薫陶を受けたカグラには及ばない。それでも他国の外交官に多少劣る程度でしかないが、その多少で問題が起きるかもしれないのだ。

「そうじゃな、片方はヨシト王の補佐。もう片方は残って政務の指揮を執らねばならん……まあ、こちらには儂が残るかのう。ヨシト王の補佐はお主に任せるが、良いか？」

アルフレッドが特に悩むでもなくそう告げると、カグラは驚いたように目を瞬かせる。

「わたしで良いのですか？」

「何事も経験じゃよ。レンシアに赴くのは三年振りになるが、今のお主ならば大丈夫じゃろう。儂は何百回とレンシアに行ったことがあるし、これからは行く機会が増えるじゃろうし……のう？」

「なんでそこで俺に話を振るかね？」

突然話を振られた義人は、驚き半分不満半分で眉を寄せた。すると、アルフレッドは意地悪そうに笑う。

「色々とこの国を売り込んでくるのじゃろう？　そうなれば、交流の機会も増えるじゃろうて。それならば、別段今すぐ行く必要もないしのう」

ほっほっほ、と笑うアルフレッドに、義人は肩を竦める。

「売り込むっていっても、新しく取引したい物があるだけだよ。多少だけど玉鋼の品質が安定してきたからね」

義人はローガスの得意げな顔を思い返し、口元を僅かに緩めた。

徐々に“たたら吹き”のコツが掴めてきたらしく、最近の玉鋼は以前よりも質が向上している。あとはその玉鋼を使い、贈り物用に剣の一振りでも作ってもらいたいところだ。

義人の口振りに自信を感じたのか、アルフレッドは次の話題に移

る。

「それは良いとして、護衛はどうするかのう……」

「護衛？　以前はどうだったんだ？」

悩むアルフレッドに、義人が尋ねる。するとアルフレッドは宙に視線を飛ばし、昔を思い出すよう目を細めた。ただ、良い思い出ではないのかその表情は険しい。

「前王の時は、無駄な人員までつれて大勢で行ったんじゃ。多いときで三百人くらいだったかのう……止めたが聞く耳を持たんかったから、無駄な経費がかかって困ったもんじゃ。それでも召喚から数年はまともだったんじゃが……」

最後は愚痴になりそうだったので、義人はあえて聞き流す。

「無駄な経費はかけたくないなぁ……最小必要限の人数で良いんじゃないか？」

アルフレッドの言葉に義人が意見を述べるが、それに対してアルフレッドは苦笑する。

「たしかに、それほど人数はいらないんじゃ。しかし、国としての体面や見栄もあるから逆に少なすぎてもいかんじゃろう。大勢が無駄とは一概に言えんが、その辺りの見極めが肝心じゃな」

「見栄なんていらないと思うけどね。でも、ある程度は仕方ないか」

ため息を吐きつつ、義人は会議室に集まっている面々の顔を見渡す。外交に必要なのは文官だが、護衛として武官も連れていかなくてはならない。しかし、無駄に連れて行くのも経費の無駄だ。いく

ら全ての決定権が王である義人にあるといっても、その辺りのバランスが取りにくく、わかり辛い。

カーリア国の王都フォレスからレンシア国の王都ハサラまでは馬を使って約三日ほどかかり、往復で約六日。その上数日はレンシア国に滞在するため、多くの人数を連れていけばそれに伴って経費がかかる。

「戦争に行くわけでもないし、経費もかかる以上大勢で行くわけにもいかないな。少数精鋭……でも、それだと護衛の手が足りないかも……うーん……」

腕を組んで悩む義人。近衛隊は確実に連れていくとして、あとはどれだけ必要かがわからない。連れて行く文官の数を数え、それぞれに割り当てる武官や兵士の数を思案する。

「何かあったら困るし……楽観的な予測はしないほうがいいよな。小康状態とはいえ戦時中らしいし……あ、贈り物を運ぶのにも護衛がいるんだよな」

ブツブツと考え事を呟きつつ、義人は手元の紙に筆を走らせていく。いくら建国記念の式典に参加するだけといっても、それだけで済むはずがない。様々なことを話すだろうし、様々な交渉をするだろう。少なくとも、義人には色々と交渉したいことがある。その交渉が相手にとっても有益だという自信はあるが、何が起こるかわからない。

「俺の護衛は近衛隊に任せるとして、他はどうするか……志信は何かあるか？」

紙面に文字を書きつつ、義人は少し離れた位置に立つ志信に話を

振る。志信は義人の傍に歩み寄ると、義人が文字を書き込んでいた紙に目を向けた。

「俺としては少数精鋭でいくべきだと思うが」

「ふむふむ……理由は？」

「人数が多すぎては逆に動きにくい。腕の立つ者数名で一つの班を作り、護衛に当たらせるのはどうだろうか？」

「班を作って、か。たしかに連れて行く文官は十人もいないし、それなら多すぎることはないかな？」

三人で一班を作ったと仮定すれば、文官十人でも護衛は三十人。そこに近衛隊を加え、さらにカグラとサクラがいる。

「全部で五十人を超えないぐらいか。でも、戦力としては申し分なさそうだな」

戦力と口にするが、義人は内心重たいものを感じで口を閉ざす。レンシア国に向かう途中で魔物に遭遇することはあるだろうが、実際に人間相手に戦うことはないだろう。もしかしたら山賊や盗賊などがいるかもしれないが、正規の軍人相手に襲い掛かってくる可能性は低い。

それでも、以前の暗殺騒動の時のように人間と戦うことがあるかもしれない。そんな思考が頭を掠め、義人は苦い表情で湯飲みに手を伸ばした。すると、急須を持った優希がすぐさま歩み寄ってくる。その服装は以前の会議と同じようにメイド服だったが、すでに何度か見ているので義人が特に反応することはなかった。

「はい、どうぞ」

「ああ、ありがとう」

笑顔でお茶を注いでくる優希に礼を言い、義人はお茶で喉を潤す。
優希はお茶を飲む義人を楽しげに眺めていたが、ふと机の上に置かれた紙に目を落として僅かに表情を変えた。

「ねえ、義人ちゃん」
「ん？」
「わたしは……お留守番？」

留守番という言葉に、義人は首を傾げる。しかし、優希が机の上の紙……レンシア国に赴く人員の草案を見ていることに気づき、小さく眉を寄せた。

「あー……そうなる、かな？」

答える義人の口調は、弱い。つい今しがた考えた“万が一”を考えると、優希を連れて行くことに抵抗がある。

「藤倉君は良いのに？」

義人の返事を聞いた優希は寂しげに表情を曇らせ、滅多にしない“反撃”をした。それを聞いた義人は、虚を突かれたように動きを止める。

「ん、あ、えーっと……でも、ほら……な？」

義人は自分でも何を言っているのかわからなかったが、それでも長い付き合いで意図は通じると信じてもう一度『な？』と呟く。そんな義人を見たアルフレッドは、苦笑しながら口を開いた。

「別に連れて行っても良かろうて。ユキ殿もこの城から出ることは

あまりないんじゃし、戦争を仕掛けにいくわけでもない。観光がてら……というわけではないが、街中を見て回るぐらいの余裕はあるわい。ヨシト王が心配するのはわかるが、レンシアは非常に治安が良い国じゃぞ？」

「ぐぬ……」

視線だけで『心配しすぎじゃ』と言われた気がして、義人はくぐもった呻き声を上げる。そして、それと同時にこちらの世界に召喚されてからのことを思い返した。

この世界に召喚されてから、優希が城から外出したことはほとんどない。義人もあまりないが、それでも視察などで何度か遠出をしたことがある。しかし、優希が城から外出したのは義人が知るだけでも片手の指で足りるぐらいでしかない。最後に外出したのはローガスの製鉄所へ共に行った時で、一ヶ月近く前の話だ。アルフレッドの言葉からそれを考えた義人は、数秒黙考して優希に目を向けた。

さすがに外出もしたくなるよな……。

心の中でそう考え、息を吐く。そして、苦笑混じりの笑みを浮かべて筆を手に取った。

「やっぱり留守番はなしで。優希にはレンシア国の料理研究をしてもらおう」

適当に名目をつけ、紙に書き加える。それを見た優希は、花咲くような嬉しげな笑みを浮かべた。

「うん、任せてよ！　それと、我が侭言ってごめんね？」

笑顔の中に少しだけ申し訳なさそうな色を混ぜ、優希が小さく頭

を下げる。それを見た義人は、肩を落として首を横に振った。

「いや、謝るのは俺のほうだ。ごめんな、優希。配慮が足りなかったよ」

優希に対する配慮が足りなかったことに、義人は頭を下げる。この場には臣下である文官武官がいたが、彼らはどこか楽しそうにその様子を眺めていた。

「やっぱりヨシト王は……」
「いや、でも……」
「しかしだな……」

それどころかヒソヒソと囁き合っていたりするが、それが義人の耳に届くことはない。

「若いのう」

義人達の様子を眺めながら、アルフレッドが楽しげに呟く。そして義人の後ろで不満そうな顔をしているカグラを横目で確認すると、今度は苦笑した。

「どうしたんじゃカグラ。ヨシト王の案に何か不満があったか？」
「……いえ、何も」

アルフレッドの言葉に、カグラは拗ねたように目を逸らす。自身にとっては孫のような少女の様子に、アルフレッドは好々爺染みた笑みを浮かべた。そして数秒ほど笑った後、表情を引き締める。

「さて、それでは護衛に当たる者達も決めねばな。ヨシト王、何か

希望はありますかな？」

　希望と聞かれて、義人は武官達の方へと視線を向けた。この場にいるのは各部隊の隊長だけで、それよりも下の者はいない。

「んー、どうしたものか……誰か、意見や希望があったら言ってくれないか？」

　どういった編成にすれば良いのかいまいち見当がつかず、義人は意見を求める。すると武官達は顔を見合わせ、互いに小声で意見を交わし始めた。

　そして数十秒ほど意見を交わし合っていると、不意にミーファが挙手する。

「ヨシト王、よろしいですか？」

「どうぞ」

　公私を分けているため、ミーファの義人に対する態度と口調は固い。そのミーファの隣では第二魔法剣士隊の隊長が座っているが、第二魔法剣士隊は第一魔法剣士隊に比べて練度が低く、隊長もそれを理解しているのかあまり発言することがない。

「護衛として考えるのならば、魔法剣士隊の同行を進言します」

「魔法剣士隊か。妥当なところだけど、理由は？」

「機動性があり、攻撃と防御の両方に秀でているからです」

　実にシンプルな理由を述べるミーファ。義人としても納得できる話ではあるが、それを遮るように別の者が手を上げた。

「シアラか。どうぞ」
「……はい」

シアラは小声ながらも妙に通る声で返事をすると、ゆっくりとした動作で立ち上がる。

「……護衛じゃないけど、レンシア国の魔法隊の訓練が見てみたい……です」
「いや、護衛に関する意見が聞きたいんだけど。でも、訓練を見てみたいか……」

義人は中々ずれてる子だなと内心で苦笑するが、シアラの案には考えさせられるものがあった。他国の人間に自国の訓練の様子を見せる可能性は低いだろうが、義人としても気になる。

「たしかに見てみたいけど、見せてもらえるものか？」

疑問を含んだ問いを投げかけると、それを受けたアルフレッドは僅かに首を傾げた。

「どうかのう……いくら友好国とはいえ、今の時勢ではいつ敵になるかもわからんしな」
「それもそうか。でも、可能性はあるんだろ？」
「そこは交渉次第、といったところかのう。自国と他国、その間にどれだけの差があるのかは向こうも気になるじゃろうし」
「なら保留かな。一応頼んでみるけど、期待はするなよ？」

最後の言葉はシアラに向けての言葉だったが、シアラは無言で首肯する。そして椅子に座る……と思いきや、立ったままで再度口を開いた。

「……それなら、魔法隊の同行を進言します」
「何が『それなら』なのかいまいちわからないぞ。理由は？」
「……魔法隊も機動力があるし、魔法攻撃は威力が高いから抑止効果が抜群……です」
「抑止効果、か。騎馬隊や歩兵隊、弓兵隊の意見は？　あ、治癒魔法使いは何人かつれていくから」

治癒魔法使い達を管理している隊長にそう声をかけ、他の者に意見を求める。すると、騎馬隊隊長のグエンが真っ先に手を上げた。

「よろしいですかな？」
「どうぞ」

義人の許可に、グエンは椅子から立ち上がる。

「騎馬隊も機動力はありますが、それは馬に乗っていたらの話。護衛となると騎馬隊は向かんでしょう。弓兵隊は接近戦が苦手ですし、もしも相手が魔法を使ってきたら歩兵隊では荷が重い……故に魔法剣士隊か魔法隊を同行させるべきだと思います」
「グエン殿に賛成です」
「同じく」

グエンがそう言うと、他の隊長も同意するように頷く。もしも何かあった際、相手が魔法を使えるのならば勝てないと彼らは理解している。それならば魔法を使える者に任せたほうが効果的だろう。そういうことだと判断した義人は、隊長達が“自分の意見”を言ってくれたことに内心喜びつつ口を開く。

「それなら、いっそのこと両方連れて行こう。魔法剣士隊二つと魔

法隊でそれぞれ十人ずつ……いや、ここは第一魔法剣士隊と魔法隊の二つにしておくか。隊長にも同行してもらうから、隊長二人を除いて十四人ずつ選出してくれ。選出の基準は任せるから」

「はっ！」

「……わかりました」

義人は第二魔法隊の隊長も連れていこうとするが、すぐにその考えを改めた。もしも自分達がいない間にカーリア国で問題が起きてしまい、その際主力である魔法剣士隊の隊長が両方とも不在というのは拙い。そう判断してのことだったが、第二魔法剣士隊の隊長も不満がないのか特に何かを言うことはなかった。

「よし、それじゃあこっちに残る部隊はいつも通り訓練や魔物退治に励むこと。指示はアルフレッドに一任する。あと、残った第一魔法剣士隊の兵は第二魔法剣士隊に合流して訓練を行い、魔法隊は副隊長に訓練の指示をさせること。いいな？」

『はっ！』

一糸乱れぬ返事に、義人は頷き返す。

そして、いるかわからないこの世界の神様に『何も起きませんように』と祈るのであった。

第七十一話：出発

十一月四日、天気は晴れ。もしも日記の最初に書くとすれば、そんな出だしで始まるだろう。

義人はそんなことを頭の片隅で考えつつ、今から乗る馬車をぼんやりと眺めていた。だが、何気なく視線を下げて自分の服装を見ると、深いため息を吐く。

「制服は良いとして、このマントはどうにかしたいな」

ため息ついでに義人はそう呟く。いつもなら優希手製の服か制服の模造品を着ているのだが、現在は元の世界で着ていた学校の制服に袖を通し、さらに王用の赤いマントを身につけ、背中にはノーレを背負っている。赤いマントなど、召喚当初は身につけていたがここ数ヶ月は使った記憶がない。

「まあ、ちょっとは王様らしい……かな？」

自分の格好を見下ろしてそう評してみるが、本来ならもっと“王様らしい”服装を用意されていた。豪奢（ごうしゃ）で華美で派手な、義人の目から見ると非常に理解に苦しむ変な服が。

結局は『違う世界から召喚されたことを証明するため』という、義人の強引で無理矢理な意見で今の服装に落ち着いたが、それでもマントだけは回避できなかった。

「……落ち着かないし、後で着替えるか」

向こうに着く前にまた着替えればいいだろう、と自分に言い聞かせ、義人は周囲へと視線を投じる。

出発のため城門前に集まっているのだが、義人や文官が乗る馬車を護衛するための手筈の最終確認や、贈呈物や移動に際して必要な物資の最終確認を行っている。もう少しゆっくりくれば良かったかと義人は考えたが、自身に歩み寄ってくる人物が目に入ってその思考を打ち切った。

歩み寄ってきた人物……商人のゴルゾーは慣れた様子で膝をつき、頭を下げる。

「お久しぶりです、ヨシト王」

「久しぶり……といっても、そんなに時間が経った気はしないんだけど？」

義人は最後に会ったのはいつだったかと記憶を漁り、ゴルゾーは膝をついたままで僅かに顔を上げた。そこには、初めて謁見した時の無駄に卑屈な態度はない。

「私にとっては、十日も経てば久しく感じますので」

「あー……忙しそうだもんな。でも、今回同伴してくれて助かるよ」

そう言って、義人は苦笑する。ゴルゾーには商人として世話になることもあれば、商人としての情報網を使った情報屋として世話になることもある。他国でも商売をするゴルゾーの情報網は広く、あちこちに顔が利くので今回は同伴を依頼していた。レンシアと何か商談があった時、これほど頼れる存在も中々いない。それを感謝しての言葉だったが、ゴルゾーは商人らしい笑みを浮かべて口を開く。

「お客様のご希望にお答えするのが商人ですから。それにお代もいただいていますし、今回必要な物資は全て当方から購入してもらいました。そして、レンシアの方に運ぶ物もあります。ですので、お

気になさらず」

商人としての顔で話すゴルゾーに頷きつつ、義人は首を捻る。

「レンシアに運ぶものって？　あ、こういうのって客の個人情報につながるから聞いたら駄目なんだっけ？」

「たしかにお客様の情報につながりますが、馬車を見られれば一目でわかりますよ」

ゴルゾーは義人の微妙な気遣いに苦笑すると、自身が使う馬車へと視線を向けた。義人達が使う人を運ぶための馬車ではなく、荷物を運ぶための簡素な馬車に乗せられた物を見た義人は僅かに目を見開く。

「米俵……米を運ぶのか？」

荷物用の馬車に乗っている米俵を見て、義人はそう尋ねる。するとゴルゾーは苦笑したままで頷いた。

「今年の新米です。レンシアにはジパング出身の方がいまして、定期的に買われるんですよ。あとは……色々ですね、はい」

義人は色々というところが気になったが、そこは聞いても答えないだろうと判断して口を閉ざす。

それから少しの間雑談に興じていたが、近衛隊の一人が駆け寄ってくるのを見た義人はそちらへと顔を向けた。

「ヨシト王、出発の用意が整いました」

「了解。それじゃあ、行こうか」

膝をつき、頭を下げた状態で報告をしてくる近衛兵に義人は返事をする。そして、それと同時に僅かに苦笑した。

「どうかされましたか？」

「いや、人間って慣れる生き物だと思ってね」

「はぁ……」

義人の言葉の意味がわからなかったのか、近衛兵は曖昧な返事をする。以前は畏まられるのが非常に窮屈に感じたが、今ではそれに慣れてしまった自分が義人にはおかしく感じられた。

義人は内心だけでもう一度苦笑すると、いまだに困惑している近衛兵に対して口を開く。

「気にしないでくれ。あと、出発の伝令をよろしく」

「はっ！」

表面上は真面目な義人の指示に、近衛兵は一礼して走り去る。義人はその背中を見送ると、先ほどまで話していたゴルゾーへと向き直った。

「というわけで、出発するってさ」

「それでは、私も自分の馬車に戻るとしましょう。何かありましたらお呼びください。では、失礼します」

そう言って慇懃に頭を下げ、ゴルゾーはゆっくりとした足取りで歩き去る。その後ろ姿をなんとなく見送ると、義人も自分の馬車に乗るべく踵を返した。

「では出発だ！」

王用の馬車に乗り込んだ義人は、外から聞こえるミーファの声を聞きながら馬車の椅子に背を預ける。その数秒後に馬車がゆっくりと動き出し、義人は羽織っていた赤いマントに手をかけた。

「着替えるの？」

「キュ？」

“隣と足元”からの声。

王用の馬車は他の馬車と違い、窮屈しないよう広く設計されている。四人ほどなら楽に乗ることが可能で、義人の隣には優希が座り、その足元では小雪が寝そべっていた。

道中は休憩があるとはいえ、馬車の中ではすることがあまりない。そのため、義人は話し相手として優希に同乗を頼んでいた。ノーレも話し相手になるが、長い付き合いがある優希なら話し相手としては最適である。

最初は志信にも頼んでいたのだが、『俺は近衛隊を指揮する』と首を縦に振らなかった。カグラは全体に指示を出す役目があり、サクラはメイドとしての役目があるため馬車に同乗していない。ミーファやシアラは自分の部下を指揮しなければならず、義人が話し相手として選べるのは優希だけだった。

義人は口でズボンの裾を引っ張る小雪に苦笑すると、隣に座った優希に顔を向ける。

「着替えるっていうか、マントを脱ぐだけだよ。向こうに着くまでならそこまで気にしないで良いだろうし」

そう言いつつ、義人はマントを脱ぐ。そしてたたもうとすると、隣の優希が笑顔で手を差し出した。

「わたしがたたむよ」
「え？　あー、うん。悪いな」

義人は一瞬悩むが、自分がたたむよりも綺麗にたたんでくれるだろうと、優希にマントを差し出す。それを受け取った優希は、楽しそうに笑った。

「ふふっ、義人ちゃんは昔から服をたたむのが苦手だもんね？」
「いやいや、別に苦手ってわけじゃないさ。優希が得意だから、そう見えるだけだって」
「そうかなぁ？」
「そうだよ」

他愛のない会話をしながらも、馬車は進んでいく。時折小石や道の凹凸で馬車が揺れるが、移動の際の振動対策として詰められた綿のおかげで腰が痛くなることもない。ただ、足元の小雪は振動が直接伝わるため若干不満そうだったが。

「小雪、おいで？」

それを見た優希は、自分の膝を叩いて小雪を呼ぶ。すると小雪は嬉しそうに一鳴きして優希の膝へと飛び乗った。それを見た義人は、苦笑しながら小雪の頭に手を伸ばす。

「生まれて二ヶ月も経たないのに、ずいぶんと大きくなるもんだな」

生まれた頃は三十センチにも満たなかった体も、今では倍の六十センチほどまで成長している。それに合わせて羽も大きくなり、もう少し成長すれば空を飛ぶこともできそうだった。

「まあ、あれだけ食べれば成長するのも当たり前か……」

以前よりも大きく、重くなった小雪を見ながら義人は目を閉じる。大きくなるにつれて増える食事量は、義人にとって地味に悩みの種となっていた。今は一食五人前程度の食事量で済んでいるが、将来的にはどうなるかわからない。

小雪の食事代で財政が破綻したりして……ははは、まさかね。

内心で乾いた笑いを浮かべる義人。すると、“それ”を聞いたノーレが義人に対して思念通話を繋げた。

『安心せよ。それはない』

『ない？　本当にないのか？　あったら困るどころじゃすまないんだけど？』

義人は声に出さず、すでに慣れてしまった思念通話でノーレに尋ねる。

『もうしばらくは食事量も増えるじゃろうが、いずれ落ち着く。最悪、魔力を吸うだけでも生きていけるのじゃぞ？　肉体的な成長は著しく遅くなるがな』

『う……ん。でもほら、食事抜きっていうのは可哀想だしなぁ……』

「大丈夫だよ」

義人がノーレと思念通話で話していると、それを遮るように優希が声を出す。そして、優希は膝に乗った小雪を撫でながら微笑む。

「安くて美味しい料理をたくさん作れば問題ないよ。ね？」

「あ、ああ。そうだな。それは優希に任せるよ」
『……』
優希の言葉に、義人は頷く。会話を遮られたノーレは、何かを言うこともなく沈黙した。それを不機嫌になったのだと判断した義人は、ノーレのほうへと目を向ける。
『ノ、ノーレは馬車の揺れは大丈夫か？』
少々腰が引けていたが、義人はそう声をかけた。しかし、すぐに返事がこない。
『……うむ』
義人が声をかけてから数秒経ち、ノーレが小さく言葉を返す。その声色に不機嫌な色が見えなかった義人は、僅かに首を傾げながら会話を続ける。
『どうしたんだ？　あ、もしかして振動で刃が欠けた？』
『この剣は、それほど柔（やわ）な作りではないわ戯けめ。『魔法文字』を使って強度を上げてもある。じゃが……』
『じゃが？』
言いよどむノーレに、義人は続きを促す。しかし、ノーレは何も答えずに沈黙するだけだ。何かを思考しているのか、ノーレから伝わる逼迫した感情に義人は眉を寄せる。
『本当に、大丈夫か？』
義人がかけた言葉は、真剣なものだった。ノーレが言いよどむこ

となど、あまりない。それを考えると、義人としては非常に気になるものがあった。
義人の問いかけから数秒経つと、それまで沈黙していたノーレが言葉を紡ぐ。

『……心配をかけてすまぬ。じゃが、まだ推測の域を出なくての』
『推測？』
『うむ。もっとも、お主に余計な情報を与えても負担になるだけじゃし、知らなくても問題のなさそうなことでな。確信が持てたら話そうと思ったんじゃが、思ったよりも深く考え込んでいたようじゃ』

いまいち要領を得ないノーレの説明だったが、それを聞いた義人は、自分に与える情報を取捨選択してくれたのだろうと、信頼を込めて小さく頷いた。

『そう言われると逆に気になるけど、ノーレが問題ないって言うのなら大丈夫か。別に、誰かの命に関わるってわけじゃないんだろ？　でも、そういう思わせ振りな態度は怖いからやめてほしいぞ。それじゃあ、確信が持てたら教えてくれよ？』
『すまぬ。考えをまとめるのに少し時間がかかってな。次からは気をつけよう』

義人の冗談めかした言葉に、ノーレは素直に謝る。その素直さに続ける言葉をなくした義人は、隣で小雪と戯れている優希へと視線を向けた。

「それにしても、馬車ってけっこう揺れるなぁ。優希は気分が悪くなったりしてないか？　休憩したいなら、いつでも言ってくれよ？」
「うん、わたしは大丈夫だよ。これくらいの揺れなら、遊園地のア

トラクションのほうがひどいしね。ジェットコースターとかに比べると、全然平気」

「遊園地か……最後に行ったのはいつだったかな？」

そう言いつつ、義人は元の世界のことを思い出す。最後に遊園地に行ったのはいつだったかと記憶を漁り、それを見つけるより早く優希が口を開いた。

「うーん……中学校の修学旅行が最後じゃない？　あ、義人ちゃんが誰かと行ってたら違うと思うけど」

覗きこむように、優希がそんな言葉を投げかける。その言葉を聞いた義人は、苦笑混じりに首を横に振った。

「はっはっは、誰が俺と一緒に行くんだよ。志信か？　ちょっとシュールだぞ、それは。優希ならともかく、志信は遊園地に行くより家の道場で体を動かすほうが性に合ってるだろうさ」

義人は志信と二人で遊園地を回る光景を想像し、優希の言葉を笑い飛ばす。それを聞いた優希は、小さく微笑んだ。

「それじゃあ、元の世界に戻ったら一緒に行こうか？」

「お、いいねー。優希と遊園地に行ったのなんて、学校行事を除いたら小学生の時以来だしな」

優希の提案に笑いながら頷く義人。まだ元の世界に戻れると決まったわけではないが、そういう約束も良いだろうと承諾する。その約束を果たすためにも、元の世界に戻る方法を見つけなくてはならない。

義人は自分の膝に乗ってきた小雪の相手をしながら、そのことを

内心だけで呟いた。

第七十二話：遅刻

カーリア国王都フォレスからレンシア国王都ハサラまでは、馬車で約三日の道程である。早馬で走れば一日ほどで着く距離ではあるが、今回は文官も一緒にいるため馬で早駆けするわけにもいかない。何より、義人自身そこまで馬に乗り慣れていないというのも理由の一つである。

フォレスを出発すること三日目。義人は馬車の窓から顔を覗かせ、少しばかり怪しくなってきた雲行きを見てため息を吐いた。

「うーん……到着までは降らないでほしいんだけどなぁ」

元の世界のように、降水確率などわかるはずもない。雲の流れや空気の湿り具合で予想できるわけもなく、義人は馬車の窓から顔を引っ込めた。ここまでは天気も良く、順調に進めたが、ここから先はどうなるかわからない。

「雨、降りそう？」

顔を引っ込めた義人に、優希が尋ねる。義人は肩を竦めると、開いた窓の外を見るよう促した。

「降水確率四十パーセントってところか？」

「五十パーセントくらいじゃない？」

義人がおどけるように言ってみると、優希は楽しげに笑って自分の意見を述べる。義人は

『五十パーセントか』と小さく呟いて窓を閉めると、傍に立てかけたノーレへと目を向けた。

『ノーレの意見は？』
『パーセントというのがよくわからんが、妾はヨシトと小娘の中間じゃな。まあ、おそらくは降らんじゃろうがな』
『小娘て……』
義人はノーレの呼称に苦笑すると、優希の膝の上に乗っている小雪へと視線を向ける。
「小雪はどのくらいだと思う？」
「キュク？」
義人に尋ねられた小雪は、意味がわからなかったのか首を傾げるだけだ。それを見た義人は、小雪の頭を撫でながら再度苦笑する。
「答えたら答えたで逆に驚くか……それにしても、予定通りには進まないもんだねぇ」
予定では今日中にレンシア国王都ハサラに到着するはずだったのだが、予定よりも進んでいない。
初日でカーリア国を南下し、国を縦断するように流れるソレス川を超え、カーリア国とレンシア国の国境まで到着。
二日目でレンシア国へと入国し、王都ハサラに向けて黙々と進む。
三日目の昼過ぎには到着できるはずだったのだが、休憩に時間を取りすぎたのか今日中に到着するのは厳しい。急げば到着できるだろうが、文官の体力の消耗が激しいため急ぐわけにもいかない。馬車に乗っているだけなのだが、普段から運動をしないため多少の振動でも体力が削られるようだ。かなりの時間的余裕を見ていたのだが、その予想を上回って時間がかかっている。
カーリア国に戻ったら、文官も体を鍛えるようにさせよう。義人

が密かにそんなことを決意していると、馬車の窓がノックされた。

「ヨシト様、よろしいですか？」

「ん？　カグラか。どうした？」

声から相手を判断して、義人は窓を開ける。すると、馬車と併走していたカグラが口を開く。

「ハサラには今日中に到着すると“向こう側”に伝達してありますが、予定よりも大分遅れています。かといって、これ以上速度を上げれば文官の方々が耐えられないでしょう」

「ああ、俺もそれを考えてたところだ」

「かといって、何も告げずに到着が遅れるというのも礼を失します。そのため、遅れる旨を伝える使者をハサラへと向かわせてはどうでしょうか？」

「んー、たしかにそうだな。それじゃあ、誰か足の速い奴に行ってもらうか……って、足が速いだけでいいのか？　使者って文官じゃなくても大丈夫なのか？」

行って伝えるだけなら魔法剣士隊の誰かを使いに遣れば良い。だが、文官でなくとも良いのかと義人は首を傾げた。

「使者と言っても、遅れる旨を伝えるだけですから。しかし、こちらの不手際で遅れるのですからきちんとした使者を送るべきですね」

「きちんとした、ねぇ……」

カグラの言葉に、義人は僅かに考え込む。この場合足が速く、なおかつそれなりの地位にいる人間に頼むべきかと思案し、三人ばかり頭に思い浮かべる。

「カグラかミーファかシアラか……でもシアラは使者には向いてなさそうだな。だったらカグラかミーファが適任だろうけど、どちらにするべきか……」

小さく口に出して考えてみるが、それを聞いたカグラが苦笑した。

「それでは、わたしが行って参ります。ミーファも使者は性に合わないでしょうから」

公私を分けているのか、ミーファをちゃん付けせずに呼び捨てで呼ぶカグラ。そんなカグラの言葉を聞いた義人は、それもそうかと頷いた。

「それじゃあ、カグラに任せるよ。どうせ明日には着くからカグラはそのままハサラにいるとして、全体の指揮はどうする？」

「ミーファに委任します。ハサラに向かって進むだけですし、このくらいの人数だったら問題もないでしょう」

「そりゃそうか。まあ、王都に着くまでここから先にあるのは小さな村だけだし、途中で野営する必要があるかもしれないけどな」

ハサラまでの地図を思い浮かべて義人は苦笑する。それなりに大きな町や村ならば宿を借りることができるが、小さな村では宿すらないかもしれないのだ。それならばキャンプ気分で野営するほうが義人としても楽で、むしろそちらのほうが良い。もっとも、それは天気次第ではあるのだが。

「宿が借りれるようなら、ヨシト様だけでも泊まってください。良いですね？」

カグラとしても宿が借りられる可能性が少ないとわかっているが、

それでも釘を刺す。立場的には無理矢理借りることもできるのだが、それは義人が承諾しないだろう。カグラとしても、その案は義人が受け入れないとわかっているので口にしない。そのため、カグラは表に出さないようこっそりとため息を吐き、すぐさま気持ちを入れ替えた。

「それでは、わたしは先に行きますね」

「ああ。大丈夫だと思うけど、気をつけてな？」

「――はい」

義人の気遣いの言葉に笑顔を返し、カグラは前を向く。そして表情を引き締めると、全身に魔力を満たして『強化』を発動させた。

召喚から半年近く経ち、半分ほど回復した魔力の量はすでに義人の五倍近くある。その莫大な量の魔力を使っての力強い『強化』に、義人は少しばかり頬を引きつらせた。

「では、失礼します」

カグラはそう言って、一歩地を蹴る。義人は見送りをしようと窓から顔を完全に出そうとした瞬間、耳元に響いた重い音に思わず動きを止めた。

「……はい？」

思わず、義人の口からそんな声が零れる。『ドンッ』という、大槌で地面を殴りつけたような鈍い音が耳に届くと同時に、義人の視界からカグラの姿が消えていた。

「今の音、何？」

さすがに気になったのか、優希が尋ねる。義人はその問いで何とか我に返ると、慌ててカグラの姿を探した。だが、辺りを見回してもその姿はない。それでも馬車の先へと視線を向けてみると、それなりに良い義人の目でもギリギリ見える距離に紅白の巫女装束が見えた。

「……速すぎるだろ。百メートル何秒だっての……ん？」

カグラが走って行った方向を見ていた義人は、ふと地面に視線を向けた。

「これは足跡、か？」

“何故か”　一定間隔で足の形に陥没している地面を見て、義人は目を閉じる。そして深呼吸をすると、努めて前向きに考えることにした。

「こ、この足跡を追っていったらハサラに到着するな。うん、地図入らずだ」

自分で言って無理があるなと、義人は肩を落とした。

日が沈んで夜の帳が下りた頃、カーリア国の一行は夕食の準備をしていた。

予測した通り王都のハサラに到着することはできず、また、通りかかった村に宿がなかったので借りることをせずに進んだ結果である。借りられたとしても、住民を退去させなければ泊まることができなかったのも理由ではあるのだが。

「無理矢理借りるっていうのも嫌だし、俺一人だけ泊まるっていうのもなぁ……」

義人は火にかけられた飯ごうを座ったまま眺めながら、そう呟く。

当初は義人一人、もしくは優希や文官達を含めて宿泊するという案が出たのだが、野営の道具も準備していたので野営を選択した。

義人としては『キャンプっぽくて良い』などと考えていたが、それを口に出すことはない。

これほど大所帯なら魔物なども寄ってくることがほとんどなく、盗賊や夜盗も正規軍を相手にするほど馬鹿ではない。雑談がてらゴルゾーから聞いた『そもそも、レンシアでは“とある事情”から盗賊が旅人などを襲うことがほとんどありません』という言葉も野営することを決めた一因である。

もちろん、安全性が高いといっても見張りの兵を立たせ、周囲の警戒は怠らない。少し離れた場所には水場や森があり、魔物が襲ってくる可能性もゼロではないのだ。もっとも、様子を見に行った兵士の報告では強力な魔物が生息しているようには見えないとのことだったので、危険性はあまり高くない。見張りの兵や、あちこちで熾(おこ)した火を見れば警戒して攻撃してくることもないだろう。

「こっちから手を出す理由もないしなぁ……っと、そろそろ炊けたかな？」

火にかけた時間と飯ごうの様子を見た義人は、腰を上げようとする。しかしそれよりも早く、傍らに控えていたサクラが前へと出た。ただし、いつものメイド服ではなく動きやすさを重視した旅用の服装である。

「ヨシト様はそのままでいてください。こういった仕事は、わたし

や他の方が行いますから」

そう言うなり、テキパキと作業に取り掛かるサクラ。義人は浮かしかけた腰を下ろすと、ぼんやりとサクラの様子を眺めることにした。

「メイド服で見慣れているせいか、違う服装のサクラはかなり新鮮だなぁ……」

以前城下町に出かけたときもそうだったのだが、普段と違う服装というのは新鮮に見える。義人は甲斐甲斐しく、小動物のように動き回るサクラに若干癒されながら、他の場所へと視線を向けようとした。だが、それと同時に食欲を誘う香りが鼻に届き、反射的にその方向へと目を向ける。すると、目を向けた先では魔法剣士隊の女性兵士達が大きな鍋を囲んで何やら作業をしていた。その中には優希の姿も見え、すぐ傍では小雪が“お座り”をしながら作業の様子を眺めている。

「ん……良い匂いだな。魚介類っぽいけど何だ？　シーフードカレーでも作ってるのか？　って、カレー粉がないか」

義人は嗅いだことの匂いから適当に料理を想像するが、材料がないことに気づいて肩を落とす。サクラにそのままでいるようにと言われたが、好奇心に押されて義人は立ち上がった。そして作業をしている傍まで歩み寄ると、それに気づいたのか小雪が義人のほうへと首を動かして目を向ける。すると、そんな小雪につられたのか作業をしていた数人が義人へと振り向いた。

「何を作ってるんだ？」

畏まって敬礼でもしそうな兵士に苦笑をしつつ、義人は尋ねる。魔法剣士隊の男性兵士達は義人に対して“それなり”にフランクな態度を取ってくれるが、女性兵士はまだまだ固い。それでも、他の隊の兵士に比べれば大分柔らかい態度で口を開いた。

「ユキ様と共に汁物を作っているんです」

「汁物？　どれどれ？」

好奇心に従って鍋を覗き込むと、いっそう濃い香りが義人の鼻へと届く。食欲を誘うその香りに、義人は傍で鍋をかき回している優希へと顔を向けた。

「なあ優希、これって何の材料を使ってるんだ？」

「これ？　これはね、貝や魚の干物を使ってるんだよ」

「氷から解凍したんじゃなくて、干物？　ああ、そういえば以前カグラと干物について少し話したっけ。これを見る限り、成功したのかな？」

そんな報告はあったかと義人は記憶を漁るが、該当する記憶はない。もちろん、全ての情報が自分の下へと届くわけでもないので、義人は大して気に留めないことにした。

「試験的に作らせたのかもしれないしなぁ……まあ、それは後で本人に聞けば良いか」

鍋の中身を眺めつつ、義人はそう呟く。そして味見という名のつまみ食いでもしようかとしたとき、背後から肩を叩かれて動きを止めた。

「義人、少し良いか？」
「いえいえ、つまみ食いしようなんて思ってませんよ？　……って、志信か」
反射的に敬語で言い訳をする義人だが、声の主が想像と違ったことに肩の力を抜く。そもそも、想像した“声の主”はこの場にはいないのだ。
「つまみ食い？」
「いや、何でもない。それでどうしたんだ？　何か問題でもあったか？」
義人は何事もなかったように表情を繕うと、片手に棍を携えた志信へと話を振る。その問いに対して、志信は首を横に振った。
「特に問題があったわけではない。俺も周囲の様子を見てきたのだが、その報告をと思ってな」
「ああ、了解。少し場所を変えようか？」
優希に聞かせる話でもないと判断した義人は、そう提案して歩き出す。そして多少離れると、足を止めて話を再開することにした。
「しかし、志信も見てきたのか。わざわざ悪いな……それで、どうだったんだ？　最初の報告では、大して強力な魔物もいないって話だったけど」
最初に受けた報告を思い出しつつ、義人が尋ねる。すると志信は軽く頷くが、ほとんど見えない表情の中に“何か”が見えた義人は首を傾げた。

「もしかして、とんでもなく強そうな魔物でもいたのか？」
「いや、そういうわけではない。報告通り、下級の魔物が少し生息しているだけだった。ただ、森の中に焚き火をした跡があってな」
「焚き火？　いや、この世界なら旅人もたくさんいるだろうし、焚き火の跡があってもおかしくないだろ？」

志信の話に僅かな疑問を覚えるが、義人はその正体が掴めず話を進める。だが、義人の言葉を聞いた志信は首を横に振った。

「たしかに、旅人もいるだろう。だが、焚き火をするとしてもわざわざ魔物がいる森の中でするだろうか？」
「……そう言われてみればそうだな。でも、生息するのは弱そうな魔物だけだったんだろ？　腕に自信があったとか、魔物も襲ってこないような大人数だったのかもよ？」

義人がそう言うと、志信は口を閉じて黙考する。そして数秒ほど考え込み、そんな志信を見た義人は背中に背負ったノーレへと意識を向けた。

「ノーレはどう思う？」

志信がいるので、思念通話ではなく声で話しかける。するとノーレも数秒ほど考え込んだ後、義人と志信に対して思念通話を繋げた。

『腕に覚えがある旅人が焚き火をした……というのが一番可能性がある話じゃな。商人ならば護衛を雇っていても危険な要素を避けるじゃろうし、この国では盗賊の類の活動が活発ではないのじゃろう？』
「ゴルゾーはそう言ってたな」

ノーレの言葉に義人は頷き、志信は僅かに眉を寄せる。しかし、数秒も経つと志信は苦笑しながら肩の力を抜いた。

「警戒のしすぎか。そうだな、あれほど魔物が少ない場所ならば、俺も同じように焚き火をして休憩をする」

「……いやー、それはどうかと思うぞ？　あんまり危ないことはしないでくれよ？　まあ、志信なら大丈夫だとは思うけどさ」

現在全国を旅している志信の祖父を思い出し、義人は一応釘を刺す。

「気をつけよう。警戒の見張りも立てているし、何かあったらまた報告する」

「わかったよ。あ、俺に報告してくれるのは良いけど、ミーファにもちゃんと教えてやれよ？　後で拗ねるかもしれないし」

「……？　ああ、現在全体の指揮を執っているのはミーファだしな」

志信は義人の言葉に僅かに首を傾げるが、すぐに“自分の中”で納得がいったのか首肯して歩き出す。義人はそんな志信に苦笑したが、不意に服の裾を引っ張られて視線を下に向けた。すると、裾を口でくわえた小雪と目が合う。

「キュク、キュー」

「ん？　ああ、夕食ができたのか？」

「キュ！」

義人が小雪の言葉を適当に解釈すると、それで正解だったのか小雪が嬉しそうな声を上げる。義人もそれに笑い返すと、すでに十メートルほど離れた場所まで進んでいる志信に向かって口を開いた。

「志信、ミーファに夕食の時間だって伝えておいてくれるか？」

ミーファもすでに知っているかもしれないが、義人は志信に伝言を頼む。志信は足を止めて振り返り、義人の言葉に頷く。

「わかった。伝えておく」

「ありがとう。頼むよ」

簡潔な返答に義人は感謝の言葉を返し、何故か裾を噛んだままの小雪へと視線を移す。

「ほら、俺の服を食べても美味しくないぞ？　というか、それ以上強く噛むと簡単に破れそうだなぁ」

「キュク……」

義人の言葉を聞き、小雪は裾から口を離して小さく一鳴きする。義人は服の裾が破れていないことを確認すると、苦笑混じりに笑った。

「もしかして噛み癖でもあるんだろうか……もっと大きくなってから噛まれたら、大変なことになりそうだな」

自身の身の丈よりも大きくなった小雪に噛みつかれる光景を想像し、義人の口元が引きつる。

「今度、アルフレッドに相談しようかな」

「キュ？」

多分に冗談を含んだ義人の言葉だったが、当の小雪は首を傾げるだけだった。

第七十三話：接近

月が中天をやや過ぎた頃、義人は野営用の天幕の中で浅い眠りについていた。一定周期で寝返りをうち、一応は眠っているがふとした拍子に目が覚める。それを四回ほど繰り返した頃、義人は再び目を覚ましてため息を吐いた。

「ふぅ……よく眠れねぇ」

不満そうに、ポツリと呟く。天幕の中には布団が敷かれており、広さも四畳ほどあるため設備的な不満はない。だが、いつもと違う環境のせいか義人は上手く眠れないでいた。何もすることがなかったため、就寝したのが午後八時頃だったのも原因の一つかもしれない。義人はもう一度ため息を吐くと、頭を掻きながら体を起こす。

『眠れぬか？』

そうやって身を起こした義人に、傍らに置かれたノーレが話しかけた。義人はそんなノーレの言葉に、苦笑混じりに頷く。

「眠ったのが早すぎたよ。今何時ぐらいだ？」

『今は……午前一時前といったところじゃな』

「あ、五時間くらいは寝てたのか。でも、日の出まではまだまだ時間があるなぁ」

義人はもう一眠りするかと考えたが、すでにほとんど眠気がなくなっていた。しばらく寝転んでいれば眠れるかもしれないが、どれほどの時間がかかるかわからない。義人は十秒ほど思案すると、鞘に納まったノーレに手を伸ばした。

『どうしたんじゃ？』
「いや、このままだと寝付けそうもないから少し外に出ようかと思って」
『……ふむ、それも良いかの。気分転換にはなるじゃろ』
義人が眠れないことに対する配慮か、ノーレは義人の言葉に納得の意を示す。それを聞いた義人は寝巻きからジーパンもどきと薄手の長袖という動きやすい服装に着替え、ノーレを背負って天幕の入り口をくぐった。すると、護衛のために天幕の入り口前に立っていた近衛兵が義人に気づいて姿勢を正す。
「ヨシト王？　どうかされましたか？」
「いや、普段と違うせいかよく眠れなくてさ。ちょっと外に出て、気分転換でもしようかと思ってね」
「そうですか……カーリア国の場合、野営する機会も中々ないですからね」
義人の言葉に苦笑と納得を半分ずつ混ぜた返答をする近衛兵。義人はそれに笑いつつ、辺りを見回す。
周囲には義人の天幕だけでなく、他にもいくつかの天幕が設けられている。そしてその入り口や周囲には見張りの兵士達が立ち、一定時間経つと見張りを交代しているようだった。
「何か異常は？」
義人は一応、一番立場が上の人間として尋ねてみる。しかし、近衛兵は首を横に振るだけだ。
「特にないです。森のほうにも警戒の見張りを立たせてはいますが、

そちらも問題は……あ、シノブ様」
「え？　志信？」

近衛兵の視線が義人から後ろへと動き、それにつられて義人も後ろを向く。すると、片手に棍を持った志信が早足で歩み寄ってきていた。志信は義人の顔を見ると歩調を緩め、一メートルほど離れた場所で足を止めて口を開く。

「起きたのか？」
「ついさっきな。なんか、よく眠れなくてさ。それでちょっと外の空気を吸おうかと思ったんだけど……志信こそどうかしたのか？」

志信の雰囲気がいつもよりやや鋭く感じ、義人は疑問混じりに尋ねる。すると志信はその雰囲気を強めながら、表情を引き締めた。

「問題と言うべきか少し迷うが、気になることがあってな」

志信の言葉に、何かあったのかと義人も表情を引き締める。

「気になること？」

そう言って義人が促すと、志信は森のほうへと視線を向けて一つ頷く。

「森のほうに人影があってな。確認しにいったのだが、どうにも様子がおかしい」

「様子がおかしいって……月の明かりに照らされながら変な踊りでも踊ってたか？」

夜空を見上げてみれば、昼間の曇り模様が嘘のように晴れている。中天を過ぎた月は少しばかり欠けているものの、その月光は焚き火の明かりが必要ないほど明るい。

「人数は確認できただけで八人。身軽な服装と武器、そして体格から旅人だと思ったのだが、そのうちの一人が文官らしき格好でな」

志信は義人の冗談を綺麗に流し、義人は冗談が流されたことを気に留めず話に耳を傾ける。

「そして付近に荷馬車が一台あったのだが……」

「荷馬車ってことは商人じゃないのか？　文官っぽいのが商人で、残りは護衛とか」

「俺もそう思ったのだが、荷馬車に乗せてあったものが気になってな」

「……何が乗せてあったんだ？」

尋ねた義人が真っ先に思い浮かべたのは、麻薬の類だ。この世界にも存在していることは以前ゴルゾーから聞いたことがあるため、荷馬車に“白い粉”でも積んであったのかと想像していた。

「遠目だったから材質はわからなかったが、何かで編まれた袋が藁の上に乗せてあった」

「藁の上に袋？」

義人はやっぱり麻薬かと心の中で呟き、警察がいないこの世界ではどこに通報すれば良いのかと首を傾げる。

「その袋の大きさが、人が丸々入るくらいの大きさでな。おそらく、中にも人と同じぐらいの大きさのものが入っていると思うのだが」

だが、続いた志信の言葉にその考えは打ち消された。義人は頭に浮かんだ新しい可能性に、眉を寄せる。

「誘拐か？　いや、この世界だと人買いかもしれないな」

「かもしれん。だが、確証がなくてな。俺一人では確認するのも難しいから近衛兵を何人か呼びにきたんだ」

「あー、なるほどな。だから急いでたのか……って、俺に説明してる暇あるのか！？」

義人が慌てたように尋ねると、志信はそんな義人に苦笑してみせる。

「どうやら向こうは休憩しているようでな。そこまで慌てる必要もないだろう。だが、時間が余っているというわけでもない」

そう言いながら、志信は傍に立っていた近衛兵に目を向けた。その視線を受けた近衛兵は頷き返し、他の近衛兵のもとへと走っていく。

「確認を取ってくる。そしてもしも誘拐や人攫（ひとさら）いだったら……」

「攫われた人を奪取“しよう”」

暗に自分も行くと告げ、義人は背中のノーレを軽く叩いてみせる。それを見た志信は、ため息混じりに苦笑した。

「義人ならそう言うと思ったが、お前を危険な目に合わせるわけにはいかない。そのための近衛隊だし、ミーファやシアラの隊もいる」

「うーん……たしかにそうだけどさ」

志信の言うこともっともだと、義人自身納得してしまう。だが、このままこの場で待っていても気になって仕方ない。気分転換のつもりが、逆に気になることができてしまった。そんな義人の様子に、志信は小さく笑う。

「相変わらず、気になったことに首を突っ込むのが好きなようだな？」

志信の言葉に、嫌味なものはない。ただ、確認するかのような問いかけだった。それに対し、義人は頷いてみせる。

「まあ、性分だから。とはいっても、今の立場上それを実行するのも難しい、と」

そこまで言うと、義人は肩を竦めた。

「ついていきたいけど、まだ誘拐や人攫いかどうかわからないしな。ここは志信に任せるとするよ。ついていったことがバレたら、カグラにも怒られるしな。でも、志信だって無理はしないでくれよ？」

「了解した。義人はこのまま……といっても気になるだろうから、野営地の傍で待っていてくれ。護衛はミーファの隊に任せる。待つのも王の仕事だぞ？」

そう言って志信は集まりだした近衛隊のほうに一度目を向けると、義人の肩を軽く叩いてそちらへと歩き出す。するとそれに合わせて、今しがた仮眠から起きたらしいミーファが義人の傍まで駆け寄ってくる。起き抜けでも意識ははっきりしているらしく、ミーファは動きやすさを重視した白の鎧を身につけ、腰には愛用の刀を差していた。そして義人の傍に着くと、臣下の礼を取って膝をつく。

「お呼びですか？」
「俺が呼んだわけじゃないんだけど……志信が森のほうで気になることがあるって話でね。それで、志信が確認に行ってる間はミーファ達に護衛を頼むよ」
「はっ。了解しました」
公私を分けたミーファの態度に義人は苦笑する。
「ミーファさ、別にそんなに畏まった態度を取らなくても良いぞ？　というか、むしろもっとフレンドリーに……いや、砕けた態度で話してくれよ。志信を相手にしてるみたいにさ。ミーファのほう年上なんだし、気兼ねなく呼び捨てでも良いんだけど」
「は……しかし、それは……」
どういった言葉を返せば良いのか、ミーファは困ったように視線を彷徨わせた。義人はそんなミーファの態度に、苦笑を深める。
「いや、ゴメン。ミーファにとってはそんな気軽な問題じゃないよな」
義人の苦笑混じりの言葉に、ミーファは黙って頭を下げた。義人はせめて志信が近くにいたらと考えるが、志信は近衛隊を連れて森のほうへと向かっているためすでにいない。
そのことをぼんやりと義人が考えていると、自身の後ろから足音が聞こえて肩越しに振り返った。
「誰だ？　っと、サクラとシアラか。悪いな、起こしたか？」
義人が振り返った先に立っていた人物、サクラとシアラに対して、義人は反射的に軽く謝る。すると、サクラは小さく笑った。

「いえ、自然と目が覚めただけです。でも、何かあったんですか？」

小首を傾げつつ、サクラは義人の隣に立つミーファに目を向ける。そんなサクラの隣では、サクラと同じタイミングでシアラが首を傾げていた。

「……交代の順番、間違えた？」

ミーファを見ながら、シアラが小さな声で尋ねる。すると、ミーファは首を横に振った。

「いや、間違いではない。ただ、シノブにヨシト王の護衛を頼まれてな」

「……そう」

納得したように引き下がるシアラ。しかし、ミーファの言葉を聞いた義人は困ったように眉を寄せた。

「もしかして、まだミーファが起きる時間じゃなかったのか？」

「はい。わたしが見張りに立つのはシアラ隊長の後の予定でした」

「うわ、そりゃ悪いことをしたな……まったく、志信にしては珍しいミスだな」

「ミスとは？」

「ん？　ああ、失敗ってことさ」

通じなかったか、と義人は笑いつつ、簡単に説明する。しかし、ミスの意味を知ったミーファは義人の言葉を否定するように首を横に振った。

「いえ、おそらくシノブ殿は護衛という立場を考えてわたしを起こしたのかと」
「護衛という立場？」
「はい。見張りの順番としてはシアラ隊長に任せるべきなのでしょうが、万が一何かが起きた場合、魔法剣士のわたしのほうが護衛に適任だと思ったのでしょう」
「適任……あ、魔法剣士のほうが接近戦向きだもんな」

義人が納得したようにそう言うと、ミーファも頷く。その際シアラの帽子が僅かに横に揺れたが、それに気づいた者はいない。

「ええ。しかし、シノブ殿も中々に心配性なところがあるみたいですね」
「ははっ、志信は良い奴だからな。それに、気配りもできるし」
「いえ、気配りはできないかと」
「え？」

コンマ数秒で否定され、義人は思わずミーファを見る。すると、ミーファは慌てたように咳払いをした。

「い、いえ。何でもないです。きっとヨシト王の聞き間違いです」
「はぁ……そう、か？」

志信が“何”に対して気配りができないと判断されたのか気になるが、そこは突っ込まないほうが良いのだろうと義人は判断する。その際、シアラの帽子が今度は縦に揺れたが誰も気づくことはなかった。

「気配りって何の？」
「アンタ馬鹿ねー。そりゃ決まってるでしょ。シノ……ひっ！」

周囲を警戒しつつも話に耳を傾けていた魔法剣士隊の男性兵士が女性兵士に尋ねたが、それに答えようとした女性兵士の声が途中から悲鳴に変わる。何事かと男性兵士が女性兵士の視線を追うと、射殺さんばかりの眼光を叩きつけるミーファにたどり着いた。そのミーファの目を見て、男性兵士は思わず回れ右をする。

「さーて、あっちのほうの見回りをしてくるかなー」
「ちょ、ちょっと待ってよ！　わたしも行くってば！」

逃げるように走り出す男性兵士を追いかけ、女性兵士も走り出す。義人はそんな兵士二人を横目で見ると、『平和だなぁ』と内心だけで呟いた。

近衛隊のうち魔法が使える者を引き連れ、志信は夜の森へと足を踏み入れていた。全員走った際に音が出る鎧などは身に付けず、魔法剣士は刀を、魔法使いや治癒魔法使いは杖を持って静かに移動する。ただの確認なら魔法剣士隊に任せても良かったのだが、こういった偵察染みた行動には向かない。

志信は先頭付近を移動しつつ、常に周囲の様子を窺う。そんな志信に合わせるように、近衛兵も周囲を警戒しつつ移動していた。幸いと言うべきか、魔物の姿はない。

「……」

無言で移動し、先ほど焚き火が行われていた場所の近くまで歩み寄る。そして木の陰から様子を窺うと、僅かに話し声が聞こえた。聞こえた言葉は日本語ではなくコモナ語だったが、志信は声の数と

目視で人数を数えると、最初に数えた人数通り八人だと手信号で近衛兵に伝える。それを受けた近衛兵が頷くと、志信はこの場での監視を任せて荷馬車のほうへと足を向けた。

『……と……だろうな？』

歩き出すと同時に、そんな声が志信の耳に届く。距離があり、コモナ語で話されているため志信にはよく聞き取れなかった。だが、周囲を気にせず喋っているので魔物に対する警戒が薄い文官の男だろうと当たりをつけ、荷馬車のほうへと歩を進めていく。

『それにしても……』

『ああ』

今度は違う人間の声。先ほどよりも距離がありながら、“何故か”良く耳に届いた。そのことに志信は疑問を抱き、思考した一瞬の後にさらに声が響く。

『でかい鼠（ねずみ）がいるようだ』

――その言葉に、志信は地を蹴っていた。

第七十四話：接敵

志信が地を蹴った瞬間、今まで志信がいた位置目掛けて四つの火球が飛来する。高速で木々の間をすり抜け、なおかつ正確に狙われたことに、志信はいっそう気を引き締めながら臨戦態勢を取った。それと同時に、近衛兵に対して片手で『散開、各自任意に迎撃』と指示を送る。

「魔法の腕だけならば、ミーファよりも上か……」

今しがたの火炎魔法を見て、志信は判断したことを呟く。放った後の魔法の軌道は操作できず、初めにどんな軌道で飛ばすかを決めなくてはならない。しかし、軌道を決めるといっても直線か曲線かを選択する程度で、複雑な軌道を描くことなど不可能だ。だが、相手は木々が生い茂る森の中で障害物を全て避けるように魔法を撃ってきた。それだけでも、相手の魔法の腕が窺える。

志信は『無効化』の棍を軽く握り、足音を隠しながら移動していく。最初の位置から多少動いたとはいえ、相手はこちらの位置を正確に把握した人間。それが魔法を撃ってきた者の実力か、それとも何かしらの魔法具でも使ったのかはわからない。だが、その場に留まり続けるのは得策ではなかった。

「……ッ！？」

僅かに響く風切り音。志信は自身に向かって飛来する“何か”へと向き直り、月明かりの薄暗い視界に映った鈍い金属の色を見て回避に移る。木々の隙間を縫って投げられた三本の投擲（とうてき）用のナイフの狙いは、頭と胴体。そして、残りは牽制。

薄暗い視界の中、棍で弾くには正確性に欠ける。そう判断した志

信は一歩地を蹴って真横へと移動し、ナイフの軌道から身を逃がす。その数瞬後にナイフが通り過ぎ、背後の木へ乾いた音と共に突き刺さった。志信はナイフが飛んできた方向、すなわち焚き火が行われていた場所へと素早く視線を向け、僅かに目を見開く。そこには狼狽した文官らしき男一人しかおらず、他の七人の姿は既にない。

その瞬間、志信の頭上から木が軋む音が響く。それと同時に感じた殺気に体が反応し、志信は身を捻りながら跳躍した。敵の頭上を取った人間が取る行動など、迷うことのないほど限られている。

『――ちっ！　良い反応じゃねえか！　だが……』

避けた志信に届く、どこか賞賛染みた声。コモナ語で向けられた言葉を理解するよりも早く、志信は声の主へと目を向ける。

志信が見たものは、頭上から落下する男とその勢いを伴って振り下ろされる片刃の剣。棍で受けたならばそのまま両断されかねない威力の一撃を放ったのは、少なくとも志信には面識のない男だった。

男が手に持った片刃の剣を見た志信の脳裏に、以前戦った敵の姿が過ぎる。それは同じような片刃の剣を使い、雷の魔法を振るっていたガルアスという男――。

『これは避けられるか！？』

志信の思考を遮るように、男が叫ぶ。一瞬とはいえ、戦闘中に思考が目の前の敵からずれた。“そのこと”に対して僅かに動揺した志信の目に映ったのは、頭上から降り注ぐ炎の雨だった。

「おいおい……誰だよ、森の中で火炎魔法使った奴は。森林火災が起きるっつーの」

冗談混じりに呟く義人だったが、表情は笑っていない。四つの火球を見て警戒を促していたのだが、その後に見た降り注ぐ火炎は放っておけるものではなかった。最初の火球だけならば、百歩譲って明かりのためなどと解釈もできる。しかし、今しがた義人が見たものは明らかに殺傷を目的としていた。

義人は森へと向かった親友の姿を頭に思い浮かべ、僅かに表情を引き締める。

「志信、悪いけどここでじっと待っとくのは無理みたいだ」

「ヨシト様？」

小さく呟いた義人の言葉に、傍に控えていたサクラが首を傾げた。そして、義人の表情を見て慌てたように口を開く。

「だ、駄目ですよヨシト様！　ヨシト様は安全なところにいてくださいっ！」

サクラは両手を広げ、義人が走り出すのを遮るように前へと出る。それを見た義人は、引き締めた表情の中に少しばかりの申し訳なさを覗かせた。

「……悪い。サクラの言うことはもっともだけどさ、志信が森に行くのを許可したのは俺なんだ。その志信が危険かもしれないって時に、じっとしとくのは無理だよ」

だから、と言葉をつなげ、義人は不意を突くように駆け出す。

「あっ！？　ヨシト様！？」

虚を突かれたサクラがすぐに手を伸ばすが、義人には届かない。風のような速度で走り去る義人を見て、サクラも慌てて後を追う。止めることもできずにそれを見ていたミーファは、傍に控えていた魔法剣士隊の兵士に視線を向ける。

「寝ている奴を起こせ！　わたしもヨシト王の後を追う！　野営地の護衛の指揮は……」

そこまで言って、ミーファは今まで近くにいたはずのシアラがいないことに気付いた。慌てて周りを見回してみれば、杖を持ったシアラがサクラの後ろを追走している。それを見て、ミーファは歯を噛み締めた。自身の他に、指揮を取れる立場の人間がいない。

「……わたしまで離れるわけにはいかないか。仕方ない、指揮はわたしが執る」

せめてあと一人隊長を連れてくれれば良かった。ミーファは指示を待つ兵士達に指示をしながら、心の中でそう思った。

『……やりすぎたか』

男は赤い短髪を面倒そうに掻くと、自分が放った魔法で燃えている周囲の木々を見て軽く息を吐く。威力が強すぎたのか、燃えると同時に発生した大量の煙が鬱陶しい。

『こりゃ“追撃”してくる奴らにも気づかれるな。そろそろお役御免と……ん？』

視界を遮っていた煙が、僅かに不規則に揺れる。男はそれが何故起きたのかを考える前に、反射的に後ろへと跳んでいた。

『っ！？』

跳んだ瞬間、顔面目掛けて“何か”が向かってくる。鼻面を狙ったその一撃を男は首を横に倒すことで避け、僅かに吹き出た冷や汗を拭うことなく着地した。そして自分に向かってきたものを確認すると、油断無く片刃の剣を構えて口の端を吊り上げる。

『避けたか、それとも耐え切ったのか……どちらにせよ、驚いたな』

煙の中から突き出された棍を見て、男は多分に賞賛を含んだ声を投げかけた。

『……いや、そのどちらでもない』

その賞賛に対する返答は、否定。どこかぎこちないものの、それでもきちんと通じるコモナ語に男は片眉を寄せる。それと同時に煙の中から突き出された棍が引き戻され、煙を払う。

『――打ち消した。それだけだ』

言葉少なに告げ、僅かに先端が発光する棍を片手に志信が煙の中から姿を見せる。『無効化』で打ち消したとはいえ、服のところどころが焦げていた。だが、それでもかすり傷程度しか負っていない。

志信は仕切り直しと言わんばかりに棍を構え、それを見た男は喜びの感情で目を細めた。だが、それと同時に少しばかり首を傾ける。

志信に対して火炎の雨を降らせた男は、油断無く志信の構えと風貌、手に持った棍を見て僅かに目を見開く。そして、楽しそうに口

を開いた。

『『無効化』の棍にその構え……アンタ、もしかしてシノブか？』

「……？」

名を呼ばれ、志信は僅かに眉を寄せる。しかしその間も構えを崩すことなく、隙を窺うようにゆっくりと距離を縮めていた。すると、そんな志信の動きを見た男が納得がいったとばかりに頷く。

『やっぱり、か。隊長が楽しそうに話してたが、中々楽しめそうじゃないか』

『隊長？』

『っと、何でもねえよ』

片刃の剣を構え、半身の体勢で男は笑う。その様子を見た志信は、油断するきっかけになったことを思い出した。

『まさか、あの男の仲間か？』

『んん？　あの男って言われてもなー。誰のことだかさっぱりだ』

とぼけた男の言葉に、志信は無表情で言葉を発する。

『ガルアスという男だ』

以前戦った“敵”を頭の隅で思い浮かべつつ、志信は詰問した。それに対して、男は軽く肩を竦めてみせる。

『さて、ね。聞かれたら答えなきゃいけないって法もないだろう？』

『それもそうだな。ならば……』

志信は握った棍を男に向けると、闘志の滾る目を細めてほんの少しだけ口元を笑みの形に変える。

『倒して吐かせる』
『はっ、上等だ』

男が笑い飛ばし、剣と棍が交差した。

月明かりが照らすものの、森の中は薄暗い。そんな森の中で、十六の影が入り乱れていた。
片刃の剣と刀がぶつかり合い、時折魔法が飛び交う。さながら戦場染みた空気が場を満たし、それを肌で感じ取った近衛兵の一人は小さく舌打ちをした。
志信と共に森へと入ったのは五分ほど前。焚き火をしている者達を囲むように展開していたが、相手はすでに察知していたらしい。一人が志信のもとへと向かい、残りの七人は文官らしき男を除いた六人が向かってきた。
『散開、各自任意に迎撃』という指示を受けて抜刀したものの、戦況は思わしくない。“こちら”の魔法剣士六人に魔法使い三人。それと治癒魔法使いが一人の合計十人。それに対して、相手は六人。全員が魔法も接近戦もこなせるらしく、しかも一人一人の腕が違う。倍近い人数がいるというのに、押されるのは近衛隊のほうだった。

「くそっ！　なんだこいつら!?」

荒い息を隠そうともせず、一人の近衛兵が叫ぶ。魔法剣士である彼は前衛として刃を合わせていたのだが、魔法使いの援護がなければすでに死んでいただろう。そう思わせるだけの実力差を感じ、そ

れと同時に自分が死んでいないことに僅かに安堵していた。
もっとも戦力となる志信の姿はない。相手側の指揮官と戦っているらしく、離れたところで火炎魔法の炸裂音が彼の耳に届いた。それがかつて魔法剣士隊にいた頃の隊長だったミーファが使う火炎魔法よりも高威力に感じ、彼は自分の内側に湧き上がる恐怖心を必死に押さえ込む。
もしも近衛隊に引き抜かれなかったら、今の自分はいない。近衛隊で鍛えられなかったら、おそらく相手と数合斬り合った時点で死んでいた。だが、無傷とは言えなくともまだまだ刀を振ることができる。

「もう少しすれば異変を察知して援軍がくる！　それまで凌ぐぞ！」

彼は自分を励ますように、そう叫ぶ。周囲の近衛兵はそれに追従して声を上げるが、斬り合ってる者もいるため全員から返答があるわけではない。このままでは当初の目的だった積み荷の確認もできないが、時間を稼げば稼ぐほど援軍が駆けつける可能性が高くなる。
そう考え、それが彼の油断に繋がった。
僅かに気が緩み、生まれた隙。それを突き、“敵”が魔法で作り出した幾多の氷の矢が最短の距離を突き進んで飛んでくる。木の杭ほどの大きさがある氷の矢は人体における急所を的確に狙い、もし一本でも命中すれば確実に即死するだろう。その恐怖と緊張、数分とはいえ殺し合いを演じた疲労で思考が凍結し、彼の体は回避という行動を取らせなかった。
後方から味方による火炎魔法が飛び、何本かの矢を溶かして撃ち落す。だが、それでも足りない。
彼は、眼前に迫る死の気配に歯を噛み締める。数秒と経たず己の体を貫く氷の矢を彼は見据え――。

「失礼します」

そんな声と同時に、真横へと引き倒された。それと同時に倒れた体の上を数本の氷の矢が通り過ぎ、仲間の間を縫って森の中へと消えていく。

「なっ……ん、だ？」

襟首を掴まれて無理矢理引き倒された影響か、はたまた己が生きていることへの疑問か。彼の口から零れたのは、途切れ途切れの問い。その問いに対して、彼を引き倒した少女は困ったように微笑む。

「えっと、すいません。カグラ様みたいに空中で全ての魔法を撃ち落す自信はなかったので、無理矢理“避けて”もらいました」

「あ……いや、助かりました」

彼には、最初その少女が誰だかわからなかった。しかし、追撃を警戒して前を見据える横顔には見覚えがある。

「あなたは、ヨシト王の……」

「はい。メイドのサクラと申します」

肩口で切りそろえた栗毛の髪を僅かに揺らし、サクラは名を口にした。いつもと違う服装だが、彼の主君である義人の世話をしている姿を覚えている。すると、それに合わせるように傍に誰かが立った。

「サクラって……足、速いのな」

僅かに息を乱しながらの声。彼が声のほうへと目を向けると、そこには王剣を片手に持った義人が立っていた。

「……わたしは、あっちに向かいます」

森の中へと飛び込む前に、義人の隣を追走していたシアラがそう口にする。それを聞いた義人は、シアラが示した方向を見て首を傾げた。その方向の先には、先ほど火炎魔法が使われた場所がある。

「あっちは……さっきの場所か。何か理由があるのか？」

「……あっちのほうから、強い魔力を感じる……違った。感じます。だけど、多分それは一人。でも、この先では多少強い魔力と弱い魔力が戦ってる……戦ってます」

「別に言い直さなくて良いぞ？　カグラもいないし、話しやすいように話してくれ」

いちいち言い直すシアラに苦笑しつつ、義人は続きを促す。

「……弱い魔力は、多分味方。徐々に押されてる……感じ？　それに、近衛隊を指揮する権限がわたしにはない……です」

小さく首を捻るシアラ。義人はそれを聞いて、前方を警戒しながら走るサクラへと顔を向ける。

「サクラはどう思う？」

「今からでも良いので、ヨシト王には野営地に戻ってほしいです」

「いや、そういうことじゃなくてですね。というか、ここまで来て引き返すわけにもいかないと思うんですよ。それに、魔法が使える奴は多いほうが良いんじゃないかなーと思う次第でして、はい」

義人の行動に腹を立てているのか、サクラは僅かに頬を膨らませたままで答えた。義人はそれに対して僅かに目を逸らしつつ、腰を低くして弁解する。それに対して、サクラは僅かに走る速度を落として義人の隣に並んだ。

「もうっ、後でカグラ様に怒られるのはわたしなんですからね？」
「ごめんごめん。それに、カグラに怒られるのは俺も一緒だろうさ。で、どう思う？」

メイドという仮面が外れて珍しく歳相応の表情を見せるサクラに謝罪し、義人は先ほどの問いを再度繰り返す。それに対してサクラは義人の護衛としての本分を取り戻し、表情を引き締めると共に僅かに思案して口を開く。

「シアラ様の案が妥当ではないでしょうか？　一人のほうと戦っているのはおそらくシノブ様ですが、シアラ様の援護があれば戦局を変えられるでしょう。ヨシト様とわたしは近衛隊のほうに向かい、救援をするのが一番効果的かと」
「よし、じゃあそれでいこう」

サクラの案に義人が頷くと、今まで隣を走っていたシアラが小さく一礼して走る方向を変える。義人は小柄な割に力強いその走りに感嘆しつつ、周囲を警戒しているサクラと共に近衛隊が戦っている方向へと足を向けた。幸いというべきか、時折飛び交うバレーボールサイズの火球が目印になっている。接近して斬り合っているのか、耳に届く剣戟の音も良い目印だ。

義人は大きく息を吸い込むと、背負ったノーレに手を伸ばして引き抜く。これから起こる戦いに対してか、義人の腕が僅かに震えたが前を走るサクラが気付くことはない。

「まずい、ですね」

すると、今まで周囲の様子を窺いながら走っていたサクラがポツリと呟いた。それを聞いた義人は、あと十秒ほどで到着する戦場に目を向けて歯を噛み締めた。

「行ってくれ、サクラ」

元の世界よりも良くなっている視力が、味方の劣勢を知らせる。そして、それを知った義人は同時に“命令”を口にした。

「真っ直ぐ、すぐに追いついてください」

周囲に敵がいないことを確認したのか、サクラはそれだけを答える。そして“本気”で地を蹴り、一気に加速した。

「速っ！？」

一歩毎に大きく距離を離され、義人が思わず叫ぶ。すると、それを聞いたノーレが若干呆れたような声を出した。

『お主も自分で『強化』を使えば、あれくらいはできるようになるわ。どうでも良いことに気を割かんで、目の前の出来事に集中するんじゃな』

「どうでも良いって……まあ、たしかに今考えることじゃないか」

義人が納得して前を見ると、サクラが一人の近衛兵を力任せに引き倒す光景が飛び込んでくる。それを見て、軽口を叩くべく口を開いた。

「カグラもだけど、サクラも怒らせたらやばいな」
『後でそう伝えるとしよう』
「いや、それは勘弁して」

そう言って、義人はノーレを強く握り締める。握り締めたその手が僅かに震えていたが、ノーレは何も言わなかった。そしてそのまま近衛隊のもとへと辿りつき、義人は息を整えながら口を開く。

「サクラって……足、速いのな」
「えへへ……鍛えてますから」

義人の言葉に喜色を含んだ返答を返すが、サクラの視線は眼前の男達から動かない。義人もノーレを構えると、それを見た男達が僅かに視線を合わせた。さらに、そのうちの一人が別の方向に視線を向けて何事かを呟く。

義人達には聞こえなかったが、それを聞いた男達は片手で剣を持ち、もう片方の手を義人達へと向けた。その動作が魔法を放つためだと判断した近衛兵達も、同じように魔法を放とうとする。敵と比べて魔法使いとしての腕は劣るが、それは量で補えば良い。そう判断した近衛兵達だが、男達は不意に手の向きを変える。そして、それを疑問に思う間もなく“周囲の木々”に向かって魔法を放った。生み出された氷の矢が木々を抉り、時には撃ち抜き、火炎が枝葉を燃やす。

「何を……っと!?」

氷で幹を撃ち抜かれた木々が倒れ、義人達は慌てて回避に移る。中には火炎によって枝葉が燃えているものもあり、義人は内心で舌打ちした。

『ノーレ、一気に吹き飛ばすぞ！』
『駄目じゃ。燃えている木々を風で吹き飛ばせば、周囲に燃え移る可能性がある』

義人がノーレに魔力を送ろうとするが、冷静なノーレの声がそれを遮る。それを聞いた義人は倒れこんでくる木々を避けつつ、後方へと跳んだ。すると男達は義人達に背を向け、置き土産と言わんばかりに火球を宙に浮かべた。

「くそっ……あれは防ぐぞ！」

今度こそ自分達が狙われていることを察してノーレを構えた義人が前に出る。近衛兵達も使える攻撃魔法を周囲に浮かべ、同時に放った。

繰り出される棍の打突を、片刃の剣が弾く。すでに数十合と繰り返された攻防に、終わりは無い。

「はぁっ！」
『ふっ！』

互いに気合いのこもった声を上げ、目まぐるしく立ち位置を変えながらぶつかり合う。志信としては近衛隊の様子が気になるが、相手も易々と通すことはない。倒して吐かせると言ったが、実力はほぼ互角。単純な“技量だけ”なら志信に多少分があるが、相手の持つ戦闘経験がその差を埋める。

志信が『無効化』の棍を手にしているため、相手が攻撃魔法を使うことはなかった。それに対して、志信は『強化』以外使えない。

それ故に接近戦しか取る手が無いのだが、試合とは違った種類の緊迫感に包まれた志信は適度な緊張と高揚感を覚えていた。

『ハハッ！　楽しそうに戦うじゃねえか！』

そんな志信の様子を見て取ったのか、男が楽しそうな声を上げる。その言葉に志信は自分の状態を確認して、僅かに吊り上った口元を真一文字に結んだ。この世界に来てから数度味わった感覚だが、元の世界では味わうことがなかったであろう“殺し合い”の雰囲気に呑まれていたらしい。

志信は自分の新しい一面を驚くことなく受け入れ、今度は意識的に笑ってみせる。

『そちらこそ、頬が緩んでいるぞ？』

親しい友に笑いかけるように告げ、同時に心臓目掛けての打突。男はその一撃を弾くことでかわすと、今度は逆に踏み込んで斬りかかった。

『こんな楽しい“殺し合い”なんだ、頬も緩むさ。特に、今回は隠密が任務で暴れてなかったしな』

『隠密だと？』

胴体を薙ぎにきた一閃を、志信は引き戻した棍で受け流す。そして僅かに相手の体勢が崩れたところを狙い、前蹴りを放った。だが、男は独楽（こま）のように回転することで蹴りを回避する。

『おっと、いけねえ。口が滑ったな』

おどけるように笑い、男は回避した体勢で地を蹴って後方へと距

離を取った。そして何度目かになる仕切り直しをしようとして、志信の後ろに目を向ける。続いて、離れたところから耳に届く魔法の炸裂音を聞いて肩を竦めた。

『あー……くそっ。時間切れか』

やや悔しそうに呟くと、男は片刃の剣を鞘に納める。それを志信が怪訝そうな顔で見た次の瞬間、上空から男目掛けて氷の矢が降り注いだ。男はそれに対し、空中に向かって火炎魔法を放つことで相殺する。志信はその隙に踏み込もうとしたが、それを見越したように火球が飛んでくる。

志信が足を止めて炎を打ち消そうとすると、今度は風の塊が飛来して炎を吹き散らす。それを見た志信は警戒を緩めずに背後の人物に目を向け、目礼を向けた。

「シアラか、助かった」
「……気にしないで」

志信の礼に、シアラは小さな返事を返す。そして志信の横に並ぶと、火球を放った男は面白そうに志信とシアラを見た。

『へぇ、氷と風が使えるのか。少しは楽しめそうなお嬢ちゃんだが……うーむ、貧相な体で俺の好みじゃないねぇ』

シアラが接近戦ができないように見えたからか、それとも女性的な意味があったのか。男はそう言って小さく笑う。それに対してシアラの眉が僅かに動いたが、薄暗い視界のためそれに気付いた者はいなかった。

『名残惜しいが、ここまでとさせてもらう。“もしも”次があった

らまた会おうぜ？』
『逃がすと思うとのか？』

少しずつ後ろに下がる男を追うように、志信も前へと出る。その隣ではシアラが鋭利な氷の矢をいくつも作り出し、男の胴体に狙いを定めた。

『おっかないねえ。だが、捕まるわけにもいかないんだな、これが』

男はそう言って懐に手を入れ、黒い球体を取り出す。魔法具が存在する以上、どんな形状の道具でも油断はできない。それが何なのか志信は警戒するが、男は軽く笑った。

『別に武器ってわけじゃないさ……そらよっ！』

男が黒い球体を地面に叩きつける。すると、一気に煙が噴出して周囲を覆った。月明かりがあるとはいえただでさえ薄暗い視界が完全に漆黒に染まり、志信は踏み込むべきか僅かに躊躇する。

『ははははっ！　じゃあな、シノブ！　俺の名はグレアだ！　次会うことがあったらちゃんと……うおっ！？　あぶねえ！』

煙幕を張った男……グレアが最後に名乗り、途中から悲鳴に似た声を上げた。志信が何事かと眉を寄せると、隣から風切り音が聞こえてそちらへ目を向ける。すると、そこには無表情で氷を撃ち出すシアラの姿があった。声がした場所を狙っているのか、黙々と煙幕目掛けて氷の矢を撃ち込んでいる。

『おっかねえお嬢ちゃんだな、おい』

最後にそれだけを言い残し、グレアの気配が希薄になっていく。煙幕と共に逃げたと志信は判断し、追撃するべきか思案してため息を吐いた。

「あれほどの腕なら、易々とは追いつけんか」

近衛隊も気になると呟き、志信はようやく魔法を撃ち終えたシアラに視線を向ける。

「気は済んだか？」

「……当たってれば気が済む」

「そうか」

シアラの発言をさらりと流し、志信は近衛隊がいるであろう方向に体を向けた。

「ひとまず合流しよう。あっちにも援軍が行ったのか？」

「……王様と、サクラが行った」

言葉短くシアラが告げると、志信は苦笑混じりのため息を吐く。

「やはりか。義人らしいといえばらしいのだが、できれば……」

義人の行動に対して何かを言おうとした志信の言葉が止まる。

「……どうしたの？」

言葉を切った志信に対して、シアラが不思議そうに尋ねた。その問いを受け、志信は視線で最初焚き火が焚かれていた場所を見るよ

う促す。
そこには、狼狽した文官らしき男が立っていた。

「一体何だったんだ？」

放たれた魔法を相殺すると、敵は波が引くように逃げ出した。義人はその逃げっぷりで呆気に取られていたが、すぐさま気を取り直す。

「追撃……は無理か」
「はい。この薄暗い視界の中で追うことは困難ですし、こちらも無傷じゃないですから」

義人の言葉にサクラが答える。それを聞いた義人は、気が抜けて膝をついている近衛兵達へと振り返った。そして、疲れているものの全員深手を負っていないことを確認して口を開く。

「重傷者は？」
「……いません。ですが、その一歩手前が何人かいて追撃は無理そうです」
「そうか……じゃあ、ひとまず野営地に戻ろう。怪我を負っていない、もしくは軽傷の奴は肩を貸してやってくれ。用心のために治癒魔法使いを何人か連れてきておいて正解だったな」

傷を負わなかった近衛兵がそう報告し、義人は“表面上”は冷静を装って指示を出す。近衛隊の中にも治癒魔法使いが一人いるが、それでは手が足りない。義人も怪我人に肩を貸そうとして、ふと視界に入った物を見てその動きを止める。

「ヨシト様？　どうかしましたか？」

動きを止めた義人を見て、サクラが声をかけた。それを聞いた義人は、薄暗い視界で目を凝らして森の中を注視する。そして、自分が見た物を確信してから口を開く。

「……馬車は置いていったのか。よし、中身を確認しよう。サクラはついてきてくれるか？」

「え？　あ、はい」

当初の目的を思い出し、義人は遠目に見えた馬車へと足を向ける。近衛隊からも何人かついていこうとしたが、それは負傷者の護衛と運搬を理由に断った。

「ノーレ、辺りに人の気配は？」

『……少なくとも、近距離に魔力は感じんな。知った魔力が二つほど移動しておるが……これは仏頂面達じゃな』

「そっか。志信は無事だったか」

嬉しげに笑うものの、義人は警戒を解かずにノーレを握ったままで馬車へと近づいていく。サクラはそんな義人を守るように周囲に目を向け、共に歩いている。

そうやって馬車のところまで辿りつくと、志信の言った通り藁の上に“何か”が入った袋が乗っていた。大きさはサクラの身長よりも大きく、義人の身長よりは小さい。

「さて、何が出ることやら……」

「ヨシト様は下がっていてください。わたしが開けます」

可能性は低いだろうが、突然襲われることを考慮してサクラが袋に手をかける。そして慎重な手つきで袋の開け口を縛ってある縄を解き、何があってもすぐに反応できるように警戒しながら覗き込んだ。

「っ！？」

覗き込んだサクラが息を飲む。それを見た義人は警戒しながらサクラの傍へと歩み寄った。

「何が入ってたんだ？」

死体でも入っていたのかと嫌な想像が頭を掠めたが、サクラの顔に浮かんでいる感情は困惑。それを読み取った義人は内心首を傾げながら、サクラと同じように袋の中を覗き込んだ。そして、袋の中を確認してサクラと似た表情で困惑した声を漏らす。

「女の、子？」

義人は思わず隣のサクラに確認を取る。

「そのようです」

そう言いつつ、サクラは袋に入った少女を両手で抱える。そして地面に下ろすと、指先に氷の刃を生み出した。続いて中の少女を傷つけないように袋を手早く切ると、切れ目から袋を開く。

袋の中から姿を見せたのは、白いドレスを身に纏った少女だった。淡い色合いの金髪に、日本人とは違う造詣の整った目鼻立ち。目を閉じてはいるが、どことなく高貴な雰囲気が漂っている。歳は義人と同じか、前後一歳違い程度だろう。

「すみませんが、ヨシト様は少し後ろを向いていてもらえますか？」
「ん？　ああ」
真剣な表情でサクラに言われ、義人はすぐに背を向けた。サクラは義人が後ろを向いたことを確認すると、手早く少女の状態を確認していく。
少女は大きな服の乱れはなく、傷を負っている様子もない。サクラは呼吸音や心拍数も確認すると、背を向けた義人に報告をする。
「傷などもないですし、意識がないだけみたいです。おそらく、薬か何かで眠らされたんだと思いますが……誘拐でしょうか？」
「着ている服からしてそれっぽいな。ところで、もう後ろを向いても大丈夫か？」
「あ、はい。大丈夫です。でも、どうしましょうか？」
「どうするって、野営地につれていくしかない……誰だっ！？」
会話の途中で背後から足音が聞こえ、義人はノーレを構えながら振り返った。だが、背後の森の中から出てきた人物を見て肩の力を抜く。
「志信とシアラか……驚かせないでくれよ」
「すまん、驚かせるつもりはなかったのだが……」
事実、志信達は足音を隠して歩いていたわけではない。義人は自分の反応が過剰だったことを自覚すると、謝罪しようと口を開きかけ、志信が引きずっているものを見て言うはずだった言葉を変えた。
「それ……いや、その人はなんだ？」

思わず指を指しながら聞く義人。その指の先には、襟首を掴んで引きずられる文官らしき男の姿があった。しかし気絶しているのか、志信が引きずっても反応を示さない。志信は僅かに思案すると、僅かにシアラを見る。

「逃げるのに邪魔だったのか、置いていかれたらしくてな。一応同行を願おうと思ったのだが、思ったよりも抵抗されて……シアラが気絶させた」

「……不可抗力」

「杖で鳩尾（みぞおち）を殴って気絶させるのは不可抗力とは言わないと思うが？」

しれっと惚けるシアラに、志信は突っ込みを入れた。そんな志信に苦笑を向けると、義人はノーレを片手に下げたままで地面に寝かせている少女へと意識を向ける。

「こっちは馬車に乗せられていた袋を開けてみた。そうしたら、この子が出てきたよ」

「ふむ……やはり誘拐か？」

「さてね。それはわからないさ。ひとまず、野営地につれていこうと思う」

『む？』

義人が志信に考えを話していると、不意にノーレが疑問のこもった声を上げた。それを聞いた義人は、何かまずいことがあったかと首を傾げる。

「ノーレ？　この子を野営地に連れて行くのに何か不都合があるのか？」

『いや、そうではない。妾が気になったのは別のことじゃ』

「別のこと？」
『うむ。一瞬、どこからか魔力を感じたような気がしたんじゃが……』
確信が持てないのか、ノーレの歯切れは悪い。それを聞いた義人は、珍しいなと思いつつ口を開く。
「気のせいじゃないのか？」
『かもしれんが……っ！？　いかん！　伏せ』
義人の言葉に対して肯定の意を伝えようとしたノーレが、切迫した声を上げる。
しかしそれを言い切るよりも早く、義人達の周囲に雷が降り注いだ。

第七十五話：予感

レンシア国王都ハサラ。

カーリア国の王都フォレスの三倍以上の人口を誇り、その人口に伴った敷地面積を城壁に囲まれたレンシアの主要都市。そのハサラの中でも一番重要な施設である王城の客間で、カグラは一人思案に耽っていた。

馬で駆けて六時間ほどかかる道程を半分の時間で踏破し、レンシア国の現国王であるコルテア＝ハーネルンに謁見したのが三時間前。最後にカグラがレンシアに訪れたのは三年以上前になるのだが、記憶にあった人柄に変わりはない。義人達の到着が遅れる旨を伝えたのだが、大した問題もなく謁見は終了し、カグラは僅かに安堵していた。

「あとはヨシト様達の到着を待つだけ、かぁ……」

客間には自分一人しかおらず、気が緩んだカグラはいつもの口調を崩して呟く。だが、すぐに気の緩みに気づいて軽く頭を振った。

「っと、いけませんね」

誰も見ていないが、カグラは口調を改める。そして自分に対して苦笑すると、着替えが入った袋を手に取った。

「少し汗をかきましたし、湯を借りますか」

『強化』を行使しながら走ったとはいえ、疲れるし汗もかく。『強化』は一定以上に出力を上げない限り魔力を消費することはないが、長時間使えば集中が乱れて余計な魔力を使ってしまうこともあ

る。三時間程度の連続使用はカグラにとって造作もないことではあるが、多少肉体的な疲労を感じていた。

客間の扉を開けると、扉の前に立っていた二人の守衛の兵士がカグラのほうを向く。その手には僅かな装飾が施された槍を持っており、客人の護衛を任務にしているようだった。もっとも、カグラの行動に対する見張りも兼ねているようではあったが。

「どうかされましたか？」

片方の兵士が直立したままカグラに尋ねる。その問いに対して、カグラは僅かに苦笑した。

「少し湯を借りたいのですが、よろしいですか？」

「はっ！　それならばこちらへどうぞ」

声をかけた兵士が返事をして、もう片方の兵士へと目配せをする。すると、目配せを受けた兵士は一度頷いて駆け出した。

護衛を女性の兵士に交代するのだろうとカグラは思案し、ふとそこで足を止める。そして軽く周囲を見回し、眉を寄せた。

「どうかされましたか？」

足を止めて周囲を見回すカグラに、兵士は困惑しながら尋ねる。カグラはその問いに答えず、五感を研ぎ澄ませて周囲の様子を窺った。

ざわついているというか……少し騒がしい？　何かあったのでしょうか？

カグラは『強化』を使うことで聴力を上げ、遠く音を拾う。する

と、慌しく走り回る音やそれに紛れて聞こえる鎧や剣などの金属が擦れる音が耳に届いた。カグラはその音がするほうを見ながら、小さく口を開く。

「何やら少し騒がしいようですが、夜間訓練でも行うのですか？」

「……は、騒がしいとは？」

カグラの問いかけに対して、兵士は真顔で首を傾げる。カグラは何かを隠したその態度に僅かに眉を寄せるが、余計なことに首を突っ込むわけにもいかない。そのため、カグラは不審に思う心を押さえつけると、兵士に『気のせいでした』と笑って歩き出した。

そして歩くこと数十秒。カグラが兵士と当たり障りのない会話をしながら歩いていると、廊下の先から慌しく走る音が響いた。カグラは衣擦れの音しかしないことから兵士ではないと判断し、それと同時に“この国で”城内を走り回る人物が頭に浮かんで苦笑する。

そうやってカグラが苦笑していると、小柄な少女が廊下の先の曲がり角から姿を現す。豪奢ながらも動きやすそうな白いドレスに身を包んだその少女は、曲がり角を曲がった勢いのままでカグラへ体当たりを敢行した。

「わぷっ！？」

だが、少女としては体当たりをするつもりはなかったらしい。走り寄った少女は小さく悲鳴を上げ、カグラにぶつかった勢いで後ろへと倒れそうになる。しかし、倒れるよりも早くカグラが腕をつかみ、体勢を整えさせた。

「うぅー……いたたた……」

倒れずにすんだ少女は、顔を右手で覆いながら頭を振る。その際

絹のように細い金髪が左右に揺れ、カグラ少女を見ながら苦笑を深めた。

「お久しぶりですティーナ様。そして、廊下は走るものではないですよ？」

カグラが諭すように優しく告げると、その言葉を聞いた少女……レンシア国第三王女のティーナ＝ハーネルンは顔を上げる。そしてカグラの顔を見ると、嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

「あっ！　カグラ様！　お久しぶりです！」

「はい、お久しぶりです」

自身の三つ年下の割には小柄で、なおかつ幼く見えるティーナに目を細めつつ、カグラも笑顔で返答する。最後に会ったのは三年近く前だが、それでも覚えていてくれたことをカグラは嬉しく思った。

「ずいぶんとお急ぎだったようですが、何かありましたか？」

カグラは僅かに膝を折ると、自分の目線をティーナの目線に合わせてそう尋ねる。すると、カグラの言葉を聞いたティーナは先程の笑顔が嘘のように悲しそうに表情を歪めた。

「カグラ様っ、お姉様が！」

「お姉様？　それはレミィ様ですか？　それともエリス様ですか？」

ティーナの剣幕に困ったように微笑みつつ、カグラは尋ねる。レンシア国国王のコルテアには息子がおらず、いるのは三人の娘だ。

長女はカグラよりも一つ年上で、名前をレミィ＝ハーネルン。レンシア国第一王女としての自覚を持ち、指導者の才を持つ明朗な女

性である。
次女はカグラの一つ年下で、名前がエリス＝ハーネルン。レンシア国第二王女で、物静かで温厚な少女である。
そして現在カグラの目の前で目に涙を溜めているのが、レンシア国第三王女であるティーナ＝ハーネルン。歳の割には小柄だが、感情の表現がはっきりしている元気の塊のような少女だ。
カグラはティーナが姉と呼ぶ二人の少女を頭に思い浮かべ、今にも泣きそうなティーナをあやすように笑いかける。

「ほら、落ち着いてくださいティーナ様。レミィ様かエリス様のどちらかはわかりませんが、どうかされたのですか？」

悪戯でもして酷く怒られたのだろうか、などという考えが頭を掠めたが、カグラは努めて無視した。十分に有り得そうな考えだったが、目の前のティーナの様子からさすがにそれはないと判断する。目に涙を溜めたティーナが口を開き、何を言おうとしているのか察した兵士が声を張り上げる。

「姫様それは！？」
「エリスお姉様が……急にいなくなって……」

ティーナの言葉を隠すように声を張り上げた兵士ではあったが、カグラには聞き漏らすことなくティーナの言葉が届いていた。

「……エリス様が？」

急にいなくなったという部分に不穏なものを感じつつ、カグラが尋ね返す。すると、そんな
カグラの問いを遮るように女性の声が響いた。

「兵士からエリスを探し回っていると聞いて探してみれば……ティーナ、あなた何をしているの？」

困惑と呆れを等分に含んだ声を聞き、カグラはその声を発した人物……レミィのほうへと体を向ける。ティーナと同じ意匠の白のドレスに身を包み、ティーナよりも幾分か長い金髪を颯爽と翻して歩みを進めてくるレミィだったが、カグラと視線が合うなり足を止め、ドレスの裾をつまんで優雅に一礼した。

「お久しぶりですね、カグラ様。三年振りでしょうか？」
「お久しぶりです、レミィ様。三年振りでございます」

レミィの一礼に対し、カグラは膝をついて礼を示す。カグラはカーリア国宰相と同格の役職ではあるが、相手は一国の王女である。ティーナも王女だが、レミィの王女としての挨拶には相応の態度で応えなくてはならない。

「カグラ様、今は公式の場での会談というわけでもありません。顔を上げ、お立ちになってください」

レミィはカグラが膝をついて頭を下げたことに対してそう告げると、カグラはゆっくりと立ち上がる。そして目を合わせると、カグラはティーナの言葉の意味を求めて口を開いた。

「エリス様の姿が見えないとのことですが……どうされたのですか？」

カグラとしては、ティーナの姿が見えないのならばまだ納得できる。明るく活発な性格の彼女ならば、城の中を探検するなり護衛を連れて城下町に遊びに行くなど考えられた。しかし、自身の記憶に

あるエリスの大人しい性格を考えればティーナのような振る舞いをするとは考えにくい。
レミィの言葉を待ちながら思考していたカグラだが、当のレミィが口を開こうとした途端に傍で控えていた兵士が口を開く。

「レミィ様、それは……」

他国の人間に聞かれると拙い。そう言いたかったのだろう。だが、兵士は意図が伝わることを見越してそこまでは口にしない。それに対して、レミィは首を横に振った。

「しかし……」
「調べればわかることです。それに、調べずとも明日には知れることでしょう」

諫めようとする兵士に対して、レミィは隠すことはないと告げる。それを聞いていたカグラは何があったのかとさらに思考を巡らせるが、思いつく回答はない。

「何があったのでしょうか？」

回答を求め、カグラはレミィへと再度尋ねる。すると、レミィは僅かに表情を翳らせた。

「……何者かの手により、攫(さら)われたようです」

告げられた言葉に、カグラは無言で眉を寄せる。その回答は予想した状況の中でも悪い部類に入るものだったが、同時に疑問も沸いた。

「しかし、一体どうやって……」

一国の王女ともなれば、周囲には常に護衛がいる。国王ほどとはいかないかもしれないが、それでも並の護衛体勢ではないのだ。

カグラの言葉を予想していたのか、レミィが表情を変えることはない。だが、カグラはレミィの雰囲気が僅かに変わったことを感じ取った。視線を下げてみれば、右手がドレスの裾を強く握り締めている。

攫った者が余程の手練だったか、城の内部について精通していたか、それとも手引きする者でもいたか。

レミィが感情を抑えるまでの時間に、攫うことができそうな可能性を思案する。カグラとしてはその三つの内二つ、最悪三つ全てが該当していたのではないかと判断した。

それと同時に、レミィが口を開く。

「どうやら、城の中に敵方に通じる者がいたようです」

言葉には、目立った感情が込められていない。しかし、だからこそカグラにはレミィの感情が痛いほどにわかった。

「そうですか……」

悔しく、悲しいのだろう。だが、カグラはそう言うだけに留める。同情染みたことを言うこともない。このご時勢、裏切りや引き抜きはどの国でも起きていることなのだ。

それでもレミィは傍に立つティーナを安心させるためか、表情を緩める。

「ですが、現在我が国の誇る風と雷の使い手達が後を追っています。

エリスを取り戻すのも時間の問題でしょう」
「カール達が！？」

レミィの言葉を聞いた瞬間、ティーナが輝くような笑顔を浮かべて何者かの名を口にした。どこかでその名を聞いた覚えがあったカグラは素早く思い出そうとするが、思い出すよりも目の前のレミィかティーナに聞いたほうが確実だと判断して口を開く。

「風と雷の使い手……それとカール、とは？」

レンシア国に関する情報を頭の中から引っ張り出しながら、カグラが尋ねる。それに対して、レミィはどこか誇らしげに口を開いた。

「第二魔法剣士隊の隊長と、第一魔法隊隊長のことです。『風』のカールと『雷』のヤナギと言えばお分かりになりますか？」

その声に込められた感情は、深い信頼と他の“何か”。カグラはそれを感じ取りつつ、与えられた新しい情報を元に自身の記憶から符合する情報を引き出す。

カーリア国は諜報に関して非常に弱く、他国に関しての情報があまり入手できない。義人が召喚されてからはゴルゾーの協力で多少改善されているが、それでも前王が没してからの十年間は他国に関して大した情報が入ってこなかった。だが、そんな状況の中でもカグラの元に届いた情報の中に“その”情報は存在している。

「たしか……先の数々の戦いで武勲を上げ、僅か三年足らずで隊長まで登り詰めた方々ですね？」
「ええ。その二人と、彼らの率いる部隊の最精鋭が探索をしています」
「……失礼ですが、戦の腕と探索の腕は比例しないのでは？」

「フウちゃんがいますから大丈夫ですよ！」

レミィの言葉に疑問を覚えたカグラがそう尋ねると、ティーナが元気良く言葉を発する。

「フウちゃん……とは？」

何かの愛称だろうかと、カグラは首を傾げた。そんなカグラに対して、レミィは苦笑混じりに笑う。

「カールが操る風竜のことです。“彼女”ならば、例えエリスが遠くにいても風に乗った魔力や匂いを辿ることができますから」

以前も同じような状況がありまして、と苦笑するレミィに、カグラは納得の意を込めて頷く。

「風龍、ですか。なるほど、それならば追跡も容易でしょう」

魔物、それも上位種である風龍ならばその追跡は容易だろう。そこまで考えた途端、カグラは言いようのない奇妙な感覚を覚えた。

「……？」

胸に手を当て、僅かに首を傾げる。すると、そんなカグラを見たレミィも首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「いえ、どうかしたというわけではないのですが……」

急に感じた不安と焦燥が混ざったような感情に対して、カグラは

確とした答えを返せない。何故いきなりそんな感情を覚えたのか、それを思考しようとしたが上手く考えがまとまらなかった。

「カグラ様？」

ティーナがカグラを見上げるように見ながら、不安そうな声をかける。その声を聞いたカグラは、強引に思考を打ち切った。そして、取り繕うように微笑んでみせる。

「……あっ、いえ……どうやら、少し疲れているみたいです。昼間にずっと走ってたせいですかね？」

カグラは不安そうなティーナに笑いかけ、ついでに軽く冗談を口にした。すると、レミィが小さく笑う。

「ふふ、そうでしたか……あら？」

駆け寄ってくる兵士の姿を見て、レミィの表情が引き締まる。そして、カグラのほうを見ると優雅に一礼した。

「何かあったようですね。それではカグラ様、失礼しますわ。ほら、ティーナもきなさい」

「はい。それじゃあカグラ様、またお話してくださいね？」

一礼と無邪気なお願いに対し、カグラは膝をついて頭を下げる。そして頭を下げたまま、二人の気配が遠ざかるのを待って頭を上げた。

「レミィ様がああ言われるのなら、時間の問題なのでしょうね……」

王女が誘拐されたなど、国家を揺るがす大事件だ。だが、カグラはレミィの様子から事態が終息するのは本当に時間の問題なのだろうと判断する。

移動用の魔法具……例えば『飛竜（ワイバーン）の（・）翼（ウイング）』などを使うとしても、使用者以外は目的地に飛ぶことができない。つまり誘拐などに使うことはできないため、移動は馬か自分の足で走ることになるだろう。だが、龍種の移動速度は馬とは比べ物にならない。もしも人を乗せて飛べるほどに成長した龍ならば、逃げた者に追いつくまでそこまで時間がかかることはないだろう。

「人を抱きかかえたまま走るのは目立ちますし、おそらく移動は馬でしょうね……もしくは馬車でしょうか？」

カグラは部屋に戻りながらも考えを巡らせる。

「風龍がいるなど、調べずともわかることでしょうに。これでは、逃げても捕まるだけです」

先ほどから落ち着かない感情を、別のことを考えることで抑えていく。

「なら、何を目的としているのか……」

思考に没頭しようとするが、上手くいかない。それでもカグラは考えをまとめようとしたが、自身に近づいてくる足音を聞いて思考を止める。

「あの、湯の用意が整いましたが……」

カグラの様子を見たからか、女性兵士が言い難そうにそう声をか

けた。それを聞いたカグラは、自分が何故部屋から出たのかを思い出して苦笑する。

「そうでした……では、湯を借りるとしましょうか」

身を清めれば、少しは落ち着くかもしれない。

そう自分に言い聞かせ、カグラは女性兵士の後について歩き出した。

第七十六話：襲来

降り注いだ雷に、視界が真っ白に染まる。弾ける雷の音に、聴覚が麻痺する。

「何……だぁ！？」

薄暗い視界に突如降り注いだ雷で視界が白く焼け、義人は狼狽した声を上げた。だが、自分で上げた声が耳に届かない。

雷は攻撃を目的としていなかったのか、義人は特に痛みを感じていなかった。触覚や痛覚は正常に働いているらしく、少し痺れるような感覚を伝えてくる。

そこまで考え、義人の頭にふと嫌な予感が過ぎった。

――俺は大丈夫だけど、志信達は？

周囲の様子が、まったくわからない。

何が起きたのか、まったくわからない。

頭がその状況を正しく理解した瞬間、義人は怯えの混じった声を上げていた。

「志信！　サクラ！　シアラ！　無事かっ！？」

周囲を見回しながら、そう叫ぶ。だが真っ白な視界には何も見えず、義人の叫びに応える声も聞こえなかった。

つぅ、と嫌な汗が頬を伝わる。

「志信――」

『落ち着くんじゃヨシト！』

再度志信達の名を叫ぼうとした瞬間、脳裏に響いたノーレの声が

それを制した。それを聞いた義人は、ノーレと思念通話の存在を失念していた自分に歯噛みしつつ思念通話を繋げる。

『何が起きたんだよ!?』

『落ち着けと言っておるじゃろうが！　仏頂面達は平気……っ！　お主らは伏せよ！　ヨシトは剣を構えよ！　それと魔力を！』

義人の怒鳴り声に怒鳴り返し、状況を説明しようとしたノーレが緊迫した声を出す。咄嗟のことで義人は反応できなかったが、“お主ら”というのは周囲の志信達に向けられた言葉だった。ノーレはろくに反応できていない義人から魔力を吸い出すと、風の魔法を発動させる。

『ノーレ!?』

『話は後じゃ！』

体から力が抜ける感覚に、義人が抗議の声を上げた。だが、ノーレはそれを遮って叫ぶ。

義人が何事かと聞こうといた瞬間、見えないことで敏感になった触覚が周囲の異変を察知する。

「……何、だ?」

肌を叩く、強烈な風。それが自身の手元から発生しているのを感じて、義人は酷く狼狽した声を上げる。

『ノー、レ?　何を?』

自身の周囲に風が渦巻いているのを義人は感じた。視覚も聴覚もろくに働いていないが、それでも周囲を囲むように風が吹き荒れて

いると肌に伝わる感触が伝えてくる。

『時間稼ぎじゃ。仏頂面達も伏せながら回復を待っておる。これなら多少は時間が稼げ……っ！？　伏せよっ！』

「え？」

そんなノーレの声に反応する暇もなく、義人は自分の体が吹き飛ぶのを感じた。

降り注ぐ雷を前に、ノーレは内心で驚愕の声を上げていた。

“その身”は魔力や魔法の察知に長ける。そんな自身に直前まで発動を悟らせず、かつ効果的に相手の動きを封じる魔法の選択。雷という使い手が希少な魔法だが、暗闇で放たれればしばらく視界を封じることが可能だろう。さらに、相手は音によって聴覚までも封じている。

そこまで考えたノーレは、自分の察知能力を超えて魔法を放ってきた相手に対して僅かな疑問を覚えた。

ここまで魔法の制御に長けた人間ならば、直撃させることも容易かっただろう。だが、相手は義人達の行動を妨げることを狙っている。それが何故かと思考しようとしたところで、ノーレの思考を遮るように義人が狼狽した声を上げた。

「志信！　サクラ！　シアラ！　無事かっ！？」

それは、ノーレが今まで聞いたことのない感情がこもった声だった。何に対してなのか、怯えの混じった声。そんな義人の声を聞くのが初めてだったノーレは、自身の動揺を抑えながら思念通話を繋げた。

『落ち着くんじゃヨシト！』

半ば怒鳴るように言いつつ、義人に落ち着くよう求める。義人はその声に僅かなりとも落ち着いたのか、今度は疑問がこもった思念をノーレに伝えた。

『何が起きたんだよ！？』

何が起きたのか。義人が何に対しての説明を求めているかをすぐさま看破し、ノーレは周囲の様子を確認する。“その身”は人間と違い、“あの程度”の雷で視界を焼かれることはなかった。

志信やシアラは棍や杖を構え、サクラは地面に寝かせている少女と義人の両方を守れる位置へと移動している。ただし、全員義人と同じように視覚と聴覚が一時的に麻痺しているらしく、その動きはいつもに比べて精彩がなかった。

『落ち着けと言っておるじゃろうが！　仏頂面達は平気……っ！　お主らは伏せよ！　ヨシトは剣を構えよ！　それと魔力を！』

志信達の無事を確認したノーレは、それを義人に伝えようとする。だが、それと同時にこちらへと接近してくる魔力を察知して無理矢理義人から魔力を吸い上げた。

今度は先程と違い、魔法の察知が容易い。しかも、こちらへと飛んでくるのはノーレにとって最も馴染みのある魔法だった。

『ノーレ！？』

『話は後じゃ！』

志信達が指示通り伏せたことを素早く確認すると、ほぼ同時に“

こちらも”風の魔法を発動させる。
向かってくる敵の魔法の数は四つ。吹き飛ばすことを目的としているのか、放たれた魔法は風の魔法の中では基本ともいえる風を塊として飛ばすものだ。ノーレはそれに対し、義人達を守るように周囲を囲むような竜巻状の風を発生させる。相殺するか弾くか、最低でも軌道を逸らせるだろう。そう判断しての行動だった。

『ノー、レ？　何を？』

ノーレが何をしているのか不安なのか、義人が尋ねる。ノーレはそんな義人に対し、先程と違って声の調子を和らげて答えた。

『時間稼ぎじゃ。仏頂面達も伏せながら回復を待っておる。これなら多少は時間が稼げ……っ！？　伏せよっ！』

だが、それも途中で逼迫したものに変わる。
発生させた竜巻状の風を敵の魔法が易々と貫通したための叫びだったが、その叫びに反応できる余裕は今の義人にはなかった。

「え？」

聞き返すような声と同時に、義人の体が後ろへと吹き飛ぶ。志信達は魔法が放たれてから伏せたため無事だが、その場から動いていない義人は避けることも防ぐこともできずに直撃を被（こうむ）っていた。

「――ぁぐっ！」

正面からの衝撃に、義人の足が地面から離れる。衝撃で無理矢理空中に押し上げられる浮遊感。その衝撃でノーレが義人の手から離れ、地面へと落ちる。そしてそれと同時にミシリと骨が軋む感覚が

伝わり、義人が痛みに対してさらに声を上げようとした。だが、浮いた体が木に叩きつけられて声と呼吸が途切れる。

『ヨシト！？　しっかりするんじゃ！』

義人から二メートルほど離れた位置に落下したノーレが慌てて声をかけた。だが、思念通話で返答がくることはない。

「……ぁ……っ……」

木に叩きつけられたことで途切れそうになった義人の意識を、痛みが無理矢理繋ぎ止める。義人は歯を噛み締めることで痛みに対して抗おうとするが、それも上手くいかない。浅く呼吸を繰り返し、少しでも痛みが治まるのを待つだけだ。

そんな義人の様子を見て、ノーレは歯噛みしたい気持ちに駆られた。急場で発生させた魔法とはいえ、敵の魔法を相殺するどころか逸らすことさえできなかった。多少威力は殺いだが、今の義人の様子を見る限り何の慰めにもならない。

ノーレは後悔する傍らで思考を巡らせ、速やかに打開策を思案する。

義人の魔力を使って発生させた風の壁もすでに消え失せ、自分一人の魔力量でできるのは思念通話と下級の風魔法を数回使う程度。雑魚を相手にするならともかく、未だ姿が見えない相手は手練だ。しかも雷魔法と風魔法の使用者は練度の差からして別人であり、最低でも敵は二人以上だとノーレは推測した。だが、義人の手から離れたノーレには今のところ推測しかできることがない。

倒れ伏した義人を案じつつ、ノーレは他に動ける者へと思念通話を繋げる。

『仏頂面、メイド、それとそこの魔法使い！　まだ視力は回復せん

か！？』

少し距離があるが、人間同士で思念通話を使うわけではないのでノーレにとって問題はない。ノーレの思念が届いたのか、今まで伏せていた志信達はすぐに顔を上げた。その中でも、一番近くにいたサクラが最初に反応を返す。

『ノ、ノーレ様ですか？　わたしはあと少しかかります。それで、あの、ヨシト様は？』

『ヨシトは……』

サクラの問いに、ノーレは思わず言いよどんだ。しかし、混乱を招かない程度に真実を伝えようと回答する。

『ヨシトは少し離れたところで倒れておる。じゃが、死んではおらんし重傷というわけでもない。仏頂面とそこの魔法使いは回復はまだか？』

『……わたしはほとんど回復した。一応、帽子被ってたから』

『ならすぐにヨシトの護衛に回るんじゃ！　妾は今義人の手にない。何かあれば対処のしようがないんじゃ！』

『……了解』

『仏頂面はどうじゃ？』

シアラが立ち上がり、義人の傍へと駆け寄っていくのを見てノーレは僅かに声の調子を落ち着けて尋ねる。すると、思念通話を聞くだけしかできない志信は自身の口を開いた。

「多少は回復したが……目はともかく耳がほとんど聞こえん」

敵に聞かれることを考慮したのか、志信の声はかなり小さい。そ

れでもノーレは志信の言葉を聞き取り、僅かに安堵の気持ちを覚えた。

『それならお主もこちらへ来るんじゃ』

「わかった……っ！」

伏せていた志信が一気に跳ね起きる。そして、気絶させた男は地面に倒したままで棍を構えた。そんな志信に疑問を覚えたノーレだったが、それと同時にこちらへと飛んでくる魔法を知覚する。狙いは志信とサクラだが、二人ともすでに魔法を察知して迎撃の構えを取っていた。

飛来するのは先程と同じく風の塊だが、志信は『無効化』の棍で、サクラは空中に生み出した氷の矢でそれぞれ相殺する。それを見たシアラが魔法が飛んできた方向へと杖を向け、お返しと言わんばかりに風の塊を撃ち出した。義人に比べれば威力は劣るものの、その狙いは正確である。命中はせずとも牽制程度にはなるとシアラは考えていたが、放った魔法の先で白刃らしきものが数回閃いた途端に魔法が四散して目を見開く。

「……無効化？　違う……魔法が斬られた？」

僅かに驚きが滲んだ声。そんなシアラの声に答えるように、ノーレが思念通話を繋げる。

『対魔法の処理がされた武器を持ち、それなりの腕を持っている者なら斬ることも可能じゃろう。それよりも、妾をヨシトの元へと運んでくれんか？』

冷静になるよう心がけ、ノーレはシアラにそう告げた。するとシアラも動揺から立ち直り、地面に転がっていたノーレを拾い上げて

義人の傍へと駆け寄る。

「……ヨシト王、大丈夫ですか？」

「っぁ……その、声は……シアラか？」

義人は地面に倒れたまま、未だに痛む体に眉を寄せながら声のしたほうを向く。木に叩きつけられた直後は呼吸もままならなかったが、少しの間で普通に呼吸をすることはできるようになった。だが、痛みは相変わらずで喋る以上のことができない。シアラはそんな義人の体をゆっくりと起こすと、木に背を預けるようにもたれかけさせて右手にノーレの柄を握らせた。

「……ヨシト王の剣です」

「ぅ……悪いな。まだ、体を動かせそうにない……」

体を苛む激痛も、当初に比べて多少和らいでいる。義人としては確信が持てなかったが、少なくとも腕や足の骨は折れていない。肋骨などはわからなかったが、痛みの質から打撲か打ち身ではないかと義人は痛む頭で判断した。

『ヨシト、仏頂面達は今のところ無事じゃ。まだ視力や聴力が完全に回復しておらんが、おそらく一番の重傷はお主じゃろう』

『いつつ……そっか。そりゃ、良かった』

その言葉は、志信達が無事だったことに対してだろう。義人は痛みを堪えつつ、僅かに笑ってみせる。

『良くないわ戯けめ！　……いや、すまぬ。魔法を防ぎきれなかった妾にそんなことを言う資格はないな』

そんな義人に対してノーレが声を荒げるが、すぐに消沈した声へと変わった。

『気にすんなって……痛たた……まだ体が痛いけど、もうちょっと休めば動けそうだ。骨も多分折れてないし……』

「……まだ動かないほうがいい、です」

動こうとした義人をシアラが注意する。義人はそれに小さく頷くと、木に背中を預けたままで大分見え始めた目を志信とサクラのほうへと向けた。

「あれは、敵の攻撃か？」

志信とサクラは時折“何か”を避けるように動き、もしくは相殺するために棍や魔法を振るっている。その動きから自分の場所へと魔法がこないようにしているのだと判断した義人は、ノーレを支えにしながら歯を食い縛ってゆっくりと立ち上がろうとした。だが、痛みで上手く立ち上がれない。

そのことと痛みに僅かな苛立ちを覚えつつ、義人は体を木に預けたままで何気なく視線を上空へと向ける。そして、思わず目を見開いた。

「あれは……」

意識せず、そんな声が零れる。

そんな義人の視界には、月明かりに照らされながら上空を飛び、こちらへと向かってくる“何か”の姿が映っていた。

遠目で義人も確信が持てなかったが、義人の声を聞いたシアラがその視線を追って上空を見上げる。続いて、ノーレも“それ”の存在に気付いて驚愕と表現するのが相応しい声で呟いた。

『何故……龍種がこんな場所にいる』

魔法が飛び交う中にいた影響か、魔力を探知するのが遅れたことに対する驚きもある。

――しかしそれ以上に、龍種が“敵意”を持ってこちらへと向かってきていることにノーレは驚愕を覚えていた。

第七十七話：死線

上空から舞い降りる、薄緑色の龍。義人はそれを呆然と見上げつつ、翼を広げた龍が降りてくるという幻想染みた光景にただ圧倒されていた。

「……そういや、“そういう”世界だったな」

今まで体を支配していた痛みさえ忘れ、義人は小さく呟く。

その体躯は小雪の数倍は大きく、全長は五メートル前後だが広げた翼が体をより大きく見せている。

舞い降りる龍を見上げるのは義人だけではなく、その隣にいたシアラも同じように上空を見上げ、飛来する魔法を防いでいたサクラや志信もその存在に目を奪われていた。

『あの大きさ……成龍ではないことがせめてもの救いじゃが、今の状況では何の慰めにもならんか……』

ポツリと、ノーレが呟く。義人はその言葉の意図を尋ねようと視線をノーレに向けようとしたが、それよりも先に龍の背中に人影が見えて思わず目を凝らした。だが、義人がその存在を確かめるよりも早く“相手”に変化が起こる。

「これは……やばい、か？」

緑の龍が目を細め、威圧するような気配を放ち出す。それが敏感に感じ取れた義人はそう口にすると、無意識のうちにノーレを正眼へと構えていた。別段、何か打てる手があったわけではない。直感染みた悪寒を感じ、自身の可能な防衛手段を無意識のうちに選択し

ていただけだ。
龍の雰囲気が変わったことを感じ取ったのは義人だけでなく、他の者も同じである。そしてそれと同時に、今まで何度も撃たれていた風の魔法が止まっていることに気付いた。義人はそのことに疑問を覚えたが、頭上で自身達を睥睨している龍を前にして深く考える余裕はない。

『ノーレ、どうすれば良い？』

思考がまとまらないままで、義人は自分が握る王剣のノーレへと話しかける。その問いに対して、ノーレは僅かに沈黙した後に応えた。

『……戦うのは無謀じゃな。巫女がおれば話は別なんじゃが、ヨシト達では“火力”が足りん』
『火力、ねえ……ミーファのところまで逃げるか？』
『戯け、そっちではないわ。魔法の威力が足りないということじゃ』

義人は龍を見上げながら軽口を叩いてみるものの、それに対するノーレの反応はいまいち弱い。義人は軽口を叩く“ことしか”できない自分を自覚しながらも、上手く思考をまとめられないでいた。
すると、傍で同じように上空を見上げていたシアラが義人の袖を引く。

「……逃げる」

常のように端的に呟くシアラ。だが、その表情には焦りの感情が浮かんでいた。異世界の人間である義人よりも、この世界で生まれ育ったシアラのほうが龍などの強力な魔物に対して正しい認識を持っている。義人はシアラの言葉に頷こうとして、今まで意識の中か

ら消えていたことが浮かび上がって頷くのを止めた。

「逃げるのには賛成だけど、さっきの女の子も連れていかないと……」

龍の攻撃に巻き込まれでもしたら。そう考えた義人は震える足に力を入れ、先ほどまで少女を寝かせていた場所へと目を向ける。自分では上手く動けないかもしれないが、少女の傍にいるサクラならなんとかできるだろう。そこまで考えた義人は、少女のほうへと視線を動かす。

「え？」

そして、思わずそう呟いていた。先ほどまで少女の傍にいたはずのサクラはそこにおらず、少女から十メートルほど離れた場所に立っている。サクラ本人はそのことに気付いていないのか、上空に意識を向けつつ、今まで魔法が飛んできていた方向にも注意しているようだった。気絶していた男を抱えていた志信も、いつの間にか男を木の傍に寝かせてそこから離れた位置に立っている。

『っ！　後ろに下がるんじゃヨシト！』

義人が“それ”が何故かと思考するよりも早く、ノーレが警戒の声を上げた。その叫び声に近いノーレの声に従い、義人は疑問を浮かべる暇もなく地面を蹴る。

半ば反射的な行動だったが、この状況でノーレが意味のない指示をするはずがない。そう信じた義人はノーレを構えたままで後ろに跳ぶが、それと同時に言い様のない悪寒を感じた。直感とでもいうべき感覚に突き動かされ、義人は上空に視線を向ける。そして、自身を見据える龍と視線がぶつかった。それと同時に、龍が翼を羽ば

たかせる。
　それは一見何気ない動作のように見えたが、魔力を察知する感覚が鈍い義人でも感知できるほどに強力な魔力が収束していく。
「なんだよ……あれ。洒落になってねえ」
　これから何が起きても対処ができるように、義人はノーレへと魔力を送った。先程多少消費したが、まだ七割程度は残っている。義人は僅かな気だるさを感じつつ、上空を見据えてノーレをいつでも振れるよう身構えた。
　そして、上空の龍が大きく翼を羽ばたく。それは魔法を発動するための予備動作であり、義人がそれに気付いたのは、目に見えずとも確かな圧力を持った巨大な風の塊が自分目掛けて迫ってきたときだった。避けようにも、巨大すぎて避ける暇と場所がない。
「ノーレ！」
『うむ！』
　対抗するように、義人はノーレを振るう。先程のように防御目的で広範囲に風を発生させるのではなく、今度は迫り来る風の塊を撃ち抜くために風の魔法を繰り出す。魔法の軌道は義人が操作し、ノーレは義人の魔力を使って強力な風を発生させる。
「く……そっ！」
　だが、上空から飛来する巨大な風の塊を撃ち抜くことはできない。互いの魔法が空中でぶつかり合い、義人は相手の魔法の力強さに歯を噛み締めた。
『受け止めるでない！　逸らすんじゃ！』

徐々に押されだした義人に対してノーレが声をかける。義人はその声に従って敵の魔法を逸らそうとするが、どう逸らせば良いかわからない。

「……ヨシト王はそのままで。わたしが逸らす」

義人はそのことに焦りの感情を覚えたが、傍にいたシアラがそう言って空中へと杖を向けた。そして、義人の魔法の軌道から僅かにずれたところへ風の魔法を撃ち出す。義人に比べれば力強さがないものの、龍の放った魔法に対して斜めからぶつかるシアラの魔法に風の塊が僅かに軌道を変えた。

「……少し威力を弱めて！」

「りょ、了解！」

シアラにしては大きい声に、義人はすぐさま頷く。義人がノーレに送る魔力を少なくすると、ノーレもそれに応えて魔法の威力を低減させた。すると、今度はシアラが魔法の威力を強める。

「……こっち。あと、失礼します」

「うおっ！？」

迫る風の塊が軌道を変えたことに義人が気付いた時、いきなりシアラに腕をつかまれた。そしてシアラは片手で魔法を放ったまま、もう片方の腕で俵でも担ぐように義人を“抱え上げて”跳躍する。

「ちょ、シアラ！？　っ！？」

自分よりもかなり小柄な少女に片手で持ち上げられ、義人は狼狽

した声を上げた。だが、今まで自分がいた場所から僅かに離れた場所を風の塊が通過して思わず絶句する。風の塊はそのまま立ち並ぶ木々を圧し折りながら進み、数十メートルほど進んだところでようやく霧散した。

「……威力が強くて完全に逸らすのは無理だった。あと、ごめんなさい」

圧し折られた木々が音を立てながら地面へと倒れる様を言葉なく見ていた義人に、シアラが少しばかり申し訳なさそうな声をかける。義人はその声で我に返ると、首を横に振った。

「いや、シアラのおかげで助かったよ。ありがとう……って、志信達は!?」

シアラに礼を言いながら思い浮かんだ親友の姿に、義人は慌てて周囲を見回す。風の塊が砂を巻き上げたのか多少視界が悪いが、それでも義人は志信を探した。

『ここまで魔法が飛び交っておると、妾でも魔力が探れんな……』

ノーレが志信とサクラの魔力を探ろうとするが、上手くいかない。ノーレからの言葉に義人が嫌な予感を覚えた瞬間、近くから草木を踏むような音が聞こえた。

「誰だ!?」

いつでも魔法を撃てるよう心がけつつ、義人はノーレを構えてその方向へと向き直る。隣のシアラも杖を構え、睥睨するような目を向けた。

「俺だ、義人」

すると、そんな言葉が投げかけられる。それが志信のものだとわかった義人は、知らず止めていた息を吐き出した。

「志信か……驚かさないでくれよ」

「驚かせるつもりはなかったのだが……すまん」

先程と同じようなやり取りをしながら、志信が姿を見せる。その後ろにはサクラが追従して周囲を警戒していたが、義人の姿を見ると安心したように表情を崩した。

「ヨシト様……ご無事で良かったです」

そう言って、サクラがヨシトの元へと駆け寄る。義人はそんなサクラに表面だけの苦笑を浮かべると、志信とサクラの二人を交互に見た。

「そっちも無事で良かったよ。攻撃は？」

「シノブ様の武器で『無効化』しながらなんとか避けました。もう少し威力が高かったらまずかったですけど……」

サクラの説明を受け、義人は志信の持つ『無効化』の術式が刻まれた棍へと目を向ける。だが、『無効化』をしたせいか刻まれていた『魔法文字』はほとんど消えていた。そんな義人の視線に気付いたのか、志信は無表情に頷く。

「同じ魔法を使われたら、次は凌げんだろうな」

「そうか……でも、二人が無事で本当に良かった」

もしもどちらか、もしくは二人が怪我を負っていたら。
もしもどちらか、もしくは二人が死んでいたら。
そんな想像が頭を掠めて、義人は身を震わせる。前者はまだしも、後者ならば取り返しがつかない。
義人が最悪の事態が起こりえた状況に恐怖していると、今まで巻き上がっていた砂塵が徐々に晴れ出す。その時になって、義人の頭に別の最悪の事態が浮かび上がった。

「……さっきの女の子と、男は……」

小さく呟いた言葉を聞き、志信が僅かに目を伏せる。

「助けられる余裕は、なかった」
「……そっか」

威力で換算するならば上級魔法に近い威力の魔法に巻き込まれたかもしれない。その事態を認識しようとするが、上手くできずに義人は感情のこもらない短い返答する。それでも目だけは先程まで少女を寝かせていた場所に向き、義人は目を見開く。

『カール、エリス様は？』
『脈もあるし、怪我もないみたいだ。眠っているだけみたいだな。そっちは？』
『こちらも生きている。“吐かせる”には十分だろう』

そこには、先程まではいなかったはずの人影が二つあった。コモナ語で言葉を交わしつつ、それぞれ少女と男を抱えている。その後ろには地面に降り立った龍が翼を広げて周囲を見回しており、義人は呆然とその会話を聞くことしかできない。

『あとは“あっち”の奴らを証人として捕まえるだけか……ヤナギはどうするべきだと思う？』

『最悪首謀者だけでも生け捕りにするべきだろう。全員を捕まえるに越したことはないだろうが人手がな……』

『たしかに、うちの隊の奴でも着いてこれなかったし、人手が足りないな。仕方ない、何人かは……』

そう言ってカールと呼ばれた青年が、義人達がいる方へと目を向ける。

少し伸びた青い髪に、月夜でもわかる青い瞳。歳は義人と同じか少し上程度で、腰には二本の剣を下げている。動きやすさを重視しているのか、身につけている鎧は必要最低限の急所を守っているだけだ。

ヤナギと呼ばれた青年は、少しばかり面倒そうに義人達のほうへと目を向ける。

歳はカールよりも僅かに上程度。乱雑に伸びた黒い髪を無造作に後ろでまとめ、魔法使いなのかシアラの持つものと比べて短い杖を握っている。こちらは鎧の類はつけておらず、着物に似た服を身に纏っていた。

カールは少女を龍の背に乗せ、ヤナギは龍の前肢で男を掴ませる。

『それじゃあ、フウはエリス様の護衛を頼む』

そんな言葉と共に龍……フウの背にエリスと呼ばれた少女を乗せると、龍が承諾したように頷く。そしてフウが翼をはためかせて飛び上がると、カールは腰に下げた双剣の柄に手を乗せた。

『さて、そこにいる奴ら。大人しく出てくるなら腕の一本くらいで済ませてやる』

『それ、大人しく出て行く意味ないだろ』

互いに軽口を交わしながら、カールとヤナギが義人達がいる方向へと歩き出す。方向はわかっても正確な位置はわかっていないのか、足取りは多少遅めだ。義人達は互いに顔を見合わせると、義人が口を開く。

「どうす」

『なんだ、そこにいたのか』

言葉を遮り、背後から声が響く。それと同時に義人は背中に氷が差し込まれるような悪寒を覚え、反射的に振り返ろうとした。

「動くな義人！」

志信から鋭い声が上がり、同時に義人の顔の横を弾丸染みた速度で棍が通過する。その一瞬後に金属を叩く甲高い音が響き、サクラが地を蹴って義人の横から飛び出す。義人は咄嗟に今までカールがいた場所を見るが、そこにはヤナギの姿しかなかった。

――あの距離を、一瞬で？

己を声を聞いた瞬間に駆け出したにしては速すぎる。半ば瞬間移動のような速度での移動に、義人は驚愕を覚えた。だが、今は忘我している暇はない。背後で響き渡る剣戟の音に振り返り、ノーレを構える。

「はぁっ！」

振り返った先、そこではサクラが両手に氷の刃を生み出してカー

ルと接近戦を繰り広げていた。
鋭利な氷の刃で、普段の雰囲気を完全に消し飛ばすように苛烈な連撃を繰り出すサクラ。それに対して、カールは冷静な表情を浮かべたままサクラの猛攻を捌いていく。
それを見た志信が隙を突くようにカールへ接近しようとするが、その途中で地を蹴って急に進行方向を変える。すると、次の瞬間志信が移動するはずだった場所へと雷が降り注いだ。それに対して志信がヤナギへと目を向け、僅かに目を細める。

『俺を忘れてもらっては困るな』

志信の視線を受けたヤナギは、頬を吊り上げて挑発するように笑う。志信はサクラとカールの拮抗した戦いを横目に見ると、今度は義人の方へと目を向けた。

「サクラならば、負けはないか。義人は身を守ることだけを考えてくれ」

そう言い残し、志信がヤナギのほうへと疾駆する。
カールに対しての接近を拒むなら、まずはヤナギを接近戦で倒す。そう判断した志信はヤナギの放つ雷の矢をかわしながら、一気に間合いを狭めていく。練度の低いただの魔法使いならば、接近戦に持ち込まれた時点で勝負は決まる。

――練度の低い、“ただの”魔法使いならば。

志信が自身の間合いまで距離を狭め、薙ぎ払うように棍を振るう。まともに食らえば、肋骨を数本折りながら弾き飛ばす威力のある一撃。だが、そんな一撃が振るわれると同時にヤナギは前へと踏み込んだ。魔法を撃つわけでもなく、自身の持つ杖に手をかけて。

「っ！？」

その踏み込みと動きを見て、志信は僅かに目を見開く。そして長年の鍛錬が培った直感が身の危険を知らせ、棍を繰り出しながらも上体を後ろへと逸らした。

『ふっ！』

ヤナギの手元で、白刃の輝きが閃く。

“杖から放たれた斬撃”は志信が身につけた服だけを切り裂き、振るわれた棍をそのまま斬り飛ばす。

斬られた棍が宙を舞い、志信は咄嗟に手元に残った棍の破片をヤナギの目へと投げつけた。そしてそれと同時に身を捻り、斬撃を放ったままの胴体へと回し蹴りを繰り出す。しかしヤナギは左手で蹴りを受け止めつつ後ろへと跳躍すると、やれやれと言わんばかりに肩を竦めた。

『まさか避けるとはな。初見だと思ったんだが』

『……魔法使いと見せかけて接近させ、仕込み杖での居合い、か。たしかに、仕込み杖を知らない者なら効果的だな』

『ご名答。だが……』

ヤナギは口の端を吊り上げ、鞘だった杖の部分を志信に向ける。

『見せかけではなく、俺は魔法使いだぞ？』

そんな言葉と共に、杖の先から雷が迸った。

志信は回避しようとするが、先程までの避けられた魔法とは違い、避けられないよう逃げ道にも雷が放たれている。

『無効化』するにも棍は手になく、志信は被弾することを覚悟に無手でヤナギの元へと踏み込もうとした。

「……駄目。なんとかするから」

だが、そんな声が聞こえて志信は動きを止める。それと同時に頭上から氷の矢が降り注ぎ、ヤナギの雷を自身の代わりに受けて砕け散る。

「助かった、シアラ」

志信は砕け散った氷の破片から目を守りつつ、同時に氷の破片をヤナギ目掛けて蹴り飛ばす。するとヤナギは身を捻ってそれを避け、氷の矢を放ったシアラに目を向けた。

『二対一、か』

『……卑怯とでも、言うつもり？』

ヤナギの呟きにコモナ語で答え、シアラは杖を構える。それをヤナギは鼻で笑うと、僅かに視線をずらして口を開いた。

『殺し合いに卑怯なんてものはないな。それに、二対一ぐらいなら何の問題もない……もっとも、カールを相手に“一番弱い奴が一対一”ってのは自殺行為だと俺は思うがね』

志信はそんなヤナギの言葉に警戒をしつつ、カールと戦っているはずのサクラに目を向ける。

そこでは、倒れたサクラを庇うように義人がノーレを振るっていた。

第七十八話：変化

縦横無尽に繰り出される斬撃と、それを迎え撃つ氷の刃。
サクラとカールの戦いは、“初めこそ”拮抗していた。

「っ！」

首を薙ぎにきた一閃を氷の刃先で逸らし、同時に逆から胴を狙う一閃は身を引くことで回避する。サクラはそこから反撃すべく踏み込もうとするが、捌いたはずの斬撃が同じ速度で別の場所を狙ってくるのでそうもいかずに再び防御に回った。
相手は攻撃の後で隙があるというのに、攻撃をする隙がないという矛盾。双剣を時には弾かれ、時には逸らされた後の不自然な体勢だというのに、繰り出されるのは全ての体重を乗せきったような重い一撃。取り回しがしやすいようにか、双剣は普通の両手持ちの剣に比べるとやや短い。だが、それでも不自然な体勢からすぐさま鋭い斬撃を放てる道理はないのだ。
サクラはそんな不可解な現象を前に動揺しながらも、義人を背に庇いながら両手の氷の刃を振るう。
今しがた、カールを援護していたヤナギを倒すために志信が向かった。『無効化』の棍はほとんど効力が切れているとはいえ、志信の高い察知能力と身体能力は“魔法使い”にとっては天敵といえる。多少骨が折れるが、ヤナギを倒しきるまでカールを押さえ込むのは可能だろう。
この時、サクラはそんな“楽観”をしていた。
だが、サクラの様子を見て取ったのかカールが僅かに口の端を吊り上げる。

『戦いの最中に楽観とは、余裕だな』

袈裟に切り裂こうと剣を振るいつつ、カールがコモナ語でそんな言葉をかける。サクラは斬撃を避けつつ、その言葉に対して眉を寄せた。しかし、すぐに表情を取り繕って口を開く。

『何の“カラクリ”があるのかは知りませんが、それだけで易々と倒されるほど甘い鍛錬を積んだ覚えはありません』

カールの斬撃を防ぎつつ、サクラもコモナ語でそう答える。すると、その言葉を聞いたカールは僅かに落胆の色を覗かせた。

『倒すだけ、殺すだけで良いのなら楽なんだけどな』
『どういう、ことですか？』

言葉に込められた意味を考え、サクラの口調に僅かな険が混じる。そんなサクラに対し、カールは気負わない口調で告げた。

『相手の力量を正確に把握するのも実力の内だってことだ。アンタは俺を抑えているつもりだろうけど、逆だよ』

そこまで口にすると、カールは挑発染みた笑みを浮かべる。それを聞いたサクラは、目を細めると僅かに声色を低くした。

『貴方が、わたしを抑えていると？』

そう言ってサクラは強く踏み込み、『強化』によって向上した膂力と体重を勢いに乗せてカールへと繰り出す。カールは身を引くことでその一撃を事も無げに回避すると、サクラの背後に少しだけ視線を向けた。

『弱っている奴や弱い奴がいるなら、そちらから無力化する。俺に比べたら、ヤナギのほうが無力化するのに適してるんでね』

その言葉に続くように、カールは僅かに表情を変える。

『あっちは時間の問題か。俺もそろそろアンタを捕まえようと思うが……今ならまだ大人しく捕まえてやるぞ？』

『捕まる理由がわかりませんが？』

『そうかい』

サクラの言葉をどう受け取ったのか、カールが表情を消す。そして、軽く地を蹴った。

『なら、多少強引にでも捕まえる』

そんな言葉を残し、カールが“視界から”消える。サクラは一瞬我が目を疑ったが、自身に迫る殺気を感じて咄嗟に右手を振り上げた。その瞬間、氷の刃に何かが当たって刃が砕け散る。

それがカールの攻撃によるものだとサクラが判断するよりも早く、今度は左手の氷の刃が砕け散った。サクラはなんとか距離を取ろうと地面と蹴るが、それに続くように鳩尾へ衝撃を受けて後ろへと弾き飛ばされる。苦痛による悲鳴を上げる暇もなく地面へ叩きつけられ、そのまま数メートルほど転がって動きを止めた。

「……あ……う……」

直前で後ろに跳んだおかげが、気を失ってはいない。だが、立ち上がることはおろか痛みで喋ることもできず、サクラはか細い呼吸を繰り返す。

『やれやれ……エリス様を攫った相手とはいえ、年下の女の子を殴るっていうのは気が引けるな……』

右手に持った剣を鞘に納め、そこから鳩尾へと拳を繰り出したカールは殴り飛ばしたままの体勢でそう呟く。そして体勢を解くと、懐からロープを取り出した。

『もっと持ってきとけば良かったか……ん？　っと！』

倒れたサクラにカールが歩み寄ろうとした時、不意に進行方向を変えて後ろへと跳ぶ。そして鞘に納めた右の剣を抜くと、“進行方向を変えた原因”へと目を向けた。

『不意打ちか？　それにしてはずいぶんとお粗末な魔法だったが』

そう言って挑発するように剣を持ち上げ、風の魔法を放ってきた義人へと口元を吊り上げて笑いかける。義人はノーレを振り切った体勢からすぐさま正眼に構え直すと、ゆっくりと息を吐き出した。

その表情は強張っているが、それでもサクラを庇うように前に出る。するとそれを見たカールは僅かに首を傾げ、続いてつまらなそうに鼻を鳴らして威圧するような雰囲気を放つ。

それでも義人はノーレを構え続け、油断すれば震えそうになる自身の体を抑えつけた。

『相手との力量が……といっても、アンタはわからないみたいだな。“その域”まできてないのか、それとも単に無鉄砲なだけか』

義人の様子を見て取ったカールは、ゆっくりと歩を進めながらそう声をかける。それを聞いた義人は返答の言葉を返そうとしたが、緊張した頭では上手くコモナ語を考えることができず、結局は何も

言わずにノーレを構えるだけだ。すると、カールがやれやれと言わんばかりに肩を竦めた。

『下手な抵抗はしないでくれよ？』

そう言葉を残し、カールが地を蹴る。サクラの時と比べると遅いが、それでも義人の目にはほとんど映らない速度で迫る。

『右じゃ！』

「っ！」

ノーレの言葉に反応し、義人はすぐさま握った王剣を右へと振り抜く。体重の乗り切らない一撃だったが、それでもノーレを叩き落しにきたカールの剣を弾くことができた。すると、防がれるとは思っていなかったのかカールが少し驚いたような表情を浮かべる。だが、驚きながらもすでに二撃目が義人の傍まで迫っていた。

『後ろに一歩引くんじゃ！』

ノーレの言葉を信じ、義人はすぐに一歩後ろへと下がる。それと同時にノーレが剣先から風を発生させ、カールの太刀筋を僅かに変えた。

義人は顔の横二十センチほどの位置を通過する剣先に冷や汗を流しつつ、次々に繰り出される斬撃をノーレの指示に従って防いでいく。

時には弾き、時にはかわし、時には受ける。防ぎようがない場合はノーレが風を放つことで回避し、紙一重で避け続ける。

そうやって切り結ぶ、否、カールの一方的な攻撃を三十合ほど受けきると、カールが不意に双剣を振る腕を止めた。そして興味深そうに義人を見ると、視線を鋭くして腰を落とす。

『動きは素人臭いのに攻撃はしっかり防ぐか。目が良いのか、それとも別の何かか。時間もかけられないしな……あまり手加減はいらないか』

そんな言葉と共に踏み込み、振るわれる双剣。だが、先程までとは様子が違う。義人は剣の周りに“何か”の力が働いているのを肌で感じ、ノーレは義人よりも正確に現状を把握して指示を出す。

『受けずに避けるんじゃ！』

首筋と右腕を狙って放たれる斬撃を前に、義人はノーレの言葉通り回避するために後ろへと跳躍することで回避を試みる。だが、空振りした双剣から“何か”が放たれ義人を狙い撃つ。

「っつ！」

“何か”……双剣から放たれた鎌鼬が左頬を掠めるが、義人は痛みを堪えながらノーレを振るう。それと同時に義人がノーレへと魔力を送り、魔力を受け取ったノーレが迎撃用の鎌鼬を生み出してカールの魔法を相殺していく。しかし、カールは自身の魔法を相殺されても動揺することはない。怜悧な眼差しで義人を見据え、次々と急所目掛けて斬撃を繰り出す。

「くっ……そぉっ！」

次々と迫る必死の一撃を、義人は辛うじて防いでいく。だが、防ぐにつれて義人は目の前のカールと自分自身の実力差を正確に認識し始めていた。

義人とて、ここ数ヶ月はほぼ毎日志信の早朝訓練に付き合ってい

る。日中は政務などがあるとはいえ、多少は剣の腕も伸びていた。だが、伸びたが故に相手との差がわかる。身を守れるようにと体を鍛え、それが原因で相手の強さをわかって恐怖するという皮肉に義人は臍を噛む気持ちだった。

――段違いではなく、桁で違う。

そう痛感し、そして何より、何の躊躇もなく急所目掛けて剣を振るうカールが恐ろしかった。

『ノーレ、みんなはこっちに来られないのか!?』

刃先が掠め、肩口に走った鋭い痛みを堪えつつ義人はノーレへと叫びかける。それを聞いたノーレは、すぐさま周囲の様子を確認した。

『仏頂面と魔法使いはこちらに来ようとしておるが、動きようがない。そしてメイドじゃが、まだしばらくは動けそうにないようじゃ』

『っ！　じゃあ他の……ミーファ達は!?』

『この騒ぎじゃから駆けつけるとは思うが……あと数分といったところじゃな』

『数分……』

ノーレの言葉に、義人は固い呟きを零す。

あと一分すら耐え切れるかわからない。今でさえすでにあちこちに傷を負い、息は上がりつつある。ノーレを振る腕は重くなっているし、そもそも体全体が重く感じていた。

――逃げる、か？

思わず心の中で呟いた言葉。だが、今はそれが酷く魅力的に思える。しかし、逃げる方法はない。背中を見せればその瞬間に斬られるだろう。それに、倒れているサクラを置いて逃げるわけにもいかなかった。

捕まえるという言葉を聞いてはいたが、それも何故かわからない。下手すれば……と、そこまで考えた時、義人は根本的なことが頭に浮かんだ。

「そもそも、何で俺達を捕まえるんだ？」

思わずそんな言葉を口にする。それを聞いたカールは日本語がわからなかったのか首を傾げた。

なし崩し的に戦っていたが、自分達が捕まる理由がない。向こうにはあるのかもしれないが、少なくともこちらにはなかった。義人がそう思考していると、それを隙だと判断したカールが一気に間合いを詰める。

「しまっ！？」

手元に激しい衝撃。それと同時にノーレが義人の手から離れ、数メートル離れた場所へと飛ぶ。義人は咄嗟に手を伸ばしたが、掴むことはできない。

『動くな』

ノーレを拾うべく義人が地を蹴ろうとした時、そんな言葉と共に首筋に冷たい感触が伝わる。自分の首筋に剣の刃を当てられているのだと気付き、義人は動きを止めた。

『下手な動きはするな。魔法を使おうとするな。口を割らせる“証

人”は多いほうが良いが、絶対じゃない。この意味がわかるな？』

殺気と共にそんな言葉を投げかけられ、義人は無意識の内に唾を飲み込む。僅かに腕が震え出すが、それでも聞くべきことがある義人はゆっくりと口を開いた。

『一つ、聞かせてほしい』

義人はここ最近になってようやくまともに話せるようになったコモナ語で話しかける。多少発音にぎこちなさがあったものの、それでも意味が通じたらしくカールが僅かに眉を寄せた。

『なんだ？』

『何で、俺達を捕まえようとする？』

『――は？』

殺気が強まり、同時に義人の首筋へと僅かに刃が食い込む。皮膚が切れそうで切れない嫌な感触に、義人は口を閉ざした。

『何故だと？　ふざけているのか？』

『……ふざけてなんか、いない。本当にわからないんだ』

義人がそう言うと、カールの殺気が僅かに弱まる。そして、探るような目つきで口を開く。

『エリス様を攫っておいて、ずいぶんと虫の良い話だな。一国の王女を誘拐する……捕まって当然だと思うが？』

そんなカールの言葉に、義人はようやく相手が何を考えて自分達を捕まえようとしているか理解した。会話が噛み合わないはずだと、

ようやく理解できた。だが、王女という単語が頭に引っかかり、義人は自身の記憶を漁る。記憶があやふやだったが、レンシア国の王女の名前に似たような名前があった気がした。

『そのエリス様って子、レンシア国の王女……だったっけ？』

誰かに聞いたか、それともそんな資料を見たかはわからない。だが、今はそんなことを気にしている場合でもなかった。

『その通りだ。わからないというのは嘘だったか？』

再度、剣の刃が首筋へと食い込んでくる。義人は冷や汗を浮かべつつも、否定の言葉を紡ぐ。

『なんで俺達が友好国の王女を攫わなくちゃいけないんだよ。そんなことをしてもメリット……利点がない』

義人がそこまで言うと、カールは眉を寄せる。そして疑惑的な口調で義人へと尋ねた。

『友好国、だと？　お前はどうせハクロアの人間だろう？』

『ハクロア？　何でハクロアの名前が……俺はカーリアの人間で、一応国王をやってる。カーリアとレンシアは友好関係にあるんじゃないのか？』

国王という言葉を聞き、カールは目を見開く。だが、首筋に当てた剣を下ろすことはない。義人が言っていることが嘘である可能性がある以上、警戒を解くわけにはいかないかった。

『……国王である証拠は？』

それでも、だいぶ険が取れた声色に義人は多少安堵する。

『そこに転がっている剣……あれは『風と知識の王剣』といって、カーリア国では王にしか使えない剣だ。あと、ちょっと離れた場所に野営地が作ってある。そこまで行けばわかるはず……』

『では、何故王が戦っている？』

『カール』

再度義人へ質問をしようとしたカールを、そんな呼びかけが遮った。義人の首筋に剣の刃を当てたままカールがそちらに少しだけ目を向けると、志信とシアラに杖を突きつけながら歩み寄ってくるヤナギの姿がある。志信もシアラも手には何も持っておらず、シアラが使っていた杖はヤナギが握っていた。だが、二人を連れて歩くヤナギの表情には困惑の色が浮かんでいる。

『何かおかしい。こいつらがエリス様を攫ったとは思えないんだが』

『その理由は？』

『こっちの女はエリス様を知っていたが、男は知らなかった。そして、カールがソイツに剣を突きつけて動けなくしたら抵抗しなくなった』

そう言ってヤナギは志信とシアラを見ると、志信が頷く。シアラは苦痛に呻くサクラを見ながら、両手を強く握り締める。その際怒気を感じ、志信は手でそれを制した。下手な動きを見せれば、義人に危険が及ぶ可能性がある。シアラは口元を強く引き結ぶと、小さく頷いた。

『そっちは何かわかったか？』

ヤナギは志信とシアラの挙動に注意しながらそう尋ねる。それを聞いたカールは、眉を寄せながら答えた。

『本人いわく、カーリアの国王らしいが……確証がない』

『おいおい。本当に国王だったらとんでもない事態だぞ』

カールとヤナギは顔を見合わせ、次いで義人へと視線を移す。その視線を受けた義人は、僅かに固い表情で口を開く。

『とりあえず、野営地まできてくれないか？　そうすれば、誤解だってわかると思う』

そんな義人の提案に、カールとヤナギは少しばかり顔を見合わせてから頷いた。

『この方は、間違いなくカーリア国の国王であるヨシト様です』

武器をカール達に渡した状態で野営地に向かい、話を聞いてそんな言葉を放ったのは商人のゴルゾーだった。その言葉を聞いたヤナギは、精彩を欠いた表情で口を開く。

『ゴルゾー。それは、本当か？』

商売のために他国に赴くゴルゾーは顔が広く、ヤナギはゴルゾーの顧客の中の一人である。今回ゴルゾーが運ぶ積荷……大半は米だが、その米の買い手の一部はジパング出身のヤナギだった。何度も顔を合わせたことがあり、ヤナギとしてはゴルゾーは信用に足る人間のため、義人が王であるということも本当なのだろうと信用した。

『はい。本来ならば昨日のうちに王都ハサラへ到着する予定だったのですが、予定よりも進行が遅れてこの場で野営をしておりました。その際、森のほうに人影を見かけたため人を向かわせたと聞いております』

『そうか……』

カールとヤナギは互いに目を合わせる。そして、すぐさま義人の前で膝を突いて頭を下げた。

『弁解の言葉もありません……まさか、カーリア国の王でしたとは露知らず……』

治癒魔法使いに傷を癒してもらいつつその言葉を聞いた義人は、傍で直立するミーファに目を向けた。

『あー……ちなみに、これってどれくらいまずい事態なんだ？』

そんな義人の問いに、ミーファは僅かに考え込む。その周囲では魔法剣士隊の兵が取り囲み、中には義人と同じように治療を受ける志信やシアラの姿がある。サクラは外傷こそほとんどなかったものの、野営地について治療を受ける内に気を失って天幕へと運ばれた。

義人は痛みが消えていく心地良さに浸りつつ、今の状態を把握するべく頭を動かす。

誘拐犯と間違われて襲われた。

言葉にすればこれだけだが、互いの立場に問題がある。

『国としては、十分に戦端を開く理由になります。それくらいの事態かと』

考え込んでいたミーファがそう言うと、義人は『だよなぁ……』と呟く。しかし、いまいち考えがまとまらない。疲労のためか、それとも緊張状態から開放された安心感からか、思考の回転がやけに鈍く感じられた。

『……駄目だ。頭が働いてくれない』

時刻は午前二時を少し過ぎた程度で、義人としては“あれだけ”の体験をしたというのにあまり時間が経っていないように感じられた。しかし、体に圧し掛かる疲労感が酷い。

『はぁ……今すぐに結論を出さなきゃいけないってわけでもないか。とりあえず、えっと……カールだっけ？』

『はっ……』

本当ならさん付けで呼ぼうとしたが、それは立場柄控える。すると、カールは畏まった様子で返事をした。

『時間も時間だし、明日になればハサラにも到着できる。ここですぐに結論を出すわけにもいかないし、今のところは保留ってことで。それと、そっちの姫様が使う天幕は用意させてるから寝かせてやってほしい』

『……ありがとうございます』

その返事を受け取ると、義人は傷がほとんどふさがっているのを確認してから背を向けた。

「くそ……」

王用の天幕に戻り、布団に腰を下ろした義人は開口一番そう呟いた。そして、安心したせいか今になって小刻みに震える右腕を見下ろし、義人は小さく舌打ちする。腕は震えているのに、手はノーレを握った形のままで動こうとしない。手を開こうとする気も起きず、義人は再度舌打ちをした。

次いで、義人は左手を頬へと伸ばす。カールの放った鎌鼬でできた傷はすでにふさがっており、痛みも残っていない。だが、もしも掠めた位置が頬ではなく首筋だったら頚動脈が切れていたかもしれないのだ。そう考えて、義人は体全体が震えるのを感じた。

『ヨシト……』

そんなヨシトの様子を見て、ノーレが気遣わしげに思念通話で話しかける。その声を聞いた義人は、頬から手を離した。

『なんだ?』

『その、なんじゃ……すまなんだ。妾は、大した力になれなかった』

気落ちしたような口調で話しかけてくるノーレに、義人は僅かに驚きの感情を覚える。そして、少しばかり肩の力を抜いてからそれに答えた。

「そんなことはないさ。ノーレがいなければ、俺は多分死んでたよ」

死んでいた。そう口にして、義人は少しばかり目を見開く。

「……そっか、俺、死んでたかもしれないんだよな」

自分で口にしたことなのに、理解が追いつかない。義人は落ち着かない感覚に眉を寄せると、先程カールと斬り合った……否、必死に攻撃をしのいだ時のことを思い出す。

一度剣を振るわれる度に強く感じた、彼我の差。以前税金を横領したエンブズの屋敷に乗り込んだ際には強く感じなかった危機感。そして、死ぬかもしれないという恐怖感。目を閉じながらそれらを思い出し、義人は深いため息を吐いた。

「……はぁ……本当に、“別世界”だな」

平和だった元の世界とは違うのだと、義人は本当の意味で理解する。自身が王として召喚されたカーリア国が特別だったのだと、この世界は決して平和で安全な世界などではないということを。

「しかし、また面倒なことになったな……」

湧き上がる恐怖感を誤魔化すように、義人は頭を掻きながら呟く。カール達は現在向かっているレンシア国の人間であり、軍に属する。しかも一部隊を率いる隊長であり、そんな立場の人間が誤解とはいえ他国の王を攻撃して怪我を負わせた。それらの事態は、自身が予想しているよりも大事になるだろう。

そうやって義人が考え事をしていると、ボスボスと天幕を叩く音が耳に届いた。義人はそれがノック代わりだと悟ると、顔を上げる。

「誰だ？」

かけた言葉は、いつもに比べて硬い響きがあった。だが、今の義人にはそれに気付く余裕もない。

「わたしだよ、義人ちゃん。少し良い？」

「……優希か。寝てたんじゃなかったのか？」

てっきり志信かミーファ辺りだと思っていた義人は、僅かに面食らったような言葉を返す。

「さすがに起きちゃった。話も大体は聞いたんだけど、義人ちゃんは大丈夫だったのかなって思ったら心配になっちゃって」

閉められた天幕越しでの会話に、義人は少しばかりため息を吐く。そして、十年以上付き合いのある幼馴染みの顔を見れば落ち着くかもしれないと腰を浮かせた。

「なあ、優希。少しで良いから話さないか？」

時間はすでに午前二時を回っているが、このままでは眠れそうにない。疲労はあるのに、頭が冴えて眠れそうにない。そう思ってかけた言葉に、外にいる優希はすぐさま返事の言葉を口にする。

「うん、いいよ。じゃあ、お邪魔するね？」

そんな言葉と共に、天幕の入り口から優希が顔を覗かせた。優希はいつも寝巻きに使っている薄黄色のゆったりとした服を身に纏い、その上に上着を羽織っている。その優希に続くように小雪が天幕の中に入ってくるが、こちらは半分寝ているのか微妙に足取りが怪しかった。

優希が義人の傍に腰を下ろすと、小雪は優希の膝の上に頭を置いて再び眠りの中へと沈んでいく。

その様子を眺めていた義人は、隣に座った優希へと目を向けた。着ている服こそ寝巻きのものだが、その顔は十年以上見てきた馴染みあるものだ。時間的な長さで言えば両親よりも長い時間見ている

かもしれない。
義人が何も喋らずに優希を眺めていると、優希は不思議そうに首を傾げる。
「どうしたの？」
「……いや、優希だなぁって思って」
特に何も考えずにそう言うと、優希は口元に手を当てておかしそうに笑う。
「ふふっ、変な義人ちゃん」
本当に見慣れた、“元の世界”と同じ優希の笑顔。それを見た義人は、僅かに心が揺らぐのを感じた。すると、不意に優希が視線を下へと下げて眉を寄せた。
「手、どうかしたの？」
「え？　あ……いや、ちょっとな」
震える腕を見た優希の問いに、義人は曖昧な言葉を返す。すると、優希は義人の目を正面から見つめた。それに対し、義人は僅かに目を逸らす。
「痛いの？」
そう言って優希が手を伸ばし、義人の左手に触る。そして労わるように義人の手を撫でると、口を開いた。
「本当に、大丈夫？」

心配の色を覗かせた瞳で見られ、義人はどう答えるべきか迷う。だが、優希を相手に嘘を言っても通じないだろうと頷いた。

「大丈夫だけどさ……なんていうか、さっきまでこの世界が“元の世界”とは本当に違うんだなって実感してたんだよ。でも、優希の顔を見たら落ち着いたっていうか、安心したっていうか……まあ、そんなところかな」

優希に握られた左手の暖かさに少しばかり照れながら、義人は右手で頬を掻く。いつの間にか右手の震えも収まっていたが、義人がそれに気付くことはなかった。

「わたしの顔を見て落ち着いたの？」

きょとんとした表情で優希が尋ねる。その言葉に対して、義人は苦笑交じりの笑みを浮かべた。

「優希の顔っていうか、笑顔というか……まあ、長年見てきたからかな。何か、安心するんだ」

義人がそう言うと、優希ははにかむように微笑む。

「そうなんだ……」

本当に嬉しいと、そう言わんばかりの優希の表情。それと同時に、義人の肩に僅かな重みが加わる。

左手を握りながら、優希は義人へと肩を寄せた。義人はそんな優希の行動に僅かに驚くものの、優希の表情と心地よい重み、そして安心できる暖かさを感じて驚きの感情を消す。

「うん、すごく嬉しい」

小さく、優希が呟く。それを聞いた義人は、不意に強い衝動を感じた。

――もっと触れていたい。

そんな衝動に駆られ、義人は無意識のうちに自身の左手に添えられた優希の手をつかむ。そしてそのまま腕を引き、やや力任せに優希を引き寄せた。腕を引かれた優希は、その勢いで義人の胸へと身を倒す。

「わっ……」

ほぼ無意識に引き寄せた優希からそんな声が上がり、義人は動きを止める。だが、抱きとめた優希から身を離すこともできずに義人はあちこちに視線を飛ばした。

自分は何をしているのか。何を考えているのか。それと抱き締めた優希の感触やら。それらが頭の中で飛び交い、上手く言葉にすることができない。

「あ、いや、その、なんだ……あー……ごめん、何か急に抱き締めたくなった」

義人は言い訳を言おうとするが、適当なものが浮かばず本音で話す。すると、驚いたように義人を見ていた優希が頬を染めて僅かに首を傾げた。

「本当に急だね？」

「そう……だな、急だ。ごめん。何と言うか、その、安心するとい

うかなんというか」

優希を引き寄せた体勢のまま、義人は少しだけ頭を下げる。その際、甘い香りが鼻に届いて義人は視線を下げた。そして、嬉しそうに微笑む優希と視線がぶつかる。

本当に嬉しそうな、優希の笑顔。それを見た瞬間、義人は“本当に”気が緩むのを感じた。

「あ……れ……？」

「義人ちゃん？」

視界が揺れる。それに気付いたのか、優希が声をかけた。だが、それに応えることもできない。完全に気が緩んだせいか、意識が虫食いのように欠落していく。

――やばい、気が遠くなる……。

そう自覚した瞬間、義人はまるでブレーカーで電気を切るように意識を失った。

第七十九話：差異

やけに体が重い。

徐々に覚醒し始めた意識の中で最初に思ったことは、そんなことだった。寝返りを打とうにも体が上手く動かず、左手は痺れたように反応しない。それでいて妙に安心する暖かさも感じる。

義人は自身の体に起きている事態を正確に把握しようとしたが、いまだに眠気が残る頭では上手くいかなかった。それでも、やけに重く感じられる“布団”を身から剥がそうと右腕を伸ばしかけ、ふと指先に触れた感触に動きを止める。それと同時に、どこか甘い匂いが鼻について義人は眉を寄せた。

「んー……？」

はて？　と首を傾げ、義人は指先に触れたモノが何なのか手探りに確認していく。

感覚のある右腕が最初に伝えてきたのは、柔らかい感触。それでいて安心を誘う暖かさがあり、義人は右腕を上へと伸ばす。すると今度はサラサラとした絹糸のような感触が指先に伝わり、義人はますます眉を寄せた。

――なんだ、この“髪の毛”みたいなの……。

心の中でそう呟き、眠気で閉じていた目を開ける。そして最初に目に映ったのは、見慣れた栗毛の髪だった。少なくとも十年以上、ほぼ毎日見てきた幼馴染みのものである髪の色。それが目の前にある。

義人はいまだにエンジンがかかっていない頭で状況を理解しようとして、ゆっくりと視線を下げていく。

「すー……すー……」

そして、“自分が抱き締めた状態”で寝息を立てる優希の姿を認識した。しかも、いつの間にか小雪が義人の体に圧し掛かるように眠っている。

左腕が痺れていたのは優希の枕にされていたからであり、布団がやけに重く感じたのは小雪が乗っていたから。そう判断した義人は、何故こんな事態になっているのかと必死に頭を働かせる。

「待て、落ち着くんだ俺。一体何が起きた？　何をした？　まさか……いやいや、でも服はちゃんと着てるしな……」

優希を抱き締めた状態で服の状態を確認し、義人はひとまず安堵する。

次いで昨夜の記憶を掘り返し、何が起きたか、何をしたかを思い出して、今度は一気に感情が冷えるのを感じた。

「そうか、昨日……っていっても数時間前か。“あんなこと”があったんだったな」

そう呟き、義人は優希へと視線を移す。そして見慣れた幼馴染みの顔をまじまじと眺めると、頬にかかっていた髪を優しく払った。

幼い頃は同じ布団で寝たこともあるが、あの頃とは違ってお互いに成長している。それでも大きく動揺することなく抱き締めているのは、優希を“そういった”対象としてみれないのか、それともすでにそれを超えた感情を抱いているのか、義人にはまだ判断がつかない。だが、感覚としては後者のほうが近い気もしていた。

「あー……つい抱き締めちまったんだっけ？　そうしたら急に意識

が……やっぱり疲れてたのかねぇ」

腕の中で眠る優希を眺めつつ、義人はこれから起こるであろう事態に対してため息を吐く。

「こういうのも国際問題でいいんだっけ？　ミーファは戦端を開く理由にもなるくらいの事態だって言ってたけど……実感がわかないんだよな」

ぼやくように呟き、義人はなんとなく優希の頬をつついてみる。すると柔らかい弾力で指が押し返され、押しては引くというサイクルを数回繰り返した。

「ん……」

そうやって義人が頬をつついていると、優希が僅かに目を開く。そして何度かまばたきをすると、軽く周りを見回した。

「……あれ？　なんで義人ちゃんがわたしのテントにいるの？」

「いや、ここ俺のテントなんだけど……昨晩のことは覚えてるか？」

「えーっと……」

義人の左腕を枕にしたままで小首を傾げる優希。義人は微妙に腕の痛みを感じたが、口に出すことはなかった。

「たしか義人ちゃんの様子を見にきて、話を聞いて……」

優希は指折り数えるように口に出し、その途中で言葉が途切れる。そして頬を赤らめると、はにかむように微笑んだ。

「抱き締められて……」

どこか幸せそうに呟く優希に、義人は僅かに頭を下げる。

「……いや、なんというか、ごめん。衝動に駆られたというか、その……」

どうにも口で表現することができず、義人は言葉を濁した。すると、優希は嬉しそうに口を開く。

「ううん、気にしないで。それで、少しは気も紛れたのかな？」

「そう……だな。うん、落ち着いた。ありがとうな、優希」

義人は表情を緩めると、礼の言葉を口にする。その礼の言葉を受け、優希は悪戯っぽく笑って言葉を紡ぐ。

「義人ちゃんが弱音を吐くなんて、珍しいね」

それは、かつてタルサ村で肩を並べて座り、かけられたものと同じ言葉。

この世界に召喚されてまだ一ヶ月も経たない頃に吐いた弱音。それに対して、優希が義人にかけた言葉だ。

優希の言葉を聞いた義人は、僅かに目を見開く。そして穏やかに笑うと、あの時と同じ言葉を口にした。

「そうか？　まあ、相手が優希だしな」

義人の言葉に、優希が心から嬉しそうに笑う。その笑みを見た義人は、微笑み返そうとして眉を寄せた。そして優希の顔をじっと見つめると、眉を寄せたままで首を捻る。

「……優希、だよな？」
「え？　うん、そうだよ。どうかしたの？」
「いや、何と言うか……」
そこまで口にして、義人は捻った首を元に戻した。見た目は今までと同じはずなのに、優希に対する印象が今までと違ったように感じる。それが何故かと思案しつつ優希を凝視するように眺めていると、今まで義人の背中に圧し掛かっていた小雪が急に頭を上げた。
「小雪？　どうしたの？」
そんな小雪の行動を見て、義人よりも先に気付いた優希が声をかける。すると、小雪は一鳴きしてから天幕の入り口へと顔を向けた。そして、小雪が入り口を見るのとほぼ同時に天幕の入り口が軽く叩かれる。それがノックだと理解すると、義人は身を起こそうとして動きを止めた。
「やべぇ……」
そう呟き、隣で同じように身を起こした優希の存在をどう説明すべきか、頭を高速回転させて考えていく。
外はすでに日が昇っているらしく、天幕越しでも外が明るいということがわかる。つまり大勢の者がすでに起きており、優希が義人と同じ天幕で寝ていたと気付かれるだろう。
義人としては誓って何もしていないが、周囲からすればそうは見えないはずだ。割と気安い魔法剣士隊の男連中に見られれば、礼儀を弁えつつもからかいの言葉を投げかけてくるだろう。
そんな近い未来が頭を掠め、義人は無意識のうちに口を開いていた。

「でも、優希なら……」
「え？」
義人の小さな呟きに、優希が反応する。義人はすぐに口を閉じて続くはずだった言葉を打ち切ると、取り繕うように笑った。
「……いや、なんでもないよ」
そう言って軽く服装を整え、ノーレを掴んで天幕の入り口にかかる布を払う。やけにぐっすりと眠れたが、さすがに寝過ぎということでサクラが起こしにきたのかもしれない。
そんな風に軽く考えていた義人の目に飛び込んできたのは、天幕の前で膝をついて頭を下げるサクラの姿だった。
『なんだと!?　それは本当か!?』
レンシア国国王コルテア＝ハーネルンは、カールの所属する部隊の人間がもたらした情報に思わず大声を上げていた。その声に対し、夜明け前から走り続けて王都まで到着した男は膝をついたままで僅かに首肯する。
『なんということか……』
コルテアはしぼり出すように呟き、座っていた椅子に背を預けてため息を吐く。年齢を重ねて刻まれた皺がそれに合わせて歪み、苦悩のほどを表していた。

誤解とはいえ、他国の王やその側近に攻撃を仕掛けた。いくら誘拐されたエリスを取り戻すための一環だったとしても、決して許されることではない。

幸いというべきか死者は出ていないが、それでも多少の怪我を負わせている。その報告に対して、コルテアは目を閉じた。そして情報を整理し、素早く考えをまとめていく。

『エリスを攫い、その逃げる先にはカーリア国の使者達……もしも彼らが定刻通り到着していても、そのままエリスを攫えば良い……だが、カーリア国の使者達を巻き込めばこちらも責任を取らざるを得ない、か。その上、こちらの対応次第ではカーリアも敵に回る。やってくれるのう』

憎々しげに呟くと、コルテアはここ最近は小康状態にあった敵国の者達のことを頭に浮かべた。

『相変わらずのやり口か……追いつくにはカール達でないと追いつけんし、関わった証拠も残さんだろう。カール達ではカーリアの面々の顔など知らぬし、エリスを攫われてからは普段と違って冷静でもなかった……してやられたわい』

もしもカーリアの王……義人に手を出したのがカール達ではなかったらコルテアもここまでは悩まない。

国としての信用や今までの友好関係があるが、謝罪とそれに合わせて慰謝料や様々な交渉、それと手を出した者達を引き渡すか処刑すれば良い。だが、カール達は今のレンシア軍において主力中の主力だ。

今でこそ互角まで戦況を回復させているが、彼らは三年前、少年とも呼べる頃に劣勢のレンシア国のために志願兵として軍に入り、ここまで生き抜いてきた。ヤナギは多少事情が異なるが、カールな

どは愛国心溢れる青年であり、剣を振るえばこの国でも一、二を争う魔法剣士である。今のレンシア国があるのはカール達の尽力のおかげでもあり、コルテア個人としてもそこは感謝してもしきれない。

コルテアの娘達、すなわちこの国の王女達の信任も厚く、城下の民からも気さくな性格が非常に好かれている。そんな者達を斬れば、どんな影響が出るかわからない。最悪、落ち着いた戦況が一気に劣勢へと傾くだろう。

そうやって様々な考えを巡らせていると、報告をした部下がまだ下がらずに頭を下げているのにコルテアは気付く。

『他にも何か報告があるのか？』

『はっ……カール隊長達とは別にエリス様を捜索していた者達が、ハサラから少し離れたところで女性と女の子の死体を発見しました。片方はおよそ三十歳前後、そしてもう片方は十歳前後の子供です。顔を斬られていたために判別は難しかったですが、おそらくは……』

『手引きをした者の妻や子か。そちらのほうの調べは？』

『手引きをしたのは政務官のウォレスでした。家族構成は妻と子が一人ずつ。家のほうにも人を向かわせましたが、誰もいませんでした』

『ふむ……家族を人質に取られたか。なるほど、わかった。他に報告は？』

『現状ではこれ以上の報告はありません』

『そうか。ご苦労だった』

コルテアは報告してきた部下を下がらせると、この事態を切り抜けるための策を模索しようと思考の海に沈む。

『カーリアの王の意見も聞かねばならんが、カーリアが敵に回ることも避けねばならんし、どう上手く収めたものか……』

それだけを呟き、コルテアは目を閉じた。

「申し訳ありませんでした！」

地面に膝をつき、土下座をするように頭を下げながらサクラが謝罪をする。それを見た義人は、虚を突かれたように目を瞬かせた。

「えーっと……サクラ？　どうしたんだ？」

服が汚れるのもかまわず、地面に膝をつきながら頭を下げるサクラに対して義人は疑問のこもった声をかける。すると、サクラは頭を下げたままでしぼり出すような声を上げた。

「わたしがヨシト様を守らなくてはならない立場だというのに、逆にヨシト様に守られるなんて……」

悔しげに、そして悲しげにそう言うと、サクラは服の裾を強く握り締める。そんなサクラの様子を見て、義人は困ったように頬を掻いた。

「いや、俺は守ったっていうか、一方的にボコボコにされただけというか……今回は相手が悪かっただけだと思うぞ？」

少し話を聞いた程度ではあるが、相手はレンシア国でそれぞれ部隊の隊長を務める者達だ。対峙して感じた殺気も、生きた心地がしないほどに強いものだった。それでも手を抜いていたのだろうが、素人同然の義人からすれば思い出すだけで膝が震えそうになる。

しかし、そんな義人の言葉に対してサクラは頭を下げたままで首

を横に振った。

「『相手が強かったから守れなかった』。そんなことは、言い訳になりません。今回は誤解で、ヨシト様に大きな被害が出る前に事が収まりました」

そこまで口にすると、サクラは顔を上げる。それと同時に、目尻にたまっていた涙が一筋地面に落ちた。

「ですが、もしも相手がヨシト様を害するための刺客だったらと考えると……わたしは護衛として失格です！」

「いや、失格って……」

大げさなと、義人は笑い飛ばそうとする。だが、サクラの真剣で真っ直ぐな目を見て口を閉ざした。そして軽く周囲を見回すが、誰もサクラを止める者はいない。

「相手の力量を見誤ったばかりか、命をかけてお守りすることすらできませんでした……」

今度は悔しげに、涙すら滲ませるサクラ。義人はサクラの言葉を聞いて、サクラの真剣な目を見て、言葉にし難い違和感を感じた。

「……じゃあ、サクラは俺を護衛するためなら命をかけるっていうのか？　そのためなら、襲ってきた相手も殺すっていうのか？」

その違和感を探すように、ポツリと呟く。すると、サクラは迷いなく頷いた。

「はい」

短いながらも、嘘偽りを感じさせない言葉。そこには普段の温厚さや、義人のからかいに慌て、はにかむように笑う姿は微塵もない。今まで義人が命令しなかったが、仮に命令されれば誰かを手にかけることも造作なくこなすように感じられた。

義人はサクラの肯定の言葉に目眩（めまい）に似た感覚を覚え、それを振り払うように軽く頭を振る。自分よりも年下の少女に告げられた言葉で胃の辺りが鉛を流し込まれたように重くなるが、数回深呼吸することで気分を落ち着けていく。

「……本気かよ」

誰かに向けた言葉ではなく、自然と口から出た言葉だった。

ここは異世界で、魔法や魔物が存在する場所。それだけでなく、“人の在り方”すらも異世界のなのだと、義人は本当の意味で実感した。

「はぁ……そうか」

気分の悪さを吐き出すように、ため息を一つ吐く。そして義人は頭を掻くと、サクラから視線を外して空を見上げた。

太陽の位置から判断して、おおよそ午前九時を過ぎたぐらいだろう。今から朝食を取って王都ハサラに向かえば、夕方前には到着できる。

そう判断した義人は、膝をついたままのサクラに再び視線を向けた。

「まあ、“それ”はいいや。朝食を取ったらハサラに向かって出発しよう……って、朝食は残ってるのか？」

本来ならば、すでに出発している時間だ。当然朝食はそれよりも早い時間に取るものであり、朝食が残っているか義人は不安になった。

「ほら、サクラもそろそろ立ってくれよ。服がもっと汚れちゃうぞ？」

気分を切り替えるためにそう声をかける。すると、サクラは愕然とした面持ちへと変わった。

「それだけ……ですか？」

「え？　それだけって何が？」

サクラの言葉の意味がわからず、義人は首を捻る。そんな義人を見て、サクラは表情を愕然からすがるものへと変えた。

「処罰は……」

「処罰？　あー……ないけど」

義人としては、サクラを処罰する気はまったくない。

元を正せば、志信の身が危険かもしれないと首を突っ込んだのは自分だ。カール達と戦うことになったのは不幸な誤解が原因だが、エリスを誘拐した者達と戦った時には十分サクラに守られている。カールと戦ったときも、サクラの強さに驚いたものだ。

終わり良ければというわけではないが、義人にとって責めるべきはエリスを誘拐した者達であり、サクラではない。

だが、サクラとしては別である。

自分は処罰すら与えられない、処罰する価値すらないのかという考えが頭に浮かび、すがるように義人を見た。

メイドという立場ではなく、国王を護衛するという立場での失態。

本来ならば責を負わされ、義人に斬られても文句はない。だというのに、義人は処罰はおろか叱責もしない。

サクラとて、義人のことは理解しているつもりだった。

メイドとして仕えている自分に対し、髪飾りを贈る気安さや優しさ。時折見せる悪戯小僧のような表情。幼子か妹でもあやすかのように自身の頭を撫でてくる少し大きな手。

しかし、命の危険があったほどの事態ならばさすがにそんな優しさは見せずに罰するだろうと、覚悟をしていた。

その結果は、予想の逆。

サクラの頭に浮かんだ『処罰する価値すらないのか』という考えは、すぐに自分の義人に対する認識で打ち消される。

義人は本当に自分を処罰するつもりがないのだと、この世界で持つには過ぎる優しさや甘さを持っているのだと、サクラは理解した。その上、例え処罰を望んでも義人は決して頷かない。上司にあたるカグラにそれを望んでも、義人が止めてしまうだろう。

ならばと、今まで固めていた決意をさらに固くする。

「……わかりました。ヨシト様の御温情には、この身の“全て”をかけてお応えしたいと思います」

そう告げて、サクラは深く頭を下げた。

義人はサクラの様子に首を傾げながらも、朝食を取るべく炊事をしている兵達の元へと歩を進めていく。義人の隣には優希が並び、追従するようにサクラが後ろを歩いている。すると、義人は目の端に見慣れぬドレス姿の少女を見つけて足を止めた。その両脇にはカールとヤナギが控えており、少女は義人と目が合うとよどみない足取りで近づいてくる。

『カーリア国の国主、ヨシト王ですね？』

そう尋ねられ、義人が頷くと少女……エリスは純白のドレスの裾をつまんで折り目正しく一礼する。その際金糸のような淡い金髪が揺れ、義人はエリスの風貌に僅かに目を見張った。

『この度はこの身をお救いいただき、まことにありがとうございました。そして、我が国の臣が非礼を働いたこと、まことに申し訳ありません』

日本人とは造詣が違うものの、これ以上ないほど整った目鼻立ち。生来の性格としてはどこか大人しそうな印象を受けるが、自分の立場を踏まえて毅然と振舞う姿。カールとヤナギ、そしていつの間にか合流したのか、彼らの部隊の人間を従えたその姿はどう見ても高貴なもの。

知らず後ろに下がりそうになった義人は、これが本物のお姫様かと内心感嘆しながら口を開く。

『……気にしないでください。こちらは当たり前のことをしただけで、カールさ……いや、貴女の国の臣下達の行動も、当然といえば当然でしょう』

言葉を選びつつ、義人はそんなことを話す。

気絶したエリスと、その傍らで抜き身のノーレを持って立つ自分。その光景を客観的に見れば、今からエリスに手をかけようとしていると誤解されても仕方ない。

エリスはそんな義人の言葉に少しだけ瞳を揺らすと、僅かに頭を下げた。

『此度の件に関しては、国として謝罪をしなければならないでしょう。それがどういったものになるか、わたしにはわかりません。今後の協議次第でしょうが……』

続く言葉を、エリスは飲み込む。王女としてではなく一人の人間として、自身の姉と妹が特に気にかけているカール達に対する助命の嘆願をしようとした自分を律した。

そんなエリスを見ながら、義人は僅かに表情を緩める。

『朝食と取ったらハサラに向けて出発しようと思います。えーっと……王女の馬車も用意させますから、乗っていってください』

エリスをどう呼べば良いかわからず、とりあえず王女と呼ぶ義人。呼び捨てしようとしたが、まずいではすまないだろうし、エリス様やエリス殿と呼ぶのも性に合わない。

そんな、歳の近い若年でありながら王という立場にいる義人の様子に、エリスは少しだけ相好を崩した。

『はい。様々なご配慮、痛み入ります』

相好を崩したエリスに、義人も表情を緩める。だが、義人はまだ理解していなかった。

自分はカーリア国の王であり、この事態がどれほど重大かということを。

第八十話：到着

カーリア国王都フォレスのものに比べて大きな城壁の門をくぐり、義人は馬車の窓から外を見る。本当ならば馬車の外に身を乗り出したいところだが、それはさすがに止められた。

窓の外に見えるのは、往来を生き生きとした表情で歩いていく住民の姿。もうじき夕方になるからか、和やかな雰囲気ながらも道脇の商人の声が飛び交い、十にも満たない子供が友達らしき他の子供と駆けていく。

「平和で、活気のある町だな……」

窓の外の光景を見て、義人は一人呟いた。

駆けていく子供を温かな眼差しで見送る老人。そんな老人の前を通り過ぎる、手を繋いだ若い男女。幸せそうな顔で笑い合う男女の傍で景気良く声を張り上げる商人。それら全てが、義人には少し眩しく見えた。

「この国の王様は、よっぽど優れた施政者なんだろうな」

町の様子を観察しつつ、義人は以前カグラから聞いた情報や書類等に書かれていた情報を頭の中から引っ張り出す。

国のことを考え、民のことも思うことができる賢帝とはカグラの弁だ。隣国のハクロアと戦(いくさ)をしていても民がここまで安らいだ表情をしているのは、コルテアが賢帝たる証拠の一つだろう。国全体を見渡してみれば違うだろうが、王都の人々の表情だけを見れば元の世界と似た雰囲気を感じ取れた。

「……ったく、俺がカーリアの住人だったら迷わずこっちに引っ越

すね」

苦笑混じりに呟き、馬車の窓から身を離す。そして義人は馬車に据え付けられている椅子に背を預けると、ため息を一つ吐いてから天井を見上げた。

「そんで、その賢帝サマと色々交渉をしないといけないわけか……全部カグラに任せて俺は町の様子でも眺めてたいねぇ」

カグラの前で言ったら笑顔で殴られそうなことを口にする義人。そんな義人の隣に座っていた優希は、義人の言葉を聞いて首を傾げる。

「カグラさんに全部任せるの？」

「いや、それは冗談だから。魅力的な話ではあるけど、俺も“交渉”に参加しないといけないんだよ」

優希の言葉に笑って返し、義人は僅かに目を細めた。

「カーリア国の中で起こったことならまだしも、レンシア国の中で、しかもレンシア国の兵士達に攻撃を仕掛けられたんだ。誤解だったから何も罰はなしっていうわけにもいかないだろうしな」

今回のことがどの程度の事態か、義人は正確に理解できていない。まずいと、端的ながらもそれだけは理解しているが、どれだけ重大かはわからない。そのため、交渉に関してはカグラや他の文官に大きく頼ることになるだろう。

いっそのこと丸投げするかと半分冗談で考えた義人ではあったが、カーリア国側の最終的な決定権は自分にあるのだ。それに、そんな

大事を決める際に国王である自分がいないというのも体裁や都合が悪い。

それが例え、違う世界から召喚された“ただの”人間だとしても。

「……義人ちゃん？」

沈黙した義人を怪訝に思ったのか、優希が首を傾げながら声をかける。すると義人は取り繕うに笑い、何でもないと言わんばかりに首を振った。

「ただの考え事だよ。さて、そろそろ着くかな？」

徐々に減速しだした馬車の中でそう呟き、義人は馬車の窓から外を見る。

その視界には、見る者を圧倒するような雰囲気を放つレンシアの王城が映っていた。

城門をくぐり、停止した馬車から義人が降りる。義人はここから先が公（おおやけ）の立場であることを弁え、制服を身に纏い、その上にカーリア国王が使う真紅のマントを羽織り、背中にはノーレを背負った姿で馬車を降りた。すると、一足先に王都ハサラへと到着していたカグラが歩み寄ってくる。表情が僅かに強張り、いつもに比べてやや足早だったが、義人の顔を見ると歩調を緩やかなものへと変えた。

「ご無事で何よりです、ヨシト様。怪我や被害などは？」

すでに報告を受けていたのか、挨拶もそこそこに本題を切り出すカグラ。表情を消してはいるが、どこかしら怒気を孕んだ気配が漂

っている。カグラの言葉を聞いた義人は、僅かに思案してから口を開いた。

「俺自体はかすり傷程度だったし、すぐに治癒魔法で治してもらったよ。他には近衛兵が何人か怪我したくらいだ」

そのかすった場所が悪ければ死んでいた可能性があるが、そんなことは口にしない。疲労がまだ抜けきっていないのか、妙な体のだるさを感じていたがそれも口にすることはなかった。

「そうですか……」

他にも細々とした報告を聞き、カグラが頷く。そして、義人の傍に控えていたサクラへと目を向けた。

「サクラ」

「……はい。申し訳、ありません」

どこか冷たい響きのこもったカグラの声に、消沈したサクラの声が応える。そんなサクラの様子に義人は苦笑しつつ、サクラの頭をポンポンと撫でた。

「首を突っ込んだのは俺のせいだよ。サクラはそれに付き合わされただけだし、俺を十分守ってくれた」

義人が庇うようにそう言うと、事の成り行きを見ていた志信が口を開く。

「義人の護衛がおろそかになったのは、俺の指示のせいでもある。サクラ一人の責任ではないだろう」

「……ん」

そして志信の言葉に同意するようにシアラが頷いた。カグラはそんな三人を見ると、俯いているサクラへと視線を向けてため息を吐きながら肩を落とした。

「ヨシト様がそう決められたのなら、わたしに言えることはありません。わたしも、ヨシト様のご温情を受けた身ですしね……ですが」

一度言葉を切り、カグラは義人に目を向ける。てっきり怒られるとばかり思っていた義人は、カグラが特に何も言わなかったことに内心驚きつつも次の言葉を待つ。

「ヨシト様も危険な目に遭われたと聞きました。これ以降は、危険だとわかることに自ら手を出されないようにお願いします」

その願いは臣下としてのもとか、それとも別か。義人はそう思考しようとして、その考えをすぐさま打ち切って頷く。

「ああ、さすがに今回の件で懲りたよ。これからは余計なことには首を突っ込まないようにするさ……なるべくだけど」

義人としても今回の件で色々と考えることができたが、もしも目の届く範囲で知り合いが危険な目に遭っていたら迷わず首を突っ込むだろう。だが、死ぬかもしれないという極限状態を味わってからはその考えもやや改まっている。

そんな義人の様子を見て何か感じるものがあったのか、カグラは真剣な表情で頷いた。

するとその時、カグラの元へと一人の兵士が駆け寄ってくる。服装を見てレンシア国の兵士だと悟った義人は、カグラへと話しかける

兵士の挙動をなんとなく眺めていた。

「……そうですか。わかりました」

数度言葉を交わして兵士が去っていく。小声での会話だったため義人には聞こえなかったが、深刻な話題というわけでもなさそうだった。

「どうかしたのか？」

「いえ、これからの予定に関してでした……っ！　コ、コルテア王！？」

兵士との会話内容について口にしようとしたカグラだったが、途中で驚きを露わにして膝をつく。その視線は義人の後ろに向けられており、義人はつられるように後ろへと振り返った。

そして、視界に入ったのは一人の男性。

外見から判断すると四十歳から五十歳程度で、白みがかった金髪と口周りや顎（あご）を覆う髭（ひげ）が貫禄を漂わせている。瞳の色と同じ赤を基調とした豪奢な服を身に纏っており、金糸を用いた刺繍（ししゅう）が施されたその意匠は嫌味のない高貴さが感じられた。

義人はカグラが呼んだ名と、周囲の人間が男性に対して膝をついていることから相手が誰なのかと思考していく。すぐさま目の前の人物と符合する情報を頭の中から引っ張り出し、義人は反射的に背を伸ばしていた。

「レンシア国国王……」

そんな呟きが漏れる。事前に読んだ資料には外見に関する記述は多少あったものの、元の世界のように写真などがあるわけでもない。カグラが名前を呼んだおかげですぐに気付くことができたが、もし

もカグラが名前を呼ばなくても雰囲気だけで察することができただろう。それだけの雰囲気が、目の前の男性……コルテアにはあった。

コルテアは義人の傍へと歩み寄ると、僅かに観察染みた視線を向ける。しかしすぐにそれを消すと、僅かに腰を折って頭を下げた。

『ようこそおいでくださった、カーリアの王よ。儂はレンシア国国王、コルテア＝ハーネルン。此度はエリスを助けていただき、感謝を申し上げる。そして此度の我が臣の非礼、大変失礼した』

「あ、いや……」

あっさりと頭を下げてみせるコルテアに面食らった義人は、コルテアの持つ威風、覇気とも呼べる雰囲気に押され、どう答えれば良いかわからず傍のカグラへと目を向ける。だが、すぐに気を取り直して口を開いた。

『初めまして、カーリア国の国王を務めている滝峰義人と申します。今回のことは……まあ、不幸な事故とでも言いますか。とりあえず、お姫様とカール達はそちらへお返しします』

慣れないコモナ語で答えつつ、義人は頬を掻く。すると、コルテアはそんな義人を観察するように見ながら頭を上げた。

『謝罪に関する協議などを行いたいところではあるが……ヨシト王も多少疲れている様子。協議は明日行うものとしてよろしいですかな？』

『……そうですね。もうじき夕暮れですし、こちらとしても多少考える時間が欲しいです』

義人がそう答えると、コルテアは同意を示すように頷く。そして傍に控えていた兵士に目を向けた。

『カーリアの方々を客室へ案内せよ。失礼のないようにな』
『はっ！』

コルテアの言葉に答え、兵士が義人達を案内するべく傍へ寄ってくる。その足取りはしっかりとしたもので、何気ない動作にも訓練が行き届いていることを窺わせた。

義人は後ろに控えていた志信へと振り返ると、アイコンタクトを取って互いに小さく頷き合う。そして義人は何事もなかったように元の体勢に戻ると、案内の兵士に従って客室へと足を向けた。

「ぷはぁー……何だありゃ。アレが本物の王様ってやつか」

客室に案内された義人は、いつも自分が使っている執務室と同程度の広さを持つ部屋を見回した後で開口一番そう呟いた。現在客室にいるのは義人だけで、他の者も各自客室へと案内されている。

義人はノーレを傍に立てかけると、無駄にでかいベッドへと倒れこんだ。

『あれがレンシアの国王か。機先を制されたのう』

三、四人は同時に寝れそうなベッドで手足を伸ばしている義人に、ノーレが思念通話で話しかける。それを聞いた義人は、同意を示すように答えた。

「ああ、まさかいきなり出迎えに出てくるとは思わなかった。しかも、あんなにあっさりと頭を下げるとはねぇ……」

しかも、頭を下げたといっても下手に出たというわけでもない。毅然とした態度で謝罪するその姿は、ある種の高潔さが見て取れた。

『非があることを自覚しているんじゃろう。ならば、少しでも印象を良くしてこれからの交渉での不利をなくしたいじゃろうしな』

「交渉……交渉か。ノーレはどのくらいが妥当だと思う？」

寝転がっていた状態から身を起こし、義人は鞘に納まったノーレを見る。ノーレは考え込むように沈黙すると、少しの間を置いてから答えた。

『通常なら今回ヨシトに危害を加えた者の引渡しを要求し、加えて賠償金を請求するといったところかの。それでヨシトの気が治まらんのなら戦(いくさ)を仕掛けても問題ないじゃろう。それくらいの事態じゃ』

「いやいや、問題あるっつーの。ミーファも戦端を開く理由になるって言ってたけど、そもそも戦ってどうするんだよ？　正直、勝てるとは思えないぞ」

『……まあ、そうじゃろうな。まともに戦えば勝てんじゃろうが、向こうはこちらとの戦は避けようとするじゃろう。戦えば“本命”に対して隙をさらすことになるじゃろうしな』

「ふむふむ……」

ノーレの言葉に頷きつつ、義人はどんな妥協点にするか模索する。国として、それなりの対応を取らなければならない。義人としては面倒だが、『はい、許します』ではすまないのだ。

「ま、今晩にでもみんなを集めて意見を聞くかな。俺一人で決めるなんて到底無理だし」

レンシアで行うのは建国記念式典の参加と玉鋼の取引に関する交

渉ぐらいだと考えていたが、ここにきて厄介な交渉が加わってしまった。

義人はそのことに若干の疲労感を覚えつつ、ため息を吐いた。

第八十一話：晩餐と小会議

細長いテーブルに敷かれた白いテーブルクロスに、その上に並べられた数々の料理。見栄えも考慮して盛り付けられた山海の味覚の数々は、見ているだけでも空腹を誘うようだった。そんな数々の料理を前にして、義人は途方に暮れたように立ち竦む。

良ければ晩餐会（ばんさんかい）に参加してはいただけないか、という知らせが来たのが三十分前。これも外交の一つかと判断した義人だったが、二つ返事で返答した三十分前の自分を殴りつけたい気分だった。

歓待か、それとも先の事件での謝罪のためか、テーブルに並べてある料理はどれも一級のものと呼んで差し支えない。匂いだけで空腹を誘い、視覚でも楽しませる。食べる前から驚くほど美味いとわかる料理を見たことなど、義人とてほとんどなかった。

「うーん……これ一品でいくらかかるんだろうか」

つい庶民染みたことを呟く義人。カーリア国での食事は倹約を徹底させているので、目の前の料理一皿の値段とカーリア国での一食の値段を比較すると前者のほうが高い可能性がある。そのことに若干の憂鬱を感じつつ、義人は視線を巡らせた。

義人から見て対面、テーブルの反対側にコルテアが座っており、その傍には三人の女性が座っている。もっとも、その内二人は少女と表現したほうが適切であり、少女の内一人は義人も見知った人物……エリスだった。

そんな三人の後ろには護衛のためか一人の男性が立っており、纏う雰囲気からして相当腕が立つのだろう。カーリア国側でテーブルに座るのは義人だけだが、義人の後ろにはカグラと志信が立っている。

義人は『さてどんな風に振舞おうか』と思案しつつ、案内に従っ

て自身の席へと歩を進めた。
コルテアは義人が席の傍まで来たのを確認すると、自身の娘である三人の女性と共に立ち上がる。

『ようこそお越しくださった、ヨシト王。ささやかではあるが、紹介を兼ねた晩餐の宴を用意させていただいた……レミィ』
『はい、お父様』

名前を呼ばれたレミィが純白のドレスの裾を摘みつつ、軽く一礼する。そして優雅に微笑み、口を開いた。

『お初にお目にかかります、カーリア国の王ヨシト様。わたしはレンシア国国王コルテア＝ハーネルンの娘、レミィ＝ハーネルンと申します。以後、お見知りおきを』

レミィはそこまで言って顔を上げると、今度は先程よりも深く頭を下げる。

『カール達の非礼は申し訳なく思っています。そして、妹のエリスを助けていただきありがとうございました』

一礼と共に、背まで伸びた淡い色合いの金髪が揺れる。一片の無駄もない、綺麗な動作に義人は思わず感嘆の息を漏らした。
自身よりも年上だからというわけではないが、強い意思と上に立つ者の貫禄が感じられる。だが、見ているだけというわけにもいかない。義人は呼吸を整えると、強い意思が感じられるレミィの瞳を見返しながら口を開く。

『どうも初めまして。カーリア国の国王を務めている滝峰義人……こっちではヨシト＝タキミネって言ったほうがわかりやすいですか

ね？　えーっと、レミィ……姫。これからよろしく』

レミィにどんな敬称をつけて呼ぶか迷った義人だったが、様や殿とつけて呼ぶのも硬すぎる気がして姫と呼ぶ。そんな義人の後ろではカグラが軽く咳払いをした。

レミィは義人やカグラの様子を見て僅かに目を細めると、隣に並び立つエリスへと目を向けた。その視線を受けたエリスは、一度深呼吸をして義人へと目を向ける。

『……せ、先日はこの身を助けていただき、まことにありがとうございました。そして、正式なご挨拶が遅れまして大変失礼いたしました。わたしはエリス＝ハーネルン。この国の第二王女です』

緊張しているのか、それを誤魔化すために一息に述べるエリス。早朝に見た時とは違い、どこかオドオドとしている。本来は人見知りをするのか、それとも父親や姉妹がいることで地が出ているだけなのかはわからない。腰まで伸びたレミィと同じ色合いの髪が、どこか所在無さげに揺れていた。

『初めまして……じゃなかった。ヨシト＝タキミネです。よろしく、エリス姫』

こっちが素なのかと内心首を傾げつつ、義人はレミィにしたものと同じような挨拶を口にした。すると、今度は義人とレミィ達の様子を興味津々といった様子で窺っていた少女……ティーナが輝くような笑顔を浮かべた。

『初めまして、ティーナ＝ハーネルンです！　エリスお姉様を助けてくれて、ありがとうございました！』

元気良く喋り、音が立つほどの勢いで頭を下げるティーナ。今年で十四歳になるが、小柄な上にはっきりと感情を表す様が実際の年齢よりも年下に見せる。姉妹揃って同じ色の髪は肩口で切りそろえられており、その表情からは活発な印象を受けた。

義人は元気の良いお姫様だと微笑ましく思い、口元を僅かに緩める。

『初めまして。これからよろしく、ティーナちゃん』

「んんっ！」

ティーナの様子に思わずちゃんづけで呼んだ瞬間、義人の後ろに控えていたカグラが大きな音で咳払いをした。それを聞いた義人は、右手で頬を掻く。

『あー……やっぱりティーナ姫で』

ちゃん付けはさすがにまずかったらしい。さん付けでも危ないところではあるが、義人としてはコルテア達がどう反応するかも知りたかった。すると、名前の呼び方を訂正されたティーナが小首を傾げる。

『わたしはティーナで良いですよ？　お父様もお姉様達もそう呼びますし』

言い直したことが余程不思議なのか、ティーナは呼び捨てでも構わないと促す。それを聞いたコルテアは、苦笑しながら口を開いた。

『申し訳ない、ヨシト王。ティーナは少々奔放に育ってしまってな』

まるで普通の父親が娘の粗相をたしなめるような光景を前に、義人は所在無さげに苦笑を返した。

『いえ、先に妙な呼び方をしてしまったのはこちらですし……』

そう言って軽く頭を下げる義人。頭を下げるのと同時に、王妃はいないのかと窺うがそれらしい女性はいない。その辺りの情報も後で確認しておこうと思いつつ、義人は僅かに視線をずらした。

『そちらの方は？』

護衛であろう男性に目を向けつつ、尋ねる。

身長は義人よりも高く、志信と比べても僅かに高い。年齢は二十代前半から後半に差し掛かる程度で、少し伸びた黒に近い緑色の髪と涼やかな顔立ちが印象的だった。それでいて、立ち振る舞いには一片の隙もない。護衛である以上武官なのだろうが、文官と言われても納得しそうな知性も感じられた。

男性はコルテアに目配せすると、それを受けたコルテアが頷く。それは許可を求めるものだったのか、コルテアが頷くのを確認してから男性が口を開いた。

『お初にお目にかかります。カーリア国の王、ヨシト様。私はクレンツ＝ホールドと申します。浅学非才の身ではありますが、この国の第一魔法剣士隊の隊長を務めております』

口上と共に頭を下げるクレンツ。

浅学非才と聞いた義人は、絶対嘘だと思いながらも一礼を返す。

『ヨシト＝タキミネです。よろしくお願いします、クレンツ隊長』

明らかに年上だったので敬語で話す義人だったが、義人の言葉を聞いたクレンツは僅かに目を見開く。

義人はそんなクレンツの反応から、『今度は逆に敬語がまずかったか』と内心だけで苦笑した。そして、自身の後ろに控えるカグラと志信に目を向ける。

『こちらも紹介したほうが良いですね。カグラはご存知でしょうから……』

そこまで言うと、今度は日本語で話すべく口を開く。

「ごめん、志信。ちょっと自己紹介してもらっていいか？」

「む、俺もか？　別にかまわんが……」

義人の頼みに、志信は一歩前に出る。そしてコルテア達に向かって一礼すると、視線をクレンツへと向けた。

『カーリア国近衛隊の指導を行っている藤倉……シノブ＝フジクラです。以後お見知りおきを』

『ほう……』

志信の名前を聞いたコルテアが、僅かに声を上げる。そしてさり気なく義人と志信の顔を見比べ、小さく眉を寄せた。

そんなコルテアの仕草に義人が気付く素振りを見せた瞬間、コルテアの表情が平静のものへと戻る。場を見渡してみればレミィも似たような表情をしていたが、義人が気付くことはなかった。

志信はクレンツと視線を合わせ、クレンツもそんな志信の視線を真っ向から受け止める。睨み合いというほど剣呑なものではないが、志信とクレンツはどこか探り合うような視線を互いに交わした。

『失礼』

志信が僅かに頭を下げ、後ろへと下がる。それを見たコルテアは、柔和な表情を作って義人に着座を促す。

『それでは、ささやかですが晩餐と参りましょう。我が城の料理人も、ヨシト王の口に合うようにと張り切っておりましてな』

『はは、それは楽しみですね』

コルテアの言葉に、義人も作り笑いを浮かべて応じた。

晩餐も終わり、午後八時を回ろうかという時刻。

三十畳ほどの大きさの会議室にカグラやミーファを筆頭とした、カーリア国の文官武官の代表六名が集まっていた。その他には国王である義人や近衛隊をまとめる志信、実際に戦闘に参加したサクラ、そして意見を筆記する役を申し出た優希、その足元には小雪の姿がある。

部屋の中央には長方形のテーブルが置かれており、各々がそれを囲むように置かれた椅子へと座っていた。

部屋の外には護衛として連れてきた魔法剣士隊の兵士が立っており、一応の警戒に当たっている。近衛隊の兵士は昨晩戦闘に参加して疲労や怪我をしていたため、心身の回復という名目で部屋に押し込められていた。外傷だけならば治癒魔法で治すことも可能だが、体に溜まった疲労などまでは治らないのだ。

その点でいえば義人もかなり疲労していたが、立場上この会議には参加しなくてはならない。疲労を理由にして明日に回すこともできたが、それでは時間が足りない可能性がある。ならばレンシア国との交渉を明日以降にすれば良いとの意見も出たのだが、この国に

来た主目的であるレンシアの建国記念式典などがあるためどうにも都合が悪かった。

この場で話し合う議題は、明日行われるレンシア国との“交渉”に関してである。

本格的な会議というわけではなく、軽く意見を出し合う程度の目的で開かれたこの会議ではあるが、“軽い”と予想していた義人の予想を裏切るように激しい意見のぶつかり合いが起きていた。

「だから先程も申し上げたように、此度の件はレンシアの一方的な落ち度です！　しかも、ヨシト王達に刃を向けたのはただの兵卒ではなく部隊の隊長！　これを追求していけば、多岐に渡る事柄で有利な交渉を行えます！　通常ならば害しようとした者達の引渡しを求めるところですが、相手はこの国の柱石足り得る者達です！　その身柄の受け取りを交渉の札として扱えば、大きな利を得られます！」

口角泡飛ばすように熱弁を振るうのは財務大臣のロッサ＝ハーネリアである。今回のことは上手く利用すれば巨額の利益を得ることができると義人にアピールし、そんなロッサを牽制するようにカグラが口を開いた。

「わたしは異議を唱えさせていただきます。たしかに、ロッサ殿の仰る通りに事を運べれば大きな利となるでしょう。しかし、国王であるヨシト様に刃を向け、その上怪我まで負わせた者の引渡しを望まないのは国としての体面に関わります。よって、断固として引渡しを求めるべきだと思います」

ロッサの弁では、ヨシトに刃を向けた者達……すなわちカール達の引渡しは行わない。その代わりにより多く譲歩させるというものだ。

対するカグラは、第一にカール達の引渡しを要求し、その上で賠償を求めるという案である。ロッサの案と比べれば利益は少ないだろうが、それでも交渉次第で多くのものを引き出すことができるだろう。

他にも意見が出ているが、この二人の意見と似通っているため二つの派閥が出来上がっている状態だ。今も、カグラの言葉に対してロッサが反対意見を口にしている。

義人はそんな話し合いを眺めながら、ため息を吐く。先程晩餐で出てきた料理の味は、正直よく覚えていない。表面上は朗らかな雰囲気だったが、どこか探り合うような空気が漂っていて食事を味わう余裕はなかった。ティーナはまったく気にせず料理を味わっていたようだが、豪胆というわけではなく場の空気が読めていないだけだろう。

義人が探り合いのように感じていただけかもしれないが、普段感じる緊張感とは別種のものを感じた。義人は『面倒だなぁ』と小さく呟き、傍らに立つ志信へと目を向ける。

「志信は何か意見はないか？　もしくは、この城の人間を見て感じたこととか」

「俺か？　そうだな……意見はないが、俺なりに観察してわかったことがある」

「わかったこと？」

「ああ。まず、城の中にいる兵士の様子を見たがカーリアと比べれば大分練度の差があるように見えた。もちろん、実際に戦うところを見たわけではないがな。だが、動きそのものがカーリア国の兵士とは異なっていた」

腕組みをしながら眉を寄せる志信に、義人は頭を掻きながら尋ねる。

「ちなみに、どのくらい差がある？」
「二対一ならなんとか勝てる、といったところか。仮に戦をするならば、三倍の兵数はいないと質の差で負けるだろう。カーリア国の大半の兵士は、人間相手の実戦経験がないしな」
「三倍って……レンシアのほうがカーリアの三倍近く兵がいるんじゃなかったっけ？　しかも実戦経験って……」

魔法という概念が存在する以上、戦いの優劣が数で決まるかはわからない。だが、基本的な考えとして戦は数の多いほうが勝ちやすいのも事実である。その上、カーリア国での実戦経験といえば魔物相手のものだ。訓練の際に試合を行うことはあっても、人間相手に命のやり取りをした者は多くない。兵の質やそういった面を加味すれば、志信の予想は妥当なものだった。

そうなれば兵を率いる将の質で勝ちたいところではあるが、これも劣るだろう。レンシア国には幾度も戦を潜り抜けた者達がいるが、カーリアにはほとんどいない。

その軍事的な観点でいえば、負い目があるとはいえレンシア国に対して強気に出すぎるわけにもいかない。戦争は政治の延長であり、無理難題を吹っかけてそれで開き直られたら一大事だ。もちろん、そんなことをすれば国としての信用を失うだろう。しかし、最終手段として取ることができる手でもある。

少し接した程度ではあるが、コルテアはそんな手は打たないと義人は見ていた。しかし、ここは元の世界とは違う異世界。手の平を返すように約束を破る可能性も捨てきれない。

「面倒だなぁ」

今度は割と大きな声で呟き、自分で肩を叩く。それを見たサクラがどこかぎこちない動きで義人の傍へと近寄ってきた。

「よろしければ肩をお揉みしますが？」
「いや、それはいいけど……」
義人は一度言葉を切り、傍に寄ってきたサクラを見る。いつも通りのメイド服に身を包んでいるが、その顔色は悪い。よく見れば額に汗が浮かんでおり、義人は首を傾げた。
「サクラ、お前大丈夫か？　調子が悪そうだけど……ちょいと失礼」
そう言って、義人はサクラの額に手を当てる。そして自身の体温と比べて僅かに唸った。
「ちょっと熱がある、かな？」
体温計のように正確にわかるわけではないが、それでも体温が高く感じられる。そう判断した義人は、心配そうに眉を寄せた。
風邪か、もしくは疲れが取れていないのか。義人は後者だろうと判断して、会議の様子を軽く窺った。
カグラとロッサの舌戦は拮抗しており、互いに落としどころがない。あともう少しすれば、義人の判断を求めて話を振ってくるだろう。
「まだ時間がかかりそうだし、サクラは部屋に戻って良いよ。疲れてるんだろ？」
本音を言えば、義人も疲れている。今ベッドに寝転べば、数分と経たない内に熟睡できる自信があった。だが、ここまで盛り上がっている舌戦に水を差すのも悪い気がする。何より、王の立場にいる自分を差し置いてまで意見をぶつけ合っている臣下の姿は、この世界に召喚されて間もない頃は中々見られなかった姿だ。

そんなカグラ達の姿を見ながら言った義人の言葉に、サクラは首を横に振る。

「主君であるヨシト様が起きていられるのに、そういうわけにはいきません」

「いや、そういうのは気にしないからさ。早めに休んで疲れを取ってくれよ。どうせあともう少しすれば……」

「ヨシト王！」

「ヨシト様！」

義人の言葉を遮るように、カグラとロッサが声を上げた。それを聞いた義人は、『ほら、やっぱりだ』と苦笑しながらサクラに退出を促す。サクラはそんな義人に無言で一礼すると、顔を俯かせて会議室から退室した。

その足取りが少しふらついていたのを心配する義人だったが、自分を呼ぶ声に意識を引っ張られる。

「ヨシト様はどう思われますか？」

「ん、そうだな……」

結局舌戦では埒が明かないと判断したらしく、カグラとロッサが交互に自分の考えを述べていく。それを聞いた義人は、最近癖になりつつある苦笑を浮かべた。

「俺としてはカール隊長達の引渡しはそこまで望まないかな。まあ、そこは明日、向こうの出方次第で柔軟に対応しよう。少し時間をおけば、違う意見も出るかもしれないしな」

みんな移動で疲れてるだろうし、と付け加える。それを聞いたカ

グラは、自身を落ち着かせるように深呼吸をした。

「そうですね。今日のところはここまでとして、明日コルテア王達の意見を聞いてから決めるというのも悪くはありません」

カグラが納得の意を示すと、ロッサも頷く。

「それじゃあ、今日はここまでだ。みんなしっかりと休むように」

最後に義人がそう締めくくり、本日の会議はお開きとなった。

第八十二話：会議は踊る、されど進まず

「ん……と、朝か？」

窓から差し込む朝日に照らされて意識が浮上し、義人は軽く目を擦りながらそう呟いた。そのまま気だるさの残る体を起こし、欠伸混じりにため息を吐く。そのまま寝起きのせいか少しばかり重く感じる体を伸ばし、気分を覚醒させようと試みた。しかし、中々上手くいかずに義人は首を傾げる。

「うーん……昨日もだるかったけど、今日もだるい。風邪かな？」

軽く肩を回して調子を確認するが、風邪とは違っただるさを感じた。まるで手足に重りをつけたような感覚に、義人は眉を寄せる。

「まさか新種の病気か？　って、そんなわけないか」

体が重くなる病気など、聞いたこともない。もしくは自分だけ重力が変動しているのだろうか、などと考えて義人は苦笑した。

「まったく、馬鹿なことを考えてないで準備するかな」

そう口にして無駄にでかいベッドから下り、すぐ傍に立てかけておいたノーレを手に取る。十一月に入って徐々に厳しくなってきた冷え込みのせいか、ノーレが納まった鞘はひやりと冷たい。指先から伝わってきたその冷たさで意識を覚醒させると、義人はノーレに向かって軽く頭を下げた。

「おはよう、ノーレ」

『うむ、おはようヨシト……む？』

欠伸を噛み殺しながら挨拶をする義人。すると、手に持ったノーレが挨拶と共に疑問のこもった声を上げた。

「ん？　どうかしたか？」

義人はノーレをもとの場所に立てかけ、着替えるための服を探しつつ、ノーレの疑問を追及する。しかし、ここは自身が治める城ではない。いつもなら寝室に何着か服を置いていたのだが、昨日借りたばかりのこの部屋に着替えの服が置いてあることはなかった。

『ヨシト、お主魔力が回復しきっておらんぞ。いつもに比べ、魔力に力強さがないように感じるんじゃが』

「こりゃサクラが来てくれるのを待つしか……はい？」

着替えを探しながら話を聞いていた義人は、ノーレの言葉をそのまま聞き流しかけてその動きを止める。そしてノーレの言葉をもう一度自分の中で繰り返すと、戸惑ったような声を漏らした。

「え？　そうなのか？」

ノーレの言葉に、義人は思わず自分の体を見下ろす。そして意味もなく自分の体を軽く叩いた。

「……いや、回復してないって言われてもわからないぞ」

志信ほど鋭い勘もなければ、カグラのように魔法に関して熟達しているわけでもない。魔力が完全に回復していないと言われても、ゲームのようにステータスが表示されるわけでもないのだ。そのた

め、義人はよくわからないと言わんばかりに肩を竦める。

『あの二刀流や盗賊共を相手にしてけっこう消費したしのう。昨日は休む時間が少なかったから仕方ないと思ったんじゃが、まだ回復しきっておらん……まあ、それでも巫女などよりも回復が早いんじゃろうがな』

「二刀流……カール隊長のことか。たしかに、けっこう魔法を使ったもんな。エンブズの一件以来、初めてか？」

残った魔力は三割程度だったのだが、ここまで魔力を消費したことはほとんどない。訓練などで使うとしても全体からすると僅かなもので、半分以上の魔力を消費したのは元財務大臣のエンブズが起こした暗殺未遂事件の時ぐらいだった。

「あの時は半分くらい消費したけど、翌日には全回復してたもんな」

『ということは、ヨシトは一日で半分近く魔力が回復するということか……それでも驚異的じゃのう』

今のところは八割ほどじゃしな、と付け加えるノーレ。それを聞いた義人は、苦笑して肩を竦めた。

「回復しても、使う機会はないほうが良いなぁ。魔法を使うのは戦う時くらいだろうし、命がかかった殺し合いなんてもうゴメンだね」

義人の戦い方は、風魔法という使い手の少ない希少な魔法を並の魔法使いよりも多い魔力で繰り出していくというものである。相手が並の者ならそれだけで互角以上に戦えるが、一定の腕を超えた者が相手だと一気に不利になってしまう。接近戦は素人で、放つ魔法もまだまだ荒い。ノーレの助言があるからこそ多少は斬り合うこともできるが、仮に志信が殺す気で襲ってきたら一撃で殺される自信

が義人にはあった。もっとも、そんな自信はいらないだろうが。

『お主は様々なことに首を突っ込みたがるからのう。助言や手助けをする妾としては、冷や汗が出るばかりじゃわい』

「いや、ノーレから冷や汗が出たら怖いだろ」

冷や汗が流れる剣など、笑いを通り越して一種のホラーである。

義人がそうやってノーレと笑い合っていると、客間の扉が軽くノックされた。そして『失礼します』という聞き慣れた声と共に扉が開き、義人の着替えを手に持ったサクラが入室してくる。

「おはよう、サクラ」

入室してきたサクラに義人が片手を上げながら挨拶をすると、サクラは義人が寝ていると思っていたのか驚いたように目を瞬かせた。だが、サクラはすぐさま気を取り直して頭を下げる。

「おはようございます、ヨシト様。もう起きていらっしゃったんですね」

サクラは頭を下げて挨拶をすると、やけにゆっくりとした足取りで義人のもとへと歩み寄っていく。そして手に持った義人の服を傍の机の上に置くと、一番上に乗っていたズボンを手に取った。

「どうぞ」

「ああ、ありがとう」

ズボンを手渡され、義人はひとまず礼を言う。

着替えた後は朝食になるのだが、昨晩の晩餐と同じようにコルテアやレミィ達と一緒に取る可能性が高い。だから早く着替えて準備

をしなくては、と義人はそこまで考えて、いまだに部屋から出ていないサクラと目が合った。

「あの、サクラ？　俺、着替えたいんだけど……」

寝巻きのズボンに手をかけた状態でそんなことを言うのも間抜けだったが、義人はサクラに対してやや遠回しに退室をお願いする。すると、サクラは真顔で口を開く。

「お手伝いします」

感情を堪えるように、短くそう告げる。それを聞いた義人は、サクラの言葉の意味を数秒間吟味し、さらに数秒呆然とした後で手を振った。

「いやいや、一人で着替えられるから。それに、手伝ってもらわないと着れないような服でもないし……な？」

召喚当初は義人が着替えようとすると手伝いを買って出たサクラだったが、それは義人が全力で拒否した。それ以降は一人で着替えることができたのだが、今日のサクラはなかなか首を縦に振らない。それでも義人が数分かけて説得すると、サクラは少しばかり肩を落としながら退室していく。

「……失礼しました」

退室間際に一度頭を下げ、サクラの姿が扉の向こうへと消える。それを見送った義人は、困ったように頬を掻いて口を開く。

「うーん……なんだったんだ？」

サクラが音を立てないように閉めた扉を眺めつつ、義人はポツリと呟いた。

昨晩義人達が使用した小さめの会議室とは違い、大規模の会議でも行えるよう作られた大会議室。

百畳ほどの広さを誇るその場所で、義人達カーリア国側の人間とコルテア達レンシア国側の人間が机を挟んで向かい合うように座っていた。両国の人数を合わせて四十人ほどだが、義人にとっては今まで感じたことのない類の緊張感が漂っている。

午前九時から開始されたこの会議は、今回の件に関する詳細の報告と義人達に危害を加えたことに対する謝罪を行うものだ。もちろん、謝罪というのは謝るだけではない。然(しか)るべき賠償を決め、それを元に謝罪する。

それは例えば何かの権利であったり、国土の割譲であったり、最も手ごろなもので賠償金などである。元の世界の日本のように、『遺憾の意』を唱えるだけではない。今回の場合はカール達の引渡しなども含めた交渉であり、両国とも口舌巧みに交渉を行っていた。だが、それも一進一退で中々思うようには進まない。

「会議は踊る、されど進まず……だったかな」

そんな会議の様子を眺めつつ、義人がポツリと呟く。会議を開始してから二時間ほど経過したが、かつてのウィーン会議を表現したその言葉は今の状況を的確に表していた。

カーリア国側はより良い賠償内容を引き出そうとし、レンシア国側はなるべくそれを抑えようとする。元の世界では交渉をまとめるのに長くて年単位という事態もあったが、今回の件は責任の所在が

ハッキリとしている分、決まるのもある程度は早いだろう。レンシア国としても謝罪の意思があり、あとはどういった賠償内容にするかが会議の焦点となっている。

しかし、二日後には建国記念の式典などが行われるためその準備もしなければならない。城の中では慌しく人が行き交い、コルテアなどは会議に参加しつつも記念式典に関する指示を出さなければならなかった。

そんな中でカーリア国が提示したのは、賠償金とカール達の身柄の引渡しである。ただし身柄の引渡しは交渉の札であり、それを餌により良い条件を引き出すつもりだった。

それに対し、レンシア国はカール達の身柄の引渡しが餌だと理解している。そのため、引き出される条件をいかに軽いものにするかを重点に置いていた。

今までの功績、そして隣国ハクロアとの戦いにおいて重要な戦力であるカール達を引き渡すわけにはいかない。

もしも今回の事件がコルテアの指示であり、義人達の暗殺を企んでいたということならばカール達の引渡しをしなければならなかっただろう。だが、それが誤解の上で起きた事故ならば義人としてもこれ以上事を荒立てるつもりはない。もちろん、『はい、許します』で片付く問題でもないのだが。

義人はレンシア国に関する情報が書かれた資料に目を落とし、軽くため息を吐く。

カーリア国と比べて三倍近い国土を持ち、兵力もおよそ三倍。十四万人ほどの人口を誇り、コルテアの治世の賜物か、戦時中にも関わらず国内の治安はかなり良い。山賊や夜盗の類による被害もほとんどなく、カーリア国に比べれば商工業、農業、魔法技術なども発達している。軍事力も隣国のハクロアに比べれば多少劣るものの、カーリア国を含む周辺の小国とは比べ物にならない。

次いで、義人はここ最近のレンシア国の動きについて書かれた項目に目を落とした。最近といっても五年ほど前から現在に至るまで

書かれており、ところどころでハクロア国と戦ったことに関する記述がある。義人達が召喚される二週間ほど前にはかなり大掛かりな戦いがあったらしく、その記述を見た義人は眉を寄せた。

「あー……だから挨拶の使者が来なかったのか。戦後処理が大変だったみたいだなぁ」

レンシア国、ハクロア国共に多くの死者が出たらしく、その戦後処理は非常に大変なものになる。その両国の死者はカーリア国の全兵力が全滅するような規模であり、それを想像した義人は静かに身を震わせた。

「ヨシト様？」

そんな義人の様子を見て取ったのか、傍に座っていたカグラが心配そうな声をかける。その心配を含んだ声を聞いた義人は、すぐさま表情を取り繕った。

「いや、なんでもないよ。それにしても、中々決まらないものなんだな」

誤魔化すように、眼前で行われている交渉へと目を向ける。カグラは義人が見ていた書類の項目に目を落とすと、僅かに表情を暗くした。だが、義人が話を切り上げたいと察してすぐに毅然とした表情へと切り替える。

「交渉事は中々決まりにくいですから。滞在中にまとまれば良いのですが、まとまらなければこのまま何人か残していくことになりそうですね」

「俺は？」

「ヨシト様はカーリア国に戻っていただきます。アルフレッド様が代行として城をまとめていると思いますが、やはり国王であるヨシト様の指示が必要でしょう」
「なるほど。なら、なるべく早く決めたいところだな」

そう呟く義人だが、目の前の会議はそう簡単に終わりそうもない。もうじき昼食となるが、いまだに賠償金の金額すら決定していないのだ。仮に決まっても、今度はカール達の身柄の引渡しでその金額が変動する可能性がある。

義人は財務大臣のロッサを筆頭に、今回の交渉のほとんどを臣下に任せていた。これはここまで大規模な交渉なら自分は役に立たないだろうという判断と、空いた時間にこの国の様子を見てみたかったからである。

城下町に住む住民や兵士が訓練している様子なども見たいし、他にも様々なことを見てみたい。その辺りの見学に関することも今回の賠償内容に含め、何かしら得られるものがないかと義人は思っていた。

そうやって義人が考え事をしながら会議を眺めていると、城の外から正午を知らせる鐘が鳴り響く。それを聞き、今まで弁舌を交わしていた者達は言葉を切って椅子へと腰を落とした。

食事抜きで会議を続けるわけにもいかず、空腹になれば頭も回らない。そのため、続きは午後に持ち越しとなった。

第八十三話：他国の情景

『お願いがあるのですが』

昼食を食べ終え、当たり障りのない会話をしていた義人はコルテアに対してそう切り出す。すると、話の切れ間にかけられた言葉に対してコルテアは僅かに警戒をしつつ口を開いた。

『願い、とは……一体何ですかな？』

紅茶を片手に、感情を表面に出さないよう話すコルテア。そんなコルテアに内心苦笑いしつつ、義人も紅茶の入ったティーカップに手を伸ばした。願いと言っても、そこまで警戒されるようなことではない。

カーリア国では中々飲む機会がない紅茶で唇を湿らせると、義人は音を立てないようにゆっくりとティーカップを元の場所へと置いた。

『少し街の様子を見てみたいと思いまして……案内に誰かお借りできないでしょうか？』

交渉がすぐにまとまるとは思えず、その間に義人ができることは話の流れを聞く程度のものだ。ならばこの国について少しでも知ろうと、義人は城下町の見学をコルテアに願い出る。すると、コルテアは少し思案した後に顎に手をやった。するとその瞬間、コルテアの瞳に智謀の色が過ぎる。しかしそれはすぐさま消え去り、義人達に気取らせることはなかった。

『街の様子ですか……ふむ、ヨシト王さえ良ければですが、カール

達に案内をさせたいと思うのですがいかがでしょう?』

『カール隊長達にですか?』

『ええ。カール達は今回の件を猛省しておりましてな。できることがあれば何でもすると言っておりまして……もちろん、ヨシト王が不快だと思われるのは重々承知です。しかし、カール達は城下の民達に慕われておりましてな。城下町を案内させるのならば、適任でもあるかと』

護衛としても腕は確かですしな、と付け加え、コルテアは義人の反応を待つ。それはどこか探るような沈黙だったため、義人は僅かに黙考した。

誤解とはいえ、カールは自分と剣を交えた相手だ。交えたといっても一方的な戦いで、下手をすれば死んでいたかもしれない。それを踏まえて不快だろうとコルテアは言っているのだが、誤解だとわかった以上、義人としては特に不快と思う感情はなかった。

『そうですね。それじゃあ、それでお願いします』

予想よりも早い返答だったのか、それとも義人が本当に頷くとは思っていなかったのか、コルテアは僅かに表情を動かす。

非を認めて謝ってきた相手に対して寛容に振舞ってしまうのは、日本人の美点であり欠点である。義人自身、相手が謝ってきたら鬼の首を取ったように騒ぎ立てるような性格をしているわけでもない。

カール達が城下町に住む民達に慕われているという、コルテアの言葉に興味を惹かれたのもある。

『それでは、そう指示を出しておきましょう。見に行くのは一時間後ぐらいでよろしいかな?』

『お願いします』

そう言って、軽く頭を下げる。
こちらも臣下に指示を出しておかないと、などと考えつつ、義人は先程よりも冷えた紅茶を飲み干した。

昼食後、義人は財務大臣であるロッサに交渉に関して一任すると、自身に宛(あて)がわれた客室でマントを脱ぐ。制服だけならばまだ良いが、さすがに紅いマントを羽織ったままで城下町の様子を見に行く気はなかった。
こちらの世界にはないタイプの服なので、『これが元の世界の正装だ』と言い張れば誰も気にしたりはしない。義人としては、無駄に華美で現代人の感覚だと着ているだけで恥ずかしくなるような服は御免被りたかった。
護衛はつくが、義人は用心のためにノーレを背負う。今回護衛兼案内役をするのはカールとヤナギで、万が一のことを考えてカーリア国側からカグラが護衛につく。本来ならばサクラや志信が護衛を務めるのだが、志信は得意な武器である棍が手元になく、サクラはカグラが護衛につくのならばと引き下がっている。

「本当は、護衛なんかつけずに出歩きたいもんだけどなぁ……」

ぼやくように呟き、義人は客室の扉を開く。すると、扉の横に立っていたカグラが義人のほうへと振り向いた。

「準備はよろしいですか？」
「いいけど、カグラはやっぱりその格好なんだな」

相変わらず巫女服を身に纏うカグラに苦笑する義人。同じサイズの巫女服が何着もあるのだろうが、ふと巫女服以外の服は持ってい

るのかと疑問に思った。しかしどうでも良い疑問だったため、すぐにその考えを打ち切る。すると、義人の言葉を聞いたカグラはどこか落ち着かない様子で僅かに頬を赤く染め、目を逸らした。

「その……たまには、違う服にしたほうが良いのでしょうか？」

「はい？　って、え？　もしかしてずっと同じ服なのか？」

一着しかないのかと、義人は思わずカグラが着ている巫女服を凝視する。同じものが何着もあるのだろうと考えたばかりだったため、その表情は驚き一色に染まっていた。

「ち、違いますっ！　ちゃんと毎日着替えてます！　同じ大きさのものが何着もあるんです！」

義人がどう勘違いしたのかをすぐさま悟ったカグラは、慌てて否定する。その慌て振りを見た義人は、苦笑しながら頬を掻いた。

「ごめんごめん。それで、違う服がどうしたって？」

義人が話を元に戻すと、カグラは気を落ち着かせるように大きな息を吐く。互いの身長差から自然と上目遣いになったカグラは、右手を胸元で握り締めた。

「それはですね、その……」

『お待たせいたしました』

カグラが言葉を続けようとした瞬間、その背後から声がかかる。その声が聞こえると同時に義人の視線が声のほうへと向いたことから、続けようとした言葉を飲み込むこととなった。

『お迎えに参りました、ヨシト王』

そう言って頭を下げるのはカールで、その傍らにはヤナギと一人の少女が立っている。カールは帯剣こそしているものの、鎧の類は身に付けていない。ヤナギは初めて会った時と同じく、乱雑に伸びた髪を後ろでまとめ、紺色の着物らしきものを着ていた。その見た目のせいか、まとめた髪がちょんまげのようにも見える。そして義人はもう一人、見知らぬ少女へと目を向けた。

『そっちの女の子は？』

少女の身長は低く、サクラやシアラよりも僅かに低い。緑色の髪とエメラルドのような翠の瞳が印象的だった。しかし、どこか落ち着かないような印象も受ける。

『“この姿”ではお初にお目にかかりますわ、カーリアの王。わたしの名前はフウ。先日は大変失礼致しました』

それでもスカートの裾をつまみ、いっそ優雅に頭を下げる少女。ティーナのように肩口で切りそろえた緑色の髪が揺れ、それを見た義人は少女……フウの言葉に首を傾げた。

『大変失礼って……どこかで会いましたっけ？　というか、“この姿”って？』

『そのままの意味ですわ。元の姿だと、城の中を歩くには少し窮屈ですの』

そう言って微笑むフウ。義人は困惑したようにカールを見ると、カールは苦笑しながらフウの頭に手を乗せた。

『フウは俺が乗ってた風龍ですよ。覚えていませんか？』
『カール隊長が乗っていた風龍って……まさか！？』

言葉の意味を理解し、義人は目を見開く。脳裏に浮かんだのは、夜空を飛ぶ姿。五メートル近い体躯を持ち、翼を広げたその姿は圧巻の一言に尽きた。

『いや、え？　本当にあの風龍？』

それが、目の前で少女の姿に化けている。見た目から察するならば十二、三歳といったところだが、見た目通りの年齢というわけではないのかもしれない。

『龍種は人の姿に化けることもできるんですが……どうやら初めて見たようですね』

驚きを隠せない義人を見て、カールが苦笑する。そんなカールの言葉に、義人は取り繕うことなく頷いた。そんな義人の反応を見ていたヤナギは、少し眉を寄せながらフウへと話しかける。

『ところでフウ、さっきから落ち着かないみたいだが何かあったのか？』

疑問を含んだ言葉。それを聞いたフウは、その言葉を肯定するように周囲を見回す。

『なんというか、妙な気配を感じますわ。ここ最近ずっと感じていたのですが、畏れ多いというか……同類？　いえ、近い“何か”の気配がするんですの』
『近い何か？』

フウの言葉に首を傾げるカール。何かあったかと考えを巡らせるが、特に思い当たる節はなかった。

それとは別に、義人は目の前で微妙に頬を膨らませているカグラをどうしようかと迷っている。何を言おうとしたのか判断がつかなかったが、何やら不満そうだった。

「か、カグラ？　とりあえず、カグラも挨拶を……」

及び腰ながらもそう促すと、カグラは軽くため息を吐く。そして気分を入れ替えると、カール達へと向き直った。

その瞬間、ヤナギが突然後ろへと後退する。

『し、師匠！？　何故ここに！？』

カグラの顔を見たヤナギは目を見開き、まさに驚愕と言うべき表情を浮かべて悲鳴のような声を上げた。絶対に勝てない天敵に出会ってしまったような、そんなヤナギの言葉を聞いたカグラは、僅かに眉を寄せる。

『わたしは弟子を取ったことはありませんが……どこかでお会いしましたか？』

師匠と呼ばれ、小首を傾げるカグラ。すると、ヤナギはそんなカグラの動作を見て何故か恐怖染みた表情を浮かべ、さらに一歩後ろへと下がった。

『そ、そんな顔をしても俺は騙されませんよ！　一体何を企んで……』

そこまで言うと、ヤナギは言葉を切ってカグラの顔を凝視する。そして何度か首を傾げると、やがて納得がいったのか口を開いた。

『いや、たしかに……違う？　ううむ、師匠はこんなお淑(しと)やかそうな顔と性格ではないが……それにしても、似ているな』

ヤナギはそこまで言うと、自分の置かれた立場を思い出して表情を変える。

『……失礼しました。カグラ殿があまりにも知り合いに似ていたため、取り乱してしまいました』

非を詫びて、頭を下げるヤナギ。すると、隣でヤナギの奇行を見ていたカールが珍しいと言わんばかりに口を開いた。

『ヤナギがそこまで取り乱すのは初めて見たけど……師匠って魔法のか？』

『あ、ああ。服装と性格こそ違うが、見た目があまりにも似ていてな。性格は百八十度違うと思うんだが……』

額に浮かんだ冷や汗を手の甲で拭い、ヤナギは無意識のうちにカグラから微妙に距離を取る。そんなヤナギを見て、義人は小さく呟く。

「カグラがお淑やか、か。素直に頷けないのはなんでだろうなぁ……」

どこか感慨深く呟く義人だったが、その声が聞こえたのかカグラが“笑顔で”振り向く。

「ヨシト様、聞こえていますよ？」
「……き、きっと空耳だよ。俺は何も聞こえなかった」
とりあえず、誤魔化しに走る義人だった。
そんな義人とカグラのやり取りを見たヤナギは、視線をずらして義人を注視する。否、正確には義人が背負うノーレを注視した。次いでカグラの顔をもう一度確認して、義人へと視線を戻す。
『この人が……』
その小さな呟きに気付いた者は、誰もいなかった。
『活気があるなぁ……』
城下町に足を運んだ義人は、周囲の様子を眺めて感嘆のため息を吐いた。王都に入った時にも同じことを思ったが、馬車の中で見た時よりもいっそう活気があるように見える。
カーリア国の王都よりも人が多いせいか、その印象は強いものだった。
そうやって義人が周囲の様子を見ていると、周囲の人々がこちらを観察していることにすぐ気付いた。
『何か、見られてるな』
『そうですね』
カグラも義人と同じことを思っていたのか、僅かに警戒の空気へと変わる。するとそれを感じ取ったのか、ヤナギが苦笑を向けた。
ただ、カグラを見て少しばかり頬が引きつっていたが。

『カールがいるからかと思われます。カールは街の人気者でして』
『人気者？』
『はい。特に、子供に慕われております……女子からの人気もありますが』
そう言って苦笑するヤナギだが、それを聞いたのかカールが軽くヤナギの頭を叩く。
『変なことを吹き込むなっての』
『ですが、慕われているのは事実ですわ』
否定しようとするカールに、肯定するフウ。そんな三人のやり取りを見ていた義人は、三人に深い繋がりがあるように感じた。
『三人は知り合って長い……のか？』
義人は思わず敬語で話しかけようとして、それとなく修正する。すると、カールは苦笑混じりで頷いた。
『ヤナギとはあと数ヶ月で三年、フウとは二年弱といったところです』
『三年……てっきり、十年来の付き合いかと思ったよ』
予想よりも短い付き合いだったことに、義人は驚く。すると、カールは少しばかり表情を引き締めた。
『戦場で背中を、命を預け合いますから。自然と親しくなるものですよ』

何気なく言い放つカールだが、戦場という言葉を聞いた義人は自然と足を止める。

『戦場、か。そういえば、ハクロアと戦ってたんだっけ』

『はい。とは言っても今でも小競り合いは起きていますし、遠くない未来に再びぶつかり合うことになるでしょう。今はその準備期間といったところですね』

『そうなのか……ところで、カール隊長やヤナギ隊長は何歳なんだ？』

事も無げに語るカールに、義人はふと浮かんだ疑問を口にする。物腰から年上であることはわかるが、“違う世界”であることを感じさせる二人のことが知りたかった。

『歳ですか？　この前、十八になりました。ヤナギは十九……だったよな？』

『ああ』

特に気にするでもなく年齢を告げる二人。だが、その年齢を聞いた義人は頬を引きつらせる。

『ほ、ほとんど変わらないんだな……』

義人も数ヶ月経てば十八歳になる。そうなればカールと同い年だが、義人としてはカールが同い年に近いとは到底思えなかった。そのことに義人が内心で驚愕していると、周囲の人ごみから声が上がる。

『あ、カール様だー！』

『え？　どこどこ？』

まだ幼さが残る声。義人が声のした方向を見ると、人ごみの中から十歳ほどの男の子が数人、転がるように出てきた。そして、カールの元へと走り寄ってくる。その風体はまさに腕白小僧と表現するのが正しく、手には自分達で作ったのか木刀らしき木の棒を握っていた。

それを見たカグラが義人の前へと出ようとするが、義人は害はないだろうと判断して引き止める。

『あの子達は？』

カールに群がる子供達を見て、義人はヤナギへと話しかけた。すると、ヤナギは苦笑する。

『この街の子供達です。先程カールが人気者と言いましたが、街に出るとああやっていつも囲まれるんです』

『ふーん……本当に人気者なんだな』

そう呟き、義人はカールと子供達の会話に耳を傾けることにした。

『カール様ー、あっちで一緒に訓練やろうぜー！』

『また色々と教えてくれよー！』

『こらこら。俺は今仕事中なんだ。また今度教えてやるから……って、袖を引っ張るな！

剣を抜こうとするな！』

『うわー！　カール様が怒ったー！』

『逃げろ逃げろー！』

本当に怒ったわけではないだろうが、カールが少し声を大きくすると子供達が蜘蛛の子を散らしたように逃げ出す。しかしその表情

は非常に楽しそうで、嬉しげでもあった。
そのうちの一人が義人のほうへと逃げてくるが、ヤナギと共に話していた義人を見るとその足を止める。

『お兄さん、誰？　カール様かヤナギ様の知り合い？』

少年は好奇心を含んだ瞳で義人を見ると、それを受けた義人は膝を折って目線を合わせた。カグラが何か言いたそうにしていたが、それは片手で制して止める。

『まあ、そんなところかな。ところで、訓練っていうのはなんだい？』
『え？　訓練は訓練だよ。僕たちも、カール様達みたいにハクロアの奴らをやっつけるんだ！』
『やっつける、か……』

笑顔で言い放つ少年に、義人は言い表せない感情を抱く。『やっつける』とは何とも少年らしい物言いだったが、その言葉の意味自体は少年らしくない。

『こら！　何をしている！　ヤナギも止めてくれ！』

子供達を追い払ったカールだが、そのうちの一人が義人と話しているのを見て慌てて捕まえる。担ぐように持ち上げられた少年は、嬉しそうに悲鳴を上げた。そんな少年の様子を見て、義人は小さく笑う。

『いや、良いですよ。別に気にしてないし……元気が良いですね』
『大変失礼いたしました。そう言ってもらえると助かります』

失礼だったと申し訳なさそうなカールだが、義人はまったく気にしない。そして、カールに捕まった少年へと目を向ける。

『訓練、頑張ってな？』

『うん！　俺、絶対カール様みたいになるんだ！』

義人の言葉に、カールに担がれた少年が元気良く言い放つ。それを聞いたカールは、どこか寂しそうに微笑んだ。

『……ほら、みんなのところに戻れ』

ポンポン、と頭を撫でてから地面に下ろす。すると少年はくすぐったそうに笑い、他の方向へと逃げた少年達のところへと走り出した。

『俺みたいに、か……そうはならないでほしいな』

義人達がそれを見送ると、カールが小さな声で呟く。その言葉を聞いた義人は、思わずカールのほうへと視線を向けた。すると、その視線を受けたカールは取り繕うように苦笑する。

『俺は戦場で何十と人を斬りましたからね。あの子達には、そうなってほしくないんですよ』

カールはそう言って、もう一度少年達のほうへと目を向けた。先程の『やっつける』という言葉の意味を理解しているのかわからないが、それはハクロア国の兵士と殺し合うことに他ならない。

『平和になれば、あの子達が戦場に立つこともなくなります。俺のようになりたいと言ってくれますが、俺としては平和な世の中で生

きてほしいですね』

どこか寂しげなカールの肩を、ヤナギが無言で叩く。それを受けたカールは、場の雰囲気を入れ替えるように表情を変えた。

『つまらない話をお聞かせしました。それでは、この街の案内をさせていただきたいと思います。どこか見たい場所などはありますか？』

『……適当に案内してもらえれば』

『わかりました。ではまずこちらから……』

そう言って歩き出すカール達の後を、義人は無言でついていく。義人は歩き出したカールの背中を眺め、そこから首を巡らせて先程の少年達が歩いていった方向へと目を向けた。そんな義人の様子から何かを感じたのか、カグラが心配そうな表情を浮かべる。

「ヨシト様？　どうかしましたか？」

「……いや、なんでもないよ」

否定の言葉は、どこか弱弱しいものだった。

第八十四話：説教

日本という国は平和な国である。

世界的に見てもトップクラスの治安の良さを誇り、一般市民が拳銃などを所持することも“ほぼ”ないので、閑静な住宅街で銃撃戦が起こるなどということも“ほぼ”起きない。

もちろん魔物などという想像上の生物も存在せず、魔法というものも存在しないだろう。もしかしたら存在しているのかもしれないが、義人は自身の生活圏内ではついぞお目にかかることはなかったと断言できる。

もっとも、魔法でも使っているのではないかと時折錯覚させるほどの運動能力を持つ親友が傍にはいたが。

それでも身の回りで大きな騒動が起きることもほとんどなく、幼馴染みや親友と過ごす高校生活は概ね平和だったと言える。

今では何の因果か異世界で王様などという職業に就いているが、それでも召喚された国は平和な国だった。言葉も通じ、文明の差はあれど不便は少ない。

命の危険を感じた出来事もあったが、それでも元の世界の日本に通じる“何か”があったと義人は思う。

それは先代以前に召喚された同じ境遇の者達が作り上げたものだったのか、それとも土地柄的なものなのかはわからない。魔物と呼ばれる危険な生き物による被害はあったが、他国のように人間同士が殺し合う環境に比べればまだ平和だと言えるだろう。

それは、この世界に召喚されたことの中でも一番の僥倖だったのかもしれない。

一歩先を歩きながら様々な説明を口にし、それでいて自然体のま

まに周囲を警戒しているカールを眺めているうちに、義人はそんなことを頭に浮かべていた。

そんなことを考えていた影響か、城下町の中を歩く人々の表情もどこか違って見える。今という時が充実しているのか、その表情は生き生きとしたものに見えた。

「ヨシト様、大丈夫ですか？」

ぼんやりとした表情でいたせいか、義人の隣を歩いていたカグラが心配げな表情で声をかける。その表情はどこか不安そうでもあったが、義人はそれに気付かず苦笑しながら首を振った。

「別に体調が悪いとか、そういうのじゃないよ。ちょっと考え事をしてたんだ」

「考え事……ですか」

義人の言葉を繰り返し、カグラは僅かに眉を寄せる。義人の言葉に納得できるわけではないが、さりとてしつこく聞くわけにもいかない。

そうやって歩くこと少々。義人は自分の状態に対して周囲が気遣っていることにようやく気付くと、常に比べて頭の働きが鈍い自分自身へ内心で舌打ちする。そして不自然にならない程度に表情を明るくすると、前方を歩くカールへと視線を向けた。

『そういえば、カール隊長って瞬間移動とかできるの？』

表情は自然に取り繕えても、口から出たのはそんな言葉である。いきなり何を言い出したのかと、隣のカグラはどこか呆れた表情だ。

『……は、瞬間移動、ですか？』

疑問を投げかけられたカールは、少し困ったように聞き返した。
それに対し、義人は小さく頷く。

『ほら、最初に会った時にいきなり消えて俺の背後に移動してたじゃないか。そんな魔法があるのかと思ったんだけど』

場を持たせるために口にした質問だったが、それはそれで義人が思い浮かべていた疑問の一つである。カールは義人の質問が何を指しているのかわかったのか、ほんの少しだけ眉を寄せて目を逸らした。

『あー……秘伝とか、門外不出の技で教えられないっていうのなら別に言わなくてもいいですよ？　ちょっと気になっただけなんで』

カールの様子から適当に当たりをつけ、義人はそう口にする。すると、斜め後ろを歩いていたヤナギが口を開いた。

『カール、別に言ってもいいんじゃないか？　どの道、あんな器用な真似はお前以外にできないだろう？』

場を繋ぐようなヤナギの言葉だったが、それを聞いたカールは僅かに思案して頷く。

『そう、だな。これも謝罪の一つと考えればお答えするべきか』

義人としては別段そんなつもりはなかったのだが、何やら納得したらしいカールは一つ頷いて口を開く。

『簡単に説明しますと、アレは風の魔法を使ったんです。瞬間移動

なんて大層な魔法でもなく、ただの応用ですね』
『風の魔法？』
カールの言葉に反応する義人。背中に背負ったノーレも同じような反応を示していたが、声を発しなかったのでそれに気付くことはなかった。
『ええ。『強化』をかけつつ自分の体を風で押す。原理はそれだけですよ』
『へぇ……てっきり難しい魔法かと思ったけど、聞いた感じは簡単に聞こえるなぁ』
簡単に説明するカールに、義人は相槌を打つ。魔法に関して造詣が深くないため、カールの言葉をそのままの意味で受け取っていた。だが、それを傍で聞いていたカグラは違う。懐疑的に目を細めると、僅かな思案の後に口を開く。
『風の魔法で自分の体を押す……そんなことが本当にできるのですか？』
『え？　普通はできないものなのか？』
疑心を含んだカグラの言葉に、義人は首を傾げる。風を生み出して自分の体を押させるぐらいなら自分でもできそうだと、“楽観”混じりの表情だった。そんな義人に対し、カグラは首を横に振る。
『直線移動ぐらいならば、わたしでもできるでしょう。しかし、それは暴風を生み出してその風に乗るというものです。もしもその状態で自由自在に動けと言われればそれは不可能ですね』
『……カグラでも無理なのか？』
『はい。先天的な風魔法の才と、それを操る魔法や魔力の精緻な操

作力があれば可能だとは思いますが……覚えることが可能だとしても、その習得にどれほどの時間がかかるかわかりません』

『なるほど。でも、カール隊長は暴風を発生させてたわけでもないしなぁ』

仮にそうならば、例え背後を取られても気付くだろう。暴風を纏った存在が近くを通り過ぎれば絶対に気付く。だが、実際は声をかけられるまで気付けなかった。

『まあ、数年がかりで習得しましたからね』

そう言って控えめに笑うカールを見て、義人はなるほどと内心で頷く。例え方法を知っていても使用できず、使ってくるとわかっていても反応もできない。あるいは何かしらの方法で察知できるのかもしれないが、義人には見当もつかなかった。

知られても絶対に負けない。そんな自信があるからこそ簡単に明かしてくれたのだと理解し、義人は苦笑混じりに笑い返す。

『しかし、移動のために魔力を割くよりも、攻撃のために魔力を使ったほうが良いではないですか？』

カールの言葉に何か思うところがあったのか、カグラが否定的な言葉を口にする。

カグラは膨大な魔力を使って敵を殲滅する、いわば火力重視の魔法使い。もちろん接近戦を蔑ろにするわけではないが、通常の魔法使いと比べて文字通り桁違いの魔力を持つからこその発言である。

『それはヤナギに任せています。しかし、魔法とは必ずしも命中するものではありませんからね。避けるか防ぐか……相手によっては『反射』や『吸収』などを使うかもしれません。それならば、魔法

を補助に使って剣で戦うほうが確実だと思いまして』

それに対して、カールはカグラに比べて十分の一程度の魔力量を最大限に活かして戦うという、いわば技術重視の魔法剣士だ。並の魔法使いに比べれば潤沢な魔力を持つが、それでも長期戦を考えれば中級以上の魔法をポンポンと放つわけにもいかない。

それ故の発言なのだが、そもそも魔法使いと魔法剣士では戦い方が違うので意見が異なるのも仕方ない。それをわかっているのか、カグラも特に何か言うわけではなかった。

そんな二人の会話を聞いていた義人は、自身の斜め後ろを歩くヤナギへと目を向ける。

『そういえば、ヤナギ隊長は第一魔法隊の隊長だったっけ？』

『そうですが……それが何か？』

『いや、ちょっとした確認かな。今度色々話を聞きたいなー、なんて思いまして』

『はぁ……』

義人の曖昧な言葉に、ヤナギは首を傾げながらも頷く。

そうやって取り留めない会話を交わしつつ、義人達は城下町を見て回るのだった。

日が沈み出す夕刻。

一通り城下町を見て回った義人は、自身に宛がわれた部屋で椅子に腰掛けて思案に耽っていた。手にはレンシア国に関する資料と、午後から行われた交渉に関する進捗報告書。

義人の背後にはサクラが立っているが、その表情はどこか硬い。

そんなサクラにつられたのか、部屋を満たす空気もどこか軋んでい

る。

「サクラさぁ……」

思案を打ち切った義人はここ数日――といっても昨日からだが、態度がおかしい侍従へと声をかけた。もちろん、義人自身はサクラのことを侍従などとは考えてはいない。世話をするのが仕事ではあるが、年下で慌てやすく、時折ドジをする可愛らしい後輩、もしくは妹のような存在だろうか。少なくなくとも、義人としてはそんな認識である。

「はい、何でしょう」

答える声も、どこか硬い。返答にどもることもなければ、慌てる様子もない。そのことに妙な落胆を覚えつつ、義人は話す内容を考えていないことに気付いた。

「その、なんだ、お茶を淹れてくれるかな？」

「はい」

取ってつけたような“頼みごと”だが、サクラは黙々とそれに従う。お茶は玉鋼などと一緒にレンシア国へと持ってきたものだが、生憎と湯飲みはない。そのためティーカップで緑茶を飲むという、ティーカップの用途として正しいのか微妙にわからない方法を取っていた。

「どうぞ」

「ああ、ありがとう」

どこかぎこちない動作ながらも差し出されるお茶の温度は義人に

とって適温で、軽くお茶を飲んだ義人は『こういうところはサクラだよなー』と内心で一人呟く。

ついでに手に持った資料と進捗報告に目を通すものの、交渉に関しては財務大臣のロッサに任せている。そのため報告書の内容を軽く確認すると、あとは本人を呼んで確認するかと思考を締めくくって報告書を机の上に置いた。

「ふぅ……」

義人はため息を一つ吐く。それは肉体的、精神的な疲労からのため息だったのだが、そんな義人のため息を聞いたサクラは怯えるように身を震わせた。

サクラは義人の後ろにいたため、義人は気付かない。しかし、それとは別に気付いたものがいた。

『メイド、お主は先程から何をしておるんじゃ？』

どこか呆れたような声を発するノーレ。そんなノーレの声を聞いた義人は、軽く肩を回そうとした体勢で首を傾げた。

「ん？　サクラがどうかしたのか？」

『どうしたもこうしたも、傍に控える者がそのような態度ではヨシトとて気が休まらんじゃろう？　まさかメイドの態度に気付かぬほどに鈍感というわけでもあるまい』

「……いや、それはそうだけどさ。サクラだって気が乗らない日や調子が悪いときもあるだろうし」

サクラを擁護しつつも遠回しにノーレの言葉を肯定する義人。すると、その言葉を受けたノーレは呆れたような雰囲気を出す。

『戯け、その“気が乗らない日”がこれからずっと続いたらどうするんじゃ？　お主の気遣いは美徳じゃがな、場の雰囲気を乱す者は注意するものじゃ。でなくては仕事が捗らんじゃろう。それに、お主は国王。その仕事の邪魔をされるくらいなら、メイドではなく他の者を傍に置き変えるのも責務のうちじゃ』

「それは……」

ノーレの言葉にサクラは顔を上げ、しかしすぐに俯かせた。そんなサクラに、ノーレは一転して労わるような言葉をかける。

『メイド。お主がヨシトを守りきれなかったことを悔やんでいるのはわかる。それは妾とて同じじゃ。しかし、だからといって“その”態度ではヨシトが余計に気遣う』

「……はい」

自身の態度と義人の性格を考えたのか、しゅん、と落ち込むサクラ。

『お主はお主にできることをやれば良い。まあ、妾とて偉そうに言えた口ではないんじゃがな』

最後に自嘲らしき響きを込め、ノーレはそう締めくくる。大して口を挟むことができなかった義人は頬を掻くと、ノーレに追従して口を開いた。

「まあ、後半のノーレの言葉に賛同……かな。今日のところはもういいから、部屋に戻ってしっかり休んで、明日からはいつものサクラに戻ってくれれば嬉しいよ」

義人がそう言うと、サクラは僅かに思案した後に小さく頷いて頭

を下げる。

「……わかりました。それでは失礼します」

それだけを言い残し、退室するサクラ。義人はそれを黙って見送り、扉が閉まると共に脱力する。

「ぷはー……ノーレが俺以外に説教なんて、初めてじゃないか？」

『戯け、今のは本来お主がするべきことじゃぞ？　臣下の扱いぐらいきちんとこなさぬか』

「いや、そうは言ってもなぁ」

そんなもの、誰かに習ったこともない。小さくそう呟き、義人は椅子に背を預ける。

「立ち直ってくれれば良いけど」

『それはメイド次第じゃな。場合によっては、本当に侍従の入れ替えも考えておくんじゃぞ？

もっとも、立場的にも実力的にも適任がいないかもしれんが』

「だから説教したのか……だったらなおさら、立ち直ってもらわないとな」

そう言って、義人は再度ため息を吐く。

――王様って、面倒な職業だよなぁ。

自分には向いていないと、所詮は一学生が演じる“紛い物”だと実感する。だが、実感したところで一つ頭に思い浮かぶことがあった。

「そうだ……だったら“本物”がどんなものか知れば良いのか」
『本物？』
何やら思いついたらしい義人に、ノーレは訝しげな声をかける。
そんなノーレの疑問に対して義人は頷き、
「本物だよ、本物。ここには本物の王様がいるじゃないか」
僅かに苦く笑いながら、そんなことを口にした。

第八十五話：紛い物

コンコン、というノックの音が響き、コルテアは明後日に行われる建国記念式典に関して書かれた書類から顔を上げた。

時刻は午後七時過ぎ。日は既に沈み、窓の外は夜の帳が下りている。卓上に置かれたランプの灯りに照らされたコルテアは、ノックされた扉のほうへと目を向けた。

するとそれと同時に、傍仕えの女性が扉のほうへと歩み寄って扉越しに一言二言言葉を交わす。

コルテアはひとまず書類を机の上に置くと、足音を立てずに戻ってきた女性へと目を向ける。

『どうした？』

『カーリアの王がお目通り願いたいとのことです』

『カーリアの……ヨシト王が？　はて、何かあったのだろうか？』

僅かな疑問を口にして、コルテアは首を傾げた。だが、今の段階では判断できる材料も特にない。精々、今回の賠償に関する交渉事かと思った程度だ。

『ふむ、考えても埒が明かぬか』

コルテアがそう呟くと、女性はその意を汲んで扉のほうへと歩み寄る。そして扉に向かって声をかけると、外にいた守衛の兵士が扉をゆっくりと開けた。

『あー……っと、失礼します』

そんな言葉と共に部屋に入ってくる少年……カーリア国の当代の

王である義人へと、コルテアは目を向けた。そして、柔和な表情を作る。

『どうなされた？　もしや我が城の者が何か粗相でも？』

コルテア自身、そんなことはないだろうと内心で呟く。今回の件での負い目があるため、普通に歓待するよりもさらに気を遣えと厳命してある。

『いえ、そんなことはないです。ちょっとお聞きしたいことがありまして』

そう言いながら、義人は僅かに目を逸らしてコルテアの傍に控える女性へと目を向けた。その仕草から内密な話かと当たりをつけたコルテアは、女性のほうへと視線を向ける。すると、傍仕えの女性は頭を下げた。

『外に控えております。何かありましたらお呼びください』

そう言って部屋の入り口へと向かい、その途中で義人にも一礼していく。その一礼を受けた義人が少し慌てたように頭を下げると、女性は礼を返された驚きから僅かに目を見開いてその動きを止めた。

『……何か？』

動きが止まったことに、義人が不思議そうな顔をして口を開く。そんな義人に対して、女性は再度頭を下げた。

『いえ、失礼いたしました』

『はぁ……』

再度頭を下げた女性に対し、曖昧な言葉を返す義人。そして女性が部屋から退室するのを見届けると、コルテアへと向き直って小さく頭を下げる。

『突然お邪魔してしまい、すみません』

そんな言葉をかけてくる義人に来客用の椅子を勧めつつ、コルテアは目の前の義人を観察するように見た。

初めて顔合わせをした時、コルテアが最初に驚いたのはその若さである。事前に様々な情報を得ていたとはいえ、実際に対面したときの義人の若年振りには内心驚いたものだ。

前回カーリア王と会ったのは十年以上前になる。その時のカーリア王は前代で、歳は自分よりも上だった。だが、その時に前代のカーリア王に対して抱いた印象は“金に溺れた俗物”である。

これでは補佐をするアルフレッド殿が大変だと、人にあらぬ身でありながら尊敬に足るエルフを気の毒に思ったことは余談だ。

しかし前代のカーリア王が部下の謀略で暗殺されたのが十年前。それ以降は王が不在なのに国が運営されるという、コルテアからすれば理解できない状態にカーリア国はあった。

元々、他の世界から新しい王を召喚するという風習を持つ国である。例えるならば、隣の家に住んでいるがその素性はわからないという、謎の隣人だ。

そしてその謎の隣人が、今回三人ほど召喚されたと聞いたのが今年の五月。ハクロア国との小競り合いを超えた大戦（おおいくさ）で受けた被害の復旧の傍ら、諜報を担当する臣下に情報を得るよう指示も出した。

今回召喚された王がどんな人物か、どんな政策や行動を行ったかも調べさせてある。それらの情報を得てコルテアが下した評価は、悪くはないがそこまで良いわけでもない。

実際に顔を合わせて自己紹介を受けたものの、実は志信が本当の王で義人は影武者ではないかと思ったりもしたのだ。

コルテアがそう思うほど、現在来客用の椅子に腰を下ろしている義人は“王”らしくなかった。

『それで、一体何の御用ですかな?』

それらを表に出さず、コルテアは尋ねる。その問いに対し、義人は頬を掻いてから少し困ったように口を開いた。

『いきなりで、なおかつ変なことを聞くと思うのでしょうが……』

前置きにそう言って、

『王って、何でしょう?』

義人は、そんな言葉を口にした。

『王って、何でしょう?』

義人はそう口にして、我ながら何とも抽象的な問いだと内心苦笑する。

わからないなら本物に聞けば良い。安易な考えながらも、この国に来て、この国の人間と顔を合わせ、言葉を交わして感じた違和感を解消するにはそれしか浮かばなかった。

『王とは何か、とな……』

案の定というべきか、コルテアは困惑している。大方、カール達が攻撃を仕掛けてきたことに対する交渉を想定していたのだろうと、義人は内心で苦笑した。今までのどこか探るような視線は、不意を突かれたことでその色を失っている。

『ええ。ご存知でしょうが、俺はこの世界の人間じゃありません。いきなりこの世界に召喚された、異世界の人間です。カーリア国の慣習に則(のっと)って王という地位に就きましたが、元は何の地位もないただの人間です』

慣れないコモナ語を頭の中で組み上げ、義人は言葉を続けていく。

『だから、聞きたいんです。“本物”の、王という立場にいる人間の話を』

そこまで言って言葉を切る。そのまま義人がコルテアを見れば、コルテアはどこか戸惑ったような表情になっていた。それを見た義人は、急すぎたかと苦笑する。

この世界の人間……特に、義人にとって身近なところで言えばカグラやサクラなどと接していても、時折感じることがあった違和感。現代人の感覚と、この世界では当たり前の感覚とのギャップ。それらは義人の中で燻(くすぶ)り続け、今回コルテアに話を聞きたいと思わせるほどに大きくなった。

『これは俺個人の、滝峰義人としての願いです。ですから、断られても文句などありません……しかし、聞かせていただけると明日からの“交渉”がスムーズに……いえ、潤滑に進むかもしれません』

そう言って、義人は僅かに口の端を吊り上げる。個人と言いつつも実際には交渉に関してちらつかせ、その内心では交渉を担当して

いる財務大臣のロッサにどう説明しようかと悩んでいた。

そんな義人に対し、コルテアは僅かな黙考の後に口を開く。

『それでは逆にお聞きするが、ヨシト王は“王”とはどんなものかと思いますかな？』

探るようにかけられた問いに、義人は思案する。そして、ポツリと呟く。

『その国が、国として成り立つようにする者……国のまとめ役ですかね』

『国のまとめ役、とな。なるほど、確かにその通りではありますな。しかし、それは一面に過ぎぬとも言える』

『王の一面ですか……では、コルテア王はどう思っているんですか？』

教えを乞うように尋ねると、コルテアは表情を引き締めた。

『ヨシト王の言う通り国のまとめ役であり、国を外敵から守りつつも発展させる者であり、民の生活を保障する役割を持つ責任者であり、国でも最大の権力を有する者であり……』

そこまで言うと、コルテアの目が刃のように鋭くなる。

『――国でも最大の殺戮者、と言えるでしょうな』

そう言い放つコルテアに、義人は気圧されるのを感じた。コルテアの言葉を理解するのと同時に、体温すら下がったように感じられる。

『殺戮者、ですか……』

尋ねた声は、少し震えていた。そんな義人の様子を見て取ったコルテアだったが、雰囲気を和らげることなく話を続けていく。

『我が国がハクロアと長年に渡って戦を行っていることをご存知ですな？』

『はい』

それは知っていると、義人は頷く。

『実際に戦うのは将兵。しかし、戦うように命じるのは王である自分。敵の将兵と戦え、敵の将兵を殺せと命じる。たしかに、実際に手を汚すのは己ではない。だが、“それ”は王の命で行ったこと。返り血は浴びずとも、殺したのは王であるこの身。“最も安全な場所”で“最も多くの人間を殺す”……わかりますかな？』

『それは……』

今度は、頷けない。そんな戸惑う義人に、コルテアは年長者が若輩に向ける労わりのような優しさと、厳しさがこもった目を向ける。そして、コルテアは敢えて敬語を止めた。

『もちろん、そういった命令を下すのは戦時だけではない。疫病が流行った時に、発生源の村を村人ごと焼き払うこととてある。罪人の処刑を命じ、首を落とさせることとてある。己の失策が、民や将兵を殺すこともある。しかしそれでもなお、国を、民を導かなくてはならない。それが上に立つ者の役目で、責務である』

もちろんそれも一面だが、と付け足すコルテア。それらの言葉は、

実際に己も行ってきたという重さがある。王として、コルテア個人としての経験であり、積み重ねてきたものだ。

義人は自分自身に、『疫病が発生したらその村を焼き払うか』と尋ねてみた。すると、すぐに答えが返ってくる。

答えは否、だと。正確には、できないと。

『では質問をするとしよう』

そんな義人に対し、コルテアは指を二本立てて見せる。

『二つの村が同時に他国の軍、もしくは魔物や山賊などに襲われているとする。村と村の間には距離があり、さらに戦力的にもどちらか片方しか救助にいけない。もしも救助の手を二つに分けた場合、その救助の者達は全滅してしまう。そして、片方の村の救助が終わる頃にはもう片方の村が全滅する。さて、そんなときはどうするかね？』

そう言って、コルテアは立てた二本の指を一本折る。それを見た義人は、眉を寄せた。

『……それは、絶対に助けられないという前提なんですか？』

『そうだ』

頷くコルテア。義人はしばらく考えるものの、答えが出ない。

すると、コルテアは先程折った指をもう一度伸ばし、再度二本の指を立てる。

『では、条件を変えよう。片方の村には百人の民が住んでいるとする。そしてもう片方には五十人の民が住んでいるとする。さて、それならどちらに救助を向かわせるかね？』

そう尋ねてくるコルテアに、義人は思わず食って掛かりそうになった。人の数は物のように数えられるものではないと、そう抗議しようとして、そんなことは百も承知かと自分を抑える。そして数十秒の沈黙の後に、義人は答えた。

『百人のほうを、救います』

『ふむ……それは何故かね？』

『両方助けられないのなら、少しでも数の多いほうを助ける。それだけのことです』

コルテアはなるほど、と頷く。大を生かすために小を殺す、“当たり前”の答えだ。そう心の中で呟き、次の問いを口にする。

『では、とある村に三百人の民が住んでいるとする。そしてとある村には三十人の民が住んでいるとしよう。ただし、その三十人の中には君にとって最も大切な者が含まれているものとする。さて、どちらに救助を向かわせるかね？』

『その大切な者っていうのは……』

『君にとって、最も大切な者だ。妻子、親、兄弟姉妹、血族、恋人、親友。三百人を助けるか、それとも大切な者を含んだ三十人を助けるか……どちらかね？』

義人は沈黙し、視線を宙に向ける。最も大切な者、と小さく呟いて、この世界でそれに該当する人物を思い浮かべた。

最初に思い浮かんだのは、優希の顔。続いて志信の顔が頭に思い浮かび、義人はその二人のどちらのほうが大切かと考え、そこで思考を打ち切る。

優希と志信の二人と見知らぬ三百人を秤にかけ、どちらに傾くか。嫌な質問だと苦く思いつつ、義人は熟考の末に答えを口にする。

『俺は、大切な人を助けます』

小を取って大を殺すと、そう口にする。見知らぬ他人を見捨て、大切な者を助けると、そう口にした。

『それは、私情というものだ』

その義人の言葉を、コルテアは切って捨てる。

しかし、先程の問いにも例外はある。もしも危機に晒されているのが自分の娘達……この場合では家族としての意味ではなく、婿を取って王位を継承させるために必要な人材（どうぐ）だった時は、助けに行くだろう。そうでなくては、国を導く者がいなくなってしまう。だが、そうでなかったらコルテアは千人を取る。

それこそまさに大を取って小を殺す選択だ。そうしなくては、見捨てられた民に関わる者達が叛意を抱くだろう。百人を取って千人を見捨てれば、その千人と親しかった別の者達が不満を抱く。

もっとも、そんな選択を迫られる時点で最悪であり、それを回避するのが当たり前だ。

『私情で大切な者を救う。それは人間ならば当然だと言えるだろう。だが、救ったことでその大切な者はこうも思うだろう。自分を救う代わりに、多くの人が死んだのだと。そうなれば、命は救えても心は救えない。それでも救うというのかね？』

『それは……』

義人は答えない。いや、答えることができない。

もし本当にそんな状況が訪れたら？　そう考え、義人は泥沼には

まったように悩む。いや、しかし、でもと様々な考えが頭の中を通り過ぎ、それでもなお、答えは出ない。

そうやって悩む義人を見て、コルテアは僅かに相好を崩す。

『すぐに答えは出ないはず……儂とて、散々悩んだものだよ。もちろん、今でも悩むことはある。どれが正解で、どれが間違っているのかなど後にならないとわからない。それでも決断をしなければならないのが“王”というもの……少しは参考になったかね？』

柔和な声色で話しかけてくるコルテアに、義人は一度思考を止める。そして、姿勢を正して頭を下げた。

『少しどころか、とても。正直、本当に話してもらえるとは思っていませんでした』

『なに、これで少しでも“交渉”が潤滑に進むのなら安いものです』

個人としてのコルテアは終わりなのか、口調を元に戻すコルテア。少々冗談混じりのその言葉に、義人は相好を崩す。

『打算的なんですね』

『それも王には必要な要素ですぞ？』

むしろ、全てが打算だとは言わない。

義人は苦笑を一つ残し、椅子から立ち上がる。

『突然の押しかけ、すいませんでした。そして、ありがとうございました』

一礼する義人に、コルテアは頷いて返す。そして義人は踵（きびす）を返し、

コルテアの執務室を後にするのだった。

義人が立ち去った後、コルテアはカーリア国との交渉を任せていた臣下を部屋に呼ぶ。

『お呼びでございますか？』
『うむ。急に呼び出してすまぬな』

呼び出しから五分足らずで到着した臣下を軽く労い、コルテアは口を開いた。

『カーリア国との交渉だが、明日から向こうの出方が変わるやもしれん』
『は……それは、一体？』

コルテアの言葉に、臣下は戸惑った言葉を返す。そんな臣下に、コルテアは小さく笑って見せた。

『なに、今日のままということも十分に有り得る。だが、もしも違うようならば……』

そう言って、コルテアは臣下へ指示を出す。そこに、半ば以上の確信を持って。

「あー、疲れたなぁ……」

そんな声を漏らし、義人は自身に宛がわれた部屋へと足を向ける。話を聞くのにノーレは無用と、今はほぼ丸腰だった。もちろん、護衛に魔法剣士隊の兵士が付き従ってはいるのだが。

コルテアの話は、義人にとって貴重なものだった。そもそも価値観が違うこの世界では、元の世界での常識など通用しない。ましてや、一国を治める王など日本にはいなかった。

それが、“本物”の王様に話を聞くことができた。もっとも、コルテアが話したのは厚意ではなく打算からだろう。

「あとでロッサを呼んで、明日からの交渉について少し話すか……」

歩きながらそう呟く義人だったが、ふと足を止める。それに従うように、傍を歩いていた兵士も足を止めた。

「どうかしましたか？」

「いや、そういえばこの辺はカーリア国の使者向けに宛がわれた部屋が多かったなと思って」

そう言って、義人は周囲を見回す。客室を宛がわれたのは、義人だけではない。カーリア国の城よりも多少大きいこの城には多くの部屋があり、それぞれが部屋を借りていた。

義人は誰がどの部屋にいるかを頭の中から探し出し、自分の部屋とは違う方向へと足を向ける。

このまま部屋に戻る気分でもない。義人は、夕方にノーレから説教を受けたサクラの部屋へと足を向ける。

――まあ、俺も少しは王様らしいことをするかね。

内心で、そんなことを思う。例え“紛い物”の王様でも、できることはある。

コルテアの言うような大を取って小を殺す命令を出すわけでもなく、まずは自分にできそうな周囲の人間関係の改善を目標にして、義人はサクラがいる部屋の扉をノックするのであった。

第八十六話：サクラ

サクラ、という名は父親に付けられた名前らしい。

らしいというのは、サクラにとって父親という存在に関する記憶がまったくと言っていいほどないからだ。十年近く前に毒殺されて死んだのだが、それを悲しめるほどの面識があったわけでもなかった。

血縁では間違いなく父親に該当するが、幼い頃の記憶の中にその父親の姿があったことはない。それは、父という名の他人と表現したほうが正しいのかもしれなかった。

父親……前カーリア王からすれば数多くいる妾の内の一人の子だ。その扱いは、市井の民となんら変わらない。何せ、向こう（国王）からすれば母は特別な存在ではなかった。たまたま気に入る容姿の女性がいたから手を出したという、それはそれは横暴極まりない理由。

その横暴に遭遇し、相手がその横暴を振るえることがサクラの母にとって、不運だった。

現在城下町に住んでいる母親は、その昔カーリア国魔法剣士隊に務めていた魔法剣士である。氷魔法を操り、その腕は中々のものだった――というのは幼い頃から様々なことを教えてくれたアルフレッドの弁である。

サクラにとっては、見知らぬ父よりも勉学から戦い方までを教えてくれたアルフレッドのほうが父親“らしい”存在だった。例えそれが将来国を支える人材を育てるための行為だったとしても、その感情は揺らがないだろう。

幸いというべきか、サクラには母親譲りの氷魔法の才とそれを操る魔力があった。

アルフレッドの指導は国政の急がしさで面倒を見る暇がなくなるまでだったが、それでも才能を努力で育て、その身を国内でも有数

の使い手になるまで育て上げた。
こと戦闘においては、師であるアルフレッドと『召喚の巫女』であるカグラを除けば国内でも最強に近い。それでいて、その強さを知るのはごく少数の人間だけだ。
そして、その秘匿性と強さを買われたサクラに与えられた役目が次代国王の護衛である。もっとも、護衛と言っても四六時中張り付くわけではないが。
過去に召喚された王達の年齢は、高くても成人程度。低くて十五歳前後と、若年の者が召喚されている。
新しい国王の年齢は、過去の事例から見てもサクラと大差ない。差があったとしても、高くて精々五歳前後、低くてもサクラと同い年程度の者が召喚されるというのが召喚前に立てられた予想だった。
それらの事柄を踏まえれば、サクラに課せられた役目は日常生活の世話や護衛だけではない。召喚された王を補佐するカグラ同様、王がこの世界で“生きていきたくなる”ようにしなければならない。
その点で言えば、父親同様の黒髪にやや幼さがあるものの整った顔立ちを持つサクラは召喚されてくる者の傍に置くのに丁度良かった。
顔の造形もほぼ日本人と同じで無用な警戒を抱かせないし、元の世界の人間と近い造形の顔ならば親しみを覚えやすいだろう。少しばかりドジなところが玉に瑕(きず)ではあったが。
あとは次第に打ち解けていき、この国で国王を続けてもらうために“飴”を与える。それが、世話や護衛の他に任された役目だ。
余談ではあるが、サクラと“同じ境遇”で、その上友人であるシアラもその役目の候補に挙がっていたが、生来の性格が王の世話には向かないだろうという理由から外されている。
そんな思惑のもとに役目を与えられたサクラだったが、とある問題が起きた。
それは過去に例のない、国王を含んだ三人の異世界人の同時召喚である。男性二人に女性一人を召喚という、過去の召喚でも起こり

えなかった事態だ。
それでも無事に当代の国王が召喚されており、サクラは新しい王……義人に仕えることになった。
召喚当日は義人の精神状態を考慮して対面できなかったが、その翌日からサクラのメイドとしての生活が始まったのである。
そんなサクラが義人に対して抱いた第一印象は、『変な人』だった。
召喚当日に自分の食事の質を下げるよう命令をする。
気さくで分け隔てがなく、臣下に対して気安い関係を求める。
机の上で山のように積もった政務に関する紙や羊皮紙の束を見て悲鳴を上げる。
そんな『変な人』だ。
だが、時折愚痴を吐きながらも積もりに積もった仕事を一ヶ月で片付けてしまった頃には第一印象は変わっていた。
『お姫様の殺人人形（プリンセス マーダー ドール）』という魔法人形を使っての暗殺未遂事件。
その際に義人を守ることができなかったカグラや、自分に対する処置（おとがめなし）。
甘さが目立つものの、それでも『変な人』ではなく『守るべき者』という印象を抱いた。それでも本人は相変わらずと言うべきか、時折妙なことを言い出してカグラに怒られてはいたが。
――そして、その印象がさらに変わることがあった。

「はぁ……」

そこまで思考を巡らせて、サクラはため息を吐く。自身に宛がわれた部屋に置かれていたベッドに腰をかけ、手には小さな木箱を持って顔を俯かせる。

就寝前のため、服装はメイド服ではない。これから到来する冬の季節にも大丈夫なように、厚手ながらも柔らかさを感じさせる薄黄色の生地で作られた優希お手製の寝巻き……平たく言えばパジャマを身に纏っていた。

サクラは顔を伏せたまま、割れ物を扱うかのように手に持った木箱を開ける。それは、両手で持てば見えなくなってしまうような大きさの木箱。

ふたを開けた中から出てきた物を見てもう一度ため息を吐く。そして、丁寧な手つきで“それ”を手に持った。

それは、過ぎ去った夏の日に義人が渡した桜の花の髪飾り。義人手ずから選び、渡したもの。

義人本人からすれば特別なものではない。カグラに黙って城下町の視察へ行き、偶然志信が見つけた装飾屋で見繕ったものだ。

それでもサクラにとって義人の印象……否、感情をさらに変えることとなった。

『守るべき人』ではなく、『守りたい人』へ。

役目だからではなく、奔放な主君を自らの意思で支えたい、守りたいと思えるようになった。それが、新しい感情である。

もちろん、それまでもそういった意思はあった。しかし、その感情に比べればその意思は弱い。

忠誠心、親しみ、友愛、慕情。様々な感情が等分に混ざり合ったその感情に、おそらく名前はないだろう。例えるなら恋愛感情に近いが、紙一重で違う。

そもそも、自分ではその役割は無理だとサクラは思っている。姉のような存在であり、上司でもあるカグラでも駄目なのだ。

義人とカグラの間で何かしらの“こと”があったと、いや、起きようとしたことをサクラは二人の雰囲気から察している。だが、義人とカグラの態度を見る限り、カグラの手を義人が振り払ったのだ

ということが窺えた。
サクラにしてみれば、カグラでも駄目だったのなら自分も当然駄目だと思っている。やはり優希がいるからだろうかと首を傾げるものの、解答は出ない。
ならば世話役として、護衛としての役目を全うしようとサクラは決意していた。
そして、今回の事件である。
守るべきが守られ、庇うべきが庇われた。
相手が強かった、などというのは言い訳にもならない。相手の強さを見誤ったのは自分である。自分がしたことは、ほんの少しの時間稼ぎのみ。
後は義人自身が剣を抜き、相手が誘拐の証人としてなるべく生け捕ることを目的としていなければ殺されていたという状況を作り出してしまった。

「はぁ……」

再度、ため息を一つ。
サクラにとって辛いのは、そのことに関して義人が何も咎めなかったことだ。この世界で生きるには、過ぎた甘さ。いくら本当の原因がカール達ではなくハクロア国にあるとはいえ、その甘さは後々命取りになりかねない。同情を引くような境遇を持った刺客が殺そうとすれば、義人は相手が刺客とはいえ躊躇うだろう。

――その時はヨシト様の身代わりになるけど……はぁ。

内心ですらため息を吐くサクラ。だが、次の瞬間腹部に走った鈍い痛みで顔を顰める。

「いたた……まだ痛みが引かないなぁ……」

そう呟き、サクラはパジャマの上着を軽くめくった。
そして視線を落としてみれば、鳩尾（みぞおち）の辺りが薄黒く変色している。
それを見て、サクラは今日一日で数え切れないほど吐いたため息をもう一度吐いた。
レンシア国第二魔法剣士隊隊長、カール＝シュトラウト。資料と噂話程度でしか知らなかったが、その強さは自分を数段上回っていた。
腹部の痣は、そんな彼に殴られたのが原因である。サクラはまだ知り得ぬことだが、カールの攻撃は風を纏った一撃だ。カールは移動だけではなく、攻撃や防御にも風の魔法を応用する。それによって今まで生き延びてきたのだが、そんなカールの繰り出した拳はサクラに重大なダメージを与えていた。
肋骨はなんとか折れていない。内臓にもそこまで異常はない。だが、それでも体の芯に痛みが残っている。動くのに支障はないが、痛みのせいでいつもより動きが緩慢にならざるを得なかった。
外傷には効果がある治癒魔法も、病気や体の内部の傷を治すことはできない。それでもサクラは、『ヨシト様に気付かれて余計な心配をかけるよりはいいや』と一人頷き……不意に、扉がノックされる音を聞いた。

「おっす、サクラ。ちょっと良いか？」

次いで、扉の外から聞こえる義人の声。それを聞いたサクラは、慌ててパジャマの上着を元に戻す。そして、桜の髪飾りを木箱に戻すと机の上に置いてから口を開いた。

「ど、どうぞ」
「んじゃ、失礼しますよっと」

義人はそんなことを口にしつつ、サクラの部屋の扉を開ける。そして部屋の中に足を踏み入れたところで、気まずそうに視線を逸らした。

「あー……ごめん。もしかして寝るところだった？」

言われて、サクラは自分の姿を確認する。上着を元に戻すことと髪飾りに気を取られ、自分がどんな格好をしているか失念していた。寝巻き姿など、アルフレッドを含めて異性の目に晒したことなどない。家族や同性ならばまだしも、夫でもない男性に見せるような服装ではないのだ。そのことを意識して、サクラは自分の顔が赤くなるのを自覚した。

それに対して、義人にとっては寝るところを邪魔してしまったかという気まずい感情が大半を占めている。昔、優希とは互いの家に泊まり合ったこともあるために、パジャマ姿にも表面上はほとんど動揺することはなかった。

「ま、まだ起きているつもりでしたけど……何か御用ですか？」

サクラは服装のことを思考の中から一度追い出すと、とりあえず話しかける。義人がわざわざ部屋を尋ねてきたのだ。

『戯け、その“気が乗らない日”がこれからずっと続いたらどうするんじゃ？　お主の気遣いは美徳じゃがな、場の雰囲気を乱す者は注意するものじゃ。でなくては仕事が捗らんじゃろう。それに、お主は国王。その仕事の邪魔をされるくらいなら、メイドではなく他の者を傍に置き変えるのも責務のうちじゃ』

そんな、ノーレに向けられた言葉が頭に掠める。義人自ら、役目の解任を告げにきたのかと僅かに血の気が引く。

「いや、夕方ノーレに説教されただろ？　それでサクラの様子が気になって見にきたんだ」
だが、義人から向けられたのはそんな言葉だった。
近くを通りかかったのもあるけど、と笑いながら小さく付け足す義人。それを聞いたサクラは、内心でああ、と呟く。
国王として、臣下の様子が気になったのだろう。だが、その気のかけ方は臣下というよりも友人知人にかける気遣いに近い。
サクラを解任するつもりなどまったくないのだろう。義人はノーレの言葉で落ち込んだかもしれないサクラを励ますために、この部屋を訪れた。
そのことだけで立ち直れると、今までの自分（サクラ）で在ろうとサクラは内心で呟く。

「お気遣い、ありがとうございます」

そのことに、サクラは頭を下げる。夕方のように辛気臭い顔をしていれば、義人は心配するだろうと自然に微笑みながら。

「ん……まあ、その、なんだろう。少しは元気になったみたいで良かった。これなら、明日にはいつものサクラに戻ってるかな？」

サクラの表情を見た義人は、表情を緩めながらそんなことを口にした。それを聞いたサクラは、僅かに首を傾げる。

「いつものって……ヨシト様はいつもどんな風にわたしを見ているんですか？」
「そりゃアレだ。お茶を入れるのが上手だけどちょっとドジで、そんなところが癒される俺より強い女の子、かな？」

そう言って義人は苦笑し、サクラをポンポンと撫でた。

「……ここは喜ぶところなんでしょうか？」

いまいち諸手を挙げて喜べないサクラ。そんなサクラに、義人は『さあ？』と無責任に肩を竦める。

サクラはそんな義人に苦笑し、義人は苦笑するサクラを見て安心する。

――どうやら、ノーレの説教だけで吹っ切れてたみたいだな。こりゃ、余計なお世話だったなぁ……。

少しは王様らしいことをしようと意気込んできたものの、どうやらすでに解決していたらしい。それでも、サクラの表情がここ数日の中でも最も生き生きとしていることに満足する。これなら明日淹れてもらうお茶を美味しく飲めるだろうと、義人は小さく笑った。

「どうやら、ノーレの言葉で元気になれたみたいだな。こんな時間にお邪魔して悪かったよ」

そう言って、義人は部屋を出るべく立ち上がる。それを見たサクラは、見送りだけでもするべきだと声をかけた。

「あ、見送りを……っ！」

そう言ってサクラは立ち上がろうとして、腹部に走った痛みで思わずよろける。そして思わず服の上から右手で鳩尾の辺りを押さえると、それを見た義人が顔色を変えた。

「サクラ？　どうした？」

「……いえ……なんでも、ありません」

気が緩んだためか、痛みが酷く感じられる。

そんなサクラの様子を見た義人は一瞬腹痛かと考えたが、サクラの痛がり方は明らかに違う。まるで打撲の箇所を庇うようなその仕草は、サクラの言葉が嘘だと判断させるには十分だった。

義人の頭に、ごく最近のサクラの様子が思い出される。いつもに比べて緩慢な動きと、どこかふらつくような足取り。その上、目の前で明らかに痛みを堪えているサクラの姿。

義人はサクラが右手で鳩尾の辺りを押さえているのを見ると、僅かに眉を寄せる。その場所は、カールと戦っている時に殴られた場所ではないのかと。

そこまで思考した義人は、無言のままでサクラの右手を握る。

「ヨ、ヨシト様？」

突然手を握られたサクラは困惑した顔をするが、義人はそれに構わずサクラの右手をどけると、パジャマの上から軽くサクラの鳩尾部分を押した。

「っ！」

それだけで、サクラは痛みに顔をしかめる。それを見た義人は、目を細めて歯を噛み締めた。

「それ、カールに殴られた時の怪我だろ？」

確信を持って、義人が尋ねる。

「……はい」

その声色から誤魔化せないと悟ったサクラは、僅かに逡巡した後頷いた。すると、義人は瞳に怒りの色を見せて口を開く。

「なんで黙ってたんだ？」

「それは……」

ヨシト様に心配をかけないように、と囁くような小さな言葉に、義人は大きなため息を吐く。そこまで自分は頼りない主君だったのかと、自身に対する落胆を込めて。

「そういう気遣いは逆に心配するっての……ったく、なんで気付けないかね俺も。ほら、サクラはベッドで大人しく寝ててくれ」

“自分に対する怒り”を抑え、義人は苦笑を浮かべてサクラをベッドへ寝かせる。そして大人しくしているよう厳命すると、部屋を飛び出すのだった。

「すぅ……すぅ……」

その一時間後、安らかに寝息を立てて眠るサクラの傍に立つ義人の姿があった。

レンシア国側に事情を話して脅迫……もとい、お願いをして手に入れた薬が効いているのか、その表情は穏やかだ。

城の医者は、体の治癒機能を高める魔法薬と塗り薬の効果ですぐに良くなるだろうと言い残し、すでにこの場にいない。

さすがに塗り薬を塗るときは部屋を追い出されたためにどれだけ効果があるか義人にはわからなかったが、現在のサクラの顔色を見

る限りきちんとした効果があるのだろう。

「まったく、王様らしいことをしようと思った矢先に自分の駄目さを知るとはねぇ」

苦笑交じりにそう呟き、義人はサクラの頬にかかった髪を優しく払う。そして、サクラを起こさないようにと静かに部屋を出ようとした。

「……んん……すいま、せん。ありがとう……ございました……」

だが、義人は扉を静かに閉めようとしてその動きを止める。

寝言だったのか、それとも僅かに目を覚ましたのかわからない。

義人は僅かに苦笑して『おやすみ』と小さく呟いてから、扉を閉めるのだった。

第八十七話：一歩前へ

ゆさゆさ、と揺すられる感覚。
ここ数ヶ月で寝慣れたカーリア国の自室のものと比べても遜色ない、無駄にふかふかで無駄に豪奢な布団越しに揺すられる感覚に、義人の意識がゆっくりと浮上する。

「んー……？」
「ヨシト様、ヨシト様。そろそろ朝食の時間ですから起きてください」

もう朝かと寝惚け頭で思考し、次いで聞こえてきた声に気を抜く。

「サクラかー……あと、五分……ん？」

自分で口にした名前に疑問を覚え、義人は目を開ける。寝ていたせいか、非常に働きが悪い頭に浮かんだ疑問が何なのかわからない。軽く目を擦ってみると、自身の布団越しに自分の体を揺するサクラと目が合った。

「あ、おはようございますヨシト様」
「……ああ、うん。おはよう」

向けられた挨拶にとりあえず挨拶を返し、義人は体を起こす。サクラに起こされることは別に珍しいことではない。ならば何を疑問に思ったのか、と首を傾げ、義人は昨晩のことを思い出した。

「って、サクラ！？　何を当たり前のように働いてるんだ！？」

義人は思わずそんな声を上げる。骨や内臓に異常はなかったらしいが、それでも動くだけで痛みがあるような怪我だった。

義人としては無理に働かず、今日一日は部屋で休んでいてほしいところである。そう思っての言葉だったのだが、サクラは違う意味として受け取った。

「そ、それは……やっぱり、わたしは解任ということ……でしょうか？」

微妙に泣きそうな顔でサクラが尋ね、それを聞いた義人は疑問の表情を浮かべる。

「へ？　……あ、違う違う。そう意味じゃなくて、怪我してるんなら今日一日くらいは休んで良いのにってことだよ」

顔の前でパタパタと手を振り、否定する義人。すると、それを聞いたサクラは安堵の息を吐いた後に口を開く。

「いえ、いただいたお薬が余程良いものだったのか、一晩眠っただけで痛みもほとんどなくなってしまいました。痣のほうも大分良くなりましたし」

そう言って微笑むサクラだが、義人はいまいち信じられずに懐疑的な視線を向けた。

「いやいや、いくら薬が良いものだったからってそんなに早く治るものじゃないだろ？」

飲ませたのは普通の薬ではなく、魔物などから採れる材料を使った魔法薬ではあったが、その効果がどれほどあるのか知らない義人

は簡単には頷けない。義人としては回復までに最低でも二、三日はかかるだろうと思っていた。
　すると、義人の視線を受けたサクラは僅かに頬を染めつつ目を逸らす。

「その……なんでしたら、確かめられますか？」
「確かめるって、どうやって？」

　怪我の度合いを知る魔法でもあるのだろうか、と義人は僅かに首を傾げる。しかし、サクラが提示する方法はそんな義人の予想の斜め上のものだった。

「それはやはり、直接見てもらうしかないと思いますが……」

　つまり、目で見て確かめろということである。
　義人はサクラの言葉の意味を真面目に噛み砕き、その案を実行すればどうなるかを思考していく。

「ふーむ……」

　サクラが怪我を負った場所は鳩尾付近で、手や足などではない。つまり確認するためには……とそこまで考えたところで義人は強制的に思考を打ち切ると、浮かんだ考えを箱に詰め込み、鍵をかけてから記憶の隅へと追いやる。
　そして、わざとらしく咳払いをしてから口を開き、

「さ、さーて、そろそろ朝食の時間だから着替えないとなー」

　ひとまず、逃げることにした。

朝食を食べ終えた義人は、小会議室を借りてカーリア国で毎朝行っていた定例の報告会を行う。報告会と言っても義人は臣下の報告や今日行うことに関して聞くだけであり、カーリア国で行う時のように報告の量が多いわけでもない。

レンシア国へ義人と共に来た文官の数は多くなく、カグラなどを含めても十人を少し超えた程度でしかない。そのため、財務大臣のロッサによる報告がやや長かったものの全体では三十分もかからなかった。

義人は報告を聞き終えると、書記を務めていた優希から各人の行動予定が書かれた紙を受け取る。そして確認の意味を込めて目を通し、ロッサの名前を見たところで顔を上げた。

「あ、ロッサ」

「はい。なんでしょうか？」

名前を呼ばれたロッサは義人の方へと体ごと向き直り、それを見た義人は僅かに苦笑しながら口を開く。

「交渉の件だけど、もしかしたらレンシア側の出方が変わるかもしれないから注意しといてくれるか？」

「それは構いませんが……何かあったのですか？」

「まあ、個人的にちょっと。変わらないかもしれないけど、向こうが強気……ってのはないか。交渉内容に関して少しぐらい引き下げようとしてくるかもしれないから、そうなったら上手い具合にまとめてくれ。何なら、玉鋼を交渉の札にしても良いから」

それだけを言って、義人は交渉に関してロッサに一任する。

「はっ、仰せの通りに」

それに対して、ロッサは僅かに思案した後に頷く。それを傍で聞いていたカグラは、義人が言った『個人的にちょっと』という部分が気になって訝しげな視線を義人へと向けた。

「個人的にちょっと、とは何でしょうか？」

「……えー、黙秘権を行使します」

カグラの視線と言葉を受けた義人はそう言ってカグラから目を逸らし、誤魔化しのために傍にいた小雪の頭を撫でてみる。撫でられた小雪は嬉しそうに一鳴きするが、カグラの追求は止まらない。

「個人的にちょっと、とは何でしょうか？」

同じ言葉を繰り返すカグラ。微妙に声色が変わってきていることに危機感を感じた義人だが、行使した黙秘権をそのままに、撫でていた小雪をさらに撫でる。それを見たカグラは、少しばかり眉を寄せた後に大きく息を吐いた。

「では質問を変えます。コルテア王と何を話されたかはわかりませんが、その時に話した内容が原因ですか？」

バレてら、と義人は内心で呟く。だが、カグラはカーリア国の中では義人に次いで宰相と並ぶ地位である『召喚の巫女』である。昨晩護衛として付き添った兵士からの情報かと判断した義人は、降参とばかりに両手を上げた。具体的な内容は知られていなくても、そこまで知られているのなら隠すこともないと口を開く。

「それはちょっと“本物”の王様と一対一で話したかったというか、王様の心得みたいなのを聞きたかったというか、そんな感じかな。それで、話を聞いた代金として交渉内容を少しぐらいなら引き下げても……って、勝手にそんなことをして悪いな、ロッサ」

そこまで言って、義人はロッサに対して頭を下げる。それを見たロッサは、どこか楽しそうに苦笑した。

「そのようなこと、気にされることはありません。私達の役目はヨシト王の望まれる通りに物事を進めることですから、お気になさらず」

「いや、そこは『なにしてんですか』と怒ってもいいところだと思うぞ？　あと、ロッサ達が認識している役目に対して一言突込みを入れたいな、俺は」

絶対に違うことを考えているだろうと確信する義人。すると、義人とロッサの会話に口を挟むことがなかったカグラがどこか真剣な表情で口を開く。

「ヨシト様。コルテア王と話してみたかったこと……それはその、今後の王としての振る舞いをコルテア王から学ぼうとした、ということですか？」

尋ねたカグラの声に込められていたのは、そこはかとない期待。義人が国王を務めることを“本当”に受け入れてくれたのかという、そんな期待だった。だが、そんなカグラの期待に気付かなかったのか、それとも気付いて敢えて構わなかったのか、義人は特に気にすることなく首を横に振る。

「いや、そういうわけじゃないよ。参考にはするだろうけど、振る

舞いに関してじゃない。王としての適性というか、在り方というか……」

義人がそう言うと、それを聞いたカグラの表情が僅かに変わる。

「そうですか」

短いながらも、どこか嬉しさのにじむ表情で小さく呟いた。

否定はされたが、義人自らそういった話を聞きに行ってくれたことは嬉しい。今の地位をどうでもよく思っているのなら、そんなことを気にするはずもないのだから。

「ま、ひとまず解散。何かあったら報告をよろしく」

そんなカグラから視線を外した義人は、報告会の解散を告げるのだった。

報告会も終了し、義人は今日一日どう過ごすかを頭に思い浮かべる。

交渉は任せているため、重要な判断に伴う裁可以外は口出しするつもりはない。それならば今日はレンシア国の訓練を視察するかと考え、義人は周囲を見回す。志信についてきてもらえば良いかと思ったのだが、その姿はない。

「って、集めたのは文官だけだったか。志信は部屋かな?」

椅子から立ち上がり、軽く伸びを一つ。義人は背骨が音を立てるのを聞きつつ、ついでに首も回してみる。そして部屋から出て行く

カグラや文官達の姿を特に意味なく眺めていると、開けた扉の外に緑色の“何か”が映った。

「んー……？」

それを訝しく思った義人はそちらへと目を向けると、何やら周囲を見回している緑の髪の少女……フウの姿が目に留まる。忙しなく辺りに目を向け、気難しげに眉を寄せているフウの姿は義人の興味を引くには十分だ。その様子を一言で言い表すとしたら、挙動不審がピッタリだろう。

『探し物？』

そんなフウに、義人は小会議室から出て思わず声をかけた。その声にフウはすぐさま顔を上げて義人の顔を確認すると、背筋を伸ばしてスカートの裾をつまみ、綺麗に一礼する。

『これはヨシト王。ご機嫌麗しく存じますわ』

やけに堂に入った挨拶に、義人は思わず頭を下げ返す。

『やや、これはどうもご丁寧に……って、挨拶も大事だけど、何をしてるか聞いてもいいかな？』

思わず下げた頭を元の位置に戻し、義人は気になったことを尋ねる。すると、フウは視線だけで周囲を見回してから口を開く。

『ヨシト王には昨日もお話したかと思いますが、ここ数日妙な気配を感じていますの。都合が悪くて調べることができませんでしたが、ようやく調べるだけの時間ができまして。この付近から強い気配が

したと思ったんですが……』

そう言ってもう一度周囲を見回すフウに、義人は首を傾げる。

『昨日のって、同類がどうとかってやつ？』

『ええ。しかし、それにしては気配が妙ですし、同じ風竜なら気付くと思いますわ』

フウがそこまで言うと、義人は彼女が探しているものが徐々に頭に思い浮かんでいく。

フウと同類、それでいて風竜ではないという矛盾した言葉ではあったが、ある意味同じ括り（くくり）に入るものがいる。

『ああ、それはきっと……お？』

「キュク？」

『え？』

気付いた義人がそれを口にしようとした瞬間、開けたままの扉からその張本人が顔を出した。ここ最近でさらに成長した体躯で甘えるように義人に飛び掛ろうとした小雪は、飛び掛るよりも先にフウに気付いてその行動を止める。そして、実に不思議そうな目でフウを見た。

それに対して、見られたフウは真顔で自分の両目を軽く擦り、続いて頬をつねった後に数回瞬きして目を見開き――いきなり平伏（ひれふ）した。

『は、白龍様！？　こ、これは失礼を！』

そう叫び、何故か平伏すフウ。

『あれっ？　ちょっと、フウ？』

某世直しのご隠居を前にした悪代官の如き様を見せたフウに対して、義人は心底困惑しながら声をかける。するとその声が聞こえたのか、フウは平伏したままで僅かに顔を上げて義人へと目を向けた。

『ヨ、ヨシト王……何故こんなところに白龍様がいらっしゃるのですか？』

『白龍“様”？　俺としては様付けしてるほうが気になるけど……小雪は以前大雨と一緒にカーリア（うち）に降ってきたんだよ。何でも『龍の落とし子』って言うらしいんだけど、卵から孵る時に俺と優希に対して刷り込みをしたらしくて。あ、優希っていうのは俺の幼馴染みの女の子な？』

そう注釈を入れると、先程まで行われていた会議に関して軽く書きまとめていた優希が義人の傍へと寄ってくる。

「義人ちゃん、呼んだ？」

「あー……呼んだというか、会話の中で名前が出ただけというか」

律儀に反応してくれた優希に苦笑を一つ向け、義人はフウに対して口を開く。

『まあ、俺と優希に対して刷り込みをしちゃってね。それ以来はこんな感じだよ』

そう言って、義人は何故か自分の背中に隠れている小雪の頭を撫でる。すると安心したのか、小雪は一鳴きしてからフウのほうへ一歩近寄った。

「キュ？」
『あ、お、お初にお目にかかります。わ、わたしは風竜のフウと申します。今はこの国の第二魔法剣士隊の隊長であるカールに付き従う生活を送っています』
「キュクー、キュル？」
『い、いえ。わたしの生まれはレンシアとハクロアの国境近くにある山岳地帯です』

緊張しているのか、多少言葉に詰まるフウ。義人にはわからなかったが、どうやら会話が成立しているらしい。
その様子を眺めていた義人は、フウと小雪の言葉が通じているあたり知性のある魔物同士ならば意思の疎通が可能なのかもと頭の隅にメモをする。

「キュク、キュ、キュ？」
『あ、その……たしかに、それはわたしですが』
「キュク！」
『い、いいえ滅相もない！　それは不幸な誤解でして、決してそのようなことはないです！』

そうやって義人が眺めていると、何やら会話の雰囲気がおかしくなっていることに気付いた。小雪の言葉に対して、フウが必死に弁解をしている。

『小雪は何て言ってるんだ？』

フウの様子から、義人は助け舟を出すべく話しかけた。すると、フウは困ったように義人へと向き直る。

『それが、わたしがヨシト王に攻撃を仕掛けたことに対してお怒り

になられているようで』
「キュク」

フウがそう言うと、それを肯定するように小雪が一鳴きした。それを見た義人は、苦笑しながら小雪の頭を撫でる。

『……ほら小雪、俺は気にしてないんだからそんなに怒らないでやってくれ。フウだってエリス姫を助けたい一心だったんだろうし』

事実、義人は今回の件でそこまで怒りを感じてはいない。思い知った死に対する恐怖で怒りの感情が浮かばなかったこともあるが、もしも自分が怒りで騒げば問題はそれだけ大きいものになる。

小雪は義人の言葉に渋々ながらも納得したのか、頷くように頭を振って優希の傍へと移動した。それを横目に見た義人は、そのままフウへと視線を移す。

『それで、俺としては小雪を様付けで呼んでることについて聞きたいんだけど？』

義人がそんな質問をすると、フウは心底不思議そうな顔をした。

『何故……と聞かれましても、白龍様ですよ？　龍族の中では黒龍様と同じく、わたし達風龍や火龍などの属性を持つ龍の上に立つ龍ですから敬意を払うのは当然のことですわ』
『上に立つってことは、龍の中でも上下関係があるのか？』

フウの言葉に疑問を感じた義人がそう尋ねると、フウは当たり前と言わんばかりに頷く。

『“再生”を司る白龍様と“破壊”を司る黒龍様。その下に火龍、

水龍、風龍、雷龍などの各“属性”を司る龍。さらにその下には翼竜などが存在します。他にも龍族の血を引く亜龍が存在しますが、亜龍は純粋な龍と比べると強さも格段に落ちますわ』

『へぇ……ということは、小雪って実はかなり偉い龍だったんだな。数も少なかったりする？』

義人がそう言って小雪の頭を撫でると、小雪は意味がわからなかったのか首を傾げる。その様子を見れば、とてもそんな大層な龍には見えなかった。

『他の龍族に比べれば出生確率も低いですし、白龍様は“再生”を司るため、その血は万能の薬にもなると言われています。そのため、古よりその血を求めた人間や魔物に討たれた方もいらっしゃったとか』

『ということは、小雪も狙われるかもしれないのか？』

『可能性としては否定できませんわ。しかし、親の龍の報復を考えればそう簡単には手出しできないと思いますわ』

『でも可能性はなくならない、と。参ったな、小雪にも護衛をつけるか』

何せ、『龍の落とし子』を行った親の龍がいずれ小雪を迎えに来る。その際、小雪がいなかったらどうなるか。それを考えると、小雪には無事に育ってもらわないと困るのだ。

相手は一国を滅ぼし得る龍族の中でも上位種、白龍。小国であるカーリアなど、瞬く間に滅ぼされる可能性がある。

『よし、小雪にも護衛をつけるか』

頭に浮かんだ嫌な未来予想図を振り払い、義人は即断した。すると、そんな義人を見たフウがおずおずといった風に口を開く。

『あの、もしよろしければですが、コユキ様に龍族に関することをお教えしたいのですが……』
『龍族に関すること？』
『はい。わたしも、生まれて間もない頃から自分の一族に関することを教わりましたわ。白龍様に関することも、多少ではありますが学んでおります。少しはお役に立てる知識をお教えできると思いますが』
『そりゃありがたい話だ。俺も聞いて良い？』

どんな話をするのか興味を惹かれた義人だったが、そんな義人の言葉を聞いたフウは申し訳なさそうに首を横に振る。

『真に申し訳ありませんが、人の言うところで秘伝に近いこともお話します。それらを知られると、龍族として非常に危険でして……』
『あ、そういうのもあるのか。じゃあ仕方ないか』

聞いても口に出すことはしないだろうが、隠すものをわざわざ聞く趣味もない。そのため、
義人はあっさりと引き下がった。

『申し訳ありません。ご配慮、ありがたく存じます』
『いや、こっちも興味本位だったから』

畏まって頭を下げるフウに、義人は苦笑しながら手を振る。フウの言葉と仕草からは、特に他意は見られない。本当に、小雪に話をするだけらしい。

『それじゃあ、小雪のことをお願いするよ』

故に、義人はそれだけを口にした。

明日は建国記念式典があり、それ以降は滞在する期間がほとんどない。精々三日を限度にカーリア国へと戻り、国の舵取りをしなければならないのだ。それまでに、できる限りのことを見聞したい。

そのため、義人は小雪のことをフウに任せて先程決めた今日の仕事……レンシア軍の訓練の視察に向かうことにしたのだった。

第八十八話：視察へ

カリカリという、何かを刻む音が響く部屋の中。志信はまるで座禅でもするかのように胡坐をかき、その音を耳にしながら目を瞑っていた。

「……」

そんな志信の横では、シアラが無言のままに手先を動かしている。左手に直径四センチ弱、長さは志信の身長と同じぐらいの棍を持ち、右手には『魔法文字』を刻むために使用する『魔石』を鉛筆サイズに削ったものを持っていた。

現在シアラが棍に刻んでいるのは『無効化』の術式である。志信が今まで使っていたものはヤナギと戦った際、放たれた居合いの一閃で切り捨てられた。そのため、この国に一緒に来たゴルゾーに頼んで用意してもらったのがこの新しい棍である。

無手、もしくは刀を使っても戦えるが、やはり得物は一番使い慣れているものが良い。さらに、今まで使っていたものと同じようにシアラに『無効化』の術式を刻んでもらっている。

欲を言えば棍自体の強度も上げてほしかったのだが、シアラの技量では一つの武器に二つの術式は刻めない。そのため、志信は『無効化』を優先して刻んでもらうのだった。

「……できた」

ポツリと、シアラが呟く。それを耳にした志信は、静かに目を開いてシアラへと目を向けた。すると、シアラの手の中には『無効化』の文字が刻まれた棍が握られている。志信には『魔法文字』などわからなかったが、シアラの腕は信頼しているためすぐに頭を下げた。

「すまん、助かる」
「……いい。わたしも、練習になる」

シアラから棍を受け取った志信は、その場で立ち上がって軽く棍を一振りする。本来ならば外で振るいたかったが、この世界の建物は日本の建築様式とは違って一部屋一部屋が広い。そのため、棍の感触を軽く確かめる程度なら事足りる。

シアラは絨毯が敷かれた床に座り込んだままで志信を見上げ、小さく口を開いた。

「……どう？」
「おそらく大丈夫だろう。あとは、実際に魔法を『無効化』してみたいところだな」
「……なら、外に行く」
「そうするか」

志信がそう言うと、シアラはゆっくりと立ち上がる。いや、立ち上がろうとした。

「……あ」

ふらり、とシアラの体が揺れる。今までの集中をしていたせいか、シアラは立った拍子に立ちくらみを起こして体勢を崩した。

「む、大丈夫か？」

そんなシアラを、志信がすかさず支える。腕一本で抱きかかえるように助け起こし、志信は瞳に心配の色を覗かせた。

「……平気。ちょっと、疲れただけ」
「そうか……重ね重ね、すまん。無理をさせたようだな」

いつもなら、『無効化』の術式全てを刻むわけではない。元々、志信が使っていた『無効化』の棍はかつてカーリア国元財務大臣であるエンブズが義人を暗殺するために志信の姿を真似させた『お姫様の殺人人形』に使わせていたものだ。

『お姫様の殺人人形』を破壊した後は志信が使っていたのだが、志信が最初シアラに頼んだのは『無効化』の術式が削れたのを直してもらうためだった。元の術式がそこまで良くなかったため少しばかり書き換えたりはしたものの、今回のように術式全てを書いたわけではない。

棍を斬ったヤナギに代品を請求するという手もあったが、殺傷能力の低い棍に『無効化』の術式を刻む物好きはいないらしく、代品が用意できるとしても志信達がこの国にいる間には不可能らしい。棍は扱う者の力量次第でかなり危険な武器になるのだが、それならば槍を使ったほうが話が早いのだ。

『無効化』自体の魔法としての難易度はそこまで高くないが、それでも『魔法文字』を使って武器や防具に術式を書くのは手間がかかる。『魔法文字』が刻まれた特殊な道具は通常のものと比べて取引価格も高く、希少価値があるため手に入りにくい。

そのため、志信はシアラに『無効化』の術式を刻んでもらった。以前交わした動く的の約束もあるが、シアラにとっても良い練習になる。それに、志信としては見知らぬ誰かに頼むよりもシアラに頼んだほうが安心できるというのもあった。

「……もう平気」

志信の腕で支えられたシアラが小さく呟く。だが、志信はシアラ

の足元を見てから口を開く。

「足に力がない。俺の言えた言葉ではないが、無理はしないでくれ」

「……平気」

繰り返すようにそう言って、シアラはトレードマークの黒い三角帽が落ちない程度に首を横に振る。

どこか戸惑うような、それでいて焦るような雰囲気のシアラだったが、志信とシアラでは身長差が大きい上に三角帽のつばの部分に視界を遮られ、志信からはシアラの表情が見えない。そのため、志信はシアラの感情の動きにまったく気付くことはなかった。

シアラは自分を抱きとめた志信の腕を見下ろして、僅かな思考に浸る。

志信の行動が邪な思惑からのものではないことなど、ここ数ヶ月の付き合いから容易に判断できる。自分がふらつき、それを心配して抱きとめた。それだけだ。それ以上でもそれ以下でもない。志信の思考が“他”に向くことなど、ない。

――――何故か、それが少し腹立たしい。

そんな思考をする自分に疑問を覚えるものの、シアラはそれが疲労からくるものだと判断する。

『魔法文字』を刻むのに集中力を酷使し、魔力も消費した。ただでさえ先日に他国の人間と戦闘を行い、多少魔力も消費している。まだそのときの疲れが抜けていないのだろうと、そう判断した。

片腕でシアラを抱きとめた志信は、自身と比べて華奢なシアラの体を支えつつどうしたものかと無言のままに思案する。

本人が平気というからには腕を離しても大丈夫だろうか、と内心で首を傾げ……その瞬間、扉が開いた。

「おーっす志信。今からレンシア軍の訓練を見に……行く……から……」

次いで、男同士だからノックはいらないだろうと気軽に扉を開けた義人の声が響く。しかし部屋の中の、正確には志信がシアラを抱き締めている光景を目の当たりにした義人の声は、後半になればなるほど小さいものへと変わっていた。

「……」

義人は数度瞬きをして、無言のまま眼前の光景を理解するよう努める。

まさか、まさかの光景。志信がシアラを片腕で抱き締めているという事態に、義人は真顔で硬直した。

それに対して、志信も思考が止まった自分を自覚する。やましいことなど何一つないと断言できるが、何故か言葉が出ない。

「義人ちゃん、どうしたの……あれ？」

義人の様子を不思議に思ったのか、義人にしがみつくようにして優希が部屋の中を覗き込む。そして少しばかり驚いたような顔をすると、邪魔をしては悪いと言わんばかりに義人の服の袖を引いた。

「まぁ……」

そうやって義人の袖を引く優希の反対側では、一歩後ろに控えたサクラが部屋の中を覗き込んで驚きに目を見開いている。口元に両手を当て、微妙に赤い顔で部屋の中の光景……具体的には志信の腕に収まっているシアラを凝視していた。

優希に服の袖を引かれた義人はすぐさま気を取り直すと、いっそ

見事なほどに背筋を正し、折り目正しく一礼する。

「お邪魔しました」
「お邪魔しましたー」
「失礼しました」

頭を下げる義人に、追従する優希とサクラ。
その数秒後にパタン、と扉が閉じられ、足音が徐々に遠ざかっていく。それを耳にした志信は後で誤解を解こうと気を取り直し、

「ぬおっ!?　ミ、ミーファじゃないか！　い、一体どうしたんだ？」

部屋の外から、義人のそんな声を聞いた。

――――やばい、やばいです。

義人は滝のような冷や汗をかきつつ、内心でそんなことを呟く。
扉を開けた向こうに広がっていた光景は、まだ良い。志信のことだから、きっとふらついたシアラが倒れないように抱きとめたのではないかと義人は予想している。
もっとも、それは扉を閉めたところで浮かんだ考えであり、一礼して扉を閉めるまでは深く考えることもできずにいた。それくらい、予想外の光景だったのだ。

「ヨシト王？　こんなところでどうされたのですか？」

そこへ、ミーファの登場である。
いつもの如く、赤髪を後ろでまとめたポニーテール姿のミーファは不思議そうな顔で義人を見ていた。動きやすさを重視した必要最低限の急所を守る白の鎧を身に纏い、手甲をはめた右手には鞘に納まった刀を握っている。

「ぬおっ!?　ミ、ミーファじゃないか！　い、一体どうしたんだ？」

義人はそう言いつつ、自身が背を向けている志信の部屋の扉をミーファの視界から隠すように一歩横へ移動する。すると義人の意図を汲んだのか、優希も義人と同じように体の位置をずらした。

「わたしはシノブ……殿に用があって来たのですが……ヨシト王もシノブ殿のところへ？」

そんな義人の動きを特に気にすることなく、ミーファは己の用件を告げる。公私を弁えたミーファの口調に義人はむず痒いものを感じつつも、首を横に振った。

「い、いやぁ、それが志信がいなくってさー。どこかに行ってるのかねぇ」

続いて誤魔化しの言葉を口にして、ついでに首を傾げてみる。誤魔化す必要はなかったのかもしれないが、この時の義人はそれがベストの選択だと判断した。

「そうですか……レンシア軍の訓練を見に行っているのかもしれませんね」

義人の言葉を疑うことなく、ミーファは頷く。それを見た義人は、今更『先客（シアラ）がいたんだ』などと言えるはずもない。
必死に誤魔化そうとする義人の横では、優希が密かにため息を吐く。

――――自分以外のときは察しが良いのになぁ……。

愚痴のようにそんなことを思ってみるが、それで義人が変わってくれるはずもない。
もっとも、それが素なのかわざとなのかは優希でも判断がつかなかったが。

「俺達は今からレンシア軍の訓練を見に行こうと思うんだけど、ミーファはどうする？」

笑顔を浮かべながら考え事をする優希に気付かず、義人はミーファに話を振る。すると、ミーファは少しばかり申し訳なさそうな顔をした。

「わたしは丁度今見てきたところでして、帰国後にアルフレッド様へ提出する書類を作成しようかと。しかし、護衛が必要ということでしたら喜んでお付き合いいたしますが？」

そう言いつつ、ミーファはさり気なく周囲に視線を向ける。目に見える範囲にいる護衛はサクラだけだが、すぐさま義人のもとへ駆けつけられるよう周囲に魔法剣士隊の兵士が三人ほど配置してある。
それに気付いているのかいないのか、義人は肩を竦めた。

「そりゃ残念。ま、護衛はサクラがいるから大丈夫だろ。というわけで、ミーファは部屋に戻って大丈夫……寄り道はせずに、な」

「は……たしかに寄る場所はありませんが」

義人の言葉を内心で不思議に思いながらも、ミーファは首肯する。義人はミーファの様子に、気にしないでくれと苦笑した。

「それじゃあ、訓練を見に行ってくる。城の裏手でやってるらしいけど、手続きとかは必要なのか？」

「手続きなどは必要ないですが、訓練をしている部隊の隊長に見学の旨を伝えたほうがよろしいかと。普段ならそう簡単に許可も下りないでしょうが、“今回”に限っては相手側も拒否はできないでしょう」

「それも交渉の一環ってか？　って、勝手なことをしたらまたロッサに迷惑がかかるかな？」

「そのあたりのことも織り込み済みかと思われますが」

ミーファの言葉に、義人は現在交渉を行っているであろうロッサの顔を思い浮かべる。

「だと良いけどな。それで、ミーファとしてはどうだった？　この国の訓練を見て何か思うことはあったか？」

話ついでにそんなことを尋ねてみる義人だったが、問いを投げかけられたミーファは表情を曇らせて小さく眉を寄せた。

「そうですね、口で伝えるよりも実際に見られたほうがわかるかと思いますが……カーリア国の兵とは様々な面で異なっていました」

「異なっている？」

「はい。実際に見られればわかるかと思います。城の裏手で訓練を行っていたのは第二魔法剣士隊が主でしたが、我々とは根本から違っていました」

「根本から？」
「根本から、です」
「……よくわからないけど、見れば理解できるんだな？」

根本から違うという言葉に興味を惹かれつつ、義人は確認するように再度尋ねる。そしてミーファが頷くのを確認すると、義人は軽く礼を言ってから歩き出した。

ミーファがそこまで言うのならば、本当にそうなのだろう。

そんなことを内心で呟きつつ、義人は優希とサクラを伴って城の裏手へと向かうのだった。

第八十九話：加速

遠くから気合の乗った掛け声と、金属同士がぶつかり合う音が響く。それを耳にした義人は、音のする方へと視線を向けて遠くを見るように目を細めた。

「おー、やってんなぁ」

呟いた義人の視線の先では、訓練用に刃を潰した両刃の剣や穂先の部分を取り外した槍を手に訓練を行う兵士達の姿が見える。カーリア国の主要武器である刀とは違い、ノーレと同じように両刃の剣を振るっている兵士を見ながら義人は周囲を見回す。

ミーファの言う通りにこの部隊の隊長に見学の旨を伝えようと思ったのだが、そこで義人はあることに気付いてその足を止めた。

「しまった。誰が隊長かわからん」

カーリア国ならば主な文官武官全員の顔と名前を覚えているが、他国の人間の顔と名前などほとんど知らない。すると、そんな義人を見て優希が首を傾げる。

「義人ちゃんどうしたの？　考え事？」

「ん、ああ……って、優希は自由に行動しても良いんだぞ？　訓練の様子なんて見てても面白くないと思うし」

ごく自然に同行していた優希に対して、義人は苦笑を向けた。すると、優希は困ったように頬に手を当てる。

「勝手にお城の中を出歩くのは気が引けちゃうよ。義人ちゃんがつ

いてきたらダメっていうなら部屋に戻るけど……」
「いや、そこまでは言わないよ。優希が良いのなら俺は構わない。あ、でも他国の人の目があるからいつも通り話すわけにはいかないかもしれないな」
ずっと部屋にいるのも退屈だろうと許可する義人だが、カーリア国にいるときと違ってどういう距離を取れば良いのかわからない。
そうやって悩む義人を見た優希は、一歩後ろに下がってサクラの隣へと並び、小さく笑った。
「それならサクラちゃんと同じように振舞うね？」
服装は違うけど、と付け足す優希に対して、義人は苦笑しながら頬を掻く。隣に並ばれたサクラも苦笑し、義人のほうへと目を向けた。
「先程何か悩まれていたみたいですけど、どうかされたんですか？」
「いや、隊長が誰かわからないんだ。たしかミーファは第二魔法剣士隊って言ってたけど」
第二魔法剣士隊と口にして、義人は首を捻った。ここ最近何度か聞いた名前である。義人は宙に視線を向け、思い出すように自分の記憶を漁った。そして、ポンと手を叩く。
「ああ、カール隊長の部隊か。それなら話も早いな」
義人がそう言うと、僅かにサクラが表情を動かす。義人としては特に意味を持たせたわけではないが、サクラにとっては別だったらしい。数日前に戦い、己が敗れた相手に対する感情はあまり良いものではないようだ。

そんなサクラの様子に内心だけで苦笑すると、義人は訓練場を軽く見渡す。そしてカールの姿を探し、それらしい人物を見つけてそちらへと足を向けた。

「っと、いたいた」

そう呟きながらカールのもとへと近づいていく。カールは部下三人を相手取って模擬戦を行っていたが、それでも義人に気付いて声を張り上げた。

『訓練止めっ！　整列！』
『はっ！』

カールが号令を発し、それを聞いた訓練を行っていた者達がすぐにカールのもとへと集まる。そして素早くかつ整然と整列し、隊長であるカールは部下がきちんと整列したのを確認してから義人へと一礼した。

『ヨシト王におかれましてはご機嫌麗しく……』
『いや、そんな畏まった挨拶はいりませんから。というか、すごい邪魔をしたみたいで申し訳ない……ちょっと訓練の様子を見せてほしいんだけど、良いかな？』

ご機嫌麗しくと言われてもどう答えれば良いかわからない義人は、すぐさま用件に移る。すると、それを聞いたカールは僅かに考え込んでから頷いた。

『それは別に構いませんが、できる限り離れた位置でご覧になってください。訓練といえど、危険なことに変わりはありませんので』
『じゃあ離れた場所で見てるから……って、サクラ？　なんか視線

が威嚇しているみたいで怖いんだけど？』

カールの言葉に返事をする義人だったが、先程からサクラのカールを見る目つきがやけに鋭かったので話を振る。

『ヨシト様の気のせいです』

話を振られたサクラは、そう言ってカールから視線を外す。見た目と違って負けず嫌いなところがあったのか、それとも他に含むところがあるのか。そんなサクラの視線を受けたカールは、姿勢を正して頭を下げた。

『先日はまことに申し訳ありませんでした』

『……いえ、あの状況では仕方ないと思います』

カールの謝罪に短く答え、サクラは義人の斜め後ろへと下がる。すでに何度か謝罪をしているが、サクラの反応は一向に変わらない。そんなサクラの様子にカールはバツの悪そうな表情を浮かべるが、すぐに表情を引き締めた。

『それでは訓練を再開したいと思います。全員、訓練を再開しろ！』

『はっ！』

義人に対して一礼すると、カールは整列している部下達へと訓練の再開を告げる。するとカールの部下達はすぐさま訓練場のあちこちへと散らばり、元々やっていた訓練へと戻っていった。

『では自分も訓練に戻りますので』

そう言ってカールが踵を返し、義人はカールに言われた通り多少距離を取る。もっとも、背中にはノーレを背負っているし傍にはサクラがいるため、何かあっても対処は容易いだろう。

義人は用心のためにノーレを背中から腰元へと移動させると、何かあったらすぐにノーレを抜けるようにしてから訓練場に散った兵士達へと目を向けた。

魔法剣士隊はその性質上、高機動かつ高い近接戦闘能力を有する。武器は剣士隊の名の通り剣を使い、その上で攻撃魔法も用いる攻撃力の高い部隊だ。カーリア国では主力の部隊であり、それはレンシア国でも変わらない。

そのため、義人は自国の魔法剣士隊と目の前の魔法剣士隊を比較して思わず眉を寄せる。

「……こりゃ、本当に違うな」

そう呟く義人の視線の先では、ノーレと同じ大きさの剣を自由自在に振るう一般兵の姿があった。男女比率は七対三で男性が多いが、自分よりも年下にしか見えない顔立ちの少女が年上らしき男性と互角に斬り結んでいる光景は中々に印象強い。互いに『強化』を使っているのだろうが、秒を刻む間に数回剣を振るうなど魔法なしでは不可能だろう。

そしてなによりも、兵達の纏う雰囲気に義人は圧倒されていた。ミーファの言っていた『カーリア国の兵とは様々な面で異なる』という言葉は、実に的を射た言葉だったなと内心だけで納得の声を上げる。

剣を振るう度に発する掛け声に込められた気迫。全身から放たれる、殺気にも似た気配。一つ一つの動きにメリハリがあり、義人の目からではほとんど隙がないように見える。

カグラや志信に意見を聞けばまだ違った意見が得られたかもしれないが、義人の目ではそうもいかない。なまじカーリア国の兵士達

を見慣れていたというのもあるだろうが、魔物を相手にするために訓練を積んだ者と人間を相手にするために訓練を積んだ者の差が感じられた。

カーリア国の兵士達は相手が魔物ならば戦えるが、相手が人間だった場合にどうなるかわからない。訓練では兵士同士で斬り結ぶが、それは訓練の範疇を出ない。もしも本当の“殺し合い”になればどうなるか。それを考えてしまった義人は、重いため息を吐いた。

「ヨシト様、どうかされましたか？」

そんな義人のため息をどう受け取ったのか、サクラが心配そうな声をかける。それに対して、義人は苦笑を向けた。

「いや、カーリア国の兵士とは本当に違うんだなと思ってね。サクラから見たらどうだ？」

「そうですね……対魔物の訓練か対人間の訓練かの差はありますけど、そもそもの実力にも差があるかと思います」

「差か……ちなみにどのくらい？」

元の世界で見たら目を疑うような動きをしている兵士達を横目に見つつ、義人がサクラへと尋ねる。その義人の問いに、サクラは困ったように表情を変えた。

「それは、実際に戦ってみないとわかりません」

「そりゃそうか。一人強い奴がいたらそれだけで負けるかもしれないしな」

そう言って、義人は視線を移す。カーリア国の魔法剣士隊と比べて高い練度を持つ兵士達の中で、最も存在感のある人物へと。

「やっぱり隊長っていうだけあって強いよなぁ」

義人がそんな賞賛を向けたのは、一人で三人を相手にしているカールである。周りの兵士と違い、多少短い剣を両手に持つ二刀流で巧みに攻撃を捌いている。その上距離があるため聞こえないが、剣を振るいながらも口頭で欠点を指摘しているらしい。

「あれで大して歳が変わらないんだよな……まあ、志信も一年経てばああなるのかね？　っと、もう一人追加か？」

現状では一対三だったが、そこにもう一人加わるらしくカールの背後から男性兵士が斬りかかる。

すると次の瞬間、カールの姿がその場から消えた。

「お？」

「あれ？　消えたよ？」

義人は思わず己の目を疑い、そんな義人の横では優希が驚きの声を上げる。だが、背後から剣を振るった兵士の“その背後”にカールが姿を見せたことで義人は納得の声を上げた。

「あ、風を使って移動する魔法か。やっぱり瞬間移動にしか見えないよなー」

そう呟く義人だったが、傍でそれを耳にしたサクラはカールの方を見ながら何かを考え込むように視線を地面へと落とす。

「風を使った移動法……ということは、不安定な体勢からでも重い斬撃を振るえたのは同じように風を使ったから？　でも、それだけだと説明がつかない……わたしが作った氷の剣をあんなに簡単に砕

いたのには他に何かタネが？　やっぱり接近戦をしつつ背後から氷を撃ち込んで……」

何かしらの対策を考えているのか、ブツブツと呟くサクラ。そんなサクラに不穏なものを感じ、義人は頬を引きつらせる。

「あの、サクラさん？　何やら物騒なことを考えてたりしませんかね？」

「ふぇっ!?　く、口に出てましたか!?」

「そりゃもうバッチリと。背後から氷を撃ち込むって、かなり危ないんじゃないですかね？」

言葉の内容に少しだけ引く義人。そんな義人の様子に、サクラは慌てたように首を横に振る。

「い、いえ！　そうは言いましても格上の相手を倒すには色々と手を打たないと勝てないものでして！」

「危ないってところは否定しないんだな……というか、再戦することが前提かよ」

本当は割と根に持っているのかもしれない。そう思いつつ、義人は腰元のノーレへと視線を落とす。

「なあノーレ」

『なんじゃ？』

かけた言葉の返答を聞き、義人は先程から何度か姿を消しているカールへと目を向けた。

「アレができたら、逃げる時にものすごい便利だよな？　ノーレな

ら似たようなことをできないか？」

カグラは才能があってもすぐには無理と言ったが、義人は自分では無理でも『風と知識の王剣』であるノーレならばあるいはと期待を込めて尋ねる。完全に真似るのは無理でも、似たことができれば大抵の敵からは逃げられるだろう。

義人としてはこれから先、二度と命がけの戦いなどしたくない。だが、この世界は元の世界に比べれば危険すぎる。いつどこで何が起こるかわからない以上、カールの移動法を覚えることができれば最低でも逃げる手段として使えると義人は判断した。

『風を利用した移動法か……ふむ、試してみる価値はありそうじゃな』

そんな義人の意図を読み取ったのか、ノーレも特に反対はしない。

「お、反対とかしないのか？　というか、できそうか？」

何かしら言われるだろうと思っていた義人は、あっさりと承諾したノーレに肩透かしに似た気持ちを覚えた。すると、ノーレは鼻で笑う。

『お主が格上の相手に斬りかかるよりは余程マシじゃ。あと、できるかじゃと？　妾を誰だと思っておるんじゃ。風の扱いにかけて遅れは取らんわ』

「そりゃ頼もしいことで。といっても、勝手にこの辺を走り回るわけにもいかないよな」

自信に満ちた言葉を返すノーレに頼もしさを覚える義人だったが、兵士が訓練をしているところを走り回るわけにもいかない。

『どうかされましたか？』

場所を変えて試すかなと義人が移動しようとした時、いつの間にやら四人の部下を叩き伏せたカールが双剣を鞘に納めながら歩み寄ってくる。見学に来たのに早くも移動しようとしている義人の行動が気になったのだろう。そんなカールに、義人は小さく笑う。

『いや、カール隊長の移動方法ができるかどうかを試したくなって。一応俺も風の魔法を使えるから試してみたいと思ってね。でも、ここだと周囲に人がいるからちょっと場所を移そうかな、なんて』

『『加速』が使えるか、ですか？』

どうやら名前があったらしい。義人はその名前を覚えると、頷いてみせる。

『そう、それ。覚えられたら逃げ足に使えるかなと思ってね』

『逃げ足には使えると思いますけど……自分で言うのもなんですが、習得は難しいですよ？』

暗に義人では覚えられないと言っているようなものだったが、カールの表情にそういった類の色はない。純粋に、習得は難しいと思っての言葉なのだろう。そんなカールに義人は苦笑する。

『もしもできたら儲けものってぐらいの話だよ。真似事でもできれば良いとは思うけどね。それで、この辺に試せるような場所はある？』

『そうですか……場所ならばすぐにここを空けますが？　部下にもそろそろ休憩を取らせようと思っていましたし』

『え、本当に？　そんなに時間はかからないだろうし、使えるのな

ら使わせてほしいけど……』
『わかりました』

カールの申し出に乗る義人。すると、カールは兵士達のほうへと向き直る。近くにいた兵士達は義人とカールの会話が聞こえていたのか、動きを止めてカールのほうへと目を向けていた。

『これから十分間の休憩とする！　各自、水分を取っておけ！』
『はっ！』

カールの言葉に対して一斉に返事をすると、兵士達は井戸がある方向へと走っていく。魔法剣士隊らしい素早さで走り去ると、それを見送った義人は感心したように口を開いた。

『休憩の時まで統率が取れてるなぁ……まあ、こっちとしては助かって良いけど』

兵士達がいなくなったせいか、先程よりも広く見える訓練場を見ながら義人が呟く。そんな義人の言葉にカールは苦笑した。

『他国の王がいらっしゃるからですよ。いつもはあれほど真面目に訓練をしてくれませんから』

義人は猫かぶりだったのかと思うが、カールの謙遜という可能性もあるので特に言及することはしない。訓練場を空けてくれたカールに礼を言ってから、走りやすいようにノーレを背中へと背負う。

「それじゃ、よろしく頼むぞノーレ」
『うむ。風を使ってお主の移動速度を上げれば良いんじゃろ？　本物の『加速』とやらも見ておるし、大船に乗った気でいるがよい』

自信ありげなノーレの言葉に頷きを返し、義人はもしものことを考えて優希やサクラから距離を取る。
そして優希の『頑張れー』という応援の声を背に、地を蹴った。

『ではいくぞ？』

そんなノーレの言葉とほぼ同時、義人はいきなり自分の体が後ろから押される感触を覚えて内心で驚きの声を上げる。自分が地面を蹴った勢いだけでない、第三者（ノーレ）による強制的な加速。風で押すというよりも、背中から風が吹き出ているような感覚だった。
一瞬で風景が後ろへと流れ、その速さに視界が狭まる。身体能力が上がった状態で全力疾走しても、これほどまでの速度を出すことは不可能だろう。
まさに風を切る速さ。しかし、当の義人にとってはそれで済む問題ではない。

――――速すぎだろこれ！？

口に出す余裕もなく、義人は内心だけで悲鳴染みた声を上げる。下手に喋れば舌を噛みかねず、いきなりの加速のせいか、息を吸い込むことさえ困難だ。
一歩一歩地を蹴るごとに加速し、一歩ごとの移動距離も伸びてくる。その速さに義人は驚きと興奮を覚えつつ、直線に走るのではなく弧を描くように進路を変えた。このままではいずれ訓練場の端についてしまい、止まりきれなかったら壁に激突する可能性もある。
そう思っての進路変更だったが、曲がる際に膝の辺りから鋭い痛みを感じて義人は眉を寄せた。
なんだ、と意識が走ることから外れる。すると次の瞬間、速度についていけずに足が空回りをした。否、平地でありながらも“足を

踏み外した”というべきなのかもしれない。あまりの速度に体のバランスが崩れ、それでもバランスを立て直そうと地を蹴った拍子に体が浮き上がり、

「おおおおおおおぉぉぉっ！？」

義人は十分に加速したまま、勢いそのままに十五メートルほど低空飛行を敢行した。

「ちょ、これ、待っ、ぎゃあああああ！」

叫んだ声は歓喜か悲鳴か。ノーレが風で義人の体勢を正そうとするが、それも遅い。義人は走り幅跳びの世界記録を軽く上回る距離を“飛んだ”後、錐揉(きりも)みしながら地面に落下する。さらにそこから、さながら人身事故にでもあったかの如く、飛び魚が水面を跳ねるように数回バウンドした後にようやく動きを止めた。

「よ、ヨシト様！？」

動きが止まった義人を見て、凍ったように事の成り行きを見ていたサクラが慌てて駆け寄っていく。そしてその後ろに優希が続くが、サクラほどには慌ててはいない。

その光景を見ていたカールは、義人の安否を気にするよりも先に驚愕を覚えていた。

『……成功？』

呆然と呟く。実際はノーレが行ったことなのだが、それを知らないカールには義人が一度で己の使う技を習得したのかと思ってしまった。

カールに比べればまだまだ遅い上に、制御は甘くて実際に実戦で使用することはまだ無理だろう。肉体的にも鍛錬が足りず、使えたとしても直線移動だけで義人自身の気質からも考えて戦いに用いることはないように思える。

だが、敵から逃げることはできる。追いつけるのは同じ移動方法が使える者か、莫大な魔力を持つ者が魔力を消費するほどに強く『強化』を使うことぐらいだ。

今の状態から数ヶ月も訓練を積めば、カールまでとはいかなくとも“それなり”に使えるようになると思えた。

「ヨシト様！　大丈夫ですか！？」

「義人ちゃん、大丈夫？」

そんなカールの内心を他所に、サクラは慌てて義人のもとへと駆け寄る。優希も心配そうではあるものの、遠目に見た義人の様子だけで大したことはないと判断して声をかけた。すると、倒れ付していた義人が顔を上げる。

「なんとか大丈夫……って、足がいてぇ！？　なんかこう、膝に痛みがっ！？」

『転がる際の衝撃は風で殺したが、さすがに進路を変える際の足への負担は妾でも軽減はできんからのう』

背中にノーレを背負っているため、下手な転がり方をすれば鞘の部分とぶつかって骨を折りかねない。かといってノーレを手に持って走るのはバランスが悪く、身につけた状態で走るには背負うしかない。そのためノーレが風を発生させてクッション代わりにしたのだが、さすがに肉体的な負担を防ぐことはできなかった。

直線移動だけならば問題はないかもしれないが、進行方向を変えようとすればそれだけで足に負担がくる。急激な進路変更を行えば

その負担はより顕著になるだろう。

『要修練じゃな。妾が多少制御するとはいえ、進路変更の際の肉体的な負担は全てお主にかかる。一直線に逃げる際には便利そうじゃが、それで動けなくなるようでは本末転倒じゃ。二刀流のように実戦で使おうとすれば周囲の誰かにぶつかりそうじゃしな』

「ぬぅ……あの速さで誰かにぶつかったらこっちの身がもたないっての。相手が鎧でも着てたらなおさらだな」

自分の体よりも硬い金属製の鎧に高速で激突する光景を想像し、義人は顔をしかめる。速さはあるが、体が頑丈になるというわけではない。このままでは人が多い場所では使えないだろうし、障害物がある場所でも使えないだろう。カールのように自在に使えれば話は別だろうが、今のままでは用途が限られてしまう。

義人は服についた砂を払いつつ、体の調子を確かめるようにゆっくりと立ち上がる。

『ヨシト王、お怪我はありませんか？』

そんな義人の傍へとカールが歩み寄り、心配そうな声をかけた。それを聞いた義人は苦笑しながら頷く。

『ちょっと膝に負担がきたぐらいかな。それよりも、カール隊長の目から見てどんな感じだった？』

膝の具合を確かめるように何度か屈伸し、一過性の痛みであったことに義人は安堵しながら尋ねる。すると、カールはそんな義人の様子に真面目に頷いた。

『正直に申しまして、驚きました。ヨシト王が風の魔法を使えるの

は知っていましたが、不完全とはいえすぐに『加速』を扱えるようになるとは……』

『いや、これはちょっとした反則というか。俺だけじゃ絶対無理だし』

『反則……ですか？』

不思議そうに首を傾げるカールに、義人は笑って誤魔化す。

『何はともあれ、試した甲斐があったよ。場所を貸してくれてありがとうカール隊長』

あとは練習で補おう。

内心でそう呟き、義人はカールに礼を述べるのであった。

第九十話：謎の手紙

時刻は午後三時を回り、明日の建国記念の式典のためか城のあちこちで忙(せわ)しない空気が流れる中、義人はその忙しなさとは無縁の場所で椅子に腰を下ろしていた。

職人が手がけたものらしく木造りながらも非常に座り心地が良い椅子に背を預けながら、義人は円形のテーブルを挟んだ向こうで同じように椅子に座る二人の人物を見る。

一人は、どこか所在無さげに義人の様子を窺うエリス。そしてもう一人は、何が楽しいのか笑顔のティーナだった。

椅子に座る二人の三メートルほど後ろには、給仕のために一人の女性が控えている。しかしおそらくはサクラと同じように護衛も兼ねているのだろう、その挙措には無駄がない。

それに対して、義人の傍にいるのは隣に座る優希と義人の後ろに控えるサクラである。ノーレはこの部屋に入室する前に守衛に渡すよう求められ、危険はないだろうという判断から預けてあった。

「……」

義人は無言のままで先程出されたティーカップに手を伸ばし、カップに注がれていた紅茶で軽く喉を湿らせてからティーナへと目を向ける。

『あー……それで、俺達が元いた世界についてでしたっけ？』

『はい！』

ニコニコと元気良く返事をするティーナを眩しく思いつつ、義人は三十分ほど前のことを思い出す。

カールの部隊や他に訓練していた部隊を午前中から昼過ぎまでに

かけて視察した義人達だったが、昼食を食べ終え、他のところの様子を見に行くかと移動を始めた矢先にエリスとティーナに遭遇したのである。

そして軽く話し込んでいるうちにティーナから、

『もし良ければ、元いた世界のお話を聞かせてください！』

これまた元気良く、そう言われたのが現在この場で椅子に座っている理由だった。

交渉などは全て臣下に任せてあるため、義人自身がすることはあまりない。ならば上の人間と話すのが自分の仕事かと一人頷き、義人はティーナの申し出を承諾していた。

『そうだなぁ、元いた世界に関してか……』

承諾したは良いが、どう話したものかと義人は悩む。すると、今まで義人の様子を窺っていたエリスが優希へと視線を移した。

『あの、ヨシト王……そちらの方は……』

優希に関しての話も聞いているが、詳細は知らない。

少なくともこの場で自分達と同じ席に座れる地位の方なのかしら？　などと思考するエリスだったが、そうなると選択肢は限られてしまう。姉のレミィと違い、そういった情報網を持たないエリスは現状で最も考えられる答えを口にした。

『ヨシト王のお妃様（きさき）……でしょうか？』

恐る恐るというわけではないが、エリスはなるべく慎重に尋ねる。もしもそうならばすでに紹介があるものだとは思っていたが、もし

もということもあった。
すると、それを聞いた義人は虚を突かれたように動きを止める。
『え？』
言われたコモナ語がわからなかったわけではない。習った範囲のコモナ語で理解できる内容ではあったが、そう聞かれるのは些か予想外だった。
――お妃様って、優希がだよな？
なんとなく、義人は隣の優希を見る。すると、同じように優希も義人を見て……互いに小さく笑い合った。
『そっか、この場にいればそんな風に思われるのも当然か』
我ながら抜けていると義人は笑い、エリスに勘違いされたことを喜びながら優希も笑う。
『うん、そうだね。義人ちゃんが勧めるから座っちゃったけど、やっぱりわたしは後ろにいたほうが良いかな？』
優希がそう言うと、エリスは義人と優希の会話に首を傾げながら口を開く。
『違うのですか？』
エリスの問いに、義人は苦笑しながら頷いた。
『優希は幼馴染みでしてね。それと友達の志信が一緒にこの世界に

召喚されたんですけど、元の世界の話をするのなら一緒にと思ったんですよ。優希、自己紹介を頼むよ』

『うん』

義人の言葉に頷き、優希はエリスとティーナを見る。

『義人ちゃん……じゃなかった、ヨシト王と一緒の世界から召喚されたユキ＝ホウジョウです。カーリア国での役職は……ヨシト王の友人？』

『客人もしくは料理と裁縫、他諸々の担当じゃないか？』

『でも、それぞれにちゃんと担当の人がいるよ？』

『それもそうか』

二人して頷き合う。

義人もそれなりに元の世界の知識を教えたが、優希は料理やお菓子、元の世界の意匠を取り入れた服飾なども作っている。それを踏まえれば、今回召喚された三人の中で元の世界の知識を最も役立てたのは優希だとも言えた。

そうやってあーだこーだと話す二人だったが、そんな二人を見てエリスが相好を崩す。

『お二人は仲がよろしいんですね？』

微笑ましいというよりは羨ましさを含んだ声。姉であるエリスの言葉に、ティーナは同意するように頷く。

『お姉様の仰るとおり、仲が良いんですね？』

『まあ、けっこう長い付き合いなんで』

羨ましさを視線に乗せたティーナに苦笑しつつ、義人は答える。
王族ともなれば、気軽な付き合いのできる相手というのは中々いないのだろう。
義人はそのことに対して僅かな苦さを覚えつつ、元の話の流れに戻すべく元の世界の話をすることにしたのだった。

『本当に、その車とやらは馬より速く走れるのですか？』
『このお城よりも何倍も高い建物が建ってるって本当ですか！？』
元の世界に関して話すこと一時間少々。興味津々な面持ちで時折質問をする二人に笑い返しつつ、義人は頷く。
『この世界の人からすれば信じられないと思うけど、本当だよ。俺としては、この世界で使われている魔法のほうが信じられないけどね』
『魔法がないということにも驚きましたが、すごい世界なんですね……』
義人の言葉に対して驚きながらも頷くエリス。部屋に案内された時に比べ、その雰囲気は大分打ち解けたものになっていた。
元の世界はどのような場所か？
どのような文化が発展しているか？
どのような国があり、人口はどれほどか？
そんな規模の大きな話から日常で使う生活品などの身近な話までを簡単にした義人は、口休めにと紅茶に手を伸ばす。優希は話すことを義人に任せていたものの、時折話の内容を補足するなどしていた。
義人の対面に座るエリスは、義人が紅茶に手を伸ばしたのを見て

自分も紅茶に手を伸ばす。そしてティーカップに注がれた紅茶をゆっくりとした動作で飲むと、隣で紅茶と一緒に用意された焼き菓子を頬張るティーナを見て苦笑混じりに微笑んだ。

『ティーナ、お行儀が悪いですよ』

そう言いつつ、エリスはティーナの口周りを軽く拭く。その口調は責めるようなものではなく、困ったようなものだった。

『えへへ……ありがとう、お姉様』

口周りを拭かれたティーナは嬉しそうに笑い、そんな二人を見て義人も相好を崩す。

本来ならば失礼に当たるのだろうが、義人がそんなことを気にしないと知ったティーナは他所向けでない普段通りの振る舞いをしていた。

『仲が良いんですね？』

義人と同じように二人を見ていた優希が尋ねる。するとエリスは少し照れたように、控えめに微笑む。

『大事な妹……大事な家族ですから』

そんな言葉と共に微笑むエリスを見て、義人は僅かな思考に耽る。相手は本物の王族だが、家族に対する情などは普通の人間と変わらない。その辺りの感情はもっと淡白なものかと思っていた義人だったが、目の前の二人を見ていればそんなこともないように思えた。

一見すれば、普通の仲の良い姉妹に見える。

もっとも、身に纏っている服装（ドレス）からして“普通”という言葉は当

てはまりそうになかったが。
二人に対してそんな印象を抱くのと同時に、義人は今しがたエリスが言った『家族』という言葉に対して小さくため息を吐いた。

――――親父とお袋、元気かなぁ……。

無言のままに紅茶を飲み、こちらの世界へと召喚される前の生活を思い出す。
毎日学校に通う、こちらの世界に比べれば変化に乏しいながらも平和な日常。自分を産み育ててくれた両親。それらが頭の中を掠め、義人は遠い目をしながら僅かな郷愁に浸る。エリス達に元の世界に関して話したことも引き金だったのかもしれない。

「義人ちゃん？」

そんな義人の心情の変化をすぐさま察したのか、優希が心配そうな声をかけた。

「ん？　ああ、ごめん。ちょっと考え事をしてた」

優希の言葉に笑って答える義人。すると、義人と優希の会話はわからずとも雰囲気だけで察したエリスが表情を変えた。

『もしかして体調でも崩されましたか？』
『いや、それは大丈夫。ちょっと元の世界のことを思い出してて…他に何か聞きたいことはある？』

自分が崩してしまった場の雰囲気を取り繕うように、義人はエリスとティーナに尋ねる。そんな義人の問いに、エリスも場の雰囲気を変えるように新たな質問をするのだった。

夕食も終わり、窓の外では夜の帳が降りきった時刻。
寝室のベッドに腰掛けた義人は、ランプの灯りに照らされながら財務大臣のロッサからの報告書に目を通していた。本人からの報告も聞いているが、用意された報告書にも目を通しておいて損はない。
報告書に書かれている内容はロッサに一任した交渉に関してであり、実際に交渉を担当した外交官などからの報告とまとめて書かれていた。

「賠償金の金額をどうするかで話が難航している、ねぇ……」

報告としては受けるが、請求している金額が妥当なのかはわからない。そもそもこの世界は
現代とは貨幣価値が異なり、こういった事態にどれだけの賠償金を請求すればいいかも知らないのだ。その辺りの感覚はこの世界で生まれ育った人間にしかわからないため、義人が口を出すことはない。

「まあ、何かあればカグラに……ん？」

何かあればカグラに確認を取るかと義人が考えたとき、寝室の扉が軽くノックされる音が耳に届く。その音を聞いた義人は、報告書を傍の机に置いて口を開いた。

「どうかしたか？」

場所が寝室であるためにサクラを傍に置いていないが、それでも部屋の外には何人もの兵士がいる。何かあったのかと義人がノーレに手を伸ばすが、それを遮るように扉の外から声が響いた。

「レンシア国のヤナギ様がお目通りを願っていますが、どうされますか？」
「ヤナギ隊長が？」
義人は思わず首を傾げる。一体何の用があるのかと思考するが、思い当たる節がなかった。
「うーむ……悩んでもわからない、か。よし、通してくれ」
考えても埒が明かないと判断した義人は、ヤナギを通すように声をかける。すると多少の問答が部屋の外から聞こえ、それが収まると同時に扉が開いた。
『夜分に失礼いたします、ヨシト王』
そう言って入室してくるのは手ぶらのヤナギだ。その後ろに視線を向けてみれば、以前ヤナギが使っていた杖を守衛の兵士が手に持っている。預けたのか、預けるように求められたのか。義人が見かけた限りいつも身に付けている和服らしき服装に身を包み、手には何も持たず腰にも何も差していない。そのおかげというべきか、ヤナギが武器の類を持っているようには見えなかった。
ヤナギが魔法使いである以上、武器がなくても魔法があるため危険性は減っていないかもしれないが、それでも視覚的には安全に見える。もっとも、ヤナギが襲い掛かってくるようには見えなかったが。
『いきなりどうしま……どうしたんだ？』
危うく敬語が口から出そうになり、義人はすぐさま口調を切り替

える。慣れないなと内心で苦笑するが、そんな義人を前にしたヤナギは膝を突いて真剣な表情で口を開く。

『少し内密に話したいことがありまして。できれば人払いをしていただきたいのですが……』

人払いをと言われた義人は、ヤナギの後ろで妙な行動をしないか見張っている兵士達へと目を向けてからヤナギへと視線を戻す。

『いきなり人払いをと言われてもなぁ……俺は良いんだけど、周囲が納得してくれそうにないんだ』

ヤナギの行動を見張っている兵士達が当然とばかりに頷く。何せ、つい先日義人が襲われたばかりだ。それが誤解だったとはいえ、護衛する側としては目を離すわけにはいかない。もしもヤナギが凶行に及んだ際、抑えられるかどうかは別だったが。

そんな義人や周囲の兵士の様子に、ヤナギは僅かに苦笑した。

『こちらのしたことを考えれば当然のことでしたね。では、このままで』

そう言って、ヤナギは懐に右手を伸ばす。その動作に兵士が動こうとするが、ヤナギは敵意はないと言わんばかりに苦笑した。

『この場でヨシト王を害して、何の得がありますか？』

『そりゃごもっともで』

兵士が刀の柄に手をかけても動じないヤナギに、義人は苦笑を返す。そんな義人の相槌にヤナギは苦笑を引っ込めると、“何か”を握った右手を懐から引き抜いた。

『それは？』

引き抜かれた右手が握っているものを見て、義人が尋ねる。ヤナギが手に握っていたものは、どこか古さを感じさせる手紙らしきもの。材質は紙なのかわからないが、それでもかなりの年数が経過しているように感じられた。

『我が師からです』

『師？　カグラ似っていう、ヤナギ隊長の師匠のことか？　なんだ、この町にいたのか？』

差し出される手紙を受け取りつつ、義人は首を傾げる。すると、そんな義人の言葉に対してヤナギは首を横に振った。

『いいえ、これは俺が師匠の元から離れる際に受け取ったものです。おそらく出会うことがあるだろうから、渡しておくようにと』

『……いや、話が見えないんだけど』

一応手紙を受け取った義人ではあるが、表情を怪訝なものに変える。すると、ヤナギはそんな義人の反応はもっともだと言わんばかりに頷いた。

『師匠は旅の占い師でして。偶然弟子入りすることができたのですが、俺が一人前になったと判断した師匠からいくつかの予言のような助言をいただきまして……その中の一つに、この手紙がありました』

『……はぁ。占い師ねぇ』

『ええ。もっとも、占い師という名前の魔法使いでしたが』

苦笑するヤナギを見つつ、義人は手紙の封を切る。その占い師とやらが一体何の用だろうかと、手紙の封から一枚の紙を引っ張り出して目を落とし――眉を寄せた。

『なんだこれ？　見取り図？』

中から出てきたのは、どこかの部屋らしき見取り図が一枚のみ。何かの言葉が書かれているというわけでもなく、目を引くものと言えば一つだけつけられた小さな赤い丸ぐらいだろうか。灯りに透かしたりしてみるが、他には何もない。

『それと、『渡せば自分で気付くでしょ』という伝言がありましたが……』

義人の反応を見たヤナギが申し訳なさそうに告げ、義人は眉を寄せてからこめかみを軽く叩く。

『何に気付けと？』

『それはわかりません。手紙を渡して伝言を伝えるようにとだけ……』

ヤナギの言葉に、義人は再度目を落とす。どこかの部屋の見取り図らしい、一枚の手紙へと。

さすがに棚などの配置物などは書かれていないが、窓や入り口などは書かれており、壁らしき部分に赤い丸がつけてある。

義人はその赤い丸を見て、ため息を吐いた。

『……これで何に気付けと』

そう呟いた義人の声に、ヤナギは申し訳なさそうに苦笑するだけ

であった。

第九十一話：建国記念式典

レンシア国へと到着して四日目。十一月十日にあたるこの日はレンシア国の建国記念日である。

街中はもちろん、城の中でも前日に比べてどこか浮き足立つような雰囲気が漂い、朝食中でありながらもその空気を感じ取った義人は小さく苦笑した。

「なんというか、お祭りみたいだな」

手元のカップに注がれたスープを飲んでの一言に、傍で控えていたカグラが微笑みながら応答する。

「国を挙げての祭事ですから。特に、ここ数年はハクロア国との戦のせいで簡素な式典でしたし」

「ああ、そういえばそうだったっけ」

「はい。そして、ヨシト様が仰ったお祭りというのもあながち間違いではないです。城下町はもちろん、あちこちの町や村でもお祭りが開かれますから」

そう言って楽しそうに話すカグラを横目に見つつ、義人は朝食を口に運ぶ。

いつもならば朝食の際に傍に控えるのはサクラだが、今日は『一日の予定を今のうちに知っておいてほしい』という理由でカグラが傍にいる。通常ならば食事中に話すことでもないが、今日一日の予定を考えるとなるべく早いほうが良いらしかった。

「それでは本日の予定ですが……」

一枚の紙を片手に説明を始めるカグラ。義人はそれを聞きながら、昨晩ヤナギから受け取った一枚の手紙……正確には何かの見取り図のことをぼんやりと思い出す。

あの後寝るまで見取り図を眺めていたが、思い当たるものは何もなかった。

『渡せば自分で気付くでしょ』

などという伝言もあったが、今のところは謎のままである。一体何の意味があったのだろうか、と伝言の意味を理解しかねていると、それまで義人に対して一日の説明をしていたカグラが小さく眉を寄せた。

「そして夜には……ヨシト様、聞いていますか？」

いつの間にやら説明がだいぶ進んでいたらしい。話半分で聞いていた義人は、至極真面目に頷いた。

「もちろんだとも。カグラがアルフレッドのことを『おじいちゃん』って呼んだときの話だろ？」

「違いますよ！　それはわたしがまだ小さいときの話です！　どういう風に今日一日の予定を話したらそこに行き着くんですか！？」

正直に聞いていなかったと言うのも怖かったため、義人はとりあえず惚けてみる。するとキレの良いツッコミが返り、その数秒後にカグラが脱力した。

「……全然聞いていないじゃないですか」

「ごめん、ちょっと考え事をしてた」

疲れたようにため息を吐くカグラに、義人はすぐさま謝る。カグラはそんな義人の言葉に小さく首を振ると、気を取り直したように姿勢を正した。

「いいですかヨシト様。本日行われるレンシア国の式典に参加するのは、我がカーリア国だけではありません。周辺の国からも祝いの使者が到着しています。だからせめて、公の場でそのような冗談を言わないでくださいね？　きちんとカーリア国の王として振舞ってください」

カグラとしては公の場だけではなく一日中王として振舞ってほしいが、義人のことを考えるとそれは言えない。義人はカグラの言葉に苦笑しながら頷くと、細かく千切ったパンを口へと放り込む。

「わかってるって。それらしく振舞うよ」

何か特別なことをしなければいけないわけでもない。精々が祝いの品を渡すぐらいで、あとは適当に話を聞いていれば良いだろう。

この時の義人は、そんなことを考えていた。

『お初にお目にかかります。私はルクカ国の……』
『お初にお目にかかります。私はサーベス国の……』
『お初にお目にかかります。私は……』
『お初にお目に……』
「いや、ちょっと待てお前ら」

次々とかけられる挨拶の声に、義人は思わず日本語でそう呟く。

現在制服の上に王用の真紅のマントを羽織り、腰には王剣であるノーレを提げた格好の義人だったが、周囲に群がってくる他国の使者達を前に辟易とした表情を浮かべていた。

呟いた義人の言葉がわからなかったのか、声をかけてきた使者達が怪訝な顔をする。

その間に、義人は傍に控えるカグラへと目配せをした。すると、その意図を汲み取ったカグラが義人の耳元へと口を寄せる。

「本日の式典の使者として国王が参加したのはカーリア国だけのようですから、挨拶を兼ねた“品定め”かと」

カグラの言葉に、義人は挨拶をしてきた使者達の顔を見た。

『どうかなさいましたか？』

そのうちの一人が首を傾げる。友好的ですと言わんばかりの柔和な笑みと、表情とは違って探るような感情が見える目。

なるほど品定めとは上手いことを言うものだと内心で感嘆しつつ、義人も作り笑いを浮かべる。

『いえ、何でもありません。改めまして、カーリア国の王を務めているヨシト＝タキミネです。そしてこっちが……』

そこまで言って、義人は傍のカグラに目を向けた。

『ヨシト王の補佐を務めています、『召喚の巫女』のカグラと申します』

ヨシトの視線を受け、カグラが一礼する。すると、カグラのことを見ていた使者達が僅かに好色そうな色を見せた。それを見た義人

は少しばかり心が波立つものを感じたが、特に触れることなく自分を観察してくる視線を見返す。

義人が若年であることを侮っているのか、向けられる視線はどこか含んだものがある。それをなんとなくだが感じ取った義人は、顔に出さないよう注意しながら内心だけでため息を吐いた。

現在義人達がいる場所は、通常ならば謁見に使用するための部屋である。しかし、建国記念日である今日はその用途から外れ、式典を行うために様変わりをしていた。

小学校の体育館ほどの面積を誇る謁見の間は今や、嫌味にならない程度の装飾が施された華美な空間へと姿を変えている。

壁には動物らしき模様が金糸で描かれた真紅の幕がかけられており、床に敷かれるのは幕の色に揃えたのか真紅の絨毯。さらには職人が手がけて作ったらしきテーブルが運び込まれ、その上に敷かれた純白のテーブルクロスが一際目立っていた。

そして、義人達が座る場所から少し離れたところにはレンシア国の主だった文官武官が綺麗に整列している。部屋の隅には見張りの兵士も立ち、少しばかり物々しいものが感じられた。

ちなみに、カーリア国の人間としてこの場にいるのは義人とカグラだけである。部屋の外には志信や近衛隊、それにサクラが控えているが、入室は許可されていない。財務大臣のロッサを筆頭にした文官達は、レンシア国滞在中に交渉がまとまるか微妙なため、今日も交渉に当たっていた。

今のところは用意された椅子に座ってレンシアの国王であるコルテアが部屋に入ってくるのを待っている状況だが、その僅かな時間にも挨拶がてらに義人の人となりを確認しようと他国の使者が声をかけてくる。それに対してカグラがにこやかに威嚇の雰囲気を見せているが、使者達はそれで引っ込むほど細い神経をしていなかった。

カーリア国はレンシア国を挟んで反対側に位置するため、交流がほとんどない。そもそも大陸の北端に位置するカーリア国と隣接している国はほとんどなく、今回は何かしらのきっかけを探すための

挨拶なのだろう。

――――式典の前に声をかけないで、黙って椅子に座っていてくれよ……と、そういうわけにもいかないのか。

義人は内心でそんなことを呟きつつ、傍に控えるカグラと共に適当に使者達の応対をしていくのだった。

『本日は我がレンシア国の建国を記念する式典へとお越しいただき、御礼申し上げる』

義人が他国の使者に囲まれて辟易すること十分少々。

今まで目にしたものよりも華美なドレスに身を包んだレミィ、エリス、ティーナの三人を従えて入室したコルテアは、開口一番にそう口にした。それに合わせて三人の姫が一礼し、使者達が返礼するのに合わせて義人も頭を下げる。そして、さり気なくコルテアやレミィ達の様子を窺った。

レミィは青みがかった白いドレスに身を包み、エリスとティーナは純白のドレスに身を包んでいる。場の雰囲気を読んでいるのか、常日頃は活発なティーナも今は大人しく、言うなればお姫様らしくしていた。エリスは使者達の視線を受けて少しばかり顔を俯かせているが、それでも義人が初めて見たときのように気を張っているようだ。

そんなエリスと対照的とも言えるのが、長女のレミィである。胸を張り、芯が通ったようにピンと背筋を伸ばし、生来の気質を表すような真っ直ぐな瞳で使者達と視線を交わすその姿は王女というよりは女王と呼んだほうが相応しく感じられた。

もっとも、当然のことではあるがこの国の王たるコルテアの立ち

振る舞いにはまだ及ばないようではあったが。

そんな三人の姫の前に立つコルテアの服装は派手過ぎず、華美過ぎず。身に纏う服には材質の良さを窺わせる白い布地を使用し、金糸や銀糸を使って縫い上げられているものの無駄な装飾はない。その上にはビロードらしき真紅のマントを羽織り、頭には金の王冠を乗せている。

レミィ達同様、まるで御伽噺から抜け出たような服装だった。だが、現実で目の当たりにしてはそんな考えも浮かばない。その場に立っているだけで大きな存在感を放つコルテアを前に、義人は苦笑しながら頬を掻いた。

「散々“本物”だと思ったけど、ここまでくると何も言えないなぁ」

他国の使者達に向けて礼の言葉を述べるその姿を一言で表すならば、威風堂々。人の上に立ち、導いていく人間が放つ雰囲気があった。

『向こうは生まれながらに王族、お主と違うのは当たり前じゃ。それに、向こうはお主の倍は生きておるんじゃろうしな』

義人が雰囲気に呑まれていると、それを察したノーレが義人に思念通話を投げかける。それを聞いた義人は、苦笑染みた声を返した。

『そりゃそうだけどさ。あれは生まれと年齢だけじゃないだろ?』

『うむ。あとは王としての経験の差じゃな』

ノーレは義人の言葉を肯定すると、さらに言葉を続ける。

『何はともあれ、最高の手本じゃ。今のうちに少しでも立ち振る舞いを学んでおくんじゃな』

『難しいことを言ってくれるなぁ……ま、元の世界に戻っても役に立つかもしれないし、覚えておいて損はないかな？』

軽口のようにそう言う義人だったが、覚えていても役に立つかはわからない。確実に使う機会があるとすれば、この世界で、カーリア国の王として振舞うときぐらいだろう。

『元の世界で使う機会があるのか？』

『いや、どうだろう？　会社の社長とか、上に立つような人間になれば必要かもしれないけど、元の世界だと当面は必要なさそうな気が……こっちの世界で生活するのなら必要だろうけど』

『ふむ、たしかにあの振る舞いを覚えてもう少し威厳が欲しいところじゃな。最近、お主の周囲の人間の態度が崩れすぎているしのう』

周囲の人間と聞いて、義人は近衛隊の人間や魔法剣士隊の男連中の顔を思い浮かべる。

『俺としてはそっちのほうが気楽で良いんだけどな。あいつらだって、弁えるところは弁えてるしさ』

『それにしても、ちと砕けすぎておる気もするがな……』

呆れたようにノーレが呟き、そんなノーレの声に義人は苦笑を返す。

「……」

そうやって話す義人とノーレの後ろでは、カグラが無言で唇を噛み締めていた。

式典は滞りなく進み、一時間ほどで終わりを告げた。
コルテアはレンシア国の歴史に関することを簡単に話し、そこから近年のレンシア国を取り巻く環境について話す。
その中にはそろそろ孫の顔が見たいという、おそらくは場を和ませるための冗談も含まれていた。そんな父親の冗談に対して僅かに顔を赤くしたレミィによっての突っ込みが入ったりもしたが、その話しぶりは元の世界で校長などの話を聞くのが嫌いな義人でも思わず耳を傾けてしまうようなものだった。
そして話が終わって解散……とはいかず、席を立った義人はコルテアのもとへと歩み寄る。

『建国記念、おめでとうございます』

そう言って義人は、建国記念を祝うための贈呈品が書かれた目録を手渡す。目録の内容は米や海産物、それにカーリア国が元々輸出していた鉄と少量の玉鋼だ。
それに対して、差し出された目録を見たコルテアは申し訳なさそうな笑みを浮かべる。

『賠償の決定案もないこの状況では、祝いの品をいただくのは気が咎めますな』
『それはそれ、これはこれですよ。気にしないでください』
『そう言っていただけると助かります。おや？　この玉鋼というのはなんですかな？』

コモナ語で書かれた目録に目を落としていたコルテアだったが、気になるものがあったらしく義人へと疑問の声を投げた。それに対し、義人はコルテアと同じように目録へと目を落としながら口を開く。

『簡単に言えば、質の良い鉄ですよ。カーリア国で採れる鉄の質は中の上程度ですが、この玉鋼の質は今のところ上の下といったところです。それにここだけの話、もっと質が良くなる余地もあります』

ロッサに玉鋼を交渉の札にしても良いと言ったが、まだ使っていなかったらしい。そのことに義人は少しばかり頭を悩ませるが、この場で直接コルテアに言ったほうが効果的だろうと判断して内容を少しだけ話すことにした。

『ほほう……良質な鉄はいくらあっても良いが、中々手に入りにくい。新しい鉱脈でも見つけられたのですか？』

『そこは企業秘密ですね。それでも何かを言うなら、元の世界からの知識を使った産物とだけ言っておきます。後で実物を見てもらえればどんな鉄かわかると思いますが、今のところ交易品として取り扱いたいと思っています』

詳しい話は文官達に聞いてもらうとして、義人は少しでも興味を持ってもらえればと言葉を重ねる。しかし、多少話したところでこの場には相応しくない話題だと判断して切り上げることにした。

『この後の予定は、城下町で行われる祭りに出席でしたか？』

朝食中にカグラから聞かされた予定を思い出しつつ、義人は尋ねる。もちろん、祭りに出席と言っても食べて飲み歩くわけではない。

コルテアは義人の言葉に頷くと、僅かに相好を崩した。

『ここ三年は規模が小さかったため、例年よりも大きなものでしてな。護衛も万全のものにしますし、お連れの女性を連れて行かれても大丈夫ですぞ？』

お連れの女性、と聞いて義人は頬を掻く。

『あー……っと、もしかして、エリス姫かティーナ姫のどちらかに聞きました？』

やはりきちんとした紹介をするべきだろうかと義人は思案するが、そんな義人の思考を遮るようにコルテアが頷く。

『お二人の関係が羨ましいと、エリスが言っておりましてな』

『……エリス姫が何を言ったのか非常に気になるところですが、幼馴染みですから。まだそういう関係ではないです』

どこか誤魔化すように告げる義人と、そんな義人を見て何やら頷くコルテア。すると、そんなコルテアの元に一人の兵士が駆け寄って一礼する。そして耳元で何事かを囁くと、コルテアは義人に目を向けた。

『護衛の準備が整ったとの報告が来ました。それでは、移動するとしますかな？』

そう言って移動を提案してくるコルテアの言葉を聞くと、義人は近衛隊から適当に一人呼ぶ。

せっかく違う国にきたのだからと自分に言い聞かせ、義人は近衛兵に優希への伝言を頼むのだった。

第九十二話：城下の祭り

元の世界とこちらの世界を比較し、魔法などを除いて元の世界よりも優れたものを挙げるとすればそれは人の活気だろう。用意された馬車に揺られつつ、義人はそんなことをふと考えた。

優れたと言うのは語弊があるかもしれないが、地面に立つよりも高い視点から見渡せばそれが否応なく理解できる。

本日は建国を記念する祭日。城下町のあちこちで出店が立ち並び、建国を祝う声がそこかしこから響く。

まだ昼も過ぎたばかりだというのに、酔っ払って顔を赤らめた人間も見受けられた。だが、今日という日を祝って楽しく美味い酒が飲めたのだろう、その顔は酔っていることを差し引いても喜びで緩んでいる。

普段はない出店で買い物をする者。楽しげに談笑する者。杯を酌み交わす者。先頭を進む馬車に乗ったコルテア達に祝いの言葉を投げかける者。多くの人間が、実に様々な形で今日を祝っていた。

「すごい賑わいだね？」

住民の声が響く中で、そんな言葉が義人の耳に届く。それを聞いた義人は、自身の隣に座る優希へと視線を向けて肩を竦めた。

「まったくだよ。元の世界じゃ、建国記念の日なんて祝日だから学校がなくてラッキーってぐらいにしか考えてなかった」

ちなみに日本での建国記念の日は二月十一日であり、『建国をしのび、国を愛する心を養う』という規定もある。もっとも、義人は建国をしのんで国を愛する心を養ったことはなかったが。

そこまで考えてから小さくため息を吐くと、義人は優希に向けた

視線を周囲に向けた。
　現在乗っている馬車はレンシア国が用意したものではあるが、馬に乗っている御者（ぎょしゃ）は元騎馬隊出身の近衛兵である。馬車の周囲には志信が指揮をする近衛隊と、どこか不機嫌そうなカグラが護衛として追従していた。さらにその周囲ではレンシア国からの護衛兵が周囲を警戒している。
　住民達に不安を与えないための配慮か、それとも祭りに物騒な物を持ち込むのは無粋だとでもいうのか。護衛についている兵士達はほとんど武装をしているようには見えない。しかし護衛についている兵士のほとんどが魔法を使えるらしく、素手でも十分以上の抑止力になるだろう。その上服のあちこちが妙な形に膨らんでおり、素手に見えるのは外見だけのようだった。
　もっとも、国を挙げての祭事とはいえコルテア達に油断はない。
　現在は小康状態に落ち着いた隣国ハクロアとの戦況だが、まだ戦争自体が終わったわけではないのだ。そのため、今日のような祝いの日でも国中の兵士に警戒を促している。他国の使者が集まっている場所に攻め込むことはないだろうが、万が一ということもあった。
　そうやって義人が周囲を観察しているうちにも馬車は進み、大きな広場へと到着する。王都ハサラの中央に位置するその広場は、大通りや他の通りとも繋がる巨大な交差点でもあった。円形に造られた広場では、他の場所と同じように出店が立ち並んでいる。
「んー……カーリア国の建国記念日でもこんなことをするんだろうか？」
　カーリア国の建国記念日は五月八日のためまだまだ先だが、ここまで賑わうのならば大々的に行うのも良いかと義人は頭の隅で思考してから頭を振った。
「来年のことを言うと鬼に笑われるか。って、この世界なら鬼とか

もいたりして」

そう言って小さく笑う義人だったが、その言葉が聞こえたのかカグラが不思議そうな顔をして近寄ってくる。

「来年のことを言うと鬼が笑うんですか……それが本当なら、鬼と遭遇した際に隙を見つけるための有効な手段かもしれませんね」

不思議そうにしながらも真面目に答える辺り、本当に鬼がいるらしい。義人は頬を掻きつつ、口を開く。

「この世界には鬼もいるのか？」

「いますよ。鬼と、鬼に似た種族でオーガという魔物がいます。カーリア国で見かけたという報告例はほとんどありませんが、大陸の中央から南側にかけて多く生息しているみたいです。わたし自身は遭遇したことありませんが、かなり危険な魔物らしいです」

そこまで言うと、カグラは小さく首を傾げる。

「でも、鬼はともかくオーガは人語を解するだけの知能はないと思うので、来年のことはおろか話しかけても答えられないと思いますが」

「いや、そこまで真面目に答えられても逆に困るんだけど……今のは俺達がいた世界での諺（ことわざ）だよ。あまり気にしないでくれ」

「はぁ……そうですか」

義人に言われ、カグラは少しばかり不思議そうにしながら引き下がる。『来年のことを言うと笑う……機会があれば試してみましょうか』などという呟きが聞こえたが、義人は聞こえない振りをして視線を前へと向けた。先程から、どうにも気になることがあったの

である。
先を進む馬車はコルテアが乗るものとレミィ達王女が乗るものの二台に別れているが、レミィ達が乗っている馬車の様子がおかしい。先程から時折兵士が馬車へと駆け寄っては何かを手渡し、馬車から離れてはまた何かを持ってくるという行動を繰り返している。
少しばかり距離が離れているため目視では確認し辛く、義人が目を細めていると隣の優希が声を上げた。

「出店で売っている物を持ってきてるんじゃないかな？」
「……なるほど。それなら頼んでるのはティーナ姫だろうな」

まだまだ短い付き合いだが、義人はティーナの行動を読んでそう呟く。前の馬車を追い越せば、きっと笑顔で出店の料理を頬張るティーナの姿が見れるだろう。
普段は食べられないようなものが出店で並んでいるのだ。活発な性格を考えれば自分の足で出店に向かいたいのだろうが、さすがにそうはいかない。そのため兵士に頼んで買ってきてもらっている……と、義人は予想した。
そんな義人の予想は正鵠を射ていたが、そこに含まれた意図まで読むことはできていない。
ティーナの行動自体は本人の意思だが、それに付随する影響を踏まえて許可をしたのはレミィである。
本来ならば王女たる人間がと却下するところだが、本日は祝いの日。身分に関係なく国の誕生日を祝う心があり、王族や臣民などの区別はない。
そして、城下町の住人に親しみを抱かせるにはティーナがうってつけの人物だった。馬車に乗っていれば目立つ上、乗っているのは国の王族である。一般の人間にとっては本来遠望するのが関の山だが、出店の料理を笑顔で頬張るティーナとそれを微笑ましげに見るレミィとエリスという絵は、見た者に十分以上に親しみを抱かせた。

それに、姉として妹のわがままを叶えたいという思いもある。後々、城から抜け出して買いに行かれても困るという思いもあったが。

『はぁ……』

素で微笑んでいるエリスと違い、打算があって微笑む自分に内心少しばかり嫌気が差すレミィだった。

「うん、こりゃ美味い。ほら、優希も食べてみろよ。この鶏肉っぽいの、美味しいぞ？」

そんなティーナの行動を見た義人は、すぐさま同じ行動に出た。もっとも、義人の場合はレミィのように何か打算や意図があったわけではなく、そろそろ腹の虫が鳴き声を上げそうだったからである。

串に刺した鶏肉らしき肉にタレをつけて焼いたものを口に運び、義人は満足そうに頷く。

「いやいや、この世界に来て初めてやきとりを食べれたよ」

何の肉なのかは深く考えないようにしつつ、そんな言葉を口にする。カーリア国での食事は出されるものを食べるのが基本だったため、今度からはもっと料理のリクエストをするかと義人は密かに決意した。

「あ、美味しい。でも、何のお肉だろ？」

義人と同じようにやきとりらしきものを食べた優希が首を傾げる。

「魔物だったりしてな。それなら一羽あたりかなりの肉が手に入るだろうし」

元の世界と違い、この世界では一メートルを超える鳥型の魔物があちこちに生息する。もしもそれで味が良ければ、食糧危機の際には非常に役立ちそうだ。

「え？　これって魔物のお肉じゃないの？」

そんな風に考えていた義人に、優希が不思議そうな声をかける。幼馴染みの思わぬ発言に、義人は数秒硬直した後に真顔で尋ねた。

「マジで？」

「うん。前に城の調理場で見たことあるよ。羽はむしってあったけど、一メートルくらいの大きさだったから多分魔物じゃないかなって……魔物も、食べられるなら家畜と同じ扱いなんじゃないかな？　同じ生き物なんだし」

「……これ、魔物の肉か」

手に持った串に刺さる、何かの肉を見てポツリと呟く。

確定したわけではないが、義人としては鶏肉と言われると最初に鶏（にわとり）を思い浮かべてしまう。もちろん元の世界では間違っていないが、この世界でも同じと考えるのは間違っている。

そして、それ以上に優希の言葉の中にあった『同じ生き物なんだし』という言葉が義人の中で引っかかった。

当然のことではあるが、魔物も生き物である。人に害を及ぼす魔物もいるが、中には知性を持って人と打ち解けることができる魔物もいる。そして中には、人間の食料になる魔物もいるのだ。義人は僅かに眉を寄せると、小さくため息を吐いた。

「そのあたりのこと、考えてなかったなぁ……」

身近な存在としてはエルフで宰相のアルフレッド。カーリア国の城下町にはドワーフで鍛冶師のローガスを筆頭に、探せば他にも魔物が存在している。知性もなく人を襲うだけの魔物は別として、知性と長い寿命を持つ魔物はある意味最高の“人材”と言えた。

「“やっぱり”使える魔物は使いたいな。カーリア国に帰ったら、アルフレッドに相談してみるか？」

肉が刺さった串を片手に考え込む義人。すると、そんな義人の様子をどう思ったのかカグラが声をかける。

「ヨシト様、どうかされましたか？　毒見は行ったはずですが……」
「いや、毒だったらそんな余裕ないって。ちょっと考え事をしてただけだよ」
「では、口に合いませんでしたか？　城に戻れば食事は取れますし、夜になれば舞踏会もありますから、それまでは我慢していただくしか……」
「そんなに食い意地張ってないよ。って、ちょっと待ったカグラ。今何か、変な言葉が聞こえた気がするんだけど」

味の良し悪しは重大な要素だが、美食家というわけでもない。しかし、義人にとってはそれよりも気になる言葉があった。

「変な言葉ですか？」

どこか慌てた様子の義人に首を傾げ、カグラは鸚鵡(おうむ)返しに尋ねる。

「ああ。聞き間違いでなければ、夜になれば舞踏会があるとか聞こえたんだけど」
「朝のうちにそう説明したはずですが？」
「……」

無言で、義人は視線を外す。
記憶を掘り返してみると、たしかに今日一日の行動予定について説明を受けた……気がする。ただ、考え事をしていてほとんど覚えていなかったが。

「舞踏会って踊るんだよな？」
「舞踏会ですから。もちろん踊りますね」
「燕尾服でも着て踊るのか？」
「女性はイブニングドレスですね」
「俺も、踊るのか？」

どこか諦めたように、義人は尋ねる。そんな義人を見て、カグラは恐る恐る尋ねた。

「あの、踊れます……よね？」

質問に対して、義人は無言で首を横に振る。コモナ語は教わったが、踊り方を教わった覚えはない。

「……城に戻ったら練習しよう。夜までに少しでも形にするから」

先のことを考えるよりも、すぐ目の前に迫ったことを考えよう。
そう判断した義人は、夜になるまで社交ダンスの練習をしようと決意するのだった。

第九十三話：舞踏会

日が沈み、夜の帳が降りる時刻。城下町では未だ祭りの熱が冷めないらしく、城内にいても届く喧騒を耳にしながら義人は小さくため息を吐いた。

「窮屈だ……でも今回は制服ってわけにもいかないしなぁ……」

そう呟き、義人は自分の服装を見下ろす。

黒のスラックスに黒の背広。中には白のワイシャツを着込み、首元には白い蝶ネクタイという元の世界では着たことのないものだった。

背広は背中側の裾が燕（つばめ）の尾のように長く、燕尾服（えんびふく）と呼ばれる男性が夜に着る最上級正礼装である。

義人としては畏まった窮屈な服を着るのが嫌だったのだが、さすがに舞踏会に制服で参加するわけにもいかず、今回義人達と共にレンシアへついてきた商人のゴルゾーに急遽用意してもらった一着だった。もっとも、一から仕立てる時間がなかったために既存のものから一番義人に合うサイズのものを持ってきてもらっただけではあるのだが。

「申し訳ありません、ヨシト様。わたしが失念していたばかりに……」

そんな義人の横では、カグラが謝罪と共にしきりに頭を下げていた。

今回の建国記念式典に参加するにあたり、責任者は国王である義人である。しかしそれは形式上の話で、実際に他の人間の指揮を取ったり予定を立てるのはカグラの仕事だった。カグラは義人の補佐

という立場ではあるが、現状の義人では実務全般をこなせるはずもない。そのため義人はカグラに一任していたのだが、一番の課題であるコモナ語の習得に気を取られすぎたようだった。

「アルフレッド様に任されておきながらこの体(てい)たらく……自分が情けなくなります」

そう言ってさらに落ち込むカグラを見て、義人は苦笑する。

「まあまあ、アルフレッドも言ってただろ？　何事も経験だって。一度失敗したら次から失敗しないようにすれば良いってだけさ」

義人としては、同い年の少女が政務から軍務までの幅広い仕事をそつなくこなせている時点で十分だろうと思ったが、そんな義人の思考を読んだかのようにカグラは首を横に振った。

「コルテア王をはじめ、他国の使者達がいる場で何か失礼があっては我が国の評価に関わります。ヨシト様、今回の件に関しての罰は……」

「罰？　いや、俺が上手くやれればいいんだろ？　まだ駄目だったわけでもないしさ」

舞踏会で踊る社交ダンスについては、午後からの練習で体に叩き込んでいる。ダンスなど学校行事で踊ったフォークダンスが精々だったが、なんとか見られる形にはできるだろうというのが義人の予想だった。

そんな義人を見たカグラは、内心でため息を吐きながら口を開く。

「……わかりました。では、“それ”に関してはアルフレッド様にお頼みします。まことに申し訳ありませんでした」

深々と一礼するカグラ。義人は頬を掻くと、それを宥めるように言葉を紡ぐ。

「カグラもコモナ語を教えるので精一杯だったんだろ？　教えてもらったのは俺だし、このくらいの問題ならなんとかするさ。というわけで、一つ優雅に踊ってきますか」

義人が冗談めかしてそう言うと、カグラも少しだけ表情を和らげる。

「よろしくお願いします。護衛にはシノブ様とミーファがつきますので」

「それはいいけど、カグラはどうするんだ？」

「わたしも着替えてから向かいます。さすがにこの格好で踊るわけにもいきませんから」

その言葉を聞いた義人は、ドレスを着た女性達が踊る中で一人巫女服姿で踊るカグラを想像して納得したように頷いた。

「そりゃごもっともで。待っておいたほうが良いか？」

「いえ、そろそろ時間ですから先に行かれてください」

「わかった。それじゃまた後で」

軽く手を振り、身に纏った燕尾服の仰々しさに辟易しながら義人は歩き出す。

そんな義人を見送ると、カグラは一つため息を吐いてから背を向けるのだった。

舞踏会とは西洋における正式なダンスパーティーである。

17世紀から18世紀にかけてヨーロッパ諸国の宮廷で典礼、儀式などの機会に宮廷舞踏会として開催された歴史があり、こうした場でのダンスは社交界に必須のものとしてイギリスで社交ダンスとして大成された。

しかしながら義人は日本の人間であり、いくら日本という国が国際色豊かだとしても、一般の高校生が社交ダンスを行う機会などあるはずもない。もちろん、学校で学ぶ機会もない。

義人は自分と似たような服装で傍に控える志信に視線を向けると、気を紛らわせるように口を開く。

「志信って和装も似合うけど、洋装も似合うよなー」

「む、そうか？　義人のほうが似合って見えるが」

そう言って僅かに首を傾げる志信に、義人は苦笑してみせた。特に意味がある会話ではなかったが、喋っていれば気も紛れる。そして少しばかり親友との会話で心を落ち着けると、周囲を見回して僅かにため息を吐いた。

「カグラにはああ言ったけど、今になって緊張が……」

周囲にいるのは燕尾服を身に纏う男性とイブニングドレスを身に纏う女性ばかりで、外見は外国人そのもの。金髪を筆頭に様々な髪の色をしており、黒髪など数えるほどしかいない。

「ヨシト王、そろそろ演奏が始まりますが準備はよろしいですか？」

そうやって義人が周囲を見回していると、黒のイブニングドレスに身を包んだミーファが傍に歩み寄ってくる。

イブニングドレスは胸元や背中が大きく露出するように作られており、服の丈は婦人服の中では最も長い。ミーファの場合は裾の長さが足元までであり、いつもとは違うタイプの服装を見て義人は思わず感嘆したような声を漏らす。

「なんというか、印象が変わるなぁ。お姫様みたいだ」

公私の公の部分では凛とした雰囲気があるミーファだったが、イブニングドレスに包まれ、いつも後ろでまとめている艶のある赤い髪をまっすぐに下ろしたその姿はどことなく健康的な色気を感じさせる。

「は、ありがとうございます」

義人の賛辞に微笑んで答えるミーファだが、その視線が僅かに横へと揺らぐ。視線の先には志信がいるが、それを見て取った義人は咳払いと共に軽く志信のわき腹を肘で突いた。

「ほら、志信も何か感想を言ってあげろよ」

「俺もか？　そうだな……ふむ」

義人にわき腹を突かれた志信は、ミーファを頭の天辺から爪先まで見下ろす。観察するような視線にミーファは恥ずかしげな顔をするが、志信は特に気にせず至極真面目に頷いた。

「その服装は護衛に向かないのではないか？」

「違うだろ！？」

スパーン、と義人のツッコミが志信の頭に炸裂する。炸裂と言っても、手拭き用に置かれた紙を束ねて叩いただけではあるが。

「……違うのか？」

叩かれた本人（しのぶ）は、どこか不思議そうな顔で首を傾げる。

「不思議そうな顔をするなよ！？　護衛の観点は捨てて、もっと違うことを言うべきだろここは！？」

「そうか」

義人の言葉に納得したのか、志信は再度ミーファへと視線を向けた。そしてどことなく緊張が漂うミーファの顔を見据え、一言。

「――――綺麗だ」

直球だった。言葉を飾らない、ど真ん中の直球だった。いや、志信という人間を知っていればある意味変化球だったのかもしれない。少なくとも、義人にとっては並の変化球どころか消える魔球のように驚愕する変化球だった。

「あ、ありがとう、シノブ……嬉しい」

対して、ミーファにとっては直球だったらしい。恥ずかしげに、それでいて嬉しげに頬を染めるその姿は日頃の訓練で見せる猛々しさはなかった。先程義人が口にした、お姫様という言葉が相応しく見える。

「あー……うん。そろそろ演奏始まりそうだし、俺は向こうのほうに行ってくるわ」

じゃあ、と右手を振り、すぐさまその場から離脱を図る義人。小

声で告げたためか、志信もミーファもそれに答えることはない。そそくさとその場を離れ、ある程度距離を取ってから口を開いた。

「いや、ある意味この世界に召喚された時よりも驚いたな」

考え直せばある意味志信らしいとも言える言葉だった。あまりに飾らないその一言に、義人は内心で尊敬の声を上げる。

「さすがは志信。せっかくの機会だし、こっちは誰か適当に護衛を任せて踊っていればいいか……」

馬に蹴られるのは勘弁とばかりに離れる義人だったが、途中である人物が目に入りそちらへと足を向けた。

「おーい……いや、やっぱりいいわ」

いつも被っている三角帽子がないが、この場では数少ない黒髪を背中まで伸ばしたその少女を見て、さらにその少女が見ている視線の先を確認して義人は回れ右をする。

「すまん、志信。俺には手に負えない」

それだけを呟くと、義人は再びその場から離れるのであった。

それから五分ほど経ち、義人に比べて十分以上に燕尾服を着こなしているコルテアの合図で手に楽器を持った人間が部屋へと入ってくる。それを見た義人は軽く深呼吸をしながら、いよいよ開始かと自分を落ち着かせた。すると、視界の端に淡い色合いの金髪が見え

て何気なくそちらへと目を向ける。

「おお……」

そして、思わず感嘆の声を漏らした。そんな義人の声が聞こえたのか、淡い金髪の持ち主が義人の傍へと歩み寄ってくる。

『これはヨシト様。良い夜ですね』

そう言って微笑みながら軽く一礼をするのは、レンシア国の第一王女であるレミィだった。ミーファをお姫様みたいだと評した義人ではあるが、今度は本物のお姫様である。

ミーファ同様に黒いイブニングドレスを身に纏っているが、こちらはミーファに比べて着慣れているのかその挙措は自然体そのものだ。それでいて、義人が今まで見ていたドレスとは違って露出が多めのイブニングドレスを身に纏うその姿には、どことない艶やかさが漂っている。

『こんばんは、レミィ姫。いやぁ、お綺麗ですね』

志信の真似をして直球に言ってみるが、そういった類の言葉には慣れているのかレミィは僅かに微笑を深くするだけだ。

『ありがとうございます。お世辞でも嬉しいですわ』

『いやいや、九割がた本気ですよ』

心外だと言わんばかりの義人だったが、そんな義人の言葉を聞いたレミィは口元に手を当てて悪戯っぽくと笑う。

『あら、残り一割は何ですの？』

『緊張です。ここまでの美人に一曲申し込まなくてはいけないっていう緊張のせいで、少しばかり心の余裕がなくて』
『本当にお上手ですこと。でも、一割しか緊張していただけないのかしら？』

恥ずかしいことを口にしている自覚はあったが、それも場の勢いと割り切って義人は右手を差し出す。

『それだけ見惚れてしまったということですよ……では、一曲踊ってもらっても？』
『ええ、喜んで』

差し出された義人の右手を見て、レミィも右手を差し出す。するとそれを見計らったように
音楽の演奏が始まり、義人は小さく苦笑してレミィの腕を引く。
社交ダンスでは楽曲に合わせて自由に、男性が考えた動きを女性に伝えながら踊る。つまりは義人がリードする必要があるのだが、レミィは義人が付け焼刃であることを見抜いているのか義人の拙いリードでもきちんと合わせていく。

『ふふふ、中々お上手ですよ？』
『それはどうも。必死に覚えた甲斐があるってものですね』

義人もレミィが自分の腕前に合わせて踊ってくれていることに気付いているが、そう答えることしかできない。
最初の一曲だからか、ややゆっくりとしたテンポの曲に合わせて義人はステップを踏んでいく。時折立ち位置を変えつつ、くるりくるりと回りながら。慣れない社交ダンスに苦慮しながらも、踊りながら覚えるようにレミィと踊る。
そうすること三分弱。義人にとってはその倍近い時間が経過した

ように感じられたが、それでもなんとか一曲踊りきってレミィに軽く一礼した。それに対して、レミィも微笑んで応える。

義人は軽く息をつくと、次の曲が始まるまでに次の相手を見つけるために周囲へと目を向けた。そして、先程と同じように淡い金髪が視界に映ってそちらへと足を進める。すると相手も義人に気付いたらしく、義人のほうへと近寄ってきた。

『ヨシト様こんばんはっ！』

そして元気良く挨拶をするのはティーナである。踊るのが好きなのか、それとも動くことが好きなのか、やけにご機嫌だった。

『こんばんは。可愛いドレスだね。似合ってるよ』

そんなティーナに対して、義人はまず褒めることから始める。もっとも、別段お世辞というわけでもなく思ったことをそのまま口にしただけではあるが。

『えへへ……ありがとうございます』

義人の言葉を聞いたティーナは恥ずかしそうにしながらも、同時に嬉しさが覗く笑顔を浮かべる。

イブニングドレスのおかげかいつもより大人びた印象を受ける義人だったが、どちらかというと背伸びする微笑ましさに近いものを感じていた。

義人はそのことに小さく笑いつつ、右手を差し出す。

『良ければ一曲踊ってくれないかな？』

リードするどころか逆に元気良くリードされそうだったが、それでも構わない。そんなことを考える義人だったが、ティーナは差し出された右手を少しばかり不思議そうに眺めた後に、満面の笑顔で頷く。

『喜んでっ！』

そう言って右手を重ねるティーナに対して、義人は小さいその手を軽く握って引くことで応えた。

ティーナと踊ること三分少々。その間に足を踏まれること四回。義人のリードに合わせて元気良くステップを踏むティーナだったが、いささか元気が良すぎたらしい。

『ごめんなさい……大丈夫ですか？』

足を踏んだことを気にしているのか、踊り終わったティーナが心配そうな表情を浮かべる。

『大丈夫大丈夫。ティーナちゃんは小柄だから、足を踏まれても痛くないよ』

小柄で体重の軽いティーナに足を踏まれてもそこまでの痛みはない。そのため義人は気にしないように言うのだが、ティーナは義人の言葉を聞くなり小さく視線を逸らした。

『……やっぱり、背がちっちゃいと駄目なのかなぁ』

『え？』

ティーナの言葉が何を指しているのかわからず、義人は首を傾げる。

『あ、いえ！　何でもないです！　ちょっと考え事をしちゃって！』

『何もないならいいけど……じゃあ、そろそろ次の曲が始まりそうだから次に踊る人を探そうか？』

『はい！　ありがとうございました！』

そう言って頭を下げるティーナにお互い様だと答え、義人は周囲に目を向けた。だが、今度は声をかけられそうな女性が中々見つからない。

『あの……』

すでに大半の人が次に踊る相手を見つけており、自身の近くには手が空いている女性の姿は見られなかった。そのため次の曲は踊らずに休憩するかと考えた義人だったが、上着の袖口を軽く引かれる感触に気付いてそちらへと目を向ける。

『あの……』

『ん？　って、エリス姫！？』

振り返った先で所在無さげに立っていたのはエリス。姉妹で揃えたのか、サイズは違うがレミィやティーナと同じ意匠の黒いイブニングドレスを身に纏っている。しかしそこにはレミィともティーナとも違う、エリス独特の雰囲気が見て取れた。

一言でまとめるならば清楚という言葉が最も合うだろう。しかし、清楚でありながらどこか引き寄せられる、無意識の妖しさも同居している。

義人はそれに惹かれないよう気を張りつつ、視線を落とした。
エリスは左手で自分のドレスを握り締め、右手で義人の上着の袖口を引いている。その動作から声をかけられて自分が気付かなかったのだと判断し、義人は慌てて向き直って頭を下げる。

『周りを見ることに集中してました。申し訳ない』
『……いえ、ティーナと踊っているのが見えてお声がけしたのですが……』

そうやって口にしたエリスの声も、周囲の音に飲み込まれていく。
義人は苦笑すると、少しばかりエリスのほうへと身を寄せた。

『エリス姫はこういった場は苦手なんですか？』
『に、苦手というわけでは……その、少しだけですよ？』

エリスは否定しようとしつつ、すぐに認める。それを聞いた義人は、最初に抱いた印象を修正しながらエリスへ笑いかけた。

『そうなんですか。俺も苦手というか、こういう場はほとんど経験がないから緊張してしまって』

本当は踊るうちに緊張が解けていたが、それでもエリスの話に合わせる義人。するとエリスは驚いたように義人を見る。

『そうなんですか？　緊張していらっしゃるようには見えませんでしたけど……』
『見えないよう、頑張っているだけですよ』

内心でエリスに正解の賛辞を送りつつ、それでいて義人はそれを表に出すことはしない。そんな義人の言葉に納得したのか、エリス

は小さく頷いた。

『そ、そうですね。わたしももっと頑張らなくては……』

胸元に手を引き寄せ、自分に活を入れるように握り締める。無意識であろうその動作に義人は少しばかり目を奪われ、軽く首を振った。

「やばい、これがお姫様の魅力ってやつか」

『え？』

突然の日本語で意味がわからなかったのか、エリスは首を傾げる。そんなエリスに苦笑を向けつつ、義人は首をゆっくりと横に振った。

『少々見惚れていました。それだけです』

『そうですか……え？』

レミィ同様お世辞ではなく、限りなく本心に近い言葉。こんな場でなければ絶対に言わない、後で言ったことを後悔すること間違いなしの言葉だった。

『あ、その……えと……ありがとう、ございます』

レミィとは違って褒め言葉に慣れていないのか、エリスは身を小さくして頭を下げる。頬が赤く染まっているところを見る限り、余程慣れていないのだろう。そう考えた義人は、エリスの気を解(ほぐ)すために腰を折って一礼しながら笑いかけた。

『それではお姫様、わたくしめと一曲踊ってもらえませんか？』

義人は一礼と共に右手を差し出して、おどけたように誘いの言葉をかける。それを聞いたエリスはどこか落ち着かないように視線を数回動かした後で小さく、それでいてしっかりと頷いた。

『……はい』

左手でドレスの裾を握り締め、それでも右手を差し出してくるエリスに義人は破顔する。

そして流れ出すスローテンポな曲に合わせ、義人はエリスの腕を引くのだった。

第九十三話：舞踏会（後書き）

どうも、作者の池崎数也です。
いつの間にやら『異世界の王様』の連載を始めて一年が経過していました。早いものだと思いつつの更新です。
この物語を連載し始めた頃の予想では一年ぐらいで書き終わるかと思っていたんですが……予想以上に伸びています。
今回のあとがきでは、一年の経過を機に前々から気になっていた部分を修正したことについて報告したいと思います。

〇修正部分
魔法の『ブースト』を『強化』という名前に変更しました。友人から「なんで魔法の中で『ブースト』だけ横文字なのか」というツッコミを受け、作者も密かにそう思っていたのでこの度修正しました。
あくまで呼び名に対するこだわりで、物語自体に何かしらの影響があるわけではありません。これからはシンプルに『強化』でいきたいと思います。

三章を残り三話～五話くらいで書き上げ、そろそろ四章へと移りたいですね。
それでは、こんな拙作ではありますが今後ともお付き合いいただければ幸いです。

第九十四話：共に踊りて

相手を変えながら踊ること三十分少々。さすがに疲れを感じた義人は、軽く休憩を取るべく壁際に置かれたテーブルの元へと移動する。

「あー疲れた疲れた」

そう言って義人は額に浮いた汗を軽く拭い、傍のテーブルに置かれていたグラスを手に取ってビンに入った水らしき液体を注ぐ。

そして特に気にすることなく一息にグラスを傾け、

「ぶっ！？」

思わぬ味に、吹き出した。

「な、なんだこりゃ？　日本酒か？」

口周りについた酒らしき液体を拭いつつ、首を傾げる。元の世界でもほとんど口にしたことはないが、その独特の味わいを間違えるはずもなかった。

「くそ、一息に飲もうとするんじゃなかった……って、匂いで気付けよ俺」

喉が渇いたところで飲んだせいか、やけに味が残っているように感じる。義人は水差しを手に取ると、今度こそはと水を口にした。

『お口に合いませんでしたか？』

そうやって義人が日本酒らしき酒の味を忘れようとしていると、不意に声をかけられる。それを聞いた義人は声の主へと顔を向け、小さく苦笑した。

『ヤナギ隊長か……一応知っている味だったけど、喉が渇いているところだったから飲みきれなかったよ。これ、どこの酒？』

声をかけてきたヤナギはいつもの服装と違う、義人と似たような燕尾服を窮屈そうに着こなしながら日本酒らしき酒が入ったビンを手に取る。

『それは故郷ジパングの酒でして。米を使って作ったものなんです。商人に頼んで取り寄せたのですよ』

『へぇ、ジパングの酒かぁ。ジパングってここから遠いんだっけ？』

そう言いつつ、義人はもう一口水を飲む。休憩がてらの雑談だったが、ヤナギはそれに付き合ってくれるらしく僅かに遠い目をした。

『そうですね……レンシア国から出立するなら、徒歩で二月（ふたつき）と船旅が一週間といったところでしょうか。『強化』が使える人間ならば二週間ほどで大陸の東まで行けるかとは思いますが』

『そこから船に乗り換えかー。ジパングって島国なんだよな？』

『はい。四つの島々から成り立っている国です』

『ほうほう。沖縄とかはないのかな？』

『オキナワ？』

『いや、こっちの話』

音楽に合わせて踊り続けている人々を眺めつつ、義人は水を口にする。ヤナギはそんな義人の視線を追って踊る人々に目を向け、僅

かに破顔した。

『踊り疲れましたか？』

『少しだけ。踊り慣れなくて……と、あれ？　あそこで踊ってるのってカール隊長？』

何気なく見ていた中にカールの顔を見つけ、義人は少し目を細める。そんな義人の横で同じようにカールの姿を確認したヤナギは、苦笑しながら頷いた。

『カールですね。立場は護衛ですが、おそらくティーナ様に捕まったのかと』

『本当だ。引っ張られてるな』

ヤナギの言葉通り、ティーナに腕を引かれて踊るカールの姿に義人は僅かに首を傾げた。

『俺が言うのもなんだけど、ああいうのって大丈夫なのか？』

『大丈夫とは？』

『ほら、王女とその臣下が踊るってことさ』

立場的にどうなのだろうかと質問する義人に、ヤナギは再度苦笑を浮かべる。

『カールがティーナ様に引っ張られるのはいつものことでして』

『……ふうん。色々と大変なんだな』

『ティーナ様は楽しそうですが』

義人の言葉に苦笑を笑みに変え、ヤナギは手に持った日本酒らしき酒が入ったビンを傍に置く。そんなヤナギの動作を見て、義人は

誰も使っていないグラスを手に取った。

『飲むならグラスがあるけど？』

『いえ、自分も護衛の身ですから』

『こういう場なら別に良い気もするけど……お、カール隊長の踊る相手が変わった。今度はレミィ姫か。ティーナちゃんはともかく、今度はどうなんだろう？』

手に取ったグラスを元の位置に戻しつつ、ヤナギへと尋ねる義人。ヤナギはその問いに対して、軽く首肯した。

『大丈夫ですよ。なにせ、姫様からの誘いを無碍に断る方が問題ですから』

『それもそうか。それじゃあ、俺も戻って踊る相手を見つけるかな。雑談の相手をしてくれてありがとう、ヤナギ隊長』

少しは疲労も取れたし、乾いた喉も潤っている。義人はそんな言葉と共に一歩前へと踏み出し、それを見たヤナギは悪戯っぽく笑った。

『次に踊る相手は、すでに誘われるのをお待ちのようですが？』

『え？』

そう言って後ろへと下がるヤナギに、義人は疑問の表情を浮かべる。

「――――ヨシト様」

それとほぼ同時、自分に対してかけられた声。

義人は聞き覚えのあるその声に振り向き……思わず動きを止めた。

「あ……」

意識せず、口から呟きがこぼれ落ちる。

振り向いた先。こちらの世界へと召喚されて以来見慣れた服装の少女を反射的に探そうとして、無意識の内に覚えた違和感が義人の動きを止めた。

「カ、グラ？」

呼ばれた声と、その顔。そして腰まで届く絹のような黒の長髪を留める、落ち着いた色合いの髪飾りには見覚えがある。何せ、それは義人自身が送ったものだから。だが、いつもと違う服で着飾るその姿には見覚えがなかった。

それは常日頃来ていた紅白の巫女服ではなく、漆黒のイブニングドレス。

ミーファが着ていたものに比べればやや露出が少ないものの、紅白の巫女服に比べれば遥かに多い。

義人の視線を受けたカグラは、どこか落ち着かない様子で僅かに頬を赤く染め、目を逸らした。

「ど、どこかおかしいでしょうか？」

ドレスの裾を握り締めながら尋ねるカグラ。義人はその問いを聞いて、つい先日にカグラから聞いた言葉を思い出す。

『その……たまには、違う服にしたほうが良いのでしょうか？』

そんな言葉が頭に浮かび、義人は感嘆とした思いを乗せて口を開いた。

「その結果がこれか……驚いたな」

見慣れた服装とは違うだけで、大きく印象が変わる。その上ところどころ見える白い肌が少し眩しく見え、義人は少しだけ目を逸らした。

「あの……やはり似合いませんか？」

目を逸らした義人をどう見たのか、カグラは不安が滲む声で尋ねる。義人はその声を耳にして、すぐに首を横に振った。

「いや、そうじゃなくて！　驚いたというかビックリしたというか！」

意味は同じである。そのことに気付けないくらい混乱した義人は、身振り手振りをしながら先程の親友（しのぶ）の言葉を借りて口を開く。

「なんというか、その……綺麗で驚いたよ、カグラ」

借りはしたが、きちんと言い切れない。

カグラの思わぬ服装に驚きすぎて冷静になれず、普段なら言えそうな褒め言葉も碌（ろく）に言うことができなかった。

着替えてくると聞いてはいたが、そこから先を全く考えていなかったのである。

義人は言葉が詰まった自分に対して内心で罵倒を投げかけ、臆面もなく褒めきった志信に賞賛の言葉を送りつつカグラの様子を窺う。

「ぁ……ぅ……」

義人本人にとっては中途半端な賛辞。
しかしそれはカグラにとってはおどけたわけでも冗談混じりでもない、言葉に詰まりながらも、それ以上に本心を感じさせる一言。
カグラは視線を左右に彷徨わせ、次いで義人の足元に視線を向ける。そしてそこから視線を上に動かし、義人と目が合うなり再び視線を下へと向けた。

「あの……その……ありがとう、ございます」

最初は頬だけ赤かったカグラだが、今では首まで赤く染まっている。それでいて恥らうように左手でイブニングドレスの裾を握り締め、落ち着かないように右手を胸に当てていた。

「い、いや、どういたしまして」

そんなカグラの様子を見た義人は、気恥ずかしさを感じてカグラ同様視線を逸らす。

「……」
「……」

周囲の音を置き去りに、奇妙な沈黙が満ちる。ヤナギは場の空気を読んだのか、すでにその姿はない。

――落ちつかねぇ……でも、このままでいるわけにもいかないか。

義人は落ち着かない気持ちを抑えつつ、逸らしていた視線をカグラへと向けた。そして、改めてカグラの姿を観察する。
袖がなく、胸元や背中の部分が露出している黒のイブニングドレス。それを身に纏い、恥らって義人から視線を逸らすその姿には可

憐さと儚さ、そして得も言えない艶やかさが感じられる。それは普段のカグラからは感じられないもので、義人は目を逸らすことなくカグラの観察を行った。

――カグラってけっこうスタイル良いよな……って違う！　落ち着け俺！？

普段は気にしないようにしていたことが頭に浮かび、義人は目を閉じる。そして自分を落ち着けるように深呼吸をすると、少しは落ち着いたことを自覚してからカグラに向かって右手を差し出した。

「せっかくの機会、せっかくのドレスだ。俺と、踊ってくれるか？」

尋ねた言葉が聞こえたか、義人にはわからない。
それでも、カグラは義人の手に自分の手を重ねて小さく頷く。

「はい……喜んで」

そう言って微笑むカグラに、義人も微笑み返す。
このときばかりは、何も考えず。

『いやはや、見事でしたな』

舞踏会も終わり、その余韻に浸っていた義人に声をかける人物が一人。その声を聞いた義人は、背筋を伸ばして声をかけてきた人物……コルテアへと向き直る。
コルテアの言葉が先程カグラと踊ったことを指しているのだと判断した義人は、苦笑交じりに首を横に振った。

ちなみに、カグラは義人と踊り終わった後に何故か逃げるようにして部屋から抜け出している。その顔が今まで見たこともないほど真っ赤に染まっていたのを知っているのは、一緒に踊った義人とさり気なく義人を護衛していた志信だけだ。

『ありがとうございます。ですが、まだまだ不慣れでして……見苦しくなかったのならば良いのですが』

『なんの、技術の巧拙などは問題ではありますまい。あれほど息を合わせて踊れる者は中々……そういえば、お連れの女性はどうされたのですかな？』

途中まで褒めていたコルテアではあるが、ふと思い出したように義人へと尋ねる。義人はそのことに苦笑を深めてみせた。

『借りた部屋にいますよ。さすがにこういう場に連れ出すわけにもいかないですし、育てている白龍の子もいますから』

『なるほど……よろしければ、これから一つどうですかな？』

そう言って義人に見せるのは、二つのグラスと一本のビン。中身は酒だろうかとアタリをつけながら、世間話のためだけに話しかけてきたとも思えず義人は頷いた。

『いただきましょう』

義人が意図を察したことを悟ったのか、コルテアは僅かに破顔する。そして傍のテラスへと続く扉を開け、先に歩き出した。

『では、まずは一杯』

そう言いながらグラスを義人に手渡し、手ずからビンを差し出すコルテア。

周囲の見える範囲に給仕係の姿はなく、護衛は扉の傍にいるレンシア国第一魔法剣士隊隊長のクレンツだけである。そのため余程内密の話をしたいのかと思った義人は、どこか拗ねた顔のシアラの相手をしていた志信だけに頼んで扉の傍に控えてもらっていた。

『これはどうも』

果実酒らしき液体がグラスに注がれ、義人はコルテアから酒のビンを受け取ってコルテアの持つグラスへと酒を注ぐ。そしてある程度注いだところで腕を止め、お互いに示し合わせたようにグラスをぶつけた。

『建国記念に乾杯……と言ったところですか？』

小さく笑いながら義人がそう言うと、コルテアも笑いながら応じる。

『此度は祝いの品までいただき、感謝申し上げる』

『大した物ではないので恐縮ですけどね』

そう言って義人はグラスに口をつけ、果実酒らしき酒を口に含む。カグラがいれば毒見がと騒ぐところだが、コルテアがそんな手を取るはずもない。それを理解している義人は、特に気にすることなく酒の味を楽しむことにした。

『飲みやすい上に美味しいですね、これ』

『城下町に良い酒を仕入れる店がありましてな。そこのお勧めだったのですが、気に入ってもらえて何よりです』

コルテアもグラスを傾け、果実酒を飲む。そして未だに熱気の冷めない城下町の様子に目を向けた。そして何気ない口調で義人へと話しかける。

『祝いの品で頂いた玉鋼という鉄に関してですが……』

『玉鋼が何か？』

『実物を見ましたが、あれは良い鉄ですな。目の利く者に見せましたが、通常の鉄とは違うようで』

『……まあ、たしかに違いますね』

話の意図が見えず、義人はとりあえず適当に相槌を打つ。どうやって製鉄したのか教える気もないが、話を無視するわけにもいかない。

『玉鋼（アレ）は、すぐに生産できるものなのですか？』

穏やかな問いかけながらも、探るような視線。義人はそんなに気になるものだったのだろうかと内心で首を傾げるが、それを表面に出さずに肩を竦めた。

『申し訳ないですが、それは簡単に教えることはできません。国益に関わることなので』

『ふむ。教えれば、誰にでも使える技術というわけですかな？』

『さて、それはどうでしょう？　何せ元の世界の知識を使ったもので……この世界の人が方法を知らないままで同じことをするには、余程の偶然が重ならないと無理だとは思いますが』

暗に無理だと告げ、義人はコルテアの様子を窺う。
たたら吹きは方法や材料さえ揃えば、あとは回数を重ねることで鉄の質を良くできる可能性がある。そのため、たたら吹きに関する情報を知っているのは義人達を除けば鍛冶師のローガスとその周りの一部だけだ。もしも腕利きの間諜を送り込まれれば情報が漏れるかもしれないが、コルテアの表情を見る限りそのことを考えているようには見えない。
コルテアはグラスに注がれた果実酒を軽く飲むと、少しの間を置いて口を開く。

『ヨシト王がいた世界というのは、たいそう平和らしいですな』
『……世界全体を見ればそうも言えませんが、少なくとも身の回りは平和でしたね』
『魔法がない代わりに、様々な技術が発達しているとも聞きました』
娘のエリスやティーナから聞いたのだろうと判断して、義人は僅かに首肯する。

『そうですね。魔法はありませんが、違うものが発達しています』
『それは便利なものですかな？』
『便利……ですね。この世界で再現するのはほとんど不可能ですけど』
『ならば一部は可能だと？』

コルテアは義人の言葉尻を捕まえ、動揺を促すように尋ねた。それに対して、義人は曖昧に笑う。

『可能ですね。それがどんなもので、どれだけあるかは秘密ですが』
そう言って言葉を切り、義人は少しばかり温くなった果実酒を飲

む。コルテアは義人の言葉の真偽を見極めるように義人の一挙動を見ていたが、すぐに表情を緩めた。

『そうですか……では、違う質問をしてもよろしいか？』

『どうぞ』

質問という言葉を聞いて、義人は内心警戒を強める。話し振りからして、玉鋼のことはそこまで重要ではないのだろう。そう思った義人はコルテアの言葉を待ち、

『ヨシト王は、妻は娶らぬのですか？』

『……は？』

聞こえた言葉に、耳の調子を疑った。

『妻……ですか？』

もしや聞き間違いだろうか、などと思いながら尋ね返す。すると、コルテアは至極真面目に頷いた。

『ユキ殿もそういった間柄ではなく、カグラ殿も違う。となればもしや、元の世界に居るのですか？』

『いや、元の世界でもこの世界でも妻はいませんよ。というか、元の世界では十八歳にならないと結婚できないという法律がありまして』

『そうですか。しかし、この世界では他世界の法は関係はありませんぞ？』

『それはそうですけど』

話題の転換で空気が緩んだように感じ、義人は僅かに緊張を解く。

すると、それを見計らったようにコルテアが告げた。

『ヨシト王さえ良ければ、我が娘はどうでしょう？』

『……え？』

再度、義人は自分の耳を疑う。だが、そんな義人の様子に構わずコルテアは話を続けていく。

『親の欲目かもしれませんが、娘達は全員器量良し。特にエリスなどは、ヨシト王と歳もそう変わりませぬ。いかがかな？』

『い、いや、いかがかなと言われても……』

サラリと、重大な選択を迫られる。義人は少しばかり混乱している自分を自覚しながらも、何とか冷静に考えをまとめようと時間稼ぎに口を開く。

『レミィ姫達はこのことをご存知なんですか？』

『もちろん知らせてあります。それに、嫁ぐことは王家の娘の役目でもある……娘達も、幼少の頃よりその覚悟を持っています』

そう言って義人の言葉を待つコルテアの目は、本気だった。少なくとも、義人の目から見れば本気に映る。

――くそ、政略結婚をさせる気か？　そんなことをする気はないぞ？

義人は内心で愚痴に近い呻き声を漏らし、それでも表面上はなるべく冷静を装う。

『……急な話で、すぐの返答はできかねます。それとお節介ですが、

娘さんの幸せを願うなら結婚相手は自分で選ばせた方が良いのでは？』

自分でも甘いことを言っていると思ったが、それでも義人はそう尋ねる。すると、コルテアは首を横に振った。

『幸せを願うからこそ、です。レミィやティーナはともかくとして、エリスは物怖じするところがありましてな。特に、あの子は男を怖がる。表面上は平気を装うとするのですがな』

そこまで言うと、コルテアは一瞬だけ親の顔を覗かせる。

『しかし、貴方は違った。おそらく、この世界の人間ではないからでしょう。この世界の人間が持つ雰囲気とは、どこか違う。今日も、まさか自分からヨシト王のもとに行って踊るとは思いませんでした。もっとも、今のところは興味本位でしょうがな』

僅かに訪れる空白。義人は脳裏にエリスの控えめの笑顔が浮かび、つい先程共に踊った時のことを連想する。

たしかに、エリスには心惹かれるものがあった。だが、だからといってすぐに頷けるはずもない。それに、このタイミングで持ちかけるのならばただの縁談でもないだろう。現在の自分の立場を考え、義人は慎重に尋ねた。

『そうは言われても……仮にエリス姫と結婚して、俺にどうしろと？』

困惑するように尋ねる義人。半分は演技で、半分は本気である。

少なくともこの場で解答することはできないが、コルテアの意図を聞き出さなくて答えようもない。

そうやって警戒する義人に対して、コルテアは真剣な表情で告げる。

『――――我が国と同盟を結びませんか？』

同盟の人質に娘を差し出す、と。

第九十五話：締結

レンシア国建国記念日より三日の時が過ぎた昼下がり。
義人は目の前に置かれた二枚の紙の内容をそれぞれ確認し、手に持った王印を押す。紙にはレンシア国で用いられる王印が押されており、そのすぐ隣に押印して義人は軽く息を吐いた。

『これで良し……確認をお願いします』

そう言って、義人はコルテアに二枚の紙を差し出す。コルテアは二枚の紙を受け取ると、内容やカーリア国の王印が押されていることを確認して一枚を義人へと返した。

『確かに。それでは、一枚はそちらの国で保管してくだされ』
『わかりました』

義人はコルテアの言葉に頷き、傍に控えるカグラへと紙を渡す。するとカグラは、どこか不機嫌そうな表情でそれを受け取った。

「……ヨシト様、本当にこれで良いのですか？」
「良いも悪いも、すでに王印を押しちゃったからね。内容は履行してもらわないと」
「それはそうですけど……もう少し相談してほしかったです」

拗ねたような声色に、義人は苦笑する。

「でも、この辺りが妥当だろ？」

そう言って肩を竦める義人にため息を一つ吐き、カグラは再度内

容を確認するべく手元の紙へと目を落とした。

『賠償に関する規約』

そんな題目のもとに書かれている内容は、今回の事件に対する賠償に関してである。カグラは細々と書かれた文章の中から重要な部分だけ目を通し、もう一度ため息を吐いた

一つ、賠償の内容は賠償金として五千万ネカを支払うものとする。

一つ、支払いに関してはネカを使用する。ただし、金や銀などで充当することも可とする。

一つ、賠償金を金や銀で支払う場合は、支払いを行う時点での相場を適用する。

一つ、賠償金は五年に分けて支払っても良い。ただし、その場合は一年毎に千百万ネカ支払うものとする。

一つ、この規約の締結後は内容の変更を行うことはできない。

大まかな内容ではあるが、そんな内容が記された規約書である。

カーリア国は最初に賠償金三千万ネカに加えてカールとヤナギの引き渡しを提示し、それに対するレンシア国の答えはカールとヤナギの身柄の引き渡しの拒否だった。賠償金はその額でも良いが、カールとヤナギを引き渡すことはできない。

それならばと、カーリア国は賠償金の増加を求めた。そして、その増加させる金額で揉めたのである。

様々なやり取りがあったものの、カールとヤナギの身柄を引き渡さない代わりに一人当たり一千万ネカ増額することで落ち着いた。本当ならばカールやヤナギと共に義人達を襲ったフウの分も上乗せしようとしたのだが、それは次の義人の言葉で取り止めになっている。

『フウはカール隊長の乗り物みたいなものだし、いいんじゃないか？　騎兵を釈放する時に保釈金を求めるとしても、乗ってた馬の分は求めないだろ？』

義人としては乗り物などという言い方はしたくなかったのだが、そこはロッサ達を納得させるための方便だ。それでもロッサ達は反対したものの、結局は義人の言を通している。

「しかし、分割して払っても良いなんて条件は必要ないのでは？五年先、どうなっているかもわからないのですよ？」

そんな、暗に五年以内にレンシア国が滅ぶ可能性があるという過激な意見も出たが、義人としてはそれを避けるための分割払いだった。

一括で払ってもらっても良いが、それが原因で戦費が足りずに負けたのでは洒落にもならない。いっそのことハクロア国との戦いが終わってから支払っても良いと考えた義人ではあるが、それだとレンシア国が負けた場合は一文も手に入らないため却下された。

『では、賠償に関してはこれで終了ですな』

義人とカグラの会話の隙間を突き、コルテアが話しかける。それを聞いた義人はすぐに頷いた。

『ええ、そうですね。これで終わりです』

そう答えて、義人は王印を専用の箱へと入れる。

王印を押す必要があるのは、賠償に関する一度のみ。その他には何もない。

『それでは、これにて賠償に関する会議を終了します』

そんなコルテアの言葉を最後に、会議が終了する。

終始、同盟に関しては一言すら出なかった。

話は建国記念日の夜へとさかのぼる。

『――――我が国と同盟を結びませんか？』

かけられた言葉に、義人の思考が僅かに停止する。

同盟に政略結婚。元の世界ならば一生無縁だったであろう言葉と出来事だが、それがこの世界では当たり前のように存在し、自分が今その立場に“立たされている”。

義人はそのことに内心でため息を吐きながらも必死に頭を働かせ、十秒ほど経った後に口を開いた。

『それは……本気で？』

同盟、そしてそのために自分の娘を人質として差し出すのかという意味を込め、義人は尋ねる。それがこの世界では当たり前のことなのだと、元の世界とは違うのだと気付きながらも、義人はコルテアに尋ねる。

『本気です』

コルテアはすぐさま頷き、義人の考えを遮るように言葉を投げかけた。

『ご存知の通り、我が国は隣国のハクロアと戦争をしております。現在は小康状態ですが、遠からぬ先に再び戦争が激化するでしょう』

『そのとき、共に戦えと？』

『そうしていただければ最上。しかし、現状そこまでは望んでいません。ハクロアと手を結び、我が国に害することさえなければ……と思っています』

同盟は結ぶが戦わなくても良い。そう告げるコルテアに、義人は警戒しながら言葉を返す。

『その条件で同盟を結んで、何か意味があるんですか？　同盟とは名ばかりで意味がないと思うんですけど』

『なんの、カーリア国とレンシア国が同盟を結んだと知らせるだけで十分に効果はあるでしょう。レンシア国との戦いに集中すれば、その間にカーリア国が動くかもしれない。そう思わせるだけで相手の動きを制限できますからな』

『……いや、それって下手すればこっちが先に攻められますよね？　それなら最初からちゃんとした同盟を結んだほうが得策でしょうよ』

『それでは同盟を結んでくださると？』

期待を含んだ眼差しで見てくるコルテア。義人はそんな眼差しに首を横に振って見せ、軽くため息を吐く。

『それとこれとは話が別です。まして、すぐに答えられるほど簡単な問題でもないですね』
『そうですか……』
しかし、と言葉をつなげ、コルテアは言葉を紡いでいく。
『我が国とて負けるつもりは毛頭ない。だが、万が一我が国が敗れれば次はカーリア国でしょう。それでもですかな？』
『ハクロアが攻め込んでくると？　自慢にもなりませんが、カーリア国に侵攻しても利益はないですよ？』
人口は少なく、今のところは目立った特産物もない。その上魔物が頻繁に出没するような場所だ。
本当に自慢にならないと自嘲する義人だが、コルテアはそんな義人の言葉に首を横に振った。
『なくとも、後顧の憂いを断つことができる。ハクロアの王は野心が大きく、周辺の国を攻め滅ぼしながら支配下に置いていましてな。他の国を攻める際に、背後に軍事力を持った国がいるのは不都合でしょう？』
『それはそうですが……しかし』
『あの国が、どれだけの国を滅ぼしたかご存知か？　取れるのならば取る。そういう国です』
確信を滲ませた言葉に、義人は口を閉ざす。
話を聞く限り、ハクロア国は非常に好戦的な国だ。国王も野心高く、周囲の国を取り込んで勢力を大きくしている。
このままでは遠からぬ未来にカーリア国も狙いの一つに入るだろう。そんな言葉で締め括り、コルテアは義人へと目を向けた。

『そこを踏まえ、もう一度お聞きする。我が国と、同盟を結んではもらえませぬか？』

そう言って答えを求めるコルテアを前にして、義人は無言のままに思考を回転させて考えをまとめていく。

もしもハクロア国がカーリア国に攻め込んできても、レンシア国と軍事的な同盟を結んでおけば助けを求めることができる。レンシア国と対峙している以上、ハクロア国も複数の国を同時に敵に回すことはしないだろうが、それでも絶対ではない。備えあれば憂いなしというべきか、これはメリットと言える。しかし、反対に助けを求められた場合はどうなるか。それを考えると安易には頷けなかった。まして、そんな重大な問題を一人で決めるわけにもいかない。

義人はカーリア国において決定権の大部分を持つ身ではあるが、義人自身はその権力を振るうつもりはなかった。

『申し訳ありませんが、この場での返答はできません』

『ふむ……理由を聞いても？』

『これほど重要なことならば、自分一人では判断できないからです。それに、今のカーリア国には他国と争うほどの余裕もない……内側で魔物を退治するだけで精一杯ですから』

そう言って、義人は同盟に乗り気ではないことと戦力にならないことをアピールする。実際には援軍を送るだけの兵力は持っているが、他国の争いに介入する気はまったくと言って良いほどにない。

条件的には同盟どころか協商と呼べるかも怪しいところだが、他国と、すなわち敵兵である人間と戦った経験がない軍を送ったところで意味はあまりないだろう。

そんな義人の言葉に対し、コルテアは落胆する様子も見せずに頷く。

『たしかに、話を聞いたその場で判断するわけにはいきませんな』
『ええ。申し訳なく思いますが』

同意を示すように頷く義人だが、その裏でコルテアの様子に変化がないかを窺う。

自分のほうから同盟を持ちかけておいて、断られたらそれを口実に実力行使に及ぶ……そんな手を使うような人物には見えなかったが、万が一ということもある。

そうやって警戒する義人だったが、コルテアは特に気負うことなく口を開いた。

『しかし、魔物を制するのにそこまでの兵力が必要と？　各町村に兵士を常駐させ、魔物がいないときは農業を行う……たしか、屯田兵でしたか。その働きもあり、魔物による被害も少なくなっているでしょうに』
『……よくご存知で』

何気なく告げられた言葉に、義人は表情を動かさないように苦慮しながら短く返答する。

コルテアはそんな義人の様子に僅かな苦笑を漏らすと、何かを教えるように言葉を口にした。

『周囲の国情を調べるのは重要なことですぞ。程度の差はあれ、他の国もカーリア国については調べているでしょう』

事も無げに告げるコルテアに苦笑を返しつつ、義人は内心で頭を痛める。諜報関係については国内だけで手一杯であり、他国に関する情報は商人であるゴルゾーからの報告に頼っている状態だ。

――やっぱり改善が必要だよな……。

カーリア国に戻ったら、少しでも諜報に対して力を入れることを決意する義人。もっとも、力を入れても効果が出るのはしばらく先ではあるが。

義人は先のことを考えても仕方がないと思考を打ち切り、そこでふと、疑問が浮かんで口にする。

『ところで、一つ聞きたいことがあるんですが』

『なんでしょう？』

『何故カーリア国を同盟相手にしようと思ったんですか？　レンシア国の周辺には他にも国があり、軍事力を持っているはずです。それなのに何故？　今回の建国記念の式典にも祝いの使者を送ってきましたし、国家間の仲が悪いというわけでもないですよね？』

『……なるほど、わざわざカーリア国と同盟を結ばなくても、他にも候補がいるはずだと。それなのにカーリア国を選んだ理由がわからず、何か意図があるのだと思うわけですな？』

率直な問いかけ。義人はそれにどう答えようか僅かに思案するが、結局はそのまま頷く。

『はい。それがわからないのでは、迂闊に頷くこともできません』

義人が肯定の意を示すと、コルテアは顎に手を当てて思案するように遠くを見る。そしてすぐさま思考をまとめ、義人を真正面から見据えた。

『そうですな……では、胸襟（きょうきん）を開いて話をしましょう』

そう言って、コルテアは右手を突き出して指を二本立てる。

『儂がカーリア国を選んだ理由は二つ。一つは周辺の国に同盟を申し込んでも断られることが明白なため。そしてもう一つは、周辺の国では同盟を結んでもハクロア国には対抗できないためです』

胸襟を開くという言葉に警戒しながら、話に耳を傾ける義人。

本当のことを話しているように見えるのだが、それが真実なのか見極める術はない。その程度の腹芸は平気でこなすだろうと自分に言い聞かせ、義人は疑問に思ったことを口にする。

『同盟が断られるのが明白というのも気になりますけど、対抗できないのは何故です？　戦いは数が多いほうが有利だと思うんですけど』

『戦いは数。なるほど、たしかにそうですな。しかし、一騎当千という言葉も存在する。それを実際に起こし得る人間は極めて稀ですが、存在するのも確かです。そして、一騎当千とまではいかずとも一人で十人、百人を征する人間はそれよりも多く存在する』

ジワリと、義人は嫌な予感を覚えて眉を寄せた。

『ヨシト王がいた世界ではどうなのか知りませぬが、この世界にはこの世界の戦（いくさ）の仕方がある。魔法剣士や魔法使いが主力となって戦いを繰り広げる裏には、歩兵達の活躍がある。歩兵にどういった役割があるかご存知か？』

『……いえ』

小さく、首を横に振る。

魔法使い、魔法剣士、騎馬兵、歩兵、弓兵。カーリア国にはその五つの兵種があるが、それぞれにどんな役割があるかを義人は知らなかった。

『それぞれに様々な役目がありますが、この世界における戦いは突き詰めて言えば“どれだけの魔法使い、魔法剣士を確保して用いることができるか”です。騎馬兵や歩兵、弓兵は同じ兵種の者と戦いながら、その上で魔法が使える者を優先的に攻撃する。魔法を使えない者がどれだけ魔法を使える者を殺せるか、魔法を使える者が同じ魔法使いを、そして魔法が使えない者をどれだけ殺せるか……それによって戦の天秤は傾くのです』

淡々と紡がれるコルテアの言葉。それを聞きながら、義人は嫌な予感が強まるのと同時に思考が一つの解答へと収束していくのを感じた。

『魔法を使えば魔力を使う。強力な魔法を使う時間を稼ぐ必要もある。戦場で魔力を消費してしまった魔法使いを守る盾もいる。しかし、戦っていても魔力が尽きない魔法使いがいれば？　一人で十の敵を、百の敵を殺せる者が』

『――つまり、カグラがいるから同盟を結びたいと？』

コルテアの言葉を遮るように、それでいて義人は言葉に確かな怒気を込める。

『同盟を結んでカグラに大量の敵を殺してもらうと、そう言いたいのか？』

若いな、とコルテアは心中で呟く。それと同時に、本当に平和な世界から来たのだと、僅かな羨望と落胆を込めて目を細めた。

そして、それらを実際に口にすることなくコルテアは泰然と答える。

『不快に思われたのなら謝罪しよう。しかし、強い者がいるのなら

ばそれを頼りにするのも当然のこと。先程儂が言った、周辺の国ではハクロア国に対抗できないというのはそういうことだ。兵はいても、それを率いる将が弱い。カグラ殿ほどの魔法使いは、大陸中を見てもそうそういないのでな』

互いに敬語はない。空気が変化したのを察したのか、離れたところで控えていた志信とクレンツが互いに牽制するような動きを見せた。

『クレンツ』

だが、それはコルテアがクレンツに対してかけられた言葉ですぐに消える。クレンツはその言葉に従うように、すぐさま志信に対する警戒を解いて元の姿勢へと戻った。志信はその様子を見て、僅かな思考の後に警戒を解く。

『ヨシト王、誤解があるようだが、儂は最初に言ったはずだぞ？共に戦うことまでは望んでいないと。同盟を結んだと知らせるだけで十分に効果はある、それだけで相手の動きを制限できると』

『言いましたね。でも、それが何か？』

『カグラ殿が戦う必要はないということだ。近隣諸国の者ならばカーリア国の内情を探り、カグラ殿がどれほどの腕を持っているかも調べることができる。そして、今のところ勝機は五分。そこにカグラ殿が仕えるカーリア国とレンシア国が同盟を結んだ……その言葉だけでハクロア国を牽制できるのだ。それだけでも大きな効果がある』

『……周辺の国と同盟を結んだのではハクロア国に対抗できないというのはわかりました。しかし、断られるのが明白なのは何故ですか？　一つの国では対抗できなくても、多数の国と同盟を結べば良いでしょう？』

コルテアの言葉に一応の納得を覚え、義人は口調を敬語に戻して尋ねた。それを聞いて、コルテアも口調を元に戻す。

『我が国と同盟を結んで対峙すれば目をつけられますからな。もしも同盟を結んで我が国がハクロア国に負けてしまえば、次は自分の国が狙われる可能性が高い。それだけで動けなくなるのですよ』

魔法を使える者が少ない国も多いですしな、と付け加え、コルテアは軽く嘆息した。そんなコルテアの様子を見て、義人は肩を竦める。

『なるほど……ですが、カグラに戦わせる可能性がある以上は同盟を結ぶことはできません』

『……それは、カグラ殿が危険な目に遭うのが嫌ということですかな？』

コルテアの目に、僅かに剣呑な光が浮かぶ。そんな理由で拒否をするのかと、そう言わんばかりの眼差しに義人は首を横に振った。

『それは違います』

『では、どんな理由が？』

尋ねるコルテアに、言うべきか言わないべきか義人は迷う。

現在義人が考えているのは、カグラに対する情ではない。カグラが人を殺すことを忌避したわけでも、手を貸すことでカーリア国が危険に晒されるかもしれないことを憂えたわけでもなかった。

『……俺は、カーリア国の現状をできる限り早く変えたいと思っています』

そして、義人は決断する。
コルテアが敢えて一対一で話を望んだ理由。エリスとの政略結婚を望みながら、同盟を結ぶ必要はないと言った理由を踏まえて言葉を口にする。

『ふむ……国の現状を変えてどうなさるおつもりか？』

義人が何かを話そうとしているのを察したのか、コルテアは続きを促す。

『まず、違う世界の人間を召喚しなくても良いようにしたいと思います。そして、その後は然るべき人物に王位を渡そうかと』

召喚国主制の廃止と、王位の譲渡。
日本のように人口が一億人以上いるような国ならともかく、カーリア国は人口八万人程度の小国である。それに伴う混乱は小さいだろう。様々な反発があるかもしれないが、それは時間をかけてなくしていけば良い。
義人はできる限り早くといいつつも、実際にはそこまでの時間はかからないだろうと判断していた。

『王位を渡す？　それは何故ですかな？』
『やっぱり、自分の国のことはその国の人間が決めていくべきでしょう？　俺は異世界から来た人間で、カーリア国は生まれ故郷でもありません。多少の愛着はありますが、やはり関係のない人間が治めるべきではないと思っています』

そして、と義人は言葉をつなげる。

『それが終われば、俺は遠慮なく元の世界に戻れます。優希や志信から先に元の世界に戻そうと思っていますが、そのためにはカグラの力が必要になる。だから、カグラの力が必要となるような同盟はお断りします』

正確には、カグラの魔力を消費するような真似はしたくないというのが本音だった。

『遠くない未来にカーリア国の体制が変わるでしょう……いえ、変えます。どんな形になるかはまだわかりませんが、召喚国主制ではなくなる。そうなると、俺が国王である理由がなくなる。だから、同盟のためと言って娘さんを嫁がせるのは止めた方が良いと思います。もしそれでも政略結婚がしたいというのなら、新しく国王になった者と行うべきです。その頃になれば、カグラの手も空いてるでしょうし』

そこまで言って、義人は場の空気をほぐそうとおどけるように笑う。

『もっとも、あれほど可愛い子達がいつまでも独り身なんてことはないでしょうけどね。同盟を結べない理由はそんなところですよ』

そう締めくくり、小さく笑う。コルテアはそんな義人を見て、表情を変えないままに話を続けた。

『では、同盟を結びたければ新しい国王に持ちかけろということですかな？』

『ええ。もっとも、何年後になるかはわかりませんが』

『ふむ……元の世界に戻るためにカグラ殿の魔力を温存する。それはわかりました。ですが、元の世界に戻る方法はあるのですか？』

『アテはあります』

今のところカグラ本人から聞いた言葉だけだが、義人は敢えて強気に頷く。

そんな義人の様子に、コルテアは内心で大きなため息を吐いた。

『……わかりました。では、今のところは諦めるしかないですな』

その言葉を最後に、深夜の密談は終わりを告げたのである。

「良いのか？」

護衛として傍に控えていた志信は、周囲に人がいないことを確認してから義人へと尋ねる。心配を含んだ親友の声に、義人は苦笑しながら頷いた。

「もちろん。俺の目的は、志信や優希と一緒に元の世界に戻ることだしな。それに、胸襟を開くとか言いながら色々と隠してそうだったし。まあ、どうせ向こうも断られることを前提にしてただろうし、大丈夫だろ。せめて賠償の件でレンシア国にかかる負担を少なくするのが関の山かな？」

「しかし、あの場で断る必要はなかったのではないか？」

そう言って自分の考えを示す志信に、義人は苦笑しながら頬を掻く。

「本当は適当なところで話を切り上げてカグラ達と相談するつもりだったんだけど、話しているときの流れでつい……」
「……そうか」
義人の言葉に、志信は苦笑を一つ漏らす。
コルテアはレンシア国が負ければ次はカーリア国だと言ったが、今のところその確証もなくレンシア国が負けるとも思えない。兵を率いる人間ではカールやヤナギ、クレンツしか知らないが、そう易々と負けることはないだろうと志信は判断した。そして、少しばかり気になっていたことを義人へと尋ねる。
「そういえば、同盟を断るのはカグラが魔力を消費するのが嫌だからと言ったが、あれは本当か？」
興味本位の些細な疑問。志信としてはあの場だけのものだろうと、そんなことを考えての疑問である。
「……さて、どうだろうな？」
その問いに、義人が明確な言葉を返すことはなかった。

第九十六話：帰国

『では、そろそろ出立しようと思います。滞在の間はお世話になりました』

来る際に乗ってきた馬車を背に、義人はコルテア達へ向けてそんな言葉をかける。それを聞いたコルテアは、苦笑混じりに首を振った。

『大したもてなしもできず、申し訳ない』

『いえ、そんなことはないですよ。それにしても、国王自らの見送りとは恐縮ですね』

苦笑するコルテアに、義人も苦笑を返す。すると、コルテアの後ろに立っていたレミィが悪戯っぽく笑った。

『あら、わたし達もいるのですけれど？』

『これは失礼。しかし、レミィ姫達のような美しい女性に見送ってもらえるとは光栄の至りですよ』

『ふふ……お上手ですこと』

義人が冗談混じりの言葉と共にレミィと“作り笑い”で笑い合うと、今度はティーナが口を開く。

『また来てくださいね？　また、ヨシト王達の世界のお話を聞かせてほしいですっ！』

もちろんだとも。

義人はそう言おうとするが、これから先にそんな機会があるかを

考えて言葉を変える。

『……機会があれば、いくらでも。その時は、優希に元の世界のお菓子でも作ってもらおうか？』

『はいっ！』

元気良く、それでいてどこか寂しそうに頷くティーナ。そんなティーナに、義人はレミィの時とは違って心の底から笑う。

『カール隊長と仲良くね？』

『……うぅ、頑張ります』

笑いながら、最後にからかいの言葉を一つかける。

何を頑張るのかはティーナ次第だが、義人の言葉を聞いたティーナは常の活発さを潜め、頬を染めながら俯いた。

『む……』

同時に、レミィの表情が僅かに動く。何かしら思うところがあったようだが、それは義人の言葉に対してか、それともティーナの反応に対してかはわからない。それは言わぬが花というものだろう。

――カール隊長も大変だなぁ……。

自分で言っておきながら、義人は心の中で他人事のように呟く。

そして、この場にいる者の中でまだ口を開いていない人物へと目を向けた。

『それではエリス姫。色々と話ができて楽しかったです』

『……はい、わたしもです』

頷くエリスに、義人は僅かに複雑な思いが浮かぶのを感じて小さく眉を寄せる。だが、エリスはそんな義人の表情の変化に気付いたのか、胸元で右手を握り締めてどこか儚げに言葉を紡ぐ。

『また、お会いする機会はありますか？』

その問いに込められた感情は、意味は何だったのか。

義人はそれを読み取れないながらも、頷きを返す。

『おそらくは』

『……そう、ですか』

義人の言葉を聞いたエリスは、視線を落として唇を引き結ぶ。そして数秒俯いた後で、どこか強さを感じさせる視線を義人へと向けた。

『“頑張ってくださいね”』

『え？』

かけられた言葉に、義人は目を丸くする。

頑張れという言葉が何を指しているのか。義人はそれを考え、数秒の後に思い当たった解答に表情を笑みへと変えた。

『――――ああ。ありがとう、エリス姫』

おそらくはコルテアから話を聞いたのだろう。そう判断した義人がコルテアへと目を向けると、コルテアはどこ吹く風と言わんばかりに目を逸らす。

そんなコルテアの様子に小さく笑うと、義人はもう一度だけエリ

スに視線を向ける。
本当にコルテアが政略結婚をさせるつもりだったのか、それともあくまで交渉の手札として口にしたのか、義人には推測でしか判断できない。
コルテアの発言はあくまで交渉の一環であり、義人が頷かないことを見越していた可能性もある。だが、それも過ぎたことだと義人は首を横に振った。そして、気を取り直してエリスへと視線を向ける。

『それじゃあ、そろそろ……』
『はい。それでは、お気をつけて』

そんなエリスの言葉を最後に、義人は背後の馬車へと乗り込むのだった。

完全な整地がされていない街道を馬車で進むこと二日。
時折上下に跳ねる馬車の中で、義人は何かを考えるように目を瞑っていた。その隣では、そんな義人の邪魔をしないようにと小雪を寝かしつけた優希の姿がある。義人の傍に立てかけられたノーレも喋りかけることはなく、レンシア国へ行く時とは比べ物にならない静けさで馬車は進んでいく。

「ヨシト様」

だが、その静けさを破るように馬車の外から声が響いた。その声を聞いた義人は数秒経った後に目を開け、馬車の側面につけられた

窓を開ける。

「どうした？」

「もうじきレンシア国とカーリア国の国境に差し掛かります。そのため、クレンツ隊長がご挨拶にと……」

「ん、了解」

短く答え、義人は周囲を囲むように併走するレンシア国の兵士達に目を向けた。

その数はおよそ百。コルテアが国境までの護衛を命じたカーリア国第一魔法剣士隊の兵士達だ。

カーリア国の中でも随一の練度を誇る第一魔法剣士隊の半数と隊長であるクレンツに護衛を任せたのは、コルテアなりの好意と誠意か。他にも何か役目があるのかもしれないが、義人はありがたく送ってもらうことにしていた。

義人が馬車の停止を告げると、それに合わせて周囲の馬車や護衛の兵士達も足を止める。そこから少しばかり待つと、クレンツが隙のない足取りで義人の乗っている馬車へと歩み寄ってきた。

動きやすさを重視した白い鎧を身に纏い、右手には鋭利な穂先の槍一本。それを見て、義人が乗る馬車の傍に控えるカグラが何かを言おうとするが、クレンツはそれを察したように傍にいた部下へと槍を手渡して無手になる。そして義人が馬車から降りてくると、膝をついて頭を下げた。

『わざわざ送ってもらってありがとう、クレンツ隊長。コルテア王にお礼を伝えておいてもらえるかな？』

『御意。お伝えしておきます』

短い、それだけのやり取り。膝をついて頭を下げているクレンツにかける言葉は少なく、それに応える声も少ない。

さすがに国境を越えてまで護送するわけにもいかず、クレンツ達とはここで別れることになっている。
義人は背後へと振り返ると、カグラと同じように傍で控えていた志信へと声をかけた。

「志信も何か言っておくことはあるか？」
「俺か？　そうだな……」

義人の言葉を聞いて、志信が一歩前へと出る。そしてクレンツを真っ直ぐに見据え、ゆっくりと口を開いた。

『御武運を』

たった一言。だが、短いながらも心のこもった一言。
その言葉に志信らしい、と義人は内心で苦笑した。すると、それを聞いたクレンツは作り笑いではない柔らかな表情で応じる。

『ありがとうございます。カール隊長達にも伝えておきます』

そう言って、志信へ一礼するクレンツ。何か通じるものがあったのか、両者の言葉には何の含みもない。志信は純粋に相手の武運を祈り、クレンツもそれを素直に受ける。
レンシア国とハクロア国の争いが再び激しくなるのは、そこまで遠い未来でもない。現在は小康状態だが、早くて数ヶ月、遅くても数年以内には雌雄を決するときが来るだろう。
志信の言葉がその戦いでの武運を指していると読み取った義人は、遠くを見るように目を細めた。

――まあ、それまでには何か変わってる……いや、変えてみせるさ。

そこまでくれば、あとは“その時”に王位に就いている者の仕事だ。

義人はこれから先のことを考え、軽くため息を吐く。

「やれやれ、まずは目の前のことから片付けるか。帰ったら、仕事の山が待ってるんだろうなぁ」

予定よりもレンシア国に長く滞在してしまった分、仕事は増えているだろう。

アルフレッドを筆頭に政務を行っているはずだが、重要な案件はもとより、大抵の案件は義人の裁可を必要としている。

幸いと言うべきか秋の収穫による税の徴収はほとんど終わっているため、一日か二日徹夜すればすぐに片付くはずだ。もっとも、徹夜をするにもカグラが止めに入らなければという条件がつくが。

『それではヨシト王。我々はこれで』

そうやって少しばかり、近い未来に関して考えていた義人へとクレンツが別れの言葉をかける。それを聞いた義人は、すぐさま気を引き締めて頷いた。

『気をつけて帰ってくれ……なんて、余計な心配かな？』

『いいえ、ありがとうございます』

義人は余計な世話かと苦笑するが、クレンツは至極真面目に返答する。そして、膝をついた状態から立ち上がると、最後に深く一礼した。

『それでは、失礼します』

そう言って、クレンツは部下達が待つ場所へと戻っていく。義人はそんなクレンツの背中を見送ると、自分の馬車へと乗り込んだ。

「よし、それじゃあ帰るか。カグラ、出発の合図を」

「わかりました」

窓越しにカグラへ出発を告げてから、義人は馬車の背もたれに体を預ける。そして疲れたようにため息を吐くと、それを聞いた優希が労わるように微笑んだ。

「お疲れ様、義人ちゃん」

「ああ、お疲れ。でも、ここから城までまだ二日くらいかかるしなぁ……」

ぼやくように義人が言うと、優希は楽しそうにそれを眺める。

「お城に帰ったらお仕事がたくさんあるだろうし、今のうちに休めるだけ休んでおいたほうが良いんじゃない？」

優希の言葉に、義人は先ほどまで考えていたことを思い出す。そして、先ほどよりも深いため息を吐いた。

「……そうだな、今のうちに休んどくか。馬車の中だけど」

そんな言葉と同時に、ガタガタと音を立てて馬車が動き出す。

最初はゆっくりと、そしてそこから一定の速度まで加速すると、伝わる振動がほぼ一定へと落ち着いた。義人は体に伝わる少しばかり強い振動を受けながら、休むのは難しそうだと苦笑する。

「これから大変そうだなぁ……」

小さく呟いたその言葉が指しているのは、これから城へ帰る道程のことか、それとも未来（さき）のことか。

それは義人にとっては大した意味のない、ただの独り言。傍に座る優希も言葉を返さないような、本当に些細な呟き。

――その呟きに応えるように、義人の懐で古びた手紙がカサリと音を立てた。

第九十六話：帰国（後書き）

どうも、作者の池崎数也です。第三章が終了いたしました。ようやく折り返し地点です。まさか九十六話までかかるとは……書き始めの予想では、四章が終わって五章に入っているぐらいの話数だったりします。次話からは第四章ということで、もっとテンポ良く話を書いていきたいですね。それでは、こんな拙作ではありますが今後ともお付き合いいただければ幸いです。

第九十七話：着手

秋の気配が完全になくなり、寒さが厳しくなり始めた十二月。
元の世界に比べれば緩やかな変化ながらも、四季が存在する“この世界”で迎える初めての冬である。
義人は最近の冷え込みに眉を寄せながら、執務室で自分の椅子に背を預けた。
レンシア国から帰国して二週間ほど経ち、その間に溜まっていた政務もすでに片付けてあるため机の上に書類の山は存在していない。
召喚されて七ヶ月。だいぶ慣れたものだと自画自賛する義人である。もっとも、帰国した際に机に積まれた書類の山を見た時は逃げたくなったが。

「ふぅ……寒い時にはお茶が美味いな」

義人はそう言って、手に持った湯飲みに口をつける。そしてほど良い熱さのお茶を飲み干し、満足気なため息を吐いた。元の世界では日常的に飲むものではなかったが、今では毎日口にしている。
年寄り臭くなったかな、などと義人は苦笑して、湯飲みを机の上へと置く。すると、少し離れた場所に置かれた机で政務に励んでいたカグラが顔を上げた。そして、どこか嬉しげに口を開く。

「お茶のお代わりですか？」
「いや、大丈夫。というか、そういうのはサクラの仕事だろ？　気持ちだけありがたく受け取っておくよ」
「そうですか？　でも、何かありましたら言ってくださいね？」

カグラは義人の言葉に納得したのか、視線を手元へ戻して政務の続きを始める。義人そんなカグラの様子を眺め、密かにため息を吐

いた。
相変わらずの巫女服姿で政務に励むカグラのその姿は、どこかやる気に満ちている。思わず『寒くないのか？』と聞きたい義人ではあったが、そんなことよりも気になることがあった。

「あ、あの……ヨシト様……」

義人が眉を寄せていると、背後に控えていたサクラがおずおずといった様子で声をかける。その声を聞いた義人は、上機嫌で書類を捌くカグラに気付かれないように小さな声で返事を返す。

「ん？　どうかした？」

「いえ、その……カグラ様、何かあったんでしょうか？　ここ最近、ずっとあの様子ですが……」

ここ最近とは帰国から今日までのことを指し、あの様子とはやけに機嫌が良い状態のことである。そのことに関してどこか不安そうに尋ねるサクラに、義人は思わず苦笑した。

「それはサクラがカグラに対してどんな印象を持ってるか、非常に興味が湧く質問だな。ずっと機嫌が良いカグラはおかしいと？」

「えっ！？　そ、それはその……」

苦笑混じりの義人の言葉だったが、サクラは慌てたように言葉を探す。それを見た義人は苦笑を深めた。

「冗談だよ。でも、カグラの機嫌が良い理由か……」

ふむ、と一つ頷いて、義人は首を捻る。そして、数秒の後に口を開いた。

「なんだろうな？」

本当に皆目見当もつかない……わけではなく、単に惚けているだけである。

義人としてはある程度の予測がついているが、それを口にすることはない。何か下手なことを口にして、カグラの機嫌を悪くする必要もないのだ。

「ちゃんと仕事もしてるし、大丈夫だろ？　しばらくすれば元に戻るか、もしくはサクラ自身が慣れるよ、きっと」

「そう、ですか？」

義人の言葉に対して、半信半疑ながらも頷くサクラ。カグラの機嫌が良くて困ることはないと自分に言い聞かせ、一応の納得を見せて義人の背後へと下がる。

そんなサクラの様子にもう一度苦笑すると、義人は机の上に置かれた書類へと目を落とした。急ぎの案件として追加の仕事が来なければ、本日最後となる書類だ。内容は玉鋼の製造に関する報告で、義人は普段と比べてゆっくりと書類の内容を確認すると、特に不備がないと判断して王印を押す。これは報告を受けたという証拠なのだが、義人は手に持った王印を見て僅かに思案に耽る。

――これって、どういう原理で印がつくんだろうな……。

召喚された当初は常々思っていたことだが、いつの間にか気にしなくなっていた疑問。自分しか使うことができないという点では王剣のノーレと一緒だが、ノーレに比べれば印象が薄いため、今まで忘れていた義人だった。

王印はある意味、義人がこの国の王であるという証の一つ。ノー

レと同様に、現状では義人しか扱うことができない。つまり“コレ”も義人が国王である証だ。

何故自分しか使えないのか。それを静かに考える義人ではあったが、そう簡単に答えが浮かぶわけもなかった。だが、それと同時にある考えが頭に浮かぶ。

「王印……王印ねぇ……」

義人はしばらく考え込み、頭を捻った。そして、とりあえずといった様子で背後のサクラへと振り返って王印を差し出す。

「サクラ。ちょっとこれを紙に押し付けてみてくれないか？」

「これって、王印をですか？」

義人から差し出される王印を恐る恐る受け取りながら、サクラは首を傾げる。義人の突然の発言の意味がわからないのだろう。それでもサクラは義人の言葉を守り、王印を紙に押しつける。

「どれどれ……って、やっぱり無理か」

そして王印をどけてみるが、そこには何の印も押されていない。予想通りの結果に義人がため息を吐くと、サクラは慌てたように頭を下げた。

「ご、ご期待に応えられず申し訳ありません！」

「いやいや、そんな謝ることでもないから」

頭を下げるサクラに軽く手を振り、義人は頭を上げさせる。

「しかしサクラでも無理かぁ……カグラは最初の説明の時に試した

しな。これも魔法具みたいだけど、魔法の腕は関係ないのか？」

そもそも、使用するのに魔法の腕が関係するのならば自分が使えるはずがない。義人は自分の口にした考えを自分で否定すると、こういったものは専門家に聞いたほうが良いと判断し、傍に立てかけてあるノーレを掴んで立ち上がった。すると、それを察したカグラが仕事の手を止めて義人の方へと顔を向ける。

「どうかされましたか？」

「どうかしたってわけじゃないけど、調べたいことができたからちょっと外に出てくるよ。何か急な仕事ができたら人を寄越してくれ」

「それは構いませんが、護衛はどうされるおつもりですか？」

いないのならば自分が。

そう言いそうなカグラの機先を制し、義人は首を横に振った。

「いや、護衛には近衛隊についてきてもらうから大丈夫だ。カグラは自分の仕事をしていてくれ」

今日は提出された書類に目を通して王印を押すだけだった義人とは違い、カグラには様々な仕事がある。義人としても手伝えるなら手伝うが、カグラでしか判断できないものも多い。それを案じての義人の言葉に、カグラは微笑むことで応えた。

「そうですか……それでは、お気をつけて」

それは、どういった心境の変化か。特に説教もなく外出の許可が出たことに、義人は内心だけで驚きの声を上げる。

「あ、ああ。それじゃあ行ってくるよ」

それでもカグラの気が変わらないうちにと、義人は足早に執務室を後にするのだった。

「それでここに来たってのか？」

呆れ顔でそんな言葉を投げたのは、城下町の外れにある製鉄所の主、ドワーフのローガスである。

突如来訪した義人に目を丸くしたものの、用件を聞くなり呆れたような表情を浮かべた。一国の王様が、そこまで気軽に外出をして良いのかと。そんなローガスに対し、義人は口を尖らせる。

「いやいや、仕事はちゃんと片付けたし、会議も入ってないから大丈夫だろ。護衛だってちゃんとつけてる。それに、これは俺にとっては非常に気になる疑問なんだって。ローガスならこういったものには詳しいだろ？　それと、頼みたいことがあってね」

そう言って、義人は懐から王印を取り出す。餅は餅屋と判断して持ち込んだのだが、義人の差し出す王印を見てローガスは眉を寄せた。

「俺は鍛冶師で魔法具の作成はあまりしないんだがなぁ……ま、こういった魔法具の扱いに覚えがないわけでもなし。見るだけは見てやらぁな」

義人から王印を受け取り、目を細めて王印を注視するローガス。時折見る方向を変え、何かを見透かすように口を開く。

「何か魔法がかかってるな。『魔法文字』……いや、刻んだ跡がねえから『付加』を使ったのか？」

「ん？　『付加』ってなんだ？」

ローガスの呟きを聞き、義人は首を傾げる。名前からして補助魔法の一種だろうかと予想を立て、そんな義人の考えを肯定するようにローガスが頷く。

「補助魔法の一種だ。何かしらの魔法を武器や防具なんかに『付加』させることができる魔法でな。そこまで難しい魔法ってわけでもねえ。ま、他にも色々と使い道がある魔法だがな。帰ったら、あの巫女の嬢ちゃんに聞いてみるといい。」

「何かしらの魔法を『付加』する？　つまり、剣に炎とか雷を纏うのも『付加』を使うのか？」

そう言いつつ、義人は脳裏にミーファの姿を思い浮かべた。

以前志信と模擬戦を行った際に、刀に炎を纏わせて攻撃したことがある。義人はその時の光景を思い出し、“あれ”も『付加』を使っていたのかと納得を込めて頷いた。ついでに、元財務大臣のエンブズと一緒にいたガルアスも同じように雷を剣に『付加』していたことを思い出す。

「ああ。しかし、本来『付加』はその場限りの効果しかないんだが……こいつは微妙に違うな。魔法文字みたいに使うことで消耗していくわけでもなさそうだ。他に何か仕掛けがあるのか、それとも壊れない限り永続するような『付加』を使ったのか……」

王印に対して興味が湧いてきたのか、王印を手の上で転がすローガスはどこか楽しげである。義人はそんなローガスの様子を眺めつつ、軽くため息を吐いた。

「魔法についても調べる必要があるか……しかし、効果が永続するっていうのはかなり便利じゃないか？」

「そりゃ便利といえば便利だろうな。もっとも、永続する『付加』を使える奴なんざ話に聞いただけで実際に見たことはねえ。先天的に素質が備わっているか、馬鹿みたいに強大な魔力を持ってる奴が『付加』をかけたか。もしくは、南のほうにある魔法技術が発達してる国にでも行けば似たような技術が見つかるかもしれねぇな」

「ふーん……しかし、効果の永続ねぇ。いまいちピンとこないなー」

「お前さんが元いた世界には魔法がないんだったか。そうさな……」

そこまで口にすると、ローガスは義人の護衛として傍に立っていた志信が手に持っている棍へと目を向ける。

「お前さんが持ってるその棍、『魔法文字』で魔法が刻まれてるな？」

「……それが何か？」

「『魔法文字』で刻まれた魔法を使わなければ、その棍に刻まれた魔法もある意味で永続することが可能だ。だがどんな魔法が刻んであるにしろ、使えば文字が消えて効果がなくなるだろ？　だが、永続的に『付加』をかけることができればその効果がずっと続くのさ。それこそ、棍が壊れるまでな」

そんなローガスの言葉に、義人と志信の表情が僅かに動く。

「もし炎の魔法を『付加』したら、ずっと燃え続ける剣ができると

か？　それだったら逆に不便そうだなぁ……持ち運びが大変そうだ」

義人はふと浮かんだ自分の考えに対する呆れから。

「……効果の永続か。可能かどうか、あとでシアラに聞いてみるとしよう」

志信は限定的に魔法を打ち消せる『無効化』の棍の発展を考えて。

義人と志信は互いの呟きに顔を見合わせ、小さく笑い合う。そんな二人を見ながら、ローガスは手に持った王印を傍の机へと静かに置いた。

「悪いが、俺にわかるのはこのくらいだ。あとは、巫女の嬢ちゃんにでも聞いてみるといい。もしくはアルフレッドの旦那か、お前さんが背負っている奴にでも聞いてみるといいさ」

「ノーレに？」

義人は首を傾げつつ、背中に背負ったノーレをひとまず机の上へと置く。すると、どこか不機嫌そうな声でノーレが声を上げた。

『話は聞いておった……が、ドワーフよ。何故妾に話を振るんじゃ？』

「そりゃあ、ある意味アンタが一番“適任”だろ？　この王印といい、アンタといい。召喚された国王にしか使えないって共通点があるんだ。それなら話せる方に尋ねるさ」

「なるほど。王印は喋らないし……喋らないよな？」

もしかしたらノーレのように喋るかもしれない。そんな考えが頭をかすめ、義人は机の上に置かれた王印へと目を向ける。“こちら”の世界へと召喚されてからは驚きの連続であり、義人としては例

え王印が喋ったとしても本気で驚くことはないだろう。むしろ、喜びの声を上げるだけだ。

「……ふむ、喋らないな」

どこか期待したような声を漏らしたのは志信である。だが、その言葉の通りに王印が喋ることはない。そのことに義人は残念そうなため息を吐き、机の上へ置いたノーレに目を向ける。

『……』

だが、ノーレは黙して語らない。知らないのか、それとも話したくないだけなのか。義人はノーレの沈黙から、どことなく拒否の雰囲気を感じ取って苦笑する。

「まあ、ノーレが話したくないならいいさ。理由がわかったとしても、何かの役に立つかわからないし。それに……」

そこまで言って言葉を切り、義人はローガスが机の上に置いた王印へと手を伸ばす。

「話が脱線したけど、頼みたいことがあるんだ」

「頼みたいこと？　そういや最初に言ってたっけか……玉鋼の質の向上にはもっと時間がかかるぜ？」

思い当たることが他になく、ローガスは頭を掻きながらそんな言葉を口にする。しかし、そんなローガスに義人は首を横に振った。

手に持った王印をローガスに差し出すようにしながら、先ほどまでの冗談混じりの表情を真剣なものへと変える。

「この王印を複製してほしい。ただし、特定の人間しか使えないんじゃない。新しく作った王印は、誰でも使えるようにしてほしいんだ」

「……おいおい、そいつはまさか」

頼みの内容が予想外だったのか、それとも別の理由か。ローガスは狼狽したような声を漏らす。

そして、義人は真剣な表情のままに頷き、静かに告げた。

「この国を変える第一歩だよ」

第九十八話：情報

義人が行うべき仕事の中には、当然ではあるが謁見も含まれる。
これは町や村の有権者であったり、困窮している民であったり、はたまた旅の商人や楽士であったりと様々だ。しかし、国王に謁見を望んでもそれがすぐさま叶うのはごく稀である。
最初は下の役職の者が話を聞き、必要と判断されれば、もしくは火急の報告ならば国王のもとへと話が通される。これは謁見を望む全員の話を聞いていたのでは時間がいくらあっても足りないからだ。他にも、謁見を望む者の素性を確認したり、持ち込まれた話の内容が取るに足らない可能性もあるので、その選別も兼ねている。
もっとも、中には“例外”が存在することもあり、この日義人のもとへと訪れた人物はその例外に該当する人物だった。

「ヨシト王におかれましては、ご機嫌麗しく……」
「あー、そんな堅苦しい挨拶は良いって。ほら、顔を上げてくれ」

定型的な挨拶から始めた人物は、商人のゴルゾーである。様々な理由から、“非公式”な謁見ならばすぐに叶う人物だ。
そんなゴルゾーを前に、義人は苦笑しながら右手を振った。するとゴルゾーは義人の言葉通りに顔を上げ、鷹のような目を僅かに細めて苦笑を返す。

「いえ、一国の王を前にそのような振る舞いはできませんので、はい」
「一国の王って言っても、ここは謁見の間じゃないしな。カグラも他の臣下もいないし、堅苦しく考えなくて良いさ」

そう言って、義人は肩を竦めた。

現在二人がいる場所は、義人用の執務室である。いつもならばカグラもいるのだが、政務のことで他の文官と話し合う必要があるため席を外していた。ゴルゾーはまるでそれを見計らったように訪ねてきたのだが、義人がそれを尋ねると首を横に振る。

「偶然でございます、はい」

どこか胡散臭い笑みを浮かべながらの返答だったが、それを指摘しても意味がないと判断した義人は話を先へと進めていく。ちなみに、サクラはゴルゾーにお茶を出すために新しい湯飲みを取りに行っている最中で席を外している。

「まあいいや。それで、今日は何の用なんだ？　何か変わったことでもあったのか？」

ひとまずゴルゾーを椅子に座らせ、義人も自分がいつも使っている椅子へと腰を下ろす。ゴルゾーは恐縮そうな態度で椅子に座ると、傍にあった袋を手に取った。

「今日はお城のほうで注文されていた『魔計石』を納品しにきたのですが……少々、お話したいと思うことがありまして、はい」

ゴルゾーが袋の口を開けると、水晶に似た無色の石が義人の視界に入る。

「魔法隊の方で使うのか？　……で、話したいことって？」

なんとなく袋の中に手を突っ込み、『魔計石』をつかんで引っ張り出す義人。そしてお手玉のように手の中で弄（もてあそ）んでいると、『魔計石』の色が徐々に変わっていく。ゴルゾーはそれを無感動に眺めな

がら、義人の問いに対して口を開いた。

「まずはレンシア国とハクロア国の争いに関してですが、しばらくは小康状態が続きそうです」

「ふむふむ……ちなみに、期間はどれくらいだと思う？」

「短くて三ヶ月。長くて一年といったところかと。もっとも、現状が急変するような事態が起こらなければの話ですが」

「そんなところか。面倒な事態が起こらなければ良いんだけどな」

薄緑に染まった『魔計石』を眺めながら、義人は眉を寄せる。

カーリア国にも情報を探るための諜報部隊が存在するが、その規模は小さく、国内だけで手一杯の状態である。そのため、入手できる他国の情報は量も質も実に心もとない。義人としては諜報部隊をもっと大きく、そして多くの正確な情報を手に入れられるようにしたいが、一朝一夕でどうにかなるものでもなかった。

そこで、ゴルゾーの出番である。カーリア国一の商人としての情報網を使えば、“それなり”の情報を手に入れることができる。以前からゴルゾーの情報を買っていた義人だが、レンシア国から帰国して以来、他国のことにもなるべく注意を向けるようにしていた。

「何か変化があったらすぐに教えてくれ。国の近くで物騒なことがあったら堪らないしな」

「御意にございます。しかしながら、私めの本分は商人でございますので……」

義人の言葉に頭を下げ、同意を示すゴルゾー。しかし、その後に続いた言葉に義人は苦く笑う。

「わかってるよ。でも、もうしばらく頑張ってくれないか？　諜報関係の人材が育つにはまだまだ時間がかかるし……報酬はちゃんと

払うからさ」

義人とゴルゾーの関係は、基本的にギブ&テイク。ゴルゾー自身にもこの国への愛国心や忠誠心はあるが、それだけで信頼するにはやや弱い。義人としては金を抜きにして純粋に信頼したいところだが、立場上そうもいかないのが現状だった。もっとも、護衛もつけずに一対一で対談しているあたりに信頼の色も透けてはいたが。

それに何より、ゴルゾーは生粋の商人である。信用が第一になる商人ならば金を払って依頼する限りは安心できるだろう。ゴルゾーは代々商人の家系であり、長年に渡って築き上げてきた信用を壊すような真似はしない。報酬を受け取る限りは、出来得る限り最大の成果を出す。それが、ゴルゾーという人間だった。

「でも、危険な橋は渡らなくて良いからな？」

だからというべきか、義人は思わずそんな言葉をかける。ゴルゾーは商人としての情報網を使っているものの、下手すれば他国の警戒網に引っかかる可能性もある。それを危惧しての言葉だったのだが、ゴルゾーは義人の言葉に対して僅かに笑みを深くした。

「心得てございます。しかし、出来得る限りは最上の品を届けますのが、商人としての私の信条でございまして」

「……いや、質の良い情報が手に入るのは嬉しいけど、そこは頷いてくれよ」

危険な橋を渡るなと言っているのに、ゴルゾーは何でもないと頷かない。

「相応の手当てをいただいております。ならば、その金額の分は応えるべきでしょう？」

「そりゃ依頼する側としては嬉しいけど……いや、ゴルゾーがそれで良いならいいさ。他に何か話はあるか？」

それは情報も商品だという、商人としての意地か誇りか。期待通りの働きを見せてくれるゴルゾーを前に義人はそれ以上話を続けることはせず、話題の転換を行う。するとゴルゾーもそれに乗り、すぐさま違う話題へと転じた。

「この国の中の話ですが、現状の税率では生活が苦しい者がまだ多いようで……他国と比べて、商業の発達に関して差が開いていく一方に思えます」

「う……税率は六割だもんなぁ。七割から引き下げたとはいえ、それでもまだまだ高いか。横領や無駄遣いをなくしたけど、さらに一割引き下げるのは簡単じゃないな」

「はい。お城の事情は“そこまで”存じませぬが、もうしばらく時間がかかるかと」

嘘くせえ、と内心で呟きながらも、義人はゴルゾーの言葉に頭を抱える。

「秋に納めてもらった年貢の量から考えても、なんとか国の運営がやっていけるってところだしな。さてさて、どうするかねぇ……」

呟きながら考えに耽る義人だが、すぐさま妙案が浮かぶはずもない。農業や商業を発展させようにも、一朝一夕で成しえるものでもないのだ。そんな義人を見たゴルゾーが口を開こうとすると、それを遮るようにノックの音が執務室に響く。

「はい、どうぞー」

ノックに対して義人が投げやりに入室の許可を出すと、一拍置いてからサクラが扉を開けて執務室へと入ってくる。相変わらずのメイド服姿で右手にはお盆を持ち、その上には新しい湯飲みと急須、そして茶請けの菓子が乗っていた。

「失礼します」

サクラは一礼すると、扉を閉めて義人達のもとへと歩み寄る。どこかで躓(つまづ)かないかと内心で心配する義人だったが、そんな心配を他所にサクラは盆に乗った湯飲みへとお茶を注ぐ。

「どうぞ、ヨシト様」

そう言って、サクラが湯飲みを差し出す。中に注がれたお茶からは湯気が立ち上り、それを見た義人は頬を緩めた。

「ありがとう。やっぱり、寒いときには温かいお茶が一番だ」
「ふふふ、そうですね。ゴルゾー様もどうぞ」
「ありがとうございます」

義人の言葉に小さく微笑み、サクラはお盆に乗せていた湯飲みをゴルゾーへと差し出す。湯飲みを受け取ったゴルゾーは礼を述べ、湯飲みを口をつけてゆっくりと傾けた。

「美味しいですね、はい」

その言葉を最後に、沈黙が訪れる。義人は無言のままに茶請けの菓子に手を伸ばし、ゴルゾーは何かを考えているのか、目を細めたままで一点を見据えていた。

そしてふと、そういえばと前置きしてからゴルゾーが口を開く。

「ユキ様が作られた服と女性用の下着ですが、他国で売れそうな気配がありまして」
「……ごめん、途中からよく聞こえなかった。何だって？」
「ユキ様が作られた服と女性用の下着ですが、他国で売れそうな気配がありまして」

一言一句違えずに、真顔で同じ言葉を繰り返すゴルゾー。義人は耳に指を突っ込んで軽く掻くと、首を傾げる。

「よし、オーケー。もう一回」
「ユキ様が作られた服と女性用の下着ですが、他国で売れそうな気配がありまして」

三度、ゴルゾーは真顔で繰り返す。義人は自分の耳が正常であることを確認すると、頭痛を堪えるように片手で顔を覆った。

「いや、悪い。ゴルゾーが何を言っているのかはわかるんだけど、意味が理解できないんだ……というか、いつの間にそんなことを？」

以前から優希が手作りで服飾類を作成していたことを思い出す義人だったが、作ったその後までは気にしていなかった。精々身近な人物が使っているのだろう、という程度にしか考えいなかった義人だが、どうやら話が違うらしい。

「ユキ様は、元々ヨシト王が居られた世界の服を参考に作ったと仰っていまして……異世界の意匠を取り入れた服ならば好事家の目にでも留まるかと思い、他国で商いを行う際に持っていってみたのです。しかし、これが思ったよりも好評でして。下着のほうも、他国

の貴族の婦人方に好評をいただきました」
「そうなのか？　でも、優希は売るほどに大量の服や下着を作ってたのか？」

いつの間にと眉を寄せる義人だが、それを聞いたゴルゾーは不思議そうな表情を作る。

「はい。ヨシト王にも許可はもらっているとお聞きしておりますが……」
「許可？　……そんなの出したっけ？　サクラ、ちょっと優希を呼んできてくれるか？」
「かしこまりました」

義人の頼みに、サクラはすぐさま頷いて応える。そして執務室から退室すると、三分も経たない内に優希をつれて執務室へと戻ってきた。

「義人ちゃん、呼んだ？」

呼ばれた優希は、傍に小雪を従えながら不思議そうな表情で義人を見る。

「ああ、呼んだ。ちょっと聞きたいんだけど、優希は作った服とかはどうしてるんだ？」
「服？　下着とかも？　それだったら使わない分はゴルゾーさんに渡してるよ」

義人の問いに対して、優希は不思議そうな表情を崩さないままにそう答える。その間に小雪は義人の傍へと移動し、一メートルを超えた体躯で甘えるようにのしかかった。

「キュク、キュー」
「ちょ、重っ！？　こ、小雪はちょっと大人しくしててくれ。それでさ、俺って何か優希に対して許可を出してたっけ？」
義人に構ってほしいのか、のしかかりながら鳴き声を上げる小雪。義人はそんな小雪をなだめつつ、優希との会話を続ける。
「許可……あ、うん。ほら、前に下着を作ってた時にもらったよ。それで洋服とかも一緒に作ってたんだけど……駄目だったかな？」
「いや、駄目ってわけじゃないけどさ。そういえば出してたっけ……」
「それがどうかしたの？」
以前の記憶を引っ張り出し、納得する義人。優希はそんな義人の様子に首を傾げる。
「それが、優希が作った服や下着が他国で売れそうだってゴルゾーから聞いてね。それで話をしているうちに、優希の話になって」
説明をするように義人が答えると、優希は軽く頷いてゴルゾーへと目を向けた。
「そうなんだ。ゴルゾーさん、どうだったの？」
「好評でございました。つきましては、新しい服などがありましたら買い取らせていただきたいのですが……」
ゴルゾーは優希の言葉に商人としての顔を覗かせ、それを見た優希は困ったように微笑む。

「いくつかあるけど、あまり量はないよ？」
「私としてはまったく構いません。では、買い取り額に関してですが……」

義人とサクラを脇に、商談を始める優希とゴルゾー。義人は二人の声を聞きながら、自分が今着ている服へと目を落とす。
着ている服は優希の手によって作られたものだが、日常で使う分にはまったく支障はない。手縫いで作られているので少し縫い目が粗いところもあるが、気になるほどでもなかった。タグも縫い付けられており、『ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＹＵＫＩ』と書かれているのはちょっとした冗談だろう。
義人は少し温くなったお茶を軽く飲み干し、ため息を吐く。

「やっぱり、元の世界の知識を一番有効利用しているのは優希だよなぁ」

それだけを呟いて、目の前で行われている商談に目を向けた。他国で売れるのならば、輸出品として正式に採用するのも良いかもしれない。
そんなことを考えながら、商談に加わる義人であった。

第九十九話：とある冬の朝の驚愕

それは、とある冬の朝のことだった。

十二月も半ば。寒さも本格化し、朝晩の冷え込みが厳しくなる時期。この時期ともなると、朝に布団から抜け出すことが困難という者も多いだろう。

少なくとも、義人にとってはそうだった。人肌で適度に温かくなった布団には、きっと何かしらの魔力があるに違いない。義人は寝惚け頭でそんなことを考えつつ、惰眠を貪るべく寝返りを打つ。

それでも早朝に行う志信達との自主訓練のことが頭を掠めるが、義人はあと少しだけと自分に言い訳しながら布団を引き寄せ、

「……ん？」

伸ばした手に、奇妙な感覚の“何か”が触れた。

“それ”は一本一本が洗練された絹のような手触りで、数は多い。義人は寝惚けたままでその“何か”の周辺を手探り、今度は人肌の温かさが指先に触れた。軽く押してみると、餅のような柔らかさが指先に伝わってくる。

「――――――」

目が、覚めた。

義人は油が切れて錆び付いた機械のように、横になったままでゆっくりと自分の傍らへと首を倒す。

そして、視界に入ったのは“何か”によって膨らんだ布団の姿。

義人は寝起きで働きが悪い頭を動かし、一つの結論に達した。

――――とりあえず、布団を剥(は)いでみよう。

手っ取り早く現状を確認できる一手である。
もしや他国の暗殺者が紛れ込んだか、という考えも僅かに浮かんだが、どこの世界に暗殺対象の布団へと潜り込む暗殺者がいるだろうか。
義人は首を横に振り、頭に浮かんだ方法を早速実践するべく布団の端をつかみ、一息に布団を剥いだ。

「……は？」

そして、思わずそんな声を漏らす。だが、続いて困惑したような声が勝手に口から零れる。

「俺……疲れてんのかな？」

目の前の光景から目を逸らし、深い、深いため息を吐く。寝起きだがどうやら自分は疲れているらしいと、朝から気が滅入る気分だった。義人はため息を吐きながらも今しがた見た光景を疑い、己の正気を疑い、最後に本物の現実かを疑う。
目を擦るが、幻ではない。頬をつねるが、夢ではない。すなわちこれは現実だと、そう理解せざるを得ない義人はもう一度自分の隣に目を向ける。

「んぅ……すー……」

端的に言うならば、小さな女の子が寝ていた。
歳は四歳か五歳ほどに見え、肩口まで伸びた黒い髪は先ほど義人が触っていたものだろう。心底安心したようにあどけない顔で眠り、規則正しく寝息を立てている。だが、その顔立ちを確認した義人は思い切り眉を寄せた。

「いや、誰？　ど、どこかで見たことあるような……ん、んん？」

ひとまず現実から逃避し、己の記憶を探る。しかし、すぐさま現実から逃げている場合ではないと気付いて正気に戻った。そして、敢えて意識していなかった部分を意識する。

「待て、待て待て待て。この子なんで裸なんだよ！？　ちょっと待て！　待て俺！　何があったんだよ俺！？」

ひたすら自問自答する。一糸纏わず、それでいて幸せそうに眠る少女を横目に義人は頭を抱えた。

「え……何？　ドッキリ？　というか、誰！？」

思考がまとまらない。義人は深呼吸をしてみたが、特に効果はなかった。

「待て待て待て待て……とりあえず、落ち着くんだ俺」

落ち着けと、とりあえず机の上に正座しながら自分に言い聞かせる義人。傍から見れば、どう見ようとも落ち着いているようには見えない。

義人は顎に手を当てながら机から下りると、今度は屈伸運動を始める。しかしそれでも落ち着かなかったのか、壁に背中を預けて目を閉じた。

『のう、ヨシト』

「ストップ！　ちょっと待ってくれノーレ！　今考えてる途中だから！」

『う、うむ……』

奇妙な行動を繰り返す義人を見かねたのか、ノーレが声をかける。しかし、返ってきた義人のこれまでにないほど切羽詰った声に言葉を途切れさせた。

落ち着いて考えるべくベッドに腰を下ろし、義人は右手の人差し指で眉間をノックする。

「思い出せ……思い出すんだ、俺。昨日、何があった？」

呟きながら、義人は前日の記憶を掘り返していく。しかし、該当するような出来事は何もない。

「……何もない……よな？」

特に変わったことのない、平凡な一日だった。朝はいつも通りに起き、日中はいつも通りに政務をこなし、夜はいつも通りに眠る。寝る際は確実に一人だった。それは間違いないと断言できる。

「だったら、この子は誰だって話だよ」

何もなかった。何もなかったはずなのだ。

義人は安らかに眠る少女を前に、腕組みをしながら首を傾げる。

コンコン。

不意に、ノックの音が響く。その音に義人は文字通り飛び上がり、扉の方へと目を向けた。

「ヨシト様、起きていらっしゃいますか？」

「ちょ、待っ」

扉越しに聞こえるサクラの声。義人は咄嗟にそれを止めようとするが、動揺が酷かったのか口から出たのは小さな声だった。

「失礼します」

扉が開く。サクラはいつものように義人の着替えを手に持って入室し、ベッドの上に目を向けた。おそらくは、義人が寝ていれば起こそうとでも考えていたのだろう。

「お着替えを……」

そこで、言葉が止まる。そして、時間（とき）も止まった。

言葉を途切れさせたサクラの視線は、ベッドの上へと向いている。その傍に座っている義人も視界に入ってるはずだが、義人はサクラの視線が自分から微妙にずれているのを感じた。

不意に、バサリと義人の着替えが地面に落ちる。しかしそれに気付いていないのか、サクラはあちこちに視線を彷徨わせ、その後に深々と頭を下げた。

「し、失礼しました！」

慌てたように扉を閉める。だが、落とした服が引っかかって扉が閉まらない。それでもサクラは扉が閉じたと思ったのか、慌しい足音と共に駆け去っていく。その素早さは、義人が待ってくれと声をかける暇もなかった。

そして数十秒後。今度は慌しい足音が義人の寝室へと接近してくる。

例えるなら『ドドドドド』という地鳴りのような幻聴が聞こえ、

義人は諦観の表情を浮かべた。

「ヨシト様っ！」

カグラである。驚きのような、恐怖のような、様々な感情が混じり合った表情で扉を吹き飛ばすように開け、ベッドの上に目を向けた。

そして、膝から崩れ落ちた。

「まさか……まさか、ヨシト様がそんな趣味だったとは……」

この世の全てに絶望したとでも言わんばかりに、カグラが呟く。するとカグラを呼びに行っていたのか、現れたサクラが気遣わしげにカグラの肩を叩いた。

「カグラ様……」

「そう……そう、ですか。いえ、そうだったんですね……でも、それなら今まで誰にも手を出さなかったのにも納得が……わたしやサクラに対してあまり反応してくれないから、女性に興味がないのかなとか、今度はミーファちゃんに頼んで頑張ってもらおうかなって思ってたのに……」

カグラの言葉を聞いた義人は、とりあえず首を横に振る。

「待て、待ってくれカグラ。後半がかなり気になるが待ってくれ。これは何かの間違いでだな……」

「……んぅ？」

義人がそこまで言ったところで、件（くだん）の少女がゆっくりと目を開ける。騒ぎで目が覚めたのか、眠そうに目を擦って周りを見回し、

「あ、おとーさん」

そして、嬉しそうに義人へと抱きついた。

「……」

「……」

「……」

三者三様に絶句する。

義人は少女の発言の意味が理解できず、サクラは真顔で目を見開き、カグラは何かを否定するように頭を振る。

「あー……今、何て言ったのかな？」

沈黙していても始まらない。そう判断した義人は、耳の調子が悪くて聞き間違えたのだと自分に言い聞かせながら少女へと尋ねる。

「おとーさん？」

すると、不思議そうに首を傾げながら少女が答えた。

――おとーさん？　おとうさん？　お、倒産？　いやいや、たしかにこの国の財政は厳しいけど、すぐさま破綻するほど酷くはないし、特産品の目処も立ったし、そういえば志信との自主訓練があったんだっけ、いや、今日の朝食はなんだろうなぁ。親父とお袋元気かなぁ……。

真面目な表情で支離滅裂に現実逃避する義人。そんな義人の腰元にしがみつき、何が楽しいのかニコニコと笑う少女。そして、そん

な義人と少女を真顔で見つめるカグラとサクラ。

「ヨシト様……」

「いや、これはその、なんだろう？」

つ、と冷や汗が義人の頬を滑り落ちる。口から出たのは、要領を得ない言葉。

自分を見る二人の視線の色が、とりわけカグラの視線があまりにも透明すぎて、義人は答える言葉を見つけることができなかった。しかも、カグラの視線にはどこか絶望に似た色が漂っている。

――なんだ？　この状況は、なんなんだ？

カグラとサクラからは真顔で見つめられ、自身の腰には一糸纏わぬ少女がしがみつくこの状況。義人は夢でも見ているのかと自分の正気を疑ったが、生憎（あいにく）と目は覚めている。

それでも何か突破口を見つけなくてはならない。僅かに残っていた冷静な理性がそう告げ、義人は自分の腰にしがみつく少女へと視線を落とす。

肩まで真っ直ぐに伸びた、黒い絹のような髪。力のある黒色の瞳が印象的だが、その顔立ちはどこか義人の記憶に触れるものがある。義人はその感覚が何なのかと、少女の顔を見ながら自身の記憶を漁っていく。

「おとーさん？　どうかしたの？」

義人の視線に気付いたのか、少女は笑顔のままに首を傾げる。何も知らないような無垢な笑顔を前に、義人は眉を寄せた。

「そのおとーさんっていうのは……あ」

そして不意に、思い当たった記憶に声を漏らす。
自身を見上げて無邪気に笑う少女。その笑顔に、義人は見覚えがあった。

それは、今は遠い過去の記憶。今を遡ること十三年ほど昔の、とある記憶。
両親の足にしがみつき、嫌だと泣き喚いていた少女。しかし己が差し伸べた手を握り、嬉しげに笑った幼馴染みの少女。それ以来、長い間隣を歩いてきた少女。

――そうか、優希だ。小さい頃の優希の笑顔にそっくりなんだ。
でも、どこか違和感が……。

僅かな疑念が混ざったものの、記憶が合致すれば後に残ったのは納得だけだった。少なくとも、義人が“その顔”を忘れるはずもない。
少女の顔立ちは、幼い頃の優希にそっくりだった。それでいて、雰囲気と目つきが僅かに違う。しかしそれは、優希と同様に見慣れたもののように思えた。

「ま、さか……俺か？」

鏡の前に立てば、きっと似たような目つきの男が映るに違いない。
先ほどから思考することを放棄しかけていた頭がそう告げ、義人は僅かに目を逸らす。

――幼い頃の自分と優希の顔立ちや髪の色を足して、二で割ったらこんな感じかなぁ。

思わず、義人は現実逃避気味にそんなことを考えた。顔立ちは優希にそっくりで、何故か髪の色や目つきや雰囲気が自分に酷似している少女。そして、『おとーさん』という言葉。

「その、ヨシト様……」

義人が考えをまとめるその瞬間、おそるおそるといった口調でカグラが声を上げる。どこか怯えすら含んで聞こえるその声色に、義人は何事かとカグラへ目を向けた。

「あー……何か？」

「この子は、もしかしてですが、その、えっと」

言葉が見つからないのか、カグラは途中まで話していた口を閉じ、しばらくしてから開くという動作を繰り返す。目尻に光るものが見えたのは、きっと義人の目の錯覚だろう。どこか悲しげに視線を逸らすカグラの横では、サクラが手拭いを差し出そうとしている。

場の空気が混乱で満ち、義人がとりあえず土下座でもして謝ってみようかと思った瞬間、それまで黙っていたノーレが声を上げた。

『落ち着かんか、戯けめ。それと巫女、お主もそのような様でヨシトの補佐が務まると思っておるのか？』

「ノーレ？　それは一体……」

『まだ気付かんのか？　いや、ヨシトでは気付けぬでも仕方はないかもしれんが、巫女とメイド。少なくともお主らが気付かんでどうするんじゃ？』

それだけ動揺しているのかもしれんが、と付け足し、ノーレはため息らしき声を漏らす。

『まったく、見た目に惑わされるとは情けないのう。たしかに幼い割には大した変化じゃ。そこは各属性の龍の上に立つ龍種と褒められるが……ここまで強力な魔力を隠そうともしない辺りは抜けておるわ』

呆れたようにノーレが言うと、それを聞いたカグラとサクラの表情が真剣なものに変わっていく。そして義人にしがみつく少女を注視すると、表情を驚きへと変えた。

「この魔力は、まさか……」

僅かに震える声で、サクラが呟く。すると、それを肯定するようにノーレが言葉を返した。

『やっと気付いたか。そうじゃ、その子はコユキじゃ』

ノーレの言葉に少女……小雪は無邪気に微笑む。

義人はノーレの言葉を無理矢理理解すると、自身にしがみつく小雪へと顔を向けた。

「えっと、その、小雪？」

「なに？」

「いや、本当に小雪？」

「うん」

質問に対して返ってくる明確な答え。義人は右手を額に当てると、ため息混じりの声を吐き出す。

「なんだ、夢か」

『現実から逃げるでない。小雪が変化をしているだけじゃ』

「現実から逃げるなって言っても……いや、レンシア国でもフウが人に化けてたか……しかし、人に化けた途端に人語を喋ってるっていうのも……」

『龍は人間よりも賢いからのう。人語を操るぐらいなら容易かろうて』

義人とて、元の世界でも人間以外の存在が人間に化けるという話は聞いたことがある。レンシア国で風龍のフウが人に化けた姿も見ている。しかし、小雪の顔が自分や優希に似ているという点が、義人から冷静さを奪い取っていた。

「おとーさん、どうかしたの？　どこかいたいの？」

そうやって義人が悩みこんでいると、それまで笑顔だった小雪が一転して泣きそうな表情を浮かべる。その表情が幼い頃の優希に重なって見えた義人は、動揺を抑えて小さく笑う。

「なんでもないよ。でも小雪、どうして俺のことを『おとーさん』って呼ぶんだ？　俺としてはできれば名前のほうがいいなー、なんて思うんだけど」

「え？　おとーさんはおとーさんだよ？」

心底不思議そうに答える小雪。それを聞いた義人は、ひとまず論理的な解答は得られないと判断してサクラに目を向けた。

「サクラ、とりあえずこの子が着るものを持ってきてくれるか？　そろそろ優希も起きてるだろうし、聞けば子ども服か小さい服の一着くらい出してくれるだろ」

「わ、わかりました」

事の成り行きを見ていたサクラだったが、義人からの指示で我に返る。そしてすぐさま踵を返そうとしたが、それよりも早く小雪が口を開いた。

「おとーさん」
「だからおとーさんと……まあ、今はいいや。何？」
「あのひと」

小雪は義人の寝巻きの裾を引っ張り、サクラのことを指差す。

「サクラのことか？」
「サクラ……サクラおねえちゃん？」

義人の言葉を復唱し、小雪はきょとんとした表情でそんな言葉を口にする。それを聞いたサクラは驚きの表情を浮かべ、数秒の沈黙の後にフラフラと小雪に歩み寄って抱き締めた。

「ヨシト様！　この子持って帰ってもいいですか！？」
「どこにだよ」

疲れたように突っ込みを入れる義人。何やら、小雪の言葉がサクラの琴線に触れたらしい。サクラは満面の笑顔で小雪を抱き締め、しかし途中で我に返ったのかすぐさま小雪から離れた。

「し、失礼しました。つい……」
「……いや、別に俺は良いけどさ」

可愛いものが好きなのかと義人は思ったが、今聞く必要もない。そんなサクラに抱き締められた小雪は、気に留めた様子もなくサクラの横へと視線を移した。

「な、なんですか？」

急に視線を向けられたカグラは、何故か警戒するように声をかける。正体が小雪だとわかりはしたが、義人を『おとーさん』と呼んでいる辺りに何か含むものがあるのか。小雪を見るカグラの目はどこか動揺の色が見えた。

「カグラがどうかしたのか？」

嬉しそうな顔でサクラが部屋から出て行くのを尻目に見ながら、義人は足元の小雪に尋ねる。小雪はカグラの顔をしばし注視すると、最初のように義人の腰元にしがみつき、頬を膨らませて横を向いた。

「カグラ」

呼び捨てである。しかも、声は非常に不機嫌そうだった。

「なんでわたしは呼び捨てなんですか！？」

対するカグラは、サクラとの扱いの違いに声を荒げる。すると、小雪は目を細めて不機嫌そうな態度を崩さないままに答えた。

「だって、うすいもん」

「何が薄いというのですか？」

フフフ、とカグラが笑顔で尋ねる。しかし、微妙に頬が引きつっているのを見て義人は無意識の内に一歩後ろへと下がった。

「えっと……そんざい？」

「それは、影が薄いとでも言いたいのですか？」

カグラは笑顔で小雪と問答をするが、目が笑っていない。対する小雪は、唇を尖らせて義人にしがみつく力を強める。しかしそれは、見た目にまったく釣り合わないほどの力強さだった。幼い体躯に見合わぬ剛力に、義人の体が悲鳴を上げる。

「むー……おとーさん、カグラがうるさい」

「ちょ、それはいいから骨が！？　ミシミシ言ってるから！　力を入れすぎっていうか一体どこからそんな力がっ！？」

しがみつかれた部分から聞こえる不穏な骨の音に、義人は必死な声を上げた。演技でもなく、これ以上力が強まれば骨が折れそうに感じるほどの力である。するとそんな義人の必死さが伝わったのか、小雪が慌てて手を離した。

「あ……ごめんなさい、おとーさん」

そして目に涙を溜めて、小雪が頭を下げる。それを見た義人は、“第三者”の目から見れば自分がどんな状況かを悟って首を横に振った。

「い、いや、わかればいいんだよ、うん」

何も知らない者の目から見れば、今の状況はかなり体裁が悪い。一糸纏わぬ小さい女の子を泣かせているという、元の世界であったならば通行人が迷わず警察に通報するぐらいには“危険な”状況だった。

『ふむ、見た目は幼くともさすがは龍族じゃな。離すのがあと数秒

遅ければ、腰骨辺りが折れていたかもしれんのう』

そんな義人の内心を知ってか知らずか、ノーレが興味深そうな声を上げる。それを聞いた義人は、小雪の頭を撫でながら首を横に振った。

「それ、洒落になってないっすよノーレさん」

『洒落ではなく事実じゃ』

「あの、折れたらわたしが『治癒』をしますから！」

「なんだかんだでカグラも冷静じゃないな！？　論点が違うから！？」

そう言う義人も冷静であるとは言い難かったが、それを告げる者は誰もいない。

そうやって義人達が騒いでいると、寝室の扉がノックされる音が響いて全員口をつぐんだ。

「義人ちゃん、言われた通り小さめの服を持ってきたけど……」

そう言って寝室に入ってくるのは、優希とその背後に続くサクラである。

「あ、ああ。悪いな優希、こんな朝早くから」

「おかーさん！」

義人の言葉を遮るように、嬉しそうな声を上げる小雪。小雪は笑顔を浮かべると、部屋に入ってきた優希のもとへと駆けていく。そして軽やかに跳躍すると、真正面から優希に飛びついた。

「わっ……と。もしかして、小雪？」

「うん！」

飛びついてきた小雪を焦ることなく受け止め、優希は首を傾げる。
そんな優希の問いに対して小雪が元気良く頷くと、優希は苦笑混じりに笑った。

「女の子が裸で走り回っちゃ駄目だよ？」

――ツッコミどころはそこなのか？

義人は思わずそんなことを考え、疲れたように頭を振る。

「なあ優希、そこは驚くところじゃないか？」
「え？　どうして？」

義人に問いかけに対して、優希は不思議そうな顔で首をかしげた。

「いや、どうしてって小雪だぞ？　昨日までは龍の姿だったんだぞ？」
「うん。でも、龍って人の姿に化けれるよね？　サクラちゃんに小雪が人の姿に化けたって聞いたし、レンシア国にもフウちゃんがいたじゃない」
「そりゃあ……そうか」

思わず反論しようとした義人だったが、“この世界”では十分に有り得ることかと納得する。そして、小雪に服を着せ始めた優希の様子を眺めながら小さくため息を吐いた。

「おとーさんにおかーさん、ねぇ」
『おや、どうしたんじゃ『おとーさん』？』

「これから大変そうだなぁと……って、ノーレまでそんなことを言うのやめてくれよ」

『冗談じゃ』

からかいの言葉を投げかけるノーレだったが、義人としては笑えない。義人は疲れたように天井を見上げ、ポツリと呟く。

「とりあえず……今朝の早朝訓練は中止だな」

今日も朝から訓練を行うであろう親友に心中で謝罪の言葉を投げかけ、義人はもう一度だけため息を吐くのだった。

第百話：驚愕、その後

「ふむ……義人は寝坊でもしたか？」

早朝の訓練が終わり、ミーファ達と共に朝食を取った志信は義人がいるであろう執務室へ向けて足を進めながらそう呟いた。石造りの廊下を何気なく進みながらも、赤い絨毯が敷かれているため足音も立たない。

志信はそろそろ寒さが厳しくなってきたなと心中で零し、きっとそのせいで義人も布団から抜け出せなかったのだろうと小さく笑う。今日の近衛隊の訓練を街の外で行うための許可が欲しかったのだが、その際の雑談の種になりそうだ。

すでに午前九時を回り、城の中ではあちこちで今日一日の仕事を開始している文官の姿が見受けられた。志信はそんな文官達を横目に王用の執務室へとたどり着き、僅かに首を傾げる。

「……何をしているんだ？」

そんな言葉をかけたのは、守衛の兵士に対してだった。いつもならば扉の両脇に立っているはずの守衛の兵士が、何故か扉から離れた位置に立っている。それを疑問に思って声をかけた志信だったが、返ってきたのはどこか疲れたような言葉だった。

「その、空気が悪くてですね……」

「空気が悪い？　よくわからないが、通らせてもらうぞ？」

兵士の言葉を鸚鵡返しにしながら、志信は執務室の扉の前へと立つ。そしてノックをしようとして、腕が止まった。

「……む？」

無意識の内に眉を寄せる。妙な気配とでも言うべきか、どこか重苦しい空気が扉越しに感じられ、志信は思わず疑問の声を上げた。志信自身が何かしらの危険を感じたわけではないが、張り詰めたような気配が伝わってくる。

「何かあったのか？」

誰にともなく問いかけるが、返ってくる答えはない。志信は埒が明かないとばかりに頭を振ると、止めていた腕を動かして扉をノックした。

「義人、俺だ。入ってもいいか？」
「……ああ、志信か。どうぞー」

扉越しにかけた声に返ってきたのは、兵士とは比べものにならないくらい疲れたような声。一拍遅れて返ってきた声が義人の声だと判断すると、志信は内心で疑問を感じながら扉を開ける。

「失礼する」

一言そう告げ、志信は執務室へと足を踏み入れていく。

「今日は近衛隊の訓練を街の外で行おうと思うのだが、その許可を……」

志信は入室すると、書類の山を相手に作業をしている“ように見える”義人へと話を切り出した。だが、その言葉は途中で止まる。

「おとーさん、これなに？」

義人の膝の上に座った、見知らぬ少女がいたために。

「……」

無言のまま、志信は少女へ観察の目を向ける。

座っているため正確にはわからないが、身長はおおよそ一メートル前後。体格に比べて少し大きめの白いセーターと膝丈まで伸びた黒いスカートを身に付けており、真っ直ぐな黒髪は肩まで伸びている。

少なくとも、志信の記憶の中に該当する人物はいなかった。しかし、見知らぬというにはどこかで見た顔である。矛盾しているようだが、志信はその見知らぬ少女の名前を口にしていた。

「北城、背が縮んだか？」

「……そこで真顔でボケれるところが最高だよ、志信」

「何？　違うのか？」

髪の色は違うものの、顔立ちは優希に似通っている。それでいて、眼差しはどこか義人に似ていた。だが、全体的には優希の面影が見えたが故の発言だったのだが、答えは外れている。ちなみに、間違えられた優希は少女の体の大きさに合った服を作りに行っているため席を外していた。

思えば、志信も動揺していたのだろう。義人と机を並べ、黙々と書類を片付けているカグラの雰囲気に。そしてカグラの雰囲気に気圧されているのか、義人の傍に控えているサクラもどこか挙動不審だった。

「何かあったのか？」

時折、義人に対して複雑そうな視線を向けるカグラを目の端に捉えつつ、志信は尋ねる。すると、義人は自分の膝の上に座る少女へと目を向けた。

「何かあった、と言うべきか……なあ志信、この子誰だと思う？」

そう言いつつ義人が少女の頭に手を乗せると、少女は嬉しそうに笑う。その笑顔がどう見ても優希と同じものにしか見えなかった志信は、僅かに首を傾げた。

「北城ではないのか？」

「……オーケー、冗談じゃなくて本気だったんだな。この子は……」

義人が少女の名前を口にしようとした時、不意に少女が志信の方へと目を向ける。そして数度瞬きをすると、義人の膝から降りて志信の方へと足を進め、不思議な生き物でも見るように志信を見つめた。志信の腰までしか身長がない少女は見上げて見つめ、反対に志信は少女を見下ろす。

「……もしや、小雪か？」

その不思議そうに自分を見る視線に、志信は自然とそう口にする。龍の時は緑色の瞳だったが、同じように自分を見上げてくる視線は忘れようもない。

「へんなひとだ……」

すると少女……小雪は肯定も否定もせずにそう答えた。視線を志信から外さず、まるで内面までも見通すように凝視する。

「変な人？」

志信は小雪の言葉を鸚鵡返しに返し、ひとまず小雪と目の高さを合わせようと膝を折った。だが、それを察した小雪は驚いたように後ろへと跳ぶ。そして小動物じみた素早さで義人の傍まで後退すると、志信から隠れるように義人の背中へと飛びついた。

「おとーさん、あのひとへん！」

「変って、そんな大声で言うんじゃないよ。というか、志信のどこが変だって？」

志信を変な人と呼び、その後自分の背中へと飛びついてきた小雪に義人は眉を寄せながら尋ねる。朝から振り回されっぱなしで、その声には多少の疲労がにじんでいたが小雪が気付いた様子はない。

「えっと、その……こう、ね。まりょくがへん？」

「はい？　魔力が変？」

「んーっと、ふつうのひととちがう？　そとからぎゅーってなってない」

「いや、意味がわからないから」

あまりに抽象的な小雪の言葉に、義人は首を横に振った。小雪は上手く伝えられるように頭を捻っているが、言葉が見つからないのか唸るだけだ。義人はそんな小雪に返事を期待せず、志信へと目を向けた。

「よくわからないけど……とりあえず志信、何か用があったんだろ？」

「ん、ああ。今日は近衛隊の訓練を街の外で行おうと思うのだが、

その許可を取りにな」
「街の外で？　別に良いけど、あまりしごきすぎるなよ？」
俺のところに嘆願が来るから、という言葉は飲み込み、義人は志信の頼みを了承する。
「善処する。それと……」
許可を受け取った志信は、義人に今朝の訓練に来なかった理由を聞こうとした。だが、義人の背中にしがみつく小雪と妙な具合に落ち込んでいるカグラを見て納得したように頷く。
「……いや、なんでもない。それでは失礼する」
きっと、朝から大変だったのだろう。何が大変だったのかはおおよその予想でしかないが、それだけでも納得を覚えて志信は執務室から退室する。
そして、執務室の扉を閉めたところで首を傾げた。
「……結局、俺の何が変だったのだろうか？」
小雪からの変な人呼ばわりに対して内心で少しだけ凹みつつ、志信は訓練に向かうのだった。
「ふぅ……これで今日の分の書類は終わりか」
机に置かれた書類の内、最後の一枚を手に取って義人は呟く。

「そうですね」

そんな義人の言葉に、視線を合わせずカグラが棒読みで答えた。
それを聞いた義人は、執務室の中の空気が軋む幻聴を聞きながら王印を手に取る。

「あの、カグラさん？　何故にそこまで怒っていらっしゃるんでしょうか？」

ひとまず、下手に出る義人。原因はおそらく、自分の膝の上で心地良さそうに眠っている小雪の存在だろう。
志信を変な人呼ばわりした理由を上手く表現しようとしていたが、考えることに飽きたのか今は義人の膝の上に移動して眠っている。
だが、それはカグラの機嫌が悪くなる理由にはならないはずだ。
朝方から現在にかけ、加速度的に機嫌が悪くなっていくカグラにはここ最近の上機嫌振りは見る影もなく、部屋に満ちる空気を刺々しいものへと変化させている。今までも同じような空気になったことはあるが、今回は少しばかり空気の鋭さが違う。最初はカグラと同じような雰囲気をしていたサクラが、今では部屋の隅で小さくなっている程度には空気が張り詰めていた。
カグラは義人に問いに対して窺うような、それでいて悲しげな目を向けると、小さく頭を下げる。

「申し訳ありません。少々、心の折り合いがつかないもので」
「は、はぁ……折り合いねぇ」

カグラの言葉に頷きながら、義人は最後の書類に王印を押す。そして小雪を膝の上で心地良さそうに眠る小雪を見ると、何の折り合いだろうかと内心だけで首を傾げた。

「とりあえず、今日の分の仕事は終わったから城の中でも見てくるよ」

そして、ひとまず逃げの一手を打つ。義人としても、今回のことは少し考える時間が欲しい。何せ、元の世界にいた頃は想像もつかなかった事態に遭遇したのだ。龍が人間に化けるなど、それこそ夢物語の世界である。

「わかりました」

そんな義人の言葉に、カグラは特に反対することなく頷いた。義人はそんなカグラの反応に少しばかり不安を覚えたが、それを振り払うようにノーレを背負う。そして眠っている小雪を両手で抱き上げると、執務室を後にするのだった。

「いや、針の筵というか空気自体が針みたいだったな。胃に穴が空きそうだ」

気まずい空気から開放された義人は、眠っている小雪を優希に託した後、冗談混じりにそんな言葉を口にする。すると、義人の背中に背負われたノーレから返答の声が響いた。

『巫女の気持ちも察してやれ。というか、これもある意味お主の自業自得じゃろうて』

「自業自得……いや、自業自得って言われてもなぁ……っと、そういえばサクラの時みたいに何か注意するかと思ったんだけど、何も言わなかったな？」

『あの時とは事情がちと異なるでの。じゃから、その辺りも含めて

自業自得じゃと言うとるんじゃよ、妾は』

呆れたようにそう言うと、ノーレは締めくくりの言葉を投げかける。

『まあ、その辺りは当人同士で解決するが良い。それで、これからどこに行くつもりじゃ？』

「どこにって言われても、特にあてはないな。適当に城の中を彷徨ってみようかと……お？」

話の流れに合わせて周囲を見回した義人だったが、ふと見慣れない扉を目にして足を止めた。大きさは大人が二人並んで通れるぐらいで、扉自体は簡素な装飾が施された白木造り。義人は背後についてくる護衛の兵士へと振り返ると、扉を指差す。

「この扉はどこに繋がっているんだ？」

こちらの世界へ召喚されて半年以上経つが、まだまだわからないことも多い。義人とてこの城の全容を把握しているわけでもなく、見知らぬものには興味が惹かれた。兵士達は義人が指差した扉を見ると、僅かに目配せを交わす。

「その扉は城の外へと続いておりまして……」

「外？　でも、こっちの方には訓練場もなければ魔力の回復施設もないだろ？」

「はい。しかし、その扉は召喚用の祭壇へとつながっています。平時であれば、見張りの兵士以外はほとんど人が寄り付かない場所でして」

「……へぇ、召喚用の祭壇か」

兵士の言葉に対して、義人は呟きながら僅かに表情を変えた。そして何事かを考えるように目を細めると、その扉へと手をかける。

「せっかくだ。少し見てみるとしようか」

――――カグラの魔力が全て回復すれば、多分世話になるだろうし。

内心でそんなことを考えながら、義人は扉を開けるのだった。

扉を開けて歩くこと一分少々。城の東側に存在する小さな林の中に、その建物は建っていた。周囲の木々がその存在を隠そうとしているのか、遠目から見ただけでは見つけることは難しいだろう。事実、義人もその存在を聞いていなかったら気付けないほどだった。

「これが召喚用の祭壇か……」

林の中に建つ建物を見て、義人は小さく呟く。

大きさは縦横ともに二十メートルほどで、高さは六メートル弱。高さ自体は二階建てだが、一階はないらしく入り口などは見当たらない。その上、天井にあたる部分には屋根がなかった。建築に使われたのは木材だけらしく、その姿は京都にある有名な寺の舞台のようにも見える。

国王を召喚する施設ということもあってか、あちこちに見張りの兵士の姿もあった。

「なんというか、貫禄があるなぁ。いつ頃から建ってるんだ？」

『建てられたのは建国の頃じゃな』

「へぇ……建国から存在してるってことは、五百五十年くらい前か

？　よく壊れたりしなかったなぁ」

『あちこちに『強化』の術式が刻んであるからのう。余程のことがない限り、壊れることはないじゃろう』

義人が物珍しいという心境で祭壇を見ていると、目の端に祭壇の脇に二階に続いてるらしき階段が映る。それを見た義人は、特に考えることなく階段の方へと足を向けた。

「お待ちください、ヨシト王」

だが、そんな義人を遮るように見張りの兵士が声を上げる。兵士は小柄の女性だったが、魔法剣士なのか動きやすさを重視した鎧を身につけ、腰には刀を提げていた。

「な、何？　何かあったか？」

義人は兵士の方から声をかけられたことに少しだけ驚きつつ、その兵士のほうへと向く。すると、兵士の方も自分から義人（こくおう）に声をかけたことに緊張しているのか、直立して口を開いた。

「し、召喚の祭壇はこの国の中でも重要な施設でして、みだりに立ち入ることは禁じられています！」

「いや、禁じられているって……俺でも立ち入っちゃいけないのか？」

一応国王なんだけど、と付け足す義人。国王が入ってはいけないのでは、国中で入れる人間がいない。そう含ませた義人の言葉に、見張りの兵士は額に汗を浮かべながら答える。

「は、入られるのなら、カグラ様に許可をいただいてからにしてい

ただきたいのです」
「カグラに？　ああ、召喚の巫女だからか……その辺の権限は国王よりも上なのか？」
「それは、なんとも……国が始まって以来のしきたりでして……」
詰問しているわけではないが、義人が尋ねると見張りの兵士は目を逸らす。義人はそんな兵士の態度に首を傾げると、そのまま階段へと目を向けた。
「でもアレだ。人間って、見るなと言われたら見たくなる生き物でして。立ち入るなと言われれば立ち入りたくなるな、うん」
そう言って、義人は階段目掛けて歩き出す。
「お、お待ちくださいヨシト王！」
「大丈夫大丈夫。カグラに何か言われたら俺が無理矢理通ったって言っていいから」
「そういう問題ではないです！？」
「見るだけだから。ははは、良いではないか良いではないか」
義人は笑いながら誤魔化しを試み、それと同時に階段へと進んでいく。しかし、この騒ぎを聞きつけたのか他の見張りの兵士まで集まりだし、階段の前を塞ぐように立ちはだかった。だが、相手が義人であるからかその表情には戸惑いの色が見える。
『……なあ、ノーレ。この上ってそんなに重要なものがあるのか？』
義人は見張りの兵士達の必死さに足を止め、思念通話でノーレへと話しかけた。

『召喚の魔法陣が書かれているだけのはずじゃ。重要と言えば重要じゃろうが、この国の人間からすればお主がいなくなるかもしれないと思っておるのではないか？』
『いなくなる？　何でだよ？』
『召喚の儀を行うための建物じゃからな。お主を立ち入れさせたら元の世界に戻ってしまう……そんな可能性を忌避しておるんじゃろう』
『と言っても、元の世界に戻るのはカグラがいないと無理だろ？』
『……まあ、そうじゃな』

僅かに遅れたノーレの返事に義人は頷き、ひとまず目の前の兵士達に目を向ける。いつのまにか義人を護衛していたはずの兵士も立ちふさがっており、義人は軽くため息を吐いた。

「わかったよ。無理に通ったりはしない」
「……そう言って、通ったりしませんか？」
「そんなことしないから。ほら、各自持ち場に戻ってくれ」

“ひとまず”は諦め、義人は階段ではなく周囲の観察に移る。これくらいならば大丈夫だろうと内心で呟き、祭壇の一階部分へと近づいた。そして、白木で造られた壁を軽くノックする。すると軽い音が響き、義人は眉を寄せた。

「中は空洞みたいだな……ん？　なんだこれ？」

自分の行動を不安げに見ている見張りの兵士達を他所に、義人は腰を折る。その視線の先にあったのは、小さな穴だった。形は長方形で、大きさは二センチほど。白蟻にでも食われたのかと思った義人だが、穴は綺麗に空けられており、人為的なものに見える。

「んー……貯金箱の口みたいだな。お金でも入れれば良いのか？」

そう呟きながら周囲を見回す義人だが、穴が空いているのはその一箇所のみ。

――――カグラに今度聞いて……いや、まずは自分で調べた方が良いか。

現在のカグラの機嫌の悪さを思い出した義人は、考えを途中で改める。まずは自分で調べ、わからなかったらカグラに尋ねるべきだ、と。

幸いというべきか、最近は自由な時間が多少ある。調べる時間も、作ろうと思えば作れる。そう考えて、義人は立ち上がった。そして、いまだに自分の一挙一動を警戒している見張りの兵士達へと振り返る。

「邪魔したね。それじゃあ、俺は城に戻るよ」

何もなかったように軽く言い放ち、義人は召喚の祭壇に背を向けるのだった。

第百一話：齟齬

「相変わらず埃っぽい部屋だなぁ」

ここ数日で通い慣れたカーリア城の図書室に入るなり、義人は愚痴を吐くように呟いた。

図書室は部屋を閉め切っているせいか、他の部屋と比べて空気がよどんでいるように感じられる。掃除も完全には行き届いていないのか、棚の上には薄っすらと埃が積もっていた。もしも棚の上に指を乗せて横に引けば、指先が真っ黒に汚れるだろう。いつか本格的に掃除をすることを考えながら、義人は図書室の中心へと足を向けた。

「さてさて、昨日の続きから調べていくかね」

義人はそう呟きつつ、昨日最後に読んでいた本が置かれている本棚まで移動する。そして、本が雑多に並ぶ本棚へと手を伸ばし、なるべく埃が立たないようにゆっくりと赤い表紙の本を引き抜いた。

現代に比べて大きく文明が劣った“こちらの世界”において、何かを調べる時に使うものは本である。現代ならばインターネットなどでも調べることができるが、“こちらの世界”にそんな便利なものはない。そのため、義人は図書室にある本を使って自分の目的に沿うものを見つけ出そうとしていた。

もっとも、“こちらの世界”では元の世界ほど簡単に本が入手できるというわけでもなく、安価で手に入ることもない。国の中枢たる王の居城だからこそ様々な本が置いてあるが、一般市民の中で本を持っている者など極一部だけである。

「まあ、本があるからといって目的の情報が見つかるとは限らない

わけで……っと」

手に取った本を流し読みをしていた義人は、本棚に手を伸ばして次に読む本を引き抜き、最初に手に取った本を本棚へと戻す。すると、下手な鉄砲も数撃てば当たると言わんばかりに本を手に取る義人の背中で、呆れたような声が上がった。

『それで、この前から熱心に本を読み漁っておるがお主は何がしたいんじゃ？　召喚の祭壇に関してか？　魔法関連なら妾が教えるぞ？』

三日ほど前に召喚の祭壇へと足を運んで以来、政務のない時間に図書室へ通い詰めている義人のことをノーレは黙って見ていた。しかし、さすがにそろそろ限界である。最近は義人の行動にあまり口を挟まなくなってきたノーレだったが、何を探しているかぐらいは聞いても良いと判断して話しかけた。

「いや、それもあるけど地図か見取り図がほしくて」

そんなノーレに、義人は本から目を離さないままで答える。

『見取り図？』

「ああ。この前レンシア国に行った時、ヤナギ隊長から手紙を受け取っただろ？　そこに載っていた見取り図について、何かわからないかなと思ってさ」

『それは、図書室で調べればわかるかのう？』

「わかる……と思うんだけどな。『渡せば自分で気付くでしょ』って伝言から考えると、俺の手が届く範囲に答えがありそうだし」

『ふむ……』

義人の言葉に対して、ノーレは何かを考え込むかのような声を漏らす。あるいは何かを思い出しているのか、声には妙な響きがあった。

『……お主の世界では、本に地図が載っておるのか？』

「そうだけど？　図書館とかに行けばその地域の地図があったりするし……って、もしかして、こっちの世界じゃ地図とかは本に載ってないのか？」

『ん？　地図は地図じゃろう？　紙か羊皮紙ならばわかるが、何故本に載っておるんじゃ？』

「……もっと早く聞けば良かった。それじゃあ、図書室には地図とか城の見取り図とかは置いてないか？」

調べるならば図書室だと判断した義人だったが、その判断は間違っていた。

城の見取り図などは、重要な国家機密である。見取り図の精度にもよるが、万が一の際に使用する抜け道などが記されていることもあるのだ。もしもそれが他国の手に渡りでもしたら一大事であり、図書室のような人の出入りがある場所には置いてあるはずもない。

“元の世界”と同じように、図書室を調べれば地図や見取り図の一つでも出てくると思っていた義人は思わず眉を寄せた。

「カグラにでも尋ねて……いや、何に使うのか聞かれそうだな。ゴルゾーにでも頼んで……」

『何故商人に城の見取り図を注文するんじゃ。商っておるはずがないじゃろう』

「それもそうか。じゃあアルフレッドにでも尋ねて……」

義人がそこまで口にした時、不意に図書室の扉が開かれる。いや、

正確には“開く”と言うよりも、吹き飛ばす勢いで扉が開かれた。

「おとーさん！」

扉の開け方があまりにも乱暴だったため、咄嗟にノーレの柄に手を伸ばしていた義人は扉を開けたのが誰かを確認してため息を吐いた。そして、自身のもとへと駆け寄ってくる小雪を見て体ごと向き直る。

「小雪、一体何の用……ごふぅっ！？」

飛びつくように抱きついてきた小雪の額が鳩尾（みぞおち）に命中し、義人は思わず倒れこむ。だが、小雪はそんな義人に構わず楽しそうにしがみついた。

「ねえおとーさん、あそぼう？」

「……いや、げほっ、地味に……痛いんだけど……」

「え？」

痛みを堪えながら咳き込む義人を見て、小雪は不思議そうに首を傾げる。義人は数回深呼吸をすると、痛みを堪えてゆっくりと立ち上がった。

「いたた……いいか小雪、いきなり飛びつくのは禁止だ。というか、頭突き禁止」

義人が鳩尾を撫でながらそう言うと、小雪は目を瞬かせる。

「いきなりじゃなかったらいいの？」

「いきなりじゃなくても、できれば止めてほしいなぁ」

倒れた際に手から落ちた本を拾いつつ、義人は呟く。すると、本を拾うためにしゃがんだ義人の行動を勘違いしたのか、小雪は義人の背中へとしがみついた。

「おとーさんおんぶ！」

「……俺の言ったこと、わかってる？」

「ところでおとーさん、さっきからなにしてるの？」

義人の言葉を綺麗に流しながら、小雪は義人の首に両手を回してぶら下がる。義人は首に重さが加わるのを感じたが、小雪を無下に扱うこともできずに苦笑を浮かべた。

もしも、小雪が幼い頃の優希の姿とそっくりでなければ違った対応を取っただろう。義人は苦笑を浮かべつつ、無意識のうちに穏やかな声で話しかけた。

「というか小雪、そのおとーさんっていうのは止めてほしいんだけど」

「え？　どうして？　おとーさんはおとーさんだよ？」

「どうしてって言われても……まだそんな歳でもないしな」

義人がそう言うと、小雪は義人の首に回していた両手を離して床へと下りた。そして、唇を真一文字に引き結んで義人を見上げる。

「おとーさんって、よんじゃ、だめなの？」

ジワリと、小雪の目の端に涙が浮かぶ。年齢相応に情緒が不安定なのか、声はかすかに震えていた。

――――やべえ、泣く。

義人は心中で短く呟きながら、頬を引きつらせる。泣く子どもと地頭には勝てず、義人は小雪が涙を浮かべた途端に表情を作り笑いに変えた。

「ま、待つんだ小雪。泣くな、泣くんじゃない。落ち着け……要求はなんだ？」

『いや、その反応もどうかと思うんじゃが』

呆れたようにノーレが呟くが、義人はそれを黙殺しながら作った笑顔で小雪の解答を促す。

「ようきゅう？　なら、おとーさんって……」

「それ以外で要求してくれると嬉しいよ」

思わず、即答で却下する義人。小雪はそんな義人の言葉に泣きそうになるものの、それでも何か代案を考えているのか、視線を下げて小さな唸り声を上げる。

「うー……」

「義人って呼んでくれてもいいから……な？　おとーさんって呼ぶのは勘弁してくれよ」

義人は今のうちにと言葉を重ねるが、小雪はそれに応えない。どう言えば諦めてくれるだろうかと悩む義人だったが、そんな義人の思考を遮るように再度図書室の扉が開いた。

「義人ちゃん、小雪がこっちのほうにいるって聞いたんだけど、知らない？」

そう言いながら部屋に入ってきたのは、右手に洋服を持った優希である。おそらくは小雪に着せるための服なのだろう。手に持った洋服のサイズは小さめだった。そして、そんな優希の姿を見た小雪は弾けるようにそちらへと駆け出す。

「おかーさん！」

「あれ？　小雪、どうかしたの？」

いきなり自分の元へと駆け寄ってきた小雪に、優希は小さく首を傾げる。

「おかーさん、おとーさんがおとーさんってよんじゃだめって……」

姿を見せた優希に真正面から抱きつくと、小雪は服に顔を埋めながらそう呟いた。すると、小雪の言葉を聞いた優希は意味を理解しかねたのか考えをまとめるように数秒沈黙する。そして、沈黙の後に苦笑しながら膝を折ってしゃがみ込み、目線を小雪と同じ高さに合わせてゆっくりと頭を撫でた。

「はいはい、泣かないの。義人ちゃんは照れてるだけだから……ね？」

「……ほんとうに？」

「本当に、だよ。そうだよね、義人ちゃん？」

「え？　いや、えーっとですね。照れているわけではなく、この歳で一児の父親かよっていう精神的な葛藤が」

「ね？」

笑顔で、返答を促す優希。それを見た義人は、ため息を吐きながら右手で頭を掻く。

「……わかった。好きなように呼んでいいから泣き止んでくれよ、小雪」

諦めたように義人はそう口にした。すると、今まで優希にしがみついていた小雪が音の立つ速度で顔を上げる。

「ほんと!?」

「あ、ああ」

その反応の速さに少しばかり驚く義人だったが、満面の笑みを浮かべた小雪を前にしては何も言えない。義人はやれやれともう一度だけため息を吐くと、優希に向かって冗談混じりに笑いかける。

「でも、優希は良いのか？」

「え？　何が？」

「優希だって、『おかーさん』って呼ばれるんだぞ？　気にしないのか？」

「うん。何か問題があるかな？」

「いや、問題はあるだろ……と思うんだけど」

何を言ってるのかと言わんばかりに首を傾げる優希に、義人は思わず自分の方が間違ったことを言っているのかと言葉を濁す。

『間違っているのはお主ではないと思うが……言うだけ無駄じゃろうな』

呆れたように呟くノーレに、言葉を返す者はいなかった。

今でこそ義人用の執務室で政務をこなすことが多いカグラではあるが、彼女自身に用意された執務室も当然のように存在する。
義人が召喚される前まではその部屋を使っており、現在でも義人の補佐をする必要がない時などには自身の執務室を使用することが多かった。
部屋の広さは義人が使う執務室よりもやや狭いものの、他の文官達が使う部屋に比べれば倍近く広い。置かれているものは政務を行うための机と椅子、それと木造りの棚ぐらいで無駄な装飾品などは一切置かれていなかった。
義人の仕事の補佐を終えたカグラは、机の上に積まれた書類の山へと伸ばしていた手を下ろし、目の前で膝をつく兵士に目を向ける。

「ヨシト様が図書室で何かを調べていると聞きましたが、それはいつ頃からですか？」
「三日ほど前からです。時間がある時に図書室へ足を運び、何かを調べておられるようです」

答えたのは、義人の護衛を担当する兵士の内の一人だった。魔法隊に所属するその兵士は、頭を下げたままでカグラの問いに答えを返す。

「この前は召喚の祭壇の方へ行かれたみたいですし、何をされているんでしょうか？」
「それはなんとも……ヨシト王が調べ物をする際、我々は部屋の外に待機しておくように言われていますので」
「そうですか……」

小さく頷き、カグラはどこか遠くを見るように窓の方へと目を向けた。そして、窓に薄く反射する自分の姿を見据えながら僅かに眉を寄せる。

「話の流れを聞く限り、ヨシト様は召喚の祭壇について調べていると考えるべきでしょうね。もしくは、召喚の魔法についてでしょうか」

「どうされますか？」

義人の行動を制限するのか。そんな意図を滲ませて、報告の兵士は尋ねた。その問いに対して、カグラはゆっくりと首を横に振る。

「特に何も。召喚の祭壇についても、召喚の魔法についても、図書室どころかこの国中を探しても資料がありませんから。ヨシト様の好きなようにしていただきましょう」

「では、このままにしておくということで良いのですか？」

「はい。引き続き、ヨシト様の護衛に当たってください。他に何かされているようでしたら、報告をお願いします」

「了解いたしました」

カグラの指示にそう答え、兵士は音を立てないように退室していく。カグラは兵士が閉めた扉の音を背後に聞きながら、小さくため息を吐いた。

召喚の祭壇や召喚の魔法に関する資料など、カーリア国中を探しても見つかりはしない。“それら”はすべて、自身の頭の中にあるだけだ。

初代のカグラより、代々のカグラが口伝で伝えてきたその知識を知る者はカグラのみ。そして、カーリア国に存在する“カグラ”は一人だけである。しかし、その知識も完全ではない。

カグラが、いや、“少女”が幼い頃に自身の母より教わったその知識は、召喚の魔法に関することのみ。召喚の祭壇については、ほとんど知らないと言って良かった。もっとも、“少女”の母であった先代のカグラも、召喚の際に使用する場所というぐらいの知識しか持っていなかったのが原因ではあるが。

「ふぅ……」

そこまで考えたカグラは、思いを馳せるように目を細めて小さなため息を吐く。

「魔力もだいぶ回復してきましたし、そろそろユキ様かシノブ様を元の世界に戻すことも考えなくてはなりませんね」

召喚できたのならば、元の場所へ戻すこともできる“はず”だ。魔力も七割ほど回復し、春を迎える頃には最大まで魔力が回復する。そうなれば、召喚当初の義人が言っていた通りに優希や志信は元の世界に戻そうとカグラは考えていた。

――だけど、ヨシト様を帰すわけにはいきません。

窓に手を当て、カグラは心中でそう呟く。

「それも、すべてはこの国のため……そして……」

窓に映ったカグラの口元は、僅かに笑みの形を描いていた。

第百二話：早朝訓練

例え真冬だろうと、藤倉志信の朝は早い。

早くから日が昇る夏に比べれば多少遅いものの、それでも午前五時には目を覚ます。それは長年の生活がそうさせるのか、目覚ましなどがなくとも毎日決まった時間に起きることができる。それは“元の世界”でも“こちらの世界”でも変わらないことだった。

「冷え込みがきつくなってきたか……そろそろ冬も本番だな」

その日もいつも通りに目を覚ました志信は、水場で顔を洗って眠気を取るとそう呟く。すでに早朝訓練を行うべく身軽な服装に着替えており、右手には訓練用の棍。左手には汗を拭くための手拭いを持ち、準備は万端だった。

外はまだまだ暗いが、城から漏れ出る灯りが僅かながらに視界を与える。志信は吐く息が薄暗い視界の中で白く染まるのを感慨深げに眺めながら、準備運動を開始した。

志信も日中に近衛隊の訓練があるが、それはあくまで自分が鍛える側の話である。

他人に何かを教えるというのも良い経験ではあるが、志信自身もまだまだ未熟であり発展途上。そのため、朝晩の自主訓練は志信にとって己を高めるための貴重な時間だった。もっとも、自分以外の人間が参加する場合もあるので完全に自分一人での訓練ではない。一人稽古の時もあるが、大抵はミーファや義人が途中から参加する。その場合は自分の鍛錬半分、他の人間との鍛錬半分だ。

志信としてはアルフレッドか騎馬隊の隊長であるグエンが参加してくれればと思っているが、その二人が早朝訓練に参加したことはない。アルフレッドならば全体的に志信よりも優れた腕を持ち、グエンも槍術の技量だけを見れば志信よりも優れた腕を持つ。

たまには完全に教わる側に回りたいものだと内心で呟きながら、志信は体を解(ほぐ)していく。魔法に関する技術を含めるのならばカグラやサクラに教えを乞うのも良いが、志信が求めているのは極力魔法を介さない力。『強化』に似た効果で身体能力が向上しているのには目を瞑るが、カグラやサクラの戦い方では志信が求めるものとは方向性が異なる。

「お爺様がいれば教えを乞えるが……いや、言うだけ無駄か」

時折ふらりと旅に出る祖父の顔を思い出し、志信は苦笑した。皆伝はもらったものの、まだまだ教わりたいことは山のようにある。しかし“こちらの世界”にいる以上、会えることはないだろう。志信は数ヶ月前までいた世界での日常を思い出し、苦笑を深める。

「今では毎日、一日中体を動かすだけで過ごせる日々か……俺にはこちらの方が性に合っているな」

朝晩に己の腕を磨き、日中は学校へ通う毎日。志信も学校へ通うのが無駄だとは思わなかったが、それでも思うところはあった。

――それは、“退屈”である。

いくら武芸の腕を磨こうとも、現代では使う機会もない。親友(よしと)がいるからこそ学校も楽しめるが、それがなければどうなっていたか。屈伸運動をしながら、志信は僅かに意識を傾ける。義人や、義人の傍にいる優希のいない学校生活。それを想像し、志信は眉を寄せた。

「まさに、退屈だな」

「何が退屈なんだ？」

不意に、声が響く。
志信は反射的に地面を蹴りながら、傍に置いておいた棍を拾い上げる。そして声がした方向へと視線を向けると、素早い動作で棍を構えた。
「っと、俺だ志信！　頼むから攻撃するのは止めてくれよ！？」
すると、暗がりの中から見知った声が響く。そのどこか焦りの色を含んだ声に、志信はゆっくりと棍を下ろした。
「……義人だったか。すまん、少し考え事をしていた」
「いや、別に良いよ。でも、こんなに近づいても志信が気付かないのも珍しいな」
苦笑混じりに姿を見せた義人との距離はおよそ三メートル。義人が背後の方向から歩いてきたことを含めても、事前に気付けなかったことに志信は内心でため息を吐く。
義人は志信同様動きやすい服装に着替えており、背中に王剣のノーレ、右手に訓練用の木刀を持っている。もしも義人が志信を害するつもりだったならば、対処が間に合ったか微妙なところだ。
「考え事が過ぎた……だが、今日は早いな。まだ五時半にもなってないと思うが？」
「たまにはいいかな、と思って。レンシア国から戻ってきて以来、忙しくて参加できなかったしな」
そう言って笑う義人に、志信は納得したとばかりに頷きを返す。忙しかった理由としては政務と小雪絡みだろうと当たりをつけ、志信は僅かに首を傾げた。

「それはわかる。それで、小雪はどうしたんだ？」
「小雪？　あー……いつの間にか俺の布団に潜り込んで幸せそうに寝てたんで、ここに来るついでに優希の部屋に抱えて行って寝かせてきた。そろそろ、小雪を無条件で寝室に通してしまう守衛の兵士に何か言わないといけないな」

主に俺の心臓のために、と付け足し、義人は少しばかり遠い目をした。

寝る前はいなかったはずなのに、朝起きると小雪が隣で幸せそうに眠っているのだ。その上、優希と似通った顔をしているために寝起きの頭では優希と勘違いしそうになることがある。さすがに意識がはっきりとしていればそんなことはないのだが、寝惚けていると本気で間違える可能性が高い。

もっとも、小雪も毎日義人の布団に潜り込むというわけではなく、一日交替で義人と優希の寝室を行き来しているようではあるのだが。そして、それを知った時のカグラの表情と視線を思い出して義人は首を横に振った。

「ま、まあそれは置いておこう。今は体を動かして忘れたい……もとい、ストレスを発散……じゃない、運動不足の解消をしたい」

ハハハ、とどこか虚ろに笑う義人を見て、志信は労わるような視線を向ける。

「カグラは相変わらずか？」
『ここ数日は落ち着いておる。まあ、笑顔なのに目が笑っていないのがなんとも言えないがのう。ある意味、自業自得じゃが』

笑う義人の代わりに答えたのは、義人に背負われたノーレだった。

どこか呆れたような声に対して、義人は両手を上げる。

「そうは言っても、小雪に『おとーさん』って呼んで良いって言っちまったしなぁ……」

「止めさせれば良いのではないか？」

冷静に指摘する志信。だが、そんな志信に対して義人は軽く手を振る。

「いや、それを言うと泣くんだよ」

「……泣く子には勝てぬ、ということか」

そういうことだ、と首肯し、義人は右手に持った木刀を持ち上げる。

「というわけで、ストレス発散の相手をしてくれ」

「つい今しがた、運動不足の解消をしたいと言い直した気もするが？　それと、動く前には準備運動をした方が良い。体を痛める」

早すぎる前言撤回に苦笑しつつ、志信はひとまず準備運動を勧める。義人はそれもそうかと納得すると、屈伸運動を開始した。

「ふっふっふ……志信、今日こそは一本取ってみせるからな」

義人は体を解しながら、やけに自信が見え隠れする発言をする。その義人の発言に対して、志信は軽く頷きを返した。

「期待しよう」

「期待してくれ。多分、志信を驚かすぐらいはできると思うから」

『妾の手助けがなければ、驚かすどころか数合も打ち合うことがで

きんじゃろうに』
『ノーレには頭が上がりません』
『下げられた覚えもないがのう？』

冗談の応酬をしながら体を解していく義人と、それを横目に軽く棍を振り回す志信。志信は義人が打算なく一本を取ると言うはずもないと、頭の中で何通りか義人が取りそうな手をイメージしながら棍を繰り出していく。

「やべぇ……余計な一言だったな。志信も少しは油断してくれれば良いのに」

そうやって、明らかに動きが変わった志信を見て義人は頬を引きつらせる。失敗したと嘆く義人に、ノーレが呆れたような声をかけた。

『それも自業自得じゃな。学ばんのか？』
「いや、ノーレがいれば大丈夫だという自信……だったら良いなぁ」
『たしかに“あれ”を使えばお主でも戦うことができるじゃろうが……』
「どれだけ戦えるかの実験でもある。これで無理だったら、有事の際の脱出にしか使わないよ」

そう言いながら、義人は両膝を重点的に解していく。そして十分に体が解れたのを確認すると、ノーレを背負った状態で木刀を手に取った。

「志信、こっちも準備オーケーだ」
「わかった。最初から打ち合いで良いんだな？」

志信はどこか楽しげに問いかけ、それを聞いた義人は苦笑混じりに頷く。

「できれば手加減してほしいけど……言うだけ無駄か。よし、行くぞノーレ！」

『やれやれ、仕方ないのう』

気合を入れるように声を上げ、義人が木刀を正眼に構える。そんな義人に合わせるように志信も半身開いて腰を落とし、訓練用の棍を中段に構えた。

訓練用の棍には何かしらの魔法の術式が刻まれているということはなく、ただ頑丈なだけである。『無効化』の術式が刻まれた棍も用意はしてあるが、早朝や夜間の訓練で使うことはほとんどなかった。

しかしながら、義人は“それだけ”で油断するほど志信という人物を知らないわけではない。志信は例え『無効化』ができずとも、放たれた魔法は避けるか強引に打ち消すぐらいのことは当然のようにやってのける。そんな確信を、義人は持っていた。

『ノーレ、『加速』を頼む』

故に、義人が選んだのは接近戦。使用するのは、レンシア国第二魔法剣士隊の隊長カールが使う『加速』。ノーレに真似させた『加速』はカールが使用するものと比べれば多少速度が劣るが、それでも義人にとっては十分以上に高速に動ける魔法である。

両者の距離は五メートルと少々。義人の武器は木刀で、志信の武器は棍。そのため、義人から仕掛けるにしても距離を詰める必要がある。

「……」

両者無言で対峙しながら、ゆっくりと距離を詰めていく。志信は棍を構えたままで義人の出方を伺い――――次の瞬間には、義人の姿が消えていた。次いで、背後に響く砂を踏む音。それが何の音かを判断するよりも早く、志信の体は動いていた。

――――もらった！

それは、義人にとって一本を取ったと確信できる一撃だった。“加速”しながら地を蹴り、義人は瞬きの速度で志信の背後へと回りこむ。あとは木刀を振るうだけで一本を取れるだろう。その判断をもとに、義人は木刀を振るうべく右足で踏み込み、

「っ！？」

それよりも早く、志信が振り返った。それと同時に放たれる、額狙いの打突。線ではなく点で放たれたその一撃は距離がつかみにくく、打突が来るとわかった瞬間に義人は進行方向を横へと変える。義人はノーレによる『加速』で志信の攻撃可能な範囲から離脱すると、すぐさま志信の背後を取るべく走り出す。

『反応どころか反撃されたよ……もしかして、これってそこまで速く動けてない？』

『それなりに速いが……ここは、仏頂面の反応の良さを褒めるべきじゃな』

『こうなったら『加速』しながら斬りかかってみるか？』

『それも一つの手じゃが、それでは体がもたんじゃろう。この速度で斬りかかったら腕の一本ぐらい折れるかもしれんが……それでもやるか？』
『ちなみに、折れるのはどっち？』
『斬りかかる方と斬りかかられる方の両方じゃな』
『よし、却下だ』

ノーレと言葉を交わし、義人は側面から志信へと斬りかかる。『加速』でついた過剰な勢いを殺すように強く踏み込み、必要な分の勢いを利用した一撃。だが、側面からの横薙ぎが志信の体へと到達するよりも速く棍が差し込まれる。

「っ！」

乾いた衝突音と、思わず木刀を取り落としそうになるほどの衝撃。義人は手が痺れそうになるのを努めて無視すると、折られることなく棍で木刀を受け止めた志信と視線をぶつけ合う。

「カール隊長が使っていた魔法か。義人も使えるとは驚いたな」

純粋に驚いたと、鍔迫り合いならぬ押し合いをしながら告げる志信に対して、義人は木刀を握る手に力を込めることで応えた。

「それをあっさりと防いだくせに」
「いや、事前に義人が『今日こそは一本を取る』と言っていなければ油断して防げなかった。それぐらい、速かったな」

その言葉を皮切りに、志信は武器を使って押し合う状態から突然脱力する。

「うわっと!?」

その結果、押し合いをしていたところでいきなり志信からの力がなくなり、義人はバランスを崩す。前のめりに倒れそうになるのを必死に堪え、志信がどう動くかを見ようと顔を上げ、

「――――あ」

“本気”の志信と目が合った。

義人は目の端で志信の左足が動いたのを見ると、ほぼ反射的に地面を蹴って左へと飛ぶ。それは生存本能がそうさせたのか、回避の動作に無駄がない。

避けなかったら腹部があったであろう場所を蹴り上げる志信の左足に冷や汗を流しながら、義人はなんとか体勢を立て直そうと試みる。ノーレも『加速』を使おうとするが、下手すれば余計に体勢が崩れるため義人の体勢が悪い状態では使うわけにもいかない。

志信の蹴りを回避した義人は地面を滑るように着地して勢いを殺し、すぐさま木刀を構え直した。

そして、そこへ棍が飛来する。義人が木刀を構えるタイミングに合わせたのか、それとも丁度追いついたのか。二メートルの距離を挟んだ状態から一直線に棍が突き出される。

風を貫きながら迫る棍の先端を見て、義人は咄嗟に木刀を横へと振るった。木刀の切っ先で棍の先端を弾き、攻撃の軌道を変える。

『ヨシト、今のうちに距離を――――』

「無理だ!」

声に出してノーレの言葉を否定する義人。その視線の先には、すでに棍を引き戻して次の攻撃へ移ろうとする志信の姿。対して、義人はまだ木刀を戻してすらいない。

「はっ！」

鋭い気合いと共に、再度繰り出される打突。
受け流すことも防御も回避も不可能と判断した義人は上体を捻りながら後ろへと倒し、服に掠らせながらも辛うじて回避する。
だが、義人にできたのはそこまでだった。

「やば……げふぅっ！？」

続いて槍のように放たれた前蹴りが、義人の体を容赦なく吹き飛ばす。無防備な脇腹目掛けて繰り出された蹴りを回避できず、義人は鞠のように地面を転がっていく。
勢いを殺そうとノーレが咄嗟に風を発生させて義人の体を受け止めるが、それもすでに遅い。義人は蹴られた部分を左手で押さえながら、木刀を放り出した右手で地面を叩く。

「……っ……げほっ！　げほっ！　い、いてぇ……げほっ！」
「……すまん、無事か？」

いつの間にか手加減がほとんどなくなっていたことを恥じながら、志信は心配気な表情を浮かべて義人へと尋ねる。当たるとわかった瞬間に力を抜いたので骨を折った感覚はなかったが、それでもヒビぐらいは入ったかもしれない。

『もっと手加減をせぬか！』
「すまない。義人の動きに、つい加減を忘れてしまった。当てる瞬間には力を抜いたが……」

叱責するノーレに、志信は頭を下げる。そして地面を転がる義人

を丁寧に抱え起こすと、蹴った部分に目を向けた。

「折れているかわかるか？」

「いてて……骨は折れてないと思うけど、朝飯食ってたら、絶対に吐いてるぞ……」

「本当にすまない。カグラを呼んで治療を……」

そう言って立ち上がる志信だったが、不意に顔を上げる。それに釣られて義人も顔を上げると、城の二階部分にある一室の窓が開いた。

一体何なのかと義人が首を傾げると、開いた窓から小雪が顔を覗かせ、視線を下げて義人達――より正確に言うならば、脇腹を押さえて痛みに苦しむ義人と、その脇で棍を持ったままの志信を見る。

結果、小雪は不機嫌そうに眉を寄せた。そして何を思ったのか、窓枠に足をかけ、

「おとーさんをいじめるなー！」

そんな言葉と共に、小雪は城の二階の窓から何の迷いもなく飛び降りた。そして、パジャマ姿の小雪は義人と志信の中間地点に着地、否、着弾する。

「うわっ！？」

その小さい体躯にどんな力があったのか、小雪が着地した瞬間地面が僅かに陥没。その衝撃で義人は後ろへと倒れ、志信は咄嗟に後ろへと飛ぶ。

「ちょ、なんだ！？」

後ろへと倒れた義人は脇腹の痛みも忘れ、すぐさま体を起こす。
すると、志信を威嚇するように小雪が立ちはだかっていた。

「おとーさんをいじめるな！」

「む？　いや、いじめていたというわけでは……っ！？」

誤解を解こうとする志信だが、小雪は問答無用と言わんばかりに殴りかかる。そして、志信は思わず目を見開いた。

――――速い！

内心での独白と同時に、志信は一気に警戒の度合いを強める。小雪の動きは単調で、軌道は一直線。だが、それを補って余りあるほどにその動きは速い。

倒れこむように繰り出された拳を、志信は地を蹴って後方に跳ぶことで回避する。すると、目標を失った小雪の大振りの拳は地面へと命中した。

その瞬間、ズドンという轟音が響く。

「……なんだアレ？」

およそ聞いたことがないような音に、義人は小雪が殴った地面へと目を向ける。一体何の冗談か、小雪の拳が命中した部分はすり鉢状に陥没していた。

『コユキは龍種じゃからな。膨大な魔力で『強化』を使えば、あのぐらいの威力は考えられる』

「いや、それにしたって物騒過ぎるだろ」

『巫女とて同じことを容易く行えるが？』

脇腹の痛みを堪えながらノーレと話をする義人だが、その表情は硬い。そんな義人の視線の先では、最初の一撃が外れた小雪が再び志信へ飛び掛るという光景が広がっていた。

単調だが、繰り出される小雪の拳はひたすらに速い。志信は直撃すれば一撃で倒される、下手すれば死にかねない拳の嵐を前に、棍では迎撃が間に合わないと投げ捨てた。

防御をしても無駄なため、志信は回避と受け流すことに注力する。体捌きで拳を避け、迫り来る拳を手のひらで受け流し、志信は真剣な表情ながらも困ったように眉を寄せた。

「義人、すまないが小雪を止めてもらえるか？　さすがに殴って大人しくさせるわけにもいかない」

「あ、ああ……小雪、そこまでだ！」

義人が声を張り上げると、志信へと飛び掛っていた小雪が動きを止める。そして義人の方を見ると、唇を尖らせた。

「でも……」

「さっきのはいじめじゃない。ただ、志信と手合わせしてただけだから落ち着いてくれ」

「……むー、おとーさんがそういうなら」

義人の言葉を聞き、小雪は不満そうにしながらも構えた拳を下ろす。すると、その様子を見たノーレが小さく呟いた。

『ふむ、零歳児に守られ、庇われる父親か』

「感慨深げに嫌なことを言わないでくれ……いたた……」

ノーレの呟きに首を横へ振ると、ぶり返してきた痛みに義人は体をくの字に曲げる。すると、今まで志信の方を見ていた小雪が慌て

たように駆け寄っていく。

「おとーさんだいじょうぶ？」

「なんとか。だから、志信に殴りかかるのは止めてくれ。な？」

そう言って作り笑いを浮かべ、義人は小雪の頭に手を乗せる。それでも小雪は不満そうにしていたが、数秒もすれば笑顔に変わった。そして、笑顔のまま義人の脇腹へと視線を落とす。

「“それ”、こゆきがなおそうか？」

「……はい？」

小雪の言葉の意味がよくわからず、義人は思わず首を傾げた。だが、小雪はそんな義人の様子に構わず口を開く。

「いたいのとんでけー、いたいのとんでけー」

そう言いながら、小雪は義人の脇腹へと右手を当てる。義人はそんな小雪の行動に少しばかり癒されるものの、途中から僅かに首をかしげた。

「あれ？　本当に痛みが引いてるような……」

『『治癒』魔法じゃな。それも、かなり強力かつ強引な』

ノーレに言われて義人が視線を下げると、脇腹に触れる小雪の右手が僅かに発光しているのが目に入った。それは今まで義人が何度か見たことのある光景で、思わず眉を寄せる。

「『治癒』か……」

「おとーさん、どこがいたい？」

「あ、いや、だいぶ痛みは引いてるけど……」
『さすがは“再生”を司る白龍じゃな。経験もなく、直感だけで魔法を行使しているとはいえ、『治癒』魔法はお手の物ということか』
感心したようなノーレの言葉に、小雪はどうだと言わんばかりに胸を張った。義人はそんな小雪の頭を軽く撫でると、頬を緩ませる。
「ありがとう小雪。でも、地面のあちこちを陥没させたのは感心しないなぁ」
カグラにバレたら怒られそうだ。そう言葉をつなげ、義人はゆっくりと立ち上がる。
「何がバレたら怒られるのでしょうか？」
すると、背後からそんな声が響いて義人は体を硬直させた。義人はゆっくりと後ろへ振り向き、額に手を当てる。
そこには、笑っていない目のまま顔だけで笑うカグラの姿があった。

第百三話：カグラ先生による魔法レッスンその４

「それで、裏庭の惨状についてお聞きしたいのですが？」

早朝訓練を終え、朝食を食べ終えた義人を出迎えたのはやけに迫力のある笑顔を浮かべるカグラだった。どうやらいまだに怒りが持続しているらしく、義人は説教が避けられないことを悟りながらもなんとか回避を試みる。部屋の隅ではサクラがお茶の準備をしているが、義人にそこまで気にする余裕はなかった。

「いや、それはですね、何と言いますか、偶然が重なったことによる不幸が……」

「コユキ様が破壊したんですよね？」

「……ま、まあ。そうとも言う……かな？」

にこりと、笑顔で断じられた義人は目を逸らす。正座をしながらの弁解ではあったが、カグラは聞く耳を持たないらしい。そんな義人の隣では志信も正座していたが、異議有りとばかりに口を開く。

「カグラ、今回のことに関して義人に非はない。すべては小雪の勘違いから始まったことであり、その原因を作ったのは俺だ」

そう言って、志信は正座した義人の膝の上に座る小雪へと目を向けた。小雪はすでにパジャマから着替えており、灰色のセーターと膝丈までの赤と黒のチェック柄のスカートを身につけている。カグラの言葉を聞き流しているのか、それとも気に留めていないだけなのか、その表情は笑顔だった。

ちなみに、小雪があちこちに穴を空けた裏庭は現在近衛隊の兵士によって埋め立て中である。

カグラは志信の言葉を聞くと、小さなため息を吐き出した。

「日中の政務に差支えがないのならば、ヨシト様が体を動かされることに異議があるわけではありません。しかし、一歩間違えば大怪我につながるようなことは控えていただきたいのです」

そのときカグラの顔に浮かんだのは、義人の身を案じる純粋な心配。義人はそんなカグラの表情を見て、小さく頭を下げた。

「気をつけるよ。まあ、今回は志信が手加減をし忘れただけだしな」

「すまない。義人の思わぬ攻撃に、つい本気で反撃してしまった。次からは俺も気をつける」

「……志信。そんな、ちょっと手が滑ったみたいな気軽さで本気を出されたら俺がもたないって。訓練ではあるけど、俺と志信じゃ実力差が大きすぎるしさ」

志信の言葉に苦笑する義人だが、そんな義人に対して志信は小さく頷いてみせる。

「ならば、次はミーファと打ち合ってみるか？　あの移動方法があれば、良い勝負になると思うが」

「そうか？　志信相手だと簡単に防がれたんだけど？」

「俺はカール隊長が使ったところを見たことがある。だからこそ反応できたが、初見ならばかなり有効な魔法だと思う。もっとも、移動しながら斬りかかるのは止めたほうが良いだろう。下手な斬り方をすれば、ノーレでも折れかねん」

「体にかかる負担も大きそうだしなぁ」

正座しながら、徐々に話を逸らしていく二人。だが、話を打ち切るためかカグラが呆れたような声を上げた。

「お二人とも、そういった話は後でお願いします。今わたしが話したいことはですね」
「もー、カグラうるさいよ？」

しかし、今度は小雪からカグラに対して声がかかる。声というよりは非難に近いが、それを聞いたカグラは何を言われたかすぐに理解できなかったのか、数秒の間を空けてから反応を返す。

「う、うるさい？　あの、コユキ様？　コユキ様が暴れた結果なのですが、わかってますか？」

声が震えていたのは、何かを堪えているためか。義人はカグラの声が震えていることに対して反射的に背筋を伸ばし、志信は何か思案を巡らせた視線を小雪へと向ける。

「ちょっとたたいただけだよ？」
「龍種の魔力量で『強化』しながら殴りつけたら地面も陥没します！　それと、あれはどう見てもちょっと叩いたという威力ではありません！」

不思議そうに首を傾げる小雪に、カグラは身振り手振りを交えながら否定する。

「でも、カグラも同じことやそれ以上のことができるんだよな」
「ヨシト様、何か仰いましたか？」

小さく呟いた義人だったが、聞こえていたらしくカグラが笑顔で振り返った。その笑顔を向けられた義人は、冷や汗を流しながら両手を挙げる。

「何でもないです。ええ何でもないですとも」
「敬語で否定するあたりが怪しいのですが？」
「そんなにおこるとしわがふえるよ？」

詰め寄るカグラに、サラリと笑顔で爆弾を放り投げる小雪。それを聞いたカグラは焦ったように首を横へ振った。

「どこからそんな話を聞いてきたんですか！？　それと、わたしはまだそこまで歳を取っていません！」
「む？　怒ることと歳は関係ないのではないか？　つまり皺は……」
「増えません！」

否定するカグラだが、再び話が逸れていることに気付いて表情を真面目なものへと改める。若干疲労が滲んで見えるのは気のせいか、義人は内心でそんなことを少しだけ考えながら小雪の頭に手を乗せた。

「少し、静かにしとけな」
「うん！」

義人の言葉に満面の笑みで答える小雪。カグラはそれを見て僅かに視線を鋭くするが、それに気付いた者はいない。カグラは仕切り直すように一度だけため息を吐くと、ゆっくりと口を開いた。

「わたしが言いたいことはですね、今後もこのようなことが起きないかどうかということです。地面を陥没させたのは……まあ、百歩譲って良いとしましょう。しかし、城下町や城の中で同じようなことがあっては困ります」

周囲の物を笑顔で破壊していく小雪を想像し、義人は同意を示すように頷く。

「たしかにそうだな。小雪、もうあんなことはしちゃ駄目だぞ？」

「おとーさんがそういうなら」

本当にわかっているのか、小雪はすぐさま頷く。すると、それを見たカグラが眉を寄せた。

「コユキ様は、ご自分の力で魔力を制御できるのですか？」

「せいぎょ？」

言葉の意味がわからなかったのか、小雪は目を丸くして首を傾げる。それを理解していないのだと受け取った義人は、自身の膝に座る小雪の頭を軽く撫でた。

「じゃあ、小雪はどうやって地面を凹ませたんだ？」

「えーっと、こう、ぎゅっとやってどーんって」

頭を撫でられた小雪は身振り手振り、どこか嬉しそうに説明をする。しかし、それを聞いた義人は真剣な顔で頷いた。

「うん、わからねぇ」

『おそらくは無意識のうちに『強化』を使ったんじゃろうが……修練も積まずに『治癒』も使えるあたり、余程優れた魔法の才があるんじゃろうな。もしくは魔力量に物を言わせた力押しか』

「どのくらい魔力量があるんだろうな？　サクラ、悪いんだけど、ちょっと『魔計石』を持ってきてくれるか？」

ノーレの言葉を聞いた義人がサクラにそう告げると、サクラは一

礼してから部屋を退室していく。義人の膝の上でサクラが退室するのを見送った小雪は、不思議そうな顔をしながら義人へと振り返った。

「おとーさん、まけいせきってなに？」
「触るだけで魔力の量を計るための魔法具だよ」
「ふーん……ふぁ」

それだけの説明で理解したのか、それとも興味を失ったのか、小雪は小さな欠伸をして義人の体に背を預ける。

「眠いか？　今日は起きたのが早かったもんな」

そう言って苦笑しながら、義人は小雪の頭を撫でた。その手つきはどこか優しく、それを見た志信は穏やかに笑う。

「そうやって見ると、立派に親子だな」
「うぐっ！？　ま、マジで？」

志信の言葉が精神的にきつかったのか、義人は少し落ち込んだ表情になる。義人は否定していたが、周囲から見れば“それなり”に父親らしく見えるらしい。

義人は『この歳で一児の父かよ、しかもけっこう大きいし』などと呟いたが、小雪が人に化けた直後に比べればその態度は柔らかい。諦めたのか、それとも認めたのか。

その光景を見ていたカグラが僅かに目を逸らしたが、小雪に視線を向けていた義人や志信は気付かない。

「『魔計石』をお持ちしました」

すると、その空気を破るように部屋の扉が開いた。その声はサクラのものであり、義人は扉の方へと目を向ける。扉を開けたサクラの手には二つの『魔計石』が握られており、サクラの魔力量で変化したのか濃い緑色へとその色を変えていた。

「ああ、ありがとうサクラ。小雪、その石に触ってみてくれるか？」

歩み寄ってきたサクラが『魔計石』を差し出すと、義人の言葉に従って小雪が『魔計石』へと手を伸ばす。

「どうぞ、コユキ様」

「ありがとう、サクラおねえちゃん」

手渡すサクラに礼を述べる小雪。サクラは小雪の言葉に笑顔になると、どういたしましてと言いながら小雪の頭を優しく撫でる。小雪はその手の感触が心地良かったのか、嬉しそうな笑顔を零した。

「だから、どうしてサクラは『おねえちゃん』でわたしは呼び捨てなんでしょうか……」

納得がいかないとばかりにカグラが呟くが、小雪がその言葉に反応を返すことはない。聞こえていないのか、それとも無視しているだけなのか、手に持った『魔計石』を物珍しげに眺めるだけだ。

小雪が『魔計石』を手に取ると、サクラから手渡されたからか濃い緑に染まっていたものが黄、橙、赤と順に色を変えていく。そして、『魔計石』が血のように赤く染まった途端に音を立てて真っ二つに割れた。

「やはりと言うべきか、大した魔力量ですね……」

『魔計石』が真っ二つに割れることを予想していたのか、カグラの声に驚きはない。小雪が反応を返さないことにも諦めがついたのか、表情はいつも通りだった。

『しかし、これでは正確には計れぬな……ヨシト、妾をコユキに持たせてくれるか？』

「ノーレを？」

『うむ。『魔計石』ほど正確ではないが、おおよその魔力量は計れる。それに妾ならば、『魔計石』のように砕けることはないじゃろう』

「そういうことなら……」

義人はノーレの言葉に頷くと、傍に立てかけておいたノーレを鞘ごとつかんで引き寄せる。そして小雪の方に柄を向けると、小雪に向かって声をかけた。

「小雪、ちょっとノーレを握ってくれるか？」

「……こう？」

小雪は割れた『魔計石』をサクラに手渡すと、空いた手で差し出されたノーレの柄を握る。

『む……これは……』

「どうかしたか？」

ノーレの声色に驚愕に近い響きがあったことに、義人は何かあったのかと尋ねた。すると、ノーレは義人の疑問を晴らすように落ち着いた声を出す。

『いや、大した魔力量だと驚いただけじゃ。おおよそじゃが、並の

魔法使いの百倍以上ある……百二十、いや、百三十倍か？　ううむ、ここまで大きいとは……ん？』

「ノーレ？」

不思議そうな声を出したのは、小雪だった。だが、ノーレは小雪の言葉に答えない。

『は、ははは……ヨシト、この子は間違いなくお主の子じゃな』

それどころか、どこか乾いたような笑い声を漏らしながらそんな言葉を呟いた。

「……いきなりそんなことを言われても、血縁関係はないはずだけど？」

小雪は空から降ってきた『龍の落とし子』であり、義人には自分の子どもだと言われる覚えはない。

『すまん、言葉が足りなかったな。小雪から、お主の魔力とそっくりの魔力を感じたんじゃ。おそらく、卵の時に吸っていたんじゃろうな。つまり、人間で言えば血を引いていると言っても良いのではないかの？』

「俺そっくりの魔力？」

『うむ。量としては全体の一割もないがな』

何が楽しいのか、ノーレの笑い声は中々止まらない。義人がそんなノーレにどう反応するべきか内心で首を傾げていると、それまでノーレを握っていた小雪が頭を上げた。

「おとーさん、こゆきすごい？」

「え？　あ、ああ。すごいすごい」

ノーレの言葉をどう捉えたのか、褒めてと言わんばかりに微笑む小雪。義人はそんな小雪の言葉に、気を取り直して頷く。

「俺の魔力、ねえ……サクラ、ちょっと『魔計石』を貸してくれ」
「あ、はい。わかりました」

義人の言葉に、サクラは持ってきた『魔計石』のうちまだ壊れていない方を義人へと手渡す。義人が『魔計石』を手に取ると、サクラの魔力で濃い緑色に染まっていたものが徐々に色を変え、数秒の時間をかけて濃い青色に変化していく。

「小雪が俺の魔力とそっくりな魔力を引いて……って、あれ？　なんか、減ってないか？」

小雪が自分とそっくりな魔力を引いていることに少しショックを受けた義人だったが、手に持った『魔計石』の色が以前と違うことに首を傾げた。

『『加速』を使ったからではないのか？　……と言いたいところじゃが、そこまで多用していないしのう。これは、純粋にお主の魔力量が減ったと見るべきかの』
「……何故に？　魔力の量って簡単に減るものだっけ？」
「いえ、魔力が減ることはそうそうありません。精々、歳を重ねたことで魔力が衰えたという話を聞くぐらいです」

義人の疑問に答えたのはカグラである。そんなカグラの言葉を聞いた義人は、僅かに眉を寄せた。

「つまり、俺ももう歳だと？　ここから先は衰えていくばかりだと？」

だとすればショックである。義人は気落ちしたように肩を落とすが、そんな義人を見てカグラは苦笑した。

「やはり、訓練の時に魔力を使いすぎたのではないですか？」

「そうなのか……志信は？」

納得できないものを感じた義人だが、話していても理由は見つからないと判断して話を打ち切る。そして志信へと『魔計石』を放り投げると、志信は軽く頷きながら濃い青色の石を受け取った。すると、今までは濃い色合いだったものが徐々に薄くなっていく。

「青色……特に変わってはいないようだ」

カグラに言わせれば、一般的な魔法使い四人分の魔力量。それに志信は大した感慨を抱かず、『魔計石』をカグラへと手渡す。すると、『魔計石』の色が赤へと変化した。

「わたしは順調に魔力が回復しているようですね」

そう言ってカグラは『魔計石』を机の上に置く。そして頬に手を当てると、何かを思いついたかのように声を上げた。

「そういえば、以前お話ししたどうやって魔法を使うかという話は覚えていますか？」

魔力が魔法関連の話だからか、カグラが言い出したことに義人は何かあるのかと頷く。

「ああ、覚えてるよ。使いたい魔法を頭の中で想像しながら魔力を放出するんだろ？」
「はい。それが“大雑把”に言った場合の魔法の使用方法です……そうですね、折角なので今日はもう少し詳しく話をしましょうか。コユキ様の魔法の制御にも役立つかもしれませんし」

そう言いながら姿勢を正すカグラに、義人や志信も姿勢を正す。そんな二人の聞く姿勢にカグラは一度頷くと、講義をする講師のように話し始める。

「魔法とは頭の中で想像し、魔力を放出することで実現させます。では、何故それだけで魔法が使えるのでしょうか？　生まれ持った才能によって使える魔法の差はありますが、魔法を使うという一点において魔法使い全員が同じ方法で魔法を発現させます」
「ふむふむ」

とりあえず、義人は相槌を打つ。政務は良いのかという考えも頭を掠めたが、例え午後から仕事を始めても夕方には終わってしまうため問題はないだろう。その上、興が乗ったのかどこか楽しそうに話すカグラを止める勇気は義人にはなかった。

「これはアルフレッド様から教わったことなのですが、魔力とは言うなれば“世界に干渉する力”です。魔力を使い、己の思い描く事象を発現させる……魔力が大きい場合はより強く、魔力の変換効率が良い場合はより簡単に魔法を使うことができます。すなわち、魔力が大きいというのはそれだけで大きな武器であると言えますね」
「魔力が大きければ、『強化』の効果も大きくなるようにか？」

カグラの言葉に志信が質問を挟むと、カグラはそれに頷きを返す。

「その通りです。そのため、コユキ様が力の制御を覚えるのならまずは魔力を自分の意思で操作することから覚えるべきですね。それさえできれば、魔法使いとしての初歩を覚えたと言っても過言ではありません。あとは才能に従って、覚えることができる魔法を覚えていけば良いでしょう。もしくは魔力の操作に重点を置くのも良いですね。強大な魔力と抜群の魔力の変換効率。それだけで桁違いに強くなれるはずです」

「へぇ……それじゃあ、小雪も魔法の練習をした方が良いのか。小雪、どうする？」

小雪が力任せに暴れるのを抑えるためにも、魔法の訓練は必要だ。その意味も込めて義人が尋ねると、小雪は僅かに首を傾げる。

「おとーさんはやったほうがいいとおもう？」

「俺はそう思うけど」

「じゃあやる！」

本当に必要だと思ったのか、それとも義人の言葉に従っただけなのか、小雪は元気良く返事をした。だが、そんな小雪から視線を外して義人はカグラへと目を向ける。

「でも、誰が教えるんだ？　カグラか？」

「わたしは日中に政務がありますから、教えるなら夜などになりますね。アルフレッド様も同じですし、シアラ隊長は部隊の訓練。ミーファちゃんも部隊の訓練がありますし、魔法を教えるにはあまり向いてないでしょう」

カグラは思いつく限り名前を挙げていくが、それぞれが忙しく小雪に教える暇はほとんどない。しかし、義人はまだ名前が挙げられ

ていない人物に気付き、そちらへと目を向けた。

「サクラはどうだ？」

「サクラ、ですか。たしかに腕は申し分ないですし、コユキ様も懐いています。しかし、そうなるとヨシト様の護衛が……」

「俺の護衛って言っても、日中は大抵カグラが一緒だろ？　これ以上の護衛はいないと思うけどな」

お茶は優希が淹れてくれるし、と付け足して、義人はカグラの反応を待つ。カグラはそんな義人の視線を受けながら、事の成り行きを見ていたサクラへと話を振った。

「サクラはどう思いますか？」

「わ、わたしですか？　その、カグラ様がヨシト様の護衛をされるのなら心配はないですし、コユキ様にお教えするのは構わないのですが……『治癒』魔法などに関してはカグラ様の分野ですよね？」

「はい。その辺りの魔法についてはわたしが教えます。サクラはひとまず、魔力の操作を教えてください。それだけでだいぶ違うはずですから」

「それぐらいでしたらわたしでも教えられますし、部屋の中でも教えられますね……わかりました。お引き受けします」

自分でも教えられると判断し、サクラは微笑みながら承諾する。すると、今まであまり会話に参加しなかった志信が不意に口を開いた。

「義人、小雪の訓練に関してなんだが……体の動かし方や戦い方についても教えないか？」

「ああいいよ……えっ！？」

特に考えること頷き、その三秒後に義人は音の立つ速さで志信へと振り返った。

「えっと、いや、なんで？」

「白龍というのは希少な種族らしいし、有事の際は自分の身を守れる手段が多いほうが良いと思ってな。今日は力任せに戦っていたが、あれだけの速さと力強さがあれば小雪は強くなるだろう」

「そりゃそうだろうけど……」

義人は困惑しながら志信を見るが、志信の表情はいたって真面目である。どこか違う意味も含んでいるように見えたが、義人の視線に気付いた志信は苦笑してみせた。

「“力”の使い方というのを教えるのも重要だと思って、な」

「……わかったよ。それじゃあ、手が空いたときにでもお願いする」

「任された」

そう言って、義人と志信は二人で頷き合う。

それを最後に、義人達五人は解散するのだった。

第百四話：年の暮れに

「ふぁ……」

年の暮れも迫り、城の中でも正月に向けて慌しい雰囲気が流れる中、義人は会議室の中で小さな欠伸を噛み殺した。すると、その欠伸をどう思ったのか義人へと声がかかる。

「ヨシト様、どうかされましたか？」

「いや、なんでもないよ」

少し不思議そうな顔で尋ねてきたカグラに適当な答えを返し、義人は軽く目を擦った。そんな義人の視線の先では、財務大臣のロッサが資料らしき紙を片手に今年一年の“金（かね）の動き”について報告をしている。

昼食後に開かれたせいか、数人ほど眠そうな目をしていることに義人は内心で苦笑した。

――やっぱり、昼飯を食べてすぐっていうのは間違いだったなぁ……。

内心でそんなことを考えた義人だが、会議室の中で最も華美な装飾が施された椅子に腰をかけ、目の前の会議の推移を眺めているだけなので義人自身も眠い。

そんな義人の右隣には『召喚の巫女』であるカグラが座り、左隣には宰相であるアルフレッドが座っている。だが、二人とも特に眠気を感じていないらしく、真剣な面持ちでロッサの報告を聞いているようだった。他にも主だった文官が揃っているが、眠そうな目をしているのはごく少数である。

「次に、秋の収穫期の際に納められた年貢に関してですが……」

その中でも、報告をするロッサは真剣そのものだ。過去の過ちの清算とでも言わんばかりに、財務大臣になってからの仕事振りは真面目の一言に尽きる。

それを見た義人は、実に良いことだと小さく頷いた。だが、それと同時に思うこともある。

――――みんな、働き過ぎじゃないか？

カーリア国では、“元の世界”の日本のように週休二日制があるわけもない。“こちらの世界”全体のことは義人にはわからなかったが、少なくともカーリア国において休日に関した話を聞いた覚えはほとんどなかった。

思い返してみれば、義人とて“こちらの世界”に召喚されてから休日らしい休日を過ごした記憶がない。

政務をこなし、謁見を行い、会議を進め、視察に出かける。丸一日の休日はなく、休暇と言えば時折できる空き時間に羽根を伸ばす程度で、それも長くて半日あるかないかだ。

「なあ、カグラ」

「なんですか？　ロッサ殿の説明でどこかわからないところでも？」

「いや、そうじゃなくて。ちょっと質問だけど、この国の休日ってどうなってるんだ？」

気になったことをすぐさまカグラへと尋ねる義人。すると、カグラは僅かに怪訝そうな表情をしながらも口を開く。

「カーリア国においての正式な休日は、正月と建国記念日の二回で

すね。あとは体調を崩した場合や冠婚葬祭の際に休暇を取られる人が多いです。兵士の場合は隊長の判断で休日を申請していますが……」

それが何か、とカグラは首を傾げる。義人は僅かに苦笑すると、首を横に振った。

「少し気になっただけだよ。というか、この国にも正月があったんだな。それも歴代の国王の誰かが決めたのか？」

「はい。たしか八代前の国王だったかと思いますが」

記憶を辿っているのか、カグラは少しだけ視線を遠くへ向ける。すると、それをどう勘違いしたのか、丁度話を終えたロッサが声を上げた。

「カグラ殿、何か質問でも？」

「いえ、そういうわけでは――」

――ズドン。

カグラがロッサの言葉を否定しようとした瞬間、不意に奇妙な音と僅かな振動が響く。まるで高所から巨大な岩でも落下したかのような音に、文官達は顔を見合わせる。

「またか……一体何が？」

「ここ数日、何度か耳にしますが……」

音の出所が何なのか、文官達は声を潜めて話し合う。義人はそんな文官達の様子に少しだけ視線を外し、ため息を吐いた。そして、ロッサが最後の報告だったことを思い出して口を開く。

「ロッサの報告も終わったな。それじゃあ最後に、質問とか他に報告しておくことはあるか？」

最後の締めくくりにと、義人はそんな言葉を口にした。すると、文官の一人が恐る恐るといった様子で義人へと声をかける。

「あの、ヨシト王……」

「ん？　どうした？」

「時折聞こえてくる、この妙な音は一体何なのですか？」

慌てる様子がないために義人が関わっていると思ったのか、声色には答えがもらえるだろうという確信がこもっている。そのことを感じ取った義人は、不安を解消するのも役目かと苦笑した。

「ちょっと、小雪が暴れてるんだよ」

「やー！」

幼い掛け声と同時に繰り出される、大振りな拳。

志信は繰り出された拳を危なげなくかわすと、すぐさま後方に跳んで距離を取った。すると、それを見た小雪は風を切りながら突撃していく。

志信が離した五メートルの距離を一歩で詰め、勢いを殺しながら志信の懐へと飛び込んで体を回転させる。

「あ、た、れー！」

そして、小雪から見ればがら空きの腹部目掛けて右拳を突き出した。だが、志信は半身開くだけでその拳をかわす。

「コユキ様、感情に任せて魔力を暴発させては駄目ですよ？　……あ」

近衛隊と共にその様子を見ていたサクラが注意を投げかけるが、すでに時遅し。続けざまに振り下ろした小雪の拳が、殴りつけた地面を轟音と共にすり鉢状に陥没させる。

「あぁ……また穴埋めか……」

「筋力を鍛える訓練にはなるけど、何度も同じ作業をするのはきついんだよな……」

「俺達の休憩時間にするのは良いけど、その後の穴埋めがなぁ」

それを見て、遠い目をする近衛隊の兵士達。

ここ数日、近衛隊の訓練の休憩時間を利用した小雪の訓練が行われている。志信が組み手の相手を務め、休憩時間以外はサクラが魔法に関して教えていくというものだが、時折繰り出される手加減なしの一撃で地面が陥没するのがネックだった。

兵士達の会話を耳にしたサクラは、傍で小雪の様子を見ていた優希へと声をかける。

「ユキ様、あとでコユキ様にもう少し加減をするように言ってもらえますか？　わたしの教え方が悪いのか、コユキ様は中々その通りにしてくれなくて……」

「別に良いけど……サクラちゃんの教え方が悪いんじゃなくて、熱中している内に忘れちゃうだけなんじゃないかな？　そのあたりは

義人ちゃんにも似たところがあるけど」

そう言って、手拭いを持った優希は志信相手に殴りかかる小雪を見て微笑む。サクラはそんな優希の言葉に気を入れ直すと、相変わらず志信へ殴りかかっている小雪に目を向けた。

「一撃の威力は文句もないのだが……いかんせん大振りに過ぎる。この前から言っているだろう？　もっと手数を増やせ、と」

「わかってるもん！」

「……ならば、実践することだ」

優希やサクラ、穴埋めのための道具を用意し始めた近衛隊（ギャラリー）を気にも留めず、志信と小雪は組み手を続ける。

ひたすら拳を繰り出す小雪と、ひたすら回避を行う志信。小雪の動きは速く、攻撃はそれなりに鋭い。だが、目を見張るのはそれだけで動きそのものは単調だった。

それに対して素人の、ましてや一歳にも満たない少女の拳に当たるような生易しい鍛錬を志信は積んではいない。小雪の動きを見切り、拳を避け、時折逸らしていく。

しかし、一見余裕であしらっている志信だったがその表情は硬かった。

――動きの速さ、攻撃の重さについては言うこともなし、か。龍の身体能力とは大したものだな……あと五年も修行を積めば、どうなるか。

逸らすだけでも腕に衝撃が走る程度には、小雪の拳は重い。龍種としての身体能力と『強化』による底上げが可能にしているのだが、当たれば志信とて無事ではすまないだろう。そのため、小雪の相手は志信にとっても緊張感のあるものだった。

魔法とはつくづく便利な力だと内心で呟き、志信は集中を強める。
今はまだ単調な動きしかできないが、小雪も成長していけば様々な攻撃方法を覚えていく。そうなれば、組み手の相手をするのも難しくなる。
それをどこか楽しみに感じながら、志信は拳を突き出したことで伸びきった小雪の右腕をつかむ。そして同時に小雪の足を払うと、なるべく衝撃を感じないよう注意しながら地面へと投げ倒した。

「うきゅっ！？」

投げられ、奇妙な悲鳴を上げる小雪。志信はそんな小雪の様子に僅かな苦笑を浮かべると、大の字になって地面に倒れる小雪の顔を覗き込んだ。

「そろそろ終わりにするか？」
「う……うー……もういっかい！　つぎはいっぽんとる！」

悔しいのか、小雪は文字通り飛び起きる。そして腰を落とすと、志信が構えるのを待ってから地面を蹴った。

「……そういうところは義人にそっくり、か」

小雪の言葉と態度からか、志信は小さく呟きながら苦笑を深めるのだった。

「おー、やってるな」

会議室での回答だけでは納得がいかなかった文官数名に加え、カグラとアルフレッドを連れた義人は小雪が志信に飛び掛っていくのを見ながら楽しげに口を開く。

「いやぁ、やっぱり子どもは外で元気に遊ぶべきだよな？」

『遊ぶと言うには被害が大きいようじゃが……さすがの龍種といえど、すぐさま魔力の制御を覚えることはできないようじゃな。いや、長寿の龍種だからこそとも言えるのかのう』

「成長も緩やかってことか？　たしかに、動きは単調みたいだけどさ」

義人の目から見れば、小雪の動きは高速。しかし、それはどこか単調な印象を受ける動きでもある。志信と小雪の組み手を眺めながら、義人はノーレと雑談がてら話を続けていく。

「速いなぁ……でも、動きが真っ直ぐすぎるか？」

『そうじゃのう。あれでは避けるのも容易いじゃろうて。まあ、ヨシトでは避けられるかわからんが』

「いやいや、俺でも避けきれるって。多分、きっと……そうだといいなぁ」

声が尻すぼみに小さくなるが、それに対する突っ込みはない。義人は少しだけ空しさを感じつつ、小雪の訓練を眺めている優希とサクラの元へ足を向けた。

「お疲れ様。小雪はどんな感じだ？」

義人がそんな言葉をかけると、優希は笑顔で振り返り、サクラは慌てたように頭を下げる。

「も、申し訳ありません。コユキ様が魔力の制御を覚えるのには、まだまだ時間がかかりそうです」
「そうか……慌てなくて良いけど、なるべく地面を陥没させないようにさせてくれるか？文官連中から不安の声が上がっててな」
義人はそう言って苦笑すると、様子を見に来た文官達に視線を向けた。それを見たサクラは表情を引き締めて頷く。
「出来得る限り早く、コユキ様に魔力の制御を覚えていただきます」
気合のこもった声でそんな言葉を口にするサクラ。すると、それを擁護するように優希が口を開く。
「でも、小雪が地面を陥没させる回数は減ってきてるよ？　最初の頃は一日に十回以上穴を空けてたけど、今日はまだ二回だし」
「二回か。それならたしかに成長して……あ」
思わず、義人は声を上げた。すると、それに続いて巨石が落下したような音が響き、僅かに地面を揺るがす振動が発生する。
その場にいたほとんどの人間が震源地へと目を向けると、そこでは小雪が地面に拳を振り下ろした体勢で動きを止めていた。
「……やっちゃった」
一応、注意はしていたのだろう。小雪が呟いた言葉には、僅かな申し訳なさがこもっている。それを聞いた志信は、警戒のために構えていた両拳を下ろした。
「今回はここまでにするか……休憩を取ったら、サクラに魔法につ

いて教えてもらうといい。魔力の制御さえ覚えれば、力加減も覚えるだろう。それと、次からはちゃんと手数を増やすように」

「うー……はい」

小雪は志信の言葉に頷き、サクラの方へと振り返る。振り返った小雪はどこか落ち込んだ表情をしていたが、サクラの傍に義人と優希が立っているのを見てすぐさま喜色を浮かべた。

「おとーさん！　おかーさん！」

非常に楽しそうに、小雪が地面を蹴る。それを見た義人は、過去の経験からすぐさま『強化』を使いながら身構えた。そして、文字通り飛んでくる小雪をなんとか受け止める。

「ぐっ……な、何度も同じ手は食わねえ……」

『その割には、受け止めた衝撃で膝が笑っておるが？』

ノーレからの指摘を受け流し、義人は飛び込んできた小雪を地面に下ろす。すると、今度は優希のほうへと小雪が抱きつき、それを見たアルフレッドが穏やかに口を開いた。

「ふむ、慕われておるのう。それに、子どもは元気なのが一番じゃな」

そう言って、好々爺な笑みを浮かべるアルフレッド。その様子はまるで、公園で遊ぶ孫を見る祖父のようだった。そんなアルフレッドの後ろでは、連れてきた文官達を相手にカグラが現状の説明をしている。

「というわけでして、コユキ様に力の制御を教えているんです。そ

うしないと、城の中の物を壊されかねませんから」

音や振動だけでなく、実際に小雪が地面を陥没させる光景を目の当たりにした文官達は冷や汗混じりに苦笑した。それと同時に、音や振動の発生源がわかって納得がいったのか、義人に一礼して城へと戻り始める。

「おとーさん、しのぶさんにかてない」

「ん？　変な人呼ばわりは止めたんだな。あと、勝てないのも仕方ないって。むしろ、数日で一本取ったら俺が凹む」

義人はそんな文官達に軽く頷いて応え、優希が持っていた手拭いで顔を拭かれた小雪に苦笑して見せた。続いて、常の如くメイド服姿のサクラへと顔を向ける。

「サクラ先生から助言は？」

「せ、先生？　……い、いえ、その、コユキ様、もう少し魔力の制御に意識を向けないと駄目ですよ？」

突然の先生呼ばわりに面食らったサクラだったが、すぐさま気を引き締めて小雪へと助言を始める。しかし、それを聞いた小雪は僅かに首を傾げた。

「でも、どうやってもサクラおねえちゃんみたいにうまくできないよ？」

「わたしも長年魔法を使っていますから、魔力の制御ができるのは当然です。魔法の習得については、練習あるのみですよ」

そう言って、サクラは僅かに胸を張る。それが妹に対して威厳を見せようとする姉のように見えて、義人は小さく笑った。

小さく笑う義人を不思議そうに見つめた後、共に来ていたカグラはサクラへと質問を投げかける。

「サクラ、コユキ様の治癒魔法に関しての才能はおおよそ知っていますが、他の属性の魔法についてはどうでしたか？」

そうやって尋ねるカグラに、サクラは姿勢を正す。

「治癒魔法以外に関しても、魔法の才をお持ちのようです。おそらくは治癒魔法が一番得意だと思うのですが、雷魔法を除いて他の属性すべての魔法も使えます。その中では風魔法が一番得意だと思われますが……」

「風魔法か」

「風魔法ですか」

偶然というべきか、義人とカグラの声が重なる。義人は単に確認の意味を込めて呟いただけだったのだが、カグラはどこか複雑そうに視線を逸らした。

「か、風魔法が得意だなんて、ヨシト様に似たんでしょうか？」

「似たのか？　俺としては、龍だったら炎を吐くって思ってたんだけど」

「たしかに、龍種は炎の扱いに長けていることが多いですね。水龍などを除けば、大抵は火炎魔法が使えますし」

「へぇ……そのあたりは想像通りなんだな」

言い換えると、定番である。だが、義人はそんなことは口にせず、優希に抱きついたままの小雪へと視線を向けた。すると、その視線をどう受け取ったのか小雪が元気良く右手を上げる。

「こゆきもできるよ！」
「できるって、口から火を吐くのか？」
「うん！　みてて！」

そう言うなり小雪は少し離れた位置に移動し、集中するためか目を閉じた。義人はサクラへと視線を向けると、声を潜めて尋ねる。

「大丈夫なのか？　というか、魔力の制御が苦手なのに魔法が使えるのか？」
「は、はい。おそらく、成功しても小さな火が出るぐらいだと思います。今までも、小規模の魔法を使うことぐらいは出来ていましたから」
「それならいいけど……お、口から火が……」

義人がサクラに安全を確認していると、小さく開けた小雪の口の数センチ先に小さな火が灯った。その火はゴルフボールサイズの球体になると、ゆっくりと回転しながら徐々に大きく膨らみ始める。

「想像と違うな。俺としては、もっと放射状に吐くものかと」

実際に放射状に吐かれると何かしらの被害が出かねないが、想像と違ったため義人はそんなことを口にした。すると、小雪の様子を見ていたサクラが驚いたような声を上げる。

「すごく安定してますね。ヨシト様やユキ様がいらっしゃるからでしょうか？」
「良いところを見せたいのかもしれんのう」

サクラの声に続いて、アルフレッドが笑いながらそんな言葉を呟く。だが、途中から表情を変えて僅かに眉を寄せた。

「やけに大きな魔力を使っておるようじゃが……っ！」

怪訝な表情から一転、アルフレッドは表情を強張らせる。それとほぼ同時に、カグラも小雪の行動を理解して表情を変えた。

『と、止めよっ！　あれだけの魔力を使えば威力が洒落にならん！』

とどめとばかりに、ノーレも大声を張り上げる。今までほとんど聞いたことのないノーレの焦り方に、義人は首を傾げた。

「え？　止めろって……あれ？」

アルフレッドやカグラ、そしてノーレの反応に意識が向いていた義人は、小雪の口の先に発生した火の玉を見て目を見開く。

火の玉はいつの間にか直径三十センチほどまで巨大化しており、刺すような熱気を振りまきながら高速で回転していた。

「がおーっ！」

なにやら可愛らしい咆哮が響き、それと同時に小雪が火の玉を発射する。

上空目掛けて発射された火の玉は高速で上空へと突き進み、五百メートルほど上昇してから一気に膨張した。

――そして、爆発。

爆発音と共に火の玉が四散し、打ち上げ花火のように大輪を咲かせる。ただし、それは本物の打ち上げ花火のように火薬と金属粉による美麗なものではない。法則性もなく、無秩序に炎が飛び散った

だけだ。

「空中に向けて放たれたのが救いですね」

呆然と爆発を見ていた義人を支えるように、カグラが声をかける。

幸いというべきか爆発の規模自体は小さく、建物などに被害はないだろう。炎は空中で消えており、残り火がどこかへ落下したようにも見えない。もしも街中にでも撃ち込まれれば大惨事になっただろうが、カグラもその場合は全力で止めるつもりだった。

「おとーさん、どうだった？」

褒めてほしいと目を輝かせる小雪に、義人は引きつった笑顔を向けた。そして小雪の両肩をつかみ、作った笑顔で詰め寄る。

「小雪、良い子だから魔力の制御を覚えよう。な？」

「え？」

「サクラ。極力早く、魔力の制御を小雪に教えてくれ。いや、いっそ叩き込んでくれてかまわない。もしも城の中で今みたいなことをされたら大惨事になる」

「は、はい。了解です」

予想していたよりも酷い事態になりそうだと判断した義人がそう指示を出すと、背中に背負われたノーレがどこか呆れたような声を出す。

『魔力量に物を言わせた魔法だったのう……あれほどの魔力を使った割に、威力としては中級魔法ぐらいか。城の中だったら、壁が吹き飛ぶぐらいじゃな』

「それでも十分に大変だっての……」

母親の龍が迎えに来ないと、遠くないうちに城が破壊されかねない。そんな嫌な未来を想像し、義人はため息を吐くのだった。

「カグラ」

ため息を吐く義人を視界の隅に捉えつつ、アルフレッドは傍にいたカグラを手招く。カグラはそんなアルフレッドに不思議そうな表情をしながら近寄ると、小さく首を傾げた。

「はい。なんでしょうか？」

「少々話がある……夜にでも、儂の部屋に来てもらえるかのう」

アルフレッドは真剣な瞳でカグラを見据え、それを受けたカグラはすぐさま頷く。

「わかりました」

「うむ。では、儂は一足先に城へ戻っておく」

そう言い残し、アルフレッドは背を向けて歩き出す。カグラはそんなアルフレッドの背中を見送り、義人とは違った意味でため息を吐くのだった。

第百五話：カグラの役目

日暮れも過ぎ、食堂で夕食を食べ終えたカグラはアルフレッドの私室へと足を向けていた。カグラは一体何の用かと僅かに首を傾げるものの、“この時期”にアルフレッドから呼び出しを受ける理由はそれほど多くない。

あと数日で年を越し、新たな年となる。故に来年からの国政に関する話か、もしくは何かしら仕事で落ち度があったか、などと思考しながら、カグラはアルフレッドの私室の前で足を止めた。

あるいは、自身（カグラ）に関することか。

声なき呟きを飲み込み、カグラは右手で扉をノックする。あらかじめ言い含めてあるのか、扉の傍に守衛の兵士はいない。

「どなたかな？」

扉の内側から響く、アルフレッドの声。カグラは僅かに息を吸い込み、部屋の中に聞こえるよう声を出す。

「カグラです」

「おお、カグラか。入っておくれ」

「失礼します」

一言断りの言葉を入れ、扉を開く。そして室内へ入ると、カグラは極力音を立てないように扉を閉めてからアルフレッドの方へと顔を向けた。アルフレッドはカグラの視線を受け止めると、好々爺染みた笑みを浮かべる。

「わざわざ来てもらってすまんのう」
「いえ、お気になさらず。それで、お話があるとのことでしたが……」
そう言いつつ、カグラはアルフレッドが勧めてくる椅子へと腰を下ろした。すると、苦笑混じりにアルフレッドが湯呑みを差し出す。そして用意してあった急須を手に取ると、その湯呑みに緑茶を注いだ。
「うむ。話はあるが、ちと長くてのう……お茶でも飲みながら話すとしよう」
「それは構いませんが……」
アルフレッドの雰囲気から、そこまで深刻な話ではないと判断するカグラ。椅子に背を預け、知らずに入っていた力を抜くと、アルフレッドが口を開くのを待つ。
国王である義人の私室よりも少し狭いが、それでもこの城の中では二番目に大きいであろうアルフレッドの私室。寝室とは違い、置いてあるのは机や椅子、それにアルフレッド個人が所有している家具や調度品などだ。もっとも、人間と違って欲があまりないアルフレッドが持つ物は必要最小限である。
しかし、その中に人目を惹く物があった。
それは、棚の上に飾られた大小の刀である。木製の刀掛けに置かれた、本差と脇差。黒塗りの鞘に納められたその二刀が、カグラの気を引いた。豪華な装飾がされているわけでもなく、何かしらの奇形であるわけもない。この国ならばよく見かける、変哲もない刀だ。だが、生まれた頃からアルフレッドと関わりのあるカグラはこの刀が何なのか知っている。
八代前の国王にして、アルフレッドがこの国に仕える理由になった人物の形見。そして、この国に現存する最古の刀。

積み重ねた歴史がそうさせるのか、戦いに刀を用いないカグラでも心を惹かれるものがあった。
カグラの視線に気付いたのか、アルフレッドは苦笑を浮かべる。
「カグラは何度か見たことがあったと記憶しているんじゃが？」
「はい。しかし、それでも目を引かれますね」
そう言って、カグラは薄く微笑む。その笑みを見たアルフレッドは同じように笑いながら、眼前の少女（カグラ）を通して僅かに懐古の感情を覚えた。
歴代の国王と、歴代の『召喚の巫女』カグラ。自身が関わっただけでも、八人の国王と“二十四人”のカグラがいた。この国の歴史を紐解くならば、もっと多くの国王とカグラがいただろう。
アルフレッドは四代目の国王である杉田晴信義景（すぎたはるのぶよしかげ）の傍にいたカグラの面影を残す、当代のカグラへと目を向けると、浮かべていた笑みを消して表情を引き締めた。
「カグラ」
「はい」
答えるカグラも、アルフレッドと同様に表情を真剣なものへと変えている。
――この子も、大きくなったものじゃな……。
ある意味、娘や孫とも思えるカグラの様子に内心で笑う。それでもアルフレッドは表面上の態度を崩さないままに口を開いた。
「お主を呼んだ理由は二つ。一つはコユキに関すること。そしてもう一つはお主自身に関することじゃ」

「わたしに関することはわかりますが、コユキ様に関することもですか？」

少しばかり予想が外れ、カグラは驚きの色を浮かべる。アルフレッドはそんなカグラに頷いてみせると、話の続きを口にした。

「コユキに関しては、お主にそこまで関係はない。しかし、この国に関わることじゃ」

「……それは？」

「お主も知っての通り、コユキは親の龍が迎えに来るまでの預かり子。それが何ヶ月、何年……あるいは何十年後になるかはわからん。儂等エルフも長寿じゃが、龍種の寿命はさらに長い。さすがに産んだ子を忘れることはないじゃろうが、それでも龍の感覚から言えば数年でも早いくらいじゃろう」

そう言って、アルフレッドは自分用の湯呑みを手に取ってお茶を飲む。そして一息吐くと、僅かに眉を寄せた。

「本来ならば、儂のような魔物が国政に関わっているのは異常じゃ。しかし、この国ならばそれが異常にはならん」

「つまり、コユキ様も将来は国政に関わらせるべきだと？」

アルフレッドよりも長寿で、現国王である義人を父と慕う小雪。アルフレッドが宰相を務め、城下町にはドワーフや人間に友好的な魔物もいる。兵士達も小雪に対して悪感情があるようには見えず、将来的には国の役職に就くことも可能だろう。

そんなことを考えたカグラに、アルフレッドは首を横に振った。

「逆じゃよ。いや、むしろ関わらせてはならんのじゃ。儂や、城下町で働く魔物とはこの国に与える影響が桁違いじゃからな」

「影響、ですか……」
「うむ。儂も魔物じゃが、この国の高い立場にいる。しかし、それでもやっていることは人間と変わらん。積み重ねた年月はあるが、宰相を務めるのは儂以外でも十分にできることじゃ。だが、コユキは違う」
そこまで言うと、アルフレッドは僅かに語気を強める。
「魔物には魔物の規則がある。儂のような中級程度の魔物ならばいざ知らず、白龍のような、上級魔物の中でも上に立つものが必要以上に国に関わることはできんのじゃよ」
年月を経て成龍まで成長した小雪がこの国のために戦うことを選べば、それは非常に大きな戦力になる。あるいは、大きな戦力どころか小国ならば単体でも滅ぼしかねない危険な存在とも言えるだろう。
「もしも、必要以上に関わった時は？」
アルフレッドの話を聞いていたカグラは、思わずそんなことを尋ねた。すると、アルフレッドは苦いものを噛んだように顔をしかめる。
「……おそらくは、コユキを排除するために動くじゃろう。邪魔と思えば、この国と一緒にのう」
「なんて身勝手な……」
カグラはそう呟くと、額に手を当てた。何も問題がなければ良いが、もしも小雪がこの国に関わりすぎれば危険がある。

「魔物とはそんなものじゃよ。じゃが、ココユキの親ならば白龍じゃろう。伝え聞く話によれば、人間に対して友好的じゃ。しかし、規則を破ればその限りではないはず」
「かといって、今ココユキ様を放り出しても親の龍の怒りを買いますね……ココユキ様やヨシト様にこの話は？」
「まだじゃ。今のところ、ココユキはただの子ども。あくまで、ヨシト王やユキ殿を親と慕い、日々を過ごしておる。まあ、普通の子どもとは言えんかもしれんが、それでも問題はないじゃろう。この話も伝える必要があるならば伝えるが、今のところ伝える必要はない。カグラ、お主が知っていてくれればそれで良いぐらいの問題じゃ」

このままでいてほしいものじゃが、と付け足し、アルフレッドはため息を吐く。しかし、すぐに表情を改める。

「そして、もう一つの話じゃが……今のところ、こちらが本題じゃな」
「なんでしょうか？」

自然と背筋を伸ばし、カグラはアルフレッドの言葉を促す。そんなカグラを前にアルフレッドは僅かに逡巡するが、すぐさま表情を元に戻して口を開いた。

「お主に……いや、『召喚の巫女』であるカグラの役目についてじゃ。これに関しては、お主もわかっておるじゃろう？」
「はい」

アルフレッドの言葉に対して、カグラは短く答える。
異世界より国王を召喚し、補佐を務めていく。その他にも、『召喚の巫女』であるカグラには役目があった。

それは、次代のカグラを産むことである。

「現状、国の中で次代のカグラを担えそうな者はおらん。だが、お主の子ならば可能性が高いじゃろう。お主の母や祖母、累代のカグラがそうだったようにのう」

「わかっています。“わたし”のように、カグラとなるべく生まれ、カグラとなるべく育つ。そのためにも、極力早く……」

そう言って表情を硬くするカグラを前に、アルフレッドは自己嫌悪の感情を抱く。

母が魔法を使えるならば、その才能や魔力を引き継ぐ可能性が高い。両親が魔法を使えるならば、その可能性はさらに高くなる。それならば、カグラの子は次代のカグラに成り得る存在だ。それは累代のカグラが証明しているし、アルフレッドが生き証人である。しかし、そこには役目などと飾った言葉は通用しない。どう言い繕ったところで、国を存続させるためにカグラに強いる義務だ。次代のカグラになるであろう子どもを産むことを強制し、その後も必要なことを教える必要がある。

そして、新たに生まれた子どももまた、幼い頃から魔法の腕を磨き、魔力を鍛え、知識を蓄え、国王を召喚する代の場合は国王を召喚し、次代のカグラになるであろう子どもを産み、死んでいく。

そう、それを繰り返すだけに生まれ、死んでいくのだ。

「すまんのう……」

思わず、アルフレッドの口から謝罪の言葉が零れ落ちる。だが、それを聞いたカグラは不思議そうな顔をするだけだ。

アルフレッドとて、カグラの役目がすべて正しいと思っているわけではない。しかし、現状の体制になってすでに数百年。今更カグラに役目を放棄させることもできなかった。召喚した者を国王とす

るこの国の仕組みを壊すことは、できなかったのである。

「それで、相手はやはりヨシト王か？」

穏やからなぬ心中を無視し、アルフレッドは話の続きを行う。ここで義人の名前が出たのは、この国の男性の中で魔力を持っており、それを踏まえた上でカグラ自身の感情を配慮してだった。

「ヨ、ヨシト様は、その、えっとですね……」

途端、カグラは顔を赤くして視線を逸らす。今まで真剣な表情だったものが一瞬で崩れ去ったのを見て、アルフレッドは笑みを浮かべた。

「この国にいる魔法を使える男の中では、ヨシト王が適任じゃと思うがな。魔法隊や魔法剣士隊の中にも、ヨシト王ほどの魔力を持っておる者はおらんじゃろ？」

「そ、それは、いませんけど……」

「ふむ？　では、ヨシト王では嫌じゃと？　普段のお主を見ていれば、そうは思えなんだが」

今までアルフレッドが見てきた、義人とカグラの関係。それはアルフレッドが今まで見てきた歴代の国王やカグラと比べて見ても、良好に映っていた。すると、カグラは赤らめていた顔をなんとか真面目なものに繕い、ポツリと呟く。

「実は、一度ヨシト様を押し倒したことがあるんです」

「……すまぬ、カグラよ。聞き違いかもしれんが、お主が押し倒したのか？　押し倒された、ではなく？」

「はい。お酒に酔った勢いで……」

訥々（とつとつ）と、その状況を話し出すカグラ。アルフレッドは驚きを隠せないままにカグラの話を聞きながら、ふと思う。

――本当に、子どもが育つのは早いものじゃなぁ……。

まさか、すでにそんな事態になっているとは。しかし、カグラもすでに十七。累代のカグラと比べれば遅い方だろうが、それならば次代のことを考えるのも杞憂に過ぎない。年寄りのお節介だったか。やはり、生まれる子は女の子だろうか……少し混乱したアルフレッドがそこまで考えたところで、カグラは目を伏せた。

「それで、断られまして……」

「……断られた、とな？」

カグラの言葉を繰り返し呟き、アルフレッドは僅かに思考する。そして、納得がいったとばかりに頷いた。

「そういえば、以前やけに気落ちしていた時期があったのう。あの頃か」

人間にはそういう時期もあると静観していたアルフレッドだが、思ったよりも深刻な事態だったようだ。

「はい。だから、どうしても二の足を踏んでしまうのです。また、断られたらと思うと……」

そう言って、カグラは口を閉ざす。そんなカグラの様子を見ながら、アルフレッドは眉を寄せた。

――他の者に……いや、この子の気持ちを尊重するならば、それはまずいか。ここはやはりヨシト王に頼むのが一番かのう。

義人がカグラを嫌っていないというのは、アルフレッドにも断言できる。しかし、カグラのことを好いているかどうかは別だ。

アルフレッドの目から見た義人は、自分が好意を持った女性にしか愛を向けない類の人間である。もっとも、前代や前々代の国王のように見目麗しい女性ならばすぐに手を出すというのも困りモノだが。

「……ふむ、折を見て儂の方から話をしてみるかのう」

「アルフレッド様からですか？」

「そうじゃ。ここは当人同士でと言いたいところじゃが、あまり長い時間をかけられないのも事実。カグラよ、お主も以前から覚悟はしておるじゃろう？」

そこから先は口に出さず、アルフレッドはカグラを見る。カグラはそんなアルフレッドの視線に対して、小さく頷いた。

「わかっています。わたし一人の意志よりも、この国の方が大事ですから」

「……そうか。話はこれで終わりじゃ。時間を取らせたのう」

「いえ、それでは失礼します」

一礼し、カグラはアルフレッドに背を向ける。アルフレッドは自室の扉が閉まるまでカグラの背中を見送り、その姿が見えなくなってからため息を吐いた。

「どうにか、あの子には幸せになってほしいものじゃが……無理な願いかのう」

どうやって義人を説得するか。それを考え、アルフレッドは頭を振った。

それ以前に、最近義人が妙な行動をしているという報告が入っている。意味もなく城の中を歩き回ったり、図書室に足を運んだりしていると義人の護衛を務める兵士から聞いていた。回数は少ないが、護衛を連れて城下町に足を運んでもいる。

それが何を意味するのか。アルフレッドは義人とカグラの顔を頭に浮かべ、ため息を吐くのだった。

第百六話：発見

季節外れと言うべきか、まるで梅雨を再現したような大降りの雨の音を耳にしながら、義人は手に持っていた王印を執務用の机の上へと置いた。

「この時期なら雪が降っても良さそうなんだけどなぁ……」

そう呟きながら、義人は窓の外へと目を向ける。

執務室の窓から見える空は濃い灰色の一色のみ。少しの雨ぐらいならば外で訓練を行う兵士達も、さすがに今日は訓練を中止している。部隊によっては臨時の休日か、もしくは室内で軽く体を動かすぐらいだろう。しかし、雨が降ろうが政務がある義人は小さくため息を吐いた。

「おとーさん、どうかしたの？」

そんな義人のため息をどう取ったのか、小雪が不思議そうに首を傾げる。義人の邪魔をしないように部屋の隅で魔力の操作の練習をしていたのだが、どうやら義人のため息に興味を引かれたようだ。すると、それまで小雪の様子を見ていたサクラや優希も同じように義人へと視線を向ける。

「義人ちゃん、もしかしてため息をつく癖がついたんじゃない？」

「嫌な癖だ……でも、否定できないのが悲しいところだな」

否定できないと苦笑する義人。隣に並べた机で書類に目を通していたカグラは、そんな義人に対して僅かに視線を向け、すぐさま逸らす。

「お疲れなら、肩をお揉みしますよ？」
「お、それは魅力的な提案だな」
「かたもみ？　こゆきがする！」

サクラの言う肩揉みを理解しているのか、小雪は楽しげに右手で挙手する。だが、やる気を見せる小雪に対して義人は少しばかり表情を固くした。

「小雪、ちゃんと力の制御ができるようになったのか？」
「え？　う、うん……だいじょうぶ、たぶん」

非常に不安になる返答だった。義人はその返答を聞いて頬を引きつらせ、カグラはそんな義人に視線を向けてすぐさま逸らす。

『肩揉みが終わった後、両肩が無事なら良いが』
「サラリと不安になることを言わないでくれ」

ノーレの呟きに、義人は両肩骨折という嫌な未来を想像して頭を振る。

小雪がサクラの指導のもとに魔法や魔力の操作の練習を始めてまだ日が浅い。義人はそのことに大きな不安を覚え、逃げの一手を打つことにした。

「いや、やっぱりそこまで疲れてないから肩揉みはいいや。こっちは気にせず、小雪は練習に集中すること」
「ぶー……」

小雪は不満そうに唇を尖らせるが、それを見た優希が宥めるように頭を撫でる。すると、すぐさま機嫌を直して笑顔を浮かべた。

そんな優希と小雪の様子に苦笑を零すと、義人は再び政務に取り掛かる――――前に、先ほどから視線を向けてくるカグラへと振り向いた。

「カグラ？」

「は、はいっ！？」

先ほどからどこかソワソワとしながら、カグラは盗み見るように視線を向けてくる。義人はそんなカグラの態度を不思議に思って声をかけたのだが、返ってきた反応はやたらと過剰なものだった。

カグラは驚いたように背筋を伸ばし、何故か手に持った書類を裏返しに置いてから義人へと視線を向ける。

「な、何か？」

「さっきからやたらと視線を感じるんだけど、何か用か？」

「い、いえ。特に何もないですよ？　ヨシト様の気のせいでは？」

取り繕うように微笑みながら、カグラは義人の言葉を否定した。義人はそれに引っかかるものを感じながらも、本人がそういうのならばと自分を納得させる。

――――俺が自意識過剰なのか……でも、視線を感じるのは確かだよなぁ。

心の中で呟きながら義人は再び政務へ戻るが、数分も経つと再び視線を感じた。一体何なのかと不思議に思いつつ、義人は書類をめくっていた状態から脈絡もなく顔を上げる。すると、カグラは慌てたように視線を逸らす。

「……」

義人は無言のままに書類仕事に戻り、小さく首を傾げた。

――――俺、何かしたっけ？

最近何かあったかと思い返すが、該当する記憶はない。カグラを怒らせるようなことをした覚えもなく、小雪に関する騒動もサクラや志信の協力によって早急の解決を図っている。

もしや小雪が執務室の中で魔法の練習をしているのが気に食わないのだろうか、などと首を傾げる義人だが、それも違う気がした。

自分の視線から逃げるように視線を逸らすカグラを数秒眺め、義人は口を開く。

「言いたいことがあるなら言ってくれていいぞ？　あ、もしかして何かミス……じゃない、何か失敗でもしたのか？　……って、そんなわけないか」

カグラも人の子である。もしかしたら政務で何か失敗をして、それを言い出せないのかもしれない。そう考えた義人だったが、カグラが何かを失敗して黙っている可能性の低さから自分で否定した。

義人が仕事の手を止めて心配そうな表情を浮かべているのを見たカグラは、逃げるように視線を逸らし、しかし再び義人の方に視線を向け……という行動を三回ほど取った後、口を開く。

「その、ですね。アルフレッド様から、何か話を聞いていたりは……」

「アルフレッドから話？　何のことだ？」

ここ最近、世間話や政務に関すること以外でアルフレッドと話した覚えはない。言い辛そうにしているカグラを見て、まさか本当に

何かを隠していたのかと義人は眉を寄せる。

「な、なんでもないです！　気にしないでください！」

義人の反応からまだ話を聞いていないのだと気付いたカグラは、両手を振って何でもないとアピールした。そんなカグラの様子に、義人は怪訝そうな表情を浮かべる。

「気にするなって……」

そこで話を切られては、義人としても気になって仕方がない。だが、慌てて仕事に戻るカグラから問いただすのもどうかと思い、義人はいつか聞けるだろうと自分に言い聞かせた。

アルフレッドとしては、“まだ”そこまで性急に事を運ぶつもりはない。今は忙しい時期のため、カグラにした話も年が明けて落ち着いてから話せば良いと考えていた。

「カグラ様、どうしたんでしょうか？」

そんな義人とカグラのやり取りを見ていたサクラは、声を潜めて優希に話を振る。

「んー……」

話を振られた優希は小さく首を傾げるが、特に何かを言うことはなかった。そんな優希の傍では、義人とカグラの会話にまったく興味を向けていなかった小雪が優希を真似て首を傾げている。

結局、その日の政務が片付くまでに同じようなやり取りが数回行われるのだった。

「まったく、カグラはどうかしたのか？」

その日の政務も終わり、夕食も食べ終えて自室へと戻った義人は凝った肩を軽く叩きながら呟く。

カグラには気にするなと言われたが、さすがに何度も同じようなことが続けば気にもなる。

義人はそういう日もあるか、と無理矢理自分を納得させると、部屋に置かれてある机へと歩み寄った。そして備え付けられた引き出しを開けると、中から折り畳まれた一枚の紙を取り出す。

紙に書かれていたのは、部屋らしきものの見取り図。レンシア国の魔法隊隊長であるヤナギから受け取ったものだ。

義人は折り畳まれた紙を片手で弄びながら僅かに視線を鋭くすると、壁に立てかけたノーレへと視線を向ける。

「ちょっと優希の部屋に行ってくるよ。留守番よろしく」

『む……妾も連れて行け、と言いたいところじゃが、それは無粋かのう？』

「そういった用事でもないんだけど、近いから大丈夫だろ」

城の中ならば危険もなく、優希の部屋は義人の部屋から歩いて数十秒程度だ。廊下には見回りや守衛の兵士もいる。そのため、ノーレは特に言い咎めることもなかった。

義人はそんなノーレに対して小さく笑ってみせると、折り畳まれた紙をポケットに入れて歩き出す。そして自室の扉を開けて廊下に出ると、小さく呟いた。

「アルフレッドがどうとか言ってたな……」

見取り図について本当はアルフレッドに聞くつもりだったが、昼間のカグラの態度が義人に警戒心を抱かせる。何かしら隠してあるだろうと当たりをつけ、義人は優希の部屋に足を向けた。

「ヨシト王、どうかされましたか？」

歩くこと三十秒。優希の部屋へとたどり着いた義人は守衛の兵士に声をかけられ、苦笑を返した。

「ちょっと優希に用があって」

「そうですか……」

守衛の兵士二人は互いに顔を見合わせると、どうぞと言わんばかりに扉から離れていく。その際のにこやかな笑顔が気にかかったが、義人は守衛の兵士から注がれる冷やかし半分、興味半分の視線を無視しつつ、義人は優希の寝室の扉をノックする。

「優希、入ってもいいか？」

「……義人ちゃん？　うん、いいよ」

部屋の中に向けて義人が声をかけると、数秒の間を置いて扉越しに返事が届く。了承の返事を聞いた義人は扉を開け、室内へと足を踏み入れた。そして優希の姿を探して室内を軽く見回すと、ベッドに腰掛ける優希とその膝の上に座る小雪を見つける。

小雪は優希の膝の上に座ったまま心地良さそうに目を閉じており、優希はそんな小雪の頭を優しげな手つきで撫でていた。

眠る前だったのか両者とも普段着ではなく寝間着（パジャマ）に着替えており、それを見た義人は間が悪かったかと頬を掻く。

「もしかして、今から優希も寝るところだったか？」

“元の世界”ならば起きている時間でも、“こちらの世界”ではそうもいかない。だが、義人の問いに対して優希は首を横に振った。

「ううん。小雪は髪を梳いてたら眠っちゃって……わたしはもう少し起きてるつもりだったよ」

そう言って、優希は右手に持った木製の櫛を掲げてみせる。すると、義人と優希の会話が聞こえたのか小雪がゆっくりと目を開けた。

「んぅ……あれ……おとーさん？」

小雪は寝惚け眼を擦りながら、不思議そうに義人を見る。それに対して、『おとーさん』と呼ばれることに慣れてしまったのか、それとも諦めたのか、義人は軽く右手を振って答えた。

「小雪、眠るなら布団に入って眠らないと風邪をひくぞ？」

「んー……」

義人の言葉に、小雪は小さく唸りながら頷く。そして優希の膝から下りると、義人のもとへとフラフラしながらも歩み寄り、腰に抱きついた。

「おとーさんといっしょにねる……」

一瞬、力の制御は大丈夫かと義人は警戒するが、小雪の腕から伝わってくるのは見た目相応の力のみ。そのことに安堵し、義人は苦笑を浮かべた。

「あとで部屋に連れて行ってあげるから、今は大人しく寝ていて……」
「ううん……おかーさんもいっしょにねるの」
――それはつまり、川の字になって寝ろと？
小雪の言葉に固まりつつ、義人は内心で問いを発する。小雪は半分寝惚けているのか、そんな義人の様子に気付かず幸せそうな笑みを浮かべていた。
「ほら、小雪。こっちにおいで」
どう答えるか迷っていた義人を助けるためか、優希が小雪を抱きかかえる。そしてゆっくりとベッドに寝かせると、慣れた手つきで布団を被せた。すると、数秒の内に小雪が寝息を立て始める。
優希は小雪が寝息を立て始めたのを確認すると、義人の方へと振り返った。
「それで、何か用があったんだよね？」
「あ、ああ。ちょっと優希に頼みたいことがあってな」
そう言いつつ、義人はポケットから折り畳まれた見取り図を取り出すと、優希へと差し出して口を開く。
「多分城のどこかの部屋の見取り図だと思うんだけど、見つからなくてね。できれば協力してくれないか？　俺はあまり昼間に動けないし、優希なら城の中を歩き回ってもあまり注目されないだろうし」
「見取り図？」

義人の言葉に首を傾げつつ、優希は見取り図を手に取る。そして折り畳まれた見取り図を広げると、かすかに目を細めた。

「これがどうかしたの？」

食い入るように見取り図を見る優希に、義人は肩を竦める。

「実は、レンシア国でヤナギ隊長に渡されたんだ。俺に関係があるみたいなんだけど、詳しいことはわからなくてね。とりあえず、その部屋がどこにあるかわかれば何かがあると思うんだけど」

「んー……これがどの部屋なのかを探せばいいんだね？」

「そういうこと。頼めるか？」

義人がそう言うと、優希はすぐさま笑顔で頷く。

「うん、わかったよ。わたしのほうで探しておくね」

深く聞くこともなく了承する優希。義人はそんな優希に対して苦笑を向けた。

「悪い。今度何かお礼をするよ」

「ふふ、楽しみにしとくね？　……あっ」

「ん？」

義人の言葉に笑顔を見せる優希だったが、再び見取り図に目を落とすなり声を上げる。義人がどうかしたのかと覗き込むと、優希は顔を上げずに呟く。

「義人ちゃん、これって図書室じゃないの？」

「……はい？」
「図書室にはよく本を見に行くけど、この見取り図と似ているような……」
むむ、と眉を寄せる優希に、義人は傍に置かれている机へと目を向ける。
机の上には三冊ほど本が置いてあり、おそらくは図書室から借りてきたものだろう。優希の部屋には書棚もあるが、書棚にない本は図書室から借りてきているようだった。
義人も見取り図に描かれた部屋を探すために図書室で城内の地図を探したことがあったが、目的の部屋が図書室だと考えたことはない。
「……灯台下暗しってやつか」
思わぬ見落としに少々凹みつつ、義人は額に手を当てる。言われてみれば、たしかに扉や窓の配置に見覚えがあった。
「むぅ……目的の場所を調べようとしたら、そこが目的の場所だったか……知らず知らずのうちに除外してたな」
悔やむように頭を掻く義人だが、そんな義人を見た優希が話を逸らすように口を開く。
「それで、その見取り図で何がわかるの？」
「いや、それは俺もわからないんだ。ま、明日にでも確認してくるさ」
本当ならば今日にでも確認したいところだが、夜間に図書室に出入りするのが知られれば、カグラあたりに何をしていたのかと聞か

れる可能性が高い。
それを考慮し、義人は思考を切り替えると苦笑を浮かべた。
「確認したら優希にも教えるよ。じゃあ、遅くに悪かったな」
「ううん、別に良いよ」
気にしていないと、首を横に振る優希。
そんな優希に礼を言うと、義人は部屋を後にするのだった。

第百七話：頼み

城の中には宝物庫（ほうもつこ）と呼ばれる場所がある。
その名の通り、宝物が保管されている場所だ。二十畳ほどの広さの部屋であり、入り口の扉は他の部屋に比べて重厚で頑丈な作りとなっている。
その上、扉には『魔法文字』を使用して『強化』の術式が刻まれた錠前が付けられており、なおかつ外から侵入できないように窓もない。
扉の両脇には常に見張りの兵士が立ち、国王（よしと）の私室並の警備体制が敷かれていた。
余談ではあるが、義人が生活を送る寝室や執務室は侵入者対策としてあちこちに『強化』の術式を『魔法文字』で刻んであり、力技で侵入するのはほぼ不可能となっている。窓ガラスにも『強化』の術式が刻んであり、侵入するには生半可な腕では不可能だ。もっとも、カグラ並の魔法の腕か小雪並の魔力があれば力尽くで侵入することが可能ではあるのだが。
閑話休題。
宝物庫の中ではいくつもの棚が並び、保管用の箱に入った金や銀、宝石などが置かれていた。その中には貴重な魔法具も置かれており、その管理については代々の魔法隊隊長……当代でいえばシアラの管轄となっている。

「……」

そして、その日のシアラは無言で魔法具の点検を行っている最中だった。
魔法隊の副隊長に本日の訓練内容を言い渡し、シアラは宝物庫に置かれた魔法具の一つ一つに目を通していく。

定期的に点検は行っているが、それは置いてある魔法具の数を数えるなどの簡易なものだ。目録片手に名前や状態の確認まで行うことはほとんどない。精々半年に一回あるかないかで、年の暮れに行う点検は後者に該当した。

シアラは常のように紺色のローブを身に纏い、愛用の杖はすぐ傍に立てかけてある。どこか無気力な瞳で魔法具の点検を行っていくが、頭に乗せた三角帽子がずれるのが気になるのか、時折右手で三角帽子の位置を直しながらの作業だった。

「……これは？」

ふと、シアラの手が止まる。

その視線の先にあったのは、小さな木作りの人形だった。人の姿を真似ているのか、中途半端に人体を形取った人形。それが四つほど並べてあり、シアラは首を傾げた。

四つの内二つの人形は肩口から何かに斬られたような跡があり、しかも片方は右腕に当たる部分がない。残った二つは原型を留めているものの、あちこちに凹んだ跡がある。

シアラは宝物庫に納められている物を記した目録を手に取ると、“それ”が何なのか調べていく。そして一分ほど目録に目を通し、小さく口を開いた。

「……『お姫様の殺人人形』。人の姿、能力を真似ることができる魔法具」

多少の制限があるものの、人の姿に化ける人形。それに目を向け、シアラは数度目を瞬かせた後もう一度目録に目を落とす。

『お姫様の殺人人形』を目録に書き加えた人物の名を調べてみれば、そこにはカグラの名前があった。地位や持っている権限はカグラの方が上であるため、目録に新たな項目が書き加えられているの

は問題ない。
問題はないのだが、魔法具を管理する立場としては目録に加えたことで一言欲しかったなと内心で呟き、シアラは右腕がない『お姫様の殺人人形』を手に取る。

「……頭に思い描いた人に、化けさせることができる」

何か思うところがあるのか、シアラはポツリと呟いて機械的な動きで左右に首を振る。そして宝物庫内に自分しかいないことを確かめると、帽子を深く被り直して目を閉じた。

「……」

静寂が部屋の中を満たすこと少々。シアラはゆっくりと目を開くと、首を傾げる。

「……失敗？」

手に握った人形は姿を変えず、元のままだ。誰に化けさせようかとしたかはシアラ本人が知るのみだが、その表情には少しばかりの落胆が見える。
シアラはため息を一つ吐きながら人形を元の位置に戻すと、今度は比較的傷が少ない人形を手に取った。人形の体はあちこちがボコボコに凹んでいるが、肩口から切り裂かれている上に右腕がない人形に比べればマシだろう。
シアラは右手で人形を軽く握り締めると、今度は長年の友人の姿を思い浮かべる。すると手に持った人形が僅かに発光し、徐々に形を変えていく。その様はまるで小人が巨大化でもするかのようで、シアラは人形を床に置いてから興味深そうに瞳を輝かせた。
そうやってシアラが人形を観察していると、人形が姿形を変え終

えてゆっくりと立ち上がる。姿を変えた人形は、己が身に纏っているメイド服を不思議そうに見下ろすと、数秒経ってからシアラに対して一礼した。

「……サクラ」

思わず、シアラの口から友人の名が零れる。メイド服を着た人形……サクラは僅かに不思議そうな顔をすると、ゆっくりと口を開いた。

「シアラちゃん、どうかしたの？」

僅かに首を傾げ、心配そうな表情で人形（サクラ）が尋ねる。その所作に、シアラは小さく息を呑んだ。

「……サク、ラ？」

一瞬、シアラは目の前のサクラが人形であることを忘れた。サクラとは長年の友人で、母は異なるものの姉妹でもある。そのシアラから見ても、人形（サクラ）は本人と見紛うばかりの擬態振りだった。

質の良い『お姫様の殺人人形』ならば、本人の容姿と能力の九割程度真似ることが出来る。能力までは完全に真似ることができないが、上手く化けさせることができれば他人と摩り替わることも可能だろう。もっとも、真似ることができるのは能力だけなのでカグラのような大きい魔力を持つことはできないが、十分に驚異的と言える。

「……戻れ」

シアラは短く、人形（サクラ）への命令を呟く。すると、その命令を聞いた

人形はすぐさま動きを止め、脱力したように膝を突いた。そして床へと倒れ込み、元の木作りの人形へと姿を変える。

友人の姿をした“モノ”が人形へと戻る様は、見ていて気分が悪い。変化させる対象を違うものにすれば良かったと後悔しながら、シアラは地面に落ちた人形を拾い上げた。そして無言のままに人形を元の位置に戻すと、最初に手に取った右腕がない人形を手に取る。

元財務大臣のエンブズが謀反を起こした際に、国王である義人を暗殺するために使用した人形。サクラの姿を真似ていたという報告はシアラも受けており、シアラは義人がノーレで切り裂いた部分へと触れる。

「……わたしでも、直せる？」

『魔法文字』は多少扱えるが、『魔法具』の作成に関してはそこまで知識を持っていない。シアラは良い機会かもしれないと心の中で呟くと、『魔法具』の点検作業に戻るのだった。

「それで、俺のところに許可をもらいにきたと？」

執務室へと訪ねてきたシアラに少しの困惑を向け、義人は手に持った書類の束を机の上へと置く。

義人の視線の先では右腕がない『お姫様の殺人人形』を片手に持ったシアラが立っており、義人の言葉に対して小さく頷いた。

「……この人形が壊れているので、直してみたい……です」

そう言って突き出してくる『お姫様の殺人人形』を見て、義人は僅かに身を引く。シアラが意思表示をしてくるのが珍しくもあったが、それ以上に義人にとっては眼前の人形に対する複雑な心境の方が重要だ。

「ん、んー……ま、まあ、壊れたものを修理してくれるっていうのならこっちからお願いしたいぐらいだな」

そう言って小さく笑う義人だが、その笑みが引きつっていることにシアラは気付かない。

「……直せるかは、わかりません」

自信がないのか、シアラは無表情なままで僅かに眉を寄せた。

そもそも、カーリア国の魔法技術は他国に比べて数段劣る。農業や商工業も劣っているのだが、それらと比べてもなお酷い。

戦闘者として魔法を使える者は多いが、『魔法文字』などの技術を習得している者がほとんどいないのが現状だった。

カーリア国の土地柄として、魔物を退治するための技術や知識は他国と比べても優れている。しかし、その技術や知識にしても実際に魔物を退治する兵士の腕前が足を引っ張っており、他国に知れ渡るほどに優れているとは言えなかった。それは精々、特殊な国の統治法や『召喚の巫女』であるカグラの有名さに花を添える程度のものだ。

農業や商工業はあと数年もすれば多少の改善が見込めるが、魔法技術についてはまったくと言って良いほど改善の目処が立っていない。

義人は魔法技術にどんなものがあり、カーリア国はどの程度の魔法技術を有しているか知らなかったが、シアラの言葉に将来性を感じて気軽に頷いた。

「直せなくても、それはそれで良い経験になるだろ。壊れているものだから、そこまで気にしなくていいぞ？　何かあったら報告してくれれば良いし」

自分で壊しておいて言えることではないけど、と付け足して、義人は小さく笑う。

「……わかりました。何かあったら報告します」

シアラはそんな義人の言葉に頷くと、一礼して執務室から退室するのだった。

シアラが退室して数十秒も経たないうちに、執務室に扉がノックされる音が響く。それを聞いた義人は何事かと顔を上げ、入室の許可を口にした。

「どうぞ」

「失礼します」

そう言って執務室に入ってきたのはカグラである。扉は守衛の兵士に開けてもらったのか、両手に抱えるほどの紙の束を持っており、それを見た義人は少しばかり顔を顰めた。

「仕事の追加か？」

常の白衣緋袴の姿で歩み寄ってくるカグラにそう問いかけると、カグラは苦笑しながら頷く。どうやらアルフレッドから受け取ってきたらしく、それなりに重要度が高そうだ。

「御裁可をいただくものが半分と、報告書が半分ですね」

そう言いながら、カグラは義人の机の上に書類の束を乗せる。義人は仕事量が一気に増えたことに眉を寄せると、何の脈絡もなく机に突っ伏した。

「昼までには仕事が終わると思ったのに……というか、まとめて持ってこられると余計に気が重くなる……」

「アルフレッド様からヨシト様に渡して欲しいと言われたので持ってきたのですが……少しずつ持ってきても、ヨシト様は『いつになったら終わるんだ』と言われるでしょう？」

一気にやる気がなくなったと言わんばかりの義人を見て、カグラは口元に手を当てて穏やかに笑う。しかし、ふと何かを思い出したように表情を引き締めると、机に突っ伏した義人へと疑問の声を投げかけた。

「今シアラ隊長とすれ違いましたけど、何かありましたか？　見間違いかもしれませんが、少し嬉しそうな顔をしているように見えたんですが」

「ん？　いや、何かと言うほどのことはないけど、壊れた『お姫様の殺人人形』を修理してみたいって言ってきてさ……許可したけど、駄目だったか？」

尻すぼみに小さくなった義人の言葉に、カグラは僅かの間、考えを巡らせるように沈黙してから首を横に振る。

「いえ、わたしも『魔道具』の作成はしたことはあまりありませんし、良いのではないでしょうか？　この国の魔法技術の発展のための新しい試みとなりそうですし」
「カグラでもあまり作ったことがないのか？」
「はい。『魔法文字』ならば習得しているのですが、それとは違った分野になりますから……それはそうとヨシト様。何やら朝から集中できていないようですが、何かありましたか？　いつもならば、追加の仕事が来る前に今日の分が終わっていそうですけど」
「……いや、何もないけど？」

不思議そうな顔をしながらのカグラの指摘に、義人は極力平静を装いながら否定した。カグラはそんな義人をマジマジと見つめ、『そうでしょうか？』と納得できないように首を傾げる。

――――やっぱり、昨日の内に確認しに行けば良かったかな。

カグラの視線を受け止めながら、義人は内心で僅かにため息を吐く。

優希のおかげでヤナギ隊長から受け取った地図が何処を示しているのかわかったが、さすがに夜間の内に図書室へ忍び込むわけにもいかない。国主が忍び込むというのもおかしな話ではあるが、義人としてはなるべく人目につきたくはなかった。否、正確に言うならば、普段と違う行動をしてそれがカグラに報告されるのを防ぎたかった、と言うべきか。

カグラは義人の行動をそれとなく兵士に見張らせており、義人も兵士に見張られているのは感じ取っている。

最初は何故カグラがそんな真似をするのかと訝しんだ義人だったが、ある程度の月日が経てば自然とその意図も見えてきていた。

――護衛の意味もあるんだろうけど、俺達が……いや、俺がいなくなるのを防ぐためか。召喚の魔法はカグラしかできないって自分で言っておいて、用心深いなぁ。

カグラに対する僅かな疑念を苦笑することで頭の隅に追いやり、義人はカグラから視線を外す。

そして、新たに追加された仕事を片付けるべく再び政務に励むのだった。

第百八話：隠されしもの

「まったく、今日に限って仕事の追加が何度も来るなんて……まるで狙ったみたいだな」

愚痴のように呟きつつ、真紅の絨毯が敷かれた廊下を歩くのはカーリア国の国王である義人だった。

あと数日で一年が終わり、新しい年がくる。何かしら特別なことがあるわけでもないが、それでも節目であることに変わりはない。城の中でもどこか浮ついたような空気が漂い、まるで祭りの前夜のようにも思える。

石造りの上に敷かれた絨毯が返す、なんとも微妙な柔らかさを靴越しに感じながら歩く義人だったが、それもすでに慣れて久しい。

“こちらの世界”へ召喚されて早七ヶ月。妙なところで月日の移ろいを感じる義人だった。

そして、そんな義人に追従するように二人の男性兵士が一定の間隔を空けてついてくる。外を出歩くならともかく、城の中を移動する程度なので近衛隊ではなく魔法剣士隊の兵士二名による護衛だ。

義人は背中から聞こえてくる規則正しい足音に心中でため息を吐くと、背中に担いだノーレへと話しかけることにした。

『どこへ行くにも護衛か……個人的な、自由な時間ってないもんかね？』

毎度のことながら、誰かしら護衛がついてくるのは義人としても気になる。もしも志信が護衛ならば歓迎するところだが、生憎と志信は近衛隊への訓練があるためここにはいない。

『部屋に引き篭もっておれば良いのではないか？　そうすれば個人

的な時間が取れるじゃろ？』

『……引き篭もりの国王とか駄目すぎるだろ。色々な意味で』

予想外なノーレの言葉に少々呆然とする義人だが、すぐさま突っ込みを入れる。あるいはノーレなりの冗談だったのかもしれないが、声色からしてその線は薄い。義人はそんなノーレに小さく笑うと、目的地……図書室へと向けてのんびりとした足取りで向かう。

背後についてくる護衛は魔法剣士隊の人間だが、義人とノーレの思念通話を聞き取れるほどに魔法を熟達しているわけではないらしく、気兼ねなく話すことができる。あるいはノーレが“声”を聞かせようとすれば聞こえるだろうが、意味もなければ魔力の無駄でもあるので実行することはなかった。

『それで、図書室に何の用じゃ？　城内の見取り図ならば、エルフにでも聞いたほうが早いじゃろう？』

最近の義人の行動を踏まえてそう告げるノーレだが、それに対して義人は否定の言葉を口にする。

『いや、そういうわけじゃないんだ。今日は別件だよ』

『別件？　はて、何かあったかのう？』

義人が図書室を訪れる理由が思い当たらなかったノーレは、不思議そうに尋ねた。義人は会話に気を取られ過ぎないように注意しつつ、その回答を示す。

『昨日の夜、俺一人で優希の部屋に行っただろ？　その時優希と話していたら、目印の場所を優希が知っててさ』

『なんじゃと？　一体どこ……いや、それが図書室というわけじゃな』

『ご名答。まさかスタート地点がゴールだったなんて思わないよな』
『すたぁと？　ごぉる？　ううむ……正確は意味はわからんが、言いたいことはわかるのう』

言葉の意味がわからずに少しばかり唸るノーレだったが、言いたいことは伝わったらしい。そうやって他愛無い話を続けているうちに、図書室の前へと到着した。義人は背後に控える護衛へと振り返ると、気軽に声をかける。

「調べ物をしてくるから、この場に待機しておいてくれ。暇だったら休憩に行ってもいいから」

召喚された当時は、思わず年上の臣下に対して敬語で命令をすることもあった。しかし義人も慣れてしまったらしく、適当に指示を出す。

「ヨシト王、それでは護衛の意味が……」

そんな義人の指示を受けた護衛の兵士は僅かに困惑した表情を見せるが、義人は軽く笑って取り合わない。

「城の中だし、大丈夫だよ。カグラに何か言われたら、俺の命令だって伝えてくれていいから。それにほら、本を読んでいる時に傍に人がいると気が散るだろ？」

冗談混じりに告げ、義人は図書室の扉を開く。そして護衛の何か言いたげな雰囲気を背に感じながら、図書室へと足を踏み入れるのだった。

図書室の扉が閉まって一分ほど経ち、義人の護衛としてついてきていた兵士二人は互いに顔を見合わせる。そして片方の兵士が声を潜めて呟いた。

「……報告を頼む」

「……了解」

短く言葉を交わし、片方の兵士が歩き出す。向かう先は、カグラの執務室だった。

「うーん……この部屋、ちゃんと掃除してるのか？」

義人は相変わらず埃っぽい部屋だと苦笑しつつ、室内に足を踏み入れていく。利用者が少ないためか、定期的に掃除されることもない。後日手の空いているメイドにでも頼むことを頭の片隅で考えつつ、義人はズボンのポケットから折り畳んだ紙……ヤナギから受け取った見取り図を取り出した。

どこかの部屋らしき、一枚の見取り図。そして、紙面に記される小さな赤い丸印。それらに目を通し、義人は頷いた。

「たしかに、優希の言う通り図書室のことみたいだな」

『ふむ、丸印が指す場所は……奥のようじゃな』

義人はノーレの言葉に従い、ゆっくりと歩を進めていく。見取り図に描かれた扉や窓の位置を元にしながら、赤い丸印が示す場所へと。

見取り図と照らし合わせながら、慎重に位置を確認する。そして赤い丸印が示す場所を見て、思わず首を捻った。

「魔法に関する書棚、か……ここに何かあるのか？」

そう呟き、とりあえずといった様子で並んだ本へ手を伸ばす。今まで何度かこの場所に来たことがあるが、特に変わった様子はなかった。

『読んだことのない本の中に何かあるのではないか？』

「……そうかもな。とりあえず、読んでいくか」

義人は片っ端から本を手に取り、流し読みしていく。その際埃が辺りに舞ったが、気にすることはなかった。

一冊読んでは棚に戻し、次の一冊を手にとっては中身を読む。流し読みのため一冊にかける時間は少ないが、特に変わったものが見つかるわけでもない。

そうやって書棚の半分に目を通した義人だったが、暗い室内で本を読んでいたせいか、目に痛みを感じて本のページを捲くるのを止めた。

『どうした？』

「いや、さすがに目が痛くなってきた……くそ、赤い丸印だけじゃわからないっつーの。昔のＲＰＧだってここまで不親切じゃないぞ」

愚痴のように呟き、義人は軽く目をマッサージする。ノーレは義人の愚痴に答えるためか、言葉の中から気になる単語を拾って質問

することにした。

『あーるぴぃじぃ？　むむ……お主のいた世界には妙な言葉が多いのう。武器か何かか？』

「いや、ある意味合ってるけど、違うなぁ」

対戦車兵器ではなく、ゲームジャンルの方である。しかし、それを一から説明するのも大変だと判断した義人は、掻い摘んで説明することにした。

「冒険することを目的としたゲーム……遊びのことだよ。魔物と戦ったり、魔法を使ったり……」

ノーレにもわかるように説明をしていく義人。

そして簡単な説明を終えると、頭を掻きながらため息を吐いた。

「こういう時はどこかにボタンがあってそれを押したり、特定の本を引き抜いたり、棚を動かしたりすれば何かがあるのが定番だけど、さすがにそんなことはないだろうしな」

見回してみてもボタンなどなく、適当に本を引き抜いてみても何も起こらない。木で作られた書棚は非常に重く、動かすのは大変そうである。

『しかし、この赤丸が本棚ではなく壁を指しているのならば可能性があるのではないか？』

ノーレの言葉に、義人はもう一度見取り図に目を落とす。言われてみればたしかに、赤い丸印は壁の部分についているように見え、深々とため息を吐いた。

「……仕方ない。どかしてみるか」

そんなことはないだろうという言葉を飲み込み、義人は書棚に並んでいる本を抜き取っていく。いくら『強化』に似た効果で身体能力が上がっているとはいえ、何百キロもある書棚を一人で動かすのは骨だ。かといって応援を呼ぶわけにもいかず、義人はこれで何もなかったらいつかヤナギ隊長に文句を言ってやると密かに決意した。

書棚に並べられていた本をすべて取り出すと、義人は書棚の側面に両手を当てる。そして力を込めて押すと、書棚は僅かに軋んだ音を立てながら、ゆっくりと横にずれていった。

「ぐ、ぬぬぬ……小雪を連れてくれば良かったか！？」

『確かに簡単にどけることができそうじゃが、勢い余って棚を破壊しそうじゃな』

非常に有り得る未来を告げるノーレに、義人はそれもそうかと頷く。幸いと言うべきか、書棚は少しずつ動かせている。

「……っ、はぁ……疲れた。やけに重かった気もするけど……」

書棚相手に苦戦すること少々、なんとか書棚を動かし終わった義人は額に浮いた汗を拭いながらそう口にした。いくらすべてが木で作られているとはいえ、ここまで重いものか。そんな疑問が頭を掠めたが、今は動かし終わったという達成感の方が強く大して気にならない。

義人は呼吸を整えてすぐに気を取り直すと、書棚を退け終えた壁へと目を向ける。

『どうじゃ、何かあるか？』

ノーレに問われ、義人は注意深く壁面を注視した。何の変哲もない、他の場所と同じ石造りの壁である。石の組み方も、特に目立っておかしい点はない。

「いや、何も――」

ない、と口にしようとした義人の動きが止まる。義人は僅かに目を細め、もう一度注意深く壁面を注視した。

石で組まれた壁の中で、一箇所だけ僅かに他と違う形の石がある。その石には端の部分が欠けており、指をかければ引き抜くことができそうだった。

『……ヨシト？』

かけられたノーレの声に、義人は答えない。

まるで引き寄せられるように石の端に指をかけ、ゆっくりと、本当にゆっくりと石を引き抜いていく。

すると、ほとんど抵抗なく石が引き抜けた。だが、引き抜いた石を見て義人は眉を寄せる。

石の高さは約二十センチ、横幅は約三十センチで厚みは五センチ程度。他の石に比べて厚みがない。いや、“なさすぎる”と言っても良いだろう。

「まるで蓋（ふた）みたいだな……」

義人は手に持った石を見て、小さく呟く。そして、自分の呟きに促されて石の蓋があった部分を覗き込む。

今まで石の蓋があった部分の奥は、空洞だった。奥行きはそこまでないのか、図書室の窓から差し込む光でも十分に中の様子がわか

る。

中を覗き込んだ義人は、困惑を表に出しながらもその中に手を差し入れた。そして、手に触れた“もの”を取り出す。

「なんだ、これ……」

それは、一冊の本だった。

現代の本を知る義人から見れば粗末な、紙の束を紐で綴じただけの本。表題が書かれているというわけでもなく、ページ数もそこまでない。余程製紙技術が悪い時に作られたものなのか、ページの一枚一枚は形が不揃いで厚みも違う。

非常に粗末な、しかし、最低限の体裁は整えた本だった。

『ヨシト、まだ何か入っておるぞ』

本に目を通そうとした義人を制するように、ノーレが声を上げる。義人はそんなノーレの言葉に従ってもう一度壁に空いた穴を覗き込み、手を差し入れた。

指先に触れたのは、金属らしき冷たい感触。一瞬刃物かと驚く義人だったが、指先は切れていない。今度は慎重に触れ、ゆっくりと引き出す。

「鉄の破片……いや、板か？」

出てきたのは、金属で作られた一枚の板だった。厚みはあまりなく、幅も二センチ程度。形は長方形に近いが、少しだけ角が丸く削ってある。表面にはミミズがのたうったような文字が書かれているが、それ以外に目立つ点はない。

「短刀とかじゃなさそうだな。しかし、この文字は何だ？　コモナ

語でもないみたいだけど……」
『材質は鉄かのう。それにしても、この文字は……』
材質を判断するノーレだが、表面に書かれた文字を見て考え込むように黙る。鉄片は錆びているということもなく、義人は鉄片をズボンのポケットにねじ込んだ。
「確認するのは後にしよう。今はまず、元の状態に戻さないと」
そう言って、義人は石の蓋をもとの位置に戻そうとする。最後にもう一度確認するが、中に何も残っていない。
それだけを確認すると義人は石の蓋をし、書棚をもとの位置まで戻すと引き抜いていた本を適当に並べていく。再度確認することがあれば面倒だが、さすがにすべてを放置して部屋に戻るわけにもいかない。それに、他の人間が図書室に来れば何かがあったと気付かれてしまう。
すべて元通りにした義人は窓に目を向け、外の明るさからおおよその時間を確認する。図書室に入ってすでに長い時間が経ち、そろそろ外の兵士が不審に思うだろう。
義人は本を懐に入れて隠すと、何事もなかったように表情を作りながら図書室から外へと出る。すると、それに気付いた兵士がすぐさま背筋を正して口を開いた。
「もうよろしいのですか？」
「ああ、待たせて悪かった。ちょっと面白い本を見つけて読み耽ってたよ」
冗談混じりに笑いかけ、義人は自室の方へと歩き出す。護衛の兵士はそんな義人に不思議そうな視線を向けた。

「そろそろ夕食の時間ですが……」

食堂の方向は反対であり、それを不思議に思ったのだろう。兵士の言葉に義人は少しだけ動揺するものの、それを抑えて振り返った。

「図書室の中はけっこう埃だらけだったから、少し汚れてね。夕食に行く前に着替えてくる。そうしないと、またカグラに怒られそうだ」

義人がカグラに怒られている姿を見たことがあるためか、護衛の兵士は義人に合わせて小さく笑った。

「なるほど。そうなっては一大事ですな」

「だろ？」

兵士の言葉に笑って返し、義人は再度歩き出す。ノーレは何事かを考え込んでいるのか、特に何も言わない。

それが原因と言うべきか、兵士二人が互いに目配せを交わしたことには、義人もノーレも気付けなかった。

第百九話：解読

日もとうに暮れ、夜の帳と共に冬らしい寒さが城中に満たされる。城が石造りのためかやけに空気が冷たく感じられ、廊下を歩きながらもそれを感じ取った志信は僅かに苦笑した。

「少々遅くなってしまったか」

呟いた声も、吐いた息と共に僅かに白く染まる。

時刻で言えば午後八時を回ったところだが、“こちらの世界”は“元の世界”と違って電灯などの灯りがない。そのため、城のいたるところに設けられた燭台や置かれているランプからの光だけが頼りである。

柔らかく、しかし光源としてはいささか弱い灯りが廊下を照らすが、光の届かない場所は墨をぶちまけた様に真っ暗になっていた。

「侵入者がいた場合、十分隠れられるな……もう少し灯りを増やすよう、義人に進言して……いや、増やすにも金がかかるのか」

難しいことだと一人呟き、志信は義人の私室へと足を運ぶ。本来の目的は、そろそろ近衛隊の人数を増やしてはどうかと尋ねるためだった。

志信自身も様々なことを学びつつ鍛えた近衛隊の兵士は、カーリア国の一般兵の中ではある程度の域まで達しつつある。だが、“隊”と呼ぶには少々人数が少ない。国王専属の護衛隊として機能するには、最低でも三倍ほどの人数が欲しいところだ。

それが実現すれば、義人の警護はすべて近衛隊で引き受けることも可能になるだろう。

もっとも、志信とて護衛として職業軍人の数を増やした場合のデ

メリットは理解している。“元の世界”と違って魔物対策などには使えるものの、軍人とは基本的に消費するだけの存在だ。その上国王の護衛ならば、あちこちの町村に派遣している屯田兵のような扱いにもできない。

――鍛えた者を他の隊に回して軍全体の練度の向上……いや、どの道時間と金がかかるか。しかし全てを義人に任せるわけにも……。

内心で様々なことを考える志信だが、簡単には答えが出ない。

“こちらの世界”に来て以来、近衛隊を鍛え、時折他の隊に顔を出して訓練をする日々を送ってきた。“元の世界”と違って学校に行くこともなく、毎日体を鍛えるだけで良いのだから楽と言えば楽だろう。少なくとも、志信にとっては“元の世界”よりも充実した日々だった。

志信はそこまで考え、毎日政務に追われている親友（よしと）のことを頭に思い浮かべる。

「その生活も義人がいればこそ、か」

“元の世界”の規模で言えば国民が少なく、カグラの補佐もあるとはいえ、一つの国をまとめるというのは並大抵の苦労ではすまない。国民性が特殊というのもあるが、それでも今のところ大きな問題はなく、当面も問題が出ることはないだろう。

「……今度、城下町で差し入れでも買ってくるか」

何か美味いものでも、と言葉をつなげようとした志信だったが、不意に妙な気配を感じてそちらへと目を向ける。

志信が目を向けた先にいたのは、義人の私室を警護する二人の兵

士だった。だが、二人とも訝しげに顔を見合わせており、志信はすぐさま歩み寄る。

「何かあったのか？」

「こ、これはシノブ様。いえ、それが……」

言いよどむ兵士に、志信は僅かに首を傾げた。

義人に何かあったのならばもっと大騒ぎしているため、それほど大事ではないのだろう。しかし目の前の兵士の様子は、何もなかったかと言うには無理があった。

二人の兵士は互いに顔を見合わせると、僅かな沈黙のあと口を開く。

「今しがたヨシト王が部屋から出てこられたのですが、少し様子がおかしかったもので……」

「様子がおかしい？」

「はい。何やら思い詰めたような顔をされていたので体調が悪いのかと思って声をお掛けしたのですが、『なんでもない』の一点張りでして」

「ふむ……」

兵士の言葉に、志信は少しばかり黙り込む。そして数秒ほど思案すると、軽く頭を振った。

「義人にもそんな気分の時があるのだろう。どこに行ったかわかるか？」

「執務室がある方向へ行かれました。他の護衛がついていたので、危険はないと思いますが」

「そういうことであれば、俺も気にかかる。様子を見てくるとしよう」

兵士の言葉に軽く頭を下げ、志信は執務室が並ぶ区域へと足を向ける。

「もしや、カグラに怒られでもして臍を曲げたか？」

そう呟き、志信は小さく笑う。

――そんなものとは比較にならないほどの事態が発生しているとも知らずに。

時を一時間ほど遡る。

図書室で表紙のない本と鉄片を見つけた義人は、ひとまず夕食を取ってから自室へと戻ることにした。本にはまだ目を通しておらず、先に食事を取ったのも時間をかけて本を読むためである。

「さてさて、何が出るやら」

背負っていたノーレをベッドの上に置き、義人はベッド脇へと腰を下ろしながら一人呟く。すでに日が暮れているためランプに火を灯して視界を確保すると、義人はやや緊張しながら本の表紙に指をかけた。

そして義人は僅かに分厚さを感じさせる表紙をめくると、書かれていることを読み取るべく紙面を注視し――首を傾げた。

「……何語？」

ミミズがのた打ち回ったような、不可思議な文字。ニホンゴではなく、どこか似ているがコモナ語でもない。しかし文章として書かれているらしく、文字の羅列がページを埋めていた。

「なんだこれ？　どこの言葉だ？」

パラパラとページをめくり、他のページに書かれている文字が同一であることを確認する。文章の他にも挿絵が三枚あったがそれらは水墨画のように筆で描かれており、義人は眉を寄せた。

「絵のほうは……石？　いや、水晶か何かか？　あと、建物……か？　それとこれは……」

ひとまず、視覚的に理解しやすそうな挿絵に目を落とす義人。

最初に見た挿絵では、台のようなものの上に大雑把に丸く削ったような形の“何か”が置かれてあり、その台の周囲を囲むように文字の羅列が描かれている。そしてその“何か”や、台を囲むように書かれた文字に対して線が引かれ、注釈のように文章が書かれてあった。

義人は『石か何かを御神体にでもしているのか？』と首を傾げるが、考えるだけで解答がわかるはずもない。続いて次の挿絵に目を落とし、今度は多少引っかかるものがあって首を傾げた。

挿絵として描かれていたのは、角材と板だけで組まれたらしい建物。比較物がないので正確な大きさはわからないが、絵を見る限りそれなりに大きいようだった。こちらも一枚目の挿絵と同じように、注釈らしき文章があちこちに書いてある。

墨で描かれた絵なので角材や板の材質はわからないが、“こちらの世界”ならば木の可能性が高い。そこまで考えた義人は、自分の中で引っかかったものが何なのかと考え、

『――召喚の祭壇じゃな』

ノーレからの言葉に、思考を途切れさせた。

「……召喚の祭壇？　城の近くにあるやつか？」

ノーレの言葉を鸚鵡返しに尋ね、義人はもう一度挿絵を見る。

「言われて見てみると、そう見えるな……でも、なんで召喚の祭壇が？」

『文を読む限り、召喚の祭壇の機能について書かれているようじゃな』

「機能ねぇ……ん？」

さり気ないノーレの言葉の中に、義人は聞き逃せない言葉を聞いた気がした。義人はベッドの上に置いたノーレへと目を向けると、疑問を込めて尋ねる。

「今、『文を読む限り』って言ったよな？　ノーレはこの本に書かれている内容が読めるのか？」

『……』

疑問に対し、ノーレは沈黙で答えた。義人はそんなノーレの様子に苦笑すると、軽く鞘を叩く。

「そこで黙ったら、知っていると言ってるようなもんだぞ？」

『……そう、じゃな』

本当は隠すつもりだったのか、ノーレの声は硬い。そのことに少

しばかり疑問を覚えた義人だが、今は先に尋ねるべきことがあった。

「それで、この本に書かれている文字は一体なんなんだ？　コモナ語に似ている気がしないでもないけど、違うんだろ？」

鞘に納まっているノーレを手元に引き寄せ、義人が尋ねる。そんな義人の問いにノーレは僅かに逡巡するような気配を出すが、やがて諦めたようにため息を吐いた。

『そうじゃな……この文字については、教えても問題ないか』

ノーレはそう言うと、一呼吸分の間を置いてから語り出す。

『この文字はな、かつてこの地で使われておったものじゃよ』

その言葉に込められた感情は、言うならば郷愁だろうか。

懐かしげで、どこか寂しげな。まるで、幼い日のことを思い出すように遠くを想いながらの言葉。

「……かつてってことは、今は使われてないんだな？」

今までに聞いたことのないようなノーレの声に、義人は内心で戸惑いながら尋ねる。すると、ノーレはそんな義人の内心に気付いていないのか、苦笑するように答えた。

『今この国で使われているのはニホンゴじゃろう？　この言葉はのう、“この国”が誕生するよりも前に使われていたものじゃよ。先ほどコモナ語に似ていると言ったが、当たらずしも遠からずといったところじゃ。今のコモナ語を多少古くし、なおかつこの地方特有の訛りがあるんじゃ』

「ようは方言混じりの古いコモナ語か……注意して読んでみると、たしかにコモナ語っぽいな。俺でも訳せるところが少しはあるし、図書室を漁ればそのへんの本も出てくるかな？」

『さて、残っておるかのう。何せ五百五十年以上も前の話じゃ』

ノーレの言葉と込められた感情を読み取り、義人は少しの明るさを込めて尋ねる。

「その話し振りからして、ノーレが『風と知識の王剣』だからこの言語を知っているってわけじゃないんだな？　勉強したのか？」

『ふむ、勉強か……使う内に自然と覚えることも勉強と呼ぶのかのう？』

「呼べるんじゃないか？」

ノーレの言葉を肯定しながら、義人は三枚目の挿絵に目を向ける。挿絵として描かれていたのは、一枚の板だった。形は長方形に近いが、少しだけ角が丸く描かれている。板の表面にはミミズがのたうったような文字が書かれており、それを見た義人は僅かに首を傾げた。

「これ、本と一緒に入っていた鉄片か？」

そう言いつつ、義人は本と一緒に持ってきた鉄片に手を伸ばす。そして紙面に書かれている挿絵と見比べ、確証を得てから頷いた。

「やっぱりそうみたいだな。ノーレ、書かれていることはわかるか？」

『書かれていること、か……どれどれ』

義人からの言葉を聞き、ノーレは本の解読を試みる。そして、一

分ほどの時間を置いてから言葉を発した。

『どうやら、この鉄片は召喚の祭壇の“中”に入るための『鍵』のようじゃな』

「鍵？」

『うむ、鍵じゃ。描かれている挿絵から考えるに、この本は召喚に関することが書かれているようじゃな。召喚の祭壇の外観に、“中”に入るための鍵。そして……』

「この石っぽいのが召喚の祭壇の“中”にある、と」

言葉を引き継ぎ、義人はもう一度最初に見た挿絵のページを開く。そして、今度は挿絵だけではなく、書かれている文章を読み解こうとする。

「……世界……蓄積……五十年？」

適当に目をつけた一文から読み取れる単語を口にしつつ、義人は首を傾げた。文章として読むことはできないが、並べられた単語から何か意図が読み取れないものかと思考を回転させていく。

『……』

そんな義人の様子を見ながらも、ノーレは何も答えない。

義人の様子から“答え”にたどり着くまで時間がかからないと判断し、何も答えなかった。

義人はノーレが口を閉ざしたことを不思議に思うが、それと同時に本の内容を訳すべく紙面に目を走らせていく。カグラに叩き込まれたコモナ語の知識を総動員して訳せる部分から訳し、わからないところは前後の言葉から最も合う言葉を当てはめる。

「世界をつなぐ穴……石を……蓄積……五十年ごとに……」

言葉をつなげ、文へと変えていく。意味が合っているかはわからない。しかし、それでも単語の一つ一つをつなげ、文章を組み上げていく。

同時に、義人は言い知れぬ悪寒を感じた。単語を訳し、文章にしていく度に不安感が脳裏を掠める。

訳すな、先を読むな、後悔する。そんな予知染みた感覚が思考を邪魔し、

「――世界をつなぐ“穴”から溢れ出る魔力を『魔石』を核として蓄積し、封印する。しかし、およそ五十年ごとに『魔石』の魔力を消費する必要がある」

それでも義人は、その一文を口にした。

「……は？」

口にして、意味がわからず呆けた声を漏らす。義人は自分が翻訳した文章を頭の中でもう一度繰り返すと、不可解さを表すように眉を寄せた。

「訳は合っていたか？」

義人はノーレへと目を向け、呟くように尋ねる。すると、ノーレは僅かな沈黙の後に言葉を発した。

『概ね合っておる。今の言葉の意味は、他の注釈を読めばわかるじゃろう』

ノーレの言葉に促され、義人はもう一度本へと視線を落とす。そして、他の注釈を訳すべく紙面の文字を目で追った。
しばらくの間、無言で本の内容を訳していく義人。だが、徐々にその表情が険しいものへと変化していく。

「……ノーレ、ここに書かれていることは」

やがて、挿絵のあったページに目を通した義人が小さく呟く。その声には感情らしい感情が込められておらず、ノーレはゆっくりと、言葉を探して答える。

『真実、じゃろうな。わざわざ嘘を書く理由もなかろう』

答えた声は、硬い。義人はそんなノーレの様子に、表情を険しいものから変えずに尋ねる。

「ノーレは知っていたのか？」
『……いや、妾も知らなんだ。そもそも、妾も召喚に関することはあまり知らぬ』
「そうか……」

呟くように答えて、義人は目を閉じた。何かを堪えるように歯を噛み締め、数秒の後に目を開ける。
そして、ノーレをつかむなり部屋を飛び出した。

背後についてくる護衛の兵士の足音を耳にしながら、義人は真紅

の絨毯が敷かれた廊下を進んでいく。その歩調は歩くと言うには荒々しく、速い。その証拠に、背後についてくる兵士はもはや小走りに近い速度だった。

『何をするつもりじゃ？』

険しい表情で進む義人に、ノーレが控えめの声で話しかける。義人はそんなノーレの言葉に対し、逡巡もなく答えた。

『決まってる。実物を、この目で確かめるんだよ。本に書かれてあることが、本当かどうかをな』

思念通話で答えた義人は、右手に握った『鍵』をよりいっそう強く握り締める。そうでもしないと、今しがた知った“事実”に押し潰されてしまいそうだった。

――この“装置”は、“この世界”に空いた穴を封印するためのものである。

執務室がある区域を進んでいた義人は、自分の記憶を頼りに“目的”の扉を見つける。簡素な装飾が施された、白木造りの扉を。そして、迷うことなく扉の取っ手に手をかけると、背後へと振り返った。

「全員ここで待機！　これは命令だ！　いいな！？」

怒鳴るように護衛の兵士に告げ、返事の声を聞くよりも早く扉を開ける。

――この“装置”は“隣の世界”から流れ込んでくる魔力を『吸収』し、蓄積するためのものである。

城外は、墨で塗り潰したような闇に覆われていた。城から漏れ出る灯りと星の光が僅かに闇を照らしているが、視界はすこぶる悪い。

「あっちか」

それでも、義人は真っ直ぐに進んでいく。

向かう先は城の東。林の中に建てられた、召喚の祭壇。

――この“装置”で魔力の蓄積が可能な期間はおよそ五十年。

義人は暗い視界に慣れてきた目を凝らし、召喚の祭壇の様子を窺う。

召喚の祭壇の警備についている兵士の数は四人。しかし、それぞれが気を入れて警備をしているというわけでもなく、雑談に興じているようだった。それを見た義人は極力足音を殺して召喚の祭壇へ近づくと、右手に握った『鍵』へ視線を落とす。

召喚の祭壇の“中”に入るための『鍵』だが、どこで使うのか。それを一瞬だけ迷った義人だが、以前昼間の間にこの場へ来た時のことを思い出す。

――それ以上の蓄積は『魔石』がもたない。

暗闇の中義人は目を凝らし、手探りで目的のものを探す。
あまり時間をかけると、見張りの兵士に気付かれたり、待たせた護衛の兵士達が追ってくる可能性がある。
義人は僅かな焦りを押さえつつ、召喚の祭壇の壁面を探っていく。
そして、一分ほど経った後に指先に引っかかりを感じて僅かに口元を緩めた。

――そのため、定期的に『魔石』から魔力を解放する必要がある。

それは、小さな穴だった。形は長方形で、大きさは二センチほど。
義人はそれを確認すると、右手に持った『鍵』を鍵穴へと差し込む。

「……ん？」

僅かに、指先から魔力が抜ける感覚がした。次いで、ゴトリという“何か”が外れた音がする。義人はその音に僅かに首を傾げながら、試しに『鍵』を引っ張ってみた。すると、それに合わせて壁面が開き戸のように開かれる。

「……開いたな」
『開いたのう……入るのか？』

ここまできて、引き返すわけもない。義人は一度だけ深呼吸をすると、召喚の祭壇の“中”へと足を踏み入れた。
召喚の祭壇の“中”は、外の暗さに反して仄かに明るい。それは蝋燭などの明るさではなく、蛍の光のような明るさ。光源の正体が

気になった義人は、ひとまず“扉”を閉めてから祭壇の“中”で淡く輝くモノへと視線を向ける。
光を放っていたのは、台の上に置かれた一つの石だった。仄かな紫色に染まっているものの、硝子（がらす）のように透き通っている。
義人は紫色の石を前にして、本に書かれている内容を思い出す。それと同時に、自身の記憶の中から眼前の石に該当する名前を思い浮かべた。

「『魔石』か……でかいな」

かつて商人のゴルゾーが持ってきた売り物の『魔石』よりも、数倍は大きい。しかし色は比べ物にならないほど薄く――義人はそのことに愕然とした。

――その期間は、五十年。そして、五十年の時で蓄えられた魔力を解放する際に“隣の世界”から――

義人が翻訳したのは、そこまでだった。
わかったのは、眼前の『魔石』を使って“こちらの世界”と“元の世界”をつなぐ穴を塞いでいるということ。『魔石』が長い時をかけて魔力を蓄積し、色濃く染まっていくということ。そして、その蓄積した魔力を使って“こちらの世界”と“元の世界”がつながるということ。
本の全てに目を通したわけではない。本に書かれていることが、全て事実かどうかもわからない。だが、本に書かれていることが事実ならば、

「……嘘、だろ？」

魔力が溜まらなければ、“こちらの世界”と“元の世界”がつながらない。
召喚魔法は、五十年ごとにしか使えない。
それを義人は知ってしまった。

第百十話：激昂

カグラが“その事態”に気付いたのは、自身の寝室で各町村に派遣している屯田兵からの報告書に目を通している時のことだった。

気の早い者ならばすでに眠りにつき始める時間だが、『召喚の巫女』であるカグラにはまだまだすることがある。現在目を通している報告書もその一環だったのだが、それを中断するほどに部屋の外の様子が気にかかった。

「少し、外が騒がしいような……」

呟きながら、カグラは報告書を机の上へと置く。内容を確認した後は国王である義人にも目を通してもらう必要があり、粗雑に扱うわけにもいかない。

この分なら明日には渡せるでしょうか、と内心で考えながら、カグラは腰掛けていた椅子から立ち上がって部屋の入り口へと足を向ける。

兵士が何も報告に来ないということは、大したことでもないかもしれない。だが、それでも確認をしなければと思う辺りにカグラの生真面目さが窺えた。しかし、カグラが扉へとたどり着くよりも早く外側からノックの音が響く。

――まるで殴りつけるような、荒々しいノックの音が。

『待て！　待つんじゃヨシト！　少し落ち着け！』
「これが落ち着いていられるか！？」

召喚の祭壇を後にした義人は、迷うことなく“ある場所”を目指して走っていた。その背ではノーレが声を張り上げて静止を呼びかけるが、義人が従う気配はない。
蹴り破るように城への扉を開け、その勢いのまま城の中へ足を踏み入れる。すると、義人の命令を聞いてこのまま待機すべきか、それとも後を追うべきかと迷っていた護衛の兵士が慌てて姿勢を正す。そして、その中でも気さくな性格をしている兵士が義人に対して声をかける――よりも早く、義人の姿が廊下の角へ消えた。

「……え？」

まるで兵士の姿に気付かなかったように走り去る義人。兵士達はその背中を思わず見送り、数秒の時を置いてから顔を見合わせた。

「今の、ヨシト王だったよな？」
「ああ。でも、あんな怒った顔は見たことがないぞ？」

己の見たものが間違っていないことを確認し合い、兵士達は首を傾げる。しかし、すぐに何事かが起きたのだと判断すると、すぐさま義人の後を追って走り出す。
義人は自身の背後でそんな会話が交わされていることなど気にも留めず、真っ直ぐにある場所……カグラの寝室を目指す。
何もない限り、この時間は寝室にいるはずだ。時期的に、各町村からの報告書でも読んでいるかもしれない。そんな風に行動の予測が立つ程度には、義人もカグラのことを知っていた。
時間が時間だけに、すれ違う人影はほとんどない。時折巡回をしている見張りの兵士が走る義人を見て慌てたような顔をするが、義

人が声をかけることはなかった。反対に、兵士が声をかけようとする頃には義人もすでに姿を消している。

義人はカグラの寝室がある区画まで止まることなく進むと、扉の両脇に守衛の兵士が立っている場所へを目を向けた。

カグラの腕前を考えれば守衛などいらない気もする、などと義人は頭の片隅で考えたが、どうでも良いことかとすぐに打ち消す。

義人は形だけの見張りに視線を向けると、そちらに歩み寄りながら背負ったノーレに右手を伸ばして鞘をつかむ。そして突き出すように兵士に押し付け、端的に用件を告げた。

「少しで良い。ノーレを持っていてくれ」

「は、はい……」

声をかけられた守衛の兵士は突然現れた人物が国王（よしと）であることに驚くと、突き出されたノーレを反射的に受け取る。そして、義人の心情を知っているノーレは慌てて声を上げた。

『待たんかヨシト！　まだ全てがわかったわけではない！　そんな状況で巫女に話を聞いても――――』

ノーレの声を遮るように、義人はカグラの私室の扉を叩く。否、それは叩くというよりも殴るような強さで、それだけでも義人の心情が垣間見れるようだった。

「カグラ、いるか？」

しかし、そんなノックの仕方に対して声は落ち着いている。まるで、嵐の前の静けさのように。

守衛の兵士の腕に納まったノーレは、いっそ風魔法で義人を吹き飛ばして強引にでも大人しくさせようとまで考えたが、それよりも

早く部屋の中から声が響く。

「は、はい。どうぞ……」

部屋の中でノックの音を聞いたカグラの声は、僅かに困惑していた。義人はそんなカグラの返事を聞くと、用件も告げずに扉を開ける。そしてカグラの私室へと踏み込むと、すぐさま扉を閉めた。

「……ヨシト様？　どうかされましたか？」

突然来訪した義人に、カグラは困惑しながら尋ねる。だが、義人はどこか思い詰めたような表情で小さく首を横に振るだけだ。

ランプが置かれているものの、部屋の中は昼間と違って薄暗い。その薄暗さが義人の表情をある程度隠し、カグラは義人の表情から感情を読み取ることができなかった。

「……」

入室したものの、義人は無言。ただ、カグラを見据えるその目だけはかつてないほど力強く、鋭い。

そんな義人の様子に、カグラはほんの少しの疑念と多分な期待を感じた。

――これは、もしかして……。

頭を掠めたのは、数日前のアルフレッドの言葉。折を見て義人に『召喚の巫女』の役割について話すと言っていたのを、カグラはこの場で思い出す。

――ヨシト様の方から？

そんな、“見当違いな”期待。
まさか、もしかしてとカグラは考え、

「カグラ」

そんな思考を叩き切るように、義人がカグラの名を呼ぶ。その声色は真剣で、硬い。カグラは常にない義人の様子に、気を引き締めつつも小首を傾げる。

「なんでしょうか？」
「前に言ったよな？　魔力が回復すれば、“元の世界”に戻すことができるって」

前置きも何もなく、義人はそんな問いを投げかけた。カグラは唐突な質問の意図がわからず、曖昧に頷く。

「は、はい。たしかにそう言いましたが……」

それが何か、と答えるカグラに、義人は苛立ったような鋭い視線を向ける。

「どうやって？」
「……召喚の魔法を使ってですが？」

今まで向けられたことのない、敵意ある視線。それを受け止めたカグラは、身を硬くしながら答えた。すると、義人は余計に苛立ったのか声を大きくする。

「だから、使えない魔法でどうやって“元の世界”に戻せるって言

うんだ！？」

それは義人からすれば至極真っ当な、しかし、カグラからすれば意味のわからない問いだった。それを示すように、カグラは困惑を表情に浮かべる。

「……申し訳ありませんが、ヨシト様の仰ることの意味が」

「わからないって言うのか？　それとも、とぼければ誤魔化されると思っているのか！？」

最早、隠すべくもない。義人は完全に敵意をむき出しにしてカグラに言葉を叩きつけ、それを受けたカグラは困惑を強めながら口を開く。

「よ、ヨシト様？　一体どうされたのですか？　いつもと様子が……」

「そりゃ違うさ。これでいつも通りだったらどうかしてる」

吐き捨てるように告げ、義人はカグラへと一歩だけ歩み寄る。その一歩は地面を踏み抜くように荒々しく、その音を聞いたカグラは僅かに肩を震わせた。

“こちらの世界”に召喚された時は、気が動転している部分もあってそこまで感情を見せていない。だが、今回ばかりは義人も黙っているわけにはいかなかった。

「なあ、どうなんだよ？」

もしも手元にノーレがあったならば、迷わず剣を抜いていたかもしれない。それほどの激情を抑えながら、義人は言葉をつないでいく。

対するカグラは、義人の言葉に何も返せなかった。
カグラとて、荒事には慣れている。師であるアルフレッドを含め、正面からまともにぶつかればカーリア国内で敵う者はいないだろう。その強さに裏打ちされた胆力も持ち合わせている。だが、それが全ての面において発揮されるというわけではない。

「そのっ、あの……」

理由もわからず、憎からず思っている――直截に言えば、強く想い、慕っている人物からの突然の怒声。それが普段は回る口を閉ざし、言葉を紡ぐことを許さない。だが、義人はうろたえるカグラを気に留めず、言葉を吐き出し続ける。

「答えてくれ、いや、答えろカグラ！　なんで騙した!?　初めから全てを話せば、俺が協力をしないと思ったからか!?」

「……」

答えはない。カグラは必死に頭を働かせ、義人が放つ言葉の意味を考えていく。

「答えないのか？　それとも、答えられないのか？」

義人はカグラを真っ直ぐに見据え、舌鋒鋭く問いただす。

「わ、わたしは、その……」

義人の言葉と視線を受けたカグラは、小さく呟きながら思わず視線を逸らす。まるで、己の非を隠すかのように。
そんなカグラの様子を見た義人は、カグラが“元の世界に戻れないことを知っていたのに黙っていた”と判断した。

「……そうか」

――判断して、しまった。

義人は一向に答えを返さないカグラに鋭い視線を向けていたが、小さな呟きと共に視線を弱める。しかし、視線の強さが弱くなった代わりに、今までにない色が瞳に宿った。

「残念だよ、カグラ。“信用”はしてたんだけどなぁ……」

それは、失望という感情。どこか空虚めいた視線でカグラを見据え、義人は言葉を紡いでいく。

「長くても三年……そのくらいなら、珍しい経験だったって思いながら“元の世界”に戻れたかもしれないさ。だけど、戻れないっていうのはさすがに許容できないし、それを黙っていたのは許せない」

「……」

カグラは答えない――答えることができない。

義人の問いかけの意図が掴めず、それに対する答えも浮かばない。それに何より、義人の言葉と感情の変化がカグラの思考力を奪っていた。義人はそんなカグラを一瞥すると、用は済んだと言わんばかりに踵（きびす）を返す。

「あ……」

カグラの口から、意味のない声が漏れる。ほぼ無意識のうちに義

人を引き止めるように右手を伸ばし、それと同時に、カグラは言い様のない感覚を覚えた。

“かつて”体験した、嫌な感覚。伸ばした手が届かず、背を向けた義人は振り返らず、ただ拒絶の言葉を投げかけられた、とある夏の夜の一幕。その時の感覚がカグラの動きを止めた。

“あの夜”とは状況も違う。だが、それでもカグラの胸に去来するその感覚は、数ヶ月の時を過ぎてもなお鮮明に思い出せる“あの夜”と同質のものだった。

――声をかけて、振り向いてもらえば良い。

頭ではそうわかっていても、“あの夜”のように声帯が麻痺したように声が出なかった。

――すぐに追いかけ、袖を引いて引き止めれば良い。

そう考えても、足が一歩たりとも前に進もうとしなかった。まるで自分の体ではないように、歩を進めることができなかった。

だから、カグラは右手を伸ばす。“あの夜”と同じように、届かないとわかっていても右手を伸ばす。

理由もわからずに向けられた悪意の意味を教えてほしいと、何故そんな目でわたしを見るのかと、問いかけたかった。だが、そんな願いも聞き届けられない。

義人は立ち止まらずに扉を開け、声をかけることもなく部屋の外へと歩み出て行く。

それだけが、“あの夜”とは違っていた。

第百十一話：接続

義人は重く感じる足を引きずりながら、優希と志信の寝室がある区画を目指していた。気は重いが、これほど大事なことならば隠すわけにもいかない。そんな義人の様子をどう取ったのか、兵士から受け取ったノーレが潜めた声を出す。

『ヨシト、お主巫女に何の話を聞いたんじゃ？』

話を聞くには時間が短かった。それを気にしたノーレの言葉に、義人は力なく笑う。

「……話なんて聞いてないさ。俺が一方的に怒りをぶちまけただけで、カグラは何も話してない……」

そう言った義人の顔に浮かんでいたのは、僅かな怒りと多分な罪悪感。

カグラに対して一方的に怒鳴りつけ、部屋を後にする際に見たカグラの表情。それが、義人の感情を多少なりとも落ち着かせた。悲しげなどという言葉も生温い。まるで感情の全てを失ったような、カグラの表情を義人は思い出す。

『……頭は冷えたか？』

「一応は、な」

ため息を一つ吐きながら、軽く頭を振る。そして僅かなりとも気分を切り替えると、義人は数歩先に見える扉へと目を向けた。その部屋に住むのは、志信である。

「どう話したら良いんだろうな？」

どんな顔をして、どう話せばいいのか。それを頭の中で思い描こうとするが、中々上手くいかない。義人は深呼吸をすると、なるようになれと木製の扉をノックした。

木を叩く乾いた音が僅かに響き、義人は中からの返事を待つ。

「……ん？　いないのか？」

しかし、部屋の中からの返事はない。義人が首を傾げながら呟くと、背中のノーレが肯定するように言葉を発した。

『そのようじゃな。仏頂面の、特徴ある魔力も感じぬ』

「志信のことだから、夜の鍛錬かもな……仕方ない、先に優希のところに行くか」

話すのならば二人一緒にと思ったが、部屋にいないのならば仕方がない。そう考えた義人は、今度は優希の部屋へと向かう。

もしも平常時の義人だったならば、志信に会えなかった時点で今夜中に二人へ話すことを諦めていただろう。後日、優希と志信の二人を部屋にでも呼んで話せば良いのだから。だが、この時の義人は少なからず平常心を欠いていた。

志信がいないのならば、優希にだけでも話しておきたい。そんな非効率な考えに疑問を抱かないほど、義人は精神的に落ち着きを失っていたのである。

志信が義人を探していることも、知り得ない。そして、それが後々大きな問題になることを、この時の義人が知るはずもなかった。

ようやく追いついてきた護衛の兵士達の足音を遠くに聞きながら、義人は優希の部屋の前へとたどり着く。そして、今度は三回ほど深呼吸をすると、平静を装って扉をノックした。すると、数秒と待た

ずに返答の声が響く。

「どちらさまですか？」

「あー……義人だけど、入っても良いか？」

「義人ちゃん？　どうぞ」

扉越しに聞こえてきた優希の声を確認し、義人は扉を開ける。そして、

「おとーさん！」

扉を開けた瞬間、“何か”が飛んできた。義人はその“何か”が小雪であることをすぐさま看破すると、咄嗟に体を動かして小雪の勢いを弱めながら受け止める。小雪は両手を広げた状態で義人に飛び込むと、すぐに首へ手を回してぶら下がった。義人は飛びついてきた小雪に驚いたものの、すぐに表情を引き締める。

「おっとっと……こら小雪、いきなり飛びつくなって言っただろ？」

「え？　でも、ずつきはしてないよ？」

以前飛びつき禁止と一緒に言い渡した頭突き禁止の言葉は、中途半端に守られているらしい。

義人はぶら下がったままで見上げてくる小雪に対して、小さなため息を吐いた。しかし、それでも優しい手つきで小雪を抱き上げると、ゆっくりと地面に下ろしてその頭を軽く撫でる。

「優希に話があるから、ちょっと大人しくしといてくれ。な？」

「うん！」

頭を撫でられた小雪は心地良さそうに目を細めた後、義人の言葉

に大きく頷いた。義人の傍から離れ、小雪は優希が腰掛けているベッドへと駆け寄る。そして笑顔でベッドに飛び乗ると、大人しくするというアピールなのか、正座をした。

義人はそんな小雪の様子に柔らかく笑うと、少しだけ気が抜けたのを自覚する。続いて表情を“普段通り”のものに変え、ベッドに腰掛けた優希へと目を向けて視線を合わせた。

「義人ちゃん、どうかしたの？」

その途端、優希が僅かに眉を寄せ、小首を傾げながら気遣わしげに尋ねた。一瞬、義人は優希の言葉の意味がわからず声を失う。

「……え？　なんで？」

思わず、問いを投げ返す義人。優希はそんな義人の顔を見ると、言葉を整理するように一拍置いてから口を開く。

「悲しそう……でも、怒った顔もしてる。何かあったの？」

かけられた声には、確信の響きがあった。何かがあったと、だからいつもと違うと、表情を見るだけで言い当てる。

取り繕っていた表情は、容易く見破られてしまった。優希はごく自然に、義人の心境を言い当てる。それを聞いた義人は僅かに驚き、続いて苦笑した。

「ははっ、優希には隠せないか」

それを当然のように、そして何故か嬉しくも思う。しかし義人はこれから話す内容を思い出し、表情を引き締めた。

「大事な話があるんだ」

そう言って真っ直ぐ見据える義人に、優希は姿勢を正す。

「大事な話？」

「ああ」

不思議そうな優希を前にして、義人は話し辛そうに視線を落とした。それに対し、優希は声を発さずに義人が話し出すのを待つ。

大事な話。

そう聞いた優希が心中で想い浮かべたのは、カグラと“同じ種類”の期待――ではなかった。

義人の表情や雰囲気、仕草から読み取れるのは、余程悪い事態を感じさせる。義人は非常に言い難そうにしており、これから聞かされるであろう話が良いものだとは思えない。少なくとも、“義人にとって”重大な問題だと優希は読み取った。

「……よし」

深呼吸を一つして、義人は話す覚悟を決める。

「優希、落ち着いて聞いてくれ」

「うん」

「一人ずつなら“元の世界”に戻れるって話だけど……無理、みたいなんだ」

断定として話せなかったのは、義人自身が本当は信じたくなかったためか。

「召喚一回を行うには、約五十年の時間がかかる。だから、元の世界には……」

言葉は終わりに近づくにつれ、強さを失っていく。説明の言葉が少ないことを義人は自覚していたが、上手く言葉が出なかった。

優希はそんな義人を真っ直ぐに見つめ、ゆっくりと口を開く。

「それは、いつわかったの？」

「……ついさっき。召喚について書かれている本を見つけて、全部はまだ読んでないんだけど、召喚の祭壇のことが書かれててさ。挿絵が描いてあって、それで実際に召喚の祭壇に行って……くそっ、言葉がまとまらないな」

苛立たしげに義人は頭を掻くと、自分を落ち着かせるためか何度か頭を振る。そして僅かに思案すると、実物を見ながら説明したほうが早いかと判断した。

「召喚の祭壇の“中”で話をした方がわかりやすそうだな……優希、ちょっと外に出られるか？」

「外に？　うん、別に良いけど」

幸いと言うべきか、まだ寝巻きには着替えていない。優希は部屋の隅に置かれている外套掛けに歩み寄ると、手製らしき厚手の白いコートを手に取った。そしてコートに袖を通している途中で、ベッドの上で正座していた小雪が口を開く。

「おかーさんとおとーさん、どこかいくの？」

「ん？　ああ、ちょっとね」

小雪の言葉に適当に答える義人。すると、今までベッドの上で大

人しくしていた小雪がベッドから飛び降りる。

「こゆきもいく！」

「いや、もう遅いから小雪は大人しく寝て」

「いくの！」

「……はぁ。まあ、いいか」

ため息を一つ吐き、小雪の同伴を認めた。絶対についていくと言わんばかりの瞳を見て、誰に似たんだと義人は首を傾げる。

義人の言葉を聞いた小雪は優希のもとへと駆け寄り、優希が着たものと同じ意匠の小さいコートに手を伸ばした。それを見た優希は小さく笑い、小雪がコートを着るのを手伝うために膝を折る。

義人はそんな二人の様子を横目に見ながら、優希の部屋の扉を開けた。すると、それに合わせて外に控えていた兵士達の目が一斉に義人へと注がれる。その数は当初義人の後をついてきていた数を上回り、十人ほどに増えていた。

「……」

扉を開けるなり十対の目が一斉に集中し、義人は思わず無言で扉を閉める。そして未だにコートを着るのに悪戦苦闘している小雪へ視線を投じて気分を落ち着けた後、背負ったノーレへと向けて思念通話を投げかけた。

『なあ、ノーレ。なんで兵士の数が増えてるんだ？』

『それはお主の行動が原因じゃろう？　自業自得じゃ』

突然部屋から飛び出して召喚の祭壇に向かい、それが終われば今度はカグラの部屋へ走って向かう。さらにそこから優希の部屋へと向かっており、普段の行動からかけ離れたことをしている。

『それを見て護衛の数が増えたか……この状態で、優希と小雪を連れて召喚の祭壇に行こうとしたらどうなるかな？』

『間違いなく、体を張ってでも止めようとするじゃろうな。今度は巫女が出てくるかもしれん』

可能性は限りなくないが。そんな言葉につなげようとして、ノーレは言葉を止めた。義人がどんな言葉を言ったかわからないが、ノーレにはおおよその予想がつく。そして、その予想が違わず的中していたなら、今のカグラが義人の前に立てるとは思えなかった。

ノーレがそんなことを考えているとは露知らず、義人は顎に手を当てて思案に耽る。

――――強行突破。いや、余計に騒ぎが大きくなるから駄目か。

護衛の兵士は何も知らない。それを考えれば、強引な手を取るのは躊躇われた。下手すれば義人が乱心したと思う可能性もある。

義人は今日中の説明を諦めるかと頭の片隅で考え、ふと、優希の部屋の中を見回す。そして、両開きで開く窓へと目を向ける。

行儀良く扉から出る必要はなかった。

「うわぁ……召喚の祭壇の中ってこうなってたんだねー」

召喚の祭壇の“中”に入るなりそんな感想を口にしたのは優希だった。そんな優希の隣では、手をつないだ小雪が不思議そうな顔で辺りを見回している。

『ヨシト、体は大丈夫か？』
「ああ。でも、やっぱり魔法ってすごいな。二階から飛び降りた優希を受け止めても、大して痛くもないんだからさ」

優希の部屋の窓から外へと出てきた義人達だが、部屋があるのは城の二階部分。そのため、義人が先に飛び降りて次に飛び降りる優希を受け止めるという方法を取った。ちなみに、小雪は過去に一人で飛び降りたことがあるので問題はない。

もしかすると、優希一人ぐらいなら抱きかかえた状態で飛び降りることも可能かもしれない。義人はそんなことを僅かに考えるが、すぐに思考を切り替えて召喚の“装置”へと歩み寄る。

「優希、この台の上に置いてあるものを見てくれ」

優希は義人と同じように召喚の“装置”へと歩み寄り、台の上に置かれたものへと目を向ける。そして、僅かな間を置いて首を傾げた。

「あれ？　これって……」
「『魔石』らしい。本に書かれていた話では、“こちらの世界”と“元の世界”……本によれば“隣の世界”か。これはその世界間に開いている“穴”を塞ぐための装置で、“隣の世界”から流れ込む魔力を吸収しているらしい。でも、それだと五十年ぐらいしかもたないらしくて、五十年周期で溜まった魔力を解放する。その時は“こちらの世界”と“隣の世界”がつながるみたいだ」

らしいという言葉を多用したが、義人とて確証を持って話しているというわけではない。本の情報と、“装置”の実物。それらを組み合わせての話だ。

「その世界がつながる時に、わたし達が召喚された……そういうことかな？」

「……ああ。だから、“こちらの世界”と“隣の世界”がつながらないことには戻れないと思う」

そして、それが可能となるのに五十年。優希は義人の話を理解したらしく、僅かに目を伏せた。小雪は義人の話がいまいちわからなかったらしく、淡く輝く『魔石』や台を囲むように書かれた何かの文字を不思議そうに触っている。

義人は目を伏せた優希へと一歩近づくと、続く言葉を口にする。

「つまり、さ……俺達、元の世界に戻れない……みたいだ」

僅かに声が震えた。戻れないと、断定を持って言えない。そんな義人の声を聞いた優希は、小雪を真似るように『魔石』を指でなぞった。

「……義人ちゃんは、“元の世界”に戻りたいんだね？」

そう呟いた優希の顔が、『魔石』からの光に照らされる。少し強い、それでいて幻想的な光に照らされる優希を見ながら、義人は頷く。

「そりゃ、戻れるなら戻りたいよ。突然“こちらの世界”に召喚されて、親父やお袋、優希の家のおじさんやおばさんだって心配しているだろうし。志信のところは……まあ、あの爺さんでも、心配してるだろうしさ」

“元の世界”のことを思い浮かべ、義人は力なく笑う。優希はそ

んな義人の表情を見て、淡く微笑んだ。

「……うん、そうだね」

その微笑は、『魔石』からの“強い”光で照らされる。

そうやって言葉を交わす二人の傍で、小雪が不思議そうな顔をした。目を瞬かせて、目の前で強く発光する『魔石』を不思議そうに見つめる。

「優希だって、“元の世界”に戻りたいだろ？」

毎日学校に行き、放課後や休みの日はどこかに遊びに行って、テストがある時はその勉強に四苦八苦する。進学と就職のどちらを選ぶか、進路に悩むこともあっただろう。

そんな“日常”は、こちらの世界にはない。

もちろん、“こちらの世界”にあって“元の世界”にないものもある。どちらの世界が優れているなどと義人は言うつもりはないが、心情的には“元の世界”への気持ちが強い。

「俺は……？」

『魔石』が放つ光に照らされながら、さらに言葉を重ねようとしたところで義人は違和感を覚えた。言葉を止め、覚えた違和感が何なのかと首を捻る。

――――なんだ、この違和感？　一体何が……。

そこまで考えたところで、義人は気付く。台の上に置かれた『魔石』が濃い紫色に染まり、強い光を放っていることに。

「なん、だ？」

最初にこの場所を訪れた際、『魔石』の色は仄かな紫色だった。だが、今義人が目にしているものは違う。何が起きているのかと、無意識のうちに一歩後ろへと足を引き、

「――――うん。帰りたいね」

戸惑う義人の耳に、そんな優希の声が届いた。

その瞬間、台の上に置かれた『魔石』と、書かれた文字が強く発光する。

――それと同時に、空中に小さな黒い穴が出現した。

『なっ！？　こ、これは！？』

異変を察知したノーレが思わず声を上げる。しかし、義人はそれに言葉を返すことはなく、空中に出現した黒い穴に目を向けた。

「これ、まさか……」

呆然とした声で呟く義人。だが、そんな義人の様子には構わず、黒い穴が徐々に大きく形を変えていく。ゆっくりと、しかし確実に大きさを変え、天井部分を覆いつくすように広がっていく。

――まるで、空間（せかい）を侵食していくかのように。

義人が記憶していたのは、そこまでだった。
黒い穴が天井全てを覆いつくしたのを見た後、音なき激しい衝撃と共に義人は気を失った。

カーリア国から遥か南。
魔法国家ウォーレンと呼ばれる大国を更に南に下った場所にある砂漠地帯で、一人の女性が夜空を見上げていた。

「これは……」

遥か遠く、北の方角の夜空を見ながら、女性は眉を寄せる。

「何かあったみたいね」

そう呟きながら、女性は歩き出す。
それに合わせて、腰まで伸びた黒の長髪が揺れた。

第百十二話：異変

その日、志信はいつも通りに早朝訓練を行うため、日が昇らない内から城の外へと向かっていた。

召喚当初は志信にも護衛の兵士が付き添っていたが、今では志信一人で行動することが多い。

カーリア国の中で志信よりも腕の立つ人間が少ないこともあり、何かあった際は護衛がいるよりも一人で行動した方が気楽だった。不意を打たれた際の時間稼ぎの盾として護衛を引き連れるという手もあるが、それは自分が不意を打たれなければ良いと志信は考えている。それに、大勢を引き連れるのは性分に合わないという気持ちも志信にはあった。

時折すれ違う、眠そうな顔をしている夜間担当の見回りの兵士と会釈を交わしながら、志信は城の外へと続く扉を開ける。それと同時に冬の朝特有の澄んだ冷気が入り込み、志信はよりいっそう気を引き締めた。

「寒いと身も心も引き締まるな……」

呟きながら、志信は開けた扉から外へと歩み出る。鍛錬で動いているうちに暑くなるため、服装は黒の半袖に薄手の長ズボンと軽装だった。右手には訓練用の棍を提げており、“元の世界”での早朝訓練とほぼ同じ格好である。

志信はいつも訓練に使っている広場へと足を向けるが、その間に昨晩から気になっていたことを思考し始めた。

昨晩、志信が義人の部屋を訪れた際に義人はいなかった。その後も兵士の言葉通り執務室がある区画にも足を伸ばしてみたが、結局義人には会えていない。何やら兵士が慌しく走り回っていたが、侵入者などの問題が発生したわけではなさそうだったため志信も大し

て気にしていなかった。

――――そこまで急ぐ用でもなし。明日義人の執務室に行けば良い。

そんな結論を下し、志信はその日のうちに義人と話をすることを諦めた。その後は夜間の訓練を城の裏手にある訓練場で行ったため、昨晩何が起きたかは知る由もない。

「しかし、何だこの違和感は……」

直感とでも言うべきか、妙な感覚がする。志信はこの感覚が何なのかと首を捻るが、答えは出ない。

そうやって考え込むうちに訓練を行うための広場に到着し――――そこで、思わぬ人物を見かけた。

「シアラか？」

正確には、気配を見つけた。日が昇っていない上に、シアラが着ている服は紺色のローブと三角帽。まるで闇に溶け込むような彩色だが、僅かに見えるシルエットと耳に聞こえた足音がその存在を知らせてくれる。

「……シノブ？」

志信の声に答えるように、小さな声が辺りに響く。その声を聞いた志信は、声がする方へと足を進めた。

「珍しいな。早朝訓練に参加するのか？」

ミーファならばよく参加するが、シアラが参加したことはほとん

どない。志信は無意識のうちに早朝訓練の内容をシアラが参加するものとして組み直すが、それを否定するようにシアラは首を横に振った。

「……違う。少し、気になることがあったから調べてた」

「気になること？」

三角帽の位置を直しながら告げるシアラに、志信は鸚鵡返しで尋ねる。シアラはそんな志信の疑問に頷いてみせると、少しだけ自信がなさそうに口を開いた。

「……昨晩、妙な魔力を感じ取った。でも、わたしは眠ろうとしていたから気が抜けていて、その魔力が何なのかわからなかった」

「だから今調べていると？　それなら、すぐに調べた方が良かったのではないか？」

思わずそう尋ねた志信だが、シアラはどこか恥じ入るように顔を赤くし、三角帽子を目深に被る。

「……眠かったの。でも、早く寝たから早く起きれる」

「……そうか。いや、早寝早起きで健康的だな。俺は良いと思うが」

兵士としてはどうだろうか。そんな言葉を続けようとした志信だが、シアラ自身も自覚しているらしく、言葉を口にすることはない。

志信は僅かな沈黙を挟むと、話の続きを促すことにした。

「それで、原因はわかったのか？」

「……ううん、まだ。使われた魔力の大きさからして、余程大きな魔法が使われたのかと思った。でも、攻撃用の魔法を使ったのならどこか壊れていてもおかしくない」

シアラの言葉を聞いた志信は、なるほどと頷く。

「今のところはそんな跡がないか。だが、まだ完全に夜が明けたわけではない。あとは日が昇ってから調べた方が良いのではないか？」

志信がそう提案すると、シアラは数秒ほど視線を宙に彷徨わせる。そして何を考えたのか、同意を示すように頷いた。

「……そうする。今ならまだ魔力が残っているかと思ったけど、そうでもなかった。あとは日が昇ってからにする」

それだけを言い残し、シアラは城へと戻ろうとする。だが、それを察した志信は止めるように口を開いた。

「すまん、少し待ってくれ。もしシアラさえ良ければだが、これから訓練に付き合ってくれないか？」

「……なんで？」

その問いかけは、いつもより多くの間を置いてからのものだった。何かしらの意図があったのか、声にはいつもに比べて“何かしら”の感情が含まれている。だが、志信はそれに気付かず素で答えた。

「一人での訓練も良いが、他の者と一緒に行う訓練も良いからな」

「……そう」

志信の言葉に対して、シアラは短く答える。その声色はどこか落ち込んでいたが、志信がそれに気付くことはなかった。

早朝訓練も終わり、城の中へと戻った志信は着ていた服を着替えると、朝食を取るべく食堂へと足を向けていた。ちなみに、着ていた服はあちこちが鋭利な刃物で斬られたように裂けており、繕わない限り二度と着ることができない状態になっている。

「今日のシアラはやけに気合が入っていたな……」

雨霰と降り注ぐ氷の矢と、隙あれば繰り出される鎌鼬。それらを繰り出すシアラの姿を思い返し、志信は一つ頷く。何か怒らせるようなことをしたかと首を傾げるが、思い当たる節はなかった。

「今日は朝早くに起きたと言っていたし、それで機嫌が悪かったか……む？」

見当違いな予想を口にする志信だが、不意に言葉を途切れさせる。それは、対面からメイド服を着た少女が歩いてきたためだった。

「サクラか、何をしているんだ？」

かけた言葉が問いかけの形だったのは、サクラはまるで探偵か鑑識のように、あちらこちらを注意深く見回っているためである。その証拠に、サクラは志信がかけた声に振り向かない。余程集中しているのか、彼我の距離が三メートルまで近づいたところでようやく気付くような有様だった。

「あ、シノブ様。おはようございます」

志信の姿を認め、サクラは折り目正しく一礼する。

「おはよう、サクラ。何か探しものか？」

志信はそんなサクラに挨拶の言葉を返し、気になったことを尋ねる。すると、サクラは苦笑しながら首を横に振った。

「探し物と言えば探し物ですけど、廊下に落ちているようなものではないです」

「というと？」

「昨晩、奇妙な魔力を感じ取りまして……その時も確認をしてみたんですけど、特に何も見つからなかったんです。朝になれば何かわかるかと思ったんですけど、何もありませんでした」

もしかしたら自分の勘違いかもしれない。その可能性を考慮して尋ねたサクラだったが、志信は聞き覚えがある話題だったので首を傾げた。

「奇妙な魔力？　そう言えば、先ほどシアラも似たようなことを言っていたな」

「シアラちゃんがですか？」

「ああ。シアラも昨晩妙な魔力を感じて、朝から調べていたようだ」

特に何かがわかったわけでもないが、と言葉をつなげ、志信はサクラへ問いを投げかける。

「気になるのなら、カグラに聞いてみてはどうだ？　魔法については俺よりも遥かに役立つと思うが」

何せ、魔法についてはカーリア国随一だ。しかし、サクラはそん

な志信の言葉を予想していたのか、ゆっくりと首を横に振る。

「わたしもカグラ様ならば何があったのか知っているだろうと思ったのですが……その、先ほど部屋に行った際は、まだ眠られていまして……」

「眠っている？　カグラがか？」

時刻はすでに八時前。これから朝食を取る時間であり、常のカグラならばとうに起きているはずである。

「体調でも崩したか？」

「呼吸は安定していたので、病気とは違うと思いますけど……泣いたような跡がありまして。それが気になります」

そう言って、サクラは眉を寄せた。志信はサクラの言葉を聞き終えるなり、引っかかるものを感じて首を傾げる。

「それは確かに気になるが……以前も同じようなことがなかったか？」

記憶を手繰りながら疑問を投げかけるが、中々答えが出てこない。サクラは志信の言葉に思い当たる節があったのか、表情を僅かに変える。そして、数秒も経たないうちに落ち込んだような顔を伏せた。

「どうかしたか？」

「……ヨシト様に関することで少々」

「義人に関すること？　そういえば、そろそろ義人を起こす時間ではないのか？」

義人の名前を出したところで、志信はふと気付く。今日の早朝訓

練に、義人は出ていない。きっと布団から出られなかったのだろうと志信は僅かに笑うが、サクラの表情はどこか硬かった。

「ヨシト様はですね、その、お部屋にいらっしゃらなくて……」

サクラはそこまで口にして、気まずそうに視線を逸らす。志信はそんなサクラの様子に内心で首を傾げるが、それよりも気になることがあったので尋ねることにした。

「どこかに出ているのか？」

早朝訓練には出ておらず、かといって寝ているわけでもない。何か他の用事があったのかと志信は首を傾げるが、すぐさま思い浮かぶ用件はなかった。しかし、サクラはその疑問を気まずそうな表情のままで否定する。

「そうではないです。いえ、出ているという意味では合っているんですけど……昨晩からユキ様の部屋に行かれていると兵士の方から聞いています」

否定の次に紡がれた言葉を理解するのに、志信は五秒の時を要した。しかし、表面上は動揺のひとかけらも見えない。

「なるほど。だからカグラは……」

志信は納得の理由を得て、言葉を切る。それと同時に、それならば自分が口を出すのはお門違いだなと苦笑するのだった。

「なんだ、あれは？」

朝食を手早く食べ終えた志信は、義人の部屋に向かうべく廊下を歩いていた。しかし、その途中で気になるものを見つけて足を止める。

志信の視線の先では、とある部屋の扉の両脇に十人ほど兵士が並んでいた。それを見た志信は何をしているのかと首を傾げると、話を聞くためにそちらへと歩み寄っていく。

「どうかしたのか？」

「これはシノブ様。どうかしたと言いますか……昨晩から、ヨシト王がユキ様の部屋から出てこられないのです」

そう言われて、志信は眼前の扉へ視線を向ける。続いて、先ほど交わしたサクラとの会話を思い出した。

「そうか……しかし、そろそろ朝食を取らないと午前中の政務に差し障りがあるな」

呟きながら扉を見る志信だが、“無粋”な真似をするつもりもない。しかし、そんな志信の内心を見抜いたのか、一人の兵士が口を開いた。

「コユキ様もいらっしゃるはずなので、“それ”はないかと」

「……そうなのか？　しかし、その割には静かだな」

小雪がいるのならば、色んな意味で騒がしいはずだ。そう考えた志信は精神を集中し、部屋の中に意識を向ける。

耳を澄ましても、物音一つない。

――人の気配がないな。

気配を消している可能性もあるが、わざわざ義人達がそんなことをする必要がない。それに、義人はまだしも優希や小雪にそんな芸当はできないだろう。志信は僅かに逡巡したものの、扉を軽くノックした。

「すまない北城、いるか？」

問いかけるのは、部屋の持ち主である優希に対してだ。だが、ノックをしてみても、声をかけてみても部屋の中から反応はない。

志信は僅かに嫌な予感を覚え、扉の取っ手に手を伸ばす。

「開けるぞ？」

一言断りを入れ、志信は部屋の扉を開いた。ゆっくりと扉を開け、室内へと足を踏み込む。そして室内の様子を確認し、志信は表情を真剣なものへと引き締めた。

「シノブ様、どうですか？」

そんな志信の背後から、見張りの兵士の声が響く。おそらくは一晩中起きていたのだろう。声には眠気が混じっており、それを聞いた志信は申し訳ないと思いつつも口を開いた。

「手の空いている兵士を集めてくれ――緊急事態だ」

志信から告げられた言葉に対して、兵士は怪訝そうに尋ねる。

「……緊急事態、ですか？」

事態が飲み込めていない兵士に頷いて見せ、志信は確認のために問いかけていく。

「昨晩、義人がこの部屋に来たのだな？」

「はい。それは間違いないです」

「その後、義人は一歩たりともこの部屋を出ていないんだな？」

「それも間違いないです。見張りは途中で何人かが交代しましたけど、ユキ様の部屋からは誰も出てきていません」

「そうか……だが、部屋の中には誰もいないぞ」

「……はい？」

志信に促され、兵士は優希の部屋の中へと視線を向ける。だが、確かに志信の言う通り誰もいなかった。置かれているベッドには誰も寝ておらず、人が隠れられそうなところもない。

見張りの兵士はそのことをゆっくりと理解すると、途端に顔を青ざめさせた。

「か、カグラ様とアルフレッド様に報告してきます！　おい！　お前は手の空いてる奴を集めて、シノブ様の指示に従ってくれ！」

見張りの兵士は傍にいた他の兵士にそう告げると、すぐさま走り去っていく。言葉通り、カグラとアルフレッドに対して報告を行うのだろう。

志信は僅かに乱れる内心を努めて抑えると、もう一度部屋の中の様子を確認する。

誰かが侵入して害を為そうとしたのならば、もっと部屋の中が荒れているだろう。だが、部屋の中はいたって普通である。物が壊れ

ているというわけでもなく、何かがなくなっているわけでもない。しかし、志信は僅かな違和感を覚えて部屋の中へを歩を進めた。そして、何がおかしいのかと思案し、ふと気付く。

「……窓の鍵が開いている？」

窓の内側には鍵がかけられるようになっているが、志信が見た時には鍵がかかっていなかった。両開きの窓は大人でも簡単に通れるほどの大きさで、義人達も問題なく通れるだろう。

部屋の扉からは出ておらず、部屋にあるのは外とつながる窓一つ。そうなると、答えは一つしかなかった。しかし、それでも疑問は残る。

「だが、何故窓から外に出る必要があったんだ？」

わざわざ夜更けに、それも優希や小雪を連れて。志信は義人の行動の意味を理解しようとするが、情報が少なすぎて理解どころか推測すら出来ない。

並べられるだけの情報を並べ、志信は起こった“何か”を導き出そうとする。だが、それを遮るように廊下の方から慌しい気配が近づいてきた。

「失礼します！」

叫ぶように言い放ち、扉を叩き割るぐらいの勢いでカグラが部屋へと踏み込んでくる。志信はその慌しさに眉を寄せたが、それよりも気になることがあって口を開いた。

「カグラ、一体どうした？」

そう問いかけたのは、カグラの様子が尋常ではなかったからだろう。

泣いたのか、それとも別の理由か、真っ赤に充血した目。顔に浮かんだ表情は、焦りと恐怖を混ぜたもの。その上でいつも通り白衣緋袴を身に纏っているが、あちこちに皺が見て取れる。腰まで伸びた黒髪も、どこか艶を失っていた。

カグラは志信の問いに答えず、室内をぐるりと見回す。そして部屋の中に志信以外誰もいないことを確認すると、ようやく口を開く。

「……ヨシト様は？」

それは、ひび割れたような声だった。ただ喉が枯れているのか、志信には判断できない。常にないカグラの様子に戸惑いながら、ゆっくりと言葉を選ぶ。

「……いない。北条や小雪もだが、昨晩から姿が見えないようだ」

志信がそう答えると、カグラは力を失ったように膝をつく。

「そ、んな……なんで？　なんでですか？」

呟くように尋ねるカグラ。それを聞いた志信は、僅かに視線を逸らす。

「それはわからない。俺も先ほど知ったばかりでな。だからカグラ、まずは義人達を探すぞ。兵達に指示を……」

そこまで口にして、志信は首を横に振る。どう見ても、今のカグラが兵に指示を出せるとは思えなかった。

「いや、いい。カグラは部屋で休んでいてくれ。アルフレッド殿に話をしてくる」

そう言って、志信は廊下へを出る。すると、心配気な表情をしたサクラが小走りに近寄ってきた。

「シノブ様、ヨシト様達は……」

「姿が見えないが、現状ではなんとも言えないな。情報がなさ過ぎる」

「そうですか……カグラ様の様子は？　話をするなり、部屋から飛び出していかれたんですが」

「危ういな。俺にはそうとしか言えん。すまないが、サクラはカグラを部屋に連れて行って休ませてくれ。俺はアルフレッド殿のところに行ってくる」

「わかりました」

サクラと手早く会話を終え、志信はアルフレッドを探すために執務室がある区画へと足を向ける。

今はまだ、昨晩のうちに何が起きたかを知る者は城中に一人もいなかった。

第百十三話：転移

「……さん……とーさん！」

体を揺すられる感覚と、自身にかけられる言葉。それらが、断絶していた義人の意識を呼び覚ましていく。朦朧とした意識ながらも、義人はゆっくりと目を開けて声のする方へと目を向けた。

「……小、雪……か？」

そう呟きながら目を向けるが、小雪の姿は見えない。目を開けても視界に何も映らず、その異常さに義人の意識は一瞬で覚醒した。目を開けても真っ暗で何も見えず、その上刺すような冷気を感じる。義人は仰向けの状態で倒れていた体に力を入れ、慌てて上体を起こそうとした。

「っ！？」

しかし、思ったように体が動かない。まるで全身が鉛にでもなったかのように動かず、覚醒したばかりの義人の思考は混乱する。

「ちょ、なんだ！？　体が重いぞ！？」

『……起きたか、ヨシト』

焦る義人の耳に、ノーレからの声が届く。それを聞いた義人は、声に出してそれに答えた。

「起きたけど、どうなってるんだ！？　俺、どのくらい気を失ってた！？」

『気を失っておったのは十分ぐらいじゃな……あと、何が起きたか妾にも詳しくはわからん』

ノーレの言葉と同時に、義人は袖を引かれる。何事かとそちらを見れば、真っ黒な視界の中に人の顔らしきものが見えた。

「おとーさん……だいじょうぶ？」

心配そうな声をかけてきたのは小雪だった。義人は声と、僅かに見える顔の輪郭からそう判断すると、小さく頷いてみせる。

「大丈夫だけど、一体何があった？　優希は？」

「おかーさんはおとーさんのとなりだよ。こゆきがひっぱってきたの」

そう言われて、義人は首を右へと倒す。すると、自身の隣に人らしき輪郭の何かが見えて眉を寄せた。

「……目が見えないってわけじゃなくて、暗いだけか」

『そうじゃな。コユキ、指先に灯す程度で良いから火炎魔法を使ってくれぬか？』

「うん、わかった」

ノーレの言葉に、小雪は頷く。そして暗闇の中で精神を集中し、指先に火を灯そうとして首を傾げた。

「んー……んー……あれ？」

「どうした？」

小雪が火の魔法を使うと聞き、内心で身構えていた義人が尋ねる。

もっとも、身構えても体が動かないのだが。
そんな義人に対して、小雪は泣くような声で答えた。

「……まほうがでない」
「え？　もしかして魔力切れか？」
「ううん。なくなってないよ。でも、まほうがでないの」

そんな馬鹿なと内心で呟き、義人は目を瞑って集中する。幸いというべきか、魔力はほとんど減っていない。しかし、ひとまず自力で『強化』の魔法を発動させようと魔力を操作したところで、義人は強烈な違和感を覚えた。

「なんだ、これ……」

召喚された当初に比べれば遥かに慣れてきた『強化』の魔法を発動させたが、それでも多少体が軽く感じる程度の効果しかない。義人はなんとか上半身を起こすと、ノーレに対して口を開いた。

「ノーレ……一体どうなってるんだ？」
『妾にもよくわからん……ひとまず、妾を握ってみてくれ』

ノーレの言葉を聞いて、義人は手探りで鞘に納まったノーレを探す。気を失っている間に小雪が背中から外したのか、ノーレは義人のすぐ傍に置かれていた。
手探りでノーレの柄を握ると、それと同時に指先から魔力が抜けていく。それがノーレが魔力を『吸収』しているのだと悟ると、義人は首を傾げた。

「そんなに魔力を吸ってどうしたんだ？」

義人が知覚できるほどに魔力を『吸収』するノーレ。しかしすぐには答えず、十秒ほど『吸収』を続けてからその問いに答えた。

『すまぬな、思念通話を行うだけでも魔力の消耗が激しいんじゃ』
「思念通話だけで？　たしか、ほとんど魔力を使わないはずだろ？」
『うむ。じゃが、やけに魔力を消費しておる。そうじゃのう……普段の十倍程度魔力を消費しておるようじゃ』
「……十倍？」

何故それほど魔力を消費しているのかと疑問を覚えた義人だが、それを遮るようにノーレが小雪に対して言葉を投げかける。

『コユキ、普段の十倍程度の魔力を使って魔法を使ってみよ』
「じゅうばい？　んーっと……このくらい？」

ノーレの言葉を聞いた小雪は、普段よりも使う魔力の量を増やして魔法の行使を試みた。しかし、ノーレの言う十倍程度という調節が上手くできず、必要以上に魔力を注ぎ込んでしまう。

「あ、ひがでた」

そんな暢気な言葉と同時に、小雪の指先にゴルフボールサイズの火の玉が出現する。すると僅かに闇が晴れ、それに合わせて義人は周囲を見回した。
小さな灯りのため、そこまで視界が良くなったわけではない。それでも周囲を“何か”に囲まれているのはわかった。その“何か”は人間や動物などではなく、時折吹く風に合わせて葉が擦れるような音を立てている。
その音を耳にした義人は、意識して鼻から息を吸う。すると最初に土臭さが鼻につき、その後に生木のような匂いを嗅ぎ取った。

人間の鼻でも嗅ぎ取れるのだから、余程緑が多い場所にいるのだろう。そう判断した義人は、より強い灯りを求めて小雪へと指示を出す。

「小雪、その火をもう少し強くできるか？」

「……うん。できるよ」

魔法の制御に意識を割いているのか、小雪の声は普段に比べて大人しい。それでも徐々に火の玉が巨大化し、それに合わせて周囲を明るく照らしていく。

義人達がいるのは、木々に囲まれた空間だった。頭上は木々から伸びる枝葉に覆われ、地面には枯れた落ち葉が敷き詰められている。

――どこかの森か林、もしくは山の中か……でも、なんでこんな場所に？

黙考するが、答えが出るはずもない。そして、今はそれよりも気にしなければならないことがある。

「まずいな……こんな暗い場所で魔物に襲われたら洒落にならないぞ」

基本的に、魔物は人がいない場所に住む。それは森の中であったり、海や川であったり、断崖絶壁の岩山であったりと、生息範囲が広い。義人はノーレの柄を握り締めると、周囲を警戒しながら口を開く。

「まずは視界を確保しないとな。ノーレ、全力で『強化』をかけてくれ」

『この状況では難しいが……出来る限りはやろう』

ノーレがそう言うと、義人は自分の体がだいぶ軽くなったのを感じた。体が動くのを確認すると、義人はようやく立ち上がる。しかし、それでも普段は片手でも持てたノーレがやけに重く感じられた。

「鞘に入っているとはいえ、ノーレが重いな」

『この戯け！　失礼なことを言うでないわっ！』

「……すみません」

どうやら禁句だったらしい。義人は素直に謝ると、地面を覆っている枯れ葉を足でどけていく。そして土が見えるところまで枯れ葉をどけると、今度は地面に落ちている折れた木々を集めていく。夜露で僅かに濡れているものの、小雪の火力をもってすれば大した問題にはならないだろう。

義人は空気が通りやすいように木々を組むと、その間に枯れ葉を詰め込んでいく。そして、指先に火球をさせ続けている小雪へと視線を向けた。

「それじゃあ小雪、その指先の火で枯れ葉を燃やしてくれ」

「うん！」

『む？　少し待つんじゃ。その火球、込めた魔力が……』

「えいっ」

ノーレが何かを口にしていたが、それを気にせず小雪が指先から火球を放つ。火球はゆっくりと移動し、義人が置いた枯れ葉に触れた瞬間、爆発するように火柱を上げた。

「うおっ！？　小雪！？　威力が強すぎるぞ！」

咄嗟に後ろへと跳んだ義人だが、その表情は強張っている。周囲

の木々には燃え移らなかったが、義人が地面に置いた木々や枯れ葉は一瞬で炭化していた。

『じゃから待てと……まあ、視界は確保できたがな』

音が聞こえるほどの火力で燃える炭を見て、ノーレがポツリと呟く。それを聞いた義人は延焼しないように周囲の枯れ葉を足でどけ、少し離れたところに落ちていた湿った木片を炭の回りに置いた。

「即席で炭が出来たとはいえ、山火事になったら魔物どころの騒ぎじゃなくなるぞ」

「うー……おとーさん、ごめんなさい」

火球を放った小雪が、目に涙を溜めながら頭を下げる。それを見た義人は、苦笑しながら小雪の頭を撫でた。

「いや、助かったよ小雪。次からは、もう少し気をつけてくれればいいから」

義人がそう言うと、小雪は泣き顔から一転して笑顔を覗かせる。義人はそんな小雪に小さく笑うと、未だに起きない優希へと歩み寄った。

「優希はまだ起きないか……って、ん？」

ひとまず火の当たる場所に移動させようとした義人だったが、ふと違和感を覚えて表情を引き締める。気を失っているのか、それとも眠っているだけなのか。灯りに照らされた優希の姿を見て、義人は違和感の正体を思案する。

――呼吸をしてない？

一瞬、そんな考えが頭を過ぎった。

「優希っ！？」

義人は慌てて優希の傍に膝をつくと、呼吸を確認する。優希の口元に耳を寄せ、呼吸音を聞き取ろうと耳を済ませた。すると、か細いものの静かな呼吸音が義人の耳に届く。義人はそれを確認すると、気が抜けたように腰を下ろした。

「はぁ……心臓が止まるかと思った」

『しかし、普通の状態とも違うようじゃぞ？　寝ているにしては、呼吸が浅すぎる』

訝しげにノーレが呟くと、義人は再度優希の呼吸音を確認する。

「そう言われてみればたしかに」

優希は静かに、しかし小刻みに呼吸していた。義人はそのことに不安を覚えるものの、ひとまず火に当たって寒さを和らげるべきだと判断する。優希の背中と膝裏に腕を通し、横抱き……所謂お姫様抱っこをして優希を持ち上げた。

「軽いな……」

思わずといった様子で義人は呟く。すると、ノーレから押し殺したような声が響いた。

『ヨシト、妾との扱いの違いについて話があるんじゃが』

「ノ、ノーレが『強化』をかけてくれてるから軽く感じるんだよ！」

アハハと笑って誤魔化し、義人は火の傍に移動する。そして上着を脱いで小雪の火炎魔法で乾燥した地面へと敷き、その上に優希を寝かせた。その際焚き火からは少し距離を取り、寝ている間に優希が火傷をしないようにも注意する。上着を脱いだ義人は寒さを感じたが、火に当たっていればなんとか凌げそうだった。

「おとーさん、寒いの？」

すると、それを察した小雪が義人の膝上に飛び乗ってくる。見た目が子どもだからか、それとも中身が白龍だからか、小雪の体温は高い。義人は小雪の温かさに頬を緩めると、それを察したのかノーレが言葉を発した。

『寒いのならば、しばらくそうしていてはどうじゃ？　近くに魔物が来たら、妾が教える。それからの対応でも間に合うじゃろう』

「そうだな……そうしよう。『強化』がないと体が碌に動かない上に、こんなに寒いんじゃな」

「うん！　えへへ……」

小雪は甘える猫のように笑い、義人に背を預ける。義人はそんな小雪に一つ笑うと、頭を撫でた。

『……それにしても、落ち着いておるな』

不意に、ノーレが呟く。それを聞いた義人は、小雪の頭を撫でる手を止めた。

「落ち着いているって、俺が？」

『うむ』

肯定の意思を示すノーレに、義人は少しだけ考え込んだ。そして、すぐに苦笑を浮かべる。

「いきなり森の中に放り出されるのはこれで二度目だしな。それに、召喚されてから驚くことの連続だったから慣れたのかもな」

今までのことを思い返し、義人は自分の言葉に頷いた。色々とありすぎて、驚くことに慣れてしまったのかもしれない。

義人としては慣れたくなかったなと思うが、それでも突発的な事態に対してすぐに落ち着けるようになったのだから文句も言えなかった。

「でも、本当はけっこう焦ってるんだぞ？　食べ物や水はどうしようとか、ここはどこなのかとか、考えることが多すぎる」

『そうじゃな。それにしても、ここがどこか、か……』

「わかるのか？」

考え込むように呟くノーレに、義人は期待を込めて尋ねる。

『いや、さすがにそれはわからぬ。しかし、妙な違和感があってな』

「違和感？」

『そうじゃ。先ほど、思念通話を使うのに普段の十倍ほどの魔力が必要と言ったじゃろう？』

「ああ。俺も自分で『強化』を使ってみたからそれはわかる。普段に比べて、魔法が使いにくいってな」

右手を握り締め、頷く義人。『強化』を使用しない状態だと、非

常に体が重く感じられた。今の状態では、馬のように速く走ることもできないだろう。跳躍しても、腰の高さまで跳べるかわからない。

『妾達の魔法の腕が鈍ったのか、それとも別の原因があるのか……』

「腕が鈍ったとして、そう簡単に魔法が使えなくなるのか？」

『余程のことがない限り、ないじゃろうな。ふむ、そう考えると別の原因と見た方が妥当か』

「別の原因ねぇ……」

何が原因かと考える義人だが、現状で考えられることなど限られている。

魔物の存在を警戒しつつ、義人は焚き火の傍で一晩中考えを巡らせるのだった。

一夜明け、東の空から太陽が顔を覗かせ始める刻限。義人は火が小さくなってきた焚き火に、乾燥させた木片を放り込みながら小さく欠伸をした。

今のところ、魔物の襲撃はない。それどころか、動物の気配すらほとんどなかった。義人は自分の膝の上で眠る小雪と、隣で眠る優希を交互に見る。

「……さすがに眠くなってきた」

『緊張しながら一晩明かしたからのう……お主も少しは睡眠を取れ、と言いたいが、この状況ではそれも叶わんな』

「眠るとしたら、安全な場所にたどり着いてからってわけだな。でも、せめて何か食べたいぞ」

『食べるものがないんじゃ。仕方なかろう』

時折腹の虫が空腹を訴えるように鳴くが、時間が経ちすぎて逆に空腹感を感じない。義人は自分にもたれかかりながら幸せそうに眠る小雪の頭を軽く撫でると、眠気を誤魔化すためにもう一度欠伸をした。

「……ん、ぅ……おとー、さん？」

すると、頭を撫でられたことに反応したのか、小雪がゆっくりと目を開ける。義人はそんな小雪に対して苦笑して見せた。

「起こしちゃったか」

「……うん。おかーさんは？」

「優希はまだ起きないな」

そう言いつつ、義人は隣で眠る優希へと視線を向ける。しかし、優希は相変わらず静かに寝息を立てるだけで、一向に起きる気配がなかった。

「……こりゃ、本当に危なくなってきたか」

食料も水もなく、現在位置もわからない。夜が明けて徐々に明るくなってきたものの、どの方向へ向けて進めば良いかもわからない状況だった。

「おとーさん、こゆきおなかへった」

膝の上に座っていた小雪が、義人を見上げながらそう口にする。それと同時に「きゅー」という可愛らしい音が響き、義人は頬を掻

いた。

「せめて、今どこにいるのかがわかればな……」

周囲は木々に囲まれており、現在位置を教えてくれるようなものはない。義人は頭上を覆う木々を仰ぎ見て、ふとあることに気付いた。

「そうか。わからなければ調べればいいんだ」

『……どうやってじゃ？　そんな魔法はないぞ？』

「いや、魔法じゃなくて……小雪で」

『む？　ああ、なるほど』

義人の言葉に納得がいったらしく、ノーレが賛同の意を示す。しかし、当の小雪は首を傾げるだけだ。

「おとーさん、なに？」

「ちょっと小雪にお願いしたいことがあるんだ」

「おねがい？」

「そう、お願い。一度変化を解いて龍の姿に戻ってくれないか？　そして、空からこの辺りの様子を見てほしいんだ」

頭を撫でながらそう言うと、小雪は力強く頷く。

「うん！　まかせて！」

元気良く答え、小雪が勢い良く立ち上がる。そして、何を思ったのか自分の服に手をかけ、何の躊躇もなく脱ぎ始めた。

「……あの、小雪さん？」

白いコートを脱いで丁寧にたたむ小雪に、混乱した義人が敬語で話しかける。すると、小雪は不思議そうな顔をした。

「ん？　なに？」

「何故に脱ぐ？」

たたんだコートを手渡され、義人はつい受け取ってしまう。小雪はコートの下に着ていた白い長袖の服に手をかけると、義人の隣で眠る優希へと目を向けた。

「おかーさんが、おようふくをきてるときにもとにもどるとやぶれるから、もとにもどるときはぬぎなさいって」

「……そうか。いや、そうだよな」

洋服ごと変化するものだと思っていた義人は、少し残念そうに呟く。その辺りも魔法でどうにかなると思っていた義人だが、現実は甘くないらしい。

そうやって義人が残念がっていると、全ての服を脱ぎ終えた小雪が少し離れた場所へと移動し、精神を集中するためか目を閉じる。

一瞬の発光。

その眩しさに、義人は反射的に目を閉じた。カメラのフラッシュのような光を受けた義人は、軽く頭を振ってから目を開ける。

「小雪……だよな？」

そこには、記憶にある姿よりもさらに大きくなった白龍の姿があった。最後に龍の姿で見た時は全長一メートル程度だったが、今では優希の身長と同じぐらいの大きさがある。

『おとーさん、どうかしたの？』

成長が早いなと驚いていた義人だが、その驚きを遮るように小雪の声が響いた。義人はそれが思念通話によるものだと悟ると、何でもないと笑ってみせる。

「それじゃあ小雪、まずは空から周囲の様子を見てくれるか？」

『うん』

義人の言葉に頷き、小雪は背中に生えた翼を羽ばたかせる。そして何度か羽ばたかせると、その体が宙に浮いた。

頭上に生える枝葉を物ともせず、小雪が飛翔する。下から見上げる義人は、枝葉の隙間から見える小雪が空を飛ぶ光景にすら驚きを覚えず、思わず苦笑した。

「慣れってのは恐ろしいな」

呟くように言葉を口にする。

そうやって下から眺めていると、一分と経たずに小雪が地面へと下りてきた。それを見た義人は、何かあったのかと首を傾げる。

「どうした小雪。何かあったのか？」

義人が尋ねると、小雪は前足で木々の奥を指しながら思念通話で答えた。

『うん。あっちに、へんなたてものがあった』

「建物？　村でもあるのか……どのくらい建物があったんだ？　距離は？」

『んー……いっぱい。きょりはあるいてさんじゅっぷんくらい？』

「いっぱい、ねぇ……まあいいや。歩いて三十分ぐらいなら、すぐにでも向かおう」

カーリア国の国王だと言えば、食事ぐらいはもらえるだろう。義人はそう判断して、未だに眠り続ける優希へと視線を向ける。

小雪には道案内を頼むとすれば、移動させることが出来るのは自分しかいない。龍の姿に戻った小雪の背中に乗せるという手もあるが、翼が生えているためにすこぶる寝心地が悪そうだ。

義人はノーレを背中ではなく体の前面へと移動させると、自力で『強化』を使って優希を背負う。そして優希の下に敷いていた上着に小雪の服を乗せ、袖の部分を縛ってノーレの柄に引っ掛けた。

『……傍から見ると、一体どのように見えるんじゃろうな』

「言うな。とりあえず、元の世界だったら警察に通報されるだろうよ」

寝ている女の子を背負い、鞘に納まった剣を肩にかけ、その柄には洋服がぶら下がっている。

少なくとも自分なら通報するなと気を滅入らせながら、義人は火が消えかかっている焚き火に砂をかけていく。そして火が完全に消えたことを確認すると、小雪が示す方向へと歩き始めた。

『おとーさん、こっちだよ』

小雪を先導にして歩くこと三十分。山を下るようにして歩き続けた義人は、『強化』を継続して使用する精神的疲労を堪えながら口

を開いた。

「……『強化』を使うだけだってのに、すごく疲れるんだが」

『普段と比べて、必要な魔力が多いからのう。消費しているわけではないとはいえ、大きな魔力を常に全身に行き届かせるのは難しいじゃろう』

気を紛らわせるように会話を交わす義人だが、精神的な限界が近い。今まで働いていた『強化』に似た効果がなくなっており、自力で『強化』を長時間使い続けることが大きな負担になっていた。

「それにしても、まだ見えないのか……ん？」

三十分ほど歩き続けた義人だが、不意に妙な音が聞こえてその足を止める。

『おとーさん？』

足を止めた義人に対して小雪が先を促すが、足を止めた義人はそれに反応を示さない。聞こえた音をもっとよく聞き取れるようにと耳を澄まし、“その音”を聞いた。

「っ！？」

音が聞こえると同時に、その方向へと駆け出す。距離は遠くない。『強化』を使用した状態で木々の合間を駆け抜け、義人は正面へと目を向けた。

森を抜けるのか、木々の間から光が見える。正面から朝日に照らされて視界が白く染まるが、それに構わず義人は先へと進んでいく。

「ここは、まさか……」

遠くから聞こえる音を目指して、義人は進む。

今は遠い、だが、かつては毎日のように耳にしていた音だ。少なくとも、召喚された世界には存在しなかったはずの音。

義人は背後についてくる小雪に意識を割く余裕もなく、その音――車のエンジン音がする方へと走る。

木々が生い茂る森を抜け、視界が開ける。義人は朝日の光に目を細めるものの、右手でそれを遮って眼前の光景を目に焼き付けた。

舗装された道路。

道路の上を走る乗用車。

道端に立つ電柱。

乱立するコンクリート造りの建物。

視界に広がった“懐かしい”光景に、義人は目を見開く。

「嘘、だろ？」

無意識の内にそう呟いて、義人は目を瞑る。そして、目を開いてもう一度眼前の光景を確認した。続いて、自分の頬をつねって痛みがあることを確認する。

「は、はは……夢でもないや」

そこは、およそ八ヶ月ぶりの“元の世界”だった。

第百十四話：失踪

太陽も中天に差し掛かり、この日十二回目の鐘の音が城内に響く。
一時間おきに鳴るようにと改められた鐘の音だが、それを決めた張本人の姿は城内のどこにもなかった。
普段ならば午前中の政務が終わり、午後の政務に備えて昼食を取る時間である。しかし、今のところ暢気に昼食を取ろうとする者はただの一人もいない。

「ヨシト王達はまだ見つからないのか……」

不安と苛立ちを隠すように呟いたのは、財務大臣のロッサだった。
毎朝行う報告会に参加するべく、謁見の間に集まったはおよそ三時間前。
そこで義人や優希、小雪の姿が見えないということを聞き、会議室で緊急の対策会議を開いたのが二時間前。
手の空いている兵士を総動員して城の中や城下町をくまなく探し、それでも見つからなければ城壁の外へと兵士を差し向ける。そうやってかつてないほどの大人数で探していても、一向に見つからない。
『召喚の巫女』であるカグラも朝から姿が見えないが、こちらは体調不良のため部屋で休んでいるという報告があった。それはそれで心配だったが、ロッサとしては国王である義人の姿が見えないという方が重大な問題である。
カーリア国から逃げ出した。
小雪を連れて優希と駆け落ちをした。
他国の刺客が侵入し、義人達の身柄を連れ去った。
会議室に集まった文官達は、そんな根も葉もない予測を口する。
しかし、他の文官と比べれば義人と深い関わりがあったロッサの考

えは違った。
財務大臣として毎日顔を合わせ、財務の話から雑談にいたるまで様々な話をしている。かつて税金を横領していた頃は、その罪を見逃してもらった恩義もあった。そのロッサからすれば、義人が何も言わずに姿を消すというのはありえない。
刺客が義人達の身柄を連れ去った可能性もあるが、その利と可能性はほとんどない。
誰にも気づかれずに城内に侵入できるほどの手練だとしても、連れ去るよりも暗殺したほうが手っ取り早いだろう。三人も引き連れて城外へ脱出できるほど警備は甘くはないし、優希はともかく義人と小雪には抗う術もある。それなのにどこにも誰かが争った形跡を残さず、義人達は姿を消しているのだ。
そうなると義人達が自発的に姿を消したことになるが、志信を置いてどこかへ消えたというのが引っかかる。義人の性格上、この城から逃げるのならば間違いなく志信も共に連れて行くはずだ。しかし、志信はカーリア城に残っており、義人達がどこに消えたかも知らない。

「……わからん」

いくら考えても、ロッサには答えが出なかった。
ロッサは一度ため息を吐いて気分を入れ替えると、アルフレッドの隣の席に座る志信へと目を向ける。
志信は会議の内容を聞いているのか、それとも自身の考え事に耽っているのか、腕組みをしながら目を瞑ったままで微動だにしない。会議が始まってからも、義人達の行き先に関して何も知らないという発言をしただけで他の言葉は口にしていなかった。
国王が突然姿を消す。その重大さはロッサも理解しており、もしも義人が見つからなかったらと思うと鉛でも飲み込んだような気分になる。

義人達が姿を消したことについては緘口令が敷かれているが、それも限界があるだろう。他国の間諜に情報が伝わるのを防ぐのも難しく、近隣諸国には遠くないうちに気づかれる可能性が高い。

カーリア国は他国以上に国王の存在に依存する傾向があり、国王がすべての権力を握っていると言っても過言ではない。宰相であるアルフレッドや『召喚の巫女』であるカグラも地位は高いが、権力という点では国王に及ぶはずもない。国王という頭がなくなった場合にどうやって国を運営していくのか、それが問題だった。

カーリア国では前代の国王が暗殺され、十年間国王が不在という事態に陥ったことがある。その際は宰相であるアルフレッドを筆頭にして国の運営を行ってきたが、“最悪の場合”はその五倍の期間国王がいないことになってしまう。

その未来を思い描き、ロッサは軽く頭を振った。

「ヨシト王のことだ。何か考えがあって姿を隠されているのかもしれん」

ロッサは軽口のように呟き、数秒の後にため息を吐く。

自分の言った言葉なのに、ただの一片すら信じることができなかった。

カグラは一人、自室の寝台で横になっていた。

すでに昼食の時間を過ぎ、平時ならば午後の政務に取り掛かっているだろう。しかし、今日に限っては政務に取り掛かることなく寝台で身を横たえている。

昼間に部屋で横になっているなど何年振りだろうか、などと考え

たカグラだったが、意味もないのですぐに止めた。
志信やサクラの配慮によって休んでいるが、横になっても一向に眠気は訪れない。しかし、気分は悪いを通り越して最悪だった。

「はぁ……」

無意識の内にため息が零れ落ちる。体調的な意味ではなく、精神的な意味での最悪。カグラにとって、ここまで気分が悪いのは過去に“一度”ぐらいしかなかった。
その両方の“最悪”には義人が関係しているのだが、その義人の姿をカグラは昨晩から見ていない。
昨晩、義人が自室へと来訪したのは、カグラにとって本当に突然の出来事だった。
そして、その際にぶつけられた数々の言葉も、カグラにとって突然かつ予想外に過ぎる。

『だから、使えない魔法でどうやって“元の世界”に戻せるって言うんだ!?』

何故、義人が突然そんなことを言い出したのか。

『わからないって言うのか？　それとも、とぼければ誤魔化されると思っているのか!?』

何故、義人がそんなことを言うのか。

『そりゃ違うさ。これでいつも通りだったらどうかしてる』

何故、義人がそこまで敵意の宿った目で見てくるのか。

『答えてくれ、いや、答えろカグラ！　なんで騙した!?　初めから全てを話せば、俺が協力をしないと思ったからか!?』

昨晩の義人とのやり取りが自動的に頭の中で再生され、カグラは無意識のうちに目を閉じた。しかし、目を閉じようとも言葉が途切れない。昨晩義人から投げかけられた言葉の中でも、最もカグラの心を抉った言葉が再生される。

『残念だよ、カグラ。“信用”はしてたんだけどなぁ……』

かけられた言葉と、向けられた感情。その二つに見えたのは、失望の色。

カグラは自分と話していた義人の表情が、徐々に変化していく様も見ていた。最初こそ怒りを面（おもて）に見せていたが、それが次第に冷め、最後には路傍の石でも見るかのような表情へと変わる。その一連の流れを、カグラは見ていた。

「……なんで、ですか……」

カグラは目を閉じたままで布団を頭まで被り、そのまま体を丸めて小さく呟く。声には涙が滲み、張りなど微塵もない。

「……一体、何が、どうして……」

昨晩義人が部屋を訪れた理由も、突然の怒鳴り声の理由もわからない。カグラは目の端に溜まった涙を手の甲で拭いながら、どうしてと数回繰り返し呟いた。

「……？」

しかしふと、カグラの頭の隅に疑問が掠める。昨晩の義人の言葉の中で、何か引っかかるものがあった。カグラは義人の言葉を思い出しながら、それが何なのかと思考する。いくつも投げかけられた言葉を頭の中で反芻し、引っ掛かりを覚えた言葉を拾い出す。

『だから、使えない魔法でどうやって“元の世界”に戻せるって言うんだ！？』

昨晩、義人はそう言った。その時は義人の言葉の勢いに押されて深く考えることがなかったカグラではあるが、義人の言葉が指す意味を冷静に考えると、『召喚の巫女』として聞き逃してはいけない言葉が含まれている。

「使えない魔法……“元の世界”に戻せる……」

小さく呟き、それらの言葉が指すものを考えていく。しかし、“元の世界”に戻るための魔法など、カグラは一つしか知らなかった。

「……召喚の魔法が、使えない？」

何故義人がそんなことを言えるのか。

まだ魔力が完全に回復しておらず、召喚の魔法を使えないのはカグラが一番理解している。だが、昨晩の義人の口振りは、それとは別の“何か”を指しているように感じられた。

カグラは布団から顔を出し、そのまま上体を起こす。

「最近ヨシト様が図書室に出入りしているという報告は受けていましたが、あの場所には召喚に関する資料はない……しかし、そうなると何を根拠にそんなことを……」

思い詰めたように独白するカグラ。そうやって一人で考えを巡らせていると、不意に扉を叩く音が聞こえた。

「……どうぞ」

「失礼します」

抑揚を感じさせない声で応じると、一言返答があってから扉が開く。

「お加減はいかがですか？」

そう言って部屋に入ってきたのは、お盆を両手に持ったサクラだった。お盆の上には水差しと、それを注ぐための湯飲み。そして粉末状の薬らしきものを包んで折った紙が乗っている。

「多少は良くなりました。心配をかけてしまいましたね」

カグラが意識して微笑むと、サクラは安心したように息を吐く。

「良かったです……あ、これはアルフレッド様が処方してくださったお薬です。疲労回復の効果があるので、カグラ様に飲ませてほしいと仰っていました」

サクラはお盆を机の上に置くと、湯飲みに水を注ぎ、紙に包まれた粉薬と一緒にカグラへと差し出す。カグラはサクラが差し出してくるものを受け取ると、軽く苦笑した。

「嬉しいですけど、アルフレッド様も心配性ですね。まあ、さすがにエルフ族の秘薬などではないようですが」

薬を包む紙を開きながらカグラがそう言うと、サクラも苦笑しながら頷く。ちなみに、エルフ族の秘薬とはほとんどの病を治す言われる妙薬であり、間違っても疲労回復のために渡すようなものではない。もっとも、アルフレッドは意外と過保護な一面を持っており、孫のように思っているカグラのためならば簡単に秘薬を渡してくる可能性もあったが。

「あはは、さすがにそれはないですよ」

カグラの冗談に笑うサクラだが、それもあまり続かず、すぐさま真面目な表情へと変わる。

「カグラ様、昨晩のことですが」

昨晩、という言葉に、カグラの肩が震えた。しかし、サクラの口から出てくるのはそれとは違った用件である。

「昨晩奇妙な魔力を感知したのですが、カグラ様は何かご存知ですか？　わたしの他にはアルフレッド様とシアラちゃんぐらいしか気付いていなかったのですが……」

「奇妙な魔力？」

サクラの言葉に、カグラは首を傾げた。

「はい。昨晩わたしが眠る前に奇妙な魔力……今まで感じたことのないような、異質な魔力を感じたんです。それで今日も朝からその原因を探していたのですが、結局何もわからなくて……カグラ様ならば、何かわかるのではないかと思いまして」

そう言って真剣な目を向けるサクラだが、カグラには思い当たる節がない。そもそも、昨晩は外からの魔力を感じ取れるような精神状態ではなかった。サクラからの質問を受けてから初めて知ったぐらいである。

「サクラ……」

しかし、それでも『召喚の巫女』であるカグラの頭に一つの解答が浮かぶ。

「その魔力を感じ取ったのは、何時頃ですか？」

その質問の答えをサクラから聞いた時、カグラは部屋から飛び出していた。

その日、召喚の祭壇を見張る担当になった兵士は大きな欠伸をしていた。国の要人を警護するというわけでもなく、国内の町や村へ出向いて出没する魔物の退治をするというわけでもない。国王を召喚するための施設という、この国では重要な位置づけの建物の警備ではあるが、ほとんどすることがないため退屈だった。精々、他の見張りの兵士と共に雑談をしながら祭壇や周囲の状況に変化がないかを確認するだけである。

「……退屈だなー」

「そう言うなよ。これだって大切な仕事だろ？」

「そうだけどさ。五十年に一度しか使わないものの警備なんて意味

があるのか……ん？」
「どうした？」

雑談をしながら祭壇の周囲を歩いていた兵士二人だが、そのうちの一人が不意に祭壇の壁へと近づいていく。そして、眉を寄せながら壁に刺さった“何か”を見て口を開いた。

「なんだこれ？　釘……じゃないな。誰かが短刀でも突き刺したのか？」
「おいおい、何を……って、お前祭壇の壁に何やってんだ！？」
「俺じゃねえよ！？」
「なんてことを……カグラ様に知られたらどんな罰が下るか……」
「だから俺じゃないって……あ」

とりあえず壁に刺さっている“何か”……昨晩義人が使った『鍵』を引き抜こうとした兵士だが、引っ張ると同時に壁が手前に動く。

「……おい、壁が扉になってたんだが」
「意味がわからないぞ。俺もわからないが」

兵士二人は顔を見合わせ、とりあえず開いた扉を閉める。

「とりあえず、カグラ様に報告を」
「そこの二人！」

報告をしようと口にしかけた兵士を遮り、カグラの声が響く。それを聞いた兵士二人は背筋を正し、慌てたように振り返った。

「違うんです！　これは全部コイツが！」
「あ、おい！　俺のせいじゃないだろう！？」

歩み寄ってくるカグラの姿を見て、兵士二人は互いに罪を擦り付け合う。しかし、カグラはそんな二人の様子は気にも留めず、自分の聞きたいことだけを口にした。

「昨晩から今日にかけて、何か変わったことはありませんか？　どんな小さなことでも良いんです。知っていたら話してください」

むしろ話せと、そんな意思が感じられるカグラの言葉に、兵士二人は慌ててその場を飛びのいた。

「き、気がついたらこんなものが壁に刺さっていました！」

そう言いつつ、壁に差し込まれた『鍵』を指差す。カグラは無言のままで『鍵』のもとへと歩み寄ると、それをつかんで手前へと引いた。

それと同時に、壁だと思われていた部分が扉のように開く。それと同時に太陽の明かりが召喚の祭壇の『中』を照らした。

「祭壇の中がこのようになっていたとは……」

そう呟きながら、カグラは己の考えの正否を確信する。そして、何の躊躇もなく扉の内側へと足を踏み入れた。

義人は何らかの方法で召喚の祭壇について調べたのだろう。挙句に祭壇の中へと入る方法までも見つけ、この場所へと踏み入れた。

カグラはそう考えながら歩を進める。もしかしたら、義人がこの場所にいるかもしれない。そんな期待を胸に、カグラは祭壇の中を注意深く探っていく。

扉の場所から入り込む太陽の光を頼りに祭壇の中を探っていたカグラは、部屋の中央に置かれたものを見つけてそちらへと歩み寄っ

た。

部屋の中央に置かれていたのは、木で作られた台。それに加えて、周囲に描かれたいくつかの文字。そして、

「これは……」

台の上に置かれた、ヒビが入った『魔石』だった。

第百十五話：帰宅

元々義人達が住んでいた町は、ごく普通のありふれた町だった。有名な歴史的建造物や観光スポットがあるわけでもない。際立って人口が多いわけでもなく、ビジネス街のように、一つのビルが倒れたらそのままドミノ倒しになりそうなほど高層のビルが乱立しているわけでもなかった。

それでも強いて特長を挙げるならば、海に面しているため夏の時期になると海水浴に訪れる人間がいるくらいだろう。しかし、義人達の住んでいる場所からは少し遠いため、海の波音が聞こえることはない。

八ヶ月ほど前までは日常的に見ていた光景。実に平和で、周囲に戦争の影も魔物の脅威もない、そんな世界。しかし、そんな平和な世界でありながら、義人はある意味でかつてないほどの脅威に遭遇していた。

森を抜けた義人は小雪に少女の姿へと化けさせて服を着せ、自身は小雪の服を包むのに使っていた上着を羽織る。寒空の下、さすがに長袖のシャツだけでは寒い。

優希手製の少し厚めの上着を羽織り、再度優希を背中に背負い、背中に当たる柔らかい感触を頭の中から努めて追い出し、“いつも通り”にノーレを肩から提げる。

そして、“それ”と遭遇してしまったのは、森から抜けて二十分ほど経った時のことだった。

気を張り詰めながら夜を徹し、空腹と激しい眠気を覚えながらも義人は自宅へと足を向ける。幸いと言うべきか、現在位置がどこなのかは記憶と照合すればすぐに知れた。子どもの頃からあちらこちらへと足を伸ばして遊んでいた義人は、その記憶をひっくり返し、現在位置から自宅までの道のりを割り出す。

あとは自宅までたどり着けばどうにかなると道を進む義人だった

が、それを遮るように“それ”は立ちふさがったのだ。

「君、ちょっといいかな？」

不意にそんな声をかけてきたのは、自転車に乗った男性だった。服装は上下紺色の長袖長ズボン。頭には紺色の制帽を被り、腰には警棒や無線機。そして、ホルスターに収まった拳銃などが確認できる。

「……」

義人は無言で目を瞬かせた。相手は、かつてこの世界で一度も会話を交わしたことがないような職種の人間である。

男性は近くに自転車を止めると、相手を安心させるためか表情を緩ませながら口を開く。年齢は五十に差し掛かったぐらいだろう。歳の積み重ねがそうさせるのか、他人を安心させるような雰囲気を持つ男性だった。

「市民の方から通報があってね。少し、話を聞かせてもらってもいいかな？」

そう言いつつ、男性は一つの手帳を掲げて見せる。その表紙に書かれた文字を読み、義人は内心で呟く。

――警察？

その単語を認識するのに一秒。しかし、義人は何故自分に声をかけてきたのかを認識できずにいた。

落ち着けと自身に言い聞かせつつ、義人は自身の状況を確認する。優希を背負っているが、これは別に拉致や誘拐というわけでもな

い。大きな問題ではないだろう。
小雪を連れているが、見た目は四、五歳の少女である。元の姿ならば警察に通報どころの騒ぎではすまないだろうが、今は傍目から見て問題があるようには見えない。

『ヨシト、この者はなんじゃ？』

疑問に思ったのか、ノーレが義人へと問いかける。

『警察って言って、国の兵みたいなもんだよ。犯罪の取締りとかをするのが目的……』

そこまで言ったところで、義人は絶句した。
同年代の女の子を背負い、幼い少女を連れ、鞘に納まった西洋刀を肩から下げて歩く男。

「なんてこった……」

完全に不審者だった。
カーリア国にいた時ならば、西洋刀だろうが日本刀だろうが所持しても問題はない。腰や背中に提げて街中を歩いていても咎められることもない。
容疑は銃刀法や誘拐などになるだろうか、などと現実逃避気味に考える義人に、警察の男性が話しかける。

「君が肩から提げてるものを見せてもらってもいいかな？」

笑顔で話しかけてくるのは、おそらく義人を刺激しないためだろう。通報されて一人で来たのは、悪戯電話だと思ったのかもしれない。義人は嫌な汗が背中を伝っていくのを感じつつ、とりあえずノ

ーレを手渡した。
警察の男性はノーレを受け取ると、柄を握って引き抜こうとする。しかし、いくら力を込めても抜けず、しばらく悪戦苦闘した後に口を開いた。

「これは何かな？」
「演劇の道具です」

するりと、義人の口から嘘が出る。元の世界に戻れたと思ったら、そのまま留置所に直行などという展開は御免被りたかった。

「演劇の道具？」
「はい。演劇の道具です」

故に、義人は嘘をつく。しかし、ここで『そうなんだ』と納得するような人間は警察でなくともいないだろう。

「……それにしてはずいぶんと重いね」
「リアリティが大事ですから」
「剣が抜けないのに？」
「そのまま殺陣（たて）をやる必要があるんです」

からかっているようにしか聞こえない台詞だが、男性は気の長い人物だった。首を傾げながらノーレを義人に手渡すと、今度は背負った優希へと視線を向ける。

「その女の子は？」
「妹です」
「……なんで背負っているんだい？」
「少し、家庭の事情が複雑でして」

真顔で嘘を吐き続ける義人だったが、警察の男性が信じてくれるとは到底思っていない。義人自身、他人からそんなことを言われたら一笑するだろう。

「じゃあ、そっちの子は？」

男性が今度は小雪へと視線を向ける。その視線を受けた小雪は、怯えたように義人の背後へと隠れた。

「おとーさん、このひとだれ？」

そう言って、小雪が義人の腰へとしがみつく。男性は小雪のような見た目が小さい女の子に怯えられたことがショックだったのか、気まずそうに目を逸らした。しかし、すぐに現在の状況を思い出したのか口を開く。

「お父さん？　君、いくつ？」

小雪は見た目が五歳程度。そして、義人はどう見ても成人には見えない。

「二十三歳です」

「……いや、どう見ても二十歳は超えてないよね？　娘さんは五歳くらいかな？　奥さんは？」

小雪の存在と義人の返答に、男性も混乱してきたらしい。義人も眠気で頭の働きが悪いが、この場はどうにか誤魔化す必要がある。

「おくさん？　おかーさん？」

「あー、うん。そうだね。お母さんのことだよ」

小雪を怯えさせないためか、膝を折って視線を合わせながら男性が答えた。小雪は男性の態度に多少気を緩め、義人が背負った優希を見上げる。

「おかーさん」

「……え？」

小雪の発言を聞いた男性は、笑顔で固まった。小雪はそんな男性の反応を前に、もう一度同じ言葉を口にする。

「おかーさん」

「え、えっと……その女の子が君のお母さんなのかな？」

「うん！」

満面の笑顔で答える小雪。それに反して、義人は男性から表情が見えないのを良いことに、絶望に満ちた顔をした。

――――小雪に何も言うなって言っておけばよかった。

もはや後の祭りである。

「そ、そうなんだ。教えてくれてありがとう」

男性は小雪に礼を言うと、ゆっくりと立ち上がった。そして、義人に複雑そうな視線を向ける。

「妹？」

「妻です」

投げやりだった。
ここまで来ると、誤魔化すよりもどうやって話を終わらせるべきかと義人は悩む。そして、そんな義人の発言を寝ながらに聞いた優希は、幸せそうに表情を緩める。

「さっき妹って言ったよね？」
「妹で、妻なんです」

自分で言っておいて、どんな関係だと義人は内心で呟く。

「それは、その……色々と駄目な気がするんだけど」

法律と倫理的に。そう口にする男性に、義人は内心で同意しながらも嘘を吐き続ける。

「家庭の事情が複雑でして」
「じゃあ、その辺りの事情も含めて話してもらえるかな？」
「……いやぁ、さすがに路上で話すような内容じゃないんで遠慮したいんですが」
「それなら署の方に来てくれるかな？　コーヒーくらいなら出すから」

男性がにこやかに同行を促す。それを聞いた義人は、思念通話でノーレに話しかけることにした。

『ノーレ、『加速』は使えるか？』
『むぅ……なんとか使える、といったところじゃな。長時間はもたぬ。精々数秒ぐらいしか使えんじゃろう』
『それだけ使えれば十分だ』

『何をする気じゃ？』

義人の言葉を聞いたノーレが訝しげに尋ねる。そんなノーレの問いを聞いた義人は、自身の魔力を練りながら警察の男性の背後に停められた自転車へと目を向けた。

『こうする』

そう告げると同時に、義人は風の魔法を行使する。男性に当たらないように風の塊を撃ち出すと、狙い違わず自転車をなぎ倒した。

「っ！？」

突然背後から聞こえた大きな音に、男性が慌てて振り向く。義人はその瞬間にノーレへと指示を飛ばした。

『ノーレ、『加速』だ！』

『うむ！』

腰にしがみつく小雪を抱きかかえ、義人は地面を蹴る。一足飛びで男性から距離を離し、振り向くよりも早く傍の路地へと飛び込む。そして魔力が続く限り走り続け、逃げ出すのだった。

「……あれ？」

倒れた自転車に気を取られた男性は、今まで話していた義人の姿が見えなくなっていること気付いて首を傾げる。視線を外していたのはほんの数秒。そして、現在いる場所は人通りがないものの見通しの良い住宅街の一角。どう間違っても、数秒の間に姿を消すことはできない。

男性は頬をつねり、ひとまず夢ではないことを確認してから口を開く。

「狐か狸に騙されたかな……」

納得できないものを感じつつも、とりあえず倒れた自転車を起こすのだった。

距離を稼ぎ、そのまま適当に入り込んだ住宅の庭の片隅で、義人は乱れた息を整えていた。

「はぁ……はぁ……最初から、ああしておけば良かった」

そう言いつつ、義人は優希を地面に下ろさないように注意しながら上着を脱ぐ。そしてノーレが外から見えないに包むと、優希を背負い直して手に持つ。

『これヨシト、突然何をするんじゃ！？』

「……こっちの世界では、武器の類を携帯してはいけないって法律があるんだよ。今回はそれに引っかかったわけさ」

他にも通報される要素があったのだろうが、それは口に出さない。現在も不法侵入として通報されそうだが、義人にそれに気付く余裕はなかった。

「それにしても……魔力の消費が……ひどい、な」

使ったのは下級の風魔法一回に、『加速』を数秒。それだけで、義人は手足に鉛をぶら下げたような疲労を感じていた。

『お主は巫女やメイドのように魔力を消費をすることに慣れておらんからのう……』

「おとーさん、だいじょうぶ？」

義人の様子を見た小雪が心配そうに尋ねる。それを聞いた義人は、深呼吸をしてから頷く。

「なんとか。さて、今のうちに家にいかないとな」

眠気と疲労で今にも倒れそうな体を動かし、義人は歩き出す。自宅までは徒歩で五分程度の距離だが、人目を避けながらのためその倍近く時間がかかるだろう。記憶の中の景色とほとんど変わっていないことを懐かしむ余裕もなく、義人は周囲に気を配りながら歩を進めていく。

そうやって歩くこと十分。義人は時折すれ違う人に怪訝そうな視線を向けられつつ、なんとか自宅の前までたどり着いた。

「……帰ってきた」

この世に生を受けて十七年。その大半を過ごした家屋を目の前にして、義人は小さく呟いた。

義人は無意識の内にポケットを漁るが、家の鍵は持っていない。そのため呼び鈴のボタンを押そうとして、不意に一枚の紙が貼ってあることに気付いた。

紙面を飾るのは、三枚の写真といくつかの文字。

「これは……」

『探しています』という言葉に、義人や優希、志信の顔写真と名前。おそらくは警察が作成したものなのだろう。紙の端に近くの警察署の電話番号が記載されている。

しばらくその紙を眺めた後、義人は玄関の呼び鈴のボタンを押した。そして、十秒ほど経ってから応答の声が響く。

『……はい。どちら様ですか？』

聞こえたのは、聞き覚えがある声だった。八ヶ月ほど聞いていなかった、自身の父親の声。

懐かしさよりも先に安心を感じながら、義人はゆっくりと口を開く。

「あの……俺……義人、だけど」

発した声は、大きく震えていた。

『……ッ！？』

驚くような絶句。そして、家の中から響く慌しい足音。その音が徐々に近づき、玄関の扉の鍵が開けられる音が響く。

「義人っ！？」

扉を開け、文字通り血相を変えて叫んだのは父親だった。その背後には、母の姿もある。驚きに目を見開き、口元に手を当て、言葉も出ない様子だった。

義人は両親の姿を見て、目を伏せる。

記憶にある両親の顔よりも、少し痩せたように見えた。それはきっと、自分達が姿を消したことが原因だろう。そこまで考え、しかし、義人はすぐに顔を上げた。

言いたい言葉はたくさんある。だが、それが中々口から出ようとしない。

目の裏が熱くなり、視界がぼやけてくるのを感じながら、それでも一番言いたかった言葉を口にする。

「――ただいま」

それは謝罪ではなく、帰宅を告げる言葉だった。

第百十六話：失踪その2

カグラが召喚の祭壇へと向かう一時間前。
サクラは義人の私室で一人ため息を吐いていた。
サクラの仕事は国王である義人の身の回りの世話をすることである。それに加えて護衛を務めるのだが、その役目と、護衛を務めるに足る実力を持つことを知る者は少ない。小柄な見た目と、時折起こすドジによって誤魔化されている者が大半だった。
政務に口を出すような権限はないが、義人が日々の生活を送る上で不自由のないようにするためならば大抵のことは“押し通す”権限も持っている。
義人の希望があればそれが最大限叶うように行動するが、今回義人達が姿を消したことに関しては全く不意打ちの出来事だった。
身の回りの世話をするということは、それだけ多くの時間を義人と接することになる。しかし、それでも毎日二十四時間張り付くというわけではない。カーリア国でも指折りの実力を持つサクラとて人間。食事も取れば睡眠も取る。
今回の“事件”についても、サクラは休憩を取っていたために詳細を知らない。
自身の代わりとして護衛を務めていた兵士達の話を聞く限りでは、『突然自室から出てきたと思ったら城の中を走り回り、召喚の祭壇の方へと飛び出していった。しかしすぐさま城内へと戻り、カグラの私室へ直行。少しの時間を置いて今度は優希の部屋へ向かい、入室後は一度も出てきていない』という、サクラでも首を傾げる内容だった。
優希の部屋に入って以降、義人の姿を見た者はいない。優希や小雪も同時に姿を消しており、もしや駆け落ちでもしたのではないかという噂も立っている。

「……ふぅ」

義人の部屋にて掃除をしていた手を止めて、サクラはため息を一つ吐いた。

現在アルフレッドや志信、探索に加わっていない文官や武官で今回の件について協議を行っているが、それによって解決策が出る可能性は低い。否、極めて低いだろう。

サクラの上司に当たる『召喚の巫女』のカグラは体調を崩しており、部屋で休んでいる。

昨晩義人との間に何かがあったようだが、とても話せるような状態ではなかった。今は多少落ち着いて眠っているはずであり、起きたら飲ませるようにとアルフレッドから薬も受け取っている。

あとで様子を見にいかなくちゃ、と内心で呟き、サクラは止めていた掃除を再開した。部屋の持ち主が姿を消している状態だが、いつ戻ってくるかわからない。そのため、掃除の手を抜くわけにはいかない……と考えたところで、不意にサクラの視界に映るものがあった。

「これは……」

机の上に置かれた、一冊の本。表紙も装飾もなく、不均等な厚みの紙を紐で綴じただけのシンプルな本だ。

机の上には政務が忙しい時に自室まで持ち込んだらしき筆や硯（すずり）、資料になりそうな本なども置かれている。それらは窓から差し込む日差しに照らされており、日差しが強い夏ならば数日で日焼けするだろう。

サクラは資料として図書室から持ち出した本かと当たりをつけ、僅かに苦笑を浮かべた。

「お日様に当たったままだと、本が傷みますね」

そう呟いて、机の上に置いてある本を手早くまとめる。そして傍にある小さい書棚に並べると、日差しが当たらないことを確認してから頷く。

「これで良し、と。あとは掃除を終わらせて、カグラ様の様子を見にいかないと……」

今後の行動について頭の中で予定を組み立てると、サクラは今度こそ掃除を再開した。

義人達が姿を消した件について、現状では何もできないと判断したアルフレッドは会議を一度中断することにした。国王が不在でも文官には政務があり、武官は国境の警備や各町村から届けられる魔物の討伐がある。

国王が姿を消したという大事を前にすれば、それらを数日放っておいても仕方ないかもしれない。しかし、実際に数日放っておけば国として痛手を受ける上に、他国の人間に何があったのか気付かれる可能性がある。もっとも、すでに兵の多くが捜索を行っており、それに加えてカーリア国の防諜技術の低さを考慮すれば、他国に現状が露見するまでに大して差はないのだが。

表情を厳しいものにした文官武官が会議室を後にしていく中で、財務大臣のロッサはアルフレッドのもとへと歩を進めた。

「……何も決まりませんでしたね」

「そうじゃのう……」

ロッサの言葉を聞いたアルフレッドは、顎に手を当てながら目を細める。

今のところ、捜索を行っている兵士から義人達を見つけたという報告はない。王都フォレスから抜け出すには城門を通るか城壁を乗り越える必要があるため、街の外に出た可能性は低いだろう。義人や小雪はともかく、優希が城壁を乗り越えれるとも思えない。しかし、目撃情報がない以上は王都の外にも目を向ける必要がある。

「城の中は隅々まで調べたしのう……どこへ姿を消したやら」

すぐに義人達が見つかれば良いが、宰相としては義人が見つからなかった場合のことも考えなくてはならない。

前王が亡くなってからの十年。なんとか国を運営してきたが、その五倍を乗り越えろと言われればアルフレッドでも頷けない。

――国王が姿を消したと知れば、ハクロア国辺りが喜んで手を出してくるじゃろうしの。

国王という頭がないとわかれば、他国が干渉してくる可能性がある。国際情勢の関係上、手を出してくるとすればハクロア国だろう。しかし、レンシア国が手を出してこないという保障もない。友好国とはいえ、第一に考えるのは自国のことだ。

レンシア国とハクロア国は争っており、カーリア国はその両国に接している。両国に接している面積で言えばレンシア国に接している部分が大半だが、ハクロア国と接していることに変わりはない。

ハクロア国は長年レンシア国と戦火を交えており、カーリア国を自国へ取り込むことができれば戦局が一気に変わる。

――最悪、レンシア国とハクロア国による奪い合いか……笑えんわい。

無論、まだそうなると決まったわけではない。今こうしている間にも、義人達が見つかる可能性もある。その場合は多少きつめに説教をすることになるが、安心して明日を迎えることができるだろう。

「アルフレッド様！」

その考えを否定するように、カグラが姿を現さなければ。

「なんじゃ、騒々しい。落ち着かんかカグラ」

突然会議室に姿を現したカグラに、アルフレッドは咎めるような言葉を投げかける。しかし、すぐさま違和感に覚えて口を開いた。

「お主、部屋で休んでいたのではなかったか？」

処方した薬をサクラに渡した後はずっと会議室にいたため、カグラの様子を見ていない。精々話を聞いた程度だが、元気に走り回れるような精神状態ではなかったはずだ。

もしや仮病だったかとありえない想像を働かせるアルフレッドだが、会議室に飛び込んできたカグラを見て、すぐさま考えを改める。

それは、血の気の引いたカグラの顔を見てそれどころではないと判断したためだ。

カグラは会議室の中を見回し、まだ数人の文官がいることを確認するともどかしげに口を開く。

「申し訳ありませんが、アルフレッド様とシノブ様以外は席を外してください」

命令というわけではなかったが、カグラの声色に何かを感じ取っ

たのだろう。ロッサを含め、文官達は慌てて会議室から退室していく。カグラはアルフレッドと志信以外の全員が会議室から出たことを確認すると、扉を閉めてから向き直った。

「何かわかったんだな？」

カグラが口を開くよりも早く、それまで沈黙していた志信が確信を持って尋ねる。その問いを受けたカグラは、唇を噛み締めながら頷いた。

「確証はありませんが」

「それでも良い。聞こう」

志信はカグラに先を促しつつ、姿勢を正す。アルフレッドもすでに聞く体勢に入っており、それを見たカグラはゆっくりを口を開いた。

「召喚の祭壇を確認したところ、昨日までにはなかった変化がありました」

「変化？」

「はい。祭壇の“中”に入るための扉が見つかりました」

「祭壇の、“中”じゃと？」

カグラの言葉に対し、志信とアルフレッドは交互に質問を投げかける。

「そうです。わたしも知りませんでしたが、召喚の祭壇の壁を開けて入ることができるようになっていました」

「もしや、ヨシト王達がその中にいたのか？」

「いえ、“中”を確認してみましたが、ヨシト様達はいらっしゃい

ませんでした。ですが、召喚に関すると思われる装置が見つかり……」

そこまで口にして、カグラは目を伏せた。しかし、『召喚の巫女』としての責務がそうさせたのだろう。表情を引き締め、言葉を紡ぐ。

「状況から考えて、召喚の魔法を使われたのだと思います……方法自体はわかりませんが」

そう言って俯くカグラを見ながら、志信は首を傾げる。

「召喚の魔法か……そんなことが可能なのは、小雪か？」

「魔力の量を考えるならばそうじゃのう。魔力の大きさに物を言わせて、無理矢理に発動したのやもしれん」

冷静に言葉を交わす志信とアルフレッド。それを聞いたカグラは、俯いた顔を上げると噛み付くように口を開いた。

「お二人とも、何故そんなに冷静なんですか!?　ヨシト様が“元の世界”に戻ったかもしれないんですよ!?」

国王（よしと）が元の世界に戻ったかもしれない。そう思うだけで、カグラは落ち着いていられなかった。しかし、それに対するように志信とアルフレッドの反応は薄い。

アルフレッドは長い時を生きて積んできた経験が冷静さを失わせず、それに加えて想定していた範疇の事態だったために。

「何故、と問われてもな……カグラ、お前は何か勘違いしていないか？」

そして、志信は冷静さを失う必要がなかったために。

「……え？」

「義人達が“元の世界”に戻った。それのどこがおかしい？」

カグラの言葉が一片も理解できないと、そう言わんばかりに志信は尋ねる。

「だ、だって……ヨシト様は、この国の国王で……」

その問いの鋭さに、カグラは常の口調を僅かに崩す。しかし、志信はそれに構わず言葉を口にした。

「その地位は、義人が望んで得たものではない。国王になるべく生まれたわけでもなければ、自分から望んで“こちらの世界”へ来たわけでもないはずだ」

会議の中では一言も口にしなかったのが嘘の様に、志信は言葉を放ち続ける。

「それでも、一人ずつでも“元の世界”に帰れると聞いたからこそ引き受けた。それだけのものに過ぎないだろう。長くて三年、その期間を過ぎれば全員が“元の世界”に帰れる……義人はそう考えていた」

その言葉に、カグラの瞳が大きく揺れる。昨晩義人と交わした会話が、自然とカグラの頭の中で再生された。

『長くても三年……そのくらいなら、珍しい経験だったって思いながら“元の世界”に戻れたかもしれないさ』

義人の言葉を思い返すと同時、カグラは言い様のない圧迫感を感じた。それは、胸が押し潰されるような強い圧迫感。意味も理由もないのに、涙腺が緩みそうになる。

表情が崩れ出したカグラだが、志信がそれに構うことはない。

冷静さはなくさないものの、それでもカグラの“勘違い”に対する憤りを隠すことはできなかった。

「義人や北城が“元の世界”に戻るのが早くなった。そのことは、俺にとっては何の問題でもない。むしろ喜ぶべきだな」

「しかし、ヨシト王がシノブ殿に何も言わずに“元の世界”に戻るじゃろうか？」

カグラと志信の雰囲気が張り詰めてきたのを和らげるためか、アルフレッドが口を挟む。

それを聞いたカグラは弾かれたように顔を上げ、アルフレッドの言葉に追随した。

「そ、そうですよ！　ヨシト様はそんな人じゃありません！」

最早考えることを放棄したのか、それとも事実を認めなくないだけなのか。カグラの発言には統一性がなくなりつつある。

志信はそんなカグラを見て、僅かに憐憫にも似た感情を覚えた。

自身の親友は、眼前の少女の中でどれほど大きな存在になっていたのか、と。

そう考えた志信は、それまで表に出ていた憤りを収めて僅かに語調を和らげる。

「カグラと同じく確証はないが、言う暇がなかったのではないか？」

「と、言うと？」

「義人にとっても予想外の事態が起きた。そうとしか考えられん」
「で、でも、もし本当に何も言おうとしなかったのなら……」
親の姿を見失った幼子のように、カグラは呟く。それを聞いた志信は、瞳に剣呑な色を宿らせた。少しだけ緩んでいた空気が、一瞬で鋭いものへと引き締まる。
「義人は、そんな人間ではない」
その一言に込められた感情は、信頼。僅かな疑問すら持たず、志信は断言する。
「言う暇がなかったか、言える状況ではなかったか……そのどちらかだろう。俺はほとんど部屋にいないからな。見つけられなかったのかもしれない」
「でもっ！」
「カグラ、そこまでにしておくんじゃ」
さらに言い募ろうとしたカグラを手で遮り、アルフレッドはため息を吐く。
「ここでこれ以上儂らが問答しても、解決はせんじゃろう。今はまず、目先のことを考えねばならんでな」
「それは、そうですが……」
納得はできずとも、現状を理解はできたのだろう。カグラは口を閉ざすと、手近にあった椅子へと腰を下ろす。それを見たアルフレッドは、困ったように苦笑した。
「こんな事態じゃ。儂らがしっかりしておかねば、国が傾く。それ

はわかるじゃろう？」
「……はい。お見苦しいところをお見せしました」
『召喚の巫女』はアルフレッドが務める宰相と同格の役職として扱われている。そのカグラが取り乱せば、その下で働く者達に余計な不安を与えることになる。
アルフレッドはカグラが落ち着いたのを確認してから、ゆっくりと口を開いた。
「ヨシト王がいつ戻るかわからぬ状況じゃ。数日ならばまだ問題も少ないが、さすがにそれ以上となると看過できん。何か対策をせねばのう」
「義人の代役を立ててみては？」
アルフレッドの言葉に、すぐさま志信が応じる。それを聞いたアルフレッドは、思慮深げな視線を志信へと向けた。
「代役とは？」
「国王代理……呼び方は何でも良いですが、今まで義人が行っていた仕事を肩代わりする者がいれば当面は大丈夫かと」
「ふむ……代役……代役か」
志信の提案を舌の上で転がしつつ、アルフレッドは思考に耽る。それが可能ならば、たしかに当面はしのぐことができるだろう。しかし、問題が一つある。
「王印を使えなければ、代役は務まらんじゃろう。そこはどうするつもりじゃ？」
カーリア国で使用されている王印は、国王以外は使うことができ

ない。その問題を乗り越えなければ代役は不可能となるが、志信は大して気に留めず返答した。

「アテがあります」
「……なんじゃと？」

驚きのこもったアルフレッドの視線を受けて、志信は椅子から立ち上がる。

「すぐに戻りますので、待っていてください」

それだけを告げて、志信は会議室から出て行く。
アルフレッドとカグラは互いに顔を見合わせ、首を傾げるのだった。

それから二十分もしないうちに、志信は会議室へと戻ってきた。右手には布に包まれた“何か”を握っており、志信の姿を見たアルフレッドが口を開く。

「どこに行っておったんじゃ？」
「城下町のローガス殿のところです」

そう言いつつ、志信は右手に持った“何か”を机の上に置く。そして中身がアルフレッドとカグラに見えるよう、布を取り払った。
アルフレッドとカグラは何が入っていたのかと覗き込み、すぐさま目を見開く。

「これは……」
「はい。王印の複製です」
それは、国王しか使えないものを他の人間が使えるようにと、義人がローガスに作成を依頼した王印の複製だった。
「義人はこの国を変えるための第一歩だと言っていました。それが何を指して、一体何を成そうとしていたのかはわかりません。しかし、これがあれば国王の代役も可能となる」
そう言いつつ、志信は傍にあった紙へ王印の複製を押し付ける。すると、義人が使っていたものとまったく同じ印が紙へと押印された。
「たしかに、これならば代役は可能じゃのう……」
その様子を見て、アルフレッドが納得したように頷く。
「……」
カグラは、無言のままで何も答えなかった。
義人が何故そんなものを作っていたのか。その理由を考え、思い当たった答えが、自身の気持ちを大きく裏切っていたために。
志信とアルフレッドの会話を聞きながらも、カグラの意識はそちらへと向いていない。
紙に捺された印を見つめながら、カグラは無言で立ち尽くすのだった。

第百十七話：説明

およそ八ヶ月振りに我が家へと帰宅した義人が最初に取った行動は、優希を客間に寝かせることだった。

さすがに帰宅してまで背負っているわけにもいかず、今まで何をやっていたのかと理由を聞いてくる両親をなだめながら布団を敷き、その上に優希を寝かせて毛布と掛け布団を被せる。そして優希の寝顔を覗き込んでみると、どこか不満そうな表情で寝息を立てていた。

優希の寝顔を見て、そろそろ起きるのだろうかと義人は首を傾げる。“こちらの世界”に戻ってから一度も目を覚ましていないが、義人の目から見ても特に異常は感じられなかった。

そんな義人の意思を汲み取ったのか、ノーレが落ち着いた声を発する。

『見たところ、魔力を消費して気を失ったようじゃな。時間が経てば自然と目を覚ますじゃろう』

「そうか……良かった。しかし、このまま俺も寝たいな……」

ノーレの言葉に安堵を感じると同時に、義人はまだしばらく叶わないであろう願望を口にする。気を張りながら夜を徹したために義人自身も強い眠気を感じていたが、このまま何も説明せずに眠るわけにもいかない。

義人は訝しげに自分を見てくる両親へと振り返ると、疲れたような笑みを浮かべた。

「とりあえず、朝飯食べさせてくれる？　昨晩から何も食ってないんだ」

「あ、ああ。それは構わないが……」

義人の父は頷くものの、それよりも聞きたいことがあると言わんばかりの表情である。それを見た義人は、頬を掻きながら口を開いた。

「一体何をやってたかって？　それは飯でも食べながら説明を……って、優希のところのおじさんとおばさんにも説明しないといけないか。朝飯を食べた後で一緒に説明するってことで駄目かな？」

空腹感が酷いため、義人としては先に腹を膨らませたい。欲を言えば風呂に入って一眠りもしたいのだが、さすがにそうはいかないだろう。

義人の様子を察したのか、義人の母は頬に手を当てながら小さく頷いた。

「お腹が空いているみたいだしねぇ……優希ちゃんのお家にも電話しないと。警察にも電話して捜索依頼を取り下げてもらわないといけないわね」

警察という単語を聞いた義人は、困ったように首を横に振る。

「警察に連絡するのは待ってほしいんだけど」

「え？　どうして？」

「どうしてって言われても……」

違う世界に行っていた、などと言えばそのまま救急車を呼ばれるかもしれない。それも都市伝説と言われる黄色い救急車がやってくるだろう。義人は僅かに悩んだものの、この場ではとりあえず理由を隠すことにした。

「その理由も含めてあとで説明するよ。だからまずは朝飯を……」

最後に食事を取ったのは十二時間以上前である。義人が猛抗議してくる腹の虫に辟易しながら催促すると、それを聞いた父は小さく首を振った。

「わかった、まずは朝食にしよう……と言いたいところだが、義人、一つだけ聞いておきたいことがあるんだが」

「ええ、そうね。わたしも最初に聞きたいことがあるわ」

「……なんでしょう？」

聞いておきたいことと言われ、義人は無意識の内に背筋を伸ばす。もっとも、義人には両親が尋ねるであろう質問の内容が予想できていたのだが。

「その、お前の腰にしがみついている子は一体……」

そう言って、義人の父は義人の腰にしがみつく小雪へと目を向ける。カーリア国とはまるで違う環境と、見知らぬ義人の両親に警戒しているらしく、小雪は義人の腰にしがみつきながら威嚇するように頬を膨らませていた。

そんな小雪の様子を見た義人の母は、膝を折って目線の高さを小雪と合わせながら口を開く。

「義人の小さい頃の面影があるわねぇ……あと、優希ちゃんにもそっくり」

「ハハハ、気のせい気のせい」

当然と言えば当然の指摘に、義人は笑って誤魔化す。しかし、義人とて自身の親が我が子の顔を見間違えるなどとは微塵も思っていなかったが。

「……義人、まさかお前……」

義人は父親から注がれる視線に多少の鋭さが含まれたことを悟り、それとなく視線を外す。どう考えても、いくら考えても両親を納得させるだけの説明ができる自信はない。

「あなた、お名前は？」

そうやって義人が僅かに現実から逃避している間に、義人の母が微笑みながら小雪へと話しかける。小雪はやや警戒をしながらも、義人と似た雰囲気を持つ女性に対して口を開いて見せた。

「……こゆき」

「あら、『こゆき』ちゃんって言うのね。いくつかしら？」

「んーっと……」

質問に対し、指折り数える小雪。何かを数えながら右手で三本指を折り、それを見た義人の母は驚いたように目を見開いた。

「三歳、かしら？　でも、それにしては少し大きいような……」

「……その辺のことも含めて、後で説明するよ。まずはご飯を食べさせてほしいんだけど」

話を切り替えるためにそう告げて、義人は内心でため息を吐く。

――――生まれて三ヶ月と少しなんて、信じてもえらえないよなぁ。

どうやって説明するべきか。義人はそれを考えながら、まずは腹ごしらえをするべくリビングへと向かう。

記憶の中のものと寸分違わぬ、自宅の廊下。それに妙な感慨を抱きながら、義人はリビングへと足を踏み入れる。

キッチンや食事をするためのテーブルが置かれたリビング……十二畳ほどの広さがあるため、正確にはリビングダイニングキッチンとでも言うべきだが、義人は特に気にせずリビングの中を見回した。

隅の方には多少大きめのテレビが置かれ、画面の中では女性のニュースキャスターが今日のニュースを読み上げている。それを見た小雪が警戒心をむき出しにするが、義人は苦笑しながらそれを止めた。

「小雪、それは気にしなくていいから」

「でも……」

「こっちの世界のことについては、親父達への説明が終わったら教えるさ。だから、それまでは大人しくしててな？」

義人は言い聞かせるように告げ、小雪の頭を軽く撫でる。小雪はそれでもテレビが気になったようだが、僅かに頬を膨らませたあとで義人の言葉に頷く。

「さて、それじゃあ朝ごはんを……」

そう言いつつ、義人はテーブルの上に目を向け――思わず、声を失った。

テーブルの上に置いてあったのは、食事中のものと思われる食器類。時刻は午前九時を僅かに過ぎたところなので、それ自体はおかしくはないだろう。茶碗に盛られたご飯が中途半端に減っているのは、義人の帰宅で慌てて食事を中断したためか。しかし、義人が声を失った理由はそこではない。

中途半端に食事が進んだ食卓。その中で、まったく手がつけられていないものがあった。

ご飯が盛られた茶碗に、お椀に注がれた味噌汁。それに加え、おかずとして置かれた焼き鮭や香の物。

それらが、まったくの手付かずの状態でテーブルの上に置かれていた。

義人の家族構成は、両親と義人の三人である。それ以外には兄弟姉妹がいるわけではない。それだというのに、両親以外の分の食事が用意されている。

突然いなくなった、義人の食事が。

「っ……」

不意に、義人の口から嗚咽が漏れかける。

八ヶ月ぶりに自宅へ帰り、両親の顔を見た時よりも強くこみ上げる感情。鼻の奥がツンとして、目の裏が急に熱くなってくる。

義人が今日この日に帰ってくるなど、両親は知らなかったはずだ。義人自身、帰ってこれるとは思っていなかった。しかし、そのはずなのに、食事が用意されている。

――それはきっと、義人がいつ帰ってきても良いように。

裏返せば、いつかは義人が帰ってきてくれるという、両親の願いだったのだろう。前触れもなく姿を消した我が子が帰ってくるという、親としての願い。

犯罪に巻き込まれたのかもしれない。

姿を消したのだから誘拐されたのかもしれない。

――心配しただろうか？

――悲しんだだろうか？

そこまで考えた義人は、頭が真っ白になった。

「……義人？　どうかしたのか？」

そんな義人の背に、父親の声が届く。義人を追ってきたのだろう。背を向けて震える義人に、心配を含んだ声をかけてくる。

大丈夫。

そう言おうとするものの、喉が震えて声が出ない。

「大丈夫か？」

そう言って肩に手をかけてくる父親に、義人の我慢は限界を超えた。涙を隠すように父親へとしがみ付き、嗚咽を漏らす。

人目を憚らずに泣くなど、幼い頃以来だ。しかし、それを情けないと思うことはなかった。義人は何も言わずに背中を叩いてくれる父親に、心中で感謝と謝罪の言葉を呟く。

それと同時に、義人は今まで無意識に張っていた緊張感が途切れるのを感じていた。

ひとしきり泣き終えた義人は、前言通り朝食を食べることにした。温かいものを言ってくる両親に首を横に振り、すでに冷めてしまった、あらかじめ義人のために作ってあった朝食を口にする。その隣では小雪が美味しそうに食事を口に運んでいた。

「ごちそうさまでした」

お腹が膨れたところで朝食を終了する義人。食べている途中で再び涙が出そうになったのは秘密だが、両親は見なかったことにしてくれていた。

そして食後のお茶を飲んでいると、リビングの扉が開いて両親以外の人間が二人入ってくる。

「おじさん、おばさん、お久しぶりです」

その二人……優希の両親の姿を見た義人は、背筋を正して頭を下げた。すると、優希の母親が柔和に微笑む。

「久しぶりね義人ちゃん。元気に戻ってきてくれて、おばさんも嬉しいわ。少し背が伸びたかしら？」

「どうですかね？　自分ではなんとも」

優希と同じ呼び方に苦笑を浮かべつつ、義人はそう答える。すると、優希の父親がゆっくりと口を開いた。

「それで義人君、君や優希のことなんだが……」

何故姿を消したのか。その問いを投げかけられ、義人は頷いてみせる。当然と言えば当然の疑問だ。そして、義人にはそれに答える義務がある。

「全部お話しします。この八ヶ月で、何があったのか」

義人の言葉に、義人の両親と優希の両親が頷く。

「まず最初に、今から俺がする話は全て真実です。現実のものと聞こえないものが多々ありますが……」

そう前置きして、義人は語り出す。ここ八ヶ月、異世界で過ごした話を。

「――――以上です」

伝えるべきことを伝え終え、義人は大きな息を吐く。自身の両親と優希の両親に対してここまで敬語を使って喋ることは今までになかったため、精神的にも疲れてしまった。時計を見れば、話を始めてから短針が一周している。

「異世界で王様を……」

「魔法に、魔物？」

説明を受けた大人達は、半信半疑の顔で首を傾げていた。

それは当然だろう。義人とて、いきなり異世界で王様をやっていたなどと聞かされれば信じ難い。しかし、義人はそれを納得させる方法を持っていた。

「信じられないと思いますし、それは当然だとも思います。だから、一つ証拠をお見せします」
「証拠？」
優希の母親が首を傾げる。それに対して、義人は頷きながら右手の人差し指を立てた。
「今から、俺が魔法を使います」
本当ならば小雪に変化を解いてもらったほうが納得できるのだろうが、魔物を知らない両親の反応が予想できない。そのため、義人は比較的納得できるだろう魔法を使うことにした。
「空を飛ぶのか？」
「親父……俺が箒にまたがって空を飛ぶとでも思うのか？」
その光景を想像して、義人は僅かに気が滅入る。どんなメルヘンだ、と。
義人は気を取り直して、魔法を使うべく精神を集中させる。“あちらの世界”と比べれば非常に魔法が使いにくいが、それでも使えないほどではない。そして、この場合は『強化』を使うよりも風の魔法を使ったほうが視覚的にもわかりやすいだろう。
割れないようにとプラスチック製のコップを手に取ると、それを離れた場所へと置く。そして、義人はコップ目掛けて弱めに調節した風の塊を撃ち出した。すると、風の塊が狙いを違わずコップを弾き飛ばす。
「……今のは？」
突然弾き飛ばされたコップを見て、優希の父親が眉を寄せながら

尋ねる。

「風を飛ばしたんです。って、そうか。もっと目に見える方法が良かったか……小雪、ちょっと指先に火を出してみてくれ」

「ちょっと？」

「うん、ちょっと」

義人がそう言うと、小雪が指先に火を灯らせた。もっとも、ちょっとと言った割には若干火が強かったが。

小雪が指先に灯らせた火の玉を見て、優希の母親が頬に手を当てる。

「あらあら……タネも仕掛けもないのよね？」

「もちろんです」

魔法を実演したためか、大人たちの表情から疑いの色が消えていく。義人がそのことに安堵しかけると、それを遮るように優希の父親が口を開いた。

「なるほど、義人君の話も……正直、信じ難いが嘘ではないとわかった。異世界とやらがあって、君がそこで国王をしていたという話も信じよう。警察に話しても信じてもらえないだろうし、友達の……藤倉君だったか。彼が未だに異世界にいる以上、いますぐ捜索依頼を取り下げられないというのもわかった」

優希の父親は、どこか気迫のようなものを滲ませながら話を続けていく。

「けれど、先ほどの話の中になかったことで一つ、義人君に聞きたいことがある」

「なんですか？」

これ以上重要なことが何かあっただろうかと内心で首を傾げる義人に、優希の父親は鋭く尋ねる。

「さっきから君の膝の上に乗っている、小さな頃の優希にそっくりな子について説明してもらえるかな？」

「え、ちょ、それですか？」

「ああ、それは父さんも聞きたかったぞ。あとで説明すると言いながら、結局説明してないしな」

優希の父親に続き、義人の父親も答えを促す。

すなわち、義人と優希両方の面影を持つ小雪が何者なのかと。

「それは、ですね……」

あとで説明をすると言いながら説明しなかったのは、説明がし難いからである。そして、どう説明しても墓穴を掘りそうだという予感もあった。主に、人生の墓場的な意味でだが。

言いあぐねる義人を見てどう思ったのか、優希の父親は視線を鋭いものへと変える。

「優希の父である私には言い難いことなのかね？　ことと場合によっては……」

「……よっては？」

優希の父親は、右手の親指で窓の外を指し示す。

「少し、表に出ようか？」

「その発言の時点で、俺がどう答えるか決め付けてますよね！？」

優希の父親から投げられた言葉に、義人はテーブルを叩きながら抗議をする。しかし、優希の父親はそれに取り合わない。それどころか、何故か遠くを見るように目を細めていた。

「義人君。私や母さんは、君のことを小さい頃から知っている。幼稚園に行きたくないと泣く優希の手を取ってくれたあの日から、すでに十年以上の付き合いだ。家に泊まりにきてくれたことも数え切れない。こう言っては何だが、君のことは息子のように思っているよ……将来も、優希が望むのならばとも思っていた」

「な、なんですか突然……」

脈絡なく過去のことを話し始めた優希の父親に対して、義人は戸惑いを見せる。そんな義人の隣では、義人の父親が『たしかに、こっちは優希ちゃんを娘のように思ってるしな』と頷いていた。

「しかし、だ」

戸惑う義人に構わず、優希の父親は言葉を続けていく。その瞳に見えるのは、怒りだろうか。義人は何故そんな目を向けられるのかわからず、無意識のうちに体を緊張させ、

「いくらなんでも、八ヶ月で五歳ぐらいの娘を連れて帰ってくるなんてどういう了見をしているんだね！？」

「まずは自分の発言がどれほどおかしいかを確認してください！いや、マジで！」

思わず、怒鳴るように突っ込みを入れてしまった。しかし、優希の父親にはそんな義人の言葉も届かなかったのか、追求の手を止めようとしない。

「それも含めて魔法じゃないのかね！？」
「違いますよ！？」

正確には、生後三ヶ月程度の小雪が魔法で化けているので半ば当たっている。もっとも、優希の父親が懸念している事態にはまったくと言って良いほどなっていない。

結局、義人が小雪の存在を説明して納得させるまでに、再び時計の長針が一周するほどの時間がかかるのだった。

第百十八話：国王代理

カーリア国の王都フォレスに午前七時を告げる鐘が鳴る。

年の瀬も迫るこの時期は、早朝だろうと城中、城下町を問わずに慌しい気配が辺りを満たしていた。もっとも、城中での慌しさと城下町での慌しさには大きな違いがあり、今年はそれが特に顕著になっている。

片や、新しい年を迎えるための準備に追われる城下の民。

今年も無事に過ごすことができたことに感謝しながら、新しい年の準備をする彼等の表情は明るい。

片や、国王の突然の失踪により浮き足立つ城中の文官武官。

民に悟られぬよう、兵士による秘密裏の捜索。城中、城下町、そして城壁の外を捜索する彼らの表情は暗い。失踪から二日目に当たるその日も、義人達が見つかったという報せは未だになかった。

義人達が“元の世界”に戻ったかもしれないという、カグラの報告を裏付けるように。

「はぁ……」

底冷えするような冷たさを感じさせる石造りの廊下を歩きつつ、現状を頭の中でまとめたカグラは無意識の内にため息を吐いていた。

吐いたため息が僅かに白く染まり、空中へと消えていく。カグラはどこか無気力な瞳でそれを追うが、それが無意味な行為だと悟ってすぐさま意識を切り替えた。

義人、優希、小雪。この三名が消えて二晩経つが、見つかったという報せはない。あるいは一人でも見つかれば話は変わるのだろうが、今のところ発見どころが手がかりの一つもなかった。

召喚の祭壇の“中”の様子を見た限り、召喚魔法を使ってどこかへ転移したと考えるのが妥当である。しかし、それが“元の世界”

なのか、それとも“この世界”のどこかなのかはまだ確証がない。もっとも、カグラ自身後者の可能性はほとんどないだろうと思ってはいたが。

アルフレッドが他国に現状を知られるのを防ぐために防諜の手を尽くしてはいるが、遠くないうちに知れ渡るだろう。

捜索を行う兵達には緘口令を敷いているが、人の口には戸を立てられないものだ。それならば兵達にも知らせなければ良いのだが、それでは捜索に割く人数が非常に限られる。

義人は政務のために城中の文官と毎日顔を合わせており、どう足掻いても不在に気付かれてしまう。それならば最初から打ち明け、それ以上の情報の拡散に協力してもらう方が良い。

カグラは現状に対してもう一度だけため息を吐くと、義人が使っていた執務室へと足を向けた。

昨日は義人達を捜索するための会議があり、高位の役職に就く文官武官の時間が多少潰れている。カグラも倒れてしまったため、昨日一日は休養に当てていた。そのため、政務が滞っている。

「……あら？」

そこでふと、カグラは足を止める。目的地である義人の執務室、その中で“何か”の気配を感じた。何か――まるで、人のような気配を。

「っ！？」

扉越しに感じた気配に、カグラは慌てて扉の取っ手をつかむ。

場所は義人の執務室――そう、“義人”の執務室だ。補佐としてカグラも使用しているが、基本的には義人専用の部屋である。もしかすると中にいるのがサクラの可能性もあるが、その時のカグラにはその可能性を考慮するだけの余裕はなかった。

「ヨシト様！？」

常ならばゆっくりと開ける扉も、この時は邪魔とばかりに勢い良く開ける。その勢いで僅かに扉が軋むが、カグラがそれを気に留めることはない。

もしかしたら、義人が帰ってきてくれたのかもしれない。そんな希望と願望を抑えつつ、カグラは義人がいつも使用している執務机へと目を向けた。

「……カグラか、早いな。何かあったのか？」

そんなカグラの言葉と視線に答えたのは義人――――ではなく、どこか疲れたような顔をした志信だった。いつも義人が使用していた椅子に座り、突然のカグラの入室に眉を寄せているものの驚いている様子はない。

「あ……れ……？」

実に不思議そうにカグラが首を傾げる。そんなカグラに対して、志信も首を傾げた。

「カグラ？　どうしたんだ？」

固まってしまったカグラに、志信が気遣わしげな声をかける。カグラはそんな志信の声で我に返ると、引きつったような笑みを浮かべた。

「い、いえ……なんでも、ありません。シノブ様こそ、何をしていらっしゃるんですか？」

期待と希望が一瞬で砕けたのを自覚しながらも、カグラはそれを取り繕って尋ねる。それを聞いた志信は、苦笑混じりに執務机の上に置かれた書類を手に取った。

「今日から国王代理だからな。少しでも仕事を理解しようと書類に目を通していた」

朝の訓練上がりだがな、と言い足して、志信は手元の書類に目を落とす。

「そう、でしたか……いえ、そうでしたね」

そんな志信の姿を見ながら、カグラは昨日のことを思い返した。

志信が持ってきた王印の複製を使用して国王の代理を立てる……その案が挙がった結果、国王代理として白羽の矢が立ったのは志信だった。

理由としては義人と同じ世界の人間であること、その一点に尽きる。

能力的にはカグラやアルフレッドの方が国王代理に向いており、志信本人もその旨を告げたが、それはアルフレッドによって却下された。

「ここで儂やカグラが国王代理になってみよ。ヨシト王達が突然消えたのではなく、“消された”と思う者が出かねんわい。現状、シ

ノブ殿が国王代理に就くのが最善じゃよ」

眉を寄せながらそう告げるアルフレッドの言葉に、志信は数秒の後に口を開く。

「『お姫様の殺人人形』などの魔法具を使って代役を立ててみては？」

「それも考えた……が、いくらヨシト王の姿に化けれても、能力を完全に真似ることはできん。精々、王印を自動で押すぐらいにしか役に立たんじゃろう」

「アルフレッド殿やカグラが許可を出した書類に判を押す。それで十分かと思いますが」

「する気はないが、儂やカグラが自身に都合の良い書類を許可したらどうするんじゃ？　すべてを決定できる部下に、王印を押すだけの国王。それでは儂やカグラが簒奪（さんだつ）したようなものじゃ。それに、人形が上に立つと聞いて臣下が納得するかのう」

顎鬚を撫でながらそう反論するアルフレッドに、志信は納得がいかないと首を横に振る。

「しかし、アルフレッド殿は前王が亡くなってからの十年間、国政を取り仕切っていたそうではないですか。ならば、問題はないのでは？」

「その結果、前財務大臣のエンブズのような人間が出てくる。それに、国王の決定が必要な重大事項は処理しておらん。じゃから、ヨシト王が召喚されてから最初の一ヶ月ほどは非常に苦労を強いたわけじゃ。早急に片付けてもらわねばならなかったからのう」

アルフレッドと志信が言い合う中で、カグラは発言することができない。何かを言うべきだとわかってはいるが、どうにも言葉が出

てこなかった。

「書類に目を通して王印を押すだけで良いのですか？」

「そうじゃな……できれば、ヨシト王と同じように政務をこなしてほしいのじゃが」

「それは無理でしょう。カグラに補佐をしてもらっても、義人と同じように政務ができるとは思えません。せめて数年の下地があれば別でしょうが……」

「できる限りでも良いんじゃ。カグラや儂だけではなく、他の文官も補佐をするからのう」

「……わかりました。では、義人が戻るまでは俺が代理を務めましょう」

そうやって、カグラが口を挟むことなく話は決まったのである。

曖昧に笑いながら、それでいてどこか無機質な視線を向けてくるカグラ。そんなカグラに内心首を傾げつつ、志信は机に積まれた書類に目を通そうとする。

国王代理とはいえ、手を抜ける役職ではない。志信もそれを理解していたからこそ、いつもの早朝訓練も早めに切り上げて義人が使っていた執務室に来た。

アルフレッドやカグラの補佐があるものの、それでも出来得る限り全力を尽くそうと考え、まずは義人が行っていた政務の内容を理解しようとしたわけである。

もっとも、机の上に詰まれた書類の山を見た時は少しばかり挫けそうになり、持ち前の精神力でそれをねじ伏せたのはささやかな余

談だ。
志信は一つ気合を入れると、臣下から上がってきていた書類に目を通し――いきなりと言うべきか、一枚目で大きな問題に直面した。

「……わからん」

それは、臣下の名前と顔と役職、それに加えて国内の地名や町村の名前、流通している物の名前や相場がわからないことである。
臣下で言えば主だった文官武官だけでも数十人。その下にも各々の部下や兵士が存在し、覚えるだけでも一苦労だろう。
国内の地名や町村の名前については数が多くないため覚えられそうだが、楽かどうかと問われれば首を横に振るしかない。
流通している物については、穀物や野菜、海辺で取れる魚介類、鉱物や民芸品など、多岐に渡って様々な物がある。それらの名前や特徴、現在の相場などが書かれている資料は一目見ても何が書いてあるのかわからないほどだ。他に覚えなければならないものと比べても情報量が多く、相場などは日々変動していく。
志信は他の書類にも目を通してみるのだが、そこに並ぶのは見知らぬ名前と専門的な用語で書かれた内容のみ。各町村からの陳情に、臣下からの陳情。中には魔物の討伐依頼などもあり、それに対する人員の編成と予算について見積もる必要があった。

「これは、困ったな……」

生来、志信は人の顔と名前を覚えるのが苦手だった。その辺りも人付き合いが苦手になる一因だったのだろうが、今は割愛する。
地名や物の名前は追々覚えていくことができるだろう。しかし、現状で全てを覚えることは到底不可能だ。当面はカグラやサクラに尋ねた方が手っ取り早く、間違いもない。

「まずは臣下の名前と顔、それと役職を覚えるべきか」

優先して覚えるものを口にするが、それだけで何日かかるかわからない。そのため、志信はすぐさまその考えを放棄した。少なくとも、残り少ない今年の内に覚えるのは不可能と思える。ならば、これもカグラやサクラに尋ねた方が無難だろう。

「カグラ、この者についてだが……」

未だに立ち尽くしていたカグラに、志信は書類を見せる。カグラはそんな志信の声に一度瞬きをすると、どこかゆっくりとした動きで書類を手に取った。

「財務官の一人ですね。この方が何か？」

「いや、どんな人物でどんな役職に就いているのかと思ってな。恥ずかしながら、面識がない。顔も覚えていないんだ」

武官の人間ならばある程度覚えているが、文官となるとほとんど覚えていない。志信がそのことを説明すると、それを聞いたカグラは僅かな苛立ちと共に口を開いた。

「……何故、文官の人間は覚えていないんですか？」

「何故、と言われてもな……接点もなかった」

志信は主に武官――ミーファやシアラ、グエン等と付き合いがある。他にも各部隊の隊長とは顔見知りであるし、部隊に所属する兵士達とも面識がある。その点で言えば、武官達に限るならば義人よりも縁が深いだろう。しかし、カグラが聞きたかったことはそんなことではない。

「ヨシト様は、文官武官も問わずに覚えていらっしゃいますよ？主だった役職に就いている方ならば、最初の数日で全員覚えられました。その後も……」

そこまで言ってカグラは空中に視線を向ける。そして何事かを考えるように沈黙し、数秒経ってから不意に笑顔を浮かべて口元を袖で隠した。

「ああ……そういうことだったんですね、ヨシト様。だから、暇があれば城の中を出歩いたり、食事の際は臣下が使う食堂に行ってたんですか……ふふふ、そうならそうと言ってくだされれば、わたしも咎めませんでしたのに……いえ、気付かなかったわたしが悪いのでしょうね」

「……カグラ？」

突然機嫌良く笑い始めたカグラに、志信は訝しげな視線を向ける。しかし、そんな志信に構わずカグラはくすくすと童女のように笑う。

「でも、ヨシト様も人が悪いですね……ええ、本当にひどい人……態度ではなく、口で示してくだされれば……」

「カグラ、どうした？」

楽しそうに笑っているところに口を出すのはどうかと思ったが、それでも志信は再度カグラへ声をかける。すると、カグラは笑うのを止めて志信へと視線を向けた。ただ、その視線、その瞳には、どこか暗い光が見える。

「どうもしません。ただ、ヨシト様について一つ知ることがあったというだけです。それでは、その財務官についてですが……」

志信の疑問を流し、書類を書いた文官について説明を始めるカグラ。そこに今まで機嫌良く笑っていた名残はなく、表情は仕事を行うための真剣なものしかない。

志信はそんなカグラの様子に再び内心で首を傾げたものの、説明を聞くために意識を傾けるのだった。

第百十九話：現代

“元の世界”へと戻ってきた翌日。

義人はおよそ八ヶ月ぶりとなる自室のベッドで布団に包まり、昨日からの疲労を睡眠によって癒していた。

自身の両親や優希の両親に対する説明もそこそこに、食事と入浴を済ませた後は布団に潜り込むと、徹夜で気を張っていた疲労からすぐに眠りに落ちた。そのため、あれこれと質問をしてくる小雪にろくに答えられていない状況である。

「ん……んー……朝、か」

そして気付けば日付が変わり、“あちらの世界”でいつも起きていた時間に目が覚めた。

義人は眠気の残る目を擦り、横になった状態で天井を見上げる。

視界に映るのは、真っ白な低い天井。跳躍しても手が届かないほどに天井が高くもなければ、華美な装飾もない。どこの家庭でも見ることができる、ごくありふれた普通の天井だった。

「……あ？」

ここ最近で見慣れたものではなく、生まれた頃から寝起きの度に飽きるほど見てきた光景。義人は寝起きで回転の悪い頭で思考を巡らせると、一気に覚醒して布団を跳ね除ける勢いで上体を起こす。

「俺の……部屋？」

周囲を見渡してみれば、確かに自分の部屋だった。何十畳もあるような西洋造りの部屋ではなく、物が置かれて少し狭苦しい、義人

が生まれ育った部屋である。
窓の外に視線を向けてみれば、まだ暗い。義人が部屋に置いてある目覚まし時計に目を向けると、時間は午前五時を少しばかり過ぎたところだった。
道理で暗いはずだと思う一方、もしや今までのことは夢だったのでは、などという考えが義人の中に浮かぶ。
ある日突然異世界に召喚されて、そこで一国の王様を務めることになった。
その世界では魔法や魔物などが存在し、現実との際に悩まされながら国の運営を行う。時には笑い、時には悩み、命を狙われたこともあった。他国の国王とも会談し、その娘である王女とダンスを踊ったこともある。
今までのことを軽く思い返した義人だが、その内容は現実のものではなく夢だったと思うほうが妥当だろう。
寝ていた布団をめくってみるが、小雪の姿もない。義人は額に手を当てると、深々とため息を吐いた。

「なんだ、夢だったのか」
『夢がどうしたんじゃ？』

今までのことが夢だったと思い込もうとした義人だが、それを否定するように声が飛んでくる。その聞き覚えがある声を聞いた義人は、もう一度ため息を吐いた。

「……いや、うん。わかってた。わかってたよ」

そう呟き、義人は声をかけてきたノーレへと目を向ける。すると、前日に適当に壁に立てかけたノーレが義人の目に映った。剣を置く場所がなかったため、クッションを下に敷いて壁に立てかけておいたのである。

夢であったことがあっさりと否定された義人は、一つ欠伸をしてからノーレに対して声をかけた。

「おはようノーレ。ところで小雪は？」

『コユキならば、お主が寝ている間にそこの扉から出ていったぞ』

「出ていったって、どこに？」

『さて、のう。この家から外には出ていないようじゃが』

ノーレの言葉を聞くと、義人はベッドから降りて背伸びをする。そしてタンスから適当に見繕って洋服を取り出すと、寝間着を脱いで着替え始めた。義人としても別に着替える必要もないのだが、いつもならば起きるとサクラが着替えを持ってきてくれたため、起きても寝間着でいることが落ち着かないのだ。

「それじゃあ、ちょっと小雪を探してくるよ」

着替えが終わると、義人はそれだけを言い残して部屋を出る。もっとも、探すと言っても義人の家はカーリア城のように広いわけでもない。義人は小雪がいそうな場所にあたりをつけると、二階にある自室から一階の居間へと足を向けた。

両親はまだ寝ており、家の中は静まり返っている。どんな時間でも見張りなどの人間が立っていたカーリア城と無意識のうちに比べ、義人は苦笑した。

「俺達がいきなり消えて、向こうはどうなってるんだろな……」

最初に思い浮かんだのは、義人にとって親友である志信。そして次にカグラやサクラ、アルフレッドなどの存在だ。

「まあ、アルフレッドがまとめてそうだな」

言葉と共に吐いた息が白く染まる。義人はそれを無感動に眺めながら、どうしたものかと首を捻った。

生まれ育った世界に戻ってこれたのは嬉しい。しかし、諸手を挙げて喜ぶことができない気持ちもあった。

「これで志信が一緒だったらなぁ」

そんな言葉を口にして、義人は寡黙ながらも頼りになる親友のことを考える。

小雪やノーレもこちらの世界に来ているが、そのあたりは許容範囲だ。だが、志信だけが“向こうの世界”に残っているというのが義人には引っかかる。

魔法や魔物の存在もだが、“向こうの世界”では戦争に巻き込まれる危険があった。幸いと言うべきか、カーリア国に戦禍は及んでいない。しかし、隣接する二つの国同士が争っており、今後その争いに巻き込まれる可能性がある。

志信ならば問題はないという気持ちと、志信だからこそと危険だという気持ちが義人にはあった。

冷静沈着で、自分よりも遥かに腕が立つ。義人が志信を評価するならばそんな評価をつけているだろう。多少人付き合いが苦手だが、義人が見ていた限り武官やその部下達と親交があり、評価も高い。

――だが、それだけである。

志信の立ち位置は、国王である義人の友人。それに加えて腕も立つため、ある程度の自由と権限が与えられていた。それだというのに、国王である義人が姿を消したのである。現状ではどういう扱いになっているのか、義人にはわからない。

腕は立つが、魔法が存在する“向こうの世界”では志信よりも強

い人間がいる。
学校の成績ならば義人よりも上だが、柔軟な思考は苦手だ。戦うことに関しては柔軟な一面を持っているが、政治を任された場合は杓子定規に対応する可能性が高い。

「俺の代わりに国王とかやらされてなければいいけど……カグラやアルフレッドがいるから、その点は大丈夫か」

そこまで考えると、義人は一度思考を打ち切る。そして到着した客間の扉に手をかけ、なるべく音を立てないようにゆっくりと開けた。

「……義人ちゃん？」

それと同時に、暗い部屋の中から声がかかる。その声を聞いた義人は、僅かな驚きを覚えながら口を開いた。

「……優希？」

お互い名前を呼び合う形になり、義人は戸惑いながらも部屋の電気をつける。すると、昨日客間の布団に寝かせた優希が上体を起こし、自身の膝を枕に眠っている小雪の髪を梳いている光景が義人の視界に映った。
義人の顔を見た優希は、柔らかく微笑む。

「おはよう、義人ちゃん」
「あ、ああ。おはよう」

挨拶を交し合う二人。優希は義人の挨拶に頷くと、今度は困ったように眉を寄せた。

「ところで、ここって義人ちゃんの家だよね？　なんでここにいるの？」
「なんでって……」
優希からの言葉に、今度は義人が眉を寄せた。
「覚えてないのか？　召喚の祭壇の“中”で話をしていたら、召喚の魔法が発動したんだ」
「……そうなの？」
要領を得ない優希の言葉に、義人は疑問を覚えながらも説明をしていく。
召喚の祭壇の“中”で会話をしていたこと。
その最中に黒い穴……召喚魔法と思われる現象が発生したこと。
目を覚ましたら山の中だったため、優希を背負って家まできたこと。
それらを話し、義人は優希の傍に腰を下ろす。
「本当に、覚えてないのか？」
義人が尋ねると、優希は目を閉じて記憶を辿る。しかし、すぐに首を横に振った。
「……うん。ごめんね、義人ちゃん」
「そうか……まあ、優希が無事に目を覚ましてくれたから良かった。おかしなところはないか？」
「えと、少し頭がボーっとするぐらい、かな？」
「もしかして、熱か？」

そう言いつつ、義人は優希の額に手を当てる。そして手に伝わる温度で熱を測るが、特に熱が高いようには感じなかった。

「熱じゃないみたいだ。寝過ぎたから頭がボーっとするんじゃないか？」

「寝過ぎたって……そうなのかな？」

「ああ。優希が眠り始めて一日以上……三十時間くらい経ってるからな。中々起きないから心配したよ」

そこまで口にした義人は、優希の両親に電話をするべく腰を上げる。電話をかけるには非常識な時間だが、優希が起きたと聞けばすぐに来るだろう。優希が小雪の髪を梳いているところを見た場合、優希の父がどんな行動を取るか少しばかり義人には不安だったが。

ちなみに、志信の家に対しては既に電話をかけてあったが、誰も出なかった。志信の祖父である源蔵は志信を一人前だと判断してからよく家を空けているため、義人としても頭が痛いところである。

とりあえず志信の家には一日一回は電話をかけるとして、義人は目先の問題である優希の家に電話をかけた。おそらくはまだ寝ているだろうと思った義人ではあるが、その予想を外すように五コールもしないうちに電話が取られる。

『はい、北城です』

「おはようございます、おじさん。義人です」

『義人君か？　君がこんな時間に電話をかけるということは……』

「はい。優希が起きま」

ガチャン、という音を立てて電話が切られた。一体何事かと義人が首を捻っていると、一分も経たずに家のチャイムが鳴らされる。

チャイムを鳴らすには非常識な時間だが、非常識な時間に電話をかけた義人は来訪者が誰か予想がつき、すぐに玄関の鍵を開けた。

すると、そこに立っていたのは義人が予想した通りに優希の父である。

「……走ってきたんですか？」

「はぁ、はぁ……もちろん、はぁ……娘が、目を覚ましたと……はぁ……聞いたら、ね」

義人と優希の家は、そこまで離れていない。走れば一分もかからないが、優希の父は全力疾走してきたのか、息も絶え絶えである。

「とりあえず、優希は客間にいるんで」

そう言って義人が促すと、優希の父は靴を脱いで客間へと突撃していく。義人はその背中を苦笑しながら見送ると、二階の方から人が降りてくる音を耳にしてそちらへと目を向けた。

「義人、どうかしたのか？」

寝起きらしく、眠そうな顔で聞いてくる自身の父に、義人は苦笑を浮かべながら答える。

「優希が起きたことを電話で伝えたら、おじさんが飛んできたんだ」

今頃は客間で感動の対面だろうか、などと義人は考え、とりあえず近所迷惑にならないよう玄関の扉を閉めるのだった。

優希の父親に三分ほど遅れてやってきた優希の母を加え、親子の再会が終わって一時間。優希の両親が来たことによって目を覚ました義人の両親も加え、いささか早い朝食が居間のテーブルに並べられていた。

「いやいや、本当に良かった」

そう言って、優希の父が笑う。その視線の先には優希の姿があり、視線を受けた優希は申し訳なさそうに頭を下げた。

「お父さん、心配かけてごめんね？」
「いいんだよ、優希。無事に帰ってきてくれたんだから、それ以上のことないさ」

娘と父親の会話を耳にしながら、義人は自分の膝の上に座ろうとしている小雪の両脇を抱え上げる。そして膝の上に乗せると、それが目に入ったのか義人の母がにこやかに笑った。

「あらあら、義人ったら。そうやってると、本当に小雪ちゃんのお父さんみたいね」

何が楽しいのか、うふふと笑う義人の母。すると、その言葉を聞いた小雪が首を傾げた。

「おとーさんはこゆきのおとーさんだよ？」
「そうなの？　じゃあ、優希ちゃんは？」
「おかーさんはこゆきのおかーさんだよ？」

無邪気に答える小雪と、それを聞いて眉の角度を吊り上げる優希の父。義人もしっかりと説明をしたのだが、心情的には納得できて

いないらしい。
どうしたものかと義人が考えていると、隣に座っていた優希が小雪の耳元に口を寄せて何事かを囁く。それを聞いた小雪は、首を傾げながらも無垢な瞳を優希の父へと向けた。

「おじーちゃん、どうしたの？」

『おじーちゃん』と呼ばれた優希の父の動きが止まる。そして、僅かに身を震わせながら口を開いた。

「……お爺ちゃん、だと？」
「あら、それじゃあわたしはお婆ちゃんかしら」

複雑そうな顔をする優希の父とは対照的に、優希の母は嬉しそうな顔をする。義人の両親は特に抵抗がないのか、暢気に互いを『お爺さん』、『お婆さん』と言い合って笑っていた。
小雪は義人の膝から下りると、不思議そうな顔をしながら優希の父親の元へと歩み寄る。

「おじーちゃん？」

下から見上げるように見てくる小雪。それを見た優希の父は、葛藤を一瞬で片付けると笑顔で答えた。

「どうしたんだい？」

優希の父がそう答えると、小雪も笑顔になってその膝の上に飛び乗る。優希の父は自分の娘の小さい頃にそっくりな少女を膝の上に乗せると、苦笑を浮かべた。

「嬉しいやら悲しいやら……優希、お前そっくりの娘だな」
「本当に、小さい頃の優希にそっくりねぇ」
「ああ、たしかに小さい頃の優希ちゃんに似てるな」
「でもうちの義人にも似てますよ」

息子や娘と一緒に戻ってきた孫らしき少女に、大人達は笑顔で話しかける。小雪も義人と優希の親だから安心しているのか、笑顔を浮かべてご機嫌の様子だった。
そんな両親達の姿を見ながら、義人は隣の椅子に座る優希へと視線を向ける。

「なあ、優希」
「なに？」
「俺達、帰ってきたんだな」
「……うん、そうだね」

義人の心情を察しているのか、優希は労わるように微笑んだ。

「お疲れ様、義人ちゃん」
「優希もな」

それだけを口にして、義人と優希は顔を見合わせる。そして示し合わせることもなく、互いに笑うのだった。
もちろん、義人としては志信のことを忘れたわけではない。だが、目の前の笑い合う両親達を前にすれば、帰ってきたのだという思いが強く実感できた。
義人は椅子の背に体重を預けると、気の向くままに天井を見上げる。

「これからどうするかな……」

義人は“元の世界”に戻ることだけを考えていたが、戻った場合のことを考えていなかった。一ヶ月ぐらいの失踪ならばまだどうにでもなっただろうが、義人達の場合は八ヶ月である。確実に留年の上、消えていた八ヶ月を説明することもできない。

異世界に行っていました、などと言えば医者にかかることを勧められるだろう。

「そう考えると、戻ってきてもまともな生活を送れない気がするな」

今のところ、こちらの世界に戻ってこれたことを知っているのは義人と優希の両親だけだ。しかし、義人達が戻ってきたことを周囲に知られれば喜んでマスコミなどが食いついてくるだろう。

長い間失踪していた学生が、剣と五歳ぐらいの子どもを連れて帰ってくるなど珍事もいいところだ。噛み付いたスッポンのようにしつこく、義人達の事情を考えようともせずに根掘り葉掘り調べる可能性もある。

そうなると、この八ヶ月のことを説明しても信用されない義人としては周囲の人間に知られるのも困りものだった。

「くそ……今の時代だったら、召喚された時点で詰んでるんじゃねえか」

“元の世界”に戻れても、以前のような生活は送れない。これが義人達よりもはるか昔に召喚された人間なら、まだ話は違っただろう。神隠しという現象が信じられていた時代もあるのだ。しかし、現代では人が一人消えただけでもそれを調べようと躍起になる。

義人が考え事に集中していると、それを妨げるように優希が義人の手を握った。

「大丈夫。どうにかなるよ」
「……そっか。そうだな、どうにかなるか」

優希の言葉を丸呑みして、義人は自分を落ち着けるように大きく息を吐く。

悪い方向にばかり考えていたが、もしかしたら良い方向に事態が転がるかもしれない。少なくとも、すぐさま事態が急変するということはないだろう。

まだまだ考える時間はあると自分に言い聞かせ、義人はもう一度だけ大きく息を吐くのだった。

第百二十話：国王代理その2

藤倉志信は目の前の事態に困惑していた。

四日ほど前まで義人が使っていたであろう執務用の机には臣下から提出された書類が小さな山をいくつか形成しているが、それ自体はまだどうでも良い。

国王の代理として政務を行い始めてから、書類の山が減るどころか増えているのもまだ良い。志信自身、まだ自分が政務に関わり始めたばかりで不慣れだと自覚している。片付けるよりも、新しい案件の書類が追加される方が早いのは仕方のないことだ。

早朝と深夜ぐらいしか体を動かすことができないが、それも百歩譲って問題がないとする。志信としてはもっと鍛錬をする時間が欲しいのだが、それが原因でこれ以上カーリア国の政務が滞るわけにもいかない。そのため、非常に窮屈な思いをしながらも政務に精を出していた。

しかし、そんないくつかの問題を超える問題が発生してしまったのである。

「何度でも言いますが、このぐらいの判断はできていただかないと困るんです！」

「……シノブは代理として国王を務めてまだ三日ぐらいしか経っていないから、政務で判断を求めるのは酷。それに、シノブはアルフレッド様やカグラ様が許可を出した書類に判を押すだけだったはず……です」

執務用の机を挟み、対峙する二人の人物。片や、『召喚の巫女』にして国王の補佐役であるカグラ。そして、もう片方は魔法隊の隊長であるシアラだった。

カグラとシアラは顔を突き合わせ、十分ほど前から延々と口論を

続けている。当初は互いに冷静に話し合っていたのだが、気付けば場の雰囲気は険悪なものへと変わっていた。同室にいる志信やサクラも両者を落ち着かせようとしたが、二人とも聞く耳を持たない。話の内容も当初話していたものから二転三転しており、志信としては頭の痛い限りだった。

「シアラ隊長？　今のシノブ様は国王代理です。呼び捨てにするのはいかがなものかと」

「……シノブが気にするなら改める。でも、シノブは気にしていない……です」

音が立ちそうなほどに視線をぶつけ合うカグラとシアラ。そんな二人を見て、とりあえず書類に王印を捺しながら志信は首を捻る。

「……どうしてこうなった？」

志信は本気で不思議がるのだった。

事の発端は、カグラとシアラによる言い合いが始まる二十分前。内心では辟易しながらも、志信が政務をこなしていた時のことだった。

「シノブ様、こちらの書類についてですが」

それまで自分の政務と併せて志信の政務も見ていたカグラが、不意に声を上げる。その手には志信が印を押した書類が握られており、

それを見た志信は首を傾げた。

「それがどうかしたのか？」

「この書類、きちんと内容を確認されましたか？」

そう言いつつ、カグラは手に持った書類を志信へと差し出す。それを受け取った志信は、内心で首を傾げながら紙面へと目を落とした。

「第一歩兵隊の魔物討伐に関する件か……これがどうかしたか？」

内容を読み取りながら、志信は魔物討伐という言葉に少しだけ心が動かされる。異世界での冒険という、年頃の少年が夢想するような話に心が動いた……などというわけはもちろんなく、単純に魔物を相手に戦ってみたいと思っただけだ。

そんな志信の内心など知るはずもなく、カグラは指先で机を叩きながらどこか不機嫌そうに口を開く。

「どうしたも何も、申請された予算が高すぎます。少なくすれば半分、多くても三分の二程度で足りるはずです」

「む……そうなのか？」

カグラの言葉に、志信はもう一度書類を最初から読み直す。

当然の話ではあるが、人を動かすには予算や対価が必要である。カーリア国は召喚国主制という他国に比べても特殊な形態の国ではあるが、その点について差があるわけではない。

人を雇うには金や物が必要であり、人が健康的に活動するには食事が必要であり、人が魔物と戦うには武器や防具がいる。しかも、兵士は基本的に消費するだけの存在だ。農民のように食料を生産するわけではなく、鍛冶師などのように武器を造れるわけでもない。

国内で出没する魔物を討伐するためには魔物が出る場所まで移動しなければならず、日帰りで帰れる場所だろうと食料や予備の武器が必要になる。

「これで多いのか……難しいな。では、少し減らすようにしよう」

志信が小さく呟くと、それを聞いたカグラが眉を寄せた。

「……それだけですか？」

「それだけ、とは？」

「その申請に対する処置は、申請された額を減らして受領する。それだけなのでしょうか？」

尋ね返した志信に、カグラは再度尋ねる。志信はその問いに対して、特に逡巡することなく頷いた。

「ああ」

「……そうですか」

明らかに気落ちしたように肩を落とすカグラ。カグラとしては、志信の回答は不満の残るものだった。

申請された内容を修正してそのまま受領する。もちろん、それも一つの答えだろう。しかし、志信はそれ以外の対応を取ろうとしていない。何故予算の額を多めに申請してきたのか、それを確認しようともしていなかった。

あらかじめ、志信にはアルフレッドやカグラが許可を出した書類に判を押すだけで良いと言ってある。だが、それでも書類に目を通す以上はおかしな点があれば何かしらの指摘がほしかった。

ふと、カグラは視線を宙に向けて思索に耽る。

人には向き不向きがあるが、志信は政務にかけては明らかに後者。

本人の技能的にも、前線で武器を振るう方が合っているだろう。カグラとて、それは理解している。だが、義人と同じく異なる世界から召喚した人間だ。カーリア国の形式上、国王の代役としてはこの上なかった。

「……誰だ？」

カグラが思考に沈んでいると、不意に志信が声を上げる。すると、その声に答えるように執務室の扉がノックされた。そして、サクラが応対に出ると魔法隊の隊長であるシアラが執務室へと入ってくる。

魔法隊の訓練が終わった後なのか、いつも着ている紺色のローブには僅かに泥がついており、いつも通りに無気力な瞳もどこか疲労が浮かんでいるように見えた。さすがに失礼だと考えたのか杖は手に持っておらず、三角帽も外して右手に持っている。

「シアラか。どうした？」

「……今日の訓練の報告にきた」

報告と聞いて志信は仕事の手を止めた。そして僅かに姿勢を正すと、シアラへと向き直る。

「聞こう」

「……ん」

シアラは小さく頷くと、今日一日行った訓練についての報告を行う。

報告と言っても怪我人の有無や現状の問題点について話す程度のため、五分もしないうちに報告は終了する。志信はシアラからの報告を聞き終えると、特に問題はないと判断して頷いた。

「その調子で訓練を頼む」
「……うん」

短いやり取りを行い、志信は手元の書類に視線を落とす。
報告は聞き、問題もない。シアラもすぐに退室するだろう。そんな考えを抱いた志信であるが、予想に反してシアラは退室しようとしない。シアラが動かないことに数秒経ってから気付いた志信は、すぐに気付かなかった自分自身の精神的な疲労を自覚しながら顔を上げた。

「まだ何か報告があるのか？」

志信がそう尋ねると、シアラは僅かに視線を逸らす。
何かを言いたいのか、それとも何も用はないのか。多少はわかるものの、未だにシアラの感情が完全に読み取れない志信は根気強くシアラが答えるのを待つ。
もっとも、志信としては仕事の手を止めているとカグラの視線が鋭くなるので、出来れば早めに答えてくれると嬉しかったが。
シアラは時間を追うごとに機嫌が悪くなりつつあるカグラの様子に気付いていないのか、空いた左手で紺色のローブを握り締め、逸らしていた視線を元に戻して志信を真っ直ぐに見つめて小さな口を開く。

「……シノブは、訓練に来ないの？」

その問いに、どんな意味が含まれていたのか。シアラの言葉を聞いた志信は、小さく苦笑した。

「実に魅力的な誘いだが、今は政務を少しでも覚えなくてはいけなくてな。代理とはいえ、ただ判を押すだけというわけにもいかん」

「……そう」

志信の返答に、ほんの少しだけ眉を寄せるシアラ。次いで、疑問らしき感情を顔に浮かべる。

「……でも、昨日より書類が増えてる気がする」

「……仕事の量に対して、俺の処理能力が追いついていなくてな。片付くのはいつになるか」

やれやれ、と志信には珍しく、ため息のような声を漏らす。すると、それを聞いたカグラが無表情で口を開いた。

「ヨシト様は、十年分近くあった仕事を一ヶ月で片付けられましたよ？」

それは、志信の発言に対する不満なのだろう。カグラは“一部”事実を捻じ曲げながら告げる。

十年分と言っても、ある程度はアルフレッドとカグラによって片付けられていた。現在執務机の上に乗っている書類の山が小指の先ほどにしか感じないほどの量があったが、量が多いだけで義人がした仕事は判を押す仕事がほとんどである。

中には文官や武官と協議をして解決しなければいけないものもあったが、そういった難易度の高い仕事については義人はカグラの補助を支えにして片付けていた。

一ヶ月。

言葉にすれば短い期間だが、義人も危うくカグラに物理的に眠らされそうになるほどに仕事漬けの日々だった。義人は仕事に熱中しやすいところがあったのか、それとも政務が性に合っていたのかはわからないが、何日も徹夜をしながら仕事を片付けるという荒行すら実行している。そのため、十年間で溜まっていた仕事を一ヶ月と

いう短期間で片付けていた。もっとも、実質的にはアルフレッドとカグラが片付けていたため、義人が行った仕事量はかなり少ないが、

「召喚当時の時か……すごい話だ。俺には真似できん」

椅子に座って大量の政務を片付けるなど、志信の性には合わない。大量の仕事をこなせば、徐々に義人のように政務に対する能力が磨かれる可能性や政務の面白さに気付くかもしれないが、現状の志信にはそんな未来は見えなかった。

カグラの話に対しても感心するだけの志信。その志信の様子に僅かな違和感を覚えながらも、カグラは志信に仕事を勧めようとする。まだまだ仕事は大量にあり、時間が経てば経つほど増えていくのだ。すると、そんなカグラの動きを察したのかシアラが口を開いた。

「……でも、休むことも大事だと思う」

ポツリと、シアラが呟く。そんなシアラの言葉に機先を制されたのか、カグラは言おうとした言葉を飲み込んだ。そして、一度だけ深呼吸をすると、珍しく食いついてくるシアラに視線を向けた。

「シアラ隊長、現状がどれほど大変な事態か理解されていますか？」

「……うん。王様がいなくなったから、大変」

「そうです。ヨシト様が突然姿を消し、カーリア国の国政が成り立たなくなりました。それを少しでも正常のものに戻すために、シノブ様には頑張っていただかないといけないのです」

少しずつ場の空気が張り詰めてきたのを察したのか、サクラが困ったようにカグラとシアラを交互に見る。しかし、両者ともそんなサクラの動きが目に入らないのか、互いに視線を合わせて言葉をぶつけ合うだけだ。

志信もタイミングを見て止めようとするのだが、話の内容が志信には理解できない、国の運営に関する深い部分へと入っているので口出しもできないのだった。

「……どうしたものか」

他の人間に聞こえない程度の声量で呟き、志信は額に手を当てる。およそ三十分が経過したものの、カグラとシアラの言い争いは未だに途切れることがなかった。

熱くなったカグラがシアラに言葉をぶつけ、シアラはそれを冷静に受け流す。そんなやり取りが続き、さすがの志信も精神的な疲労が重大なものになりつつあった。

こうなれば、アルフレッドを呼んで仲裁してもらうしかない。

志信がそう考え、サクラにアルフレッドを呼んできてもらおうと頼もうとした瞬間、場の空気を無視するかのように執務室の扉がノックされる。その音を聞いたカグラとシアラは舌戦を止めると、一体何だと言わんばかりに執務室の扉へと目を向けた。

「失礼します。本日の訓練の報告に……ん？」

扉を開け、執務室へと入室してきたのは第一魔法剣士隊の隊長であるミーファだった。ミーファは執務室に足を踏み入れたものの、場の空気……鋭い視線を向けてくるカグラやシアラ、明らかに安堵したように息を吐くサクラ、そしてどこか疲れたような表情をしている志信を見て、不思議そうに首を傾げた。

「何かありましたか？」

公私を弁えているためか、敬語でカグラへと尋ねるミーファ。互いに幼少の頃からの付き合いのため、顔を見れば何があったかは大抵わかる。しかし、カグラはそんなミーファから視線を外すと、自分を落ち着けるように息を吐き、一度頭を振ってから執務室の扉へと向かう。

「……すいません。少し、頭を冷やしてきます」

それだけを口にして、カグラは執務室から退室する。

そんなカグラの背を無言で見送り、志信達は顔を見合わせるのだった。

執務室を出たカグラは、ひとまず自室へと移動して深いため息を吐いた。すると、吐いた息は室温の低さですぐさま白く染まり、空中へと溶けていく。

カグラの顔に浮かぶ感情は、自己嫌悪。自分は一体何をしているのかと、再度ため息を吐く。最近、どうにも理性に歯止めが利かないことがあった。今までならば気にしなかったようなことでも、やたらと気にかかるのだ。

志信に当たって何かが変わるわけではない。シアラに噛み付いて、何かが変わるわけもない。そう自分に言い聞かせ、カグラは石造りの壁に背を預ける。すると、背中から氷に触れたような冷たさが伝わり、熱したカグラの思考が僅かに冷めた。

義人がいなくなってから早四日。年を越すまで、あと二日ほどし

かない。

新しい年に変われば、それに合わせて様々な仕事が飛び込んでくる。友好国に対しては新しい年を祝うための使者を出す必要もあるし、国内では新年を祝う各地の有力者達が謁見に訪れるだろう。カグラは国王の補佐として、それらに対応する必要がある。

志信を補佐して対応できるか。カグラはそう自問するが、答えは出ない。

もしも国王が代理の志信ではなく義人ならば、カグラは迷うことなくできると頷いただろう。この八ヶ月で、そう断言できるぐらいには義人の補佐に慣れた。しかし、志信の補佐をすることは容易ではない。

「……はぁ……どうすれば良いのでしょうか……」

ため息と愚痴を同時に吐き、カグラは背中を壁につけたまま力を抜いて絨毯の上へと座り込む。そして両膝を抱えると、膝に額を当てて目を閉じた。

厄介なことに、カグラが志信の補佐を難しいと思うのは志信の政治能力の低さが理由ではない。義人以外の人間を補佐するという、その一点だけで志信を補佐することを拒んでいた。

義人達を召喚した当時のカグラならば、そんなことは考えなかっただろう。その頃のカグラは召喚して国王になった者がどんな人間だろうと従い、補佐をしていくという自信があった。例えカグラが幼い頃に接していた前国王（ちちおや）のような人間が召喚されようと、何を思うでもなく補佐できるだろう、と。だが、召喚して国王の座についたのはおよそ真逆の人間だった。

カグラはゆっくりと顔を上げると、普段の姿が霞むような緩慢な動きで立ち上がり、部屋の隅に置かれた小物を入れるための棚へと近づく。そして壊れ物でも扱うよう手つきで小さな木箱を取り出すと、静かに開いて中を覗き込んだ。

木箱の中に入っていたのは、髪留めとしても使える落ち着いた色合いの手櫛（てぐし）だった。木を削り、磨いて造ったであろう手作りの一品。木の温かさが感じられる外見を眺め、カグラは視線を虚ろなものに変える。

召喚を行う前は、こんな贈り物をもらえるような人物を召喚できるとは思っていなかった。国王に相応しい人間が召喚されるという口伝があったが、前代や前々代の国王の人間性を考えると信じかねていたのである。

カグラは手櫛を手に取ると、適当に髪をまとめて留めた。そして、ふとレンシア国の城で一緒に踊ったことを思い返す。

「……ヨシト、様」

その時のことを脳裏に思い浮かべ、カグラは花咲くような笑みを浮かべる。

それは実に無邪気で、本当に嬉しそうな、薄暗い部屋の中で浮かべるには不釣合いな夢見る少女の笑顔。

ふふ、と小さく笑い声を上げ、カグラは手櫛を木箱へと戻す。

「さて、お仕事を片付けなくてはいけませんね」

カグラはそう呟いて機嫌良く部屋を出ると、軽い足取りで執務室へと向かうのだった。

“少女”が歪み出したことに気付いた者は、まだいない。

そして、歪みを直し、正すことができたはずの少年も、傍にはい

なかった。

第百二十一話：平穏

年末の昼下がり。すでに年越しに向けた大掃除も終え、師走と呼ぶには穏やかでゆったりとした時間。

そんな時間の中、義人は自分の部屋でじんわりとした温かさを伝えてくるコタツに足を入れ、テーブルの上に置かれたミカンへと手を伸ばしていた。黄色い皮を剥くと、適当に実を取って口へと放り込む。そして咀嚼しながらミカン特有の甘酸っぱさを味わうと、満足そうに目を細めた。

「ミカンうめぇ……」

至福の表情で呟き、さらにミカンを口へと放り込む。すると、コタツの対面に座っていた小雪がコタツを抜け出し、義人の膝の上へと移動して義人を見上げる。

「おとーさん、こゆきもたべたい！」
「そうか？　それじゃほら、あーん」
「あーん」

義人がミカンを差し出すと、小雪はそれに従って口を開く。そして口の中に入れられたミカンを噛み締めると、その甘酸っぱさに頬を緩めた。

「あまくておいしい……」
「だろ？　向こうの世界の果物にはない甘さだからな」

そう言いつつ、義人は次のミカンへと手を伸ばす。

つい最近まで義人がいた世界では、手に取ったミカンのように品

種改良が進んだ果物はなかった。ポポロなどのように甘い果物もあったが、それでも糖度はあまり高くない。

「このミカンを向こうに持っていけば、高く売れるんだけどなぁ」

ミカンの木の苗があれば、向こうの世界でも育てることができるだろう。

そうなった場合、栽培してミカンが生るまでにどれほどの期間がかかるか。また、どれくらいの量を栽培していくらの値で売るか。それに加えて販売する相手を定め、販売ルートを考える必要もある。そうなるとどれほどの利益が出て、それを何に利用するか……などと考えたところで、義人は思考を打ち切った。

今そんなことを考えても、何にもならない。ここは義人が生まれ育った世界であり、今は留年してしまったしがない学生。間違っても国王などではなく、両親に庇護される立場の人間だ。

「おとーさん、みかんはー？」

僅かに義人が考え込んでいると、膝の上に座った小雪が不思議そうな目をして見上げてくる。

「ん？　ああ、悪い。すぐに剥くよ」

「んー……こんどはこゆきがむく！」

そう言うなり小雪は義人の手からミカンを取り、真剣な表情でミカンの皮を剥き始めた。義人はそんな小雪の様子を見て、小さく苦笑する。

「気をつけないと、ミカンの皮から目が痛くなる汁が飛んでくるぞ？」

「え？　それなに……みゃぁっ！？」

義人が注意の言葉を向けるが既に時遅く、猫みたいな悲鳴を上げる小雪。それを聞いた義人は苦笑を深め、小雪からミカンを取ろうとした。

「ほら、俺が皮を剥くから」
「だめ！　こゆきがむくの！」

義人が伸ばした手を避け、小雪は目を擦りながら再度ミカンの皮を剥こうとする。しかし、力加減が難しいのか中々皮が剥けない。小雪の場合、力を入れすぎるとミカンどころかリンゴだろうと握り潰してしまえるため、細心の注意が必要だった。

「頑固だなぁ……誰に似たのやら」
『お主に似たんじゃろう、おとーさん？』

義人の独り言に対して、ノーレが茶々を入れる。それを聞いた義人は、眉を寄せながらノーレへと目を向けた。

「おとーさん言うな」
『どう見ても父親そのものじゃろうて。客観的に見ても、娘に甘えられている父親にしか見えんわい』
笑いを堪えるように、ノーレが声を投げかける。
「いや、そんなことはないだろ」

ないない、と首を横に振る義人。すると、そんな義人に対してミカンを剥き終えたらしい小雪が満面の笑顔を向けた。

「おとーさん、みかんむけた！」

「お、上手に剥けたなー」
「うん！　はい、あーん」
笑顔で差し出されるミカンを前に、義人は何の躊躇もなく口を開く。だが、そこでふと我に返った。
――あれ？　俺、ノーレの言ってること否定できなくないか？
差し出されたミカンを口に入れ、甘酸っぱさを噛み締めながらそんなことを内心で呟く。
どう見ても、どう考えても幼い娘に構う父親そのものである。親の後ろに馬鹿という文字をつけて、親馬鹿と呼んでも良いかもしれない。
――いやいや、待つんだ俺。いつからこうなった？　というか、どうしてこうなった？
いつの間にか小雪が娘のように接してくるのを受け入れていたことに気付き、義人は愕然とする。
育ての親であることには間違いない。その点で言えば、小雪を娘と思うことは間違っていないだろう。
「でも、未婚の父ってどうなんだろうか……それどころか、恋人もいないし」
そんなことを口にして、義人は自分でダメージを受ける。思わず

頭を抱えたくなった義人ではあるが、そんな義人の行動を遮るように義人の部屋の扉がノックされた。

「ん？　どうぞ？」

「義人ちゃん、お邪魔するね」

義人の言葉に対して、そう告げながら部屋に入ってきたのは優希だった。すると、優希の姿を見た小雪が表情を輝かせて立ち上がり、飛びつくようにしてしがみつく。

「おかーさん！」

「どうしたの？」

「みかん！」

小雪は単語一つで会話を終わらせると、皮を剥いたミカンを差し出す。差し出されたミカンを見た優希は、首を傾げながらも差し出されたミカンを口にした。

優希は目を覚まして以来、寝る時などは自宅に帰っているものの、それ以外は大抵義人の家で過ごしている状態である。優希の父はあまり良い顔をしなかったものの、小雪が義人と優希の傍にいたいと“お願い”をしたらあっさりと折れてしまった。

優希はミカンを食べながら小雪を抱きかかえると、義人の対面へと座ってコタツに足を入れ、膝の上に小雪を座らせる。小雪は優希の膝の上に座れたことが嬉しいのか、満面の笑みを浮かべた。

義人はそんな優希と小雪の様子を眺め、先ほどまで考えていたことを頭の中から追い出す。そして、真剣な表情を浮かべて壁に立てかけたノーレへと視線を向けた。

「さて、生活もだいぶ落ち着いてきたし、そろそろ状況の整理をしたいな」

『そうじゃな……妾としても、異存はない』

義人の言葉に肯定を返し、ノーレは意識を優希と小雪に向ける。

『お主らも良いな？』

「うん」

優希が頷くと、小雪もそれを真似るかのように頷く。それを確認したノーレは一拍の間を置き、この場にいる全員へと話しかける。

『まずはこの世界についてじゃが、妾としては気になる点がいくつかある』

「気になる点？」

『うむ。まずは、魔法……いや、魔力についてじゃ。ここ数日、“こちらの世界”で過ごしてみたが、“向こうの世界”と“こちらの世界”では魔力の質がかなり違うようじゃ』

「しつが、ちがう？」

小雪がノーレの話す内容を復唱し、首を傾げた。そんな小雪を見ながら、義人も僅かに首を傾げる。

「質が違うって言われてもな。いまいち話が見えないんだけど」

『むぅ……例えばじゃ、ヨシト。お主が“こちらの世界”で魔法を使おうとした時、何か思うことはないか？』

「思うことっていうと、魔法が使いにくいとかでいいのか？」

特に深く考えず、義人は思いついたままに答えた。すると、その答えを聞いたノーレは満足そうな声を漏らす。

『そうじゃ。“こちらの世界”では非常に魔法が使いにくい。ヨシ

トのように魔法に不慣れな人間ならともかく、妾でさえ魔法が使いにくいと感じるのじゃ。高い魔力を持つコユキでもそうじゃろう？』

話が振られたことを理解したのか、優希の膝の上に座った小雪は何かを考えるような顔をしながら頷く。

「うん。こゆきもまほうがつかいにくい」

“こちらの世界”に来てから何度か魔法を使った時のことを思い出したのだろう。小雪は少し不機嫌そうにノーレの言葉を肯定した。

『つまり、“こちらの世界”では魔法の腕の良し悪しや魔力量の大小に関係せず、魔法が使いにくいのじゃ』

「……えーっと、なんで？」

ノーレの断言に対して、優希が不思議そうな顔をしながら挙手する。すると、ノーレも興が乗ってきたのかどこか楽しそうな口調で話を続けた。

『ヨシトは以前巫女から聞いたじゃろうが、魔力と言うのは“世界に干渉する力”じゃ。魔力を使って火を熾したり、氷を生み出したりすることができる。しかし、それはヨシト達の常識からすれば自然のものではないじゃろう？』

「そりゃそうだ。“こちらの世界”じゃ、人間が道具を何も使わずに火を熾したり氷を作ったりはできないよ。というか、魔法自体が実在してるかわからないし」

違う世界には存在していたため、確実に実在していないとは言えない。義人も自分が知らないだけで、もしかするとこの世界にも魔法という不可思議な現象が存在しているかもしれないのだ。

今より遥か昔。平安時代などでは、当たり前のように妖怪や幽霊の存在が信じられていた。しかし、現代ではそんな話を持ち出せば笑い飛ばされるか馬鹿にされるか、あるいは正気を疑われるかのどれかだろう。だが、“こちらの世界”でも魔法を使うことはできたのだ。ならば、“あちらの世界”で言うところの魔物や、妖怪や幽霊が存在し、義人達以外にも魔法やそれに似た力を使える人間が存在しているかもしれない。

「でも、そう考えると陰陽師って本当に魔法みたいなことをできたのかもなー」

『なんじゃ？』

「いや、こっちの話。それで、ノーレの話を続きは？」

脱線しかけた思考を戻し、義人はノーレに話の続きを促す。ノーレはそんな義人の対応に僅かな不満を抱くものの、すぐに忘れて話の続きをすることにした。

『簡潔に言うならば、“こちらの世界”は魔力によって世界に干渉することが難しいようじゃ。だから、魔法を使う場合には多くの魔力を消費する』

確信があるのか、それともまだ推測の段階なのか。義人はノーレの言葉を聞きながら情報を整理すると、何かに思いついたように口を開く。

「つまり、“こちらの世界”は魔法という超常現象を使えるようにはできてないってことか？」

『いや、それだと魔法自体が使えんじゃろう。おそらくは、“こちらの世界”にも魔法のようなものが存在しているのだと思うんじゃが……』

後半になるにつれて自信がなさそうなノーレではあるが、その内容自体は今しがた義人が考えていたことと似ている。
義人はノーレの話を頭の中でまとめると、顎に右手を当てながら視線を宙に飛ばす。

「そう言えば、魔法を使う時に普段の十倍ぐらい魔力を消費してるって言ったな……ということは、俺は“向こうの世界”の普通の魔法使いぐらいしか魔法が使えないってことになるのか」
『魔力の消費量を考えるとそうなるのう。コユキでも、メイドと同じぐらいしか魔法が使えんと考えるべきじゃ』

魔力量自体は変わっていないが、消費量が増えたため魔法の使用回数も減ってしまう。義人は今までに体得した魔法の技術と自身の魔力量を考え、困ったように眉を寄せた。

「一度に使う魔力の量も増えたし、魔法の制御が難しいな。“向こうの世界”だったら『強化』を使う必要はなかったけど、“こちらの世界”だと『強化』を自力で使わないといけないし」

“こちらの世界”に戻って以来、何故か義人も“向こうの世界”に行く前の身体能力しかない。義人も運動神経には自信がある方だが、それでも『強化』らしき効果が働いていた頃には到底敵わないのだ。

「でも、“こちらの世界”で魔法を使う機会ってあまりないんじゃないかな？」

主に義人とノーレが意見を交わしていると、控えめに優希が疑問を挟む。

『そうなのか？』

「そうだなぁ……“こちらの世界”だと魔法の存在を信じていない人間がほとんどだし、もしも人目のあるところで目立つ魔法を使ったら、次の日からは表を歩けないことになるかもな」

もしも魔法を使っているところを他人に見られれば、大きな騒ぎになるだろう。警察に通報され、危険だからと逮捕される可能性もある。

そんな有り得るかもしれない未来を想像し、義人は内心でため息を吐いた。

警察に通報されるだけならば、まだ誤魔化しが利くため百歩譲って問題はない。しかし、人間は自分で理解できないものや認められないものに対しては酷く攻撃的になることもある。警察に通報などではなく、直接的もしくは間接的に手を出してくることすら考慮しなければならない。

この場合に手を出される対象は己の身であり、家族の可能性もある。

「あー、面倒くさい。“こちらの世界”に戻って万事解決。ハッピーエンドだ、なんてのは虫の良すぎる話か」

そもそも、志信が一緒に戻っていないためハッピーですらない。

義人はテーブルに突っ伏すと、億劫そうに右手を挙げて三本の指を立てて見せた。

「魔法は使わなければ良いとして、今後の展望は三つに分かれそうだな」

義人の表情を見た小雪がミカンを食べる手を止め、首を傾げる。

「みっつ？」
「そう。一つは“こちらの世界”で生活しつつ、志信がカグラの手を借りて“こちらの世界”に戻ってくるのを待つ。一つは志信のことも“向こうの世界”のことも忘れて元の生活に戻る。そして最後に……」
薬指、中指と順に折り、最後に人差し指だけを残して義人は言葉を紡ぐ。
「どうにかやって“向こうの世界”に戻る、と。俺としては最初の案が実現してくれると嬉しいね。まあ、その場合は小雪やノーレの扱いをどうするかも決めなきゃいけないけど」
そう言って、義人は最初の案が実現する可能性を考える。そして、すぐに首を横に振った。
――それはあり得ない、か。
何の理由があって志信を“こちらの世界”へ戻すというのか。その理由が一片たりとも存在しない。
召喚する際には召喚者が魔力を消費する。この場合は召喚の魔法が使えるカグラ……一般の魔法使い百人分以上の魔力を持つ彼女でも、召喚を行えば魔力が底をついてしまう。そしてそれ以上に、五十年ごとにしか“こちらの世界”へと繋がる“穴”が開かないのだ。それではどう足掻いても志信は“こちらの世界”へと戻れない。
けれど、と義人は思考に沈みながら思う。それならば、何故自分達は“こちらの世界”に戻ることができたのか。それが義人にはわからない。

召喚について記された本の内容が嘘だったのか。
しかし、わざわざ嘘を書く必要性が義人には思いつかない。何かしらの意図があったのだとしても、それは何百年も昔の、本を書いた者にしかわからないだろう。

「そうなると……」

義人は優希と小雪に視線を向ける。あの夜、あの場にいたのは義人と優希、それと小雪の三人だ。ノーレを含めれば四人としても良い。だが、義人は何もしていない。ノーレも何か強い魔法を使うためには義人の魔力が必要となるが、義人が自覚できるほどに魔力が減っているわけでもない。そうなると、必然的に答えが限定される。

「なあ、優希。それと小雪」
「なに？」
「んー？」

優希か小雪、もしくはその両方が原因だろう。義人に名前を呼ばれた優希と小雪は首を傾げ、不思議そうな顔をする。

「“こちらの世界”に戻ってきた理由はわからないか？　魔法を使ってみたとか……」

そう言いつつ、義人は可能性の低さに気付く。
優希は膨大な魔力があっても魔法が使えず、小雪は魔法が使えても細かい調節ができない。そして、そんな義人の考えを肯定するように優希と小雪は首を横に振った。

「わたし、どうやったら魔法が使えるかわからないよ？」
「こゆきはきづいたらこっちのせかいにきてたよ」

「……だよな」

二人の答えを聞き、義人は疲れたようにため息を吐く。何かしらの原因があるからこそ“こちらの世界”に帰れたのだ。その原因が魔法に関することだと義人は当たりをつけている。しかし、そこから先が出てこない。

あー、と気の抜けた声を漏らす義人。すると、そんな義人を見かねたのかノーレが優希へと意識を向ける。

『……のう、ユキ。お主は本当に魔法が使えないんじゃな？』

「うん。どうやって使えば良いかもわからないよ」

『それは、本当にか？』

「ノーレ？　本当って言うのはどういうことだ？」

疑うような声を出したノーレに、義人が僅かに目を細めながら尋ねた。ノーレはそんな義人の視線を受けると、確信のこもらない声で答える。

『あの時の状況を考えるに、魔法を使ったのはユキだと思うのじゃが……』

「優希が？」

『うむ。“こちらの世界”へ来て魔力が底をついていたのも、それが原因ではないのか？』

ノーレの言葉を聞いた義人は、再度優希へと視線を向けた。しかし、優希は困ったように首を傾げるだけである。

「そう言われても、本当に思い当たる節がないんだけど……」

「だよなぁ。それに、優希が嘘をつく理由も意味もない。魔力がなくなってたのも、何か他の原因があるんじゃないのか？」

『他の原因か……すぐさま思いつくものはないのう』

現状“まとも”に魔法が使える義人とノーレが頭を捻るが、答えの欠片すら出ない。膨大な魔力で強引に魔法を使っている小雪は、義人達の話の内容に飽きたのか再びミカンを食べることに集中し始めた。そんな小雪を眺めつつ、義人は内心で舌打ちする。

――こんなことになるのなら、あの『本』を持っておくべきだったな。

激情に駆られ、召喚に関する『本』はカーリア城の自室へ放り出してきてしまった。そのことを後悔しつつ、義人は小雪が時折差し出してくるミカンを口へと放り込む。

「本当、どうするかねぇ……」

そこまで焦ることでもないか、と自分に言い聞かせ、義人は思考を打ち切った。折角“こちらの世界”へ戻ってくることができ、その上新しい年も目前に迫っている。

政務に追われることもなく、のんびりと休むなど“向こうの世界”では中々なかったことだ。

――少し休むぐらい、良いよな。向こうも、カグラやアルフレッドが何とかしてるだろ。

“こちらの世界”へと戻ってきて以来、徐々に染み込み始めた楽

観と緩み始めた緊張感が義人をそう思考させる。考えるべきこと、やらなければならないことを後回しにすればどうなるか、散々学んだというのに。

平和な世界（にちじょう）へ戻れたことで、そのことを義人は忘れていた。それほどに“こちらの世界”は平和で、居心地が良すぎる。

故に、この時の義人は“向こうの世界”がどうなっているかを軽く考えていた。

カーリア国が非常に危ういバランスの上に成り立っていることを、軽く考えていたのである。

第百二十二話：新年

肌を刺すような冷たい空気が満ち、その冷たさに合わせたかのような静寂に包まれたカーリア城の謁見の間。その場に集まった文官武官は無言で互いに目配せを交し合い、一言一句たりとも口にしない。

今日は元旦。新年の初日である。

本来ならば、この日は静寂とは縁遠いめでたい日。大晦日を超え、新しく迎えた一年を祝うための日である。

カーリア国では数少ない、国の祝日だ。今日ばかりは王も臣も民も仕事を忘れ、新たな年を祝う。その証拠と言うべきか、城下町からは祭囃子の音色が響き、カーリア城へもその音色を僅かに届けている。旅の楽師でもいたのか、遠くから聞こえてくる音色は音楽の造詣が深くない志信でも一流のものだとわかる腕前だった。

冬の冷気によって冷たくなった石造りの壁に背を預け、志信は場の空気を読み取るように周囲へ視線を向ける。

謁見の間に集まった者達の顔は、端的に言えば暗い。全員がというわけではないが、ほとんどの人間が現状に対して危機感を覚えているのか、表情を暗いものへと変えていた。

一通り見回すと、志信は静かに息を吐く。

――――国の柱となるべき国王が不在……暗くもなるか。

国王（よしと）が姿を消し、すでに一週間近くが経過している。優希や小雪の姿も見つからず、噂すらも聞こえない。そんな状況では、例え新年を迎えようとも笑顔になれるはずもなかった。

場の空気を十二分に察しているのか、宰相であるアルフレッドが

苦々しい表情を浮かべる。

去年――否、過去十年に遡って、国王が不在で新年を迎えたことはあった。しかし、それは新しい王を召喚するまでのカウントダウンと等しい。故に、新しい国王を迎えるための準備を怠るなと言い含めれば、ある程度は臣下達を抑えることができた。だが、召喚した国王はこの場にいない。

カグラの弁に間違いがないならば、義人達は“元の世界”へと戻ってしまった。それならばいくら探しても見つからず、義人達が見つからないのは“元の世界”へ戻った証拠と成り得るのかもしれない。

この場に集まった文官武官達も、ある程度事態を知っている。そして、もしも本当に義人達が“元の世界”へと戻ったのなら、カーリア国は再び国王を失ったと言えるだろう。志信が国王代理を務めているが、それはあくまで代理。『召喚の巫女』であるカグラが召喚した義人についてきた、いわばおまけの存在だ。

それを証明するように、志信は王座に座っていない。王座近くの壁に背を預け、両腕を組んでこの場の空気を、この場に集まった人間を観察している。

「皆の者」

そうやって場が沈黙して十分少々。

頃合いを見計らったのか、それとも場の沈黙を嫌ったのか、アルフレッドがこの場の全員へと声をかける。国王を除けば『召喚の巫女』であるカグラと並び、最上位の役職に就くアルフレッドの一声だ。場の全員がアルフレッドに視線を向け、その視線を受けたアルフレッドは鷹揚に頷く。

「本日は祝日。仕事を忘れ、しっかりと休むように」

短い言葉。その言葉を聞いた者達は、力なく頷くことで返答した。
そんな光景を見ながらも、志信は何も言わない。志信は国王ではなく、本来この国の人間でもない。この世界の人間ですらない。そのため、この場に集まった人間の間に漂う、僅かに不穏な空気にも口を出さない。

「……」

正確には、どう口に出せば良いかがわからなかった。
義人達の姿が消えて、まだそれほど日数は経っていない。だというのに、城中の空気は少しおかしくなってきていた。
空気が悪くなっている原因としては義人達の失踪だけに限らず、様々な理由がある。
例えば、国王が不在だというのに近隣の国同士が争っていること。
例えば、国王の代理が立てられてから陳情が通りにくくなったこと。
例えば、文官と武官の間に溝ができつつあること。
他にも細々（こまごま）とした、様々な理由が存在する。その一端に関係する志信ではあるが、本人としては思い当たる節がない。義人の代役として、己にできることをやっている。義人と同じようにはいかないが、それでも代役としてできる限りのことはしていた。
今日も、この後は執務室にこもって政務を片付けるつもりである。未だに昨年の仕事が片付いておらず、いくら新年といっても休めば今以上に政務が滞ってしまう。

「それでは、解散じゃ」

いつの間にか話を終えていたアルフレッドの言葉を最後に、志信は執務室へと向かうのだった。

国王の生活面での世話役兼護衛であるサクラは、新年早々から頭が痛くなる問題に直面していた。

眼前で椅子に座る上司……カグラに対して一度だけ視線を向けると、内心で生じる複雑な思いを噛み殺し、戸惑うように口を開く。

「あの、カグラ様……」

「どうかしましたか？」

サクラの言葉に反応したカグラは、どこか優しさすら感じさせる穏やかな表情をしていた。サクラはそんなカグラの様子に底知れぬ不安を覚えつつ、首を横に振る。

「……いえ、何でもありません」

サクラがカグラの部屋へと訪れた理由は、単に新年の挨拶をするためだった。その挨拶も滞ることもなく終わり、あとは退室するだけ。そのタイミングで、サクラはカグラに対して言い様のない感覚を覚えたのである。

義人達が姿を消し、臣下の中には不安の声を上げる者も多い。それだというのに、何故か今日のカグラは機嫌良く笑顔を浮かべていた。そして、サクラの表情はカグラの笑顔に対比するように暗い。

情緒不安定、と言うべきだろうか。サクラは頭の片隅でそんなことを考え、ここ最近のカグラの様子を思い出す。

突然機嫌が悪くなる時もあれば、逆に突然機嫌が良くなる時もある。そんなカグラの様子を目の当たりにして、サクラはどうしても不安を覚えずにはいられなかった。

「……失礼しました」

そんな言葉を残し、サクラはカグラの部屋から退室する。

「……ふぅ」

扉を閉め、カグラの私室から離れたところでサクラは小さくため息を吐いた。

新年だというのに、どうにも気が重い。その理由を考え、サクラはすぐに一人の人物の顔を脳裏に思い浮かべた。

――本当に、ヨシト様は“元の世界”へ戻られたのでしょうか……。

心中だけでそう呟くと、サクラは軽く頭を振る。

一週間近く経っても何の情報も入らない以上、カグラの言う通り義人達は“元の世界”へ戻ったのだろう。しかし、それだというのに何故かカグラの機嫌が良い時がある。

現状に対して疑問が沸くばかりのサクラではあるが、自分にできることはほとんどない。国王の付き人ではあるが、カグラのように何かしらの権限があるわけではないのだ。精々が、城中で働く他のメイドに顔が利くという程度である。

「むぅ……どうしたものでしょう……あら？」

考えることを放棄して城下町にある実家に顔を出そうか、などと考えていると、不意にサクラは足を止めて傍にある扉へと目を向け

た。

サクラが目を向けたのは、国王が使用するための執務室。今日ばかりは臣民が普段の仕事を忘れて過ごすはずだ。しかし、無人のはずの執務室から人の気配がする。

僅かに目を細め、サクラは音を立てずに執務室の扉へと歩み寄っていく。そして扉越しに室内の気配を窺うと、小さく眉を寄せた。賊でも侵入したのかと思ったが、室内の気配は動いていない。サクラはそのことを確かめると、右手で扉をノックした。

「……誰だ？」

すると、すぐさま返事が返ってくる。その声に聞き覚えがあったサクラは、『失礼します』と口にしながら扉を開く。

「サクラか。どうした？」

執務室にいたのは、志信だった。執務用の椅子に腰掛け、机に積まれた書類を一枚ずつ確認している。そして時折手を止めると、何度か内容を確認してから王印を捺し、処理が済んだ書類を入れる箱へと入れていく。

「その質問をそのままシノブ様にしたいのですが……何をされているのですか？」

「何をと言われても……」

サクラの言葉に、志信は自分の姿を確認する。

かつて通っていた学校の制服を着て、手には王印の複製を持ち、執務机には大量の書類。格好としては、以前の義人とそう変わるものでもない。そのため、志信は不思議そうな色を瞳に宿しながら首を傾げた。

「政務を片付けているのだが？」
「そっちではありません。今日は祝日なので、お仕事をしなくても良い日なんですよ？」

何故不思議そうな顔で聞かれるのかわからず、サクラも同じように首を傾げる。すると、そんなサクラの反応を見て志信は苦笑した。

「例え休みの日だろうと、政務を片付けなければな。このままでは、机の上が書類で埋まってしまう」

そう言って、志信は既に机の半分近くを占領している書類の山を軽く叩く。そして、特に気負うことなく言葉を続けた。

「俺は国王“代理”だからな。国王が戻ってきたら国が潰れていた……そんな事態になったら申し訳が立たん」

サクラと話しつつも、志信は政務の手を止めない。そんな志信を見ながら、サクラは驚きで目を見開く。

「シノブ様は、ヨシト様が戻ってこられると思っているのですか？」

志信の様子と言葉に、思わずサクラはそう尋ねた。すると、その問いを向けられた志信は困ったように小さく笑う。

「さて、どうだろうな？」
「どうだろうなって……」

まるでからかうような返答に、サクラは僅かに表情を変える。そして、そんなサクラの表情の変化を見た志信は笑みを深めた。

「すまんな、別にサクラをからかおうとしたわけではないんだ」
「……と、言いますと？」
納得が出来ない様子で尋ねるサクラ。そんなサクラの視線を受けて、志信は政務の手を止める。そして窓の方へと視線を向け、どこか遠くを見るとゆっくりと口を開く。
「俺自身も、上手く言葉にできない。だが、義人のことだ。俺が“こちらの世界”にいることを責任に感じて、戻ってくるかもしれないな」
「しかし、戻ろうと思って戻れるものでもないのでは？」
義人達が“こちらの世界”へと来た理由は、カグラによる『召喚』が原因だ。しかし、現状のカグラでは魔力が足りないため『召喚』を行うことができず、“元の世界”へ戻った義人達は『召喚』の魔法を扱うことができない。もしも小雪が長年魔法を扱っていれば『召喚』の魔法も使えた可能性があるが、今のところ魔法の扱いが下手である。
一番高い可能性としては、カグラが魔力を回復して再度『召喚』の魔法で義人を“こちらの世界”へ召喚することだろう。いくつかの可能性を挙げ、サクラはそう考える。
もっとも、義人が知っていてカグラ達が知らない『召喚』に関する“落とし穴”があるため、事実は異なるのだが。
志信は外に向けていた視線を戻すと、王印を指先で弄びながら小さく笑う。
「カグラにも言ったことだが……正直なところ、義人が“こちらの世界”に戻らないのなら俺はそれで良いと思っている。“向こうの世界”で北城や両親と平穏無事に過ごす……それが自然で、おそら

くは、それが一番だ」
「“元の世界”がとても平和な場所だというのはお聞きしていますが……」
「ああ。何十年後のことはわからないが、今に限って言えばとても平和だ。魔物も存在しない上に、“こちらの世界”よりも様々な面で発達している」

魔法はないがな、と付け足し、志信は次の書類へと手を伸ばす。サクラはそんな志信に対して納得したような、それでいてどこか不満そうな目を向けた。

「カグラと同じように、義人が“元の世界”に戻ったことが気に食わないか？」

サクラの視線を受け止め、志信が問う。その問いに込められた感情は鋭いが、サクラは気圧されることなく首を横に振った。

「そういうわけではありません」
「なら、サクラはどう思っているんだ？」

手に取った書類を机の上に置き、試すように志信が尋ねる。サクラは僅かな間に考えをまとめ、ゆっくりと、しかし芯の感じられる声を発した。

「もし、“元の世界”で生活することがヨシト様にとって最も安全で、最も心地良いものなら……」

そこで言葉を切り、サクラは目を閉じる。そして、自分に言い聞かせるように言葉を口にした。

「ヨシト様は、“元の世界”で生きるべきだとわたしは思います」
「……国王がいないというのは、この国……いや、どの国だろうと致命的と言える事態だ。それでも良いのか？」

前代の国王が死んでからの十年。それを乗り越えることができただけでも奇跡に近い。しかし、義人が戻らなければ今度はその五倍近い期間が国王不在という事態になる。新しい国王を立てるか、国そのものの体制を変えなければカーリア国は滅びの一途を辿るだろう。

「良い悪いで判断するのならば、間違いなく悪いのでしょう。しかし、ヨシト様はわたしの主君です。ヨシト様のことを第一に考えるのならば、“元の世界”で平和に過ごされたほうが良いですから」

――それは悲しくて、寂しいですけど。

続きそうになった言葉を飲み込み、サクラは微笑む。
義人は、“こちらの世界”で生きるには向いていない。いや、生きるだけならば問題はないだろう。だが、国王という役職に就くには向いていないのだ。
時には臣下と共に食事を取り、時には笑い合い、時には酒宴に混ざる。
時には落ち込み、時にはカグラに怒られ、時には臣下に呆れられることもある。
時には自ら行動して、時には臣下に贈り物を贈り、時には率先してみんなを引っ張る。
サクラから見れば、それらをまとめて義人の美徳に思えた。しかし、それだけで完全に務まるほど国王という役職は甘くない。

運良く今までなかったが、人の生き死にに直接関わる事態になればどうなるか。国を運営する以上、どこかしらで人を死なせることになるが、それでも自分の手を直接下すような事態になればどうなるか。

それを考えれば、義人は“元の世界”で過ごすべきだろうとサクラは思った。

もっともそれは、個人の感情を抜きにすればという話だが。

「そうか」

そんなサクラの心情を知ってか知らずか、志信はそう呟く。

「……はい」

答えた声は、どこか固い。志信は小さく息を吐くと、椅子に背中を預けて天井を仰ぎ見た。

「“こちらの世界”に戻ってくる手段がないことを祈るか」

何に祈れば良いかはわからない。

志信はそれだけを口にすると、再び政務に集中するのだった。

閑話：五章之一

カーリア国では数少ない、国民の休日である元旦。本日ばかりは臣民問わずに仕事を休み、新年を祝って過ごす。もちろん、国境やカーリア城の警備などの最低限必要な人間は除いてであるが。

カーリア国の中枢たるカーリア城の城下町でも、町中が新年を祝う明るい雰囲気が満ちていた。旅の楽士が楽器を吹き鳴らし、道に並んだ露店で店主が声を張り上げる。道行く人々はそんな雰囲気に酔いしれ、去年を無事に過ごせたこと、そして今年一年が幸多い年であることを祈る。

「……」

そんな雰囲気の中、魔法隊の隊長であるシアラは無言のままに歩を進めていた。つばの広い三角帽子に、魔法隊で着用している紺色のローブ。そして一メートルほどの木製の杖を片手に歩きつつ、周囲の様子に茫洋とした視線を向けた。

国王である義人が姿を消したことを、城下町の人間は“まだ”知らない。人の口に戸が立てられない以上、いずれは知ることになるだろう。しかし現状では城の人間しか国王失踪の事実を知らず、民は皆笑顔で新年を祝っていた。

帽子のつばを手で押さえつつ、シアラは今後のことについて意識を傾ける。

他国の間諜に国王失踪の事態が知られるまで、あと幾日ほどあるか。いや、もうすでにその情報は他国に渡っている可能性もある。そうなると、他国がどんな対応を取るか。

シアラはそんなことを考えながら、器用に人波を避けて歩く。向かっている先は母親が住む実家で、目的は新年の挨拶である。

実家への道を歩きながら軽く考えを巡らせてみたものの、シアラ

に何かしらの案が浮かぶわけでもなかった。そもそも、外交や他国からの干渉などについて考えるのはシアラの仕事ではない。カグラやアルフレッド、それに文官達が対応するだろう。

シアラに求められるのはその後の対応……他国から手を出された際に、火の粉を払うのが仕事だ。

新年早々物騒な考えが頭を掠めるが、可能性としては決して低くない。特に、ハクロア国のように好戦的な国も傍にいる。

もしも他国と争うことになったら。

その仮定を考え、シアラは僅かに歩調を緩めた。そうなれば、国王代理である志信のもとで戦うことになるだろうか。それとも、カグラを先頭にして戦うことになるだろうか。

そうして無言のままで歩くこと五分少々、シアラは実家の前へとたどり着いた。カーリア城からは徒歩十分程度の、他の家と比べると多少大きな我が家。現在、シアラの母が一人で住む家である。シアラも暇があれば帰るようにしているが、それでも大半は城の外に造られた魔力回復施設で過ごしていたため、帰るのは二週間ぶりだった。

新年早々、考えるには気が重くなることを思い浮かべていた頭をすぐに切り替えると、シアラは木で造られた扉を開けて家の中へと入っていく。

生まれ育った我が家に知らず安堵したのか、シアラは静かに大きな息を吐いて食事を取る部屋へと足を向けた。すると、扉の音で気づいたのか一人の女性が顔を覗かせる。肩口まで伸びた髪は茶色ながらも、シアラによく似た顔立ちの女性だった。

「あら、シアラ？」

「……ただいま」

シアラは顔を覗かせた女性……自身の母親に対して帰宅の挨拶を述べる。すると、シアラの母は表情を柔和なものへと変えた。

「おかえりなさい。ご飯にする？」
「……ん」

小さく頷き、シアラは食事を取るための部屋へと足を踏み入れる。そして適当に杖を立て掛け、頭に被った三角帽子をテーブルの上に置くと、傍の椅子へと腰を下ろした。

「今年は元旦の警備の担当じゃないのね？」
「……今年は第一魔法剣士隊が担当してる」

母の質問に、シアラはミーファが隊長を務める第一魔法剣士隊を思い浮かべる。元旦にカーリア城の警備を行う部隊は、毎年交代で変わっていく。去年は魔法隊が担当をしていたが、今年は第一魔法剣士隊が警備を務めていた。

もっとも、警備といっても魔法剣士隊全員が担当しているわけではなく、隊長と必要な人員が配置されているだけではあるのだが。

そうやって適当に会話を交わしていると、シアラの母がテーブルの上に料理を並べていく。そして皿を並べ終わると、互いに頭を下げた。

「明けましておめでとう」
「……おめでとう」

言葉を交わし合い、シアラはテーブルに並んだ料理へ手を伸ばそうとする。すると、それを遮るようにシアラの母が口を開いた。

「新しい年になったわけだけど、そろそろ婿でも取る気になった？」
「……」

いきなり何を言い出すのだろうか、という意味を込めてシアラは冷たい視線を自身の母へと向ける。その視線を受けたシアラの母は、まるで気にせず笑い飛ばした。

「ほら、あなたもいい歳だし、そろそろ恋人の一人や二人……ねえ？」

何が『ねえ？』なのかわからなかったシアラは、無言でテーブルに並んだ食事へ手を伸ばす。

カーリア国における女性の結婚の適齢期は十代後半までである。正確には十五歳から十九歳に結婚する女性が多く、シアラは現在十六歳。適齢期の真っただ中であり、彼女が隊長を務める魔法隊でも同年代前後の女性隊士が結婚を機に脱退することもある。

もしも義人がこの場にいたならば、『早いよ』と笑い飛ばしただろう。しかし、義人が住んでいた世界でも昔の時代では珍しいことでもない。

興味なさげに料理を食べるシアラを見て、シアラの母は苦笑を漏らした。幼い頃から感情の起伏が少ない娘ではあったが、この年齢まで浮いた話の一つも聞かない。シアラの母もかつては魔法隊の隊長を務めていた人物であり、現在の魔法隊にも顔が利く。その伝手を使って調べてみても、シアラの周囲に男の影はほとんどなかった。

シアラが名を連ねるテンシア家は、カーリア国の中では魔法使いの家系として有名である。カグラという例外を除けば、カーリア国屈指の魔法使いの家系と呼べるだろう。かつて、テンシア家の人間が魔法隊や魔法剣士隊の隊長になったことも数多くある。

そんな歴史がある家であるから、シアラの母の心配も当然だろう。このままでは、シアラの代でテンシア家が終わることにもなりかねない。

「ねえ、シアラ。あなた、好きな人はいないの？　あ、もちろん好

きっていうのはサクラちゃんみたいに友達として好きって意味じゃないわよ？」

食事を進めるうちに、シアラの母がそんなことを尋ねる。その問いを聞いたシアラは、食事の手を止めて自身の母へと視線を向けた。

――――好きな人？

母からかけられた言葉を胸の中で繰り返し、シアラは僅かに首を傾げた。

サクラとは違う、好き。そうなると、それはどんな『好き』だろうか。

不思議そうな顔で目を瞬かせるその姿に、シアラの母は無駄を承知で問いを重ねる。

「一緒にいると楽しい、ずっと一緒にいてほしい、一緒にいると落ち着く……そんな男性はいない？　……いないわよねぇ」

途中から諦めてしまったのか、シアラの母は溜息を吐きながら問いを打ち切った。

「……ん」

シアラは母の問いに対して、律儀に考えを巡らせる。

一緒にいると楽しい男性……そもそも、一緒にいる男性自体が“ほとんど”いない。

ずっと一緒にいてほしい男性……そもそも、親しく話したことのある男性自体が“ほとんど”いない。

一緒にいると落ち着く男性……そもそも、傍にいて落ち着く男性など“ほとんど”いない。

「……？」

何かに思い当り、シアラは小さく首を傾げた。先ほどから、条件に該当する人物がいるような気がする。

それが誰かと考えた途端、シアラの脳裏に一人の男性の顔が思い浮かんだ。それは、当代の国王である義人と一緒に召喚された――。

「……ぅ……」

「シアラ？」

小さく声を発したシアラに、疑問の視線を向けるシアラの母。いったい何事かと注視して、シアラの母は一つの違和感を覚えた。

「……うぅ…」

ゆっくりと、非常にゆっくりとだが、シアラの頬が赤く染まっていく。無表情なのは変わらないものの、親であるシアラの母にはシアラの表情が変化していることがよくわかった。

シアラはそれを自覚しているのか、落ち着かないように視線を彷徨わせると、心細げにテーブルの上に置いた両手の指を絡める。

そんなシアラを見た母は、驚愕して一瞬だけ忘我した。

――この娘が、恥ずかしがっている？

思わず、内心でそんなことを呟いた。
そして、それと同時に今まで見たことのない娘の反応にシアラの母のテンションが一気に跳ね上がる。テーブル越しに身を乗り出すと、シアラへと質問を開始した。

「いるの!?　いるのね!?」
「……い、いない」

母からの追及に対して、シアラは逃げるように傍に置いた帽子で顔を隠す。そんな、シアラの反応を見たシアラの母はさらに勢いを増して尋ねた。

「誰!?　わたしが知っている人!?　魔法隊の人!?」
「……」

否定を表しているか、それとも恥ずかしさを隠すためなのか、帽子を抱きかかえたままでプルプルと首を横に振るシアラ。シアラの母は、その仕草から前者だと受け取った。

「魔法隊の人じゃないってことは……まさかその、国王様とか?」

当代の国王として召喚されたのは、シアラよりも少し年上の男性だと聞いている。さすがに退役した身とあっては謁見する機会もなかったが、当代の国王の為人(ひととなり)ぐらいは耳に入っていた。
シアラの母が仕えていた頃の国王とは、似ても似つかぬ人物だと。

「……違う」

しかし、シアラはそれを否定する。そんな否定の言葉を聞いたシアラの母は、楽しげに口元を緩めた。

「否定するってことは、好きな人がいるのは認めるのね？」
「……しまった」

シアラ最大の失策である。
帽子のつばから少しだけ顔を覗かせたシアラは、耳まで真っ赤にしながら母の反応を窺う。
からかわれたら、とりあえず殴り掛かろう。そんな物騒なことを決意しながら、シアラは自身の母の言葉を待った。

「あの、何事にも興味を持たなかったシアラがねぇ……」

そんな決意とは裏腹に、返ってきたのは嬉しげで、どこか一抹の寂しさを含んだ声。シアラが視線を向けてみれば、彼女の母は現在（いま）ではない、どこか遠くを見るように目を細めていた。

「……お母さん？」

常にない母の様子に、シアラは困惑しながら声をかける。すると、シアラの母は表情を優しげなものに変えてから口を開いた。

「その人は、良い人？」
「……ん」

誤魔化すという選択すら頭に浮かばず、シアラは素直に頷く。
シアラは幼い頃から物事に興味を向けることが少ない女の子だった。テンシア家の人間として魔法や魔法に関する技術には興味を持ったものの、それ以外に興味を持ったことはほとんどない。
そんなシアラが、男性に何かしらの興味を抱いている。
友情か、思慕か、愛情か。それはわからなかったが、今までには

なかったことだ。
シアラの母は、自分がシアラと同じ歳だった頃のことを思い出す。
その頃はまだ前代の国王も存命しており、シアラの母は日々を魔法の訓練と魔物の討伐で過ごしていた。シアラ同様魔法隊の隊長を務めており、魔法剣士隊に務めていたサクラの母とも仲が良く、それなりに楽しい日々だったと自負している。
もっとも、その楽しい日々も仕えているはずの国王によって粉々になったのだが。
脳裏に過ぎる不快な記憶。しかし、今は過去にあった……前代の国王との間にあった出来事を思い出す時でもない。脳裏に浮かんだ記憶に蓋をして、シアラの母は己の娘へと優しげな目を向けた。
「あなたはそういった面では不器用を通り越しているけど、仲良くできてる？」
仲が悪いわけではないはずだ。そう結論付け、シアラは答える。
「……多分」
答えた声に、自信はない。そんな娘の姿にシアラの母は破顔すると、口元に手を当てて笑った。
「あはは……頑張りなさいよ、シアラ。わたしは、そういった感情とは無縁だったからね。あなたが少し羨ましいわ」
そう言って笑う自身の母に、シアラは複雑な視線を向ける。シアラの母は、サクラの母と同じく前代の国王によってその人生が多少なりと狂った。
シアラも今よりもずっと幼い子供の頃、“そのこと”で密かに憤った記憶もある。なにせ前代の国王……自身の父にあたる人物が、

間違っても自身の母のことを大切にしたわけではないのだから。
そんなシアラの母が、自分の娘には幸せな道を選んでほしいと願ったのはある意味当然だったのかもしれない。からかいこそしたものの、シアラが意識しているらしき男性と“良い仲”になってくれればとも思う。もっとも、その前に大事な一人娘を任せるに足る人物かを見極める必要はあるのだが。

「……」

目の前で何やら考え始めた母を前に、シアラは無言で食事を再開する。
食事を終えたら、頭の中に思い浮かべた男性……志信のところへ新年の挨拶をしに行くのも良いかもしれない。そんなことを考え、シアラの口元が僅かに緩む。すると、そんなシアラの様子から何かを感じ取ったのか、シアラの母は再びからかいの笑みを浮かべる。

「あら、嬉しそうな顔をしてどうしたの？」
「……別に」
「そう？」

尋ねる母に頷きを返し、シアラは食事の手を少しだけ早くした。シアラの母はそんな娘の様子を楽しげに眺めると、不意に両手を合わせて口を開いた。
やけに楽しげな笑みを浮かべつつ、シアラの母は自身の娘へと尋ねる。

「それで、いつ頃になったら孫の顔が見れるのかしら？」

笑顔でそんなことを言い放った自身の母に対し、椅子を蹴倒して全力で殴り掛かったのもシアラにとっては仕方のないことだった。

場所は変わってカーリア城の兵士の詰所。
元旦でもいつもと変わらずに兵士が詰めているその部屋では、いつもと違った緩んだ空気が流れていた。

「たいちょーたいちょー」

緩んだ空気を発している人物……魔法剣士隊の女性隊士は、こんな日でも職務を忘れない上司であるミーファへと話しかける。話しかけられたミーファは、眉を寄せながらそれに応対した。

「……気が抜けているぞ。それと、その妙な呼び方は止めなさい」

普段ならば一喝して説教をするところだが、さすがに今日ばかりはミーファもある程度は好きにさせている。国民の休日だというのにいつもと変わらず仕事に就いているのだ。それに対する不満ぐらい、見逃してやるのが人の情である。
詰所にいる者や城の各地で見張りや守衛を行っている者は、今年の元旦を迎えるにあたってあらかじめ選抜された者達だ。第一魔法剣士隊の中でも、家庭を持っていない者や元旦に用事がない者を中心に選ばれている。ミーファは隊長のため強制的に参加しなければならないが、それ以外の者にとっては中々の苦行だろう。城の外では祭囃子が鳴り響き、城下町からは時折楽しそうな歓声まで聞こえてくる。

「……なんでわたし達は元旦から働いているんでしょうね？」
「言うな。それに、誰かがやらなければならないんだ。」
「それはそうですけど……あーあ、こんなことならわたしも男の一人でも捕まえておくんだったなぁ。そうしたら『家庭の事情があるので』なんて言い訳が使えたのに」
さらりと肉食的な発言をする女性隊士。それを聞いたミーファは、呆れたような視線を向けた。
「来年からは当分違う部隊が担当することになるんだ。あまり愚痴を吐くものではない」
「そうですけどね。わたしも今年で十八ですし……さすがにそろそろ焦ってきてるんですよ」
焦ってきている。その言葉を聞いたミーファは、僅かに頬を引きつらせた。
ミーファは今年で二十歳になる。カーリア国における女性の結婚の適齢期から、一歩踏み出してしまうのだ。しかも、それだけではない。十九歳と二十歳では、男性に与える印象がかなり異なる。
「……だからですね、わたしも……ってあれ？　隊長？　あの、隊長？　聞いてます？」
女性隊士の声が右から左へと通り抜け、ミーファは思わず片手で顔を覆った。
――――そうだ……わたし、二十歳になるんだ……。

まだまだ十分に若い。しかし、二十歳である。もう、十代ではなくなるのだ。

もしも一年前のミーファならば、それがどうしたと鼻で笑っただろう。そんなことよりも、父の仇を討つという意識が先に立った。

「……なんだ、この焦燥感は……」

小さく呟き始めたミーファに、女性隊士は顔を引きつらせる。だが、ミーファはそれに気づかず自分の考えに没頭していた。

思い返してみれば、自分と同時期に魔法剣士隊へ入隊した女性の同僚は皆家庭に入っている。結婚してからも退役しない者もいるが、それはどちらかと言えば少数派だ。すでに何人かの子供がいる者もいる。そのことを考えた途端、ミーファは言いようのない焦燥感と敗北感を覚えた。

ふと、ミーファは己の青春時代を振り返る。

父が殺されてからは一心に刀を振るい、魔法の腕を鍛える日々だった。同い年の少女達が色恋話をしている頃も、血豆を潰しながら刀を振るい、魔物を相手にしていたのである。その結果が魔法剣士隊の隊長という今の立場ではあるが、なんとも殺伐とした青春だった。

「これは……まずい……」

国王が姿を消した時に何をと思う自分がいる反面、そんな時だからこそと思う自分もいる。

もちろん、思い悩むのにも理由があった。ミーファとて、何も理由がなくてここまで悩むわけではない。

現在、ミーファ＝カーネルに親族らしい親族はいない。両親や先祖から受け継いだ血筋をミーファの代で絶やすのは忍びなく、申し

訳が立たないという思いがあった。
ならば魔法剣士隊の隊長を辞め、婿を見つけるのが妥当だろう。しかし、自分が辞めた後の魔法剣士隊を任せられる人物がいないのだ。そもそも、婿を見つけるというのも簡単にいくかわからない。
並の魔物ならば一人で倒し切る自信があるが、こと色恋沙汰となるとその辺の新兵にも劣る。実際のところは魔法剣士隊の中にもミーファに恋慕する男性隊士がいるのだが、ミーファはそれに気づかずに何年も過ごしたある種の傑物だ。

「父上、わたしはどうしたら良いのでしょうか……」

すでに亡き父の顔を思い浮かべ、ミーファは呟く。その隣では、最初に話を振った女性隊士が若干引きながらミーファを見ていた。
もしも婿を取るとして、と仮定したミーファは視線を宙に向けて黙考する。
ミーファも女性である。できるなら男性に守ってほしいという願望があるが、生憎とその身は魔法剣士隊の隊長だった。カーリア国の中では、接近戦において屈指の腕前を持つ。その辺の男性が三人同時に襲い掛かってこようが、適当にあしらえるぐらいにミーファは強かった。
そうなると、ミーファの希望に該当するのは一人しかいなかった。正確には一人と魔物が一人。すなわち、志信とアルフレッドである。

――アルフレッド様はまず論外よね。

祖父であり父であり上司であり恩師でもある。男性という括りでは見れない人物だった。
そうなると、志信一択しかない。というよりも、初めからそれし

かミーファにはなかったのだが。

「む……むむ……シノブは、女性の年齢を気にするのかしら……」

「あの、隊長？　今は職務中なんですけど」

先ほどの自分を棚に上げ、ミーファを注意する女性隊士。しかし、ミーファはそれに気づかない。

結局、その日のミーファは考えすぎてロクに仕事がこなせないのだった。

第百二十三話：収穫

義人達が“元の世界”へと戻り、一週間ほどの時が流れた。
年を越し、三が日も過ぎ、年末年始ということで流れが止まっていた世間が動き出す頃である。社会人ならば仕事が始まり、学生ならばあと少しで学校での授業が再開するだろう。
仕事や学校が始まることに対して気を引き締める者、休みが終わることを嘆く者、様々な人間が様々なことを思い、考える時期だ。
そんな世間の流れに逆らうように、義人は今、山の中にいた。
首にマフラーを巻き、上着はハーフコートに下はGパン、靴はスポーツシューズという、登山をするには向いていない服装である。背中にリュックを背負ってはいるものの、その大きさは登山をするには向いてないほどに小さい。もっとも、義人本人にとっては登山をしているという意識はないのだが。
朝露で湿った落ち葉に足を滑らせないように気をつけながら、一歩一歩ゆっくりと歩を進めていく。そして時折、木の幹に拾った石で傷をつけると、今まで歩いてきた方向を確かめて溜息を吐いた。

「はぁ……ノーレを持ってくれば良かったかな」

吐いた息が白く染まるのを尻目に、義人は山の奥へと進んでいく。
死に場所を求めて……などということは欠片もなく、“ある目的”を持って義人は人気のない山中を進んでいた。
何故義人が山へと踏み入っているのか。それは、五時間ほど前へと時を遡る。

早朝である午前五時。義人はここ数か月で身についた習慣によって、まだ夜が明けない内に目を覚ました。目覚まし時計をかけていたわけでもなく、自然と目が覚めたのである。

義人は軽く体を伸ばしながら欠伸をすると、枕元に置いてある目覚まし時計に目を向けて小さくため息を吐いた。

「……この時間に起きてもすることがないっての」

もしも“向こうの世界”だったならば、起きて志信の早朝訓練に参加しただろう。しかし、“こちらの世界”で早朝から庭先に出てノーレや木刀を振り回していれば、即刻警察に通報されるだけだ。

そのため、義人は再び布団にもぐりこむ。小雪も今日は優希と一緒に寝ているためおらず、のんびり二度寝へと突入し――今度はきっちり二時間後の午前七時に目が覚めた。

“向こうの世界”ならば起きて朝食を取り、その日の政務に備える時間である。だが、“こちらの世界”で政務に励むことなどない。サクラが着替えを持って義人を起こしに来ることもなければ、寝坊を咎めてカグラが部屋に来ることもなかった。

義人の脳裏に、“向こうの世界”にいるであろう知り合いの顔が浮かぶ。続いて志信の顔が思い浮かび、義人は布団を跳ね除けながら上体を起こした。

『……ん？　起きたか、ヨシト』

「ああ、起きた。おはようノーレ」

声をかけてくるノーレへ返事をして、義人は苛立たしげに頭を掻く。すると、それを見たノーレが不思議そうな声を出す。

『どうしたんじゃ？　夢見でも悪かったか』

「……いや、そうじゃないよ。ただ、“向こうの世界”の生活に合わせた時間で目が覚めたから、少しね」
『……そうか』
ノーレの声には、僅かな間があった。義人はそんなノーレに苦笑を向けると、手早く寝間着から普段着へと着替える。そして欠伸をしながら自室を出ると、一階のリビングへと向かった。
「起きたのか。おはよう、義人」
そして、リビングに入るなり父親から声をかけられる。義人の父はスーツ姿で椅子に腰かけており、キッチンで義人の母が作っている朝食を待っているようだった。
「今日から仕事だったっけ？」
「ああ。父さんも母さんもな。義人は……」
「休みって言うのもおかしいかな。んー……自宅待機？　家でゆっくりとしてるんじゃないかな」
まだ学校は始まっていないが、始まったとしても通うわけにはいかない。世間的に、義人と優希はまだ行方不明ということになっているのだ。そのため、あまり外を出歩くわけにもいかない。出歩くとしても多少の変装は必要だろう。
義人の言葉に何を思ったのか、義人の父は『そうか』とだけ口にしてリビングに置かれたテレビへと目を向ける。ブラウン管の中に映ったニュースキャスターは、新年早々だというのに公金の横領が発覚して追及される政治家について、原稿用紙を読み上げていた。
それをぼんやりと聞いていると、義人の父が口を開く。
「義人がいた国では、こういう事件があった場合はどうしていたん

だ？」
「俺がいた国って、“向こうの世界”のこと？」
「ああ」

それは純粋に興味があったからなのか、それとも息子が経験したことを知りたいがためか。義人は僅かに考え込むが、特に隠すこともないと判断する。

「証拠を突きつけて、横領した金を全額返済して心を入れ替えるか、それとも官職と家名を剥奪、そして財産も没収。退職金もなしのどっちが良いかを選ばせたけど」

本当のところはそれに加えて斬首だった、と付け足し、義人は小さく笑った。

“向こうの世界”に召喚されて間もない、一か月すら経っていない頃の出来事である。現在は財務大臣に任命しているが、ロッサなども横領をしていたのだから、かなり危険な状態だった。アルフレッドという屋台骨がなければ、カーリア国は滅びていただろう。

もっとも、国王がいない状態ではいつ滅びてもおかしくないのだが。

「……そうか」

懐かしむように、ついでとばかりに自分が行っていた政務の内容などを話した義人を見て、義人の父はどこか複雑そうな、それでいて納得したような声を漏らす。

「何か変なこと言ったかな？」
「変というか……いや、そうだったな。お前は、そんな立場に就いていたんだったな……信じたようで、信じてなかったみたいだ」

義人達が異世界に身を置き、そこで生活を送っていた。それを説明されて、理解しても、心のどこかで信じていなかったと、義人の父は寂しげに語る。

「息子のことなのになぁ……斬首なんて言葉が当然のように出てくる世界、か。魔法もあれば、近くの国は戦争もしている。魔物なんて生き物もいる……父さんにしてみれば、夢物語だよ」

「まあ、俺も自分で体験しなかったら信じなかっただろうけど……」

普通なら、笑い飛ばすか精神科への通院を勧めるような内容だ。

義人の父は、いや、義人の両親と優希の両親は、自分の子供の言葉を理解はしても心のどこかで信じていなかった。もちろん、義人が実演して見せた魔法などである程度の信憑性はある。しかしそれ以上に、義人の父にとっては自分の息子が当たり前のように、“向こうの世界”とやらで行っていた政務のことを話すことのほうが余程言葉に真実味を持たせていた。

「それで、義人にとってはどうだったんだ？」

「どうって……何が？」

「政務を行って、“向こうの世界”で過ごして、どう思った？　辛かったのか？　楽しかったのか？」

その問いに何の意味があるのか。義人は僅かに戸惑いながらも、“向こうの世界”で過ごした時のことを思い返す。そして、考えをまとめるようにゆっくりと口を開いた。

「辛いこともあれば、楽しいこともあったよ。“こちらの世界”じゃ経験できないようなこともたくさん経験した。“こちらの世界”じゃ見れないようなものも見た……うん、まとめて言うなら、充実

していた……かな」

“向こうの世界”にいた頃は、“元の世界”に戻りたいと思っていた。平和で、ただの学生として過ごせる“元の世界”に。優希や志信と一緒に帰り、また元の生活に戻れればいいと、義人は思っていたのだ。

「充実していた、か」

義人の言葉に何を感じたのか、義人の父は小さく頷く。それがどうしたのかと思った義人ではあるが、父の雰囲気に押されて何も言えなかった。すると、それを察したのか義人の父は場の雰囲気を変えるように口の端を吊り上げる。

「そう言えば、お前のいた国……カーリア国だったか？　そこで王様をやっていたと言うが、生活の面ではどうだったんだ？」

「生活の面？　こっちに比べたらかなり不便だけど……」

文明の差を説明しようとする義人だが、義人の父は違うとでも言いたげに首を横に振った。

「ほら、お前は国で一番偉かったわけだろ？　ということは、“色々と”自由だったんじゃないか？　お前も若いんだし」

「……あー」

自分の父親の言いたいことを理解して、義人はどこか遠くを見るように目を細める。

商人であるゴルゾーからお近づきの印に多数の少女を譲渡されかけたり、酒に酔ったカグラに押し倒されたりしたが、間違っても手を出してはいない。カグラについては、実際のところ義人としても

ギリギリだったが、手を出していないのだ。
故に、義人は顔の前で手を軽く振る。
「ないない。なかったなかった。そんなことはありませんでした」
そう言いつつ、義人としても父親の言いたいことも理解できた。
――ちょっと勿体なかったかなぁ……。
“元の世界”に戻る際の枷になればと拒否したが、いざ“元の世界”に戻ってみるとそんなことを考える余裕すらある。もっとも、実際に実行することはなかっただろうが。
「可愛い子の一人や二人、いたんだろ？」
「いたけど……」
何の理由があって朝から実の父親とこんな話をしているのだろうか。そんな疑問を覚える義人だったが、父はそれに気づかないのか話を続ける。
「勿体ない。父さんだったら」
「『父さんだったら』……何を、どうするのかしら？」
ピタリと、義人の父の動きが止まった。その声の主が誰なのか、それを察した義人は席を立つと、リビングの出口へと向かう。
「あ、顔洗ってなかったから洗面所に行ってくるね」
背後で父親の悲鳴が聞こえた気がしたが、義人は気にしないことにした。

義人は両親が仕事で家を出た後、自室に戻った義人は外出の準備を行っていた。

朝方自身の父に話した内容。“向こうの世界”での生活について話すうちに、義人の中である考えが浮かんでいたのである。

――本当に、このままでいいのか？

“元の世界”に戻ることができた。しかし、そこには親友である志信はいない。だからどうにかやって連れ戻して……そんなことを考えてはいたものの、明確な手段もない。それに加えて、平和でのどかな“こちらの世界”で再び生活をしていると知らず知らずのうちに気が抜けていくのだ。

このままでは、“向こうの世界”に加えて志信のことまでどうでも良くなってしまうのではないか。そんな不安が過ぎり、義人は居ても立ってもいられなくなった。

そのため、義人は“こちらの世界”へと戻ってきた際に最初にいた場所へと向かうことにしたのである。

優希と小雪には電話をかけてその旨を伝えてあるが、同行は断った。義人一人ならばそこまで目立たないだろうが、優希と小雪を連れて歩くとそれなりに目立つ。もしも同級生にでも目撃されたら危険だった。行方不明になったはずのクラスメートが顔の似ている子供を連れて歩いていたら、誰でも事の真偽が気になるだろう。

「さて、こんなもんか」

タオルやペットボトルに入ったお茶、それに用心として方位磁針をリュックに詰め込む。あとは行きの途中でコンビニにでも寄って、おにぎりかパンを買う。そう決めた義人は財布をポケットにねじ込むと、部屋を出ようとした。

『これ、どこに行くヨシト。妾も連れて行かぬか』

服装やリュックから外に出ることを察したのか、ノーレがそんな声を上げる。それを聞いた義人は、苦笑しながらドアノブに手をかけた。

「いや、だから無理だってば。“こっちの世界”では、ノーレを持ち歩くだけで捕まるんだよ」

中身がわからないように布などで包めば携帯しても問題はないが、ノーレは“こちらの世界”で持ち歩くには物騒な代物である。竹刀でも木刀でも、ましてや模造刀でもない。往来で真剣を鞘から抜けば、即座に警察に通報されるだろう。

義人がそれを懇切丁寧に説明すると、ノーレは不思議そうに疑問の言葉を投げかける。

『夜盗や追い剥ぎに襲われたらどうするんじゃ？』

「襲われないから！　この世界……いや、この国に限って言えば、その確率は無視できるほどに低いから！」

通り魔に遭う可能性は僅かにあるものの、夜盗や追い剥ぎに襲われることなど現代の日本では宝くじに当たる並に確率が低い。そもそも、夜盗や追い剥ぎなど日常の中で聞く言葉でもなかった。

それに加えて、義人はノーレがなくても魔法を使うことができる。“向こうの世界”と違って多少使いにくいものの、『強化』や風の

魔法が使えるのだ。そして、命のかかった実戦も経験している。例え通り魔に出会ったとしても、『強化』だけで対処できるだろう。

「暇ならテレビをつけていくから」

そう言って、義人は自室に置かれている小さいテレビの電源を入れる。そしてチャンネルをノーレの前に置くと、ボタンを指しながら使い方を説明していく。

「このボタンを押したらチャンネルが変わるから、見たいもの……と言っても内容はわからないか。とりあえず、気になるものを見てくれよ」

『むぅ……仕方ないのう。妾とて、“こちらの世界”の文化は気になる。ところで、どうやって『ぽたん』とやらを押せば良いんじゃ？』

「……それは、えーっと……気合で？　いや、リモコンを壊さない威力の風魔法で押せばいいんじゃないか？」

帰ったらリモコンが無事であることを祈りつつ、義人はノーレを残して家を出るのであった。

そして現在。義人は以前山から出てきた場所に到着すると、逆流するように山へと足を踏み入れた。それも、道に迷っても大丈夫なように、一定の距離を歩いたら拾った石で木の幹に傷をつけながらである。

“こちらの世界”へ戻ってきた際、山から出るまで多少の時間が

かかった。そのため、“こちらの世界”に戻った際に最初にいた場所まで戻るのも時間がかかるだろう。

戻るための道筋については、最近複数人が歩いた跡が残っているため問題ない。雪が積もっていたらそれもわからなくなっていただろうが、地面から生えた草が曲がっていたり、丈の低い木の枝が不自然に折れているなど、山登りについては素人の義人でも道筋がわかる程度に人の通った跡が残っている。それに、途中までは龍の姿に戻った小雪の足跡なども残っていたため、義人が思っていたよりもスムーズに進むことができた。

そうやって地面を睨みながら歩くこと一時間弱。

義人は“こちらの世界”に戻った際、暖を取るために焚き火をした場所までたどり着いた。消化のために土をかけてはいたが、さすがに焦げた枯葉や地面を見逃すことはない。

義人は休憩がてらリュックからお茶の入ったペットボトルを取り出すと、一気に半分ほど飲み干す。そして大きく息を吐くと、改めて周囲を見回した。

地面には枯葉が敷き詰まり、周囲には乱立するように木々が立ち並ぶ。時期が冬のためか虫や動物の気配もなく、精々頭上を鳥が飛んでいくぐらいだ。

「……」

無言で目を閉じ、義人は周囲の様子を耳で探る。だが、それでも特におかしな点はない。

「何かあるかと思ったけど……」

義人は小さく呟いたつもりだったが、人気のない山の中ではやけにその声が大きく聞こえた。そのことに僅かな心細さを感じたものの、努めて無視して義人は周囲の様子を確認していく。

例えば、“こちらの世界”と“向こうの世界”をつなぐ際に出てきた、黒い穴などの一目見て異常とわかるもの。しかし、いくら探しても影も形もない。

例えば、五感で感じる異常。しかし、どうやっても異常は感じない。

例えば、魔法的な異常。五感とは違う、ある意味第六感とも呼べる感覚。しかし、それでも異常は感じない。

「……あれ？」

何かしらあるのではと思っていた義人ではあるが、結果は『何も異常はない』の一言で説明ができる。

そしてそれは、『こちらからでは何もできない』という事実を浮き彫りにする。

義人は頭に手を当て、思わず空を仰ぎ見た。

「どうすりゃ良いんだよ……」

“向こうの世界”のことが気になったが、渡る術も、確認する方法もない。

「……次は、ノーレと小雪を連れてくるか」

自分では気づかなかったことに気付くかもしれない。そんな願いを口にしながら、義人は山を下りるべく歩き出す。

結局、“この日の”収穫はゼロだった。

第百二十四話：ズレ

元旦の休みも過ぎ、通常通り国が動き始めて三日ほどの時が過ぎた。

人や物が動き出し、カーリア国軍も通常通り訓練や各地での魔物討伐が始まったのだが、魔法隊の隊長であるシアラは訓練のない空き時間は常に自室にこもっていた。

引きこもり……などではなく、以前修理の許可をもらった『お姫様の殺人人形』を自分の手で修理するためである。しかし、ここ数日かけて人形の修理を行っていたシアラは常の無表情を崩して小さく眉を寄せた。

「……わからない」

小さく呟きながら、シアラはもう一度人形へと視線を落とす。

肩口から切り裂かれている上に右腕がない、見るも無残な魔法人形。自分で修理が可能かと思って受け取ったが、直すどころか修理に取り掛かれてすらいないのが現状だった。

シアラとて、魔法具の全てを知るわけではない。極めるなどという言葉からは程遠く、魔法具の修理を本職としている人間に比べれば劣るだろう。腕は精々、中級者に届くかどうかといったところか。しかし、それでも大抵の魔法具ならばどういう仕組みで作られたかぐらいは読み取れる。

「……どうやって作ったの？」

そんなシアラが、まったくと言って良いほどに仕組みが読み取れない。

魔法具を作るには魔力を持つ魔物の体の一部を材料とし、さらに

『魔法文字』で好みの魔法を付加するものが大半だ。
例としては、火の属性を持つ魔物の角や爪、牙などに火を使った魔法の『魔法文字』を付加する。そうすることで、魔法具を持つ者が放つ火炎魔法の威力を底上げすることができたり、一度しか使えないが誰でも投げるだけで火炎魔法が発動できる……といった効果がある。逆に氷魔法の『魔法文字』を付加してしまえば何の効果も発揮しない、ただのゴミが生まれるだろう。
簡単な魔法具を挙げるなら、志信が使う棍やミーファが使う刀も魔法具に該当する。志信の棍の場合は『無効化』の『魔法文字』を付加しており、棍の触れた魔法を『無効化』できるようになっている。ミーファの刀の場合は『強化』の『魔法文字』を付加することで刀の強度や切れ味を『強化』しており、棍も刀も『魔法文字』が消えるまで効果を発揮し続ける。
しかし、シアラが修理を行っている『お姫様の殺人人形』は違った。外見は木造りの小さな人形であるが、どこにも『魔法文字』が書かれていないのである。義人によって斬られた右腕や、肩口から腰まで斬られた部分を覗き込んでもそれらしいものは見当たらない。

「……」

無言で人形を机の上に置き、シアラは椅子に体重を預ける。
手に取った者が思い描く人物に姿を変える魔法具である『お姫様の殺人人形』。その効果は既に自分の目で確かめており、疑うべくもない。しかし、だからこそわからない点がシアラにはあった。

「……どうやって姿や能力を変化してるの？」

人形が真似るのは姿だけではなく、その人物の能力も真似ることができる。もちろんそのまま丸写しというのは無理だが、質の良いものならばかなりの精度で能力を真似ることが可能だ。だが、その

原理がわからないのである。
姿を真似るだけならば、それは可能だろう。姿を変えるだけならば、シアラも小雪という存在を知っている。しかし、能力を真似る点だけがどうにもわからなかった。

「……能力を変化……でも、この人形は何度でも使用可能……そうなると一回だけじゃなくて複数回、複数の属性に変化することもある……」

考えをまとめるように呟き、シアラはゆらゆらと頭を左右に揺らす。

――――そんな魔法技術は、ない。

そんな結論がシアラの頭に過ぎる。少なくとも、今のカーリア国にそんな魔法技術はなかった。
魔法国家と呼ばれる大国、ウォーレンならばそれに適うだけの魔法技術があるだろうか。そこまで考えたシアラではあるが、シアラはほとんどカーリア国から出たことがない。ウォーレンなど、言葉の上で知っている程度だ。新しい魔法体系の研究や、対魔法に関する研究が盛んらしいが、実際にその地を訪れたことがないためシアラには本当かどうかわからなかった。

「……むぅ……」

口をへの字に曲げて、シアラは椅子から立ち上がる。
残念ながら、そろそろ午後の訓練が始まる時間だった。

カーリア国の宰相であるアルフレッドは、新年早々深いため息を吐いていた。

祝日である元旦が過ぎたのはほんの三日前。今ではいつものように政務が始まり、一日の休日を得た国民達も再び各々の仕事を開始している。しかし、そんなアルフレッドには頭の痛い問題があった。

国王不在という現状。

新年を迎えるにあたり、隣国から送られてくる友好の使者に対する対応。

その他にも細々とした問題があり、アルフレッドとしても頭の痛いところだった。

「どうしたものかのう……」

愚痴のように呟いてみるが、答えは出ない。

新年を迎える……それ自体は良い。魔物であるアルフレッドも、多少は人の感情や習性を理解している。新たな年を祝うという習慣はエルフ族にはなかったが、アルフレッドは長い間を人間と共に過ごしたのだ。今では新年を祝うということがどんなことかも理解している。

国王が不在という現状については、まだ対処可能だ。宰相のアルフレッド、『召喚の巫女』のカグラ、そして国王代理として志信がいる。最近はカグラの様子が気にかかるものの、今のところ大きな問題でもない。頭を痛める用件ではあるが、アルフレッドとしては“まだ”大きな問題ではないのだ。しかし、他国から送られてくる新年を祝う使者をどうするか。実のところ、これが一番の問題である。

新年を迎えた場合、戦争状態にある敵国でもない限り、周辺国に対して互いに祝いの使者を送るのが慣例だった。使者の手配につい

てはアルフレッドが行っているため、問題はない。だが、送る使者よりも迎える使者の対応についてどうするかが問題だった。

使者を迎える場合、当然のことではあるが謁見の間へと通して応対する。そして、他国が正式に遣わした使者を相手にするのは国王の役目だ。勿論、正式に遣わした使者とはいえ、その内容によっては国王ではなく他の高官……カーリア国で言えば宰相であるアルフレッドや『召喚の巫女』であるカグラが対応することもある。しかし、今回の場合は祝いの使者である。拒む理由もなければ、拒める道理もない。もしも拒めば、それだけで使者を遣わしてきた国が悪感情を持つ可能性がある。

「どうしたものかのう……」

再度同じ呟きを漏らしつつ、アルフレッドは溜息を吐いた。

国王である義人が姿を消したことは、秘するべきである。捜索のために人を出しているためいずれは周辺の国にも知られてしまうだろうが、発覚するまでの時間は長い方が良い。

そうなると、どうするべきか。それを考えるアルフレッドではあるが、取れる手はあまり多くないのが現状だった。

「病気で臥せっていることにするかのう……しかし、使者の対応もできないほどの重病だと思われるのも問題か……ふむ、どうしたものか……」

浮かぶ案は、どれも説得力に欠ける。アルフレッドは眉間を軽く叩くと、志信やカグラの意見も聞くべきかと今まで座っていた椅子から腰を上げた。

他の文官達については、もう少し具体的な対策をまとめてから話した方が良いだろう。ただでさえ、正式な国王が不在ということで不安がっている者もいるのだ。

臣下達の心情についても何かしらの手を打つべきかと考えつつ、アルフレッドは国王用の執務室へ足を向ける。そして執務室の前まで到着すると、軽くノックしてから扉を開いた。

「あら、アルフレッド様。どうかしましたか？」

扉を開けたアルフレッドを迎えたのは、微笑を顔に張り付けたカグラである。カグラは義人が使っていた机の隣で、今まで通り政務を片付けていた。

今まで通り、義人がいた頃と同じように。

現在国王用の執務机に座っているのは志信である。以前はそのことに対して不満があったはずだが、何故かアルフレッドを迎えたカグラは笑顔だった。

アルフレッドが部屋の中に視線を向けて見ると、壁側で所在なさげに立つサクラと目が合う。サクラはどこか困惑したような表情をしていたが、それでもアルフレッドと目が合うとどこか安心したように一礼した。アルフレッドはそんなサクラの態度が気にかかったものの、これからカグラと話す内容を考えて退室を促すべきか僅かに迷う。しかし、サクラの意見も参考にするべく執務室の扉を後ろ手に閉めた。

「それで、どうかしましたか？」

扉を閉めたアルフレッドを視界に捉えつつ、カグラが口を開く。それを聞いたアルフレッドは、カグラに歩み寄りながら答えた。

「うむ、近々来訪する他国の使者についてじゃ」

「使者……ああ、新年を祝う使者ですね。ヨシト様が国王に就いた

から、去年よりも数が多いようですが」

頬に手を当てながら思い出すように話すカグラに、アルフレッドは頷いてみせる。

「そうじゃな。レンシア国はいつも通りのことじゃが、他にもあちこちから先触れの使者が来ておる……ハクロア国からも先触れの使者が来たのは予想外じゃがな」

アルフレッドがそう言うと、それまで黙って話を聞いていた志信が疑問の声を上げた。

「ハクロア国からも、ですか」

国としては直接的に対立したわけではないが、ハクロア国とは前財務大臣であるエンブズとの一件もある。そのことを懸念した志信だが、アルフレッドもその懸念に同意する気配を見せた。

「シノブ殿の言いたいこともわかる。じゃが、祝いの使者を断ればそれはそれで角が立つ。あの国のことじゃ、それだけで攻めてくるやもしれん」

「さすがにそこまで軽率ではないと思いますが……警戒はしておくべきですね」

「うむ。そこでじゃ、ヨシト王が不在というこの状況をどう誤魔化すか、その意見を聞きたい。他の文官にはある程度案を固めてから話したいからのう」

「……そう言えば、中には現状を不安に思う者もいるのでしたね」

国王代理である志信に対して、どことなく不信な目を向ける者も存在する。武官ではほとんどいないのだが、文官の中には志信に対

して『武官連中に贔屓をするのではないか』と勘繰る者もいるのだ。義人ならば文官武官のバランスを上手くとるようにしていたが、志信は本人の性質的に武官側に傾くことがある。そのせいもあって、現状に不安を覚える者が出ているのが現状だった。

「シノブ殿ならばどう対処する？」

「……そうですね、俺ならば義人が病に臥せっていることにしますが」

「儂もそれは考えた。じゃが、国王が他国の使者に会えないほどの重病だと思われるのも問題じゃよ。カグラは何かないか？」

「そうですね……祝いの使者を受けないのも手ですが、それでは今後に悪影響があります」

「ふむ……それならば、義人の影武者を立てれば良いのではないか？　そんな道具があっただろう？」

代替案を上げる志信だが、それに対してカグラが首を横に振る。

「もしも使者の中に魔法の扱いに長けた者がいれば、見抜かれるでしょう。そうなると、病気だという以上の疑いを持たれます」

使者の護衛にはそれなりに腕の立つ者がつくことも多い。そう付け足し、カグラは再び案を考える。すると、不意にアルフレッドが小さく呟く。

「シノブ殿を、正式な国王じゃと紹介するという手もあるか……」

志信を国王代理ではなく、正式な国王にする。王印もあるため、職務上の問題はないだろう。あるとすれば、志信を国王に据えた場合の臣下の反応が気がかりという点だが。

「……アルフレッド様、今、なんと仰いましたか？」

気がかりの筆頭である少女が、感情を感じさせない声で尋ねる。

アルフレッドはそんなカグラの反応に、僅かに冷たいものを背筋に感じながら答えた。

「シノブ殿を正式な国王にするという手もある……そう、言ったんじゃが」

「俺を国王に、ですか？」

アルフレッドの言葉を聞いて急に俯いたカグラを横目に見つつ、志信が尋ねる。

「勿論、ヨシト王が戻るまでの一時的な話じゃがな」

「しかし、義人が戻らなかった場合はどうするのです？」

むしろ、その確率の方が高いのではないか。そんな意図を込めて尋ねる志信に、アルフレッドはため息交じりに頷く。

「シノブ殿の言いたいことはわかる。しかし、このままではこの国が傾くどころか、潰れかねんのじゃ……儂とて、都合の良いことを言っているのはわかっておる。その場合はシノブ殿、お主に一時的なものではない正式な国王として」

「――――いや、です」

アルフレッドの言葉を遮るように、小さな声が響く。その声を発したのは、先ほどから俯いたままのカグラだった。俯いているため

表情が見えないが、その声にこめられた感情だけで表情を見る必要はないだろう。

声に込められていたのは、明確な拒絶と怒り。

カグラからすれば彼女の仕える国王は義人だけであり、志信はあくまでその友人……悪く言えば、ただのおまけである。

国を支える『召喚の巫女』としては、アルフレッドの案に乗るべきだろう。

新しく国王となった志信を支え、カーリア国の発展に貢献していけば良い。

その傍らで次代のカグラとなるべく“人材”を産み、育てていけば良い。

仕える相手が義人から志信に変わる、それだけだ。そして、かつての自身の母や、連綿と続いてきた今までのカグラと同じように、己に課された“務め”を果たせばいい。

――ただ、それだけである。

「嫌です」

しかし、“少女”は真っ向からそれを拒否した。

理性では、アルフレッドの言っていることが妥当だと理解している。だが、それは嫌だと感情が声を上げた。

アルフレッドの案に代わるものはない。説き伏せるだけの根拠もない。それは突きつけられた言葉を跳ね除けるだけの、単純な拒否。

ただ拒否するなど、幼い子供でもできることだ。それでも、彼女は拒否した。

それは当代の国王を召喚する前の彼女ならば、考えられないことだった。以前の彼女だったならば、アルフレッドの言葉に唯々諾々と従ったに違いない。

「……っ、失礼します！」

カグラは白衣の袖口で乱暴に目元を拭うと、アルフレッド達の返事も聞かずに部屋を飛び出す。アルフレッドと志信はそんなカグラを呆然と見送ったが、すぐさま我に返って互いに顔を見合わせた。

「あの様子を見るに、今しばらくは現状を維持した方が良いと思いますが」

カグラの背を見送った志信が、冷静に尋ねる。そんな志信に対して、アルフレッドは伸びた白髭を困ったように擦った。

「そう、じゃな……」

政務、それも国政に関わることに私情を持ち込むつもりは“ほとんど”ないアルフレッドだが、さすがにカグラの態度に思うところはある。長い間、『召喚の巫女』である“カグラ”を見続けてきたのだ。今回のカグラの反発も、ただの癇癪と片付けることはできない。

「ひとまず、使者の件は当初の案で通すかのう……サクラ、すまんがカグラの様子を見てきてはくれんか？」

「あ、はい……」

一度も会話に参加することはなかったサクラだが、カグラの行動を心配していたのだろう。アルフレッドの指示に頷き、すぐさま部屋を飛び出していく。

カグラに続いてサクラまで見送ったアルフレッドは、深々と溜息を吐くのだった。

執務室を出たサクラは、城中の人間に話を聞きながらカグラの後を追っていた。カーリア国の中ではある意味国王よりも有名なカグラである。城中ならばその容姿を知っている者ばかりなので、後を追うのは容易だった。

人気の少ない廊下を直進し、曲がり角を右に曲がる。そしてさらに突き当りの角を曲がろうとしたところで、サクラは静かに足を止めた。

「……それは嫌。ヨシト様ではなく、シノブ様では嫌。そんなの嫌」

僅かに、声が聞こえる。その声に聞き覚えがあったが、あまりに普段と違って聞こえたサクラは思わず息を潜めて声に耳を傾けた。

「嫌、嫌、嫌。だったら、どうすれば……」

ブツブツと聞こえる声が、一度途切れる。サクラは何と言って声をかけるべきかと非常に悩んだが、そんなサクラを制するように声が聞こえた。

「ああ、そうか……ふふふ、なんだ、簡単じゃない」

小さな笑い声。そして、続いた言葉に、サクラは言葉を失うことになる。

「――――もう一度、ヨシト様を召喚すれば良いんだ」

できる、できないではない。召喚“する”のだと口にして、カグラは笑うのだった。

第百二十五話：ズレ　その2

召喚国主制国家カーリア。

大陸の北部に存在するその国家を語る上で外せないものは、国主たる者を異世界から召喚するという他国には存在しない――否、他国ではあり得ない方法で王になる人物を決めていることだろう。国王の座を巡って権謀術数を張り巡らせている国々からすれば、到底考えられないことである。

土地柄魔物が多く、農業や商工業、魔法技術が目立って発展しているわけでもない。他国の市井の民が口に出して語るような特産物もなく、これといった名所もない。強いて挙げるとすれば、代々の国王に仕える『召喚の巫女』と呼ばれる役職に就く人間が卓越した魔法技術を持つことが噂されるくらいである。

隣接する国家としてはレンシア国とハクロア国が存在するが、この二国は大陸北部の中でも有数の国家であり、周辺の小国に比べれば大国とも呼べる。カーリア国も他の小国に比べれば大きい方だが、それでも先の二国には及ばなかった。しかし、その二国に接しつつも、カーリア国は建国以来他国からの本格的な侵略は受けていない。

領土に組み込んでも大した利益になりそうもないという点、国民が他国の人間を王に据えても全く従わないという点、そして、先述した『召喚の巫女』という存在が原因だった。

魔法が存在するこの世界において、卓越した魔法の腕を持つというのはそれだけで大きな脅威となる。それに加えて、人並み外れた強大な魔力も持ち合わせるというのだから手に負えない。

それこそ、『一騎当千』という言葉を文字通り実行しかねない存在なのだ。カーリア国にすれば最強の矛であり盾。その上国王に対する絶対的な忠誠を持つという、他国からすれば非常に頭を悩ませる存在である。

無論、他国にも強者は数多く存在する。しかし、魔力量という一

点において『召喚の巫女』は他者の追随を許さない。仮に戦うことになったとすれば、『召喚の巫女』を上回るほどの技量を持つ者か、『召喚の巫女』と同じだけの技量を持つ者を同時に複数当てなければ勝ち目はないだろう。もしくは物量に物を言わせて強引に押し潰すかである。もっとも、後者を選択すればどれだけの被害が出るかはわからないが。

そんな他国から見れば危険物にも等しい『召喚の巫女』を従えるカーリア国に、正式な国王が就任した。それは、周辺の国にとっては注目せざる事態である。もしも野心溢れる人間が国王だったらと思うと、嫌でも気になるだろう。幸いというべきか、代々の国王は他国に目を向けずに自国の中だけに注力していた。先代や先々代の国王などは暗愚も良いところである。自侭に振る舞ったその果てに、家臣に暗殺されるほどなのだから。

このままならば遠からず自壊する。

周辺の国々はそう判断しており、事実、カーリア国は自壊寸前だった。長年に渡る国王の不在に加え、臣下による公金の横領。日々暴威を振るう魔物の対応など、カーリア国は確実に破滅への一途を辿っていた。『召喚の巫女』やアルフレッドという優秀な文官がそれを先延ばしにしていたが、それも時間の問題である。しかし、アルフレッド達はその危機を乗り切った。

新しい国王、すなわち、当代の国王の召喚である。もっとも、召喚自体は召喚したものの、結果自体は国王以外の人間も召喚するという前代未聞のものだったが。

新しい国王を得たカーリア国は、今までの衰退を回復すべく動き出す。今の勢いならば、そう遠くない内に往年までの国力を取り戻すだろう――それが大半の周辺国家の認識であり、争う理由もない国々はこぞって新年を祝う使者をカーリア国へと差し向けていた。

『申し訳ない。ヨシト王は現在体調を崩されていましてな……残念ながら、顔をお見せすることができないのです』

各国の使者に対してコモナ語でそんな説明をしたのは、国王に次ぐ権力を持つアルフレッドである。長年カーリア国の宰相を務めてきた彼のことを知る者は多く、その為人も広く知られている。そんなアルフレッドの言葉に、使者達は納得と不審さを感じながら互いに顔を見合わせた。

『顔も見せられぬほどの病気とは一体……』

『レンシア国でお会いした時は健康だったが……』

小さな呟きを交わし合い、再度アルフレッドの顔を使者達は見る。

『何か？』

視線を向けられたアルフレッドの表情には僅かな揺らぎもなく、傍目には嘘をついているようには見えない。しかし、ここにいるのは外交を生業としている者達である。使者達はアルフレッドの心情を見通すように注意深く観察するが、当のアルフレッドは首を傾げるだけだ。

『はて、儂の顔に何かついていますかな？』

そう言いつつ自分の顔を触るアルフレッド。とぼけているようにも見えるが、自然体にも見える。元々、生きてきた年数が違うのだ。化かし合いでは勝負にならないと、使者達は謁見の間にいた他の人間達に目を向ける。

謁見の間にいたのは、宰相であるアルフレッド、『召喚の巫女』であるカグラ、それに志信と外交を専門とする文官達だ。

『……ん？』

使者の中の一人がカグラに視線を向けると、僅かに目を細める。かすかに、違和感とも呼べない“何か”が引っ掛かったのだ。

それは、カグラの浮かべる表情が原因だったのだろう。他の使者に笑顔で応対するカグラではあるが、その笑顔がどこか寒々しい。レンシア国の建国記念式典でも会ったことがあるのだが、その時に見た笑顔と何かが違う。勘違いかもしれないが、見ているだけで背中に虫が這うような、嫌な印象を受けるのだ。

『どうかされましたか？』

そんな使者の視線に気づいたのか、それとも最初から気づいていたのか。カグラが笑顔で問いかけてくる。使者は内心の動揺を押し殺すと、カグラに倣うように笑みを浮かべた。

『いえ、国王様が体調を崩されているとは知らなかったものですから。そうとわかっていれば、日を改めたのですが……』

『申し訳ありません。どうやらヨシト様が元いた世界とは気候が違うらしく、最近の冷え込みで急に体調を崩されてしまったのです』

言葉の通り、申し訳なさそうな顔をするカグラ。その表情には先ほどまでの得体の知れない冷たさはなく、使者は苦笑を返した。

『この世界とは異なる世界でしたか……その辺りの話も、機会があれば聞いてみたいものですな。そういえば、そちらのシノブ殿も国王様と同じ世界の出身だとか？』

それまで沈黙を守っていた志信に対し、使者が話を振る。話の矛先を向けられた志信は、アルフレッドが目配せをしてくるのに対して僅かに頷き、使者へと向けて口を開いた。

『ええ。義人王とは同郷ですが？』

『そうですか。やはり、こちらの世界とは違うのですか？』

何の違いを指しているのか、それを僅かに考えた志信ではあるが、今までの話の流れからすぐさま答えを口にする。

『そうですね。こちらとは気候もだいぶ違いますよ』

“元の世界”と“こちらの世界”では気候が異なる。もっとも、“元の世界”に比べれば気温の変化も緩やかであり、どちらが過ごしやすいかと聞かれれば“こちらの世界”のほうが過ごしやすいと言えるだろう。しかし、使者達はおろかカーリア国の人間だろうと“元の世界”のことはほとんど知らない。そのため、使者達は志信の言葉に納得するしかなかった。義人の病状についても、時をおけば何かしらの情報がわかるだろう。数日ならばともかく、長い間民にも姿を見せないのならば何があったか推測できる。

すぐに姿を見せるのならばそれほど重い病気ではなかったと考えられるが、もしも長期間姿を見せないのならば余程重い病気か、もしくはすでに死んでいる……等々、おおよその予想は立てられる。それに加えて間諜も放ってあるため、焦らずとも情報は入ってくるだろう。

使者達の多くはそう考え、この場で深く追求することはなかった。

大多数の使者達に含まれない少数、この場で言うなら、レンシア国の使者とハクロア国の使者は、他国の使者とは違った考えを持っていた。

レンシア国の使者――レンシア国王コルテア＝ハーネルンの長女である、レミィ＝ハーネルンは傍らに控える少女――風龍のフウに小声で尋ねた。

『フウ、あなたはどう思う？』

『嘘、でしょうね』

短く、しかしフウは確信を持って答える。

新年を祝う使者に一国の王女を派遣するというのは、中々あることではない。しかし、いずれ来るであろうハクロア国との戦に備えるため、少しでもカーリア国との友好を結んでおきたかった。そのために王女であり、文官、外交官としても手腕の長けているレミィが使者に選ばれたのだが、どうにも雲行きがおかしい。

『ヨシト王が顔を見せられないのは、病気ではなく他の理由だと思いますわ』

周囲に聞こえない程度の声量で話すフウに、レミィは僅かに首を傾げる。

『根拠はあるの？』

『根拠と呼べるほどのものではないのですけれど……コユキ様の魔力が感じられないのが腑に落ちなくて』

『コユキ様……ああ、あの白龍ね』

『はい。ヨシト王を親として慕っていたはずのコユキ様の魔力が感

じられず、ヨシト王の姿が見えない。もしも本当に病気だというのなら、コユキ様は今頃ヨシト王に張り付いて看病でもしているはずですわ』

レミィの護衛としてついてきたフウではあるが、会えるならば小雪にも会いたいと思っていた。しかし、その小雪の魔力が感じられない。隠すには大きく、小雪自身も魔力を消すなどという芸当はまだできないはずである。

『その子は『龍の落とし子』よね？　親が迎えにきたんじゃないの？』

『それも考えられますが、白龍の成龍がこの城を訪れたのなら大事になっているでしょう。しかし、そんな話は間諜からも上がってはいませんでしたわ』

『そうなると……その白龍の子が家出して、ヨシト王達はそれを探しているとか？』

『他国からの使者を放っておいてまでですか？』

自分を親と慕う子供の家出と、他国からの使者に対する応対。フウはかつて顔を合わせた義人のことを思い浮かべ、そのどちらをとるか考えて眉を寄せた。

『……ない、と言い切れないところが怖いですわね。しかし、さすがにそれはないのでは？　というか、そもそも家出をする理由もないとは思いますが』

『わからないわよ？　うちのティーナみたいに、城を抜け出して城下町に遊びに行っているとか』

冗談混じりにそんなことを呟くものの、レミィとて本心から言っているわけではない。

『さて、お父様にどう報告したものかしらね……』

他国からの使者の応対を行った日の夜、志信はつくづく自分が外交に向かない人間であることを僅かに嘆きつつ、自室へ向かって歩を進めていた。もしもこのまま義人が戻らなかったら、国王代理ではなく正式に国王として就任することになるかもしれない。そう考えると、多少なり暗鬱な気分になる志信だった。

「どうしたものか……ん？」

ふと足を止め、志信は前方へと視線を向ける。ここは城中であり、見張りの兵も多い。しかし、前方から歩いてくるのは普段城中で見かけない人物だった。

「おや、これはシノブ様。ご機嫌麗しく存じます、はい」

同じように気づいたのか、商人であるゴルゾーが笑みを浮かべながら頭を下げる。その両脇には案内の兵士がついており、志信は兵士を視界に収めつつゴルゾーに会釈を返す。そして、気になることがあったためすぐに口を開いた。

「何故ここに？」

今は義人の不在を隠すため、外部の者は極力城中へ入れないようにしている。今回使者として訪れた者達も、謁見の間や各自にあて

がった部屋以外では気軽に出歩けない。そんな志信の疑問を感じ取ったのか、ゴルゾーは笑みに僅かな困惑の色を混ぜながら頭を下げた。

「カグラ様に呼ばれて伺った次第です、はい」
「カグラが？」

そんな話は聞いていない。内心でそう付け足す志信だが、ゴルゾーは志信の言いたいことがわかったのか、困惑の色を深めるだけだ。

「カグラ様からは何も聞かれていないので？」
「ええ。俺は何も聞いていません」

ゴルゾーの方が年上のためか、志信は敬語で返した。ゴルゾーはそんな志信を前にして何かを考え込むように沈黙すると、話を変えるように軽く両手を合わせる。

「そういえば、ヨシト王は今どちらに？　少しお耳に入れておきたいことがあるのですが」

そう言ったゴルゾーに対して、両脇に控える兵士が僅かに気配を剣呑なものへと変えた。しかし、志信が目配せするとそれをすぐに抑える。

「……どうかされましたか？」

そんな兵士と志信のやり取りに気づいていないのか、ゴルゾーは不思議そうな顔をした。

「いえ、義人は今体調を崩していましてね。俺で良ければ用件を窺

いますが？」
「おや、そうでしたか。そうとわかっていれば、お見舞いの品を持参したのですが……そうですね、はい。シノブ様さえよろしければ、伝言をお願いできますでしょうか？」

志信の言葉を信じたのか、ゴルゾーは特に言及することなく引き下がる。そして、伝言を頼むと口にしつつ、素早く視線を両脇の兵士達に向けた。

「申し訳ありませんが、お人払いをお願いします」

その申し出に、志信は僅かに目を細める。すると、それまでゴルゾーの両脇に控えていた兵士達が判断を求めるように志信へと視線を向けた。志信はそれに頷きを返すと、兵士達はすぐに駆け出して姿を消す。

ゴルゾーは人の気配がなくなったことを十分に確認した後、志信の方へと一歩だけ歩み寄って小さく呟いた。

「――と、ヨシト王に伝言願います」
「っ！　それは、どういう？」

伝言の内容に不穏なものを感じた志信が尋ねるが、ゴルゾーは首を横に振る。

「お客様の情報に関わることなので詳細はお教えできないのです、はい。しかし、ヨシト王ならばそれだけで対処できるかと。それでは、私はこれで失礼いたします、はい」

そう言って一礼し、ゴルゾーが歩き出す。商人として商売相手の情報は明かせないが、それでも報告できることは報告する。そのた

めの報告だったが、志信は伝言の内容に困惑していた。
ゴルゾーが去っていた方向に視線を向け、志信はゴルゾーから告げられた伝言を口に出して呟く。

「カグラに気をつけろ、だと？」

第百二十六話：ズレ　その3

『召喚の巫女』であるカグラの主な仕事は、国王の補佐である。文官や武官に対する指揮権も持ち合わせてはいるものの、最も優先すべき仕事は国王の行動に対する補佐だ。そのため、国王である義人が姿を消してからも、代理で国王を務めている志信の補佐を行っていた。しかし、その働きぶりは義人が国王だった頃に比べれば遥かに見劣りするだろう。

国を正常に動かすために働かなければならないとはいえ、カグラも人間である。やる気が出なければ仕事の能率も上がらない。特に、義人が姿を消してからすぐの頃は非常に情緒不安定で、仕事の進捗にも大きな波があった。

「……」

無言のままで、志信は自身から少し離れた位置に座るカグラへと視線を向ける。すると、そこにはいっそ上機嫌とすら呼べる様子で政務を片付けるカグラの姿があった。

ふむ、と内心で首を傾げつつ、志信は自分が行っていた政務に集中すべく視線を手元の書類へと向ける。

義人が姿を消して早一カ月弱。

国王が不在という根本的な原因は解決していないものの、文官も武官もだいぶ落ち着きを取り戻していた。情緒不安定だったカグラも“ある日”を境に落ち着いており、当面の心配はないように見える。

ある日……志信がゴルゾーから義人宛ての伝言を聞いた日以降、カグラはそれまでの不安定さをなくしていた。仕事の能率も上がり、志信の補佐も的確にこなす。それでいて基本的に機嫌が良く、以前のように落ち込むこともない。

――しかし、『気をつけろ』とは一体……。

ふとした拍子に、ゴルゾーの言葉が志信の脳裏に過ぎる。カグラの何に対して気を付ければ良いのか、それが志信にはわからない。

――誰かに相談してみるべきか？

自分一人で考えていてもわからず、志信は仕事の手を止めて軽く思考に沈んだ。

ゴルゾーがわざわざ義人に対する忠告を残すのだから、確実に“何か”があるのだろう。しかしその“何か”がわからず、志信は黙考せざるを得ない。

そうやって志信が思考しながらも政務を進めていると、不意に執務室の扉をノックする音が響く。志信とカグラは僅かに動きを止め、扉へと視線を向ける。すると部屋の隅で待機していたサクラが小走りに扉へと近づいた。そして扉の外の人間といくつかの言葉を交わすと、カグラへと視線を向ける。

「カグラ様、アルフレッド様がお呼びとのことですが……」

「アルフレッド様が？」

政務のことで何か相談でもあるのか、とすぐに立ち上がり、そこでカグラは志信へと視線を向けた。

「それでは、わたしは少し席を外しますね。判断に困るものがあっ

た場合は、そのままにしておいてください」
「ああ、わかった。わからないことがあったら後で尋ねる」

志信の返事に微笑みを一つ残し、カグラは執務室から退室する。志信はそんなカグラの背中を意味もなく見送り、そこで不意に、不思議そうな顔をするサクラと視線が合う。

「カグラ様と何かあったのですか？」
「……何か、とは？」

疑問を示すサクラに問い返すと、サクラは言葉を選ぶようにゆっくりと口を開く。

「いえ、最近のカグラ様を見ていると、やけに上機嫌と言いますか陽気と言いますか……以前も上機嫌な時がありましたが、その時よりも機嫌が良いように見えまして」

サクラの言葉を聞いた志信は、それを否定するように首を横に振った。

「俺個人がカグラに対して何かをした覚えはないな」

ただ、と言葉をつなげ、志信はサクラに真剣な視線を向ける。

「カグラ自身に“何か”があったのだろう。サクラ、何か思い当る節はないか？」

真剣に問うと、サクラは動揺したのか僅かに視線を逸らす。それを見た志信は、重ねるように言葉を紡いだ。

「何か知っているんだな？」
「……はい」

志信の問いに、サクラは小さく頷く。志信は手に持っていた書類を机の上に置くと、一度深呼吸をしてからサクラを見据える。

「それが何か、教えてほしい。俺の方でも気にかかっていることがある」
「シノブ様も、ですか？」
「俺“も”？」

サクラの言葉に首を傾げる志信。そんな志信に、サクラは自身が知ることを話すべきか僅かに逡巡する。しかし、すぐに気を取り直して打ち明けることにした。

「シノブ様を正式な国王にする……アルフレッド様がそんな話をしたことを覚えていますか？」
「もちろんだ。それほど長い月日が経ったわけでもなし、覚えているとも」

志信が首肯すると、サクラは“その時”カグラが口にしていた言葉を思い返しながら話を続ける。

「あの時、カグラ様は執務室を飛び出していかれましたよね？　すぐにあとを追ったのですが、追いついたわたしはカグラ様の独り言を聞いてしまったんです」
「独り言？」

独り言を口にしたことがおかしいのか、それともその内容に問題があるのか、志信は意味もなくそんなことを考えつつサクラの言葉

を待つ。

「『もう一度、ヨシト様を召喚すれば良いんだ』と、カグラ様が仰っていました」

そして、その独り言の内容に志信は目を細めた。

「……もう一度、だと？」

「はい。その時のカグラ様の雰囲気が……その、なんと言いますか、非常に危ういものでしたので、声をかけて確認することはできませんでしたが……」

そう言って、サクラは気まずそうに目を逸らす。カグラとは幼い頃から面識があったが、それでもあのような――――鬼気迫る、背筋が凍えるような声を聞いたのは初めてだった。

「ふむ……」

サクラの僅かに怯えを含んだ表情を見た志信は、カグラの最近の機嫌の良さやゴルゾーの忠告、そして志信自身がカグラから感じた印象から頭の中で現状をまとめていく。

「俺の方はゴルゾーから忠告を受けてな」

「ゴルゾー……ヨシト様のもとに出入りしていた、あの商人の方ですか？」

「ああ、そのゴルゾーだ」

ゴルゾーのことはサクラも知っている。義人が特に贔屓にしていた商人であり、カーリア国の中では屈指の商人だ。

「ゴルゾーの口振りからして、カグラに“何か”を売ったらしい。商人という職業上、その“何か”の詳細は教えてもらえなかったが、それはカグラにとって上機嫌になり得るもの……そこにサクラの言う、『もう一度義人を召喚する』という話を付け加えれば、ある程度の形は見えてくるか」

考えがまとまりつつあるのか、志信の口調からは淀みがなくなりつつある。サクラは志信の考えがわからないのか、小さく首を傾げた。

「ある程度の形、ですか？」

「おそらく、カグラが買ったものは“召喚に必要なもの”か“召喚の際の補助”になるものではないか？　加えて、わざわざゴルゾーが義人への注意を促すほどの重要な……もしくは危険な代物だろう。サクラ、召喚に使うことのできる、もしくは召喚の際の補助になる道具に覚えはないか？」

志信にはその“何か”の概要は掴めてきたが、断言できるほどの確証はない。何せ、志信からすれば“こちらの世界”は異世界である。志信の知らない道具や知識も多く存在するだろう。そのためサクラに問いを投げかけたのだが、サクラは困ったように眉を寄せた。

「召喚に使うことのできる、もしくは補助になる道具ですか？　探せばその条件に該当する魔法具があるかもしれませんが、召喚は基本的にカグラ様自身の魔力で行われることですし、あったとしても魔法具の値段が高いと思いますよ？」

「高いと言っても、カグラなら貯えぐらいあるだろう？　宰相と同程度の地位にいるのならば、俸禄も高いはずだ」

「それはそうですけど……カグラ様でしたら魔力が回復すれば自力で召喚の儀式が可能ですし、魔法具などの補助は必要ない気がしま

す」

サクラは自身の記憶にある魔法具やカグラ自身の力量を考慮して否定の言葉を口にする。しかし、志信はサクラの言葉に何か思うところがあったのか視線を鋭くした。

「魔力が回復すれば召喚の儀式は可能なんだな？」

「は、はい。カグラ様の魔力が完全に回復したなら、召喚の儀式を行うことも可能のはずです」

視線を鋭くした志信に困惑しつつもサクラは頷く。すると、志信は間髪入れずに指摘した。

「それなら答えが絞られるな。カグラが買ったものは魔力の回復に使う道具ではないか？　たしか、まだ魔力が完全に回復していなかっただろう？」

「それは……はい。だいぶ回復されていますが、完全に回復するにはあと三ヶ月ほどかかるはずです」

魔力の回復に使う道具と口にはしたが、志信自身はそんな道具があるかは知らない。そのため確認の意図を込めてサクラを見ると、サクラは少しの間を置いてから口を開いた。

「魔力の回復ができる道具……そうですね、直接的に回復できるというわけではないですが、良質の『魔石』ならば所持者の魔力量や魔力回復量を増幅させることは可能ですし、使用する魔法の補助にもなるかと思います。もっとも、カグラ様ぐらいの魔法使いになるとよほど質の良い『魔石』が必要ですが」

「ふむ、『魔石』か」

『魔石』ならば、志信も知っている。かつて財務大臣を務めていたエンブズの屋敷で戦った際に、エンブズが使っていた魔法具だ。志信はその時のことを思い出し、小さく嘆息する。

「アレか……しかし、もしも本当にカグラが『魔石』を購入したのだとしたら、少々面倒な事態になりそうだな」

カグラが上機嫌な理由を考えれば、最早答えは一つしかない。サクラも志信の話を聞いて状況を理解したのか、驚きに目を見開いた。

「まさか、『魔石』を購入したのはもう一度ヨシト様を召喚するため……ですか？」

「状況を考えれば、それしかないだろう。もっとも、カグラが購入したのが『魔石』だという確証もない以上、憶測でしかないがな」

外れれば良いが、と志信は考えたものの、すぐに自分の考えを否定するように首を横に振った。

――――それは楽観に過ぎる、か。

大丈夫だと自分に言い聞かせ、その結果、再度義人が召喚されたのでは義人に対して申し訳が立たない。

志信は椅子に背を預けると、すでに一カ月近く顔を合わせていない友人のことを頭に思い描いた。

志信が義人を友人だと思えるようになってから、ここまで長い期間顔を合せなかったことはない。夏休みや冬休み、春休みなどの長期休暇だろうと、暇があれば遊んだ仲だ。

義人と出会う前の志信からすれば、ここまで縁が続く友人ができ

るとは思わなかっただろう。休日に遊ぶだけでなく、異世界にまで一緒に行くことになるなど、縁があるにもほどがある。

その友人（よしと）は、何があったのか“元の世界”へ戻った。否、戻ることができたと言うべきだろう。

元の、平和な世界に。

魔法も魔物も存在せず、志信からすれば僅かに退屈な、“元の世界”に。

「シノブ様？」

会話の途中で黙り込んだ志信を訝しんだのか、サクラが不思議そうな声を上げた。その声を聞いた志信は、声をかけたサクラではなく、ここにはいないが話題の中心になっているカグラへと意識を向ける。

“まだ”憶測の段階を出ず、カグラが義人を再度召喚しようとしているとは限らない。しかし、もし義人を再度召喚しようとするのならその時は――。

「その時は全力で止めるぞ、カグラ」

聞く者はサクラだけしかいない、決意のこもった呟き。その呟きにこめられた感情を読み取ったサクラは、表情を強張らせる。

「シノブ様、何を……」

志信から不穏なものを感じたのか、サクラが表情を強張らせたままで尋ねた。すると、志信はそんなサクラの表情を見て、苦笑を浮かべる。

「勘違いをするなサクラ。サクラが考えるようなことはしない」

ただし、と言葉をつなげ、志信は机を指先で軽く叩く。

「今はまだ、な。カグラが何もしなければ、こちらも何もしない。だが、もしカグラが義人を召喚しようというのなら、全力で止めるだけだ」

「……それをわたしに話して良かったのですか？」

カグラに告げ口することは考えないのか。そんな意図を込めた問いに、志信は苦笑を深める。

「義人のことを考えるならば“元の世界”で過ごした方が良いと、以前サクラは言った。それなら、俺はその言葉を信じるだけだ。それに、カグラのことはまだ憶測でしかないしな。違えば笑い飛ばせば良い」

そこまで口にすると、志信は止まっていた政務を再開すべく机に積まれた書類へと手を伸ばす。サクラはそんな志信をしばらく見つめた後、視線を床へと落とした。

「アルフレッド様には……」

「言わない方が良いだろう。もしも話を聞いたアルフレッド殿がカグラ側についたら勝てないからな。まあ、おそらくは中立の立場を取ると思うが」

「カグラ様の部屋から『魔石』を盗み出すのは……」

「部屋にあるとは限らないし、気づかれたら実行した者が危険だ。今のカグラはどんな行動を取るか予想できん」

志信は俯くサクラに視線を向けると、僅かに考えてから言葉を投げかけた。

「すまんな、余計な話を聞かせた。忘れてくれると助かる」

忘れてくれと言われて、忘れられるような話でもない。

結局、アルフレッドのもとからカグラが帰ってくるまでその沈黙は続くのだった。

第百二十七話：迷い

人間とは慣れる生き物である。

“向こうの世界”という異世界に召喚されたものの、日々を過ごす内に生活に慣れたように。“こちらの世界”に戻り、日々を過ごす内に義人は現在の生活に慣れつつあった。

もっとも、慣れると言っても元は十七年近く過ごした世界である。元の生活に戻りつつあるというのが正しい表現だろう。

「……さて、今日は何をするかな？」

朝起きるなり、ベッドの上で胡坐（あぐら）をかいた義人は首を傾げた。

“こちらの世界”に戻り、早一ヶ月近く。まだまだ寒さが残るものの徐々に春の気配が近づいており、世間では花粉の情報などがニュースで流れる頃。

学生である義人は短い三学期のあとにやってくる春休みを心待ちにし、そして来年訪れる就職や進学などの進路について頭を悩ませる時期である。

本来ならば。

「結局、何もないまま一ヶ月か……」

宙に視線を投じて、義人は無感動に呟く。

“こちらの世界”に戻って以来、義人は“向こうの世界”とどうにか接触を持てないかと苦心していた。

“こちらの世界”戻った際の最初の地点……山の中に小雪やノーレを連れて行き、異常がないかを調べ、義人自身も拙いながら魔法の痕跡を見つけようと歩き回る。そんな生活を送っている内に一ヶ月もの時が経っていた。

毎日のように山の中に足を運び、街中を歩き回る。もちろん、人目についても大丈夫なようにある程度服装に気をつけ、帽子を被り、一見しただけでは以前失踪した人物であることを気づかせないように多少の変装をしていた。しかし、それにも限界がある。どうやっても近所の目まで誤魔化すのは難しく、最近は義人や優希が戻ってきたのではないかと人が尋ねてくることもあった。

義人は両親に頼み込んでなんとか誤魔化してもらっているが、それもあと一カ月もてば良い方だろう。運が悪ければ、今日にも気づかれるに違いない。

「自分の部屋で明かりを点けないっていうのは意外ときついしな……」

ここ一ヶ月の生活を思い出すように、義人は目を細める。周囲の人間に気づかれないように過ごすというのは、非常に難しい。もしも近所の人に見られたら、根本的な解決にはならないがすぐさま『強化』や『加速』などの魔法を使ってその場から離れるしか義人には誤魔化す方法がないのだ。かといって、家から出ないのでは“向こうの世界”の痕跡を探すことができない。

『ヨシト、わざわざベッドの上で考え事をしなくても良いじゃろ』

そうやって義人が考え事をしていると、壁に立てかけたノーレが義人へと声をかける。その声を聞いた義人は、一度思考を打ち切ってノーレに目を向けた。

「いや、つい……」

苦笑しながら頬を掻く義人。そして、鞘に納まったノーレを見ながらここ最近の記憶を掘り返す。

“こちらの世界”で生活を送る内に、小雪やノーレも“こちらの世界”の生活に慣れてきたのだろう。余程のことがない限りは驚いたり、義人や優希に質問をしたりすることもなくなった。

慣れるまでは色々とあったものの、それも一つの思い出だろう。

例えばテレビで流れていたアクション映画を見ている際、テレビから響いた爆発音に本気で驚いた小雪が泣き出したり、ノーレが『なんじゃ!?　敵襲か!?』と本気で慌てたりすることも最早ない。

ゾンビが出てくるホラー映画を見た小雪が本気で泣いて怯え、ノーレが無言で義人にチャンネルを変えるように促してくることもない。

それ以外にも、エアコンで部屋の温度調節をすることに驚いたり、コタツに入って暖を取ることで安穏とした表情を見せたり、義人が持っていたゲームを見て感嘆したり、車や電車、飛行機の存在を教えたり……等々、他にも挙げればキリがないが、義人としても密度の濃い一カ月だった。

ホラー映画を見た小雪が、丸一日コアラの赤ちゃんのようにしがみ付いて離れなくなった時は義人も本気で困ったが。

『それで、今日はどうするんじゃ？』

「ん……どう、するかな……」

どうするかと問われ、義人は再び思考に耽(ふけ)る。

この一カ月、ほぼ毎日“向こうの世界”とのつながりを探したのは志信の存在があるからである。志信の祖父である源蔵が家に帰っていないため説明もできていないが、“こちらの世界”に志信がいないという事実は義人にとっても非常に頭と心を痛める話だ。しかし、それだというのに志信を“こちらの世界”に連れ戻す方法もなければ、こちらから“向こうの世界”に行く方法もない。

『“こちらの世界”に戻れたというのに、お主はよくそんな顔をし

ておるな』

義人の表情と口調から心境を悟ったのか、ノーレは労るような声を出した。

「……ノーレ？」

『あの仏頂面が大事な存在だというのは、妾も知っておる。お主とはまだ一年にも満たん付き合いじゃが、それでもあの仏頂面……シノブがお主の親友であり、ユキとは違った意味で大事な存在だというのは理解しておる』

そこで言葉を切ると、ノーレは僅かに雰囲気を厳しいものに変える。

『しかし、じゃ。残念ながら、こちらから“向こうの世界”に戻る術はない。お主やコユキでも、妾でも無理じゃ。ユキも……アレは妾にもよくわからんが、無理じゃろう。それでもこの一カ月、妾はお主を止めはせなんだ。この世界のことは妾もよくわからぬし、もしかしたら妾の知らない手段があるかもしれんが……』

「……」

ノーレの言葉を、義人は無言で聞く。ノーレがこれから言うであろうことは、半ば予想はできたが。

『無理だと見切りをつけることも、必要ではないか？』

そして、ノーレの言葉は義人の予想通りのものだった。

『この世界では魔法という存在が世間に認知されていない以上、誰かに“向こうの世界”に戻る方法を聞くこともできんじゃろう』

「それは……そうだけど」

“こちらの世界”にも魔法が存在していたとして、その魔法を扱うことができる人間をどうやって見つけ、協力を得るのか。もしいたとしても、“こちらの世界”と義人の知る“向こうの世界”をつなぐ魔法を知っているのか。

それら義人の願いをすべて叶える人物に出会える可能性は、限りなく低い。あるいは、ゼロと呼べるほどに。

『それにこの世界、この国ではお主は両親に養われる存在じゃ。国王ではない、ただの国民じゃ。この一ヶ月で“こちらの世界”の常識を多少学んだが、お主は世間的に独り立ちできるわけではないしのう』

当然ではあるが、人間が生きるためには食事を取り、睡眠を取る必要がある。そのための食料や寝床となる場所を得るためには金がかかり、“向こうの世界”ならばともかく“こちらの世界”で義人自身が金を得る方法はアルバイトか他人から強奪するしかない。そのため、今の生活は完全に両親の経済力に依存しているのだ。

ノーレの言葉に、義人は苦悩する。

ノーレの言いたいことは、“こちらの世界”で生活するために志信を切り捨てて見捨てることに他ならない。そこに悪意があるわけではなく、義人のことを思っての言葉だが、簡単に決断できることでもなかった。そして、そんな義人に言い聞かせるようにノーレは言葉を続ける。

『お主は“こちらの世界”に戻ることを望んでいたじゃろう？』

それは、“向こうの世界”に召喚された時から常に望んでいたことだ。“元の世界”に戻り、家族に自分は無事だと伝える。そう、

望んでいた。

――しかし、しかしである。

「“こちらの世界”に戻ることを望んでいたけど、それは志信も含めてみんなで一緒に戻ってくるって話だよ。志信がいないんじゃ、意味がない」

口に出したことで、僅かに意志が固まる。しかし、目の前の現実を考えればそれもすぐに霧散してしまう。

義人は小さくため息を吐くと、脳裏に志信の姿を思い描いた。

志信だけを置き去りにして“こちらの世界”に戻ることができたが、それを志信は怒るだろうか。

そんな自問が浮かび、すぐさま『それはない』と自答する。志信のことだから、無事に帰れたのならばそれを素直に喜んでくれるだろう、と。そんな予想を超えた確信に近い回答と、ノーレが口にした『見切りをつける』という言葉が交互に義人の頭に浮かんだ。

見切りをつければ、ただでさえ低い志信と再会する可能性がゼロになる。志信がいない“こちらの世界”を許容し、生きていくことになる。

「ったく、どうしたもんかねぇ……」

今後の生活や将来を含めて“こちらの世界”で生きていくことが可能かと聞かれれば、義人は可能だと答えることができる。反則も良いところだが、『強化』が使える以上スポーツ選手になれば生活に困らないだけの金銭は手に入れることができるだろう。

スポーツも野球だろうとサッカーだろうと、バスケットだろうと関係はない。例え変化球を百六十キロで投げられようがホームランにすることは可能で、サッカーもドリブル一本でゴールまで突破で

き、バスケットでもスリーポイントのラインから飛んでダンクシュートもできる。陸上競技とて、短距離走でも長距離走でも世界記録を塗り替えることが可能だ。良心の呵責があるとしても、『強化』を使えばそれぐらいは可能だと義人は判断している。

“こちらの世界”から消えていた期間のことを問われると閉口せざるを得ないが、学校に復学して卒業してしまえば、就職することはできるのだ。体を動かす仕事であることが前提だが。

しかし、“向こうの世界”に戻る手段があったとしても懸念すべきことがあった。

――その場合、優希はどうなる？

内心で独白し、義人は幼い頃から共に過ごしてきた少女の顔を脳裏に思い浮かべる。

“こちらの世界”に戻ることができ、両親とも再会できた。だが、もし“向こうの世界”に戻る手段があったとしても優希をどうするか。

小雪やノーレならば良い。元々は“向こうの世界”で生まれた存在のため、義人としても一緒に戻ると決断できる。

「うー……あー……」

義人はグルグルと思考を回転させるが、中々良い案が出ない。そもそもすべてがただの仮定のため、考えるのは無駄でもある。

義人がそうやって一人で唸っていると、不意に部屋の外から足音が聞こえた。二階にある義人の部屋を目指しているのか、軽快な音を立てて階段を上る音。そして、階段を上りきったのか廊下を歩く音が義人の耳に届く。

“向こうの世界”にいた経験がそうさせたのか、一瞬ノーレに手が伸びかける。しかし、その手をすぐに止めて義人は苦笑した。

現在両親は仕事に出ているため不在であり、義人の部屋に訪ねてくる……正確に言えば、義人が住む家に上がることができる人物は限られている。泥棒の可能性もあるが、ここまで無警戒に軽快な足音を立てはしないだろう。

『これはコユキかの？』

「あと優希も一緒だと思うけど……っと、もうこんな時間か。考えすぎたな」

壁掛け時計へと視線を向けた義人は、僅かな驚きを込めて呟く。考え事をしているうちに時間が過ぎたのか、起きてからすでに一時間以上が経過していた。そうやって義人が時間の経つ早さに驚いていると、無遠慮に部屋の扉が開かれる。

「おとーさん、おはよー！」

そして、そんな叫び声に近い挨拶を口にしながら小雪が飛び込んできた。小雪はタックルさながらの勢いで義人に突撃すると、子犬が飼い主にじゃれ付くかのように飛びつく。

「おっとっと……おはよう小雪。今日も元気だなー」

一応『強化』を使いながら小雪を受け止める義人。それでも勢いで後ろに倒れそうになるが、そこは見栄を張って何事もないかのように振る舞う。

「おはよう義人ちゃん」

続いて、小雪の後を追うようにして部屋に入ってきた優希が笑みを浮かべながら挨拶の言葉を口にした。義人はそんな優希に対して、

同じように笑みを浮かべて答える。

「おはよう優希」

ここ最近、毎日のように繰り返しているやり取り。そのことを自覚した義人は再び思考の海に沈もうとしたが、それよりも早く小雪が首を傾げながら口を開く。

「おとーさん、きょうはどこにいくの？」

不思議そうに、それでいて期待を込めた目で小雪が義人を見る。義人はそんな小雪の様子に苦笑すると、頭を掻きながら答えた。

「今日は家でゆっくりとするかな。少し考えたいこともあるし」

「かんがえたいこと？」

「そう。考えたいこと」

オウム返しに復唱する小雪の頭を撫で、考えることぐらいしかできない現状に僅かな落胆を抱きつつ、義人は乾いた笑みを浮かべるのだった。

考え事をすると言っても、優希や小雪の相手をしながらならば時間が経つのも早い。遊んでほしいとせがむ小雪に応対していた義人は、あっと言う間に過ぎてしまった時間についてそう解釈した。

考え事をしながら優希と話し、それでいながら小雪とも遊ぶという地味な離れ業を行っていた義人は、夕焼けに染まりつつある部屋

の中で本日何度目かになるため息を吐く。

「くー……すぅー……」

小雪は遊び疲れたのか、義人のベッドに潜り込んで寝息を立てている。昼寝というにはやや遅い時間だが、遊ぶだけ遊んで疲れたら眠るその姿は非常に子供らしかった。

「小雪寝ちゃったね」

そう言って、優希は優しげな眼差しをしながら小雪の頭を撫でる。

「そうだな」

優希の言葉を聞いた義人は、小雪を見ながら頷く。優希に撫でられることが心地良いのか、寝ながらも満足そうな笑みを浮かべていた。そんな小雪や義人達を照らすように窓から斜陽が差し込むが、小雪の眠りを妨げるほど明るいものでもない。

「……」

「……」

気まずさのない沈黙が場を満たす。義人は小雪の頭を優しい手つきで撫でる優希を見ながら、今の生活について思いを馳せた。

優希がいて、小雪がいて、ノーレがいて、そして両親がいる。学校には通っていないが、およそ“幸せな生活”と言えるだろう。

そう考えた時、義人の思考に黒い染みのようなものが浮かび上がる。じわりと、布に墨汁でも染み込むように義人の思考を黒く染めたのは、普段ならば決して考えないようなことだ。

――それは、『このままで良いのではないか』という考え。

志信のことを諦め、“こちらの世界”で平和な日常に浸りながら生きる。

“向こうの世界”に比べれば退屈で、しかし、安穏とした“こちらの世界”。魔物もいなければ、義人自身も国王などという身分ではない。多少の魔法を使えるものの、それ以外の点では他の人間とも変わらない。

そんな世界で生きていくのも、悪くない。否、むしろ良いのではないか――。

「義人ちゃん、少し、外に散歩に行かない？」

考えることに割いていた意識は、そんな優希の声で正常に戻る。声につられた義人が視線を向けると、そこには小雪の傍から離れた優希の姿があった。

「散歩？　……まあ、いいけど」

突然の申し出に戸惑うものの、断るような内容でもない。義人は多少不思議そうな表情を浮かべたものの、それをすぐさま打ち消す。

『む……妾も連れて行けと言いたいところじゃが、外ならば無理か』

「ああ。悪いけど、小雪と留守番を頼むよ」

銃刀法を理解したのか、ノーレが不満そうながらも自重するように呟く。小雪もしっかりと寝入っているのか、起きる気配はない。これならば小雪が起きるよりも早く帰ってこられるだろうと義人は判断し、優希と共に家を後にするのだった。

家を出た義人と優希は、人気の少ない夕暮れの住宅街を歩く。
極力人目の少ない道を選んで歩きながら、義人は僅かに首を傾げた。現在、先頭を歩くのは優希である。普段ならば義人の隣か、僅かに後ろの位置を好んで歩くのだが、何か思うところがあるのか義人を先導するように歩いていた。
そうやって歩くこと五分。義人達は小さな児童公園へと足を踏み入れていた。住宅街の一角に造られたその公園は、人気がないのか子供の姿も見えない。小さな砂場に滑り台とベンチが一つという、面積自体も狭い公園だった。
義人自身も幼い頃に何度かこの場所で遊んだことがあったのだが、ある程度年を取って来てみると手狭に感じる。

「行き先は……ここで良いのか？」

公園に入るなり足を止めた優希に、義人が話しかけた。その言葉が聞こえたのか、それまで先導するために背を向けていた優希が振り返る。

「特に行き先を決めていたわけじゃないんだけどね。足が向くままに歩いていたら、ここに着いたの」
「……まあ、散歩だしな。適当に歩くのも散歩らしいか」

優希の言葉に小さく苦笑し、義人は傍にあったベンチに目を向けた。

「座るか？」

「うん」

短い言葉を交わし、義人と優希は隣り合ってベンチに座る。肩が触れるか触れないかという、近くて、親しさを感じさせる距離。義人と優希が子供の頃から築いてきた距離感を表すように、二人は自然と寄り添うように座っていた。

「それで、何か話があるんだろ？」

地面に伸びる影法師を見ながら、義人が口を開く。そんな義人に倣うように、優希も自分の影法師を見ながら口を開いた。

「話ってほどのことじゃないんけどね。最近、義人ちゃんが悩んでるみたいだったから」

そう言うと、優希は義人へと視線を向ける。

「今の生活のこと？」

「まあ、な……っ」

優希相手に隠すこともないか、と内心で呟き、義人は頭を掻く。そして優希の方へと視線を向け、義人は思わず息を呑んだ。

「どうしたの？」

夕日に照らされた優希が、不思議そうに尋ねる。

「い、いや、なんでもない」

僅かにどもりながら答える義人。続いて視線を優希から外し、内

心の動揺を静めるように深呼吸をする。

――な、なんだ？　どうした、俺？

隣に座った優希を見た瞬間、僅かに、しかし確かに胸が高鳴った。優希との距離はいつも通りだが、何故か距離が近く感じる。

「義人ちゃん？」

その行動を疑問に思ったのか、優希が疑問符を浮かべながら義人の顔を覗き込む。

「その、なんだ、ちょっと近いんじゃないですかね優希さん」

「近い？」

ある意味普段通りな優希の反応に、義人は動揺を抑え込む。そして一度咳払いをすると、優希の方へと視線を向けた。

「いやいや、やっぱり気にしないでくれ」

義人は必死に誤魔化してから小さく笑うと、会話の内容を少し前まで戻すことにした。視線を優希から外し、再び自身の影法師へと落とす。

「優希はさ、今の生活を思う？」

「今の生活？」

「そう。楽しいか？」

とりあえずといった顔で質問する義人。その質問に対し、優希は迷うことなく頷いた。

「うん、楽しいよ」
「……そうか」
優希の返答を聞いて、義人の中で不明確にまとまっていた考えが徐々に形作っていく。
優希は今の生活が楽しいと言う。そして、義人にとっても今の生活は楽しい。
――それなら良いんじゃないのか？
義人の中の何かが囁く。
――今の生活を続けて良いんじゃないのか？
まるで、底なし沼にでも引きずり込むように、優しく声が囁く。
――優希達と、“こちらの世界”で生きた方が良いんじゃないのか？
いやいや、と。嘲るように声が囁く。
――“優希と一緒に”生きていければ、それで良いだろう？
「なあ、優希」
見えない“何か”に背を押されるように、義人は声を出す。視線を再び優希へと向け、真っ直ぐに見つめる。優希は義人の雰囲気から何かを悟ったのか、僅かに背筋を伸ばした。
優希とは、幼い頃から長い時を共に過ごしてきた。義人にとって

は見慣れたのに見飽きない、“これからも”見続けていたい少女。
そんな優希と、“こちらの世界”で共に生きていく。

――それで良い。

一瞬、志信（しんゆう）の顔が義人の脳裏を掠め――すぐに消える。

「“こちらの世界”で――」

それでも、義人は真っ直ぐに優希を見つめ、

「ずっと、一緒に生きていかないか？」

そう、口にした。

「――――――」

義人の言葉が聞こえたのか、それとも聞こえなかったのか。斜陽に照らされた優希は何も答えない。ただ、いつもと変わらない様子で義人を見る。

そして、どれだけの時間が過ぎたのか。義人としては十秒にも一分にも、一時間にも感じる時間が経過してから優希は口を開いた。

そして小さく、しかしはっきりと聞こえる声で、義人の言葉へ答えを返す。

――嫌だ、と。

第百二十八話：決意

滝峰義人という少年にとって、北城優希という少女との関係は中々に不思議なものだった。

幼い頃、それこそ幼稚園に通っていた頃からの知り合いである。

ある日いつも通りに幼稚園に通っていたら、両親と保育士の前で泣き叫ぶ少女を見つけたのが切っ掛けだった。泣き叫んで必死に両親から離れまいとする少女の姿を見た義人は、とても元気が良いなと幼心に思ったものである。

もしも現在の義人が当時の自分を見れば、非常にずれた感性を持っていたと赤面せざるを得ないだろう。しかし、それでも幼い頃の義人は泣いていた優希に手を差し伸べ、握られた小さな手を大切なものだと思っていた。

それからというもの、何をするにも、どこで遊ぶにも優希と一緒だった。一緒にいた時間で考えるならば、両親にも劣らない。

それでいて、優希とはどんな関係かと聞かれれば義人は悩まざるを得なかった。

幼馴染みと答えることもでき、妹のような存在だと答えることもでき、友達だと答えることもでき、親友だと答えることもできる。言葉を飾ればいくらでも答えることができそうだが、総じて優希が『大切な存在』であることに変わりはない。

その“大切”が家族に向けたものなのか、友人に向けたものなのか、それとも一人の女の子として、異性として大切なのかもわからない。それらすべてに該当する代わりに、すべてが等しく感じられていた――はずだった。“向こうの世界”に召喚される時までは。

“こちらの世界”と異なるその世界で、義人は今まで知らなかった優希の新しい顔を見た。それこそ、日常の一風景の中でも見つけることができる。環境が変わったせいか、それとも義人自身に変化があったせいかはわからない。それでも、そんな優希に心が惹かれ

たのも事実だった。
いつ頃から優希を一人の“女の子”として見るようになったのかは、義人にはわからない。
“こちらの世界”に戻ることができてからか、それとも“向こう世界”で過ごす内にか。もしかしたら、心の中ではそれ以前に惹かれていたのかもしれない。そして、それは優希も同じだろうと。
故に、優希の口から拒否の言葉が出てくるとは思っていなかったのである。

――嫌だ。

優希は、確かにそう言った。

「い、や……か……」

自身の口から出た言葉が掠れたのを、義人はどこか遠くに捉える。事実、声が掠れていたのかもしれない。
自惚れではあるが――それこそ大きな自惚れではあるが。義人は、優希が自分のことを好いているものだと思っていた。だから、“こちらの世界”で共に生きようと言えば断わられることはないだろう、と。
表情をなくした義人をどう思ったのか、優希は僅かに苦笑めいた表情を浮かべる。

「違うよ、義人ちゃん。わたしが嫌なのは“そこ”じゃないの」
「……違う？」

ならば何が嫌なのか。そう問おうと義人が口を開くよりも早く、優希はベンチから立ち上がった。そして三歩ほど義人から離れると、肩まで伸びた淡い茶色の髪を翻しながら振り返る。

振り返った優希は、それまで義人が見たこともないほどに真剣な顔をしていた。十年以上の付き合いを経ても見たことのない優希の表情に、義人はひどく気圧される。

そして、優希は真剣な表情のままで義人へと尋ねる。

「義人ちゃんは、本当に“それで”良いの？」

「……え？」

優希の言いたいことが理解できず、義人はそんな呟きを返すことしかできない。しかし優希はそんな義人に構わず、“伝えたい”ことを言葉にしていく。

「義人ちゃんは、本当にその選択で後悔しない？　藤倉君のことを諦めて、忘れて、この世界で生きていって……後悔しない？」

「それ、は……」

義人が答えるよりも早く、優希は首を横に振る。その顔は、どこか哀しげなものに変わっていた。

「ごめんね、義人ちゃん。わたしが今の生活が楽しいって言ったから、義人ちゃんの考えを曲げちゃったんだよね？」

目を伏せ、優希が言う。それを聞いた義人は、そんなことはないと言いたかった。だが、それを制するように優希は義人の顔を見ながら言葉を続けていく。

「義人ちゃんは絶対後悔する。この先、何かある度に藤倉君のことを思い出す。その度に悩んで、苦しんじゃう。わたしは、“それ”が嫌」

まるで本当に苦しさを覚えているように、優希は胸に手を当てる。そして一度だけ首を振ると、意思の強さを秘めた目で義人を見る。

「義人ちゃんがわたしとこっちの世界で生きる言ってくれたのは嬉しい。本当に、嬉しい。でも……そんな、後悔する義人ちゃんを見たくないの」

それがまるで確定した未来であるかのように、優希はそう言った。このままいけば、必ず後悔すると。近い未来、遠い将来の内で後悔すると。それこそ生涯を通して後悔すると、優希は言った。そして、そんな義人を見るのが“嫌”だと。

「優希……」

優希の言葉を聞いた義人は、思わず眼前の少女を呆然と見つめた。優希はまるで叱咤するように、決定的に間違った選択を正すように、真っ直ぐに見つめてくる。

視線を交わす内に、義人の中で再び声が聞こえた。ただし、今度は底なし沼に引きずり込むような耳心地良い声ではない。義人自身の、迷いが晴れたような声だった。

――このまま“こちらの世界”で志信のことを忘れたように生きて、それで満足できるか？

否である。

――――そもそも、忘れることができるのか？

断じて否である。決して、そんな浅い付き合いではなかった。

“たかが違う世界にいるぐらいで”縁を切りたいと思えるような付き合いではなかったのだ。

そこまで思った時、義人は急に笑いが込み上げてくるのを感じた。

「……はっ、はははははは！　あはははははははははははは！」

顔を手で覆い、義人は笑う。それは、たかが一ヶ月程度で諦めようとした自分への嘲笑だ。

“向こうの世界”にいた時は、三年だろうと待ち続けて“こちらの世界”に帰ろうとした自分が、一ヶ月という時間で諦めようとしている。ぬるま湯のような生活に浸る内に、あっさりと骨が抜けてしまったらしい。そんな自分を、義人は笑い飛ばす。

そうやって義人はひとしきり笑うと、優希に対して頭を下げた。

「あはは……あー、悪い、優希！　さっきの言葉は忘れてくれ！」

試せる手をすべて打ったかと言えば、答えはノーである。諦めるには早く、諦めかけていた心は既にない。

他力本願になるが、魔法のことならばノーレや小雪がいる。もちろん義人自身も魔法が使える以上はできることがあるのだ。ノーレは無理だと言ったが、それも推測に過ぎない。探せば“こちらの世界”にも魔法を使える人間がいる可能性もある。いたとして“向こうの世界”に渡る術を知っているかはわからないが、可能性はゼロ

ではない。
笑い出した義人を見て優希は少しだけ驚いたものの、そのあとの言葉を聞いて微笑みを浮かべている。そんな優希を前にして、義人はベンチから立ち上がった。

「優希」
「なに？」
「優希も手伝ってくれるか？」

何をとは優希も尋ねない。ただ、嬉しそうに頷いた。
優希が頷いたのを見た義人は、自身でもわかるぐらいに笑みを浮かべる。しかし、そこでふと思うことがあった。
昔自分が手を引いていた少女は、いつの間にか自分の隣に並び、しっかりと歩いている。その上、間違いかけた自分を正してくれた。感謝してもしきれない。そして、感謝だけでは済まない感情が義人の内側にある。
義人の脳裏に、幼い頃から優希と共に過ごした記憶が流れていく。それらの記憶は記憶の引き出しの一番上に納まっていたのか、わざわざ深く思い出さなくてもすぐに思い浮かべることができた。
自分自身の中にある感情をいつ抱いたか、それを思い起こすように義人は記憶を振り返る。
自覚がなかっただけで、“その感情”を抱いたのは子どもの頃かもしれない。
もしかすると、ごく最近なのかもしれない。
共にいることが当たり前になっていて、見落としていたのかもしれない。だが、少なくとも今は自覚している。
“その感情”が、心の奥深くまで根付いていることを。

「……優希」

義人は畏まったようにその名を呼ぶ。
タイミングとしては間違っている気もするが、それでも、義人はこの場で“その感情”を言葉にして伝えたくなった。

「……なに？」

今度こそ義人の様子からただならぬものを感じたのか、優希が緊張したように背筋を伸ばし、真っ直ぐに義人を見る。

「その、あのな？　このタイミングで言うのもなんだけどさ、あー、なんだ……くそ、改まって言おうとすると言いにくいな……」

優希の視線を受けた義人は、思わず逃げ腰になりかけた。しかし、それよりも強い感情に突き動かされる。

「これからも、よろしく」

そう言って、思わず義人は自分を殴りたくなった。
そんな遠回りな言葉ではない、もっと直接的に伝えたい言葉がある。
決意を込めて、義人が一歩優希へと近づく。優希はそんな義人から目を逸らさず、義人の言葉を静かに待っていた。そんな優希の顔が赤く見えるのは、沈む夕日に照らされたためか。それとも、義人が言うであろう言葉に期待をしているためか。
思えば十七年、この言葉を家族愛以外で口にしたことがないなと頭の片隅で義人は思う。しかし、それで良かった。初めてこの言葉を使う相手が優希で本当に良かったと思いながら、義人は生まれて初めて『告白』の言葉を口にした。

「好きだ、優希」

その言葉を口にするだけで、ひどく緊張する。それでも義人は、伝えたい想いを言葉にしていく。

これから先に何があるかわからず、再び迷って悩むことがあるだろう。しかし、傍に優希がいてくれるのならばどんな困難だろうと乗り越えられる。今日のように情けない姿を見られても、それが優希ならば良いのだと思える。

「幼馴染みとしてでもなく、友達としてでもなく、一人の女の子として好きだ。これからもずっと、優希と一緒にいたい。ずっと、傍にいてほしい。また間違いかけたら、正してほしい。だから――」

声が震えないように必死だった。伝えたい想いをすべて口にすると、義人は優希に対して頭を下げる。

「俺と、付き合ってください」

言い切った。そのことに僅かな安堵を抱くが、それですべてが終わったわけではない。

義人が頭を下げて数十秒。答えを待つだけで義人の心臓は跳ね回った。

それこそ義人にとっては永劫に近い時間が経過したように感じられ、義人は僅かに頭を上げて優希へと目を向ける。

「……優希？」

そう声をかけ、義人は思わず目を見開く。

「……っ……ぅ……」

優希は顔を俯かせ、肩を震わせていた。よく見れば、頬に透明の雫が伝っている。

「ゆ、優希!?　どうした!?」

予想外の優希の反応に、義人は狼狽えながらも完全に顔を上げた。優希はそんな義人を前にしながら、手の甲で頬に流れた涙を拭う。

「ごめんね、義人ちゃん……」

ごめんという言葉に、思わず義人の動きが止まる。やはりタイミングが悪かったのかと、後悔が過ぎる。

しかし、涙を拭った優希の顔は、嬉しさをこらえるような笑顔だった。

「心配しないで。嬉しくて、涙が出ちゃっただけだから」

「嬉しい？　それじゃあ……」

喜色を浮かべる義人。そんな義人に、優希は淡く笑みを浮かべながら尋ねる。

「本当に、わたしで良いの？」

「優希が良い。優希じゃなきゃ駄目なんだ」

即答だった。そこは義人としても微塵も譲れるところではない。

「あとで後悔しない？」

「絶対しない」

後悔などしない。するわけもない。

「わたしは、義人ちゃんを見ているだけでも幸せだよ？」
「なら、それ以上に幸せにする」
その言葉だけでも、嬉しく感じる。しかし、義人が望むのはそんな関係ではない。
「だから優希、これからもずっと一緒にいてほしい」
義人がそう告げると、優希は満面の笑顔で頷いた。
「――うんっ！」
それと同時に、優希が笑顔のままで義人の胸元へと飛び込む。義人はそんな優希を抱き留めると、優しく抱きしめた。
腕の中にいる優希は、義人が思っていたよりも小さく、柔らかい。服越しでも伝わる温かさと、鼻に届く甘い香りが義人の鼓動を僅かに早める。
義人は以前、レンシア国に向かう途中の天幕の中で優希を抱きしめてしまった時のことを思い出した。あの頃は戸惑い、すぐに身を離してしまったが今はその逆である。
優希を正面から抱きしめ、義人は安堵すら覚えていた。嬉しさと緊張と安堵が適度に混ざり合い、今の状態に幸福感を感じさせる。
優希は十年以上の付き合いで積み重ねてきた想いがそうさせるのか、義人を強く抱きしめていた。
そうやってしばらく抱き合っていたが、やがて義人と優希は互いにゆっくりと身を離す。そして顔を見合わせると、照れるように笑った。
「これからもよろしくな、優希」

「こちらこそよろしくね、義人ちゃん」

そう言うなり、優希は目を閉じて僅かに上を向く。その動作で優希が何を求めているか悟った義人は、優希の思わぬ行動に内心驚いた。しかし、断る理由もなければ断る気もない。

優希の肩を抱きしめ、義人も目を閉じながら顔を近づけていく。

夕日に照らされて地面に映る二つの影法師がゆっくりと近づき――その距離はゼロになった。

第百二十九話：決行

窓から差し込む月の光と、机の上に置かれた燭台が照らす明かりの中。カーリア国の宰相であるアルフレッドは、相談があると訪ねてきた財務大臣のロッサとの話を終え、小さくため息を吐いた。

「それでは、失礼します」
「うむ。また何かあれば報告を頼む」

一礼して去っていくロッサの背中を見送り、アルフレッドは椅子に背を預ける。

「文官と武官の間で溝が大きくなりつつある、か……困ったのう」

軽く顎を擦りながら呟くが、事は静観できるほど簡単なことでもない。元々文官と武官は折り合いが悪いことが多く、カーリア国もその例に漏れなかった。

アルフレッドもカーリア国の政治に関わりながら生きて四百年近くになるが、文官と武官の仲が良かったことはほとんどない。職務の内容が違うのだから溝ができるのも仕方ないのだが、それにも限度がある。

「その辺りの公平性がある者が上に立ってくれれば良いのじゃがな……」

愚痴を吐きつつ、アルフレッドは当代の国王である義人のことを頭に思い浮かべた。

文官と武官を分け隔てなく扱う――臣下を上手く扱うという点では、歴代の国王の中でも群を抜いている。それこそ、アルフレッ

ドが仕えるきっかけになった四百年前の国王にも匹敵するだろう。もっとも、匹敵するのはその一点だけで、他の要素は劣っているのだが。

「どうしたものかのう……やはり、シノブ殿を新しい国王に立てるべきか……しかし、それだとカグラが反発するし、シノブ殿はどちらかというと武官寄りじゃ……ヨシト王が戻ってくればすべて解決するんじゃがなぁ」

義人達が姿を消して既に二ヶ月近くが経過している。他国も間諜を通じて義人達が姿を消したことをつかんでいる頃だろう。少なくとも、レンシア国とハクロア国は既に気づいているものとアルフレッドは見ていた。

王がいない国など、いくらでも崩しようはある。このままでは遠くない内に他国からの侵略を受けることになるだろう。

アルフレッドには前代の国王が死んでからの十年、カーリア国を国として存在させた実績もあるが、それは奇跡に近い。アルフレッド自身の内政における手腕と、他国の状況や自国の価値が低いことが功を奏したが、今ではそれも難しい。良くも悪くも、今のカーリア国には価値があるのだ。

商工業面では、玉鋼というカーリア国独自の特産物もできた。軍事面では『召喚の巫女』であるカグラがいる。

最悪、国土を脅かさぬ代わりにカグラや玉鋼の製法を差し出せという要求が来る可能性もあった。無論、アルフレッドとしてはそんな話を持ちかけられても受ける気はない。

「レンシア国と同盟を組めば当面は凌げそうじゃが、そうなるとハクロア国と戦うことにもなるじゃろうしな……それに、国王抜きの判断では同盟もできんか」

義人達が戻ってくれば万事解決とまではアルフレッドも考えていないが、現状が好転するのは間違いない。ほんの一部の問題を除いてではあるが。

ほんの一部の問題――それは、カグラについてである。

義人が姿を消してからすでに二ヶ月近くの時が経っているが、最近カグラの様子がおかしい。義人が姿を消した当初こそは情緒不安定なこともあったが、今では毎日笑顔で働いている。

そう、笑顔で働いているのだ。何か心境の変化があったのか、政務にも身が入っているし、国王代理である志信の補佐も的確にこなしている。特に、ここ数日の働き振りはアルフレッドにも目を見張るものがあった。

何があったのかと不審に思ったアルフレッドは一度カグラを呼び出し、話を聞いてみたこともある。そして、その時の回答を聞いてアルフレッドは思わず絶句した。

――だって、もう少しでヨシト様が戻ってくるんですから。

笑顔で、カグラはそう言った。義人が戻ってくると、何一つ疑わぬ瞳でそう言い切ったのである。

何故、とは聞かなかった。方法は一つしかない。

止めろ、とは言えなかった。国王を再度召喚すれば現状を乗り切れる可能性が高い以上、カグラを諭せるだけの理もない。

確かにもうじきカグラの魔力は完全に回復する。そうなると、再度『召喚の儀』を行うことも可能だろう。しかし、カグラは気づいていない。否、もしくは気づいても敢えて無視しているのかもしれない。

再度『召喚の儀』を行っても、絶対に義人が召喚されるという保

証はどこにもないことに。

そもそも、五十年に一度という規則を破って行うのである。成功するかと聞かれれば、アルフレッドとしても首を傾げざるを得なかった。

「それでも、あの子はやるんじゃろうな……」

ため息と同時に独白し、アルフレッドは額に手を当てる。

カグラが義人を再度召喚しようとしているのは、間違いなく私心だろう。『召喚の巫女』としてではなく、カーリア国を背負う一人の臣下としてでもなく、カグラと言う名の一人の少女が下した決断。力づくで止めることも可能だが、宰相であるアルフレッドと『召喚の巫女』であるカグラが争うわけにもいかない。もとより、言って聞くような問題でもない。

「この時期に『カグラ』が魔力を失うのは危惧すべきことじゃが、他国の情勢を見ればまだどうにかなる、か……それに、滅多にない“あの子”の我が儘じゃ」

宰相として考えるならば、全力でカグラを止めるべきだろう。しかし、アルフレッド個人としては止める気はない。

失敗すると決まったわけでもないのだ。もしかすると、再び義人達が召喚されて万事が上手く収まる可能性もある。

「シノブ殿達も何やら動いておるようじゃしな……さて、時代の変わり目でも近づいているのかのう……」

現在のカーリア国に愛着はあるが、このままでは遠くない内に破滅する可能性が高い。アルフレッドが奔走すればどうにか丸く収ま

る可能性もないではないが、いつでも時代を動かすのは人間である。
この国の宰相ではあるが、魔物である自分は傍観に徹する。
アルフレッドはそう決めた。

義人が姿を消して二ヶ月近くの時が過ぎた。
その間の時の流れが早かったのか、それとも遅かったのかはカグラにもわからない。ただ、無味乾燥とした時間が流れていたことだけは確かである。

――――でも、それも終わりですね。

心中で呟き、カグラは月明かりに照らされた自室の中へと視線を向けた。
眠るための寝台と、持ち込んだ政務をこなすための机。それに衣装箪笥と小物を入れるための棚。石造りの床には絨毯が引かれているが、それも豪奢なものではない。必要最低限の物だけが置かれた部屋である。
カグラは小物を入れるための棚へと近づくと、引き出しを引く。そして中から『魔計石』を取り出すと、壊れ物を扱うかのように握りしめた。すると、透明だった『魔計石』が徐々に色を変えていく。
紫、藍、青、緑、黄、橙、赤と七色に色を変え、それでも握り続けると『魔計石』にヒビが入り、遂には砕けて絨毯の上へと散らばった。『魔計石』で測ることができるのは、普通の魔法使いのおよそ百人分の魔力までである。それ以上の魔力を持つ者が握った場合、

『魔計石』自体が測りきれずに壊れてしまう。
そして、カグラ自身の魔力は最大まで回復すれば『魔計石』の計測可能な容量まで到達する。カグラも自分の魔力がどの程度まで回復しているかはおおよそ感覚でわかるが、『魔計石』を使うほど正確ではない。しかし、感覚として魔力は全快しており、その予想を証明するかのように『魔計石』も砕けた。
その結果を目の当たりにして、カグラの唇が緩やかに弧を描く。
『召喚の儀』から九ヶ月ほどの時が流れ、ようやく魔力が全快した。本来ならばあと一ヶ月ほどかかったが、商人であるゴルゾーから購入した魔法具――『魔石』によって魔力の回復速度が速まったおかげだろう。給金の使い道がなかったカグラにとっては、ゴルゾーから『魔石』を購入するだけの金もあった。

「これで、もう一度召喚ができますね」

ぽつりと、カグラの口からそんな呟きが零れる。
義人が姿を消して二ヶ月。
義人が“向こうの世界”へと帰って二ヶ月。
義人と言葉を交わすことがなくなって二ヶ月。
義人の顔を見ることがなくなって二ヶ月。

「……っ！」

強く、右手を握りしめる。
思えば、ここまで執心することになるとはカグラ自身思っていなかった。
『召喚の巫女』として国王を補佐し、カーリア国を繁栄させていく。『召喚の儀』を行う前のカグラはその程度しか考えていなかった。無論、歴代の『召喚の巫女』と同じく、新しい国王にその身を捧げることも理解し、覚悟していた。ある意味では、『召喚の巫女』

とは召喚した人間をカーリア国に縛り付けるための役目でもある。女として新しい国王に抱かれ、情を植え付け、この国で生きていくよう囁く。そこに愛情はなく、カーリア国への忠誠心と愛国心しかない。

少なくとも、本心からカグラはそう思っていた。

カグラは小物を入れる棚から小さな装飾された木箱を取り出すと、蓋を開いて中から木製の手櫛（てぐし）を取り出す。髪留めとしても使えそうな落ち着いた色合いの手櫛は、かつて義人から贈られたものである。もっとも、贈られてからは大事に仕舞い込んでいたため、余程のことがない限り使うことはなかった。カグラは手櫛を手に取ると、大切に、抱きかかえるようにして胸元に当てる。

義人自身から受け取った日のこと。

レンシア国で髪を留め、共に踊った日のこと。

他にも、義人の傍で過ごした日々がカグラの中で思い起こされる。何気ない日常も、カグラにとって掛け替えのないものだった。そして、そんな日々を過ごす内にカグラの中で芽生えた想いがある。

初めは忠誠心に近い感情だった。しかしそれがすぐに親しみを込めたものになり、好意に変わった。それも、今ではしっかりとした恋慕の情がカグラの中に根差している。

一体いつ頃から義人に惹かれていたのか、カグラにもわからない。元々恋愛とは無縁の存在であり、周囲の環境もそれを後押ししていた。

記憶にある自身の母や、前代の周囲にいた女性のことを思えばそれも当然だろう。

カグラの父でもある前代の国王は、見目麗しい女性と見れば見境なく手を出していた。既に十年以上前に殺されたが、その所業は幼い頃のカグラから見ても唾棄すべきものだったのである。故に、カグラは新しく召喚した国王に惹かれることなどないと、そう思っていた。

「ふふ……それなのにここまで強く想うなんて……昔のわたしなら思いもしませんでしたね」

自嘲するように笑うが、後悔はない。そして、これから自分が行うことに対する躊躇もなかった。

状況証拠しかないが、義人達は“向こうの世界”へ渡って元の生活に戻ったのだろう。今頃平和に過ごし、“こちらの世界”のことを忘れようとしているかもしれない。

義人の性格を知っているカグラとしては、それはないと言い切れる。しかし、『自分のことも忘れようとしている』と思えば、平静ではいられなかった。

当初は召喚されたことに対し、怒りを見せた義人である。再度召喚したとなれば、その怒りがどれほどになるか計り知れない。

再び怒鳴られ、憎しみに近い目で見られるかもしれない。今度こそ、手に持った剣で斬りかかってくるかもしれない。

そんな可能性を考えるだけで、挫けそうにもなる。しかし、義人に再び会いたいという感情がその恐怖を上回った――上回ってしまった。

「ごめんなさい、ヨシト様……」

謝罪は一度。

そこにいたのは『召喚の巫女』としてではない、一人の“少女”だった。

カーリア国の現状を考えるならば、自分が今から行う行為は褒められたものではない。カーリア国最強の矛であり、盾でもあるカグラが魔力を消費しようというのだ。だが、それらの状況をすべて踏まえた上で、カグラは決断した。

カグラは手櫛を木箱に戻すと、元の位置に戻して棚を閉める。そして『魔石』が懐に入っていることを確認すると、部屋に設けられ

た窓を開け放ち、何の躊躇もなく飛び降りた。
全身を使い、カグラはほとんど音を立てずに着地する。カグラには護衛の必要がないため巡回の兵士が部屋を訪れることはなく、現在カグラが着地した場所も巡回の経路から外れている。そのため、カグラはいっそ気軽な足取りで歩き出した。
天上を覆う星空に、夜であっても地上を照らす月の光。特に今日は満月だったためか、視界は明るい。
冬らしい肌寒さがカグラを包むものの、これから先のことを思えば気になることはなかった。
全快した魔力に、ゴルゾーから購入した『魔石』。これだけあれば再度の召喚は可能だとカグラは判断している。あとは城の外れに建てられた召喚用の祭壇まで行き、『召喚の儀』を行うだけだ。

「……？」

逸る気持ちを抑えながら進むカグラだったが、不意にその足が止まる。そして注意深く前方の様子を窺い、僅かに腰を落とした。

――――これは、魔力？

自身の進む先に、魔力を持った何者かが潜んでいる。それを認識したカグラは静かに臨戦態勢を取った。

「そこにいるのは誰ですか？」

誰何（すいか）の声をかけつつ、カグラは思考を巡らせる。
夜間に城の外に潜む人物。それも、離れた場所からでも感じるほどの魔力を持っているのだ。他国の間者か、もしくは暗殺者か。魔

力を持つ以上戦闘能力を持っている可能性が高いため、後者である可能性が高い。
そうやって警戒するカグラだったが、その人物はあっさりと姿を見せる。

「……サクラ」

姿を見せたのは、サクラだった。常のメイド服を身につけているものの、その身に纏う雰囲気は普段とは比べ物にならないほど研ぎ澄まされている。
サクラはここ最近のカグラの様子からもうじき再召喚を決行すると踏み、待ち伏せていたのだ。そして、当たってほしくはなかったが、予想通りカグラが姿を“見せてしまった”。

「カグラ様……一体どこに行かれるつもりですか？」

まるでカグラの行く手を阻むように、サクラはそう告げる。それを聞いたカグラは、サクラの考えを理解して眉を寄せた。

「わかって聞いているのでしょう、サクラ？」
「はい。召喚の祭壇に行かれるつもりですよね」

カグラの言葉に、サクラは戸惑うことなく頷く。それを見たカグラは、ならばと口を開いた。

「それならわたしが何をするかもわかるでしょう。そこを退いてください」

止めるのならばサクラでも許さない。そんな意志を込めた目でカグラはサクラを見る。

「お断りします」

しかし、サクラは毅然とした様子で首を横に振った。

「……あら、サクラはヨシト様にもう一度会いたくないんですか？」

カグラの声色が冷たいものへと変わるが、それでもサクラは一歩も退く気配を見せない。

カグラの言葉に表情を変えるものの、それはカグラの言葉に気圧されたものではなかった。

「わたしだって、もう一度ヨシト様にお会いしたいです」

それは小さく、確かな願望を込めた声。サクラとて、会えるものならもう一度義人に会いたかった。そして、もう一度仕えたかった。だが、それとは別に義人自身の幸福を願う心も確かに存在する。

「でも、それはヨシト様の意思を無視しています！」

一度召喚をしている以上、カグラはおろかサクラにもそんな台詞を言う権利はないのかもしれない。しかし、義人に仕える前ならば決して言えなかったであろう言葉でもある。カーリア国でもなく、カーリア国王でもなく、義人自身のためを思っての言葉など。

「ヨシト様は、“こちらの世界”よりももっと平和な世界で生きるべきです。だからカグラ様、わたしは全力であなたを止めさせてもらいます」

明確に戦う意思を示すサクラに、カグラは困ったような視線を向

けた。それはまるで、幼い子供に駄々を捏ねられた母親のような反応に近い。

「あなただけでわたしを止められると？」

確かにサクラはカーリア国でも指折りの使い手ではある……が、それだけだ。少なくとも、カグラにとっては『それだけだ』と片付けることができる。もしもカーリア国の全軍を率いていたならば話は別だが、周囲に大勢の兵士を伏せている気配はない。

「止められる、止められないではないんです……止めます」

それでも、不退転の決意を込めてサクラは対峙した。カグラがサクラの力量を知るように、サクラとてカグラがどれほどの力量を持つかは知っているのだ。魔力の量でも大きな差があり、魔法の技術でも“一部”を除いて大きな差がある。

恐怖がないと言えば嘘になるだろう。明確な敵意を持ってカグラと対峙するなど、生まれて以来考えたこともない。だが、カグラがもう一度義人に会いたいと思ったように、サクラも思ったのだ。

――例え二度と逢えなくとも、平和な世界で義人が幸せに生きるのならばそれで良いと。

それがサクラなりの忠誠であり、義人への好意の形だった。そして、その考えに同調するのはサクラ一人ではない。

「よく言った、サクラ」

そんな声を響かせて、カグラを間に挟む形で志信が姿を見せる。手には『無効化』の棍を持ち、動きやすさを重視したのか半袖のシャツに薄手のズボンという服装だった。

完全に気配を消していたため気づけなかったのか、姿を見せた志信にカグラは僅かな驚きを覚える。

「カグラ、お前の気持ちもわからんではない。だが、義人の意思を無視した召喚は止めてもらう」

思いとどまらせるための志信の言葉に対して、カグラは感情の見えない声で呟く。

「……ヨシト様が“こちらの世界”に戻りたいと思っている可能性もありますよ？」

「たしかにその可能性もある。だが、あいつならば戻ろうと思えば自力で戻る方法を探すだろう。そんな奴だ」

そう言うと、志信は付け足すように、無自覚に爆弾を投下した。

「それに、傍に北城もいる。何かあれば義人を支えるだろうさ」

その言葉を聞いた瞬間、ざわりと、カグラの雰囲気が変わる。それを目の当たりにした志信は、戸惑ったように目を瞬いた。

「む……何か変なことを言ったか？」

「シノブ様、それは藪蛇というものです」

呆れたようにサクラが呟くが、すぐに気を取り直す。既にカグラから放たれる気配が剣呑なものへと変わっており、これ以上気を抜ける状況でもなかった。

「……わたしは、もう一度ヨシト様に会いたいんです」

自分に言い聞かせるように、カグラはもう一度だけ自分の願いを口にする。自分の胸の中にある感情は、これ以上抑えようとしても抑えられない。

――――もう一度逢いたい。

その一念を込めて、カグラは宣言した。

「そのためにも……押し通ります」

カグラの声色と雰囲気からこれ以上の問答は無意味と判断した志信は、小さく首を横に振る。

「是非もなし、か。いくぞ、サクラ」

「はい！」

そして、志信とサクラは申し合わせたように同時に地を蹴るのだった。

第百三十話：執着

カグラの『召喚の儀』を止めるための手段は二つ。

一つは、カグラ自身を『召喚の儀』ができない状態にすることである。

殺すことは論外だが、気絶させれば事足りるだろう。あとは『魔石』を破壊し、カグラ自身は拘束する。

そしてもう一つは、カグラの持つ魔力を消費させることである。

『召喚の儀』にカグラ自身の魔力が必要な以上、魔法を使わせることで魔力を消費させれば『召喚の儀』は行うことができなくなる。無論、行おうと思えば行えるが、『召喚の儀』にはカグラの持つ魔力のすべてを使う。魔力が減った状態で行えば、その結果は推して知るべしだろう。

戦いの中で攻撃魔法を使わせる、もしくは多少の傷を負わせて『治癒』を使わせれば魔力を消費させることができる。

実現の可能性や今後のことを考えるならば、後者の方が良い。ある程度魔力を消費させることで『召喚の儀』を不可能にし、“ひとます”カグラに諦めさせることができる。前者の場合は、今回を乗り越えても再び近い内に同じことが起こる可能性が高い。殺すという手段が取れない以上、再発を警戒するならば、後者の手段を取るべきである。例えそれが、問題の先送りに過ぎないとしても。

そして、志信とサクラが選んだのも後者だった。

「はっ！」

「やぁっ！」

同時に地を蹴った志信とサクラは、ほぼ同じタイミングで自身の武器が届く間合いへと踏み込む。志信の持つ武器は棍であり、サクラは一瞬で両手に纏った刃渡り一メートルほどの氷の刃。刃と言っ

ても切れ味は鈍くしてあるため、どちらかと言えば打撃武器に近い。
志信はカグラの肺を、サクラはカグラの左脇腹を狙ってそれぞれ武器を振るった。
棍による打突と、氷刃による斬撃。
それは二対一という有利を活かした同時攻撃であり、常人ならば避けることもできず、常人でなくとも精々防御するのが関の山だろう。志信とサクラの腕が二流三流ならば話は別だが、こと接近戦においては一流の腕を持つ二人である。

「……はぁ」

そんな二人に対して、カグラは小さくため息を吐いた。
カグラは右足を引き、半身開く。そして振り向きざまに志信が突き出した棍の先端を右手の甲で軽く叩いて軌道を逸らし、サクラの繰り出した氷刃の“腹”に左手を当て、半身を開いた勢いで上へと逸らす。

「っ！？」

サクラの口から僅かに驚愕の声が漏れた。カグラが取ったのは、防御でも回避でもなく攻撃の受け流し。それも一人に対してではなく、二人同時に攻撃を逸らす。
斬撃が逸らされたことで、サクラの体勢が僅かに崩れる。そして、その僅かな隙を見落とすカグラではなかった。
鋭く呼気を発し、一瞬でサクラの懐へと滑り込むと同時にカグラは掌底を繰り出す。下手に受ければ骨をまとめて圧し折るであろう一撃を前に、サクラは左手に生み出していた氷刃を咄嗟に防御へと回した。それと同時に崩れた体勢を無視して地面を蹴り、少しでも衝撃を殺すべく後ろへと跳ぶ。

「――――ぁぐっ！？」

しかし、それも些細な抵抗に過ぎない。カグラの掌底はサクラが生み出した氷の刃を容易く打ち砕くと、その勢いを持ってサクラを弾き飛ばす。

サクラは腹部に伝わる衝撃に意識を失いかけたが、歯を食いしばることで気を保ち、なんとか足から着地した。しかし、乾いた地面に着地したことでそのまま体が後ろへと滑っていく。そしてカグラは、そんなサクラを何の躊躇もなく追撃した。掌底を放って数瞬も経たない内に地を蹴り、一気にサクラの間合いへと踏み込む。

地面を滑ることで勢いを殺している以上、サクラに打つ手はほとんどない。右手に残った氷刃を振るおうとも、踏み込みすらできないのでは体勢を崩すだけだ。防御をしても、カグラの前では意味がない。

――――せめて足止めだけでも！

故に、サクラは別の手で攻撃に転じる。一瞬で魔力を練って空中に氷の矢を生み出すと、風のような速度で迫るカグラに向けて撃ち出した。

撃ち出した氷の矢は合計八つ。さすがにこの状況で不殺に努める余裕もなく、先端は鋭利に尖っている。魔法を放つまでの時間と、撃ち出した矢の数を考えれば十二分に強力な攻撃だろう。少なくとも、今の状況でそれ以上の攻撃はできそうにもない。カグラとて、この状況ならば防御に回らざるを得ないはずだ。

そんな“楽観”が、サクラの心のどこかにあった。

「甘いですよ、サクラ」

カグラは最も早く自分に命中するであろう氷の矢を瞬時の見切りでつかみ取ると、瞬く暇すら挟まずに残りの氷の矢をつかんだ矢で叩き落とす。

――それはまさに、目にも止まらぬ早業だった。

そして、そんな神業じみたカグラの行動を目の当たりにしたサクラは、内心で驚愕の声を上げる。

サクラとて、カグラの力量は知っていた。しかし、それはあくまで義人を召喚する前の話である。

義人を召喚してからはその補佐に回っていたため、カグラが武芸の修練にかける時間はほとんどない。そのため、かつての腕を保つのが精一杯か、ある程度は腕が落ちているだろうというのがサクラの予想だった。

例え莫大な魔力で『強化』を使おうが、志信と二人がかりならば五分に渡り合い、『強化』以外の魔法を使わせて魔力を消費させることができるだろう、と。

それは楽観であり、カグラへの侮りであり、サクラの願望でもあった。相手の力量を低く見積もるなど、油断に他ならない。それだというのに、志信と二人がかりならば対抗できると判断した。

後悔がサクラの頭を掠めるが、後悔する時間など刹那の間すらない。眼前には無表情のカグラが迫っており、一秒も経たずにサクラを叩き伏せるだろう。カグラもサクラを殺す気などないが、邪魔をする以上は打ち倒す。

「させん！」

そんなカグラを追うようにして地を蹴った志信が、カグラの側頭部目がけて棍を振るった。既に容赦もなければ加減もない。

二対一の上、下手すれば相手を殺めかねない攻撃など志信としても忌避すべきことではある。しかし、十年以上培ってきた修練が志信に告げるのだ。

殺す気でかからなければ、相手にすらならないと。

最初の攻撃とて、ほとんど手加減をしていない。それだというのに、カグラは振り向きざまに志信の打突を見切り、棍の先端を軽く叩いて逸らしている。

――――魔法だけではなく、武芸も得意とはな。

感嘆の念を抱くが、志信はそれをおくびにも出さない。

風を切って迫る棍を察知したカグラは、頭部と棍の間に右手を差し込んで棍を受け止める。受け止めた際に竹が破裂するような音が響くが、カグラ自身にダメージはないのだろう。素早く志信に視線を向けると、受け止めた棍を手のひらで握り込み――――そのまま握り潰す。

「ぬっ！？」

これにはさすがの志信も驚かざるを得ない。横から衝撃を与えて折るのならばともかく、『強化』を使っているとはいえ棍を握り潰したのだから。

『無効化』の棍は先端から中ほどにかけて、一気に粉々に砕け散る。樫の木と同等の硬度を持つ木材を使用していたが、『強化』を使用したカグラにとっては木材を握り潰すことなど造作もない。棍の先端に施された『無効化』の術式も、カグラの膨大な魔力をもとに発動している『強化』の前では数秒ももたなかった。

志信は即座に棍から手を離すと、カグラの反撃を警戒して一気に

距離を取る。その間に、サクラもカグラから大きく距離を取った。
しかし、カグラからの追撃はない。
カグラは手の中にある木片を地面へと落とすと、口の端を吊り上げる。

「無駄です。わたしには勝てません」

そして、何の慢心も感じさせない口調でそう告げた。カグラにとってはそれが事実であり、志信とカグラをあしらったのは当然の結果に過ぎない。
大きな魔力を持つ者は、それだけで一つの武器を得ることになる。莫大な魔力で『強化』を使えば、それに見合っただけの身体能力の向上が可能となる。特に、カグラほどの魔力を持つ人間はほとんどいない。魔力なしの身体能力に限れば志信の方が勝るが、魔法を使用することによってそのアドバンテージも容易く逆転する。
悠然と立つカグラを見ながら、サクラは悔しげに眉を寄せた。

――やはり、体術のみでカグラ様に魔力を使わせるのは無理ですか……。

『強化』は補助魔法に分類されるが、体外に魔力を放出しないためカグラ自身の魔力が減ることもない。体術で互角の勝負に持ち込むことができれば、カグラとて志信とサクラを倒すために別の手段として魔法を使わざるを得なかっただろう。しかし、『強化』を使用したカグラの前では互角に渡り合うことすら難しかった。

――できれば取りたくなかった手段ですが、仕方ないですね。

内心で決意を固め、サクラは眼前のカグラを真っ直ぐに見据える。

「シノブ様」

「ああ。わかっている」

かけた声に、志信が答えた。

こうなった以上は志信がカグラを抑え、その隙にサクラが魔法を叩き込む。言葉にすれば、それだけだ。作戦と呼ぶのもおこがましいが、この状況で打てる手の中では最もカグラが魔法を使う可能性が高い作戦になる。

そこでふと、サクラは思う。

もしも義人がいたならば今回の戦いも起きなかっただろうが、共に戦うのが志信ではなく義人だったらまた別の手が打てたのに、と。

戦いには相性というものがある。そして、サクラから見れば志信とカグラの相性は最悪に近い。『強化』を使ったカグラが相手では接近戦で劣ってしまうため、どうやっても志信には勝ち目がないのだ。しかし、その点で言えば義人はカグラに対する対抗手段を持っていた。

それは、以前義人がレンシア国で使った『加速』である。

カグラと戦って勝つためには、何か一点でも良いからカグラの持つ能力を上回ることが最低条件。つまり、特化した技能を持っていればカグラを打倒できる可能性がある。そのため、義人が『加速』を使えばカグラが出せる速度を上回り、打倒できる可能性があった。

もっとも、義人がいない現状ではないものねだりに過ぎないのだが。

そんな益体もない考えが僅かに頭を掠めるが、サクラは努めて無視する。

言葉は悪いが、カグラが相手では志信も時間稼ぎが関の山だ。志

信が時間を稼ぐ間に、サクラはカグラに魔法を使わせるだけの“手”を打たなければならない。

「やはりそうきますか……」

サクラの表情を見て、カグラが呟く。

カグラもサクラとは長い付き合いである。この状況でどういった手を打つか、予測することは容易かった。

サクラにも、義人同様“一点だけ”カグラを上回る能力がある。それは、あるいは才能でカグラを上回ると評した方が正しいかもしれない。

それは、氷魔法。

その一点のみ、サクラはカグラを上回る。その一点だけは、サクラはカーリア国でも最も優れた才を持っていると言えた。

カグラも氷魔法は使えるが、あくまで“使えるだけ”に過ぎない。治癒魔法や風魔法ならば得意だが、火炎魔法や氷魔法の才能については並を多少上回る程度だ。そのため、志信が壁となってサクラが氷魔法を使うことに注力するのならば、カグラにとっても脅威になり得る。

無言のままに、カグラは地を蹴った。それと同時にサクラは後ろへ跳び、志信が二人の間に滑り込んでくる。

「邪魔です！」

サクラへの進路を防ぐように立ちはだかった志信に対し、カグラは掌底を繰り出す。受ければ志信とて無事に済まないその一撃は、速く重い。志信は攻撃に回ることを即座に諦めると、繰り出された掌底を受けずに手のひらで受け流した。

志信とカグラの視線が交差する。片や打倒の意思を込め、片や不倒の意思を込めて視線をぶつけ合う。

「はぁっ！」

カグラは攻める。緩急をつけ、虚実を混ぜ、掌打を繰り出す。

「しっ！」

志信は守る。虚実を見抜き、呼吸を読まれないよう意識し、繰り出される掌打をかわして逸らす。

突いては逸らし、突いてはかわし、逸らしては突かれ、かわしては突かれるその様は、まさしく一進一退の攻防。カグラは『強化』で底上げした身体能力で怒涛のように攻め、志信は長年培った修練の経験を駆使して防ぐ。

そうして掌打を交わし合うこと三十手。二人の隙間を縫うように、氷の弾丸が一発撃ち込まれる。志信の動きを読んだのか、それとも志信が合わせたのか。志信が首を横へと振った瞬間に後ろからその弾丸は飛来した。

視認から直撃までコンマ一秒にも満たないだろう。志信の背後から飛来した弾丸を認識した瞬間、カグラはほぼ無意識に回避動作を取る。

「っ！？」

氷の弾丸がカグラのこめかみを掠め、一筋の血線が引かれた。避けなければ、正確に額を打ち据えただろう一撃。下手すれば死にかねないが、サクラにとって狙いは“そこ”ではない。カグラならば避けるだろうと知っての、ある意味信頼しての一撃だった。

カグラが避けに回ると同時、志信はそれまでの防御を止めて一歩前へと踏み込む。右足で踏込み、体重を乗せて鳩尾（みぞおち）への順突き。ただし拳ではなく、衝撃が伝わるようにと掌底で繰り出す。

その隙をついた攻撃にも、カグラは対応してみせた。咄嗟に腕を交差し、防御の体勢を取る。いくら『強化』を使っているとはいえ、体が鉄並に固くなるという出鱈目な効果はない。そのためカグラは防御を選択し、その結果、志信の掌打を受けた体が僅かに浮いた。

「そこです！」

氷の弾丸を放ったサクラが、追加で空中に氷の矢を生み出す。魔法を使うことに集中していたためか、その数は先ほどよりもはるかに多い。

志信を避けるようにして、成人男性の二の腕ほどの太さを持つ氷の矢が雨あられと降り注ぐ。先端は丸まっているものの、直撃すれば痛手を被るだろう。少なくとも、骨の一、二本は折って余りある威力である。

降り注ぐ氷の矢を前に、カグラは小さく舌打ちした。いくらカグラでも、地面に足がついていなければ対処が限られる。

最も安全な回避策を取るならば、風魔法を使うことで氷の矢を逸らすべきだろう。サクラが使った魔法は、中級魔法に届くほどの威力がある。それを避けるには、カグラも同じように中級魔法と同等の威力の風魔法を使う必要があった。しかし、カグラとしては『強化』以外の魔法を使って魔力を消費するわけにもいかない。

――これから、義人を再度召喚しなければならないのだから。

「あ、あああああああああああああぁぁぁっ！！」

義人の顔を思い浮かべた瞬間、カグラは即座に行動に移った。降り注ぐ氷の矢の中でも急所に命中するものだけを手のひらで弾き、残りはすべて無視する。

カグラの足が地面につくまでかかった時間は、およそ二秒。その

間にカグラが捌いた氷の矢は二桁に迫るが、カグラの体を掠めた氷の矢は二十を超える。

急所に当たりさえしなければ問題はないと判断したカグラだが、着ていた白衣緋袴はあちこちが裂け、徐々に血が滲み出した。特に上半身は白衣のため、斑模様（まだらもよう）に紅く染まり始める。

「……はっ……はぁ……」

地面に足がつくなり、カグラは志信から距離を取る。そして頬に流れる血を荒々しく拭うと、呼吸を整えるために深呼吸をした。

そんなカグラの様子を見た志信は、気を抜かないままで口を開く。

「『治癒』を使えカグラ。そのままでは危険だ」

服が裂けた分にはまだ良い。しかし、氷の矢が掠めた部分は服だけでなく皮膚も裂き、出血を促す。

致命傷には程遠いが、『治癒』を使って傷を治さなければいずれ失血死を起こすだろう。

「あ、はは……嫌、です」

だが、カグラは意地でも魔力を使わない。体のいたるところから血を流しながらも、カグラは戦意を失わない。それどころか、薄く笑みすら浮かべていた。

「わたしは、もう一度……ヨシト様に会うんです」

血化粧を纏って笑うカグラを前に、さすがの志信も背筋が寒くなる感覚を覚える。普段のカグラを知っているだけに、そのギャップは大きい。

「げに恐ろしきは女の情念か……」

そんなカグラの姿を見て、志信は苦々しく吐き捨てる。

ここまでくれば、カグラを諦めさせることはできないのではないかとすら思えた。それこそ、息の根を止めでもしない限りは。

――――いや、それこそ下策か。

浮かんだ考えをすぐさま切り捨て、志信はカグラの様子を窺う。サクラもカグラの様子を窺っているのか、動く気配はない。

カグラは出血しており、それを治すための『治癒』も使おうとしない。そのため、このままならば時間が経てば経つほど志信達が有利になる。出血が続けば手足の感覚は鈍り、思考も散漫になるだろう。そうなれば、取り押さえることも可能になる。

取り押さえた場合はカグラに魔力を使わせることはできないが、このまま死なせるわけにもいかない。

解決法は取り押さえてから考える。そんな考えを巡らせた志信に隙を見たのか、カグラは血を振りまきながら地面を蹴った。しかし、その動きは先ほどまでに比べれば見劣りするほどに遅い。

それでも志信は、自身へと突貫してくるカグラを前に気を抜かなかった。例え手傷を負っていようが、カグラは気を抜けるほどに弱い存在ではない。

そうして、油断することなく志信はカグラを迎え撃つのだった。

――五分。
それが、カグラが地面へ倒れるまでにかかった時間である。
防御に徹した志信とサクラが文字通り出血を強い、カグラはようやく動きを止めた。ひどく悲しげに、それでいて寂しげな表情を浮かべながら地面へと倒れたカグラを見て、志信はようやく緊張を解く。

「……ようやく気を失ったか」
「……気を失うどころか、このままだと命まで失いそうですけど」

志信の言葉に疲れた声を返し、サクラはため息を吐いた。
もしもカグラが『強化』以外の魔法を使っていたならば、この結果にはならなかっただろう。志信と共に最初の一分で打ち倒されて終わりである。それでも今回は志信達に軍配が上がった。

「とりあえず、『治癒』が使える者を呼ぶか」
「そうですね。それで――」

カグラ様を治療しましょう。そう、言葉をつなげるはずだった。
激戦を乗り切って気が緩んでいたのか、それともこの場合はカグラを褒めるべきか。
志信とサクラが疲労で気を緩めたその瞬間を見計らったように、カグラの体が地面から跳ね上がる。腰まで伸びる長髪を振り乱し、一足飛びに志信の懐へと潜り込む。

「――気を抜きましたね？」

近距離で志信とカグラの視線が交じり合う。
志信が咄嗟に反応するが、それも遅い。カグラは軽く握った拳を横に振るうと、正確に志信の顎先を打ち抜く。

「……っ！？」

顎先を打たれ、志信の脳が揺れた。それまでの暴力的な攻撃から一転、正確な急所への攻撃に膝から力が抜け、志信の意識が飛びかける。
本気で殴られていたら顎骨を砕かれていただろうが、カグラの狙いはそこではない。手早く無力化するために、攻撃を正確で素早いものに切り替えていた。
顎先を打たれて脳を揺らされた志信は必死に意識をつなぎとめるが、それも儚い抵抗に過ぎない。消えそうになる志信の視界の中で、カグラがさらに動く。
カグラは志信の意識が残っていることに気付くと、振るった拳を手刀の形に変え、首筋へと振り下ろす。
そして、顎先に続いて首筋へと振るわれた手刀の衝撃に、志信はそのまま意識を失った。

「シノブ様っ！？」

意識を失った志信に、サクラが心配を込めた声を上げる。カグラはそんなサクラに視線を向けると、意識を失って倒れかけている志信を押し飛ばした。
意識を失った人間というものは、非常に危険な状態に陥る。意識がないため体のバランスが崩れても立て直すこともできず、地面に倒れたとしても受け身も取れずに頭を強打することもあるのだ。
自身へと向かってくる志信を見たサクラは、取るべき行動の選択に迷った。

このままでは志信が危険である。しかし、志信を受け止めればそれだけで致命的な隙になりかねず、カグラがその隙を逃すことはないだろう。だが、ここで志信を見捨てるような選択肢を取れるはずもなかった。

逡巡は一瞬。サクラは志信に手を伸ばすと、極力衝撃が伝わらないよう受け止める。志信が意識を失っているためかなりの重さが伝わってきたが、『強化』を使用しているため重さに潰れることもない。

サクラは志信を無事に受け止めたことに安堵の息を吐き、

「ごめんなさい、サクラ」

背後から聞こえてきた声を最後に、意識を失った。

「……ぼろぼろですね」

意識を失った志信とサクラの体を丁寧に地面に横たえると、カグラは自身の体を見下ろしてそう呟いた。

サクラの放った多量の氷の矢が体を掠めたせいで、体のあちこちから血が流れている。このまま放っておけば、いずれは失血死に至るだろう。そうなれば、義人を再召喚することもできなくなる。

カグラは僅かに迷ったものの、傷口に手を当てて『治癒』を発動させた。すでにだいぶ血が流れたが、魔法を行使する分には支障もない。

『魔石』が手元にある今、魔法を使う際の魔力消費もかなり抑えることができる。その程度ならば、召喚に影響はないだろうと判断してのことだった。どの道、傷をふさがなければ召喚の途中で倒れることになるだろう。

サクラの使った魔法を避けるために中級魔法を使うよりも、多少の傷を癒すための『治癒』ならば後者の方が消費する魔力も少ない。それぐらいならば召喚に支障は出ないはずであり、サクラの攻撃を『強化』以外の魔法を使わずに捌いたのは正しい選択だったとカグラは思う。これならば召喚にも支障は出ないはずだと、カグラは判断した。その結果全身に傷を負ったとしても、“これから”のことを思えば後悔もない。

日を改めて再度召喚の祭壇に赴くという手もあったが、その場合は志信やサクラが再度立ちはだかる可能性が高い。そのリスクを考えれば、カグラにとってはほんの僅かに過ぎない魔力を消費して傷を癒し、召喚を行った方が良かった。

『治癒』によって僅かに発光した手のひらを傷口に押し当てながら、カグラはゆっくりとした足取りで歩き出す。まさか、志信とサクラにここまで強硬に反対されるとは思ってもみなかった。さすがに“本気で”殺す気ではなかったようだが、カグラとしては予定外の戦闘である。

「でも、これで……」

邪魔をする人はいない、とカグラは笑った。あとは召喚の祭壇で義人を再召喚するだけだ。祭壇の召喚には見張りの兵士もいるが、気にすることもない。例えカグラを止めようとしても、並の兵士では束になっても歯が立たないのだから。それこそ志信やサクラぐらいの腕を持っていなければ、相手にもならない。

祭壇の召喚に到着すると、予想通りと言うべきか兵士が駆け寄ってきた。カグラは駆け寄ってきた兵士に構わず、祭壇の召喚へと上

るべく歩き出す。

「か、カグラ様!?　こんな夜更けにどうされたのです!?　それに、その傷は!?」

叫ぶように兵士が尋ねるが、カグラは構わずに召喚の祭壇へと向かっていく。

兵士からすれば、夜中に突然『召喚の巫女』であるカグラが召喚の祭壇へと現れたのだ。それも、巫女服のあちこちが裂けて肌が覗いている。しかも、今は『治癒』でふさいだが、傷口から流れた血によって白衣もほとんど朱に染まっていた。これで何事もなかったと思えるような人間はいない。

「カグラ様?　カグラ様!?　お止まりくださいカグラ様!」

焦ったように止める兵士にまったく言葉を返さず、カグラは召喚の祭壇へと進む。脇の方に造られた階段へと足をかけると、さすがに異常だと思ったのか見張りの兵士がカグラの肩に手をかけた。

「……邪魔、です」

まるで蝿(はえ)でも追い払うように右手を振るカグラ。兵士はそれだけで後ろへと吹き飛び、十メートルほど転がってからようやく動きを止めた。

「な、何を!?」

吹き飛んで気を失った兵士を見て、他の見張りの兵士が声を上げる。カグラはそんな兵士達を一瞥すると、興味を示さずに階段を上り始めた。

「お待ちください！」

残っていた兵士達が一斉にカグラへと駆け寄る。事情も理由もわからないが、今のカグラは正常ではない。

ならば正気に戻さなくては、と判断した兵士達は正しく、それと同時に間違いでもあった。

駆け寄った兵士が、最初に吹き飛ばされた兵士と同じように弾き飛ばされていく。カグラが『強化』を使いながら軽く腕を振るっただけだが、それだけで兵士達は面白いように後ろへと転がった。

そもそも、『召喚の巫女』を力づくで止める手段を持っていないのだ。吹き飛ばされて気を失った以上気づいても詮無きことではあるが、カグラを本気で止めるのなら城の方へと走って助けを呼ぶべきだった。数に恃(たの)んで抑え込むか、腕の立つ人間を呼ぶべきだったのである。

カグラは気を失った兵士達に背を向け、召喚の祭壇へと続く階段を上っていく。最後にこの階段を上ったのは義人達を召喚した『召喚の儀』の時が最後で、それ以来上っていない。もっとも、『召喚の儀』が終わった以上は近づく場所でもなかったのだ。

カグラ自身、自分が生きている内に再度召喚の祭壇に上ることになるとは思っていなかったのだから。

階段を登り切り、カグラは召喚の祭壇へと立つ。床には召喚用の魔法陣が描かれており、それを見たカグラは緩やかに口元を歪めた。

いずれは異常を察した城の兵が来る可能性が高い。だが、一度成功させた『召喚の儀』である。二度目ともなれば、以前ほどの時間はかからないだろう。

カグラは一度だけ深呼吸をすると、気を引き締めながら懐から『魔石』を取り出す。

そして、魔力の消費を抑える『魔石』を補助にカグラは『召喚の儀』を開始した。

「――――――」

目を閉じ、胸に手を当てながら祝詞を口にする。それと同時に、召喚の魔法陣へ自身の魔力を注ぎ込んでいく。

そうして五分ほど経っただろうか。召喚の魔法陣が淡く輝き始め、カグラは一度体感したことのある感覚を覚えた。

それは以前の『召喚の儀』の際にも感じたもので、カグラは再度の召喚が上手くいっていることを確信する。“こちらの世界”と“向こうの世界”をつなぎ、異なる世界が交わる感覚。それを理屈ではなく本能で察し、カグラは己の成功に僅かに口元を緩めた。

「――――――？」

だが、さらに五分経ったところでカグラは疑念を覚える。

――――“こちらの世界”と“向こうの世界”がつながりにくい？

以前『召喚の儀』を行った際は、非常に簡単に“こちらの世界”と“向こうの世界”をつなげることができた。しかし、今回は違う。つながってはいるが、そのつながりが非常に不安定であやふやだった。

前回はその“つながり”も大きく、“向こうの世界”の魔力を感じ取ることができた。だが、今回は“つながり”が小さく、“向こうの世界”の魔力をほとんど感じ取ることができない。比較をするなら、握り拳と針で刺した一穴ぐらいに“つながり”の大きさに差があった。

――これでは、義人を再度召喚することは無理である。

思考の端でそんな声を捉え、カグラは冷水を浴びせられたような感覚を覚えた。

「いや、です……」

思わず祝詞を止めてしまうほどの衝撃を覚え、カグラは小さく呟く。

魔力は十全にあり、多少血が流れたものの体調にも問題はない。しかし、“何か”が足りない。

「嫌です！」

“何か”が足りず、何が足りないのかも理解できない。だが、このままでは義人の召喚ができないことだけは理解できる。

「どうして!?　何が足りないの!?」

立っていることを止め、カグラは召喚の魔法陣の上で膝と手をつきながら叫ぶ。

「あと、もう少しなのに……っ！」

そこに、普段の“カグラ”の姿はない。義人にもうじき会えると、もう一度逢えると願い、それが叶わないことに気づいてしまった一人の少女の姿しかない。

魔法陣に手を当てながら、カグラは必死に魔力を注ぎ込んでいく。“向こうの世界”とのつながりを大きくするべく、注ぐ魔力の量も増やしていく。それでもなお、届かない。

「もう一度……ヨシト様に……」

魔力を注ぐ。ひたすらに、注いでいく。その魔力の大きさに比例するように、“向こうの世界”とのつながりも強く大きくなっていく。

「……っ……ぁ……」

ずきりと、頭が痛んだ。急激な魔力の放出に体が悲鳴を上げるが、それでもカグラは止めない。今成功させなければ、後になろうと成功することはないと本能的に察したのかもしれない。必死に魔法陣へ魔力を注ぎ、“向こうの世界”へつながる“穴”を大きくしていく。

『魔石』があるとはいえ、直接魔力を注いでいる以上大きな足しにはならない。カグラは自分の魔力が減っていくのを自覚しながらも、魔法陣へ魔力を注いだ。

そうしてどれだけの時が過ぎただろうか。残りの魔力が三割を切ったところで、カグラはその顔に喜色を浮かべる。

「あ……はは……つな、がった……」

“こちら世界”と“向こうの世界”がつながる感覚。それをしっかりと覚え、カグラは満面の笑みを浮かべる。あとは、召喚の対象者を“こちらの世界”へと引き込むだけだ。

「ヨシト様……ヨシト様……」

虚ろに呟きながらカグラは召喚の魔法を再開する。しかし、“こちらの世界”と“向こうの世界”のつながりを保ちながらのため、

魔力の消費が大きい。それでもカグラは構わずに祝詞を口にしながら召喚者を探していく。

「どこ？　どこにいるの？」

床に書かれた魔法陣が発光し、カグラの“感覚”を召喚の対象者の元へと引っ張っていく。その間にも魔力が消費され、底が見え始める。

「ヨシト様、どこに……どこに……っ！」

そして、カグラは言葉を止めた。無意識の内に、口が笑みを形取る。

「見つけた……ヨシト様！」

思わずカグラは歓喜の声を上げた。召喚の魔法陣がそれに応えるように、強く光を放つ。

あとは、見つけた“義人と思われる”魔力の塊を捕まえて“こちらの世界”へと引きずり込むだけだ。

「ふふふ……これでやっと……」

もう一度、義人に逢える。

――逢ったら何を話そう？

――いや、その前にもう一度召喚してしまったことを謝らなきゃ。

――許してくれるかな？

――うん。きっと、ヨシト様なら許してくれる。

召喚したら、謝って、いっぱい喋って、許してもらって、国王として頑張ってもらって、自分はそれを補佐して、一緒にいる。ずっと、一緒にいる。ずっと、一緒にいたい。

「……？」

支離滅裂な思考が占めていた頭の中が、不意に澄み渡った。魔法陣についていた手から力が抜け、カグラは音を立てながらうつ伏せに倒れ込む。

「あ……れ？」

倒れ込んだ先にあった床が頬に触れ、冷たさを伝えてくる。それが場違いにも気持ち良く感じて、カグラは思わず目を閉じかけた。

「どう、して？」

妙な眠気を感じて、カグラはそんな声を漏らす。そして、自分の身に起こったことを理解した。

――魔力が、底をついている。

それを理解した途端、召喚の魔法陣が光を失い始め、急速に“こちらの世界”と“向こうの世界”のつながりが薄れていく。すぐそ

こまで感じられた義人の魔力が遠ざかっていく。

「あ……やだ……やだぁ！」

幼子のように、カグラは手を伸ばす。しかし、それで結末が変わるわけもない。魔力がなければ召喚の魔法を続けることはできず――義人を“こちらの世界”に喚(よ)ぶこともできない。

つまり、召喚は失敗する。すぐ傍に魔力を感じられた義人には会えず、二度と逢うこともない。

その結末は、定められた運命のようにカグラを捉える――――。

「そん、なの……みと、め、ない……認めない！」

――――はずだった。

叫ぶと同時、魔力を失ったカグラの体が僅かに発光する。それに伴い、召喚の魔法陣も光を取り戻した。

魔力がないのならば、作り出す。“己の魂を削って”でも、召喚を成し遂げる。

どこかで、硝子が砕けるような音が響く。だが、カグラはやけに大きく響いた“その音”を気に留めず召喚を続ける。

「――――ヨシト様ぁ！」

力を、魂を振り絞り、カグラが叫ぶ。

慟哭(どうこく)するような叫びは輝く魔法陣に吸い込まれ――――カグラはそのまま意識を失った。

第百三十一話：『おとーさん』と『おかーさん』

小雪にとって滝峰義人という少年は父であり、北城優希という少女は母である。

産みの親ではないものの小雪はそれを知らず、また、知っていても変わらず義人と優希を親と慕っただろう。そんな小雪ではあるが、日々の生活の中で不満な点もあった。

それは、義人の小雪に対する扱いについてである。

小雪が今の人型に化けられるようになってからはそうでもないが、扱いや接し方にどこかぎこちなさが残る。小雪が自分の大好きな母であり、義人とも仲の良い優希と似た姿に化けたのもその辺りが原因だった。もっとも、似た姿と言っても大好きな父である義人の外見も多少取り入れていたが。

人の姿に化けられるようになってからというものの、それまでとは扱いが異なっていることを小雪も理解している。人語を喋るようになったのも一因だろうが、やはり見た目が大きな要因だった。それでも、優希はともかく義人は小雪に対してどこか一線を引いた態度を取っており、それが小雪にとっての不満だったのである。しかし、ここ最近は“その不満”が解消されつつあった。

生まれ育って一年にも満たなかったが、故郷と呼べる“向こうの世界”とは異なる世界に移動してきて早二ヶ月。義人（おとーさん）や優希（おかーさん）の両親である『おじーちゃん』と『おばーちゃん』にも慣れ、小雪は“こちらの世界”での生活を満喫していた。

義人に政務がない“こちらの世界”では、ほぼ一日中義人や優希と一緒にいることができる。そのため小雪は義人や優希とずっと一緒に過ごしていたのだが、徐々に義人の態度が変化していることを幼心に感じ取っていた。特に、“ある日”を境に義人の態度が変わっており、小雪としては疑問一割嬉しさ九割で首を傾げることになる。

いつも通り義人や優希に遊んでもらい、疲れたから昼寝をする。そして目が覚めてみれば、義人の小雪に接する態度が変わっていたのだ。それも、良い方向に。

それまでは小雪の方から言わなければ一緒に布団で寝てくれなかったが、今では義人の方から『よし、一緒に寝るか』と言ってくれる。膝の上に座れば、笑顔で頭を撫でてくれる。悪戯をしたら怒って“くれる”ようにもなった。

そんな義人の変化が嬉しくて、小雪は母親である優希へと尋ねたことがある。

「さいきんねー、おとーさんがやさしいの。なんで？」

その問いに、優希は柔らかく微笑みながら答えた。

「んー……それはね、小雪が義人ちゃんの“娘”だからだよ」

優希の答えに、小雪は頭を悩ませる。小雪にとって、自分が義人の娘であることは文字通り生まれたその瞬間から知っていた。そのため、優希の返答は自分の求めていたものとは異なっていたのである。

「えーと、えーと……」

義人の真似をしてか、腕組みをしながら首を捻る小雪。そんな小雪を見て、優希は笑いながら小雪の頭に手を置いて優しく撫でる。

「じゃあ、おとーさんが小雪に優しくしてくれるのは嫌？」

「ううん！　うれしい！」

即答する小雪。それを聞いた優希は、小雪を撫で続けながら笑み

を深くする。

「それなら悩まなくても良いでしょ？」

「んと……うん」

いまいち納得はできなかったものの、義人が優しい分には問題もない。優希は元々優しく接していたため、義人も同じように優しく接してくれるのなら小雪としては嬉しい限りだ。

ニコニコと笑顔を浮かべる小雪を見て、優希は苦笑しながら頭を撫で続ける。

「小雪は『おとーさん』のこと好き？」

「うん！　おとーさんも、おかーさんもだいすき！」

「そう……おかーさんもね、義人ちゃんのことも小雪のことも好きだよ。でも、義人ちゃんと小雪に対する『好き』はけっこう違うんだけどね？」

「ちがうの？」

優希の言葉に小雪は首を傾げる。

「うん、違うの。小雪にはまだわからないと思うけど、『好き』にもいくつか種類があるんだ」

「ふーん……」

わかっているのか、それとも返事をしているだけなのか。小雪は不明瞭な声を漏らす。そしてしばらく経ってから、小雪はお手上げと言わんばかりに頬を膨らませた。

「こゆき、わかんない」

「わかんないかー。ふふ、まだ小雪には早かったね。でも、小雪も

いつかわかる日がくるよ」
「そうなの？」
「そうなの。それがどれくらい先のことかわからないけど、ね。傍にいるだけで幸せって思えるような人が、いつか見つかるよ」
そう言って、優希は小雪に微笑みかける。その二人の姿は、十分に母娘として映っただろう。
優希は小雪の頭から手を放すと、時計に視線を向ける。時刻は午後十時を過ぎており、小雪（こども）はそろそろ眠る時間だった。
「それじゃあ、お風呂に入ったら寝ようか？」
「うん！」
笑顔で頷く小雪に、優希もまた笑顔を返す。
今日もまた、非常に平和な一日だった。

義人が優希へと告白して一ヶ月。それだけの時間が流れ、義人は感慨深げに口を開いた。
「早いなぁ……」
ここ最近、あっという間に流れて行った時の早さを実感する義人である。
優希に告白し、それを受け入れられてから二人の関係は劇的に変

わった――というわけもなく、義人と優希は以前と同じような関係を続けていた。

元々互いに支え合い、距離が近かったこともある。そのため、恋人同士になったからといって急に付き合い方が変わることもない。ただ、以前よりも半歩分だけ互いに近づいたことが変化だろう。

義人としては、むしろ優希よりも小雪に対する態度が変化していた。

それまでは娘というよりも別の、例えるなら親戚の女の子に対するような感覚だった。しかし、最近ではその感覚もなくなり、小雪は自分の娘だと義人も思えるようになっている。正確には、義人と優希の娘だが。

小雪の外見が義人と優希の容姿を引き継いでいるため、一度でも完全に“娘”だと思ってしまえばあとは楽だった。開き直ったわけではないが、小雪は自分の娘なんだと思えば義人も行動が変わる。この一ヶ月で、義人は世間一般の父親と同じような接し方ができるようになっていた。

『いや、お主はかなりの親馬鹿だと妾は思うんじゃがな……』

ポツリとノーレが呟く。それを聞いた義人は不思議そうな顔でノーレへと視線を向ける。

「何か言ったか？」

『……なんでもないわい』

親馬鹿と口にしてみたものの、ノーレには“普通の父親”というものがわからない。そのため、義人の態度の急変振りに対して『親馬鹿』と言ってみただけだった。

ノーレは声に出さずにもう一度だけ『親馬鹿め』と毒づくと、話題を切り替える。

『それで、明日は何をするつもりなんじゃ？』
「そうだな……」
ノーレの言葉に対して、義人は窓に視線を向けた。窓の外からは静かな雨音が聞こえており、空を覆う分厚い雨雲が夜の闇をいつもより深いものへと変えている。
「天気予報だと明日も雨が降るみたいだしな。雨が降ったら、山の中で魔法の練習をするわけにもいかないし」
そう言って、義人は壁に立てかけたノーレを手に取った。そして柄を握ると、ゆっくりと鞘から引き抜いていく。両刃の剣が電灯の明かりに照らされて光を放つが、その輝きは以前に比べると濁って見えた。
「“こちらの世界”だとノーレの手入れも難しいのがなぁ。志信のとこの爺さんが帰ってきたらどうにかなりそうだけど、いつになったら帰ってくるのやら」
やれやれと首を振り、ノーレを鞘に納める。『強化』の術式が刻んであるため今のところは刃毀れもないが、たまには手入れぐらいしてやりたいと義人は思っていた。
「召喚の魔法もどうやれば実現できるのかわからないし……いや、困った困った」
困ったと口にするものの、義人の表情は穏やかな笑顔である。その義人の表情を見たノーレは、戸惑いながら言葉をかけた。
『“こちらの世界”で過ごす方が無難じゃろうに……本当に、“向

こうの世界”に戻ろうというのか？』
「そうだよ。“向こうの世界”に戻りたいというか志信を連れ戻したいというか……まあ、“向こうの世界”に戻るって意味で言えば合ってるか」
『しかし、戻る手段がないじゃろう？』
「だからこの前からノーレにも魔法を習っているんじゃないか」

そう言って、義人はここ一ヶ月のことを思い返す。
優希と結ばれてから、義人は前言通り“向こうの世界”に戻る手段を探し続けていた。そして、その手段として選択したのは魔法によって“向こうの世界”へ戻ることである。
魔法の知識ならばノーレが持っており、魔力の量で言えば小雪や優希は巨大なものを持っている。義人自身もそれなりに魔力を持っており、自分の意思で魔法を使うこともできた。そのため、いっそのこと自分達で“向こうの世界”に渡る魔法を習得しようと思ったのが一ヶ月前のことである。
“向こうの世界”から再度召喚されるとは限らず、“こちらの世界”に移動してきた際のスタート地点である山の中には何もない。そうなれば、あとは自力で“向こうの世界”に行くしか手段がなかった。
さすがに家の中で魔法の練習をするわけにもいかず、最近は山へと出向いて人目につかない場所で魔法の練習をする日々である。
もしかしたら、魔法の練習をしていれば“こちらの世界”の魔法使いも気づくかもしれない。そんな希望的観測もあり、義人達は毎日のように山へと出向いていた。もっとも、“こちらの世界”に魔法を使える人間がいるかどうかもわかっていない状態のため、大きな期待はしていない。

「それに、魔力って“世界に干渉する力”なんだろ？　それなら、大きな魔力を持っている小雪と優希がいればなんとかなりそうじゃ

ないか？」

他力本願になってしまうが、義人よりも優希や小雪の方が大きな魔力を持っているのは事実である。それに加えて、“こちらの世界”では何故か魔力の消費が大きい。

『魔力量に物を言わせた力押しか……しかし、コユキは魔力の操作が苦手で、ユキは魔法を発動すらできん。そしてお主はそこそこに魔法を使えるが魔力が足りん』

「……やっぱりそこが問題か」

義人は自分の意思で魔法を制御できるが、魔力が足りない。

小雪は自分の意思で魔法を制御するのが苦手だが、大きな魔力はある。

優希は大きな魔力を持っているが、魔法を使えない。

「俺が優希や小雪と同じぐらい魔力を持っているか、小雪が俺と同じぐらい魔力を操作できれば話は別なんだけどなー」

『その話でいけば、コユキに魔力の制御を覚えさせるのが一番の近道じゃな。あとは、そうじゃな……』

そこで一度言葉を切ると、ノーレはからかうような声を上げる。

『お主とユキの子供なら召喚の魔法を使えるようになる可能性があるじゃろ？』

「……ん？　小雪なら可能性があるって話か？」

ノーレの言いたいことを半ば理解しつつ、義人は敢えてとぼけた。

すると、ノーレはからかいの感情を強めながら言葉を続けていく。

『いやいや……そのままの意味じゃよ。お主とユキの間に子を成せば、その子が魔法を使える可能性が高い。それこそ、お主と同程度

の才能を持っており、ユキと同程度の魔力量を持っている可能性があるじゃろう？』

「あー、まぁ、そうだよなぁ……」

大げさに慌てようかとも思ったが、その元気もない。義人は頭を掻くと、最近からかい癖がつき始めたノーレを軽く叩いた。

「でもそれだと何年先になるんだって話だよ」

『……むぅ、つまらん反応じゃのう。もっと慌ててみせよ』

「その手の話題は親父やお袋、それに優希のおじさんやおばさんだけで十分なんだよ」

優希と付き合い初めて一ヶ月になるが、それまでに義人が自身の両親や優希の両親から受けた冷やかしやからかいの言葉は数多い。付き合い出したことを言った覚えもないのに、翌日の夕飯に赤飯が出てきた時は思わず義人も噴出してしまった。

「な、なんで晩飯が赤飯？」

そんな問いを口にした義人に、義人の母は楽しそうに笑って答える。

「あら、だって義人と優希ちゃんが付き合い始めたんでしょ？　おめでたいじゃない」

「いや、なんでそれを知ってるんだよ！？」

明らかに確信している様子の母に詰め寄ると、義人の母は口元に手を当てながら笑う。

「そんなの、見ていればわかるわよ。優希ちゃんもだけど、何年あ

なた達を見てきたと思ってるのかしら？」

ふふふ、と笑う自身の母を前に、義人は力なく椅子に着席した。

そして、そのあとは様々な質問（ひやかし）が飛んできたのである。『どっちから先に言ったのか』、『優希のどこに惚れたのか』等々、両親からそんな質問を浴びせられて義人は精神的に疲弊した。

特に、優希の母親から『若いからっていっても、ほどほどにね？あ、でも小雪ちゃん以外の孫の顔が早く見たいわ』と言われた時は義人も軽く死にたい気分になった。もちろん、現在がそんな状況でもないため、それが冗談であると理解した上でである。

さすがに、優希の父親から再度『ちょっと表に出ようか』と言われた時は義人も無言で逃げたが。

思い出すだけで羞恥心と疲れが蘇ってくるようである。義人は意識して思考を打ち切る。

「……ん？」

――そこでふと、不意に誰かに呼ばれた気がして義人は顔を上げた。

『どうしたんじゃ？』

「いや、誰かの声が聞こえたような……」

遠くから誰かの声が聞こえたように思えて、首を傾げる義人。しかし、ノーレは何も聞こえなかったのか賛同する声は上がらない。

『妾には何も聞こえなかったぞ？　空耳ではないのか？』

「空耳か……疲れてるのかな」

魔法の練習をしていたため、精神的にも疲れているのかもしれない。そう思った義人ではあるが、それを遮るように再度声が聞こえた。

――ヨシト様ぁ！

叫ぶような、慟哭染みた声。“その声”は、たしかに義人の耳に届いた。

「……カグラ？」

『ん？』

「いや、今カグラの声が聞こえた気がしたんだけど」

思わず周囲を見回す義人。しかし、しっかりと声が聞こえたのは一度だけ。義人はしばらく黙っていたものの、やがて苦笑しながら首を振る。

“こちらの世界”に戻ってくる前の、カグラに対して怒りをぶつけた時の罪悪感がそうさせたのか。そんなことを考え、義人は苦笑を深める。

「疲れて空耳が聞こえただけ、かな？」

『ならば早めに眠って疲れを取るんじゃな』

「そうするか。よし、それじゃあ風呂に入って寝るよ」

そう言って、義人は立ち上がる。そして風呂に向かうべく歩き出し、僅かに首を傾げた。

「気のせいだったか……カグラが泣いてるような声が聞こえたんだけどな……」

不思議そうな声で義人は呟く。

やけに耳に残った“その声”には、一言で相手に伝えたいことのすべてを伝えるほどの感情がこもっていた。しかし、しっかりと声が聞こえたのは一度だけ。

義人は僅かに疑問を持ったものの、空耳であると判断して風呂場に向かうのだった。

カーリア国から遥か南。

魔法国家ウォーレンを通り過ぎ、レンシア国へと続く街道を歩いていた一人の女性が、不意に夜空を見上げた。他国へ赴く商人達も利用する街道だが、深夜ともなれば人の気配はない。レンシア国の国境まであと徒歩で十日という距離で足を止め、女性は注意深く北の方角――すなわち、カーリア国へと視線を投じる。

「……また何かあったみたいね」

北の方角の夜空を見ながら、女性は眉を寄せた。

「もう少し急いだ方がいいかしら」

そう呟きながら、女性は歩き出す。

応える声は、どこにもなかった。

第百三十二話：亀裂

志信達とカグラの戦いから一夜明け、カーリア城は蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。

城の裏手で意識を失っている志信とサクラを見回りの兵士が見つけた上に、召喚の祭壇で巫女服を血塗れにしたカグラが倒れていたのである。他国から暗殺者でも潜り込んだのかと、義人達が姿を消したとき同様に大騒ぎになっていた。

カグラは治療を施され、城の医務室で眠っている。志信とサクラは気を失っているだけだが、用心のためにカグラ同様医務室で寝かされていた。

寝台で眠る三人の姿を見て、アルフレッドはため息を吐く。

「結果は最悪の方へと転んでしもうたか……」

志信とサクラは怪我もないが、カグラは魔力が底をついた状態で見つかり、召喚を行ったはずの義人の姿もない。

状況から考えれば、召喚を行おうとしたカグラを止めるために志信とサクラが戦い、多少の傷を負わせたものの敗れてしまったのだろう。そう判断したアルフレッドは、気を失ったまま目を覚まさないカグラに目を向ける。

魔力を完全に使い果たしたのが原因か、それとも別の理由があるのか、カグラは死んだように眠っている。以前『召喚の儀』を行った時は倒れることもなかったが、今回は違う。揺さぶっても目を覚まさない以上、自然に起きるのを待つしかない。

続いて、アルフレッドは志信とサクラに目を向けた。二人は単純に気を失っただけなのか、そろそろ目覚めそうな気配がある。志信やサクラが倒れて見つかったと聞いて心配したミーファやシアラが傍にいるが、志信とサクラは眠っているため見守ることしかできな

い。
もっとも、シアラは心配のし過ぎで気疲れしたのか、志信とサクラが眠るベッドの間に置かれた椅子に座り、二人の服の袖を小さく握りながら舟を漕いでいる。ミーファは壁に背を預け、時折カグラの方に視線を向けて溜息を吐いていた。

――ここまで思い詰めていたなんてね……。

内心でそう呟き、ミーファはもう一度ため息を吐く。ミーファもアルフレッドと同様に、現状から何が起きたのかを正確に推測していた。
しかし、である。まさか誰にも断ることなく『召喚の儀』を行い、それを止めようとした志信とサクラを打ち倒すとは思いもしなかった。それほど義人に再会したいと思っていたことも、ミーファにとっては予想外である。カグラが義人に対して思慕の情を抱いていたのは知っていたが、まさか強硬な手段に打って出るほど深く想っていたとは思わなかった。
志信とサクラは気絶しているだけだが、カグラは体のあちこちに魔法による攻撃を受けた痕がある。『強化』のみで志信とサクラを相手取り、その上倒したのかと思えばミーファとしても別の意味でため息を吐きたかった。
最終的に『治癒』を使ったようだが、それでも魔力の消費は限りなく抑えたのだろう。志信達が倒れていた場所の近くにはカグラのものと思わしき血だまりが地面に残っており、身の危険を感じるまで魔法を使わなかったことがうかがえる。

「まったく……」

ミーファにとって、カグラは親友である。そして、志信は“やけに気になる”友人だ。その二人が戦ったというのはミーファにも大きな衝撃をもたらしたが、二人とも死んでいない以上どうにでもなる。

カグラが目を覚ましたら説教を、志信が目を覚ましたら心配させたことを引き合いにして怒る。ひとまずそう心の中で決め、ミーファは寝台で眠る志信へ目を向けた。すると、その視線に気づいたかのように志信が目を開く。

「……ここは？」

自分が寝台に寝かされていることを即座に把握し、志信はそんな声を漏らした。

「起きたか、シノブ殿。どこか痛むところはないかの？」

ミーファと同じく志信が起きたことに即座に気づいたアルフレッドが声をかける。ミーファも声をかけようとしたが、アルフレッドに先を越されてしまったので大人しく口を閉ざした。

アルフレッドからの問いを受けた志信は目をつぶると、自身の体調を確認しながらゆっくりと上体を起こし、昨夜の記憶を辿っていく。そして体調に問題がないことと、昨夜何があったかを思い出し、重いため息を吐いた。

「体調に問題はありませんが……そうか。不覚を取ったな」

カグラが気を失ったと油断した結果、己が逆に気絶することになったのである。己の未熟を嘆く志信ではあるが、今はそれよりも気になることがあった。

「義人は……『召喚の儀』はどうなりましたか？」

カグラを止められなかったことを悔やみながら志信が尋ねる。その問いに対して、アルフレッドは静かに首を横に振った。

「わからぬ。ヨシト王の姿がなかった以上は失敗したと思うんじゃが、最初の時と同じく違う場所に召喚された可能性もある」

「捜索は？」

「すでに出しておる……が、おそらく召喚は失敗したんじゃろう」

苦虫を噛み潰したような顔で『失敗』と口にするアルフレッドに、志信が尋ねる。

「……理由を聞いても？」

「前回『召喚の儀』を行った際は、カグラ自身召喚が成功していることを“認識”できておった。それに加えて、魔力をすべて消費しても気絶はしておらん。そうなると、何故カグラが今回気絶したかじゃが……」

そこで一度言葉を切ると、アルフレッドは哀しげな視線をカグラに向けた。

「ヨシト王の召喚に“失敗したこと”に気づいてしまい、それが原因で気を失ったのではないのか、とな」

そうやって自分の予測を口にしたアルフレッドではあるが、実際のところその予測は当たっていない。結果として『召喚の儀』が失敗したことを当ててはいるが、そこに至るまでの過程が間違っていた。無論、カグラが召喚をする現場を見たわけではないので予測するのも難しい問題ではあるのだが。

「そうですか……」

アルフレッドの言葉に小さく安堵の息を吐き、志信は隣の寝台で眠るカグラへ視線を向けた。

魔法を使う人間と戦ったことは何度かあったが、カグラほど規格外な存在と戦ったことはない。『無効化』の棍を素手で握り潰すなど、予想外にもほどがあった。そして、そこでふと志信は気づく。

「……シアラに『無効化』の棍を作ってもらわねばならないか」

持っていた棍は粉々に砕かれたしまったため、使える武器がなくなってしまった。訓練用の棍もあるが、『無効化』の術式がないため本格的な戦闘には使えないだろう。魔法が存在しないのならば問題はないが、相手が魔法という反則技を使ってくる以上『無効化』があった方が良い。今度は一から作ることになるが、そこは頼み込むしかない。

志信がそんなことを考えていると、それまで志信の傍で舟を漕いでいたシアラが不意に顔を上げる。そして、上体を起こした志信を見て目を瞬かせる。

「……シノブ？」

「如何にも俺は志信だが……どうした？」

シアラの声にズレた答えを返しつつ、志信は首を傾げた。すると、シアラは僅かに顔を伏せる。

「……シノブが、城の裏手で気絶した状態で見つかったって聞いた」

そう答えたシアラの肩は、かすかに震えていた。それは志信の容

態が心配だったからか、それとも別の理由か。シアラは志信の服の袖を強く握り締めると、伏せていた顔を上げる。

「……心配した」

余程心配したのか、涙ぐみながらシアラが呟く。今まで見たこともないシアラの反応に志信は驚くものの、心配かけて泣かせたのが自分のせいだとわかっているため素直に頭を下げた。

「すまないシアラ。心配をかけた」

頭を下げながら謝罪する志信。そして顔を上げると、謝意を伝えるようにまっすぐにシアラを見つめる。

「……いい」

その視線を受けたシアラは僅かに頬を赤く染め、視線から逃げるように帽子を深く被り直した。

「あ、あの、シノブ？　わたしも心配したんだけど……」

シアラの様子を見たせいか、壁に背を預けていたミーファがおずおずと声をかける。空気を読むべきだとは思ったが、そうするとミーファとしては大変面白くない。志信はミーファの方を向くと、同じように頭を下げた。

「すまないミーファ」

「あ、うん。いいのよ。シノブが無事だったんだから」

志信の言葉に機嫌を直し、ミーファは再度壁に背を預ける。そし

て志信の視線から逃げるようにカグラの方へ眼を向けた。
そんなミーファの態度に首を傾げたものの、志信としてはそれよりも気になることがある。志信は自分と同じように寝台に寝かされているサクラに視線を向けると、案じるように口を開いた。

「サクラの容態は？」
「……シノブと同じ。気を失っているだけ」
「そうか……」

気を失っているだけという答えに、志信は安堵の息を吐く。サクラは呼吸も安定しており、怪我をしているようにも見えない。
これならば自分と同じようにもうじき目が覚めるだろうと判断し、今度はカグラの方へと視線を向けた。
カグラは眠っている。しかし、その寝息は聞こえないほどに小さく、か細い。一見しただけでは死んでいるようにも見えて、志信はその考えを否定するように頭を振った。そして意識を切り替えると、必要なことを確認していく。

「今回の件で、周囲への影響は？」
「文官武官、兵士を問わず動揺が広がっておる。カグラは召喚の祭壇に向かう際に兵士を気絶させておってな。それも動揺を広げる一因になっておる」
「……他国の間諜への対策は？」
「できる限りは情報を抑えておるが……無駄じゃろうな」

義人達の失踪に加え、対外的に見れば『召喚の巫女』による暴行事件の発生。ここまでくれば隠せるものでもなく、アルフレッドはある種の諦観を持って答えた。
どこの国がどう動くか。それによってどんな影響が出るか。それをどう乗り切るか。アルフレッドはいくつものパターンを想像し、

ため息を吐く。
十年前の国王暗殺事件並に骨の折れる、厄介な事態だと。だが、この件に関してカグラを責めるつもりも“アルフレッド個人には”ない。
傍観すると決め、現状がその決断の結果である。本気で国のこと“だけ”を思うなら、志信達よりも先にカグラを止めれば良かったのだ。しかし、アルフレッドもカグラと同じように私心に従った。カグラという名を背負った“少女”を止めないと、そう思い、その心に従ったのである。そのため、アルフレッド個人としてはカグラを責めるつもりはなかった。
勿論、公人の立場としてはカグラに何かしらの罰を負わせる必要がある。カグラが宰相と同格の役職に就いているとはいえ、それだけは免れない。しかし、他の者ならば下手すれば処刑せざるを得ないほどの事態だが、カグラはカーリア国随一の魔法使いでもある。体の傷を癒し、魔力を回復する意味でも謹慎か軟禁が精々だろう。
甘い――甘すぎると言っても過言ではないが、『召喚の巫女』あってのカーリア国でもある。現状のように国王がいなくても政治を回すことは可能だが、『召喚の巫女』がいなくては国王自体召喚することができない。今回は失敗に終わったが、次回以降のことを考えれば処刑できるはずもなかった。
義人が召喚できなかった以上、次代の『カグラ』を産むための相手は別の男になるだろう。ある意味、それこそがカグラにとっては最大の罰になる。カグラがその結末を許容できるかどうかは無理である可能性が非常に高いが、アルフレッドも本心は別として、カーリア国の宰相としてカグラに許容させなければならない。
魔力が回復すればカグラは再度召喚に挑む可能性があるが、さすがのアルフレッドも再度の“暴走”を許すわけにはいかない。
――ヨシト王が再びどこぞの森の中に召喚されておれば話は別

じゃが、な……。

限りなく可能性が低いが、捜索に向かった兵士が召喚された義人を見つけたという報告を持って帰ってくる可能性もある。

「まずは、カグラが目を覚ますのを待つか……」

アルフレッドは眠り続けるカグラへと視線を向け、そう呟くのだった。

カーリア国王都フォレスより馬で駆けておよそ五時間。朝方にフォレスを出たものの、すでに中天を超えた太陽を見ながら騎馬隊の隊長であるグエンはため息を吐いていた。

「ふぅ……」

「隊長？　どうかされましたか？」

「いや、なんでもない」

不思議そうな視線を向けてくる部下に首を振ってみせ、グエンは己を戒めるように深呼吸をする。そして精悍な顔つきで前方を見ると、遠くに見える森へと馬首を巡らせた。

カーリア国は魔物が多く出没する国である。王都フォレスから東に進めば鉱山地帯、西に進めば魔物の森に行きつき、どちらに向か

おうと魔物が多く生息している。特に、鉱山地帯をさらに奥へと進むと上級に区分される魔物すら生息していると言われていた。反対に、魔物の森はよほど奥までいかなければ中級以上の魔物に遭遇する可能性は低い。

北の方に進めばいずれ海にたどりつき、南に進めばレンシア国との国境へとたどり着く。その途中にも魔物が生息する森が散在しているが、魔物の森や鉱山地帯に比べれば数や脅威は格段に低い。

そして、現在グエンが向かっているのは王都フォレスから北へ進んだところにある、クラシエという町の傍にある森へ向かっていた。その理由は、アルフレッドから義人の捜索を命じられたからである。

二ヶ月近く前に義人が姿を消したことは、騎馬隊の隊長であるグエンでなくとも捜索に加わった兵士ならば知っている。しかし、今回グエンが受けた命令は『カグラが召喚した“かもしれない”ヨシト王』を探すというものだった。

あまりにもあやふやな命令ではあるが、命令は命令。グエンは自身の率いる騎馬隊と共に、魔物が住む森の中を探すつもりだった。森の中に入る際は馬から降りて探すことになるが、それでもグエンが育ててきた騎馬隊の面々は魔物相手に白兵戦でも戦える。

危険度の高い魔物の森や鉱山地帯は魔法剣士隊や魔法隊が探すことになっているため、グエンが担当するのはそこまで魔物が多く生息しない地域が主だった。

グエンは森の近くまでたどり着くと、森の中へ行く係で半分、馬の管理と野営地の設営を行う係で騎馬隊を半分に分ける。そしてグエン自身は馬を下り、兵士をまとめて森の中へと進むのだった。

そして森の中を警戒しながら進むこと五分。言いようない違和感を覚えたグエンは隊を停止させる。

「……妙だな」

「妙、ですか？」

周囲を見回しながら呟いたグエンに、兵士が相槌を打つ。グエンは兵士の方へと視線を向けると、周囲を見回すように促した。

「普段ならば、すでに複数の魔物と遭遇しているだろう。だが、魔物の姿が見えない」

「まだ寒いですし、冬眠している魔物も多いのでは？」

「冬眠、か……その可能性もあるか」

やや腑に落ちないものの、グエンは自分を納得させてさらに先へと進む。しかし、視界の隅に妙なものを見つけて再び足を止めた。

「……ん？」

グエンは周囲を注意深く見る。視界の隅に映ったものを確認するべく、鬱蒼と木が生い茂る視界の中を見回す。

そして、宙に浮かぶやけに真っ黒な物体を見つけたのだ。

「……なんだ……これは……」

近づいて、グエンは思わずそんな声を漏らす。

“ソレ”は、地面から一メートルほどの高さに浮かんでいた。だが、浮かんでいたという表現がおかしいだろう。何故なら、“ソレ”は物体ですらない。

「……亀裂（きれつ）？」

兵士の誰かが呟いた。その呟きを聞いて、グエンは『そんな馬鹿な』と思う。しかし、それは亀裂という以外表現のしようもない。

「馬鹿な……」

心中で思った言葉を口にして、グエンは眼前の光景を理解するべく頭を働かせる。
もしもそれが、岩に亀裂が入っていたのならグエンもそこまで疑問には思わなかっただろう。
だがしかし――――亀裂が入っているのは、空中だった。
窓硝子でもなく、岩や鉱石でもなく、城塞などの壁でもなく。空中に亀裂が走っていた。より正確にいうなら“空間”にヒビが入っていた。
思わず、グエンは自身の視界がおかしくなったのかと目を擦る。亀裂の後ろに見えるはずの木々が見えず、見えるのは真っ黒な亀裂のみ。それもところどころが亀裂では済まず、空中を不格好な多角形の形に切り取ったようになっている。
「なんだ……一体……何が起きた？」
疑問を口にするグエンだが、その声に答える者はいない。
「っ！　急ぎアルフレッド様に伝令！　魔法剣士隊か魔法隊の人間を派遣されたし、とな！」
グエンは眼前の現象が己では解決できる類のものでないと判断すると、部下にアルフレッドへの伝令を命令する。そしてグエンはもう一度空中に走った亀裂を視界に納め、小さく呟く。
「何事も起きなければ良いが……」
それが叶うとは、呟いた本人も思ってはいなかった。

第百三十三話：幸福な日々

その“異変”に最初に気づいたのは、ノーレだった。
“向こうの世界”にいた時も、“こちらの世界”に移動してきてからも感じたことのない奇妙な気配。それを感じ取り、己の使い手である義人へと声をかける。

『ヨシト』
「ん？　どうした？」
『何か、妙な気配を感じぬか？』
「妙な気配？」

そう言われて、義人は周囲を見回す。
時刻は正午前。場所は義人の住む家から離れた山の中で、現在は魔法の訓練中だった。
中天に差し掛かろうとしている太陽が照らすのは、生い茂る木々と地面に敷き詰められた落ち葉のみ。冬の間に丸裸になった木々の中には新しい葉が芽吹きそうになっているものもあったが、ノーレの言葉が指す“妙な気配”ではないだろう。
少し離れたところでは、ビニールシートを地面に敷いた優希が突然周囲を見回した義人を不思議そうな瞳で見ており、その膝には笑顔の小雪が座っている。義人は一通り周囲の様子を確認すると、右手に握ったノーレに視線を落とした。

「何もおかしなところはないぞ？」
『う、む……そうか。妾の気のせいかのう……』
「疲れてるんじゃないか？」

剣が疲れるのかという疑問が僅かに浮かんだが、義人はそれを無

視しながらノーレを鞘に納める。

「ノーレも疲れているみたいだし、今日のところはこれぐらいにしとくか」

疲れているという言葉に、ノーレは腑に落ちないものを感じつつも自分を納得させた。“こちらの世界”に移動して早二ヶ月と少し。何百年も過ごした“向こうの世界”とは異なる世界だ。体は剣だが、知らず知らずの内に精神的な疲れが溜まっていたのかもしれない。

『そうじゃな……ヨシトもだいぶ魔法の使い方が様になっておるし、今日はこれぐらいにしておくかのう』

そのため、ノーレは義人の言葉に同意する。すると、義人は口元を笑みの形に変えた。

「ノーレ先生としては、合格点は取れてますかね？」

『調子に乗るでない戯けめ……と、言いたいところじゃが、この一ヶ月で魔法の腕が上がったのも事実。合格かと聞かれれば……うん、そうじゃな。合格じゃ』

そう言って、ノーレはここ一ヶ月のことを振り返る。

義人がカーリア国の国王に就いて以来、丸一日魔法の練習に費やせた日などなかった。そのため、今の環境ならば魔法の腕が伸びるのも道理だろう。“向こうの世界”に戻るという目的があるため義人自身もやる気が高く、それに見合っただけの成果が出ていた。

『風魔法に限っては、じゃが』

喜びの声を上げようとした義人を制してノーレが告げる。その言

葉を聞いて、義人は喜びの表情を苦笑へと変えた。

「あ、やっぱりか……」

『うむ。しかし、風魔法についてなら褒めようぞ。大した才じゃ……それと同じぐらい補助魔法が使えれば良かったのじゃが』

「俺としては、『強化』よりも風魔法の方がよっぽど使いやすいんだよなぁ」

義人としては、魔力を操作して効力を発揮する補助魔法よりも、魔力を風に変換して撃ち出す風魔法の方が使いやすい。それが才能かと聞かれれば首を傾げるが、義人としては補助魔法に比べれば風魔法は難易度が低かった。

『普通は逆なんじゃがな……まあ良い。小雪に比べれば、進歩が伺える』

「ああ、小雪はな……」

二人で僅かにげんなりとした声を出し合うと、当の小雪が首を傾げる。

「おとーさん、なに？」

「いや、小雪はもう少し頑張りましょうって話だよ」

義人がそう言うと、小雪は不思議そうな顔をしながらも頷く。

「うん。がんばる」

何を、とは義人も言わなかった。しかし、少し離れた場所にある、隕石が落下したかのように陥没している地面や、一抱えほどの太さがあるのに半ばから圧し折れている木などを見れば、小雪が頑張る

べきものがわかるだろう。
今は山に足を踏み入れて二十分ほどの場所で訓練をしているが、次からはもう少し山の奥で訓練をした方が良いかもしれないと義人は思った。何も知らない人が見れば、一体この場所で何があったのかと不思議に思うはずである。

『“向こうの世界”では上手くできていたことも、“こちらの世界”では難しくなる、か』
「魔法を使うのに必要な魔力が全然違うからな。小雪の場合、俺の十倍以上の魔力があるから操作が難しいんじゃないか？」

そう言いつつ、義人は自力で『強化』を発動させた。全身に魔力を行き渡らせるだけで使えるという基本中の基本である補助魔法だが、魔力の操作が苦手だと『強化』を行うのも難しくなる。特に、義人は“向こうの世界”だと常に『強化』を使った時と同様の身体能力があったのであまり『強化』の練習をしておらず、“こちらの世界”に戻ってからは『強化』を使うのも一苦労だった。

『魔力が大きいというのもあるんじゃろうが……小雪が生まれる時、お主はまだ魔法の扱いにそこまで慣れておらんかった。ユキにいたっては、魔法の使い方もわからん。お主ら二人……特に、一日中卵を抱えておったユキの特性を受け継いだのなら、魔力の操作が苦手というのも頷けるがのう』
「そこは似なくても良かったのにな」

ノーレの言葉に苦笑する義人。小雪は再生を司る白龍らしく『治癒』を得意とするが、義人が得意な風魔法も同様に得意としている。しかし、魔力の操作が苦手なため必要最低限の魔力で魔法を発動させることができず、無駄に多くの魔力を使ってしまう。そのため、予定よりも威力の大きい魔法になることが多く、時折失敗すること

もあった。

「まあ、“こちらの世界”でもいずれ魔力の制御が身に付くだろうさ。極力避けたいところだけど、もしかすると、小雪には召喚の魔法を身に付けてもらう……いや、作ってもらう可能性もあるんだし」

義人自身で“向こうの世界”に戻る手段を得られなかった場合、小雪に頼ることになる。優希は魔法の使い方を教えても首を傾げるだけなので、小雪に魔法の使い方を熟知してもらうしかない。もっとも、義人としてはまだまだ限界は遠いように感じているので、当面は小雪ではなく自力で召喚の魔法を覚えるつもりだ。

『正直なところ、お主では難しいどころの話ではないと思うが……』

そんな義人の考えを読み取り、ノーレが気遣わしげに呟く。それを聞いた義人は、小さく苦笑した。

「だろうね。でも、娘に頼りっきり父親ってのは情けないだろ？」

小雪はあくまで最後の手段だ。義人が頼めば断ることはないだろうが、それでも“父親”としての意地もある。

それに、まだ小雪は一歳にもならない子供。人間で言えば赤ん坊である。人語を話すことができ、外見が五歳児程度だからといって、その点を忘れることはできない。

「小雪には日常生活を問題なく送れるだけの魔力操作を覚えたら、あとはなるべく普通の子供みたいに過ごしてほしいしな」

『親馬鹿め』

「はっ、褒め言葉だね」

開き直って笑い、義人は優希と小雪の元へを歩いていく。そんな義人の姿に、ノーレもまた笑った。

“この時”は、ノーレも己が感じた違和感を気のせいだと見逃した。

“こちらの世界”についてはまだまだノーレも知らないことが多い。そのため、自身が覚えている違和感は気のせいだろう、と。

そう思い、見逃してしまったのである。

山を下り、義人達は自宅に帰るべくアスファルトで舗装された道路を歩いていく。

以前の経験から、ノーレは外見で武器だとわからないように布で包み、義人がたすき掛けに背負っている。背中に優希を背負うこともないので、職務質問を受けることはないだろう。春休みと言うには早い時期のため、その点を問われる可能性があるが、誤魔化せないときは逃げるしかない。

「――――――♪」

そうやって義人が警察の影を警戒していると、不意に小雪から鼻歌が聞こえた。

小雪は右手で義人の左手を、左手で優希の右手を握り、義人と優希を引っ張るようにして歩いている。両親と手をつないで歩くことで機嫌が良いのか、時折義人や優希の方を振り返る際の顔は満面の笑顔だった。そしてテレビを見て覚えたのか、どこか聞き覚えのあ

るフレーズの鼻歌を歌っている。

「小雪、ご機嫌だね」

「そうだな」

こっそりと笑顔で呟く優希に、義人も笑顔で答えた。時折すれ違う通行人も、小雪の様子を見て頬を緩めている。そして特に問題なく自宅の近くまで到着した義人は、優希の家へと足を向けた。

義人の両親は共働きだが、優希の両親はそうではない。優希の母は専業主婦であり、今は家で家事をやっているだろう。

自宅にいるよりも優希の家にいた方が退屈しない。そう判断した義人だが、優希の母は義人と優希が付き合い始めて以来からかい癖がついたのか、優希とのことでよく義人をからかってくる。その点に目を瞑れば、自宅にいるよりも楽しいだろう。

義人達は優希の家に到着すると、玄関の鍵を開けて中へと入っていく。義人としても、幼い頃から何度も通い、何度か泊まったこともある家である。今更家の間取り等に戸惑うこともなく、まっすぐにリビングへと向かった。

「あら、お帰りなさい。今日は早かったのね」

そんな台詞と共に出迎えた優希の母は、ちょうど昼食の準備をしていたのかキッチンから顔を覗かせる。

「お昼は？」

「まだだよ。お母さん、義人ちゃんの分もお願いして良いかな？」

「はいはい。でも優希、あなたも手伝いなさいね」

「うん。それじゃあ、義人ちゃんは小雪と一緒にリビングでくつろいでてね」

笑顔で料理の準備に取り掛かる優希を見ながら、義人は頷く。ノーレを傍の壁に立てかけると、続いて小雪に視線を向けた。

「それじゃあ、お言葉に甘えるか。小雪、外から帰ったら何をするのかな？」
「おてあらいとうがい？」
「正解。風邪を引いたら困るしな」

白龍が風邪を引くかは義人も知らないが、食事前でもあるのだから手洗いうがいをするのは間違っていないだろう。そうやって小雪を洗面所に連れて行く姿は、新米の父親らしくて優希の母は微笑ましげに笑った。

「ふふ、義人ちゃんもすっかりお父さんね」
「そうだね。わたしとしては嬉しいけど」
「あら？　義人ちゃんが優希よりも小雪ちゃんを構っていても良いの？」

昼食の準備をしつつ、優希の母が尋ねる。すると、優希は楽しげに笑った。

「うん。だって、今の義人ちゃんってすごく楽しそうなんだもん。だったらわたしも楽しいし、嬉しいよ」

その言葉に嘘偽りがないことを、長年母親をやっていた優希の母はすぐに気づく。そして、『あらあら』と言いながら頬に手を当てた。

「小さい時からそうだとは思っていたけど、あなた本当に義人ちゃんのことが好きなのねぇ……」

優希の母はそう言って自身の娘を真っ直ぐに見た。その声に込められたのは、驚きか、それとも喜びか。少なくとも負の感情を感じさせない声である。しかし、すぐに笑みを浮かべると、義人と小雪が戻ってこないことを確認してから優希を肘でつついた。

「それで、義人ちゃんとはどこまでいったの？　お父さんには言わないから、お母さんには教えてちょうだいな」

「えー……もう、お母さんったら、それを聞いて義人ちゃんをからかうつもりでしょ？」

「大丈夫大丈夫。からかわないわよ、多分。だからほら、教えてちょうだい」

からかわないことを確約せず、優希を急かす。もうじき四十路とはいえ、優希の母も女性だった。恋愛話……それも、娘の恋愛話となれば否が応でも聞きたくなる。

「うーん……お父さんが聞いたら怒りそうなことはしてないよ？」

「あら、そうなの？」

驚いたと言わんばかりに目を見開く優希の母。一体どんな回答を期待していたのかと優希は尋ねたくなったが、藪蛇になりそうなので止めた。優希の母は再度頬に手を当てると、困ったように眉を寄せる。

「あなた達って付き合い始めてからはまだ一ヶ月だけど、それまでは十年以上一緒にいたでしょう？　だから、付き合いが始めればトントン拍子で進むと思ったのに……」

「……お母さんがわたしと義人ちゃんに何を期待しているのか、よくわからないよ」

そう言って、優希は料理を作るべく視線を落とす。優希の母は視線を落とした優希を見ると、何を勘違いしたのか気遣わしげに尋ねる。

「もしかして、義人ちゃんってふの」

「わーわーわー！　何言ってるのお母さん！」

まだお昼だよ、と声を荒げる優希。さすがに親が相手ならば遠慮もないのか、普段は出さないような声が出た。さすがに、親と“そういった話”をするのは恥ずかしい。しかし、優希の母はこの機会を逃すつもりがなかった。

「案外、義人ちゃんも奥手なのかしら……あ、それとも小雪ちゃんがいつも一緒にいるからかしら？」

優希の言葉を特に気にせず、優希の母はそんなことを口にする。そして、名案が浮かんだとばかりに両手を合わせた。

「それなら、お母さんはお昼ご飯を食べたら小雪ちゃんと出かけるわね。良い機会だし、小雪ちゃんのお洋服を買いに行ってくるわ。その間、優希は義人ちゃんに甘えなさいな」

「お母さん……」

思わず、優希は呆れたような声を出す。しかし、『義人に甘える』という部分に心魅かれたのか、僅かに逡巡した後頷くのだった。

「小雪ちゃん、『おばーちゃん』と買い物に行きましょ？」

昼食を食べ終えて食休みをしていると、不意に優希の母がそんなことを言い出した。それを聞いた義人は不思議そうな視線を向ける。

「買い物ですか？　荷物持ちぐらいしかできませんけど、手伝いますよ」

昼ご飯のお礼にと義人が言うと、優希の母は苦笑しながら首を横に振った。

「違うのよ。小雪ちゃんに新しい服を買ってあげたくてね」

「新しい服を、ですか？」

「ええ。それで、どうかしら？　小雪ちゃんもたまには違う服が着てみたくない？」

優希の母が笑顔で尋ねると、小雪は僅かに迷いの表情を浮かべる。

「およーふく？」

「そう、お洋服。いつもと違う格好になったら、きっと『おとーさん』も『おかーさん』も可愛いって褒めてくれるわよ？」

「ほんと？」

義人と優希が褒めると聞き、目を輝かせる小雪。どうやら一気に乗り気になったようで、その様子を見た義人は苦笑を浮かべて頭を下げた。

「ありがとうございます。それじゃあ、俺と優希は……」

「あ、義人ちゃんと優希は家でのんびりしててね。うん、三時間は

戻らないようにするから」

戻らないように“する”とはどんな意味か。そう聞きたかった義人だが、優希の母の笑顔に押されて頷いてしまう。

「うふふ……それじゃあ、準備をして出ましょうか」

「はーい！」

優希の母の言葉に満面の笑みで答える小雪を見て、義人は『まあいいか』と納得することにした。

元々、休養を取るために帰宅したのである。

そのため特に問題はないと、小雪達を見送りながらそう思う義人だった。

そんな義人の考えが覆されたのは、小雪と優希の母が家を出て一分後のことだった。玄関まで出て二人を見送った義人ではあるが、リビングに戻るとやけに顔を赤くした優希の姿が見えたのである。

ソファーに座り、所在なさげに指を絡めているその様は、見ていて首を傾げざるを得なかった。

「優希、どうした？」

何かあったのかと尋ねると、優希は困ったように、それでいて僅かに慌てたように両手を振る。

「う、ううん。なんでもないよ」

何でもないと言うが、そうは見えない。そのため義人は壁に立てかけてあるノーレに目を向けたが、彼女は黙して何も語らなかった。
首を傾げつつも、義人は優希の隣へと腰を下ろす。特に意識しない行動だったが、義人が座ると同時にソファーが沈み込み、傍に座っていた優希は義人の方へともたれかかった。

「……おぉぅ」

肩にもたれかかってきた優希を見て、義人は思わず奇妙な声を漏らす。神に誓って言えることだが、義人としては本当に無意識だった。優希の傍に座ることも無意識ならば、現状に対して深く考えなかったのも無意識の産物。そこまできて、義人はようやく無意識の内に止めていた思考を回転させていく。

――これは、アレですかね？　優希のおばちゃんの笑顔的に、優希にもっと構ってやれっていうサイン？

半ば当たっており、半ば外れている考えが義人の頭に浮かんだ。
小雪のいない、優希と二人っきりの時間である。思い返してみると、優希と付き合い始めてから二人っきりになった時間はほとんどない。もしかすると遠回しにそれを責められたのかと義人は後悔した。

「ごめんな、優希」
「……え？」

いきなりの謝罪に、優希は目を瞬かせる。

「最近、二人っきりでいられる時間がなかったもんな。でも、俺も嫌で優希と二人っきりになることを避けていたわけじゃないんだ」

そう言って、義人は優希の肩に手を回した。恥ずかしさもあるが、それよりも今は優先することがある。義人は優希の肩を抱き寄せると、照れ隠しに頬を掻いた。

そんな二人を見たノーレは、この場に自分もいることを告げようとしたが、それはあまりにも野暮だったので口を閉ざす。しかし、その点には優希が気づいたのか気まずそうな視線をノーレへと向けた。

「えっと、でも、ノーレさんが……」

「……いや、忘れてたわけじゃないんだ、うん」

つい先ほど視線を向けたはずなのに、優希の様子を見て頭からノーレの存在が吹き飛んでいた義人である。平静を装っているが、冷や汗が一筋流れていた。

この場をどう切り抜けたものかと悩む義人だが、案が浮かぶよりも先に優希が決意のこもった視線を向ける。

「義人ちゃん……その、良かったらわたしの部屋に行かない？」

「優希の部屋に？」

そこまで言って、義人は思考を停止させた。優希の部屋に行けば、今度は完全に二人っきりである。

思わず、義人は優希をじっと見てしまった。優希はその視線を受けて、居心地が悪そうに身をよじる。

義人も男である。恋人から部屋で二人っきりになりたいと言われれば、迷わず頷きたくなる。しかし、二人っきりという状況はまず

い。

――理性がもつかなぁ……。

遠くに視線を向けながら、義人はそんなことを思った。そして、それが無理だと言うこともすぐに理解できた。そのため、真剣な表情を優希へと向ける。

「優希……その、良いのか？」

何が、とは言わない。優希は義人の言葉を聞くと、頬を染めた。

「義人ちゃんが、望んでくれるのなら……」

蚊の鳴くような声で答える優希。

――その答えだけで、義人には十分だった。

優希のことを大事だと思う気持ちが、義人の中でさらに強くなる。義人と優希は互いに真っ赤な顔で微笑み合うと、示し合わせたようにソファーから立ち上がるのだった。

『やれやれ……』

義人と優希の姿が消えたリビングで、ノーレは一人呟く。

『“向こうの世界”に戻れたとしても、問題は山積みになりそうじゃな……』

からかうような声。しかし、その声にたしかな哀しみが込められていたのを聞いたのは、誰もいなかった。

第百三十四話：光

そこは暗い――――真っ暗な空間だった。
上下左右のどこにも光はなく、自分がどこにいるのかもわからない。それでいて全身が浮いているようにも感じられた。まるで水に浮く木の葉のような感覚を覚えながら、“少女”は虚ろに思考する。

――――ここは？

思考しただけで、声には出ない。自分が目を開いているのか、それとも閉じているのか。それすらもわからない。現実感すらないあやふやな世界で、“少女”は一人暗闇に身を浸していた。時間の感覚は希薄で、どれだけの時が過ぎたのかもわからない。既に一ヶ月近い時が流れた気もすれば、まだ一時間も経っていない気もする。

――――わたしは、何を……。

靄がかかったように晴れない思考の中で、“少女”は自問した。
しかし、中々自答することができない。
そうやって悩み、どれだけの時が過ぎたのか。“少女”は心中で小さく呟く。

――――何か、大切な“何か”があった気がする……。

そこまで考え、“少女”の心が僅かに震えた。
そう、自分は“何か”を忘れている。自分の職務も、地位も、役割も。すべてを投げ打ってでも、成し遂げたい“何か”があった。例えその“何か”が叶っても、自分の望んだ未来は訪れないかもしれない――それでも、叶えたいと思えた“何か”。

――なんだった、かな……。

徐々に鮮明になっていく思考の中で、“少女”は絡まった記憶の糸を解いていく。頑丈に、幾重にも絡まった記憶の糸を解きほぐすのは容易ではなかったが、それでも頭に引っ掛かっている“何か”を思い出していく。
温かい思い出があった。
冷たく、悲しい思い出があった。
何気ない日常の中でも積み上げた、小さな思い出があった。
ぼんやりとした輪郭しか見えない思い出達。しかし、それでもしっかりと胸に伝わってくる感情がある。

――思い出さなきゃ。

それらはとても大事なもので、今の“少女”を形作っている一部。たった一年足らずだというのに、それまで過ごした年月よりも大切で、充実した日々の記憶だ。
“少女”が幼い頃から予想していたものとは、まったく異なった未来。決して心の底から笑うことはないだろうとすら思っていた、

暗くて重いだけのはずだった未来。けれど、それは予想外に楽しく、哀しい未来だった。

――――そう、だ。わたしは……。

“少女”がそこまで考えた時、それまで暗闇しかなかった空間に僅かな光が差す。そして、その光の傍に人影が見えた。何故か顔の部分だけ真っ暗でよく見えないが、背格好から年頃の少年であることが伺える。しかし、その“少年”の姿を見た瞬間“少女”の胸が大きく高鳴った。

知っている。その“少年”のことを、“少女”は知っている。“少女”にとってこれ以上ないほどに大切で、焦がれるほどに想い、求めた“少年”。

相変わらず顔の部分だけ真っ暗になっているが、“少女”はそれがすべてを投げ打ってでも求めた人物であると断言できる。

“少年”と出会うことができたのは“少女”にとって幸運であり、不幸でもあった。もしも出会ったのが別の人間だったならば、こうはならなかったかもしれない。

“少女”は一歩分だけ“少年”へと近づく。しかし、“少年”は動かない。

“少女”はもう一歩分だけ“少年”へと近づく。しかし、“少年”の顔は相変わらず見えない。

そして“少女”は“少年”のすぐ傍までたどり着いた。それはあと一歩、手を伸ばせば届く距離。

“少女”はおそるおそる手を伸ばし――――触れるよりも早く、その“少年”の姿が粉々に砕け散った。

「――――あ」

思わず、声が漏れる。そして、その声は大きく震えていた。
“少年”の姿が砕け散る瞬間、僅かにその表情が見えた。明かりが差すように、それまで影が差して見えなかったのが嘘のように表情が見えたのである。
“少年”――義人が、見たこともないほど穏やかな笑顔を浮かべているのを。

「ヨシト、様……」

そんな呟きが口から漏れ、カグラはゆっくりと目を開けた。そして数度瞬きをすると、ゆっくり上体を起こす。
周囲は暗い。いや、暗いと言うよりも視界が真っ黒に染まっており、カグラは思わず首を傾げた。

「……真夜中なんでしょうか？」

燭台に火がついていないのか、それとも月明かりが差さないほどに天気が悪いのか。そう思いながら、カグラは周囲を見回す。

「……カグラ様？」

そんなカグラのすぐ傍で、聞き覚えのある声が聞こえた。暗がり

から声が聞こえたカグラは僅かに驚きつつ、その声の持ち主の名を呼ぶ。

「サクラ？　どこにいるんですか？　いえ、そもそも何故あなたがわたしの部屋にいるんです？」

「……え？」

カグラの言葉に、サクラは呆然とした声を返す。その声を聞いたカグラは内心で不審なものを感じたが、それを無視して気になっていたことを確認する。

「そんなことよりも、ヨシト様は？」

完全に記憶を取り戻したのか、カグラは義人の行方を尋ねた。カグラとしては、『召喚の儀』はなんとか成功したものと判断している。しかし、そのサクラはその問いに答えず、雰囲気を固くしながらカグラへと質問を投げかけた。

「カグラ様……今、この部屋には何人の人がいますか？」

「わたしとサクラの二人でしょう？」

何を言っているんだと言わんばかりに答えたカグラに、“周囲から”絶句したような気配が伝わる。

「カグラ……あなた、何を言ってるのよ」

「……え？　ミーファ……ちゃん？」

今度はミーファの声が聞こえ、カグラは呆然としながら声のした方を向いた。だが、何も見えない。

視界は相変わらず真っ暗で、何も映しはしなかった。

カグラ達が医務室に運び込まれて、三日の時が過ぎた。志信とサクラはすでに体調を回復させ、日常生活を送っている。しかし、カグラだけは一向に目を覚ます気配がなかった。

「まったく、カグラはいつになったら目を覚ますのかしら？」

眠り続けるカグラを見ながら、ミーファが疲れたような声で呟く。時間が空けば顔を出すようにしているが、未だにカグラが起きることはない。そんなミーファの声に応えるように、カグラの身の回りの世話を行っていたサクラが頭を振った。

「治癒魔法使いの方や医師の方に見ていただきましたが、いつ起きるかわからないそうです。すぐに起きるかもしれませんし、当面は眠ったままかもしれない、と」

「……そう」

サクラの言葉に、ミーファは僅かに意気消沈しながら頷く。そして一度だけため息を吐くと、窓の外へと視線を向けた。

「そろそろ、ヨシト王の捜索と“見張り”をやっている魔法隊の交代に行かないと……わたしは行くわ。何かあったら人を寄越して」

そう言って、ミーファは扉へと足を向ける。

カグラ達が医務室に運び込まれた翌日。召喚された“かもしれない”義人を探して兵士達が国のあちこちを探索していたが、その中で奇妙な報告を受けたのである。

“最初に”その報告を届けたのは、グエン率いる騎馬隊だった。王都フォレスから北に進んだ森の中で、空中に走る謎の亀裂を見つけたのである。亀裂の正体を確認するために魔法の扱いに長けた者を派遣してほしいとも言われたのだが、魔法隊から人員を選抜している間に今度は第一歩兵隊から報告が届いた。それも、騎馬隊の届けた内容とほぼ同じものが。

その後も、義人の探索に向かった各隊から似たような報告が届くことになる。時には平野の真ん中で、時には森の中で、時には街中に建つ家の屋根の上で、空中に亀裂が入っていると報告が届いた。

城に残っていた人員によって情報を整理した結果、カーリア国のあちこちで“空中に亀裂が走る”という現象が確認されたのである。その亀裂の大きさもバラバラであり、人が一人通れそうなほどに大きな亀裂が走っている場所もあれば、手のひらサイズの石が通らないような小さい亀裂も見つかった。

一体何が起きたのか、誰もわからない。予想すらできない。害があるものなのか、それとも無害なのかもわからない。そのため、義人の捜索と併せて城の兵士を派遣し、監視に努めているのである。

謎の現象と、目を覚まさないカグラ。たった数日の経過でのし掛かってくる重い疲労を感じつつ、ミーファは捜索と見張りに行っている魔法隊と交代すべく部屋を出ようとした。

いつになったらカグラは目を覚ますのかと、一体何が起きているのかと不安を胸に抱えながら。そんなミーファの姿を見て、サクラはミーファを見送るべくその背に追従する。

「ヨシト、様……」

そして、不意にそんな声が部屋の中に響いた。ミーファとカグラ

は思わず足を止め、ゆっくりと振り返る。

「……真夜中なんでしょうか？」

続いて不思議そうな、ある意味呑気とも言える声がサクラ達の耳に届いた。

「……カグラ様？」

振り返ったサクラは、寝台の上で上体を起こしたカグラの名を呼ぶ。すると、カグラは数度周囲を見回してからサクラのいる方へと目を向ける。

それは、酷く虚ろな目だった。まるで光を映していないような、真っ暗な視線をカグラは向ける。

「サクラ？　どこにいるんですか？　いえ、そもそも何故あなたがわたしの部屋にいるんです？」

「……え？」

カグラの言葉に、サクラの反応が遅れた。

どこにいるかと聞かれれば、目の前にいるとしか答えようがない。それだというのに、何故わざわざそんなことを聞くのか。

「そんなことよりも、ヨシト様は？」

硬直したサクラを気に留めず、カグラは尋ねる。そのカグラの様子に、サクラは背中に氷でも差し込まれたような嫌な感覚を覚えた。

“そんなことよりも”と、現状を理解してないような言葉に冷や汗すら出そうだった。

「カグラ様……今、この部屋には何人の人がいますか？」
「わたしとサクラの二人でしょう？」

即答である。しかし、答えは間違っていた。サクラが視線を向けてみれば、扉に手をかけようとしていたミーファも呆然とカグラを見ている。

「カグラ……あなた、何を言ってるのよ」
「……え？　ミーファ……ちゃん？」

掠れかけた声で話しかけるミーファ。そんなミーファの声に、カグラはようやく狼狽したような声を出した。そしてミーファの方へ視線を向けるが、微妙に向きがズレている。おそらくは声のする方へ顔を向けただけなのだろう。ミーファの姿を捉えているとは、間違えても言えなかった。

「まさか……目が見えないんですか？」

足から力が抜け、膝から倒れ込みそうになるのを堪えながらサクラが尋ねる。その問いに対して、カグラは逡巡してから答えた。

「……もしかして、今は夜中ではない？　部屋の中も、真っ暗ではないと？」

認識が追いついていないのか、普段と変わらぬ声色でカグラが問いを投げ返す。

「今は、真昼よカグラ。正午を回って、外は晴れ……間違っても夜じゃないわ」

ミーファもサクラと同じ気持ちなのか、額に手を当てながら答える。

「……そう、ですか」

その回答に、カグラは顔を俯かせた。しかし、すぐに顔を上げてぎこちない笑みを浮かべる。

「あ、はは……ヨシト様を召喚するために、少し無理をしちゃいましたからね」

魔力が底をつき、それでもなお『召喚の儀』を止めなかったのだ。己の魂を、命を削ってでも、カグラは『召喚の儀』を続けた。ないはずの魔力を、無理矢理絞り出して続けたのである。

その代償で視力を失ったのならば、カグラとしてもまだ納得はできた。

理解し、納得し、視界が暗闇に閉ざされようとも――それでも、義人を召喚できたのなら良いと、カグラは納得する。

「わたしの状況はわかりました……それで、ヨシト様は？　今は政務をされていますか？」

サクラがいる方向に顔を向け、カグラが尋ねた。その問いを受けたサクラは、思わず視線を逸らす。しかし、その動作も視力のないカグラにはわからない。

「……ミーファちゃん？」

サクラがいつになっても答えないので、カグラは親友であるミーファへと声をかけた。寝台の上で小首を傾げるカグラを見て、ミー

ファは唇を噛みしめる。
カグラはまったく疑っていない。義人の再召喚は成功し、“こちらの世界”に義人がいると疑っていない。

「ヨシト王は……」

そこまで口にして、ミーファはありのままに話すべきか迷う。義人が“こちらの世界”に召喚されたかわからず、現在も捜索中であると伝えるべきか。それも、捜索を開始してから三日ほど時間が経っており、状況は絶望的であると。それを、カグラに伝えるべきかミーファは迷った。

「ヨシト王は、“まだ”見つかっていないわ」

だが、それもいずれは知ってしまうだろう。そのため、ミーファは正直に現状を伝える。カグラが『召喚の儀』を行ってから三日の時が流れているが、義人は見つかっていないと、カグラに伝える。

「……え？　でも、わたし、ヨシト様を召喚しましたよ？」

ミーファの言葉が理解できなかったのか、心底不思議そうにカグラは呟く。
“向こうの世界”と“こちらの世界”をつなげ、義人の魔力を見つけ出し、召喚を行った。カグラとしては、それがすべてである。
失敗など、考えてもいなかった。考えようとも思わず、事実、カグラは己の成功を疑っていない。これからは、再び国王の座に就いた義人と共に過ごせるのだと、それだけしか考えていなかった。
そんなカグラを見て、サクラは両手を強く握り締める。
サクラにとって、カグラは幼い頃から共に過ごした姉的存在。怒れば怖いが、それでも今まで共に笑い、共に過ごしてきたのである。

そこには親しみがあり、憧れがあった。いつかはカグラのようになりたいと思ったこともある。しかし、今サクラの目の前にいるカグラは、長年見てきたカグラとは似ても似つかない存在だった。

「……ヨシト様が召喚された可能性は、限りなく低いんです。国中を捜索していますが、手がかりもありません。現実を受け入れてください……カグラ様」

口に出した言葉は、今までにないほど冷たい。そして、その言葉に凍らされたかのようにカグラは表情を硬くした。

その言葉を最後に、沈黙が場を支配する。カグラはサクラの言葉を理解しようとして――頭がそれを拒否した。

表情から色をなくし、カグラはブリキ仕掛けの人形のようにサクラへと顔を向ける。

「……でも、可能性は、あるでしょう？」

感情の感じられない声で、カグラが尋ねた。

「っ！？」

視力がないはずなのに、カグラの瞳がサクラの姿を捉える。真っ黒な、否、真っ暗な瞳がサクラを映すが、その瞳にはまるで感情がない。どこかに感情を置き去りにしてしまったかのような瞳だった。

「カグラ、様……」

サクラは背中に嫌な汗が伝うのを感じた。志信と二人でカグラを止めるべく立ちふさがった時とは別種の、恐怖心にも近い感情がサクラの中で湧き上がってくる。

「可能性はあるわ。でも、それは本当に小さい可能性よ？」

カグラの瞳を前にして動けなくなったサクラを庇うように、ミーファが二人の間へと体を割り込ませて答えた。ミーファとしても、今のカグラは見ていられるものではない。

ミーファの言葉を聞いたカグラはしばらく無言を続けたが、それまでの無表情が嘘だったかのように、不意に笑顔を浮かべた。

「ふふっ、そうですよね」

両手を合わせ、花咲くのように微笑むカグラ。そんなカグラの笑顔にミーファすらも絶句すると、サクラとミーファの様子を気に留めずにカグラは寝台へと身を倒す。

「まだ体調が回復していないみたいなので、もう少しだけ休ませてもらいますね」

「え、ええ」

ミーファが頷くと、カグラはものの数秒も経たない内に寝息を立て始める。そんなカグラを見て、サクラは小さく口を開いた。

「これから、どうなるんでしょうか……」

事態が最悪の方向へと進んでいることを感じ取り、サクラはそう呟く。それはミーファに向けた問いだったのか、それとも独り言だったのか。少なくともミーファは自分への言葉だと判断し、疲れを吐き出すようにため息をついた。

「わたしにもわからないわよ、そんなの」

第百三十五話：亀裂　その2

――カグラが視力を失った。

その情報はすぐさまアルフレッドの元へと伝わり、彼は額に手を当てて天井を仰ぎ見る。状況は最悪の方向へと転んだと思っていたが、それもまだ甘かったらしい。こうなれば、最悪という底を突き破り、どこまで下へ落ちていくかもわからない。

目が見えないことでカグラ個人が感じる不便さ。

『召喚の巫女』が視力を失ったことでカーリア国が被るであろう被害と影響。

それらを考え、執務室で政務をこなしていたアルフレッドはため息を吐かざるを得なかった。

もしもカグラではなく、城下に住む民の一人が視力を失ったと言われたら、アルフレッドはここまで悩まない。不憫には思うが、それだけである。しかし、視力を失ったのが『召喚の巫女』であるカグラならば話は別だ。

目が見えなければ書類も読めず、満足に戦うこともできない。そもそも、日常生活を送ることすら困難になる。

「どうしたものかのう……」

顎に手を当て、アルフレッドは思考に耽る。カグラが視力を失ったという情報は臣下にも伏せており、知るのはサクラやミーファ、それに志信やシアラなどの信用のおける者達だけだ。

国王の失踪に続き、『召喚の巫女』が魔力をすべて消費し、その上で視力まで失ったとなればカーリア国も長くはもたない。遠くない内に内側から瓦解するか、他国の侵略で滅ぶことになる。そうなるよりも早く、何かしらの手を打つ必要があるだろう。

もっとも、いくら情報を規制しようといずれは漏れてしまうため、延命措置にしかならないのだが。

「国内各地で発見されている空中の亀裂も問題じゃし、ヨシト王は相変わらず見つからん……八方ふさがりじゃな」

長い時を生きてきたアルフレッドといえど、打てる手がほとんどない。せめてカグラの行った再召喚で義人が“こちらの世界”へと召喚されていたならば話は別だが、捜索を開始してから日数も経っている。希望的観測は捨てなければならないだろう。

義人が姿を消して以来溜まっている政務の数々に、国内各地で散見される謎の現象。そして、カグラが視力を失ったことへの対応。隣国では再び戦火の影が迫っており、カーリア国としても無関係ではいられない。しかし、それらに対して明確な指針を示せる“人間”がいないのだ。

アルフレッド自身が指針を示すこともできるだろうが、それは魔物であるアルフレッドの職分を超えている。

「国王と“カグラ”がいなくては成り立たない国、か……」

いっそ、ここまで国として続いたことがおかしかったのかとアルフレッドは苦く笑う。アルフレッドとしては、何百年も支えてきた国だ。辛いこともあったが、楽しくもあった日々。遥か昔に友人から言われた通り、忙しくて退屈はしなかった。

「……いかんな」

いつの間にかカーリア国が滅んでしまう未来を受け入れかけていた自分に気づき、アルフレッドは緩やかに首を横に振る。急転する事態を前にして、疲れが溜まっていたのかもしれない。

「儂も老いたのかのう……」

顎鬚を軽く撫でつつ、アルフレッドは苦笑した。優に千年以上を生きる長命のエルフの中ではまだ壮年の域を出ないが、人の中で生きる内に精神が老いていたらしい。そのことに笑うと、アルフレッドは止まっていた政務を進めるべく政務用の机に積まれた書類に目を向けた。

難局といえど、“まだ”全てが終わってしまったわけではない。片づけるべき仕事は山のようにあり、アルフレッドの指示を仰ぐ臣下も多くいた。

現状を打破することはできないが、せめて現状を維持する。それが、アルフレッドにできる精一杯のことだった。

「これから、どうなるのかな」

不意に聞こえてきた声に、シアラは無意識の内に声のするほうへと視線を向けた。その視線の先にいたのは、シアラが隊長を務める魔法隊の隊士である。女性の比率が高い魔法隊のため、仕事の最中でも同僚と言葉を交わす者がいるのだ。行き過ぎなければシアラも咎めないため、その会話がシアラの耳に入ったのはある意味仕方のないことだった。

何もない空間に亀裂が入るという謎の現象が報告されて早五日。カーリア国の中でも魔法に長けた部隊である魔法隊は国内のあちこちへと派遣され、空間に入った亀裂について調査する日々を送っていた。

シアラも例に漏れず、十名ほどの部下を率いて確認された亀裂の一つ……カーリア城から東へ徒歩で五時間、『強化』を使いながら走って三十分ほどの位置にある森の傍へと足を運んでいた。

「ヨシト王もいないし、カグラ様の様子も変だし……アルフレッド様は毎日忙しそうにしてるよね」

「うん。それに、この妙な現象がね……あーもう、いくら魔法隊の人間だからって、知りもしない現象を調査しろって言われても困るんだけどなー」

シアラと大して歳が変わらない隊士達が愚痴のように言葉を交わし合う。シアラはそれを無表情に聞いていたが、何か思うところがあったのか隊士のほうへと歩み寄った。

「……そんなことを言ったら駄目」

「うわっ、隊長!?」

背後からかけられた声に、無駄口を交わしていた隊士達は慌ててシアラの方へと向き直る。愛玩的（マスコット）な扱いを受けることもあるが、シアラが魔法隊の隊長であることに変わりはない。何かしらの叱責を受けると思った隊士が背筋を伸ばすと、シアラは小さくため息を吐いてから空中に走った謎の亀裂に視線を向ける。

「……わたし達は、できることをやれば良い。今は調査が大事」

「それはそうなんですが……さすがに、調査しても何もわからないと気も滅入りますよ……」

魔法剣士隊と交代をしながら調査をしているが、一向に原因も亀裂の正体もわからないため隊士達にも疲労の色が見え始めていた。それを理解しているが、シアラとしては受けた指示を全うするしか

ない。

「……わからないなら、わからないで良い。それも一つの報告。それに、その場合はアルフレッド様から次の指示がくる」

調査の結果としては最低だろうが、わからないものはわからないのだ。シアラはカーリア国ではカグラに次いで魔法や魔法具などについて詳しいが、そのシアラでも目の前の現象は理解できない。しかし、カグラが義人の再召喚をしようとしたその日以降にこの現象は確認されたのだ。紐付けて考えるのが妥当だろう。

今のところ、亀裂によって何かしらの影響が出たという話は聞いていない。これから先も影響がないかはシアラも断言できないが、現状では害がないと言える。

「隊長なら“コレ”が何かわかるんじゃないんですか？」

そう言って、隊士の一人が空中の亀裂を指差す。その場所にあったのは、直径一メートル、幅二十センチほどの亀裂だった。それまであった風景を切り取ったように、真っ黒な多角形の穴が空中に浮いている。

「……わかったら苦労はしない」

「そうですよね……」

試しに木の棒を亀裂の中に入れてみたり、石を投げ入れたりしてみたが、特に変化もない。ただ、投げ入れた石が戻ってこなかったことがシアラの気にかかっていた。

「いっそのこと魔法を撃ち込んでみましょうか？」

良いことを思いついたとばかりに一人の隊士が手を合わせる。

「……駄目。何が起こるかわからない」

そんな隊士を見て、シアラは小さく首を振った。木の棒や石が大丈夫だったのだから、魔法も大丈夫という結論には賛同できない。

そうやってシアラが部下と亀裂の調査をしていると、不意に傍の森から一斉に鳥の群れが飛び立った。魔物には分類されていない、小型の鳥である。まるで何かから逃げるように、鳥の群れが森から離れていく。

「隊長、今のって……」

いきなり鳥の群れが飛び立ったことに疑問を覚えた隊士が呟く。

野生の動物というのは自身に迫る危機に対して敏感であり、時には予知染みた正確性を持って行動を取ることがある。そのことを知っているシアラは亀裂の調査を一時中断すると、常に携帯している木製の杖を両手に握りしめて森の方へと視線を向けた。

「……全員、警戒」

小さいが、よく通る声で指示を出す。すると、それまで緩い雰囲気だった魔法隊の隊士達も気を引き締め、各々杖を構えた。

カーリア国の東側には魔物が生息する鉱山地帯があり、その周囲にある森にも魔物が多く生息している。しかし、だからといって森に住む鳥達が一斉に逃げ出すことはない。逃げた鳥達も日常的に森にいる以上、魔物と接する機会はあるのだ。

その鳥達が逃げ出した。その一事だけで、警戒する理由になる。

強い魔物が冬眠から目を覚まし、空腹を満たすために手当たり次第に周囲の生き物を襲い始めたのか、それとも天変地異の前触れか。

そんな考えがシアラの頭を過ぎった。しかし、警戒をしていても一向に変化はない。

「隊長、どうしますか？」

緊張の滲んだ声で隊士が尋ねる。その声を聞いたシアラは僅かに逡巡したものの、強い意志を持って口を開いた。

「……もう少しだけ待機。でも、何も変化がなければこちらから確認に行く」

「了解しました」

森の方を注視するが、鳥が飛び立って以降は何も変化がない。だが、“何か”があったことは確実だろう。そう判断したシアラは、何かあった時のために十人いた部下を半分に分けて残し、半分を自身が率いて森へと向かう。

隊長という立場を考えればシアラがこの場に残って指揮を執るべきだったが、森の中に入って中級以上の魔物に襲われた場合、並の隊士では生還できるかわからない。そのため、シアラは何があっても対応できるように周囲に気を配りつつ、森の中へと足を踏み入れた。

可能性は低いが、上級に分類される魔物が森の外に出ようとしているのなら重大な事態である。その場合はシアラが殿を務めてでも隊士を逃がし、事の次第を報告しなければならないだろう。

そんな覚悟すら抱きつつ森の中を進むシアラ達だったが、それを裏切るように何も起こらない。静かな――静かすぎる森の中を慎重に進み、シアラ達は異常がないかを確認していく。

「何もないですね……」

「……油断したら駄目。何が起こるかわからない」

部下が気を抜きそうになるのを注意しつつ、シアラは周囲の様子を確認する。

風も吹いていないため、木々がざわめく音すら聞こえない。もうじき春を迎えるため、冬眠から目を覚ました魔物の姿があると思ったがそれもない。元々冬眠が必要ない魔物の姿も、見当たらない。

異常と言えば、それが異常だった。もしや魔物が生息しない地域だったかと首を傾げるシアラだったが、カーリア国は建国して以来、国内に数多く生息する魔物に悩まされてきた国である。どの地域にどんな魔物がいるかも、おおよそはわかっていた。その知識と照らし合わせれば、今シアラ達がいる森は中級以下の魔物が生息する場所のはずである。

警戒しながら森の中を進むこと少々。シアラ達は木々がない、開けた場所へと到着した。もっとも、開けたといっても森の中である。半径五メートルほどの、森全体に比べれば針の穴のような空地だった。

「……っ」

そして、シアラは思わず息を呑んだ。龍種などの上級に属する魔物がいたわけではない。森の中で見つけたその空地には、今までシアラ達が“調査していたもの”が存在していた。

――空中に浮かぶ、謎の亀裂。

しかし、その大きさはそれまで見たものとは比較にならない。

「大きい……」

隊士の一人が無意識の内に呟いた。シアラ達が新たに見つけた亀

裂は、それまでのものより遥かに大きい。縦幅と横幅、共に二メートル近くあるだろう。人間だろうと簡単に飛び込むことができるほどの大きさの亀裂――――否、最早大穴と言える代物が空中に浮かんでいた。

「隊長」

「……うん。報告が必要」

そう言って、シアラが部下に指示を出そうとする。しかし、それよりも早く目の端に妙なものが移り、シアラはそちらへと足を向けた。

“ソレ”を目にしたシアラは膝を折り、真剣な表情で地面を見つめる。

枯れ葉が散らばり、ところどころ土がむき出しになった地面。その土の部分が、不自然に凹んでいた。

「……これは、足跡？」

魔物が住む森の中である。間違っても人間の足跡ではないだろうが、魔物の足跡が地面に残っているぐらいならば特におかしくはない。

「……大きい」

シアラが妙だと思ったのは、その足跡の大きさだった。小型の魔物は言うに及ばず、シアラが今まで見たことのある魔物の中でも最も大きいであろう足跡。足跡の周囲を探してみると、同じような形の足跡が複数残っている。それらを観察して、シアラは小さく呟いた。

「……四足獣……それも、かなり大きい」

己の言葉に嫌な予感を覚えて、シアラは思わず振り返る。

その足跡の先には、今しがた見つけた大きな亀裂があった。

第百三十六話：忍び寄る影

幸福、という言葉がある。

読んで字の如く、幸せであることを表す言葉だが、それを強く実感したのは十八年近く生きてきた義人にとっても初めてのことだった。

何故幸福かと自問すれば、即座に自答として優希の顔が脳裏に浮かんでしまうぐらいに理由はハッキリとしている。なんのことはない、ずいぶんと長い時間がかかってしまったが、優希と恋仲になったのが理由だった。幼馴染みという関係上、ある意味では自然の流れとも言えたが、それでも義人にとっては今までの人生の中でも中々類を見ない出来事と言える。

志信などの友人が一緒にいるときは違う、今まで感じたのことのない感情。それまでは優希と一緒にいても緊張することはほとんどなく、むしろ安らぐことが多かった。しかし、それに加えて言いようのない、胸が満たされるような感覚がある。

はてそれはなんだろうか、と義人は首を捻るものの、上手い言葉が見つからない。

そうやって悩み、どれぐらいの時間が過ぎたのだろうか。朝起きてから朝食を摂って以来、自室で一人ベッドに腰掛けて考え事をしていた義人に、恐る恐ると言った口調でノーレが話しかけた。

『のう、ヨシト……お主、大丈夫か？』

そう問いかけるものの、義人からの返事はない。本当は違う用件で話があるのだが、今のままでは話すだけ無駄だろう。義人は何を考えているのか、頬を緩めながら一人頷いているだけだ。そして、数秒ほど経ってからようやくノーレへと視線を向ける。

「……っと、あれ？　今、話しかけたか？」
『話しかけたが……先ほどから何を一人で笑っておるんじゃ？』
「え？　あーっと……」

ノーレにそう言われ、義人は表情を引き締めた。気を抜けば無意識の内に笑みを浮かべてしまいそうになり、傍目から見ればさぞおかしく見えるだろう。それを自覚した義人だが、時間が経てば元に戻ってしまい、再び緩い笑みを浮かべてしまう。

『……ト……ヨシト！』

再度意識をどこかに飛ばしてしまったらしい義人に、ノーレが声を大にして呼びかける。すると、義人は不思議そうな顔をしながら周囲を見回した。

「……っと、あれ？　今、話しかけたか？」
『うむ。その台詞も、まったく同じものをつい先ほど聞いたわい』
「そっか、そりゃ悪かった。それで、どうかしたのか？」

不思議そうな顔をする義人を前にして、ノーレは声に出さず大きなため息を吐いた。ここ最近、彼女の使い手である義人とはことあるごとに同じような会話をしている。さすがに魔法の訓練をしている時は真剣だが、それ以外のふとした拍子に義人が気を緩ませる――優希のことを考えて周囲の状況がわからなくなることがあった。

それ自体は別に良い。ノーレとしても、二人の関係は祝福すべきことだとわかっている。傍から見ても似合いであるし、義人と優希の仲が良いと小雪も喜んでいる。“向こうの世界”に戻れた場合、一悶着どころではない騒ぎが発生するだろうが、現状では問題ではない。そのため、ノーレは現状で気にかかっていることを確認する

ことにした。

『妾が以前話したことを覚えておるか？』

「以前……って、いつのことだよ？」

あまりにもアバウトな話の振り方に、義人は首を傾げる。以前と言われても、ノーレと言葉を交わした機会は多いのだ。

『ほれ、“妙な気配”がすると言うたではないか』

「ああ。魔法の訓練をしている時にそんな話をしてたっけ。それがどうかしたのか？」

軽く記憶を掘り返し、義人はノーレに話を促した。すると、ノーレは僅かな間を置いてから話の続きを口にする。

『あの時は気のせいかと思ったんじゃが、ここ数日でその気配が強まったように感じるんじゃ……気のせいとは思えないぐらいに、のう』

「強まったって……その、妙な気配ってやつが？」

『うむ』

確信を持った口調で肯定の返事をするノーレに、義人は緩んでいた気を引き締めた。

「妙な気配、か……俺は何も感じないけどなぁ。気配とか殺気とか、そういった目に見えないものは志信ならわかったんだろうけど……」

『仏頂面を基準に考えるとロクなことにならんぞ？　アレはお主が使った風魔法を感覚だけで打ち払ったこともあったしのう』

「そんなこともあったなー。んで、その気配がどうしたって？」

何か危険があるのか、と言外に尋ねる義人。ノーレはそんな義人の意図を正確に読み取ると、ため息混じりに答える。

『わからん。“この感覚”が何を指しておるのか、現状では判断がつかんのじゃ。ただ、何が起こっても大丈夫なように常に気を張っておけ。今のお主の様子を見ていると、不安で仕方がないわい』

「ぐぬ……そんなに気が抜けて見えたか？」

『戯けめ。その質問を口にしている時点で、気が抜けていると言っているようなものじゃ』

呆れた口調で告げるノーレに、義人は誤魔化すように乾いた笑いを浮かべた。しかし、笑っている途中で何かに気付いたのかベッドから立ち上がる。

「それなら優希や小雪にも注意を促しておかないとな」

『それはそうじゃが、何故立ち上がるんじゃ？“ケイタイデンワ”を使えばいいじゃろ？』

“こちらの世界”での生活に慣れたのか、ノーレはそう言って携帯電話の使用を促す。それを聞いた義人は、“向こうの世界”に召喚された際は部屋に置きっ放しにしていた携帯へ視線を向け、すぐに逸らした。

「い、いやぁ、家近いし、直接話せば良いだろ？」

『“ケイタイデンワ”を使った方が早いじゃろうに……』

ノーレは呆れたようにそう言うが、途中で何かに気付いたのか意地悪げな声を漏らす。

『ははぁ……さてはお主、自分からユキに会う理由にするつもりじ

ゃな？』

ピクリと、義人の肩が震える。どうやら図星だったらしく、そんな義人の姿を見たノーレは楽しそうに笑った。

『くくく、愛いやつめ。それならば仕方ない。“ケイタイデンワ”など使わず、直接訪ねるが良いわ』

「だぁーっ！　うっせ！　からかうなよ！？」

ノーレの言葉に気恥ずかしさを感じつつ、義人は誤魔化すように叫ぶ。しかし、そんな義人の態度が面白いのか、ノーレが口を閉ざすことはなかった。

『何を言うか。毎日飽きもせずに顔を合わせ、乳繰り合っておるではないか』

「人が聞いたら誤解するようなことをサラッと言わないでくれませんかね！？」

そう言って、義人は手が痛むことを気にせず王剣の鞘へと裏手で突っ込みを入れる。本当に乳繰り合っているわけではないが、突っ込みを入れずにはいられなかった。そしてノーレに背を向けると、逃げるように部屋のドアノブに手をかける。

「じゃあ、ちょっと行ってくるからな！」

『うむ、行ってくるがよい。魔法の訓練は午後からで良いじゃろう。まあ、本当ならば妾も連れて行けと言いたいところじゃが、それは無粋に過ぎるというものじゃし……のう、ヨシト？』

ノーレへの返事は残さず、義人は部屋を後にする。帽子などの人相を隠す道具を手に取っているあたり実は冷静なのかもしれないが、

それは確かめようもない。ノーレはそんな義人の背中を見送ると、静かになった部屋の中で小さく笑う。

『ふふ……ちと羨ましいのう』

義人が、ではない。それならば優希かと聞かれても、答えは否だ。単純に、“互いに触れ合えること”が羨ましい。

『まあ、今の妾には叶うはずもない願いか……』

それだけを呟き、ノーレは意識を遠くへと向けた。

ここ最近感じている“妙な気配”。それが強まっていると口にしたが、それと同時に言いようのない不安も覚えてしまう。

それは未知に対する恐怖か、それともどこかでその気配を知っている気がするからか。

『何もなければ良いんじゃがな』

今頃家から外へと出ているであろう義人のことを思い浮かべ、ノーレは小さく呟く。

その呟きが叶わぬことを、この時のノーレは知るはずもなかった。

「……というわけで、ノーレが注意しといてくれだってさ」

優希の家に上がった義人は、ノーレとの会話をそのまま優希と小雪に言って聞かせた。
今日は平日のため、優希の両親の姿はない。

「はーい」

本当にわかっているのか、義人の顔を見るなり背中によじ登った小雪が返事をする。

「でも、何に注意すればいいのかな？」

優希は疑問を覚えたのか、小さく首を傾げながらそう尋ねた。それを聞いた義人は、同じように首を傾げる。

「さあ？　でも、ノーレが見当はずれなことを言うわけもないしな。とりあえず、身の回りで異常がないか注意しようか」

注意をすると言っても、気を抜かないのも疲れてしまう。そのため、適度に注意をしようと義人は内心で呟いた。もっとも、“こちらの世界”で注意するのも高が知れている。
“向こうの世界”ならば“こちらの世界”の日本のように治安が良いわけではないし、魔物なども生息している。その上、義人は国王という役職に就いていたため何が起きるかわからず、身の回りには護衛の兵士もいた。その頃と比べれば、注意する点も異なる。
“こちらの世界”で注意するならば、道路を走る車や通り魔に対してだろうか。そんなことを考え、義人は再度首を捻った。

「えーっと……信号無視をしない、とか？」
「でもそれって当たり前のことだよね」
「だよな」

“向こうの世界”に自動車はないため、危険と言えば危険だが方向性が違うように感じられる。かといって、可能性としては低いが通り魔が出たとしてもあまり問題はないと義人は思っていた。何せ、“向こうの世界”では数度とはいえ修羅場を潜っている。相手が銃器を持っていたら話は別だが、こちらは魔法が使えるためどうにかなるだろうという思いもあった。

そうやって義人と優希が意見を交わしていると、義人の背中にぶら下がったままで話に入りそびれた小雪が右手を上げる。

「こゆきはなににちゅーいしたらいいの？」

「そうだなぁ……知らない人についていかない、とか？」

「しらないひとー？」

「そう。見たことも話したこともないのに『お菓子あげるからこっちにおいで』とか、『お父さんとお母さんが呼んでる』とか言う人には注意しような。大抵、変質者だから」

そう言いつつ、背中にぶら下がる小雪を正面に移動させて頭を撫でる義人。義人に頭を撫でられた小雪は心地良さそうに目を細め、小さく頷く。

「わかった。しらないひとにはついていかない」

「よしよし、良い子だ」

「しらないひとにおとーさんがいってたことをいわれたら、たたいて“あくにんたいじ”するね」

「よしよし、ちょっと待ちなさい」

撫でる手を止め、義人は物騒なことを口走った小雪と目線を合わせる。

「退治しなくていいから。小雪が変質者を退治しようとしたら、とんでもないことになるから」
「でも、へんしつしゃなんだよね？」
「変質者だから攻撃しても良い、なんてことはないんだよ。というか、小雪が力加減を間違うと洒落にならないだろ？」

洒落にならないどころか、傷害事件になることは確実だろう。多少の傷を負わせるだけで済んだら良いが、重傷もしくは相手を死亡させる可能性もある。

「むー……でも、“てれび”では“ひーろー”がわるいひとをやっつけてたよ？」

義人の言葉に納得がいかないのか、小雪は首を捻るだけだ。“こちらの世界”で生活する間に子供向けのヒーローものアニメでも見てしまったのか、悪人は殴って退治すれば良いと思っているのかもしれない。

そんな小雪をどう諭したものかと義人が悩んでいると、優希が微笑みながら小雪の頭に手を乗せた。

「そういう時はね、小雪が退治するんじゃなくて『おとーさん』に助けてもらえば良いんだよ」
「おとーさんに？」
「そうだよ。小雪にとっては『おとーさん』もヒーローみたいなものでしょ？　それに、小雪が危ないことをしたら義人ちゃんもわたしも心配するしね」

そう言って、優希が小雪の頭をゆっくりと撫でる。

「……うん。わかった」

ようやく納得したのか、それとも優希に頭を撫でられる心地良さでどうでも良くなったのか、小雪が頷く。そして、それに続いて口を開けると、小さなあくびが零れた。

「……こゆき、ねむい」

小雪が洋服の袖口で目を擦りながらそう言うと、義人と優希は顔を見合わせる。

「今日は何時に起きたんだ？」

「六時過ぎ、ぐらいかな？　小雪が目が覚めたとかで、起きるのがいつもより早かったね。それじゃあ小雪、少しだけお昼寝しようか？」

「うん……」

昼寝というには早い時間帯だが、小雪は生まれて一年も経っていない。人間で言えば赤ん坊であり、眠いと言うなら寝かせるべきだろう。そう判断した義人は優希の言葉に追従するように頷いた。

「そうだな。優希のベッドで良いか？」

「……んー」

既に眠気が強くなってきているのか、返ってきたのは生返事である。義人はそんな小雪に苦笑すると、横抱きに抱え上げて優希のベッドへと寝かせた。すると、小雪はものの数秒で眠りに落ちてしまう。そんな小雪の寝顔を眺めて、義人は苦笑を柔らかいものへと変えた。

「いや、眠るの早いなー。食べて、寝て、遊ぶのが子供の仕事だけ

どさ」
「そうだね。“向こうの世界”でも割とお昼寝はしていたんだけど、“こっちの世界”でもそれは変わらないや」
優希は眠りについた小雪を一撫でると、壁に掛けてある時計へと目を向ける。
時刻は午前十一時を僅かに回ったところであり、時計を見た優希はポンと音を立てながら両手を合わせた。
「そう言えば、お昼ご飯の材料がないんだよね。お米もあまりなかったし、義人ちゃんさえ良ければ一緒に買い物に行かない？」
「買い物？　重いものがあるなら付き合うよ」
「いいの？」
「もちろん。重いものは俺が持つから」
魔法の訓練は午後からのため、丁度良いと言えば丁度良い。自宅に帰って自分一人で昼食を取るよりも、優希の家で優希や小雪と共に昼食を取った方が余程建設的である。
そうして、義人と優希は二人で連れ立って外出をすることにしたのだった。
義人や優希が住む住宅街から最も近いスーパーは、徒歩で十五分ほどの位置にある。本来ならば自転車を使った方が早いのだが、特に互いに示し合せることなく、自然と徒歩で向かうことにした。そ

の際義人はニット帽で髪型がわからないようにし、優希は度の入っていない眼鏡をかけて印象を変えるようにしている。“こちらの世界”に戻ってそれなりに時間が経つが、今まで周囲に気付かれていない以上有効なのだろう。義人は最低限の警戒心だけ残しながら歩を進めていく。

優希と話しながら歩くこと五分少々。義人達は赤信号に捕まってその足を止めた。道路の近くには大きめの児童公園があり、幼稚園や保育園に通っていないと思われる子供が数人ほど遊んでいる。

義人はそんな子供たちを遠目に眺め、僅かに目を細めた。空は雲一つなく、たしかに屋外で遊ぶには最適だろう。春が近づいているため、気温も十分暖かい。空には渡り鳥でも飛んでいたのか、やけに“巨大な影”が地面を走っている。

それらの光景を眺め、義人は隣に立つ優希へと話を振った。

「いや、それにしても小雪もいつの間にヒーローもののテレビ番組なんて見たんだか――」

そこで不意に、義人は言葉を途切れさせる。

“何か”が、引っ掛かった。

それが何なのか、僅かに黙考する。そして、つい今しがた地面を移動していた影に視線を向け、そこから空を仰ぎ見た。

そんな義人の様子に気づいた優希は、義人と同じように視線を移動させ、『あ』と声を漏らす。

「大きい……鳥？」

疑問の含みを持たせて、優希が呟く。優希の声を聞いた義人は、それに応えることもできずに呆然と空を見つめた。確かに、鳥と言えば鳥だろう。しかし、素直に首肯するわけにもいかない。

そんな義人の視線の先にあったのは、

「……おいおい。なんで“アレ”が“こっちの世界”にいるんだ……」

“向こうの世界”に召喚されたその日に遭遇した紫色の化け鳥が、“こちらの世界”の空を飛んでいる姿だった。

第百三十七話：忍び寄る影　その2

艶のある紫色の翼を羽ばたかせ、三つ目の怪鳥が空を舞う。

電柱や看板などの障害物を事もなげに避けつつ空を舞うその姿は、ある意味勇壮とすら言えただろう。

一メートルほどの体躯ながら、両翼を広げたその姿はその体躯を何倍も大きく見せていた。その大きさは、“こちらの世界”では中々お目にかかることがないほどに大きい。鳥にしては、十分以上に巨体と呼べる。体長だけで言うならばコンドルなどの方が大きいだろうが、その怪鳥は横幅もあり、体重で比較するならばコンドル以上と窺えた。

もっとも、目を引くのはそれだけではない。鋭い嘴（くちばし）や、小さな子供ぐらいなら鷲掴みにできそうなほど巨大な鉤爪（かぎづめ）。極めつけは、額にある三つ目と頭の両脇に生えた二本の角。三つ目や角がある鳥など、“こちらの世界”には生息していない。義人が知らないだけで、どこぞの秘境にでも行けば生息しているかもしれないが、少なくとも日本、とりわけ義人が生まれ育ったこの地でこれほど大きな鳥を見た記憶はない。

有り得ない光景を前に、義人は僅かに忘我する。しかし、すぐさま気を取り直すと、隣に立つ優希へと視線を向けた。

「……優希、どう思う？」

「“向こうの世界”にいた魔物、だよね？」

優希の言葉に首肯すると同時、義人はやはりかと内心で舌打ちする。夢か、はたまた見間違いならば良かったが、これは紛れもなく現実だ。

何故魔物が“こちらの世界”にいるのか。それを思考しつつ、義人は空を飛ぶ怪鳥の姿を目で追う。すると、そんな義人の思考を遮

るように優希が小さく呟きを漏らす。

「あの鳥、なんでここにいるんだろう」

「なんでって、それは……」

俺にもわからない、と口にしかけて、優希がそれを制する。

「ううん、そういう意味じゃないの。わたしが言いたいのは、なんで街中にまで出てきたのかなって……」

「……え？」

そう言われ、義人は思考を止めた。だが、すぐに優希の言葉を飲み込み、思考を回転させる。

魔物というのは、基本的に警戒心が強い生き物だ。エルフやドワーフ、龍種などの言葉が通じる種族ならばともかく、下級に属する大半の魔物は人間に対して強い警戒心を持つ。縄張りに侵入すれば襲ってくることもあるが、それは生き物として当然でもある。しかし、それとは別に魔物が人を襲うことがないわけではない。

義人は“向こうの世界”にいた際、国王として魔物の被害に対応した指示を臣下に出すことが多々あった。そのため様々な被害状況を聞いてきたが、魔物の被害は基本的に魔物の生息地の近くで起きる。

森の近くの畑で作業をしていたら魔物に襲われた。

旅の途中、森の近くを通ったら魔物に襲われた。

海で漁をしていたら魔物に襲われた。

それらは縄張りを侵した場合に襲われたことが大半だったが、それ以外にも魔物が人を襲う理由はある。

「まさか……」

義人は視線の先で、滑空しながら徐々に高度を落とし始めた怪鳥を見据えた。

魔物が人を襲う理由、それは実に単純な話である。

――人間を食料とする場合に、魔物は人を襲う。

まさか、と義人は浮かんだ考えを否定する。しかし、一度浮かんだ最悪の予想は中々消えようとしない。また、否定のしようもない。

仮に、である。

空を飛ぶ怪鳥が“こちらの世界”に来て、数日の時間が経っているとする。ニュースになっていない以上、これまでは人の目につかない場所にいたのだろう。しかし、警戒心が強いのならば人間が住む場所にノコノコと出てくるはずもない。それだというのに、怪鳥が人の住む街……それも、“向こうの世界”とは異なる高層の建造物や道路を走る車が存在する街に出てくるだろうか。

答えは否である。ただし、出ざるを得ない状況に陥った場合はその限りではない。

そして、この場合は出ざるを得ない状況に陥ったのではないだろうか。

人の目につかない場所にいたが、そこには食料がなかった。そのため、空腹を満たすために警戒心を押し切ってまで人の住む街に出てきた。そう考えれば、怪鳥の行動にも納得がいく。

事実、そんな義人の考えを肯定するように怪鳥は高度を下げている。旋回しているため地面に降り立つまでは時間がかかるだろうが、それも僅かなものだ。秒は優に超えるが、分を超えることはないだろう。

怪鳥が旋回するその下にあったのは、児童公園で遊ぶ子供達の姿。

それを確認した瞬間、義人は振り向かないまま優希へと声をかける。

「優希……すぐに家に戻って、小雪を起こしてきてくれ。あと、ノ

ーレを持ってきてほしい」

それだけ告げると、優希は迷うことなく頷く。

「うん、わかった。義人ちゃんは？」

その声色に含まれていたのは、僅かな心配と隠すことのない信頼。

そんな優希の言葉に対して、義人は小さく笑う。

「ちょっと、正義のヒーローをやってくるわ」

それだけを言い残し、義人は駆け出した。

平日の昼間とはいえ、人通りが皆無になることなど早々ない。何人かの通行人は空を飛ぶ巨大な怪鳥を目撃し、驚きの声を上げていた。中には携帯電話のカメラを起動し、写真を取ろうとしている者もいる。

「ったく、気楽なもんだな！」

そんな歩行者を尻目に、義人はアスファルトの道路を疾走していく。

『強化』を使っての、全力疾走。『加速』を使った時とは比べるべくもないが、それでも現在の自分が出せる最高速度で義人は疾走

する。人に見られれば、首を傾げるどころではないだろう。短距離走でオリンピックに出ればメダルの獲得も容易く行えるような速度で、義人はアスファルトの道路を走破する。

視線を向ければ、すでに怪鳥は高度をだいぶ下げていた。このままいけば、十秒と経たない内に子供の一人でも攫っていくだろう。かといって、空を飛ぶ鳥を打ち落とす手段もない。ノーレが手元にあれば話は別だが、空を飛ぶ鳥に風魔法を命中させる腕は義人にはないのだ。故に、義人に取れる手段は非常に限られている。

怪鳥の位置を確認しつつ、義人は地を蹴る力を強めていく。“向こうの世界”とは違い、全面アスファルトの道路の上だ。もしも転べば、軽い怪我では済まない。それでも義人は転倒する恐怖を抑え、ひたすらに走る。

「……え？」

公園で遊んでいた子供の中の一人が、空を見上げてそんな呟きを漏らした。呆けたように見上げたその視線の先に映るのは、紫の怪鳥の姿。普段、スズメやカラスしか見たことがないためか、自分達目がけて滑空してくる怪鳥を現実のものとして捉えられていないのだろう。そんな子供の姿につられ、周りにいた子供達も空を仰ぎ見る。

「あれ……なに？」

子供達の中の誰かが呟く。しかし、それに答えることができる者はいない。全員が一様に空を見上げ、迫りくる怪鳥を見つめることしかできなかった。

子供達が恐慌を起こすことがなかったのは、怪鳥の姿が現実離れしているからか。ロールプレイングゲームに登場するモンスター染みたその造形は、到底現実のものではない。彼らは、鉤爪を開閉さ

せながら迫りくる怪鳥をただ見つめ、

「そうは――――させるかあぁぁっ！」

続いて響いたその声に、ようやく現実へと立ち返った。

それまで迫っていた怪鳥が、横合いから義人に蹴り飛ばされる。

それはさながらピンボールのように、横からの衝撃で怪鳥の軌道が一気に真横へとずれた。横からの衝撃を受けた怪鳥は耐えきることもできず、放物線を描きながら地面へと落下する。

加速し、跳躍しての飛び蹴り。そこには技術も何もない、勢い任せの蹴撃だ。しかし、それまでの助走によってついた勢いをそのまま乗せれば、それだけで十分な武器になる。

怪鳥に飛び蹴りを見舞った義人は勢いを殺し切れずに地面を転がる羽目になったが、それでも上出来と言えた。幸い、公園の敷地内は地面がアスファルトではなく土のため、二転三転した後に受け身を取り、勢い任せに立ち上がる。

「いってぇ……勢いをつけ過ぎたな。蹴った足もいてぇ」

『強化』を使っているとはいえ、痛いものは痛い。地面を転がった際に多少擦過傷を負ってしまったが、アスファルトの上を転がるよりは余程マシである。

義人は蹴りに使った右足を軽く振ると、異常がないことを確認した。そして、放物線を描いて地面に落下した怪鳥に視線を向ける。首などを正確に蹴り抜くことができれば即死させることも可能だっただろうが、それを望むだけの精度もない。結果として一番的が大きい部分……すなわち胴体部分への攻撃になったが、効果はあったようだ。怪鳥は翼を震わせ、奇妙な悲鳴を上げながら地面をのた打ち回っている。しかし、致命傷には程遠いのか時間を置けば起き上がってくるように見えた。

そんな怪鳥から視線を逸らさずに、義人は子供達へと声をかける。

「今の内に、ここから離れるんだ。寄り道せずに家に帰って、しばらくは閉じこもっていること。いいね？」

「え……えっと……」

義人の言葉に、子供達は顔を見合わせた。疑っているのか、それとも思考するだけの余裕もないのか。義人は内心でため息を吐きつつ、努めて声を張り上げる。

「早く行け！」

「う、うんっ！」

怒鳴るように言うと、子供達は慌てたように走り出す。欲を言えば家にたどり着くまで見送りたいが、そんな余裕もない。義人の視線の先では、よろめきながらも身を起こそうとしている怪鳥の姿があったのだから。

「ゲ……グゲェ……」

そんな呻き声を漏らしながら、怪鳥が完全に身を起こす。そして、ダメージを確かめるように頭を振ると、義人へと鋭い眼差しを向けた。

人語を話すわけではない。しかし、その瞳に込められた感情は怒り一色に染まっており、一目瞭然。義人は意識して嘲るように笑うと、そのまま肩をすくめる。

「食事の邪魔して悪いなぁ。でも、見過ごすわけにもいかないんでね」

「ゲェァァアアアアアアア！」

怒りからか奇声を上げ、怪鳥が地面を蹴る。
それは翼を羽ばたかせての低空飛行。木の板程度なら貫通しそうな鋭い嘴を義人へと向け、地面スレスレを飛びながら一直線に突っ込んでくる。
それを見た義人は、好都合とばかりに精神を集中させた。そして、真っ直ぐに突っ込んでくる怪鳥目がけて風の塊を撃ち出す。“向こうの世界”で使った時に比べれば威力も精度も低い風魔法だが、それでも真正面から突っ込んでくる敵に命中させることは容易だ。

「グゲェッ！？」

正面から風の塊にぶつかった怪鳥は、潰れたカエルのような悲鳴を上げて再度地面へと落下する。しかし、先ほどよりも早く起き上がると、威嚇するように両翼を広げた。

「決定打にはならない、と。やっぱりノーレがないと駄目か……」

冷静に分析に、義人が呟く。風魔法を使うことができても、威力が低い。鎌鼬を発生させて切りつけることもできるが、ノーレが補助に回った時と比べればその切れ味は名刀と鈍（なまくら）を比較するに等しい。

「かといって、あまり時間もかけられないな」

怪鳥から僅かに意識を逸らして周囲の様子を窺うと、遠くの方から人の騒ぐ声が義人の耳に届く。逃げた子供達が人を呼んだのか、それとも空を飛ぶ怪鳥につられたのか。傍には道路もあるため、車に乗った人が気付く可能性もある。
既に通行人に怪鳥の姿を見られているが、義人としては、“こちらの世界”に戻ってきたことを知られるのが怖い。どうしたものか

と義人が僅かに思案すると、その考えを遮るように離れた場所で絹を裂くような悲鳴が上がった。
その悲鳴の必死さに、義人は油断しないよう意識しながら悲鳴の上がった方向へ視線を逸らす。そして、思わず目を見開いた。

「はぁっ!?」

“その光景”を見て、思わず気の抜けた叫び声を上げてしまったのも仕方がないだろう。視線を向けた先、そこには現在義人が対峙している怪鳥とほぼ同じ姿の別の怪鳥が空を飛んでいたのだから。

「一匹じゃなかったのかよ!?　っとぉ!」

悪態を吐くように叫び、それを隙と見て突っ込んできた怪鳥を横っ飛びに避ける。義人とすれ違った形になった怪鳥はそのまま一気に高度を上げると、飛来する別の怪鳥の隣へと並んだ。そして、言葉でも交わすように奇声を上げると、二匹並んで山の方へと進路を取る。
義人と対峙していた怪鳥を助けに来たのか、それとも義人を脅威と見て狩場を変えるのか。まるで逃げるように、二匹の怪鳥が飛んで行く。

「くそっ、逃がすか!」

このままだと別の場所で被害が出るかもしれない。そう考えた義人は再び走り出そうとした。しかし、背後で妙に重い足音が聞こえ、足を止める。

「なん……は?」

義人は何事かと振り返り――そこに、四本腕の熊が立っていた。

「……」

頬が引きつるのを、義人は自覚する。眼前にいる熊も、“向こうの世界”で遭遇したことのある魔物だ。体長は二メートルほどで、以前遭遇した化け熊よりも小さい。しかし、その体重は義人の数倍以上はあるだろう。それこそ、圧し掛かられたら圧死しかねないほどに。そして、そんな化け熊に従うかのように両脇から犬に似た生き物が二匹、歩を進めてくる。

犬種としてはシベリアンハスキーが一番近いだろうか、黒に近い灰色の毛並みに大型犬らしい体躯。噛み合わせた歯はむしろ牙と評するに相応しく、口元から垂れた涎と低い唸り声が本能的な恐怖を誘う。

怪鳥との戦闘に惹かれたのか、それとも義人が使った魔法にでも呼び寄せられたのか。明らかに義人を認識し、今も少しずつ距離を詰めてきている。

義人は無言のままで右手を掲げると、魔力を収束させて風の塊を生み出す。続いて、魔物が動くよりも早く地面に風の塊を叩きつけると、砂塵（さじん）を巻き上げて魔物へと叩きつけた。

即席の目潰し。魔物の足が止まったのを見て取った義人は、全力で『強化』をかけながら地を蹴る。

――魔物とは、反対の方向へと。

すなわち、逃げた。

「三匹相手とか無理に決まってるだろぉっ！」

戦略的撤退、などと言葉を飾ることもない。迷うことなく背を向け、全力で駆ける。

この場で食い止めなければ被害が出るかもしれない。そんな考えも浮かんだが、ノーレがない状態では時間稼ぎも難しい。

化け犬の方ならばどうにかなるかもしれないが、熊の方は中級に分類される魔物である。魔物三匹を相手に回し、倒す、もしくは時間を稼げると思えるほどに義人は自惚れていなかった。

「くそ、ノーレがいればなぁ！」

しかし、ノーレが手元にあれば話は別だ。例え三匹を相手にしたとしても、十分に倒す――――殺すことが、できる。もちろん、そのノーレを家に置いて外出した義人が悪いのだが、“こちらの世界”で魔物と戦うような未来がわかるはずもない。

なるべく人通りの少ない道を選び、義人は自宅へと向かう。ノーレが手元にあり、小雪もいれば直面している危機を乗り切ることはできる。疾走しながらそんな考えを巡らせていると、義人の背後で大きな悲鳴が上がった。

「っ！？」

急制動をかけながら、肩ごしに振り向く。そして、思わず絶句した。

目潰しをしたはずの魔物達は、迷うことなく義人を追走していた。そして、通りすがった通行人に目を止めたのか、どこか嬉しげな気配すら見せながらそちらへと進路を変えている。

先ほどの化け鳥と同じく、空腹を覚えているのか。獲物を見つけた猛獣の如く、通行人へと突っ込んでいく。

その場にいたのは、母親と子供二人の親子連れだった。赤ん坊を

乳母車に乗せ、それを小雪の外見と同年齢程度の少女が楽しげに押している。そして、母親はそんな子供の様子を見ながら微笑みを浮かべていた。

その場にいたのは、そんな、どこにでもいるような普通の親子連れだった。

その親子連れの中で悲鳴を上げたのは、母親の女性である。

それはそうだろう。何が悲しくて、閑静な住宅街で体長が二メートルを超すような四つ腕の化け熊と遭遇しなければならないのか。

涎を垂らしながら接近していく化け熊と、従者のように従う化け犬。それを見た義人は体ごと向き直ると、僅かに逡巡する。

自分一人ならば逃げ出すことは容易だ。事実、今は逃げている最中であり、化け熊達の移動速度よりも義人の方が早い。だが、魔物に襲われる人を見捨てることもできない。

もしも見知らぬ通行人を見捨てることができれば、義人は無事に家までたどり着くことができる。その代わり、親子連れは間違いなく魔物の牙にかかることになるだろう。それを是とするか、非とするか。

「迷うまでも……ないか！」

勝てないから逃げ出す。しかし、被害が出そうになれば立ち向かう。

なんとも中途半端な自分に僅かな落胆を抱きつつ、義人は地面を蹴った。

“自力で”『加速』を発動し、弾丸の様に一直線に走り出す。加減もなく加速したため地面を蹴った右足から鈍痛が伝わるが、義人はそれを無視して化け熊を睨み付けた。『加速』を使うことで一気に魔力が消費されるが、気を張って体から力が抜けないように意識する。

彼我の距離はおよそ二十メートル。それを三歩で走破し、義人は

全力で『強化』をかけながら体当たりを敢行する。
加速し、踏込み、肩口からぶつかり、化け熊を一気に吹き飛ばす。
それと同時に『加速』を解除すると、風魔法を発動して突風を叩きつけて二匹の化け犬も吹き飛ばした。

「っつぅ……早く、逃げてください」

体重差を無視して体当たりをした影響か、左肩から妙な痛みが伝わってくる。それでも、義人は痛みに眉をしかめながらも、母親の女性へと声をかけた。

「え……あ……は、はい……ありがとう、ございます」

母親の女性は義人の言葉に戸惑いながらも頷くと、娘を抱き上げ、乳母車を押しながら足早に去っていく。義人は遠ざかる足音を背後に聞きながら化け熊達に視線を向けると、化け熊達はダメージなどないかのように起き上がっていた。

「くそ……嫌になるな。素手で熊と戦うとか、俺は志信の爺さんじゃねえんだぞ……」

確かめるように左手を開閉しながら、愚痴のように呟く義人。僅かに痛みがあるが、拳を握ることはできる。腕も、動かすことはできるようだ。
そして、自分が漏らした呟きの内容に気付き、義人は眉を寄せる。

「志信の爺さんか……帰ってきてないかな……」

ここからならば、志信の家まで遠くはない。走れば三分とかからずに到着することができるだろう。ただ、志信の祖父である源蔵が

帰宅しているかはわからなかった。“こちらの世界”に戻って以来、志信のことを伝えるために何度か電話をしているが、一向に捕まらないのだ。もっとも、志信からは『祖父は旅に出ている』という話を聞いてもいたので、納得のできることではあったが。

「でも、あそこなら庭も広いし塀にも囲まれてるか……」

上手くすれば、人目につかずに戦うことができる。そして、この場に留まって戦えば、再び通行人を巻き込む可能性もあった。

「……ああ、くそ！　お前らこっちに来い！」

一瞬だけ迷い、義人は化け熊達に背を向けて走り出す。ついでばかりに挑発を兼ねて風の塊を飛ばしてみると、化け熊達は咆哮を上げて義人の後を追い始めた。

志信の住む家は、義人の住む家からそう遠くない場所にある。それは志信の祖父、源蔵の意向からか、洋風の住宅が増える昨今の風潮に逆らうような、純和風の家だった。

道路に沿うように作られた塀に、見知らぬ人間が足を踏み入れることを戸惑わせるような木造りの門扉。そして、その門を潜った先に立つ、平屋建ての母屋。さらに、母屋から僅かに離れた場所には道場が建てられ、庭は広い面積に渡って玉砂利が敷き詰められている。

日本人としては、平時に見れば心の落ち着く光景だろう。縁側にでも座り、お茶でも飲めばさぞ気分が安らぐに違いない。しかし、今の義人にそんな余裕はなかった。

化け熊達から一定以上距離を離さないように注意しながら走り、志信の家まで到着したら一気に跳躍する。そして門扉の頂上に手をつくと、跳んだ勢いと『強化』を使った腕力を頼りに門を飛び越えた。続いて、着地をするなり門を閉めている閂を外し、門を開け放つ。

志信の祖父が帰ってきたら土下座をして謝ろう。そんなことを考えながら、義人は化け熊達を門の中へと招きこんだ。広い庭と、周囲からの目を阻む塀。これで武器があれば完璧だったが、さすがに道場の扉を破って中にあるであろう木刀などを借りるわけにもいかない。それは、最終手段だ。

「ガアアァァァー！！」

義人が速度を落としたことを好機と見たのか、化け犬の片方が力強く地面を蹴る。そして一気に速度を上げると、義人へと肉薄した。それに気づいた義人は油断なく迎撃の構えを取るが、思わず目を見開く。

当然のことではあるが、人間を相手にする場合と獣を相手にする場合では戦い方が異なるものである。相手が二足歩行で人間大の生き物ならば、ある程度は適応も可能だろう。しかし、相手は犬と似た姿形をした魔物だ。四肢を地面について走るその姿は、義人の腰ほどの高さもない。

ノーレがあったならば、話は別だった。真っ直ぐ突っ込んでくるだけなら、一刀両断にすることも可能である。しかし、現状義人が取れる攻撃手段は無手での打撃か、風魔法のみ。低い位置を走る獣が相手ならば、タイミングを合わせて蹴り上げるのも効果的だろう。そう判断した義人は、反射的に右足で回し蹴りを繰り出す。だが、

化け犬は蹴りの軌道を見切ったのか、それまでよりもさらに低い体勢で蹴りを回避して義人の懐へと潜り込むと、迷うことなく首筋目がけて飛びかかってくる。

首――――とりわけ動脈を噛み切られでもしたら、間違いなく致命傷になる。出血多量か、もしくはその前に痛みでショック死することになるだろう。そんな未来が僅かに脳裏を掠め、義人は全力で頭を横へと倒す。

ガキン、という牙の噛み合わさる音が義人の耳に届く。そのあまりの近さに思わず震えそうになるが、そんな余裕もない。化け犬の牙をかわしたものの、飛びかかってきたその体自体は避けようがない。

「――――ぅおっ！？」

化け犬の体重がかかり、蹴りを繰り出した体勢だった義人はそのまま後ろへと倒れた。その際背中を打ち、僅かに呼吸が止まる。しかし、そこで咽（むせ）るよりも早く、義人を倒した化け犬とは違う、もう一匹の化け犬が接近しているのが目に入った。そして、嬉しげに歯を鳴らしながら義人へと飛びかかってくる。

「食われて……たまるか！」

意識が遠のくのをつなぎとめ、必死に集中して義人は全力で風魔法を行使する。自分と化け犬の間に魔力を集中させると、自身が吹き飛ぶのも構わず突風を生み出す。瞬間的に発生した竜巻並の風圧を受け、化け犬二匹が真後ろへと吹き飛んだ。そしてそのまま壁に叩きつけられると、僅かに呻き声を上げて動かなくなる。当たり所が悪かったのか、それとも気絶しただけなのか、義人にはわからない。義人は地面に接地していた分、それほど吹き飛ばなかったが、それでも激しい勢いで玉砂利の上を転がったせいで服が裂け、体の

あちこちに裂傷ができていた。

「いってぇ……自爆技って、洒落になんねぇ……」

肩の痛みだけでなく、全身から痛みが伝わってくる。量はそれほどでもないが、裂傷の内いくつかは血が出ていた。

「でも、これであとは熊だけ――」

そう言って義人は顔を上げ、目の端に映った“何か”に、いきなり殴り飛ばされた。

左頬と、左脇腹への衝撃。掬い上げるように放たれたその衝撃で、義人の体が宙に浮く。次いで地面を三回ほどバウンドして壁に叩きつけられると、義人は自分を殴り飛ばした相手へと目を向けた。

化け犬が吹き飛んだことなど気にも留めなかったのか、そこには二本の右腕を振り切った体勢の化け熊が唸り声を上げながら立っていた。義人が起き上がるよりも早く接近していたらしく、義人は思わず舌打ちをして眉を寄せる。

左頬に伝う、温かい液体。右手で触れて見れば、べったりと血が付着していた。どうやら殴ると同時に爪で抉られたらしく、すぐには止まらないほど血が流れている。

脈拍と同時に血が傷口から溢れる感触と、継続的に伝わってくる痛み。深呼吸のために息を吸い込んでみれば、左の脇腹もじくじくと痛む。

致命傷ではないが、重傷に近い。気を抜けば膝が震えそうになるのを堪えながら、義人は深くため息を吐いた。

「さて……こいつはどうやって倒せばいいのやら……」

化け犬二匹を倒せたのも、実力と言うよりは運に近い。志信なら

素手でも十分に余裕をもって倒すことができただろうが、義人は志信ではなかった。義人は改めて親友（しのぶ）の規格外さを実感し、痛む体を無視して構えを取る。

それと同時に、化け熊が四つ腕を広げながら義人へと突進した。それを見た義人は、迷わず右手を振って風の刃を化け熊へと飛ばす。しかし、飛ばした風の刃は化け熊に僅かな傷をつけるだけで、化け熊の突進を鈍らせることもできなかった。

「くそっ！」

腕が振り下されるよりも早く、義人は真横へと転がって化け熊の突進を避ける。そしてすぐに距離を取ると、再度風の刃を生み出して化け熊へと放った。

体格や体重差もさることながら、全身を覆う体毛や、脂肪と筋肉による防御力、頑強さは人間の比ではない。化け熊は四つ腕を振るって風の刃を叩き消すと、義人へと再度突進する。

このまま逃げ回っても、いずれは捕まるだろう。だが、義人も自身の攻撃が通じないとわかっている以上は逃げ回るしかない。振るわれる四つ腕をかわし、時には掠らせながら、逃げ回ることしかできない。

「っ……はぁ……はぁ……倒すのは、無理だな……」

逃げ回っている間にも血が流れ、徐々に体が重くなってきた。義人はそれを自覚し、足を止める。

ここまで疲労していては、逃げることも困難。時間が経てば、化け犬が起き上がってくる可能性もある。その上、化け熊を“倒す”方法もない。

――覚悟を、決めるしかないか。

心中で独白し、義人は歯を噛みしめる。

先ほど口にした正義のヒーローならば、ここから華麗な大逆転も可能だろう。しかし、義人はヒーローなどではない。

動きを止めた義人を訝しんだのか、化け熊がゆっくりと近づいてくる。それを見た義人は、同じように化け熊へとゆっくり歩を進めた。

全身……とりわけ左半身の痛みが酷いため、体の左半分を引きずるようにして歩いていく。化け熊も最初は訝しげにしていたものの、義人の様子を見て抵抗らしい抵抗も不可能だと判断したのか喜ぶように口元を歪めた。そして、大人の頭でも噛み砕けそうな口を開きながら、義人へと四本の腕を伸ばす。

それを見た義人は、不意を衝くように軽く地を蹴った。

魔物も生きているからと、倒す――気絶させることを考えていたが、それも最早無理である。このままでは義人自身が死に、その後は手当たり次第通りかかった人間を襲うだろう。

それならば、残った手は一つ。

倒せないのならば――あとは、殺すしかない。

開いた口を目がけ、右手を突き出す。それと同時に化け熊の口が閉じられ、義人の右腕へと鋭い牙が食い込み、

「あああああああああぁぁぁ！」

腕を食いちぎるよりも早く、義人は全力で鎌鼬を発生させた。口

の中、否、体の中で風の刃が暴れ回り、化け熊は思わず閉じた口を開ける。そして口から大量の血を吐き出すと、二歩、三歩と後ろに下がった。

「とどめだ！」

残った魔力のほとんどを使い、義人は風の塊を発生させる。続いて、物理的な破壊力を伴ったその一撃を、化け熊の腹部へと叩き込んだ。先ほどまで使っていた魔法とは威力の違うその一撃に、さすがの化け熊からも悲鳴が上がる。

残った魔力では『強化』を維持するだけで精いっぱいだが、それでも、自身の放った魔法が決定打になることを義人は確信していた。

「ガァァァァアアアアアッ！」

化け熊は断末魔を上げると、そのまま仰向けに倒れこむ。そして数回痙攣すると、まるで糸を切ったかのように動きを止めた。

「……は……や、やったか……」

倒れて動かなくなった化け熊を見て、義人は小さく呟く。

化け熊が倒れ込んだ際の音と断末魔で近所の人間が様子を見に来るかもしれないが、義人にはそれを気にする余裕もない。今は、それよりも先にすることがあった。

「……あっちにも、とどめを刺さないと」

そう言って、義人は二匹の化け犬に向かってゆっくりと歩き出す。気を失っているのか、それとも死んでいるのかはわからないが、生きているのならとどめを刺さなければならない。

その後はどうすれば良いのか。そんなことを胡乱な頭で考えながら、義人は化け熊の口へと突っ込んだ右腕に視線を向け、思わず顔をしかめた。

――――見なきゃ良かった……。

喰いちぎられてはいないが、それでも牙が深く食い込んだせいで傷が深い。穴のような傷口から覗く白い物体は、自身の腕骨だろう。熱さを伴った痛みは、そのまま倒れて泣き出したいほどに辛かった。痛みのせいか、自分がちゃんと歩けているのかもわからない。音も遠く聞こえ、今なら例え耳元で銃声が聞こえても平気だろう。

故に、義人は気付くことができなかった。

倒れたはずの化け熊が身を震わせ、その身をゆっくりと起こす。そして、門扉へ向かって歩いている義人の姿を見つけ、歯を鳴らしながら六足で歩き始めた。しかし、その化け熊の足取りも義人同様に遅い。何せ、体の内側を刃物で滅多刺しにされたようなものだ。人間では致命傷であり、即死してもおかしくはない。だが、それでも化け熊は義人の傍まで歩み寄ると、その身を立ち上がらせていた。立ち上がり、背を向けた義人に対して四つ腕の内一本だけを振り上げる。

立ち上がることはできても、四本の腕すべてを動かすだけの力は残っていないのか。それでも、腕一本が動けば十分である。

腕が一本動けば、義人を殺すことも可能だ。

「義人ちゃん！」

「おとーさん！」

切羽詰まった声が遠くに聞こえ、義人は無意識の内に声のした方へと視線を向けた。向けた視線の先にいたのは、入り口の門から敷地内へと足を踏み入れた優希と小雪の姿。優希は義人の言葉を守ったのか、抱き締めるようにして両手でノーレを持っている。

そして二人は、義人の様子を見て目を見開いた。

「おとーさんっ！」

義人の危機を見た小雪が、すぐさま地面を蹴る。しかし、門から義人がいるところまでは、一足で詰められないほどの距離があった。

小雪の行動を見て、義人は痛む体で背後へと振り返る。すると、そこには右腕を振り上げた化け熊の姿があった。

避けるだけの体力は、既にない。

風魔法を放つだけの魔力も、既にない。

「おとーさんからはなれろっ！」

小雪が叫ぶ。しかし、小雪が駆け寄るよりも、満身創痍の化け熊が腕を振り下す方が早い。

小雪が化け熊を倒すよりも、化け熊が義人を殺す方が――――早い。

そして、その予測を証明するかのように、化け熊の剛腕が義人へと振り下された。

第百三十八話：忍び寄る影　その3

時を僅かにさかのぼる。

小雪が優希によって昼寝から揺り起こされたのは、つい五分ほど前。ノーレを両腕で抱え、いつも浮かべている柔和な笑顔を引っ込めた優希を見て、小雪は昼寝で寝惚けそうになっていた頭をすぐに覚醒させた。

「ついてきて」

言葉少なくそう告げ、優希は背を向ける。小雪は状況を掴めなかったが、優希が意味もなくそんなことを言うはずもない。小雪は疑問を飲み込むと、すぐさま優希の後を追うべくベッドから降りる。すると、優希が抱きかかえたノーレから小雪に対して声が届いた。

『ユキの話を聞いたところ、“こちらの世界”に魔物が現れたらしいんじゃ。ヨシトは今、一人で魔物の相手をしておる』

「まもの？」

『うむ。じゃからコユキ、お主は義人がどこにいるか探るんじゃ。魔力でも匂いでも良い』

「ん……やってみる」

ノーレの言葉を受け、小雪は義人がどこにいるかを探す。魔力や匂い、他にも手掛かりになるものを探し、歩きながらも精神を集中する。しかし、いくら集中してもすぐに義人の居場所がわかるわけではない。

風龍ならば、すぐに風に乗った義人の匂いを見つけることができただろう。あるいは、カグラほどに魔法の腕に長けていたならば、遠くからでも義人の魔力を察知することができたかもしれない。

「う……うう……わかんない……」

泣きそうになりながら、小雪は首を横に振る。“もとの姿”に戻れば話は別だが、“こちらの世界”では人の姿でいるよう注意もされていた。

『難しいか……む？』

小雪の言葉を聞いたノーレがどうしたものかと困ったような声を漏らすが、優希の様子を見て戸惑った声を上げた。

『ユキ、お主どこに向かっているんじゃ？』

「義人ちゃんのところだよ」

短く答え、優希は急ぎ足で進んでいく。ノーレを抱えているため少しだけ足取りが怪しいが、それでも迷いのない歩調だった。

『ヨシトの場所？　コユキでもわからぬのにどうやって……』

「知らないよ、そんなの。でも、義人ちゃんはこっちにいる」

確信の響きを込めた声。それを聞いたノーレは、続けようとした疑問を飲み込み、どこか納得がいったような声を発した。

『そうか、やはりお主は――――』

「あ、いたよ！　おとーさんのまりょく！」

ノーレの言葉を遮り、小雪が叫ぶ。弱いが、それでもかなり近い位置に義人の魔力を感じ取ってすぐさま駆け出した。それと同時に、優希も駆け出す。

駆け出した優希と小雪の姿を見たノーレはかけようとした言葉を止めると、ため息混じりに声を吐き出した。

『……まずはヨシトの無事を確かめてから、じゃな』

その声に応えたものは、誰もいない。優希と小雪は先を争うように走り、塀に囲まれた日本家屋の入り口へと到着する。開け放たれた扉を潜り、周囲に視線を走らせ、ノーレは思わず絶句した。

気絶しているのか、それとも死んでいるのか。壁の近くに倒れている二匹の犬型の魔物。そしてだいぶ離れた位置にいる、四つ腕の化け熊。毛皮のあちこちが血濡れになっているが、それでも二本の足で立ち、同じように血濡れの義人の前で腕を振り上げている。

義人の怪我も、酷いものだった。化け熊の鉤爪で抉られたのか、血が溢れる左頬。服のところどころが裂け、そこから見える擦過傷。そして、半ばで腕骨が見えている右腕。よく見れば左半身に痛みがあるのか、体の重心も右側に寄っている。

死んではいないが、間違いなく重傷だった。

「おとーさんっ！」

義人の危機を見て取った小雪が地面を蹴る。

その一動作で、小雪は弾丸のように飛び出す。そんな小雪が見据える先にいたのは、今にも化け熊によって命を絶たれそうな義人（おとーさん）だった。

龍種としての身体能力に、膨大な魔力を使っての『強化』。その二つを以って駆け出し――それでも、届かない。小雪が駆け寄るよりも、化け熊が義人へと腕を振り下す方が早い。

一瞬、魔法を使うべきかと小雪は迷う。しかし、その考えはすぐさま消え失せた。

感情に任せて魔法を使う、それは良い。火球を生み出す、氷の矢

を放つ、風の刃を作り出す。それはすぐにも可能だ。だが、威力を絞って化け熊だけに命中させられるかと聞かれれば、答えは否だった。確実に義人を巻き込み、小雪自身の手で殺めることになりかねない。

それ故に、小雪は地を蹴って走るしかない。届かないと悟っても、それでも自身の足で駆けるしかない。

義人（おとーさん）が死ぬという絶望からか、小雪の目に映るものすべてがスローモーションになる。振り下される化け熊の腕も、今にも崩れ落ちそうな義人の姿も、後ろに流れる風景も、全てがゆっくりと動く。

「……？」

そんな緩やかな視界の中で、“何か”が動いた。“それ”は、『強化』を使って走る小雪の横を滑るようにして追い抜いていく。しかし、足が速いというわけではない。単純な速度だけを見るならば、小雪の方が速いだろう。だが、その“何か”――優希は、小雪が一歩を進む間に五歩先へと進んでいた。

「おかー……さん？」

ノーレを両腕に抱え、自身を追い抜いた優希を呼ぶ。しかし、その声を発する間に優希はさらに先へと進み、一直線に義人の元へと駆け抜けていく。

緩やかな時間の中で、それに縛られないような足取りで、常人と変わらない速度で、全力で走る小雪を追い抜く。

傍目から見れば、それは異様な光景だっただろう。全員がスローモーションで動く中、それを意に介さず、いつもと変わらない動きで走っているのだから。

優希は周囲の状況を気に留めず、一直線に義人へと駆け寄り、そして――。

化け熊に命を絶たれそうになっていた義人は、振り下された化け熊の腕を見ながら内心でどこか苦笑するような心地で思考していた。

――なんだ、死ぬ間際だっていうのに、走馬灯なんて見ないじゃないか。

そんなことを思考し、僅かな既視感を覚える。

振り下された化け熊の腕は、ひどくゆっくりだ。見ている光景がスローモーションになり、時間が引き伸ばされたように感じる。時間の流れが緩慢で、義人は似たような光景をどこかで見た気がした。

――そうだ、あの時。

ぼんやりと、“向こうの世界”に召喚されて間もない頃に起こった事件を思い出す。その当時の財務大臣が画策した、義人（じぶん）の暗殺事件のことを。

その際、義人はサクラの姿を真似た『お姫様の殺人人形』に襲われた。そしてあと一歩で殺されるというところまで追いつめられた。

――あの時、俺を助けてくれたのは……。

化け熊の腕が、義人に届くまであと僅か。しかし、義人の中で死への恐怖が急速に薄れていく。諦観か、そとも恐怖が一定の域を超

えてしまったのか。そのどちらかと考え、義人は否定する。
それは、自分が死なないという確信にも似た予感を覚えたからだ。

「義人ちゃん！」

横からの衝撃。抱き着くようにして地面へ押し倒され、それと同時に今まで義人の頭があった部分を化け熊の腕が通過する。
義人は自分を押し倒した人物――優希へと目を向け、痛みも忘れたように笑った。

「“今回”は、優希が怪我しなくて良かったよ」
「でも、義人ちゃんが怪我をするほうが嫌だよ」

義人の言葉に、優希は困ったように微笑む。
血濡れの義人を抱き締めたせいで、優希も服が血で汚れたが気にした様子もない。ただ、純粋に義人の無事を喜んでいた。
優希は義人の左頬に手を添えると、傷口から溢れる血を手に付けながら僅かに眉を寄せる。

「ごめんね、義人ちゃん。来るのに時間がかかっちゃった」

そこまで言って、優希は義人を押し倒した状態から体を起こす。
そして、“突然”現れた優希を見て動きを止めた化け熊へと向き直った。
義人へと腕を振り下した状態でいた化け熊は、視線を向けてくる優希を見て再度腕を振り上げる。誰かは知らないが、仕留めようとした獲物を逃がされたのだ。その怒りを以って腕を振り上げ――硬直する。まるで、金縛りにでもあったかのように。
義人に致命傷を負わされ、その怒りで満たされていた化け熊の目に理性の色が戻る。しかし、それはすぐに違うものへと色を変えた。

「――義人ちゃんに怪我をさせたのは、あなた？」

問いかけ、優希は一歩前へと踏み出す。それを見た化け熊は、隠しようのない恐怖を浮かべながら一歩後ろへと下がった。

化け熊も“向こうの世界”で何度か人を襲ったことがあり、その中には優希と変わらない年齢の少女が含まれていたこともある。男性と比べれば小柄で、魔法使いでもなければ非力な存在。例え死に掛けの体だろうと、少女一人ならば恰好の食料だ。

それだというのに、化け熊の足は勝手に後ろへと下がる。もしも体が万全ならば、背を向けて全力で逃げていたかもしれない。

同じ恐怖を感じたのか、それとも違う理由からか。駆け寄っていた小雪も足を止め、困惑したように優希を見ている。走る途中で放り出されたのか、地面を転がるノーレも声を発することはない。

一歩一歩と歩を進める優希と、一歩一歩と下がる化け熊。

「どうして逃げるの？」

不思議そうな顔をしながら、優希は歩み寄っていく。化け熊はそんな優希を見てなおも後ろに下がろうとするが、義人に致命傷を負わされていたためか、それも叶わず足から力が抜けて地面へと倒れ込んだ。しかし、それでも四本の腕を使い、地面を這うようにして優希から遠ざかろうとする。

「ァ……ガ、ァ……」

最早声を出す力もないのか、化け熊は喘ぐような声を漏らす。優希はそんな化け熊を無感動な瞳で眺めていたが、足を止めた小雪が

視界へと入ったためそちらへと視線を向けた。

「小雪、何をしてるの？　早く義人ちゃんを治療しないと」

「あ、う、うん」

優希の言葉を聞き、金縛りが解けたように小雪が駆け出す。そして義人の傍まで駆け寄ると、すぐさま傷口に手を当てて『治癒』を発動した。例え幼くとも、小雪は『再生』を司る白龍である。見る間に傷口が癒え、それを確認した小雪は次の傷口へと手を当てる。

優希はそんな小雪の姿を見て、化け熊へと視線を戻す。視線を外した間に化け熊が移動したのは一メートルほどで、優希は化け熊が必死の思いで稼いだその距離を事もなげに無視して化け熊へと歩み寄った。

そして、膝を折り、死に掛けの化け熊の耳元へと顔を寄せる。

「――――――」

小さく、優希が何かを呟く。すると化け熊は僅かに身を震わせ、それまで逃げるために使っていた四本の腕すべてから力が抜けた。

「……ァ……」

化け熊の瞳から生気が抜け落ちる。体を起こす気力すら失い、完全に地面へと倒れ伏す。優希はその様子を見届けると、踵を返して義人の方へと歩き出した。

義人は化け熊が完全に動かなくなったのを見ると、次いで歩み寄ってくる優希へと視線を向ける。

優希が何をしたのか、聞きたいことは山ほどある。しかし、多量の出血と魔力の枯渇で意識が遠退き始めた。『治癒』によって怪我の傷口はふさがってきているが、疲労まで抜けるわけではない。そ

れでも、なんとか意識をつないで義人は優希に苦笑を向ける。

「悪いな、優希……服、汚れてるぞ？」

「別に良いよ。義人ちゃんの血だもん」

そういう問題ではないと思った義人だが、口にする余裕もないので伝えたいことだけ伝える。

「小雪、悪いけど、治療が終わったらあっちの犬二匹と熊を……」

そう言って、義人は化け犬が倒れているであろう方向へと視線を向けた。そして、思わずため息を吐く。

「逃げてるし……やっぱり死んでなかったのか……」

かなりの勢いで壁に叩きつけたので、無傷というわけではないだろう。おそらくは人を襲う余裕もないはずである。そう判断した義人は、回復したら探しに行こうと内心で呟く。

「熊の死体は……とりあえず、門を閉めれば人目につかないか。あとで森にでも埋めに行こう」

魔法を使ったせいで庭のあちこちが惨状と言って良い状態になっているが、それもいずれは直す必要がある。この時ばかりは、家を空けて全国を旅している志信の祖父に感謝したい義人だった。

「あと、は……魔物に、注意しといてくれ……」

例え再度魔物が襲ってきたとしても、小雪がいればなんとかなるだろう。しかし、何が起きているのか詳細もわからない以上、警戒

するに越したことはない。
義人は他に伝えることはないかと考えるが、さすがに限界が来たらしい。急速に意識が遠退き始める。

「ごめん……ちょっと寝る……あと、よろ……しく……」

両親達への誤魔化しに苦労するかもしれないが、それは起きた時にでも謝罪しようと思いながら義人は徐々に意識を手放していく。

「うん。おやすみ、義人ちゃん」

義人を抱き締めた際に付着した血を拭うことなく、優希は微笑んで応える。
そんな優希の姿を見て、義人は張っていた気を抜く。
情けないなぁ、と最後に呟き、義人は気を失うのだった。

第百三十九話：作り物の幸福

義人達が姿を消して、既に二ヶ月以上の時が過ぎた。その日々を長いと見るか短いと見るか、それは人それぞれだろう。

そんな中で、志信にとっては時間の流れが非常に緩やかに感じられた。国王代理として書類と格闘する日々は、志信にとって拷問に近い。以前は飛ぶ矢のような速さで流れていた時間が、今では遅々として進まないのだ。

志信はその原因である、机に山のように積まれた書類へと視線を向けた。

よくもこれだけの書類を捌いていたものだ、と“こちらの世界”にはいないであろう親友に向けて苦笑し、志信は軽く息を吐きながら椅子の背もたれに背を預ける。

「疲れが溜まっているようじゃのう」

そんな志信に声をかけたのは、隣の執務机で書類を片付けていたアルフレッドだった。本来ならばカグラが座っているはずの席につき、志信の何倍もの速度で書類の山を片付けている。それを見ながら、志信は僅かに苦笑を浮かべた。

「俺には体を動かすことぐらいしか能がないので……義人のようにはいかないですね」

勉強は自分の方ができたが、頭の“出来”という点では劣っていたのだろう。飲み込みが悪いというわけではないが、突発的な事態に対応する能力は義人に数歩も劣ると自己分析する。そして志信は冷え切った湯呑に手を伸ばすと、苦みが感じられる緑茶を飲み干してかすかに顔をしかめた。

そんな様子の志信を見て、アルフレッドは苦笑を向ける。

「それでも以前に比べれば進歩しておるよ。なに、儂とて最初の数年は失敗続きだったんじゃ。気にすることはないわい」

志信を励ますためか、おどけるように言ってアルフレッドは笑う。それを見た志信は相好を崩し、傍に置いていた急須に手を伸ばして眉を寄せた。すると、そんな志信の動作を見て一人の少女が傍に寄ってくる。サクラと同じくメイド服に身を包んだその少女は一礼してから急須を受け取ると、お湯を注ぐためか静かに執務室から出て行った。

サクラの同僚であるが名前も知らないその少女を見送り、志信は視線を窓へと向ける。

「……カグラは？」

その問いを聞いたアルフレッドは、書類に走らせていた筆を止めて視線を宙に向けた。

「相変わらずじゃよ。いや、むしろ酷くなっておるか……最近など、あまり食事が喉を通らんようじゃ」

「そうですか」

珍しくため息を吐き、志信は机に積まれた書類に手を伸ばしながら脳裏にカグラの姿を思い描く。

以前の健康的な輝きなどない、ベッドに臥せるその姿。現在はサクラが付きっ切りで身の回りの世話をしているが、それでも良くなる兆しがない。

魔力をすべて消費し、それだけでも足りず、命すら削って召喚魔法を行使した代償。視力を失い、精神的なものが原因なのか食事が

喉を通らず、日に日に衰弱していくカグラを見れば、志信とて思うところがないわけではない。

己の職責を放り出し、“この世界”から姿を消した義人を求めた結果として現在（いま）がある。愚かと言えば、そうなのだろう。しかし、それほどまでに義人を想ったカグラの心情を思えば愚かだと断じることはできない。

それほどの感情――激情を、志信は持ち合わせていないのだ。故に、志信にはカグラを愚かだと断じることはできない。

巡り合わせが悪かったのか、惚れた相手が悪かったのか。おそらくは両方か、と言葉を飲み込み、志信は意識を切り替えて仕事を再開するべく机に積まれた書類の山を見る。

いくら片づけても次から次へと書類が届き、一向に減る様子がない書類の山。片づけた傍から新しい書類が積まれるのはある種の悪夢染みている。ただでさえ、アルフレッドと同等に仕事をこなせるカグラが抜けているのだ。義人が国王を務め、カグラがその補佐につき、手の回らないところをアルフレッドが補っていた頃に比べれば、格段に効率が落ちてしまうのも仕方がない。

現状ではアルフレッドには仕事が集中し、その上で志信の補佐を行う必要もある。志信もアルフレッドの補佐を受けながら国王代理として仕事を片付けているが、いつ仕事が終わるとも知れない現状は志信に多大な精神的ストレスを与えていた。

それでも、志信は鍛えた精神力で不満を抑え込むと、次々に書類に目を通していく。ロクに体を動かすことができない点も志信にとっては苦痛であり、今のところは早朝と深夜に軽く鍛錬を行うぐらいしかできないのが悩みの種である。

国王代理としての仕事に、カグラの体調。先行きの見えない現状について打開策を頭の隅で考えるものの、志信には良い案が思い浮かばない。精々が、今の生活が破綻することを少しでも遅らせるぐらいのことしかできなかった。

「……ん？」

そうやって志信達が政務をこなしていると、執務室の扉を叩く音が室内に響く。その音で作業の手を止めた志信は、顔を上げて扉の方へと視線を向けた。

「誰だ？」

「……失礼、します」

短く誰何の声を上げると、それに遅れて返答の声が小さく響く。そしてゆっくりと扉が開くと、紺色のローブを身に纏ったシアラが入室してきた。一応は礼儀を守るつもりがあるのか、常ならば被っている三角帽子を手に持っている。

「シアラか、どうした？」

何かの報告だろうか、と志信は姿勢を正す。すると、それを見たシアラは首を横に振った。

「……報告じゃない」

「む……そうか」

シアラの言葉に頷くと、志信は僅かに首を捻る。報告でないのなら、シアラがこの場を訪れる理由がわからないのだ。その疑問を込めて志信がシアラを見つめると、シアラは居心地が悪そうに目を逸らす。

「……報告じゃない……けど、相談がある」

「相談？　珍しいな」

そう言いつつ、志信はアルフレッドに目配せをする。それを見たアルフレッドは、一度だけ咳払いをした。

「儂は席を外した方が良いかの？」

わざわざ執務中のところに相談にくるほどだ。重要な相談ではとアルフレッドが腰を浮かしかけるが、シアラはそれを制するように首を横に振る。

「……アルフレッド様も、一緒が良い……この国に関わる、大事な話だから」

「ふむ、それならば同席しようかのう」

浮かしかけた腰を落ち着けると、アルフレッドは意識して微笑みを浮かべた。

「それで、相談とはなんじゃ？」

少しでも言いやすいようにと、雰囲気すら和らげるアルフレッド。そんなアルフレッドの態度に僅かに感心しつつ、志信も傾聴の姿勢を取る。

シアラはそんな二人の視線を受けてどこか言いにくそうにしていたが、覚悟を決めたのか、茫洋とした瞳の中に覚悟にも似たような輝きを覗かせた。そして、端的に言葉を紡いだ。

「……このままだと、カグラ様は遠くない内に命を落とす」

「――――――」

相談、と前置きした割に物騒な話の切り出しに、志信とアルフレッドは静かに視線を合わせる。

「……サクラからもそう聞かされているし、典医の見解も同じ。それに、だいぶ時間が経つのに魔力も回復してない」

淡々と言葉を紡ぐシアラ。感情を抑えているのか、それとも素なのか、話すその姿は普段と変わりがない。

口にしている内容は物騒だが、カグラの容態が思わしくないのは志信やアルフレッドも気にかかっていたことだ。

「……多分、精神的なものが原因。魔力が回復しないのは気になるけど、まずは体調を戻すことが先決。でも、カグラ様はご飯を食べてくれない。だから衰弱する一方」

「ああ、それは俺もわかっている……が、手だてがない」

義人がいないことが、原因だろう。しかし、義人は“こちらの世界”にいない可能性が高く、会おうと思って会えるものでもない。今も捜索は続いているが、志信としては義人は“向こうの世界”に戻ったものと捉えているのだ。

「精神的なものが原因だとして、どうやって精神を治療する？　いくら魔法が存在する世界と言えど、そんな魔法はないだろう？」

「……これ」

そう言って、シアラはポケットから小さな人形を取り出した。木で作られたと思わしき、人の造形を真似た人形。数度とはいえ見覚えがあった志信は、僅かに目を見開いた。

「それは……」

「……『お姫様の殺人人形』。これは壊れているけど、ちゃんとしたものを使えばなんとかなる……と、思う」

それは、使用者が思い浮かべた人物の姿を真似る魔法人形。以前シアラが修理の練習用に借りた人形は直せていないが、壊れていないものも存在する。

「……ヨシト王のことは、シノブが一番知ってる。だから、シノブに使ってほしい」

そう言って、シアラが魔法人形を示して見せる。小さな手に握られた魔法人形を見据えた志信は、小さく眉を寄せた。

「人形で義人の身代わりを作れば、カグラが持ち直すと？」

「……今のカグラ様は、目が見えない。多分、魔法や魔力を感じ取ることもできない。なら、声だけでも真似ることができれば」

「――ふざけるな」

シアラの言葉を、志信の声が遮る。それは普段の彼なら出すことのなかったであろう、酷く冷たい声。それを聞いたシアラは、思わず身を強張らせる。

「それで何が解決する？　カグラが気付いたらどうする？　いや、遅いか早いかの違いはあるだろうが、義人が“こちらの世界”にいないのならばいずれは気付かれるだろう。その時はどうするつもりだ？」

「……」

志信の問いに、シアラは沈黙を以って応えた。シアラとて、自分

の出した案が時間稼ぎにしかならないことはわかっている。義人が“こちらの世界”にいなければ、いずれは破綻する嘘だ。加えて、カグラが嘘に気付けば今以上に事態が悪くなるだろう。

それこそ、悪くなるという言葉では済まないぐらいに。

「……たしかに、一つの手ではあるのう」

それまで言葉を挟むことがなかったアルフレッドが、沈黙を破るように呟く。

「アルフレッド殿……」

思わぬ賛同の声に、志信は知らず険のある視線を向けた。しかし、その視線を受けたアルフレッドは揺らぐことなく首を横に振る。

「志信殿、お主の言いたいことはわかる。懸念も尤(もっと)もじゃ。しかし、“この国”を存続させるなら『カグラ』を死なせるわけにもいかん。次代の『カグラ』もおらんしのう」

「……次代の『カグラ』がいれば、今のカグラは必要ないと聞こえますが？」

舌鋒鋭く尋ねる志信に、アルフレッドは苦笑染みた表情を浮かべた。

「違う、と言いたいところじゃが、そういった側面があるのも事実。しかし、カグラに死んでほしくないという気持ちが最も強いのも確かじゃ。“あの子”は、儂にとっては孫のようなものじゃからな」

それに、と言葉をつなげ、アルフレッドは表情に僅かな疲れを滲ませる。

「まだ、ヨシト王の召喚が失敗したという確証もない……望みは、極めて薄いがのう」

それだけを言うと、アルフレッドはシアラへと視線を向けた。

「して、カグラにはどう説明するつもりじゃ？」

「……カグラ様の召喚は成功していた。でも、最初の時みたいに違う場所に召喚されたことにする。だから見つけるのに時間がかかった……そう言えば良い、と思います」

「それでカグラが納得すると？　最初に気付く可能性もあるが？」

「……多分、それはないと思う。目が見えない、魔力も感じ取れないのなら、気付きようがない」

そう言って志信を見るシアラの視線には、どこか窺うような色がある。だが、その視線を受けた志信は目を閉じて椅子に背を預けて沈黙した。言葉にはしないが、シアラの案を拒絶しているのだろう。

シアラはそんな志信の姿を見ると、少しだけ視線を床に向ける。

「……例え嘘だとしても、精神的な支えが必要。それに……カグラ様に、死んでほしくない。カグラ様の気持ちは、少しわかるから」

「ふむ……」

顎に手を当て、アルフレッドは交互に志信とシアラに視線を送った。アルフレッドとしては、シアラの案に賛成する気持ちが強い。志信は反対のようだが、声に出して否定するつもりはないのか沈黙を続けている。そんな志信を視界の隅に捉えつつ、アルフレッドは宙に視線を向けた。

「ヨシト王の姿を人形に真似させたとしても、カグラの世話をさせ

るのが精々、か……ヨシト王が見つかったと言っても、魔法に長けた者が見れば魔法人形だと気付く可能性が高いしのう。しかし、カグラが持ち直す可能性もあると」

「……城のみんなにも、必要最低限の情報は伝えておいた方が良い。あと、カグラ様に気付かれないよう協力が必要……だから、シノブ」

協力を、と願い出るシアラ。そんなシアラの声を聞きながら、志信は椅子に背を預けたままで沈黙を続ける。

そうやってどれだけ時間が過ぎたのか。志信は小さくため息を吐くと、閉じていた目を開けた。

「俺は協力しない。たしかに、“こちらの世界”では俺が義人を一番知っているだろう。だが、いや、“だからこそ”協力はしない」

本当ならば、力尽くでも止めたいところである。しかし、そうしないことはせめてもの妥協だろう。

「……わかった。それなら自分でする」

それだけを口にすると、シアラは一礼して退室する。その姿を見送ってから再度ため息を吐く志信に、アルフレッドは気遣わしげな視線を向けた。

「シノブ殿なら力尽くで止めると思ったんじゃがのう」

「このままだと何も変わらないのも事実ですから」

シアラが去ったあとも執務室の扉に視線を向け続ける志信からは、何を考えているのかすら窺い知ることはできない。ただ、最後に小さく、疲れたような呟きを漏らした。

「変わるとしても、良い方向に転ぶとは思えませんが、ね」

「カグラ様、お加減はいかがですか？」

両手で盆を持ったサクラが、小さな声でそう尋ねる。盆の上には湯気の立つおかゆが載っているが、カグラがそちらに視線を向けることはない。寝台から身を起こした体勢で、宙を見据えるだけだ。

カグラが寝起きをする寝室は、他の部屋に比べてどこか暗い印象を受ける。外の光が差し込まないというわけではないが、部屋全体に澱んだ“何か”が沈殿しているような雰囲気があった。

「サクラ……ヨシト様は、まだ見つからないのですか？」

碌に食事を取っていないからだろう、サクラよりも小さく、力ない掠れた声でカグラが尋ねる。それを聞いたサクラは、カグラからは見えないとわかっていても首を横に振った。

「……はい、まだ、です」

この問答も、何回繰り返したのか。何回か、何十回か、それとも何百回か。さすがに千回は超えていなかったかな、とサクラは心中だけで愚痴のように呟く。

ことあるごとに繰り返される問答。日に何十回も同じことを尋ねられれば、サクラとて愚痴の一つは言いたくなる。それでも、うわ

言のように義人の名を繰り返すカグラの姿を見れば、実際に愚痴を口にすることもできなかった。精々、親友であるシアラに話すぐらいしかサクラにはできない。

目が見えていないためか、カグラの空中に視線を投じる瞳もどこか虚ろだ。以前に比べれば頬も痩せこけ、全体的に体が小さくなったような印象を受ける。

病床に就く、盲目の少女。その言葉だけを耳にすれば、儚げな印象を与えるだろう。しかし、ただ宙を見据えるその姿を実際に目の当りにすれば、儚さよりもどこか狂気染みた印象を抱かせた。

「カグラ様、お食事ですが……」

そう言いつつも、サクラには答えがわかっていた。カグラはサクラの問いに首を横に振ると、『食欲がない』と掠れた声で呟く。そんなカグラを見て、サクラは作ったような笑みを浮かべた。

「そう言われましても、ヨシト様が戻られた時にカグラ様がそんなご様子では驚かれますよ？」

義人の名を出すと、僅かにカグラの視線が動く。それまで宙へと向けていた視線をサクラに向けると、ぎこちなく笑ってみせる。

「そう、ですね……それは嫌です」

そう言って、カグラはサクラに対して手を伸ばした。それを見たサクラは、笑顔を崩さないようにしながらカグラの傍へと腰を下ろす。そして木製のレンゲでおかゆを一掬いすると、十分に冷ましてからカグラの口元へと差し出した。

「どうぞ、カグラ様。今日は昨日よりも薄味にしているので、食べやすいと思います」
「ん……」
カグラは差し出されたおかゆを口に含み、ゆっくりと咀嚼して飲み込む。それを機械的に繰り返しながら、サクラは僅かに意識を遠くへと飛ばした。
――――いつまで続くのかな……。
心中で呟き、サクラは現状に思いを馳せる。
カグラの体調もそうだが、その他にも懸念すべきことは多い。城中の雰囲気もどことなく険しく、城下町の活気も以前に比べればなくなっている。兵達も苛立っており、些細なことから喧嘩をする者が絶えないという状況だ。
メイドであるサクラにできることはほとんどないが、それでも懸念は膨らむばかりである。
そうやってサクラが考え事をしていると、コンコン、という扉を叩く音が小さく響いた。それを聞いたサクラは意識を浮上させ、カグラに一声かけてから扉の方へと歩み寄る。
「どちら様ですか？」
ミーファかシアラだろうと当たりをつけながら、サクラは扉越しに尋ねた。そして、
「俺だよ、サクラ。義人だ」

ひどく聞き覚えのある声が、名を名乗った。その声を聞いたサクラは数秒ほど忘我し、続いて、呆けたような声を上げる。

「……え？」

小さく声を漏らしながらも、体が勝手に動く。ドアノブを捻り、サクラはゆっくりと扉を開けた。

「ヨ、シト……さま？」

扉を開けた先にいたのは、二か月以上前に姿を消した義人だった。“向こうの世界”から“こちらの世界”に来た際同様、学校の制服に身を包んだその姿をサクラが見間違えるはずもない。

「ああ。久しぶり、サクラ」

事態を飲み込めないサクラに、義人は柔らかく微笑んだ。サクラはそんな義人の笑顔を見て安心と喜びの感情を覚え――――次いで、冷えた感情が浮かび上がる。

「あなたは――――誰ですか？」

そう尋ね、サクラは目を細めた。そしてゆっくりと腰を落とすと、右手を前に出して臨戦態勢を取る。それと同時にサクラの周囲の温度が下がり始め、宙にいくつもの氷の矢が生み出された。それを見た義人は、困ったように微笑む。

「おいおい、どうしたんだよサクラ」

「……もう一度だけ問いましょう。あなたは誰ですか？」

たしかに、見た目や声は義人そっくりだ。しかし、纏う雰囲気が明らかに違う。

本物の義人ならば、サクラが殺気を出しながら詰め寄ったらすぐさま取り乱すだろう。

『ちょ、サクラさん!?　なんで怒ってんの!?　俺何かしたっけ!?』

そんな幻聴と、慌てふためく義人の姿を幻視して、サクラは歯を噛みしめた。しかし、目の前の義人はそれに気づかず不思議そうに首を傾げる。

「え？　だから、義人だってば。何を言ってるんだよ」

サクラが見せる殺気を前にしても、相変わらず義人は笑っている。その様子にどうしようもない怒りを覚えながら、噛みしめるようにサクラは呟いた。

「わたしが、仕えるべき主人を見間違うとでも？」

呟くと同時、サクラが地を蹴る。一瞬で右手に氷の刃を生み出し、首を叩き落とすべく義人の懐に飛び込みながら体を捻って腕を振るい――突然差し込まれた木製の杖が、その一撃を防いだ。

「……駄目」

サクラの一撃を防いだシアラが呟く。それを聞いたサクラは、僅かに戸惑いながら距離を取った。

「――シアラちゃん。一体、どういうこと？」

僅かに視線を鋭くしながら、サクラが尋ねる。それを聞いたシアラは、相変わらず笑みを浮かべたままの義人の前に立って小さく首を横に振った。

「……カグラ様のため」

「カグラ様の？　それってどういう――」

「サクラ？　何をしているんですか？」

さすがにただ事ではないと気付いたのか、カグラが寝台から降りてゆっくりと歩み寄ってくる。その足取りは非常に不安定で、思わずサクラは手を貸すべく前へ出ようとした。しかし、それよりも早く義人が扉を潜り、カグラの元へと歩み寄っていく。

「あ、ちょっと」

咄嗟に止めようとするが、それを見越したようにシアラがサクラの肩を掴んだ。サクラはシアラに視線を向けるが、シアラは首を横に振る。

「サクラ？　……あっ」

案の定というべきか、バランスを崩してカグラが転びそうになる。しかし、カグラが地面へと倒れるよりも早く、抱きかかえるようにして義人がカグラを支えた。

「ふぅ……大丈夫か？」

「え……ヨシト……さ、ま？」

声から判別したのだろう。呆然と、それでも義人の名を呼ぶカグ

ラ。そんなカグラに対して、義人は相変わらず薄い笑顔で微笑む。

「ああ、そうだよ。久しぶり、カグラ」

「なん、で……え……本当に、ヨシト様……ですか？」

「おいおい、俺を忘れたのかよ。ひどいなぁ」

いっそ朗らかに、義人が笑った。その声を聞いたカグラは、自身を支える義人の腕を震える手でつかむ。

「わ、わす、忘れるなんて……あるわけないじゃないですかっ。わ、わたしが、ヨシト様を忘れるなんて……」

そこまで口にして、カグラは目の端に涙を浮かべた。そして、震える手で義人の服を握り、表情を隠すように胸板へ頭を押し付ける。

「忘れるなんて、できるわけないじゃないですか！？　ずっと、ずっと会いたかったんです！　ずっとあなたに謝りたかった！　でも、あなたは……」

そこまで口にして、カグラの言葉が途切れた。それを不審に思った義人がカグラの様子を確かめると、カグラは目を閉じたままで動きを止めている。

「カグラ？」

肩を揺すってみるが、反応はない。どうやら義人に再会できたことで安堵したのか、意識を失ったらしい。

そのことに苦笑を浮かべると、義人――人形（よしと）はカグラの体を抱き上げて、寝台へと寝かせるのだった。

第百四十話：崩壊への一歩

「ん……」

寝台で眠っていたカグラは、ゆっくりと目を開く。そして瞬きを数回すると、その段階になってようやく自分が眠っていたことに気付いた。

カグラはバランスを崩さないよう注意しながら身を起こすと、相変わらず墨で塗り潰したような視界に若干辟易としながら頭を振る。眠る前の記憶は曖昧で、眠ったというよりは突然気を失った感覚に近い。

「わたし、なんで……」

いつの間に眠っていたのだろうか、と一人呟く。

最近は食欲もなく、眠りも浅い日が続いている。カグラ自身も体調が思わしくないことを自覚していたが、さすがに突然気を失うようなことはなかった。

目が見えなくなってから時間の感覚がおかしくなりつつあるが、それでもサクラなどと話をしていれば最低限の時間の感覚は保てる。

カグラは一度だけため息を吐くと、気を失う直前のことを思い出そうとして、

「お、やっと起きたか」

そんな声が、耳に滑り込んできた。

「……え？」

ひどく、聞き覚えのある声。それはここ最近、直に聞くことのなかった、カグラが常に聞きたいと思っていた声だった。

「ヨシト、様？」

掠れた声を漏らし、カグラは聞き間違いかと己の耳を疑う。しかし、気を失う前にも同じ声を聞いていたことを思い出してカグラは口を開いた。

「ヨシト様……なんですか？」

カグラは一瞬、自分の体が幻聴を聞くほどの変調をきたしているのかと心配になったが、さすがにそこまでではないと自ら否定する。ならば、今自分が話している相手は本当に――――。

「ああ、義人だよ。しかし、まいったまいった。また召喚されたと思ったら、今度はカーリア国からけっこう離れた場所だったからなー。コモナ語を覚えてなかったら、ここに戻ってこられなかったよ」

陽気な声が、浮かびかけた疑念を吹き飛ばす。その声色に、カグラは考えることを放棄した。

考えるのは後でも良い。例え今話している相手が幻聴だろうと、義人と言葉を交わすことができるのだから。

「その、ヨシト様……」

そんな破綻した考えに気付かず、カグラは義人へと話しかける。最近の不健康な生活が祟っているのか、声が出にくいが構わない。己の体調よりも、今は優先すべきことがある。何を置いてでも、言うべきことがあった。

「申し訳、ありませんでした……わたしは、その、再びヨシト様を」

召喚してしまった。

そう口にしようとして、言葉が止まる。否、義人達が姿を消す昨晩に、義人自身から向けられた言葉や感情が言葉を止めた。

怒気混じりの声に、怒りを湛えた瞳。今は見ることも叶わないが、再び同種の声と視線を向けられたらと思うと、カグラは続きの言葉を口にすることができない。義人自身が召喚されたことを口にしたが、その事実をカグラ自身が口にすることは憚られた。

「カグラ？　どうしたんだ？　もしかして、体調が悪いのか？」

しかし、まるでそんなカグラの心情を無視するように優しげな声がかけられる。カグラの身を案じる、心配そうな声。その声を聞いたカグラは、何故義人がそんな優しい声をかけるのかと不思議に思った。

「あの、ヨシト様……」

「ん？　何？」

聞いて良いものか。それとも、聞かずにおくべきか。

僅かな逡巡。しかし、深い葛藤を堪えてカグラは言葉を紡ぐ。

「……怒って、いないのですか？」

「怒る？　俺が？」

何故そんなことを聞くのだろうと、心底不思議そうに声が応える。

次いで、納得したような声が響く。

「いや、カグラだって、この国のためを思ってもう一度召喚したんだろ？　なら、“国王”である俺は、むしろ礼を言うべきだよ」

そう言って、義人は小さく笑った。カグラには見ることができないが、その表情に嘘偽りはない。本当に、“何も思っていないような”笑顔だ。

しかし、カグラにとって予期せぬ返答である。

“元の世界”に戻りたいと願い、それが叶ったであろう義人を“こちらの世界”に召喚するという行為は、間違いなく怒りを買うだろう。口汚く罵倒され、最悪義人自身の手にかかることすら考えていた。それだというのに、義人の声からは怒りの感情が感じ取れない。

そんなカグラの戸惑いを感じ取ったのか、かけられる声が一段と優しげなものへと変わった。

「カグラの言いたいこともわかるさ。でも、“元の世界”に戻って、色々と考えてみたんだ。“向こうの世界”での生活に、“こちらの世界”での生活。両親に無事を伝えることができた後、その二つを比べてみてさ……最後には、“こちらの世界”に戻りたいって気持ちが残ったんだよ」

だから怒っていないと、義人が――人形（よしと）が告げる。実に耳心地良く、さもカグラを慰めるように。

「ほ、本当ですか？」

故に、カグラにはその言葉を信じることしかできなかった。本当に“元の世界”と“こちらの世界”を秤にかけ、“こちらの世界”を選んでくれたのだと。純粋に、カグラ自身の願いも相まって、その言葉を信じる――信じて、しまう。

「ああ、本当だよ。だから、カグラには感謝してるぐらいさ」

そんなカグラの心中を肯定するように、義人が答える。そして、そんな義人の言葉を聞いたカグラは、安堵のためか大きく息を吐き出した。

失敗したと思っていた召喚の成功。それに加えて、その行為を咎めない義人の言葉。

まるで夢のようだと、そこまで考えたところでカグラの脳裏に一つの疑問が浮かぶ。

一度目の召喚の際には、優希や志信が共に召喚された。それならば今回はどうなのかと、疑問と“とある感情”から口を開く。

「あの、ヨシト様……」

それでもどこか言い難そうに、カグラは視線を下げる。視力がない以上意味のない行為ではあるが、カグラの心情を表すという点では無意味ではない。事実、視線を下げたことで、義人からはカグラの表情を窺い知ることができなくなっていた。

「……ユキ様は、どこにいらっしゃいますか？」

続いて、小さな声で尋ねる。その声の質を不思議に思った義人がカグラを見るが、カグラは視線を下げたままだ。

そんなカグラの様子に疑問を覚える――――ようなことはなく、人形（ひとがた）は答える。

「“こっちの世界”に召喚されたのは、俺だけみたいだ。優希や小雪、ノーレは“元の世界”にいる……と思う」

いきなり召喚されたからな、と苦笑混じりに言うと、それに釣られたようにカグラも薄く微笑む。

「そう……ですか」

「ああ。きっと、“向こうの世界”で元気に過ごしているだろうさ」

小雪が暴れていなければ良いけど、と他人事のように付け足す義人。しかし、すぐに考えることを放棄したのか、カグラへと目を向ける。

「まあ、そんなわけで帰ってきたって報告だよ。とりあえず、カグラはゆっくり養生してくれ」

そう言って、義人はそれまで腰かけていた椅子から立ち上がった。すると、それを音で察したのかカグラが慌てたような声を上げる。

「ど、どちらに行かれるのですか？」

それは義人がいなくなることへの不安だったのか、カグラは衰弱した体を恨めしく思いながらも体を起こし、義人の声のする方へと手を伸ばす。

「ん？　ちょっと食堂に行ってカグラ用の食事を作ってもらおうかなって。カグラ、ちゃんと食事を取ってないんだろ？」

そうやって慌てるカグラをどう思ったのか、義人は苦笑しながらカグラが伸ばした手を握った。そして、まるで壊れ物でも扱うようにゆっくりと、優しく指を絡めていく。

「こんなに痩せて……まったく、体は労われよ？　“この国にとっ

て”、大事な体なんだから」
「は、はい。申し訳ありません……」

突然手を握られたことに戸惑いながらも、カグラは頭を下げる。下げた際に覗いた頬が僅かに赤みがかっていたのは、単なる羞恥からではないだろう。心臓の脈打つ速さが徐々に早くなってきていることを自覚して、カグラはより頭を深く下げるのだった。

そんな二人のやり取り……正確には一人と一体のやり取りを、サクラは苦虫を噛み潰したような表情で見つめていた。そして頭を振ると、隣に立つシアラへと視線を向ける。

「……それでシアラちゃん、本当に、あれでカグラ様が元気になると思うの？」

カグラに聞こえない程度の声量で、サクラはシアラへと尋ねた。その声に込められた感情は複雑だが、一番強いものは怒りだろう。親友であり、異母姉妹でもあるシアラには向けたことのない感情を込めて、サクラは声を発する。

カグラは義人との会話に集中しているのかその声に反応することはなく、人形（よしと）はそもそも二人に気を払うこともない。

「……元気には、なると思ってる」

対するシアラの声色は、どこか固い。

そもそもが自分の言い出したことではあるが、それでも塞ぎ込んでいたカグラがすぐさま笑顔になるとは考えていなかった。最初こそ疑問や恐怖に近い感情を抱いていたようだが、今ではそれもない。人形（よしと）の言葉を信じているのだろう、見せる表情は明るくなりつつあった。

そんなカグラの姿を見て、サクラは大きくため息を吐きたくなるのを堪える。

魔法人形が義人本人であると本当に信じているのか、それとも、信じるしかなかったのか。そのどちらかと考え、すぐさま後者だろうとサクラは思考する。

予期せぬ事態に、予期せぬ言葉。

おそらくは、カグラにとって義人との再会は大きな願いだったのだろう。しかし、それと同時に大きな不安もあったに違いない。

会いたい――――が、会えば再び拒絶される。そんな希望と恐怖があったはずなのに、人形（よしと）が告げたのはカグラにとって都合の良い、都合の良すぎる言葉ばかりだ。

無論、サクラは義人とカグラの間に何があったかは詳細には知らない。正鵠を射ることはできないが、おおよその出来事を想像できる程度でしかなかった。それでも、カグラの様子を見ていればその想像が的外れではないと断言できる。

「ねえ、シアラちゃん」

眼前の光景を眺めつつ、サクラが口を開く。相変わらず小さな声で話しかけたが、シアラはそれを聞き漏らすことなく応じた。

「……なに？」

「あの魔法人形には、どんな指示を出したの？」

それは、僅かな興味からの問い。以前、義人の暗殺に使われたように、あの人形には何かしらの指示を与える必要がある。それがどんな指示なのか、サクラはある程度予想しながらも尋ねた。
その問いに対して、シアラは三角帽子を目深に被りながらサクラと同じように小さな声で答える。

「……カグラ様が喜ぶ対応をするようにって」
「……ああ、なるほど」

シアラの言葉に、サクラは頷いて納得を示す。
たしかに、ある意味効果的な指示だ。効果的で、カグラにとっては残酷とも言える。

「シノブ様は、納得していたの？」
「……シノブは、反対した。本当は、シノブにあの人形を使ってもらうつもりだったけど……」

気落ちしたようにシアラが呟く。それを聞いたサクラは呆れを滲ませながらため息を吐くと、隣に立つシアラへと視線を向けた。

「シノブ様なら反対するよ。うん、わたしでも反対するもの」

サクラがそう言うと、シアラは視線を床に向けて押し黙る。おそらくは、シアラも己の取った行動が正解ではないと気付いているのだろう。それでも行動したのは、シアラの目から見ても現状が危機的に過ぎるからである。
沈黙したシアラを見て、行動できなかった自分が責めるのもお門違いかとサクラは頭を振った。カグラを止めようとしたが止めきれず、その後も事態が動くままに任せている。

――――このままでは、本当に……。

「サクラ」

思考が危うい方向へと転びそうになった瞬間、そんな声が響いた。聞こえた義人の声に、サクラはそちらへと顔を向ける。すると、義人はどこか申し訳なさそうな顔をしながら小さく頭を下げた。

「悪いんだけど、カグラの食事を用意してもらってもいいか？」

その表情と仕草は、確かに義人に似ている。先ほどは自分で食事を取りに行く素振りを見せていたのに、カグラの反応から傍にいることを選んだのだろう。そのカグラに対する気遣い振りは、たしかに『カグラの喜ぶ対応』である。しかし、本人ではないと知っているサクラからすれば、その気遣いは違和感を覚えるだけだ。

先ほど浮かびかけた感情に蓋をすると、サクラは一度だけ深呼吸をした。

「はい、わかりましたヨシト様」

そして、人形（よしと）の笑顔にサクラも作った笑顔で応える。

カグラが食事を取り、元気になってくれるのはサクラとしても望むところだった。このまま時間が経てば、カグラは遠からず命を落とした可能性が高く、それを防げるのならば多少のことには目を瞑ることができる。

現状、カグラの体調が悪いのは精神的な部分が大きい。人形（よしと）の存在が支えになるのならば、それも一つの手だ。そう強く思いながら、極力音を立てないように扉を開けて退室する。

「はぁ……」

廊下に出ると、隠しきれなくなったため息を一つこぼしてサクラは目を閉じる。

たしかに、人形（よしと）は一つの手ではある。

サクラは自分にそう言い聞かせるが、その結果に待ち受ける未来が、明るいものだと思うことはできなかった。

第百四十一話：忍び寄る影　その４

目を覚まし、最初に飛び込んできたのは木造りの天井だった。石膏ボードに木目の化粧紙を貼り付けたような紛い物ではなく、本物の木を使用した天井。年季の入った、温かみのある色である。それと同時に畳の匂いが鼻につき、義人は天井を数十秒眺めると、そこでようやく自分が意識を取り戻したことを自覚した。そして意識して深呼吸すると、僅かな気怠さを感じながら口を開く。

「やばいな……俺、どれぐらい寝てたんだ？」

呟き、身を起こす。感覚としては、半日以上眠っていたのだろう。眠り過ぎたのか、それとも違う理由があるのか、頭の働きが多少鈍く感じられる。

義人が意識をはっきりさせるために軽く頭を振ると、それと同時に全身に僅かな痛みが走って眉を寄せた。

「いたた……そういえば、魔物と戦ったんだった」

眠りにつくその直前に何があったかを思い出し、義人は自分の体を見下ろす。僅かに引きつるような痛みがあるものの、予想したよりは痛みがない。

血まみれだった服も、今は紺色の寝間着に変わっている。一体誰が脱がしたのかと気になるところだったが、今はそれどころではない。

義人は深呼吸をすると、恐る恐る寝間着の右腕部分をめくり、じっくりと腕の様子を確認してからため息を吐く。

化け熊の口に突っ込んだ右腕は、元通りになっていた。多少力が入りにくいが、自分の意思通りに動いてくれる。傷跡も残っておら

ず、他人が見れば怪我をしたようにすら見えないだろう。しかし、食い千切られはしなかったものの、それでも鋭い牙が腕に穴を開けていたはずである。

戦っている最中は気が昂っていたため平気だったが、平常時には絶対に見たくないほどの重傷だった。“こちらの世界”の最新医療技術でも完治には数ヶ月、下手をすれば年単位で時間がかかりそうなほどの傷だったが、傷口はふさがり、多少違和感を覚える程度までに回復しているのだ。

「小雪かな……」

おそらくは小雪が治癒魔法を使ったのだろうとアタリをつけ、義人はゆっくりと立ち上がる。すると、急激に目の前が真っ暗になって再び布団へと倒れ込んだ。

「う……ぉ……なんだこりゃ……貧血、か？」

意識が消えかけるのをかろうじて繋ぎ止め、そんな呟きを漏らす。思い返してみれば、戦っている最中にもだいぶ血を流してしまった。それが原因だろうと判断し、義人は苦笑を浮かべる。

「傷は治っても、さすがに失った血は元に戻らないか……」

さすがに、魔法はそこまで万能ではない。傷がふさがっているだけでも十分に喜ぶべきだな、と義人は呟く。

『……無茶をするでない、血が足りんじゃろう』

すると、そんな義人を案じるような声が響く。その声を聞いた義人は声のした方へ視線を向け、相好を崩した。

「無茶をしたつもりはなかったんだけどな」
『どう考えても無茶じゃろう、この戯けめ。お主が素手で立ち向かうえるような相手ではなかったはずじゃぞ？』
義人の言葉に不機嫌そうに答えたのは、畳に敷かれた座布団の上に鎮座するノーレである。しかし、その声色には義人を労わる色が見え、本気で咎めているようには聞こえなかった。
「いや、うん。そこはほら、男の強がりってことで聞き流してくれ」
布団に寝転がりながら、義人は苦笑する。
戦った相手は二メートルを超し、四本の腕を持ち、口から火を吐くような化け熊だ。そんな化け熊と戦うのは無茶であり、無謀。落ち着いた今だからこそ冷静にそう思えるが、あの場ではそんな弱音を吐く余裕もなかった。
「……まあ、俺のことは横に置いておこう。現状はどうなってる？」
『横に置くでない……が、説明をする必要もある、か』
「ああ、頼むよ。というか、ここって……」
倒れたままで周囲に視線を送り、義人は自身の頭から記憶を引き出していく。そして、記憶の中から正解を引っ張り出して口にした。
「志信の家じゃないか」
そこは、志信の家にある客間の一室だった。中学生の頃から何度も訪れたことのある場所である。落ち着いて観察すれば、すぐに気付くことができた。

「というか、どうやって入ったんだ？」

思わず、首を傾げる。玄関前の門は閂を外したが、家の鍵は閉まっていたはずだ。まさか小雪が腕力に物を言わせてこじ開けたのだろうか、と義人が不思議がっていると、それに答えるように襖が開く。

「儂が入れた」

その声に、義人は思わず身を起こす。そして開いた襖へと目を向ければ、そこには一人の老人が手にお盆を持った状態で立っていた。

「……って、爺さん！？」

「うむ、久しぶりじゃな」

義人の驚きに老人――――志信の祖父である源蔵は、そう言って呵々と笑う。

顔立ちこそ志信が歳を重ねればこうなるのだろうと思わせるほどに似ているが、何分性格が違いすぎた。芯は似ているのかもしれないが、一見すると孫とは似ても似つかぬ豪快な性格。歳は既に七十間近だというのに、まっすぐに伸びた背筋と日々の稽古で鍛えた肉体、精気に溢れた眼差しが年齢よりも若く見せる。体格も六十を過ぎて七十を間近に控えるようには見えず、四十代、下手をすれば三十代に見えた。

「それにしても驚いたぞ。久しぶりに我が家へ帰ってみたら、庭先に人が倒れているんじゃからな。しかも、それが孫の友人……と、そういえば、志信を知らんか？　姿が見えんのじゃが。旅にでも出たのかの？」

「いや、爺さんじゃないんだから……」

ないない、と手を振り、義人は否定する。そもそも、志信は高校生だ。それに加えて、学校を放り出して旅に出るような性格でもない。

義人がそうやって否定していると、源蔵は手に持ったお盆を傍にあった机の上へと置く。お盆の上には深皿と急須、湯呑みが乗っており、深皿の中には料理らしきものが入っているようだった。味噌らしき匂いが義人の鼻に届き、それに釣られて義人の腹の虫が鳴く。すると、それを聞いた源蔵が小さく笑いだす。

「ほれ、まずはこれを食うと良い。腹が減っては体の治りも遅いじゃろう」

そう言って、源蔵が深皿と箸を義人へと手渡す。義人は反射的にそれらを受け取ると、苦笑を浮かべた。

「あー……体の怪我は問題ないんだけど、貧血が酷くて。ありがたくいただきます」

合掌し、源蔵に対して頭を下げる。そして深皿へと視線を移すと、義人はもう一度だけ『いただきます』と呟いた。

白菜に牛蒡、人参に“何かの肉”。深皿に入っていたのはそれらを味噌で煮込んだ料理らしく、どことなく豚汁に似ているなと思いながら義人は箸をつける。貧血であることが影響したのだろう、最初に肉へと箸を伸ばして口へ放り込むと、思わず感嘆の息を漏らした。

「お、美味い……けど、なんだこの肉。食べたことない味だな……」

少し生臭い気もするが、野性味溢れる味と言うのはこういうもの

を指すのだろう。減った血を増やすには丁度良い。そう思いながら、義人は空腹を満たすべく食事を進めていく。

「ああ、それは庭先に落ちとった熊の肉じゃ」

「ぶふぉっ！？」

だが、さすがにその返答は予想外だった。何故か笑顔で告げられた源蔵の言葉に、義人は思わず咳き込む。何度か咳き込み、それでも呼吸を整えると義人は源蔵へと食って掛かった。“庭先に落ちていた熊”に、心当たりがあり過ぎたのだ。

「ちょ、どこの世界に庭先に熊が落ちてるんだよ！？　というか、なんでその“落ちてた”熊の肉を調理しようと思ったんですかね！？」

「どこの世界も何も、実際にうちの家の庭先に落ちていたし、熊の肉も中々イケるじゃろ？　それに、死にたてだから新鮮で美味いと思うが？」

「美味けりゃ良いって問題じゃねぇ！？　いや、美味いけどさ！？」

これで不味かったら本気で抗議するところだが、源蔵の作った熊汁はやけに美味かった。そのため義人としてもある程度の抗議しかできず、最後には黙って箸を伸ばす。すると源蔵が急須を手に取り、湯呑に中身を注いで差し出した。

「まあ、熊の肉も大半は龍のお嬢ちゃんが食べたんじゃがな」

「……え？　龍のお嬢ちゃんって……」

思わぬ言葉に、湯呑を受けりながらも義人は冷や汗が流れるのを自覚する。しかし、源蔵はそんな義人の様子に構わず、顎に手を当てて遠くに視線を向けた。

「小雪、と言うたか。お主の治療をした子じゃよ。しかし、儂もそれなりに長い間生きてきたが、まさか龍なんてものが本当におるとはのう……いや、腰が抜けるかと思ったわい」

「あー……えっと、小雪は爺さんの前で龍の姿になったのか？」

「うむ、白い龍の姿になったぞ？」

何故『変化』を解いたのかと頭を抱える義人だが、それを見たノーレが助け舟を出す。

『この御老体を説得するために、ユキが命じたんじゃよ。しかし、さすがは仏頂面の祖父じゃな。小雪が元の姿に戻っても、驚かんかったぞ？』

「なんだそれ。ちょっとその場面を見たかった……って、今はそんなことを言っている場合でもないか」

義人としては源蔵が言った『熊の肉も大半は龍のお嬢ちゃんが食べた』という部分の方が気になったが、そこは敢えて流すことにした。どうやって食べたのかと、その光景を想像しようとして頭を振る。

ため息を一つ吐き、義人は止めていた食事を進めていく。そして最後に源蔵から受け取ったお茶を飲み干すと、両手を合わせて『ごちそうさま』と口にした。

「ところで、優希と小雪は？」

ようやく人心地つくことができ、義人はノーレへと目を向けてそ

う尋ねる。

『ユキとコユキは隣の部屋じゃ。家に荷物を取りに行ってそのあとはお主の看病をしておったが、時間が時間じゃから寝かせた』

「時間が時間って、今何時だ？」

そう言いながら、義人は客間の壁にかけられた時計へと目を向けた。そして、大きく肩を落とす。

「日付変わってるし……親父とお袋にどう説明すればいいんだよ……」

魔物と遭遇したのは昼前だったが、壁掛けの時計は午前三時を指している。優希が何かしらの説明をしたのか、それとも何も言っていないのかはわからないが、家に帰ったら説教を受けることは間違いないだろう。

それでも半日以上気を失っていた事実を認識すると、義人は源蔵に視線を向けた。

「看病してもらってありがたいけど、爺さんは寝なくても平気なのか？」

「儂は三日程度なら寝なくても平気じゃぞ？」

「……いや、色々と突っ込みどころがあることをさらっと言わないでほしいんだけど。元気過ぎるだろ……」

義人は源蔵の年齢に見合わぬ体力に呆れるが、これはある意味良い機会だと判断する。これまでに何度も源蔵の家に電話をかけたが、一度も取られなかったのだ。魔物を倒して気絶し、その起き抜けという状況ではあるが、“こちらの世界”に戻ってきてからずっと話をしたいと思っていた。

義人は布団から身を起こすと、礼儀として正座する。そして源蔵を真っ直ぐに見据え、貧血で視界が揺れるのを堪えながら口を開いた。

「爺さん……いや、源蔵さん。あなたに、話しておかないといけないことがあるんです」

居住まいを正した義人を見て、源蔵は僅かに首を捻る。しかし、義人の様子に思うところがあったのだろう。疑問を示すことなく頷く。

「ふむ……聞こう」

頷いた源蔵に、義人はゆっくりと語り出す。

“向こうの世界”へ召喚され、“こちらの世界”へと戻ってくるまでの出来事を。

「……以上です。志信を巻き込み、その上俺達だけで“こちらの世界”に戻ってくることになりました……申し訳ありません」

“向こうの世界”でのことを一通り話し終え、義人は頭を下げる。源蔵に何を言われるかと、そう考えるだけで心臓が早まるが、話さずにいるわけにもいかなかった。

「異世界、のう……龍のお嬢ちゃんがいる以上、妄言とは言えんか」

義人の言葉を信じているのか、それとも信じていないのか。源蔵はしきりに首を捻っている。その様子を見た義人は僅かに緊張しながら尋ねた。

「何か疑問でも？」

「気になる点はある……が、とりあえずその畏まった口調は止めんか。いつも通りにせい」

「……わかった」

『お主くらい若いなら、多少生意気であるべき』というのは以前源蔵が義人に対して口にしたことである。

孫の志信は非常に真面目に育ってしまい、源蔵に対して礼儀を忘れない。祖父と孫というよりも、師匠と弟子といった面が強いため、源蔵としても思うところがある。厳しく鍛えはしたものの、そこに愛情がないわけではない。源蔵としては志信にも義人と同じような接し方をしてほしいのだろう。もっとも、それを表に出すこともあまりないのだが。

源蔵は正座を崩したものの、それでも座ったままの義人を真っ直ぐに見る。傷を負って大量の血が抜けたため、辛いのだろう。義人の顔色はあまり良くない。それでも源蔵の言葉を待つその姿は、源蔵が最後に見た時よりもだいぶ大人びて見えた。

源蔵も、義人のことは孫の友人としてそれなりに見知っている。“あの”志信と友人になってくれたことも、その気性も好ましい。義人の言葉を信じるのならば、“向こうの世界”で様々な経験を積んできたのだろう。子供が成長する姿は微笑ましくあるが、召喚による騒動に関しては源蔵も首を傾げる点があった。

「義人、お主は申し訳ないと言うが、自分の意思で志信を巻き込ん

だのか？」

源蔵が最初に気になったのは、その点である。

カグラ達は国王になる人物を召喚するつもりだったが、それに選ばれたのが義人であり、傍にいた志信や優希も召喚に巻き込まれた。そして、“こちらの世界”に戻ってきたのは義人と優希、それに“向こうの世界”の存在であるノーレや小雪だけである。志信も一緒に戻ってこれなかったことを義人が悔やむ気持ちは源蔵にも理解できるが、その“原因”を考えると義人を責める気も起きない。

「いや、自分の意思というか……偶然？」

源蔵の言葉に、義人は疑問形で答える。

もしも召喚された日に志信や優希と共に下校していなければ、召喚されたのは自分一人だったはずだ。志信は近くにいたから巻き込まれたのであり、義人としては偶然としか言い様がない。もしも前もって“向こうの世界”に召喚されるとわかっていれば、わざわざ志信や優希を巻き込んだりはしなかった。いや、それどころかその日に学校を休み、この町から離れていただろう。召喚されたのは、言わば突発的に遭遇した事故のようなものである。

そんな義人の様子を見ると、源蔵は小さく息を吐く。

「つまりお主や志信が召喚とやらの現象に巻き込まれたのも向こう側の……お主が国王を務めていたという国の都合じゃろ？　お主はただ巻き込まれ、志信もまた同じように巻き込まれた。それだけのことじゃ」

「それだけのことって……」

確かに、元を辿ればその通りではある。

カーリア国の風習や環境をすべて無視し、『カグラ』の務めも無

視すれば、あとに残るのは『義人も巻き込まれた側に過ぎない』ということだ。源蔵からすれば、誘拐犯に誘拐された人間が元の場所に戻ってきた程度にしか思えない。

そんな源蔵の言葉に納得できないのだろう。義人は困惑したような表情を浮かべる。

「でも……」

「でもも何もない。儂から言えることは、よく帰ってきた……それだけじゃ。それに、志信も無事なら問題もない。元気にやっとるんじゃろ？」

そう言われて、義人は“向こうの世界”での志信の様子を思い出す。

「まあ、ある意味“こっちの世界”にいた時よりも生き生きとしてるかな？」

“こちらの世界”で学生として毎日勉強していた日々と、“向こうの世界”で国王（よしと）の友人として兵達と共に鍛錬に励む日々。その二つを比べてみれば、後者の方が志信は楽しんでいるようだった。

義人の言葉を聞くと、源蔵は顎に手を当てて視線を遠くへと向ける。

「そうか……なら、良い」

『御老体、それで良いのか？』

「うむ」

ノーレの言葉に頷き、源蔵は僅かに相好を崩す。

「しかし、異世界か……魔物に魔法に喋る剣。まるで御伽噺（おとぎばなし）じゃな。

叶うなら、儂もそんな世界を旅してみたいもんじゃよ」
「……爺さんなら何事もなかったかのように“向こうの世界”に適応しそうで怖いよ」
『たしかに』

義人が呆れるように呟くと、ノーレもそれに追従した。義人としては否定してほしかったところだが、ノーレとしても義人の言葉に納得する部分があったのだろう。
そんなノーレの嫌な追従に義人が眉を寄せていると、不意に隣の部屋から襖を開ける音が響いた。次いで、軽い音が廊下を駆け、義人達がいる客間へと近づいてくる。

「おとーさん！」

そんな声を上げながら客間へと入ってきたのは、小雪だった。今まで寝ていたのだろう、寝間着姿で客間へ入ってくると、一足飛びに義人へと飛びつく。

「ちょ、小雪、今はちょっと体調がっ！？」

義人は正面から飛びついてきた小雪を受け止めるものの、その勢いに押されて再び布団へと倒れ込む。すると、そんな小雪を追うようにして優希が苦笑しながら客間へと入ってきた。

「義人ちゃん、大丈夫？　義人ちゃんの声がするって言って、小雪が部屋を飛び出していったんだけど」
「……大丈夫だけど、大丈夫じゃない」

小雪が飛びついた際の衝撃はそれほどでもなかったが、体調が悪い時に受けるのは中々堪える。さすがに叱るべきかと義人が小雪へ

視線を向けると、丁度顔を上げた小雪と視線が合った。

「こゆき、しんぱいした」

そう言いながら小雪が義人に向ける瞳の端には、僅かに涙が溜まっている。よほど心配したのだろう、小雪の声は震えており、それを見た義人は叱る気が霧散した。

「ああ、そっか……心配かけてゴメンな、小雪。それと、怪我を直してくれてありがとうな？」

「……ん」

義人が身を起こして小雪の頭を撫でると、小雪はようやく安心したかのように小さく笑う。すると、その光景を見ていた源蔵が口を開いた。

「まるで本当に親子のようじゃな」

「っ！？」

源蔵の言葉に、小雪が機敏な動きで反応する。それまで抱き着いていた義人から身を離すと、すぐさま義人の背中に隠れてしまった。

「うー……」

そして小雪は義人の背に隠れると、少しだけ顔を出して源蔵の様子を窺う。まるで警戒心の強いリスのようだと思いながら、義人は口を開いた。

「小雪？　どうしたんだ？」

義人は小雪と接して一年にも満たないが、それでも小雪が人見知りをする性質（たち）ではないことを知っている。そんな義人の疑問に答えるためか、小雪は眉を寄せながら源蔵に人差し指を向けた。

「おとーさん、このひとへん！　しのぶさんよりへん！」

どこかで聞いたような会話である。

指をさしながら変だと連呼する小雪。それを見た優希が、小雪の手に自分の手を重ねながら諭すように口を開く。

「人を指差したら駄目だよ？」

「でもおかーさん！　あのひとしのぶさんよりへん！」

変だと連呼する小雪を見て、源蔵は首を傾げた。

「何かおかしなところでもあるかの？」

「いや、ないと思うけど……外見は」

最後に一言付け足し、義人も源蔵のように首を傾げる。少なくとも、外見上は妙なところもない。そうやって義人達が首を傾げていると、そんな騒ぎを気にも留めずノーレが声を発した。

『ユキ達も起きてきたし、妾としては他にも話したい……いや、聞きたいことがあるんじゃが』

そんなノーレの言葉に、義人はひとまず小雪が源蔵に対して何を変だと思ったのか聞くのを止める。そして座布団の上に置かれたノーレへ視線を向けると、ノーレの言葉に疑問を向けた。

「聞きたいこと？」

何か気になることがあったのかと、義人は内心で首を捻る。すると、ノーレはどこか言い難そうな、しかし、確信を込めた声色で、

『――ユキ、お主、魔法を使えるな？』

そんな疑問を優希に向けて投げかけるのだった。

第百四十二話：忍び寄る影　その5

『――ユキ、お主、魔法を使えるな？』

そんなノーレの言葉を聞いて、各々が示した反応は様々だった。義人は思わず優希に視線を向け、小雪は首を傾げる。源蔵は会話の流れがわからないのか、不思議そうな顔をしながら片眉を上げた。

「……」

そして、優希は無言で答えることもしない。敢えて言うならば、小雪のように小さく首を傾げた程度だ。

『前々から、その可能性は疑っておった。“向こうの世界”から“こちらの世界”に移動した時といい、今回のことといい……これで確信が持てたわ』

優希の反応をどう取ったのか、ノーレが話を続ける。ノーレは自身の言葉通り、確信を持っているのだろう。以前は言葉を濁していた彼女が向ける言葉には、一切のよどみがない。

「……確信？」

ノーレの真剣な口調を聞いて、義人は疑問の声を向けた。以前、ノーレから『おそらくは』という程度に話を聞いていたが、どうやって確信を得たのか。未だに背中に隠れる小雪を抱きかかえて自身の膝に乗せると、言外に話を促す。

『ヨシト、以前妾がお主に『確信が持てたら話す』と言ったこと、

覚えておるか？』

「え？　あ、ああ……えーっと……たしか、レンシア国に行く途中でそんな話をしたよな？」

『うむ。そして、今回の騒動でその確信が持てた』

今回の騒動というのは、義人が魔物に襲われた件だろう。そして、ノーレの言葉から連想する事柄が義人にもあった。

「俺があの化け熊に殺されそうになった時のことか？」

そう言いながら、義人は記憶を掘り返す。

化け熊が振り下した腕、いや、見ている光景すべてがスローモーションになり、時間が引き伸ばされたように感じた“あの瞬間”。

それは、以前にも見たことがある光景だった。

死ぬ間際に見ると言われる走馬灯などではなく、“流れる時間が遅くなった”ような感覚。暗殺騒動があった際には気のせいと思ったが、それも二度目になれば偶然ではない。

『うむ。時間停止……いや、遅延させたのか？　どちらにせよ、並の魔法使いでは決して成し得ることではない。おそらくは、あの巫女ですら不可能じゃろう。そのような芸当ができる者は、魔物を含めてもそうはいないはずじゃ』

「……マジかよ」

カグラでも使えないと聞き、義人は意味もなく天井に視線を向ける。しかし、すぐに返す言葉を見つけてノーレへと視線を向けた。

「でも、俺が聞いた魔法の中に時間の操作なんてなかったぞ？」

義人が以前聞いた話では、魔法の種類は火炎魔法に氷魔法、風魔

法に雷魔法、そして補助魔法の五つである。そして、そんな疑問を呈した義人に、ノーレはどこか疲れたような声で答えた。

『……非常に馬鹿げた話じゃが、分類で言えば補助魔法になるじゃろうな。以前にも言うたが、魔力とは『世界に干渉する力』じゃ。その魔力を使って想像……お主の言うところの『いめーじ』をして魔法を発動させる。そう考えれば、ユキは魔力を使って時間を操作するようにしたんじゃろう』

ノーレとしても予想外だったのか、その声色は平静のものとは僅かに異なる。そして、そんなノーレの言葉に対して、優希は何も答えず沈黙するだけだ。

いつも通りの優希の表情を横目に見ながらも、義人はノーレへと次の質問を投げかける。

「優希が魔法を……それもカグラでも使えないような魔法を使ったっていうのは、まあ、一応理解した。でも、確信を持ったのが今日とはいえ前々から疑っていたんだろ？　なんでもっと早くその可能性を言ってくれなかったんだ？」

尋ねながらも、義人は思い出す。ノーレの口ぶりからすると、だいぶ以前からその可能性を疑っていたはずだ。

『それについてはすまん、としか言えぬ。確信が持てず、偶然の可能性もあった……いや、“こちらの世界”に移動してきたことや、今回のことがなければ妾とて偶然で済ませていたじゃろう』

しかし、と言葉を区切り、ノーレは言い辛そうに言葉を続ける。

『ユキの魔法の使い方は、通常の魔法使いとはかなり異なっておっ

てな。お主に話すことが……いや、“向こうの世界”で口にすることが憚られたんじゃ』

「かなり異なるって……え？　なんだよそれ。もしかして、優希が普通の人間じゃないとでも言うのか？」

本人の傍で尋ねることではないが、義人も気が動転していたのだろう。思わずそう尋ねてしまうが、それに対してノーレは否定する。

『いや、ユキは人間じゃよ。コユキのように、何かが化けているわけでもない。お主同様、先祖に魔力を持つ“何か”が混ざっておるじゃろうが、間違いなく人間じゃ。ただ、魔力量がちと大きいがのう』

以前優希の魔力量を『魔計石』で計ったことを思い出し、義人は小さく相槌を打つ。優希の魔力量は『魔計石』で計れる上限を超えており、間違っても少ないと言える量ではない。カグラと同等か、もしくは小雪並、下手をすれば小雪以上である。義人は優希が魔法を使うことができないと考えていたため、魔法が使えるとわかった今ではその魔力の大きさは驚異的と言えた。

思わず黙り込む義人だが、そんな義人に対してノーレは話を続ける。

『妾が最初に疑問を持ったのは、だいぶ以前のことじゃ。妾とヨシトが思念通話をしておる時に、ユキが会話に参加してきたことがあった』

「……それがどうかしたのか？」

何か気になる点でもあるのだろうか、と義人は首を傾げる。そんな義人に、ノーレは呆れたような声を漏らした。

『わからぬか？　ユキは妾とお主の思念通話……つまりは魔法を感知したんじゃ。あの巫女やメイドでも、最初は気付けなかったものを、じゃぞ？』

「……あ」

ノーレの言いたいことを理解して、義人は思わず手を打つ。

『妾も、最初は気付かなかった。あまりにも自然に会話に加わってきたからのう。何度かそのようなことがあって、途中で気付くことはできたが……その場にいる全員に向かって話しかけていた時もあったから気付くのが遅れたわ』

そう言われて、義人は記憶を辿る。思い返してみれば、確かにノーレとの会話に優希が途中から参加してきたことがあった。

『それとヨシト、これはお主が知らぬことじゃがな』

「……なんだよ？　まだ何かあるのか？」

優希が魔法――――それも、時間を操作するなどという、“向こうの世界”に多少慣れた義人でも首を傾げざるを得ない魔法を使ったのだ。正直なところ、すでに義人としては頭がパンク寸前である。体調が悪いというのも手伝って、今にも布団に倒れ込んでしまいたい気分だった。

『お主が魔物と戦っておる場所に妾達を案内したのは誰じゃと思う？』

「それは……小雪じゃないのか？　小雪なら俺の匂いとか魔力とかを辿りそうだし」

以前レンシア国に行く際に戦った風龍のフウを思い出しながら返

答する義人。小雪ならば龍のため、匂いなり魔力なりに対して鼻が利くだろう。そう思っての返答だったが、それすらもノーレは否定する。

『お主の居場所を見つけたのはユキじゃよ。それも、迷うことなくこの場所まで妾達を連れてきたんじゃ』

「……はい？　え？　優希がここまで案内したのか？　小雪じゃなく？」

ノーレの回答に、義人は思わずそのまま聞き返す。

『うむ。妾も最初は小雪にお主を探すように言ったのじゃが、無理でな。しかし、優希がお主の元に案内した。一度も迷うことなく、な』

それがどんな意味を持つのか。僅かに視線を鋭くして、義人はノーレを見据える。

「それは……ノーレにも、カグラやサクラにも無理なんだよな？」

『巫女ならば可能かもしれぬ……が、断言はできん』

カグラなら可能“かもしれない”。そう言われ、義人は言うべき言葉をなくして沈黙する。

『おそらくは、じゃが……』

そんな義人に遠慮しているのか、ノーレはそこで一度言葉を切った。しかし、告げずにはいられなかったのだろう、ノーレは静かに告げる。

『――ユキは、お主が関係している場合にのみ魔法を使っておる』

おそらくは、と言いながらも、ノーレは確信のこもった声でそう口にした。それを聞いた義人は、隣に座る優希へ視線を向けながら口を開く。

もし本当にノーレの言うことが正しいのならば、義人にも色々と符合することがあった。

「それじゃあ……もしかして、“こっちの世界”に戻れたのは俺が『元の世界に戻りたい』って願ったからか？」

そう呟き、義人は思い出す。たしかに、召喚の祭壇の中で自分はその願いを口にしている。“こちらの世界”に戻りたいと、優希の前で口にしていた。

そして今回――否、以前の暗殺騒動を含めれば“今回も”と言うべきだろう。義人の危機を前に、優希は魔法を使用した。

「優希……今ノーレが言ったことは、本当なのか？」

尋ねることに、何の意味があるのか。優希が否定したとしても、義人にはノーレの言葉が的を外しているとは思えなかった。それでも、優希の口から肯定の言葉を聞くまではと、答えを待つ。

「……本当って？」

「本当に、優希は魔法が使えるのか？」

重ねて問いの言葉を投げかけ、しかし、優希は小さく首を傾げる。

「使える……のかな？」

返ってきた答えは、非常に曖昧なものだった。優希自身もわかっていないのか、不思議そうな顔をしている。

「わたしにも、よくわからないんだ。昨日だって、義人ちゃんを助けたいと思っただけだから」

そう言われて、義人は優希を真っ直ぐに見つめた。幼い頃からの付き合いであり、今は恋人同士である。もしも嘘をついているのならば、ある程度はわかる。義人の視線の意味を気付いたのか、優希も真っ直ぐに義人を見た。

「……」

嘘をついているようには、見えない。

「おとーさん……」

無言で視線をぶつけ合う二人をどう思ったのか、小雪がオロオロとしながら義人の服の袖を引いた。それで我に返ったのか、義人は袖を引いた小雪の頭を軽く撫でて苦笑を浮かべる。

「ノーレの話は本当だと思うけど、優希が自力で魔法を使ったわけじゃないっていうのも本当みたいだな」

『おそらくは、無意識に魔法を使ったんじゃろう。しかし……』

そこで、ノーレは口調に苦笑にも似た色を滲ませた。

『お主が関わる場合のみ魔法が使えるなど……まったく、呆れるほどの一途さじゃよ』

一途というのは間違っているかもしれんが、と最後に付け足し、ノーレは苦笑の色を消し去る。

『そうなると、ユキならば“向こうの世界”と“こちらの世界”をつなぐことができるじゃろう。ヨシト、お主が本気でそれを望むのならばな』

「それは……」

ノーレの言葉に、義人は思わず優希を見る。そんな義人の視線に対して、優希は再度真っ直ぐに見つめ返した。

「優希……可能、なのか？」

小さく呟く義人。その声色に含まれているのは、僅かな期待と多分な心配。

叶うのならば、もう一度“向こうの世界”に戻りたい。連れ戻せるのなら志信を連れ戻したいと思っており、それと同時に、“こちらの世界”で起こっている現象をどうにかする方法を知りたくもある。“こちらの世界”に戻る前のことを、カグラにも謝りたい。

――でも、そのためには優希に無理を強いることになる……。

“向こうの世界”から“こちらの世界”に戻ってきた際、優希は気を失っていた。おそらくは、多くの魔力を一気に消費してしまったからだろう。義人自身、今は多少マシになったが、魔法を覚えたての頃は中級魔法を使うだけで酷い疲労感を覚えた記憶がある。

疲労を感じる程度の影響ならば良いが、それ以上の場合はどうなるのか。それがわらかず、義人は眉を寄せた。

もしも召喚魔法を使うのが自分自身だったならば、義人はここまで悩まなかっただろう。賭けるのが自分の身一つなら、当たって砕けろと挑戦したに違いない。だが、今回魔法を使うのは優希である。それも、カグラでさえ一度使えばすべての魔力を消費してしまう召喚魔法だ。実現の可否よりも、召喚魔法を使うことによって発生する優希への影響の方が気にかかってしまう。一体どれだけの負担がかかるのか、それを考えると容易に決断することはできなかった。

――――でも、代替案はあるか？

そう自問するが、答えは“否”だ。

義人自身が召喚魔法を使えるようになるというのも一つの手ではある。しかし、使えるようになるまでどれぐらいの時間がかかるかわからない上に、そもそも使えるようになるか保証がない。可能性としては、限りなく低いものになるだろう。魔法の技術も魔力も、圧倒的に足りないのだ。

そしてなにより、“こちらの世界”に魔物が存在するという現状を前にすれば、悠長なことも言ってられない。空腹になった魔物がいつ人を襲うかわからず、時間的な余裕はないと言える。

既に人を襲おうとした魔物がいる以上、決断は迅速に下すべきだ。今以上に騒ぎが大きくなってしまえば警察沙汰になり、最悪、自衛隊などが出動する騒ぎに発展しかねない。

いくら警察でも、魔物の相手をするのは難しいだろう。小型の魔物ならどうにかなるかもしれないが、義人が戦った化け熊のような魔物が相手では分が悪い。自衛隊が持つ装備ならば話は別だろうが、そこまで話が大きくなってしまえば収集もつかなくなる。

理屈で考えるならば、優希に協力を仰ぐべきだろう。このままでは時間の経過と共に“こちらの世界”、とりわけ義人自身が生まれ

育った町に生きる人々が危険に晒される可能性が高くなっていく。考え、悩み、苦悩する。眉を寄せ、義人はひたすらに思考を働かせる。

恋人（ゆき）に負担をかける。その一点が、ひどく引っかかってしまう。魔物の存在も、魔法の存在も知らない“こちらの世界”の人間が危険だという事実も、建前に思えてしまうほどに。

「義人ちゃん」

そんな義人の思考を遮るように、優希が声を上げる。その声に釣られて義人が優希に視線を向けると、優希は小さく笑った。

「義人ちゃんが望んで、わたしにその望みを叶える力があるのなら……」

優希は手を小さく握り締めながら、自身の胸に当てる。迷っているのか、それとも何か考えているのか。僅かに目を伏せ、数拍の間を置いてから義人に視線を向けた。

「わたしは、それを叶えてあげたいな」

その言葉とその瞳に、迷いの色はない。言葉に偽りなく、義人が望んだことを叶える気なのだろう。可能か不可能か、それすらも超えて叶えてみせると、優希の瞳が告げている。

そこまで言われてしまうと、義人は何も言えなくなった。何かを言うべきで、何か行動するべきだ。そう思うのに、体が動こうとしない。

そんな義人の代わりに、ノーレが言葉を向ける。

『ユキ、わかっておるのか？　安全とは言えんのじゃぞ？　妾も補

助できるならしたいが、それも無理じゃ。それに、今回のように複数の人間を召喚魔法で“向こうの世界”に連れて行くとなると、魔力の消費も大きい。そうなると、お主の負担も大きいんじゃぞ？』

「うん、わかってるよ」

ノーレへの返答にも、迷いがない。そんな優希の様子に気圧されたのか、ノーレは僅かに声を潜めて再度尋ねる。

『……仮に召喚魔法が成功した場合、再び“向こうの世界”に戻ることになる。そうなれば、もう一度“こちらの世界”に戻ってこられるという保証もない……それでも良いのか？』

「うん」

変わらず、優希は迷いなく頷く。ノーレの言葉を信じていないというわけでもないだろう。断言する優希に、義人はゆっくりと口を開く。

「優希、本当に良いのか？　危険もある、“こちらの世界”に二度と戻ってこられない可能性もある。その、なんだ……優希の気持ちは嬉しいんだけど、優希に悪影響があるのなら、俺は……」

俺は、どうするというのか。続く言葉が見つからず、義人は視線を彷徨わせる。何度か口を開いては閉じ、そして、大きくため息を吐いた。

今後の方針は自分の意思一つで決まってしまう。そのことに、小さくないプレッシャーを覚える。

迷う義人は、思わず優希へと視線を向けた。そして優希の真剣な表情が目に入り、ふと、その表情から以前聞いた言葉が脳裏に過ぎる。

『義人ちゃんは、本当に“それで”良いの？』

それは、夕暮れの公園で義人が優希へ告白した日のこと。志信を見捨て、“こちらの世界”で生きようと優希に告げた、“あの日”のこと。

『義人ちゃんは、本当にその選択で後悔しない？　藤倉君のことを諦めて、忘れて、この世界で生きていって……後悔しない？』

今、優希が向けてくるのはあの日と同じ表情、同じ視線だった。無言で、それでいて雄弁に告げてくる。

本当に、それで良いのかと。その選択で後悔しないのかと、静かに義人の答えを待っている。

もしも義人が『“こちらの世界”に残る』と言えば、優希もそれに従っただろう。魔物をどうにかしなければならないが、小雪の手を借りて駆逐すれば良い。根本的な解決にはならないが、時間稼ぎにはなる。

――だが、それだけだ。根本的な解決には、決して成り得ない。

“向こうの世界”での人々に、親友である志信。“こちらの世界”での家族や友人に、恋人である優希。破綻から持ち直しかけていたカーリア国に、“こちらの世界”で魔物が人を襲うという現状。それらをすべて考慮し、己がどうしたいのかを自問し、義人は目を閉じる。

内臓を締め付けられるようなプレッシャーが体調に響くが、泣き

言も言えない。膝の上に座った小雪も、座布団の上に置かれたノーレも、話を聞き入っていた源蔵も、義人の答えを待っている。

嫌な緊張感だった。カーリア国で約八万人の国民の生活を守っていた時にも感じていた、嫌な緊張感（プレッシャー）。

しかし、裏を返せば――そんな緊張感（プレッシャー）など、“向こうの世界”で国王をやっていた頃にいくらでも味わっていたとも言える。

く、と小さく苦笑し、義人は肩から力を抜く。そんなプレッシャーの中で国王という役職を投げて逃げ出さなかったのは、優希や志信の存在があったからだ。志信は義人の身を守るために近衛隊を組織し、優希は極力義人の傍にいた。特に、“こちらの世界”にいた頃と同じように接してくれた優希には精神的にも救われていただろう。

そして今も、優希は“いつものように”義人の言葉を待っている。

――まったく、俺には過ぎた彼女だよ。

内心で独白し、義人はそれまでの苦悩をすべて飲み込む。そして今後どう動くかを決断し、目を開けた。

義人が後悔するのが嫌だと、以前優希は言った。それならば、少しでも優希が安心するように後悔しない道を選ぶ。そう決断し、義人は大きく頷いた。

義人の表情から思考の結果を悟ったのだろう、優希は柔らかな笑みを浮かべる。そんな優希に対して、義人も笑みを浮かべた。

「優希……ありがとう」

謝罪を口にしても、優希は喜ばないだろう。だから、義人は心からの謝意を込めて礼の言葉を向けた。そして、決断したことを口に

する。

「“向こうの世界”に戻るのを、手伝ってくれ」

確かな決意を込めて、義人はそう告げるのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0609f/

異世界の王様

2011年10月3日00時16分発行